

坂戸市

いな り まえ
稲 荷 前 遺 跡 (A区)

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— IV —



1992



▲稲荷前遺跡A区遠景(東より)



▲稲荷前遺跡A区全景(西より)



▲第1号住居跡出土遺物



▲第1号住居跡出土円面硯



▲第1号井戸跡出土の墨書土器

^{〔大カ〕}
「□里郡」

「多磨郡男川」

「申□尺本」

「□□^{〔郡カ〕}」

と記されていた。土器の特徴から奈良時代初期の墨書土器と思われる

(□は判読できない文字である)

序

岩殿丘陵の南裾を縫うように流れる越辺川は、高麗川や都幾川等の支流を集め、やがて入間川と合流しますが、この越辺川の南岸に位置する坂戸市域には著名な古代遺跡が多数存在します。県内最古の寺院の一つである勝呂廃寺、大規模な四面庇の掘立柱建物を有し、官衙あるいは豪族居宅とも言われる大集落若葉台遺跡、奈良三彩を出土し注目を集めた山田遺跡等枚挙にいとまなく、古代より文化栄えた地域でありました。

このたび、坂戸市北西部の入西地区に住宅・都市整備公団により土地区画整理事業が実施されることとなりました。当地に所在する埋蔵文化財の取り扱いに関して、関係諸機関による協議が重ねられた結果、11ヶ所の遺跡について当事業団が発掘調査を実施してその記録を保存することになりました。

稲荷前遺跡はそれらの遺跡の一つであります。調査の結果、主に古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡300軒以上を擁する県内でも最大規模の集落跡であることが判明いたしました。豊富な出土遺物のなかには円面硯や「多磨郡男川」・「^{【大カ】}里郡」等と記された県内最古の墨書土器など、遺跡の性格や地域の歴史を考えるうえで重要な資料も多数発見されました。

本書は稲荷前遺跡のうちA区の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用願えれば幸いに存じます。

刊行にあたり、発掘調査における調整に御尽力いただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで多大なる御協力をいただきました住宅・都市整備公団、同埼玉西宅地開発事務所、坂戸市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。最後になりましたが、猛暑、酷寒のなか数年間に及ぶ調査に御協力いただきました調査補助員の方々にも併せてお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井修二

例 言

1. 本書は、埼玉県坂戸市大字竹之内字稲荷前130番地他に所在する稲荷前遺跡のうちA区に関する発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は昭和61年8月27日付委保第5の988号、昭和62年6月18日付委保第5の801号と昭和63年7月7日付委保第5の1054号である。遺跡略号はINR.Aである。

2. 発掘調査は、住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業に伴う事前調査である。埼玉県教育局指導部文化財保護課の調整のもと、住宅・都市整備公団の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3. 入西地区土地区画整理事業関係の既刊発掘調査報告書は下記のとおりである。

『金井遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集 1989

『広面遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第89集 1990

『塚の越遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第101集 1991

4. 稲荷前遺跡の発掘調査は、昭和61年4月1日から平成元年3月31日まで実施した。A区の調査は昭和61年度及び昭和63年度に実施した。報告書作成事業は、平成2年4月1日から平成4年3月31日まで実施した。発掘調査及び整理事業の組織は2ページに記した。

5. 分析・鑑定については下記へ委託した。

鉱物分析と樹種同定 株式会社パレオ・ラボ

土器胎土分析 第四紀地質研究所

土器胎土分析に関しては稲荷前B・C区のものが含まれるため本書では掲載しない。

6. 本書の執筆は富田和夫が行なったが、石槍の実測を川口 潤、瓦塔の実測を高崎光司、土器実測の一部を植木智子が行なった。

7. A区に関する図版作成、写真撮影は下記のものが行なった。

図版作成及び遺物撮影 富田

発掘調査における写真撮影 村田健二・西口正純・赤熊浩一・大谷 徹・富田

8. 本書の編集は資料部資料整理第1課の富田が担当した。
9. 本書に掲載した資料は、平成4年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
10. 墨書土器の釈読に関しては国立歴史民俗博物館平川 南氏のご指導を得た。
11. 本書の作成に際し、下記の方々から御教示・御協力を賜わった。(敬称略)

浅野晴樹 伊藤研志 井上喜久男 加藤恭朗 金井塚厚志 北堀彰男 佐藤正知 篠崎 潔
曾根原裕明 竹野谷俊夫 中村倉司 柳 楽 理 平川 南 藤沢良祐 三沢京子 宮瀧交二
渡辺 一

凡 例

1. 本書における挿図の指示は次のとおりである。

- ・ X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表わす。

- ・ 挿図の縮尺は、住居跡1/60、カマド1/30、掘立柱建物跡1/60、溝跡土層図1/80、井戸跡1/80、土壌1/80、土器1/4、石製品1/3、鉄製品1/3、木製品任意、を原則としたが例外もある。

- ・ 全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。S J…竪穴住居跡、S B…掘立柱建物跡、S E…井戸跡、S K…土壌、S D…溝跡、S A…柱穴列、S X…その他（竪穴状遺構、小鍛冶遺構）

- ・ 遺構図中に示したドットは遺物の出土位置及び接合関係を示し、ナンバーは遺物実測図のそれと一致する。

- ・ 土器実測図において復元実測を行なったものは中心線を一点鎖線で示した。また調整技法の変換点は実線で、器形の変換点は破線で表現した。器種毎の主な表現方法は下記のとおりでである。

須恵器 断面黒塗り。図外に示した細線はへら削りの範囲を、図内の矢印はへら削りにおける工具の移動方向を示す。

土師器 断面白抜き。図中の矢印はへら削りの方向を示す。彩色されたものはその範囲に網をかけて示した。

施釉陶器 断面網かけ。灰釉陶器・緑釉陶器を示す。施釉範囲は一点鎖線で示した。

中世陶磁器類 断面白抜き。施釉範囲に網をかけて示した。



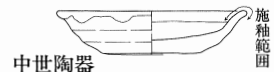
土師器 へらケズリ



須恵器 回転へらケズリ



施釉陶器



中世陶器

2. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

- ・ 法量の()内の数値は推定値であり、単位はcmを示す。なお器高は破片の場合残存高を示す。

- ・ 胎土は土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

A 石英、B 白色粒子、C 白色針状物質、D 長石、E 角閃石、
F 赤色粒子、G 黒色粒子、H 雲母、I 片岩、J 砂粒。

- ・ 焼成は4ランクに分けた。A良好、B普通、Cやや不良、D不良である。

- ・ 色調は『新版標準土色帖』（農林省水産技術会議事務局監修1967）に照らし最も近い色相を記した。彩度や明度は無視したためかなり幅のあるものである。

- ・ 残存率は5%刻みで表わしたが、破片の場合、図で示した残存部位に対するもので必ずしも全体に占める残存率を表示していない。

- ・ 備考に記載した数値は註記番号である。多数の破片が接合した場合一部を割愛した。

目 次

坂戸市

稲荷前遺跡(A区)

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1	7. その他	292
1. 発掘調査に至る経過	1	VI 第III群の遺構と遺物	297
2. 発掘調査・報告書刊行事業の組織	2	1. 住居跡	298
3. 発掘調査・報告書作成の経過	3	2. 掘立柱建物跡	329
II 立地と環境	4	3. 井戸跡	353
III A区の概観	15	4. 溝跡	361
IV 第I群の遺構と遺物	21	5. 土壌	365
1. 住居跡	21	6. 火葬墓	370
2. 掘立柱建物跡	143	7. その他	370
3. 井戸跡	169	VII 第IV群の遺構と遺物	372
4. 溝跡	188	1. 住居跡	373
5. 土壌	190	2. 井戸跡	388
6. 竪穴状遺構	202	3. 溝跡	389
7. 小鍛冶遺構	205	4. 土壌	392
8. その他	208	5. その他	393
V 第II群の遺構と遺物	211	VIII 表採遺物	394
1. 住居跡	212	IX 調査のまとめ	397
2. 掘立柱建物跡	247	1. 遺物について	397
3. 井戸跡	269	2. 遺構について	417
4. 溝跡	279	3. 集落の変遷	421
5. 土壌	284	4. 郡名墨書土器をめぐって	435
6. 竪穴状遺構	291		

挿 図 目 次

第1図 埼玉県 の地形区分 ……………4	第48図 第20号住居跡出土遺物 ……………51
第2図 事業地内の遺跡分布 ……………5	第49図 第21号住居跡 ……………52
第3図 地形断面模式図 ……………6	第50図 第21号住居跡出土遺物 ……………52
第4図 塚の越遺跡の遺構分布(部分) ……………7	第51図 第22号住居跡・カマド ……………53
第5図 入間・高麗郡の遺跡分布 ……………8・9	第52図 第22号住居跡遺物分布図 ……………54
第6図 霞ヶ関遺跡出土遺物 ……………10	第53図 第22号住居跡出土遺物 ……………54
第7図 張摩久保・若葉台遺跡の遺構配置 ……11	第54図 第23号住居跡 ……………55
第8図 東の上遺跡(第7次) ……………12	第55図 第23号住居跡出土遺物 ……………55
第9図 基本土層と分析値 ……………15	第56図 第24号住居跡 ……………56
第10図 稲荷前遺跡全測図(1/1200) ……………16・17	第57図 第24号住居跡出土遺物 ……………57
第11図 A区 の全測図(1/1200) ……………19	第58図 第25号住居跡 ……………58
第12図 第I群遺構配置図 ……………21	第59図 第26号住居跡 ……………59
第13図 第1号住居跡 ……………22	第60図 第26号住居跡出土遺物 ……………59
第14図 第1号住居跡カマド ……………23	第61図 第27号住居跡 ……………60
第15図 第1号住居跡遺物分布図 ……………24	第62図 第27号住居跡出土遺物 ……………61
第16図 第1号住居跡出土遺物(1) ……………25	第63図 第28号住居跡 ……………62
第17図 第1号住居跡出土遺物(2) ……………26	第64図 第28号住居跡出土遺物 ……………62
第18図 第1号住居跡出土遺物(3) ……………27	第65図 第29号住居跡 ……………63
第19図 第2号住居跡出土遺物 ……………28	第66図 第29号住居跡出土遺物 ……………63
第20図 第2号住居跡 ……………29	第67図 第30号住居跡 ……………64
第21図 第3号住居跡出土遺物 ……………29	第68図 第30号住居跡出土遺物 ……………65
第22図 第3・4号住居跡 ……………30	第69図 第31号住居跡 ……………66
第23図 第4号住居跡出土遺物 ……………30	第70図 第31号住居跡出土遺物 ……………67
第24図 第5・6号住居跡 ……………32	第71図 第32号住居跡(1) ……………69
第25図 第5・6号住居跡カマド ……………33	第72図 第32号住居跡(2) ……………70
第26図 第6号住居跡出土遺物 ……………34	第73図 第32号住居跡出土遺物 ……………70
第27図 第7・8号住居跡 ……………35	第74図 第33・34号住居跡 ……………71
第28図 第7号住居跡カマド ……………36	第75図 第33号住居跡出土遺物 ……………72
第29図 第7号住居跡出土遺物 ……………36	第76図 第35号住居跡 ……………73
第30図 第8号住居跡出土遺物 ……………37	第77図 第35号住居跡出土遺物 ……………73
第31図 第9～11号住居跡 ……………38	第78図 第36号住居跡・カマド ……………75
第32図 第9号住居跡出土遺物 ……………39	第79図 第36号住居跡出土遺物 ……………76
第33図 第11号住居跡出土遺物 ……………40	第80図 第37号住居跡 ……………77
第34図 第12号住居跡・カマド ……………41	第81図 第37号住居跡カマド ……………78
第35図 第12号住居跡出土遺物 ……………42	第82図 第37号住居跡出土遺物 ……………78
第36図 第13・14号住居跡 ……………43	第83図 第38号住居跡 ……………79
第37図 第13号住居跡出土遺物 ……………44	第84図 第38号住居跡出土遺物 ……………80
第38図 第15号住居跡 ……………45	第85図 第39号住居跡 ……………81
第39図 第15号住居跡出土遺物 ……………45	第86図 第39号住居跡出土遺物 ……………81
第40図 第16号住居跡出土遺物 ……………46	第87図 第40・41号住居跡 ……………82
第41図 第16号住居跡 ……………46	第88図 第40号住居跡出土遺物 ……………83
第42図 第17号住居跡 ……………47	第89図 第41号住居跡カマド ……………84
第43図 第17号住居跡出土遺物 ……………48	第90図 第41号住居跡出土遺物 ……………84
第44図 第18号住居跡 ……………48	第91図 第42号住居跡 ……………85
第45図 第19号住居跡 ……………49	第92図 第42号住居跡出土遺物 ……………86
第46図 第19号住居跡出土遺物 ……………49	第93図 第43号住居跡 ……………87
第47図 第20号住居跡 ……………50	第94図 第43号住居跡出土遺物 ……………88

第95図	第44号住居跡	89	第144図	第69号住居跡出土遺物	137
第96図	第44号住居跡出土遺物	90	第145図	第70号住居跡・カマド	138
第97図	第45号住居跡	91	第146図	第70号住居跡出土遺物	139
第98図	第46号住居跡出土遺物	92	第147図	第71号住居跡出土遺物	139
第99図	第46・47号住居跡	93	第148図	第71・72号住居跡	140
第100図	第47号住居跡カマド	94	第149図	第72号住居跡出土遺物	141
第101図	第47号住居跡出土遺物	94	第150図	第73号住居跡	142
第102図	第48号住居跡・カマド	96	第151図	第73号住居跡出土遺物	142
第103図	第48号住居跡出土遺物	97	第152図	第1号掘立柱建物跡	144
第104図	第49号住居跡	98	第153図	第2号掘立柱建物跡	145
第105図	第49号住居跡出土遺物	98	第154図	第3号掘立柱建物跡	146・147
第106図	第50号住居跡	99	第155図	第4号掘立柱建物跡	148・149
第107図	第50号住居跡出土遺物	100	第156図	第5号掘立柱建物跡(1)	150
第108図	第51・52号住居跡	101	第157図	第5号掘立柱建物跡(2)	151
第109図	第51・52号住居跡出土遺物	102	第158図	第6号掘立柱建物跡	152・153
第110図	第53号住居跡	103	第159図	第I群掘立柱建物跡見取図	153
第111図	第54号住居跡	104	第160図	第7号掘立柱建物跡	154
第112図	第54号住居跡出土遺物	104	第161図	第8号掘立柱建物跡	155
第113図	第55号住居跡出土遺物	105	第162図	第9号掘立柱建物跡(1)	156
第114図	第55号住居跡	105	第163図	第9号掘立柱建物跡(2)	157
第115図	第56号住居跡	106	第164図	第10号掘立柱建物跡	158
第116図	第56号住居跡出土遺物	106	第165図	第11号掘立柱建物跡	159
第117図	第57号住居跡	108	第166図	第12号掘立柱建物跡	161
第118図	第57号住居跡出土遺物	108	第167図	第13号掘立柱建物跡	162
第119図	第58号住居跡	109	第168図	第33号掘立柱建物跡	163
第120図	第58号住居跡出土遺物	110	第169図	第34号掘立柱建物跡	164
第121図	第59～65号住居跡遺物分布図	111	第170図	第51号掘立柱建物跡	165
第122図	第59号住居跡	112	第171図	第52号掘立柱建物跡	166
第123図	第59号住居跡出土遺物	112	第172図	第I群掘立柱建物跡出土遺物(1)	167
第124図	第60・61号住居跡(1)	114	第173図	第I群掘立柱建物跡出土遺物(2)	168
第125図	第60・61号住居跡(2)	115	第174図	第1号井戸跡・遺物分布図	169
第126図	第60号住居跡出土遺物	116	第175図	第1号井戸跡出土遺物	171
第127図	第61号住居跡出土遺物(1)	117	第176図	第2号井戸跡・出土遺物	173
第128図	第61号住居跡出土遺物(2)	118	第177図	第3号井戸跡・出土遺物	175
第129図	第62～64号住居跡	120	第178図	第4号井戸跡	176
第130図	第62・63号住居跡出土遺物	121	第179図	第4号井戸跡出土遺物(1)	177
第131図	第64号住居跡出土遺物	122	第180図	第4号井戸跡出土遺物(2)	178
第132図	第65号住居跡出土遺物	123	第181図	第5号井戸跡・出土遺物	179
第133図	第65号住居跡	124	第182図	第6号井戸跡・出土遺物	179
第134図	第66号住居跡	125	第183図	第7号井戸跡・出土遺物	180
第135図	第66号住居跡出土遺物	126	第184図	第8号井戸跡・遺物分布図	181
第136図	第67・68号住居跡(1)	128	第185図	第8号井戸跡出土遺物(1)	182
第137図	第67・68号住居跡(2)	129	第186図	第8号井戸跡出土遺物(2)	183
第138図	第67・68号住居跡遺物分布図	130	第187図	第9号井戸跡・出土遺物	184
第139図	第67・68号住居跡出土遺物(1)	131	第188図	第10号井戸跡・出土遺物	184
第140図	第67・68号住居跡出土遺物(2)	132	第189図	第11・12号井戸跡	185
第141図	第67・68号住居跡出土遺物(3)	133	第190図	第13号井戸跡・出土遺物	186
第142図	第69号住居跡	135	第191図	第14号井戸跡・出土遺物	187
第143図	第69号住居跡カマド	136	第192図	第I群溝跡・土壇配置図	188

第193図	第I群溝跡土層・出土遺物	189
第194図	第I群土壙(1)	191
第195図	第I群土壙(2)	192
第196図	第I群土壙(3)	193
第197図	第I群土壙(4)	194
第198図	第I群土壙(5)	195
第199図	第I群土壙(6)	196
第200図	第I群土壙出土遺物(1)	197
第201図	第I群土壙出土遺物(2)	198
第202図	第1号竪穴状遺構	202
第203図	第1号竪穴状遺構出土遺物	203
第204図	第2・3号竪穴状遺構	204
第205図	第2号竪穴状遺構出土遺物	204
第206図	第3号竪穴状遺構出土遺物	205
第207図	第1号小鍛冶遺構	206
第208図	第1号小鍛冶遺構出土遺物	207
第209図	第I群ピット出土遺物	208
第210図	第I群グリッド出土遺物	209
第211図	第II群遺構配置図	211
第212図	第74号住居跡	212
第213図	第74号住居跡出土遺物	213
第214図	第75号住居跡出土遺物	213
第215図	第75号住居跡	214
第216図	第76号住居跡出土遺物	214
第217図	第76号住居跡	215
第218図	第77号住居跡出土遺物	216
第219図	第77号住居跡	216
第220図	第78号住居跡出土遺物	217
第221図	第79号住居跡出土遺物	217
第222図	第78・79号住居跡	218
第223図	第80・81号住居跡	220
第224図	第80・81号住居跡出土遺物	221
第225図	第82号住居跡出土遺物	221
第226図	第82号住居跡	222
第227図	第83号住居跡出土遺物	223
第228図	第83・84号住居跡	224
第229図	第85号住居跡	225
第230図	第85号住居跡出土遺物	226
第231図	第86号住居跡	227
第232図	第86号住居跡出土遺物	228
第233図	第87号住居跡	229
第234図	第87号住居跡出土遺物	230
第235図	第88号住居跡	231
第236図	第88号住居跡出土遺物	231
第237図	第89号住居跡	232
第238図	第89号住居跡出土遺物	232
第239図	第90号住居跡	233
第240図	第90号住居跡出土遺物	234
第241図	第91号住居跡出土遺物	234

第242図	第91号住居跡	235
第243図	第92号住居跡	236
第244図	第93号住居跡	237
第245図	第93号住居跡出土遺物	238
第246図	第94号住居跡	238
第247図	第95号住居跡	239
第248図	第96号住居跡	240
第249図	第96号住居跡出土遺物	241
第250図	第97号住居跡	242
第251図	第97号住居跡出土遺物	242
第252図	第98号住居跡	243
第253図	第98号住居跡出土遺物	244
第254図	第99号住居跡出土遺物	245
第255図	第99号住居跡	246
第256図	第14号掘立柱建物跡	247
第257図	第15号掘立柱建物跡	248
第258図	第II群掘立柱建物跡見取図	249
第259図	第16号掘立柱建物跡	250
第260図	第17号掘立柱建物跡(1)	252
第261図	第17号掘立柱建物跡(2)	253
第262図	第18号掘立柱建物跡	254
第263図	第19号掘立柱建物跡	255
第264図	第20号掘立柱建物跡	256
第265図	第21号掘立柱建物跡	257
第266図	第22号掘立柱建物跡	259
第267図	第23号掘立柱建物跡	260
第268図	第24号掘立柱建物跡	261
第269図	第25号掘立柱建物跡	263
第270図	第35号掘立柱建物跡	264
第271図	第36号掘立柱建物跡	265
第272図	第37号掘立柱建物跡	267
第273図	第II群掘立柱建物跡出土遺物	268
第274図	第15号井戸跡・出土遺物	269
第275図	第16・24・26・28・29号井戸跡	270
第276図	第17号井戸跡・出土遺物	271
第277図	第18号井戸跡・出土遺物	272
第278図	第19号井戸跡・出土遺物	273
第279図	第20号井戸跡・出土遺物	274
第280図	第21号井戸跡・出土遺物	275
第281図	第22号井戸跡・出土遺物	276
第282図	第23号井戸跡・出土遺物	277
第283図	第25号井戸跡・出土遺物	277
第284図	第27号井戸跡・出土遺物	278
第285図	第II群溝跡・土壙配置図	280
第286図	第II群溝跡土層図	281
第287図	第II群溝跡出土遺物	282
第288図	第II群土壙(1)	285
第289図	第II群土壙(2)	286
第290図	第II群土壙(3)	287

第291図	第Ⅱ群土壙出土遺物(1) ……………	288	第340図	第30号掘立柱建物跡 ……………	334
第292図	第Ⅱ群土壙出土遺物(2) ……………	289	第341図	第31号掘立柱建物跡 ……………	335
第293図	第4号竪穴状遺構出土遺物 ……………	291	第342図	第32号掘立柱建物跡 ……………	336
第294図	第4号竪穴状遺構 ……………	292	第343図	第38号掘立柱建物跡 ……………	338・339
第295図	第5号竪穴状遺構 ……………	293	第344図	第39号掘立柱建物跡 ……………	340
第296図	第1号柱穴列 ……………	293	第345図	第40号掘立柱建物跡 ……………	341
第297図	第Ⅱ群ピット出土遺物(1) ……………	294	第346図	第41号掘立柱建物跡 ……………	341
第298図	第Ⅱ群ピット出土遺物(2) ……………	295	第347図	第42・43号掘立柱建物跡 ……………	342
第299図	第Ⅱ群グリッド出土遺物 ……………	296	第348図	第44号掘立柱建物跡 ……………	343
第300図	第Ⅲ群遺構配置図 ……………	297	第349図	第45号掘立柱建物跡 ……………	344・345
第301図	第100号住居跡 ……………	298	第350図	第46号掘立柱建物跡 ……………	346
第302図	第100号住居跡出土遺物 ……………	299	第351図	第47号掘立柱建物跡 ……………	347
第303図	第101号住居跡 ……………	300	第352図	第48号掘立柱建物跡 ……………	349
第304図	第101号住居跡出土遺物 ……………	301	第353図	第49号掘立柱建物跡 ……………	350
第305図	第102号住居跡 ……………	301	第354図	第50号掘立柱建物跡 ……………	351
第306図	第102号住居跡出土遺物 ……………	302	第355図	第Ⅲ群掘立柱建物跡出土遺物 ……………	352
第307図	第103号住居跡 ……………	303	第356図	第30・33・36・38・42号井戸跡 ……………	353
第308図	第103号住居跡出土遺物 ……………	303	第357図	第31号井戸跡・出土遺物 ……………	354
第309図	第104号住居跡 ……………	304	第358図	第32号井戸跡・出土遺物 ……………	354
第310図	第104号住居跡出土遺物 ……………	304	第359図	第34号井戸跡・出土遺物(1) ……………	356
第311図	第105・106号住居跡 ……………	305	第360図	第34号井戸跡出土遺物(2) ……………	357
第312図	第105号住居跡出土遺物 ……………	306	第361図	第35号井戸跡・出土遺物 ……………	358
第313図	第107号住居跡 ……………	307	第362図	第37号井戸跡・出土遺物 ……………	358
第314図	第107号住居跡出土遺物 ……………	308	第363図	第39号井戸跡・出土遺物 ……………	359
第315図	第108号住居跡 ……………	309	第364図	第40号井戸跡・出土遺物 ……………	359
第316図	第108号住居跡出土遺物 ……………	310	第365図	第41号井戸跡・出土遺物 ……………	360
第317図	第109号住居跡 ……………	311	第366図	第43号井戸跡・出土遺物 ……………	361
第318図	第109号住居跡出土遺物 ……………	311	第367図	第Ⅲ群溝跡・土壙配置図 ……………	362
第319図	第110・111号住居跡 ……………	313	第368図	第Ⅲ群溝跡土層図 ……………	363
第320図	第110・111号住居跡出土遺物 ……………	314	第369図	第Ⅲ群溝跡出土遺物(1) ……………	364
第321図	第112号住居跡 ……………	315	第370図	第Ⅲ群溝跡出土遺物(2) ……………	365
第322図	第112号住居跡出土遺物 ……………	316	第371図	第Ⅲ群土壙(1) ……………	366
第323図	第113号住居跡出土遺物 ……………	316	第372図	第Ⅲ群土壙(2) ……………	367
第324図	第113号住居跡 ……………	317	第373図	第Ⅲ群土壙出土遺物 ……………	368
第325図	第114号住居跡 ……………	318	第374図	第1号火葬墓 ……………	370
第326図	第114号住居跡出土遺物 ……………	319	第375図	第Ⅲ群ピット出土遺物 ……………	370
第327図	第115号住居跡出土遺物 ……………	320	第376図	第Ⅲ群グリッド出土遺物 ……………	371
第328図	第115号住居跡 ……………	321	第377図	第Ⅳ群遺構配置図 ……………	372
第329図	第116～118号住居跡 ……………	322・323	第378図	第122号住居跡・カマド ……………	373
第330図	第116～118号住居跡遺物分布図 ……………	324	第379図	第122号住居跡出土遺物 ……………	374
第331図	第116～118号住居跡出土遺物 ……………	325	第380図	第123号住居跡 ……………	374
第332図	第119号住居跡 ……………	327	第381図	第123号住居跡出土遺物 ……………	375
第333図	第119号住居跡出土遺物 ……………	328	第382図	第124号住居跡・カマド ……………	376
第334図	第120号住居跡 ……………	328	第383図	第124号住居跡出土遺物 ……………	377
第335図	第121号住居跡 ……………	329	第384図	第125号住居跡・カマド ……………	378
第336図	第26号掘立柱建物跡 ……………	330	第385図	第125号住居跡出土遺物 ……………	379
第337図	第Ⅲ群掘立柱建物跡見取図 ……………	331	第386図	第126号住居跡 ……………	380
第338図	第27・28号掘立柱建物跡 ……………	332	第387図	第127号住居跡出土遺物 ……………	380
第339図	第29号掘立柱建物跡 ……………	333	第388図	第127号住居跡 ……………	381

第389図	第128号住居跡	381
第390図	第128号住居跡出土遺物	381
第391図	第129号住居跡出土遺物	382
第392図	第129号住居跡	382
第393図	第130号住居跡	383
第394図	第131号住居跡	384
第395図	第132号住居跡	385
第396図	第133号住居跡	386
第397図	第133号住居跡出土遺物	386
第398図	第134号住居跡	387
第399図	第134号住居跡出土遺物	387
第400図	第135号住居跡	388
第401図	第44～46号井戸跡・出土遺物	389
第402図	第IV群溝跡・土壇配置図	390
第403図	第IV群溝跡土層・出土遺物	391
第404図	第IV群土壇	392
第405図	第IV群土壇出土遺物	392
第406図	第IV群グリッド出土遺物	393
第407図	A区表採遺物	394
第408図	土師器坏類の変遷	398・399
第409図	土師器壺・甕類の変遷(1)	402
第410図	土師器壺・甕類の変遷(2)	403
第411図	第IV・V期の須恵器	406
第412図	第VI・VII期の須恵器	409
第413図	第VIII・IX期の須恵器	410
第414図	第X～XIII期の須恵器	411
第415図	第XIV期の須恵器	413
第416図	土師器供膳器の器種組成	414

第417図	住居・掘立柱建物跡の規模	418
第418図	住居・掘立柱建物跡の主軸分布	420
第419図	第III・IV期の集落	422
第420図	第V期の集落	423
第421図	第VI・VII期の集落	425
第422図	第VIII期の集落	426
第423図	第IX期の集落	427
第424図	第X・XI期の集落	428
第425図	第XII期の集落	430
第426図	第XIII期の集落	431
第427図	第XIV期の集落	432
第428図	中世以降の遺構配置図	433

表目次

第1表	第I群土壇一覧表	199
第2表	第II群土壇一覧表	289
第3表	第III群土壇一覧表	369
第4表	第IV群土壇一覧表	393
第5表	A区遺構新旧対照表	395

付図目次

付図1	稻荷前遺跡全側図(1/800)
付図2	稻荷前遺跡A区全側図(1/400)

写真図版目次

図版1	A区全景(南より)
図版2	A区全景(西より) A区全景(東より)
図版3	第I群全景(東より) 第II群全景(西より)
図版4	第1号住居跡 第1号住居跡遺物出土状況(1) 第1号住居跡遺物出土状況(2) 第1号住居跡円面硯出土状況
図版5	第2号住居跡 第7～9号住居跡 第7号住居跡 第9～11号住居跡
図版6	第12号住居跡 第12号住居跡遺物出土状況 第13・14号住居跡 第15号住居跡
図版7	第16号住居跡

図版8	第17号住居跡 第20号住居跡と第2号井戸 第21号住居跡 第21号住居跡カマド周辺 第23号住居跡 第24・25号住居跡 第27号住居跡
図版9	第27号住居跡遺物出土状況 第28号住居跡 第31号住居跡 第31号住居跡遺物出土状況(1)
図版10	第31号住居跡遺物出土状況(2) 第31号住居跡遺物出土状況(3)・(4) 第32号住居跡 第32号住居跡カマド
図版11	第33号住居跡 第35号住居跡・遺物出土状況 第36号住居跡

図版12	第36号住居跡遺物出土状況(1) 第36号住居跡遺物出土状況(2) 第36号住居跡カマド 第37号住居跡 第37号住居跡カマド	図版24	第87号住居跡 第87号住居跡遺物出土状況 第91号住居跡 第91号住居跡遺物出土状況
図版13	第37号住居跡遺物出土状況 第38号住居跡遺物出土状況(1) 第38号住居跡遺物出土状況(2) 第41号住居跡	図版25	第93号住居跡 第95号住居跡遺物出土状況 第96号住居跡 第98号住居跡
図版14	第41号住居跡カマド 第42号住居跡 第43・44号住居跡 第45号住居跡	図版26	第99号住居跡 第100号住居跡 第105・106号住居跡 第107・110~112号住居跡
図版15	第47号住居跡カマド土層 第48号住居跡 第51・52号住居跡 第52号住居跡P ₂ 遺物出土状況	図版27	第107号住居跡 第108号住居跡 第108号住居跡カマド内遺物出土状況 第109号住居跡
図版16	第53号住居跡 第54号住居跡 第55号住居跡 第56号住居跡	図版28	第109号住居跡遺物出土状況(1)・(2) 第110・111号住居跡 第112号住居跡 第113号住居跡
図版17	第58号住居跡 第58号住居跡遺物出土状況(1)・(2) 第59号住居跡 第60~65号住居跡	図版29	第114号住居跡 第116~118号住居跡 第119号住居跡 第119号住居跡遺物出土状況
図版18	第61号住居跡 第61号住居跡カマド 第61号住居跡遺物出土状況 第63号住居跡カマド	図版30	第122号住居跡周辺 第122号住居跡 第123号住居跡 第124号住居跡
図版19	第67・68号住居跡 第67号住居跡カマド 第69号住居跡 第69号住居跡カマド	図版31	第125号住居跡 第125号住居跡遺物出土状況 第126号住居跡 第132号住居跡
図版20	第70号住居跡 第70号住居跡カマド遺物出土状況 第71号住居跡 第73号住居跡	図版32	第I群掘立柱建物群 第1号掘立柱建物跡 第2~4号掘立柱建物跡 第3号掘立柱建物跡
図版21	第73号住居跡カマド土層 第74号住居跡 第74号住居跡遺物出土状況 第78・79号住居跡	図版33	第3号掘立柱建物跡P ₄ 断面 第4号掘立柱建物跡 第5号掘立柱建物跡 第6~8号掘立柱建物跡
図版22	第78号住居跡カマド 第80・81号住居跡 第82号住居跡 第85号住居跡	図版34	第6号掘立柱建物跡 第7号掘立柱建物跡 第8号掘立柱建物跡 第9号掘立柱建物跡(1)
図版23	第85号住居跡遺物出土状況(1) 第85号住居跡遺物出土状況(2) 第86号住居跡 第86号住居跡遺物出土状況	図版35	第9号掘立柱建物跡(2) 第10号掘立柱建物跡 第5・14・15号掘立柱建物跡 第15号掘立柱建物跡
		図版36	第17~22号掘立柱建物跡(1)

第17~22号掘立柱建物跡(2)
第16号掘立柱建物跡
第17号掘立柱建物跡
図版37 第18号掘立柱建物跡
第21号掘立柱建物跡
第26号掘立柱建物跡
第27号掘立柱建物跡
図版38 第29・30号掘立柱建物跡
第31号掘立柱建物跡
第32号掘立柱建物跡
第39号掘立柱建物跡
図版39 第1号井戸跡
第1号井戸跡断面
第3号井戸跡
第3号井戸跡断面
第3号井戸跡曲物桶出土状況
第4号井戸跡
図版40 第7号井戸跡
第8号井戸跡
第8号井戸跡遺物出土状況
第10号井戸跡断面
第11号井戸跡
第12号井戸跡
図版41 第13号井戸跡遺物出土状況
第17号井戸跡
第17号井戸跡断面
第17号井戸跡遺物出土状況
第18号井戸跡
第18号井戸跡木材出土状況(1)
図版42 第18号井戸跡木材出土状況(2)
第18号井戸跡木製品出土状況
第22号井戸跡
第23号井戸跡
第24号井戸跡
第26号井戸跡
図版43 第27号井戸跡
第27号井戸跡井戸側検出状況
第31号井戸跡
第32号井戸跡
第32号井戸跡遺物出土状況
第34号井戸跡遺物出土状況
図版44 第36号井戸跡
第43号井戸跡
第43号井戸跡木材検出状況
第44号井戸跡木材検出状況
第45号井戸跡断面
第46号井戸跡
図版45 第1~3号竪穴状遺構
第2・3号竪穴状遺構

第1号小鍛冶遺構
第1号小鍛冶遺構遺物出土状況
第1号小鍛冶遺構P₃
第1号小鍛冶遺構P₄上面
図版46 第18号溝跡
第34・35号溝跡
第36号溝跡
第106号土壙
第106号土壙遺物出土状況
第288号土壙出土状況
第101号土壙礫群出土状況
図版47 第5号土壙
第42号土壙
第71号土壙
第105号土壙遺物出土状況
第142号土壙
第183号土壙
第209号土壙
第272号土壙
第282号土壙
第283号土壙
第292号土壙
第293号土壙
図版48 土師器坏類(1)
図版49 土師器坏類(2)
図版50 土師器坏類(3)
図版51 土師器皿・埴類
図版52 土師器甕類
図版53 土師器壺・甕類
図版54 須恵器坏類(1)
図版55 須恵器坏類(2)
図版56 須恵器坏類(3)
図版57 須恵器坏類(4)
図版58 須恵器坏類(5)
図版59 須恵器坏類(6)
図版60 須恵器坏類(7)
図版61 須恵器坏類(8)
図版62 須恵器坏類(9)
図版63 須恵器坏類(10)・埴類(1)
図版64 須恵器埴類(2)・盤・皿類
図版65 須恵器蓋他
図版66 須恵器壺・甕類他
図版67 墨書土器(1)
図版68 墨書土器(2)・灰釉陶器
図版69 灰釉・緑釉陶器他
図版70 中世陶磁器類
図版71 瓦塔・瓦類
図版72 金属器類
図版73 石製品・土製品・木器(1)
図版74 木製品(2)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

首都圏における人口増加の波は著しく、全国の三分の一の人口が集中している。埼玉県ではそれに対応するため、住宅・都市整備公団を中心に住宅政策及び地域環境整備計画が進められている。坂戸市入西(西部)地区については、住宅・都市整備公団により区画整理方式による宅地開発事業が計画された。

住宅・都市整備公団では文化庁との間で取り交わされた『住宅・都市整備公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書』に基づき、埼玉県教育委員会へ「坂戸市入西(西部)地区における埋蔵文化財の取り扱いについて」照会した。

県教育委員会では、埋蔵文化財遺跡地名表等に基づき、昭和56年1月20日付け教文第918号をもって次のとおり回答した。

記

1. 文化財の所在

名 称	所 在 地	種 別	時 期
坂戸市 No.99	坂戸市大字堀込	古 墳	古墳時代後期
柵 塚 古 墳	字桑原157		

上記の他に条里遺跡及び畑地部分に集落遺跡の存在が予想される。

2. 取り扱いについて

- (1) 開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。
- (2) 上記の結果をもとに埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ましい。
- (3) 計画上、やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第57条3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。

住宅・都市整備公団と県教育委員会では開発地域内に所在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して昭和59年度から発掘調査を実施することに決定した。

文化財保護法に基づき、住宅・都市整備公団からは埋蔵文化財発掘通知、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出され、稻荷前遺跡の発掘調査は昭和61年4月1日から平成元年3月31日まで実施された。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書刊行事業の組織

— 主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 —

(1) 発掘調査 (昭和61～63年度)

理事長	長井五郎
副理事長	岩田明 (S61)
	百瀬陽二 (S62・63)
常務理事 兼管理部長	町田勝義 (S61)
常務理事 兼調査研究部長	早川智明 (S62・63)
管理部	
管理部長	原田家次 (S62・63)
主査	関野栄一
主事	江田和美
主事	岡野美智子
主事	福田浩 (S61・62)
主事	本庄朗人
主事	斉藤勝秀 (S63)
調査研究部	
部長	中島利治 (S61)
副部長	小川良祐 (S61)
副部長	塩野博 (S62・63)
第二課長	駒宮史朗 (S61)
第二課長	昼間孝次 (S62・63)
主任調査員	小野義信 (S62)
主任調査員	村田健二 (S61・62)
主任調査員	中村倉司 (S61)
主任調査員	昼間孝志 (S61・62)
主任調査員	富田和夫 (S63)
主任調査員	西口正純 (S63)
主任調査員	赤熊浩一 (S63)

調査員	細田勝 (S62)
調査員	黒坂禎二 (S61)
調査員	大谷徹

(2) 整理事業 (平成2・3年度)

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事 兼管理部長	古市芳之 (H2)
常務理事 兼管理部長	倉持悦夫 (H3)
管理部	
庶務課長	高田弘義
主査	松本晋
主事	長滝美智子
主事	福田昭美 (H3)
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	本庄朗人 (H2)
主事	菊地久
主事	斉藤勝秀 (H2)
主事	腰塚雄二 (H3)
資料部	
部長	栗原文蔵 (H2)
部長	中島利治 (H3)
副部長兼 資料整理第一課長	増田逸朗
主任調査員	富田和夫

3. 発掘調査・報告書作成の経過

稲荷前遺跡の調査は昭和61年4月から平成元年3月31日までの3ヶ年にわたって実施された。調査対象面積は48,000㎡に及ぶ。遺跡内は谷地形により大きく4地点に分かれそれぞれA～D区と呼称した。A区は昭和61年度と昭和63年度に、B区は昭和61・62年度、C区は62年度、D区は61年度に調査を行なった(但し、旧D区は本報告ではA区に含め、本書の第III群の一部と第IV群として扱った)。調査は多年度に及び検出された遺構数も膨大であるため細かい経過は省略し、本書に関わるA・D区の調査経過の概要を年度毎に記すこととする。

昭和61年度 4月、塚の越遺跡と併行して調査を開始。A区の遺構確認作業に着手する。かなり遺構密度が濃いことを確認する。5月、遺構確認が一段落したため遺存状態の良い竪穴住居跡から実質的な調査に取り掛かる。9月までに竪穴住居跡20軒、井戸跡2基の調査を行なう。井戸跡は地

下水位が高く、掘削を途中で断念し水位の低下を待つて下層の調査を行なうこととした。10月、併行してD区の調査を開始する。竪穴住居跡、井戸跡、土壇、溝跡等を検出。一般に覆土が浅く遺存状態が悪い。11月、第1号住居跡を発掘し、円面硯を始め多数の須恵器を検出する。3月までに住居跡45軒、井戸跡2基、土壇10基の調査を完了した。

昭和63年度 4月、A区は約1年放置されたため、再度遺構確認から始めた。その結果、一昨年調査分と合わせて住居跡は130軒前後、井戸跡40基以上、土壇200基以上、ピット数百本の他、掘立柱建物跡も20棟以上存在することを確認し、急ピッチで調査を進めた。各遺構は全体に遺存状態が悪い上に相互に重複が激しく、遺構間の新旧関係を把握するのは困難を極めた。またA区とB区を隔てる谷の埋積土を除去し遺構の有無を確認したところ、古代の掘立柱建物跡と中・近世の溝状遺構が発見され、奈良・平安時代には谷はほぼ埋まりつつあったことが判明した。出土遺物から住居跡は7世紀後半～10世紀初頭に及ぶ約250年間に累々と営まれたこと、中世の遺構もかなり認められること、年度当初に確認した遺構数よりもやや増加することなどが次第に判明した。昭和61年度調査した第1号井戸跡の下層を調査した際、2点の墨書土器を確認した。その後「多磨郡男川」、「^{〔大カ〕}里郡」等と判読され、県内最古の墨書土器であること、また古代武蔵国の郡名を記した極めて重要な資料であることが明らかとなった。年号が改まり平成元年3月も押し詰まった頃、航空写真撮影と遺構測量のチェックを終え稲荷前遺跡の全調査は完了した。

平成2年度 稲荷前遺跡の整理に着手。A区から開始することに決定。おりしも県立埋蔵文化財センターの開設と重なり当初は慌ただしく過ぎ去る。4月から10月、遺物接合と図面整理、遺物実測を併行して進める。11月以降、遺物実測・トレース、各遺構図の作成と仮版組、トレースを開始する。

平成3年度 4月土器実測終了。木器類の実測に入る。5月～7月各遺構図の作成終了。版組を開始する。8月～10月、併行して遺物版組と遺構原稿の執筆を行なう。11月遺物復元を実施。12月、遺物写真撮影と割付け・編集作業。1月入札。2～3月校正・報告書の刊行。



◀ 説明は長井理事長（当時）
畑知事の視察 昭和62年4月

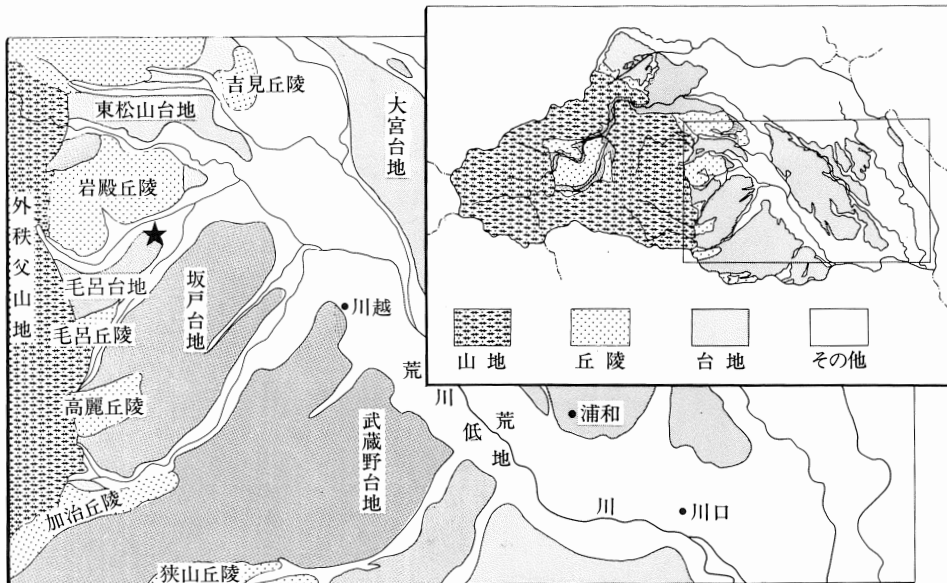
II 立地と環境

立地

稲荷前遺跡は埼玉県坂戸市大字竹之内に所在する。位置的には東武東上線北坂戸駅の西約3km、越辺川を臨む毛呂台地の北東部先端の低台地上に立地し、標高約31mを測る。遺跡北側には越辺川によって形成された後背湿地(沖積地)が広がり、肥沃な水田地帯を構成している。水田面との比高差は1.0~1.5m程である。遺跡の立地する毛呂台地は広義の入間台地に含まれ西側は毛呂山丘陵を経て外秩父山地に続き、北側は越辺川を挟んで岩殿丘陵と対峙する。東側と南側は高麗川に画されそれぞれ坂戸台地、入間台地に移行する。この毛呂台地は越辺川、高麗川を始め、台地内を貫流する葛川等の中小河川とその支流の侵蝕を受け、起伏に富んだ複雑な地形を形成している。一方、高麗川以東の坂戸台地は毛呂台地と対照的に比較的平坦な扇状地性地形が広がり、勝呂廃寺、若葉台遺跡等の著名遺跡はこの台地上に形成されている。毛呂台地と坂戸台地を取り巻くように広がる広大な沖積地は越辺川とその支流たる高麗川・葛川・飯盛川等の小河川により形成されたもので、本遺跡も含め越辺川右岸に形成された遺跡群成立の母胎であると言える。

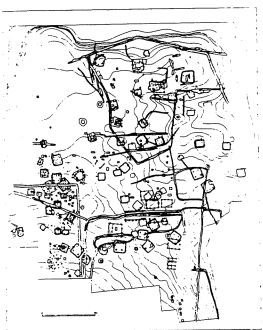
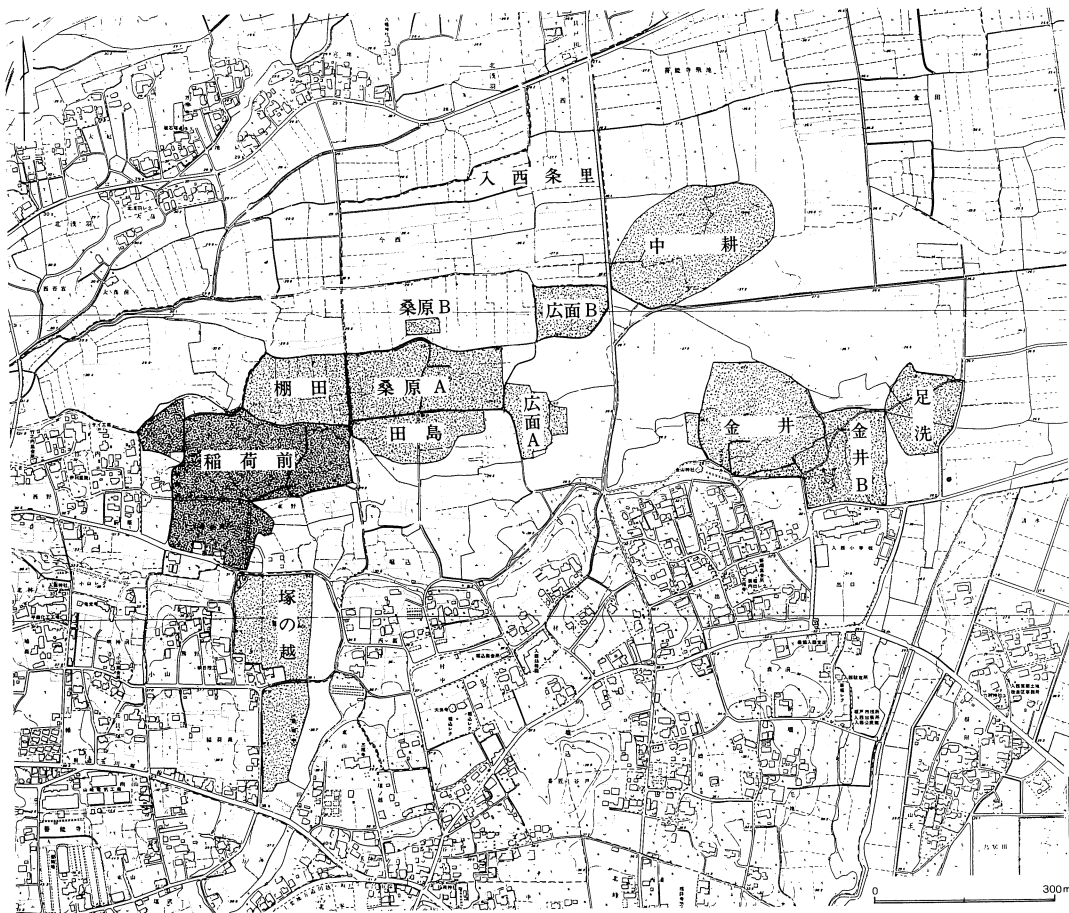
周辺遺跡の概観

先ず、坂戸入西地区土地区画整理事業地内に位置する遺跡群の様相を概観しておきたい。当事業地は越辺川中流域右岸にあたり、稲荷前遺跡の他に塚の越遺跡、棚田遺跡、田島遺跡、桑原A遺跡、桑原B遺跡、広面A遺跡、広面B遺跡、中耕遺跡、金井遺跡(A・B区)、足洗遺跡が所在する。稲荷前遺跡は古墳時代前期の周溝墓群と古墳時代後期~平安時代の集落、塚の越遺跡は前方後円墳と古墳時代後期~平安時代の集落、棚田遺跡は古墳時代後期初頭の集落、田島遺跡は古墳時代後期~平安時代の集落、桑原A遺跡は古墳時代後期初頭の集落と平安時代の集落、桑原B遺跡は古墳時代後

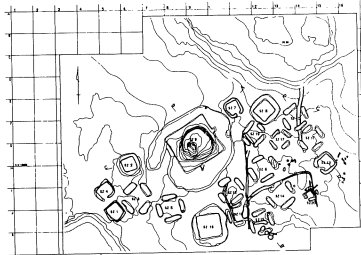


第1図 埼玉県の地形区分

広面遺跡



塚の越遺跡



広面遺跡



金井遺跡(A区)



第2図 事業地内の遺跡分布

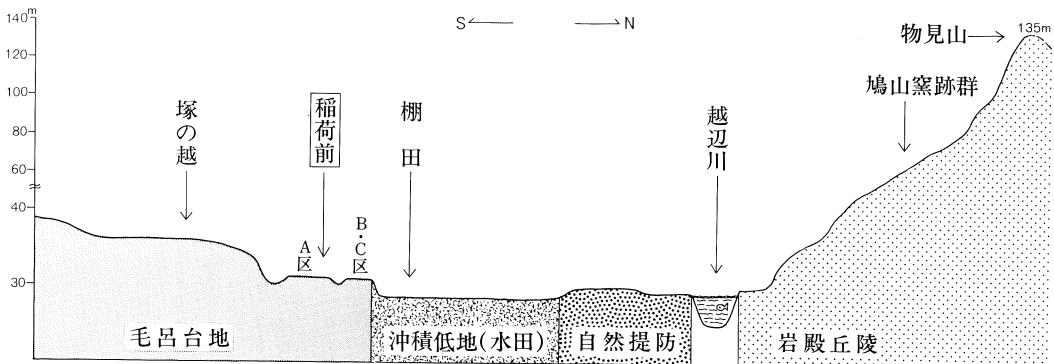
期と推定される水田状遺構、広面遺跡は弥生時代終末期～古墳時代初頭の周溝墓群、中耕遺跡は同時期の集落と周溝墓群、金井遺跡A区は古墳時代後期～奈良時代の集落、金井遺跡B区は古墳時代後期～平安時代の集落と中世の鑄造遺跡、足洗遺跡は古墳時代後期～平安時代の集落である。

これらの遺跡群は立地面から大きく4つに分けられ、稲荷前遺跡よりも一段高い高躁な台地上に位置する塚の越・金井遺跡B区、沖積低地に面した低台地上に立地する稲荷前・田島・桑原・金井遺跡A区・足洗遺跡、沖積面下に埋没したローム台地上に立地する広面・中耕遺跡、水田下の沖積地に立地する棚田遺跡である。こうした立地上の差異は遺跡形成の時期的な相違をも微妙に反映していることが次第に解ってきた。すなわち、最も低位な現水田下に位置する棚田・中耕・広面B遺跡には7世紀以降集落は形成されず、沖積地に面した稲荷前・桑原A・金井B・足洗・田島・塚の越遺跡といった台地部に集落域が限定される傾向が認められる。恐らく、古墳時代後期を画期とするこうした集落の高位面への移動という背景には第一義的には河川の氾濫による堆積作用が挙げられるが、それとともに可耕地の拡大を意図した積極的な水田開発があったものと推測される。現に桑原遺跡北側の沖積面には7世紀以降と推定される水田状遺構が検出され(桑原B遺跡)、6世紀前半代と推定される棚田遺跡の消滅後、さほどの期間を経ないで水田化された状況を読み取ることができる。棚田・桑原B両遺跡はこの地に形成されたとされる「入西条里」水田推定域内の一角に位置し、入西条里の施行期を検討する際の貴重な情報を提供しているといえる。条里水田の施行期に関しては桑原遺跡の報告で具体的に触れられるものと思うが、少なくともその上限は6世紀後半以降であることは確実である。

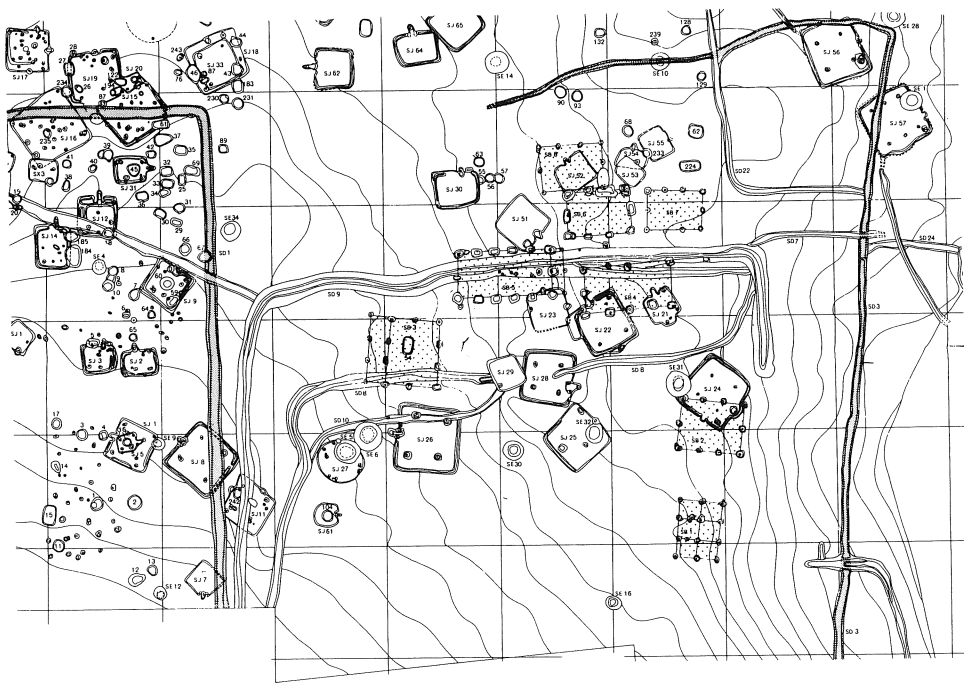
古代入間・高麗郡の遺跡様相

さて、周辺地域を含めた歴史的環境に目を転じてみよう。各時代の主な遺跡や歴史的環境に関しては既に『金井遺跡』(昼間1989)、『広面遺跡』(村田1990)、『塚の越遺跡』(昼間1991)の各報告書によって網羅的に詳述されており、本稿では稲荷前遺跡A区の存続期間である古墳時代後期(鬼高期)～奈良・平安時代の遺跡群の概要、特に古代入間郡と高麗郡の遺跡様相をまとめてみたい。なお地図に示した郡域は『新編武蔵風土記稿』正保年間改定図を基に作成したものである。

まず越辺川右岸の様相から見てみよう。下流域は弥生時代以降、早くから開発の進んだ地域で古墳時代においても数多くの遺跡が存在する。6世紀前後の集落は調査例は少ないが附島遺跡で検出

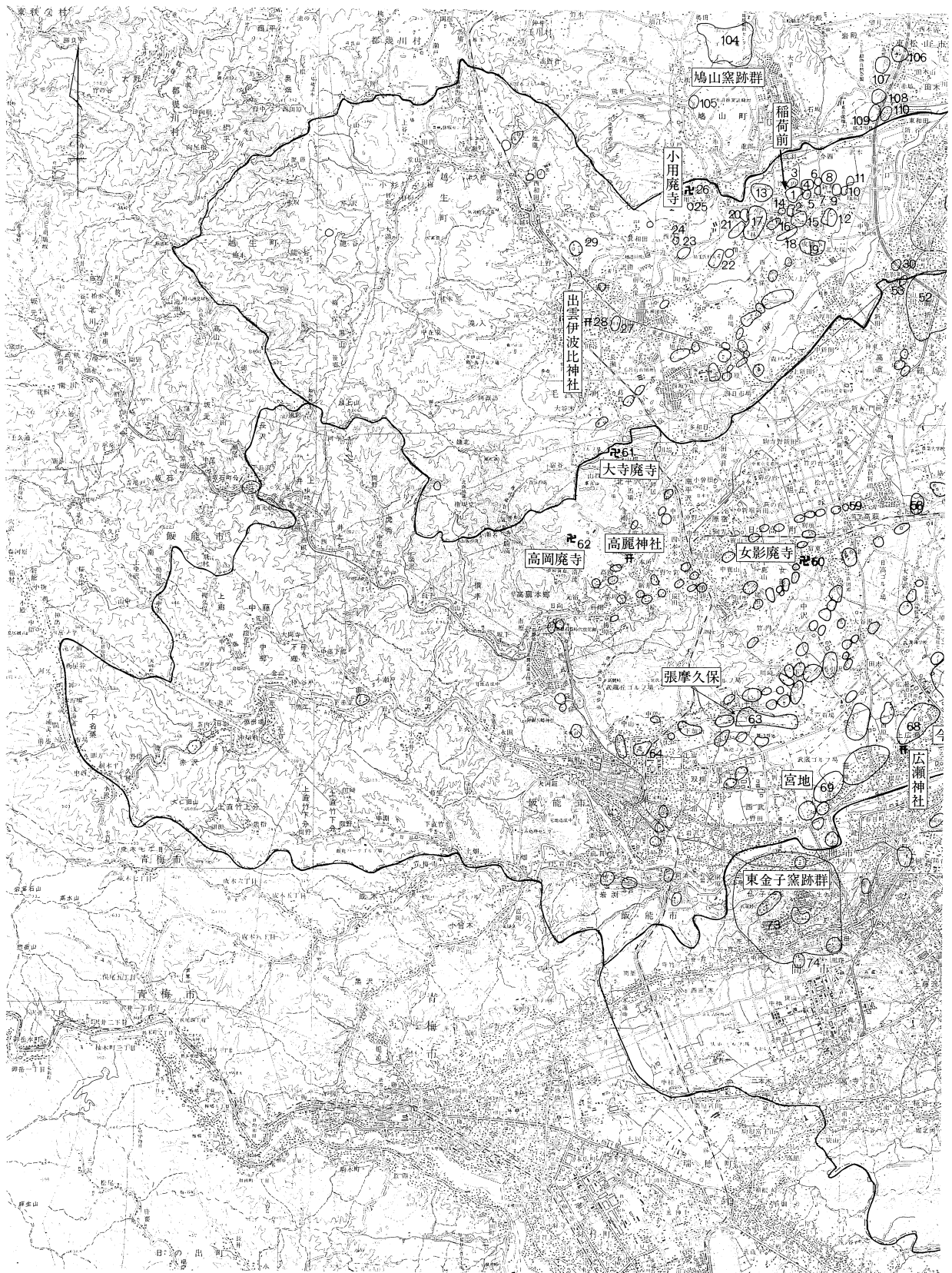


第3図 地形断面模式図



第4図 塚の越遺跡の遺構分布(部分)

されている(伊藤他1987)。続く6世紀後半代の様相は未だ明確に捉えられていないが、勝呂廃寺では6世紀後半から7世紀の集落が20数軒検出されている(伊藤1981)。7世紀に至ると更に開発が進み、集落数も増加するようである。その象徴が勝呂廃寺である。勝呂廃寺は寺域が未確定であるが7世紀後半創建と推定される県内でも最古の寺院の一つである(高橋他1982)。周辺地域には6世紀以降全長63mの胴山古墳(前方後円墳)、直径50mの勝呂神社古墳を主墳とする総数50基以上とも言われる新町・勝呂古墳群、牛塚山古墳を主墳とする牛塚山古墳群が形成されている。その他にも新山古墳群等が存在し入間郡内において最も古墳分布の稠密なエリアであることが指摘されている。このことから窺えるように廃寺造営以前にも周辺地域には大規模な集落が広がっていたものと考えられ、こうした在地勢力をまとめた有力氏族の手によって勝呂廃寺が建立されたものと理解されている(高橋前掲書)。この地域は8世紀以降も前代に引続き集落が存続しており、勝呂遺跡群内の勝呂廃寺F区(加藤他1989)・下石井遺跡(加藤他1991)、台地下の自然堤防に所在する附島遺跡では8世紀初頭から9世紀後半に至る住居跡が検出されている。また該期以降宮町、清進場、住吉中学校、山田遺跡、そして若葉台遺跡、脚折遺跡群など台地奥部にも新たに集落が形成されるようになり更に発展した様相を窺うことができる。若葉台遺跡は住居跡100軒以上、掘立柱建物跡50棟以上が検出され、その中には四面庇の掘立柱建物跡、円面硯、奈良三彩小壺、和同開珎、帯金具、銅鈴、銅線など一般集落ではなかなか出土しない遺構や遺物が認められ、古くから郡衙、豪族居館、駅屋、官人居宅説等様々な位置付けがなされてきた(斉藤他1984等)。山田遺跡は若葉台遺跡の西側約1kmにあり、これまでに住居跡52軒が調査された。奈良三彩香炉を出土したことで著名である。若葉台・山田遺跡の南西に位置する脚折遺跡群(一天狗・脚折山田・雷田池東遺跡等)では該期の住居跡44軒、



第 5 図

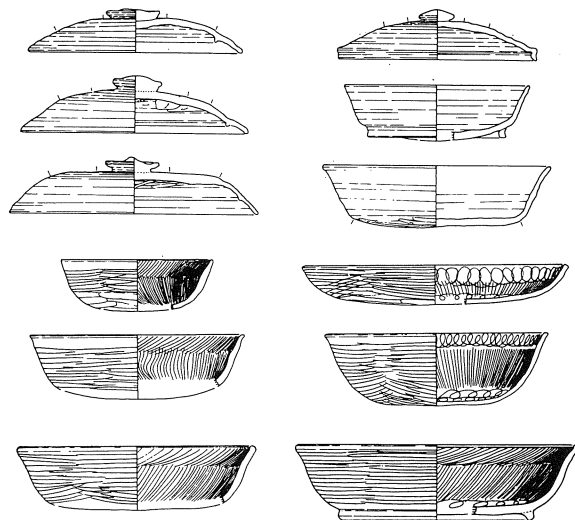


入間・高麗郡の遺跡分布

掘立柱建物跡11棟が発見された。宮町遺跡では棹秤の石製錘と留金具が、隣接する清進場では鉄製錘が住居跡から出土し遺跡の性格について注目を集めている。こうした一連の遺跡は生産基盤となる沖積低地からかなり離れ狭少な可耕地しか確保し得ないにもかかわらず集落規模が大きく、生業形態、遺跡相互の関係、所属郡等その性格について興味もたれるところである。

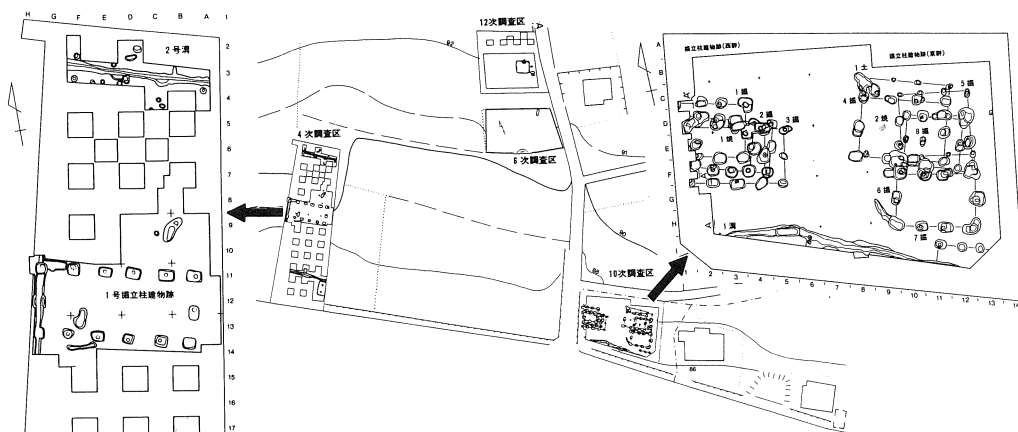
越辺川右岸中流域の集落では鬼高期初頭(6世紀前後)に集落が形成される遺跡として本区画整理事業地内の棚田遺跡、桑原遺跡が挙げられる。巨視的には同一遺跡と考えられ、存続時期もほぼ5世紀末葉から6世紀前半代の約半世紀間にわたって営まれた遺跡である。長岡遺跡は前記の棚田・桑原遺跡の西側約0.7kmの至近距離に位置する集落で、立地的には桑原遺跡とほぼ同様な低地に面した低台地上に位置する。正式報告が未刊であるが、凡そ6世紀初頭には集落が形成されていた模様である。苦林古墳群との密接な関係が示唆されており、奈良・平安時代にも引続き集落域として利用された大集落であると推定されている(加藤他1987)。7世紀に至ると塚の越遺跡、稻荷前遺跡、金井遺跡、足洗遺跡で集落が形成され、長岡遺跡でも該期の集落は営まれていたようである。また稻荷前遺跡の南約0.6kmには大河原遺跡が所在し、7世紀後半と9世紀の住居跡が調査されている。また未調査ではあるが毛呂山町神明台遺跡等も古墳時代後期から平安時代の大規模な集落跡と推定されている。この地域には5基の前方後円墳を含む総数53基から構成される苦林古墳群を中心として善能寺古墳群、三福寺古墳群、大河原古墳群、北峰古墳群、成願寺古墳群の各古墳群が6世紀から7世紀にかけて形成され、入間郡内でも越辺川下流域と並んで最大規模の古墳分布地域として知られている。こうした古墳群は前記の集落群を背景として成立したことは疑いなく、この時期に越辺川及び葛川流域の開発が盛んに行なわれたことを示す証左といえよう。また7世紀に成立した諸集落は基本的に8世紀以降の所謂律令期になってもやや断続はあるもののほぼ同一地点に集落が継続して営まれていたことが知られ、古墳時代終末期の在地勢力が律令国家成立以後も大きな改変を受けずその勢力を維持・拡張し得た稀有の地域であり、同時に入間郡内でも屈指の拠点的な集落群と捉えることができよう。

右岸をやや遡ると毛呂山町に6世紀後半から7世紀にかけて構築された38基の円墳からなる川角古墳群が形成されるが、周辺に対応する集落は未だ検出されていない。更に越辺川を遡ると支流大谷木川縁辺には9世紀初頭～10世紀初頭前後に営まれた伴六遺跡(富田1982・村木1983)が存在する。調査の結果住居跡25軒他が検出されている。他には越生町の越生五領遺跡で9世紀の住居跡が1軒検出されたにとどまり、中・下流域に比して遺跡規模は小さいことが指摘できる。

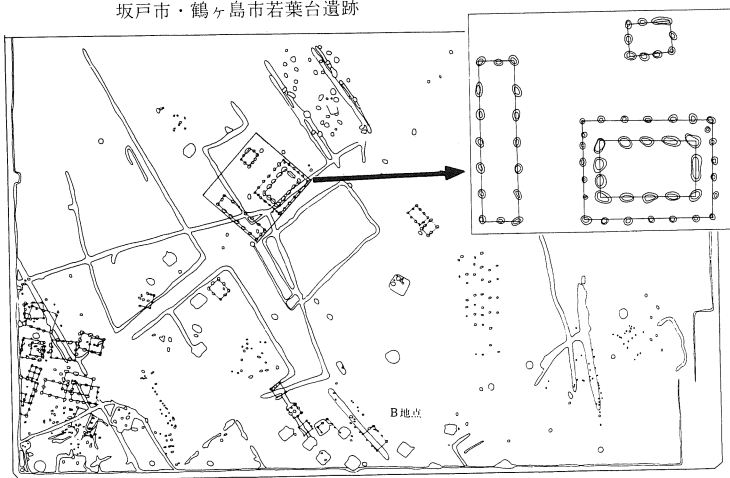


第6図 霞ヶ関遺跡出土遺物

飯能市張摩久保遺跡

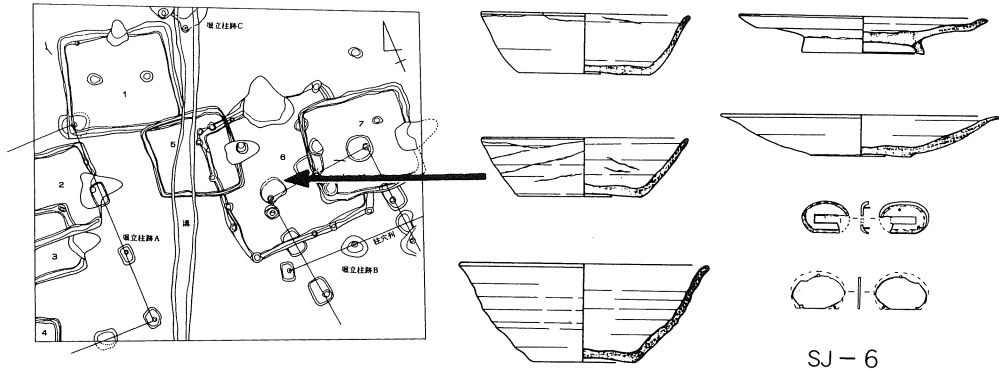


坂戸市・鶴ヶ島市若葉台遺跡



第7図 張摩久保・若葉台遺跡の遺構配置

越辺川左岸では古墳時代の古墳群と須恵器窯跡に関連する遺跡が多く分布している。岩殿丘陵東麓に位置する桜山・根平・舞台遺跡では6・7世紀の須恵器窯と7世紀の古墳群が、舞台遺跡では5世紀後半から7世紀中葉頃の住居跡87軒が検出され該地域の中心的な集落と捉えられる。駒堀遺跡では7世紀の集落11軒、立野遺跡では7世紀後半の工房跡2軒が調査され、円面硯を始め多量の須恵器が出土した。大塚原遺跡では7世紀後半の住居跡8軒、緑山遺跡では8世紀初頭の住居跡4軒が検出されている。しかしこの地域の集落と須恵器窯は8世紀前後を境にして途絶えてしまい、替わって鳩山窯跡群で須恵器生産が本格的に開始される。鳩山窯跡群は玉川村を中心とする亀の原窯跡群、嵐山町を中心とする將軍沢窯跡群とともに南比企窯跡群を構成する中核となる窯跡群として位置付けられ、発掘調査によって8世紀初頭から9世紀後半までの間、41基の須恵器窯が順次操業され、かつ住居139軒からなる工人集落や多数の粘土採掘墳などが存在することが明らかになった。まさに古代の大規模な須恵器生産工業地帯といえよう(渡辺他1988)。周辺には7世紀前半といわれる特異な波状文を巡らす鉢を出土する小用窯跡、8世紀初頭に比定される山下窯跡、県指定史



第8図 東の上遺跡(第7次)

跡の赤沼国分寺瓦窯跡等の窯跡群が密集することが知られている。また小用の地には7世紀後半創建とされる小用廃寺が、その西至近距離に供給瓦窯と推定されている西戸丸山遺跡が存在し越辺川左岸域にも7～8世紀の段階で有力な氏族が存在したことを示している。

次に坂戸台地南部に目を転ざると、大谷川と小畔川に挟まれた台地先端部付近に中小坂遺跡群と下小坂古墳群が所在する。上谷遺跡を中心に古墳時代後期の住居跡が77軒調査されており該期の拠点的な集落の一つと考えられている(田中1976・加藤他1987)。ただし、平安時代の住居跡は僅か3軒となり律令期に衰退した集落と推定されている。

小畔川流域を遡ると右岸に川越市上組Ⅰ・Ⅱ遺跡、左岸中流域に日高市光山・上猿ヶ谷戸遺跡が所在する。前者は7世紀代の住居跡49軒が検出されたが、8世紀以降に集落が連続しない点に特色がある。後者の光山・上猿ヶ谷戸遺跡は現在当事業団で調査中の遺跡であるが、凡そ8世紀前葉から後半にかけての比較的短期間に営まれた集落であることが指摘されている。日高市一帯は靈龜二(716)年に建郡された高麗郡に属することはほぼ確実に高麗建郡と有機的関連をもった集落と理解されている(井上1990・1991)。日高市域は古墳時代後期の集落は未発見で、高麗建郡と軌を一にして遺跡が激増するという(高橋1980)。調査された集落には若宮遺跡、新宿遺跡、宮久保遺跡等がある。また古代寺院の分布も多く女影廃寺、高岡廃寺、大寺廃寺が8世紀前半から中葉にかけて相次いで創建されたとされている(高橋他1982)。同様に高麗郡域に属すると推定される飯能市でも古墳時代の遺跡は少なく奈良時代以降遺跡数は爆発的に増加する。特に南小畔川流域で顕著に認められ、なかでも張摩久保遺跡は東西1.5km、南北0.3kmにわたって遺物が分布し第4次・第10次調査では9世紀頃と推定される5×2間の大規模な掘立柱建物跡を始め9棟の建物群、第12次調査では8世紀前半の住居跡が1軒検出されている(曾根原1990)。しかも掘立柱建物跡を区画する可能性をもつ溝が巡り、かつ溝内には現状では竪穴住居が存在しないこと、掘立柱建物跡の配置に規格性を見ることが出来るなど通常の集落とはやや様相が異なる。今後の調査の進展に期待したい。対して入間川流域では9世紀中頃に形成された集落が多いことが指摘されている(鈴木1984)。

入間川流域では先ず下流域左岸に霞ヶ関遺跡と河越氏館跡内遺跡が存在する。霞ヶ関遺跡は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて継続した集落と考えられ一部の資料は埼玉県史に公表された。それによれば畿内系の暗文を施す土師器杯・皿等が出土し入間郡衙に比定する説もある重要な遺跡

である(酒井1987)。河越氏館跡内遺跡も霞ヶ関遺跡と同一遺跡の可能性が高く奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。近接して所在する龍光・天王遺跡も含めてよいだろう。天王遺跡では7世紀前半代の住居跡も調査されている。左岸中流域の狭山市内には宮ノ越、城ノ越、小山ノ上、今宿、宮地遺跡がベルト状に連続して一大集落群を形成している。この地は従来入間郡に属するとする見解が主流であったが、いずれの集落も8世紀前半の高麗建郡以降形成されたものと推定されること、『新記』の高麗郡域に属すること等を根拠に、高麗郡域に属するものとする見解が提出されている(駒見他1982・中村1991)。ただし、上広瀬古墳群、笹井古墳群が存在しており、古墳時代後期においても一定の集落は形成されていたものと考えられる。

入間川右岸下流域、特に川越市域の遺跡分布が現状では不明であるが、広大な可耕地を控えているため今後かなりの遺跡が発見される可能性を有する。中流域の狭山市では左岸の集落群に対応するように赤間川沿いに大規模な集落が形成される。稲荷上遺跡、坂上遺跡、揚榎木遺跡、戸張遺跡、峰遺跡、滝・祇園遺跡がそれである。調査された揚榎木遺跡では8世紀前葉から9世紀後半の住居跡89軒と掘立柱建物跡12棟が検出された。この周辺においても古墳時代の集落は滝・祇園遺跡で7世紀前半の住居跡が1軒検出されているのみで相対的に少ない模様である。古墳群は稲荷山公園古墳群が挙げられる程度である。上流に位置する入間市域には前内出、八坂前、新久窯跡等から構成される東金子窯跡群、集落では9世紀代の住居跡10軒が検出された霞川遺跡が知られている。

柳瀬川左岸中・上流域の所沢市内では古墳時代の集落として高峰、野竹、城上第二遺跡が存在し、6世紀初頭から7世紀前半までの住居跡45軒が検出された(並木他1984)。美園上遺跡では7世紀後半と推定される住居跡が1軒検出されている。8世紀以降の集落は柳瀬川の流域を中心にむらなく広がるという。特に著名なものに東の上遺跡があり、7世紀後半から9世紀の住居跡52軒と掘立柱建物跡数棟が検出されている。周辺には物部天神社、中水川神社、出雲祝神社という式内社に擬せられる神社も存在し入間郡衙に比定する説もあるが、現状では官衙に比定することは到底不可能である。最近では道路状遺構が検出され古代の官道ではないかと注目を集めており、周辺地域の調査の進展に期待したい。他には畔の前遺跡から9世紀代の住居跡1軒、野竹遺跡から住居跡2軒が検出される程度で、東の上を除くと全体に小規模な遺跡が多く分布するようである。

荒川右岸の武蔵野台地縁辺では古墳群の形成がほとんど見られず、古墳群の空白地帯といわれており対応する集落も認められないという。該地に集落が再び出現するのは古墳時代後期後半以降とされ、三芳町本村北遺跡、富士見市宮脇遺跡第5地点、別所遺跡6A地点、谷津遺跡第7地点、観音前遺跡第5地点等で7世紀中葉から後半にかけて住居が検出されている。続く8・9世紀になると富士見市打越、観音前、北通、北別所、栗谷ツ、殿山、宮廻、東前遺跡、本目、黒貝戸、東台、上福岡市川崎、ハケ遺跡C地区、滝、松山、三芳町新開、本村北、俣埜、大井町東台遺跡等の集落が形成され集落数が著しく増加することが知られている。総じて9世紀段階の遺跡が多く、また大規模な遺跡は少ない模様である。このうち新開遺跡、栗谷ツ遺跡から須恵器窯跡が検出され、南比企窯跡群・東金子窯跡群衰退期の須恵器生産のあり方を示すものとして注目される。

以上雑駁に古代入間郡及び高麗郡を中心とする集落の様相を記してきたが、まとめてみると、律令期である8・9世紀の集落には中核となる集落群を抽出することができる。例えばA稲荷前遺跡

第5図 掲載遺跡一覧

1	稲荷前	29	越生五領	56	鶴ヶ丘C・E区	85	打越
2	塚の越	30	花影	57	登野山	86	富士見松山
3	棚田	31	芦山	58	光山・上猿ヶ谷戸	87	氷川前
4	桑原	32	相撲場	59	新宿	88	観音前
5	田島	33	金内山	60	女影廃寺・若宮	89	東台
6	広面B	34	新山古墳群	61	大寺廃寺	90	別所
7	広面A	35	山田	62	高岡廃寺	91	栗谷ツ
8	中耕	36	若葉台	63	張摩久保	92	北通
9	金井A	37	新町古墳群	64	旭原	93	南通
10	金井B	38	勝呂廃寺・勝呂遺跡群	65	宮ノ越	94	本村北
11	足洗	39	附島	66	城ノ越	95	新開
12	北浦西峰(古墳群)	40	明泉	67	小山ノ上	96	本目
13	長岡	41	青木堀ノ内	68	今宿	97	俣埜
14	稲荷森	42	住吉中学校	69	宮地	98	三芳東台
15	三福寺古墳群	43	宮町	70	揚楯木	99	滝ノ城横穴
16	善能寺古墳群	44	清進場	71	滝・祇園	100	東の上
17	苦林古墳群	45	駒方	72	稲荷山公園古墳群	101	畔の前
18	大河原遺跡(古墳群)	46	小沼堀ノ内・牛塚山古墳群	73	東金子窯跡群	102	美園上
19	成願寺古墳群・若宮遺跡	47	木曾免	74	霞川	103	高峰・野竹・城上
20	神明台	48	丸山	75	南大塚古墳群	104	鳩山窯跡群
21	明神台	49	上谷・中小坂遺跡群	76	仙波	105	雷
22	川角古墳群	50	河越館跡内・龍光他	77	川崎	106	舞台
23	西戸古墳群	51	霞ヶ関	78	ハケ遺跡C地点	107	根平
24	西戸丸山窯跡	52	脚折遺跡群	79	滝	108	緑山
25	小用窯跡	53	羽折	80	松山	109	立野
26	小用廃寺	54	的場古墳群	81	宮廻	110	駒堀
27	伴六	55	上組I・II	82	黒貝戸		
28	出雲伊波比神社			83	殿山		
				84	谷津		

周辺、B勝呂廃寺周辺、C若葉台・山田・脚折遺跡群、D霞ヶ関・河越館跡内遺跡、E日高市若宮遺跡周辺、F飯能市張摩久保遺跡周辺、G狭山市宮の越遺跡から宮地遺跡までの集落群、H揚楯木遺跡周辺、I東の上遺跡周辺、J荒川右岸地域の富士見市、上福岡市周辺地域である。これらの集落群の時期的消長をみると、A・Bの地域は7世紀以降9世紀に至るまで継続する集落と推定され、古墳時代の在地勢力が律令期に至っても勢力を維持・伸長したことを物語っている。D・I・Jの地域は7世紀代から集落形成はなされるが、集落規模や集落数が増加するのは8世紀以降のようである。対してC・E・F・Gの地域は古墳時代後期の遺跡がほとんどないか、あっても一定の断絶期間を挟んで8世紀2/4期を前後する段階で新たに集落が形成されたと推定される。

一方坂戸市上谷遺跡や川越市上組I・II遺跡のように古墳時代後期(6・7世紀)にかけて営まれた大集落が律令期には断絶するか極端に勢力を弱めてしまう例もみられ、律令体制形成段階の社会的変動の大きさを物語っている。各集落群成立の背景には異なる事情が存在したことが窺えるが、上記の集落群が古代入間郡・高麗郡を構成する郷の中心的な位置を占めていたことは疑いない。当然文献に記されている古代入間郡における郷名と遺跡群の対比という作業も射程に入るが、これに関しては今後検討していきたい。引用・参考文献は巻末に一括した(なお第4図～8図は各報告書並びに県史から作図した)。

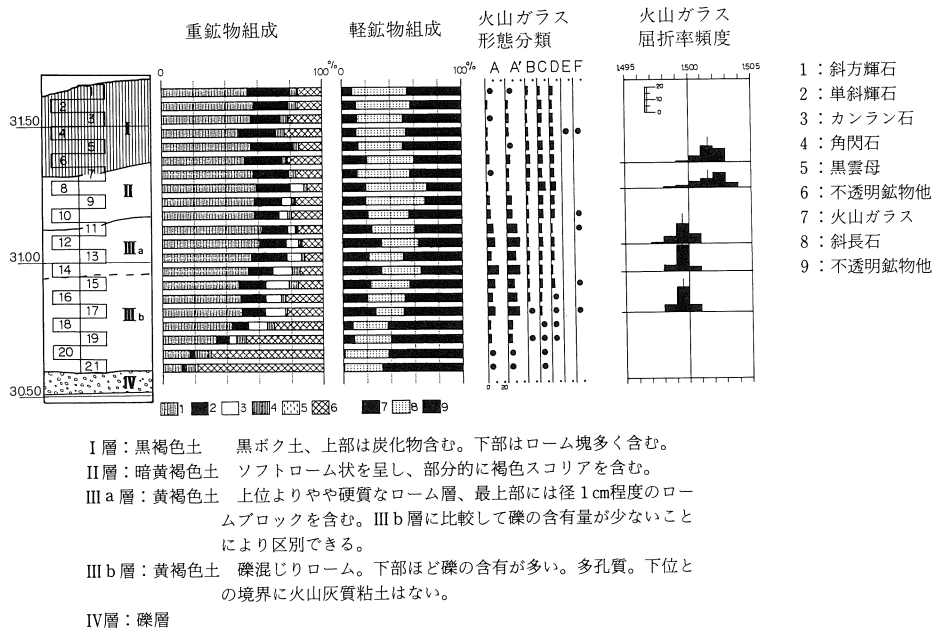
III A区の概観

稲荷前遺跡は調査区東西500m、南北250mの広範囲に及ぶ大集落である。遺跡そのものは西側に位置する竹之内の集落に延びるのは確実であり、おそらく谷を隔てて長岡遺跡と隣接するものと推定される。地形的には北側に広がる沖積低地に面した低ローム台地先端に位置する。調査区西端(O-5区)の基本土層は第I層～第IV層に分かれ、第I層は耕作土、第II層はローム漸移層、第III層はローム層、第IV層は礫層である。遺構確認面は第II層から第III層である。本地域のローム層については武蔵野面と考える説と、立川面も存在するという説があるため、主としてロームの対比を目的に(株)パレオ・ラボに委託して自然科学的分析を実施した。ここではその結果のみを要約して掲載する。第II層から上部にはローム層最上部ガラス質火山灰(UG)を第III層にはバブルウォール型のA型、A'型の火山ガラスが多いこと、屈折率が1.498～1.501に集中することから始良 Tn 火山灰(AT)が挟在し、下位に礫層を伴うことから立川面の Tc 2面に対比される。稲荷前遺跡A区のやや高い地形が地形の変換点のスロープではなく、明らかに区別される地形面であり、南側の台地の末端に沿うかたちで Tc 2面が分布することを示している。また南側の台地(塚の越遺跡立地面)が Tc 2面よりも古い地形面であることが判った(第9図)。

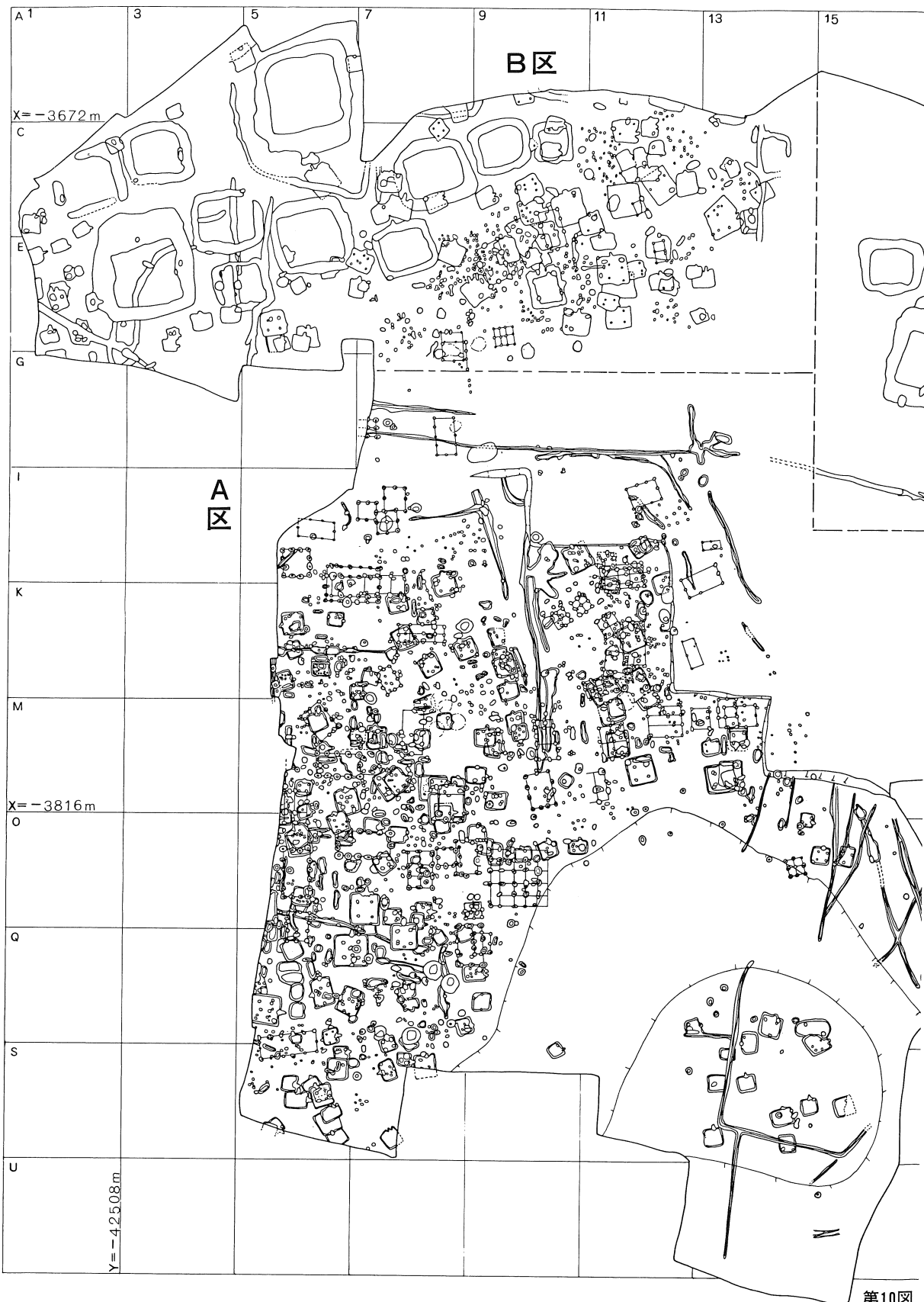
調査区は谷状地形によりA～C区に区分される。時期的には古墳時代後期から奈良・平安時代の集落と中世遺構が全面に展開する他、B・C区では古墳時代前期の方形周溝墓群が帯状に累々と営まれていた。現在知られている遺構の内訳は以下のとおりである。

A区 竪穴住居跡135軒、掘立柱建物跡52棟、井戸跡46基、溝跡39条、土壌296基、ピット756基、竪穴状遺構5基、小鍛冶遺構1基、火葬墓1基である。

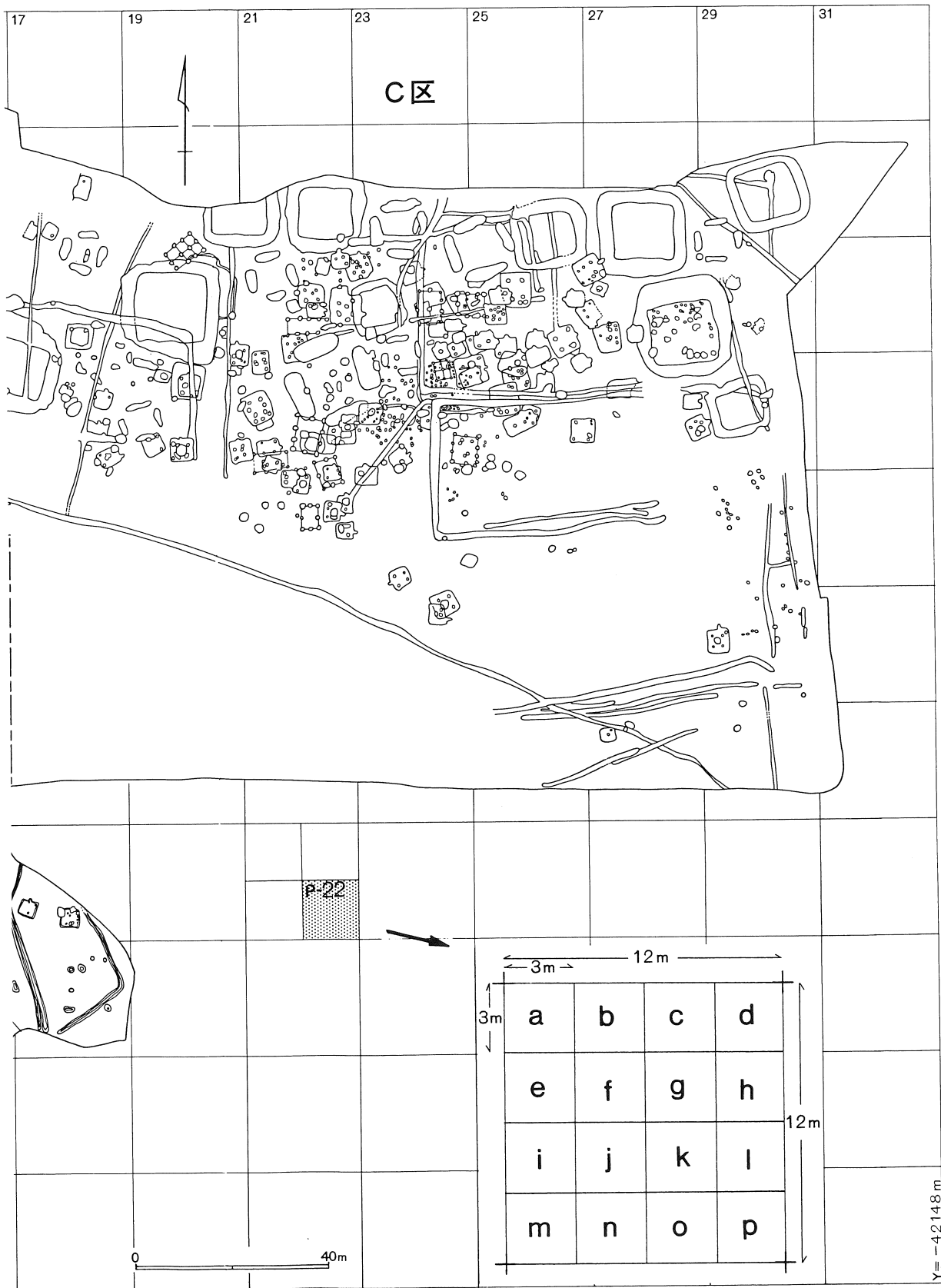
B区 竪穴住居跡95軒、掘立柱建物跡6棟、井戸跡14基、溝跡9条、土壌62基、方形周溝墓17基、



第9図 基本土層と分析値



第10图



稲荷前遺跡全測図(1/1200)

火葬墓 1 基、特殊遺構 1 基。

C 区 竪穴住居跡94軒、掘立柱建物跡11棟、井戸跡30基、溝跡30条、土壇137基、方形周溝墓19基、特殊遺構 4 基。

このほかB区とC区を分つ谷部には須恵器を多量に含む包含層が形成されていた。合計すると竪穴住居跡314軒、掘立柱建物跡69棟、井戸跡90基、溝跡78条、土壇495基、方形周溝墓36基、火葬墓 2 基、竪穴状遺構 5 基、小鍛冶遺構 1 基、特殊遺構 5 基のほか多数のピット群と遺物包含層が検出されたことになる。但しB・C区に関しては、今後の整理状況によっては遺構数の変動も予想されるのでご了承願いたい。

調査は各地区毎に行なったため、遺構番号は地点毎に附した。また地点の呼称方法は遺跡全体を包含する12m グリッドを切り、北西隅を起点に南北にA・B・C…、東西に1・2・3…とし交差する位置を、例えばG-5区と呼称した。12m 方眼内の分割は3m 毎としa・b・c…と表わした。

本書ではA区から検出された遺構・遺物を報告するが、A区の遺構分布は極めて密でしかも重複が激しい。そのため本書では便宜的に4つの群に分割し、小地点毎に報告するという方法を用いた。したがって、遺構番号は調査時点とは異なる(対照表は巻末に示した)。第I群はA区南西部の最も遺構が密集する部分である。第II群は北西部、第III群は北東部、第IV群は南東部に当る。

住居跡は7世紀中葉から10世紀初頭頃までに営まれたものと考えられ135軒が検出された。全体に遺存状態は悪く、出土遺物も少ない傾向にあるが、第1号住居跡では多量の遺物が出土し、その中には円面硯が1点含まれる。井戸跡は7世紀から中世に至る時期に位置付けられる。人々が生活を営む上で欠くことのできない水を得る施設である井戸が多数存在することは、すなわち長期にわたって集落が営まれた証ともいえる。特に、第1号井戸跡からは2点の墨書土器が発見された。1点は須恵器蓋で「多磨郡男川」、「^{〔大カ〕}里郡」、「□尺本」等と記されている。他の1点は須恵器杯の底部に不明文字が記されている。時期的には8世紀1/4期後半頃と考えられ、墨書土器としては県内最古であるばかりか、内容的にも当時設置されて間もない武蔵国の郡名が複数記載されており、今まで発見された官衙遺跡からも出土例を聞かない。おそらく国府または郡衙といった官衙以外で出土する可能性は極めて少ないと考えられる。それが何故稻荷前遺跡に存在したのか、結論は出せないが奈良時代初期の社会動向をも反映した第一級の資料といえよう。

掘立柱建物跡は52棟検出されたが、単独ピットとしたなかにも組み合わせが判明しないために建物と捉えられなかったものもかなり含まれており、実数はこれを上回るの間違いはない。県内では8世紀以降の掘立柱建物跡検出例は最近かなり増加しているが、本遺跡では出土遺物から7世紀代と推定されるものも発見されている。また8・9世紀代の建物も特に第I・II群では配置にかなり規格性が認められる例、3×3間の総柱建物の周囲に3面乃至4面の庇または縁を設けた大規模な建物が検出されている。その他、中世と推定される建物群も併存するため時期的な弁別作業は困難なものも多く認められた。

溝跡は全て中世以降の所産である。中世屋敷の区画溝、或いは水路、道路側溝等の機能を果たしたものであろう。小鍛冶遺構としたものは平面プランこそ摺めなかったが、鞆羽口や鉄滓、鉄製品が集中する地点を指す。そのなかには炉と推定される焼土が分布する小穴が認められた。鉄滓は埴



第11図 A区的全測図(1/1200)

型滓等いわゆる鍛冶滓であり、この場において鉄製品の製作が行なわれたものと考えられる。時期は平安時代である。

竪穴状遺構には古代のものと中世のものがある。前者が3基、後者が2基である。性格は不明確であるが、古代のものはカマドのない住居跡状遺構、中世のそれは土間状遺構を指す。そのほか火葬墓は中世の所産である。

出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・瀬戸美濃系陶器・在地産陶器・瓦類・鉄器・青銅器・木製品・石製品・瓦塔・土製品等が検出された。特に供膳器において須恵器の占める割合が高く、7世紀代ではまだ土師器坏類が一定量を占め、在地産及び東海産と推定される須恵器が混じる程度であるが、8世紀以降鳩山窯跡群の生産が本格化する段階から供膳器はほとんど須恵器で占められ、土師器坏類は器種組成から欠落するようになり、例えば北武蔵の状況とは全く異なることが指摘できる。8・9世紀代の須恵器はおそらく90%以上が南比企窯跡群産で占められ、対岸の鳩山窯跡群周辺からの供給に依存していたことを窺わせる。また9・10世紀になると猿投産や東濃産の灰釉陶器・緑釉陶器がかなり多量に搬入されていた模様である。小片がほとんどであるため、正確な産地や時期を明らかにできる資料は少ないが、100点を越える数量が検出された。中国産青磁や瀬戸美濃系陶器の存在は13～15世紀を中心にしてこの地に生活が営まれたことを物語るものである。

鉄器は集落規模から見ると遺存数は少ない。鎌・刀子・鋸・釘といった農工具が出土した。木器は主に井戸から検出され、曲物や井戸側に転用された建築部材がある。また掘立柱建物跡からは柱材の一部が検出された例もみられる。瓦塔は基部の破片が一例出土した。或いは類例の少ない六角瓦塔とも推定されるが断定できない。石製品は主に砥石である。その他旧石器時代終末か縄文時代初頭の石槍が1本出土した。

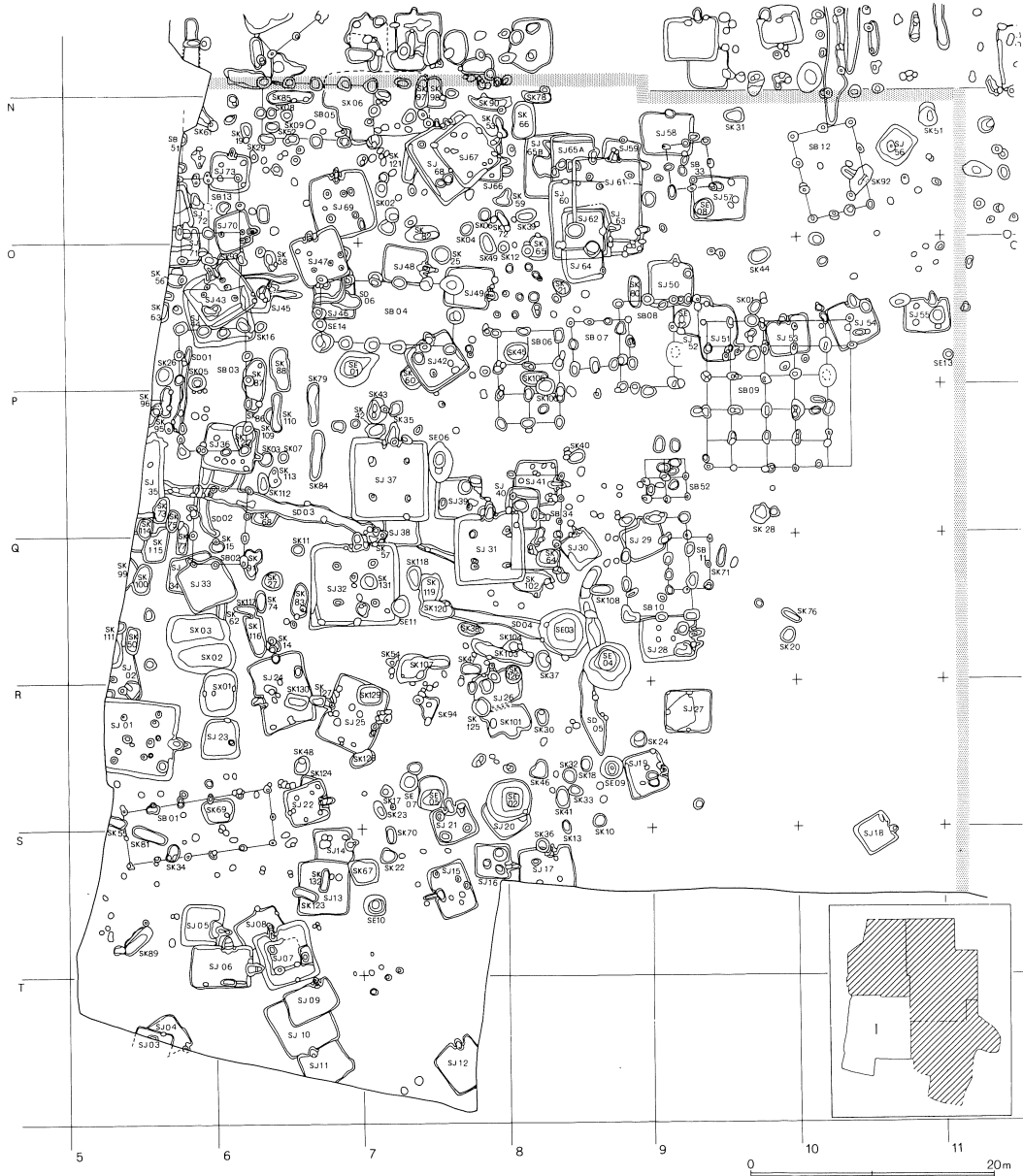


IV 第I群の遺構と遺物

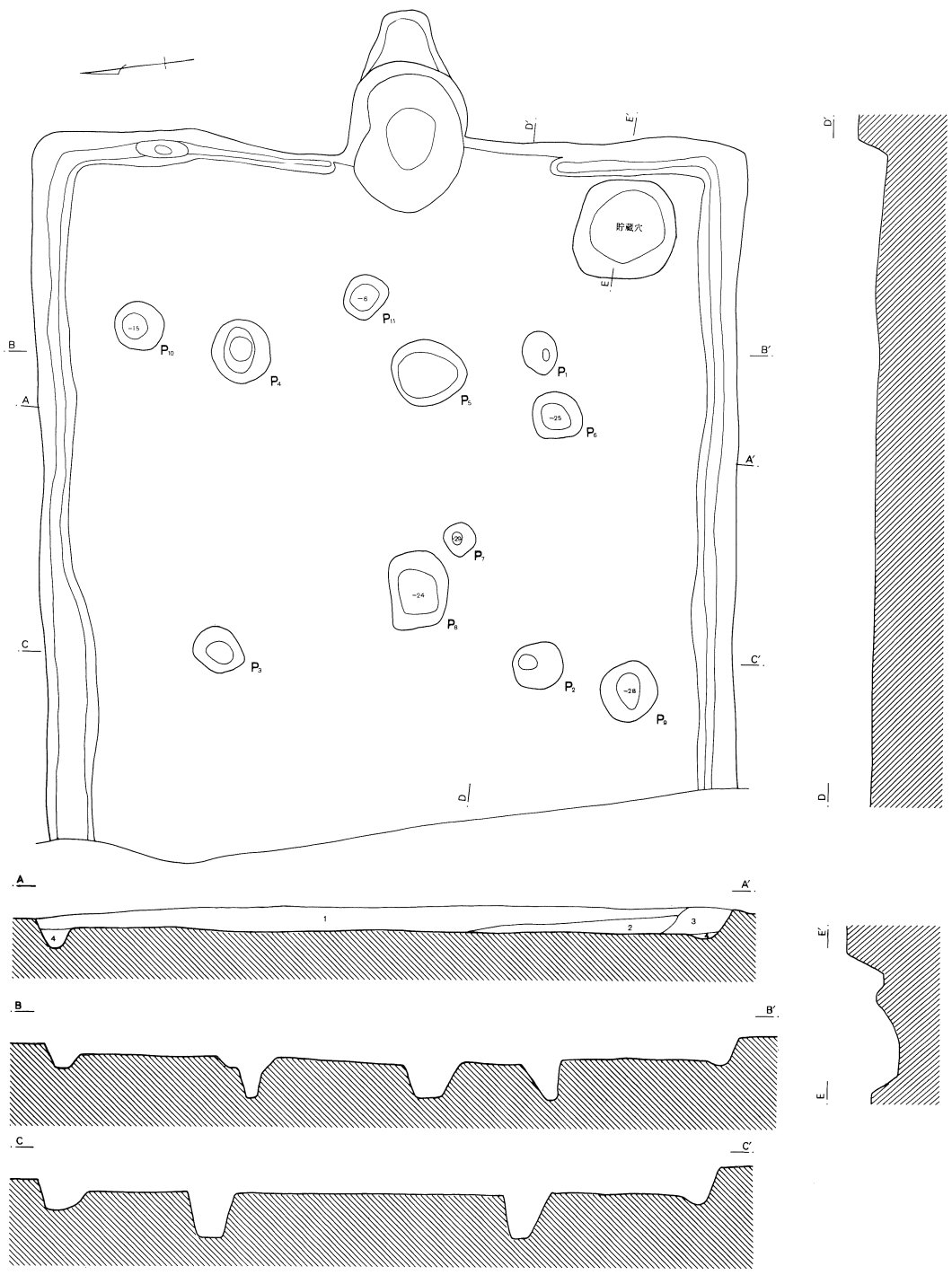
1. 住居跡

第1号住居跡(第13・14図)

R-5区に位置する。調査区西端に位置し西壁は調査区外に延びる。北側に第2号住居跡が重複し、本住居が切っている。平面形態は方形または長方形を呈するものと推定され、残存規模は一辺6.20m、深さ0.30mを測る。比較的大型の住居跡である。主軸方位はE-6°-Sを示す。



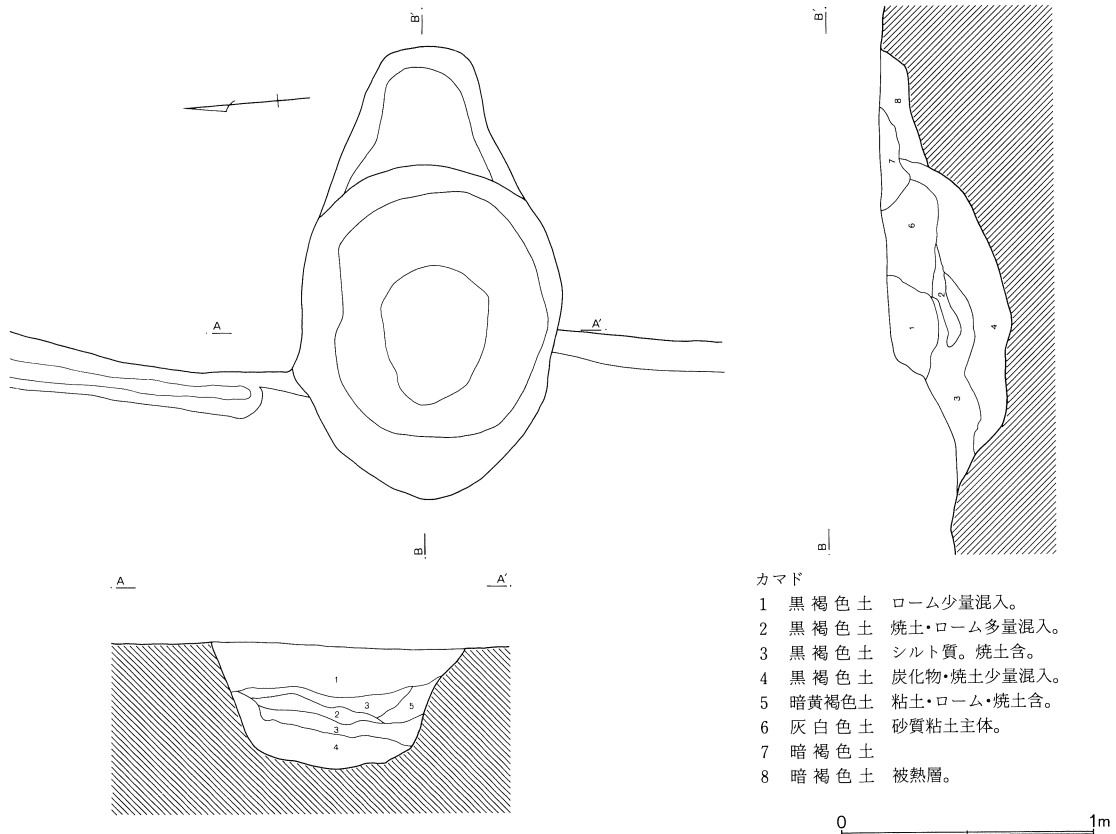
第12図 第I群遺構配置図



- 1 黒褐色土 ローム粒子・小礫少量混入。 3 暗褐色土 ロームブロック少量混入。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土多量混入。 4 暗褐色土 ローム粒子多量混入。

0 2m

第13図 第1号住居跡(L=31.50m)

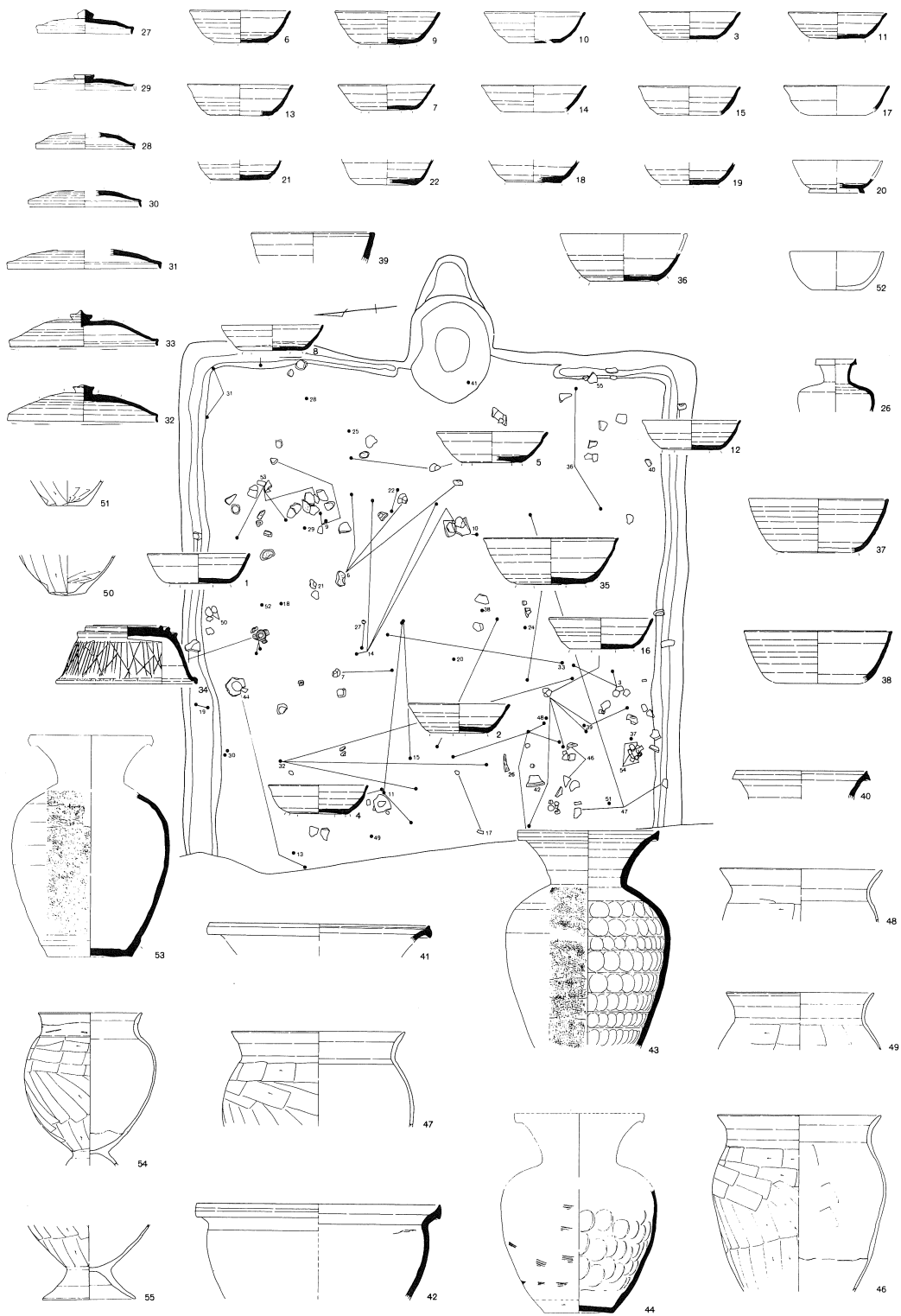


第14図 第1号住居跡カマド(L=31.50m)

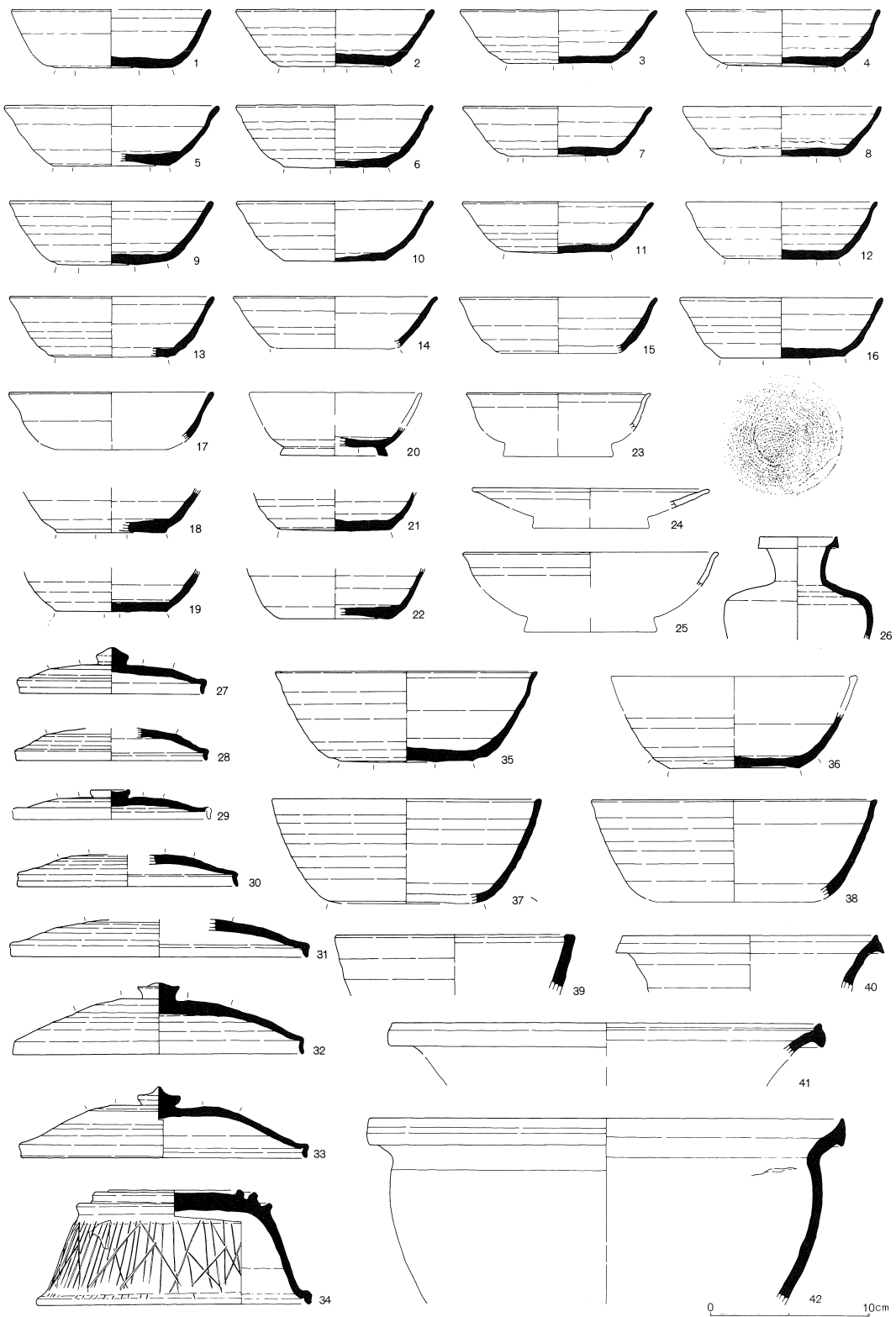
床面はやや凹凸が顕著で中央部を中心に比較的堅く踏み固められていた。覆土の堆積環境は不明だが、住居廃絶後さほど期間をおかずに一気に埋没したもの(第1層)と考えられる。カマドは東壁の中央部に設置される。燃焼部は緩やかに凹み、煙道は段差をもって立ち上がる。4層下面が火床面に相当しよう。袖部の遺存状況は悪く、明確には確認されなかった。貯蔵穴はカマド右側のコーナー部に位置し、深さ0.25mを測る。壁溝はカマドを除きほぼ全周する。ピットは13本検出され、P₁~P₄は支柱穴と考えられるが、他のピットについては本住居に伴うか否か明らかにできない。

遺物は須恵器坏を主体に多量に検出され、総数435点を数える。器種的には土師器坏、皿、甕、台付甕、須恵器坏、碗、蓋、甕、壺、鉢の他、円面硯がある。土師器坏と皿は明らかに混入である。出土状況をみると覆土上層から床面まで満遍なく出土しており、またかなり離れた破片でも接合関係にあるものが認められる。しかし、施釉陶器(23~25)と古銭(56・57)を除けば大きな時期差は窺えない。おそらく、一括投棄された遺物が多かったことを示すものといえよう。注目される遺物としては円面硯(34)がある。割れた状態でほぼ床面から出土している。須恵器はほとんど南比企窯跡群産である。稻荷前IX期新段階を中心に営まれたものであろう。

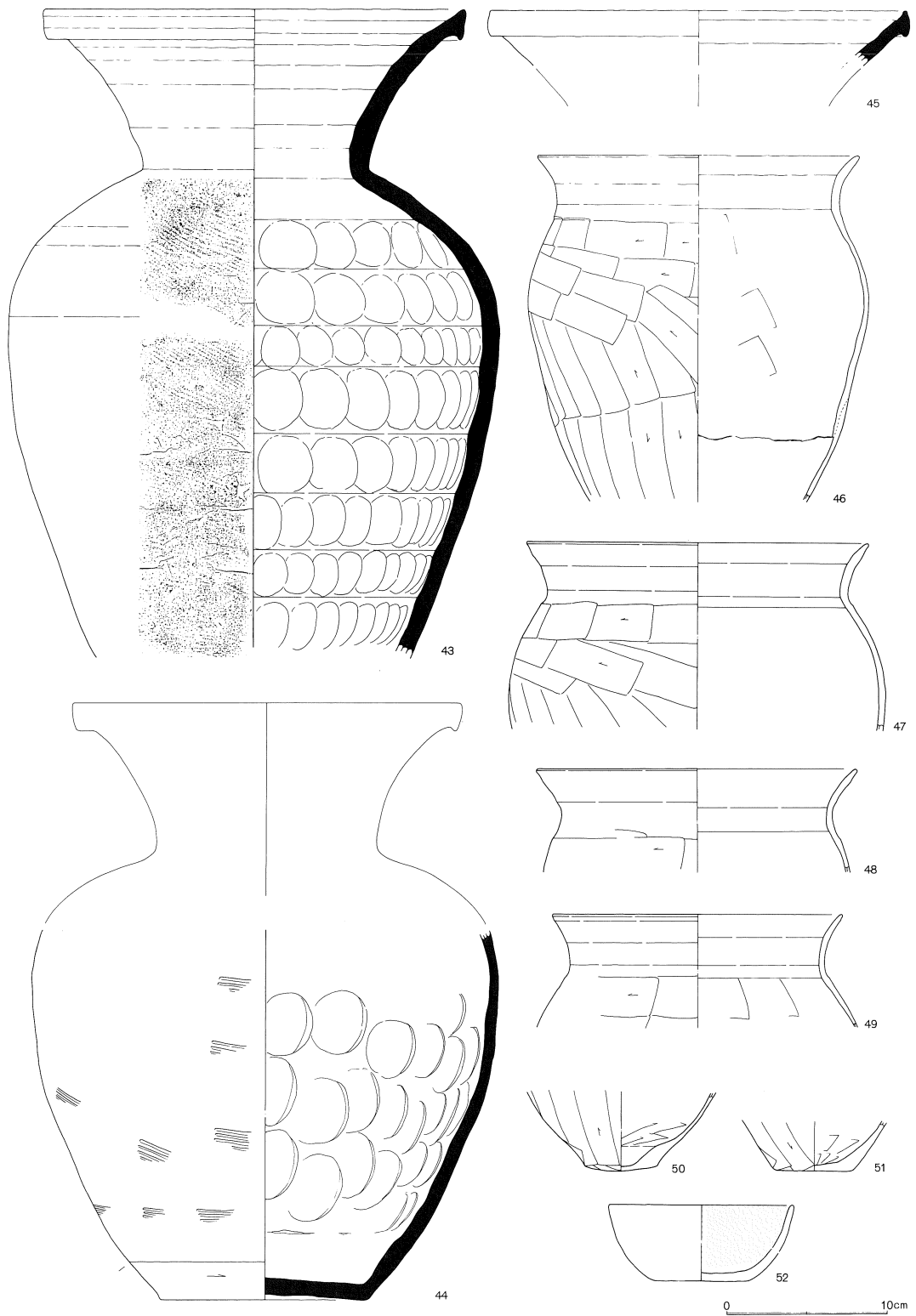
古銭(第18図56・57) 覆土中から2枚重なった状態で出土した。56は元祐通寶で、背は鋳型のずれが観察される。直径2.4cm。57は政和通寶である。直径2.3cm。



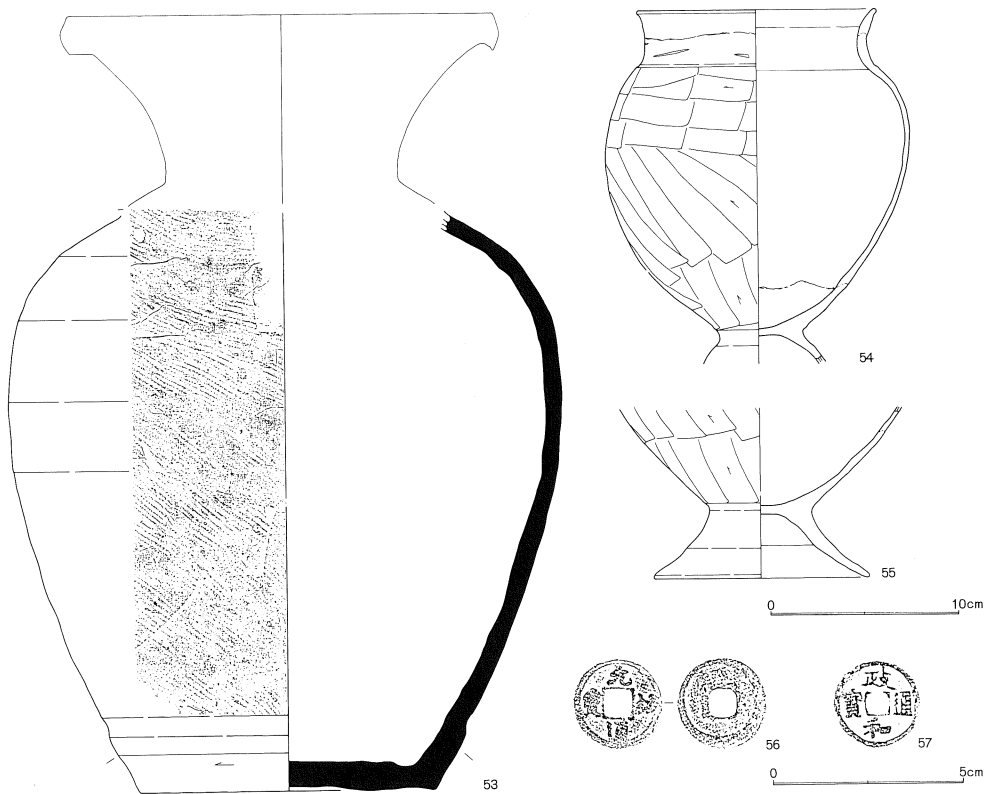
第15图 第1号住居跡遺物分布図



第16图 第1号住居跡出土遺物(1)



第17图 第1号住居跡出土遺物(2)



第18図 第1号住居跡出土遺物(3)

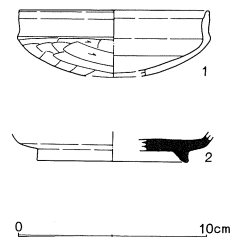
第1号住居跡出土遺物観察表(第16~18図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.4)	3.7		AC	B	灰	20%	No.412.覆土。
2	坏	(12.4)	3.6	7.0	ABC	B	緑灰	25%	No.170, 201.覆土。
3	坏	12.4	3.4	6.5	ABC	B	灰	60%	No.209, 349, 503.床面。
4	坏	12.0	3.6	6.7	AC	A	青灰	80%	No.547.覆土。
5	坏	13.4	3.8	(7.3)	BC	A	灰	45%	No.258, 484. P ₁₁ 内覆土。
6	坏	12.3	4.0	6.5	ABC	A	青灰	75%	No.236, 250, 483, 485.覆土。
7	坏	11.8	3.7	6.1	ABC	B	灰	90%	No.134, 433.覆土。
8	坏	(12.4)	3.2	7.2	AC	A	灰	55%	No.108.覆土。
9	坏	12.7	4.0	6.9	ACD	B	灰白	70%	No.246, 247, 424, 470. P ₄ 内覆土。
10	坏	12.3	3.8	6.4	AC	B	灰	40%	No.463, 464. P ₅ 内覆土。
11	坏	(11.8)	3.2	6.8	ABC	A	灰	40%	No.116, 159, 431.覆土。
12	坏	12.0	3.6	7.0	ABC	A	灰	100%	No.525.床面。
13	坏	(12.8)	3.8	(7.0)	ABC	B	灰	20%	No.546.覆土。
14	坏	(12.8)	3.2	(8.2)	AB	B	灰	35%	No.126, 268, 466, 524.覆土。
15	坏	12.4	3.5		ABC	B	灰	35%	No.116, 156.覆土。
16	坏	12.6	3.8	7.7	ABC	B	青灰	70%	No.218, 222他.覆土。底部「×」印のヘラ記号。
17	坏	(12.8)	3.1		ABC	B	灰白	20%	No.435, 436.覆土。
18	坏		2.7	6.8	ABC	B	にぶい黄橙	40%	No.71.覆土。
19	坏		2.7	7.0	ABC	B	灰	50%	No.18, 23.覆土。
20	高台坏		1.9	(6.8)	ABC	B	灰	40%	No.179. P ₅ 内覆土。

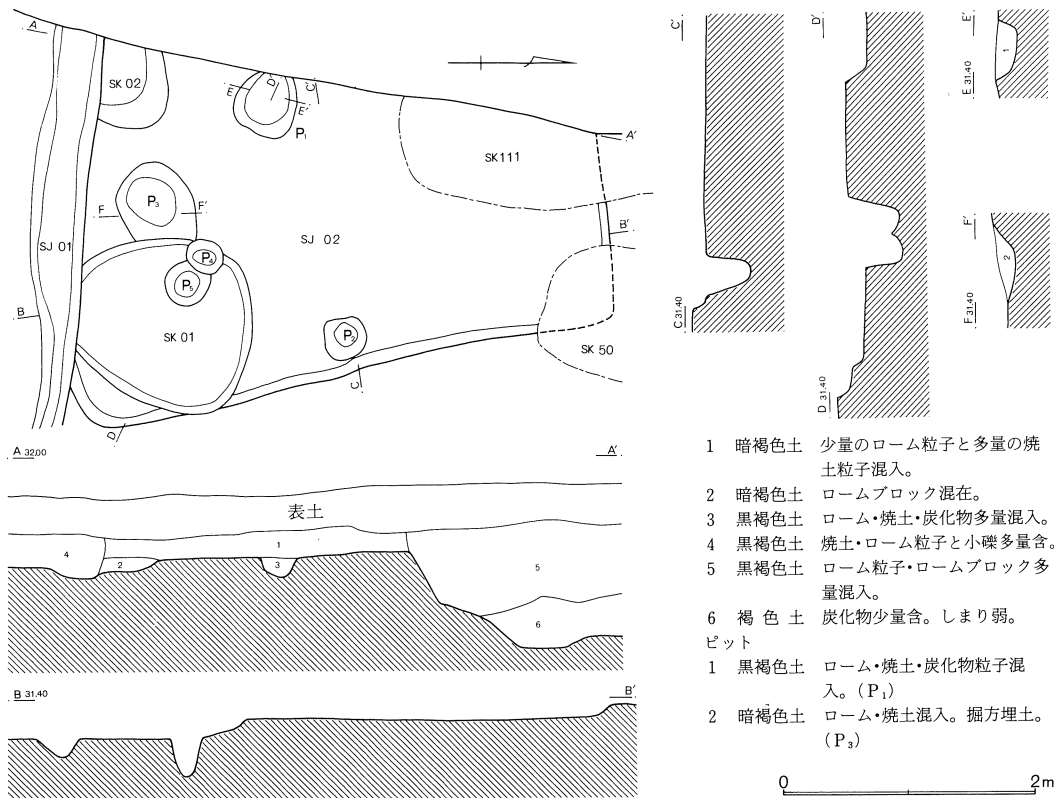
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
21	坏		2.4	(7.0)	A C D	B	灰	45%	№409。覆土。
22	坏		3.2	7.0	A B	A	灰	30%	№264, 271。覆土。
23	緑釉埴	(11.5)	2.4		B D	A	灰	5%	覆土。東濃産。
24	緑釉皿	(14.8)	1.25		J	A	灰白	5%	№194。覆土。猿投産か。
25	灰釉埴	(16.0)	2.2		A G	A	灰白	5%	№255。覆土。猿投産か。
26	小型壺	4.8	6.4		A C	A	黒褐	70%	№389。床面。
27	蓋	(11.4)	2.9		A C	B	灰	25%	№125, 434。覆土。
28	蓋	(12.0)	2.0		B C	A	灰	20%	№276。覆土。
29	蓋		1.6		A B C	A	灰	20%	№79。覆土。
30	蓋	(13.8)	2.0		A D	A	灰	20%	№8, 9。覆土。
31	蓋	(18.8)	2.3		A B D	B	灰白	40%	№91, 109。覆土。
32	蓋	18.2	4.4		A B C D	B	灰	70%	№37, 158, 168, 453。覆土。
33	蓋	17.8	4.4		A B C	B	にぶい黄橙	55%	№122, 455。床面。
34	円面硯	8.1	7.1	17.0	A C D	B	灰	80%	№203, 204, 405。床面。
35	埴	16.5	5.7	8.4	A C	B	にぶい黄橙	60%	№399。覆土。
36	埴	(8.2)	3.4		B C	B	灰	15%	№323, 331。覆土。
37	埴	(17.0)	6.6	(9.8)	A C	C	褐灰	40%	№492。覆土。
38	埴	(18.0)	6.2		A B C	C	にぶい橙	40%	№185。覆土。
39	播鉢	(15.0)	3.8		A B C	B	オリブ灰	15%	№397。覆土。
40	甕	(16.0)	3.5		A	B	灰	20%	№508。覆土。
41	甕	(27.0)	2.1		A B C	B	灰白	10%	№322。カマド内。床面。
42	鉢	(30.0)	11.7		A B C D	A	灰	25%	№447。覆土。
43	甕	(26.2)	40.3		A C D	A	灰	60%	№167, 211, 214, 221。覆土。
44	壺		22.9	(12.8)	A C D	A	灰	70%	№401, 541。覆土。
45	甕	(25.8)	3.4		A B	B	灰白	10%	覆土。
46	甕	(20.0)	21.5		A B E	B	明赤褐	25%	№446, 449。覆土。
47	甕	21.2	11.6		A B D	A	にぶい橙	35%	№164, 443, 487。覆土。
48	甕	19.8	6.4		A B D	B	橙	10%	№215。覆土。
49	甕	(18.0)	7.0		A B D	B	にぶい赤褐	15%	№545。床面。
50	甕		4.9	4.6	A E F	A	橙	50%	№56, 407。床面。
51	甕		3.1	5.0	A B E	A	橙	80%	№380。覆土。
52	坏	(11.4)	4.7	5.8	C	C	にぶい黄橙	30%	№69。覆土。内面黒色処理。
53	甕		30.5	(15.4)	A C D	A	灰	5%	№66, 420, 421, 475他。床面。
54	台付甕	12.5	18.8		A B D	B	褐灰	60%	№490, 491, 493。覆土。
55	台付甕		9.0	11.2	A B E	A	橙	45%	№516。覆土。

第2号住居跡(第20図)

Q-5・R-5区に位置し、調査区外に延びる。第1号住居跡・第50・111号土壌に切られ、正確な形態及び規模は不明。残存規模は、長軸4.24m、短軸2.90m、深さ0.10mを測る。床面は凹凸をもち、壁際は軟弱であった。第1・2号土壌は床下土壌または掘方か。ピットは3本検出され、P₁は上面に床面が乗り、P₂・P₃は住居に伴う可能性がある。カマドと壁溝は検出されなかった。遺物は土器が25点出土したが、全て小片である。時期比定は難しいが、第19図1を基準に7世紀後半頃(稻荷前III期)と考えておきたい。



第19図 第2号住居跡出土遺物



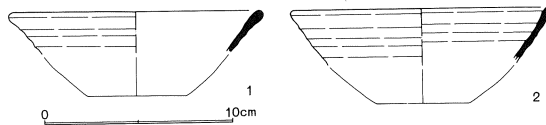
第20図 第2号住居跡

第2号住居跡出土遺物観察表(第19図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	3.5		A B	A	浅黄橙	30%	覆土。
2	高台坏		1.6	(8.0)	A C	B	灰白	15%	覆土。

第3号住居跡(第22図)

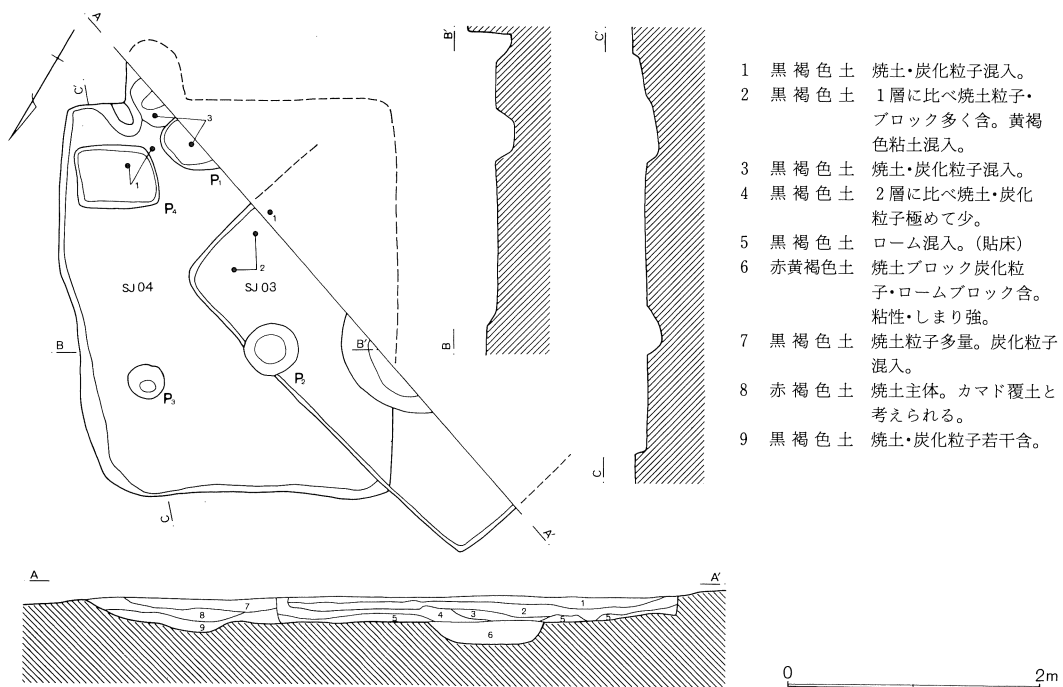
調査区南西端のT-5区に位置する。第4号住居跡と重複し、本住居の方が新しい。大部分が調査区外に延びるため正確な形態及び規模は不明であるが、残存する一辺は3.16m、深さ0.10m前後を測る。北壁に直交する向きを仮に主軸とすると、主軸方位はN-15°-Eを示す。



第21図 第3号住居跡出土遺物

床面は凹凸があり一定しない。覆土は概ね自然堆積と考えられる。第5層は貼床面に相当する。1号土壌は床下土壌であり、焼土・ロームブロック混じりの粘質土で充填され強く締まっていた。カマド等の付属施設は検出されていない。

遺物は47点出土した。細片が多い。須恵器坏には軟質で焼きの悪いものと酸化焰焼成の製品がみられる。稲荷前XIV期頃に比定される。



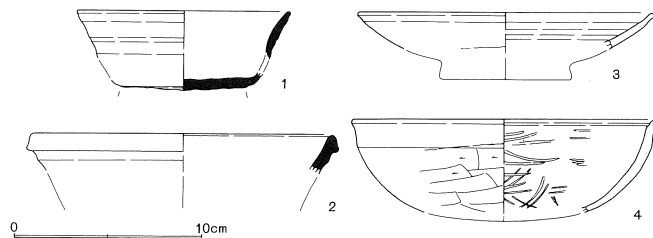
第22図 第3・4号住居跡(L=31.50m)

第3号住居跡出土遺物観察表(第21図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.0)	2.1		A C	C	灰黄	10%	No.47。覆土。
2	坏	(13.6)	2.7		A F	C	灰黄 に黄橙	20%	No.38, 39。覆土。

第4号住居跡(第22図)

T-5区に位置し、第3号住居跡に切られている。平面形態は長方形と推定される。規模は長軸3.10m、短軸約2.70m、深さ0.10mを測る。但し北壁は推定線以上に延びる可能性はある。主軸方位はS-29°-Eを示す。床面はほぼ平坦である。覆土は黒色土で覆われ大きな土層変化はみられなかった。ピットは4本検出され、P₁・P₄は住居に伴うがP₂・P₃は遺構に属しない可能性が高い。P₁はカマド前面の浅い掘り込みである。P₄についてはカマドに近すぎるが貯蔵穴の可能性もある。カマドは南壁に設置される。調査区外に延びるため規模は不明である。袖部は僅かに残り、褐色系の粘土で構築される。壁溝は存在しない。



第23図 第4号住居跡出土遺物

可能性はある。主軸方位はS-29°-Eを示す。床面はほぼ平坦である。覆土は黒色土で覆われ大きな土層変化はみられなかった。ピットは4本検出され、P₁・P₄は住居に伴うがP₂・P₃は遺構に属しない可能性が高い。P₁はカマド前面の浅い掘り込みである。P₄についてはカマドに近すぎるが貯蔵穴の可能性もある。カマドは南壁に設置される。調査区外に延びるため規模は不明である。袖部は僅かに残り、褐色系の粘土で構築される。壁溝は存在しない。

遺物は23点検出された。全て破片である。須恵器坏(1)は底部ヘラ切り成形され、白色針状物質は含まれないが在地産と推定される。灰釉皿(3)は混入であろう。7世紀後半代(稻荷前IV期頃)に比定されようか。

第4号住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.2)	4.2	6.6	A B	C	にぶい黄	30%	No.57, 67. 覆土。
2	壺	(16.0)	2.0		A C	B	灰	15%	カマド内。
3	灰釉皿	(14.4)	1.9		B	B	灰白	15%	No.63, 70. カマド内。覆土。
4	埴	(16.0)	4.9		A B	A	灰褐	15%	No.203. 覆土。

第5号住居跡(第24・25図)

S-5・6区に位置する。第6号住居跡と重複し、本住居が古い。平面形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸3.27m、深さ0.13mを測る。主軸方位はE-4°-Sを示す。

床面は平坦で、カマド周辺は堅く踏み締められていたが、壁溝周辺は軟弱であった。住居跡覆土は黒色土系で構成されるが、堆積状況は不明である。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は皿状に凹み、煙道部に向かって緩やかに立ち上がる。袖部は明瞭には検出されていない。第1層下部が火床面と推定される。壁溝はほぼ全周するが、東南コーナー部で一部切れている。貯蔵穴・ピット等の付属施設は存在しない。

遺物は17点検出されたが、細片のため図化し得るものはない。時期も明確にできないが、厚手の土師器甕や比企型坏の破片、また内面青海波の須恵器甕を含むことから7世紀代に比定しておきたい。

第6号住居跡(第24・25図)

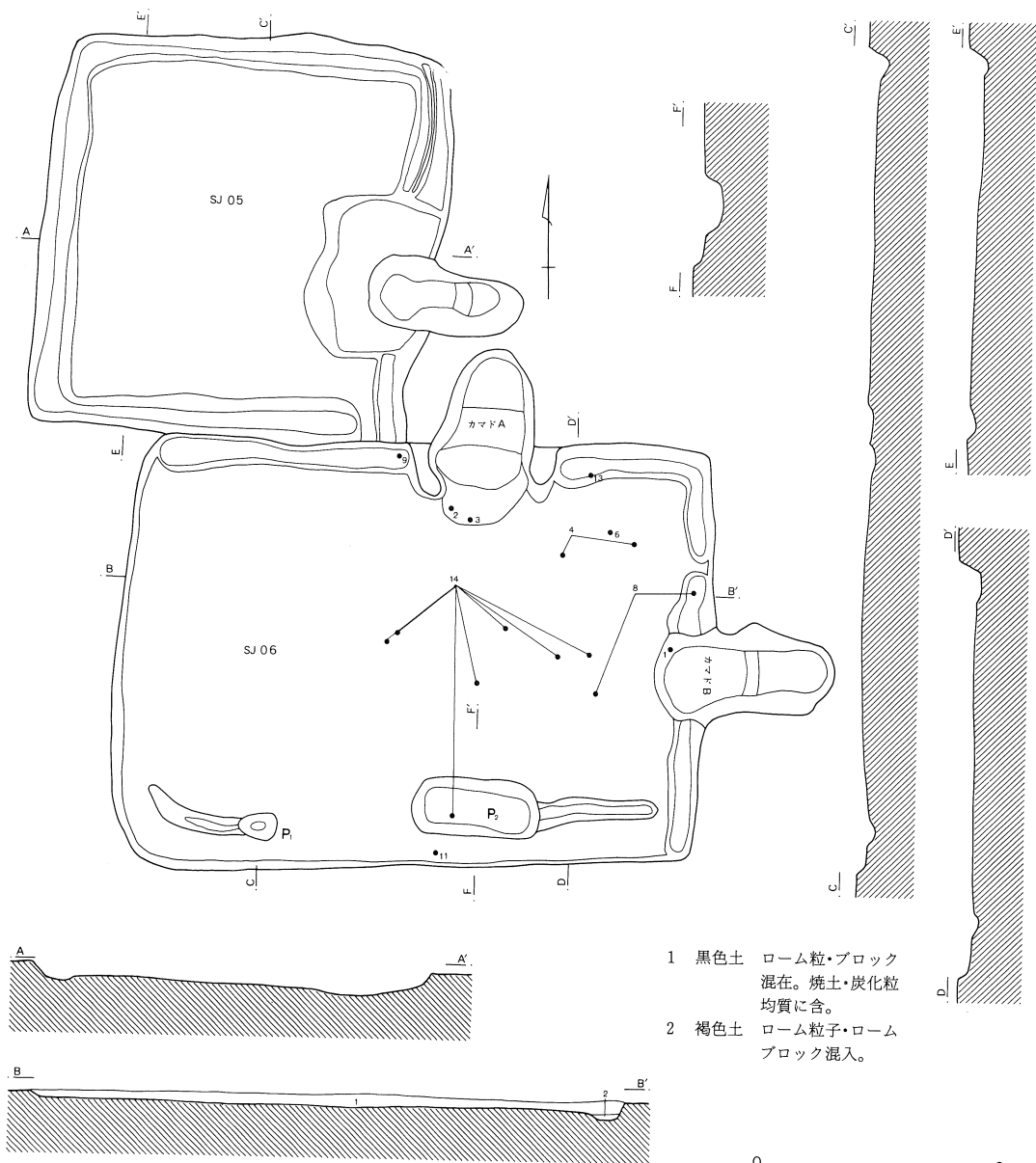
S-5・6、T-5・6区に位置する。第5・7・8号の各住居跡と重複し、本住居が最も新しい。形態は整った長方形を呈し、長軸4.84m、短軸3.46mを測る。深さは0.05m程で非常に浅い。主軸方位は長軸で測定すると、E-5°-Sを示す。

床面は概ね平坦である。中央部は比較的堅いが壁際は軟弱で面として捉え難かった。覆土は黒色土で占められ、土層変化は認められなかった。堆積状況に関しては、ロームを比較的多量に含むことから人為的埋没を想定することも可能であるが、覆土が浅く断定はできない。

カマドは北壁と東壁に各1基設置されるが同時併存したものではない。袖部の有無と断面観察から、東壁(カマドB)から北壁(カマドA)へ付け替えられたものと考えられる。カマドAは燃焼部が皿状に凹み、煙道部の立ち上がり角度は緩やかで、袖材には灰白色粘土が用いられている。カマドBもAと同様な形態を呈するが、袖を構成する粘土は確認されなかった。また壁ラインと平行する位置で土層変化が認められ(第5層)、カマドA構築時には機能していなかったことが推定される。

ピットは2基検出されたが柱穴とは考えられない。壁溝は西壁を除き巡るが、途切れる箇所がある。南壁のそれは壁から0.2m~0.3m内側に存在し、カマドB構築時の壁ラインであった可能性もある。

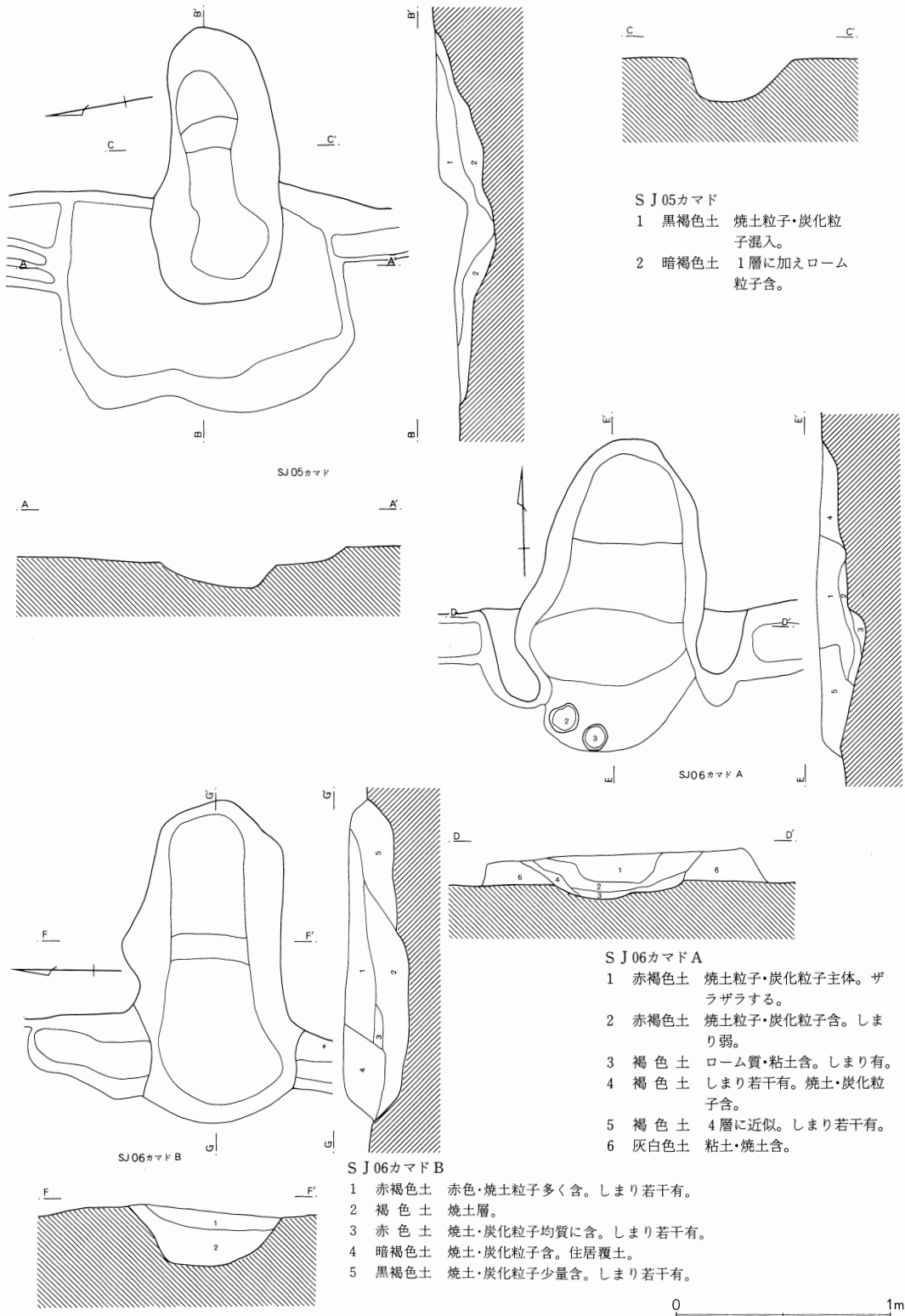
出土遺物は全て土器で、計187片検出された。壁高が浅いこともあり住居に伴うものが多い。第26図2・3の坏はカマドB焚口部底面から検出されたもので確実に住居に伴う。1・4・8はほぼ床面に接して出土した。また14の台付甕は床面に散乱した状態で出土している。5の土師器坏は明らかに混入である。稻荷前XIII期に属する。



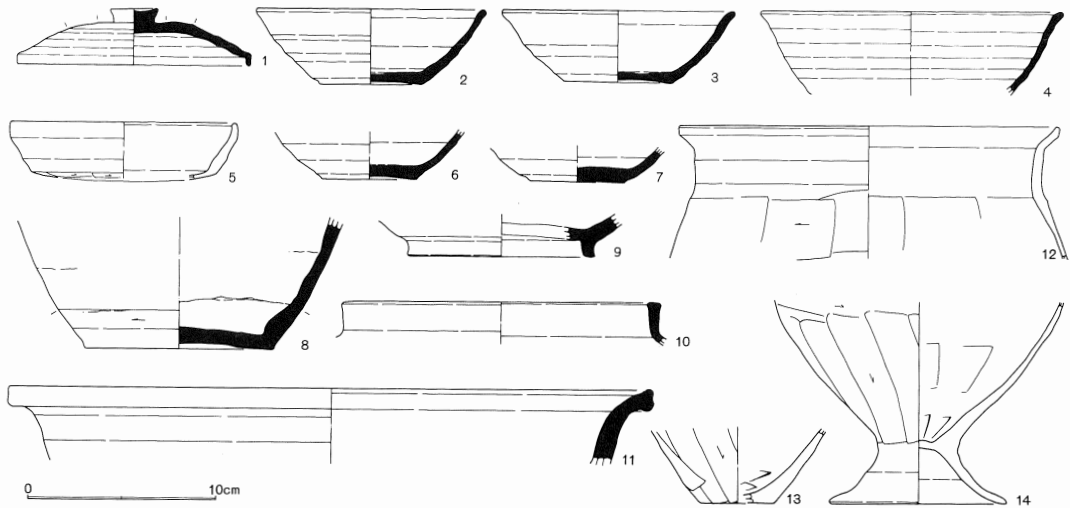
第24図 第5・6号住居跡(L=31.30m)

第6号住居跡出土遺物観察表(第26図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(12.2)	3.0		ABD	A	暗青灰	70%	№183。床面。
2	坏	12.0	4.0	5.4	AC	C	灰白	90%	№2。カマドB内。
3	坏	12.0	3.8	5.7	AC	B	灰	100%	№1。カマドB内。
4	埴	(15.8)	4.4		ABD	B	灰白	15%	№69,99。床面。
5	坏	(12.0)	3.0	(9.8)	AB	B	橙	15%	覆土。
6	坏		2.5	(5.0)	AD	A	青灰	30%	№80。覆土。
7	坏		1.9	(5.0)	AC	A	灰	90%	覆土。



第25図 第5・6号住居跡カマド(L=31.30m)



第26図 第6号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
8	甕		6.9	(10.0)	A B	A	灰	55%	№163, 120。床面。
9	瓶		2.2	(10.0)	A C	B	灰	20%	№4。床面。
10	短頸壺	(10.0)	1.9		A B	A	灰	20%	覆土。
11	鉢	(34.0)	3.9		A B D	B	灰	5%	№132。床面。
12	甕	(20.0)	7.0		A D F	A	褐	15%	№5。カマドB内・壁溝上。
13	甕		4.55	(4.0)	A B E F	A	灰褐	25%	№74。覆土。
14	台付甕		9.6	(9.2)	A E F	A	橙	30%	№33。カマドB内覆土・床面。

第7号住居跡(第27図)

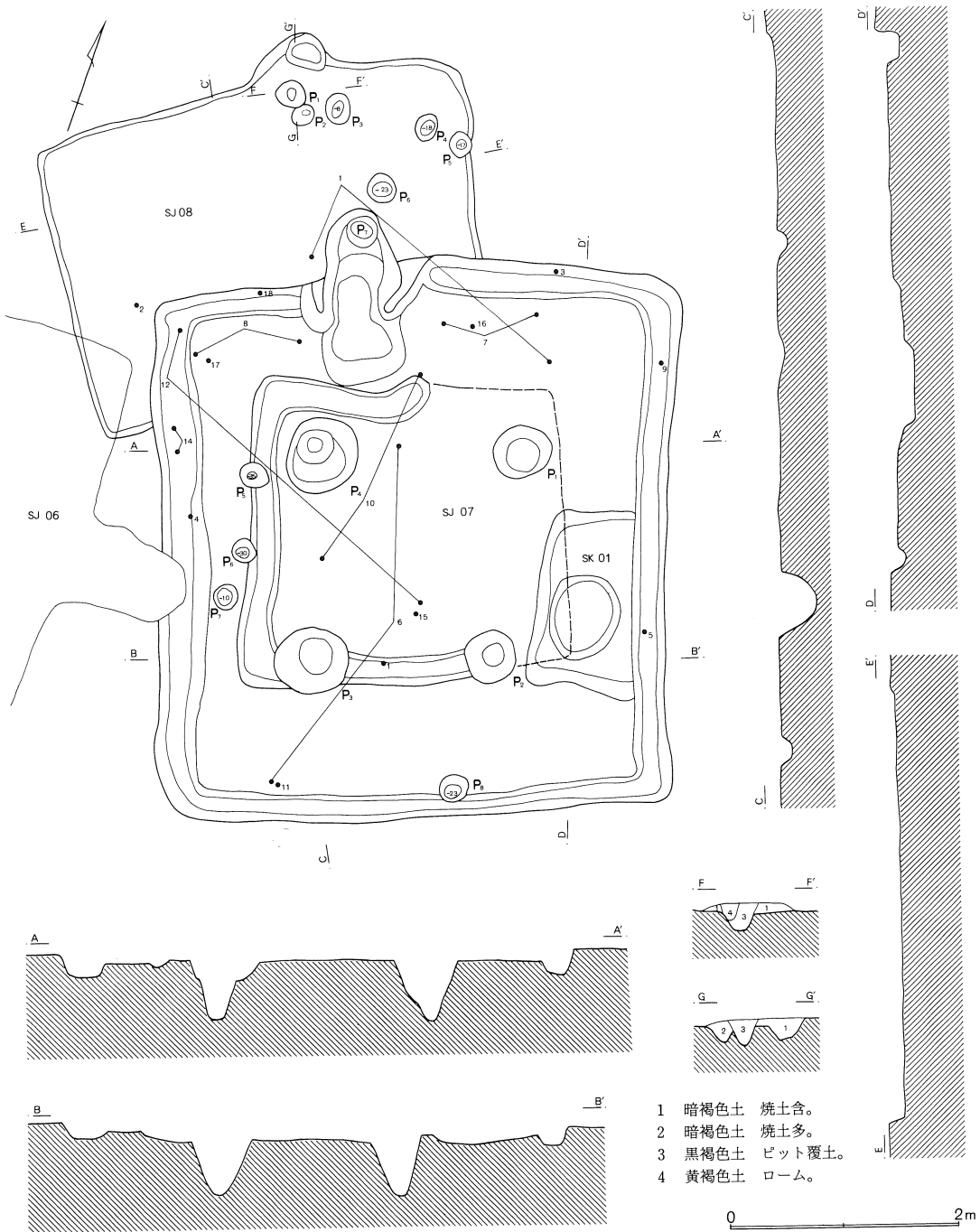
S・T-6区に位置する。第6号・8号住居跡と重複し、前者よりも古く後者よりも新しいことが判明した。また9号住居跡とも近接するが、直接の切り合い関係はない。平面形態は比較的整った長方形を呈する。規模は長軸4.42m、短軸4.70m、深さ約0.10mを測る。主軸方位はN-16°-Wを示す。

床面はやや凹凸をもつ。覆土は焼土・炭化物粒子・小礫混じりの黒色土で覆われ、明確な土層変化はみられない。カマドは北壁の中央から西に寄った位置に設置される。焚口から燃焼部は鍋底状に掘り込まれる。覆土は第1～4層は天井部崩落土、5層が灰層に相当する。袖は暗褐色粘質土で構築される。ピットは8本検出された。P₁からP₄は主柱穴と考えられる。他のピットは住居に伴うものではなかろう。壁溝は全周する。

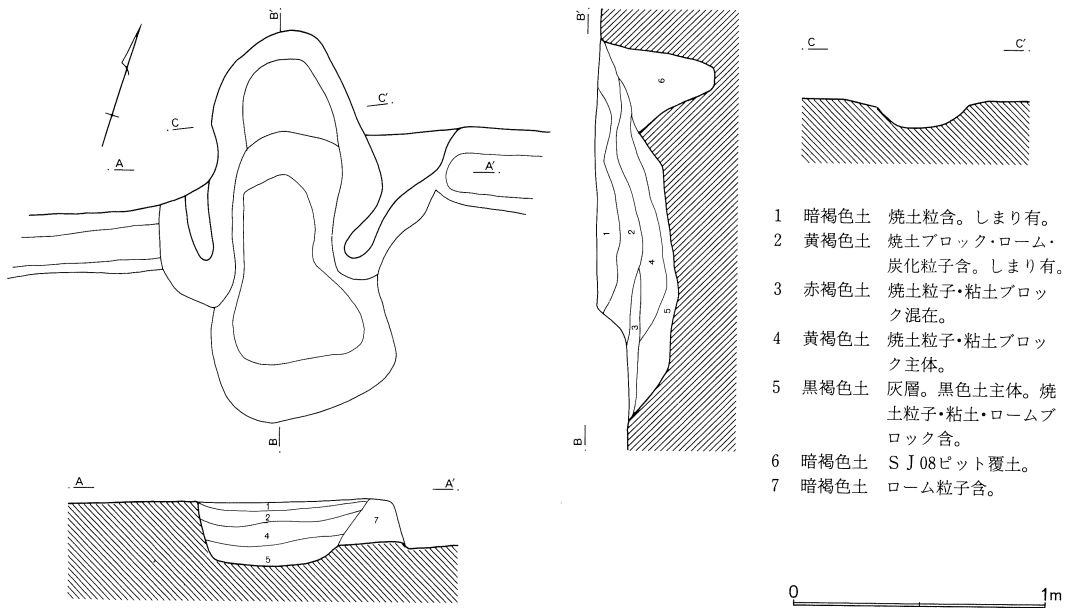
また壁溝の内側に入れ「コ」状に溝が巡る。当初2軒の重複と推定したが、住居にしては規模が余りに小さく、カマドの痕跡もなく、また断面観察でも土層変化は表れない。住居に伴う間仕切り溝または掘方的施設であろうか。1号土壌は住居掘方と推定され、ロームブロック・焼土混じりの黒色土で充填される。

出土遺物は土器267片、鉄刀子1、埴型滓1点がある。覆土下層及び床面を中心に出土しているが、土器様相に若干時間差が認められる。須恵器坏(第29図10～13)、土師器甕(6～8)を基準とす

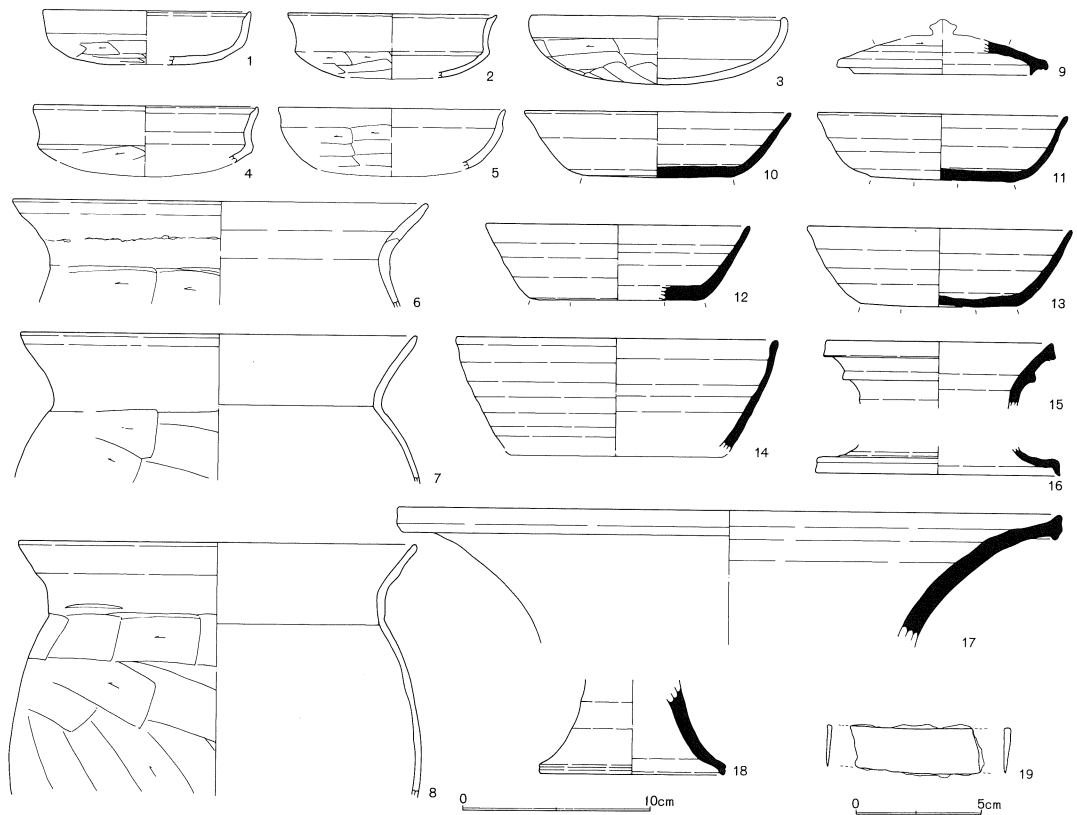
ると稲荷前VIII期に比定される。須恵器蓋(9)は周辺住居からの混入であろう。また土師器坏(1・2・4・5)も該期まで残存するか疑問である。鉄滓は坩型滓と考えられる。全体の1/4程の破片で重量49gを測る。覆土から出土したもので直接住居に伴うものではない。



第27図 第7・8号住居跡(L=31.30m)



第28図 第7号住居跡カマド(L=31.30m)



第29図 第7号住居跡出土遺物

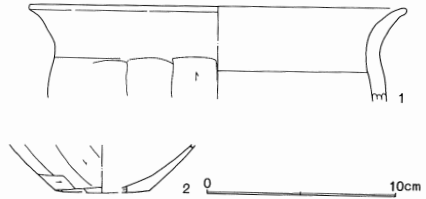
第7号住居跡出土遺物観察表(第29図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	(11.0)	2.9		A B D	A	橙	15%	No.110。覆土。	
2	坏	(11.0)	3.4		A B	B	橙	15%	覆土。	
3	坏	(13.4)	3.6		E F	B	橙	55%	No.162。覆土。	
4	坏	(11.8)	3.0		B	A	橙	15%	No.335。覆土。	
5	坏	(12.0)	3.2		A B	A	橙	10%	No.386。床面。	
6	甕	(22.0)	5.5		A B E	A	橙	20%	No.135, 359。覆土。	
7	甕	(21.0)	7.7		A B F H	B	橙	10%	No.13, 41。覆土。	
8	甕	(21.0)	13.4		A B D F	B	橙	20%	No.242, 302。カマド左袖・覆土。	
9	蓋	(10.9)	1.8		A G	A	灰白	15%	No.182。覆土。東海産か。	
10	坏	(14.0)	3.5	8.0	B C	A	灰	35%	No.217, 341。覆土。	
11	坏	13.0	3.5	7.5	A B C	A	灰	80%	No.390。床面。	
12	坏	(13.9)	4.0	9.2	B C	A	灰	10%	No.115, 236。覆土。	
13	坏	13.9	4.2	8.2	B C	B	灰	65%	P ₄ 内。	
14	坑	(17.0)	5.9		A B C	B	灰白	15%	No.376, 377。床面。	
15	壺	(12.0)	3.5		A B	A	灰	10%	No.267。床面。	
16	高盤	(12.9)	1.5		A C	A	灰	15%	No.221。P ₁ 内。	
17	甕	(35.0)	7.0		A B	A	灰	20%	No.245。床面。	
18	高盤	(9.7)	5.0		A D	C	灰	20%	No.372。壁溝内底面。白色針含まない。	
19	刀子	残長5.3cm。幅1.8cm。								覆土。身部片。身は比較的薄い。

第8号住居跡(第27図)

S-6区に位置する。6・7号住居跡と重複し、本住居が最も古い。形態は長方形を呈するものと推定される。規模はやや小型で、長軸3.90m、短軸2.70m、深さ0.07mを測る。主軸方位はN-32°-Wを示す。

床面は平坦である。覆土は黒色土の単層で7号住居跡のそれと類似している。カマドは北壁に設置される。遺存状態は極めて悪く、袖部及び煙道部は削平されていた。また焚口から燃焼部の掘り込みはほとんど確認できず、焼土混じりの暗褐色土が堆積していたのみであった。ピットは7本検出された。P₃・P₆・P₇は土層観察や色調から住居に伴うものと判断したが、他のピットは後世の所産であろう。貯蔵穴・壁溝等の施設は存在しなかった。出土遺物は極めて少なく土師器甕の破片が9片のみであった。時期は明らかにできないが、甕(第30図1)の特徴から7世紀後半～8世紀初頭頃と考えておきたい。



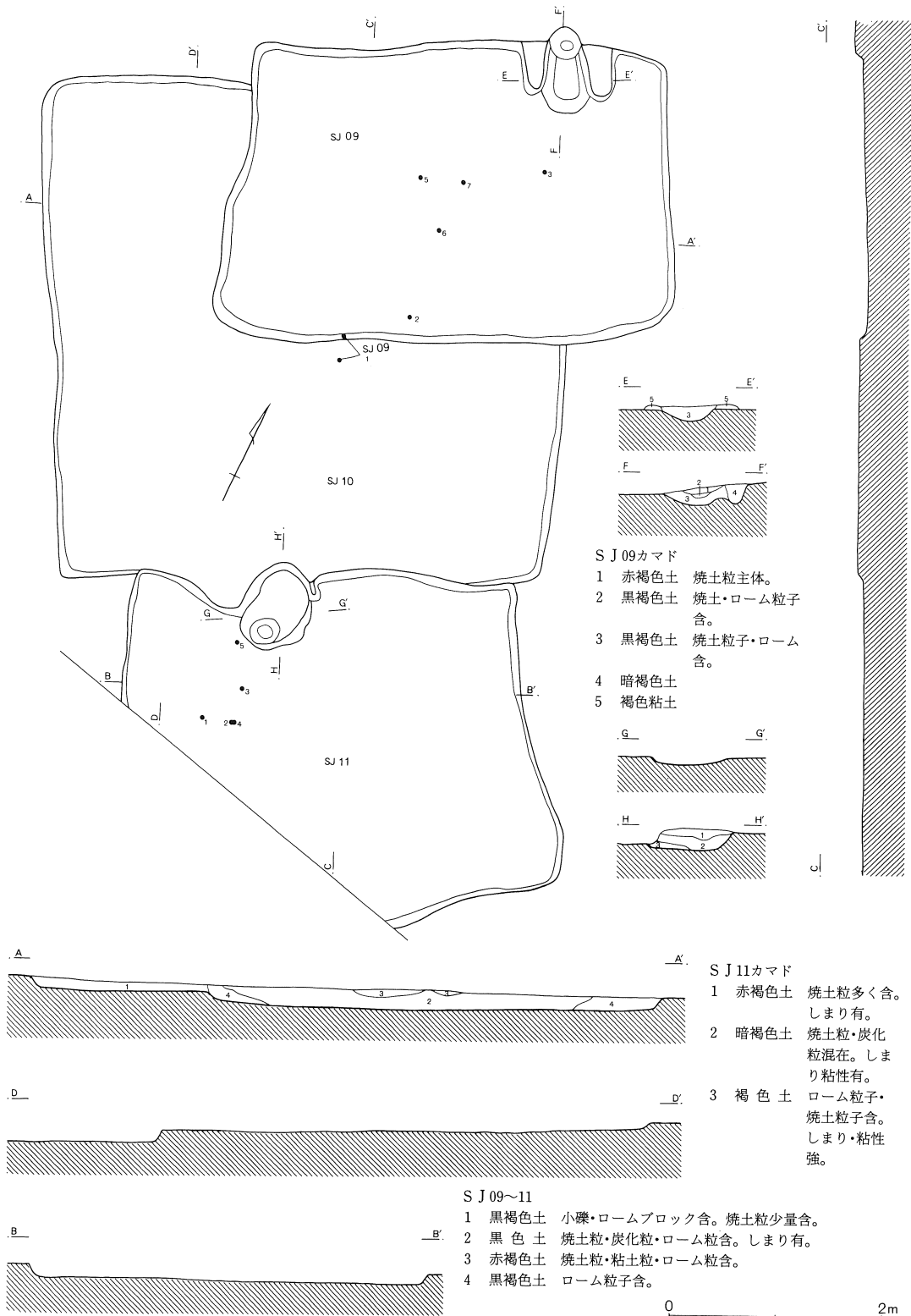
第30図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表(第30図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	甕	(20.0)	4.8		A C F	B	にぶい黄橙	20%	No.4。SJ69-230。覆土。
2	甕	(5.0)	2.5		A B E	B	橙	25%	SJ7-151。床面。

第9号住居跡(第31図)

T-6区に位置する。第10号住居跡と重複し、本住居の方が新しいものと判断された。平面形態は



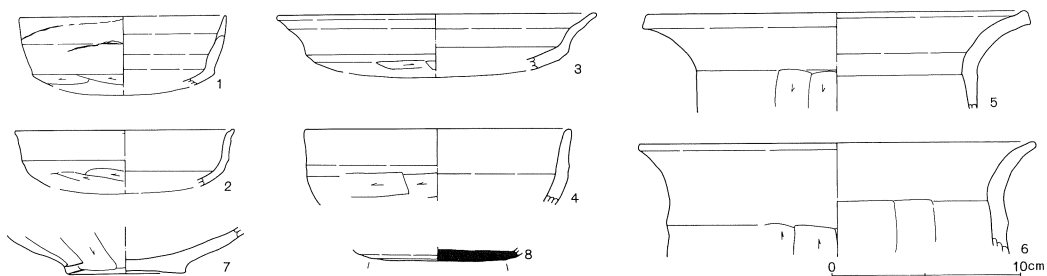
第31図 第9~11号住居跡(L=31.40m)

長方形を呈し、規模は長軸4.28m、短軸2.82m、深さ約0.08mを測る。主軸方位はN-28°-Wを示す。

床面は平坦である。覆土は黒色土単層で、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

カマドは北壁に設置されるが、上部は削平されているうえピットによる攪乱を受け、遺存状態は極めて悪い。焚口から燃焼部はほぼ壁内に納まり、皿状に凹んでいる。煙道部は遺存していなかった。袖には僅かに粘土が堆積してただけで詳細は不明であった。遺構に伴うピットや壁溝等の諸施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器を主体に96片検出された。須恵器は5点のみで、うち東海産と推定される瓶が2点含まれる。ほとんどが小片で、図化し得た土器は8点到留まる(第32図)。第32図3・5は床面に接する位置から出土した。1は壁外の遺物と接合するため、埋没過程で流れ込んだものと推定される。総体的には時期差は少ないものと判断される。稲荷前IV期に比定される。



第32図 第9号住居跡出土遺物

第9号住居跡出土遺物観察表(第32図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	3.7		AD	B	灰褐	35%	№ 39, 40。覆土。
2	坏	(11.6)	3.0		ABF	A	橙	20%	№ 46。覆土。無彩。
3	皿	(17.0)	3.0		ACF	A	にぶい橙	5%	№ 14。床面。
4	鉢	(14.0)	3.8		AD	A	橙	15%	覆土。
5	甕	(20.0)	5.2		AB	A	橙	15%	№ 53。床面。
6	甕	(21.0)	6.0		ADF	A	橙	10%	№ 25。覆土。
7	甕		2.5	(6.4)	ADF	A	にぶい黄橙	45%	№ 10。覆土。
8	坏		0.7	(7.2)	ABC	A	灰	70%	カマド内覆土。

第10号住居跡(第31図)

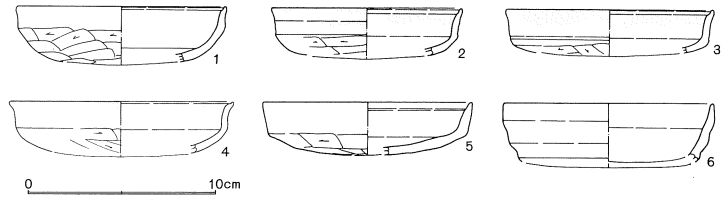
T-6区に位置する。第9・11号住居跡と重複し、本住居が最も古いものと推定される。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸4.28m、短軸4.64mを測る。深さは0.02~0.10m程で全体に極めて浅く、床面が露出していた部分もみられた。主軸方位はN-28°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は礫混じりの黒色土で、ロームブロックと焼土粒子を若干含んでいる。カマドや貯蔵穴、ピット等の諸施設は検出されなかった。

出土遺物は皆無であり、時期を明らかにすることはできない。

第11号住居跡(第31図)

T-6区に位置し一部は調査区外に延びる。形態は不整形を呈する。規模は長軸3.78m、短軸3.28m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位は西壁を基準にすると、N-19°-Wを示す。



第33図 第11号住居跡出土遺物

床面はほぼ平坦である。覆土は締まりの強い黒色土で構成され、焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を少量含む。

カマドは北壁に設けられる。燃烧部は皿状に凹み、焚口部下面は深さ5cmほどの落ち込みがみられる。覆土は3層に分かれ、第2層下面が火床面に相当するものと考えられる。

出土遺物は少なく16点に過ぎない。全て土師器である。第33図1~5は覆土出土。6はカマド内から出土したものである。稻荷前IV期に比定される。

第11号住居跡出土遺物観察表(第33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	2.7		AB	A	にぶい橙	25%	№5。覆土。無彩。
2	坏	(10.0)	2.5		AB	A	橙	20%	№4。覆土。
3	坏	(10.8)	2.3		DF	B	橙	10%	№3。覆土。
4	坏	(11.9)	2.8		AB	B	にぶい橙	20%	№4。覆土。器面剥落(体部外面)。
5	坏	(11.0)	2.8		AB	A	橙	15%	№1。覆土。無彩。
6	坏	(11.0)	3.1		AD	B	暗褐	10%	カマド内覆土。

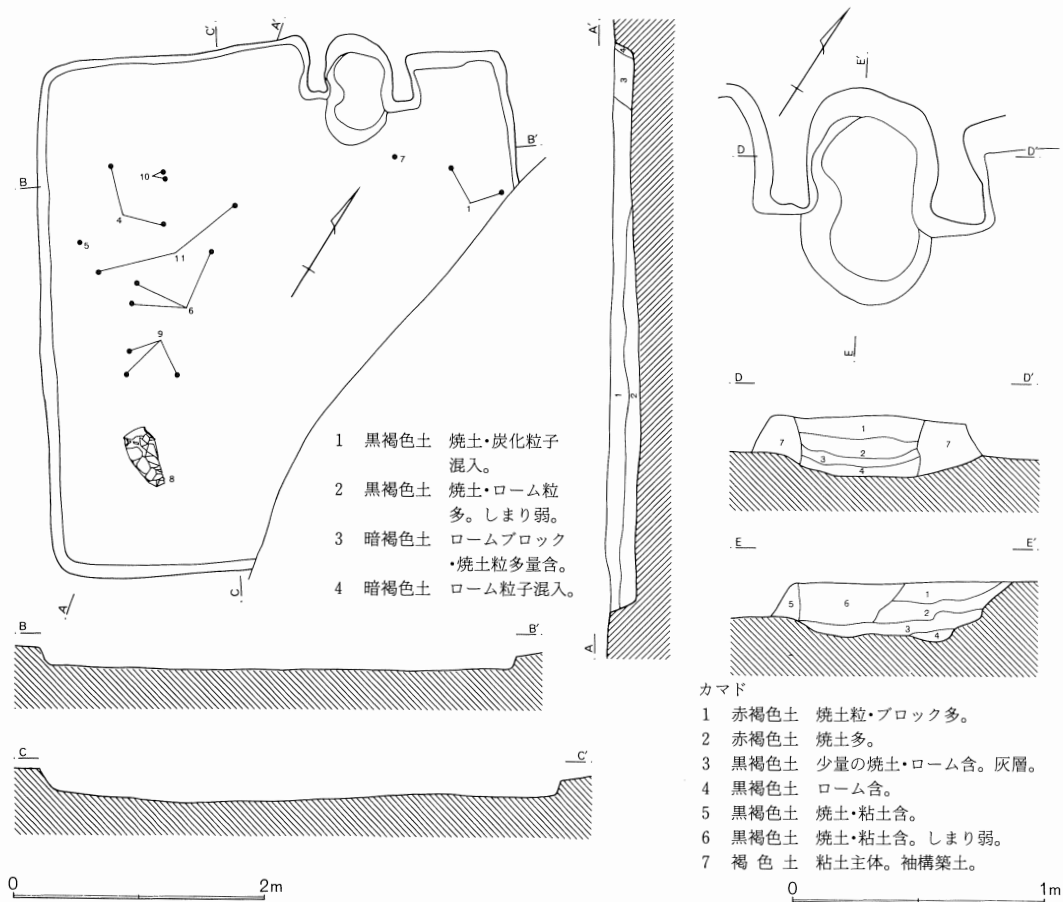
第12号住居跡(第34図)

T-7区に位置する。調査区最南端にあたり南東コーナーは調査区外に延びる。平面形態は長方形を呈するものと推定される。南壁はやや掘りすぎたため図上で訂正を加えてある。規模は長軸4.10m、短軸3.82m、深さ0.15~0.20mを測る。主軸方位はN-34°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、住居南半がやや低くなる。南壁直下には炭化材が遺存していたが、特に火災を示す状況は確認されなかった。覆土は4層に分かれ、堆積状況から見る限り特に人為的埋没状況は窺われなかった。

カマドは北壁の中央から東に寄った位置に設置されているが、カマドの左右で壁ラインがややずれている。燃烧部は壁内に位置し、燃烧部奥壁は比較的急角度で立ち上がる。袖部は褐色粘質土で構築され遺存状態は比較的良好であった。覆土は7層に区分され、第3層下面が火床面に相当しよう。また焚口部には火床面に達しない程度のピットが掘り込まれ一部攪乱を受けていた(第6層)。ピット・壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は比較的多く128点検出された。器種的には土師器坏、埴、甕、小型甕、台付甕、壺、須恵器坏、蓋、甕から構成される。土師器甕の破片が半数以上を占める。図示した1・8・10は床面に接する位置から出土した。そのなかでも8の長甕はほぼ完形に復元された。南壁付近の床面に横

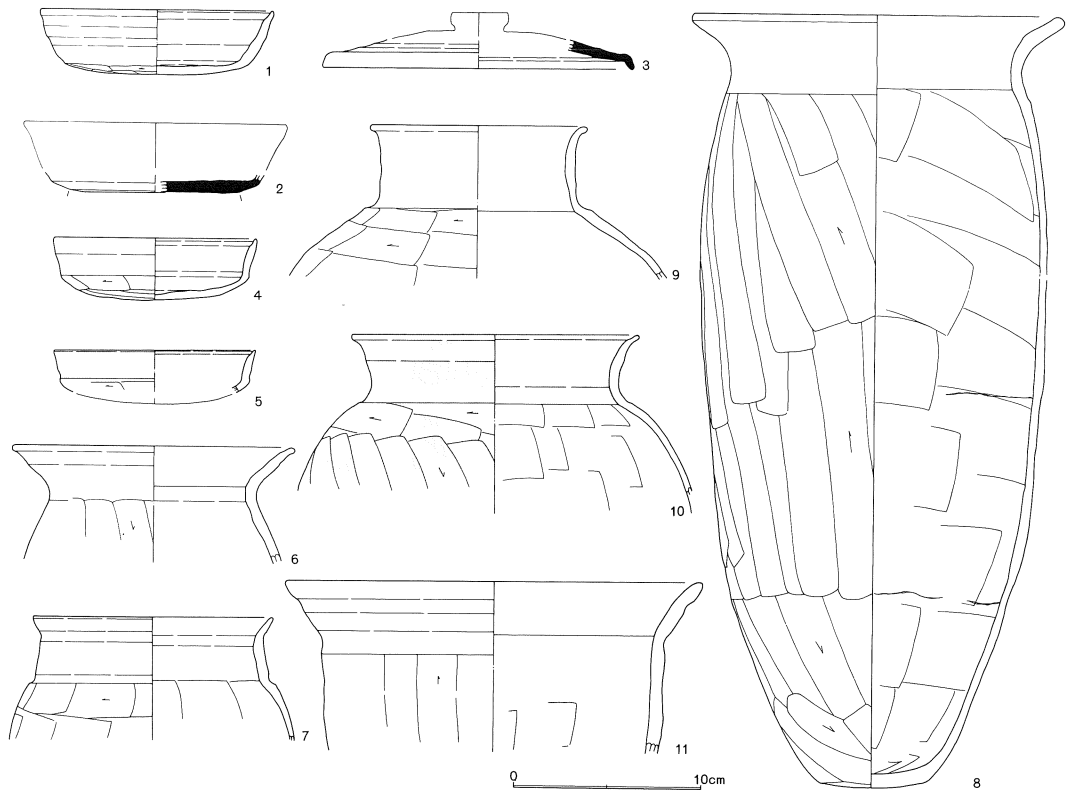


第34図 第12号住居跡・カマド(L=31.20m)

倒しの状態で出土したもので確実に住居に伴う遺物と考えられる。他は覆土から出土したものである。稻荷前IV期に比定される。

第12号住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.2)	3.4		D	A	にぶい赤褐	50%	No7, 142。床面。口唇部。底部内面磨滅。
2	坏		1.1	(9.0)	A C D	A	灰	20%	覆土。
3	蓋	(16.5)	1.5		A C	A	灰	5%	覆土。
4	坏	(10.6)	3.3		C E	C	橙	70%	No41, 98。覆土。
5	坏	(10.6)	2.2		B C	A	橙	20%	No52。覆土。
6	小型甕	(14.6)	6.1		A C D	A	橙	25%	No58, 61, 94。覆土。
7	甕	12.6	6.5		B E	A	橙	80%	No3。覆土。
8	甕	19.8	40.7	5.8	A D E	B	にぶい橙	95%	No144, 145。床面。
9	壺	(11.3)	8.0		A B C	B	橙	20%	No68, 105, 110。覆土。
10	壺	(15.0)	9.5		A B C	A	橙	40%	No34, 35。床面。
11	甑	(22.0)	9.0		A D F	C	橙	10%	No54, 91。覆土。



第35図 第12号住居跡出土遺物

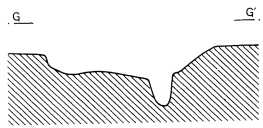
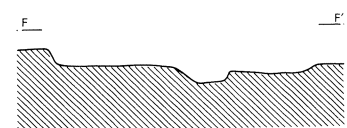
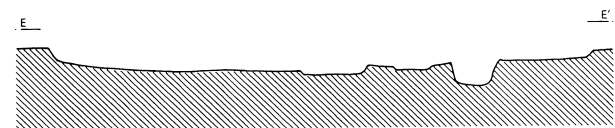
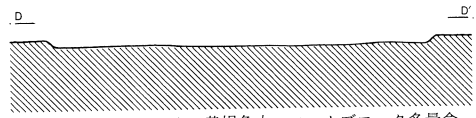
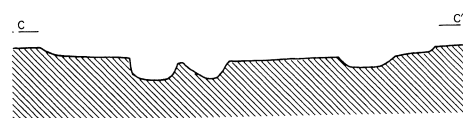
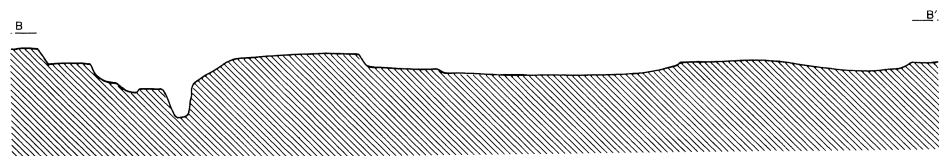
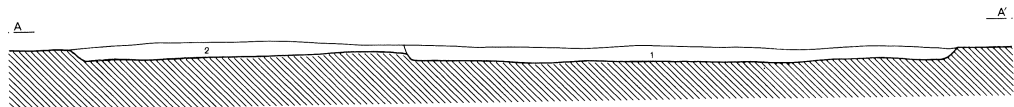
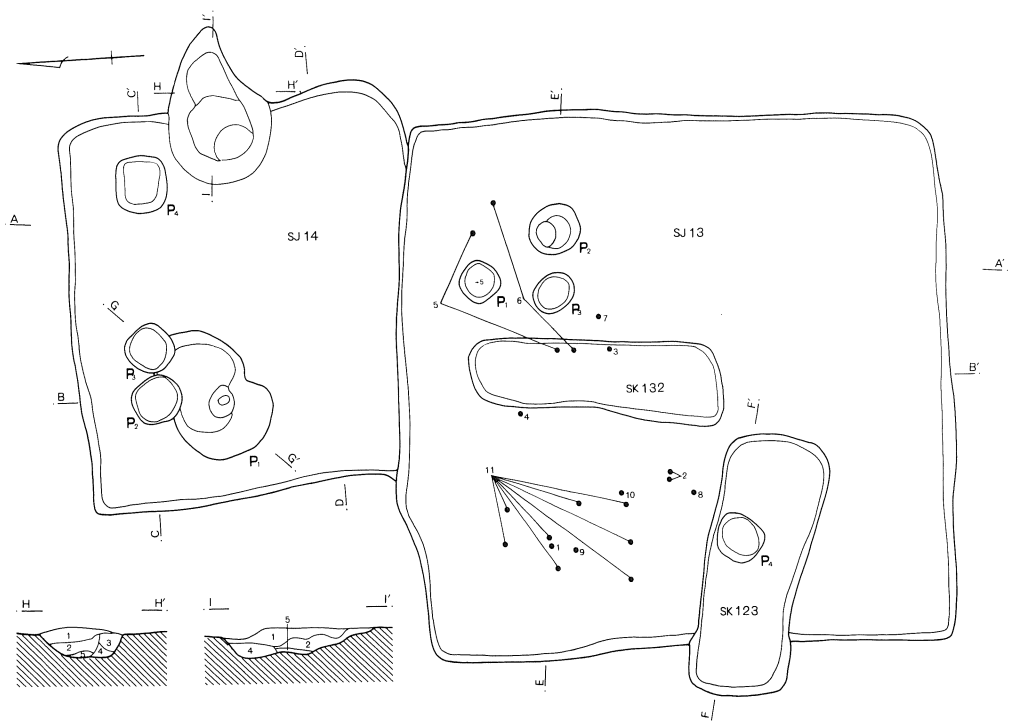
第13号住居跡(第36図)

S-6区に位置する。14号住居跡と重複し、本住居の方が新しい。また123・132号土壌が住居内に掘り込まれるが、土壌の方が新しい。形態は方形を呈し、規模は長軸4.33m、短軸4.19m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位はN-3°-Eを示す。

床面はやや凹凸が顕著である。また全体に軟弱で、特に強く踏み締められた形跡は認められなかった。覆土にはロームブロックが多量に含まれ、強く締まっていたことから人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは検出されなかった。可能性としては123号土壌によって破壊されたとすることもできるが、周辺に焼土や粘土等の散布は確認されなかった。また壁溝や貯蔵穴等の施設は発見されず、通常の住居とは性格が異なるものかもしれない。ピットは4本検出されたが、暗褐色を呈する締まりのない埋土で中近世の所産と推定される。123・132号土壌は褐色系の埋土でロームブロックを多量に含む。性格は不明だが墓墳の可能性もある。時期は不明である。

出土遺物は85点あり、その他に9世紀後半以降の土器片が若干含まれる。第37図1・8・9は床面から、11は床面より若干浮いた位置に散乱していた。3・5・6は132号土壌埋土内に混入していた。稲荷前V期に比定される。なお5は、VII期に降るものと推定される。



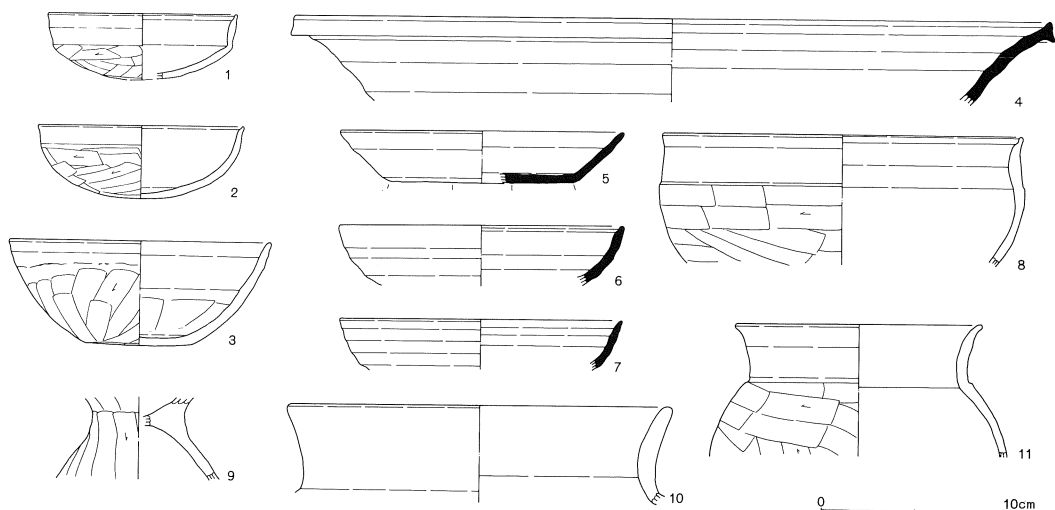
- 1 黄褐色土 ロームブロック多量含。焼土粒子僅かに含。堅緻。
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量含。ロームブロック部分的に含む。焼土含。

S J 14カマド

- 1 赤褐色土 焼土・ローム粒子含。
- 2 黒褐色土 黒褐色土主体。焼土粒子含。
- 3 黒褐色土 第2層に比較し焼土粒子細かくローム粒子やや多い。
- 4 黒褐色土 第2層に比較し焼土微量。ローム粒子含。
- 5 黒褐色土 ローム粒子若干含。黒色土主体。しまり弱。焼土含まず。

0 2m

第36図 第13・14号住居跡(L=31.40m)



第37図 第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土遺物観察表(第37図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	3.5		A B	A	橙	30%	№79。床面。
2	坏	10.8	3.8		A B F	A	橙	60%	№40, 86。覆土。
3	碗	13.8	5.6		A D E	C	浅黄	55%	№48。SK132内。全体に風化。
4	甕	(40.0)	4.4		A C	A	黒褐	5%	№30。覆土。
5	坏	(15.0)	2.8	(9.6)	A C	A	青灰	40%	№56, 125。SK132内。
6	坏	(15.0)	3.2		A B	B	灰白	20%	№53, 62。SK132内。
7	坏	(14.9)	2.7		A D	A	灰	10%	№51。覆土。
8	碗	(19.0)	6.9		A D	A	にぶい赤褐	40%	№107。床面。
9	台付甕		4.4		A D	A	にぶい赤褐	25%	№114。床面。
10	壺	(20.0)	5.1		A D F	B	橙	10%	№19。覆土。
11	小型甕	(13.0)	7.0		A D F	B	にぶい赤褐	25%	№9, 13, 14, 16~18, 22, 91。覆土。

第14号住居跡(第36図)

S-6区に位置する。第13号住居跡に南壁部を切られている。平面形態はやや歪んだ長方形を呈するものと推定され、規模は長軸3.12m、短軸2.80m、深さ0.05~0.08mを測る。主軸方位はN-86°-Eを示す。

床面は平坦で、比較的堅く踏み締められている。覆土はローム粒子を多量に含む黒色土単層で、深度が浅いこともあり土層変化は観察されなかった。カマドは東壁の中央に設置され、燃焼部は壁を若干切り込んで構築される。底面は焚口部が最も深く煙道部はなだらかに立ち上がる。袖を構成する粘土は検出されなかった。ピットは4本検出された。P₁は床下土壌または掘方と考えられ、ロームブロック混じりの土で充填されていた。P₂・P₃は中世のピットと推定されるが、P₁が住居に帰属するか否かに関しては明らかにできなかった。

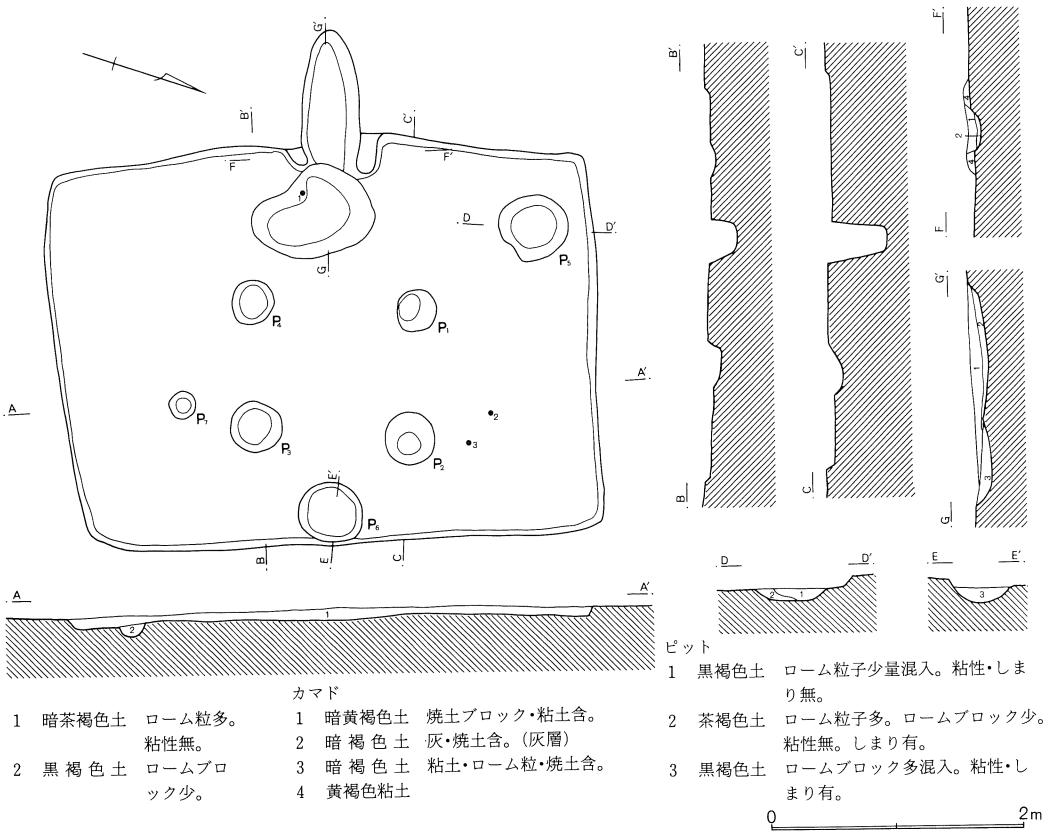
出土遺物は31点検出されたが全て小片で図化し得るものはない。須恵器は5片のみで土師器甕が大半を占める。時期は明確に押さえられないが13号住居跡との切合いからIV期頃と推定される。

第15号住居跡(第38図)

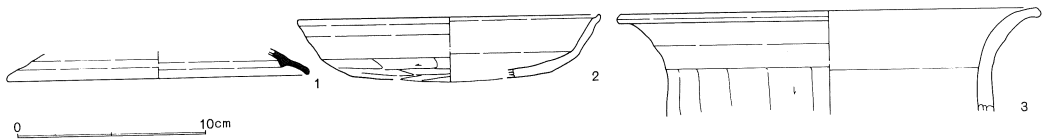
S-7区に位置する。形態はカマドを長辺にもつ横長の長方形を呈し、規模は長軸4.28m、短軸3.14m、深さ0.05mを測る。主軸方位はS-71°-Wを示す。

床面はやや凹凸をもち、覆土はローム粒子を多量に含む暗褐色土の単層で、堅く締まっていた。カマドは西壁中央に設置される。燃焼部から煙道にかけてはほぼフラットに移行し、黄褐色粘土で構築された袖の痕跡が残る。覆土第2層が灰層に相当しよう。またカマド前面に検出された土壌は、断面観察から掘方と判断される。ピットは7本検出された。P₁~P₄は位置的に支柱穴に相当するが、P₂・P₃は深度が浅く、支柱穴として機能していたか疑問である。P₅は貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は10点と非常に少ない。第39図1はカマド前面の床面から、2・3はP₂北側の床面から僅かに浮いた位置から出土した。稲荷前V期に比定される。



第38図 第15号住居跡(L=31.20m)



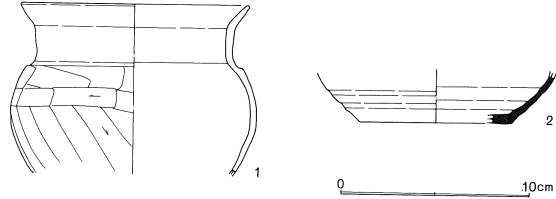
第39図 第15号住居跡出土遺物

第15号住居跡出土遺物観察表(第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(16.0)	1.4		AH	C	黒褐	5%	Na9.覆土。
2	皿	(16.0)	3.3		ACE	A	にぶい赤褐	25%	Na21.カマド内。無彩。
3	甕	(22.0)	5.5		ACF	A	橙	20%	Na10.覆土。

第16号住居跡(第41図)

S-7・8区に位置する。17号住居跡と重複し、本住居が新しい。形態は長方形を呈する小型の住居跡で、規模は長軸3.02m、短軸、2.72m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。

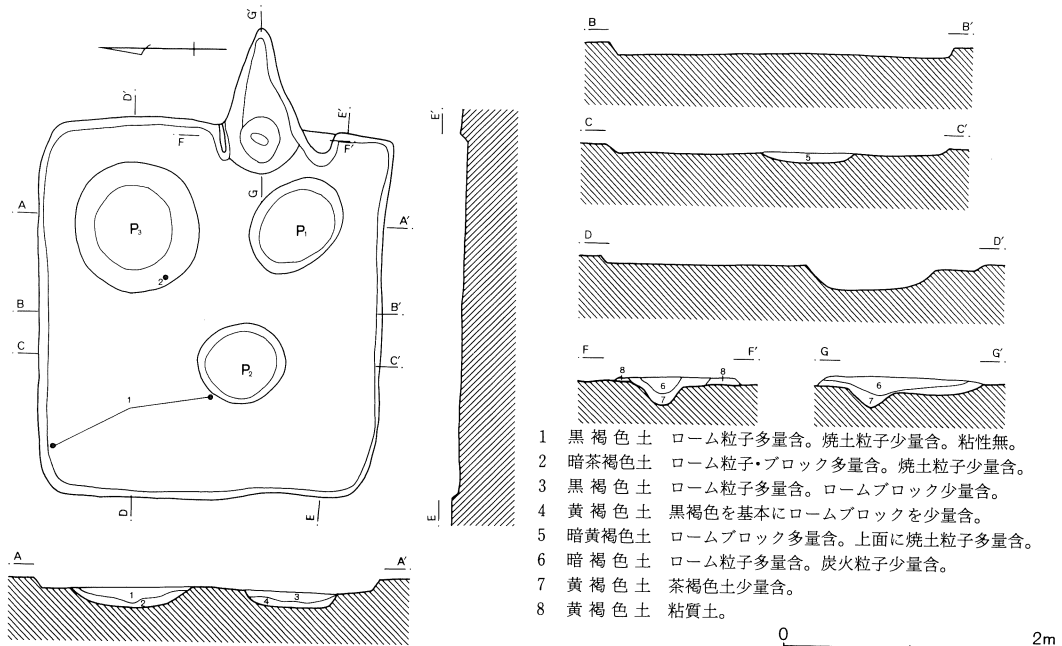


第40図 第16号住居跡出土遺物

床面は、中央部が高く踏み締められているが、周辺部はやや低く軟弱であった。覆土は焼土粒子とローム粒子を少量含む暗褐色土で構成され、大きな土層変化は認められない。

カマドは東壁の中央から南に寄った位置に設置される。燃焼部から煙道部にかけての底面はほぼフラットである。燃焼部には小ピットが穿たれており、支脚を抜き取った痕跡とも解される。袖部には黄褐色粘質土が僅かに残存するが、あまり明確なものではない。ピットは3本検出され、P₁・P₃は床下土壌と推定される。P₂は床面に焼土粒子が多量に散布していた。鍛冶炉とも異なり、性格は明らかにできなかった。

出土遺物は全て土器で10点にすぎない。土師器坏、甕、小形甕、須恵器坏、蓋があるが、小片のため正確な時期比定は困難である。恐らく9世紀中葉前後であろう。



第41図 第16号住居跡(L=31.20m)

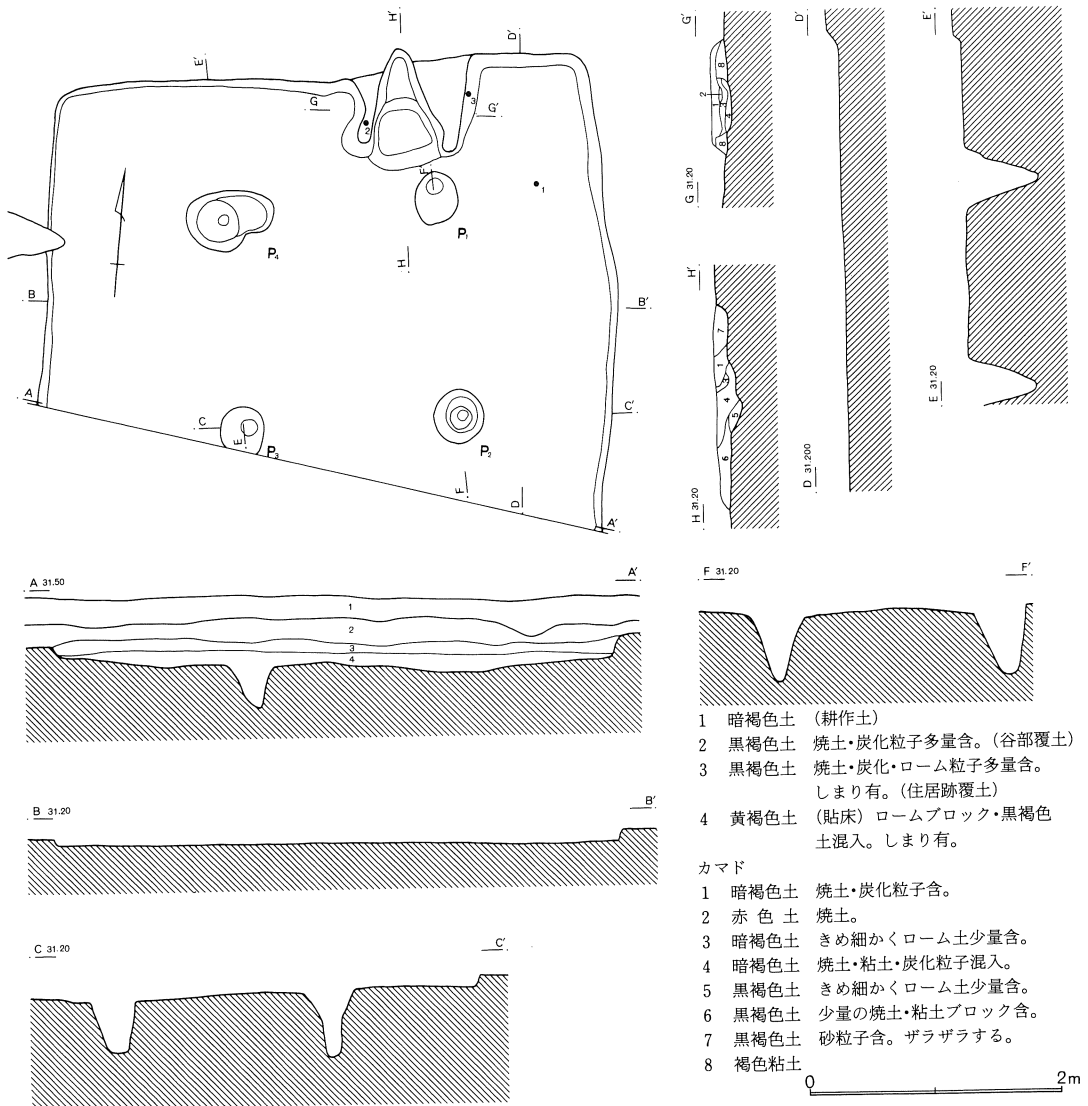
第16号住居跡出土遺物観察表(第40図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	小型甕	(12.0)	9.0		A E	A	にぶい赤褐	30%	No 11, 13。床面。
2	埴		2.8	(8.0)	A C	B	灰白	20%	No 19。覆土。

第17号住居跡(第42図)

S-8区に位置する。重複関係は16号住居跡よりも旧く、36号土壌よりも新しい。南辺は調査区外に延びるため全容は窺い知れないが、方形または長方形を呈するものと推定される。残存規模は東西長4.55m、南北長3.58m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-5°-Wを示す。

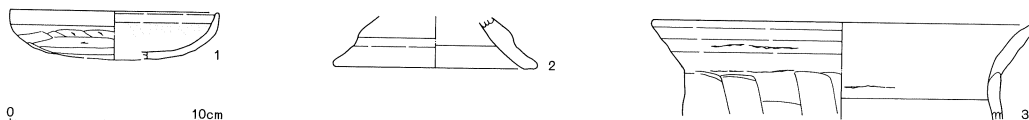
床面は概ね平坦で堅い。ほぼ全面貼床され、掘方面を見ると周囲が高く、中心部が深く掘り下げ



第42図 第17号住居跡

られていた。覆土は焼土・炭化物粒子・ローム粒子を含む黒色土で占められ、土層変化は観察されなかった。カマドは北壁中央から東に寄った位置に設置される。燃烧部は壁内に納まり、煙道部は僅かに壁外に延びる。底面はフラットで燃烧部のみ皿状にくぼむ。袖部は褐色粘土で構築され比較的良く残存する。ピットは4本検出され、位置的に見ても主柱穴と判断される。貯蔵穴・壁溝は存在しない。

出土遺物は少なく17点に留まる。第43図1～3は破片ではあるが住居に伴うものと推定される。稲荷前V期に属する。



第43図 第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土遺物観察表(第43図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	2.5		B F	A	橙	30%	№7.床面。
2	台付甕		2.6	(10.6)	A E F	B	橙	15%	№40.カマド右袖内。
3	甕	20.0	5.1		A B E F	B	橙	15%	№29.カマド内左袖上。

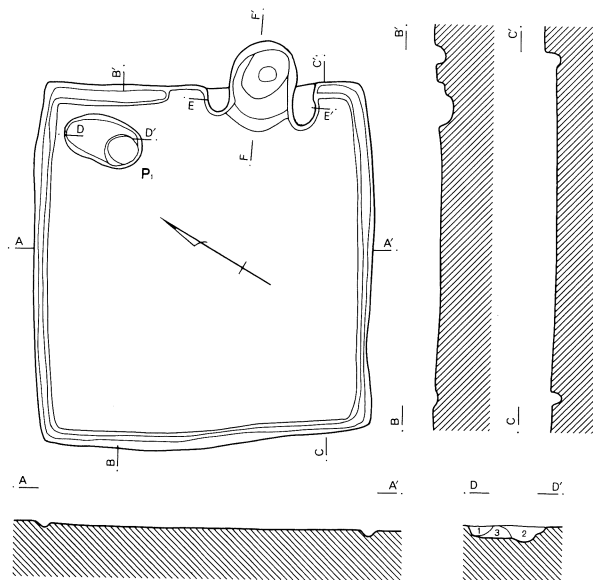
第18号住居跡(第44図)

R・S-10区に位置し、第I群の東側に広がる谷部に単独で存在する。形態は方形を呈し、規模は長軸2.87m、短軸2.72mを測る。床面は露出していた。主軸方位はN-60°-E。

床面はほぼ平坦である。カマドは辛うじて残存している。火床面は第4層上面と考えられ、一部焼土の硬化面が見られた(第3層)。袖部に相当する位置には一部褐色の粘質土が認められた。

ピットは1基検出され、位置的に貯蔵穴の可能性はある。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は土師器甕の小片が2片あるのみで、時期は不明。



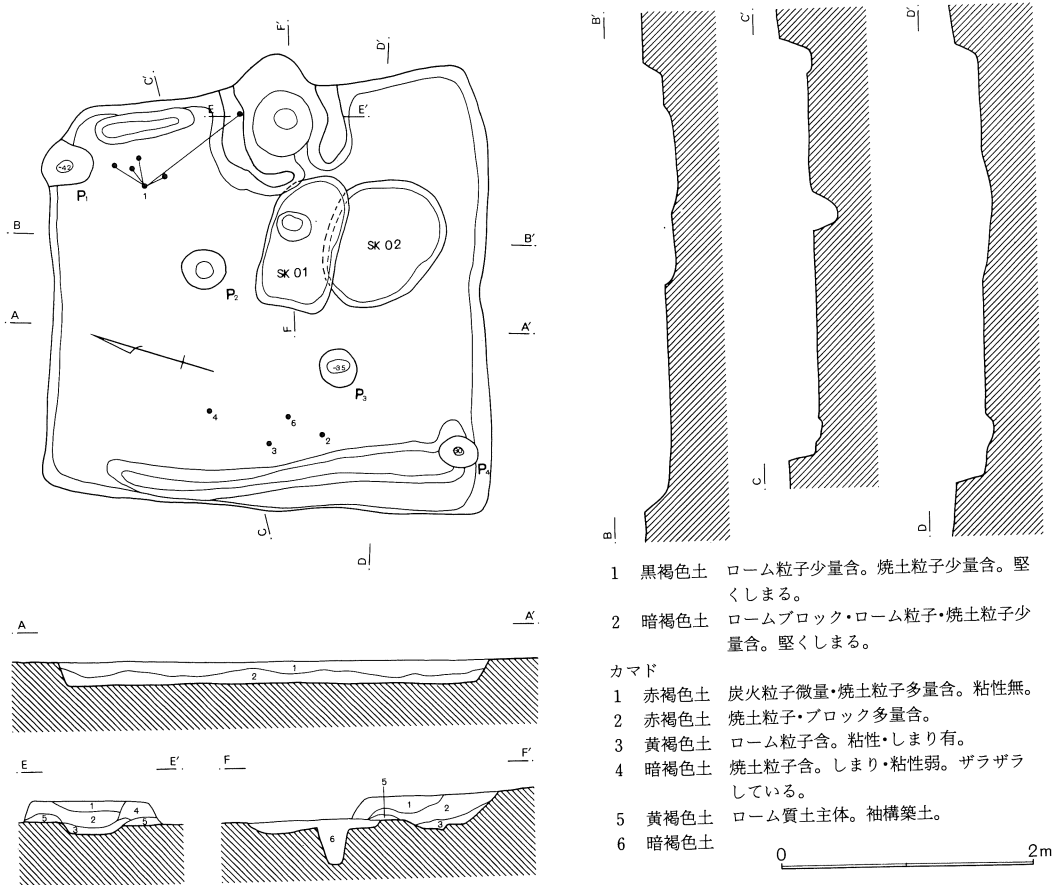
- カマド
- 1 暗褐色土 焼土多。
 - 2 黒褐色土 灰層。焼土含。
 - 3 赤褐色焼土 火床面。
 - 4 暗褐色土 ローム・焼土粒子少量含。
 - 5 褐色土 粘質土。
- ピット
- 1 暗褐色土 ローム粒少量含。
 - 2 暗褐色土 ロームやや多。
 - 3 黄褐色土

第44図 第18号住居跡(L=30.80m)

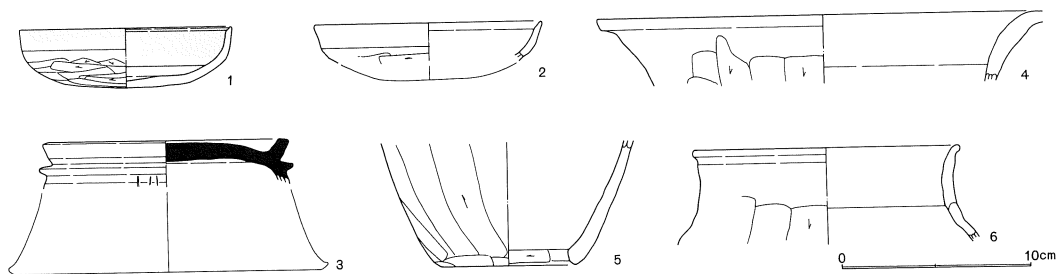
第19号住居跡(第45図)

R-8・9区に位置する。9号井戸跡と接するが直接のきり合いはない。形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は長軸3.50m、短軸3.46m、深さ0.15~0.20mを測る。主軸方位はN-75°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は上下2層に分かれ、自然堆積と推定される。カマドは東壁中央部に設置される。燃焼部は一段低く円形に掘り込まれ、煙道部は壁外に僅かに延びる。また焚口部にはロームを突き固めた土堤状の高まり(高さ2~3cm)が観察された。壁溝は東壁と西壁下に部分的



第45図 第19号住居跡(L=31.20m)



第46図 第19号住居跡出土遺物

に掘られていた。土壌は2基検出された。断面観察から床下土壌と考えられる。ピットは4本検出され直線的に並ぶ。覆土の状態から何れも住居よりも新しい時期の所産と判断される。

出土遺物は60点検出されたが完形に復元されるものはない。第46図4・6は床面から出土した。3の円面硯は混入であろう。そのほか、中世に位置付けられる鉢と瓦片が出土した。ピット列に伴う遺構が存在したのかもしれないが、明確には掴めなかった。およそ稻荷前V期に比定しておきたい。

第19号住居跡出土遺物観察表(第46図)

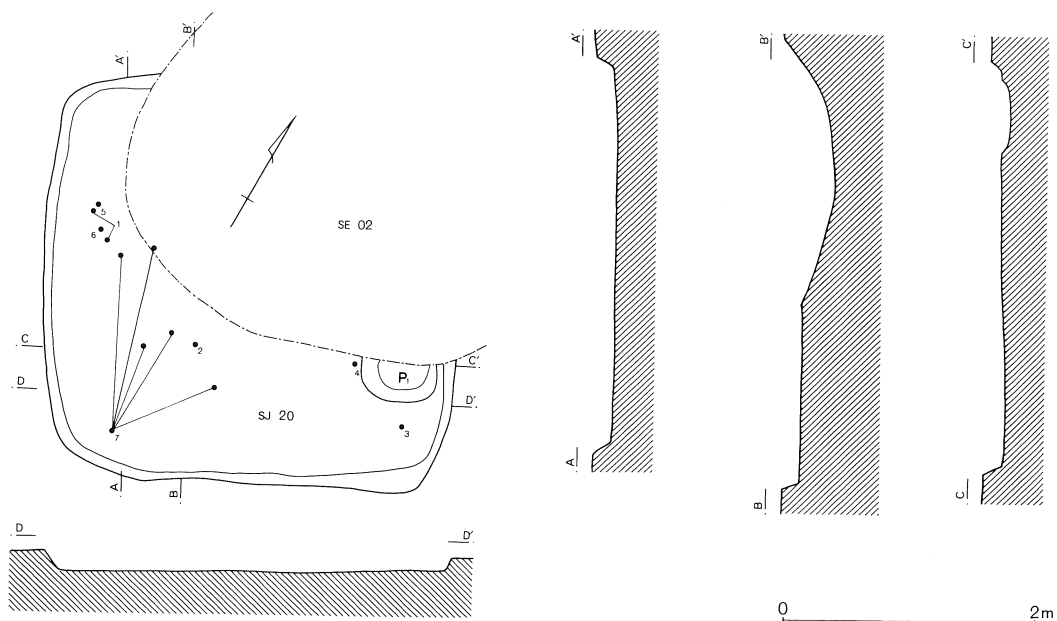
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.2)	3.2		A B	A	にぶい赤褐	50%	Na 58, 59, 60, 62, 63, 99。覆土。
2	坏	(12.0)	2.0		B F	A	橙	20%	Na 42。覆土。
3	円面硯	(12.0)	2.3		A C D	B	灰	20%	Na 32。覆土。外面沈線3条。透孔は未確認。
4	甌	(24.0)	3.6		A C D	B	にぶい褐	20%	Na 35。床面。
5	甌		6.5	7.0	A C D	B	橙	25%	覆土。
6	小型甕	(14.0)	5.1		A C D	B	にぶい褐	20%	Na 31。床面。

第20号住居跡(第47図)

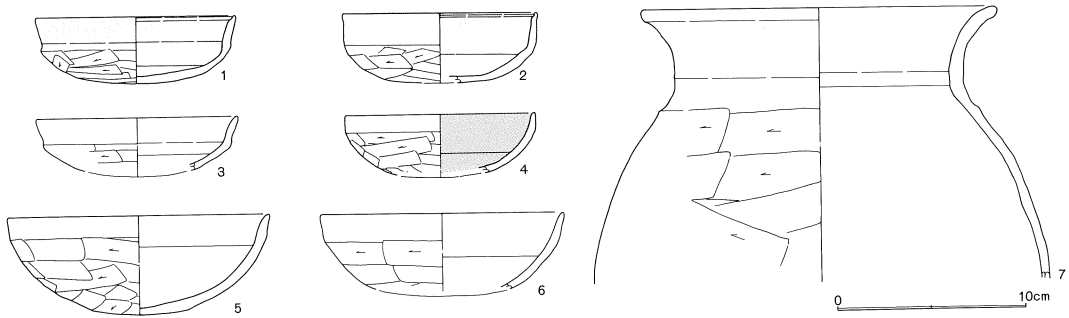
R・S-7・8区に位置する。第2号井戸跡と重複し、井戸に住居の北半を破壊されている。形態は方形を呈するものと推定される。規模は長軸3.24m、短軸3.18m、深さ0.15mを測る。主軸方位はN-23°-Wを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は焼土粒子とローム粒子を含む暗褐色土で構成される。ピットは1本検出されているが貯蔵穴の可能性もある。カマド・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は全て土師器で20点検出された。第48図3・5・7は床面出土。7は床面に散乱した状態で出土した。稻荷前IV期に比定される。



第47図 第20号住居跡(L=31.20m)



第48図 第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡出土遺物観察表(第48図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	10.5	3.5		AB	A	橙	80%	№1, 7。覆土。
2	坏	(10.2)	3.7		AB	A	橙	25%	№16。覆土。
3	坏	(10.6)	2.8		ADE	B	橙	15%	№37。床面。
4	坏	(10.0)	3.1		ACD	A	橙	15%	№25。覆土。内面黒色処理。
5	坏	(13.8)	5.2		AC	A	橙	50%	№41。床面。
6	坏	(12.8)	4.0		B	A	橙	20%	№5。覆土。
7	甕	18.4	14.5		AB	A	橙	15%	№8, 9, 12, 14, 19, 39。床面。

第21号住居跡(第49図)

R・S-7区に位置する。第20号住居跡の西側に近接して構築される。形態は方形を呈し、規模は長軸3.56m、短軸3.02m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-26°-Wを示す。

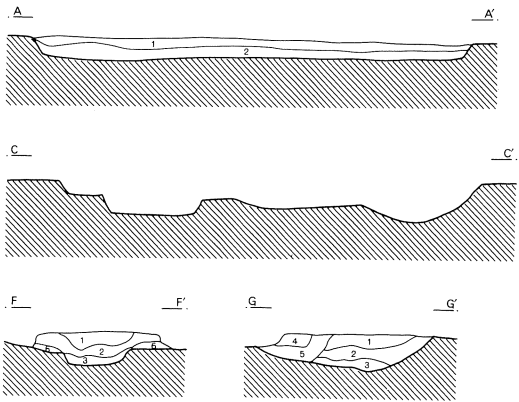
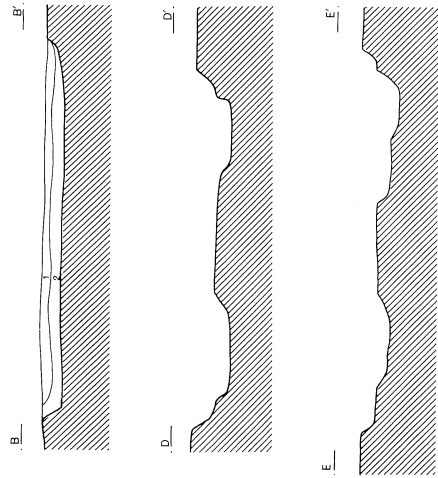
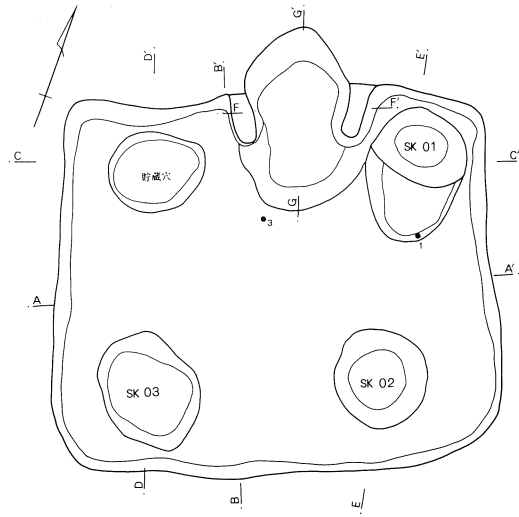
床面は概ね平坦である。住居中央部とカマド前面は比較的堅く踏み締められていたが、壁際はやや軟弱であった。覆土は2層に分かれ、下層にはロームブロックが多量に含まれていた。人為的堆積であろうか。

カマドは北壁中央に設置される。火床面は皿状に凹み、緩やかに立ち上がる。袖には褐色系粘土が一部残存するが、明確な形では検出されなかった。貯蔵穴はカマド西側に位置する。床面に散乱していた礫群が貯蔵穴内に流れ込んだ状況が観察され、住居使用時には開口していたものと考えられる。第1～3号土壌は床下土壌または掘方と推定される。住居主柱穴に相当するピットは検出されなかった。

遺物は少なく19点にすぎない。器種としては土師器坏、甕、須恵器坏、甕がある。図示した第50図1は1号土壌内、3は床面から出土した。年代決定の資料に欠けるが8世紀前半代に位置付けられよう。

第21号住居跡出土遺物観察表(第50図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(16.0)	2.9		AC	A	灰	5%	№31。SK01内覆土。
2	埴	(16.8)	5.0		AC	B	灰白	5%	覆土。口縁内面に沈線巡る。
3	坏	13.0	2.8		AC	A	橙	10%	№34。床面。



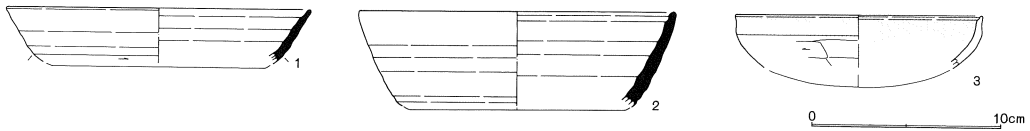
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子全体の多量含。粘土粒子まばらに含。粘性・しまり無。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含。焼土粒子僅かに含。粘性・しまり無。

カマド

- 1 暗茶褐色土 焼土粒子多量含。ローム粒子少量含。
- 2 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含。
- 3 黄褐色土 茶褐色土基調。ロームブロック部分的に含む。
- 4 暗茶褐色土 1層に近似。焼土粒子無。ローム粒子少量含。
- 5 黒色土 ローム粒子均質に混入。
- 6 褐色土 粘質土。袖構築土。

0 2m

第49図 第21号住居跡(L=31.30m)

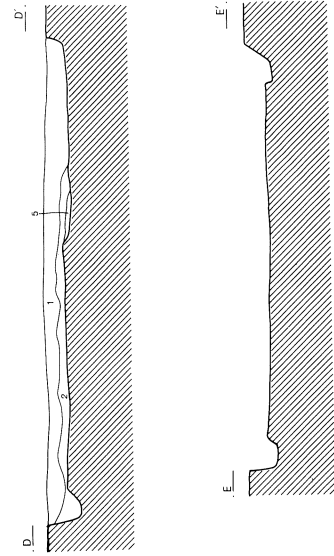
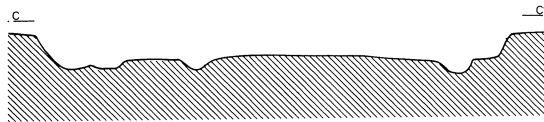
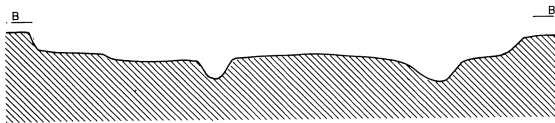
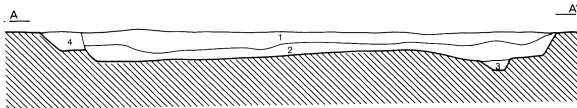
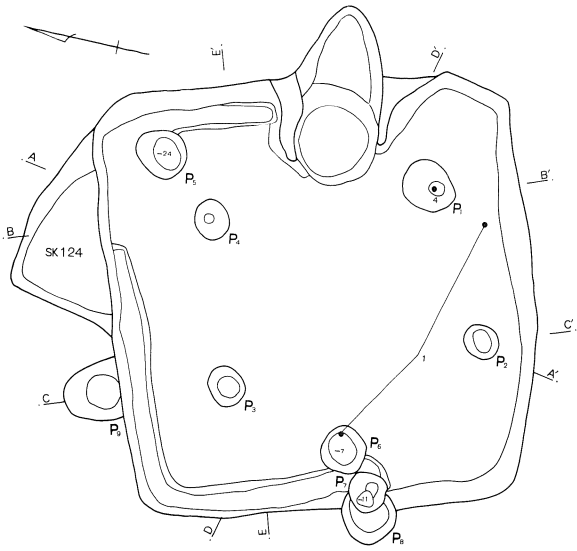


第50図 第21号住居跡出土遺物

第22号住居跡(第51図)

R-6区に位置する。第124号土壌を切って構築される。形態はやや不整な方形を呈し、規模は一辺3.38m、深さ0.20mを測る。主軸方位はN-70°-Eを示す。

床面は比較的堅いが、南半がやや軟弱で凹凸が目立つ。埋没過程は自然堆積と考えられる。カマドは北壁に設置される。焚口から燃焼部が深く掘り込まれ、煙道部は緩やかに延びる。袖には、ロームを含む褐色粘土の僅かな高まりが確認されたが、あまり明確なものではない。ピットは住居内に7本、壁にかかって2本検出された。P₁~P₄が主柱穴と考えられる。P₅からP₉は覆土の様相から遺構に伴うものではない。壁溝は南壁を除いて巡るが北東コーナー付近で一部切れている。

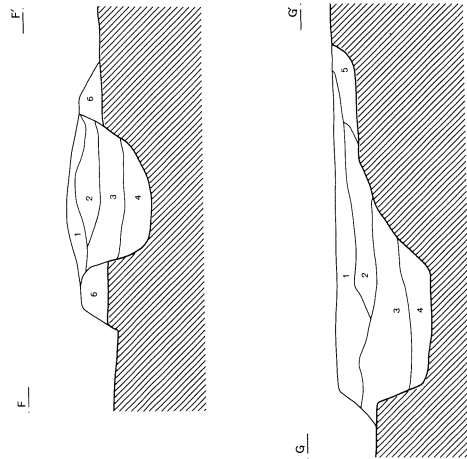
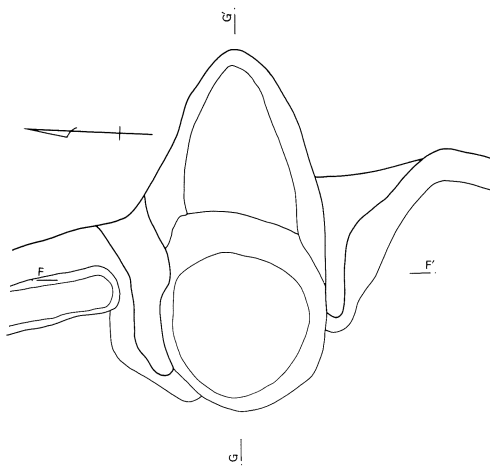


- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子・ローム粒子若干含。しまり・粘性弱。
- 2 暗褐色土 第1層より焼土粒子多量含。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化・ローム粒子均質含。
- 4 黄褐色土 ローム粒子・ブロック混在。
- 5 黄褐色土 ローム粒子・ブロック主体。

カマド

- 1 赤褐色土 焼土主にロームブロック含。
- 2 暗赤褐色土 焼土ブロック含。
- 3 暗赤褐色土 焼土粒・炭化粒子多。粘土含。
- 4 暗褐色土 掘方埋土。焼土・ローム・炭化粒含。
- 5 黄褐色土 ローム多。焼土・炭化粒含。
- 6 褐色土 褐色粘土。

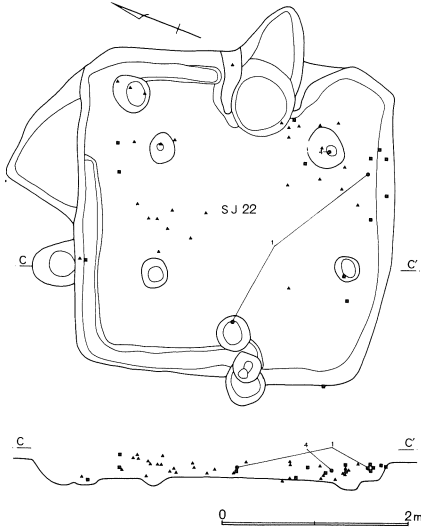
0 2m



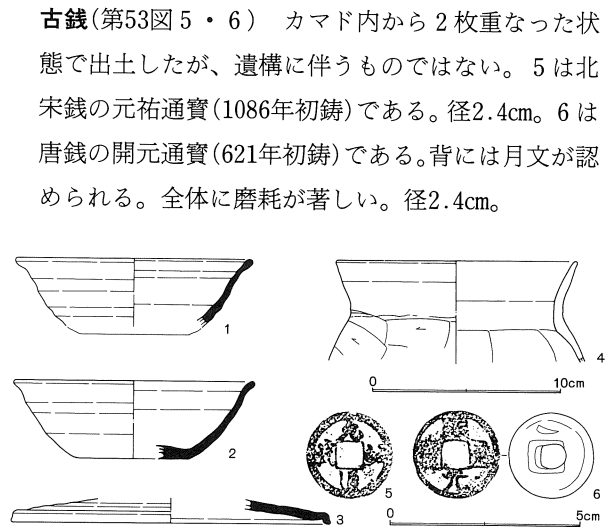
0 1m

第51図 第22号住居跡・カマド(L=31.40m)

出土遺物は112点あるが、全て小片である。7世紀末葉から8世紀前半と推定される土器と9世紀代の須恵器を中心とする。基準資料が得られなかったため分布図を作成したところ、前者(▲印)は覆土上層から下層まで満遍なく出土しているのに対し、後者(■印)は南壁付近に比較的多く集中し、埋没過程で流れ込んだような状況が観察される(第52図)。遺構の時期決定は困難であるが、仮に新しい土器群で代表させておくと稲荷前 XIII 期に比定される。



第52図 第22号住居跡遺物分布図



第53図 第22号住居跡出土遺物

第22号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.6	4.1	(5.8)	A C D	C	灰白	20%	覆土。
2	坏	(12.4)	3.6		B C	B	オリーフ灰	15%	No 16, 34。覆土。
3	蓋	(17.0)	1.3		B C	B	灰白	10%	覆土。
4	甕	(12.6)	5.3		A B E F	A	橙	25%	No 28。覆土。

第23号住居跡(第54図)

R-5・6区に位置する。1号竪穴状遺構と近接するが、切り合い関係はない。形態は不整形を呈する。規模は長軸3.28m、短軸3.04m、深さ0.25mを測る。主軸方位はN-2°-Eを示す。

床面は緩やかな起伏をもち全体に軟弱である。壁の立ち上がり角度も緩やかで曲線的である。覆土は3層に分かれ、埋没過程は自然堆積と考えられる。ピットは2本検出されたが遺構に伴うもの

第23号住居跡出土遺物観察表(第55図)

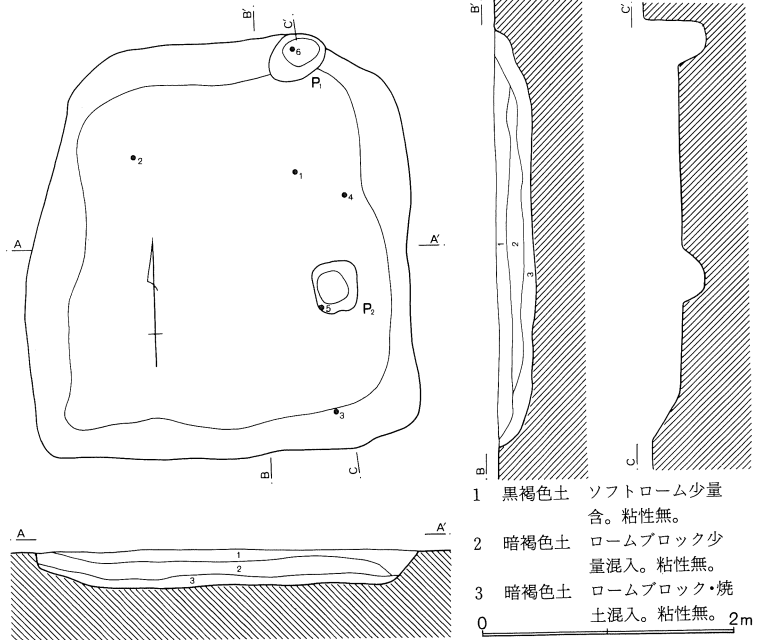
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.4)	3.1		A B C	B	青灰	15%	No 18。覆土。
2	坏		0.9	6.4	A B C D	B	灰白	60%	No 37。覆土。
3	埴	(17.4)	6.0	(10.0)	A B C	A	灰	15%	No 3。確認面。
4	瓶		6.2	(11.0)	A B C	C	灰白	20%	No 21。覆土。
5	壺		4.8	(18.0)	A B C	B	灰	15%	No 24。P ₂ 内。
6	鉢	(30.0)	7.7		A H	B	灰	10%	No 44。P ₂ 内覆土。

ではなく、中世の所産と考えられる。カマド・壁溝等の施設は当初から存在せず、一般の竪穴住居跡とは趣を異にする。性格は今のところ不明であるが、北側に隣接する1・2号竪穴状遺構と同様な機能を果たした施設であろう。

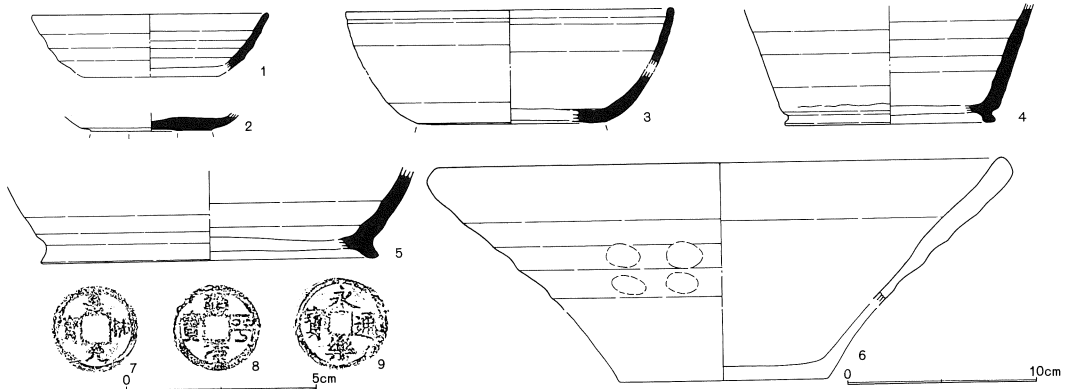
出土遺物は44点あり、ほとんどが覆土から検出されている。7～9世紀代の土器を含み正確な時期比定は難しいが、主体を占めるのは8世紀中葉

から後半にかかるものである。第55図5・6はP₂から出土。古銭(7～9)は覆土出土である。何れも混入と考えられる。

古銭(第55図7～9) 3枚錆着した状態で出土。7は嘉祐元寶(1056年初鑄)、8は治平元寶(1064年初鑄)、9は永楽通寶(1408年初鑄)である。遺構に伴うものではない。



第54図 第23号住居跡(L=31.50m)



第55図 第23号住居跡出土遺物

第24号住居跡(第56図)

Q・R-6区に位置する。第26号住居跡の西側に隣接するが直接の重複関係はない。また第127・130号土壌による攪乱を受けている。平面形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸5.78m、短軸4.53mを測る。深さは0.05m程と極めて浅い。主軸方位はS-73°-Wを示す。

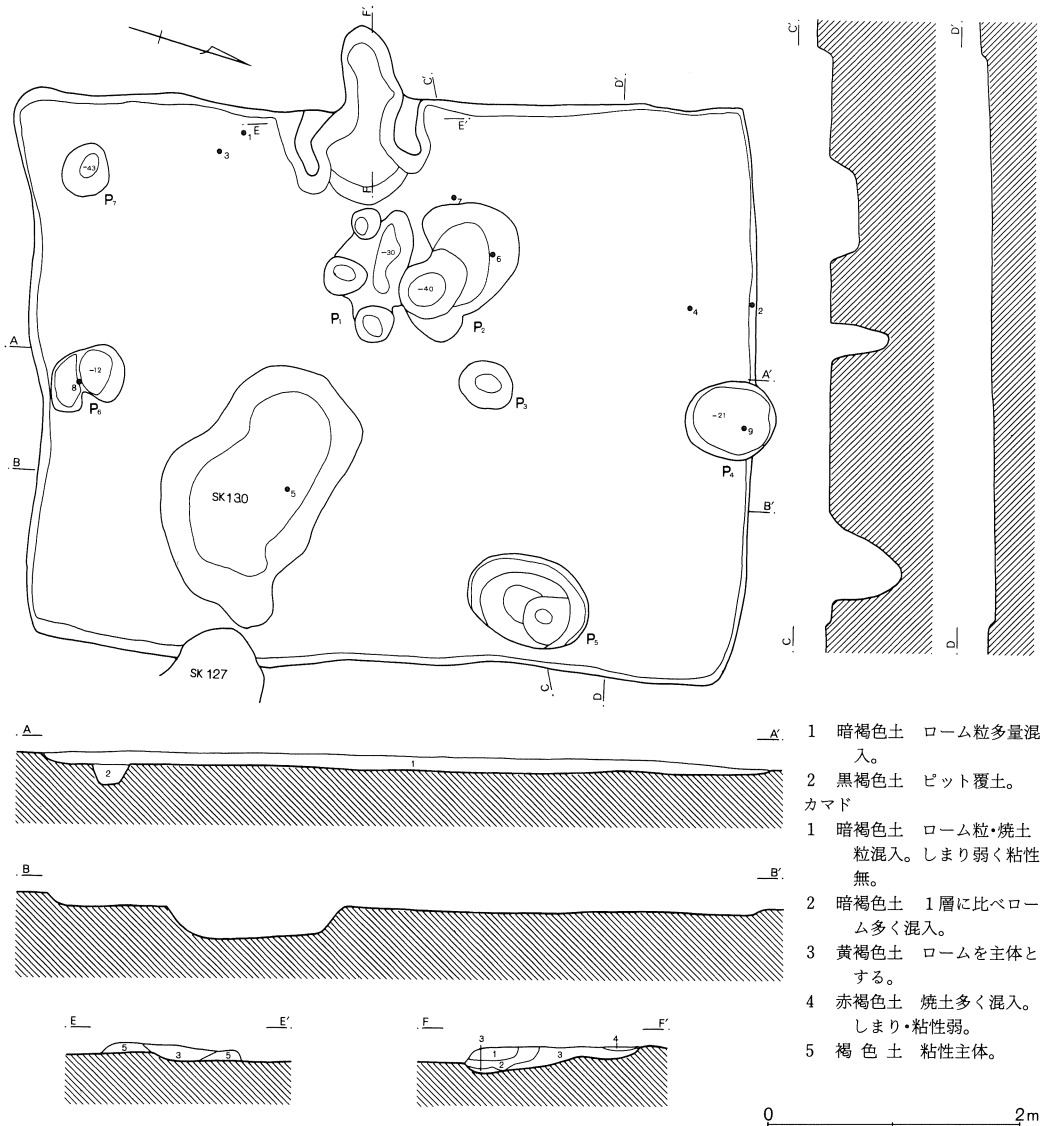
床面はほぼ平坦だが、全体に軟弱だった。覆土は暗褐色土で構成され、壁高が浅いために土層変

化は観察されなかった。

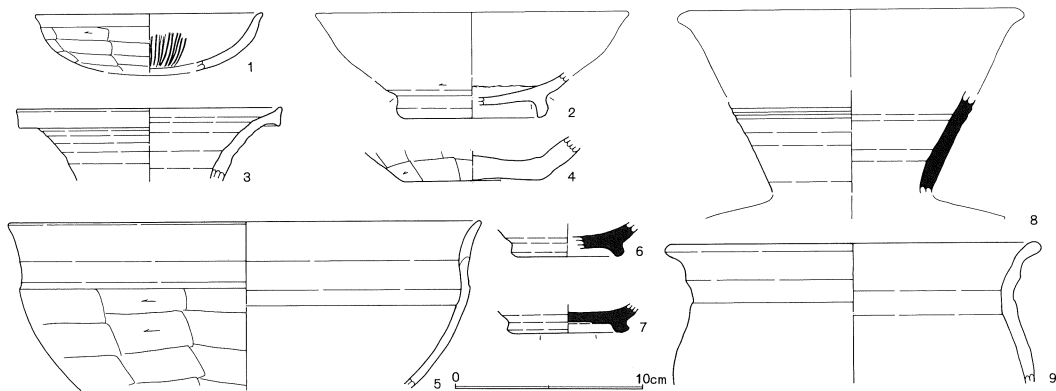
カマドは西壁に設置されるが遺存状態は悪い。焚口から燃焼部は浅く皿状に掘り込まれ、煙道部へ緩やかに移行する。袖には褐色粘土が用いられていたが、遺存部分は極少ない。

ピットは7本検出されているが、断面観察や覆土の状況からP₁・P₂・P₄・P₅は遺構に伴わないものと判断された。P₃・P₅に関しては住居に伴う可能性もあるが断定はできない。壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は30点と少ない。第57図1は暗文が施される。2・3・6・7は混入であろう。9の甕は在地産の甕の整形技法と異なり系統は不明。他に須恵器盤の底部小片、灰釉瓶、中世陶器がある。土師器坏は図示した以外に口縁部小片が1点あるのみである。稻荷前V期に比定しておきたい。



第56図 第24号住居跡(L=31.50m)



第57図 第24号住居跡出土遺物

第24号住居跡出土遺物観察表(第57図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.0)	3.0		ABE	B	橙	25%	Na 66。床面。内面に暗文。
2	灰釉埴		2.4	7.0	ABG	D	灰白	50%	Na 25。覆土。内面に重ね焼き痕。産地不明。
3	灰釉壺	(14.0)	3.9		G	A	灰白	10%	Na 1。覆土。猿投産。K-90号窯式か。
4	甕		1.5	7.0	ACE	A	にぶい褐	90%	Na 5。覆土。
5	鉢	(25.0)	8.9		ACD	B	橙	20%	Na 28。SK130内覆土。
6	高台坏		1.8	5.2	A	C	灰白	30%	Na 59。P ₂ 内。
7	高台坏		1.5	5.6	CD	D	黒褐	35%	Na 85。覆土。黒色処理(内外面)。
8	壺		5.4		AD	B	灰	10%	Na 81。覆土。
9	甕	(19.2)	7.5		ACD	B	橙	15%	Na 7。P ₄ 内覆土。胴部整形ナデか?。

第25号住居跡(第58図)

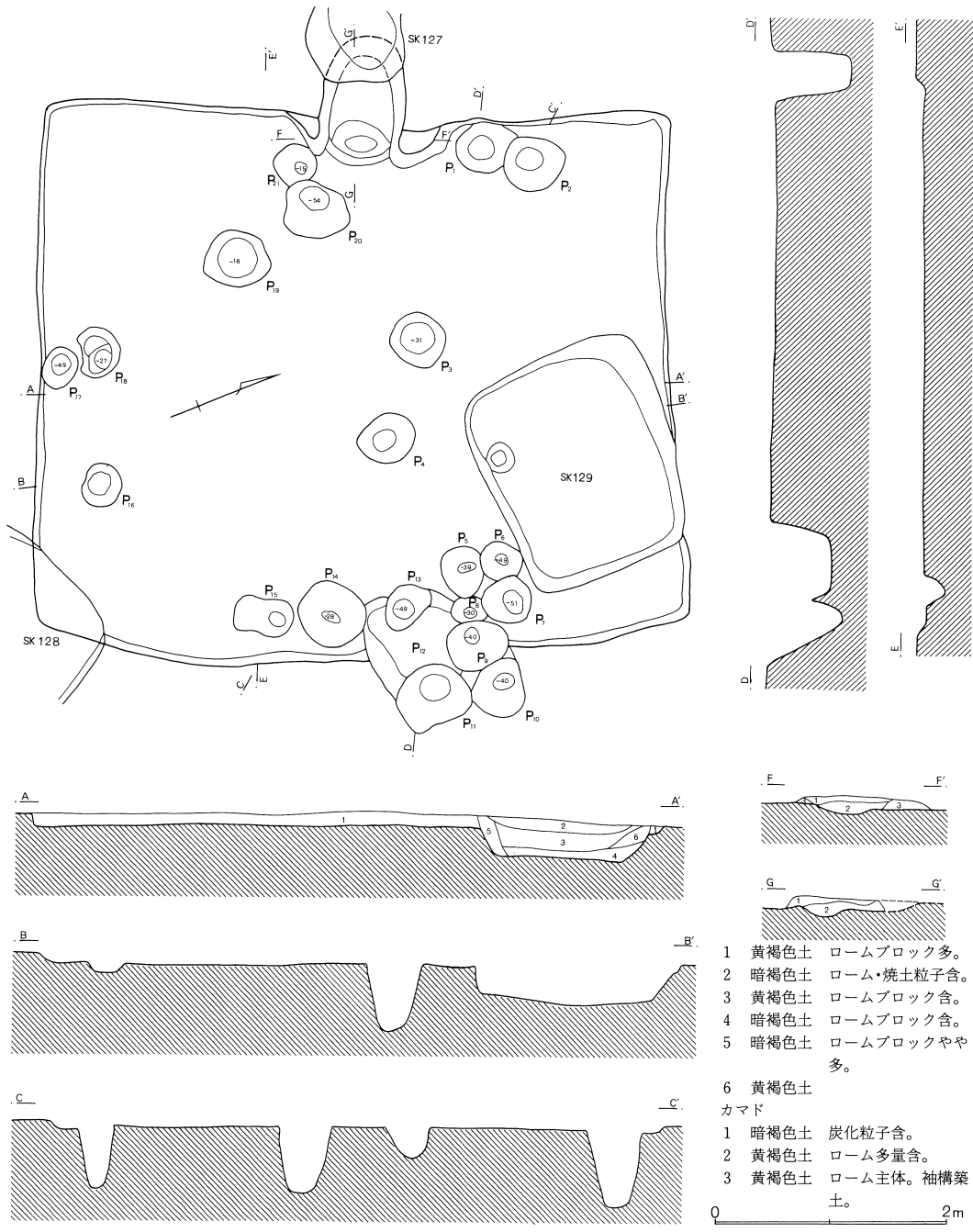
R-6・7区に位置する。第24号住居跡の東に単独で存在する。第127~129号土壌により床面やカマドの一部を壊されている。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸5.62m、短軸4.80mを測る。深さは約0.05mと極めて浅い。主軸方位はN-67°-Wを示す。

床面は平坦である。覆土はロームブロックを多量に含む黄褐色土で構成されるが、深度が浅いため埋没状況は明らかでない。

カマドは西壁中央に設置される。先端は第127号土壌に破壊されている。底面の掘り込みは全体に浅く、焚口が一段低く下げられている。袖は大半が流失しており明確ではなく、僅かにロームを主体とする粘質土が残存していたにすぎない。

ピットは多数検出された。特に東壁付近に集中するが、覆土の状況からほとんどは中世の所産と推定され、明確に住居に伴うものは認められない。

出土遺物は少なく、須恵器坏7点、土師器甕1点にすぎない。実測可能な遺物はなく、時期は明確にしえないが、3点の須恵坏底部片は篋削り調整がなされており、8世紀中葉から後半頃と推定しておきたい。

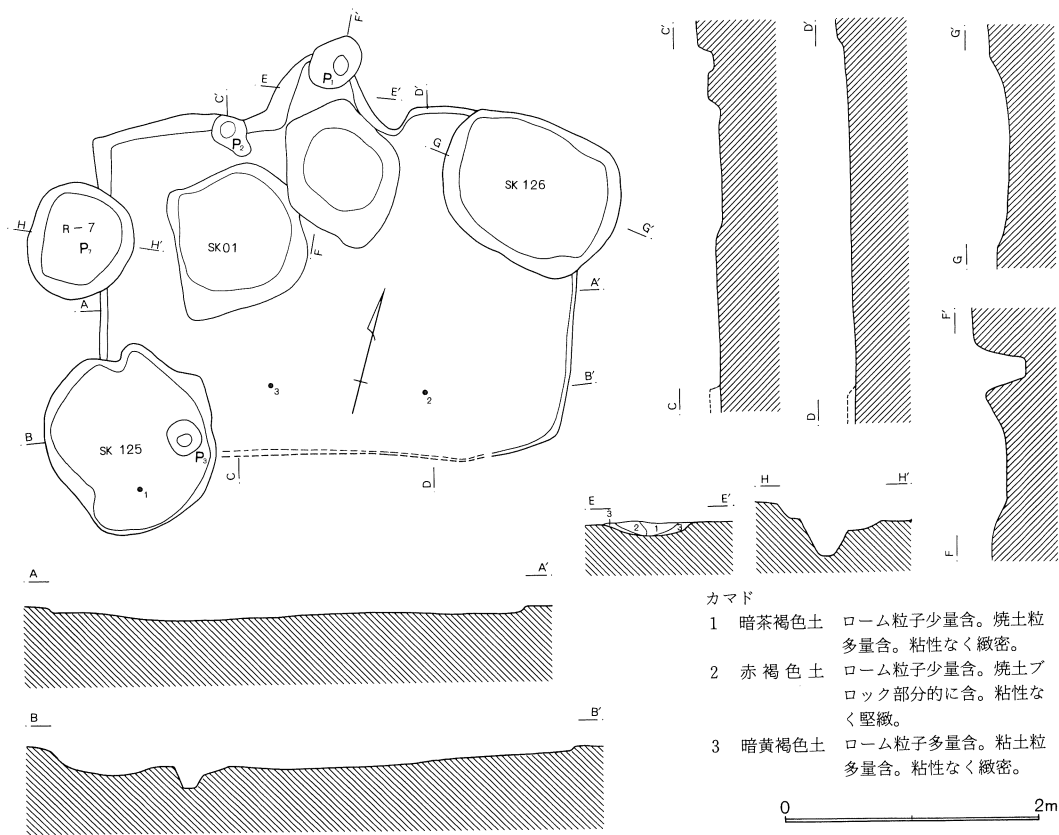


第58図 第25号住居跡(L=31.40m)

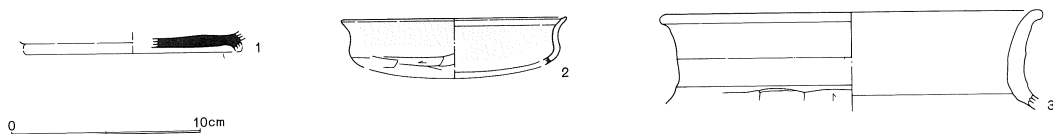
第26号住居跡(第59図)

Q・R-7・8区に位置する。周囲には中世の土壌群が集中し南壁部はほとんど把握できなかった。形態は不整形方を呈するものと推定される。規模は長軸3.78m、短軸2.86m、深さ0.04~0.10mを測る。主軸方位はN-13°-Wを示す。

床面はかなり凹凸を有し全体に軟弱である。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土を基調としている。カマドは北壁中央に設置される。遺存状況は極めて悪く、詳細は不明である。燃烧部は皿状に掘り込まれ、先端はP₁に破壊されている。袖は残存しない。ピットは3本検出されたが、何れも住居に伴うものではない。第1号土壌はロームブロックを混入する黒色土で埋められ、土層観察から、遺構に伴う床下土壌と考えられる。出土遺物は56点検出されたが何れも小片である。第60図2は第125号土壌内から出土した。本遺構から流入したものであろうか。7世紀後半から8世紀初頭の遺物と9世紀後半代と推定されるものが混在し、時期は明確にできない。



第59図 第26号住居跡(L=31.20m)



第60図 第26号住居跡出土遺物

第26号住居跡出土遺物観察表(第60図)

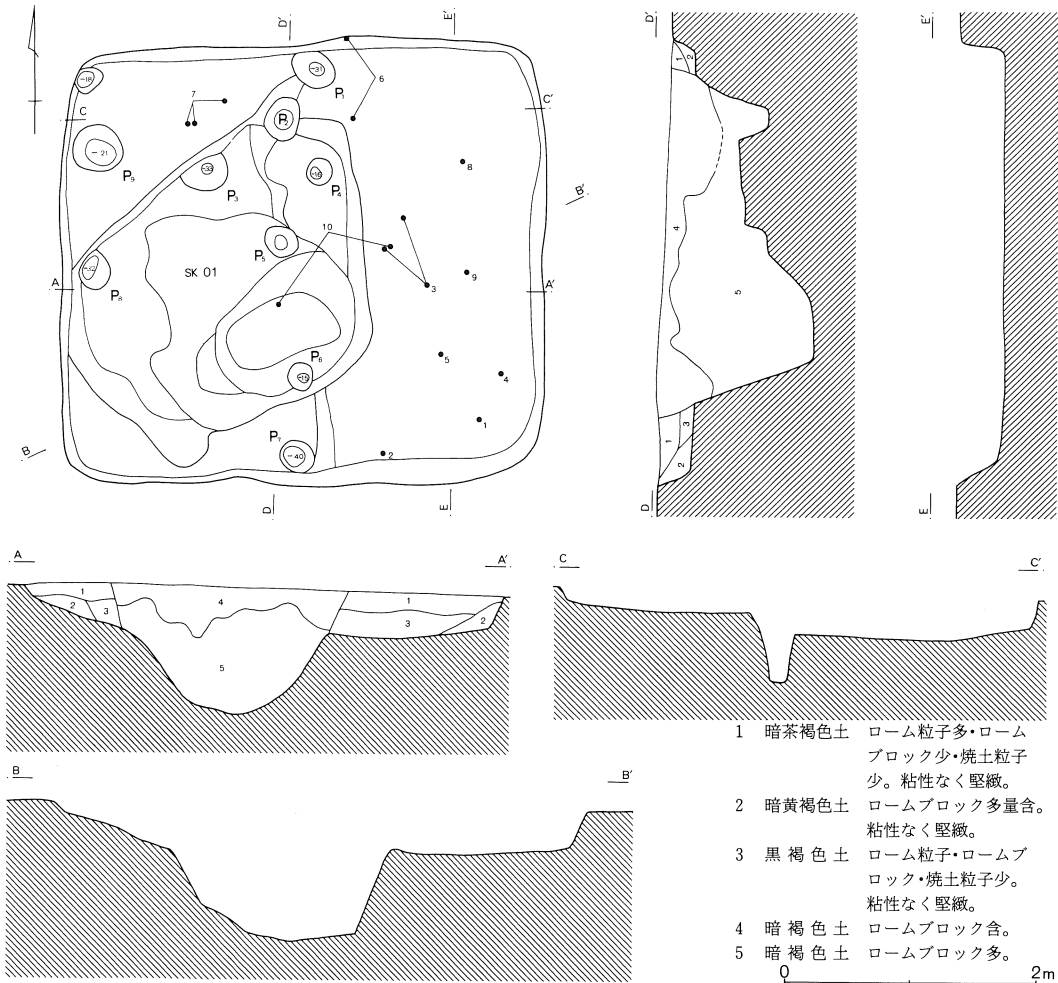
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	高台坏		1.1	(11.4)	A C	A	灰	10%	№45。覆土。
2	坏	11.8	2.5		B	A	にぶい黄橙	15%	№36。SK125内覆土。
3	壺	19.7	5.2		A B C E	A	にぶい橙	20%	№5。覆土。

第27号住居跡(第61図)

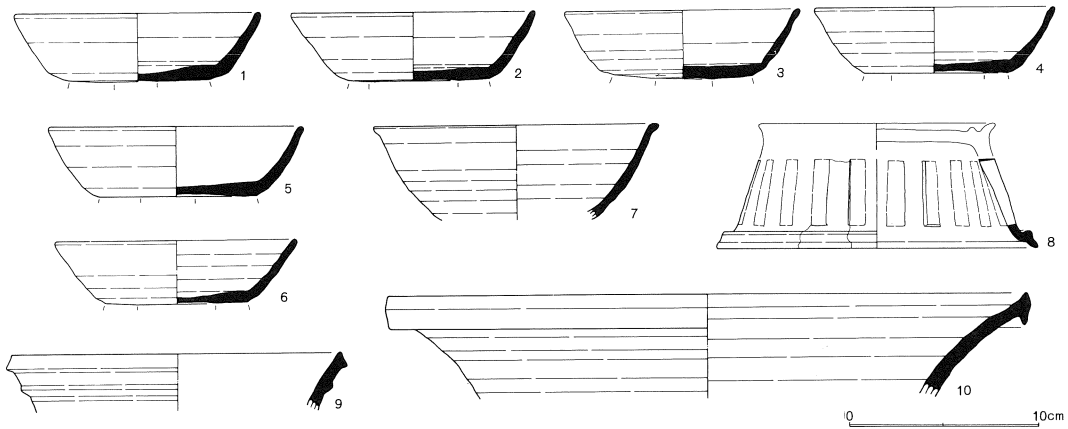
R-7区に位置する。北側に第28号住居跡、南側に19号住居跡が近接する。形態は方形を呈し、長軸3.87m、短軸3.54m、深さ約0.30mを測る。主軸方位はN-1°-Eを示す。

住居内には2.8×2.2×0.9mを測る不整形の土壇が重複する。断面観察から住居埋没後に掘り込まれたものと判断された。倒木痕とも異なり性格は不明である。床面は住居中央から西側と、東側で深さが異なる。第1層下面が比較的平坦に堆積しているが、貼床または掘方を示す痕跡は観察されなかった。このことから、床面の段差は当初より存在したものと考えられる。床面は全体に凹凸をもち、踏み締められたような堅い面は認められなかった。ピットは10本検出されたが、伴うものは明確ではない。またカマドも存在せず、通常の住居とは様相が異なる。

出土遺物は47点ある。第62図1・3・4・5の須恵器坏は、床面に置かれた状態で出土した。2・6は床面から浮いた位置から出土したが、大きな時期差は認められない。7・9は覆土、10は土壇覆土上層出土である。8の円面硯は透孔をもつ脚部小片で覆土出土。稻荷前VIII期に比定される。



第61図 第27号住居跡(L=31.20m)



第62図 第27号住居跡出土遺物

第27号住居跡出土遺物観察表(第62図)

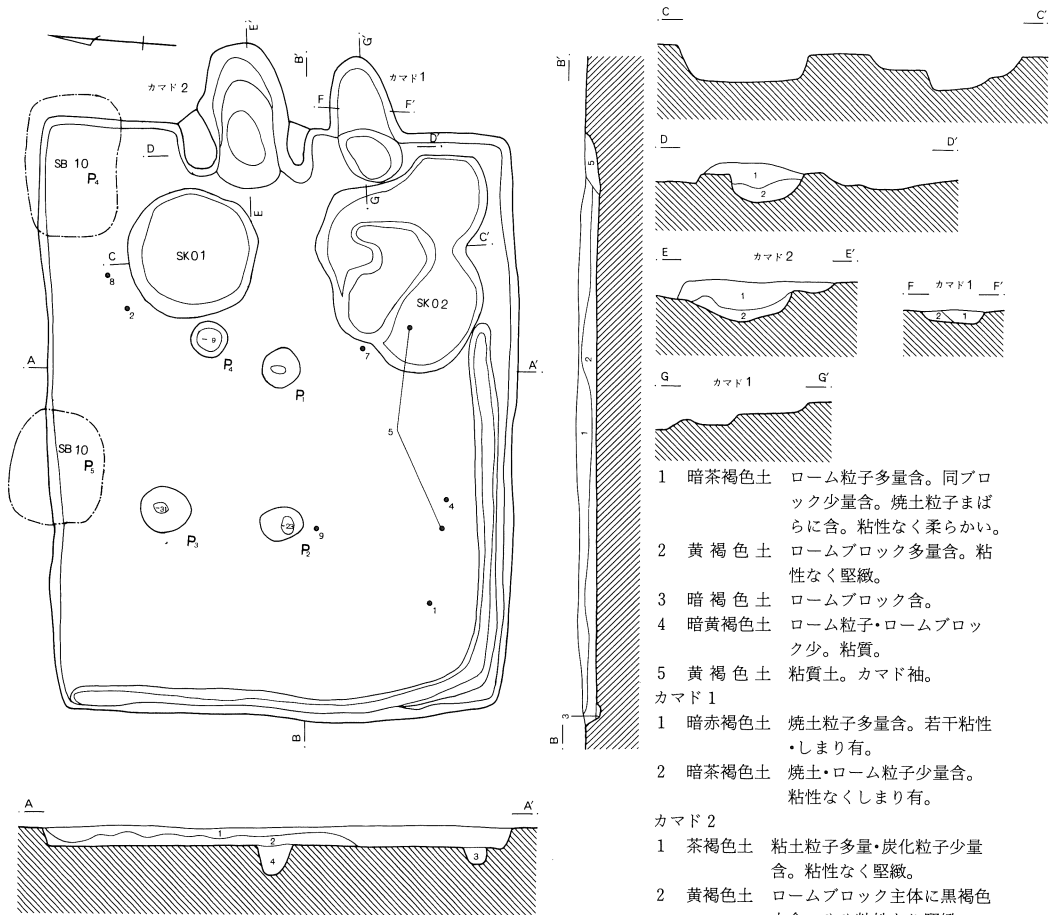
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.8	3.6	7.4	A B D	B	灰	100%	№76。床面。口唇部磨滅。
2	坏	12.8	3.7	7.4	A C D	B	灰	85%	№77。覆土。
3	坏	12.3	3.7	7.5	A B	A	青灰	75%	№59, 60, 61。床面。
4	坏	12.6	3.5	7.5	A B C D	B	灰	60%	№75。床面。口唇・底部内面磨滅。
5	坏	13.3	3.7	8.2	A C	B	灰白	95%	№74。床面。
6	坏	(13.2)	3.4	7.6	A C	C	灰白	25%	№51, 62。覆土。
7	碗	15.0	5.0		A C D	B	灰	45%	№7, 8, 9。覆土。
8	円面硯		4.7	(17.0)	A C	B	灰	5%	№45。覆土。
9	甕	(17.4)	3.1		A B	B	黒褐	10%	№63。覆土。
10	甕	(34.0)	5.5		A B D	B	青灰	10%	№22, 72。SK01内。

第28号住居跡(第63図)

Q-8・9区に位置する。第10号掘立柱建物跡と重複し、本住居が切られていた。遺存状況は比較的良好である。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.68m、短軸3.74m、深さ0.15mを測る。主軸方位はN-87°-Eを示す。

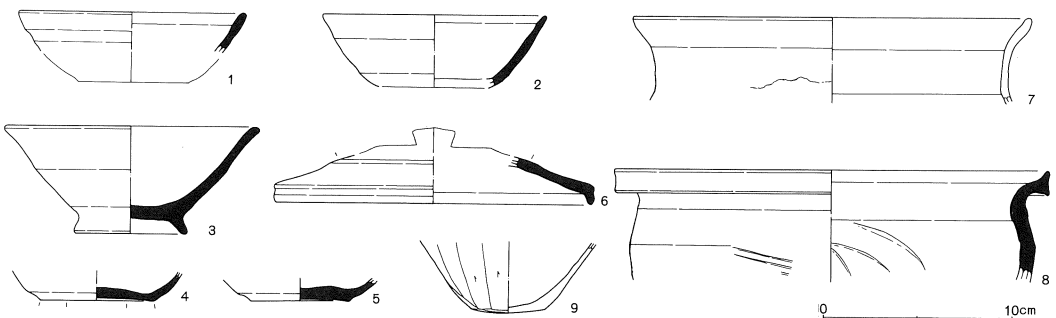
床面は概ね平坦である。覆土は2層に分割されるが、ロームの混入が多い。カマドは東壁に2基設置される。覆土の状況から、南側のカマド1が古く、北側のカマド2が新しいものと考えられる。カマド1には袖は残存せず、燃燒部の掘り込みも浅い。カマド2には袖に相当する部分に僅かに地山に類似した褐色土が堆積していたが明瞭な袖とは異なる。燃燒部の掘り込みは比較的深い。土壌は2基検出された。第1号土壌は円形を呈し、上層に焼土・灰を多量に含む灰溜め状の遺構と推定される。第2号土壌は不整形で掘方と考えられる。ピットは4本検出されたが、遺構に伴うか否か不明である。壁溝は西壁から南壁にかけて、鍵の手状に巡り全周しない。

出土遺物は71点検出された。土師器は全て甕の破片で20点を数え、口縁部「コ」の字形を呈する。第64図3の須恵器高台坏は確認面から出土したもので混入の可能性が高い。白色針状物質を含まず、口唇部と底部内面が磨滅している。稻荷前Ⅻ～ⅩⅢ期頃に比定される。



第63図 第28号住居跡(L=31.10m)

0 2m



第64図 第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡出土遺物観察表(第64図)

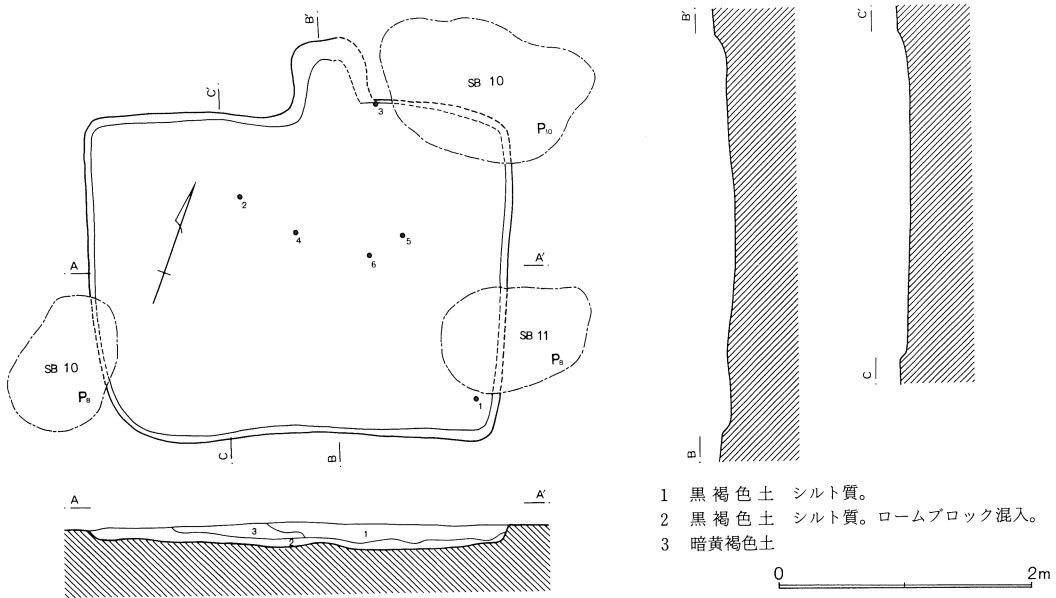
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.0)	2.1		A B C	A	灰	20%	№61.覆土。
2	坏	(11.8)	3.8		A B C D	B	褐灰	20%	№3.覆土。
3	高台坏	13.2	5.65	5.8	A E	C	灰	35%	確認面。口唇部・底部内面磨滅。
4	坏		1.6	(6.0)	A B C	A	青灰	30%	№38.覆土。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
5	坏		1.2	5.2	A B C D	B	灰	50%	№37, 63。覆土。
6	蓋	(16.8)	2.5		B C	A	暗青灰	15%	確認面。
7	甕	(21.0)	4.5		B E F	B	橙	15%	№42。覆土。
8	鉢	23.0	5.9		A B C	B	灰白	5%	№6。床面。
9	甕		3.8	4.0	B E F	A	明赤褐	25%	№69。覆土。

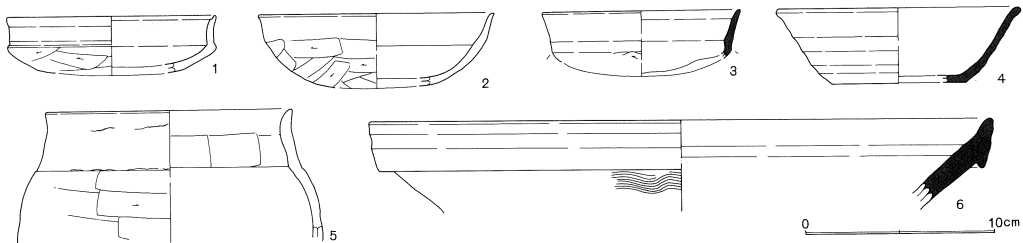
第29号住居跡(第65図)

P・Q-8・9区に位置する。第30号住居跡の東に近接して位置する。第10・11号掘立柱建物跡と重複するが、当初掘立柱建物に気付かず住居を優先して調査したため、残念ながら新旧関係は把握されていない。おそらく2棟の掘立柱建物よりも、本住居が古いものと推定される。カマド周辺に攪乱を受け、遺存状態は極めて悪い。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.38m、短軸2.54m、深さ約0.05mを測る。主軸方位はN-13°-Wを示す。

平坦な床面は検出されず、全体に凹凸が顕著であった。覆土は3層に分かれ、特に人為的堆積を示す様子は認められない。



第65図 第29号住居跡(L=31.20m)



第66図 第29号住居跡出土遺物

カマドは北壁に位置するが、一部攪乱を受け堆積状況は不明である。底面の掘り込みはみられず、床面からフラットに続く。袖も検出されなかった。ピット、壁溝等の施設は存在しない。

出土遺物は30点ある。9世紀代と推定される遺物を若干含むが、主体は7世紀後半頃と考えられる。第66図3はカマド横の床面から出土した小ぶりの須恵器坏小片である。底部は手持ち篋削り調整され、産地は不明。1・2を基準に稻荷前IV～V期に比定しておきたい。

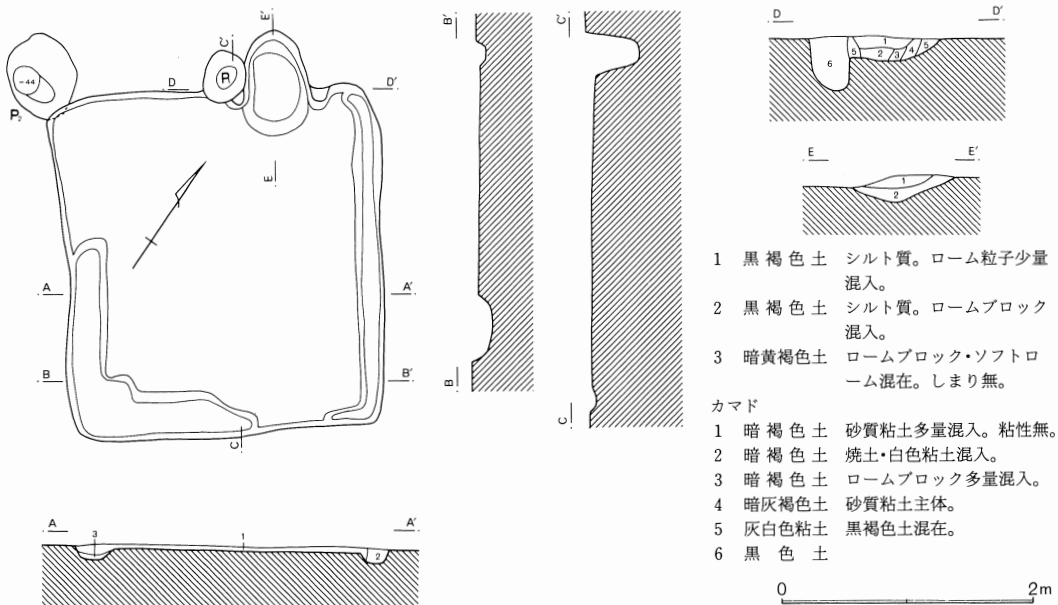
第29号住居跡出土遺物観察表(第66図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	3.0		A B E F	A	橙	10%	No.12。床面。
2	坏	12.4	3.9		A E F	B	浅黄橙	25%	No.30。覆土。
3	坏	(10.0)	2.6		A B	A	灰	10%	No.29。床面。
4	坏	(12.6)	4.0	(7.0)	A D	B	暗青灰	20%	No.21。覆土。
5	小型甕	(13.0)	7.0		A C E F	B	褐	15%	No.1。床面。
6	甕	33.0	4.8		A C D	A	灰	5%	No.18。床面。

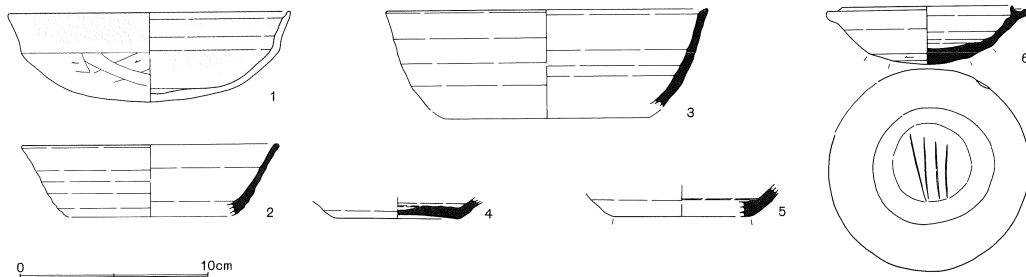
第30号住居跡(第67図)

P・Q-8区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸2.76m、短軸2.56m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-35°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土が堆積していたが、埋没状況は明らかではない。カマドは北壁のコーナー寄りに構築される。P₁に一部攪乱されるが、燃烧部は皿状を呈し壁外にも延びる。袖は僅かに褐色系粘土が残存するだけである。壁溝は部分的に検出された。ピットは壁にかかって2本検出されたが、住居に伴うものではない。出土遺物は33点と少なく、7世紀から9世紀代の遺物が混在する。住居の時期は確定できないが7世紀代であろうか。第68図6は東海産と推定され、底部に4条の沈線(へら記号)が描かれる。



第67図 第30号住居跡(L=31.20m)



第68図 第30号住居跡出土遺物

第30号住居跡出土遺物観察表(第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.8	4.7		A C E	B	明褐	25%	覆土。
2	坏	(13.6)	3.7		A C E	B	灰白	20%	覆土。
3	碗	(17.0)	5.2		A B C	B	灰	10%	覆土。
4	坏		1.1	(6.6)	A B C	B	灰	40%	覆土。
5	坏		1.9	(7.2)	A B C	C	灰	20%	覆土。
6	坏	9.0	3.0		A G	A	灰	95%	覆土。東海産か。底部にヘラ記号あり。

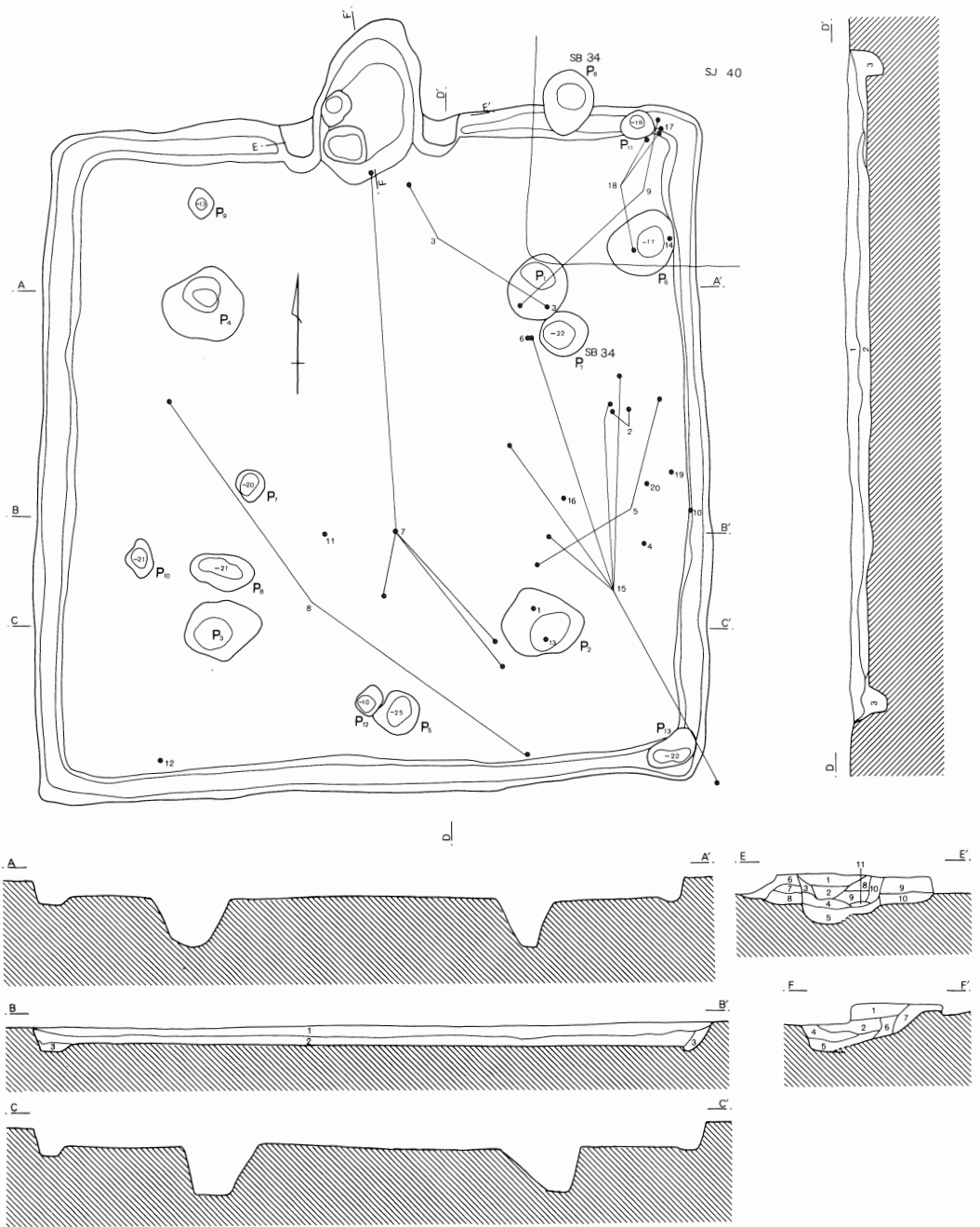
第31号住居跡(第69図)

P・Q-7・8区に位置する。第I群中心部に位置する3軒の大型住居跡の一つで最も東側に所在する。重複遺構との新旧関係は、第39・40号住居跡、第3号溝跡よりも古い。第34号掘立柱建物跡との先後関係は明らかにできないが、本住居の方が古いものと判断される。第102号土壌との新旧関係は不明である。形態は長方形を呈し、規模は長軸5.80m、短軸5.64m、深さ0.10~0.15mを測る。主軸方位はN-1°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。カマド前面から住居中心部は堅く踏み締められていたが、壁際は軟弱であった。覆土は暗褐色土系で構成され、概ね自然堆積と考えられる。

カマドは北壁中央部に設置される。燃烧部は皿状に掘り込まれ、袖は褐色系の砂質粘土が用いられる。ただ、袖の遺存状態はあまりよくない。ピットは13本検出された。P₁~P₄は支柱穴に相当する。遺物の出土状況からP₆は遺構に伴うものと考えられるが、他のピットに関しては遺構に伴うか否か不明である。壁溝はカマドを除いて全周する。

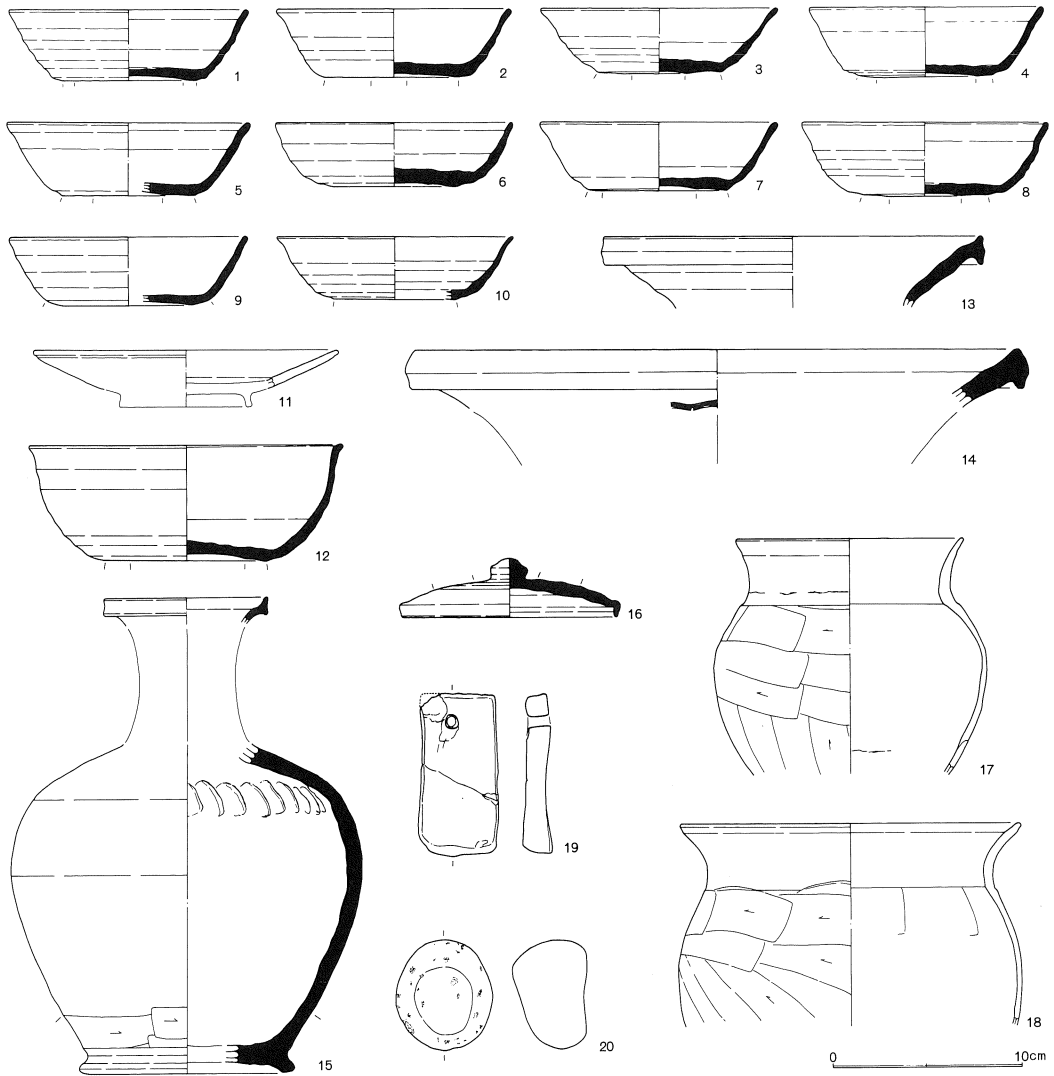
出土遺物は土器と石製品、礫がある。礫は多量に検出され、遺物高について観察すると、東壁側が高く中央に向かって低くなる傾向が認められる。住居埋没過程に、主に東壁側から投棄されたものであろう。なお、P₁~P₄とP₆は礫と遺物が流入しており、住居廃絶時には柱は抜かれていたものと考えられる。土器は155点検出され、器種としては土師器坏、甕、小形甕、台付甕、須恵器坏、碗、蓋、甕、壺類と緑釉皿があり、須恵器坏が主体を占める。礫とともに投棄されたと推定される遺物が大半を占める。図示したなかでは、第70図4の須恵器坏が床面に接する位置から検出された程度で、他は覆土から出土したもので直接住居に伴うものとはいえない。第70図11は緑釉段皿で内面に弱い稜が付き、明らかに混入であるが、他の土器には床面、覆土を問わず大きな時期差はない。稻荷前IX期に比定される。



- | | | |
|--------------------|--------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 シルト質。しまり有。 | 2 黒褐色土 焼土・ローム多量混入。 | 8 暗褐色土 ロームブロック・砂質粘土・焼土の混合土。 |
| 2 暗褐色土 ローム粒子少量混入。 | 3 暗黄褐色土 ローム砂質焼土多量混入。 | 9 暗褐色土 6層に近似。 |
| しまり無。 | 4 暗褐色土 ローム・炭化物少量混入。 | 10 暗黄褐色土 ロームブロック・焼土多量混入。しまり有。 |
| 3 暗褐色土 ローム・円礫少量混入。 | 5 暗褐色土 黒褐色土ブロック・ローム多量混入。 | |
| カマド | 6 暗褐色土 炭化物焼土混入。 | 11 焼土 |
| 1 暗褐色土 焼土・ローム多量混入。 | 7 暗褐色土 ロームブロック・粘土混在。 | |

0 2m

第69図 第31号住居跡(L=31.20m)



第70図 第31号住居跡出土遺物

第31号住居跡出土遺物観察表(第70図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.5)	3.7	(7.0)	ABCDE	B	暗青灰	35%	№506。P ₂ 内覆土。口唇部磨滅。
2	坏	12.3	3.6	7.1	ACD	A	灰	60%	№69, 426。覆土。
3	坏	(12.4)	3.5	6.5	AC	A	青灰	60%	№525, 238。P ₁ 内。底部「×」印のヘラ記号。
4	坏	12.2	3.7	7.1	ACDF	A	灰	70%	№435。床面。
5	坏	(12.7)	3.9	(7.0)	ABCD	B	灰	20%	№107, 404。覆土。
6	坏	(12.4)	3.4	6.6	ACD	B	灰	40%	№492。覆土。口唇部。底部内面磨滅。
7	坏	12.4	3.6	7.2	ACD	A	灰	80%	№284, 292, 301, 321, 324。覆土。
8	坏	12.8	3.9	6.6	ACDF	B	灰	50%	№451, 135。覆土。器形歪みあり。
9	坏	(12.5)	3.6	6.6	ABC	A	暗青灰	20%	№491, 489。覆土。体部下端ヘラ削り。
10	坏	(12.5)	3.3	(6.6)	AC	A	暗青灰	15%	№80。覆土。
11	緑釉皿	(16.0)	2.05		B	A	灰白	5%	№283。覆土。段皿。内皿に弱い段がつく。
12	埴	16.4	6.1	8.4	ACD	A	暗青灰	80%	№476。床面。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
13	甕	(20.0)	3.8	10.0	AB	A	灰	25%	No.501。P ₂ 内覆土。
14	甕		3.1		ABCE	A	青灰	5%	No.17。P ₆ 内。
15	長頸瓶	8.6			ABCD	B	暗青灰	40%	No.102, 433, 492。覆土。
16	蓋	11.3	3.1		ACD	B	灰	60%	No.438。P ₂ 内。
17	台付甕	12.0	12.5		ABDEF	A	橙	25%	No.5。覆土。
18	甕	(18.0)	10.7		ABDEF	B	橙	30%	No.6, 490, 519。覆土
19	提碇	全長8.6cm。重量80g。凝灰岩製。							No.79。覆土。よく使用され平滑となる。
20	軽石	長径5.8cm。短径5.1cm。厚さ3.9cm。重量60g。							No.430。覆土。上・下面は平滑な面をもつ。

第32号住居跡(第71・72図)

Q-6・7区に位置する。第38号住居跡、第11号井戸跡、第131号土壌と一部重複し、本住居が最も古い。形態は長方形を呈し、規模は長軸7.20m、短軸6.60mを測る大型住居跡で、深さは0.10~0.15m程である。主軸方位はN-2°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、東壁側では凹凸が顕著であった。カマド前面から住居中心部は比較的堅く、壁際はやや軟弱な部分が見られた。覆土は小礫混じりの暗褐色土で構成されるが、中央部が床面付近まで削平されていたため、埋没状況は明らかではない。

カマドは北壁の中央部に設置される。燃焼部は皿状に凹み、段をもって煙道部に続く。図面を誤って紛失したため、堆積状況は不明である。袖は褐色の砂質粘土で構築されるが、遺存状況は良くない。ピットは13本検出された。P₁~P₄は支柱穴である。それ以外のピットは伴うか否か確認できなかった。壁溝は南西コーナーを除き全周する。貯蔵穴は存在しない。第131号土壌は住居内に位置し、深さ約2mを測る井戸状の遺構である。下面には礫を多量に包含するが有機質土の堆積はみられなかった。住居には伴わない。

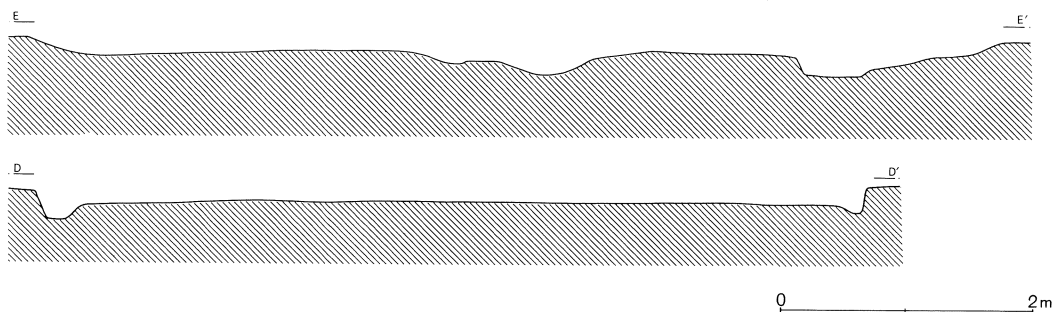
遺物は74点検出された。第73図1は壁溝上面の床面に相当する位置から出土、6はP₁内から出土した。柱を抜き取った後に落込んだものと推定される。10・11の甕はカマド周辺から出土し、接合しないが同一個体の可能性がある。3・4の土師器坏は覆土から出土し混入の疑いが強いものと考えられる。稻荷前IX期に比定される。

第32号住居跡出土遺物観察表(第73図)

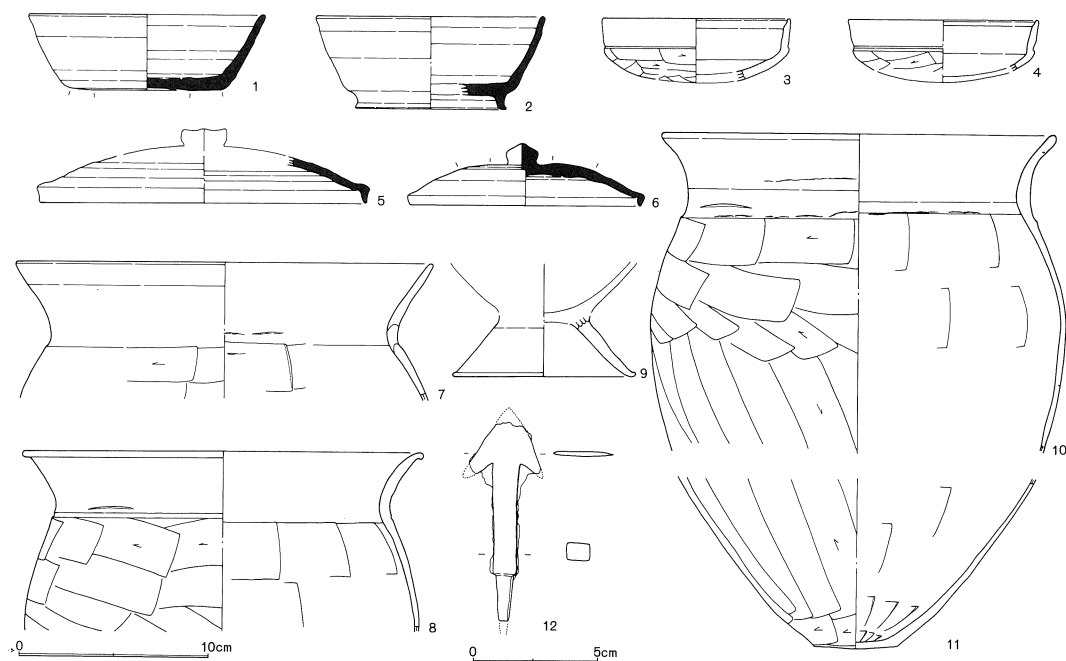
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.4	4.0	7.9	ABC	B	灰白	70%	No.144。床面。
2	高台坏	(12.0)	4.9	7.8	AC	A	青灰	35%	覆土。底部回転ヘラケズリ。
3	坏	9.9	3.3		ACE	A	明赤褐	50%	覆土。
4	坏	(10.0)	2.7		A	A	にぶい赤褐	20%	覆土。
5	蓋	17.3	2.45		ABC	B	灰白	15%	No.58。覆土。
6	蓋	12.2	3.3		ACD	A	暗青灰	90%	No.146, 148。P ₁ 内。
7	甕	(22.0)	7.2		ABF	A	橙	10%	No.128, 136。カマド内。
8	甕	(21.0)	9.5		ABEF	B	橙	25%	No.111。カマド内覆土。
9	台付甕		3.2	9.6	ABC	B	明赤褐	15%	覆土。
10	甕	(20.8)	16.8		AEF	A	橙	25%	No.124。カマド内覆土。
11	甕		9.0	4.5	AEF	A	にぶい褐	15%	No.3, 120。カマド内覆土。
12	鉄 鋏	残長7.8cm。重量20g。No.89。床面。短頸関筥被腸扶平造正三角形式。							



第71图 第32号住居迹(1)(L=31.30m)



第72図 第32号住居跡(2)(L=31.30m)



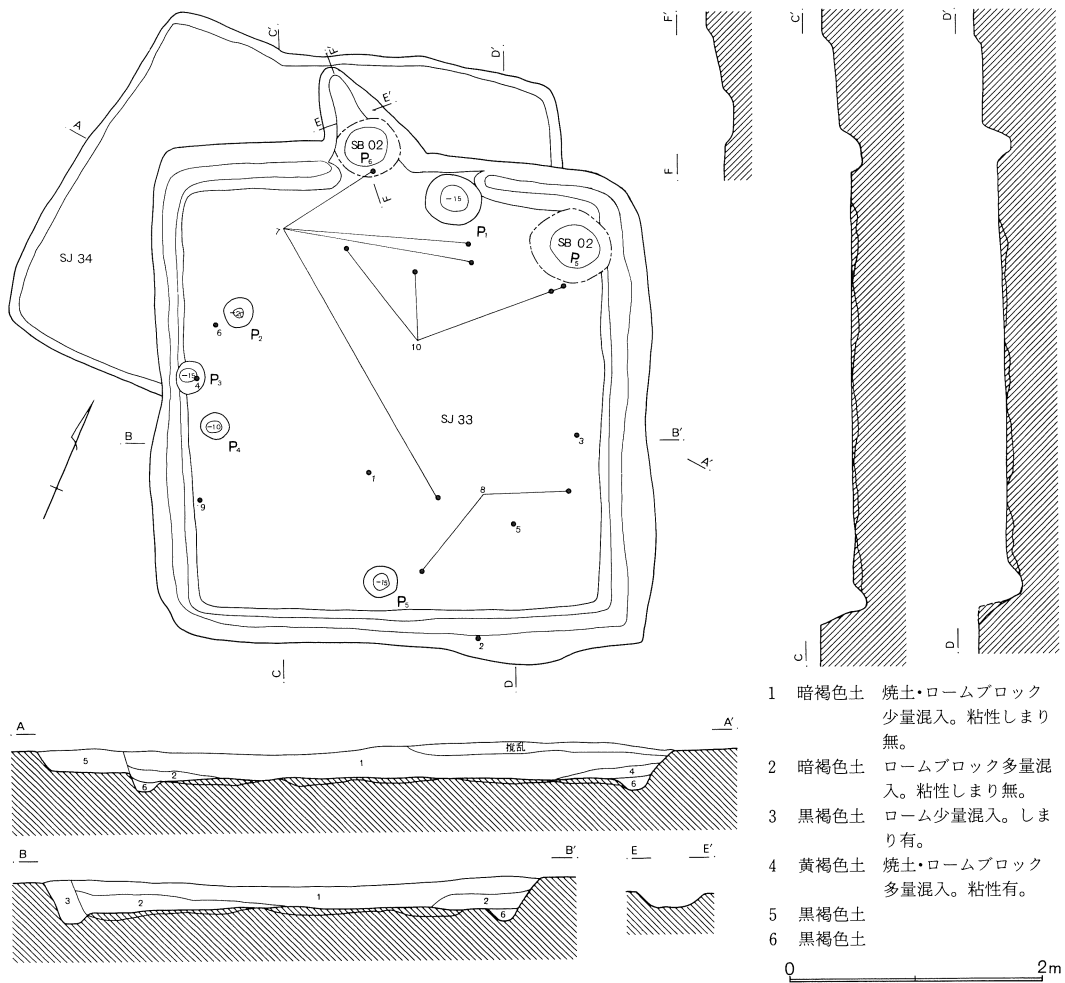
第73図 第32号住居跡出土遺物

第33号住居跡(第74図)

調査区西寄りのQ-5・6区に位置する。第34号住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は前者よりも新しく、後者よりも古い。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸4.02m、短軸3.96m、深さ約0.20mを測る。主軸方位はN-24°-Wを示す。

床面は凹凸をもち一定しない。覆土上面に攪乱を受ける。堆積環境にはロームブロックの含有量が多く、人為的影響が作用した可能性が高い。カマドは北壁に設置される。煙道部は壁に対して斜めに延びている。燃焼部中央に第2号掘立柱建物跡の攪乱を受け、堆積状況の詳細は不明である。袖を構築した粘土は検出されなかった。住居廃絶時に取り去られたものであろうか。壁溝は全周する。覆土の状況は不明である。ピットは5本検出されたが、確実に支柱穴と考えられるものはない。貯蔵穴は存在しない。

出土遺物は53点ある。覆土上層から下層まで満遍なく出土している。第75図4の灰釉碗は混入である。7はほぼ床面と思われる位置に散在していた。稻荷前V期に比定される。

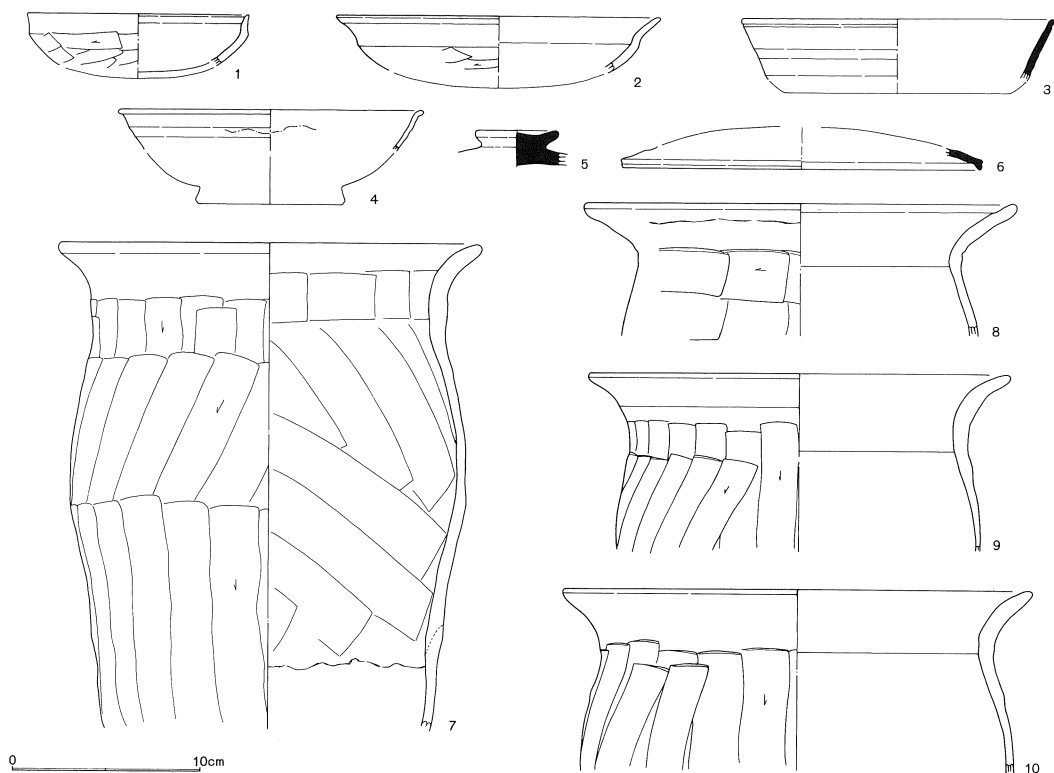


- 1 暗褐色土 焼土・ロームブロック少量混入。粘性しまり無。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量混入。粘性しまり無。
- 3 黒褐色土 ローム少量混入。しまり有。
- 4 黄褐色土 焼土・ロームブロック多量混入。粘性有。
- 5 黒褐色土
- 6 黒褐色土

第74図 第33・34号住居跡(L=31.40m)

第33号住居跡出土遺物観察表(第75図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.6)	2.7		BC	B	橙	20%	№132。覆土。
2	皿	(17.0)	2.9		AB	B	にぶい褐	10%	№20。覆土。
3	坏	16.4	3.2		ABC	A	灰白	20%	№46。覆土。口唇外面に沈線。
4	灰釉碗	(16.0)	2.2		BG	A	灰白	5%	№121。覆土。
5	蓋		1.3		AB	A	灰白	100%	№11。覆土。
6	蓋	(18.8)	1.1		AC	B	灰白	5%	№152。覆土。
7	甕	(22.0)	25.7		ABE	A	にぶい橙	25%	№24, 65, 72, 75。覆土下層。
8	甕	(22.6)	7.0		ABE	B	にぶい褐	20%	№3, 23。覆土。
9	甕	(22.0)	9.3		BEF	A	にぶい橙	20%	№137。覆土。
10	甕	24.6	9.6		EF	A	にぶい褐	40%	№57, 62, 78, 147。覆土。



第75図 第33号住居跡出土遺物

第34号住居跡(第74図)

Q-5区に位置する。第33号住居跡と重複し、本住居跡が古い。形態は不整形を呈する。特に北壁が大きく屈曲し、あるいは2軒重複していた可能性もあるが調査では捉えられなかった。規模は長軸3.42m、短軸2.88m、深さ0.15mを測る。主軸方位は西壁を基準にすると、N-6°-Eを示す。

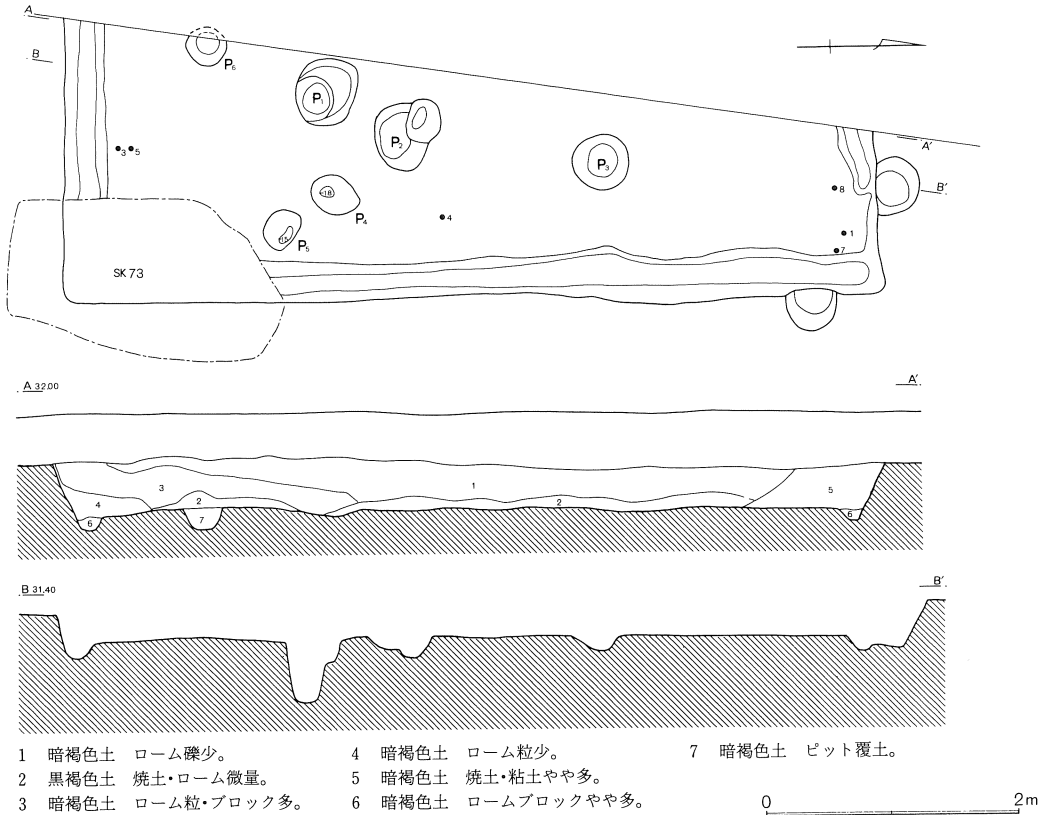
床面はやや起伏をもち、全体に軟弱でロームブロックが浮き出した状態であった。覆土は黒褐色土で構成される。カマドを始めピット、壁溝等の施設は検出されなかった。出土遺物はないため、時期も明らかにできない。

第35号住居跡(第76図)

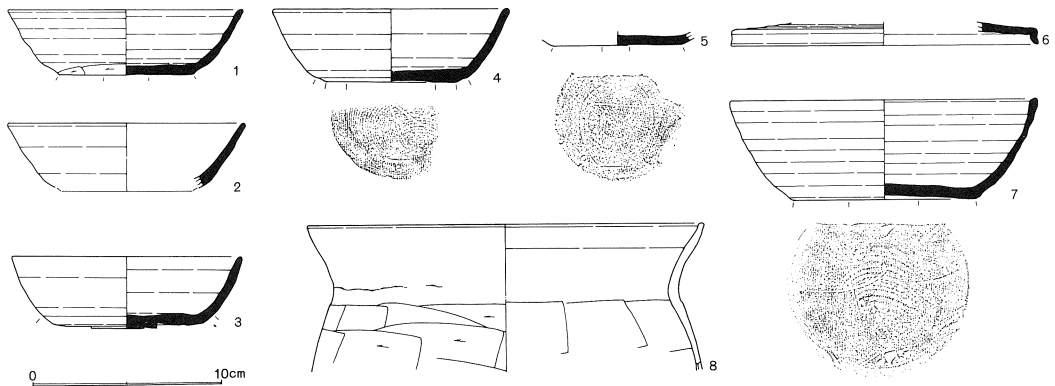
P-5区に位置する。大部分は調査区外に延びるため、全容は不明である。また南東コーナーは第73号土壌により破壊されている。形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸6.46m、短軸1.80m、深さ0.20m前後を測る。主軸方位はN-1°-Wを示す。

床面はやや起伏をもつが全体に堅く踏み締められている。覆土の堆積状況は自然堆積と推定されるが、一部ロームブロックを多量に含む層が見られた(第3層)。壁溝は北壁コーナー付近で一部途切れる箇所がある。

カマドと貯蔵穴は検出されていない。ピットは6本検出された。P₁は最も深く、主柱穴に相当しよう。土層観察から柱を抜き去った痕跡が認められた。P₆は上面に床面がのっている。他のピット



第76図 第35号住居跡



第77図 第35号住居跡出土遺物

は遺構に伴わない可能性が高いものと考えられる。

出土遺物は30点ある。須恵坏は全て底部調整が施される。第77図1と8は床面出土である。4・5・7の底部にはへら記号が刻される。また3の底部は全面回転へら削りまたはへら切りの可能性もあり階段状の段差が生じている。その他、中世の鉢と古墳時代前期の甕の破片が出土した。稲荷前IX期に比定される。

第35号住居跡出土遺物観察表(第77図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.4)	3.4	7.1	A C	A	オリーブ灰	50%	№6。床面。体部下端ヘラケズリは浅い。
2	坏	(12.4)	3.4		A B C	C	灰オリーブ	30%	覆土。
3	坏	12.0	3.8	8.0	A B C D	A	オリーブ灰	100%	№1。覆土。体部下端・底部回転ヘラケズリ。
4	坏	(12.4)	3.8	6.9	A C	B	にぶい橙	35%	№4。覆土。底部外面にヘラ記号あり。
5	坏		0.7	6.8	A B C	A	褐灰	70%	№2。覆土。底部外面にヘラ記号あり。
6	蓋	16.2	1.2		A C	A	灰	5%	覆土。
7	埴	(16.2)	5.2	9.6	A C	B	灰	50%	№5。覆土。底部外面にヘラ記号あり。
8	甕	21.0	7.8		A B E	B	橙	35%	№8。床面。

第36号住居跡(第78図)

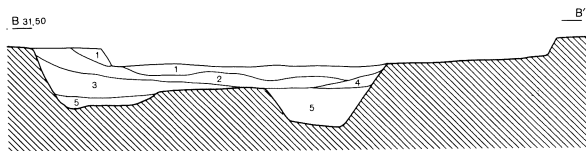
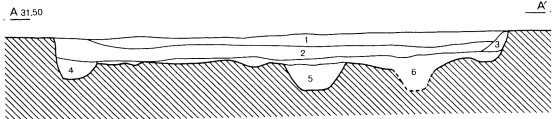
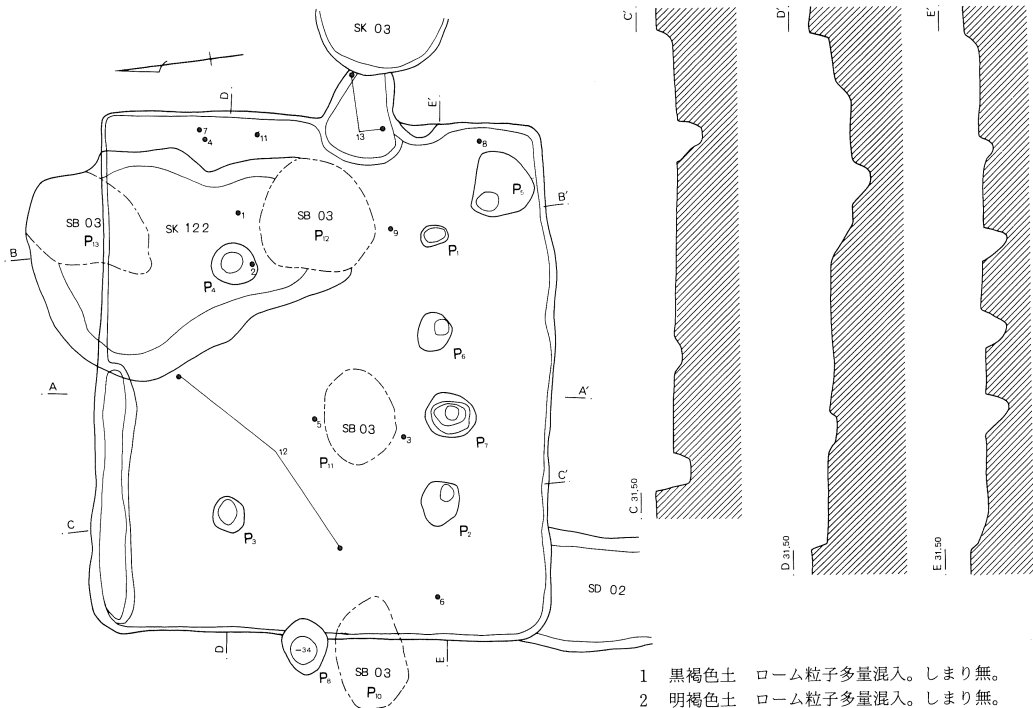
P-5・6区に位置する。第2号溝跡により上層を一部攪乱される。また、第3号掘立柱建物跡、第3号土壇、第122号土壇と重複する。遺構間の先後関係は土層観察により、第3号掘立柱建物跡(古)→第122号土壇→第36号住居跡→第3号土壇(新)と考えられる。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.10m、短軸3.64m、深さ0.15～0.20mを測る。主軸方位はS-82°-Eを示す。

床面は概ね平坦で貼床されている。覆土は自然堆積と推定される。カマドは東壁に設置され、先端を第3号土壇に破壊されている。左袖には角礫が据えられていた。また、燃烧部にも類似した礫が2個残されていたが原位置を留めたものではない。同様にカマド施設として用いられたものと推定される。燃烧部は壁外に位置し、掘り込みは浅い。右袖には若干粘土が残存するが明確な袖とは異なる堆積状況であった。壁溝は北壁で一部確認されたのみで、全周しない。ピットは8本検出された。P₁～P₄は位置的に支柱穴に対応するが、P₁・P₃が浅く断定できない。P₅～P₇に関しては伴う可能性も残されている。

出土遺物は54点検出された。須恵器供膳器を主体に土師器甕類、灰釉埴、緑釉皿の破片を含む。第79図1・6・7・9は床面から、13はカマド内から出土した。その他多量の礫が、覆土内に散乱した状態で検出されている。稻荷前XIII期に比定される。

第36号住居跡出土遺物観察表(第79図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.4)	3.2		A C	B	灰白	15%	№69。床面。
2	坏	(12.5)	4.25	(5.6)	B C	C	灰白	30%	№68。覆土。
3	埴		2.4	(9.0)	A C D	B	灰	40%	№38。覆土。
4	埴	15.8	6.0	8.0	A C D	A	暗青灰	85%	№86。覆土。口唇・底部内面磨滅。
5	坏		0.9	5.5	A C D	B	灰	95%	№31。覆土。
6	緑釉皿		0.9		J	A	灰	5%	№4。床面。硬質。0-53号窯式か。
7	蓋	16.2	3.9		A C	B	灰	45%	№87。床面。歪みあり。
8	蓋	(16.6)	3.7		A C	A	灰	25%	№103。覆土。
9	瓶	(16.0)	3.1		A C	A	灰	15%	№62。床面。
10	甕	(20.0)	8.8		A B E	A	橙	25%	覆土。
11	小型甕	(14.2)	4.5		B E I	B	明赤褐	40%	№90。覆土。
12	小型甕	14.0	6.6		A D E F	B	赤褐	25%	№14, 24。覆土。
13	甕	(19.0)	6.6		B D E	B	にぶい橙	15%	№120, 125。カマド内。

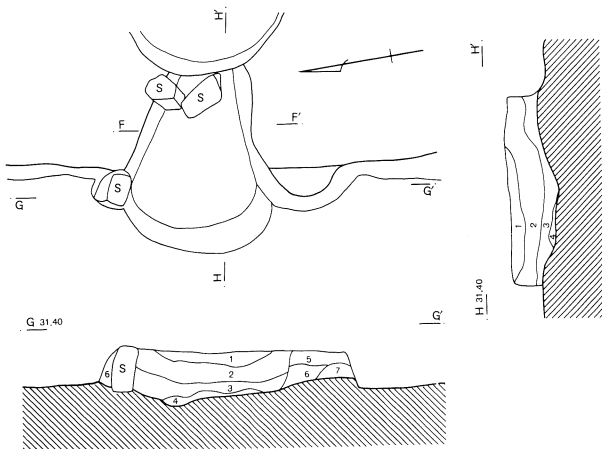


- 1 黒褐色土 ローム粒子多量混入。しまり無。
- 2 明褐色土 ローム粒子多量混入。しまり無。
- 3 褐色土 サラサラしてしまり無。ローム粒子少量混入。
- 4 暗褐色土 ロームブロック混入。
- 5 暗褐色土 ロームブロック多。
- 6 褐色土 ロームブロック多。掘方埋土。

カマド

- 1 暗褐色土 ローム混入。しまり無。
- 2 暗褐色土 砂礫・焼土少量混入。
- 3 暗褐色土 砂礫・焼土・炭化物含。砂質粘土混入。
- 4 暗褐色土 黒褐色土と焼土の混在土。

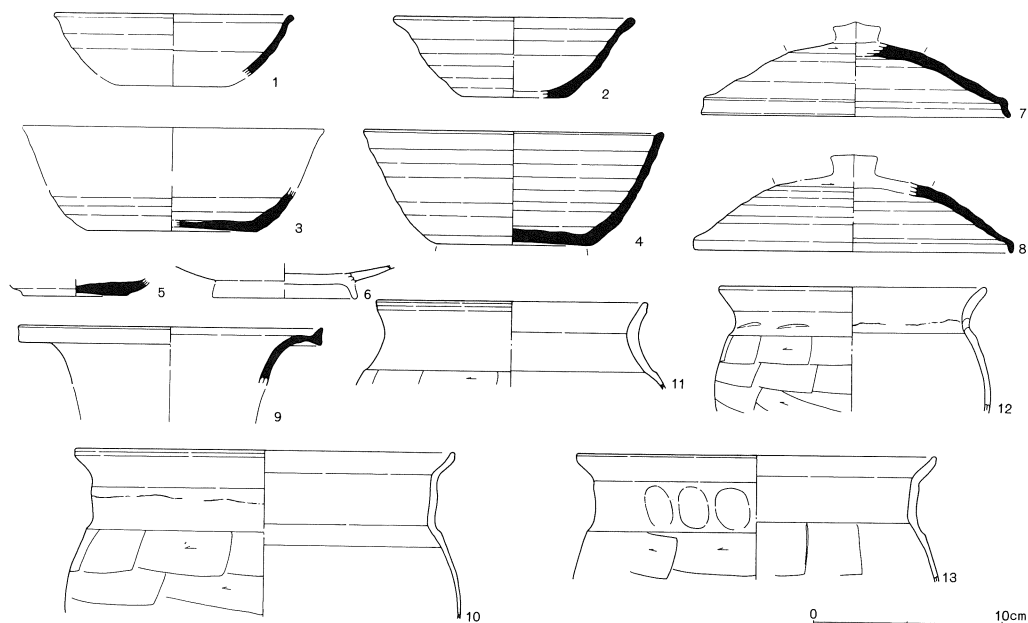
0 2m



- 5 砂質粘土 ロームブロック混入。
 - 6 砂質粘土 ロームブロック混入。
 - 7 黄褐色土 ロームブロック主体。
- SK122
- 1 暗褐色土 焼土・ローム粒子多量混入。しまり有。
 - 2 暗褐色土 焼土・ローム粒子混入。しまり有。
 - 3 暗褐色土 焼土・ロームブロック混入。しまり有。
 - 4 褐色土
 - 5 黒色土とロームブロックの混土层。

0 1m

第78図 第36号住居跡・カマド



第79図 第36号住居跡出土遺物

第37号住居跡(第80図)

P-6・7区に位置し、第31・32号住居跡とともに大型住居群の一角を形成する。第38号住居跡と重複し、本住居の方が古い。平面形態は整った方形を呈し、規模は長軸6.48m、短軸6.30m、深さ0.15~0.20mを測る。主軸方位はほぼ座標北を指す。

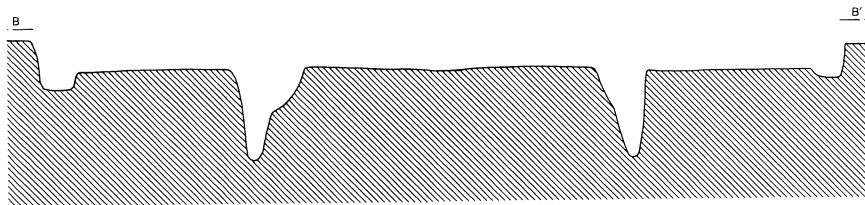
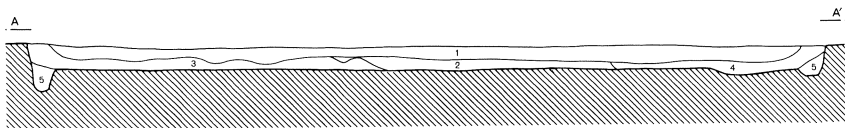
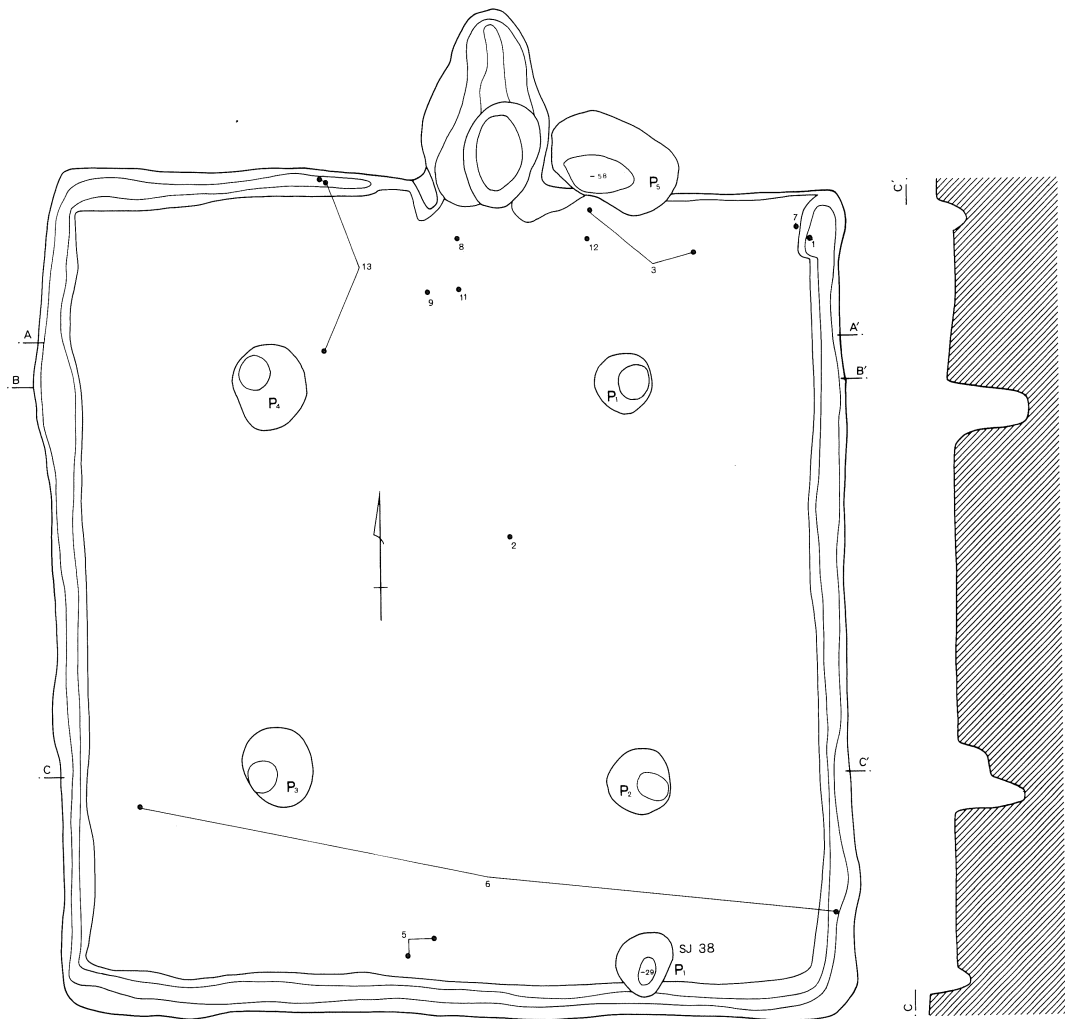
床面はほぼ平坦で全体的に堅い。覆土にはロームブロックが比較的多量に含まれ、堆積環境にある程度人為的影響が働いた可能性も考慮される。

カマドは北壁中央部に設置される。燃烧部は皿状に掘りくぼめられ、壁は急角度で立ち上がる。カマド構築材には、白色粘土が多量に用いられていた。第5層上面が火床面に相当しようか。袖は貧弱で、灰白色粘土が僅かに認められたにすぎない。ピットは5本検出された。P₁~P₄が支柱穴と考えられ、住居プランに沿って均等に配置される。P₅はカマド脇に位置するが、遺構に伴うものではない。壁溝はカマド東側の北壁を除き、全周する。貯蔵穴は存在しない。

出土遺物は44点検出された。器種としては土師器坏、埴、甕、台付甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、壺があるが、土師器坏類(第82図9~11)は混入と思われる。底部再調整される須恵器坏類が主体を占めている。第82図1・7は北東コーナー部の床面から、3はカマド前面の床面からそれぞれ出土した。稲荷前IX期新段階に比定される。

第37号住居跡出土遺物観察表(第82図)

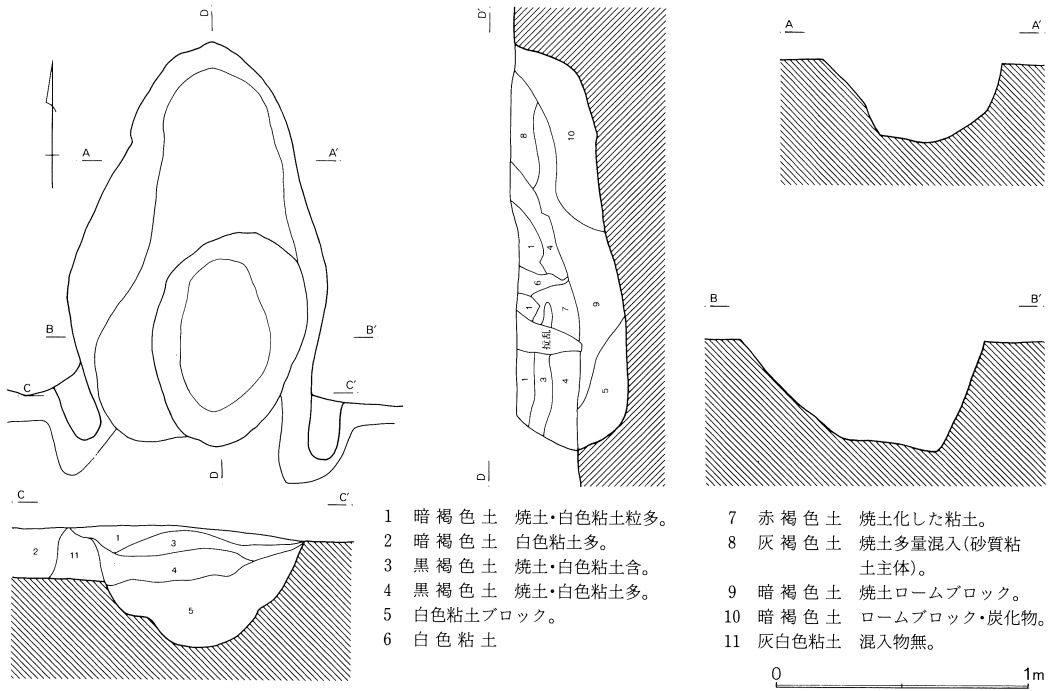
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	高台坏	11.2	4.2	7.0	ABCD	A	灰	70%	№10.覆土。
2	坏	(12.4)	3.7	7.2	AC	B	灰白	30%	№57.覆土。
3	坏	12.8	4.2	7.6	ABCDE	B	灰白	90%	№6, 124.カマド内。
4	坏	(12.8)	3.6	(7.4)	AC	B	暗青灰	20%	カマド掘方。



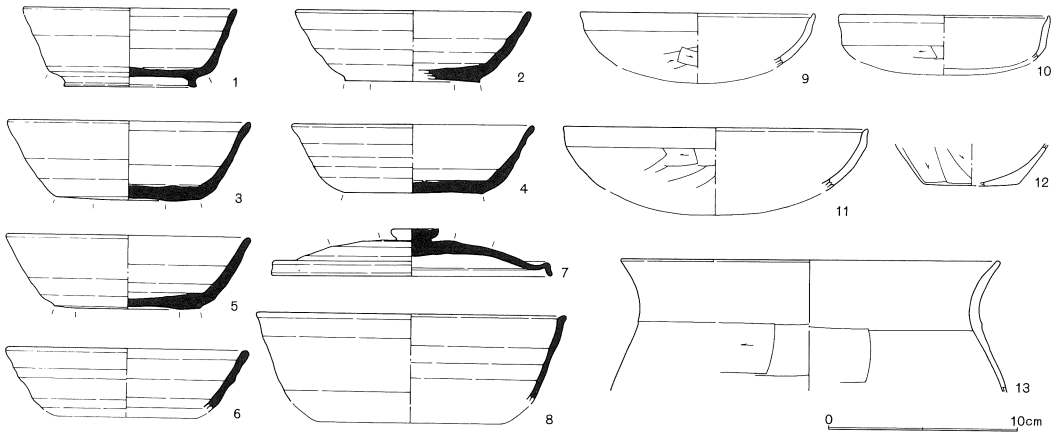
- | | | | | | |
|---|------|--------------------------|---|-------|-------------------|
| 1 | 暗褐色土 | ロームブロック・焼土の細
粒子多量混入。 | 3 | 暗褐色土 | 細砂粒子多量含。 |
| 2 | 暗褐色土 | ロームブロック・焼土・砂質
粒子多量混入。 | 4 | 黒褐色土 | ソフトローム少量混入。 |
| | | | 5 | 暗黄褐色土 | ロームブロック・ソフトローム混在。 |

0 2m

第80図 第37号住居跡(L=31.40m)



第81図 第37号住居跡カマド(L=31.40m)



第82図 第37号住居跡出土遺物

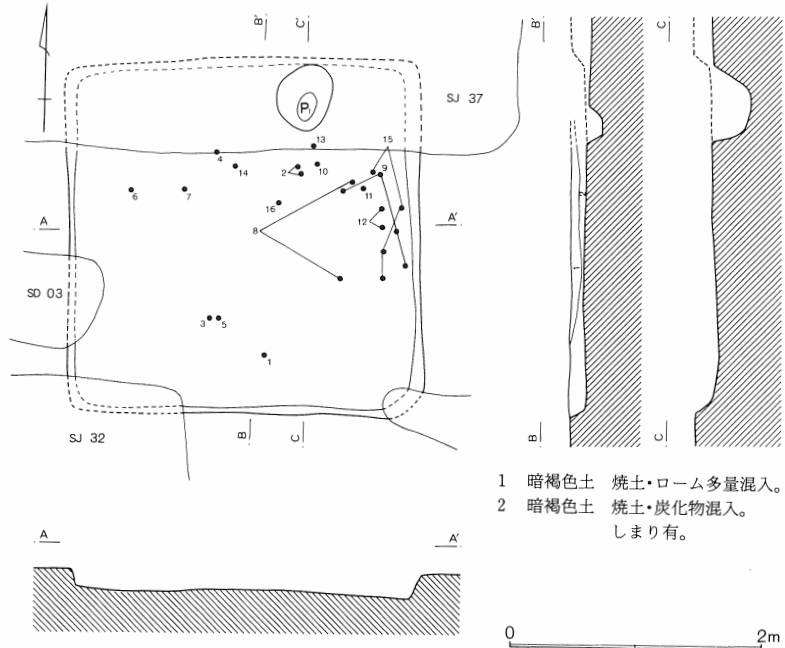
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
5	坏	(12.8)	3.9	7.8	ACE	B	灰	35%	№91, 92. 覆土。
6	坏	(12.6)	3.3		AC	B	灰白	45%	№115, 116. 覆土。
7	蓋	14.8	2.5		AC	C	灰	100%	№9. 床面。
8	埵	(16.2)	4.7		ABC	B	灰	10%	№19. 覆土。
9	坏	(12.3)	2.8		AB	B	橙	10%	№18. 床面。
10	坏	(11.0)	2.4		BD	A	明赤褐	10%	カマド内。
11	坏	(11.6)	3.3		ABC	C	橙	10%	№17. 床面。
12	甕	5.0	2.3		BDEF	B	橙	45%	№3. 覆土。
13	甕	(20.0)	6.9		ABDF	B	橙	10%	№16, 21, 22. 覆土。

第38号住居跡(第83図)

P・Q-7区に位置する。第32・37号住居跡と重複し、両住居よりも新しい。当初、住居に気付かず重複する古い住居から掘り下げてしまったため、全容は不明である。形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸2.84m、短軸2.06m、深さ0.10~0.15m程である。主軸方位はほぼ座標北を指す。

床面の状態は、中央から北側は平坦で強く踏み締められていたが、壁際はやや凹凸をもち軟弱であった。覆土は2層に大別され、上層に焼土・ローム粒子が多量に混入していた。ピットは1本検出された。第37号住居跡の壁溝を切っており本住居に伴うものとしたが確証はない。カマド・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は50点あり、土師器甕片を主体に須恵器坏・甕、灰釉埴(3点)を含む。層序に対比すれば第1層に含まれるものがほとんどである。4は猿投産の灰釉系陶器と思われる。稻荷前 XIV 期に比定される。

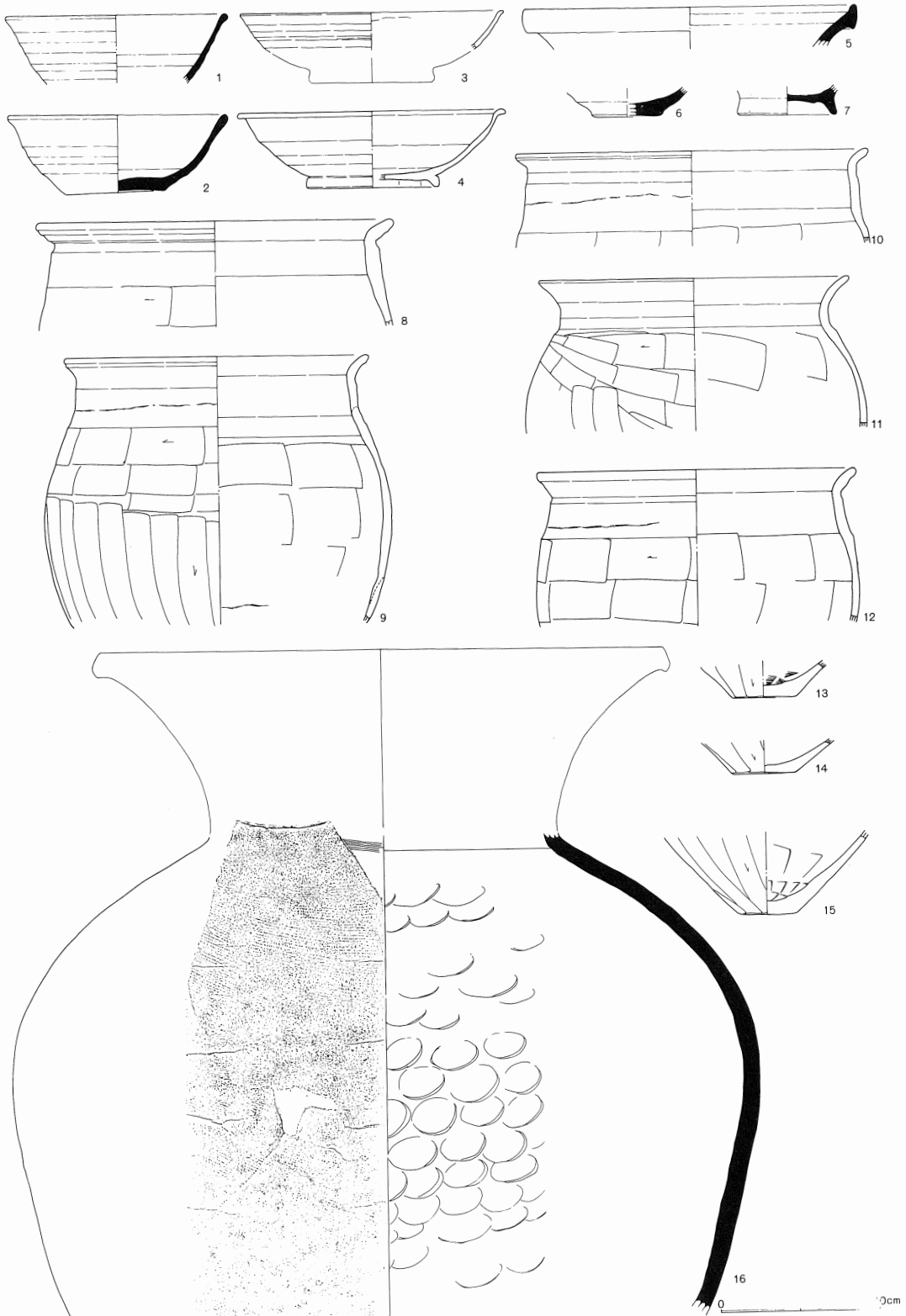


- 1 暗褐色土 焼土・ローム多量混入。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物混入。しまり有。

第83図 第38号住居跡(L=31.40m)

第38号住居跡出土遺物観察表(第84図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.8)	4.3		ABC	C	灰白	10%	№7。床面。
2	坏	13.8	5.0	6.1	ABDE	C	灰白	100%	№153, 160。床面。
3	灰釉埴	(16.4)	2.4		B	A	灰	5%	№2。覆土。
4	灰釉埴	16.6	4.8	8.0	A	B	灰	25%	№109。覆土。
5	甕	20.8	2.7		ABC	A	暗青灰	5%	№3。床面。
6	坏		1.8	(4.5)	ABEI	C	灰白	40%	№118。覆土。
7	坏		1.8	6.0	ADE	C	灰白	50%	№114。覆土。
8	甕	22.0	6.65		ABE	A	褐灰	10%	№76, 81。覆土。
9	甕	19.0	16.9		ABF	B	にぶい褐	25%	№26, 30, 51, 68。覆土。
10	甕	(22.0)	5.9		AEF	B	暗褐	35%	№84。覆土。
11	甕	19.4	9.6		ABE	B	にぶい橙	50%	№151。覆土。
12	甕	19.9	9.8		ABEF	B	褐	20%	№34, 38。覆土。
13	甕		2.3	(3.8)	ABE	A	橙	40%	№90。覆土。
14	甕		2.0	4.0	AE	B	にぶい赤褐	90%	№107。覆土。
15	甕		5.2	3.5	ABEF	B	にぶい褐	50%	№22, 24, 35, 139。覆土。
16	甕		30.3		ABCD	A	灰	25%	№154。床面。



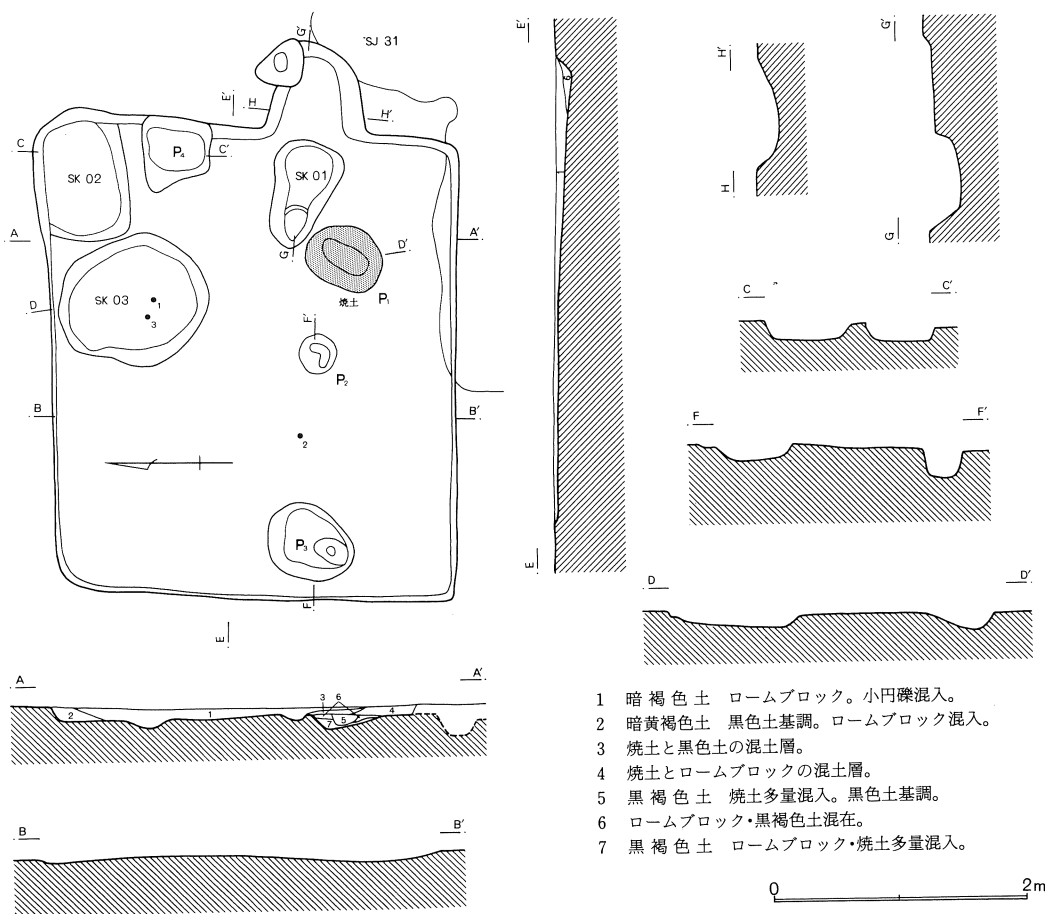
第84图 第38号住居跡出土遺物

第39号住居跡(第85図)

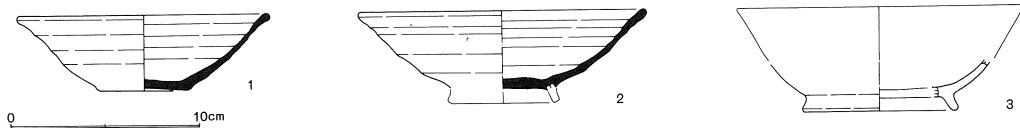
P-7区に位置する。第31号住居跡、第6号井戸跡と重複し、本住居が最も新しい。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.66m、短軸3.20m、深さ約0.05mを測る。主軸方位はS-88°-Eを示す。

床面は凹凸をもつ。カマド周辺は堅く踏み締められていたが壁際は軟弱であった。床面近くまで削平されており、覆土の堆積状況は詳細には把握し得ない。カマドは東壁に設置される。遺存状態は極めて悪い。袖は存在しない。ピットは4本検出された。P₁は焼土が多量に含まれるが、上面は堅く踏み締められていた。P₂・P₃は遺構に伴う可能性がある。P₄は住居に伴うものではない。土壌は3基検出され、第1・2号土壌は掘方であろう。第3号土壌は床下土壌と推定される。

出土遺物は29点と少ない。図示した以外に緑釉陶器の破片が2片含まれる。第86図1・2はほぼ床面に相当する位置から、3の緑釉碗は第3号土壌内から出土した。稲荷前 XIV 期に比定される。



第85図 第39号住居跡(L=30.80m)



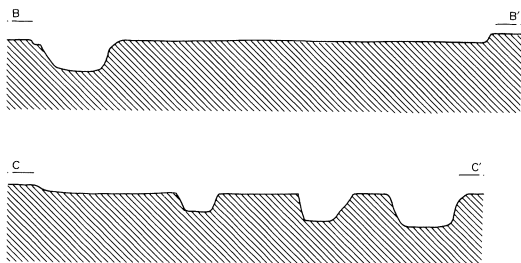
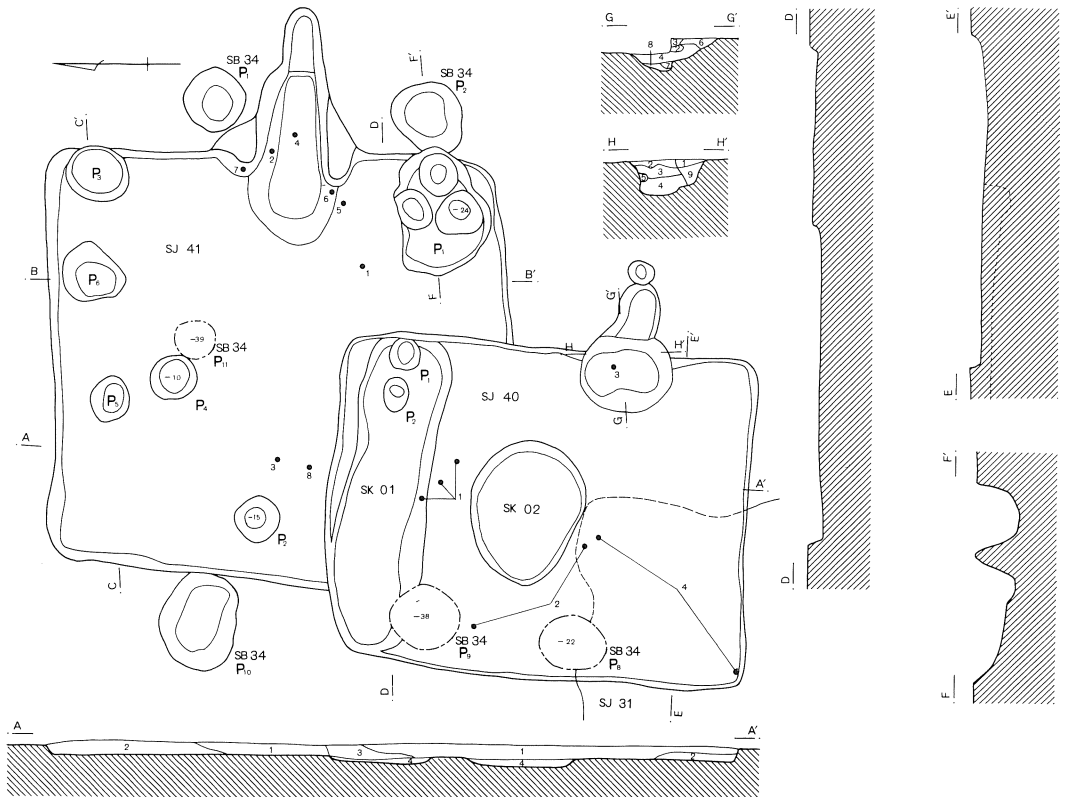
第86図 第39号住居跡出土遺物

第39号住居跡出土遺物観察表(第86図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.0	4.0	4.6	A B C	B	橙	90%	№8。SK03内。
2	高台坏	(15.0)	4.5		A C D	B	灰白	25%	№22。覆土。
3	緑釉埴		2.6	(7.9)	J	B	灰白	20%	№37。SK03内。

第40号住居跡(第87図)

P-8区に位置する。第31・41号住居跡と重複し、前者の上に貼床し、後者を切って構築される。第34号掘立柱建物跡との新旧関係は本住居跡の方が古いものと考えられる。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸2.60m、深さ約0.10mを測る。主軸方位はS-86°-Eを示す。

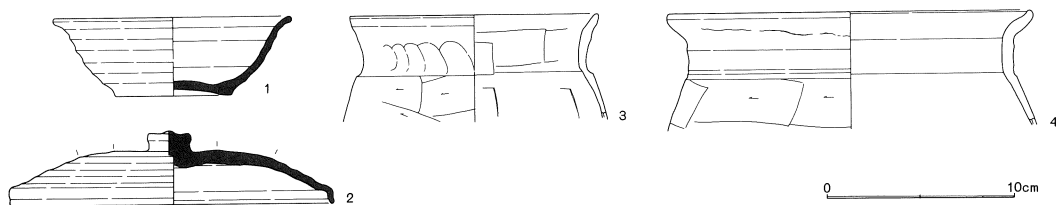


- 1 暗褐色土 ホソボソした褐色土主体。
- 2 暗黄褐色土 ソフトロームとロームブロックの混在土。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量混入。しまり無。
- 4 暗褐色土 焼土・ロームブロック少量混入。
- S J 40カマド
- 1 暗褐色土 ロームブロック少。
- 2 暗褐色土 ローム・焼土多。
- 3 黒褐色土 焼土・ローム少。
- 4 黒褐色土 ロームブロック多。
- 5 ロームブロック
- 6 灰褐色粘土 焼土混入。
- 7 灰褐色粘土 粘土・焼土混入。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック混入。黒褐色土主体。
- 9 暗黄褐色土 ソフトローム・ロームブロック多。

第87図 第40・41号住居跡(L=31.20m)

床面は概ね平坦で、全体的に堅く踏み締められている。カマドは東壁に位置する。底面は2段に掘り込まれ、緩やかに立ち上がる。袖は検出されなかった。土壌は2基検出された。第1号土壌は掘方と推定され、上面には堅い床面が貼られている。第2号土壌は焼土・ロームブロック混じりの暗褐色土が堆積していた。床下土壌とは異なるものであろう。ピットは2本検出されているが、住居の柱穴として良いか不明である。壁溝・貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は84点検出されたが、ほとんどが小片である。第88図1は床面、3の台付甕はカマド内、4の甕はカマド内のものと住居内の破片が接合している。稲荷前XIII期に比定される。



第88図 第40号住居跡出土遺物

第40号住居跡出土遺物観察表(第88図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.6)	4.15	6.1	ABCD	C	褐灰	60%	No6, 9, 25.床面。
2	蓋	17.2	3.9		AC	B	灰	70%	No13, SJ31-1.覆土。
3	台付甕	13.2	5.7		ABD	B	明赤褐	20%	No80.カマド内。
4	甕	19.2	6.2		ABDEF	B	にぶい橙	80%	No20, 21, 62, 116, 136.カマド内。

第41号住居跡(第87図)

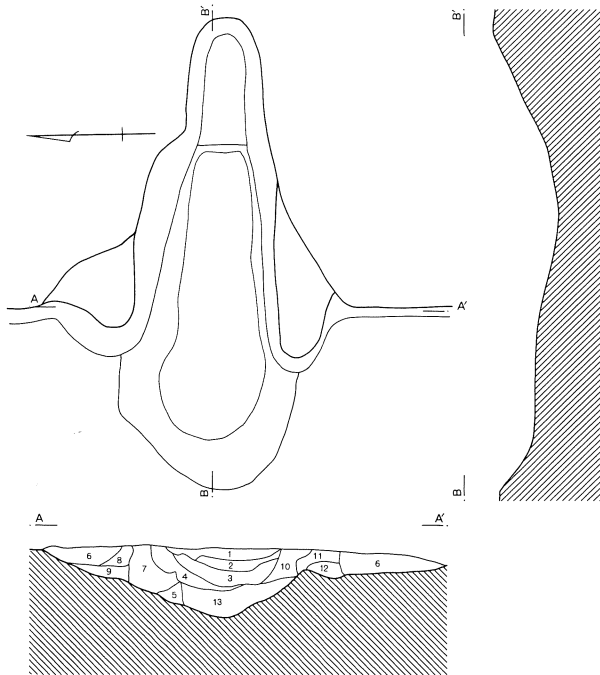
P-8区に位置する。第40号住居跡と重複し、土層観察により本住居の方が古いことが判明した。また第34号掘立柱建物跡との新旧関係は明確に擲めていないが、本住居の方が古いものと推定される。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸3.66m、短軸3.30m、深さ0.10~0.15mを測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で、全体的に堅く踏み締められていた。覆土は2層に分かれるが、第42号住居跡との切り合い状況から見ても人為的な堆積環境を想定する必要がある。

カマドは東壁中央部に設置される。燃烧部は壁外に長く延び、底面は皿状に凹む。袖はあまり明確ではない。第13層上面が火床面に相当しようか。

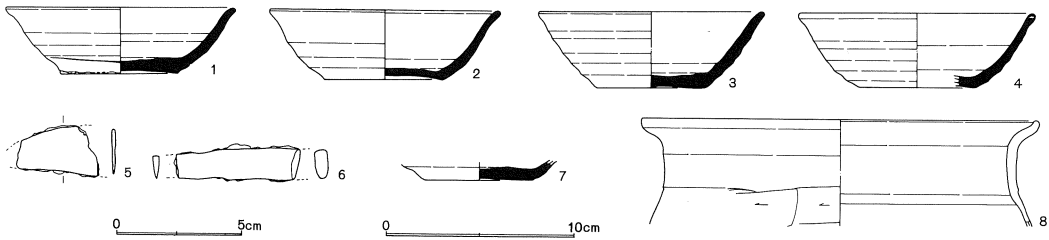
ピットは6本検出されたが、住居の柱穴と考えられるものは明らかではない。壁溝・貯蔵穴は存在しない。

出土遺物は72点検出されたが全体に小片が多い。そのうち半数近くは須恵器坏である。第90図2・4の坏はカマド内から出土した。図示したその他の遺物もカマドまたは床面から出土したものがほとんどで、遺構に伴う遺物としてよいものとする。1の坏は体部下端に糸を差し入れた痕跡が2ヶ所残り、切り離しに失敗したことが判る。5の鉄製品は鉄鎌に似るが、刃が付されているか明確ではない。稲荷前XII期に比定される。



- 1 暗褐色土 焼土・ロームブロック多。
- 2 赤褐色土 焼土・赤化ローム多。
- 3 暗褐色土 焼土・赤化ローム少。
- 4 暗褐色土 焼土・赤化ローム少。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・炭化物多。
- 6 黒褐色土 ソフトローム・炭化物混入。粘性有。
- 7 暗褐色土 ロームブロック・焼土多。粘性無。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・焼土多。
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック・砂質土多。
- 10 暗黄褐色土 ロームブロック多量混入。
- 11 暗黄褐色土 ロームブロック・砂質粘土多。
- 12 暗黄褐色土 ロームブロック多。
- 13 黒褐色土 ロームブロック(大)多。粘性有。

第89図 第41号住居跡カマド(L=31.20m)



第90図 第41号住居跡出土遺物

第41号住居跡出土遺物観察表(第90図)

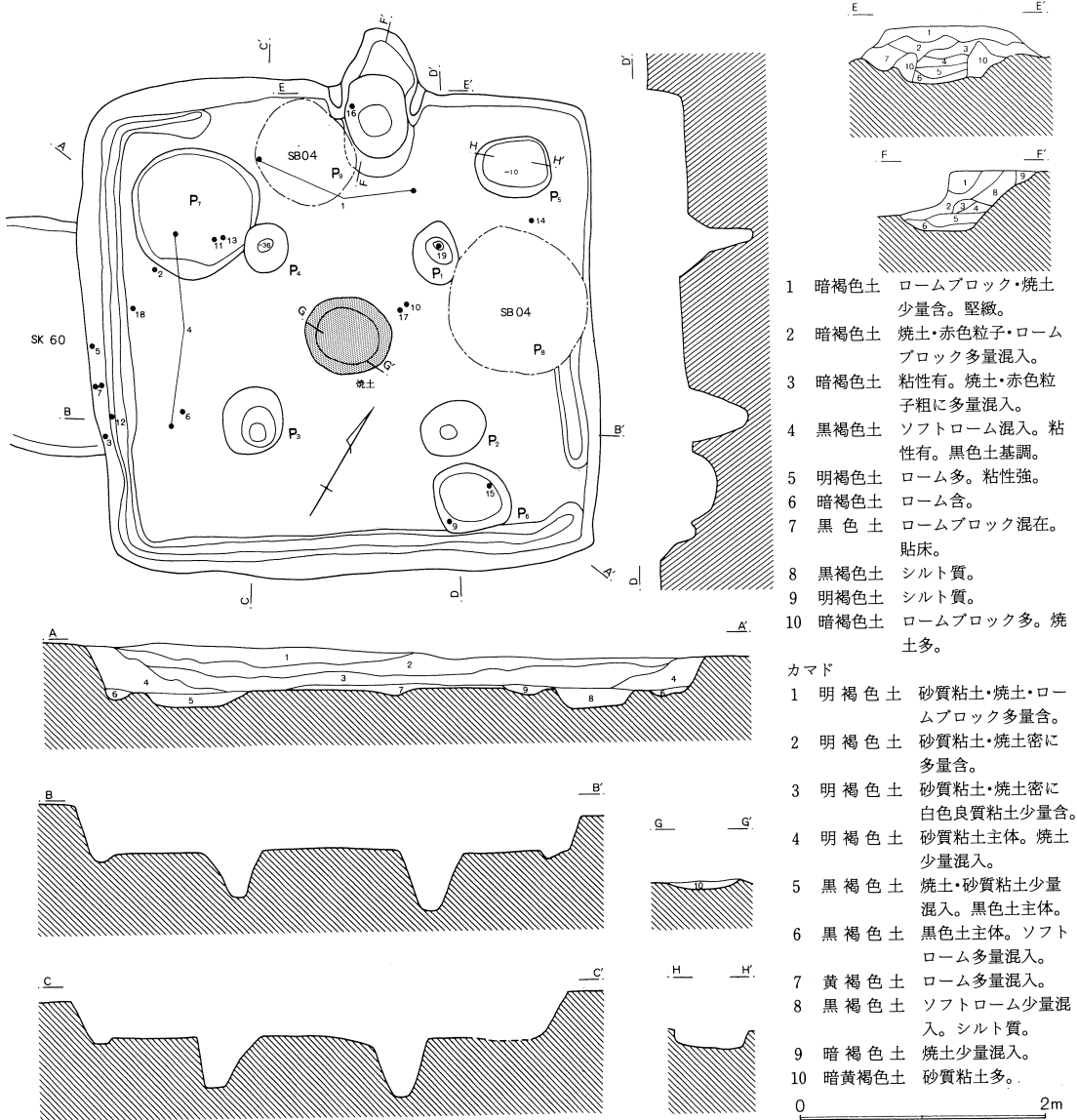
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	12.0	3.7	6.1	ABCD	C	暗青灰	60%	Na57.覆土。	
2	坏	12.1	3.7	6.2	ABCD	A	灰	70%	Na93.カマド内。	
3	坏	(11.8)	4.0	5.7	A	B	灰白	40%	Na14.覆土。	
4	坏	(12.3)	3.9	(6.1)	AC	B	オリブ灰	25%	Na85.カマド内。	
7	坏		1.1	5.7	ABC	B	灰白	90%	Na96.カマド左袖内。	
8	甕	21.0	5.6		ABEF	A	にぶい橙	15%	P1内。	
5	鉄 鎌?	残長3.4cm.最大幅1.9cm.								カマド内。
6	刀 子?	残長5.0cm.最大幅1.2cm.								Na79.

第42号住居跡(第91図)

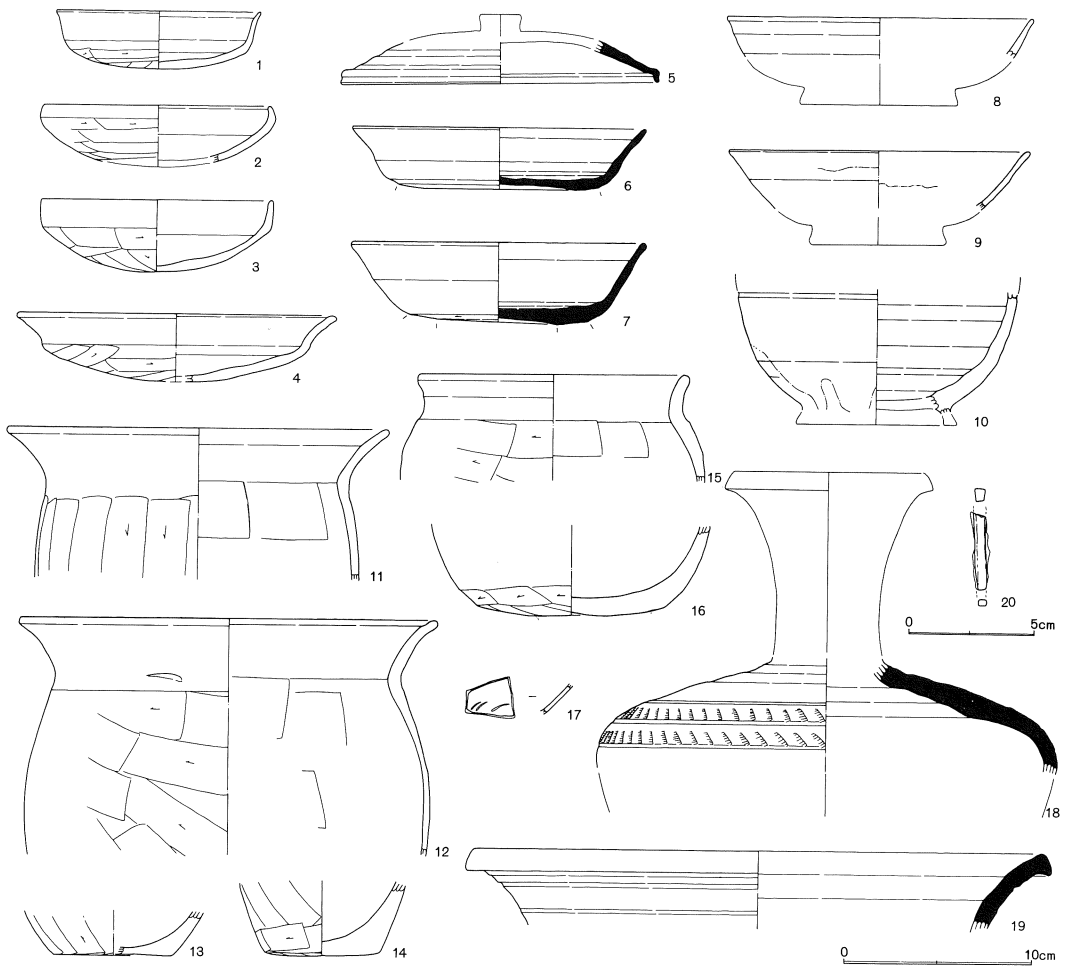
O・P-7区に位置する。第4号掘立柱建物跡・第60号土壇と重複し、両遺構に切られている。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸4.02m、短軸3.84m、深さ0.25mを測る。主軸方位はN-32°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で貼床されている。覆土は概ね自然堆積と考えられる。カマドは北西壁に設置され、両袖が残る。燃焼部はほぼ壁内に位置し、煙道部には急角度で移行する。壁溝は途切れながら、凡そ2/3周程巡る。ピットは6本検出された。P₁～P₄は支柱穴と考えられる。P₅は位置的に貯蔵穴とも考えられる。P₆と第1号土壌は掘方乃至床下土壌であろう。また、床面中央部には浅い土壌が存在し、上面に焼土が堆積していた。性格は不明である。

出土遺物は90点検出されているが、時期幅が認められる。灰釉陶器(第92図8・9)は明らかに混入で第60号土壌に伴う可能性が高い。出土位置から3・7・12はVII期頃の製品で埋没過程で混入したものと考えられる。住居の時期を決定する資料としては1・2の土師器環と11の甕が残る。2の北武蔵系環は内屈が顕著で1の比企系環とも齟齬はない。稻荷前IV期に比定されるものであろう。



第91図 第42号住居跡(L=31.30m)



第92図 第42号住居跡出土遺物

第42号住居跡出土遺物観察表(第92図)

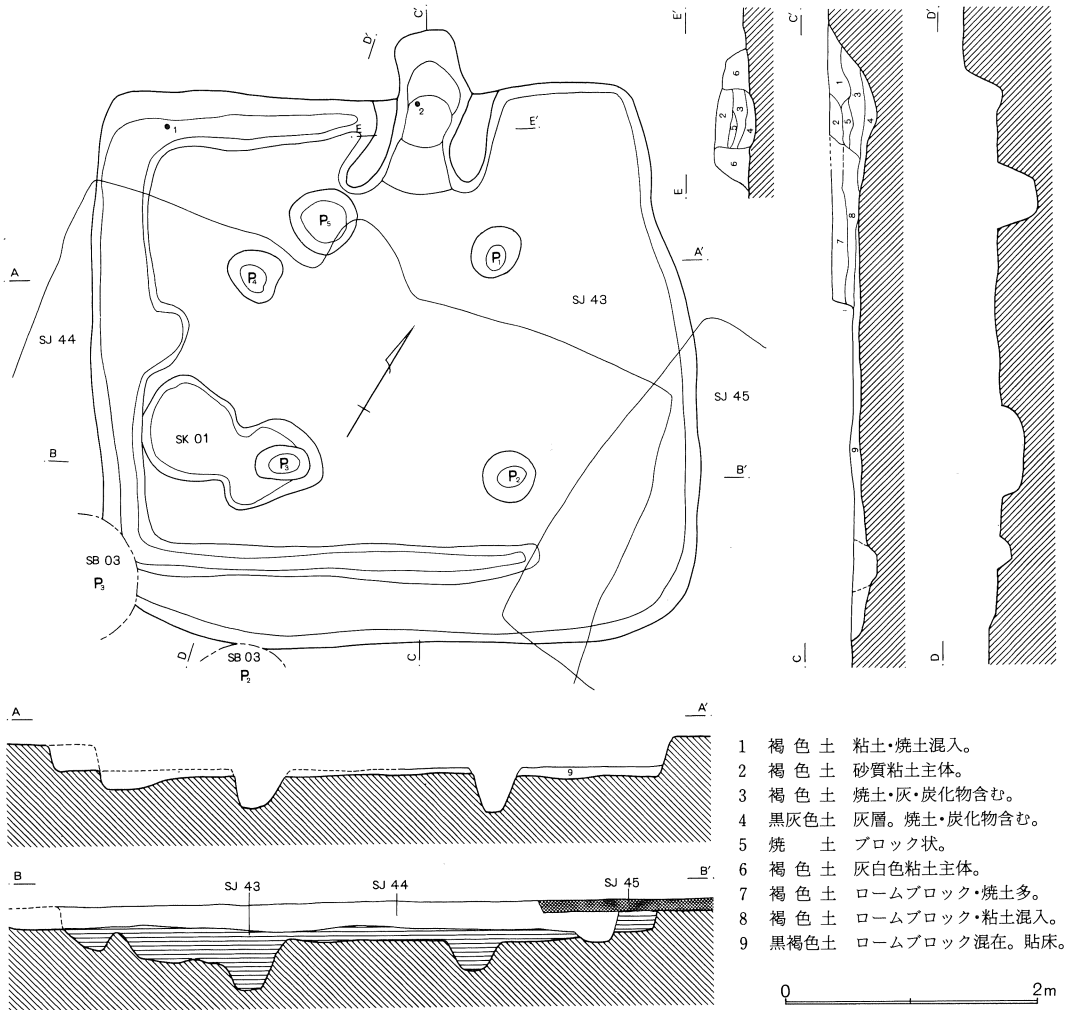
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	10.8	3.1		ADF	B	明赤褐	90%	No.5, 154.覆土下層。無彩。
2	坏	(12.0)	3.0		EF	B	橙	15%	No.16.覆土下層。
3	坏	12.2	3.8		BDEF	B	橙	45%	No.50.覆土。北武蔵系。
4	皿	16.6	3.6		ABF	A	明赤褐	35%	No.37, 214.覆土中層。
5	蓋	(16.8)	2.2		ABC	A	灰	20%	No.38.覆土中層。
6	坏	15.4	3.3	10.6	ACD	B	灰	60%	No.211.覆土中層。
7	坏	15.3	4.3	9.5	ACD	C	褐灰	40%	No.45, 46.覆土上層。
8	緑釉壺	(16.0)	2.1		J	B	灰白	5%	覆土。軟質。釉は剥落。
9	灰釉壺	(17.8)	3.1		G	A	灰白	5%	No.72.覆土上層。
10	瓶		6.5		BG	B	灰白	20%	No.90.覆土。器形不明。釉は厚く垂下がる。
11	甕	(20.0)	8.0		ABCDE	B	にぶい橙	25%	No.199.覆土。
12	甕	(21.8)	12.4		ABE	A	橙	20%	No.48.覆土中層。
13	甕		2.4	(6.2)	ABF	B	褐	25%	No.207.覆土中層。
14	甕		4.0	(6.0)	ADE	B	褐	25%	No.233.床面。
15	小型甕	14.0	5.6		AB	C	橙	20%	No.222.覆土下層。
16	壺		4.8	10.0	ABE	C	橙	45%	No.259.カマド内。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
17	緑釉埴				J	A	灰	5%	№97。覆土上層。硬質。内面に陰刻？。
18	長頸瓶		6.0		A C D	B	青灰	20%	№26。覆土中層。東海産か。
19	甕	(30.0)	4.1		A D	B	灰	5%	№132。覆土下層。
20	鉄釘	残長3.1cm。							覆土。

第43号住居跡(第93図)

調査区西寄りのO-5・6区に位置する。重複する第44・45号住居跡に2/3以上破壊され、遺存状態は良くない。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸4.72m、短軸4.36m、深さ0.10~0.20mを測る。主軸方位はN-34°-Wを示す。

床面は全面貼床され、残存部は概ね平坦で堅い。但し住居南半では、第44号住居跡に削られ、貼床部分が残存するにすぎない。覆土は褐色土を基調としており、ロームブロック・焼土粒子を含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。カマドは北壁に設置される。燃烧部は挿鉢状に凹み煙道部に

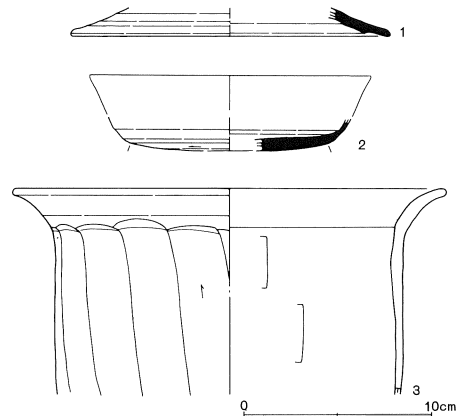


第93図 第43号住居跡(L=31.40m)

向かって急激に立ち上がる。袖は灰白色の砂質粘土を積み上げて構築され、左袖には胴部下半を欠いた土師器甕の破片が芯材として使用されていた。

ピットは5本検出され、P₁からP₄が主柱穴に相当する。P₅は伴うか否か不明である。土壌は1基存在するが掘方かもしれない。壁溝は北壁から南壁にかけておよそ半周する。南壁のそれは壁ラインよりも内側に巡り建て替えられた可能性もある。貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は少なく、時期決定は難しい。甕(第94図3)はIV期～V期、かえり蓋(1)はV期、坏(2)はV期乃至VI期であろう。遺物からみる限り稲荷前V期～VI期に比定される。



第94図 第43号住居跡出土遺物

第43号住居跡出土遺物観察表(第94図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(16.8)	1.5		B C D	C	灰	15%	SJ44-562。覆土。
2	坏		1.6	(10.6)	A B	B	灰白	25%	No.3。カマド左袖。
3	甕	22.7	10.8		A B D	B	にぶい橙	40%	カマド左袖。

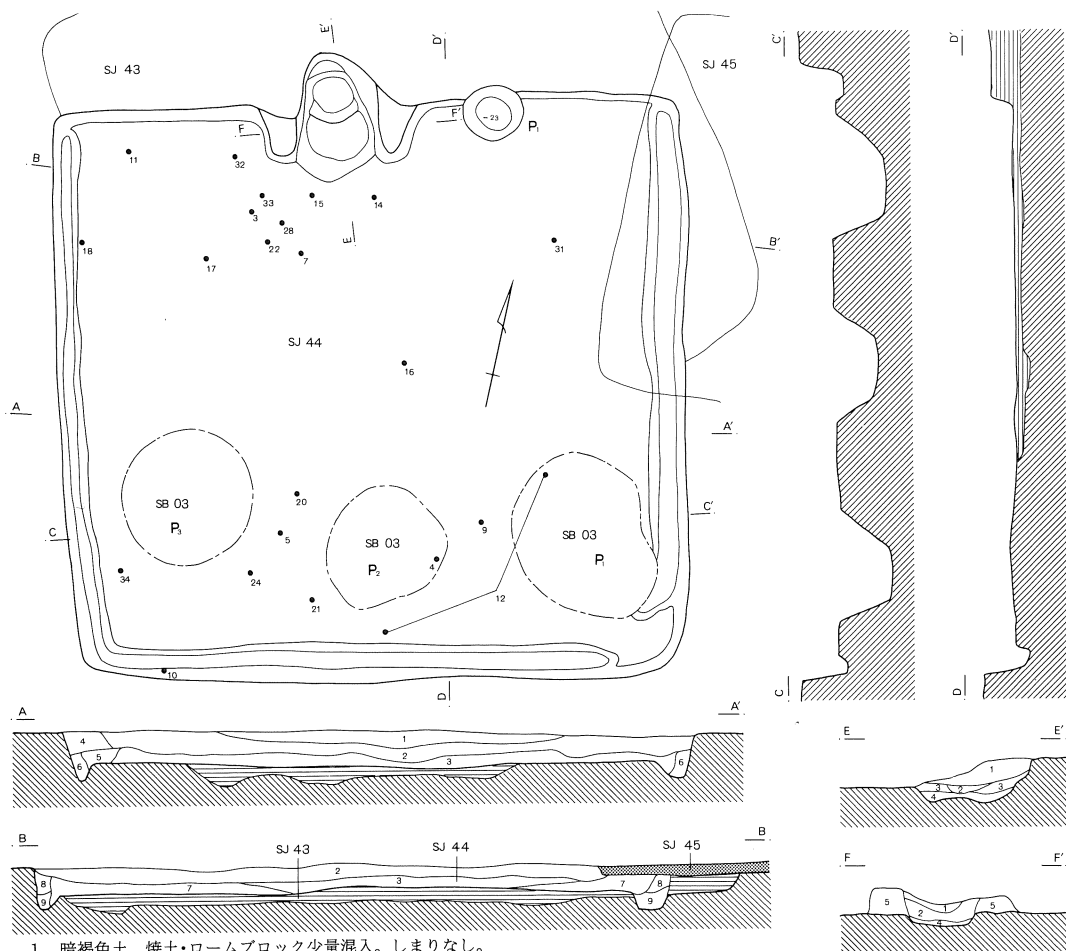
第44号住居跡(第95図)

O-5・6区に位置する。重複遺構との新旧関係は第43号住居跡よりも新しく、第45号住居跡と第3号掘立柱建物跡よりも古いものと考えられる。形態はやや横長の長方形を呈し、規模は長軸5.00m、短軸4.58m、深さ0.20～0.30mを測る。主軸方位はN-13°-Wを示す。

床面はやや凹凸をもつが全体に堅い。貼床された痕跡があるが、これは43号住居の貼床と推定され、本住居床面との識別は不明瞭であった。覆土は暗褐色土を基調とし、第3層にはロームブロックの混入が多く認められた。

カマドは北壁中央に設置される。燃焼部は0.10m程掘りくぼめられ、煙道部への移行角度は急である。袖は灰白色の砂質粘土を積み上げて構築される。ピットは1本検出されたが、遺構に伴うものではなく、住居の柱穴に相当するものは認められなかった。壁溝は北壁と南東コーナーを除いて巡る。深さ約0.10mを測る。貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は164点を数えるが、重複する43号住居との遺物分離が完全ではなく出土遺物にも時間幅がみられる。土師器坏類(第96図1～6)は口径の縮小化が最も進んだ段階でIV期～V期としても前半代、他の土師器坏類もV期前半を中心とするものと考えられる。須恵器の内、15のかえり蓋、28～30の東海系長頸瓶はIV期、21・24・31・32もIV期からV期であろう。結局43号住居よりも新しくなる可能性をもつものは高台坏(20)と須恵器蓋(16～18)程度である。図化以外の遺物をもみてもIV期～V期前後のものが量的には主体となり、遺物面からみる限り本住居の方が43号住居よりも古い様相が窺え、調査によって把握された遺構の新旧関係とはうまく合致しないことになる。ここでは住居の時期として稲荷前IV期～V期前半に位置付けておきたい。



- 1 暗褐色土 焼土・ロームブロック少量混入。しまりなし。
- 2 暗褐色土 焼土・ソフトローム多量混入。ややしまりもつ。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量混入。粘性あり。
- 4 黒褐色土 ソフトローム混入。よくしまる。
- 5 黒褐色土 ロームブロック混入。
- 6 黒褐色土 ロームブロック多量、焼土少量混入。
- 7 褐色土 ロームブロック多量混入。
- 8 黄褐色土 ロームブロック混入。しまりなし。
- 9 黒褐色土 混入物なし。

カマド

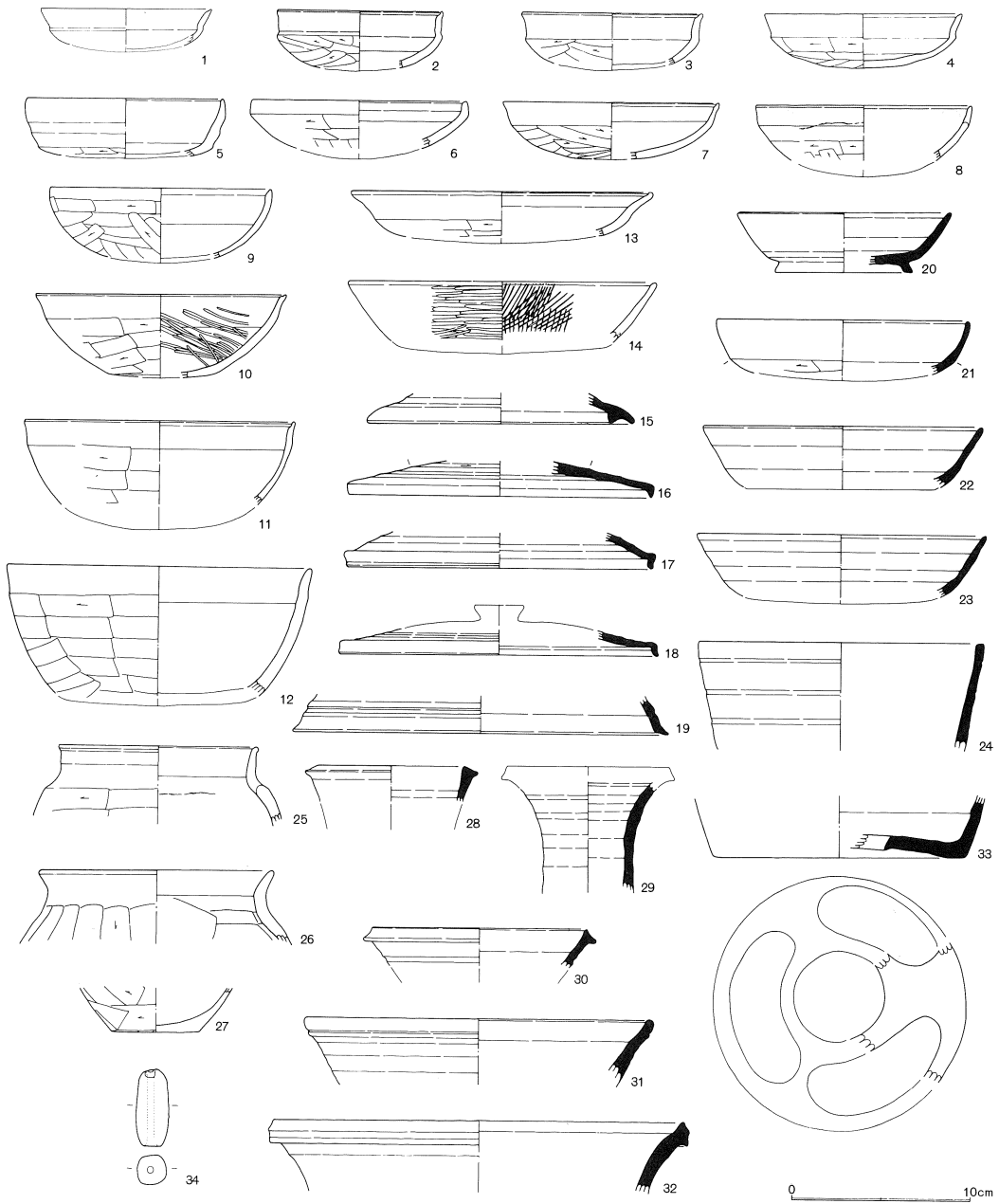
- 1 暗褐色土 砂質粘土・焼土粒少量混入。
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土少量混入。
- 3 暗灰褐色土 焼土・炭化物混入。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土・炭化物少量混入。
- 5 灰白色粘土 砂質強い。

0 2m

第95図 第44号住居跡(L=31.40m)

第44号住居跡出土遺物観察表(第96図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(9.2)	3.1		AD	A	にぶい赤褐	30%	覆土。
2	坏	(9.2)	3.2		ABE	A	橙	30%	覆土。
3	坏	(10.0)	2.9		ABF	B	橙	10%	№44。覆土。口唇部磨滅。
4	坏	(11.0)	3.1		AB	B	明赤褐	35%	№154。覆土。
5	坏	(10.9)	3.2		A	B	褐	20%	№321。覆土。
6	坏	(12.0)	2.7		ABD	B	橙	10%	覆土。
7	坏	12.0	3.2		AB	A	橙	45%	№237。覆土。無彩。
8	坏	(12.0)	3.1		AB	B	淡橙	15%	覆土。
9	坏	(12.4)	3.9		AB	B	暗褐	35%	№165。覆土。
10	埴	(14.0)	4.5		AB	B	橙	10%	№401。覆土。



第96図 第44号住居跡出土遺物

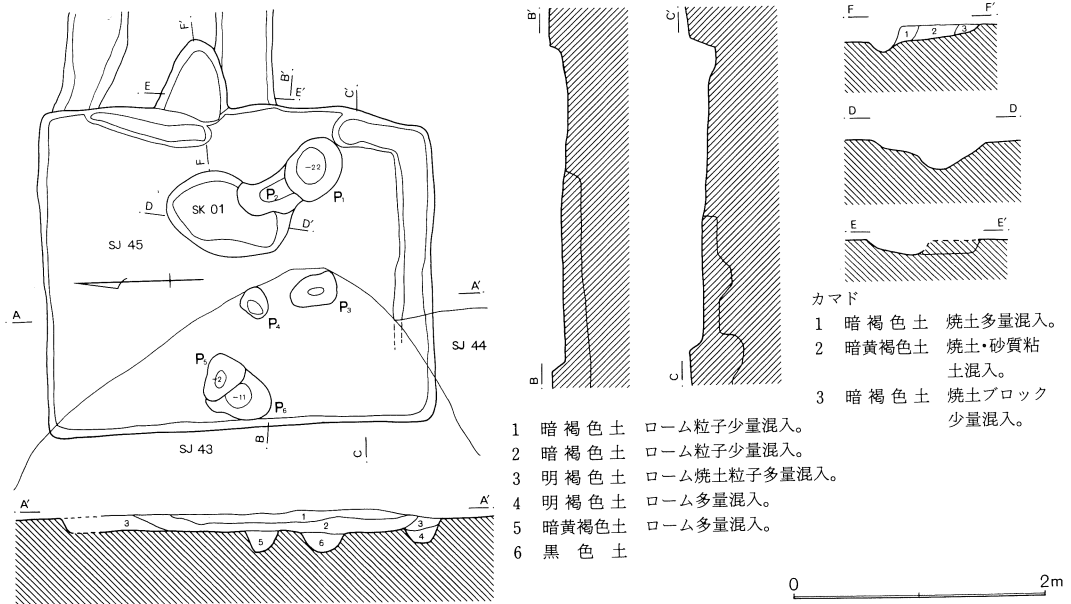
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
11	碗	(15.0)	4.7		AB	A	橙	10%	No 26. 床面。無彩。
12	鉢	(17.0)	7.2		ACE	A	赤褐	20%	No 150, 181. 覆土。
13	皿	(17.0)	2.5		ABD	C	橙	10%	覆土。
14	坏	17.0	3.3		B	B	にぶい橙	10%	No 529. 覆土。硬質土師器。
15	蓋	14.7	1.7		B	A	灰白	5%	No 14. 覆土。東海産。
16	蓋	(17.0)	2.0		ABC	B	灰白	15%	No 210. 覆土。
17	蓋	(17.0)	2.0		ABC	B	灰	15%	No 349. 床面。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
18	蓋	(17.8)	1.4		BC	A	灰	5%	No.68。覆土。
19	不明		2.1	(21.0)	ABC	C	灰	5%	覆土。
20	高台坏	(11.8)	3.4	(7.6)	AB	B	灰	15%	No.143。覆土。
21	坏	(14.0)	3.0		ABC	B	褐	10%	No.327。覆土。
22	坏	(15.5)	3.4		AC	A	灰	5%	No.49。覆土。
23	坏	(16.0)	3.4		AC	B	灰白	5%	覆土。
24	不明	(16.0)	6.0		ACE	C	褐	15%	No.132。覆土。高台坏か。
25	甕	(11.0)	4.3		AD	A	にぶい橙	20%	覆土。
26	小型甕	(13.0)	4.1		ABC	A	橙	20%	覆土。
27	甕		2.4	5.0	AE	A	にぶい褐	55%	覆土。
28	長頸瓶	8.2	2.0		GJ	A	灰白	10%	No.47。覆土。東海産か。
29	長頸瓶		6.2		AB	A	灰	25%	覆土。東海産か。
30	壺	(12.0)	2.1		GJ	A	灰白	10%	覆土。東海産か。
31	壺	(19.2)	3.7		ABC	B	灰白	5%	No.38。床面下。
32	甕	(23.0)	4.0		ABC	A	灰	10%	No.21。覆土。
33	甕		3.4	(14.2)	ACD	B	灰白	20%	No.42。覆土。
34	土錘	全長4.3cm。重量20g。			AC	A	にぶい橙	95%	No.411。覆土。最大径1.8cm。孔径0.4cm。

第45号住居跡(第97図)

O-6区に位置する。第43・44号住居跡覆土を切り込んで構築されており、本住居が最も新しい。またカマドと北壁際は溝状遺構の攪乱を受けている。形態は横長の長方形を呈し、規模は小型で長軸3.18m、短軸2.54m、深さ0.10m前後を測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。

床面は比較的堅く踏み締められている。ただ、43号住居跡と重複する西壁付近は、軟弱な箇所がある。カマドは東壁に設置される。袖は存在しない。土壌はカマド前面に1基存在する。上面には床が貼られており、住居に伴う床下土壌と考えられる。覆土は焼土・ロームブロックを含む暗褐色



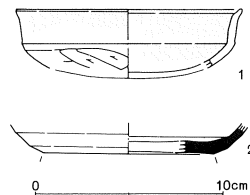
第97図 第45号住居跡(L=31.30m)

土で構成される。ピットは6本検出されたが、住居に伴うものは明確ではない。壁溝は東壁から南壁にかけて部分的に残るが、北壁と西壁は明確に検出できなかった。

出土遺物は極めて少なく18点にすぎない。須恵器坏・甕・土師器甕の破片で実測しうるものはない。時期も不明確であるが、XIII～XIV 期頃と推定される。

第46号住居跡(第99図)

O-6 区に位置する。第47号住居跡と第4号掘立柱建物跡に切られている。また第6号溝跡の攪乱を大きく受け、遺存状態はあまりよくない。形態は長方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸4.06m、短軸3.36m、深さ0.10m 前後を測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。



第98図 第46号住居跡出土遺物

床面はやや凹凸が有り一定しない。覆土はロームブロック・焼土を多量に含む暗褐色土で構成され、大きな土層変化はみられなかった。カマドはおそらく北壁に設置されたものと思われるが、47号住居跡に破壊され残存しない。壁溝、ピット等の施設は検出されなかった。

出土遺物は55点あるが全て小片である。第98図2の須恵器坏は混入。その他9世紀後半代の須恵器坏、灰釉陶器片もある。1の土師器坏は比企型坏と考えられ、床面から検出された。稲荷前III期に比定されよう。遺構の新旧関係から第47号住居跡に先行するが時期的な差は殆どみられない。

第46号住居跡出土遺物観察表(第98図)

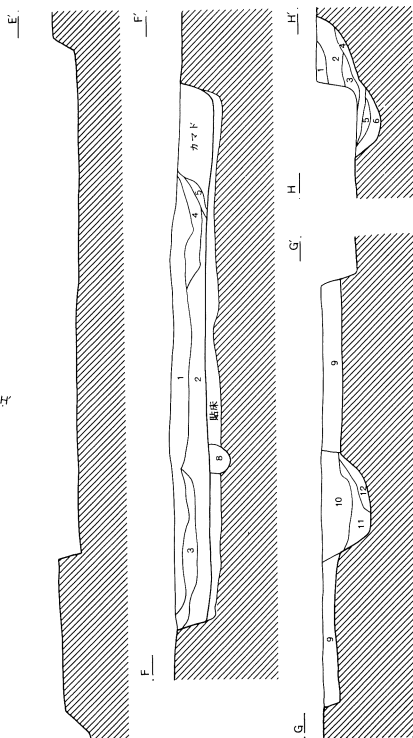
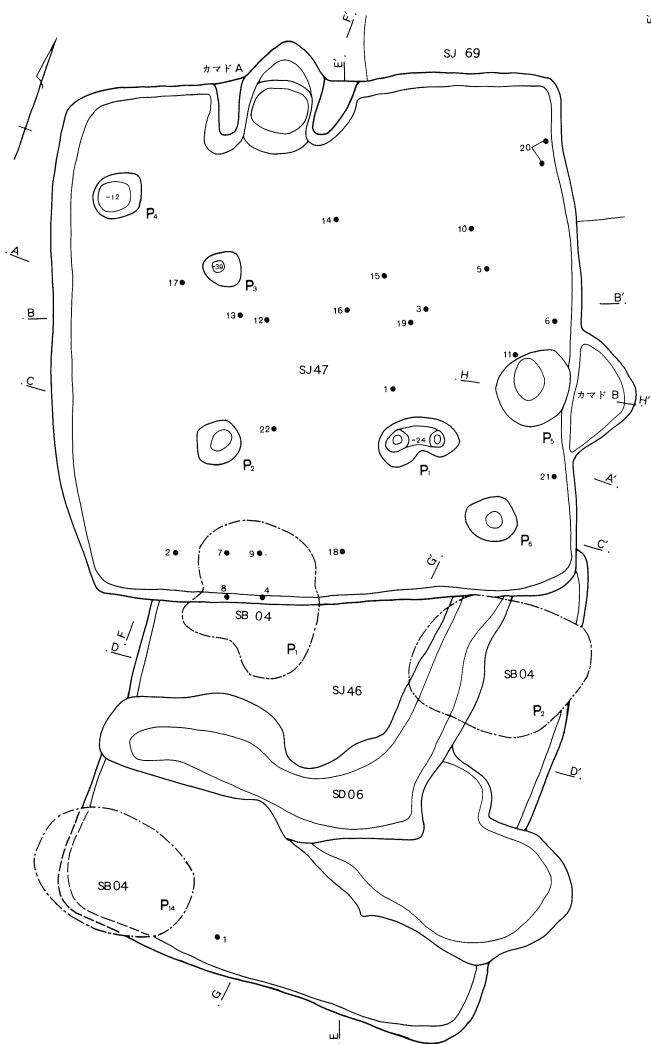
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.0)	3.1		B F	A	橙	15%	No 16. 床面。
2	坏		1.6	(9.1)	A B C	B	灰	10%	覆土。

第47号住居跡(第99図)

N・O-6 区に位置する。南側に第46号住居跡、北側に第69号住居跡が重複し、前者よりも新しく後者よりも古い。また、第4号掘立柱建物跡とも一部切り合い関係をもつが、調査所見に拠れば、掘立柱建物跡の方が新しいものと判断される。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.20m、短軸4.04m、深さ0.25m 前後を測る。主軸方位はN-19°-Wを示す。

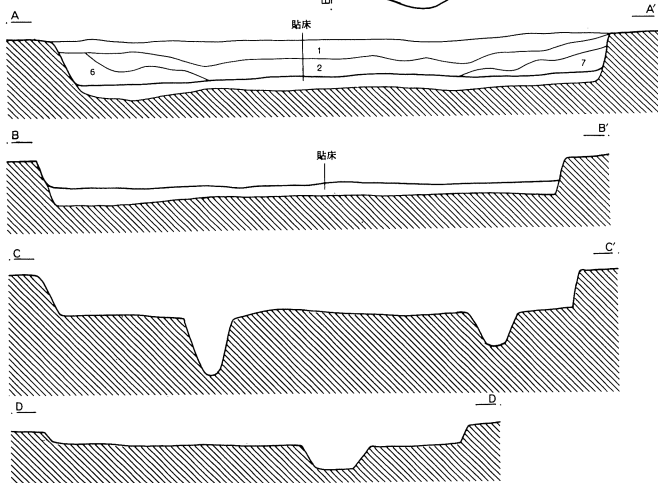
床面は概ね平坦で、全体的に堅く締まっていた。床面下は全面貼床され、ロームブロック混じりの黒色土が約10cmほど堆積していた。覆土は7層に区分される。ロームブロックを多量に含む層(第4・6・7層)が介在し、自然堆積と断定するのは難しい。カマドは2基検出された。遺存状況等により、東壁のカマドBから北壁のカマドAに付け替えられたものと考えられる。カマドAは浅い鍋底状の燃焼部をもち、灰白色粘土を積み上げた袖部が明瞭に残存する。ピットは6本検出された。P₂・P₃は住居に伴う可能性が高いが、P₁は柱穴とは考えられない。P₅はカマドBに伴う掘方で、最下層にシルト質の粘土が厚く堆積していた。P₄・P₆の帰属は不明である。壁溝、貯蔵穴は存在しない。

出土遺物は95点検出された。器種的には土師器坏、甕、壺、須恵器坏、蓋、甕、灰釉陶器がある。



カマド B

- 1 褐色土 焼土・粘土粒少。
- 2 明褐色土 焼土・粘土・ローム塊多。
- 3 明褐色土 焼土・砂質粘土ローム混在。
- 4 暗褐色土 ローム多。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロックと褐色土含。
- 6 黒褐色土 黒色シルト・ローム混入。

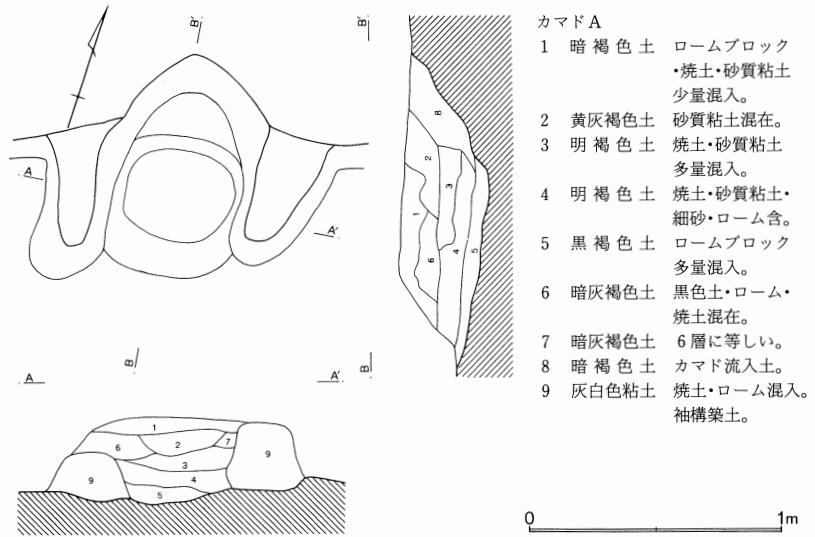


- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・多量混入。しまり弱。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土多量混入。しまり強。
- 3 黒褐色土 ソフトローム少。シルト質。
- 4 明褐色土 ロームブロック・ソフトローム多量混入。粘性有。
- 5 黒褐色土 ソフトローム少量混入。シルト質。粘性有。
- 6 明褐色土 ロームブロック・焼土多量混入。粘性有。
- 7 明褐色土 ロームブロック・焼土多量混入。粘性有。
- 8 暗褐色土 ローム粒子含。
- 9 暗褐色土 ロームブロック・焼土・炭化物多量混入。しまり無。
- 10 暗褐色土 焼土・ロームブロック・少量混入。しまり無。
- 11 暗褐色土 ソフトローム多。しまり有。
- 12 暗黄褐色土 ロームブロック・ソフトローム混在。

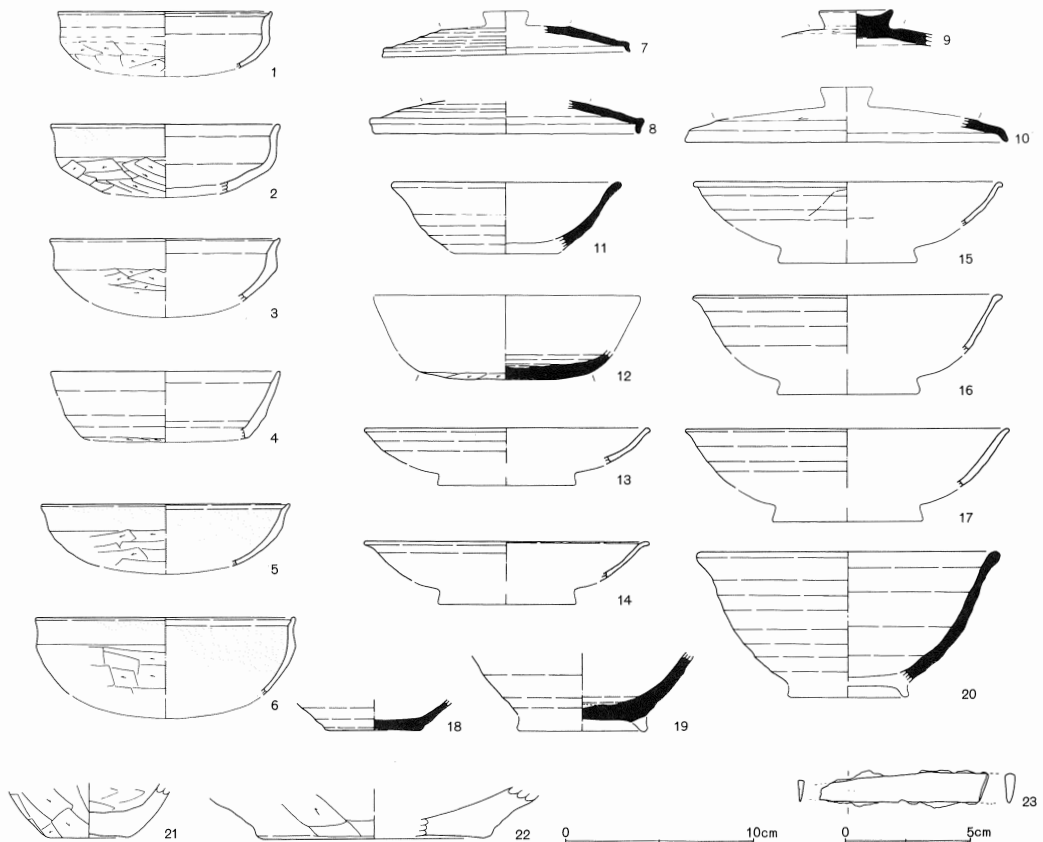
第99図 第46・47号住居跡(L=31.40m)

0 2m

出土遺物の時期にはかなり幅が認められる。第101図11・13～20は確実に混入と思われる。また7～9の須恵器については14号掘立柱建物跡に伴う可能性が高く、結局住居に伴う可能性が最も高いのは土師器坏類ということになる。1～3は比企型坏の系譜で捉えられA区の中でも最も古い要素を具備する一群と考えられる。4の有段坏と12の手持ち篋ケズリを施す須恵坏が伴うか否かは明確ではない。稲荷前III期に位置付けておきたい。



第100図 第47号住居跡カマド(L=31.30m)



第101図 第47号住居跡出土遺物

第47号住居跡出土遺物観察表(第101図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	(11.2)	3.0		A B C	A	橙	20%	№ 115。覆土。	
2	坏	12.0	3.7		A F	A	橙	20%	№ 142。床面。	
3	坏	(12.0)	3.3		A B C E	A	橙	10%	№ 101。覆土。	
4	坏	(12.0)	3.6		A B	A	褐灰	10%	№ 169。SB04-P ₁ 内。	
5	坏	(13.0)	3.3		A B E	A	橙	10%	№ 76。覆土。	
6	碗	(13.6)	4.1		A B C E	A	橙	10%	№ 80。覆土。	
7	蓋	(13.0)	1.5		A B C	A	灰	15%	№ 64。SB04-P ₁ 内。	
8	蓋	(12.4)	1.8		C	A	灰白	25%	№ 144。SB04-P ₁ 内。	
9	蓋		1.9		A B C	A	灰	50%	№ 194。SB04-P ₁ 内。	
10	蓋	(17.0)	1.3		A B C E	A	灰	5%	№ 151。覆土。	
11	坏	(12.0)	3.6		A C D	D	灰白	25%	№ 85。覆土。	
12	坏		1.5	9.1	A B C	A	灰	35%	№ 25。覆土。	
13	緑釉皿	(15.0)	1.9		B	A	灰	5%	№ 23。覆土。硬質。K-90号窯式か。	
14	緑釉皿	(15.0)	2.1		B	A	灰	5%	№ 2。覆土。硬質。K-14号窯式か。	
15	灰釉皿	16.0	2.4		A B	A	灰	5%	№ 73。覆土。灰釉漬け掛けか。産地不明。	
16	灰釉碗	(16.0)	3.1		G	A	灰白	10%	№ 106。覆土。灰釉刷毛塗か。猿投産。	
17	緑釉碗	(17.0)	3.1		B	A	灰	5%	№ 15。覆土。硬質。K-14号窯式か。	
18	坏		1.6	(5.0)	A C	A	灰白	40%	№ 1。覆土。	
19	坏		3.7		A D	D	暗褐	10%	№ 103。覆土。酸化焰。内面黒色。	
20	坏	(16.0)	6.9		A B D F	B	にぶい褐	25%	№ 153, 182。覆土。焼きむらあり。	
21	甕		2.9	4.2	A B C D	A	褐灰	80%	№ 127。覆土。	
22	壺		2.7	(11.8)	A B C E	A	にぶい橙	15%	№ 187。床面。	
23	刀子	残長6.8cm。最大幅1.15cm。								覆土。切先・柄部欠損。刃は内反り気味。

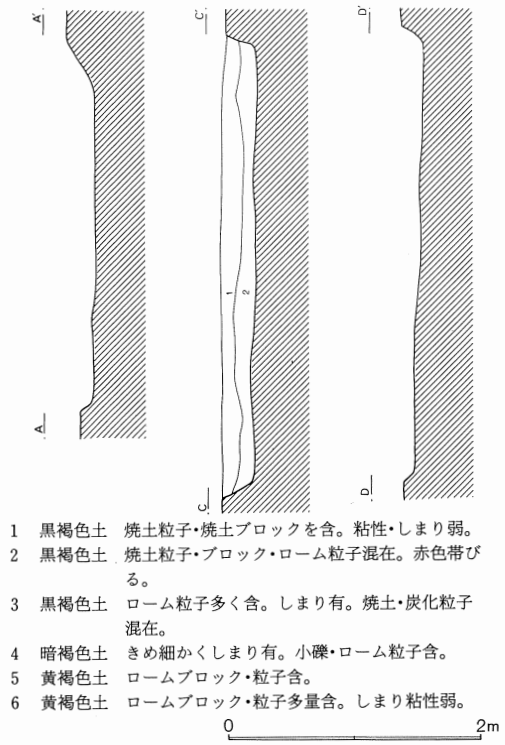
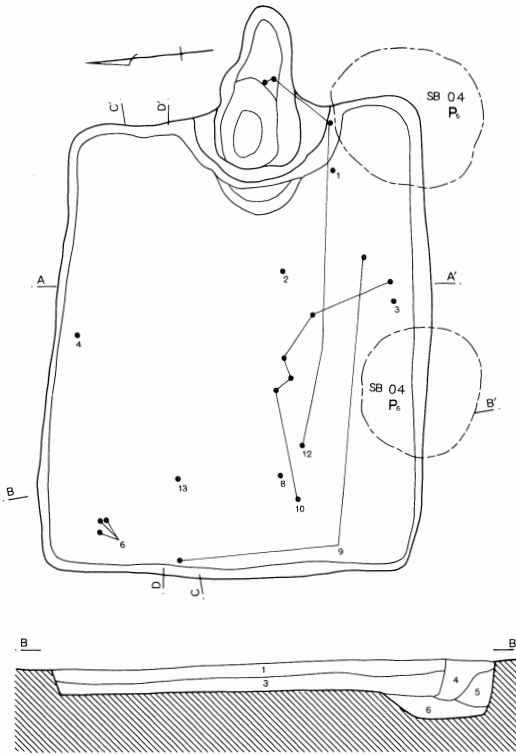
第48号住居跡(第102図)

O-7区に位置する。第4号掘立柱建物跡と重複するが、土層断面の観察により、本住居が新しいものと確認された。形態はやや歪んだ長方形を呈し、規模は長軸3.53m、短軸2.86m、深さ0.15m前後を測る。主軸方位はS-80°-Eを示す。

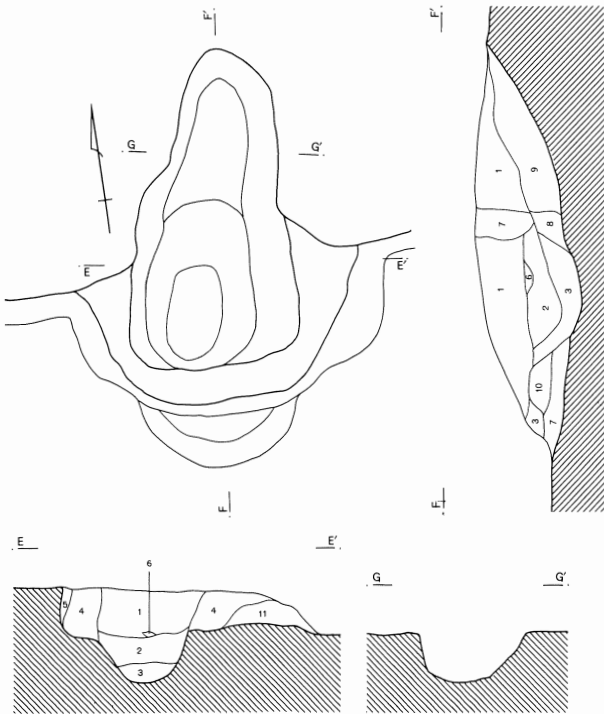
床面はやや凹凸をもつが、壁際を除いて全体に堅い。覆土は混入物の差で分層されるが色調には大きな変化はない。

カマドは東壁中央に設置される。燃焼部から煙道部は壁外に張り出し、掘り込みは比較的深い。袖は明確ではないが焼土粒子を含む褐色土が認められた。また焚口部を囲むように僅かな高まりの粘土帯が堤状に巡っていたが、性格は明らかではない。第7層上面が火床面に相当すると考えられる。ピット・貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

出土遺物は190点あるが、小片が多い。器種的には土師器坏、碗、甕、台付甕、壺、須恵器坏、須恵器碗、蓋、甕、壺類がある。須恵器坏と土師器甕が主体を占めるが、多くは覆土から出土している。土師器坏と碗は混入である。第103図4・10はほぼ床面から出土したもので住居に伴うものと考えられる。9・12の甕はかなり離れた位置で接合している。全体に年代差は少なく稲荷前XIV期に比定されよう。



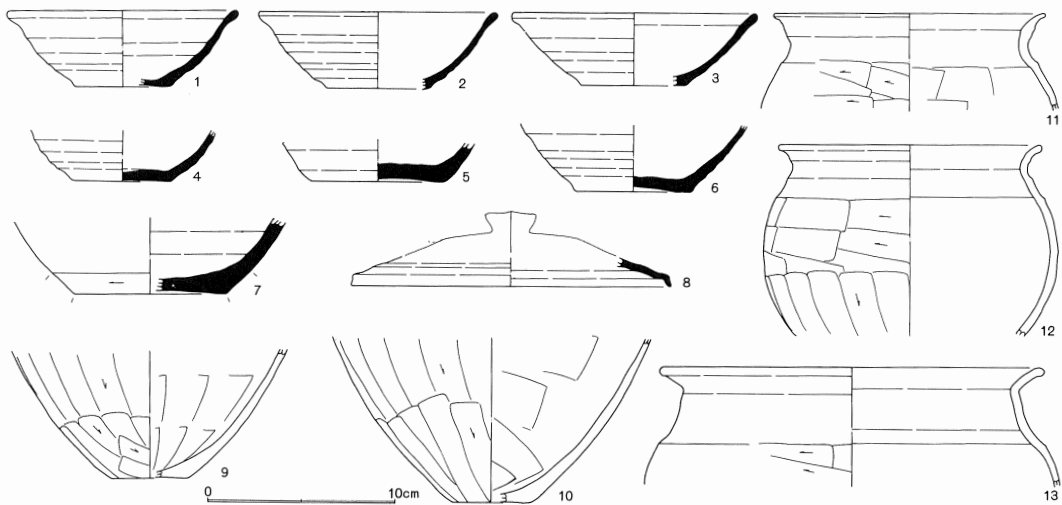
- 1 黒褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを含。粘性・しまり弱。
- 2 黒褐色土 焼土粒子・ブロック・ローム粒子混在。赤色帯びる。
- 3 黒褐色土 ローム粒子多く含。しまり有。焼土・炭化粒子混在。
- 4 暗褐色土 きめ細かくしまり有。小礫・ローム粒子含。
- 5 黄褐色土 ロームブロック・粒子含。
- 6 黄褐色土 ロームブロック・粒子多量含。しまり粘性弱。



カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子多量含。粘土ブロック混在。炭化粒子含。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒子含。1層に比べ微粒子。粘土粒子含。しまり有。
- 3 黄褐色土 ロームブロック混在。1層を含。
- 4 暗褐色土 2層に近似するが色調はやや明るい。粘土粒子含。
- 5 黄灰褐色土 (粘土層) 焼土粒子若干含。
- 6 黒褐色土 炭化物多く含。(灰層)
- 7 褐色土 きめ粗く、焼土・炭化粒子混在。
- 8 黄褐色土 ロームブロック含。しまり弱。
- 9 黄褐色土 ローム粒子・ブロック含。
- 10 灰白色土 粘土層。
- 11 褐色土 粘質土。焼土粒子含。

第102図 第48号住居跡・カマド(L=31.30m)



第103図 第48号住居跡出土遺物

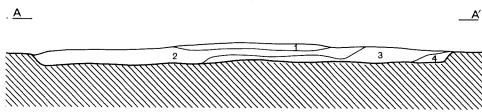
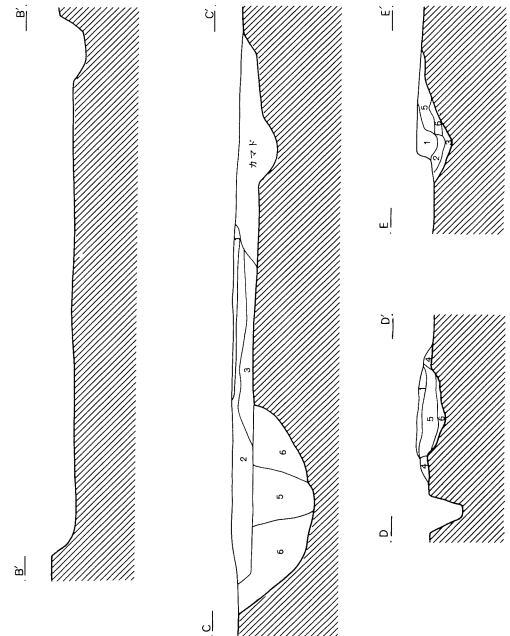
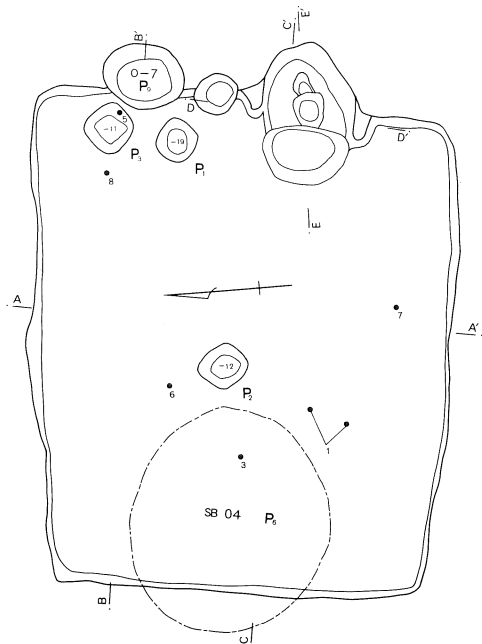
第48号住居跡出土遺物観察表(第103図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.0)	4.0	5.0	ABD	C	にぶい橙	30%	№132。覆土。
2	坏	(12.6)	4.0	(5.4)	AC	B	灰白	20%	№71。覆土。
3	坏	12.8	3.8	5.5	AC	C	橙	50%	№96。覆土。
4	坏		2.7	(5.0)	ACD	B	灰	25%	№120。床面。
5	埴		2.0	(7.0)	ABD	A	青灰	60%	覆土。底部内面磨滅。
6	坏		3.5	6.0	ABE	A	灰白	75%	№115, 146, 169。覆土。
7	甕		4.0	(8.0)	ACD	A	灰	25%	覆土。
8	蓋	(17.0)	1.5		AC	A	灰	10%	№139。覆土。
9	甕		6.7	(4.0)	ABF	A	橙	25%	№160, 187。覆土。
10	甕		8.6	(4.0)	ADE	A	にぶい橙	35%	№41, 45, 49, 57, 97, 110。床面。
11	甕	(14.2)	5.0		AE	A	にぶい褐	15%	カマド上面。
12	甕	(13.7)	10.2		A EF	A	橙	20%	№134, 207, 209, 214。覆土。カマド内上層。
13	甕	(20.0)	6.3		A EF	A	にぶい橙	30%	№152。覆土。

第49号住居跡(第104図)

O-7区に位置し、第48号住居跡の南東に隣接する。第4号掘立柱建物跡と重複するが、土層観察により本住居が新しいことが確認された。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.96m、短軸3.32m、深さ0.10~0.15mを測る。主軸方位はS-84°-Eを示す。

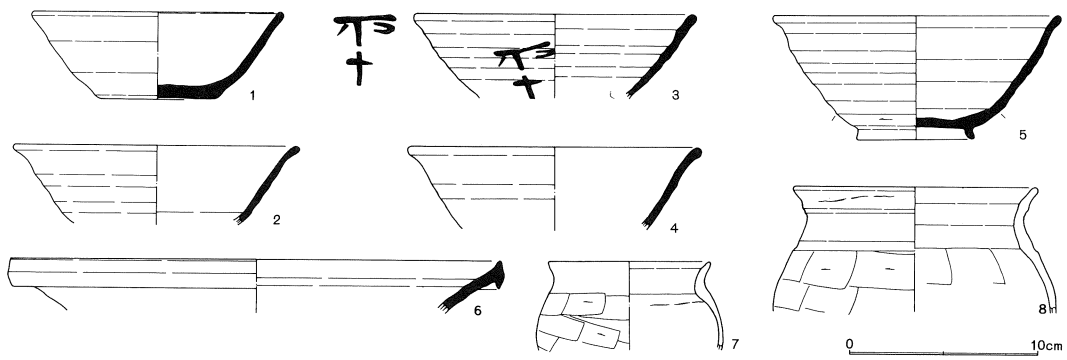
床面は概ね平坦であったが、特に堅い箇所はみられない。覆土は4層に区分され、粘土の混入が目立つ。人為的な堆積とすべきであろうか。5・6層は掘立柱建物跡ピットの埋土である。カマドは東壁に設置される。焚口と推定される部分が最も深く、燃烧部は緩やかに壁外に延びている。袖は断面では確認されたが、平面的にはあまり明確には検出されなかった。ピットは4本検出されたが、遺構に伴うか否か不明であった。壁溝・貯蔵穴は存在しない。出土遺物は73点検出された。第105図1・5・7はほぼ床面から出土した。3は墨書土器で良く判読できないが、「平」であろうか。その他に灰釉小瓶の肩部片と灰釉埴片がある。稻荷前XIII期に比定される。



- カマド
- 1 暗褐色土 焼土・粘土の細粒子多量混入。
 - 2 暗褐色土 砂質粘土・焼土少量混入。
 - 3 褐色土 シルト質。ソフトローム多量混入。
 - 4 暗黄灰色土 褐色土に多量の粘土混入。
 - 5 暗黄褐色土 砂質粘土・白色粘土・焼土混在。シルト質。
 - 6 黄灰褐色土 白色粘土主体。黒色シルト混在。

- 1 暗褐色土 白色粘土・焼土多量混入。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック少量混入。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量混入。
 - 4 暗黄褐色土 ロームブロック・ソフトローム多量混入。
 - 5 黒褐色土 焼土・ローム粒子多。柱抜き取り痕。
 - 6 暗黄褐色土 ソフトローム・ロームブロック多量混入。掘方埋土。
- 0 2m

第104図 第49号住居跡(L=31.30m)



第105図 第49号住居跡出土遺物

第49号住居跡出土遺物観察表(第105図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.0)	4.6	6.0	ABE	C	褐灰	45%	No. 29, 33. 床面。歪みあり。
2	坏	(14.8)	4.2		ABD	B	灰	20%	覆土。
3	坏	(14.6)	4.5		ABE	B	にぶい黄橙	25%	No. 55. SB04P6内。体部外面に不明墨書あり。
4	坏	(15.2)	4.4		ABDE	A	橙	10%	覆土。酸化焙焼成。白色針なし。

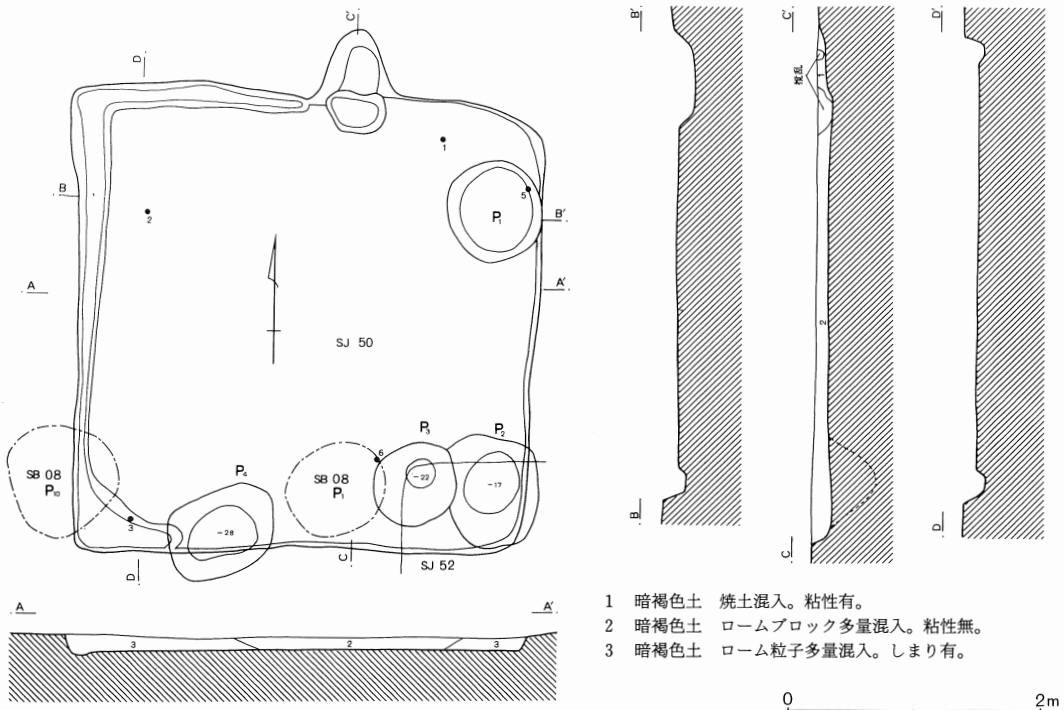
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
5	埴	15.0	6.6		A C D	B	褐灰	60%	No.11。床面。
6	甕	(26.0)	2.8		A C D	B	灰	5%	No.26。覆土。
7	小型甕	(8.5)	4.7		A B D E	A	にぶい黄橙	20%	No.68。床面。
8	小型甕	(12.8)	6.7		A B E	A	橙	20%	No.37。覆土。

第50号住居跡(第106図)

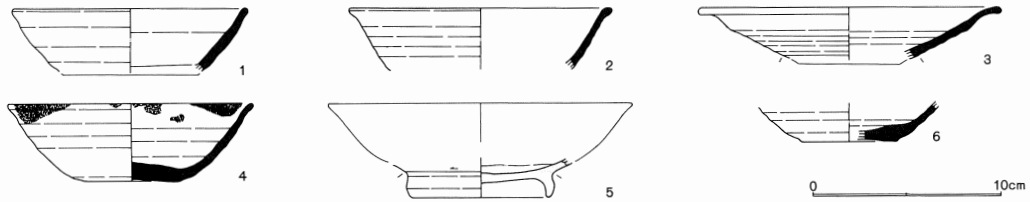
O-9区に位置する。第52号住居跡と南壁部で一部重複するが、切合関係は明瞭に把握できなかった。また第8号掘立柱建物跡との重複は本住居の方が新しいものと判断された。形態は方形を呈し、規模は長軸3.67m、短軸3.64m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位はN-1°-Wを示す。

床面は概ね平坦であった。覆土は暗褐色土で構成されるが、深さが浅いために堆積環境は明確ではない。壁溝は西壁を中心に約半周する。カマドは北壁に設置されるが、攪乱を受け遺存状態は悪い。燃焼部は壁外に突出するが、掘り込みは浅い。袖は検出されなかった。ピットは4本検出されたが、住居の柱穴に相当するものはみられない。P₁は深さ0.12mの土壌状を呈し、貯蔵穴の可能性はある。P₂~P₄に関しては住居に伴うものではない。床面の状態や遺物の出土状態から見ると住居よりも古い可能性がある。

出土遺物は47点検出された。須恵器坏類を主体とするが、確実に住居に帰属する遺物はない。第107図4は確認面から検出されたもので、口縁部に油煙状の有機物が付着する。5は灰釉陶器埴で断面三日月状の高台をもち、東濃産と推定される。稻荷前 XIII 期に中心をおく住居であろう。



第106図 第50号住居跡(L=31.10m)



第107図 第50号住居跡出土遺物

第50号住居跡出土遺物観察表(第107図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.4)	3.4		A C	A	灰	20%	№8。覆土。
2	坏	(14.0)	3.2		A B E F	B	橙	10%	№5。覆土。
3	皿	17.6	2.7		A	A	青灰	15%	№16。覆土。
4	坏	12.8	4.2	5.0	A C E	C	灰	55%	確認面。口縁に油煙付着。
5	灰釉埴		2.1	7.1	A	A	灰白	90%	№13。P ₁ 内覆土。灰釉刷毛塗か。東濃産。
6	坏		2.1	(5.0)	A B C	C	灰	45%	№27。覆土。

第51・52号住居跡(第108図)

O-9区に位置する。第51号住居跡は第52号住居跡・第9号掘立柱建物跡と重複している。後者との切り合いは土層観察により、掘立柱建物を切って構築されていることが確認された。しかし、前者との切り合い関係については、当初第51号住居跡の存在に気付かなかったため正確に把握できなかった。一応カマドの有無及び出土遺物から第52号住居跡が新しいものと判断した。

第51号住居跡は平面形態が横長の長方形を呈し、規模は長軸4.66m、短軸3.21m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は黒色土で構成されるが、深度が浅いために堆積状態の詳細は把握できなかった。カマドは東壁の南東コーナーに寄った位置に設置される。燃烧部は皿状に掘り込まれ、袖部は明確ではないが粘土が僅かに堆積していた。焚口部下面には第9号掘立柱建物柱穴が位置する。カマド覆土が完全に覆っており、切り合い関係は明白である。ピットは3本検出されているが、伴うか否か明確ではない。

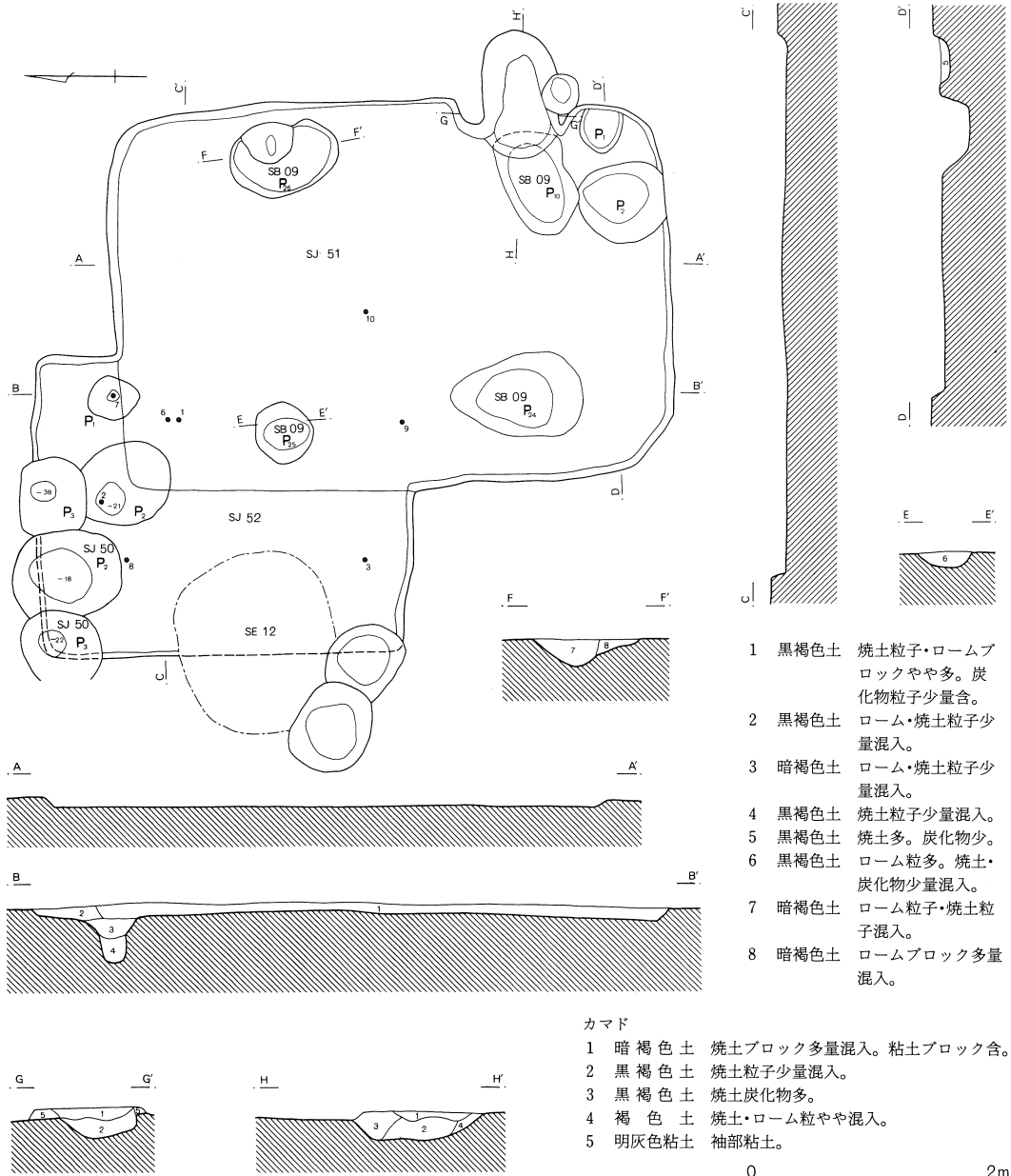
第52号住居跡は第51号住居跡南西に位置し、第50・51号住居跡、第12号井戸跡と重複する。住居跡の確認が遅れたため、重複遺構との新旧関係の把握に問題を残してしまった。新旧関係はあまり明確ではないが、一応50→52→51号住居跡と推定される。第12号井戸跡は出土遺物も少なく、正確な時期は明らかではないが、井戸跡掘削時の土層観察では床面と思われる硬化面は確認されなかった。第12号井戸跡の方が新しいものと推定しておきたい。

形態は長方形を呈し、規模は長軸3.14m、短軸2.50m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位はN-2°-Eを示す。

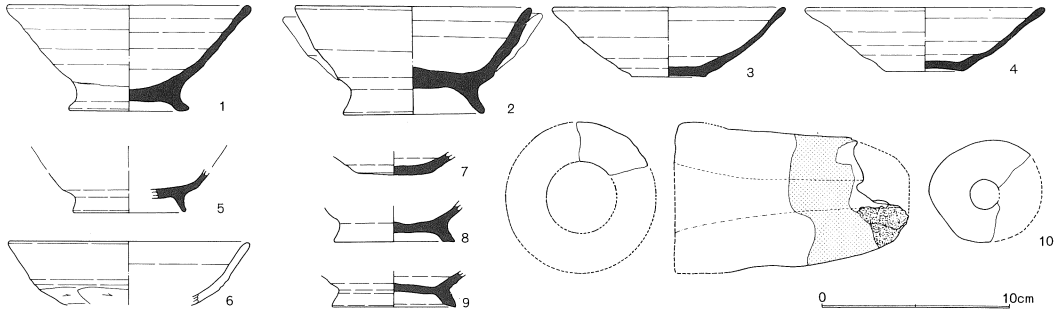
床面はほぼ平坦で、第51号住居のそれとほぼ同一レベルで続く。覆土の様相は不明である。ピットは4本検出された。P₁とP₂は遺構に伴うものと推定されるが、他のピットの帰属は不明である。カマド等の諸施設は検出されなかった。

第51・52号住居跡から出土した遺物は94点ある。須恵器坏類を主体に甕・瓶類、土師器甕を若干

含む。切り合い関係の把握に誤りがなければ、第109図1・6・9・10は第51号住居跡、2～4・7・8は第52号住居跡に帰属することになる。2の高台坪はP₂底面から検出されている。鞆羽口(10)は羽口としては小型に属し、おそらく鍛冶工程に使用されたものと推定される。先端部はガラス状に溶解し続く部分は還元されている。しかし鍛冶滓や鍛冶炉は発見されておらず、この場で小鍛冶作業を行なったものではなかろう。両住居の須恵器は酸化焙焼成によるものが主体を占め、大きな時期差は認められない。稲荷前 XIV 期に比定される。



第108図 第51・52号住居跡(L=31.10m)



第109図 第51・52号住居跡出土遺物

第51・52号住居跡出土遺物観察表(第109図)

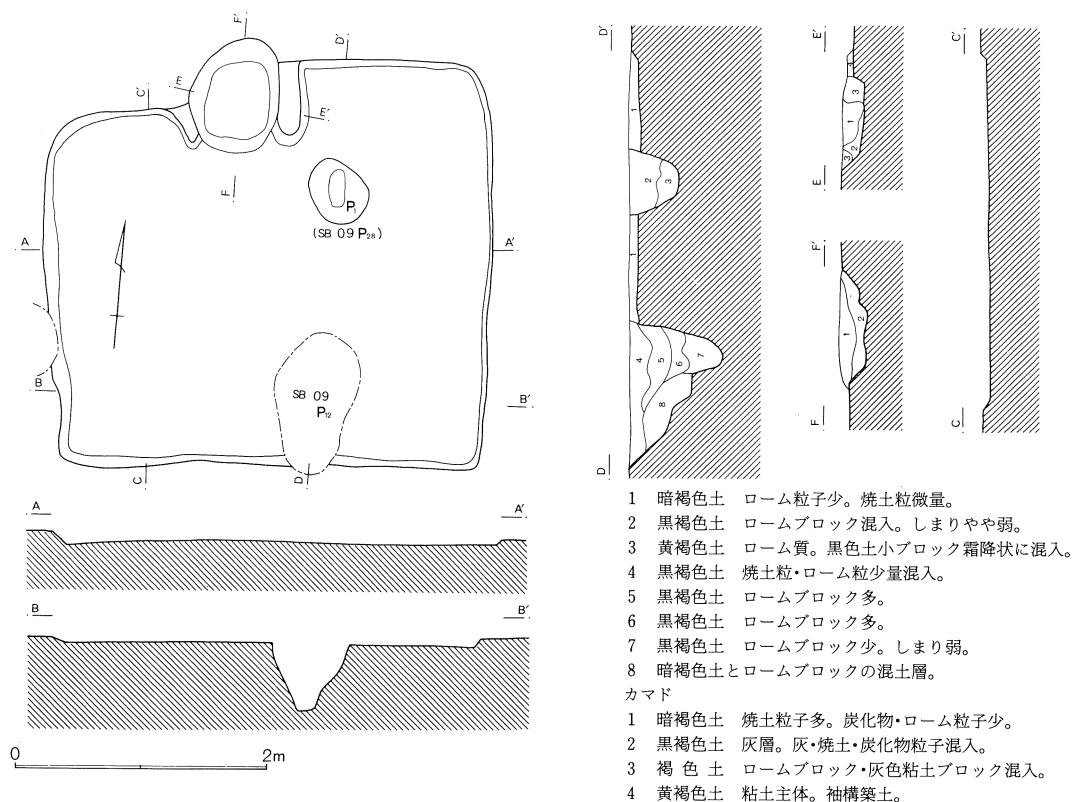
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	高台杯	(12.8)	5.6	6.2	A F	B	橙	30%	№7。床面。酸化焰焼成。
2	高台杯	12.8	5.7	7.2	A C D F	C	にぶい橙	100%	P ₂ 。楕円形に歪む。酸化焰焼成。
3	杯	(12.2)	3.7	4.0	A B F	B	黄橙	25%	№15。床面。
4	杯	12.5	3.4	4.1	A B F	B	浅黄橙	25%	P ₂ 。覆土。
5	高台杯		2.2	6.0	A C	B	灰	20%	覆土。
6	杯	(12.6)	3.4		A C D E	A	にぶい橙	25%	№6。床面。
7	杯		1.2	4.1	A C E	A	にぶい橙	80%	№1。覆土。
8	高台杯		2.2	6.4	A B E	A	橙	85%	№3。覆土。酸化焰焼成。
9	高台杯		1.9	6.6	A B	A	橙	70%	№10。覆土。底部糸切り痕残す。酸化焰焼成。
10	鞍羽口	長さ12.5cm。			A B D	C	橙	50%	№11。覆土。先端部はガラス化。



▲第I群 全景

第53号住居跡(第110図)

O-9・10区に位置する。第9号掘立柱建物跡と重複し本住居跡の方が古い。形態は不整形を呈し、カマドの左右では壁ラインが大きくずれている。規模は長軸3.60m、短軸3.23mを測り、深さは0.05mを測る。主軸方位はN-4°-Wを示す。床面は平坦で覆土は暗褐色土単層であった。カマドは北壁に設置され燃焼部は皿状に掘り込まれる。袖には粘土が残存していた。遺物は土師器坏、甕を主に計30点検出されたが、須恵器は混入と考えられる。図示し得るものはないが、甕は厚手で、坏には有段口縁の坏と内面に沈線をもつ赤彩坏が存在し稻荷前IV乃至V期に比定されよう。



第110図 第53号住居跡(L=31.00m)

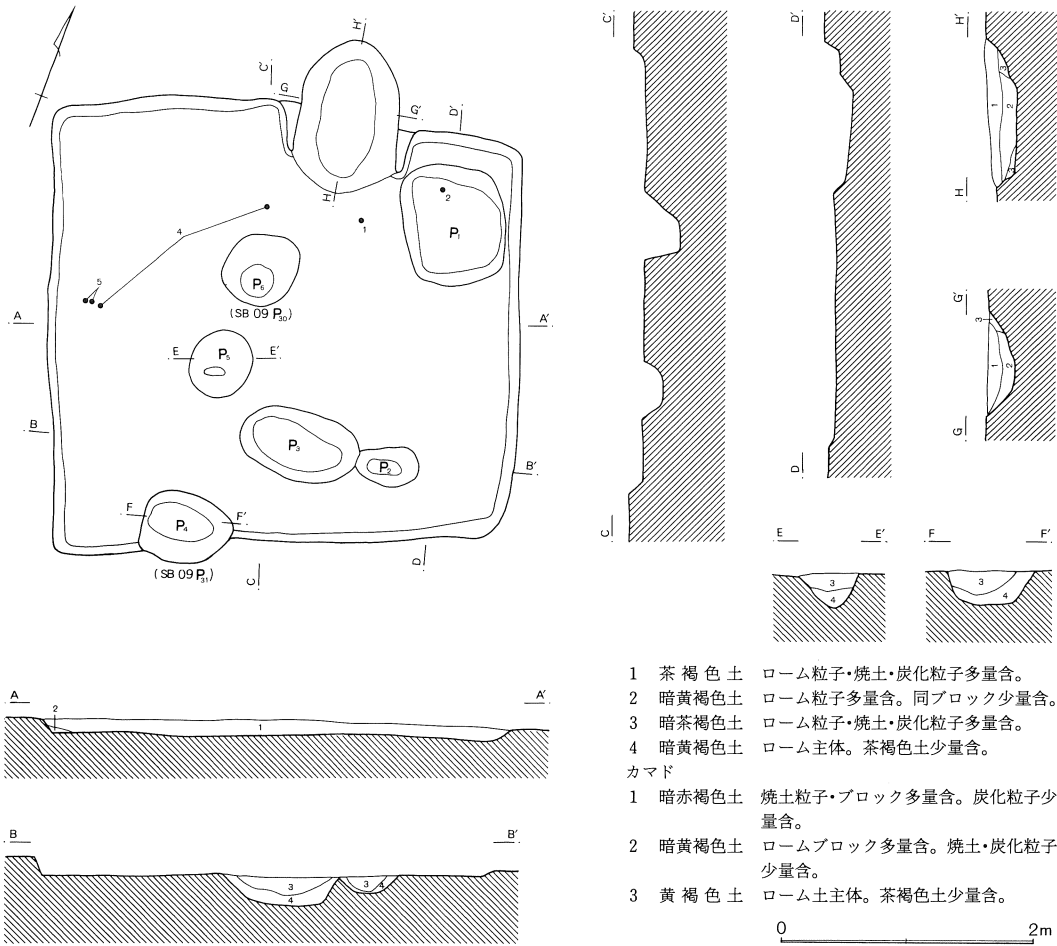
第54号住居跡(第111図)

O-10区に位置する。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸3.75m、短軸3.50m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位はN-20°-Wを示す。

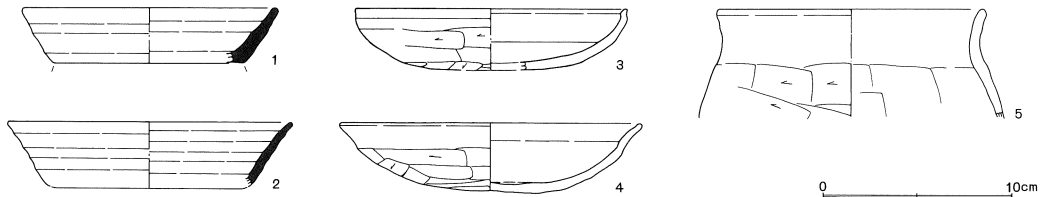
床面は緩やかな凹凸をもつ。カマド前面から中央部は比較的堅いが壁際がやや軟弱であった。覆土は茶褐色土を基調とし、大きな土層変化はみられなかった。カマドは北壁に設置され、燃焼部底面は皿状に掘り込まれている。袖は褐色系の粘土で構成されるが、遺存状態は良くない。ピットは6本検出された。P₁は位置関係から貯蔵穴と考えられる。P₄とP₆は共に第9号掘立柱建物跡の柱穴に相当する可能性が高い。

出土遺物は60点検出された。大半は土師器甕で、須恵器の構成比は低い。第112図4は床面よりや

や浮いた位置で検出された。稲荷前VI期に比定される。



第111図 第54号住居跡(L=30.90m)



第112図 第54号住居跡出土遺物

第54号住居跡出土遺物観察表(第112図)

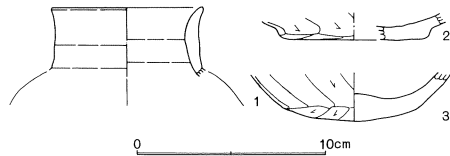
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.4)	2.9		A B C	A	灰	15%	№8.覆土。
2	坏	(15.0)	3.4		A C D	B	灰	5%	№19. P ₁ 内覆土。
3	坏	(14.4)	3.0		A D	A	橙	20%	カマド.覆土。
4	皿	15.9	3.7		A B E F	C	橙	80%	№60, 65.覆土。
5	小型甕	(14.0)	5.7		A B E	A	明赤褐	20%	№63, 64.床面。

第55号住居跡 (第114図)

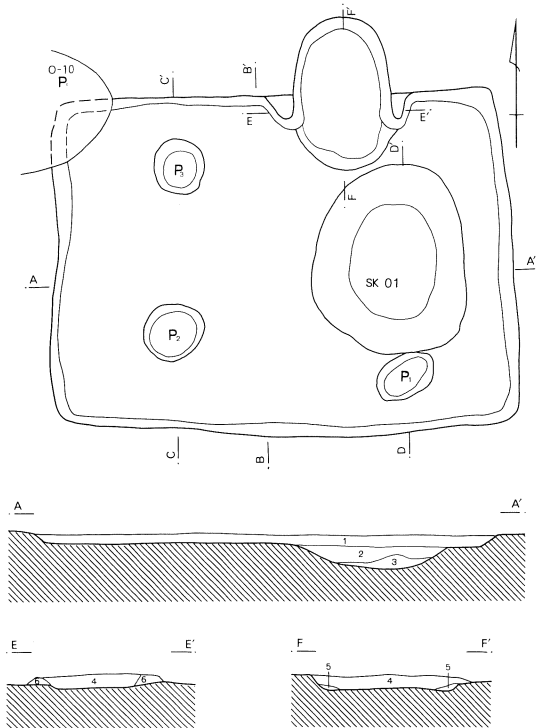
O-10区に位置する。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸3.68m、短軸2.70m、深さ0.10m前後を測る。主軸方位はN-4°-Wを示す。

床面は概ね平坦で、全体的に堅く締まっていた。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土で構成され、土層変化は観察されなかった。カマドは北壁の中央から東に寄った位置に設置される。底面は比較的平坦で、鍋底状を呈する。覆土は2層に分かれ、上層には焼土の含有は少ない。袖はあまり明確なものではなく、褐色粘土が僅かに堆積していた。ピットは3本検出されているが、どれも深さ約10cm程と浅く住居の柱穴とは思われない。土壌は1基検出された。住居に伴う床下土壌と考えられる。

出土遺物は全て土師器で16点に留まる。時期は不明確であるが、7世紀代に含まれる可能性が高いものと推定される。



第113図 第55号住居跡出土遺物



第114図 第55号住居跡(L=30.80m)

- 1 暗茶褐色土 ロームブロック多量含。焼土粒子僅かに含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量含。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒少量混入。
- 4 暗茶褐色土 ローム粒子多量混入。ロームブロック・焼土粒子を少量混入。
- 5 暗黄褐色土 ローム・焼土粒子多量含。
- 6 褐色粘土

0 2m

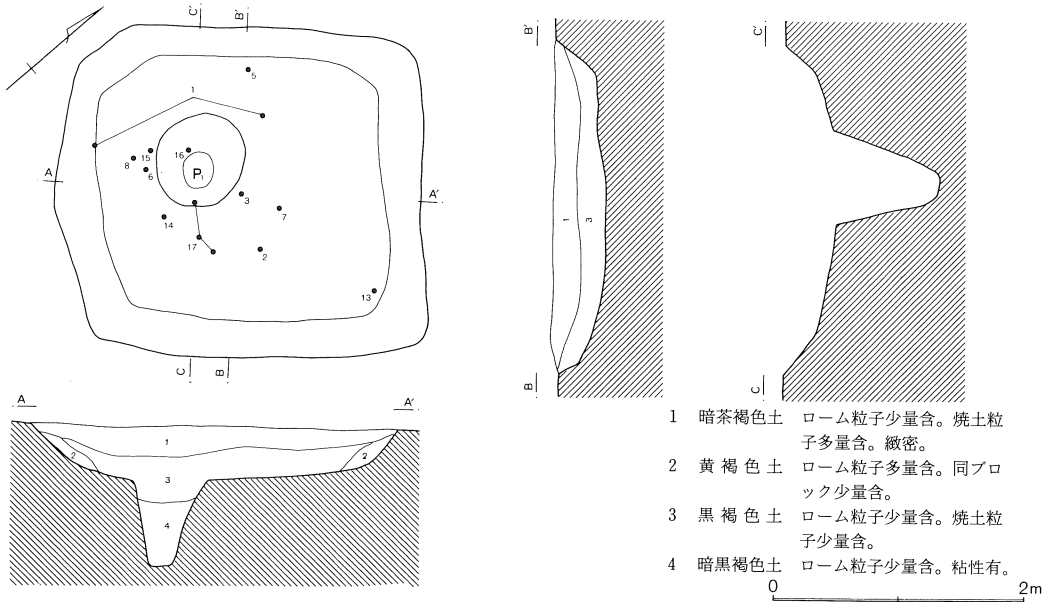
第55号住居跡出土遺物観察表 (第113図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	壺	(8.0)	3.7		A D	A	にぶい褐	30%	No.124.覆土。
2	壺		1.4	(7.0)	A D E	B	褐	25%	覆土。
3	壺		2.5	7.1	A B C	B	橙	90%	覆土。

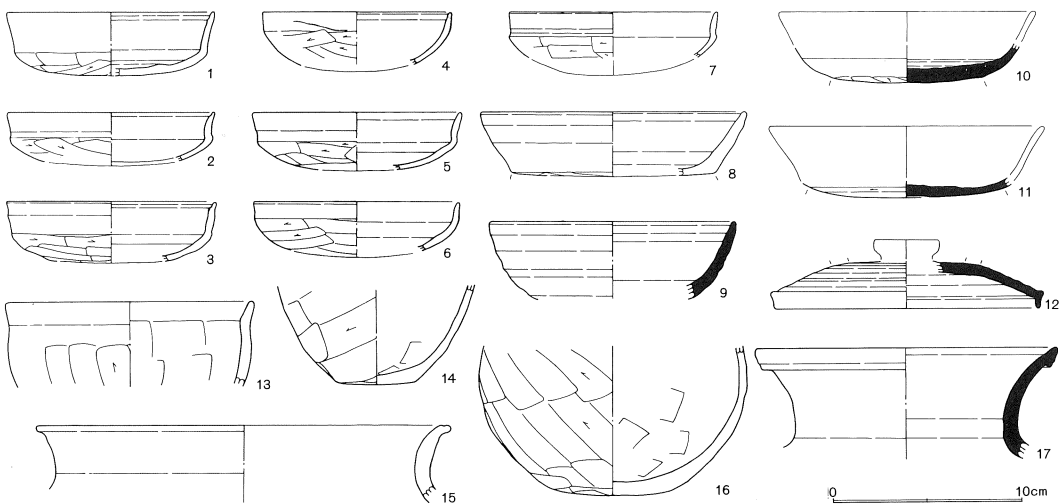
第56号住居跡(第115図)

N-10区に位置し、第12号掘立柱建物跡の東に隣接する。形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸2.70m、短軸2.60m、深さ0.30~0.40mを測る。主軸方位はN-57°-Wを示す。

床面は全体的に堅く踏み締められているが、水平とならず、中央部に向かって緩やかに傾斜している。壁の立ち上がり角度は緩やかである。床面の中央からやや西に寄った位置にピットが1本穿たれていた。土層観察に拠れば、住居使用時には開口していたものと考えられる。床面からの深さ0.80mと非常に深く、埋土は粘性に富み軟質である。これらの状況から通常の柱穴とは考えられな



第115図 第56号住居跡(L=30.80m)



第116図 第56号住居跡出土遺物

い。カマドや壁溝等の施設も存在せず、一般的な住居とは機能的に異なるものと推定される。性格的には不明とせざるを得ないが、本遺跡では小型の井戸状遺構が数基検出されており、ピットの状況はそれに近いものといえる。土壇状施設を伴う井戸跡の一種であろうか。

出土遺物は234点検出された。土師器の坏と甕の破片が大半を占め、須恵器の構成比は低い。ピット内及びその周辺からの出土量が多い。土師器坏は推定口径11cm前後が主体をなし、口唇部内面に沈線をもつもの(第116図1～4)ともたない一群(5～7)が見られる。8は硬質の土師器坏で底部は手持ちヘラ削りが施される。須恵器が全て伴うかどうかは検討を要する。土師器坏の様相から稲荷前IV～V期に位置付けられよう。

第56号住居跡出土遺物観察表(第116図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	3.3		A C D	A	橙	25%	№121, 168。覆土。
2	坏	(11.0)	3.15		A B	A	橙	20%	№156。覆土。赤彩痕なし。
3	坏	(10.9)	2.6		A B	A	橙	20%	№144。覆土。
4	坏	(10.0)	2.8		B F	B	にぶい橙	20%	P ₁ 覆土。赤彩不明。
5	坏	(11.0)	3.0		A B	A	橙	15%	№163。覆土。
6	坏	(10.8)	2.6		A E	C	橙	40%	№130。P ₁ 覆土。赤彩痕なし。
7	坏	(11.0)	2.4		B	A	橙	15%	№110。覆土。赤彩痕なし。
8	坏	(14.0)	3.4		A D E	B	橙	15%	№31。覆土。硬質土師。底部手持ちヘラ削り。
9	坏	(13.0)	4.1		A C D	B	灰	15%	P ₁ 覆土。
10	坏		2.0	8.0	A C D	B	灰	60%	P ₁ 覆土。底部手持ちヘラ削り後ナデ。
11	坏		1.1	10.4	A C D	A	灰白	80%	覆土。
12	蓋	(14.0)	2.5		A C	C	灰	25%	P ₁ 覆土。
13	鉢	13.0	4.5		A C E	B	橙	20%	№63。覆土。
14	甕		5.2	4.1	A B E	B	にぶい褐	25%	№100。覆土。
15	壺	(20.8)	3.3		A B	A	橙	5%	№124。覆土。
16	小型甕		7.9		A C E	A	にぶい橙	60%	№17。覆土。胴部に二次的の被熱を受ける。
17	壺	(15.8)	5.9		A B C	D	灰白	15%	№46, 90, 112。覆土。

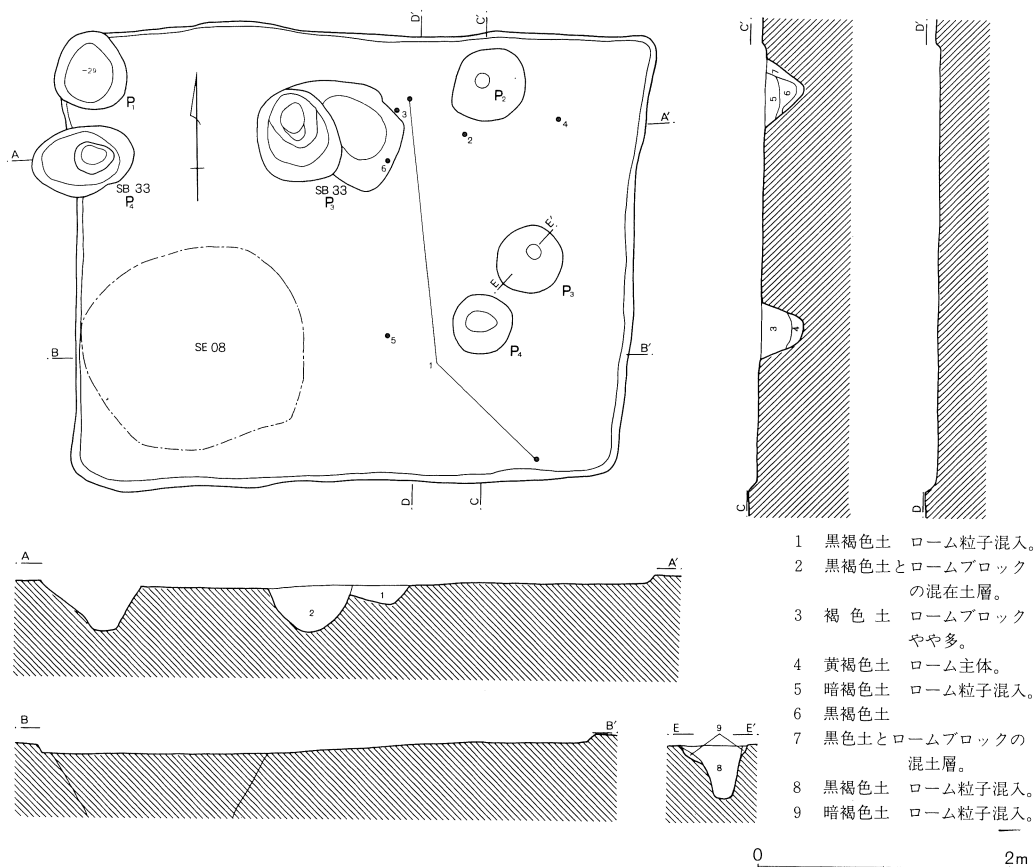
第57号住居跡(第117図)

N-9区に位置する。第8号井戸跡が住居内に存在するが、本住居の床面が覆っており井戸跡廃絶後に住居が構築されたことが判明した。また第33号掘立柱建物跡が重複し、本住居の方が新しいものと判断された。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.44m、短軸3.51m、深さ0.05～0.10mを測る。主軸方位は南壁を基準にすると、S-89°-Wを示す。

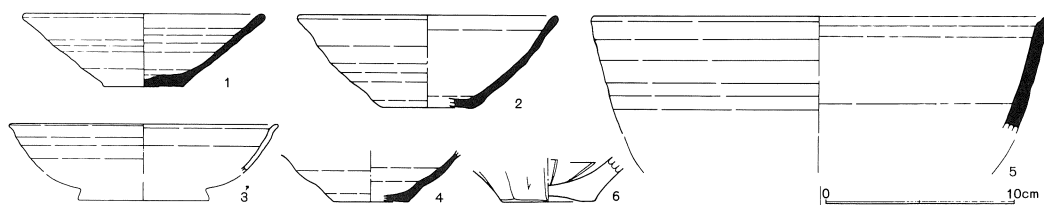
床面はやや凹凸が顕著で、井戸跡周辺が若干低い傾向がある。覆土はローム粒子を少量含む褐色土で構成され、土層変化は観察されなかった。カマドは存在せず、住居跡というよりも竪穴状遺構とすべきであろうか。ピットは4本検出された。伴うピットは明確にできなかったが、P₂・P₃には柱を抜き取った痕跡が観察された。

出土遺物は49点検出された。器種的には須恵器坏が大半を占め、須恵器甕、鉢、土師器甕、緑釉碗が存在する。須恵器坏は半還元焰焼成及び酸化焰焼成を受けた焼き締まりのやや悪い製品が主体となっており(第118図1・2)、また土師器甕底部の整形には、粗砂粒を多量に付着させる「砂底」

技法が用いられている(6)。緑釉坑は緑灰色の釉が掛かり、猿投産と推定される(3)。図示した土器は全て床面、または床面よりも僅かに浮いた位置で出土している。稲荷前XIV期に比定される。



第117図 第57号住居跡(L=30.90m)



第118図 第57号住居跡出土遺物

第57号住居跡出土遺物観察表(第118図)

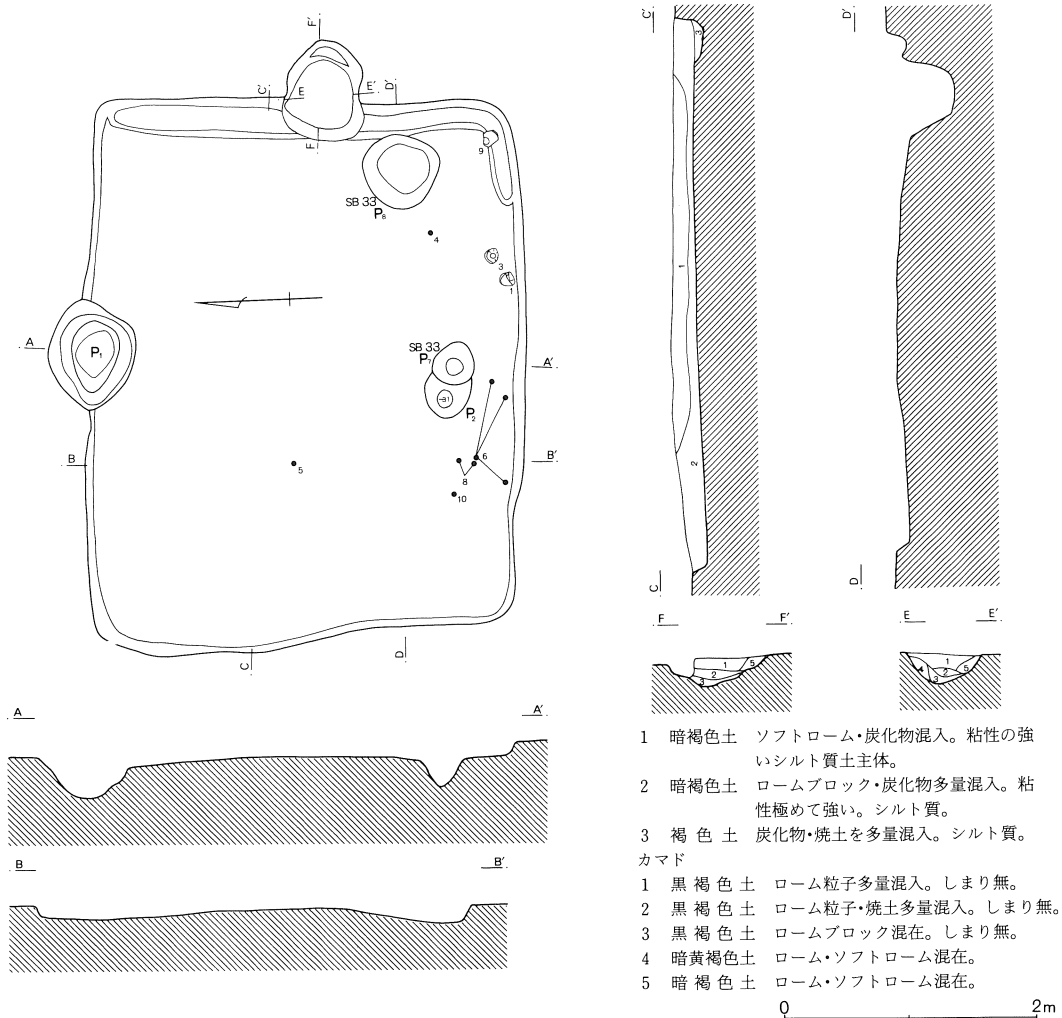
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.6	3.9	4.2	A B C	A	橙	75%	№12, 28. 床面。
2	坏	(13.6)	4.8	(4.9)	A C E	C	橙	20%	№18. 床面。
3	緑釉坑	(14.0)	2.6		J	A	灰白	10%	№15. 下層。猿投産。
4	坏		2.7	(4.0)	A C	C	灰白	25%	№24. 床面。
5	鉢	(24.0)	6.2		A B	B	灰白	10%	№27. 床面。
6	甕		2.3	(5.0)	A B E	A	にぶい橙	35%	№13. 覆土下層。粗砂粒多量に付着。

第58号住居跡(第119図)

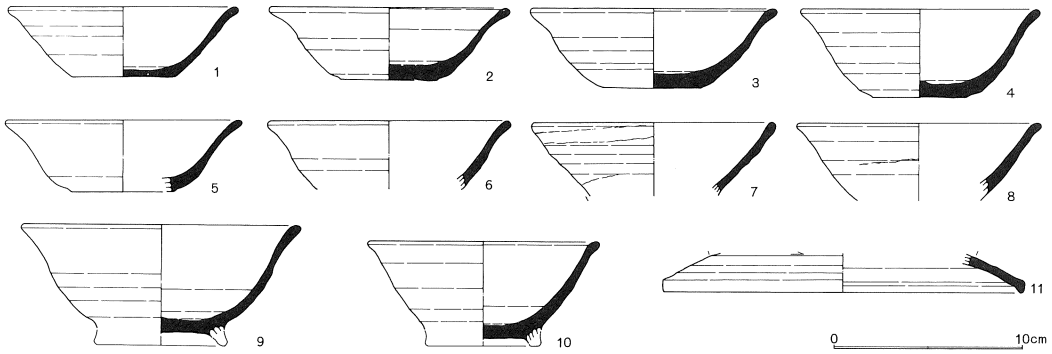
N-8・9区に位置し、第33号掘立柱建物跡と重複する。掘立柱建物跡P₇上面に床が貼られていたことから本住居の方が新しいものと考えられる。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.38m、短軸3.48m、深さ0.10mを測る。主軸方位はS-88°-Eを示す。

床面は中央部が高く、壁際が低い。床面硬度もこれに対応し、中央部からカマド前面にかけて堅く、壁際が概して軟弱な傾向が認められた。覆土はシルト質の土壌で構成され、自然堆積とは考え難い。カマドは東壁に設置される。燃烧部は壁外に延び、規模はやや小型である。袖は認められなかった。壁溝は東壁から南壁にかけて巡る。ピットは2本存在するが住居に伴う可能性はない。

出土遺物は81点検出された。須恵器坏を主体に埴、甕、土師器甕から構成される。また、灰釉瓶の肩部小片と緑釉埴の小片が各1点出土している。須恵器供膳器の大半は軟質で酸化焰焼成の製品も混在する。残存率の高い土器は、南壁際の床面及び床面よりやや浮いた位置から検出されている。第120図7の坏は砂粒の混入が多い。稻荷前XIII期に比定される。



第119図 第58号住居跡(L=31.10m)



第120図 第58号住居跡出土遺物

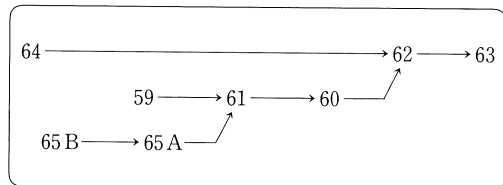
第58号住居跡出土遺物観察表(第120図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.0)	3.7	5.5	A C D F	D	褐灰	45%	№42。覆土。
2	坏	(12.6)	3.9	5.2	A B C D E	B	灰	50%	№54。覆土。
3	坏	12.8	4.2	5.1	A C E	D	褐灰	70%	№44。覆土。
4	坏	12.4	4.7	5.0	A D E	B	にぶい橙	75%	№55。床面。
5	坏	(12.3)	3.7		B C E	D	褐灰	20%	№53。床面。
6	坏	12.6	3.6		A B E	D	黒褐	55%	№10, 13, 18, 21。床面。
7	坏	(12.6)	3.9		A B	A	にぶい黄橙	25%	覆土。産地不明。接合痕3条。
8	坏	(12.7)	4.1		A B E	D	黒褐	35%	№5, 11。床面。
9	高台埴	(15.2)	5.5		A B	C	褐灰	45%	№48。覆土。
10	高台埴	(12.4)	5.1		E	D	褐灰	30%	№6。覆土。
11	蓋	(19.0)	2.0		A B	B	灰	15%	覆土。

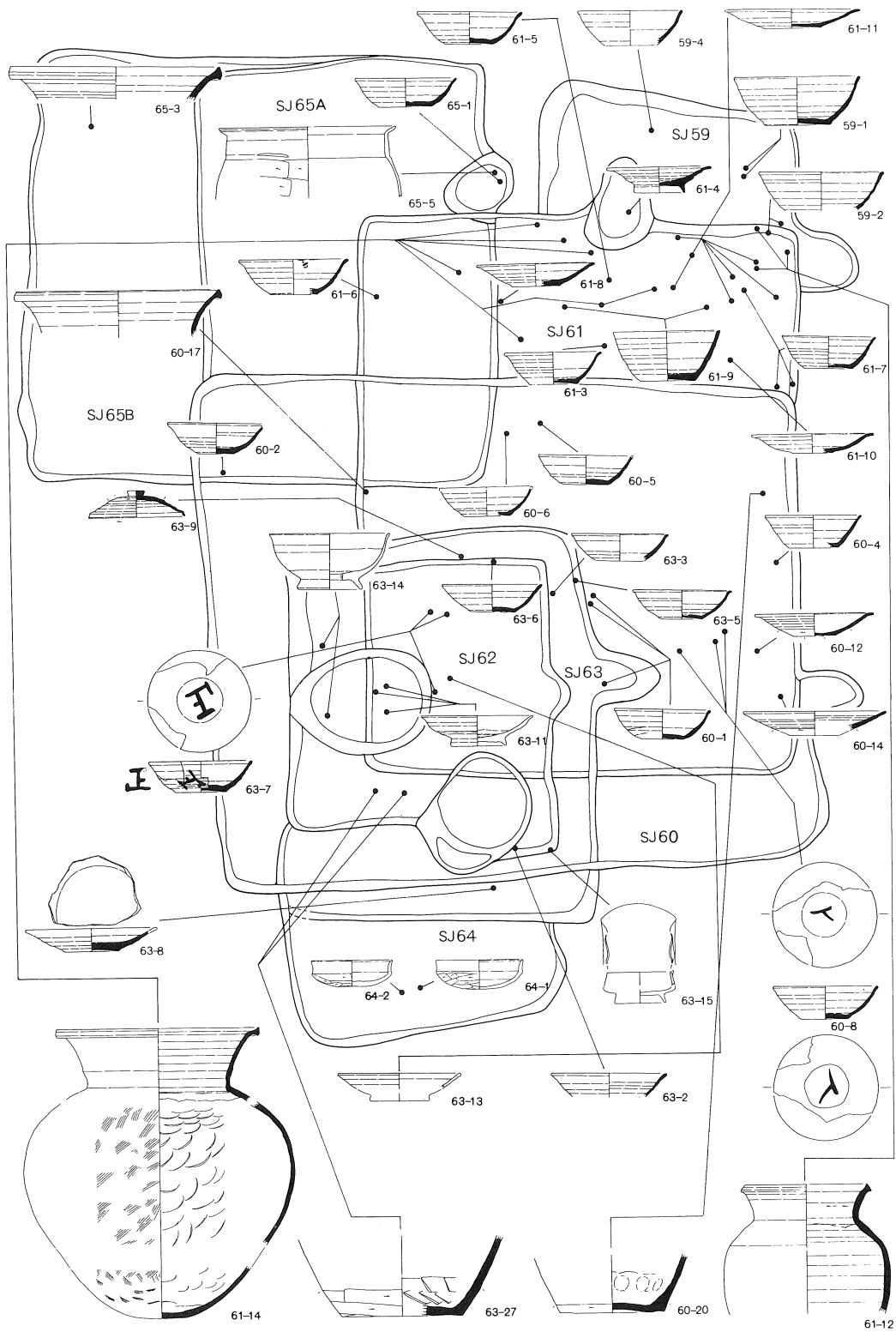
第59～65号住居跡(第121図)

N-8区を中心にして7軒の住居跡(65号住居を2軒とすると8軒)がほぼ同一地点において複雑に重複して構築されていた。調査時点では黒色土中で遺物が多量に出土したために遺構の把握が難しく、かつ出土遺物から見ても近接しており時期的な分離が容易ではなく、遺構数や土層断面における重複関係の想定にやや矛盾をきたしてしまった。ここで示した遺構及び新旧関係は整理時に推定したものである。また遺物の帰属に関しても同様であるため、註記番号とは掲載住居が異なる場合がある。一応土層観察や遺物から把握された新旧関係を示せば以下の様になる。

このうち最も古いのは第64号住居跡で出土した土師器坏から7世紀後半と推定される。他の住居群は9世紀中葉から後半にかけて相次いで構築されたと考えられる。第60・61号住居跡は該期としては大型住居の部類に属し、おそらく主軸を90°振



って建て替えたものであろう。同様な建て替えと思われる例は第62・63号住居、第65A・B号住居にも見られ、それぞれ同一主軸方向に拡大または縮小したものと解される。



第121图 第59~65号住居迹遗物分布图

第59号住居跡(第122図)

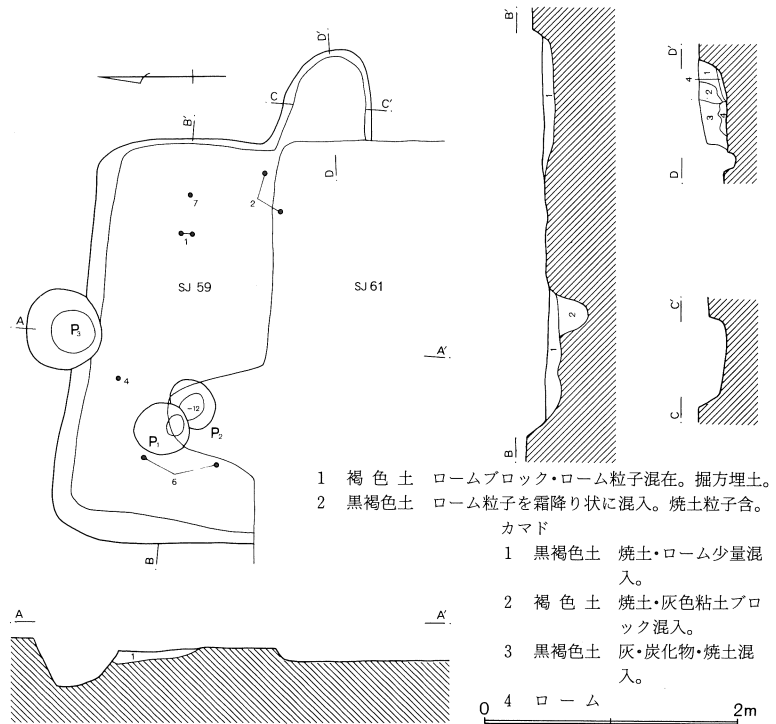
N-8・9区に位置する。本住居を含め、最低でも7軒の住居跡が複雑に重複する密集地域の一面にある。直接的には第61号住居跡と切り合い、本住居跡が古いものと考えられる。

正確な形態は不明であるが、方形を呈する小型の住居跡と推定される。規模は長軸3.20m、短軸1.48m、深さ0.20mを測る。主軸方位は北壁を基準にするとS-81°-Eを示す。

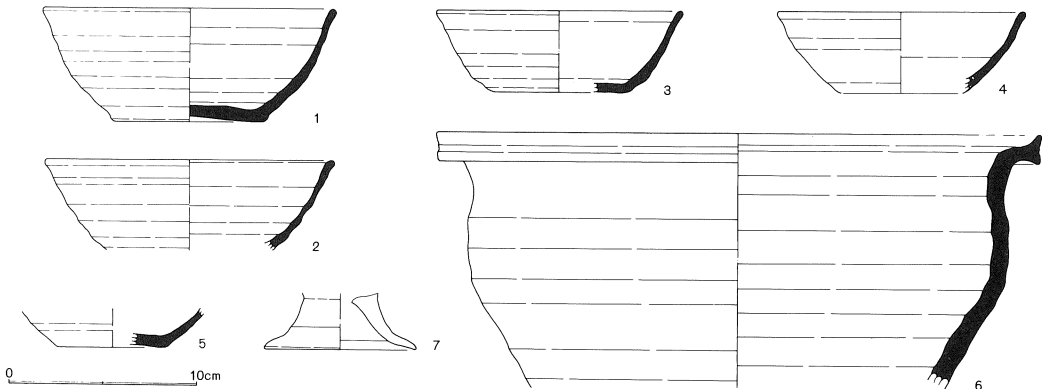
床面はほぼ平坦であるが、中央部を除く周囲は、貼床され軟弱であった。カマドは東壁に設置される。燃焼部は壁外に掘り込まれ、底面は平坦である。袖は検出されなかった。

ピットは3本確認された。P₁・P₂は床面精査の段階で確認され、住居に伴う可能性がある。P₃に関しては住居に伴う可能性はないだろう。壁溝の有無は明瞭に把握できなかった。

出土遺物は、須恵器坏類を主体に48点検出された。図示した以外の器種には須恵器甕、蓋、皿と土師器甕の破片があげられる。稲荷前Ⅻ期に比定されよう。



第122図 第59号住居跡(L=31.00m)



第123図 第59号住居跡出土遺物

第59号住居跡出土遺物観察表(第123図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	埴	(15.4)	6.0	7.8	A C	B	灰	5%	№18, 19。覆土。
2	埴	(15.2)	4.8		A C D F	A	橙	30%	№6, 11。覆土。
3	坏	(13.0)	4.3	(6.8)	A C D	B	灰	15%	覆土。
4	坏	(13.0)	4.1		A B D	A	灰	20%	№23。床面。
5	坏		2.1	(5.7)	A B	B	灰	30%	カマド内。
6	鉢	(32.0)	13.5		A B C	B	灰白	40%	№332。SJ51カマド。覆土。
7	台付甕		3.0	(8.0)	A D E	B	橙	25%	№17。床面。

第60号住居跡(第124・125図)

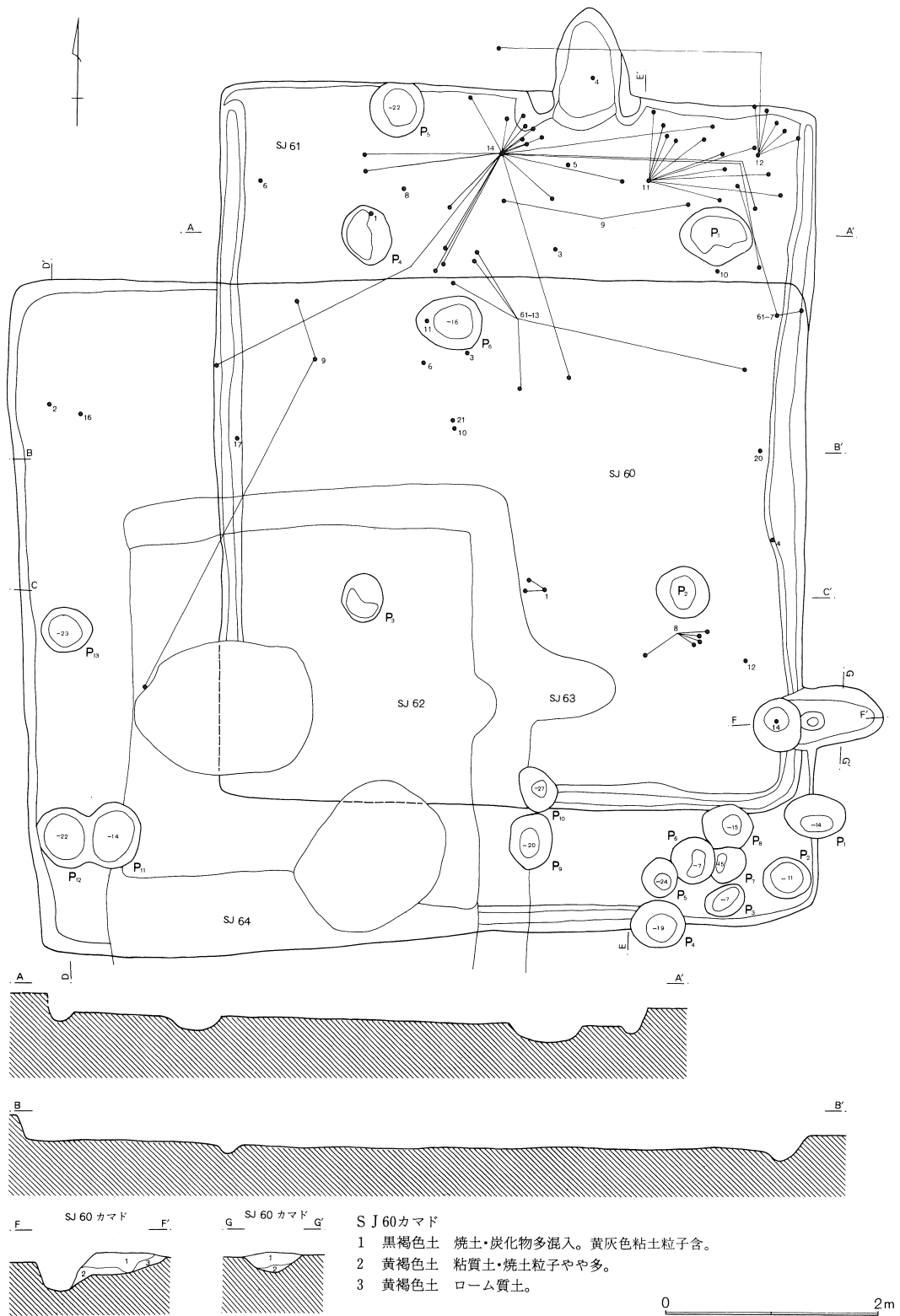
N・O-8・9区に位置し、第61～65号住居跡と重複関係にある。調査時に於ける遺構の把握に混乱があり、新旧関係と遺構の捉え方にやや問題が残るが、第62・63号住居よりも古いことはほぼ誤りないものと考えられる。しかし、第61号住居跡との切り合いについては明確にし得なかった。土器様相から見る限り本住居の方が若干新しい様相が認められ、ここでは61号(旧)→60号住居跡(新)という変遷で捉えておきたい。おそらく両住居は連続した時間幅の中で建て替えられたものと推定され、明確な年代差を抽出するのは難しいかも知れない。

また、第65号住居跡との新旧関係は、本住居跡の方が新しいものと推定される。61号と共に長方形を呈する大型住居跡であり、規模は長軸7.40m、短軸6.30m、深さ0.15m前後を測る。主軸方位はN-87°-Eを示す。

床面はやや凹凸をもち一定しない。覆土は暗褐色系の土で構成され、土層変化及び堆積状態の詳細は明らかにできない。

カマドは東壁の南東コーナーに寄った位置に設置される。燃焼部は壁外に位置し、掘り込みは浅い。焚口部のピット状の掘り込みには焼土が多量に含まれ締まりのない土質であり、カマドの一部と考えても良からう。全体に遺存状態はあまり良好ではなく、袖は検出されなかった。特に左袖の状況は61号住居との切り合い関係を把握する上で重要であるが、残念ながら明確にできなかった。伴う柱穴も明確ではない。南東コーナーに集中するピットは中世以降の所産と推定される。壁溝は南壁に一部確認されたに留まる。

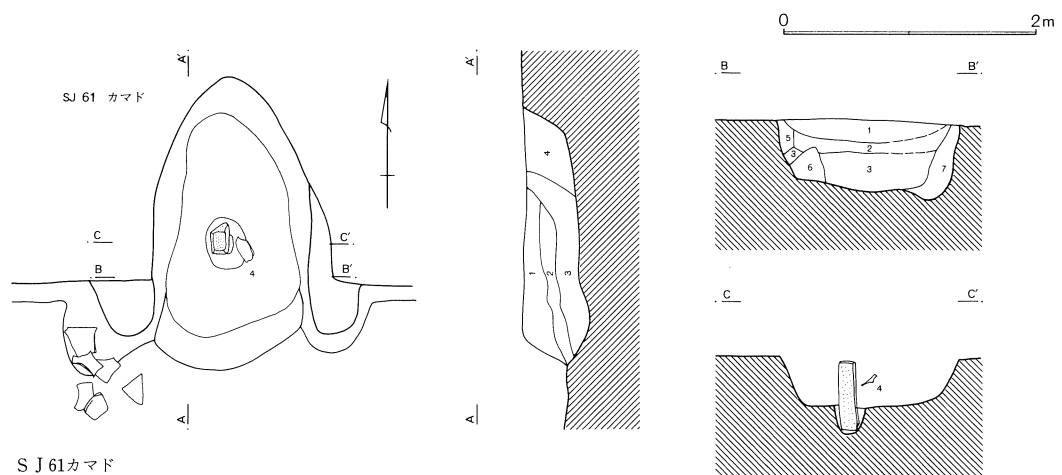
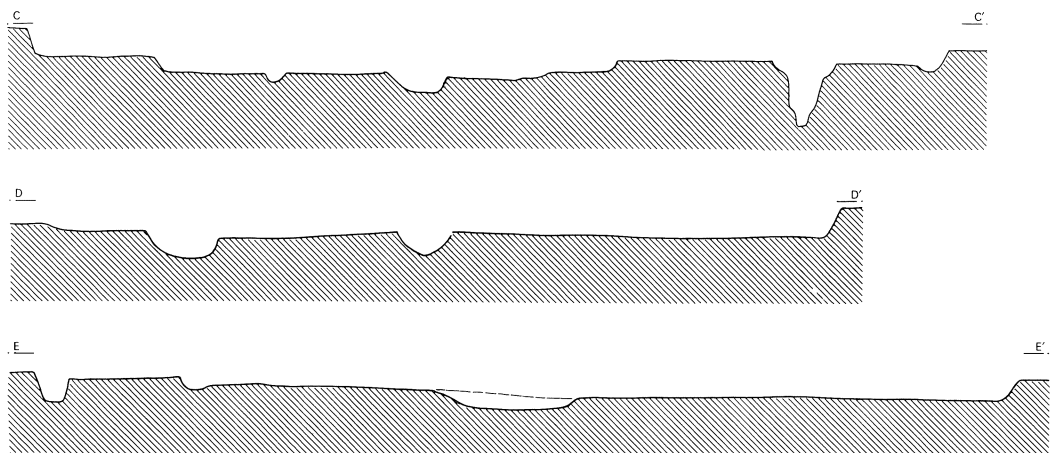
出土遺物はかなり多いが、第61号住居跡出土遺物と明確に分離できないものがある。出土位置から本住居に含めて考えられるものは総数322点を数える。須恵器坏がおよそ半数を占め、須恵器埴、皿、蓋、甕、甗、土師器甕、台付甕と混入品の土師器坏を含む。その他灰釉陶器6点、緑釉陶器1点(第126図9)、鞆羽口1点(16)、鉄釘1点がある。須恵器坏(1～8)は底径が口径の1/2以下のものが主体を占める。8の須恵器坏には底部の内外面に「人」という墨書文字が記されていた。15の高台付埴はカマド内から出土したもので確実に遺構に伴う遺物である。鞆羽口は鍛冶炉に使用されたものと推定され、孔径が小さい。先端はガラス状に溶融し、続く部分は還元されている。稻荷前XIII期に比定される。



第124図 第60・61号住居跡(1)(L=31.10m)

S J 60カマド

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物多混入。黄灰色粘土粒子含。
- 2 黄褐色土 粘質土・焼土粒子やや多。
- 3 黄褐色土 ローム質土。



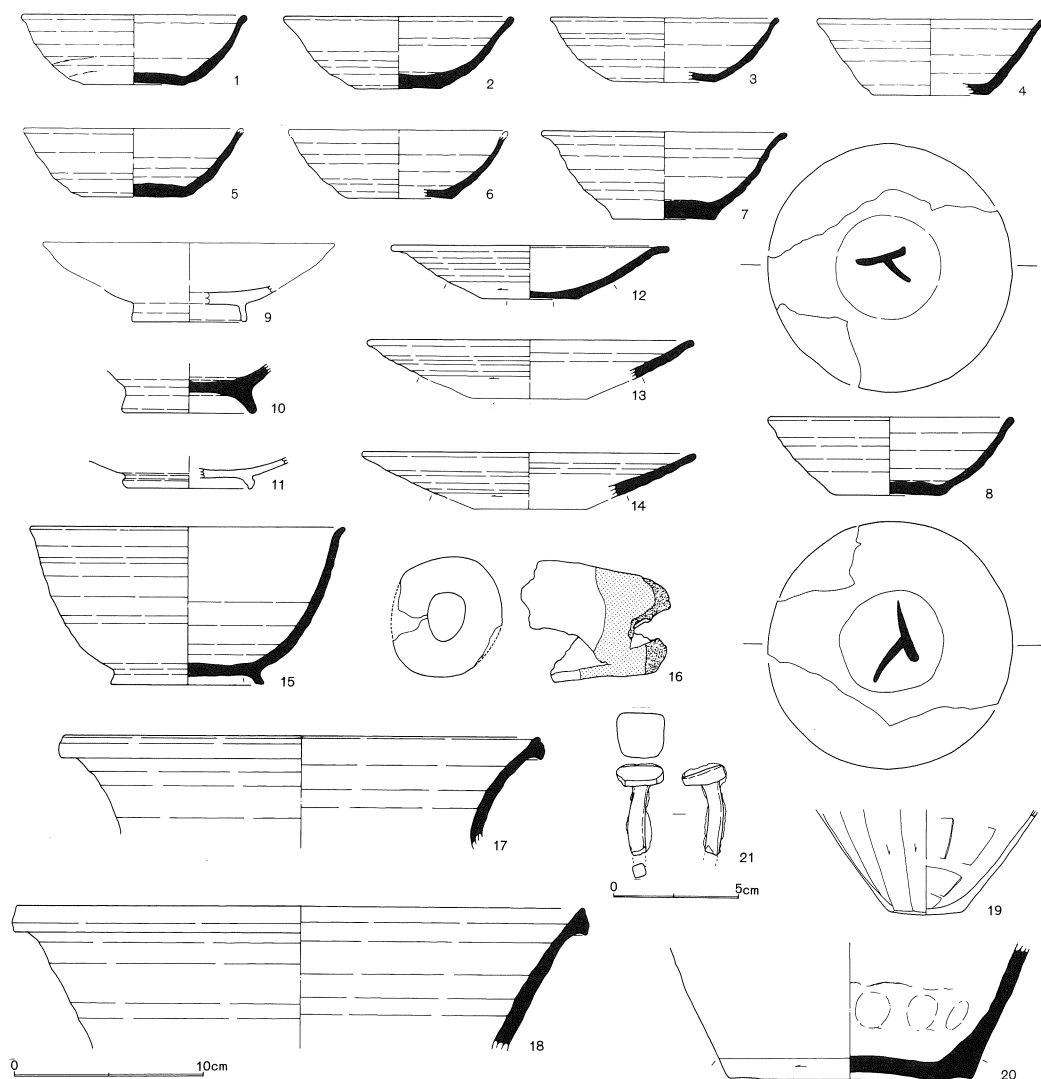
SJ 61カマド

- | | | | |
|---------|-------------------|-----------|------------------|
| 1 暗褐色土 | 多量の砂質粘土主体。 | 4 暗灰褐色土 | 焼土・砂質粘土の赤化ローム混在。 |
| 2 暗褐色土 | 褐色土主体・焼土・炭化物少量混入。 | 5 砂質粘土 | 焼土少量混入。 |
| 3 暗黄褐色土 | ロームブロックと黒褐色土混在。 | 6 ロームブロック | |
| | | 7 灰白色土 | |

第125図 第60・61号住居跡(2)(L=31.10m)

第60号住居跡出土遺物観察表(第126図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.8)	3.7	5.3	AC	B	灰	45%	№62, 65。覆土。
2	坏	(12.0)	3.8	4.5	DE	B	にぶい橙	55%	SJ62-593。覆土。
3	坏	12.0	3.4	5.3	ACD	B	灰	25%	SJ61-108。床面。
4	坏	(11.8)	4.0	(6.0)	BG	A	灰	25%	№431。床面。
5	坏		3.7	5.5	ACD	B	灰	25%	確認面。
6	坏		3.2	(5.5)	C	C	灰白	25%	SJ61-102。床面。
7	坏	12.8	4.7	5.4	ABCD	C	灰白	40%	確認面。
8	坏	12.6	4.1	5.4	ABC	B	灰白	60%	№12, 19~21, 37。床面。「人」の墨書あり。
9	緑釉碗		2.1	6.0	B	A	灰	25%	SJ61-206, 250。覆土。硬質。猿投産。
10	高台坏		2.6	6.9	ABE	C	にぶい黄橙	90%	SJ61-370。床面。
11	灰釉碗		1.7	6.5	G	A	灰白	40%	SJ61-116。覆土。猿投産か。



第126図 第60号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
12	皿	(14.4)	2.3	(5.0)	AC	A	灰	15%	№18。床面。
13	皿	(16.8)	2.1		ACD	B	灰	15%	カマド内。
14	皿	(17.5)	2.4		ACD	B	灰	20%	SJ61-430。カマド前ピット内。
15	碗	(16.6)	8.3	8.0	ACDE	B	にぶい黄橙	30%	カマド内。
17	甕	(25.0)	5.9		ACD	B	灰	15%	SJ61-389。覆土。
18	甕	(30.0)	7.5		ACD	B	灰	10%	確認面。
19	甕		5.4	4.0	G	A	にぶい褐	60%	カマド内。
20	甕		7.1	13.0	AC	B	灰	75%	SJ61-360。覆土。
16	鞆羽口	残長8.0cm。			ABC			10%	SJ62-504。覆土。孔径1.5~2.6cm。
21	鉄釘	残長3.6cm。頭部平面形は方形(1.9×1.8cm)。							№245。床面。鋸状を呈する。

第61号住居跡(第124・125図)

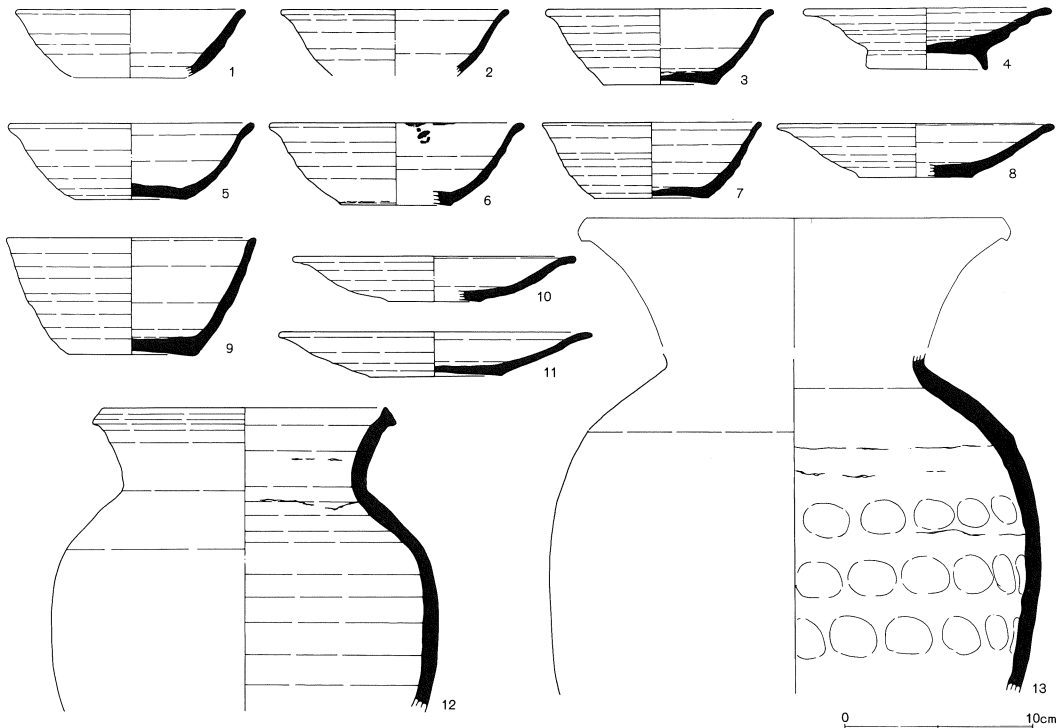
N-8区に位置する。第60号住居跡と並ぶ大型住居跡である。形態は長方形を呈し、規模は長軸6.60m、短軸5.60m、深さ0.15~0.20mを測る。

主軸方位は座標北を指し、60号住居跡とほぼ直交する。両住居は東壁を共有する形で存在し、また規模・形態・主軸方位に密接な関連が窺えることから、同一地点に於ける建て替えと考えられる。

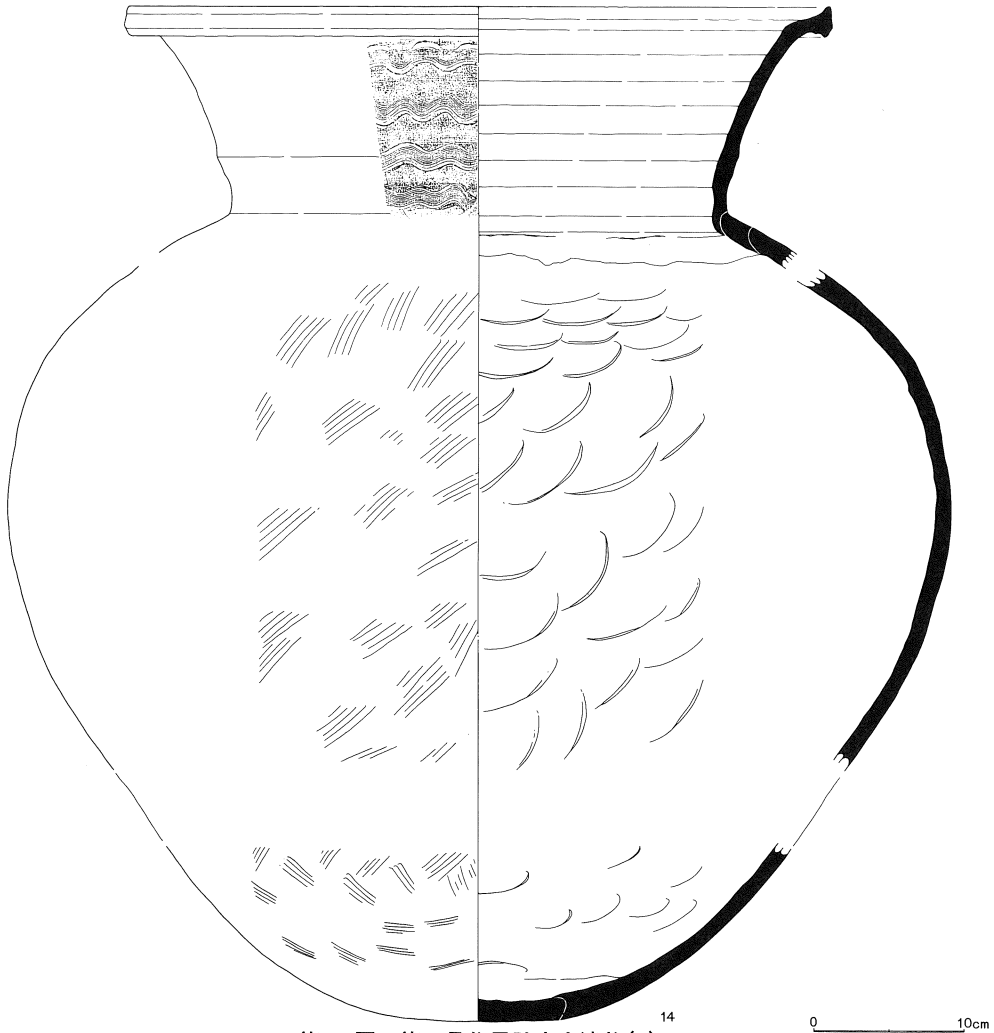
床面はほぼ平坦で、第60号住居跡よりも僅かに深い傾向にある。覆土の堆積状況の詳細は不明である。

カマドは北壁の中央から東に偏した位置に設置される。遺存状況は比較的良好で、燃烧部中央からやや西に寄った位置には石製支脚が据えられていた。燃烧部の掘り込みは浅く床面と大差ない。袖部には砂質粘土が若干残されていたが、天井部崩落土とも考えられよう。ピットは5本検出された。P₁~P₄が主柱穴に相当しようか。但し深さはP₂を除くとあまり深くない。P₅は伴わない。壁溝は北壁を除き巡るが、南西コーナーは残存しない。

出土遺物は178点検出された。須恵器坏が半数弱を占め、須恵器碗、皿、蓋、甕、壺、土師器坏、甕、台付甕から構成される。土師器坏は混入である。高台付皿(第127図4)はカマド内から検出された。また5・6・8・10は床面に相当する位置から出土した。須恵器大甕(第128図14)は、カマド前面の床面よりやや浮いた位置を中心に破碎された様な状態で散乱していた。12の甕は破片の分布状態から見ると、一部は第59号住居跡に掛かった位置にも存在しており、第59号住居跡から流れ込んだものとした方が良いかも知れない。稻荷前XIII期に比定される。



第127図 第61号住居跡出土遺物(1)



第128図 第61号住居跡出土遺物(2)

第61号住居跡出土遺物観察表(第127・128図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	11.8	3.5		A	A	オリブ灰	15%	No.155。覆土。
2	坏	12.0	3.5		A C D	B	灰白	15%	P ₃ 内覆土。
3	坏	11.8	4.0	6.0	C D	A	灰	45%	No.397。覆土。
4	高台皿	12.6	3.3	6.0	A D	B	灰	80%	No.330。カマド内。
5	坏	(12.8)	4.0	5.8	A C D	A	浅黄	50%	No.396。床面。
6	坏	(13.2)	4.3	(5.8)	A C	C	灰黄褐	45%	SJ65-50。床面。口縁部内に油煙付着。
7	坏	11.5	4.0	6.0	A D	A	オリブ灰	50%	No.49, 50, 342。覆土。
8	皿	14.3	2.9	6.0	A	A	灰	30%	No.162。床面。
9	坏	13.0	6.2	6.6	A D	A	灰	90%	No.390, 401。床面。体部下端に糸切り痕残る。
10	皿	14.6	2.4	(4.8)	A C	B	灰白	20%	No.327。床面。底部接合痕残る。
11	皿	16.2	2.4	7.0	A C D	B	灰	65%	No.9, 10他。覆土。
12	甕	(15.0)	16.1		A B C	B	灰	35%	No.11他。覆土。
13	甕		17.0		A B	A	灰	80%	No.356, 366, 376, 382, 383。覆土。
14	甕	(47.0)	18.2		A B C	A	灰	20%	SJ61-257他。覆土。

第62号住居跡(第129図)

N・O-8区に位置する。新旧関係は土層観察から、第60・61・64号住居跡よりも新しく、第63号住居跡よりも古いものと推定された。第63号住居跡は主軸方位もほぼ一致し、本住居跡の直上に規模をやや大きくして建て替えられたものと考えられる。また住居内に位置する2基の土壌は何れも住居を切っていることが判明している。形態は一辺3.22mの方形を呈し、確認面からの深さは0.35～0.40mを測る。主軸方位はN-86°-Eを示す。

床面はやや凹凸をもち北半では貼床が認められた。覆土は黒褐色土単層で構成され、上面は第63号住居跡床面が乗っている。第63号住居跡を構築するために人為的に埋め戻されたものと推定される。カマドは東壁に設置される。上面は削平を受け、遺存状態は極めて悪い。袖は存在しない。伴う柱穴は明確ではない。P₂は第61号住居の主柱穴に相当する。壁溝は西壁に検出された。本住居に伴う出土遺物は不明である。

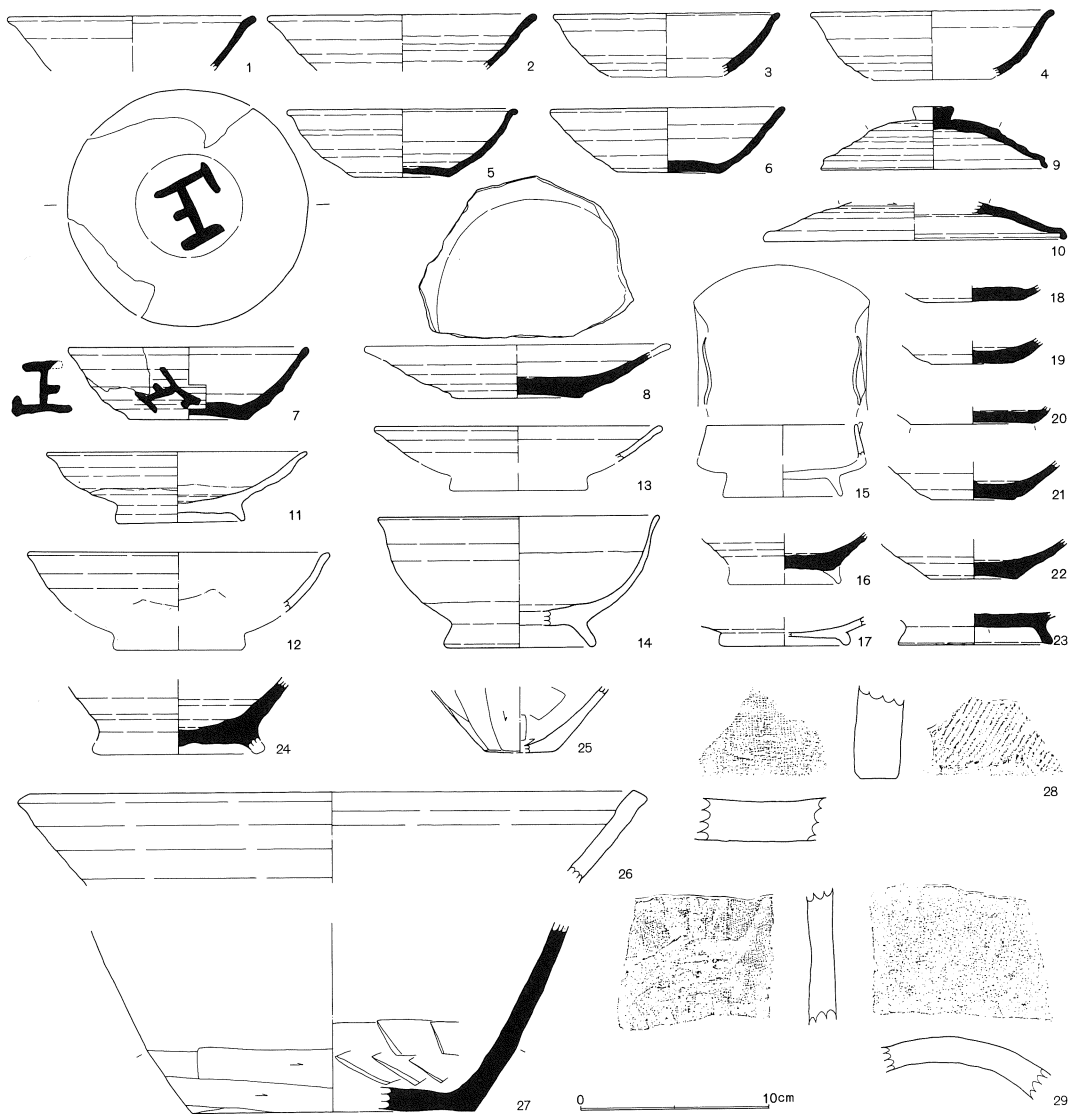
第63号住居跡(第129図)

N・O-8区に位置し、第62号住居跡直上に構築される。重複する住居群の中では最も新しい住居跡と推定される。住居内に位置する2基の土壌は明らかに住居を切っているもので中世に属する可能性が高い。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸4.80m、短軸3.64m、確認面からの深さ0.25～0.30mを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。

床面は第62号住居跡を埋め戻して形成されほぼ平坦である。覆土は暗褐色土の単層である。カマドは東壁の中央からやや北に偏した位置に設けられている。燃烧部は壁外に大きく延びている。袖は存在しない。壁溝は北壁から東壁にかけて検出されたが、南壁部には存在しない。西壁部のそれは第62号住居跡に属するものとしたが、或いは本住居に帰属する可能性もある。ピットは東壁に掛かって2本検出されているが、勿論本住居に伴うものではない。

出土遺物は第62号住居跡と併せて550点余りを数える。小片がほとんどであるが、器種的には須恵器坏を主体に皿、蓋、甕、土師器坏、甕、台付甕、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、鉄滓から構成される。但し、土師器坏と甕の一部、そして須恵器坏のなかには明らかな混入品が含まれている。出土遺物は、位置及びレベルからそのほとんどが本住居に帰属するものと推定され、第62号住居跡に対応するものは明確に抽出できない。

第130図7の須恵器坏には体部外面と底部内面に「正」という文字が墨書されている。8の皿は底部内面が非常に磨滅しており、転用硯の疑いがある。11～14・17は灰釉碗皿類、15は緑釉耳皿である。26の鉢は酸化焰焼成され土師器風であるが、轆轤整形される。中世に降るものであろうか。出土位置から見て、1号土壌に伴う遺物と推定される。20の須恵器坏も混入である。28は平瓦で、凸面平行叩き、凹面布目(3cm²あたり縦糸21本、横糸18本)残す。29は丸瓦で凸面などで整形、凹面は布目(縦糸11本、横糸14本/cm²)。鉄滓は覆土中から検出され、長径6.2cm、短径4.7cmの楕円形を呈する。ほぼ完存する坩型滓である。凸面は凹凸が顕著だが表面は滑らかである。凹面は多孔質でざらざらしている。重量65g。稻荷前XIV期に比定される。



第130図 第62・63号住居跡出土遺物

第62・63号住居跡出土遺物観察表(第130図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.8)	3.4		ACDE	C	明黄褐	40%	№416, 436, 453, SK01内。
2	坏	(14.0)	2.9		ACD	A	橙	15%	SJ64-No.5.床面。
3	坏	(11.8)	3.3		ABC	B	灰	20%	SJ60-No.71.床面。
4	坏	(12.6)	3.5		ACD	B	灰	20%	カマド内。
5	坏	(12.0)	3.5	5.0	AC	B	灰	40%	SJ60-No.68.覆土。
6	坏	12.2	3.5	5.5	AC	C	灰	55%	№26, 231, 244.覆土。
7	坏	12.6	3.8	6.4	ABC	A	灰	75%	№40, 193, 232.覆土。「正」の墨書有り。
8	皿		2.3	7.0	ACD	A	灰	75%	№17.覆土。内面磨滅。転用硯か。
9	蓋	(11.9)	3.3		AC	B	灰	25%	№33.覆土。
10	蓋	(16.0)	2.0		AC	B	灰	15%	№18.覆土。

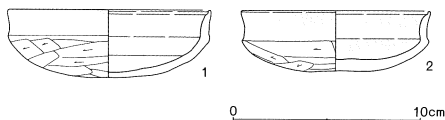
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
11	灰釉皿	13.7	3.8	6.5	G	C	灰白	75%	№449。SK01内。灰釉漬掛け。産地不明。
12	灰釉埴	(15.8)	3.1		AB	C	灰白	5%	№437。覆土。灰釉漬掛け。東濃産。
13	灰釉皿	(15.0)	1.9		AB	C	灰白	5%	№472。覆土。東濃産。
14	灰釉埴	(14.8)	6.9	7.6	G	B	灰白	25%	№80, 147他。SK01内。東濃産か。
15	緑釉皿		1.8		J	A	灰	5%	SJ64-1。床面。耳埴。硬質。猿投産。
16	高台坏		2.0		ABDF	B	灰	70%	№51, 58。覆土。
17	灰釉皿		1.5	6.4	A	C	灰白	25%	№469。SK01内。
18	坏		0.8	5.0	C	A	灰白	35%	№357。覆土。
19	坏		1.3	4.4	ABDF	C	浅黄橙	80%	№538。覆土。
20	坏		0.9	6.5	BC	A	浅黄橙	90%	№7, 107。覆土。
21	坏		2.0	4.4	AEI	C	橙	90%	№164。覆土。
22	坏		2.1	4.6	AEI	D	にぶい黄橙	60%	№342, 382, 428。覆土。
23	高台坏		1.6	8.1	ABD	A	灰	100%	№352。床面。
24	瓶		3.8		ACDE	C	橙	90%	№84。覆土。
25	甕		3.4		ABE	A	にぶい橙	25%	№48。SK01内。
26	鉢	(32.0)	4.8		ABCE	A	赤褐	5%	№282, 284。SK01内。中世か。
27	甕		9.9	(15.0)	ACD	A	灰	15%	№82, 503。覆土。
28	平瓦				ACD	B	灰白		№162。床面。
29	丸瓦				ACD	A	灰		№235。P1内。

第64号住居跡(第129図)

O-8区に位置する。第62・63号住居跡の南側にあり、両住居に切られている。形態は不明であるが長方形または方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸3.34m、短軸2.62m、深さ0.15~0.20mを測る。主軸方位はN-6°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で、第63号住居跡と同一レベルで続く。覆土は暗褐色土で構成されている。壁溝は南壁から西壁にかけて巡るが、東壁では明瞭に確認できなかった。ピットは3本検出されているがどれも住居に伴うものではない。残存部にはカマドは存在しない。

出土遺物は少なく、28点検出されたにすぎない。土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕、壺から構成される。小片が多いが、図示した1・2は南壁下の床面からやや浮いた位置から並んで出土した。重複する住居跡群の中では最も古く位置付けられよう。他に中・近世の陶器片が1片出土した。稲荷前IV期としておきたい。



第131図 第64号住居跡出土遺物



第64号住居跡出土遺物観察表(第131図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	10.6	3.6		ABCE	A	にぶい橙	80%	№54。覆土。
2	坏	10.0	3.2		AB	C	にぶい赤褐	70%	№55。覆土。

第65(A・B)号住居跡(第133図)

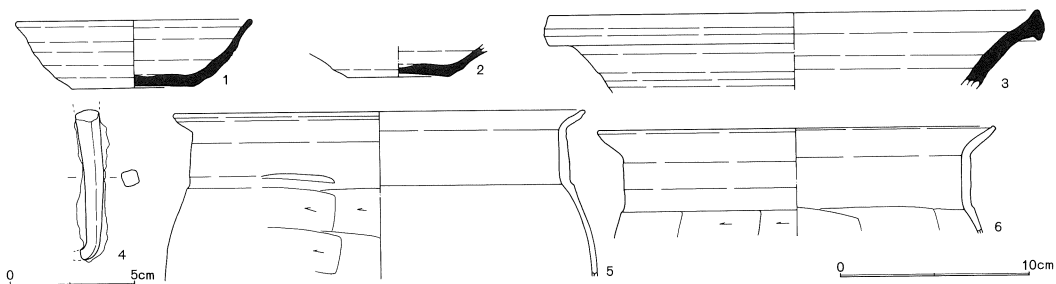
N-8区に位置する。当初、重複する第60・61号住居跡よりも新しいものと捉えたが、精査の結果、重複部の床面が途切れており本住居が古いものと判明した。また、調査進行中、西壁外にも遺構の存在が判明したため精査を進めたところ、北壁と東壁を共有する形で更にもう1軒存在することが明らかとなった(第65B号住居跡)。床面レベルは当初検出された住居(第65A号住居跡)が僅かに深く、その上面に貼床は認められないため、調査所見に従って第65B号→第65A号に縮小したものと捉えておきたい。

第65A号住居跡の残存規模は長軸3.68m、短軸3.58m、深さ0.10m前後を測る。第65B号住居跡の規模は長軸5.56m、短軸5.16m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-89°-Eを示す。

残存部の床面は比較的堅緻だが、北壁際は軟弱であった。B号住居の壁に沿う形で溝が巡るが、これは掘方と考えられる。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は僅かに壁外に突出する程度で、底面の掘り込みは約0.2mを測る。立ち上がり角度は垂直に近い。袖は存在しない。おそらくA号住居のカマドと考えられ、B号住居使用時に同一箇所が存在したか否かについては不明である。ピットは遺構内に11本検出された。P₁~P₄はB号住居に伴う主柱穴と考えられる。P₆・P₈・P₉は上面に床が貼られており、床下土壌または掘方と判断される。また、P₁₁には焼土が多量に含まれていた。他のピットについては直接遺構に伴うという可能性は少ないものと推定される。

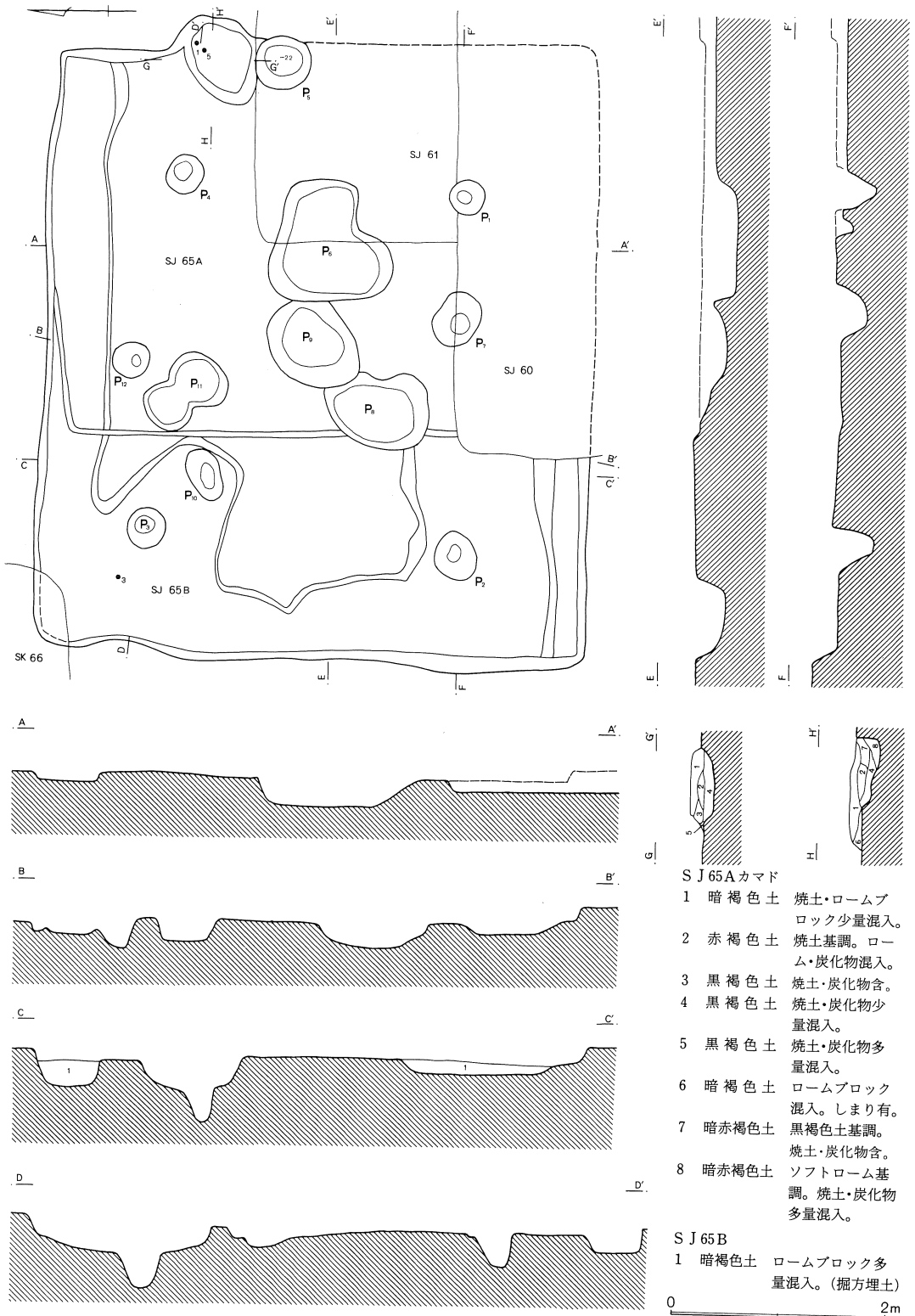
出土遺物は141点あるが、これには本来重複する第60・61号住居跡に帰属すべきものが含まれている。器種的には須恵器坏、皿、蓋、甕、壺、土師器甕、鉢で構成される。他に青磁碗と土師器坏の小片が混入している。確実に伴うものとしては第132図1の須恵器坏と5の土師器甕があり、何れもカマド内の火床面付近から出土している。稻荷前XII期に比定される。



第132図 第65号住居跡出土遺物

第65号住居跡出土遺物観察表(第132図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.3	3.6	6.4	AC	B	灰	50%	Na92。カマド内。
2	坏		1.7	5.5	AC	B	橙	70%	覆土。
3	甕	(26.0)	4.1		AC	A	灰	10%	Na101。覆土。
5	甕	(20.7)	8.8		ADEFI	A	におい褐	10%	Na73。カマド内。
6	甕	(21.0)	5.7		ADEI	A	橙	25%	P ₁₁ 内。
4	鉄釘	残長6.0cm。							覆土。



第133図 第65号住居跡(L=31.30m)

- S J 65A カマド
- 1 暗褐色土 焼土・ロームブロック少量混入。
 - 2 赤褐色土 焼土基調。ローム・炭化物混入。
 - 3 黒褐色土 焼土・炭化物含。
 - 4 黒褐色土 焼土・炭化物少量混入。
 - 5 黒褐色土 焼土・炭化物多量混入。
 - 6 暗褐色土 ロームブロック混入。しまり有。
 - 7 暗赤褐色土 黒褐色土基調。焼土・炭化物含。
 - 8 暗赤褐色土 ソフトローム基調。焼土・炭化物多量混入。
- S J 65 B
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量混入。(掘方埋土)
- 0 2m

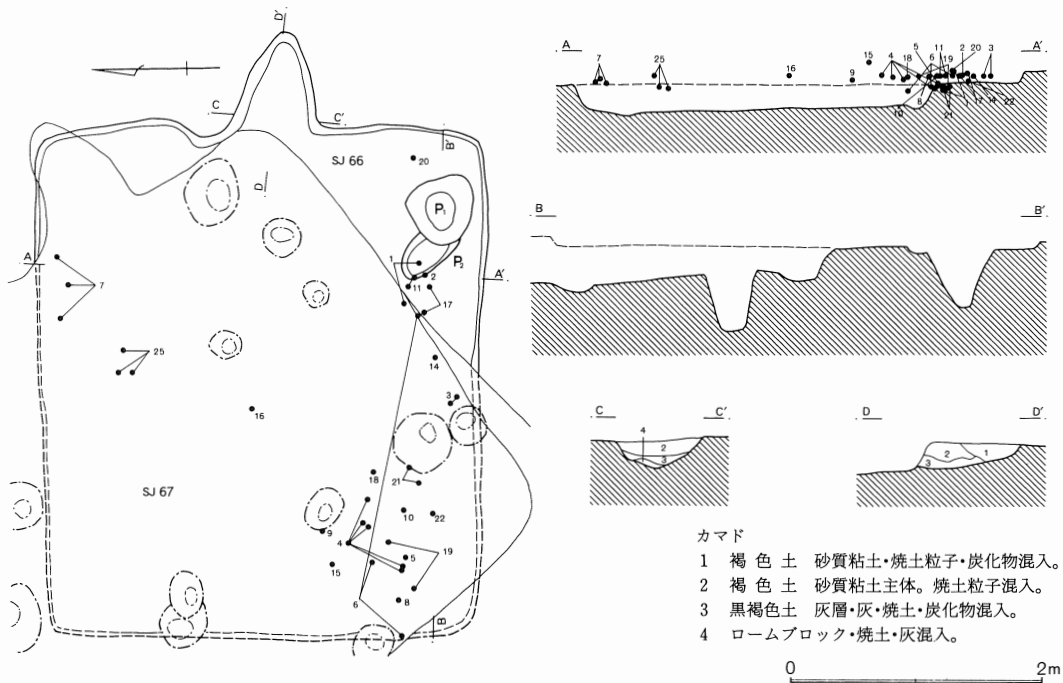
第66号住居跡(第134図)

N-7・8区に位置する。第67・68号住居跡と重複するが、本住居が最も新しい。第67号住居跡調査時には遺構の存在に気付かなかったため、詳細は不明とせざるを得ない。第67号住居跡出土遺物のうち、該当する時期の遺物分布を基に想定した規模は、長軸約4.00m、短軸3.60m、深さ0.05~0.10m程度であろう。主軸方位はN-89°-Eを示す。

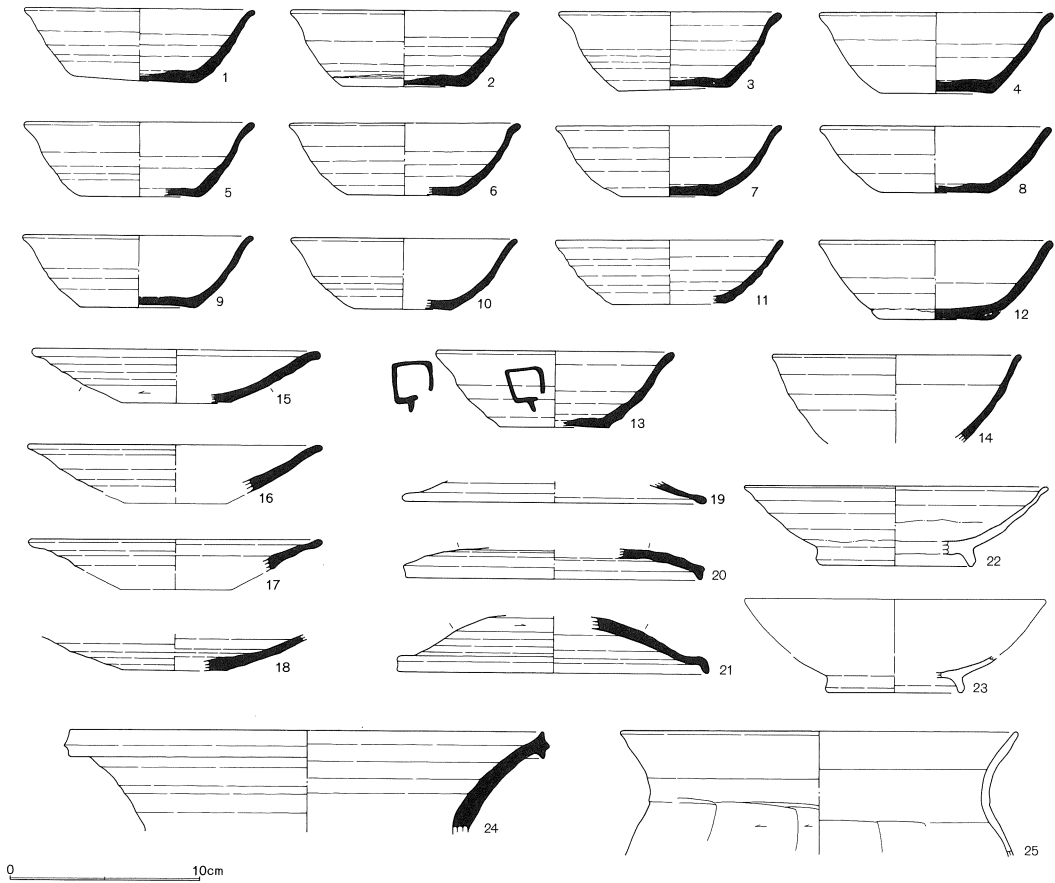
残存部の床面は、平坦で比較的堅緻であった。カマドは東壁の中央部に設けられている。燃烧部は壁外に位置するが掘り込みは浅い。第3層が灰層と考えられる。袖は存在しない。ピットは2本検出されたが、伴うか否か明らかではない。

出土遺物は前述したように、第67号住居跡出土遺物のうち明らかに新しい一群の土器を本住居の時期に合致するものとして組込んだ。破片総数438点を数える。須恵器坏が半数近くを占め、須恵器坑、皿、蓋、甕、壺、土師器甕、台付甕から構成される。その他に灰釉坑3点、瓶2点が出土している。

遺物の垂直分布を見るとほぼ床面と思われる高さに集中する傾向が顕著に認められ、遺構に伴う蓋然性はかなり高いものとする。須恵器坏は深身で口縁部が外反するものが主体を占め、底径は口径の1/2前後のものが多い。須恵器はほとんどが南比企窯跡群産と推定されるが、メルクマールでもある白色針状物質が明瞭に観察されないものも一定量含まれている。第135図2・12は体部下端に糸を差し入れた痕跡を残す。13は体部外面に「甲」もしくは「申」と記された墨書が残されているが、墨痕が薄く良く判読できない。図示した灰釉坑は東濃産と推定される。稻荷前XIII期に比定される。



第134図 第66号住居跡(L=31.20m)



第135図 第66号住居跡出土遺物

第66号住居跡出土遺物観察表(第135図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.0	3.9	6.3	AD	B	灰	55%	SJ67-1245, 1252。覆土。
2	坏	(12.0)	4.0	6.5	AD	C	灰白	40%	SJ67-1250。覆土。体部下端に糸切り痕。
3	坏	11.7	4.2	5.9	AD	B	灰白	70%	SJ67-1121, 1123。覆土。
4	坏	12.3	4.3	5.9	A	B	灰白	60%	SJ67-29, 30, 1495, 1496, 1498, 1762。覆土。
5	坏	(12.0)	3.9	6.2	ABF	B	浅黄橙	10%	SJ67-28。覆土。
6	坏	(12.0)	3.8	(6.0)	AC	A	灰白	15%	SJ67-976, 1492。覆土。
7	坏	11.8	3.7	5.0	ABC	A	灰白	50%	SJ67-803, 805, 1368。覆土。
8	坏	(12.0)	3.5	5.6	AD	A	暗青灰	20%	SJ67-978。覆土。
9	坏	12.0	3.8	6.0	ACD	B	オリブ灰	45%	SJ67-679。床面。
10	坏	(11.9)	3.7	(5.0)	ACE	B	灰白	35%	SJ67-8。覆土。
11	坏	(12.0)	3.4	(6.0)	AC	A	灰	20%	SJ67-1157, 1251。覆土。
12	坏	(12.1)	4.2	(6.0)	AD	B	灰	20%	カマド内。体部下端に糸切り痕残す。
13	坏	12.4	4.0	(5.8)	BG	C	灰白	50%	SJ67-覆土。体部外面に墨書あり。
14	埴	(13.0)	4.7		ABC	C	灰	25%	SJ67-1125。覆土。
15	皿	(15.0)	2.8		AB	A	青灰	30%	SJ67-629。確認面。
16	皿	(15.3)	2.5		A	A	灰白	15%	SJ67-734。覆土。
17	皿	15.2	1.7		AB	A	灰	20%	SJ67-1153。床面。蓋の可能性あり。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
18	皿		1.9	(5.4)	A C	A	灰	25%	SJ67-1。覆土。
19	蓋	(15.8)	1.1		A C	B	灰	10%	SJ67-992, 998。覆土。
20	蓋	15.7	1.6		A C	B	灰	15%	SJ67-1283。覆土。
21	蓋	(16.4)	3.0		A B C	B	灰	50%	SJ67-1178, 1179。覆土。
22	灰釉埴	(16.0)	4.2		G	B	灰白	20%	No14。床面。東濃産。
23	灰釉埴		2.0	(7.0)	G	A	灰白	15%	SJ67-P ₂ 。東濃産。
24	甕	(25.0)	5.4		A B	A	灰	10%	覆土。
25	甕	(21.0)	6.5		A B E	A	橙	10%	SJ67-1309, 1617, 1623。覆土。

第67号住居跡(第136・137図)

N-7区に位置する。第66・68号住居跡と重複している。第66号住居跡は本住居埋没後に構築されたことは誤りないが、第68号住居跡との先後関係は微妙である。両住居は当初1軒として処理されていたが、その後北側に存在した農道を除去したところ、新たにカマドが現れ、2軒重複していたことが確認された。土層観察の際には残念ながら両者は識別されなかったが、出土遺物の様相からみると第67号住居跡が新しい可能性がある。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸4.72m、短軸4.26m、深さ0.30m前後を測る。主軸方位はN-52°-Eを示す。

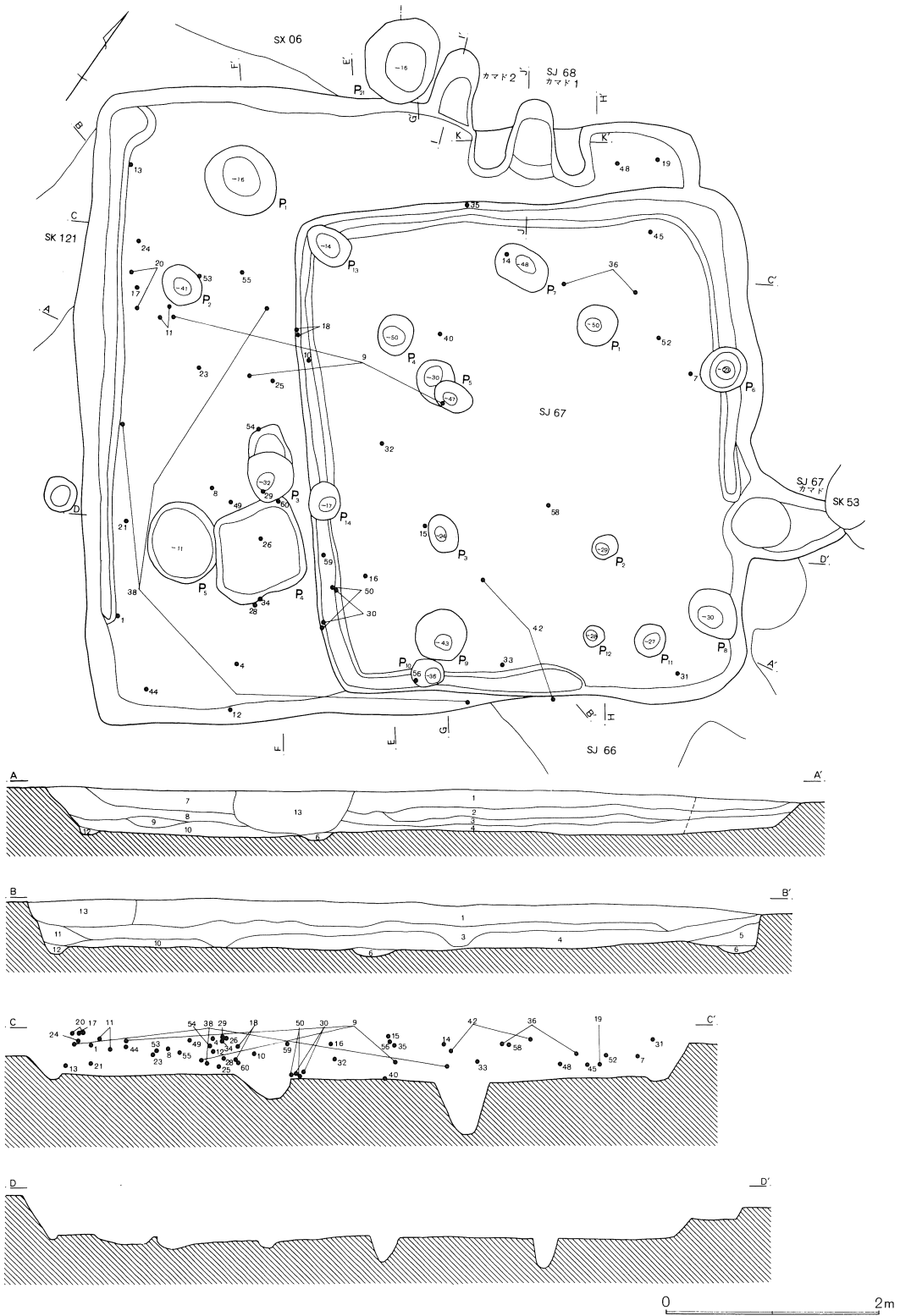
床面はやや起伏をもつ。覆土の状態は不明である。カマドは東壁の南に偏した位置に設置される。燃烧部は楕円形を呈し、床面から0.10m程掘り込まれる。煙道部への移行は急角度である。袖は比較的遺存状態が良く、左袖には土師器甕と円柱状の礫が、右袖には土師器甕がそれぞれカマドの補強材として埋設されていた。壁溝は南東コーナーを除いて全周する。ピットは住居内から12本検出されている。重複する遺構のものも含まれようが、明瞭に識別できなかった。4本支柱穴とすればP₁～P₄が該当するものと推定される。

出土遺物は前述したように、第68号住居跡と分離できないために、同一図版に掲載した。確実に本住居に帰属するものは袖の補強材として使用された第140図46・47の甕とカマド内から出土した6の坏、59の刀子程度である。土師器甕は胴部に膨みをもち、第68号住居跡のそれよりもやや新しい様相がある。稻荷前VII期に比定されよう。

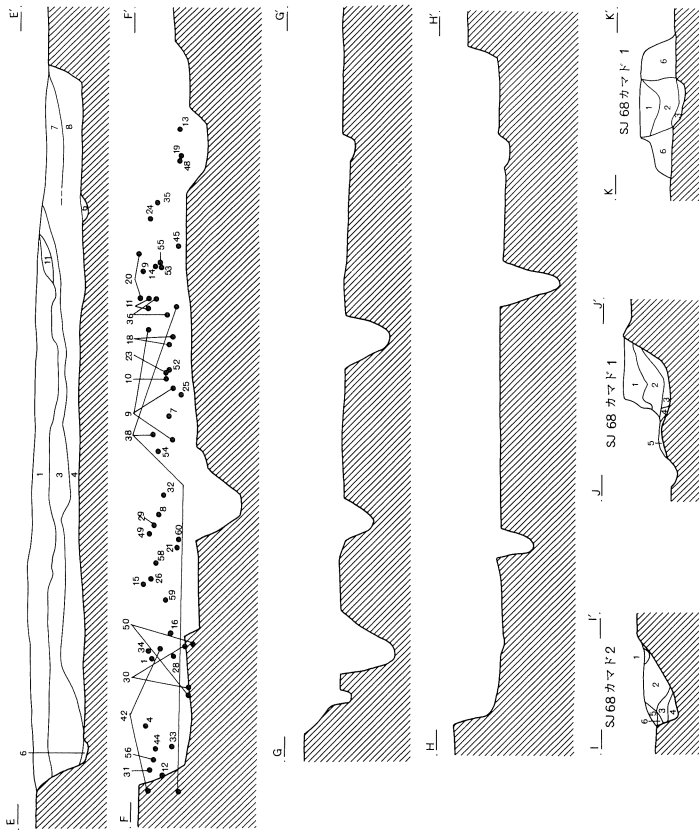
第68号住居跡(第136・137図)

N-7区に位置し、第66・67号住居跡と重複する。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸5.90m、短軸5.70m、深さ0.40m前後を測る。主軸方位はN-34°-Wを示す。

残存部の床面は概ね平坦で堅い。堆積状況は概ね自然堆積に近いと推定されるが、上層に第121号土壌や第66号住居跡の攪乱を受ける。カマドは北壁に2基設置される。1号カマドは燃烧部はほぼ壁内に位置し、掘り込みは浅い。袖には黄灰色粘土が比較的良く遺存していた。2号カマド燃烧部は壁を切り込んで構築されていたが、袖等の施設は遺存せず、2号から1号カマドへ付け替えられたものと推定される。ピットは5本検出されたが、P₂・P₃以外は浅く、柱穴とは想定し難く、第67号住居跡内のピットを含めても規則的な柱穴配置を想定するには無理がある。壁溝は西壁で確認されたのみである。



第136図 第67・68号住居跡(1)(L=31.20m)



- 1 暗褐色土 焼土・炭化物少量混入。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物多量混入。
- 3 黒褐色土 シルト質・焼土・黄褐色粘土・少量混入。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量混入。
- 5 暗黄褐色土 焼土・黄褐色粘土・炭化物混入。しまり良い。
- 6 褐色土 ロームブロック混入。
- 7 暗褐色土 焼土粒・ローム粒混入。
- 8 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒混入。
- 9 暗褐色土 1層にほぼ等しい。
- 10 黒褐色土 ローム粒混入。
- 11 暗褐色土 黒褐色・シルトの混合土。
- 12 褐色土 ローム粒混入。
- 13 黒色土 ロームブロック混入。

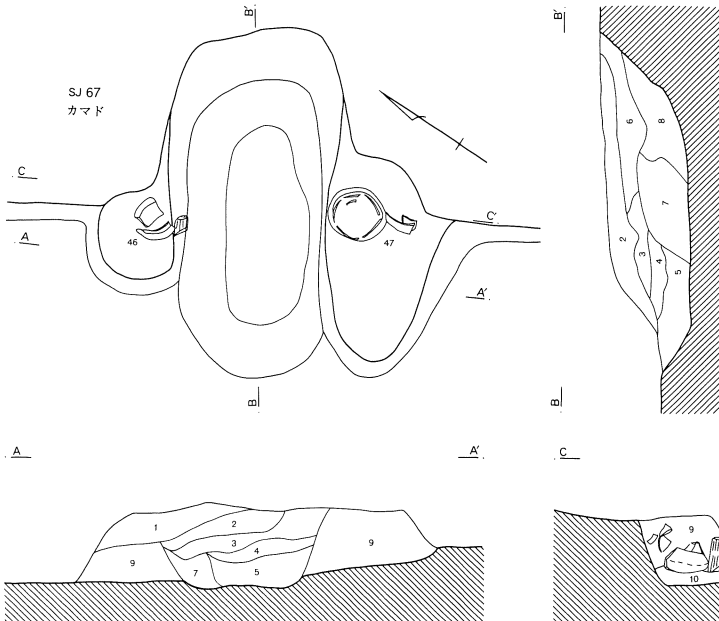
SJ 68-1号カマド

- 1 赤色焼土
- 2 褐色土 砂質粘土・焼土・ロームブロック混入。
- 3 褐色土 灰・炭化物混入。(灰層)
- 4 ロームブロック
- 5 ロームブロック。(貼床)
- 6 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック・ロームブロック混入。焼土含む。

SJ 68-2号カマド

- 1 黒褐色土
- 2 黄灰色粘土 砂質焼土混入。
- 3 黒褐色土 灰・焼土・炭化物混入。
- 4 褐色土 ロームブロック・焼土混入。
- 5 褐色土
- 6 黄褐色土

0 2m



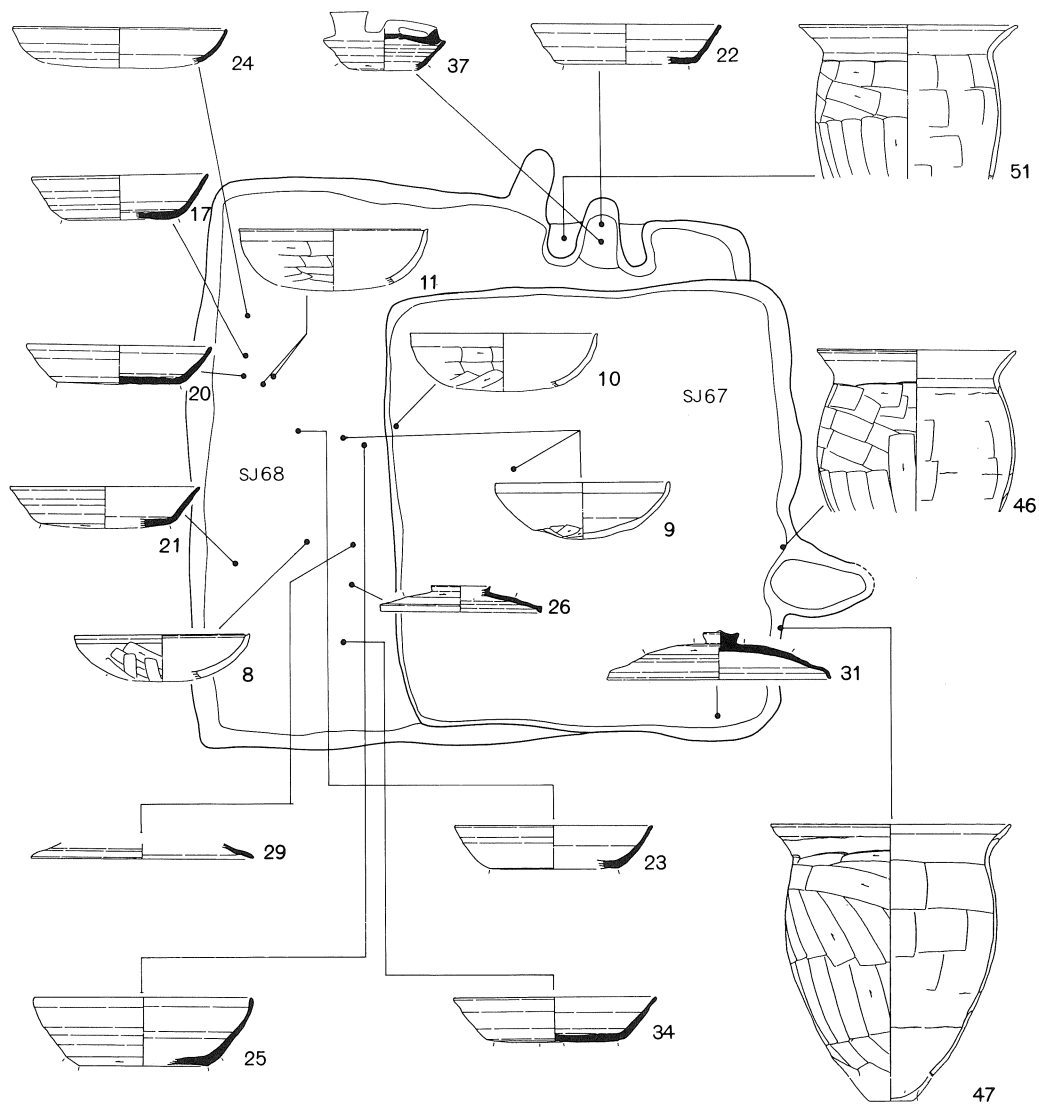
SJ 67カマド

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 砂質粘土ブロックを多量混入。
- 3 黒褐色土 砂質粘土・焼土混。
- 4 黒褐色土 砂質粘土・焼土を多量に混入。
- 5 黒褐色土 焼土・ロームブロック多量混入。
- 6 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒多量混入。
- 7 灰白色粘土
- 8 灰白色粘土 ローム塊多。焼土少量混入。
- 9 灰白色粘土 砂質粘土混在。
- 10 褐色土 粘土を主にローム・焼土多量混入。

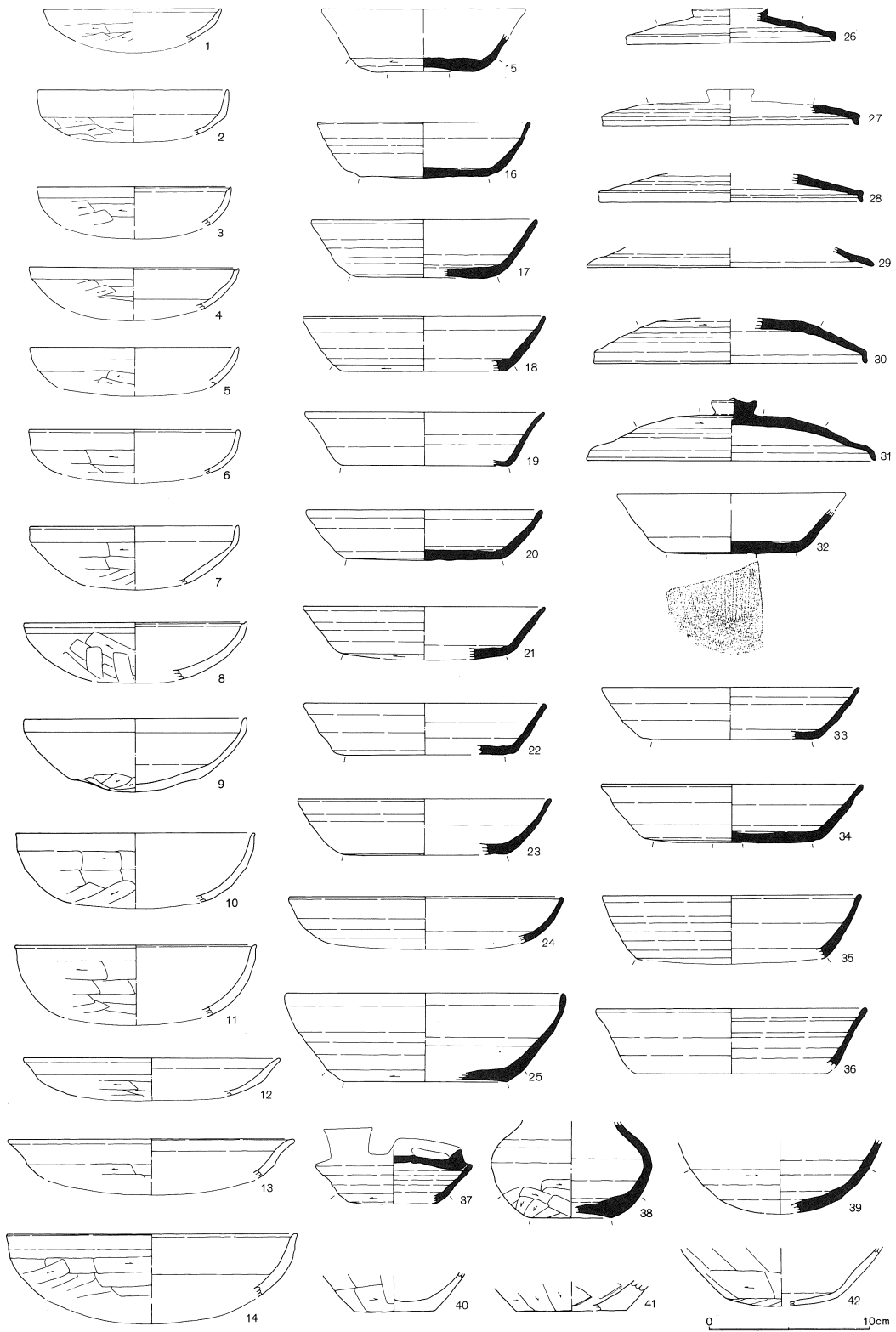
0 1m

第137図 第67・68号住居跡(2)(L=31.20m)

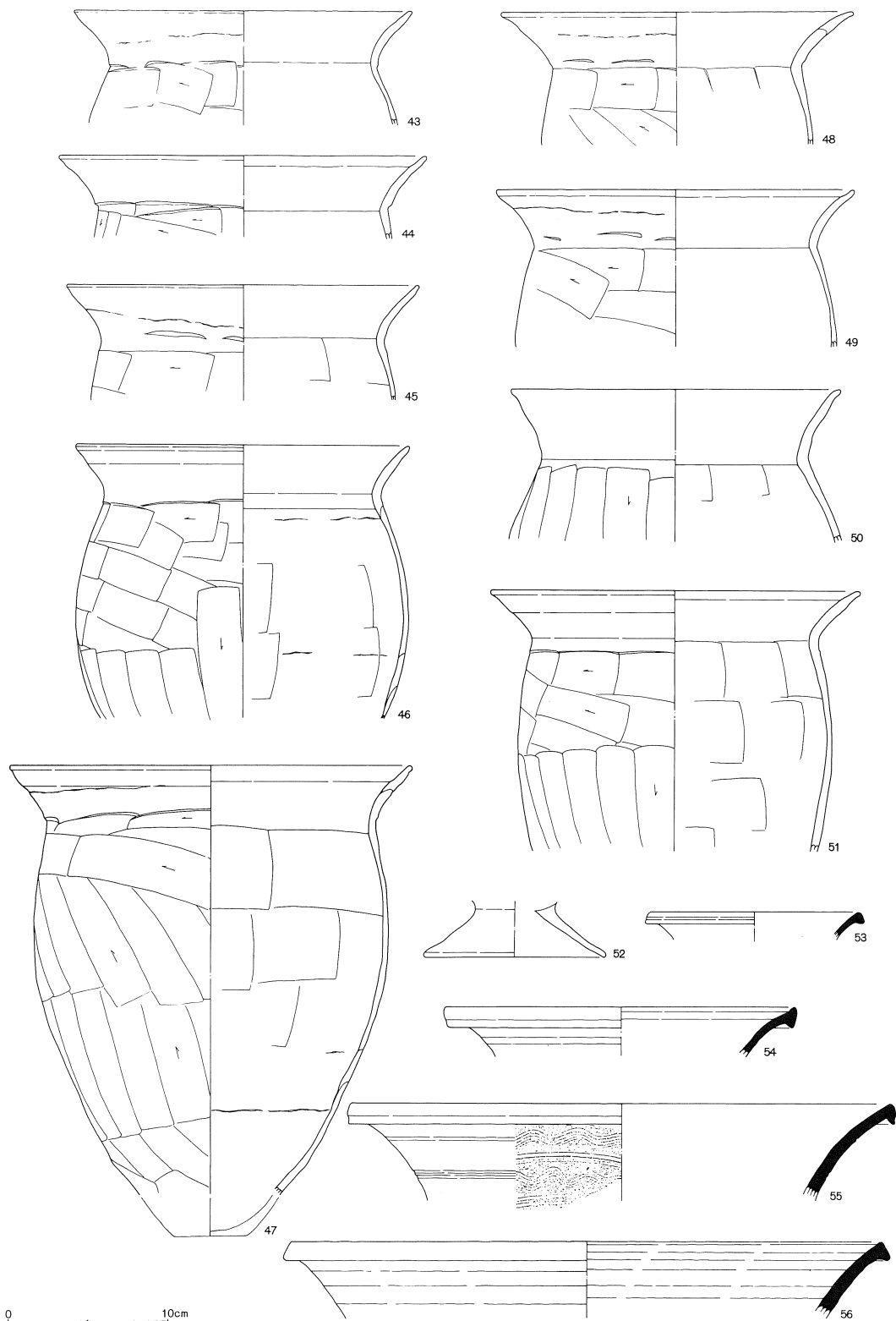
出土遺物は67号住居跡のものを含めて905点検出された。小破片が多く、覆土上層から下層まで満遍なく出土している。器種的には土師器坏、碗、皿、甕、小型甕、台付甕、壺、須恵器坏、蓋、甕、甌、瓶、壺類、瓦の他鉄製品がある。68→67号住居跡という新旧関係が正しいとすると、須恵器坏類の内第139・140図17・19～25・34、土師器甕では48・49・51が本住居に該当することになる。土師器甕(51)はカマド左袖から出土したもので基準とできるだろう。また土師器坏類に関しては小片が多いが、在地产土師器としては最も新しい段階である。その他、水滴(37)・小壺(38)・鉄鎌(60)等も本住居の遺物としても良いであろう。32の坏は底部に静止糸切り痕が残るが出土位置から見る限り本住居に属する可能性は低い。また37・39は東海産か。58の平瓦は凹面に布目(18×18本/cm²)、凸面平行叩痕を残す。稻荷前VI期～VII期にかかる時期と考えておきたい。



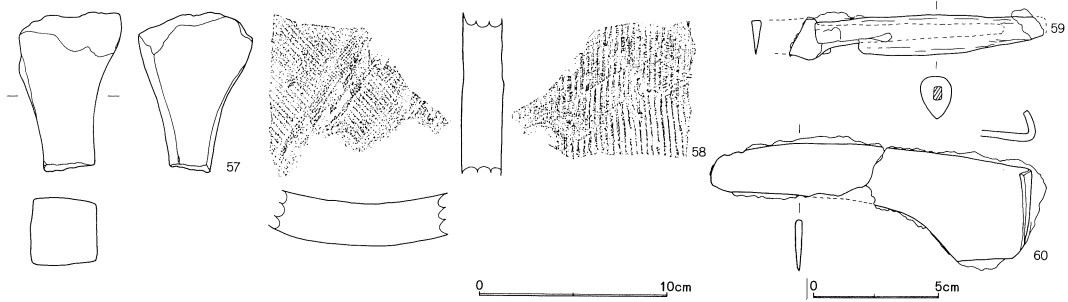
第138図 第67・68号住居跡遺物分布図



第139图 第67・68号住居跡出土遺物(1)



第140图 第67·68号住居跡出土遺物(2)



第141図 第67・68号住居跡出土遺物(3)

第67・68号住居跡出土遺物観察表(第139~141図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	1.7		ABC	A	橙	10%	№173。覆土。
2	坏	(11.8)	2.9		AE	B	橙	35%	覆土。
3	坏	(12.0)	2.5		AC	B	褐灰	10%	SJ67カマド内覆土。
4	坏	(13.0)	2.6		BCF	B	にぶい赤褐	10%	№203。覆土。
5	坏	(13.0)	2.5		ABC	A	灰白	10%	SJ68-1号カマド右袖。
6	坏	(13.0)	2.8		BE	B	橙	15%	SJ67カマド内覆土。北武蔵系。
7	坏	(12.8)	3.7		ADE	B	にぶい橙	10%	№784。覆土。体部ヘラケズリ不明瞭。
8	坏	(13.8)	3.6		C	B	にぶい赤褐	15%	№107。覆土。
9	坏	(13.8)	4.5		BC	A	明赤褐	20%	№245, 378, 610。覆土。
10	坏	(14.8)	4.3		CDG	B	にぶい橙	25%	№340。覆土。
11	坏	15.0	4.4		ABC	B	橙	15%	№365, 856。覆土。
12	皿	(15.8)	2.3		AE G	B	橙	10%	№192。覆土。
13	皿	(17.7)	2.5		C	A	橙	10%	№474。床面。
14	埴	(18.0)	3.9		ABC	A	橙	20%	№688。覆土上層。
15	坏		2.3	6.4	AC	B	灰	10%	№678。覆土。
16	坏	(13.2)	3.5		BC	A	灰	25%	№23。覆土。
17	坏	14.0	3.6	7.9	ACD	A	灰白	60%	№867。覆土上層。
18	坏	(15.0)	3.5		AC	C	灰	10%	№544, 1021。覆土。
19	坏	(15.0)	3.3	(10.4)	ACD	A	灰	10%	№3。覆土下層。
20	坏	14.6	3.2	9.8	ACD	B	灰	45%	№355, 868。覆土上層。
21	坏	(15.0)	3.3	(10.2)	ACD	B	灰白	10%	№926。覆土下層。
22	坏	(15.0)	3.25	(10.4)	ABC	C	灰	25%	SJ68-1号カマド上面。
23	坏	(15.8)	3.5	(10.2)	BC	A	灰白	10%	№249。覆土。
24	坏	(17.0)	2.9		ABC	A	灰	15%	№471。覆土上層。
25	坏	(15.3)	5.5	(10.2)	ABC	A	灰	10%	№262。床面。
26	蓋	(13.0)	2.1		ACD	A	青灰	15%	№72。覆土上層。
27	蓋	(16.0)	1.2		BC	B	灰	10%	覆土。
28	蓋	(16.3)	1.8		BC	A	灰	5%	№2107。覆土下層。
29	蓋	(17.8)	1.2		BC	A	灰白	5%	№1170。覆土。
30	蓋	(17.0)	2.8		AC	C	灰	35%	№989, 2048。床面。
31	蓋	(17.8)	3.9		AC	B	灰	25%	№1356。覆土上層。
32	坏		2.8	8.0	ACD	B	灰	25%	№1048。覆土, 底部静止糸切り。
33	坏	(16.0)	3.2		ACD	B	にぶい橙	20%	№2129。覆土下層。
34	坏	16.2	3.6	9.9	AC	B	灰白	95%	№2036。覆土。
35	坏	(16.0)	4.0		ACD	A	灰	10%	№691。覆土。口唇部内面磨滅。
36	坏	(16.8)	3.8		AC	A	灰	15%	№728, 2008。覆土。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
37	水滴		3.4	5.6	G	A	灰	50%	SJ68-1号カマド内。覆土。東海産か。	
38	小型壺		6.0	(5.0)	ABC	A	灰白	25%	№78, 286, 1231。覆土。	
39	瓶		4.6		G	C	灰白	35%	確認面。東海産か。	
40	甕		2.3	5.0	BDE	A	にぶい橙	40%	№2197。床面。	
41	甕		1.8	(6.8)	ADE	A	橙	20%	SJ67カマド覆土。	
42	甕		3.0	7.0	BEG	A	にぶい褐	50%	№1157, 1536。覆土上層。	
43	甕	(21.2)	7.0		ADEF	B	橙	20%	覆土。	
44	甕	(23.0)	5.1		ABDF	B	橙	25%	№1433。覆土。	
45	甕	(22.0)	7.2		ABEF	A	橙	40%	№2220。覆土。	
46	甕	(21.0)	17.1		ADE	A	橙	30%	SJ67カマド左袖内。	
47	甕	(25.0)	26.7		ABD	B	橙	50%	SJ67カマド右袖内。	
48	甕	(22.0)	8.3		ABE	B	橙	20%	№1。覆土下層。	
49	甕	(22.4)	9.8		BCEG	B	橙	15%	№104。覆土。	
50	甕	(20.6)	9.4		AB	B	にぶい橙	15%	№2046, 2052。床面。	
51	甕	(23.0)	17.2		ABE	A	橙	35%	SJ68-1号カマド左袖内。	
52	台付甕		3.5	11.2	ABE	B	橙	30%	№2072。覆土。器面風化。	
53	壺	(13.0)	1.8		AB	B	灰白	15%	№384。覆土。	
54	甕	(22.0)	3.1		AC	A	青灰	5%	№232。覆土。	
55	甕	(34.0)	6.1		AB	B	灰	10%	№402。覆土。	
56	甕	(37.0)	4.8		ABC	B	灰	10%	№1518。覆土上層。	
57	砥石	残長8.4cm。最大幅6.1cm。重量252g。				A			覆土。凝灰岩製か。上下欠損。	
58	平瓦				BCG	A	灰	5%	№1552。覆土。	
59	刀子	残長10.1cm。幅1.05cm。刀子自体残長8.6cm。								№38。SJ67カマド左袖内。木柄遺存。
60	鎌	全長12.7cm。基部幅4.1cm。								№1481。覆土。基部を折り返す。

第69号住居跡(第142図)

N-6・7区に位置する。第47号住居跡に南西コーナー部を切られているが、遺存状態は比較的良好である。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸5.16m、短軸5.02m、深さ0.20mを測る。主軸方位はN-15°-Wを示す。

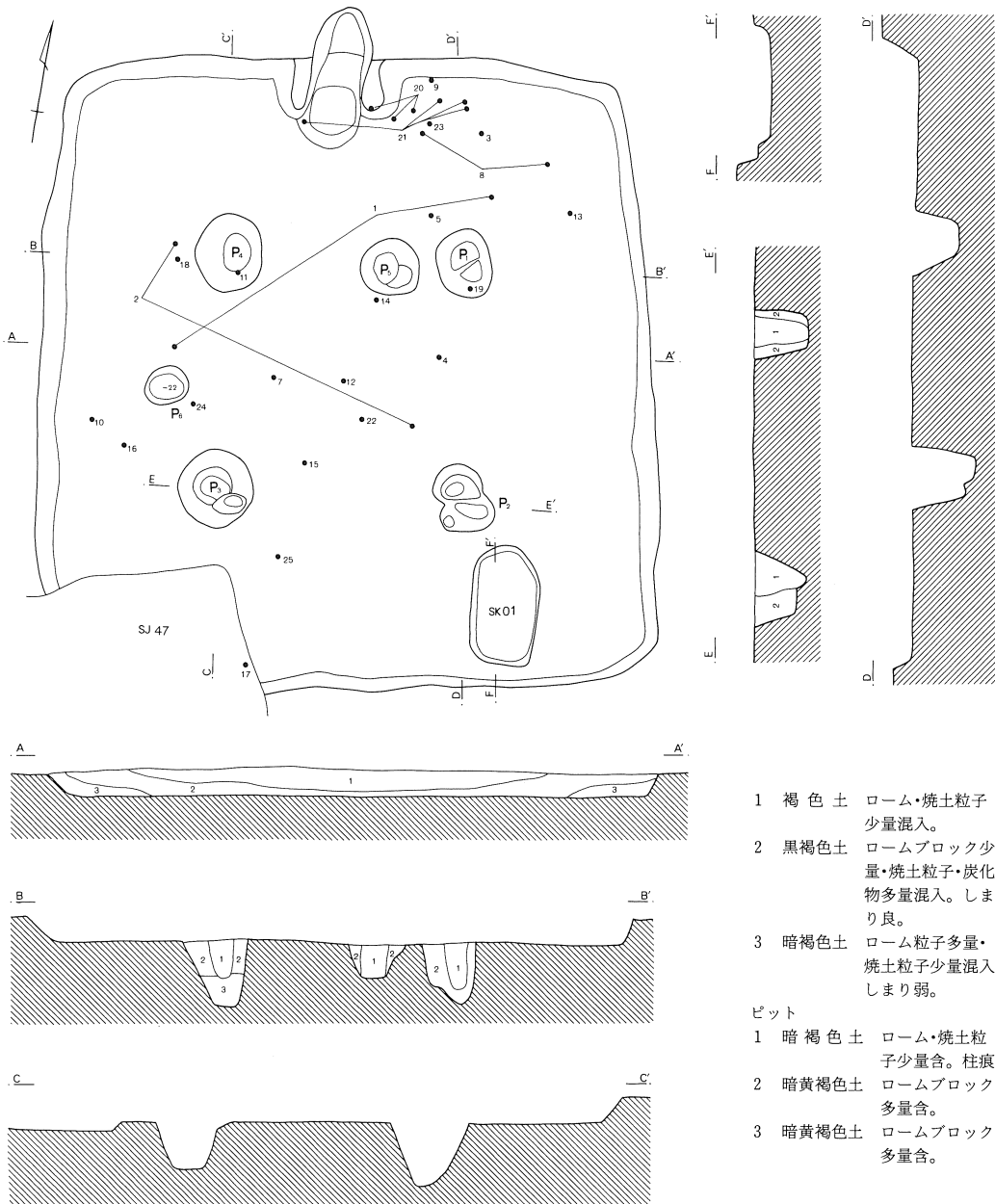
床面は概ね平坦で、壁際を除いて全体的に堅緻であった。壁際は幅約0.5mの掘方をもち、黒色土で埋められている。覆土は褐色系の土壌で構成され、特に人為的堆積を示すような様相は観察されなかった。

カマドは北壁の中央部に設けられる。燃焼部は壁内に納まるが、床面下の掘り込みは浅い。燃焼部奥壁は急角度で立ち上がり煙道部へ続く。袖の遺存状況は比較的良好で、右袖には底部を欠いた土師器甕(第144図20)が補強材として埋め込まれていた。

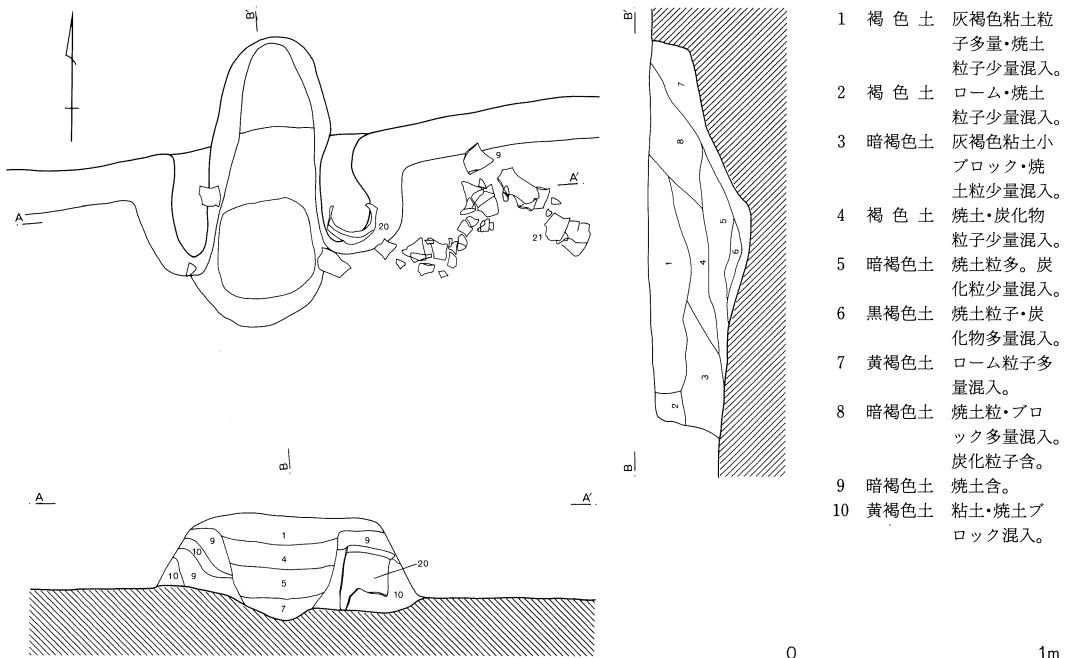
ピットは6本検出された。P₁~P₄は深度も充分であり支柱穴と考えられる。何れも柱痕(抜き取り痕か)が明瞭に観察された。P₅・P₆と第1号土壙(SK01)の帰属は不明である。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は289点を数える。器種的には土師器坏、埴、甕、台付甕、甗、壺、須恵器坏、埴、蓋、甕、壺、鉢で構成され、土師器坏類と甕の構成比が高い。土師器坏は小型化しており、北武蔵型坏と称される一群(第144図7~9)を含む。須恵器は数少なく図示した11の坏は南比企窯跡群産と考

えられ体部中位以下がヘラ削りされる。12の底部はヘラ切り成形されている。13の底部は外縁部が回転ヘラ削り、中心部が手持ちヘラ削りされる。14は蓋としたが異なる器形かもしれない。17の鉢には口縁下に小孔が穿たれている。20の土師器甕はカマド右袖の芯として使用されたもので底部を欠いている。21の甕はカマド前面に潰れた状態で出土した。15~17は混入の可能性がる。稻荷前IV期に比定しておきたい。



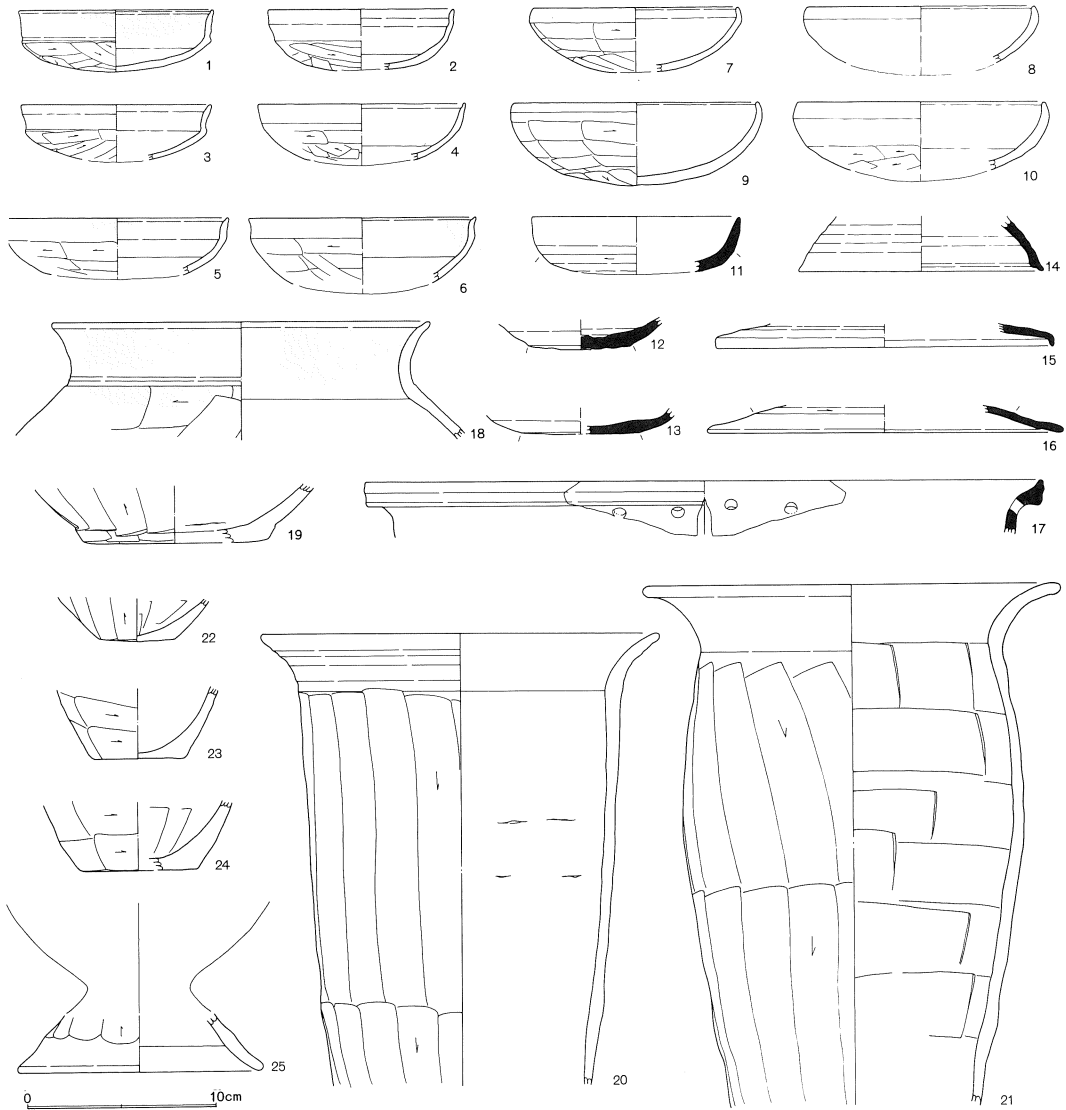
第142図 第69号住居跡(L=31.20m)



第143図 第69号住居跡カマド(L=31.20m)

第69号住居跡出土遺物観察表 (第144図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	10.2	3.3		A B F	A	橙	70%	No.28。覆土。赤彩剥落し不明瞭。
2	坏	(9.9)	3.2		A C D	A	橙	20%	No.19, 174。覆土。
3	坏	(10.0)	2.9		A B	A	橙	20%	No.68。覆土。
4	坏	(11.0)	3.0		A B	B	橙	15%	No.46。覆土。
5	坏	(11.8)	3.0		B F	A	橙	15%	No.55。覆土。
6	坏	12.0	3.5		A B	A	橙	15%	P ₄ 内。
7	坏	(10.9)	3.4		A D E	B	橙	25%	覆土。北武蔵系。
8	坏	(12.0)	3.0		A B	C	橙	20%	No.398。覆土。北武蔵系。
9	坏	(13.0)	4.4		A B E	B	橙	30%	No.445。覆土。北武蔵系。
10	坏	(13.0)	3.6		B	A	橙	20%	No.326。覆土。北武蔵系。
11	坏	(11.0)	2.9		A B C	A	灰	20%	No.22。P ₄ 上面。風化著しい。
12	坏		1.6	5.6	B	C	にぶい黄橙	50%	No.36。覆土。
13	坏		1.4	(6.3)	A C	A	灰	20%	No.99。覆土。底部手持ちと回転ヘラ使用。
14	蓋	(13.0)	2.9		A	A	灰	10%	No.275。床面。器形不明。東海産か。
15	蓋	(18.0)	1.1		A C	A	灰	10%	No.162。覆土。
16	蓋	18.6	1.3		A C	C	灰白	10%	No.128。覆土。
17	鉢	(36.0)	2.9		B C	A	灰白	5%	No.185。覆土。口縁下に小孔2ヶ。
18	壺	20.0	6.3		A B D	A	にぶい橙	15%	No.20。覆土。
19	壺		3.1	(10.0)	B	A	橙	20%	No.359。P ₁ 内。
20	甕	(21.0)	24.0		A D E	A	浅黄橙	45%	No.463。カマド右袖内。
21	甕	20.6	27.5		A B E	A	浅黄橙	30%	No.417。床面。
22	甕		2.2	(4.0)	E F	A	にぶい褐	80%	No.372。覆土。
23	甕		3.8	(5.0)	A E	A	明黄褐	25%	No.440。覆土。
24	甕		3.5	(6.2)	A E	B	橙	25%	No.170。覆土。
25	台付甕		3.0	12.6	A B E	B	橙	45%	No.310。床面。

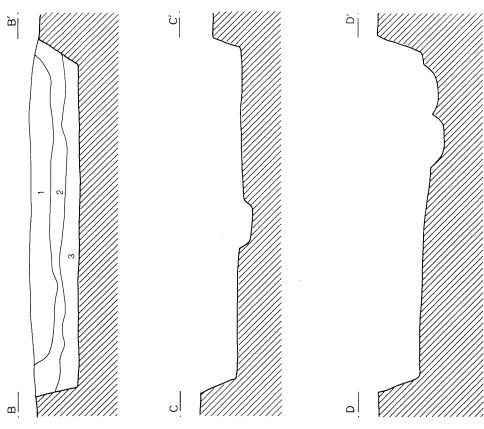
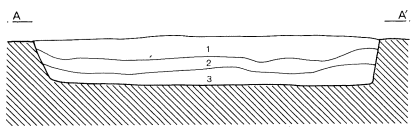
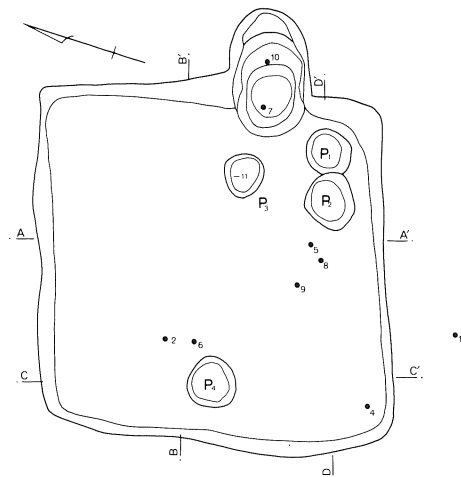


第144図 第69号住居跡出土遺物

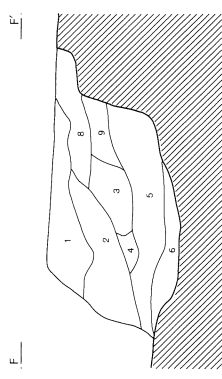
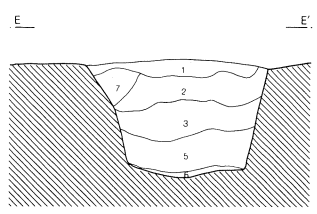
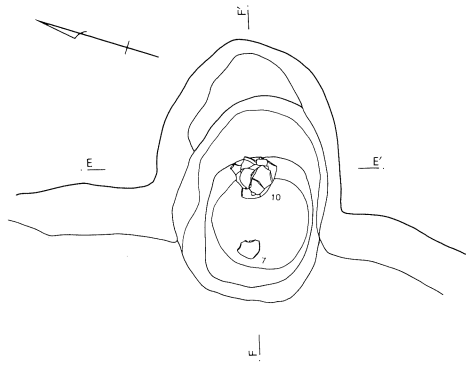
第70号住居跡(第145図)

N・O-6区に位置する。第13号掘立柱建物跡に対応する柱穴がP₃付近に存在したと思われるが床面まで掘り込まれていないため検出されなかった。住居の方が古いものと推定される。形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸2.80m、短軸2.74m、深さ0.20~0.30mを測る。主軸方位はN-71°-Eを示す。

床面は平坦で全体的に堅緻であった。覆土は3層に分かれ、一部に攪乱を受けるが、概ね自然堆積と考えてよからう。カマドは東壁に設置される。燃烧部は壁ラインよりも突出して掘り込まれるが、床面下の深度は浅い。奥壁は急角度で立ち上がり煙道部へ続く。袖は灰白色の粘質土が少量残存していたが遺存状態は悪く明確な形では検出されなかった。第6層は掘方埋土でありその上面が



- 1 暗褐色土 焼土・ローム粒子混在。しまり弱。小礫混在。
- 2 褐色土 ローム粒子・ブロック混在。しまり弱。
- 3 黒褐色土 きめ細かくローム・焼土粒子含。しまり・粘性弱。



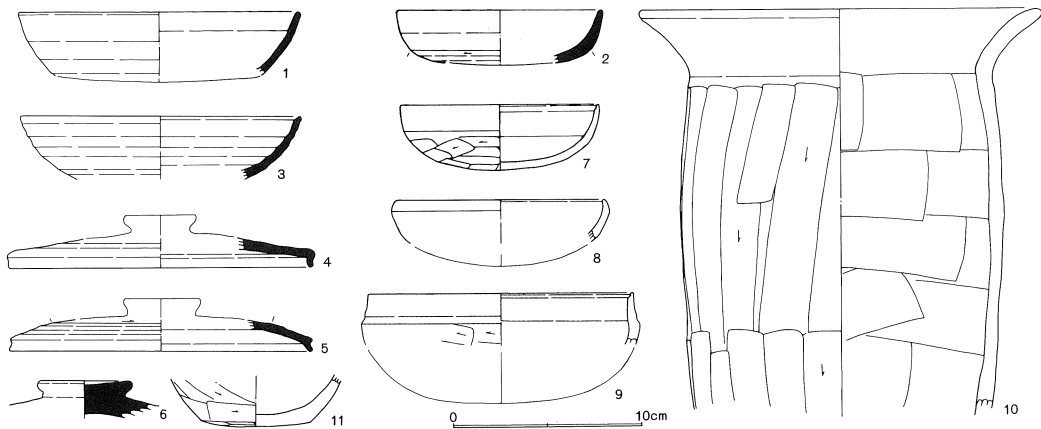
- カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒多。焼土粒少量混入。
 - 2 褐色土 ローム粒子斑状に多。焼土粒子・炭化物少量混入。
 - 3 黄褐色土 焼土粒子・炭化物多混入。
 - 4 黒褐色土 ローム・焼土粒子少混入。
 - 5 赤褐色土 焼土・粘土粒子多混入。ブロック状に炭化物含。
 - 6 暗黄褐色土 ロームブロックと焼土粒子斑状に混入。
 - 7 黄褐色土 ブロック・焼土粒子少量混入。
 - 8 黄褐色土 焼土粒子多。炭化物少混入。3層に類似。
 - 9 赤褐色土 焼土粒多混入。5層に類似。



第145図 第70号住居跡・カマド(L=31.30m)

火床面と考えられる。ピットは4本検出されたが何れも浅く柱穴とは見做し難い。

遺物は115点出土した。第146図2は第144図11と同一個体の可能性がある。坏としたが蓋かもしれない。床面上約9cmから出土。厳密な意味では住居に伴うものではないが、时期的には齟齬はない。3は口縁内面が凹み丸底の坏であろうか。3～6の須恵器は伴う可能性は少ないであろう。土師器坏類は図示したもの以外に比企型坏A₁b類とA₂b類が含まれる。伴出する北武蔵系坏(8)は口唇部が内屈する古段階の特徴を具備している。稻荷前IV期でも前半代に位置付けられよう。



第146図 第70号住居跡出土遺物

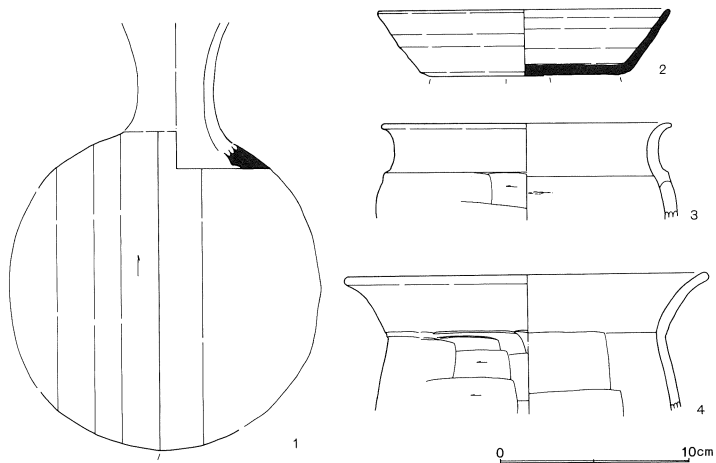
第70号住居跡出土遺物観察表 (第146図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.8)	3.4		AC	B	灰	10%	№70。覆土。
2	坏	(10.8)	2.9		ACD	B	灰	15%	№177。覆土。
3	坏	14.8	3.3		ACD	B	灰白	20%	覆土。
4	蓋	(16.0)	1.6		ACD	B	灰	15%	№112。覆土。
5	蓋	(16.0)	1.7		AB	A	灰	10%	№164。床面。
6	蓋		2.0		AD	B	灰白	70%	№33。覆土。
7	坏	10.5	3.5		AC	B	褐	60%	№182。カマド内。
8	坏	11.0	2.3		BE	B	橙	15%	№159。床面。外面磨滅。北武蔵系。
9	碗	(14.0)	2.8		B	A	橙	10%	№19。覆土。
10	甕	(21.0)	21.5		ADE	A	橙	70%	№181。カマド内。
11	甕		2.7	(5.8)	AE	B	にぶい褐	25%	カマド内。

第71号住居跡 (第148図)

N・O-5区に位置する。第72号住居跡、第13号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は第72号住居跡→第71号住居跡→第13号掘立柱建物跡の順に新しい。調査区外に延びるため、遺構の詳細は不明とせざるを得ない。残存規模は長軸3.02m、短軸2.62m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-2°-W。

床面は平坦で良く踏み固



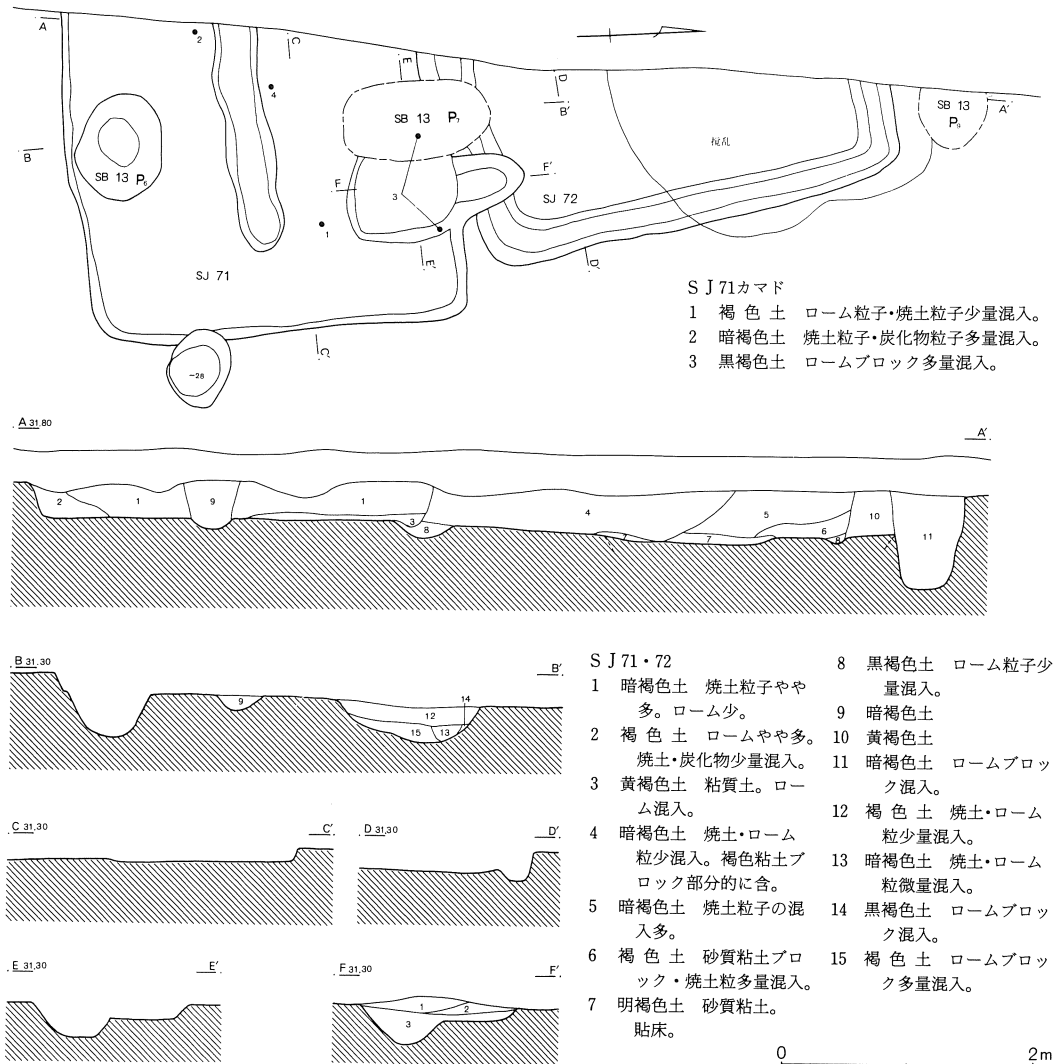
第147図 第71号住居跡出土遺物

められているが、中央部を溝状遺構の攪乱を受けている。覆土は3層に分かれる。第3層は貼床面である。カマドは北壁に設置される。第13号掘立柱建物跡により一部破壊され、遺存状態はあまりよくない。袖には灰白色粘土が僅かに残存していたのみで詳細は不明である。ピットは存在しない。

出土遺物は68点検出された。器種的には土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、甕、瓶から構成される。第146図1はフラスコ形瓶で東海産と推定される。2の須恵器杯は調査区界に近い位置の床面から伏せた状態で出土した。稻荷前VI期に比定される。

第71号住居跡出土遺物観察表(第147図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	瓶		16.8		G	B	灰	25%	No.7。覆土。
2	杯	15.4	3.5	10.0	A C D	A	灰	70%	No.50。床面。
3	甕	(15.0)	5.2		A D F	A	橙	10%	No.12, 23。カマド内。覆土。
4	甕	(19.0)	7.4		A E F	A	橙	20%	No.29。床面。



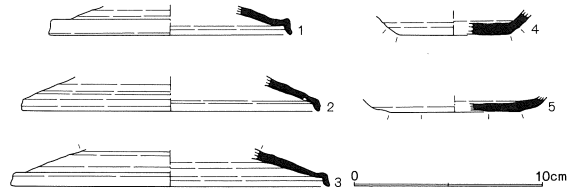
第148図 第71・72号住居跡

第72号住居跡(第148図)

N-5区に位置し、南壁部を第71号住居跡に切られている。また住居の大半は調査区外に延びるため、遺構の詳細は不明である。床面の北半には当初、井戸状遺構が重複するものと考えたが調査の結果、風倒木痕であることが判明した。土層観察により、風倒木痕の上部に貼床していることが確認された。残存規模は長軸3.36m、短軸1.40m、深さ0.15mを測る。主軸方位は東壁を基準にすればN-10°-Wを示す。

床面はやや凹凸をもち全体に軟弱であった。覆土には焼土やロームブロックの混入が多くすべてが自然埋没とは思われぬ。壁溝は巡るが、調査区内にはカマドや柱穴等の施設は存在しない。

出土遺物も31点と少なく、全て小片である。器種的には土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、甕があるが、全て覆土出土であり時期決定の資料とはならない。第71号住居跡との関係から8世紀初頭以前に構築されたものと考えられる。



第149図 第72号住居跡出土遺物

第72号住居跡出土遺物観察表(第149図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	12.8	1.5		AC	A	灰	10%	覆土。
2	蓋	15.8	1.8		ACE	A	灰	10%	覆土。
3	蓋	16.8	1.9		ACD	A	灰	10%	覆土。
4	杯		1.3	(6.0)	C	A	灰	10%	覆土。
5	杯		0.7	(7.0)	ABC	B	灰	20%	覆土。

第73号住居跡(第150図)

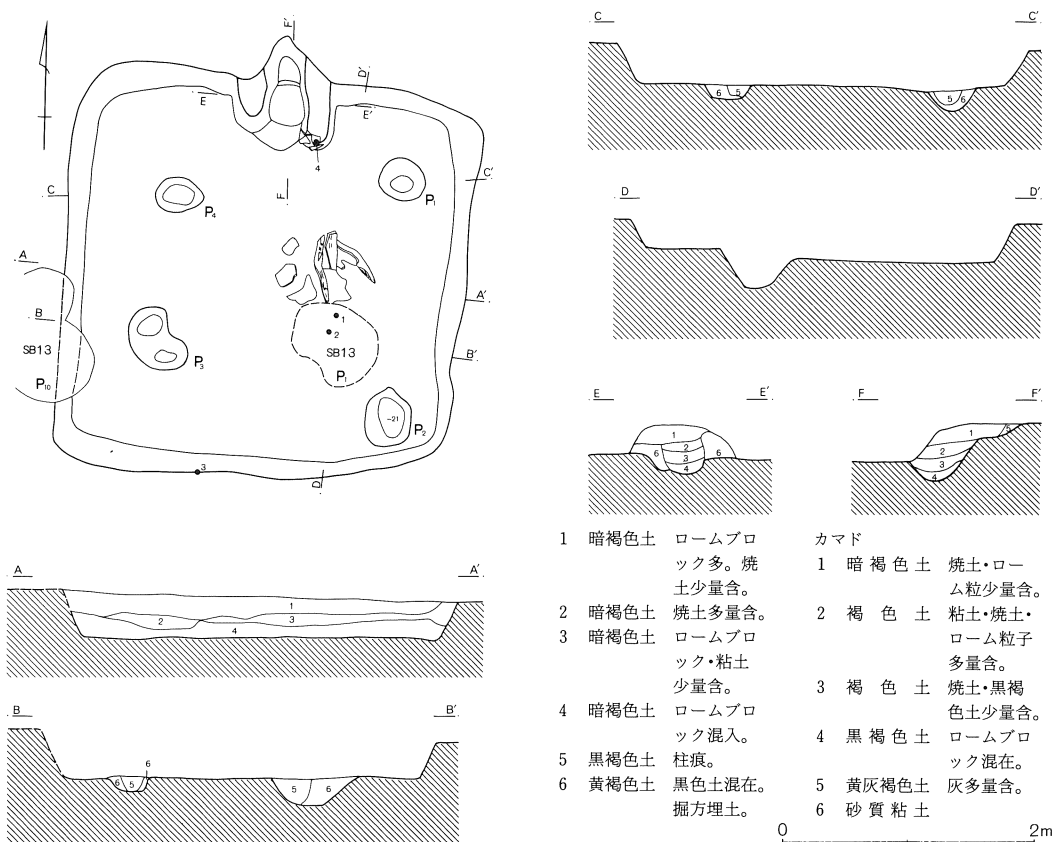
N-5・6区に位置し、第70号住居跡の北側に隣接する。第13号掘立柱建物跡と重複し、本住居が古い。形態は方形を呈し、規模は一辺3.20m、深さ0.30mを測る。主軸方位はN-6°-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、南壁側がやや浅い傾向にある。床面中央付近には炭化材が数点検出されているが、特に火災を受けたような状況は認められない。覆土は4層に分かれ、ロームブロックの混入が目立つ。

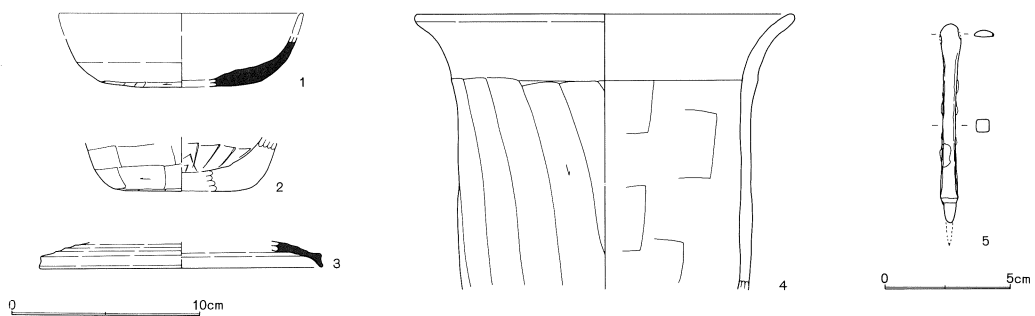
カマドは北壁の中央部に設けられる。燃焼部はほぼ壁内に納まり、掘り込みは深い。第4層は掘方で、火床面は3層下面と考えられる。袖は灰白色の砂質粘土を用いて構築される。焚口付近の粘土は流失していたが、遺存状態は比較的良好である。右袖内からは土師器甕が潰れた状態で出土した。袖の補強材として使用されたものであろう。ピットは4本検出された。位置的にはアンバランスだが柱痕が確認され、柱穴となる可能性が高い。壁溝は存在しない。

出土遺物は109点あり、土師器杯、甕、壺、須恵器杯、蓋、甕、瓶、鉢から構成される。須恵器は少なく大半は混入であろう。第151図1・2は第13号掘立P₁内に落込んだ状態で検出された。4はカマド袖の補強材と考えられ住居に伴うものである。5の鉄鏃は長頸関篋被片丸造端刃箭式に属する。時期の限定は難しいが図示以外に模倣杯内面に沈線をもつ例や浅椀タイプの杯かと推定されるもの

があることからIII期以前には遡らない。稲荷前IV乃至V期に含まれるものと推定される。



第150図 第73号住居跡(L=31.40m)



第151図 第73号住居跡出土遺物

第73号住居跡出土遺物観察表(第151図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏		2.5	8.6	A C D	B	灰	20%	No.10, P1内。覆土。
2	甕		2.8	7.3	A B D	A	にぶい赤褐	25%	No.94, SB13。覆土。
3	蓋	(15.0)	1.4		A	A	灰	5%	No.46。覆土。
4	甕	(20.0)	14.5		A B E	B	浅黄	50%	No.2, 3, 4, 145。床面。
5	鉄 鍬	残長7.9cm。							覆土。

2. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第152図)

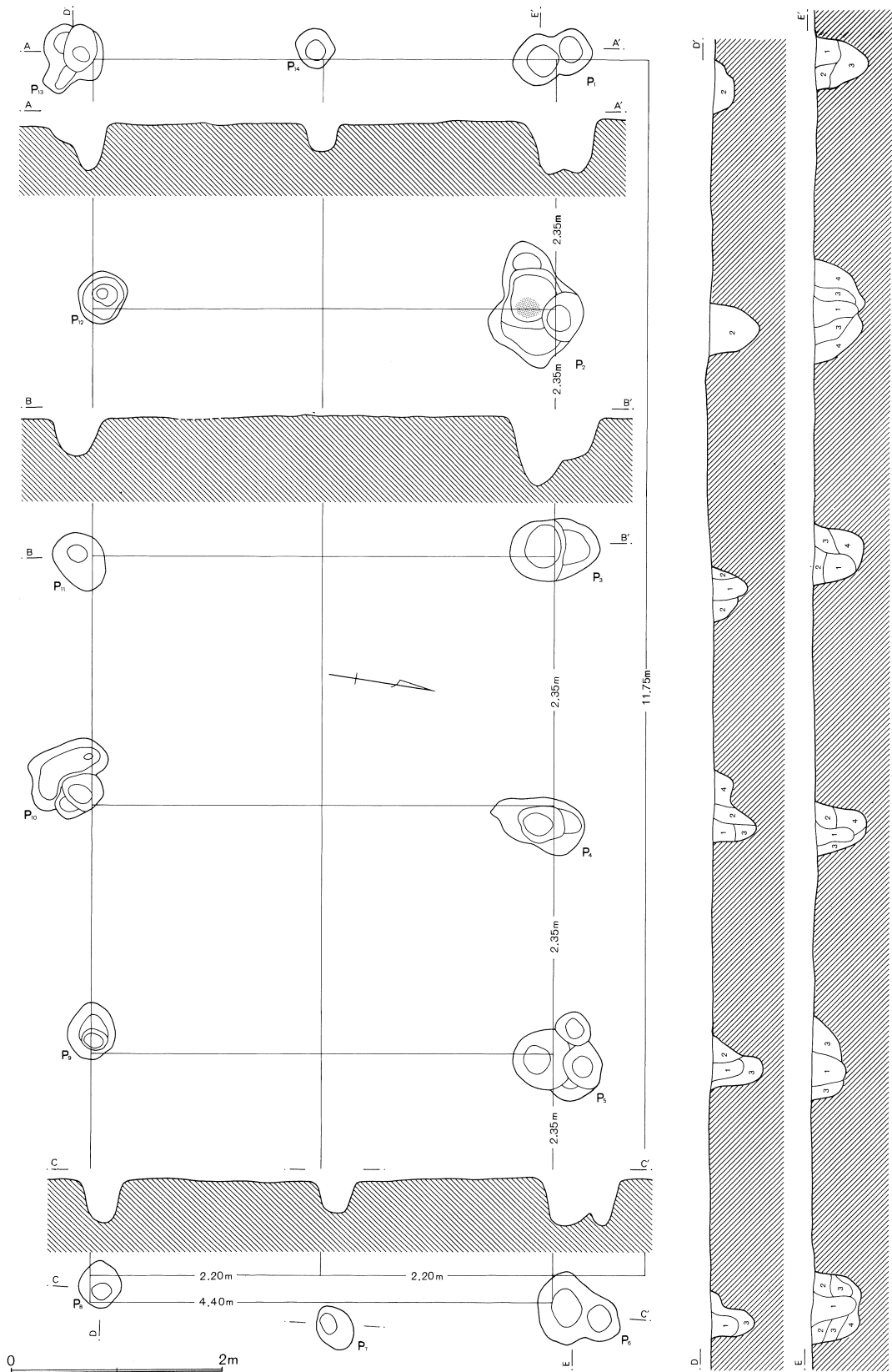
R・S-5・6区に位置する。調査区南西端にあり、調査区外に延びる可能性も否定できないが、一応5×2間の狭長な建物と推定しておきたい。桁行11.75m、梁行4.40mを測り、主軸はN-83°-Eを指す。また見方によっては東の妻側に庇をもつとも考えられる。

柱穴形態は略円形をなすものが多く、規模は比較的小さい。径0.40~0.60m、深さ0.30~0.60mを測る。柱間寸法はおよそ桁行2.35m、梁行2.20mとなり、前者の方がやや長い傾向が認められる。また、妻側の中間柱であるP₇とP₁₄は柱筋よりも僅かに外側にずれており、棟持柱様の構造を取っている。14本の柱穴のうち10本で柱痕(柱抜き取り痕)が確認された。きめ細かい黒色土で締まり粘性は弱い(第1層)。掘方埋土は黒色土~暗褐色土で構成されロームブロックを含む(第2層~第4層)。特にP₅では版築状に突き固めた様相が観察された。

出土遺物は7世紀代の土師器甕、8~9世紀代と推定される須恵器環、埴が検出されている(第172図1~3)。柱掘方形態や柱間寸法等からみると古代の建物とするには違和感があり、遺物こそ出土していないものの中世に下がる可能性も否定できない。



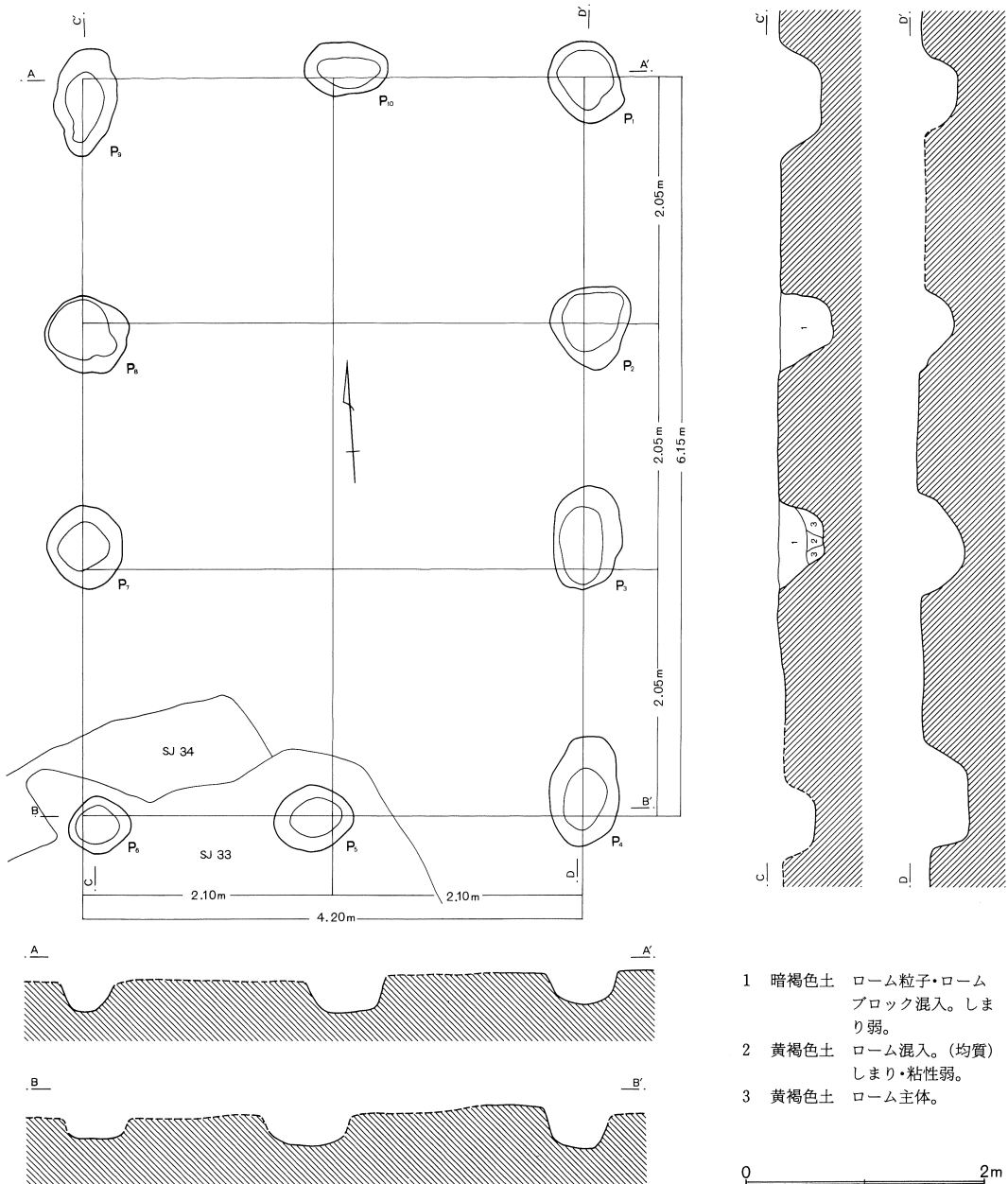
▲第I群掘立柱建物跡群



第152图 第1号掘立柱建物跡(L=31.40m)

第2号掘立柱建物跡(第153図)

P・Q-5・6区に位置する南北棟の建物である。調査区西部にあり、第33号住居跡と重複し、本建物跡の方が新しい。また、第3号溝跡に上面を削られている。3×2間の側柱建物で、桁行6.15m、梁行4.20mの規模をもち、主軸方位はN-5°-Eを指す。北側に第3号・第13号建物が位置するが主軸及び柱筋は僅かにずれている。寧ろ東側の桁行柱筋の延長上には第5号掘立柱建物の西側の妻側にほぼ揃う。



第153図 第2号掘立柱建物跡(L=31.40m)

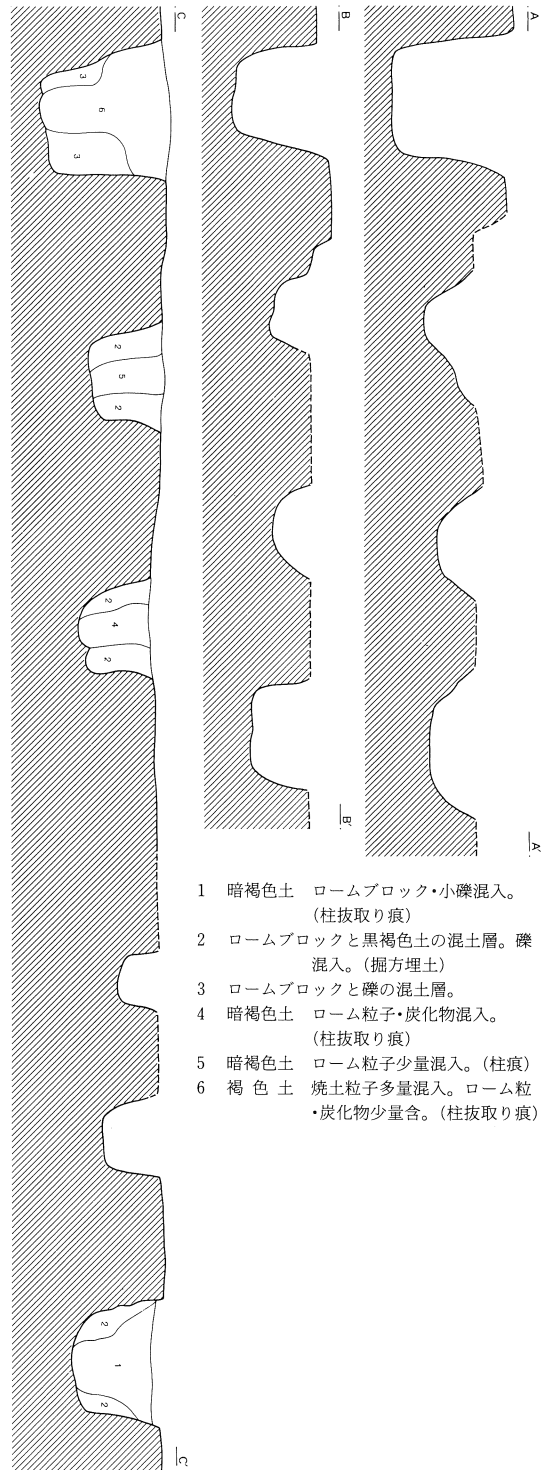
柱穴掘方形態は楕円形を呈するものが多く、長径は0.50~0.90m前後、深さ0.30~0.40m程である。柱間寸法は桁行2.05m、梁行2.10mを測る。土層観察ができたものは少なく、柱痕の有無は明らかでないが、P₂・P₃では明確に確認できなかった。掘方埋土はロームブロックを均質に含む褐色系の土で構成されている。

出土遺物は少ないが、埋土から土師器杯、甕、須恵器杯、甕の破片が検出されている。第172図4は体部外面に墨書が記されている。残存部では「一」と読めるが、欠損部にも墨痕が延びている。「上」のような文字であろうか。正確な時期は明らかにできないが、稻荷前VI期よりも確実に新しく、およそ稻荷前IX期頃に比定しておきたい。

第3号掘立柱建物跡(第154図)

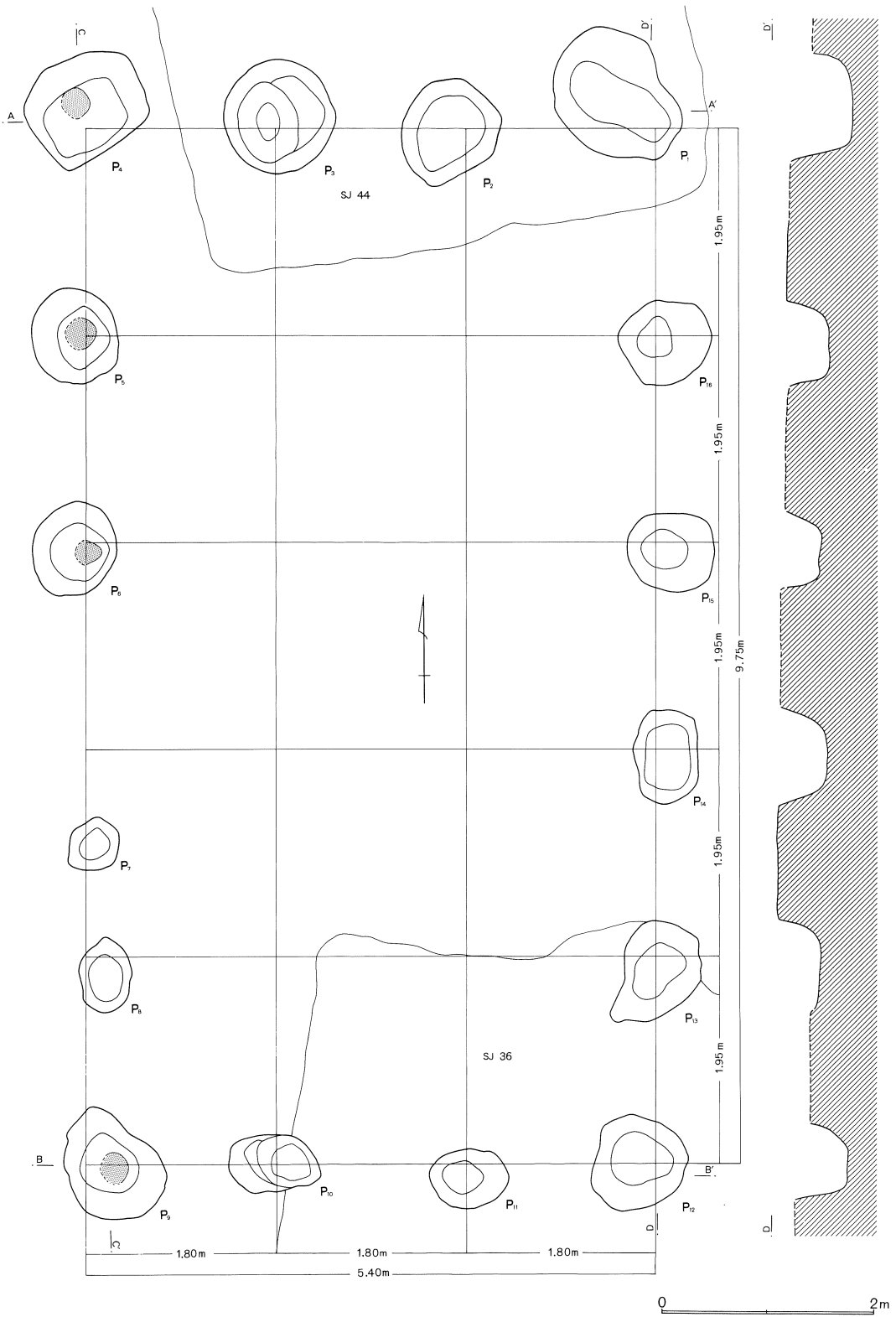
O・P-5・6区に位置し、第2号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡に挟まれた中間地帯に構築される。第36・44号住居跡と切り合い関係にあり、土層観察等から、前者よりも旧く、後者よりも新しいことが判明している。5×3間の南北棟の側柱建物で、桁行9.75m、梁行5.40mの規模を持ち、主軸方位はほぼ座標北を指す。柱穴掘方は比較的大型で円形から楕円形を呈し、均等に配されているがP₇とP₈は位置がずれ、柱穴規模が他に比して著しく小さい。深さは不均等で隅柱が深い傾向にある。P₁・P₄では0.9~1.0mを測る。柱間寸法は桁行1.95m、梁行1.80m等間に復元されるが、P₄とP₉で検出された柱痕位置はややずれてしまう。柱痕から復元される柱径は0.20~0.30mのものでP₄・P₉では抜き取った痕跡が明瞭に残されていた。

出土遺物は44点あるが、全て破片である。

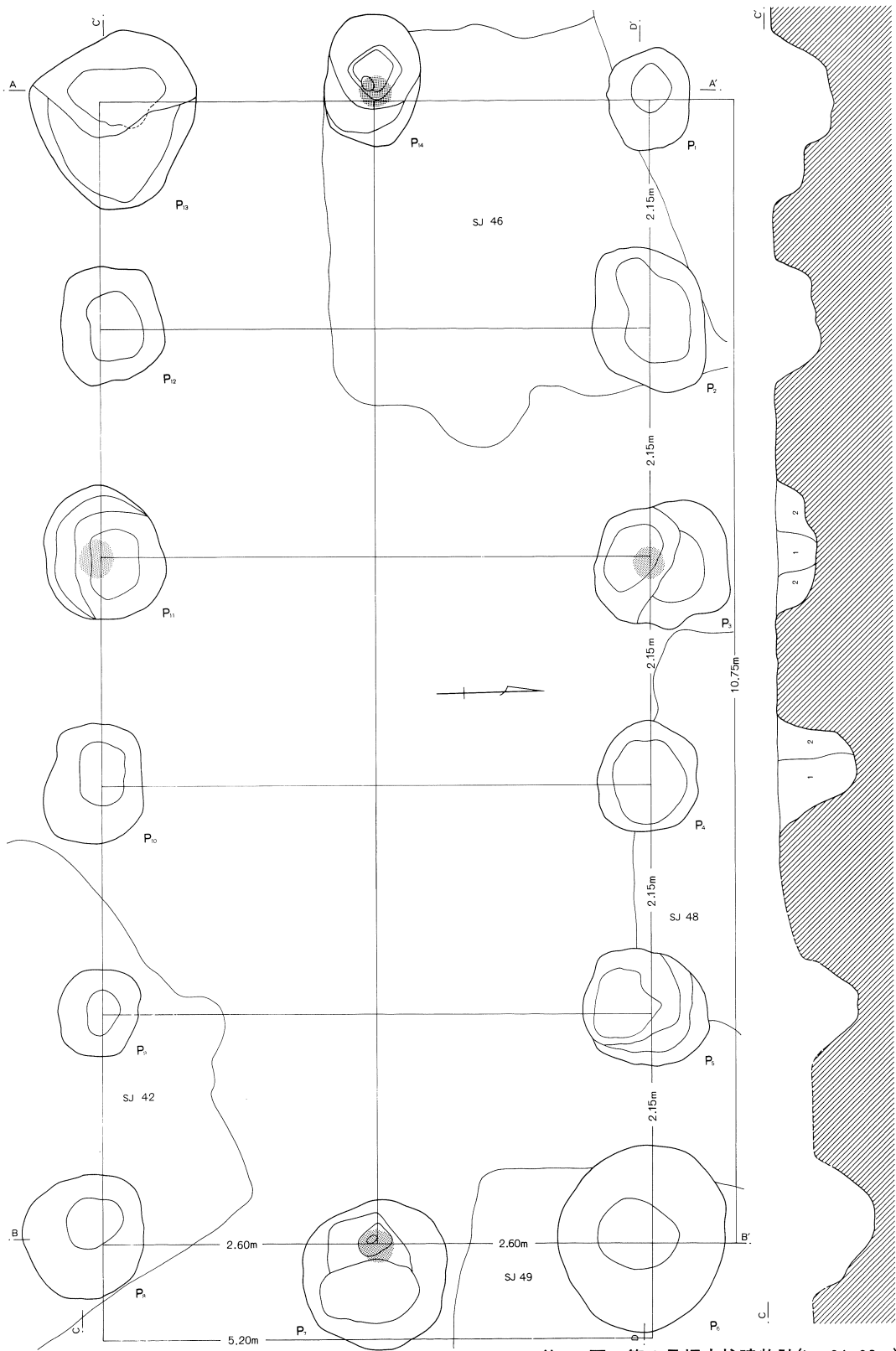


- 1 暗褐色土 ロームブロック・小礫混入。
(柱抜き取り痕)
- 2 ロームブロックと黒褐色土の混土層。礫混入。(掘方埋土)
- 3 ロームブロックと礫の混土層。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・炭化物混入。
(柱抜き取り痕)
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量混入。(柱痕)
- 6 褐色土 焼土粒子多量混入。ローム粒・炭化物少量含。(柱抜き取り痕)

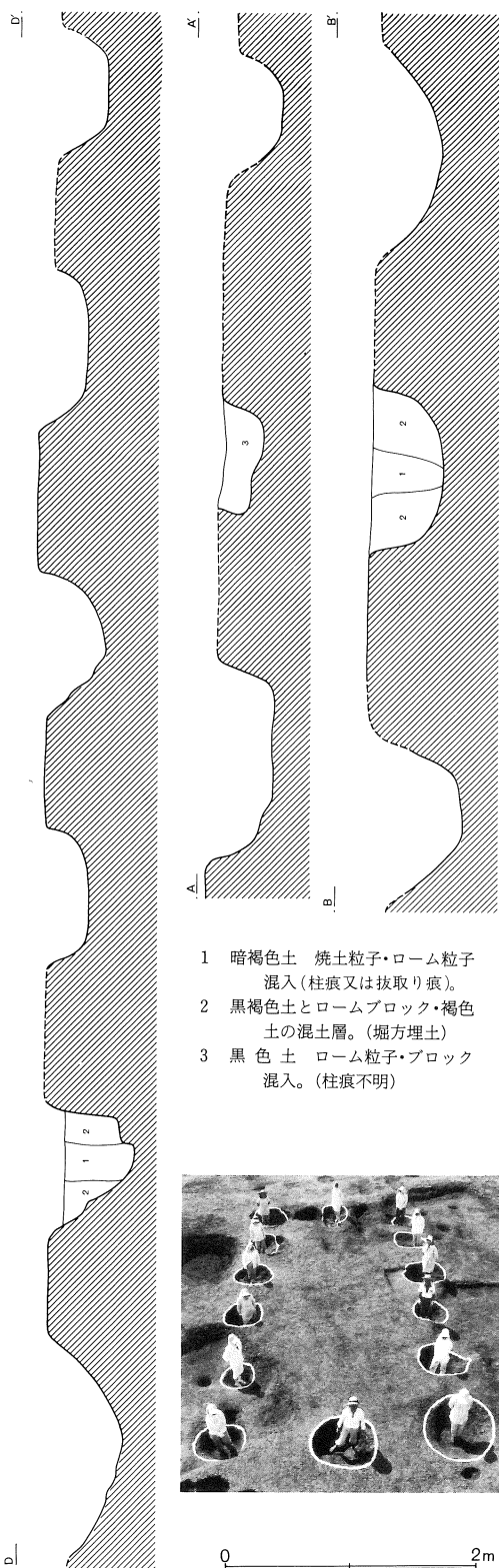
第154図



第 3 号掘立柱建物跡(L=31.40m)



第155图 第4号掘立柱建物跡(L=31.30m)

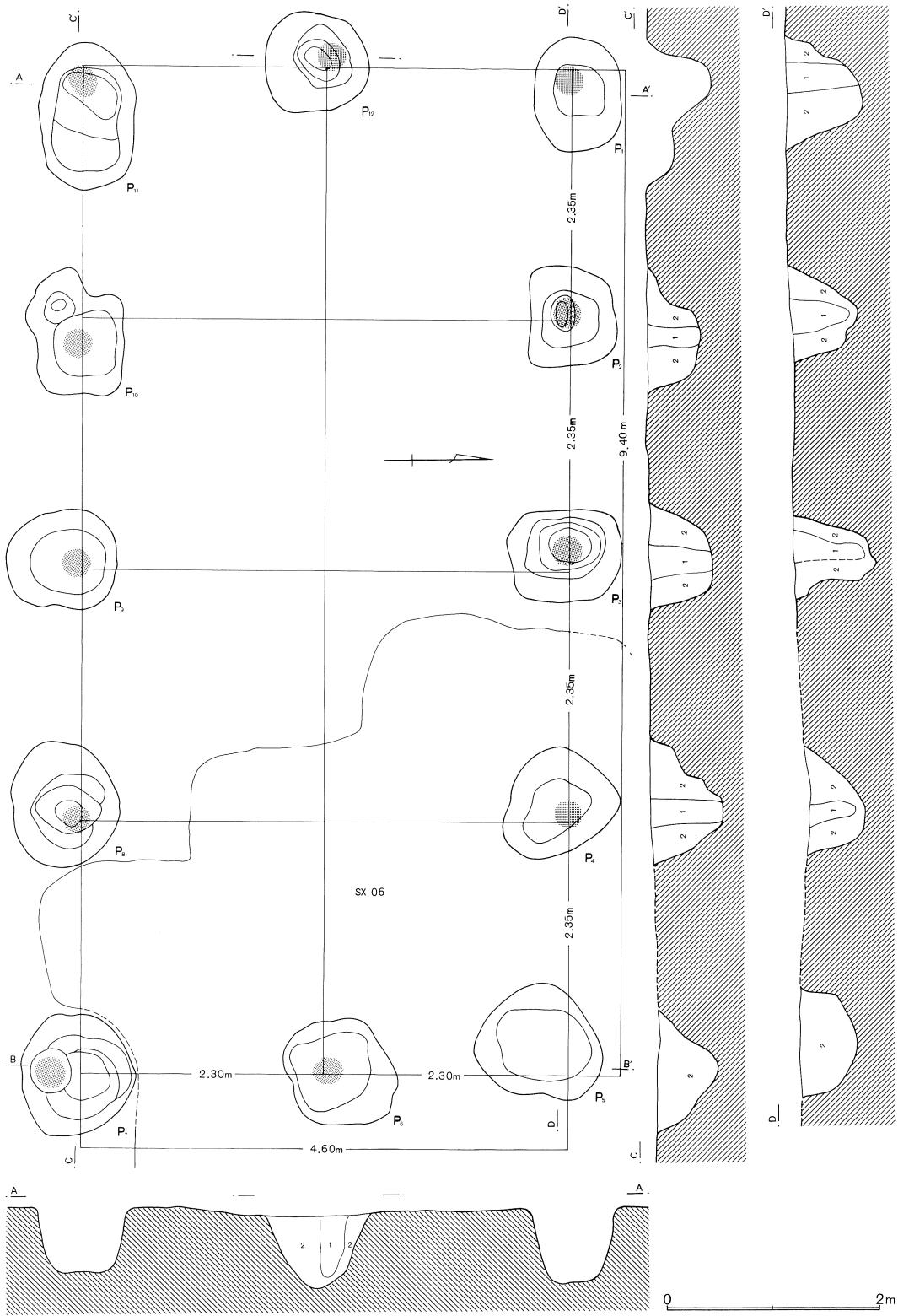


器種的には須恵器坏、埴、蓋、甕、土師器坏、甕で構成され、7～8世紀代と考えられる遺物である。第172図7・8は第44号住居跡の遺物として取上げられているが、出土位置からP₁に帰属するものと推定される。9の蓋は掘方埋土（第2層）上面から検出された。天井部に鈕を接合するための螺旋状の切り込みがみられる。重複関係や須恵坏からおよそ稻荷前IX期に比定されよう。

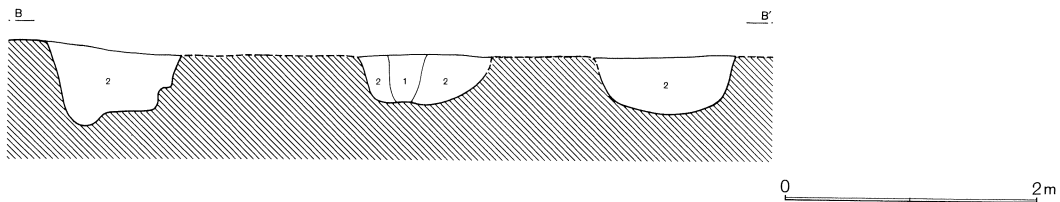
第4号掘立柱建物跡（第155図）

O-6・7区に位置し、第42・46～49号住居跡と重複する。調査所見に拠れば、第42・46・47号住居跡よりも新しく、第48・49号住居跡よりも古いものと判断された。5×2間の大型建物で、桁行10.75m、梁行5.20mの規模をもつ。主軸方位はN-88°-Wを指す。柱穴掘方は全体に大きくP₆・P₁₃では径1.7mにも及ぶ。掘方形態は円形と隅丸方形を意識したものが多く、各柱穴はほぼ均等に配されている。深さは0.40～0.80mを測り、隅柱が深い傾向にある。柱間寸法は桁行2.15m、梁行2.60m等間となり、桁行と梁行で寸法を違えている。柱痕は4本のみ確認され、P₃・P₄は抜き取ったような痕跡が観察された。柱径は約0.30mを測る。

出土遺物は71点検出された。7～8世紀代の土器が混在するが、明確に9世紀代に下がるものは含まれていない（第172図10～13）。器種的には土師器坏、甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、瓶がある。須恵器坏類は全て底部調整されている。須恵器埴の様相、切り合い関係からみてもおよそ時期は限定され、稻荷前IX期前後に位置づけられるものと考えておきたい。



第156图 第5号掘立柱建物跡(1)(L=31.20m)



第157図 第5号掘立柱建物跡(2)(L=31.20m)

第5号掘立柱建物跡(第156・157図)

M・N-6・7区に位置する。第1号小鍛冶遺構(SX06)と重複し、本建物が古いものと推定される。4×2間の建物跡で桁行9.40m、梁行4.60mの規模をもつ。主軸方位はN-88°-Wを指す。柱穴掘方は、形態的には方形乃至楕円形を呈するものが多く、長径は1.00~1.40mと大型である。深さは0.40~0.80m程である。各柱穴はほぼ均等に配され、柱間寸法は桁行2.35m、梁行2.30m等間を測る。柱痕はP₅を除いた柱穴で確認され、柱径は0.30m前後と推定された。柱痕内覆土は、焼土粒子とローム粒子を僅かに含む黒褐色土で充填され、締まりは全くない(第1層)。掘方埋土はロームブロックを多量に含む暗褐色土で構成され、堅く突き固められていた(第2層)。

出土遺物は総点数163片を数え、土師器坏、甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、瓶の各器種が認められる。ほとんどの土器は7世紀~8世紀中葉前後に位置付けられるものであるが、第172図15のみ新しい様相が窺われる。判断に迷うところであるが第1号小鍛冶遺構との前後関係から8世紀中葉(稻荷前VIII期頃)に比定しておきたい。

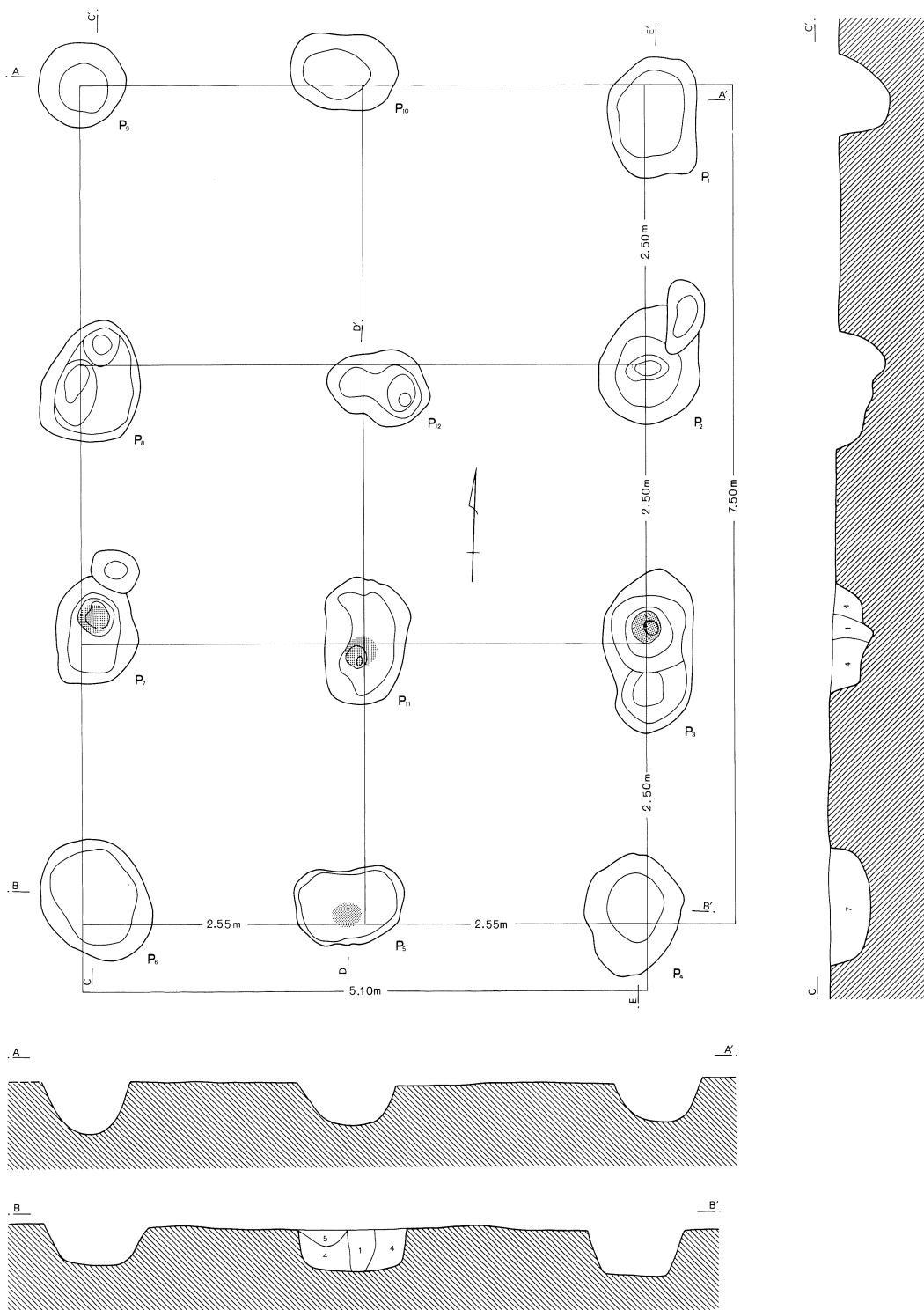
第6号掘立柱建物跡(第158図)

O・P-7・8区に位置し、西側に第4号建物、東側に第7号建物が近接する。3×2間の総柱建物で桁行7.50m、梁行5.10mを測る。主軸方位はN-2°-Wを指すが、ほぼ南北棟の建物とみてよい。柱穴掘方は不整形を呈するものが多く、長径は0.80~1.00m、深さ0.40~0.50m前後を主体とする。各柱穴はほぼ均等に配置され、柱間寸法は桁行2.50m、梁行2.55m等間を測る。柱痕はP₅・P₇・P₁₁で確認され、P₃のそれは抜き取られたものと考えられる。

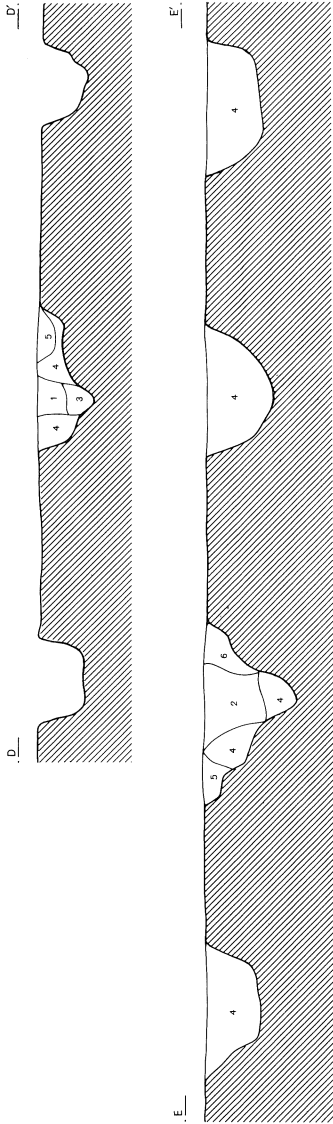
出土遺物は33点検出されているが、何れも小片で図化し得る遺物はない。7世紀から9世紀後半代の土器を含み、時期決定の決め手を欠いている。9世紀後半代(XIII~XIV期頃)の遺物はP₂・P₃・P₁₁から出土しており、本建物もそこまで時期的に降るものであろうか。

第7号掘立柱建物跡(第160図)

O-8区に位置する。第6号掘立柱建物跡の東側に隣接する。第8号掘立柱建物跡とはP₇が重複するが、新旧関係は不明である。3×2間の側柱建物で、桁行4.65m、梁行3.60mを測る。主軸方位はN-84°-Eを指す。また南側に庇柱様の柱穴列が一行見られるが規模が不揃いで柱筋にきれいに对应しないため除外した。柱穴掘方は円形または楕円形を呈し、径0.60~1.20m、深さ0.40~0.60m程の規模をもつ。各柱穴は均等に配され、柱間寸法は桁行1.55m、梁行1.80m等間となる。全ての柱穴で柱痕または抜き取った跡と思われる痕跡を確認できた。それによると、P₅・P₆間、P₉・P₁₀間の寸



第158图 第6号掘立柱建物跡(L=31.20m)



- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量混入。(柱抜き痕)
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量混入。
- 4 黒褐色土とロームブロックの混土层。(掘方埋土)
- 5 暗褐色土 後世のピット。しまり無。
- 6 黒褐色土 ロームブロック少量混入。(掘方埋土)
- 7 黒色土 ローム粒子・ロームブロック少量混入。焼土混入。

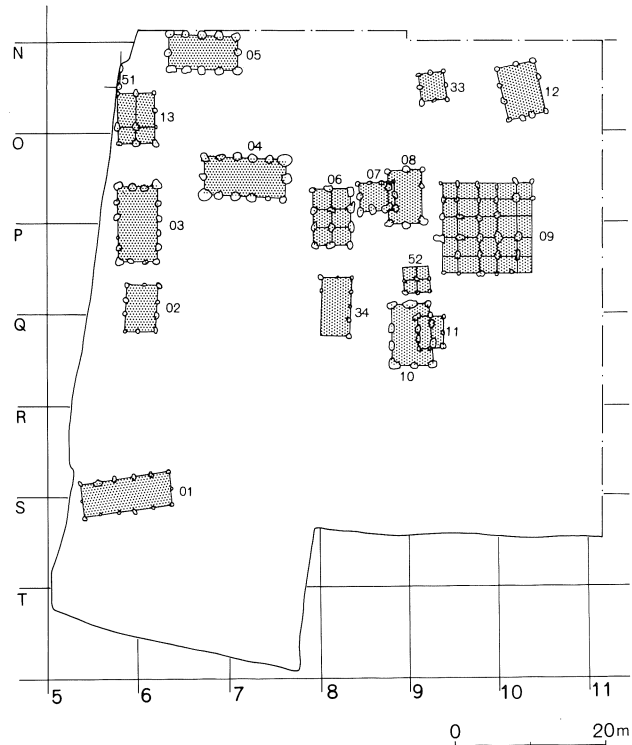
法は2.10m前後となる。東柱が検出されていないが、柱間や規模から見ると倉庫風の建物となる可能性も残されていよう。

出土遺物は15点と少なく、正確な時期は明らかにできない。7～8世紀代の遺物が中心で、明確に9世紀末葉以降に含まれるものはない。8世紀代の建物と考えておきたい。

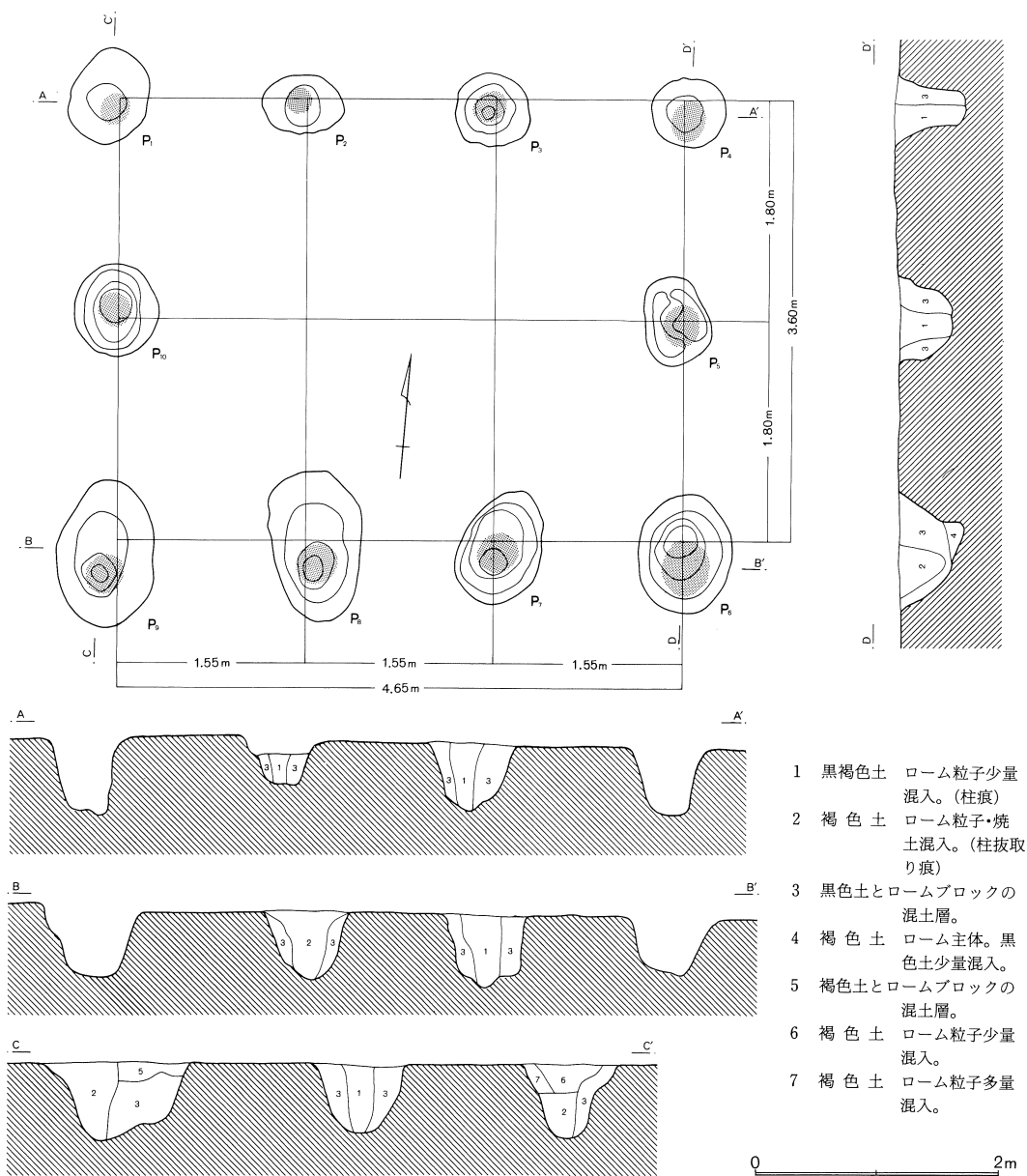
第8号掘立柱建物跡(第161図)

O・P-8・9区に位置する。第7号掘立柱建物跡の東側に重複する。新旧関係は明らかにできなかった。また、第50号住居跡とも重複するが、本建物の方が古いものと考えられる。

3×2間の側柱建物で、桁行7.05m、梁行4.60mを測る。主軸方位はN-2°-Wを指す。柱穴掘方は円形または楕円形を呈し、径0.80~1.40m、深さ0.30~0.50m前後の規模をもつ。P₃は倒木痕の攪乱を受け残存しない。各柱穴はほぼ均等に配されるが、妻側中央柱のP₇とP₁₀は、柱筋よりもやや外側にはずれ、棟持柱様の配置をとっている。柱間寸法は桁行2.35m、梁行2.30m等間となる。柱痕または抜き取り痕は5個のピッ



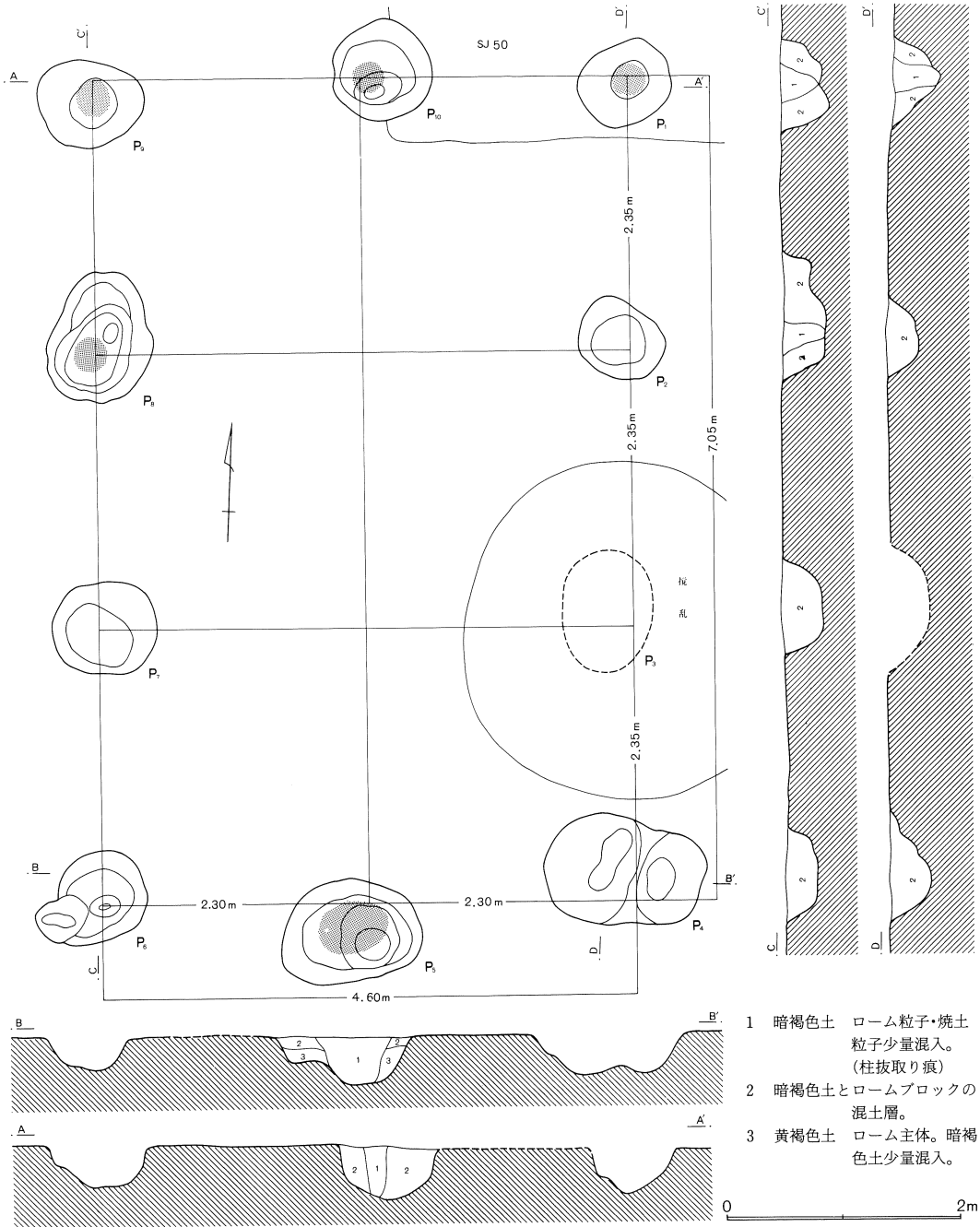
第159図 第I群掘立柱建物跡見取図



第160図 第7号掘立柱建物跡(L=31.10m)

トで確認できた。

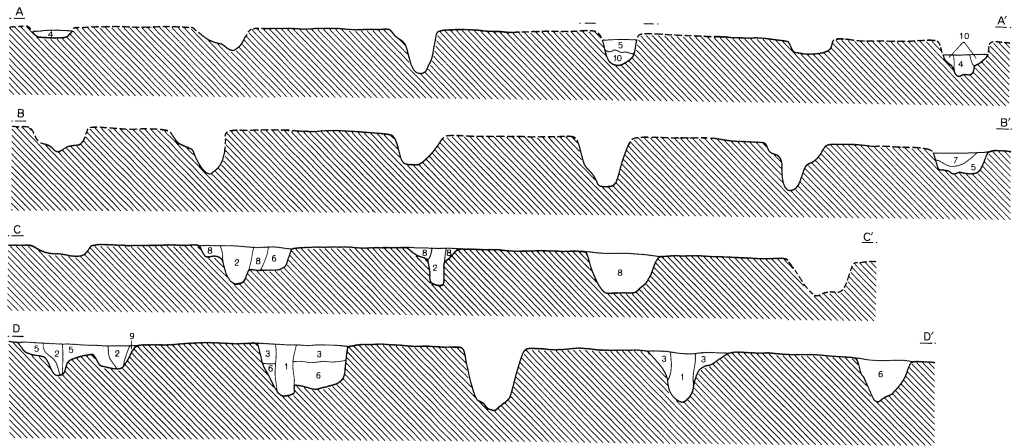
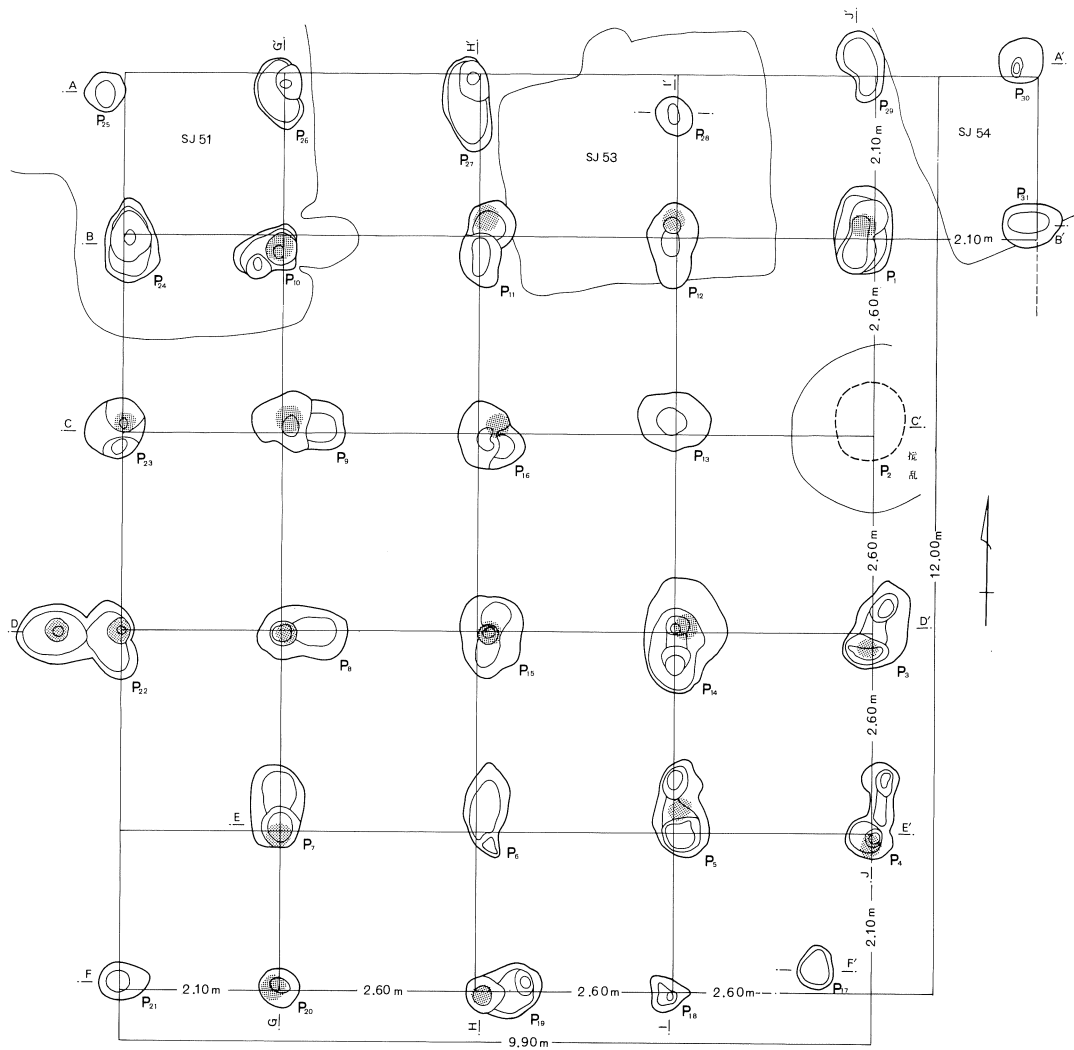
出土遺物は21点検出されたが、全て小片で出土遺物から時期を明確にすることはできない。第50号住居跡との重複関係からXIII期まで下がることはないことは確実である。8世紀から9世紀前半代の建物であろう。



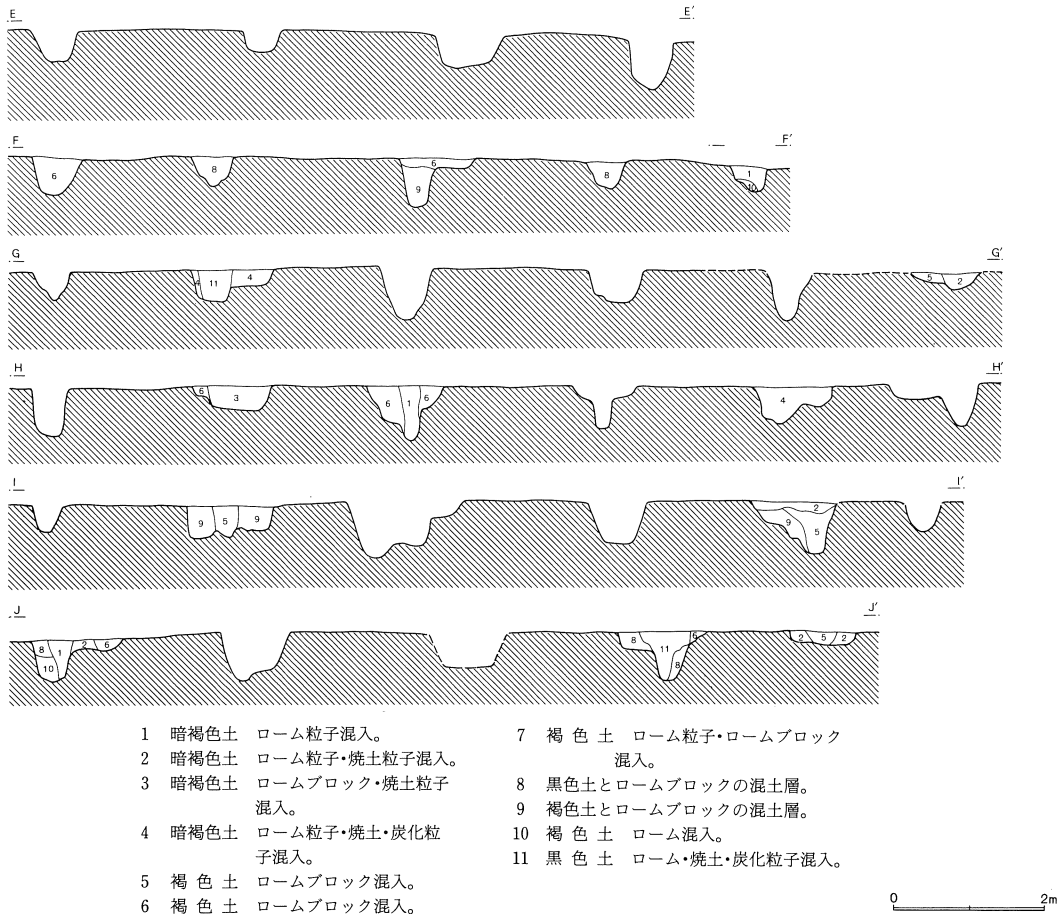
第161図 第8号掘立柱建物跡(L=31.00m)

第9号掘立柱建物跡(第162・163図)

O・P-9・10区に位置し、第8号掘立柱建物跡の東側に隣接する。土層観察に拠れば重複する第51号住居跡よりも旧く、第53号住居跡よりも新しいものと推定される。当初3×3間の総柱建物と考えたが、周囲にも対応する位置に柱穴が検出され最低でも三面に庇が付属する。身舎柱のP₂は倒



第162图 第9号掘立柱建物迹(1)(L=31.00m)



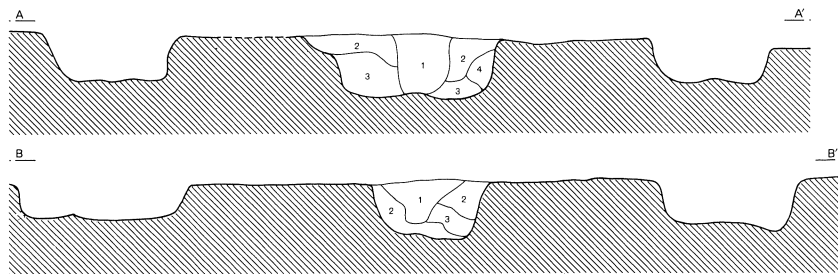
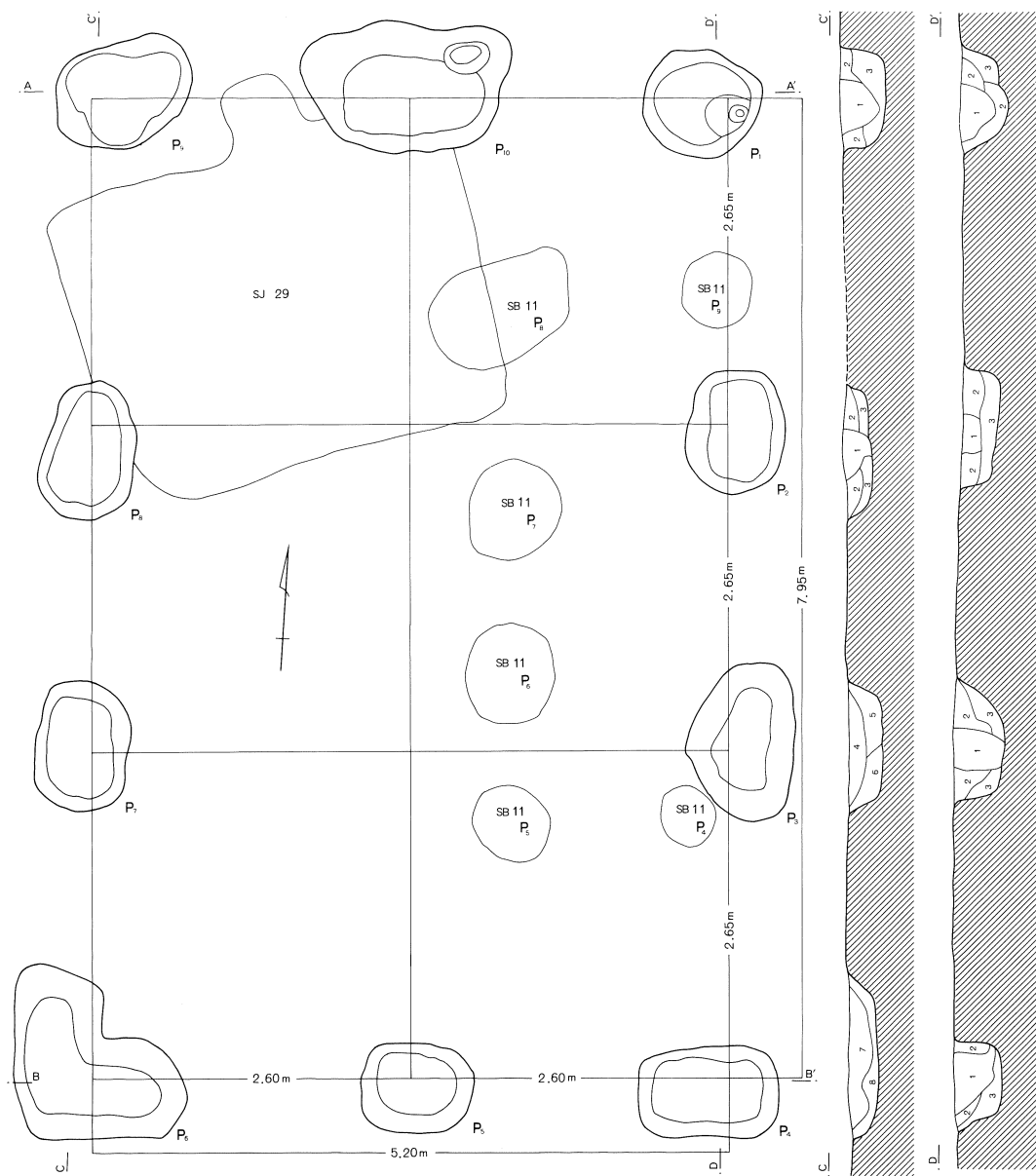
第163図 第9号掘立柱建物跡(2)(L=31.00m)

木痕の攪乱を受け消滅していた。

建物東側は谷地が形成され、遺構確認が充分できなかったが、第54号住居跡内にあるピット(P₃₀・P₃₁)が本建物に伴うとすると、四面庇をもつ一辺12.00mの大規模建物を復元される。何れにせよ、身舎部分は3×3間の総柱で構成され、桁行・梁行共に7.80mを測り、柱間寸法は凡そ2.60m等間となる。庇と身舎の間隔は2.10mとなり身舎柱の間隔に比較してやや幅狭くなる。但し、庇に関しては問題点もある。P₂₁とP₂₂の間には入念に確認したものの柱穴が存在しないこと、また、P₁₇・P₂₅・P₂₈が庇に該当するとするならば位置的にずれを生じ柱筋が揃わない点である。

身舎部分の柱穴掘方は楕円形を呈し、長径1.00~1.50m、確認面からの深さは深いもので0.90mにも及ぶ。庇に相当する柱穴はやや小型で浅いものが多い。柱痕、または柱抜き取り痕は凡そ半数のピットで確認された。特にP₈・P₁₄・P₁₅では明瞭に観察され、柱痕内に空隙が存在する部分もみられた。

出土遺物は掘方内と抜き取り痕の中から92点検出された。須恵器坏、高台付埴、甕、皿、土師器坏、甕、緑釉段皿等の器種がある。XIII期~XIV期頃の遺物が主体となり(第172図21~28)、建物の年代も概ねそれに近い段階に比定されよう。



0 2m

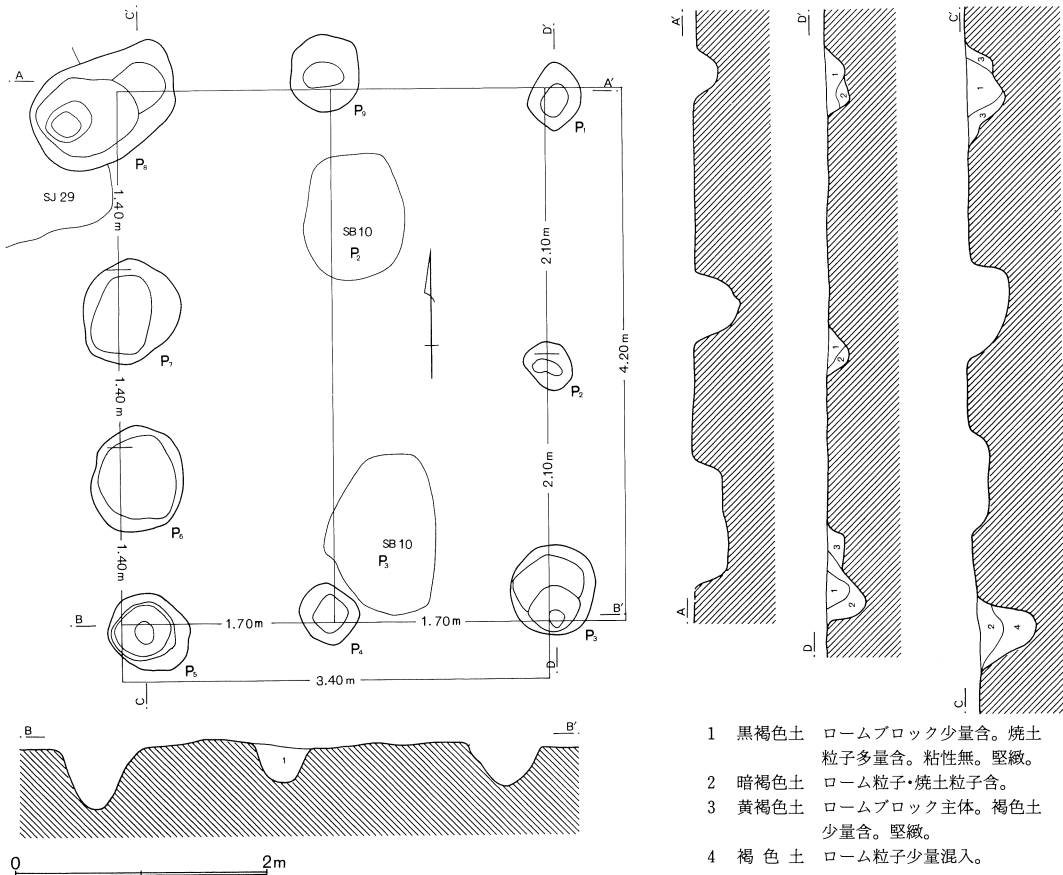
第164图 第10号掘立柱建物跡(L=31.10m)

第10号掘立柱建物跡(第164図)

P・Q-8・9区に位置する。第28・29号住居跡と重複し、本建物が最も新しいものと推定される。第11号掘立柱建物跡との新旧は不明である。3×2間の規模をもつ南北棟の側柱建物で、桁行7.95m、梁行5.20mを測る。主軸方位はN-3°-Wを指す。柱穴掘方は隅丸方形を呈するものが多く、隅柱のP₆は「く」の字状に屈曲している。深さは0.30~0.50m程を測る。各柱穴はほぼ均等に配され、柱間寸法は桁行2.65m、梁行2.60m等間となる。柱痕は8本の柱穴で確認できた。断面観察から全て抜き取り痕と考えられ、埋土には一様に焼土が充填されていた(第1層)。第4・7層は茶褐色系の土で焼土の含有量は僅少であった。他の層は黒色土とロームブロックの混土层で、掘方埋土である。出土遺物は24点あり小片が多い。7~9世紀代の遺物を含み建物の時期的な限定は難しい。図示した坑(第172図20)はP₉掘方出土。最新の遺物としてはP₃から高台坑の小片が出土し、凡そ稻荷前XIII乃至XIV期に位置付けられる。遺物の切合関係から見ても妥当な年代と思われる。

第11号掘立柱建物跡(第165図)

Q-9区に位置し、第10号掘立柱建物の東側に重複するが、直接的な切り合い関係にないため新旧は不明である。3×2間の南北棟の建物と考えられるが、東側の桁行が2間、西側のそれは3間と



第165図 第11号掘立柱建物跡(L=31.00m)

なり変則的である。

主軸方位はほぼ座標北を指す。桁行は4.20m、梁行3.40mを測るが、柱穴の規模はかなり格差があり、1棟の建物としてよいか疑問がないわけではない。深さも0.15～0.50mとかなり幅がある。柱間寸法は東側桁行で2.10m、西側桁行で1.40mとなるが、後者では柱穴位置がやや南にずれてしまう。

出土遺物は16点検出されているが、全て小片で図化し得るものがない。7世紀から9世紀代の遺物が含まれ、時期を限定することは困難であるが古代の建物であることは間違いない。9世紀代の建物とするのが妥当であろうか。

第12号掘立柱建物跡(第166図)

N-10区に位置する。第92号土壌によりP₃を破壊されていたが遺存状態は比較的良好である。2×3間の南北棟の建物であるが、南側梁行は柱穴が2本穿たれ、3間構成となる。桁行7.05m、梁行5.10mを測り、主軸方位はN-24°-Wを指す。

柱穴掘方は円形から楕円形を呈し、径0.70～0.90m、深さ0.40～0.70mを測る。柱間寸法は桁行2.35m、梁行は北側で2.55m、南側では1.70m等間に復元できるが、P₅・P₆間は中央に寄り気味である。

柱痕は西側の桁柱で比較的可見に観察された。それによれば柱径は0.20～0.30m程となる。

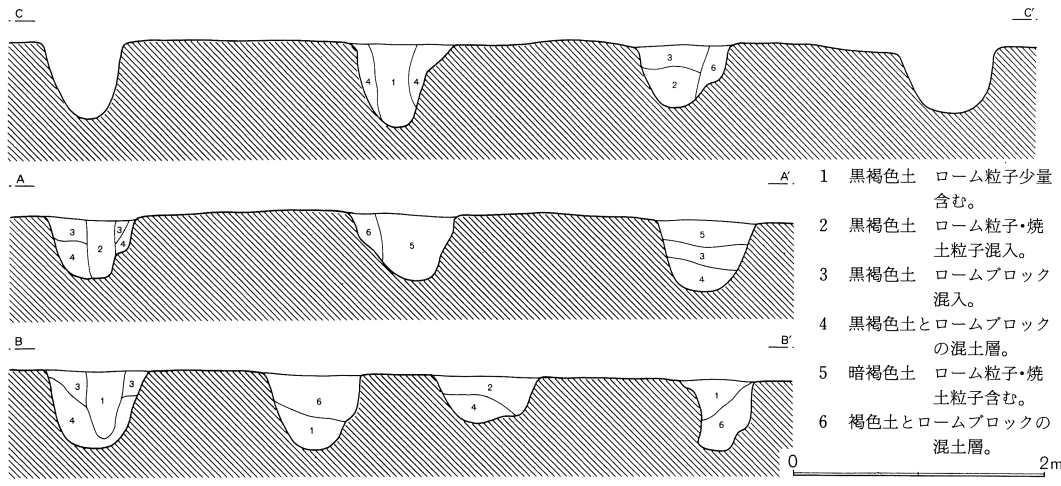
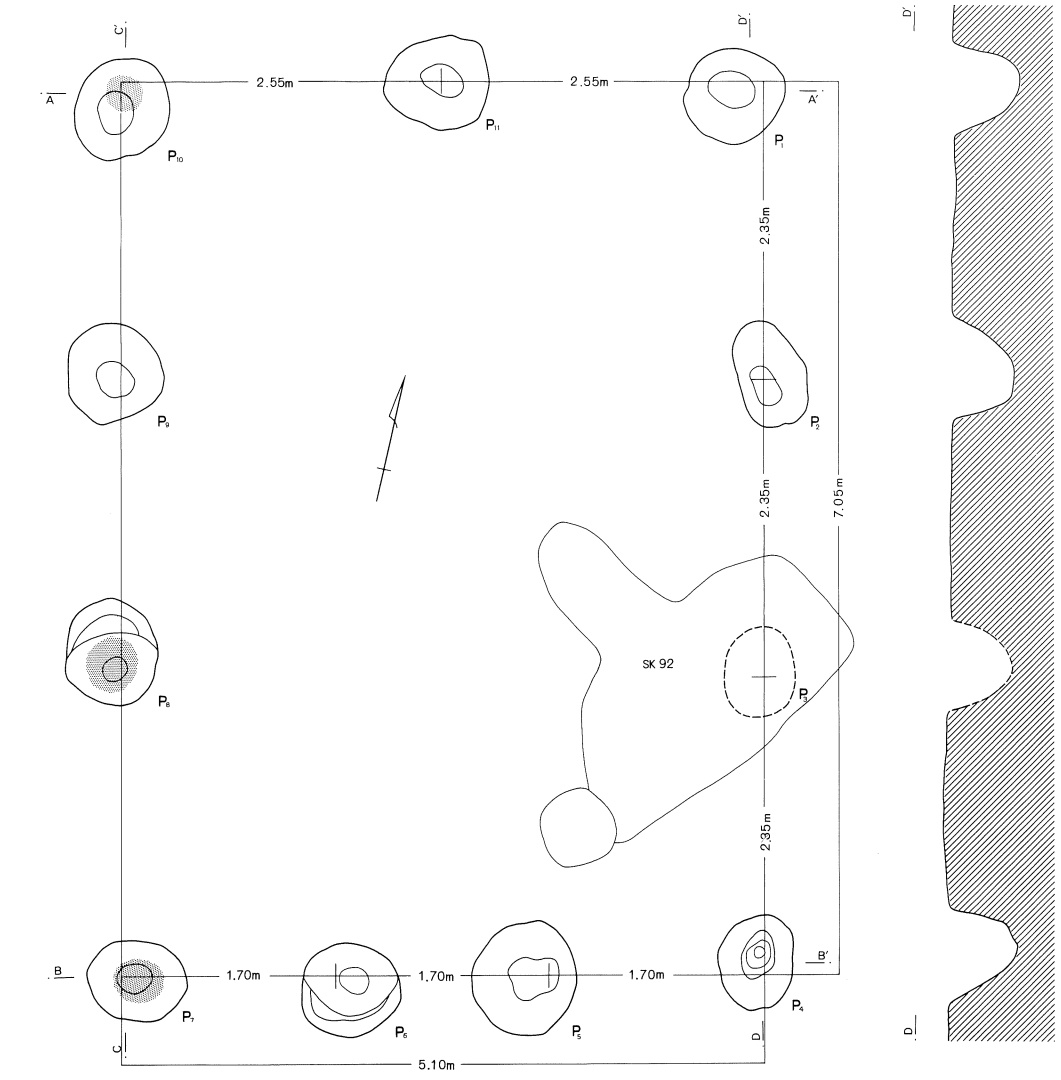
出土遺物は100点検出された。器種的には土師器杯、甕、壺、甗、須恵器杯、蓋、甕がある。ほとんどは土師器で須恵器の構成比は少ない。9世紀後半以降の須恵器杯が2点あるが、大部分は7世紀後半を中心とする時期のものである。本建物も大きく時期的な隔たりはないものとする。一応、稲荷前V期頃と考えておきたい。

第13号掘立柱建物跡(第167図)

調査区西端のN・O-5・6区に位置する。第70～73号住居跡と重複するが、本建物が最も新しいものと考えられる。3×2間の南北棟の建物で、束柱を1本もつ。P₃・P₈は調査の不手際から検出できなかった。またP₁₀とP₁₁間にもう1本柱穴が入ると総柱となる可能性があるが断定できない。桁行6.60m、梁行4.80mを測り、主軸方位はN-2°-Wを指す。

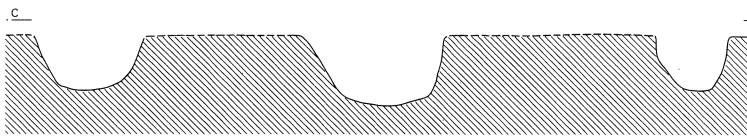
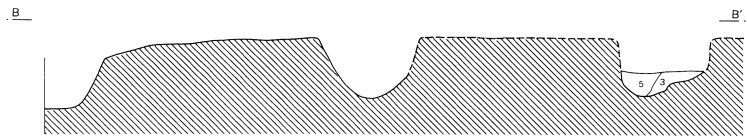
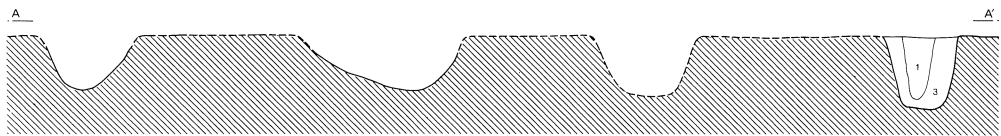
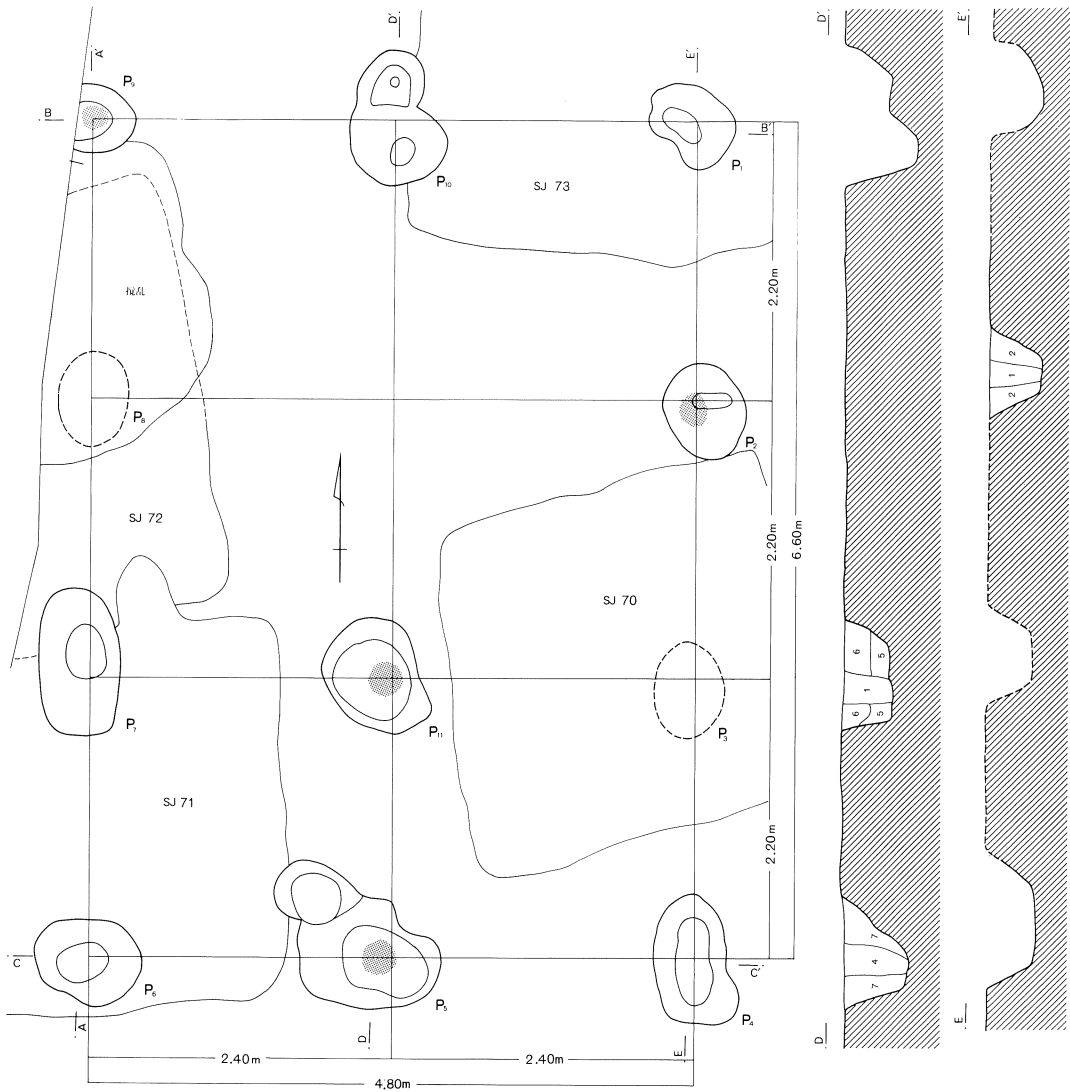
柱穴掘方は楕円形を呈するものが多く、径0.70～1.20m、深さ0.40～0.60mを測る。各柱穴はほぼ均等に配され、柱間寸法は桁行2.20m、梁行2.40m等間となる。柱痕は4本の柱穴で明瞭に観察され、柱径は0.20～0.25mと推定される。

出土遺物は59点検出された。器種的には、土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、甕がある。須恵器杯は全て底部へラ削り調整されている。第173図41の須恵高台杯はP₅から、42の土師甕はP₂埋土から出土した。時期は明確にできないが、出土遺物の様相から9世紀に下がる要素はなく、稲荷前VIII～IX期頃に位置づけられよう。

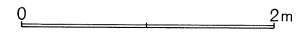


- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子混入。
- 3 黒褐色土 ロームブロック混入。
- 4 黒褐色土とロームブロックの混土层。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子含む。
- 6 褐色土とロームブロックの混土层。

第166図 第12号掘立柱建物跡(L=31.00m)



- 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子混入。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量混入。
- 3 暗褐色土 ロームブロック混入。
- 4 暗褐色土 焼土粒子少量混入。
- 5 黒褐色土 ロームブロック混入。
- 6 褐色土 ロームブロック多量・焼土粒子少量混入。
- 7 褐色土 ローム粒子多量混入。



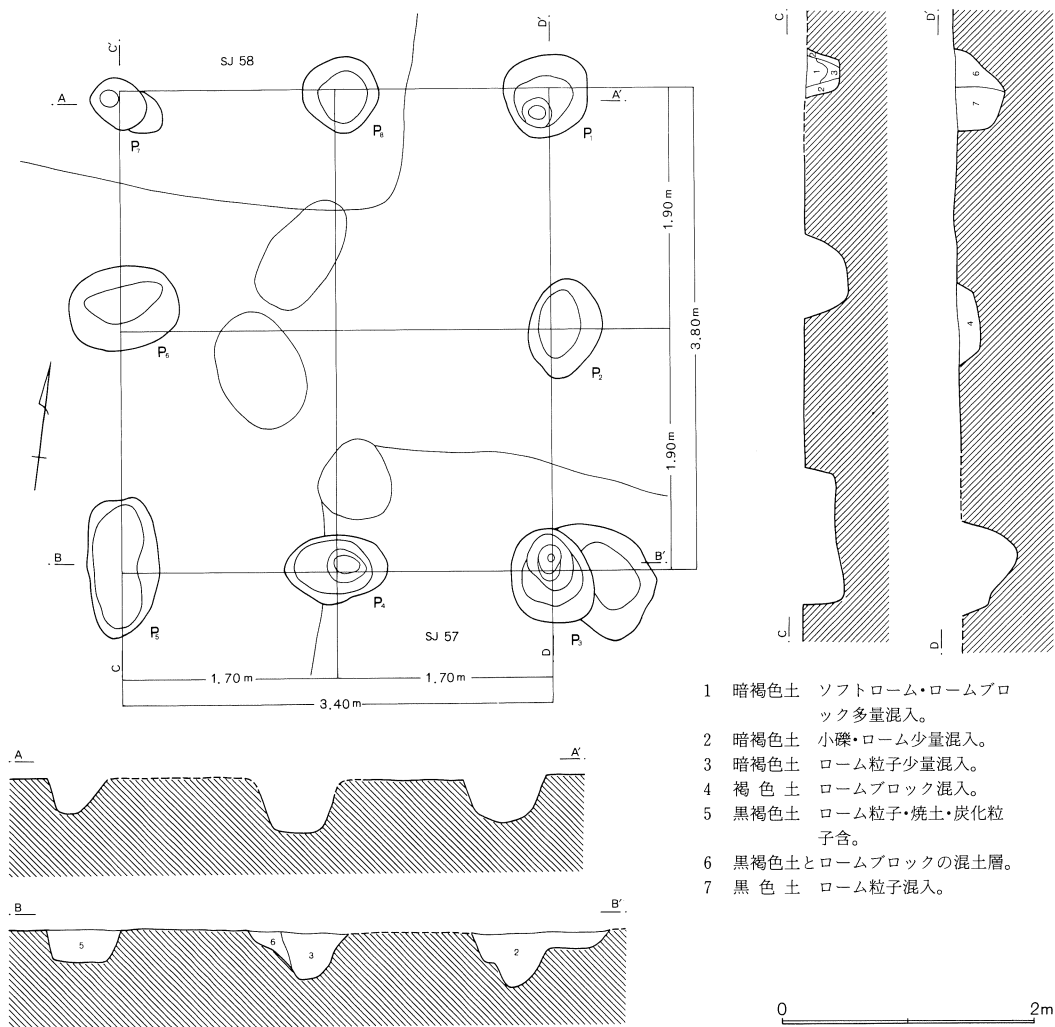
第167図 第13号掘立柱建物跡(L=31.30m)

第33号掘立柱建物跡(第168図)

N-9区に位置し、第57・58号住居跡と重複する。柱穴の検出状況から本掘立柱建物跡の方が古いものと考えられる。2×2間の倉庫風建物であるが中心に束柱がみられない。規模は桁行3.80m、梁行3.40m、柱間寸法は桁行1.90m、梁行1.70m等間を測り、僅かに南北に長い構造をもつ。主軸方位はN-8°-Wを指す。

柱掘方は楕円形または円形を呈し、径0.60~1.00m程が主体となる。柱痕または抜き取り痕と思われる痕跡はP₁・P₄・P₇で確認された。

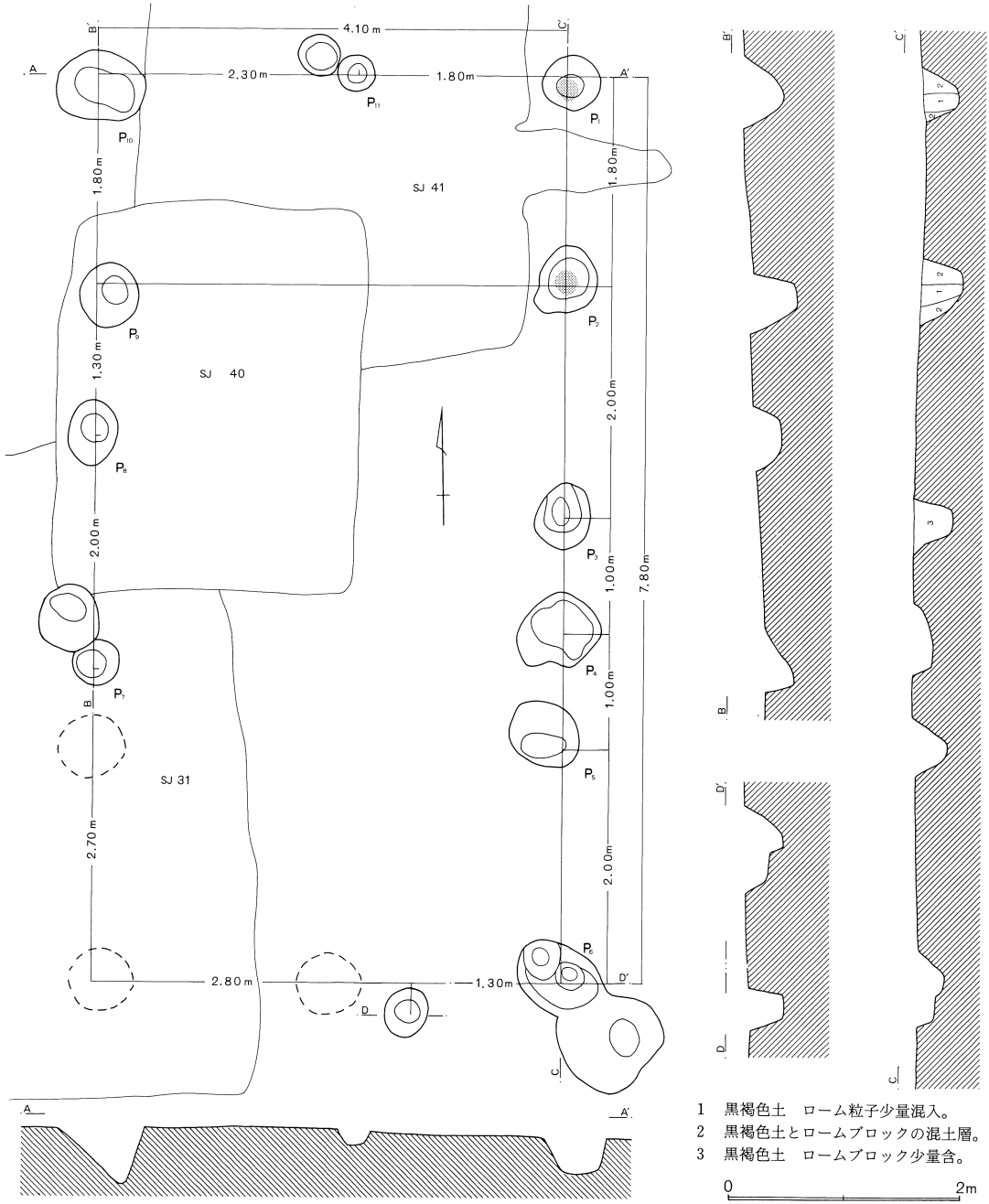
出土遺物は11点ある。器種的には土師器坏、甕、須恵器坏、坑、甕が認められる。1点のみ出土した須恵坏は9世紀後半以降、他の土器は7世紀から8世紀でも末葉に下がる要素はないものである。何れも小片で図化し得るものはない。正確な時期は不明であるが、住居の切り合いからみてもXIII期以前であることは間違いない。12号建物と主軸が揃い同時期の可能性もあろう。



第168図 第33号掘立柱建物跡(L=30.90m)

第34号掘立柱建物跡(第169図)

I 群ほぼ中央部のP・Q-8区に位置する。整理段階で検出したもので、不明な点もあるが、第30・31・40・41号住居跡と重複し、本遺構が最も新しいものと判断される。4×2間の南北棟、または3×2間の北庇をもつ建物と考えられるが、柱間隔が不揃いな箇所と欠落する柱がみられる。東側側柱のP₄は深度も浅く除外して考えると、P₁・P₂間は1.80m、P₂からP₆間の柱間寸法は各2.00m



第169図 第34号掘立柱建物跡(L=31.20m)

等間になる。一方西側ではP₇・P₈の位置がずれており規則的な配置を取らない。妻側柱間柱としてP₁₁とP₁₃を想定するとややずれてしまう。P₁₂を使用し、棟持柱風の構造を想定した方が良くもしれない。

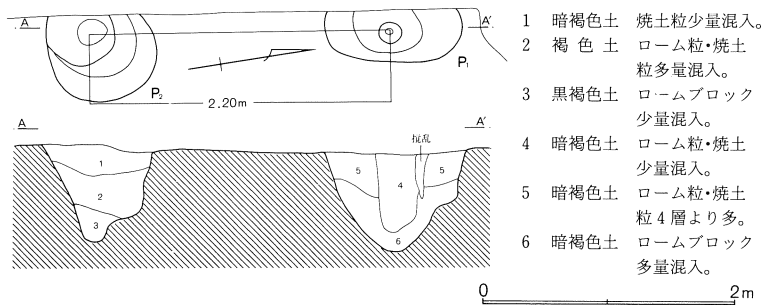
規模は桁行7.80m、梁行4.10mを測り、主軸方位はN-2°-Eを示す。柱穴規模は比較的小さく径0.50~0.60m前後が主体を占める。柱痕はP₁とP₂で確認されている。

出土遺物はP₄から土師器甕が検出されているが、P₄自体本建物から除外して考えると直接建物年代を指し示すものとはいえない。中世の建物であろうか。

第51号掘立柱建物跡(第170図)

N-5区に位置する。調査区西端に位置し、柱穴が2本検出されたのみで詳細は明らかにできない。おそらく調査区西側に延びる建物跡と推定される。第13号建物が南に隣接するが、柱穴間が接近しすぎ、同時期存在は不可能と考えられる。柱穴は大型で深さ0.80mと深い。柱痕はP₁で明瞭に観察された(第4層)。P₂の柱は抜き取られたものと考えられる。柱間寸法は2.20m程である。主軸方位は不明であるが、座標北から数度の振れに納まるであろう。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏が計3片検出されている。8世紀初頭前後の遺物と推定されるが、建物の時期と合致するかどうかは不明である。何れにせよ古代の建物であることは間違いなからう。



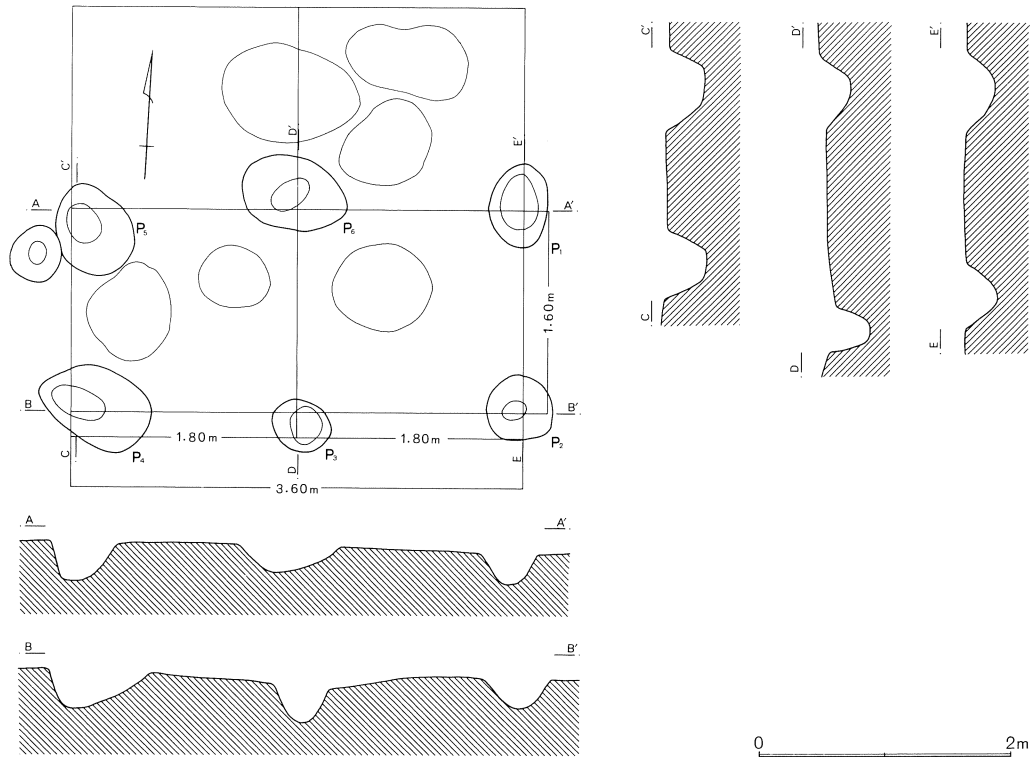
第170図 第51号掘立柱建物跡(L=31.50m)

第52号掘立柱建物跡(第171図)

P-8・9区に位置する。第10号掘立柱建物跡の北側に隣接し、柱穴6本が発見された。調査時点ではピット群として処理されていたため、建物規模等の詳細は明らかにできない。仮に東西方向を桁行、南北方向を梁行とすると桁行の柱間寸法は1.80m、梁行の柱間寸法1.60mを測り、桁行が僅かに長い傾向にあるが、他の建物と比較して柱間寸法そのものは短いといえる。おそらくP₆が束柱となる2×2間の総柱建物に復元するのが最も妥当であろう。機能的には倉庫様建物と推定される。

この推定が正しいとすると建物規模は桁行3.60m、梁行3.20m前後となる。主軸方位はN-2°-Wを指す。各柱穴は円形と楕円形を呈し、径0.50m~0.90m、深さは0.30m前後と比較的浅い。

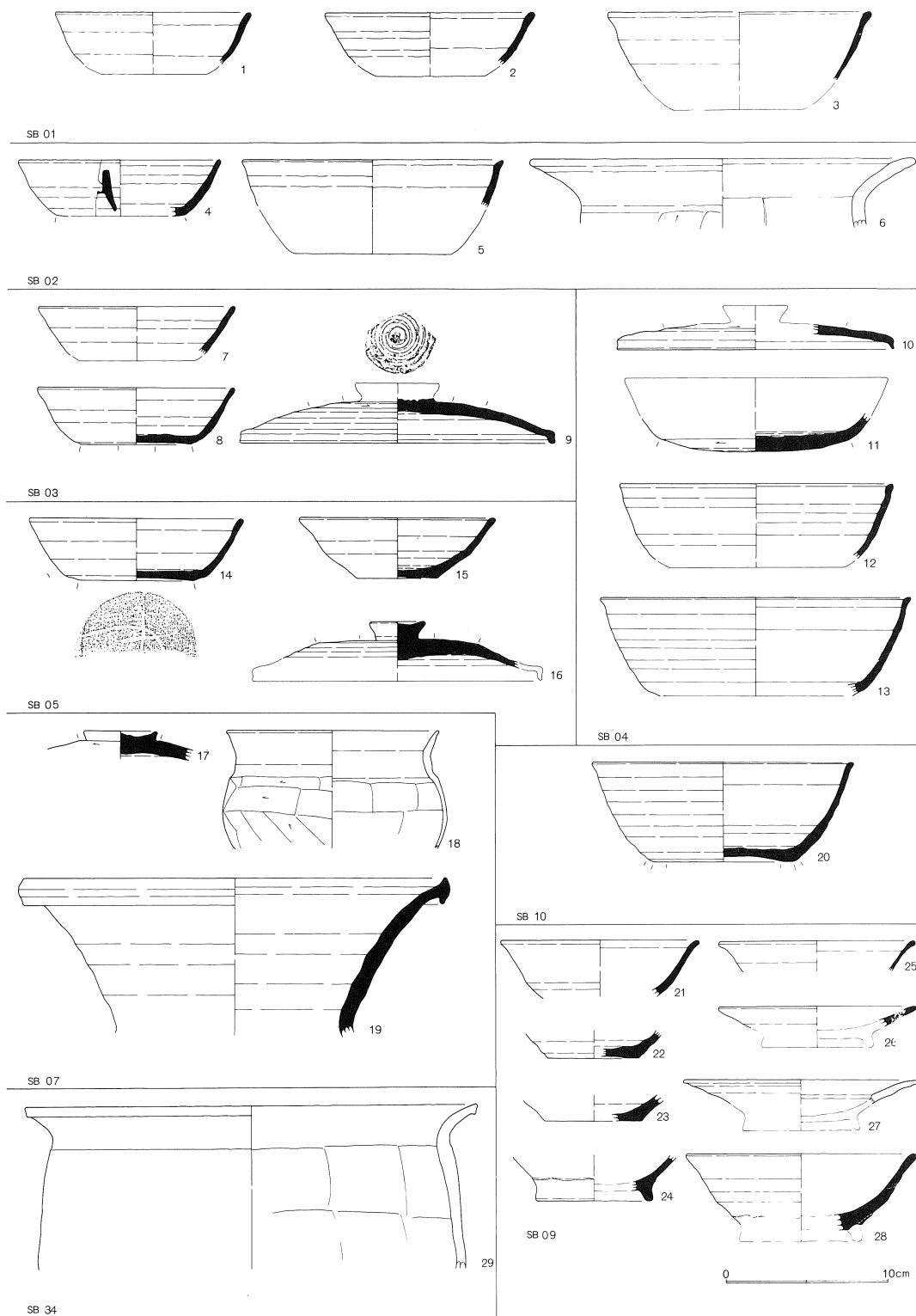
各柱穴からは出土遺物が検出されていないため年代を限定できないが、中世以降のものではないであろう。



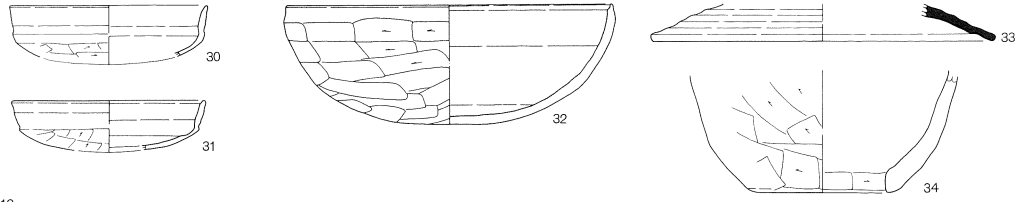
第171図 第52号掘立柱建物跡(L=31.10m)

第I群掘立柱建物跡出土遺物観察表(第172・173図)

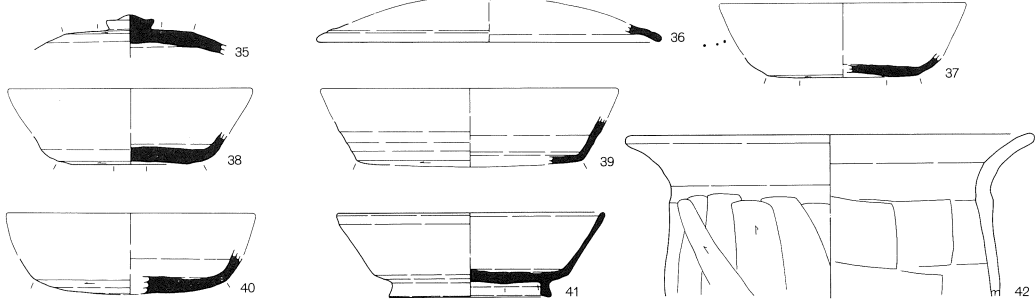
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.8)	3.2		ABC	A	灰	10%	SB01-P4覆土。
2	坏	12.6	3.1		ABC	B	灰	10%	SB01-P11覆土。
3	埴	(16.0)	4.2		ABC	B	灰白	10%	SB01-P6覆土。
4	坏	(12.4)	3.4	(7.9)	AC	B	灰	10%	SB02-P8覆土。不明墨書あり。
5	埴	(16.0)	2.9		AC	B	灰	5%	SB02-P7覆土。
6	甕	(23.2)	4.3		AC	A	にぶい橙	5%	SB02-P8覆土。
7	坏	12.0	3.4		ABC	A	灰	20%	SB03-P1覆土。
8	坏	12.0	3.5	6.8	ABC	A	灰	70%	SB03-P1覆土。
9	蓋	(19.3)	2.8		ABC	A	暗灰	25%	SB03-P4覆土。
10	蓋	(17.0)	1.5		ABC	A	灰	10%	SB04-P13覆土。
11	坏		2.4	(11.6)	ABC	C	淡黄	30%	SB04-P10覆土。
12	埴	(16.8)	4.6		ABC	A	灰	15%	SB04-P12覆土。
13	埴	(19.0)	6.0	(11.8)	ACE	B	灰白	15%	SB04-P8覆土。
14	坏	(13.0)	3.8	7.1	AC	A	オリーブ灰	35%	SB05-P9覆土。底部「×」のヘラ記号。
15	坏	11.8	3.7	5.0	ABE	B	明赤褐	90%	SB05-P11覆土。
16	蓋		2.9		ABC	A	灰	80%	SB05-P8覆土。
17	蓋		1.8		ABC	B	灰	30%	SB07-P1覆土。
18	小型甕	(13.0)	7.2		ABDE	A	にぶい橙	30%	SB07-P6覆土。
19	甕	(26.0)	9.6		ABCD	A	オリーブ黒	30%	SB07-P4覆土。
20	埴	(16.0)	6.1	8.6	AC	B	灰白	40%	SB10-P9覆土。
21	坏	(12.0)	3.5		ABDE	B	にぶい黄橙	40%	SB09-P1覆土。



第172図 第I群掘立柱建物跡出土遺物(1)



SB 12



SB 13

0 10cm

第173図 第I群掘立柱建物跡出土遺物(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
22	坏		1.8	5.6	A B C D	B	灰	30%	SB09-P ₈ 覆土。
23	埴		1.6	(6.0)	A E	C	灰黄褐	10%	SB09-P ₉ 覆土。
24	高台坏		2.8	(7.0)	A B C E	C	にぶい黄橙	20%	SB09-P ₆ 覆土。
25	坏	(11.9)	1.8		A B C	A	暗灰	5%	SB09-P ₁₁ 覆土。
26	皿	(12.0)	1.3		A B C D E	B	灰	20%	SB09-P ₁₀ 覆土。
27	緑釉皿	(14.2)	1.5		J	A	灰	5%	SB09-P ₆ 覆土。段皿。
28	高台坏	(14.0)	4.6		A B C	C	にぶい橙	25%	SB09-P ₅ 覆土。
29	甕	(27.8)	10.0		A C D E	A	橙	25%	SB34-No.1。P ₄ 覆土。胴部ナデ。
30	坏	(10.4)	2.7		A C	A	橙	15%	SB12-P ₁₀ 柱痕内。
31	坏	(10.0)	2.7		A B C	A	橙	20%	SB12-P ₁₀ 覆土。
32	埴	17.2	6.3		A B C E	A	橙	40%	SB12-P ₁₁ 覆土。
33	蓋	(18.0)	2.0		B C	A	灰白	10%	SB12-P ₂ 覆土。
34	甑		6.4	6.8	A B C D	B	にぶい黄橙	20%	SB12-P ₂ 覆土。
35	蓋		2.2		A B C D	D	灰	40%	SB13-P ₁₀ 覆土。
36	蓋	(18.0)	1.0		A B C	D	灰白	5%	SB13-P ₁₀ 覆土。
37	坏		1.2	(8.0)	A B C	A	灰	15%	SB13-P ₉ 覆土。
38	坏		1.5	(6.0)	A B C	A	灰	30%	SB13-P ₁₀ 覆土。
39	坏		2.6	(12.0)	A B C	A	灰	10%	SB13-P ₅ 覆土。
40	坏		2.4	(10.0)	A B C	B	灰白	10%	SB13-P ₁₀ 覆土。
41	高台坏	(14.0)	4.4	(8.6)	A B C	A	暗灰	35%	SB13-P ₅ 覆土。
42	甕	(21.2)	8.6		A B	A	にぶい黄橙	15%	SB13-P ₂ 覆土。

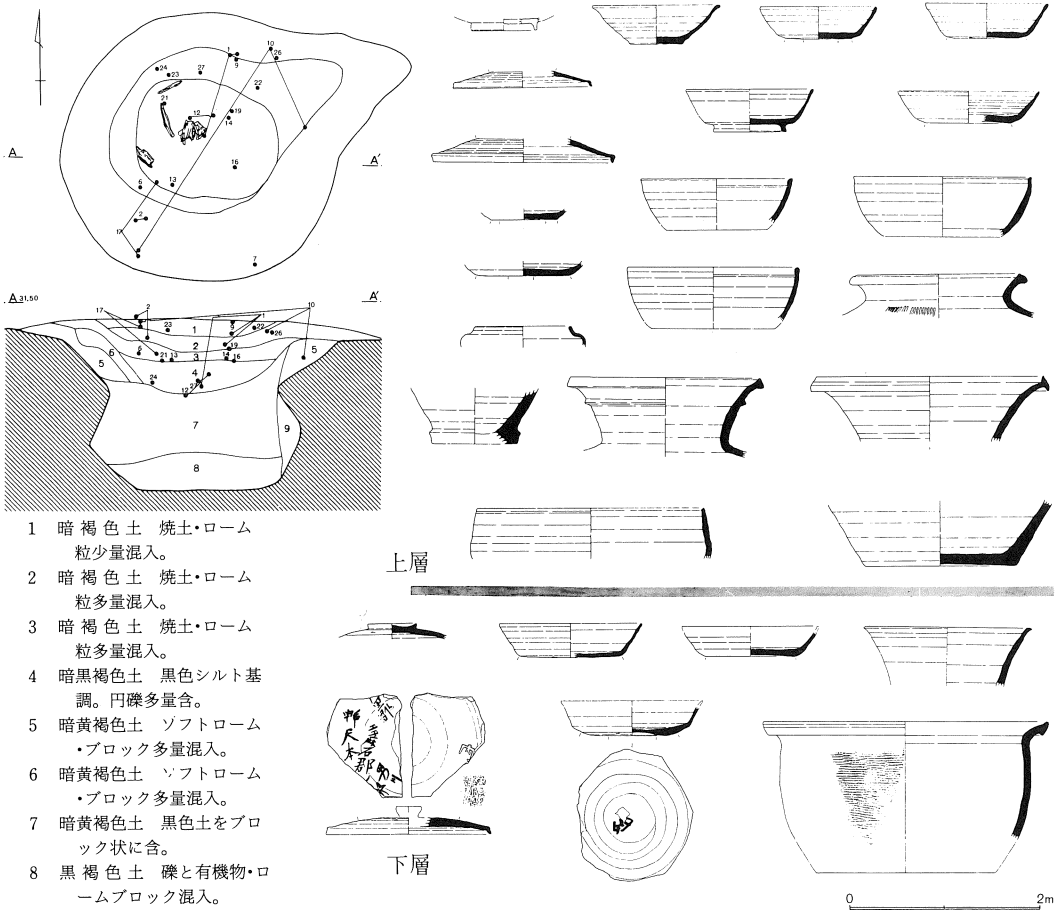
3. 井戸跡

井戸跡は第I群から14基発見された。時期的には集落の時期とほぼ対応し、古墳時代後期から中世に至るものである。特に深いものはないが、当時の水位の関係でそれでも充分だったものと推定される。形態や規模にはかなりバリエーションがみられる。

第1号井戸跡(第174図)

O-6・7区に位置し、第4号掘立柱建物跡の南に近接する。平面形態は東側が突出しており、水滴形とも呼ぶべき形態を呈する。規模は長径3.85m、短径2.88m、深さ1.70mを測る。断面は本来ロート状に掘り込まれたものであろうが、下部は出水のためか、壁が崩落しオーバーハングしている。

覆土は8層に分かれ、第5層が井戸側の裏込め土、8層が最下層に堆積する黒色有機質土と考えられる。井戸側そのものは検出されなかったが、8層上面相当層には木片が若干残されており、存在した可能性が残されている。



第174図 第1号井戸跡・遺物分布図

出土遺物(第175図)は極めて多く、上層と下層から主に出土している。ほとんどが破片であるが総数440点に及ぶ。器種的には土師器坏、埴、皿、甕、台付甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、壺類、磨鉢、灰釉埴、緑釉皿と桃の種子がある。須恵器からみると時期的にはおよそ8世紀初頭～9世紀末前後とかなり幅をもつ遺物を含んでいるが、出土層位により概ね時期を異にするようである。覆土下層とした遺物は第8層とした黒色有機質土から出土したもので、最も古い土器群はこれに属する(第174・175図3～5・15・18・20・25)。それ以上のものはドットで出土位置を記録したが、それによれば最新の土器群(7・9等)はほぼ埋没した段階(ほぼ第1層相当)で混入したものであることが解る。

また上層(第2～7層)の遺物をみると、7層に比定される遺物量は極端に少なく、間層を形成する。従って上層とする遺物は主に第2～6層出土遺物である。この第7層堆積時にはかなり埋没が進み井戸としての機能は停止していたものと考えられる。

特筆すべき遺物として2点の墨書土器が挙げられる(第175図5・18)。何れも覆土下層から出土したもので本井戸跡が機能していた段階の遺物としてよいものとする。5は須恵器坏であるが、底部外面中央に不明文字が記されている。欠損部位がありかつ墨痕も薄いため良く判読できないが「多」または「的」か。中央に小さく書かれる点に特徴がある。もう一点の墨書土器に「多磨郡」と読める文字があり、それとの関わりで捉えると多磨郡を意味する「多」と読むのが妥当であろうか。

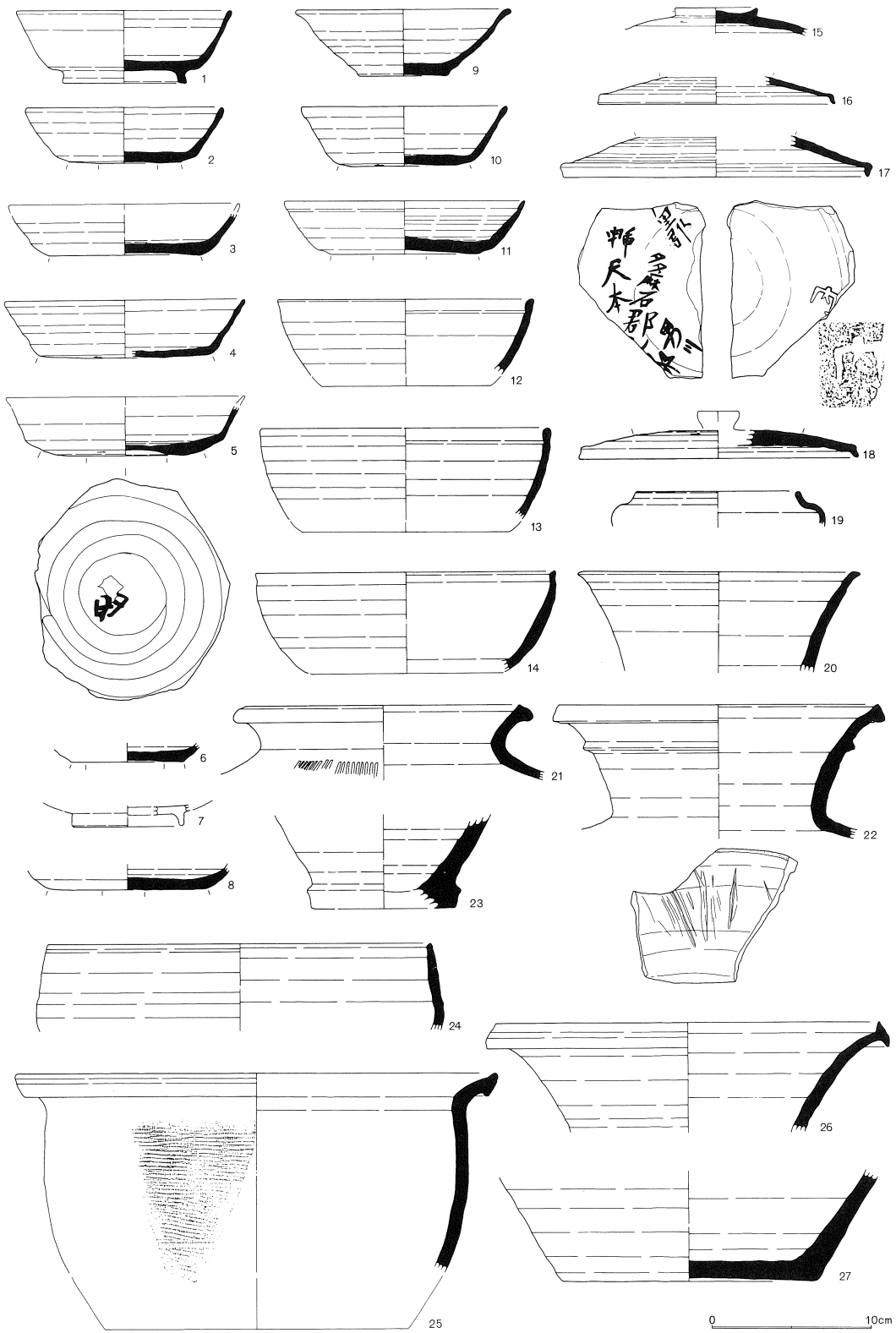
18は扁平な須恵器蓋の破片で、鈕と天井部の過半を欠く。外面に「□里郡」、「□尺本」、「多磨郡男川」、「□□□」の最低4つの異なる文意をもつ文字が記されている。仮に順にAからDとすると、Aでは最初の1文字の大部分が欠損するが続く2字が里郡であることはほぼ間違いなく、文意から大里郡と読んで誤りなからう。不明の第1文字の残画も「大」の第2画のはねと考えれば不自然さはない。

Bは外側面に沿ったように書かれている。第1字の偏は「申」であることは確定するが、旁が読めない。次の「尺」は坂と同義であり、「坂本」と読むことが可能である。Dとの位置関係から「本」の下に文字が続く可能性は少ないものと考えられる。人名または地名を表わしたものと推定されるが、武蔵国の郡郷名に該当するものがない。

Cは鈕を中心に逆時計回りに記されている。釈文はほぼ確定でき、「多磨郡」は武蔵国の郡の一つ、多磨(磨)郡を意味するものと判断される。以下の「男川」は多磨郡に含まれる郷名に「小川郷」が存在したことが知られており、音の一致からみて「小川」を「男川」と表記したものと解される。

Dは欠損部が多く判読が難しいが、最低2文字乃至3文字記されていたものと推定される。最後の文字は偏に縦画、旁に「オオザト」をもつ字、例えば「部」や「都」、「鄙」、「郡」等の文字が候補に挙げられる。このなかで最も可能性の高いものは他に書かれた文字から推して「郡」であろう。この推定が正しいとすると、ここにも武蔵国の郡名が記されていた蓋然性が極めて高いものとなる。上の文字の残画から見ると、多磨郡の「磨郡」と読むことも可能であろう。

またこの土器の天井部内面には「内」の押印が刻されている。土器自体は白色針状物質を含み、広義の南比企窯跡群産であることは確実である。類例は鳩山窯跡群小谷B9号窯で須恵器蓋天井部内面、広町B15号窯で須恵器瓶胴部外面に押された例等が確認されるが、消費地で発見されたのは本



第175図 第1号井戸跡出土遺物

本例が唯一で、その性格や需給関係を知る上で貴重な資料であると考えられる。

22の須恵器壺は内面に鋭い刃先で付けられたと思われる無数の条線が刻まれており、後世おそらく中世の頃、砥石に転用されたものと推定される。

第1号井戸跡出土遺物観察表(第175図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	埴	(13.4)	4.5	7.6	A B C	A	灰	30%	No.28, 277, 565。覆土上層。
2	坏	12.2	3.5	7.0	A B C	A	灰	70%	No.495, 522。覆土上層。
3	坏		2.6	9.5	A C	B	灰白	70%	覆土下層。
4	坏	(15.0)	3.6	10.8	A B C	B	灰	35%	覆土下層。
5	坏		3.0	7.4	A B C	B	灰	90%	覆土下層。
6	坏		1.2	7.0	A B C	B	オリーフ灰	70%	No.635。覆土上層。
7	緑釉埴		1.3	(6.8)	A B	A	灰	10%	No.180。覆土上面。
8	坏		1.6	10.0	A C	B	灰白	25%	覆土上層。
9	坏	(13.2)	4.2	5.3	A B	B	灰白	30%	No.261。覆土上面。
10	坏	(12.8)	3.7	6.5	A B C	A	緑灰	50%	No.32, 313, 518。覆土上面。
11	坏	(15.1)	3.35	(9.3)	A B C	B	灰	55%	覆土上層。
12	埴	(16.0)	4.7		A C E	B	灰	25%	No.455, 567。覆土上層。
13	埴	(18.0)	5.7		A C	B	灰白	15%	No.216。覆土上層。
14	埴	(18.8)	6.2		A C D	B	灰	15%	No.298。覆土上層。
15	蓋		1.7		A B C	C	灰	50%	覆土下層。
16	蓋	(14.8)	1.7		A C	A	灰	20%	No.223。覆土上層。
17	蓋	(19.0)	2.6		A C	B	灰	20%	No.517, 527。覆土上層。
18	蓋	(17.4)	1.7		A C	B	灰白	25%	覆土下層。
19	短頸壺	(10.0)	2.3		A B	A	灰	20%	No.58。覆土上層。
20	壺	(16.8)	6.3		A B	A	灰	10%	覆土下層。
21	壺	(17.2)	4.7		A B C	B	灰	10%	No.636。覆土上層。
22	壺	(20.0)	8.4		A C D	B	灰白	15%	No.265。覆土上面。
23	磨鉢		5.8	9.0	E	A	灰	30%	No.104。覆土上面。
24	鉢	(24.0)	5.4		A C D	B	オリーフ黒	10%	No.666。覆土上層。
25	鉢	(30.0)	12.4		A B	B	灰	15%	覆土下層。
26	甕	(24.0)	6.8		A C D	A	オリーフ黒	15%	No.42。覆土上層。
27	甕		6.8	16.0	A B C	A	灰	30%	No.123。覆土上層。

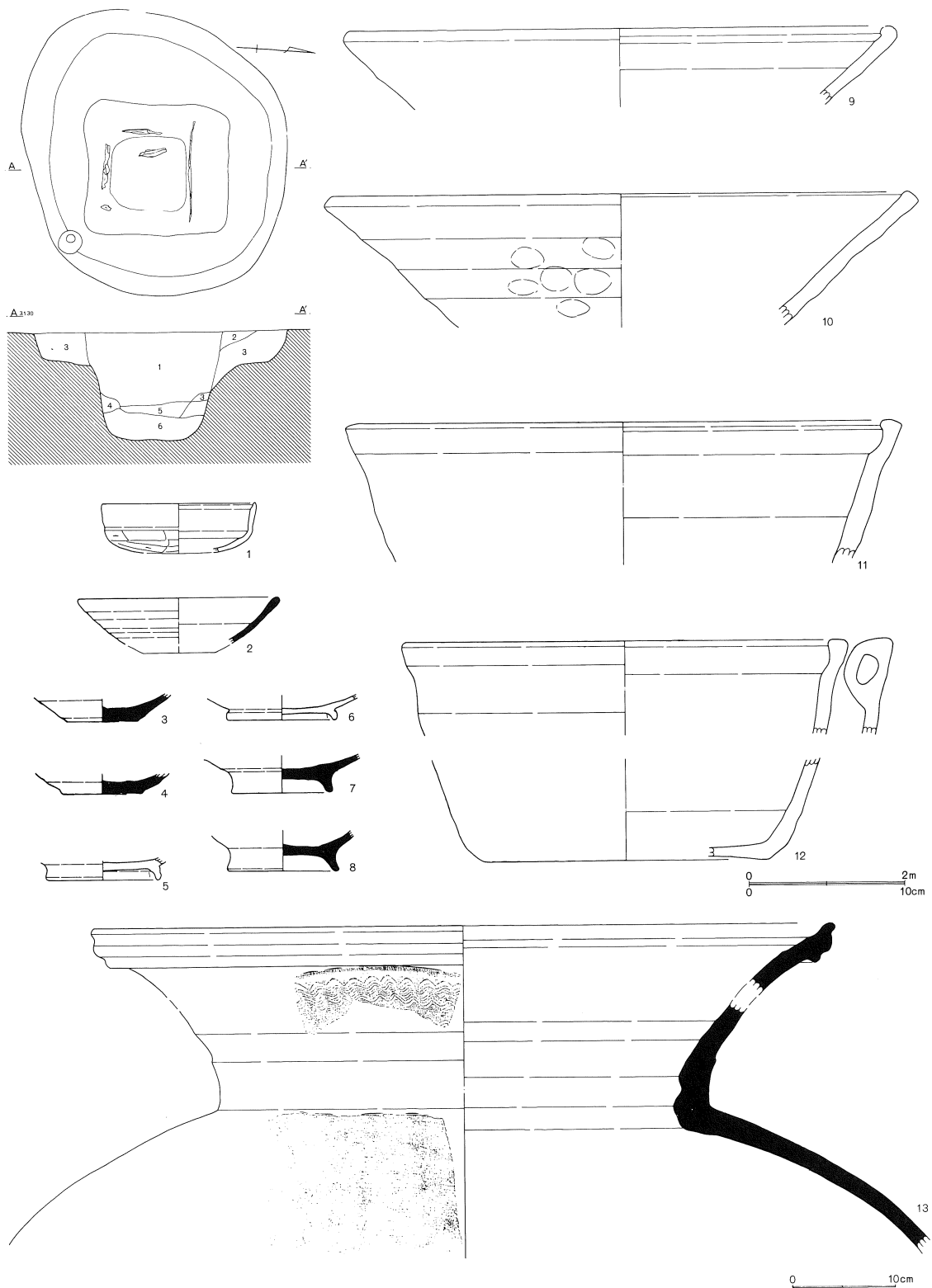
第2号井戸跡(第176図)

R-7・8区に位置し、第20号住居跡を切って構築される。確認面の平面プランは径3.30×4.06mの楕円形を呈する。内部は2段に掘り込まれ、下段の上面プランは径1.65×1.80mのほぼ方形を呈し、おそらく木製井戸側の存在が想定される。確認面からの深さは1.40mを測る。

覆土は黒色土を基調とし、第2・3層が井戸側の裏込め土と推定される。最下層は黒色有機質土で構成され、方形に巡る板材の一部が遺存していた。井戸側の基礎に使用されたものであろうか。

出土遺物は79点検出され、土師器坏、甕、須恵器坏、埴、皿、甕、施釉陶器、常滑系鉢、在地系鉢、内耳鍋の各器種がある。

時期的には7世紀後半～8世紀初頭前後、9世紀末葉～10世紀初頭頃、中世と大きく三時期に分かれるが、主体を占めるのは9世紀末葉～10世紀初頭頃の土器群である。中世の遺物(第176図9～12)に関しては遺物取上げ時の記載間違いの可能性があり、本来第4号井戸に伴う遺物かも知れな



第176图 第2号井戸跡・出土遺物

い。第176図1は重複する第20号住居跡から混入したものであろう。2～8が本井戸跡に伴う遺物と判断しておきたい。5は灰釉埴、6は緑釉埴で何れも底部は回転ヘラ削り調整されている。稲荷前XIV期に比定しておきたい。

第2号井戸跡出土遺物観察表(第176図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(9.8)	3.1		ABEF	A	橙	20%	覆土。無彩。
2	坏	(11.8)	2.9		AD	A	橙	15%	覆土。
3	坏		1.7	4.6	ACE	C	にぶい褐	80%	覆土。
4	坏		1.3	5.0	BEF	A	橙	25%	覆土。
5	灰釉埴		1.4	7.0	A	B	灰白	100%	覆土。猿投産か。底部回転ヘラケズリ。
6	緑釉埴		1.6	6.6	B	A	灰	30%	覆土。猿投産か。底部回転ヘラケズリ。
7	高台坏		2.4	6.2	BCE	B	橙	90%	覆土。
8	高台坏		2.6	6.8	ABD	C	灰	40%	覆土。
9	鉢	34.6	4.9		ABDE	B	灰	10%	覆土。
10	鉢	(36.8)	8.4		ADE	C	灰	15%	覆土。
11	内耳鍋	34.0	9.1		AEF	A	にぶい黄橙	10%	覆土。
12	内耳鍋	(28.2)		(18.0)	ABD	A	灰	30%	覆土。
13	甕	(70.2)	31.8		ACD	A	灰	30%	覆土。波状文9本単位2段。

第3号井戸跡(第177図)

Q-8区に位置する。第4号溝跡が上面を横断しているものと考えられるが土層観察では確認されていない。形態は円形を呈し、規模は径3.90m、深さ1.70mを測る。断面は楕円状を呈する。底面は礫層に達し一段深く掘り込まれ、水溜として底を抜いた曲物桶が設置されていた。その周囲には長さ0.30～0.60m程の杭が打ち込まれており、水溜を保護するための木製井戸側が設けられていたことが解る。

覆土は7層に分かれ、第1～4層は小礫・焼土を含む暗褐色系の土で埋まり、第3・4層はシルト化していた。第5層は砂礫を多量に含む灰褐色土で、井戸側の裏込め土と推定される。第6層は水溜(曲物桶)内の堆積土で有機質土壌、7層は褐色礫層で構成されていた。

出土遺物は197点検出され小片が多い。器種としては土師器坏、甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、壺がある。7世紀代の土師器坏から9世紀後半代の須恵器まで含まれるが、数量的に主体を占めるのは底部糸切り離し痕をそのまま残す須恵器坏で、底径は口径の1/2をやや上回るものである。再調整品も存



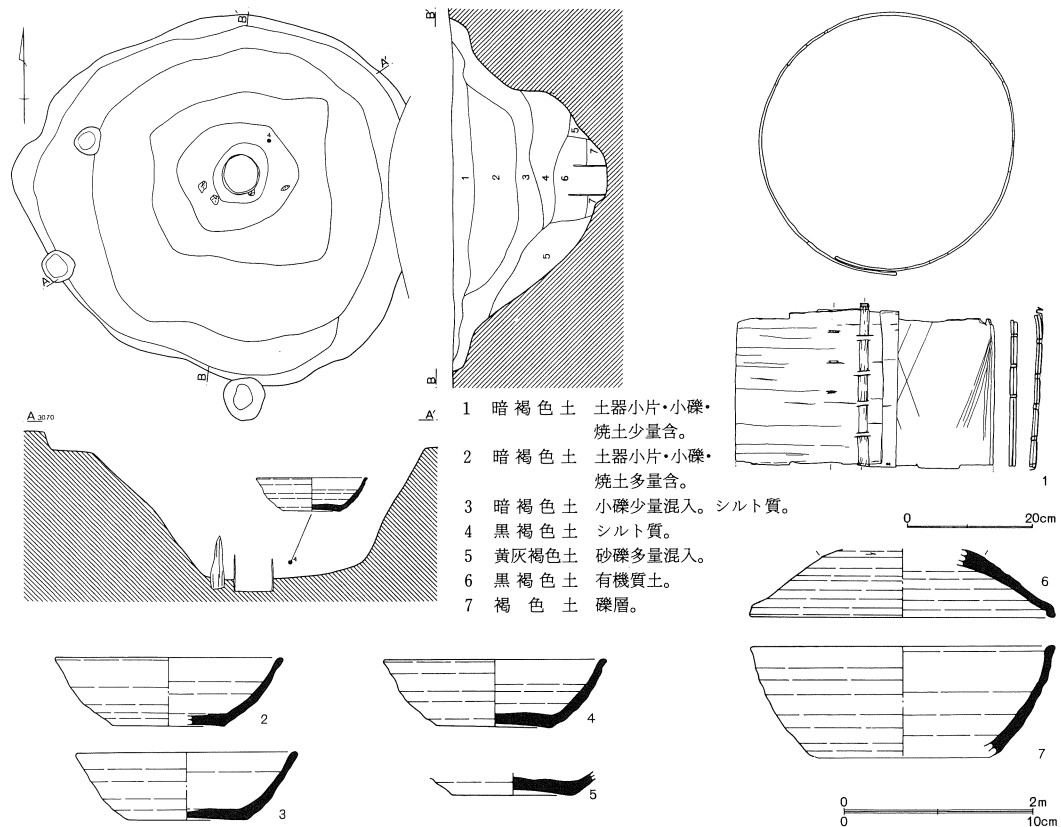
▲曲物桶出土状況

在するが数量的には少ない。層位別に取り上げていないために井戸の構築時期を明らかにすることは難しいが、主体となる須恵器の様相から稲荷前Ⅱ期頃を中心に機能していたものと推定しておきたい。

曲物桶(第177図1) 直径41.5cm、残高25.1cm、板厚0.4~0.5cmを測る。曲物側板で底部は抜かれている。(株)パレオ・ラボに委託した樹種同定に拠れば、ヒノキ科ヒノキ属の材が用いられたことが判明した。この薄板を一重に巻き、二重に重ねた部分は2ヶ所桜皮で縦に綴じられている。下端部には対面する位置に径0.2cm程の方形の目釘穴が開けられていた。また内面には斜格子状切り込みが無数に刻まれている。

第3号井戸跡出土遺物観察表(第177図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
2	坏	(12.0)	6.0	(6.0)	A B C D	B	灰	20%	覆土。	
3	坏	(11.7)	6.2	6.2	B C	A	浅黄橙	50%	覆土。	
4	坏	11.8	3.6	6.0	A C	B	灰	100%	No.1.覆土。	
5	坏		1.2	6.2	B C	B	にぶい橙	80%	覆土。	
6	蓋	(16.0)	3.7		A C	A	青灰	20%	覆土。	
7	碗	(16.0)	5.8		A B C D	D	青黒	10%	覆土。	



第177図 第3号井戸跡・出土遺物

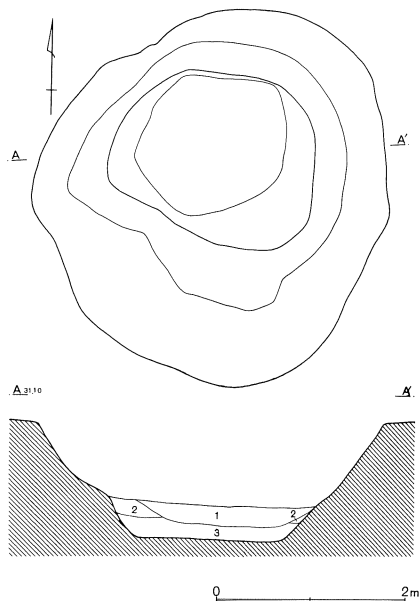
第4号井戸跡(第178図)

Q・R-8区に位置する。重複する第5号溝跡もほとんど同時期と推定されるが残念ながら遺構間の新旧関係は把握できなかった。

形態は円形を呈し、径3.90m、深さ1.25mを測るA区の中でも最大規模の井戸跡である。断面は逆台形を呈する。

覆土上層の堆積状況は明らかではないが、下層では木片や木の葉片を多量に含む黒色有機質土(第1・3層)とローム質の褐色系の土で構成されていた(第2層)。水溜及び井戸側の存否は明らかではない。

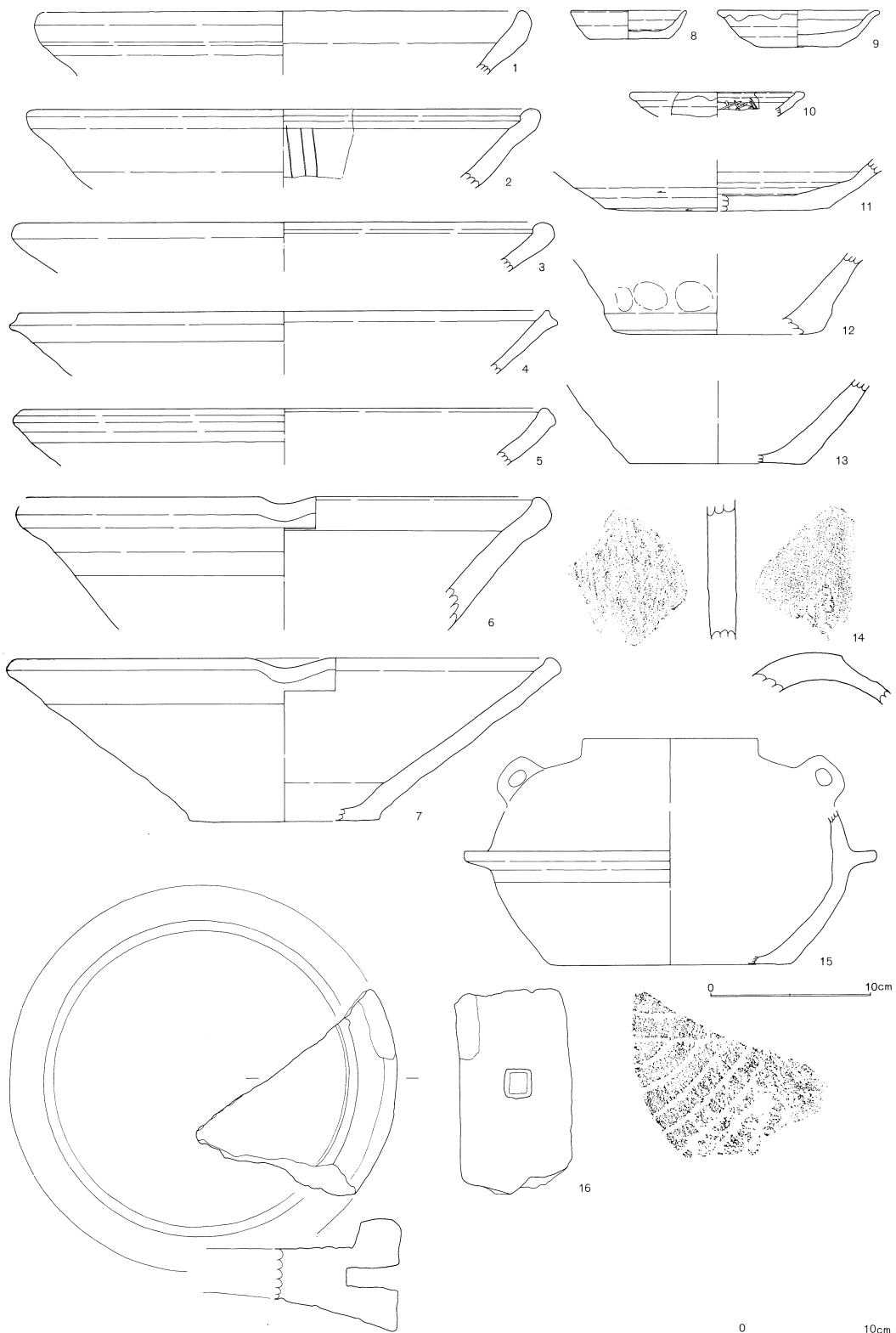
出土遺物は土師器・須恵器を除いて74点を数える。土師質皿、内耳鍋、在地系鉢、土釜、常滑系甕、片口鉢、瀬戸美濃系皿、盤、卸皿、石臼等の遺物が比較的多く検出され(第179・180図)中世の井戸跡であることを示している。瀬戸美濃系陶器を基準にすると15世紀代を中心に機能していたものと推定される。



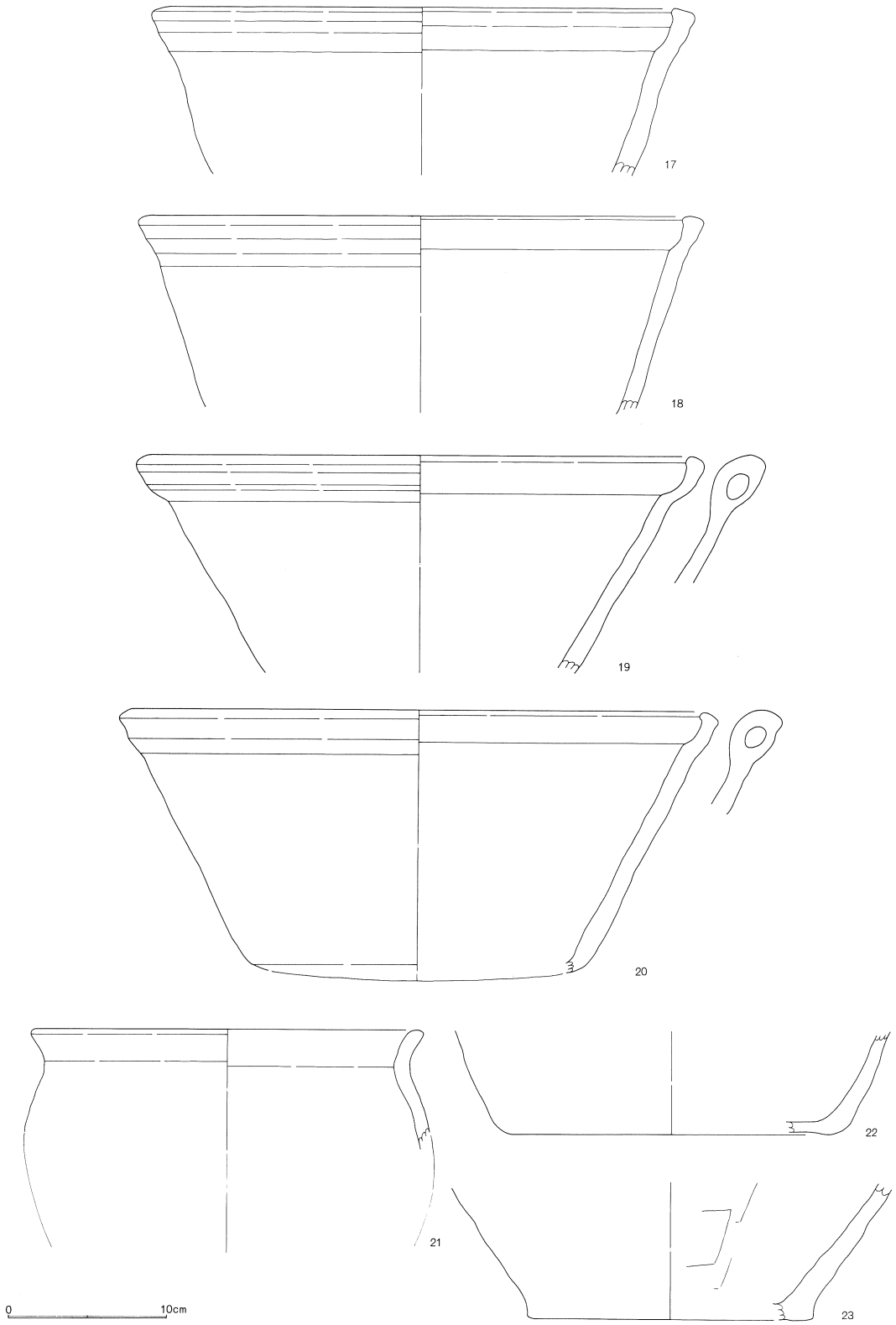
第178図 第4号井戸跡

第4号井戸跡出土遺物観察表(第179・180図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	常滑鉢	(30.0)	3.9		A	A	灰	5%	覆土。須恵質。
2	播鉢	(30.8)	4.9		A B F I	A	にふい黄橙	5%	覆土。在地系。
3	鉢	(32.6)	3.1		A B	A	にふい黄	5%	覆土。在地系。
4	鉢	(33.0)	3.9		A B E I	C	灰	5%	覆土。在地系。内面風化。
5	鉢	(32.6)	3.5		A B I	A	灰白	5%	覆土。在地系。内面風化。
6	片口鉢	(32.0)	8.3		A B I	B	灰	10%	覆土。在地系。
7	片口鉢	(33.4)	10.1	(14.0)	A B E G	C	灰黄	15%	覆土。在地系。内面底部周辺は磨滅。
8	坏	(7.0)	1.8	5.1	A E	A	浅黄	80%	覆土。土師質。底部糸切り。
9	緑釉皿	(9.8)	2.2	5.3	A	A	灰白	35%	覆土。瀬戸・美濃系。口縁部に灰釉掛かる。
10	卸皿	(10.6)	1.5		D	A	灰白	10%	覆土。瀬戸・美濃系。口縁部に褐色釉掛かる。
11	三足盤		2.2	(14.0)	A B	A	淡黄	30%	覆土。瀬戸・美濃系。
12	瓦質鉢		5.0	(13.0)	E G I	A	灰	20%	覆土。在地系。
13	鉢		5.1	(10.8)	A E	A	灰	20%	覆土。在地系。
14	丸瓦								覆土。凸面ナデ。凹面切り離し痕。
15	土釜		9.4	(15.0)	A C	A	灰白	35%	覆土。接合しない2片よりなる。
16	石臼	(30.0)	8.8						覆土。粗粒凝灰岩。
17	内耳鍋	(32.0)	10.5		A B E	A	褐灰	10%	覆土。
18	内耳鍋	34.0	12.4		A I	A	灰	15%	覆土。
19	内耳鍋	(34.2)	13.7		A I	B	灰	20%	覆土。
20	内耳鍋	(36.2)	16.4	(21.0)	A E F	A	灰黄褐	40%	覆土。
21	甕	(24.2)	7.5		A B D E	D	暗灰黄	5%	覆土。在地系。胴部外面器面剝落。
22	内耳鍋		6.5	(20.0)	A I	B	黄灰	5%	覆土。
23	常滑甕		8.6	(18.0)	A B F	A	赤褐	10%	覆土。



第179图 第4号井戸跡出土遺物(1)



第180図 第4号井戸跡出土遺物(2)

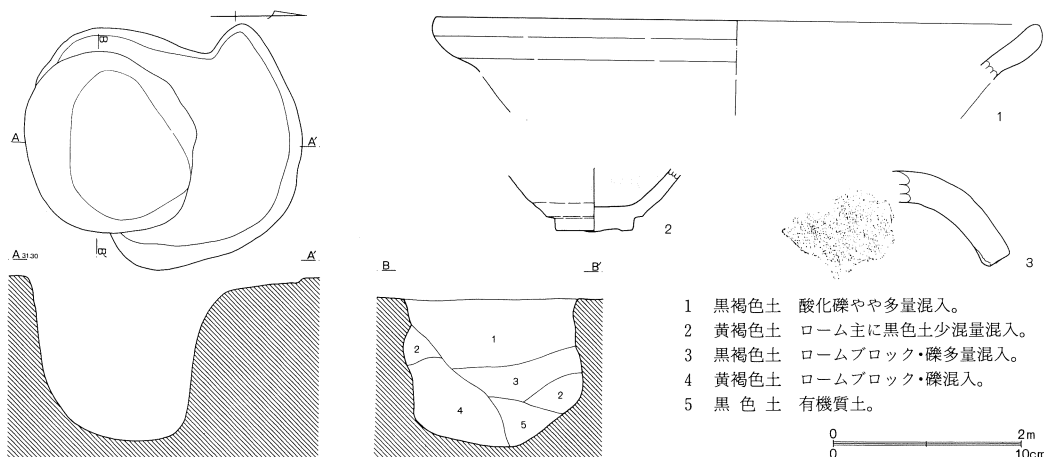
第5号井戸跡(第181図)

R-7区に位置する。径2.00×1.80mの楕円形プランを呈し、深さ1.70mを測る。断面形は筒状を呈する。覆土は5層に分割されるが、堆積状況を見る限りでは井戸側等の施設は確認されず、素掘り井戸と推定される。また井戸の上面には井戸を囲むように浅い土壌状の掘り込みが存在していた。覆土の状況から井戸に伴うものと判断した。

出土遺物は29点と少ない。古代の遺物と中世の遺物(瓦、在地系鉢、天目茶碗)が混在するが後者の年代で代表し、15世紀代に機能した井戸跡と考える。

第5号井戸跡出土遺物観察表(第181図)

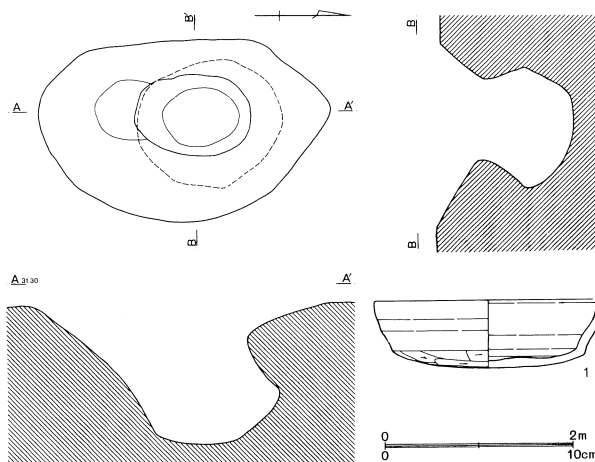
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	鉢	31.6	2.9		A B E	B	灰	5%	覆土。在地系。
2	天目		3.3	4.1	A		灰白	80%	覆土。瀬戸・美濃系鉄釉天目。
3	丸瓦	残長5.2cm.厚さ1.6cm.			A B	B	灰	10%	覆土。瓦質。凹面布目条痕跡残る。凸面ナデ。



第181図 第5号井戸跡・出土遺物

第6号井戸跡(第182図)

P-7区に位置する。第39号住居跡と重複し、本井戸跡が切られている。形態は楕円形を呈し、規模は長径3.10m、短径1.90m、深さ1.50mを測る。断面形は本来ロート形を呈するものと推定されるが、側壁が崩落しオーバーハングしていた。覆土の詳細な観察はできなかったが、上層から中層にかけては礫の混入が目立ち、下層は黒色有機質土が堆積していた。



第182図 第6号井戸跡・出土遺物

井戸側等の施設は確認されていない。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏が各1点検出されたにすぎない。年代比定の資料に欠けるが、図示した土師器坏(第182図1)は覆土下層から出土したもので井戸跡の年代に近いものと推定しておきたい。口径11.9cm、器高3.6cm。胎土に石英・長石含み焼成良好。色調は鈍い橙色。残存率50%。覆土下層出土。稲荷前Ⅲ期前後であろうか。

第7号井戸跡(第183図)

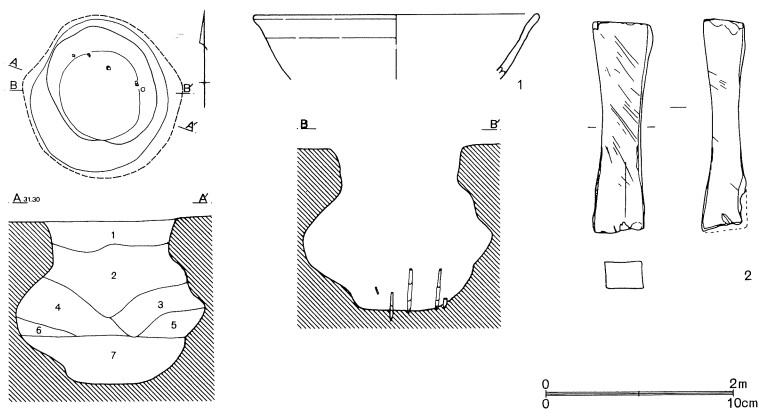
R-7区に位置し、第5号井戸跡に近接する。平面形は円形を呈し、径1.50m、深さ1.70mを測る。断面形は筒状を呈するものと推定されるが、側壁は崩落しオーバーハングしている。

覆土は7層に分かれ、第3・4層には礫が、5層にはロームブロックがそれぞれ多量に混入していた。7層は有機物を多量に含む黒色シルト質土である。底面には竹が3本、木杭が1本打ち込まれており、水溜もしくは井戸側の施設が存在したものと推定される。

出土遺物は土師器坏1、須恵器甕9、灰釉塊2片と在地産と推定される瓦質鉢体部片5点、砥石1点、桃の種子1個がある。資料が少なく年代決定は難しいが、中世と捉えておきたい。

2点を図化した。第183図1は灰釉塊小片である。推定口径は約15.0cm、残存高3.4cm。灰白色を呈し、焼成は良好。5%残、覆土から出土し、東濃産と推定される。

第183図2は砥石である。長さ11.1cm、重量95gを測る。凝灰岩製と推定される。

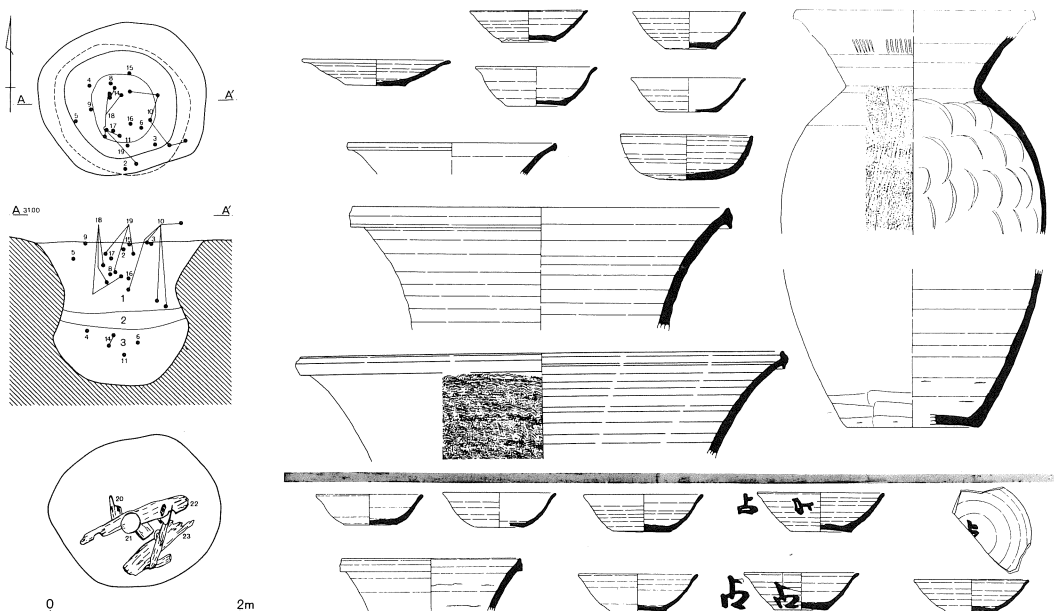


第183図 第7号井戸跡・出土遺物

第8号井戸跡(第184図)

N-9区に位置する。第57号住居跡と重複し、調査所見によれば井戸跡の上部に貼床されており第8号井戸跡の方が古いものと推定された。平面形は楕円形を呈し、径1.80×1.60m、深さ1.50mを測る。断面形は本来ロート形を呈するものと推定されるが、側壁は崩落してかなりオーバーハングしている。覆土は3層に分かれ第1層はロームブロック・炭化物粒子混じりの暗褐色土、第2層はローム質の褐色土、第3層はロームブロックを多量に含む黒色有機質土で、木片等の有機物が残されていた。

出土遺物は93点ある。土師器坏、甕、須恵器坏、埴、皿、蓋、甕、壺から構成されるが、主体は須恵器坏と甕である。第2層を間層として大きく上・下層に分けられるが出土遺物に大きな時期差

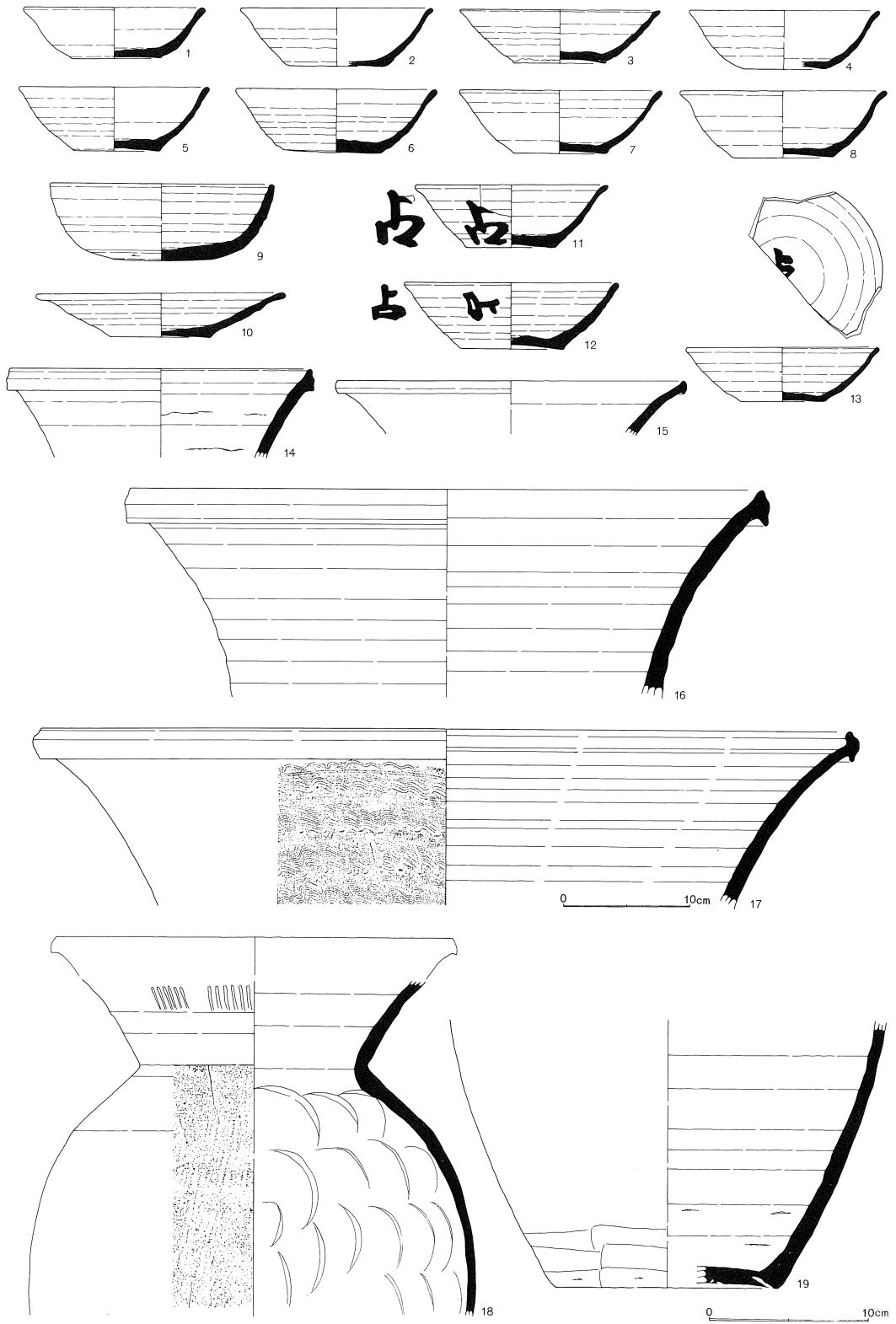


第184図 第8号井戸跡・遺物分布図

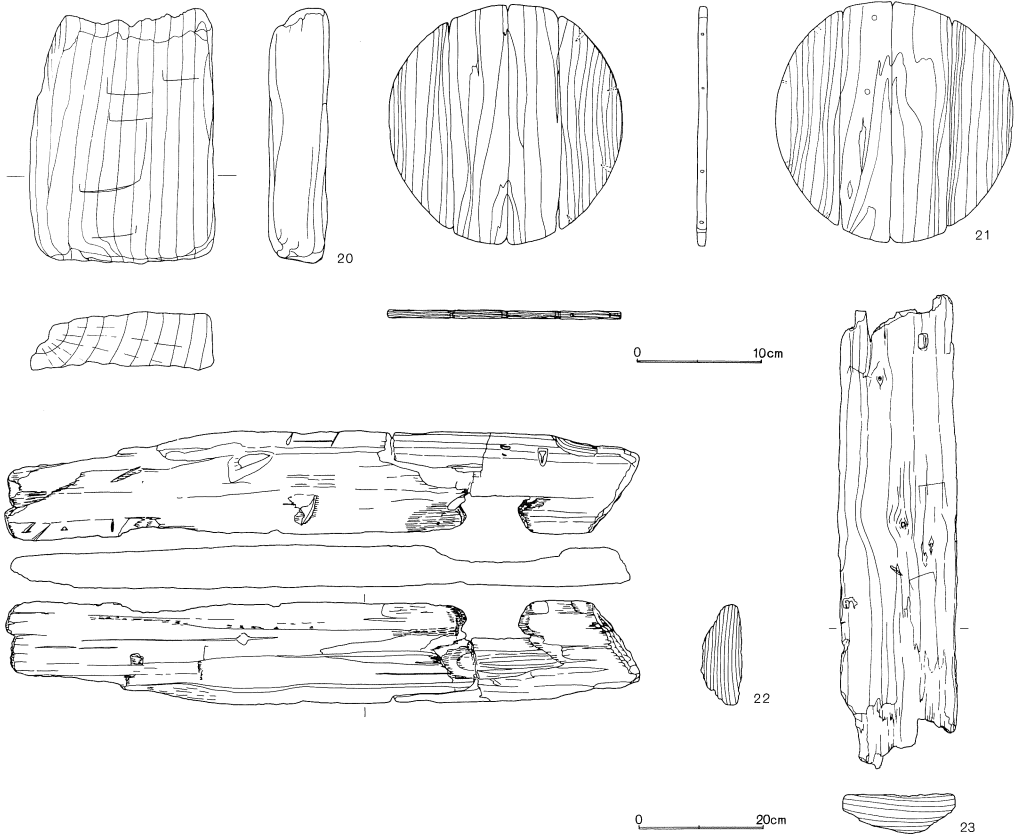
は窺えない。第185図9は明らかに混入と考えられる。特に下層には井戸側に用いられたと推定される板材と曲物桶の底板(第186図20~23)と3点の墨書土器が出土した。墨書土器は何れも須恵器坏で「占」と記されていた(第185図11~13)。曲物底板は径19cm、側面に目釘穴が穿たれる。稻荷前 XIII 期に比定される。

第8号井戸跡出土遺物観察表(第185図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	11.2	3.2	5.6	AB	B	灰	95%	覆土下層。
2	坏	(12.0)	3.6	(6.0)	AC	B	灰	15%	№73。覆土。
3	坏	(12.5)	3.3	5.9	ABCD	B	灰白	30%	№51。覆土。
4	坏	(11.8)	3.7	(5.2)	ABCE	B	灰	35%	№90。覆土。
5	坏	11.9	4.0	5.5	AC	B	灰	60%	№3。覆土。
6	坏	12.6	4.0	6.2	ACD	B	灰	100%	覆土下層。
7	坏	12.7	4.0	5.9	ACD	A	褐灰	95%	覆土下層。
8	坏	(12.8)	4.2	6.1	C	B	灰白	40%	№71。覆土。
9	坏	(14.0)	4.8		ABC	A	灰	25%	№4。覆土。
10	皿	15.5	2.8	6.3	ACD	A	灰	35%	№20, 32, 84, 92。覆土。
11	坏	(12.0)	3.9	5.7	AC	B	灰白	50%	№92。覆土。体部外面「占」の墨書あり。
12	坏	13.3	4.2	6.5	ACD	B	褐灰	90%	覆土下層。体部外面「占」の墨書あり。
13	坏	(12.0)	3.4	5.3	AC	B	灰白	40%	覆土下層。底部内面「占」の墨書あり。
14	甗	(19.0)	5.6		ABCD	C	灰	75%	№86, 87。覆土。
15	甗	(22.0)	3.4		ABC	A	灰	5%	№94。覆土。
16	甗	(40.0)	13.0		ACD	A	暗灰	20%	№63。覆土。
17	甗	(64.0)	13.9		ACD	A	灰	10%	№7。覆土。
18	甗		20.8		ACD	A	灰	35%	№40, 73, 74。覆土。内面叩き当具痕残す。
19	甗		16.7	(14.0)	ACD	A	暗灰	35%	№10, 41, 45。覆土。



第185图 第8号井戸跡出土遺物(1)



第186図 第8号井戸跡出土遺物(2)

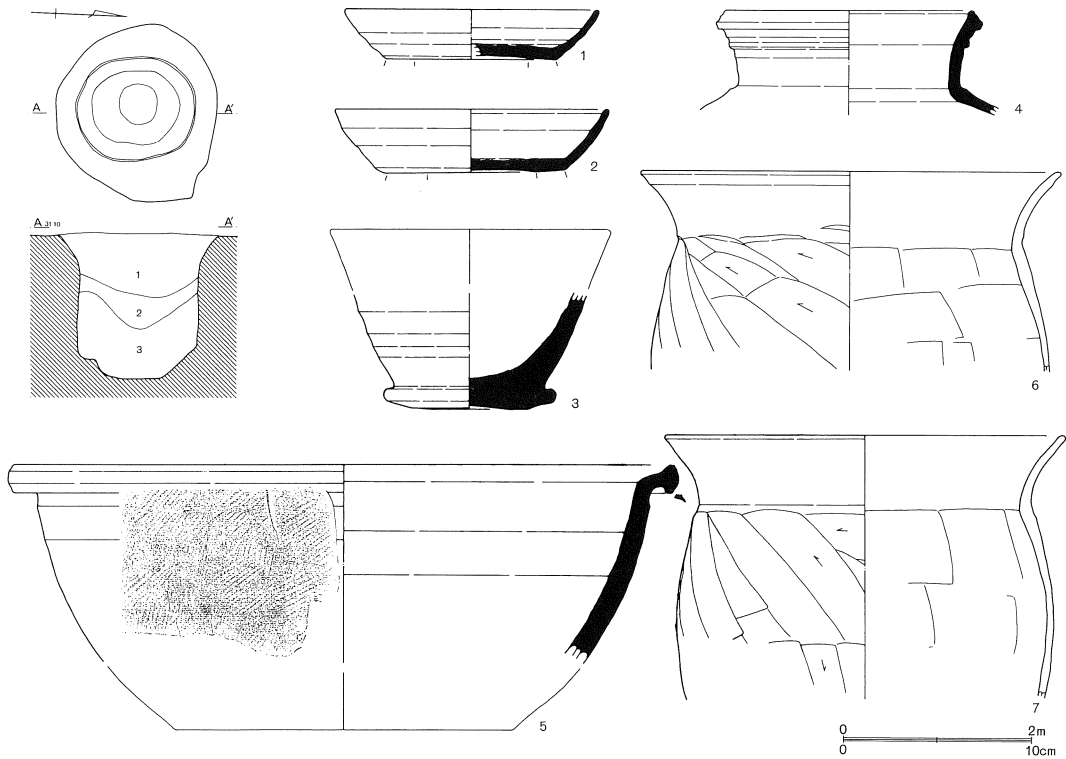
第9号井戸跡(第187図)

R-8区に位置し、第19号住居跡の西側に隣接する。平面形は円形を呈し、径1.90m、深さ1.55mを測る。断面形はほぼ筒状に掘り込まれるが、井戸側等の施設は確認されない。覆土は3層に分かれ、第1層はローム・礫・焼土を少量含む暗茶褐色土、第2・3層は礫が多量に混じる黒色土で構成され、第3層はシルト質土壌となる。

出土遺物は35点と比較的少ない。土師器甕、須恵器坏、蓋、甕、磨鉢、鉢の各器種が認められる。土器様相から稻荷前VII期を中心に機能したものと推定される。

第9号井戸跡出土遺物観察表(第187図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.3)	2.6	9.0	ABD	B	青灰	30%	覆土。
2	坏	14.4	3.4	9.4	ACD	B	灰	80%	覆土。
3	搗鉢		6.1	6.1	ACD	A	灰	70%	最下層。
4	壺	(13.0)	5.5		ABC	A	灰	10%	覆土。
5	鉢	(35.0)	10.5		ABC	A	灰	20%	覆土。
6	甕	(22.0)	10.5		ADE	A	にぶい褐	20%	覆土最下層。
7	甕	(21.0)	13.9		ABDE	A	にぶい褐	20%	覆土最下層。

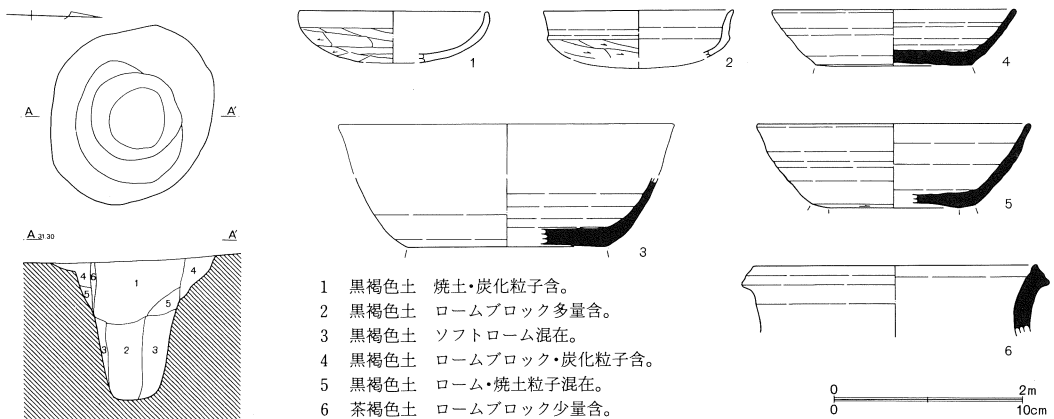


第187図 第9号井戸跡・出土遺物

第10号井戸跡（第188図）

S-7区に位置する。平面形は楕円形を呈し、径1.90×1.70m、深さ1.50mを測る。断面形はロート形を呈する。覆土は6層に分かれ、堆積状態から見ると井戸側の存在を想定することもできる。

出土遺物は26点あり、土師器坏、甕、須恵器坏、埴、甕、壺から構成される。若干時期差が認められるようである。一応稻荷前V～VIII期のある時期に機能していたものであろう。



- 1 黒褐色土 焼土・炭化粒子含。
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量含。
- 3 黒褐色土 ソフトローム混在。
- 4 黒褐色土 ロームブロック・炭化粒子含。
- 5 黒褐色土 ローム・焼土粒子混在。
- 6 茶褐色土 ロームブロック少量含。

第188図 第10号井戸跡・出土遺物

第10号井戸跡出土遺物観察表(第188図)

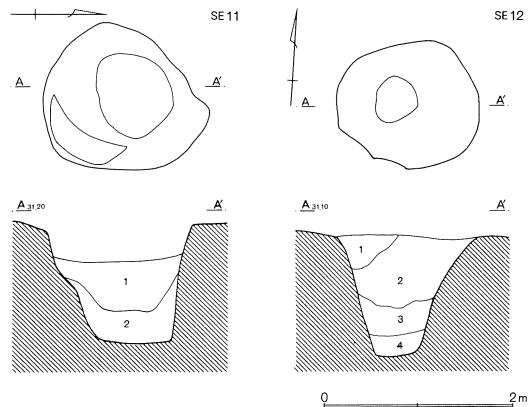
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	2.7		BE	A	橙	20%	覆土。
2	坏	(10.0)	2.5		B	A	橙	20%	覆土。無彩。
3	埴		3.6	10.6	ACD	B	にぶい橙	20%	覆土。
4	坏	(12.8)	2.95	8.3	AC	A	灰	35%	覆土。
5	埴	(14.4)	4.4	8.6	ACD	A	灰	15%	覆土。
6	短頸壺	(15.0)	3.7		ABCD	B	灰	10%	覆土。

第11号井戸跡(第189図)

Q-7区に位置する。第32号住居跡と重複し、本井戸跡の方が新しいものと考えられる。平面形は不整円形を呈し、径1.70m、深さ1.30mを測る。確認面下約30cmで礫層に至る。断面形は逆台形を呈し、覆土は2層に分かれる。ローム混じりの暗褐色土で構成され、下層に礫の混入が多い。井戸特有の有機質土の堆積は認められなかった。出土遺物は土師器坏が1点のみで時期は不明である。

第12号井戸跡(第189図)

O-9区に位置し、第52号住居跡と重複する。新旧関係は不明であるが、本井戸跡の方が新しい可能性がある。形態は楕円形を呈し、径1.50×1.30m、深さ1.25mを測る。覆土は4層に分かれ、ローム混じりの黒褐色土で構成される。第3層にはロームブロックの混入が多く、第4層には有機物が多量に含まれていた。出土遺物は27点と少ない。土師器坏、甕、須恵器坏、甕、灰釉埴、灰釉瓶の各器種が認められるが、全て小片で図化可能な遺物はない。おそらくほとんどの遺物が埋没過程で重複遺構から混入したものと考えられる。中世の井戸であろうか。

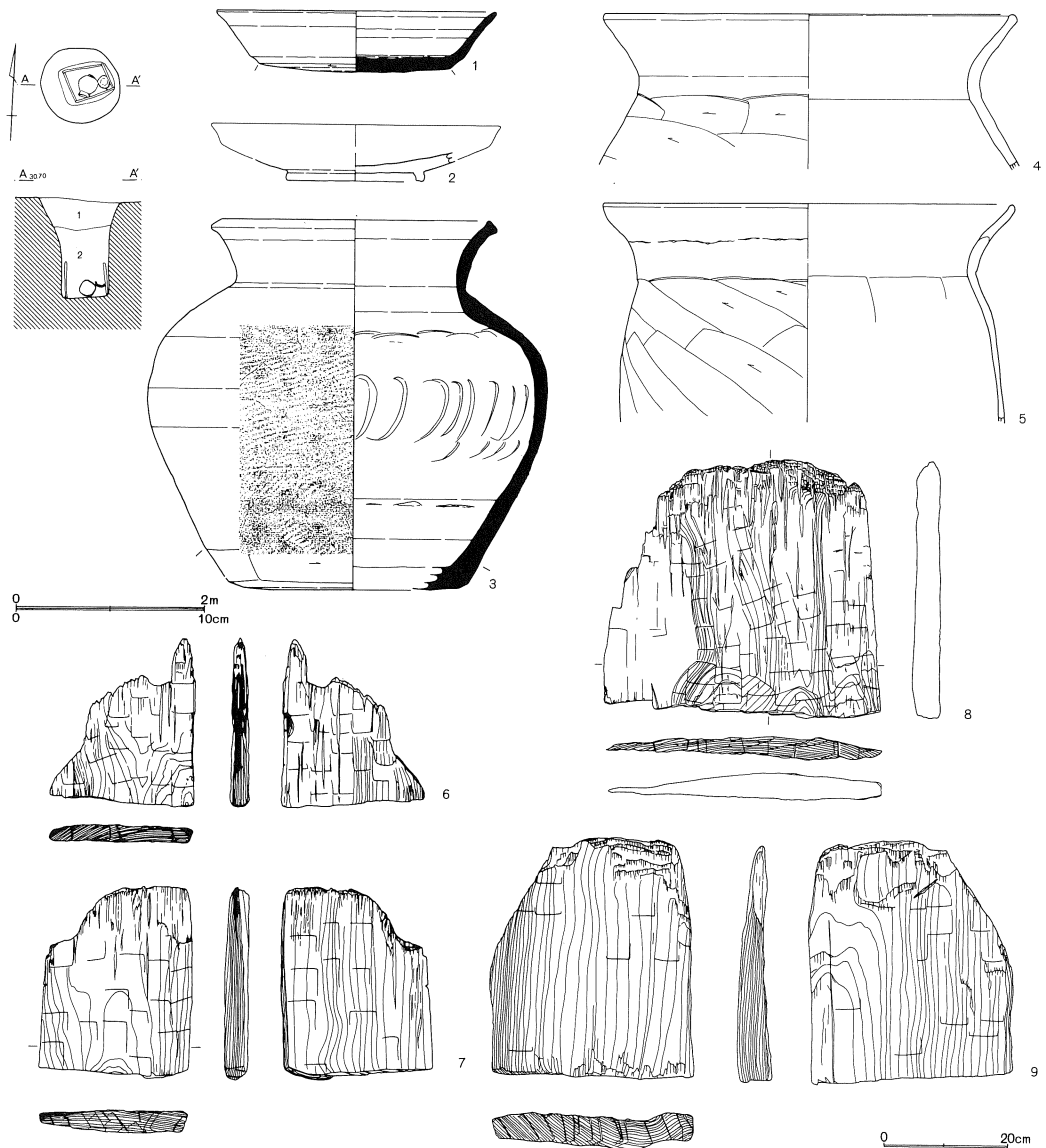


第189図 第11・12号井戸跡

第13号井戸跡(第190図)

第I群東端のO-11区に位置する。平面形は円形を呈し、径0.80m、深さ1.05mと非常に小型の井戸である。ほぼ筒状に掘り込まれ、底面には4枚の板を組み合わせて方形の井戸側が設けられている。覆土は大きく2層に分かれ、黒色土を基調としている。下層には木片等の有機物が多量に含まれていた。

出土土器は20点と少なく、土師器皿、甕、須恵器坏、埴、甕、壺、緑釉皿がある。緑釉皿(第190図2)は覆土上層から出土したもので埋没過程で混入したものと考えられる。須恵器壺(3)は井戸底面に横倒しの状態で検出された。底部が欠損するが故意に打ち欠かれたような様相が窺える。須恵器坏(1)、土師器甕(4・5)も底面に近い位置から出土している。6～9は井戸側材で手斧痕が不



第190図 第13号井戸跡・出土遺物

明瞭ながら確認される。須恵器坏は底部が丸底風で全面ヘラ削りされている。土師器甕と須恵器壺から稻荷前VI～VII期に比定されよう。

第13号井戸跡出土遺物観察表 (第190図)

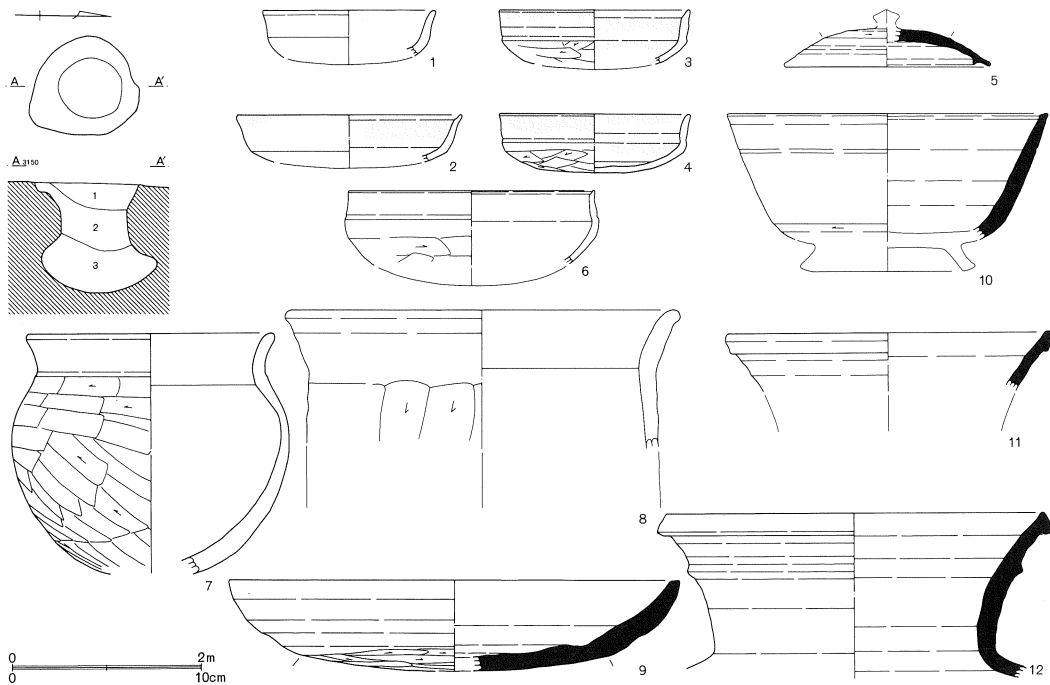
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.8	3.2	10.2	ACD	B	灰白	95%	No.2。覆土下層。
2	緑釉皿	1.5	7.2		B	A	灰	15%	覆土上層。猿投産。
3	壺	14.2	19.5		ACD	A	灰	95%	No.1。覆土下層。底部穿孔。
4	甕	(21.6)	8.2		ACDF	A	橙	20%	No.3。覆土下層。
5	甕	21.8	11.5		ADE	A	橙	60%	No.3。覆土下層。

第14号井戸跡(第191図)

O-6区に位置し、第4号掘立柱建物跡の柱穴間に挟まれている。形態は円形を呈し、径・深さ共に1.20mを測る。断面は筒状を呈するものと推定されるが、底面近くの側壁は礫層が崩落し大きくオーバーハングしている。土層は3層に区分され、黒色土または暗褐色土で、第2層にはローム塊が、第3層にはロームと礫が多量に含まれていた。出土遺物は53点検出され、土師器坏、甕、小型甕、台付甕、須恵器坏、碗、盤、蓋、甕から構成される。第191図10の碗は口縁端部が平坦で、体部外面に沈線が巡る。9の盤は覆土最上層から出土した。口縁が平坦に仕上げられ古い様相が認められる。集落内でも最も古い井戸跡と推定され、稻荷前IV期に比定される。

第14号井戸跡出土遺物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	2.5		ABE	B	灰	15%	覆土下層。
2	坏	(11.8)	2.5		B	B	橙	25%	覆土。
3	坏	(10.0)	2.8		BEG	A	橙	15%	覆土下層。
4	坏	10.0	3.1		AB	A	にぶい橙	25%	覆土下層。
5	蓋	(10.8)	2.1		ACD	A	灰	25%	覆土下層。
6	碗	13.0	3.9		BD	A	橙	15%	覆土下層。
7	小型甕	12.9	12.7		ACD	A	橙	50%	覆土。
8	甕	(20.2)	7.3		ACD	A	にぶい橙	10%	覆土。
9	盤	24.0	4.8		ABCD	B	灰	40%	覆土最上層。
10	碗	(17.0)	6.6		ABCD	A	灰	20%	覆土下層。
11	甕	(17.0)	3.1		ABCD	B	灰	5%	覆土。
12	広口壺	20.0	8.7		ABCD	B	灰	20%	覆土。



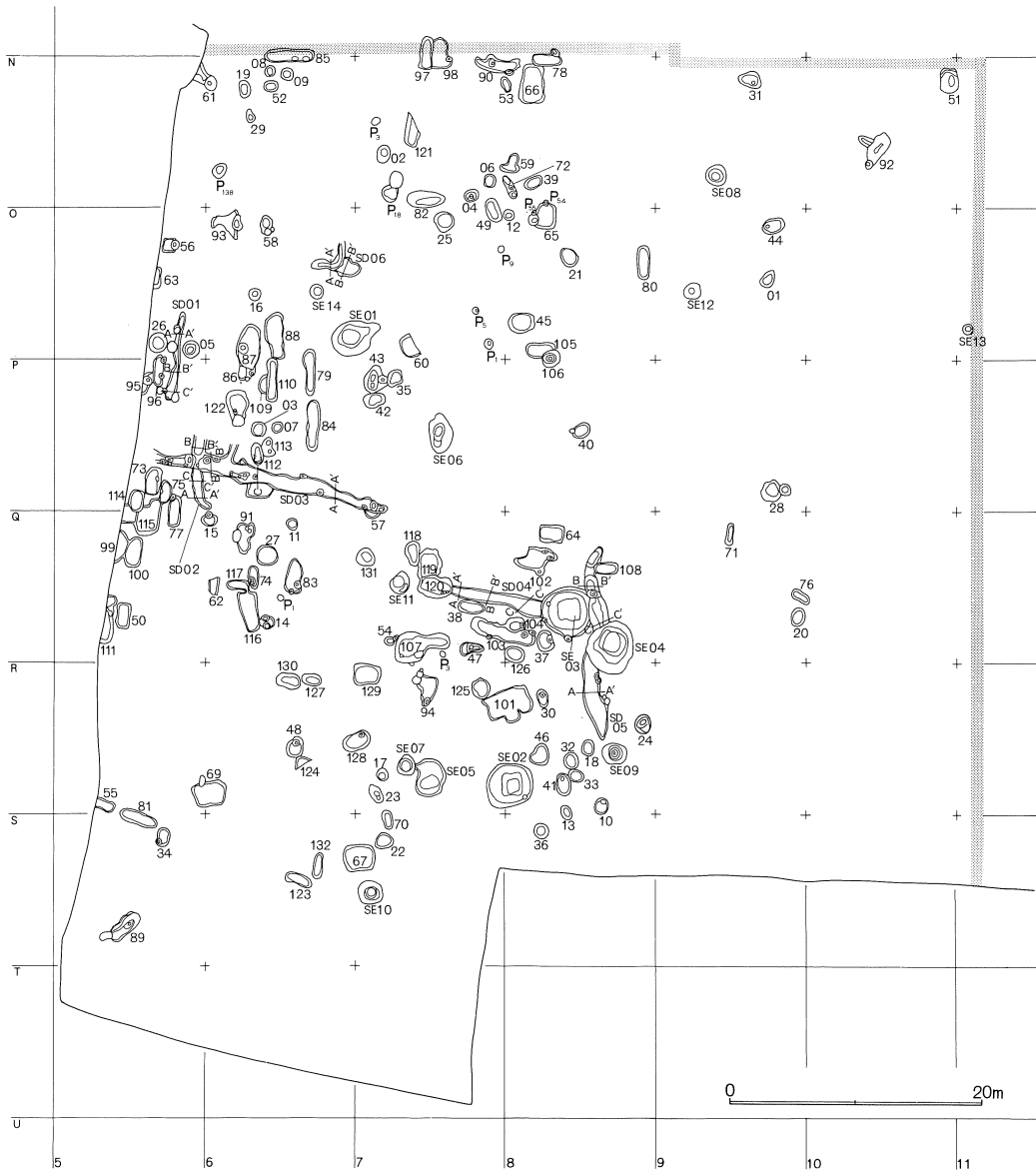
第191図 第14号井戸跡・出土遺物

4. 溝跡

第 I 群では 6 条の溝跡が検出された。何れも途切れ途切れで短く、かつ深度の浅いものである。時期的には古代に遡るものではなく、全て中世以降と推定される。遺構配置は第192図、土層図と出土遺物は第193図に一括して掲載した。

第 1 号溝跡は調査区西端の O・P-5 区に位置し、南北に約 7.00m 延びる。幅 40~50cm、深さ 10cm を測る。覆土はローム粒子混じりの暗褐色土で締まり弱い。遺物は検出されていない。

第 2・3 号溝跡は一体のものである。3 号溝跡は P-5~7 区に掛けて東西に約 22m 延びる。幅は



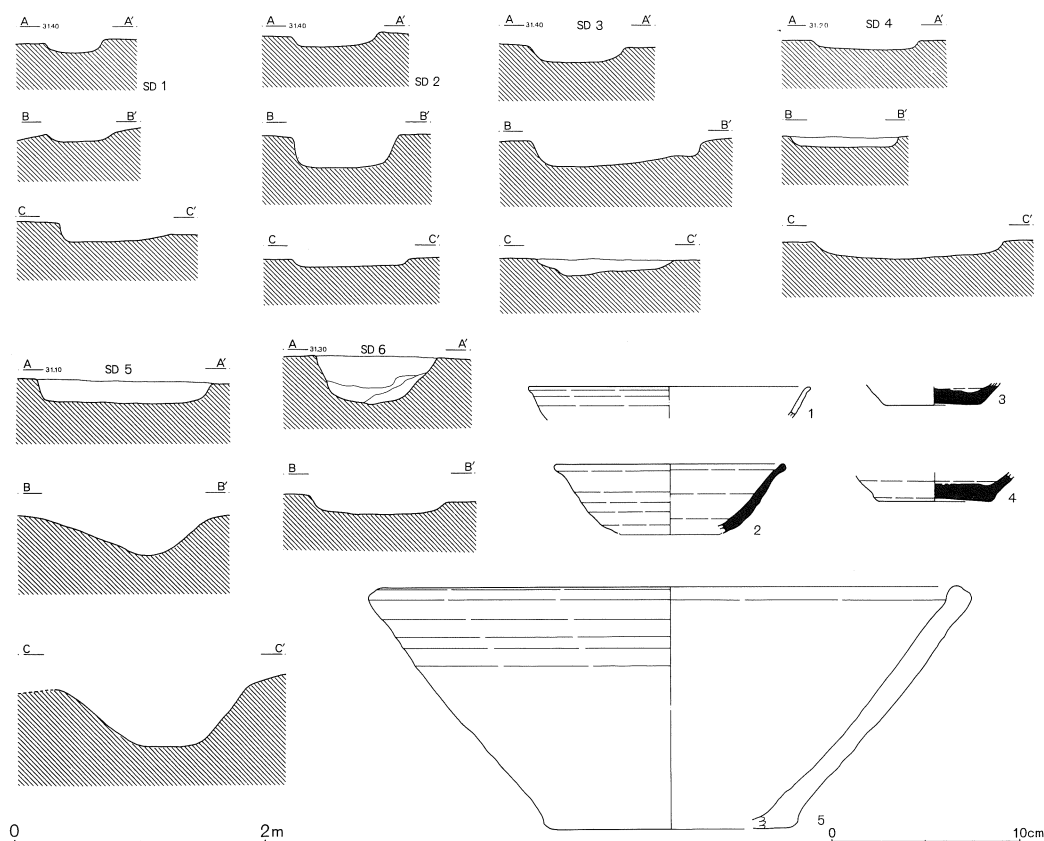
第192図 第 I 群溝跡・土壌配置図

最大で130cm、深さ10～35cmを測る。P-5区で南北に分岐し2号溝となる。幅70～100cm、深さ10～30cm。覆土はロームブロック・小礫を含む暗褐色土で締まり及び粘性に欠ける。水の流れた形跡は窺えず区画溝と推定される。出土遺物は72点検出されている。土師器・須恵器・施釉陶器と瀬戸・美濃系折縁深皿片が認められる。時期的には中世陶器の出土から15世紀頃と思われる。

第4号溝跡はQ-7～8区に掛けて東西に延び、3号井戸跡上を抜けて東端は第5号溝跡と合流するものと考えられる。幅80～130cm、深さ10～20cmを測る。覆土はローム粒子と粘土粒子を含む茶褐色土で構成される。出土遺物は土師器・須恵器34点、常滑甕1点がある。出土遺物及び5号溝の関係から15～16世紀頃と推定される。

第5号溝跡はQ・R-8区に位置し、南北に約15m延びる。第4号井戸跡と重複するが新旧関係は不明であった。幅は100～160cm、深さ30～60cmを測る。覆土はローム粒子・ロームブロックと砂礫を少量含む茶褐色土で構成される。出土遺物は土師器・須恵器計6点、在地系鉢13片が認められる。中世と推定されるが、重複する4号井戸跡との時間差がどの程度あるのか、或いは一体のものであるのかが問題となるが結論は出せなかった。

第6号溝跡はO-6区に位置する。平行する2条の溝が東西に延び、南溝は第46号住居跡上で北に屈曲する。幅は一定せず40～100cmほど、深さ10～30cmを測る。覆土は暗褐色から暗黄褐色土で構成



第193図 第I群溝跡土層・出土遺物

され、比較的ロームの混入が多い。総じて締まりに欠ける。遺物は出土せず年代は不明であるが、近世以降と考える。

第 I 群溝跡出土遺物観察表 (第193図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	緑釉埴	(14.8)	1.7		B	A	灰	5%	SD03覆土。
2	坏	12.0	3.7		A C	B	暗青灰	15%	SD03覆土。
3	坏		1.1	5.0	B	C	灰褐	50%	SD03覆土。
4	坏		1.0	6.0	A C	B	灰	30%	SD03覆土。
5	擂鉢	30.4	12.7	(13.0)	A B E I	B	灰	45%	SD05覆土。(R-8Grid)。

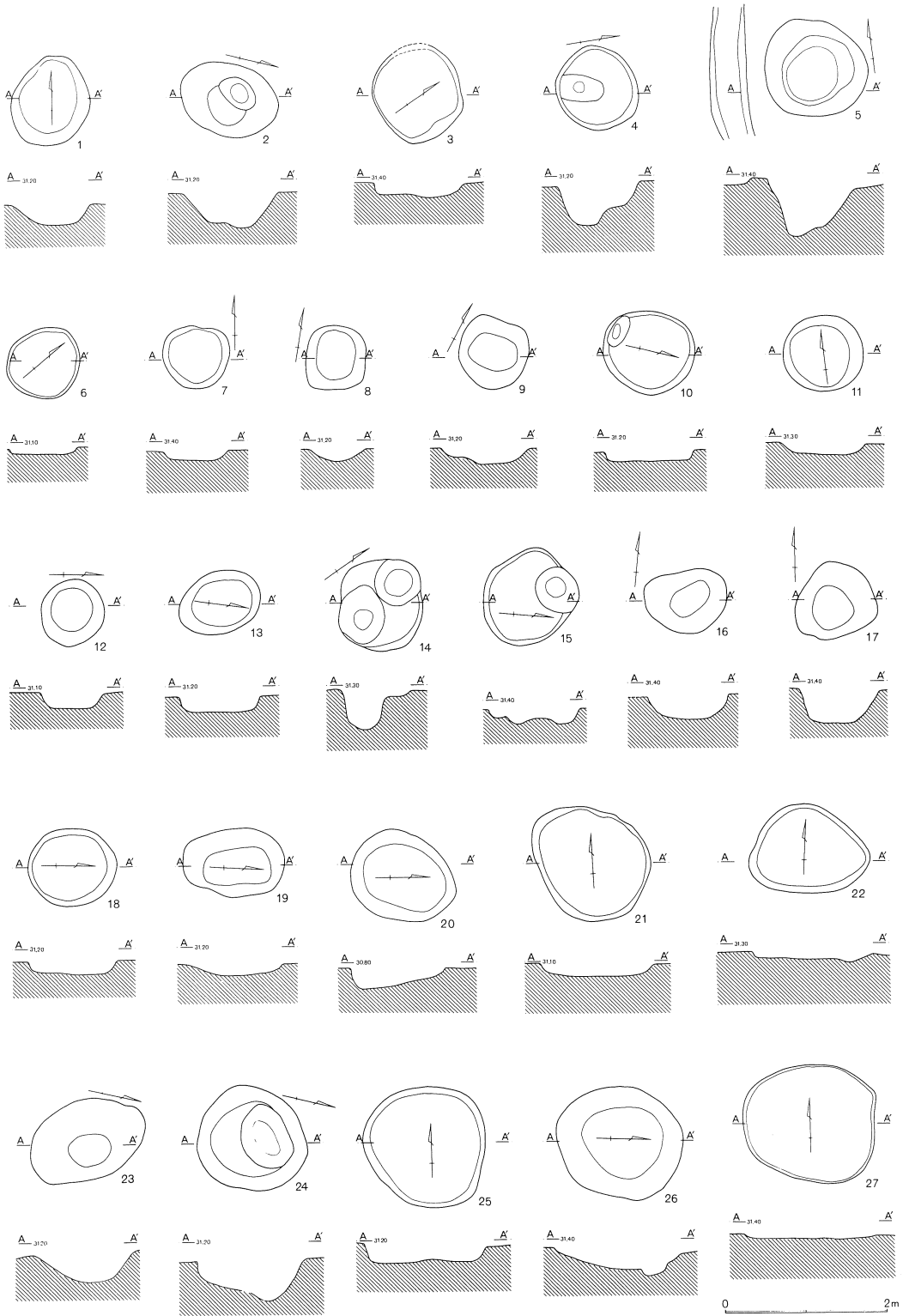
5. 土壙

第 I 群では132基の土壙が検出された。遺構配置は第192図に、規模等の詳細は第 1 表に示したとおりである。形態は円形、楕円形、隅丸方形、長方形、不整形を呈するものの各種類が見られる。時期は不明なものがほとんどであるが、一応出土遺物の年代を基に大まかな時期を表中に表わした。但し出土遺物が古代であっても覆土の状況等の調査所見が中世以降であるものと推定された場合には中世とした。性格に関してほとんどが不明であるが、第131号土壙は有機質土の堆積こそ認められていないが形態や深度から井戸跡の可能性が強いものと推定される。第101号土壙は不整形プランを持ち多数の礫が混入していた。底面は不安定であるが中世の土間状遺構とすべきかもしれない。また、隅丸方形または楕円形の掘方をもつ土壙の中には掘立柱建物跡の一部を構成するものも含まれよう。

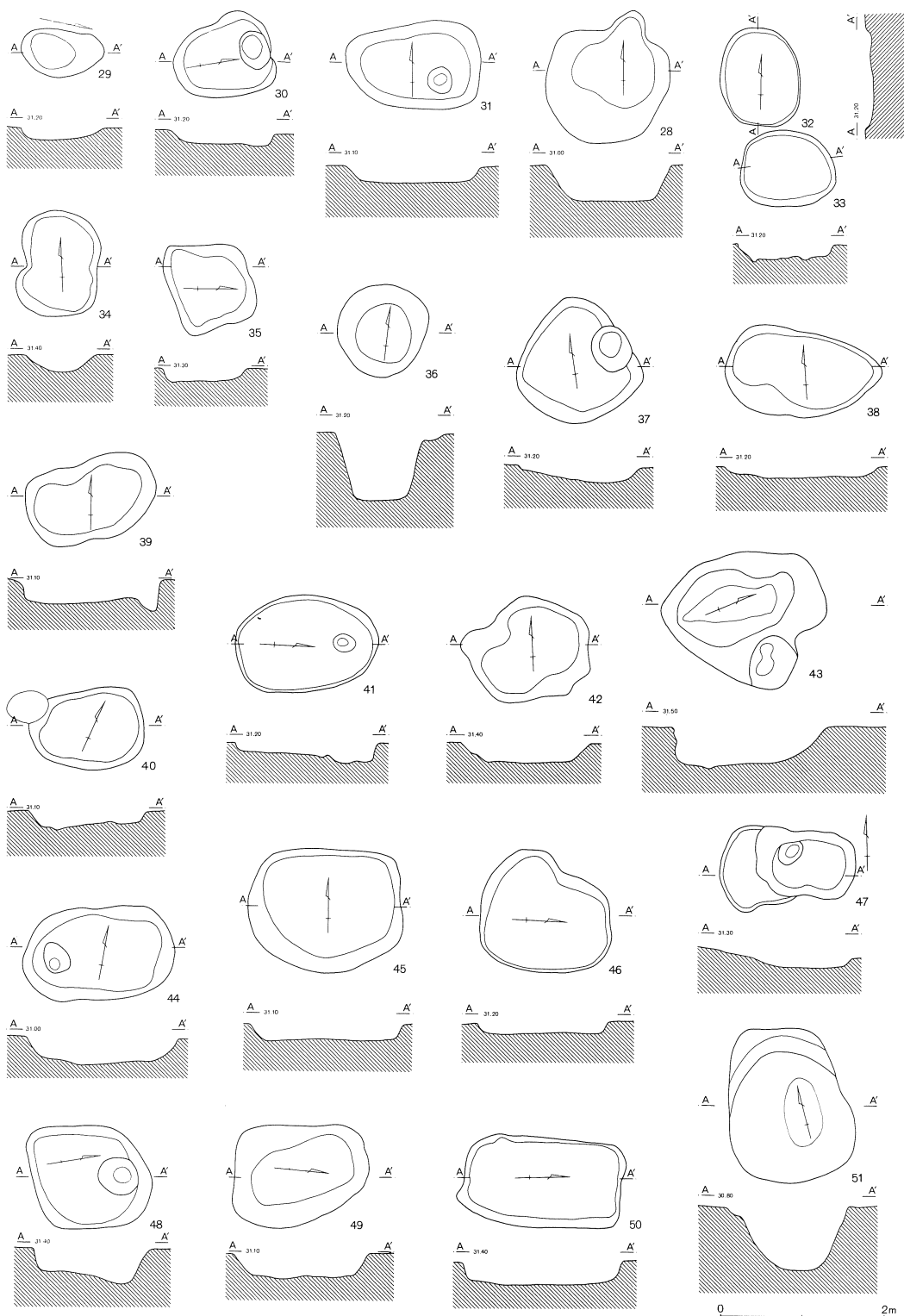
古銭(第200図21) 第101号土壙出土の寛永通寶(鉄銭)である。土壙に伴うかどうか疑わしい。径2.7 cmを測り、背に波文がある。

第 I 群土壙出土遺物観察表 (第200・201図)

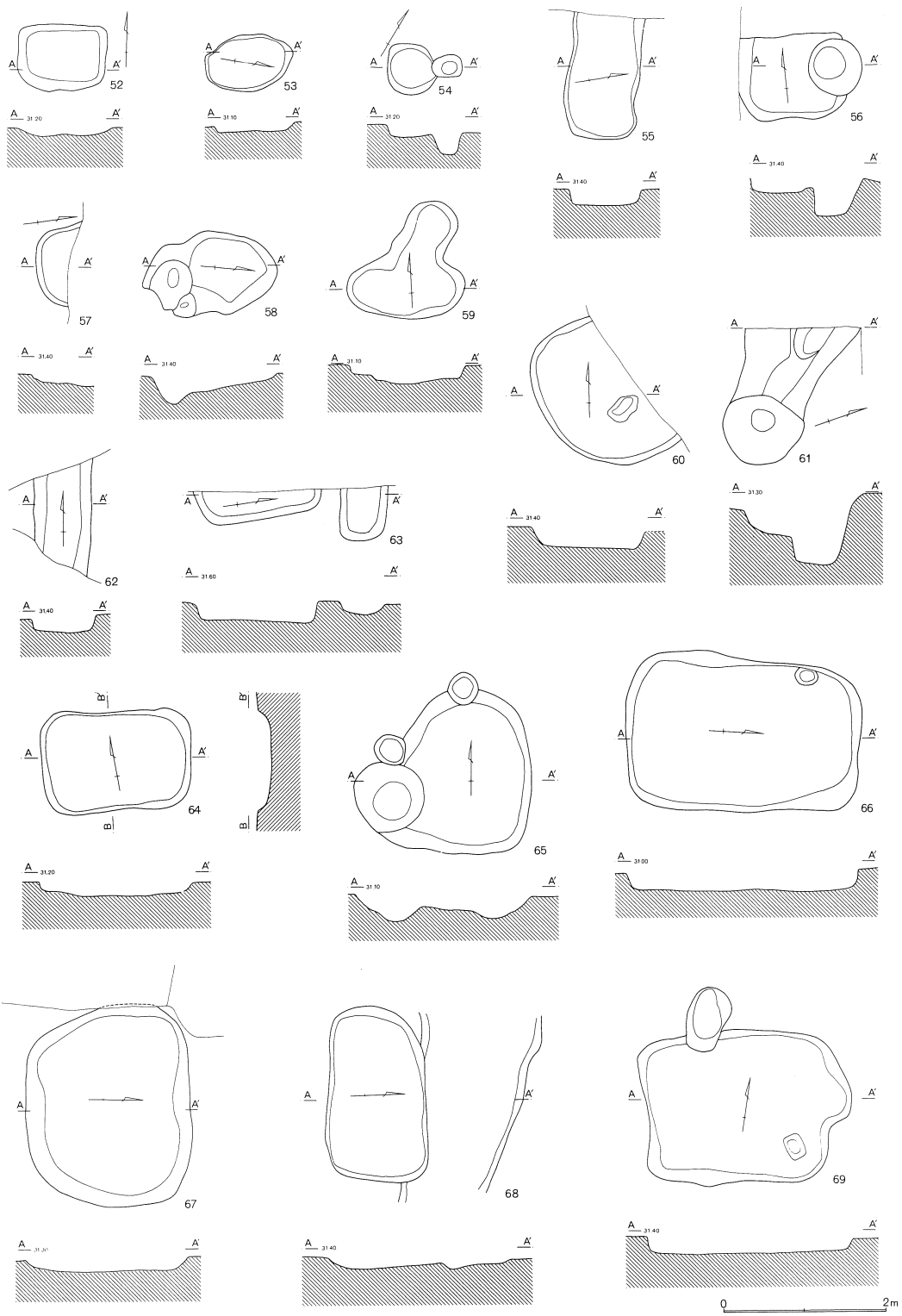
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏		2.4	(5.0)	A B C E	C	灰	50%	SK01覆土。(0-9Grid P ₅)。
2	坏	(13.8)	4.6		A B E	A	にぶい橙	15%	SK01覆土。(0-9Grid P ₅)。
3	高台坏		4.7	5.6	A C E	C	灰	30%	SK06覆土。
4	坏		1.8	7.0	A B C	A	灰	60%	SK56覆土。
5	坏	(12.1)	3.0		A B C	A	明赤褐	25%	SK67覆土。
6	坏		3.0	(4.5)	A C E F	A	橙	25%	SK50覆土。
10	坏	(12.0)	3.6	(7.0)	B C	A	灰	30%	№4。SK93覆土。
11	坏	(13.8)	3.8	(8.6)	A C	B	灰	25%	№3。SK93覆土。
12	蓋	(17.8)	3.2		A B C D	A	灰	25%	SK93覆土。
13	壺	(18.0)	6.2		A B C D	A	灰	25%	SK93覆土。
14	坏		2.2	10.0	A C E	A	灰	60%	SK92覆土。
15	壺	(19.0)	6.2		B F	A	にぶい橙	20%	SK92覆土。赤彩。
16	高台坏		1.7	6.4	A B F	B	橙	100%	SK73覆土。
17	甕		3.4	(4.8)	A B C	B	浅黄橙	70%	SJ22-11。SK101覆土。
18	坏	(13.0)	3.5	(7.0)	A B H	A	浅黄橙	20%	SJ22-72。SK101覆土。土師質土器。
19	台付甕		3.7		A C E F	B	橙	50%	SJ22-8, 14。SK101覆土。
20	小型甕	11.9	11.2		A B C	B	にぶい橙	50%	SJ22-35, 51, 52。SK101覆土。



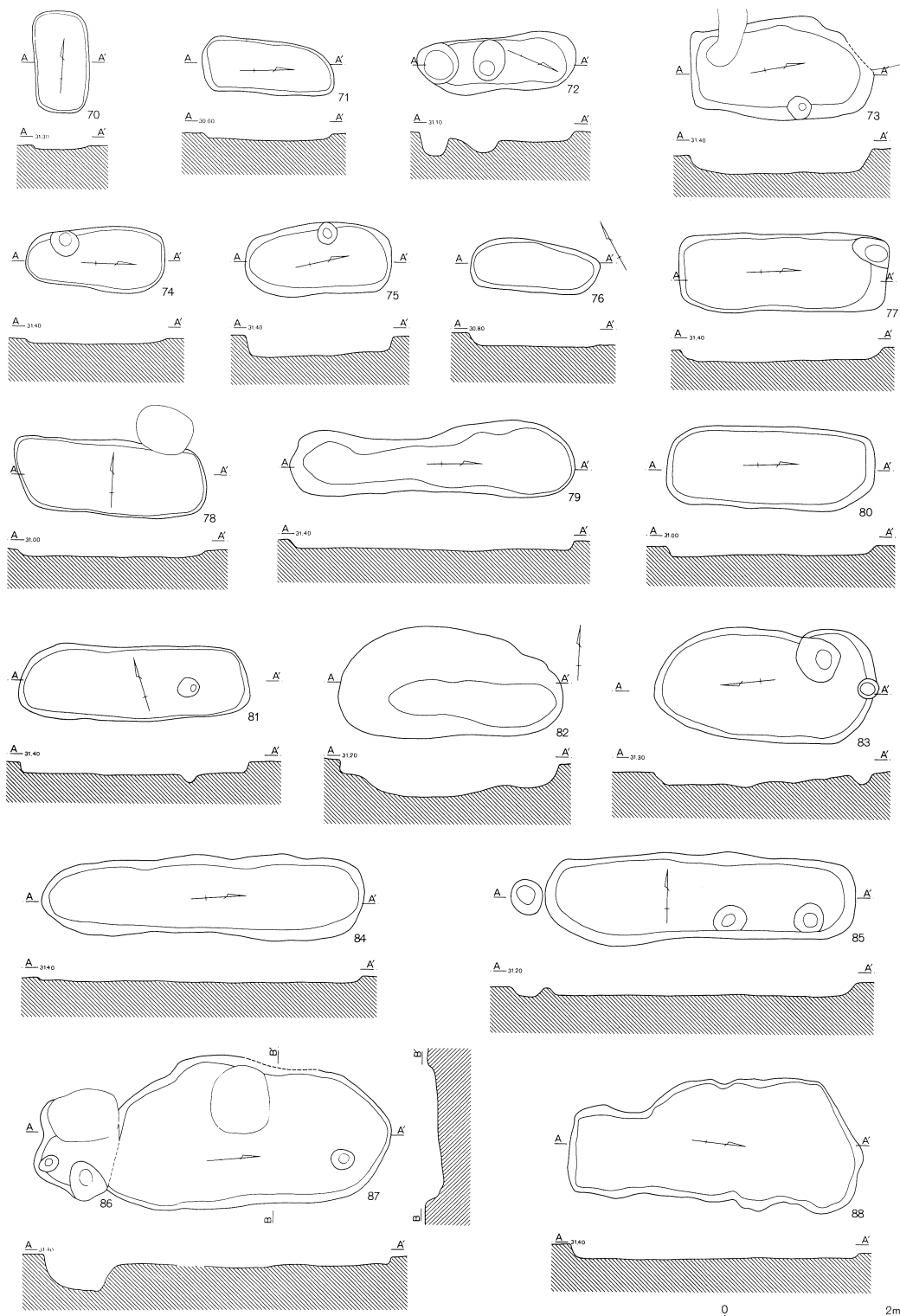
第194图 第I群土坑(1)



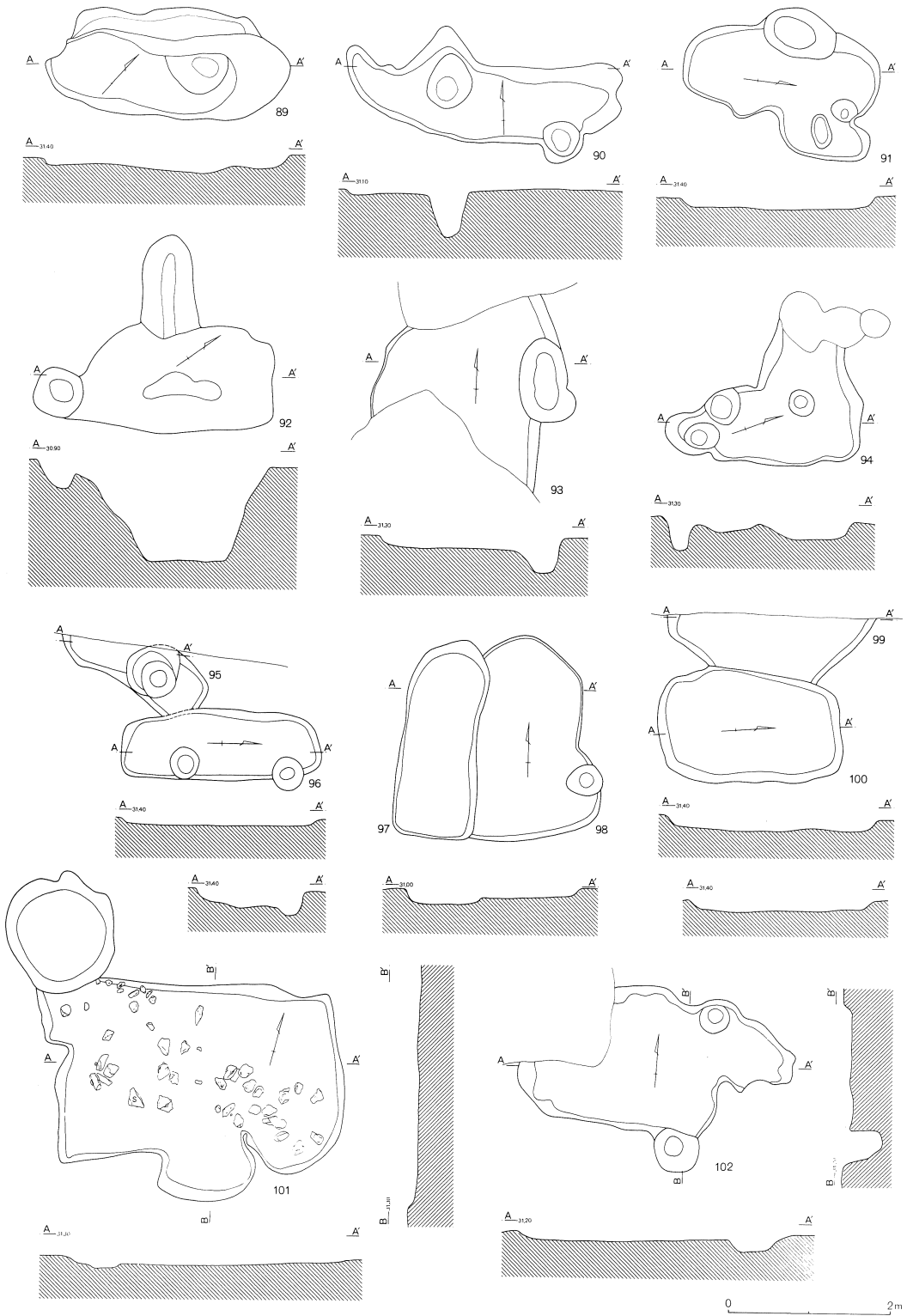
第195图 第I群土壤(2)



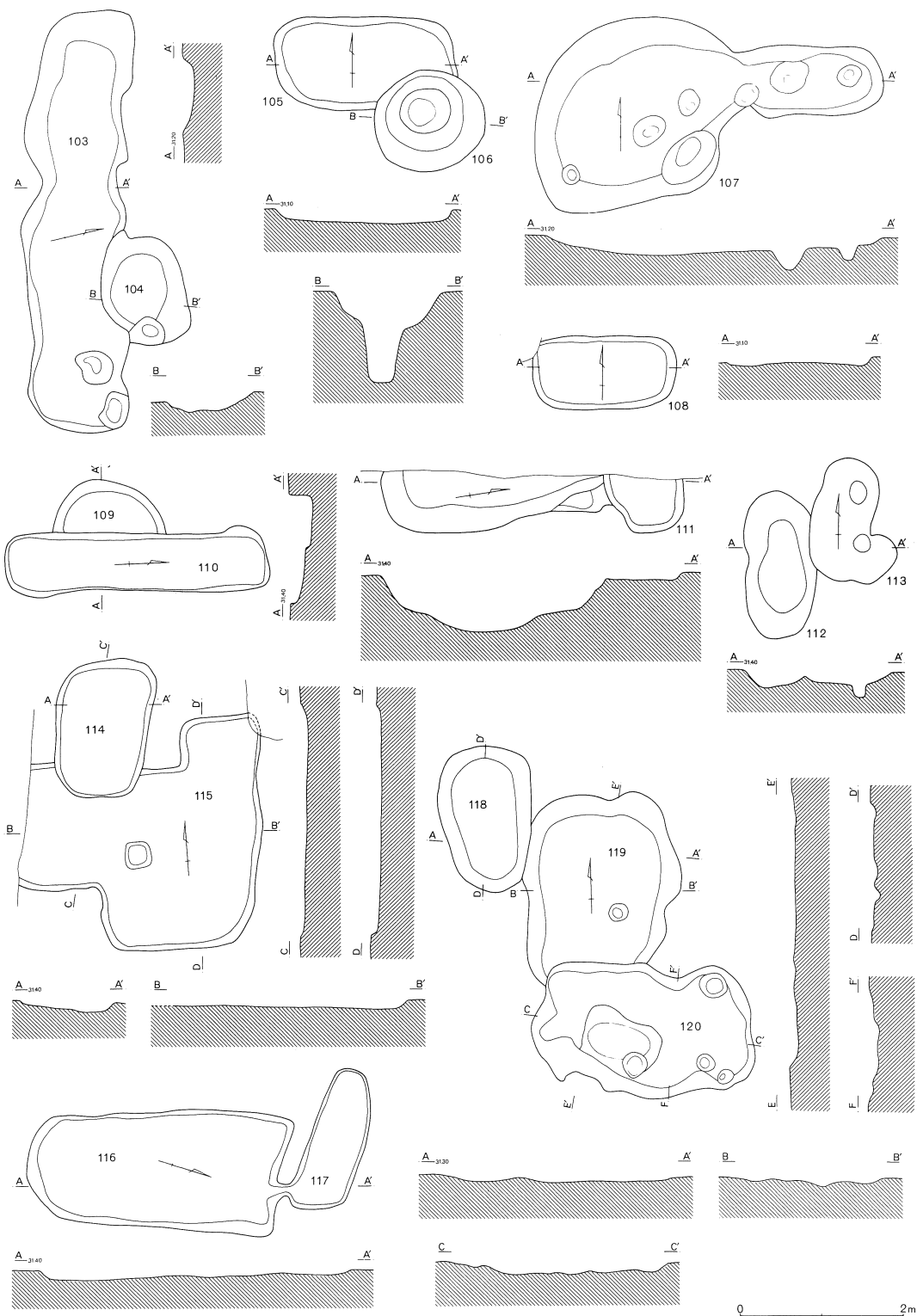
第196图 第I群土坑(3)



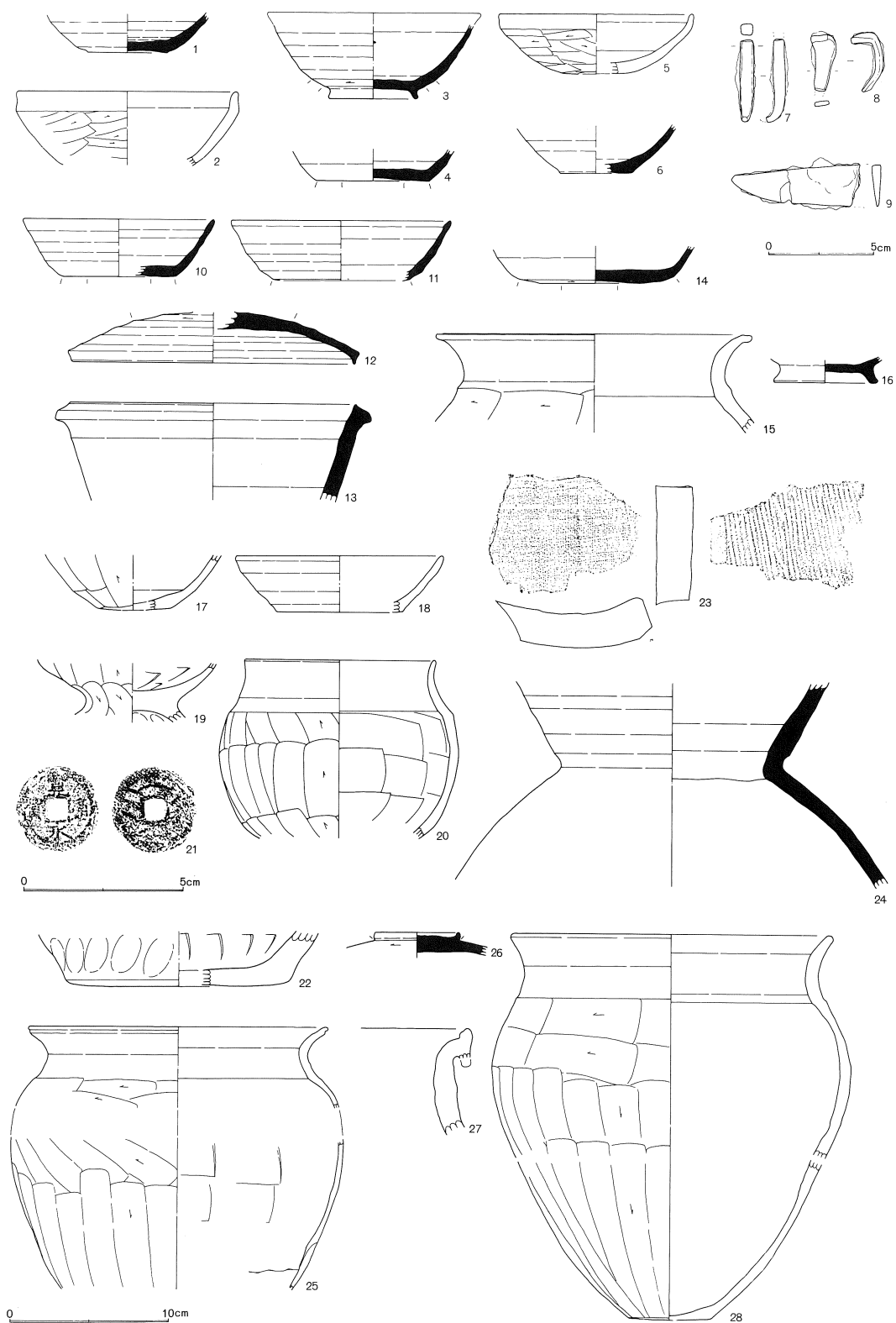
第197图 第I群土坑(4)



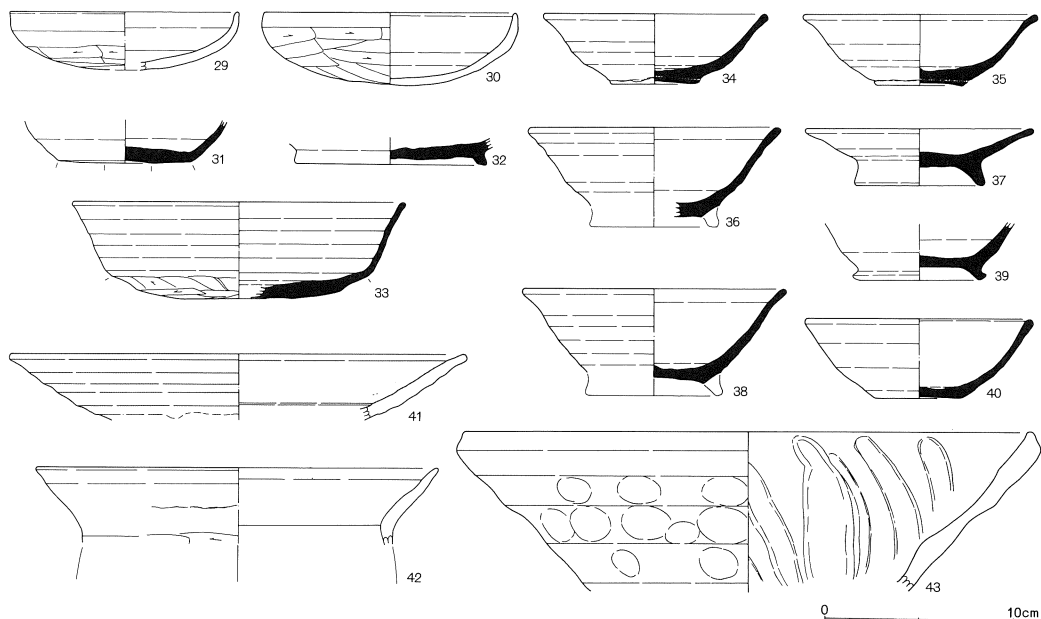
第198图 第I群土坑(5)



第199图 第I群土壙(6)



第200图 第I群土壙出土遺物(1)



第201図 第I群土壙出土遺物(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
22	鉢		3.4	14.2	A E H	B	灰白	25%	SJ22-28, SK101覆土。中世在地系鉢。	
23	平瓦				A C D	B	にぶい黄橙	10%	SK129覆土。凹面布目9×8本/cm ² 。	
24	甕		12.7		A B D	A	灰	25%	№12, SK43覆土。	
25	甕	(18.8)	16.5		A D E	A	にぶい橙	20%	SK65覆土。	
26	蓋		1.6		A B C	A	灰	100%	SK90覆土。	
27	常滑甕		6.6		A	A	にぶい赤褐	5%	SK90覆土。	
28	甕	19.8	24.1	5.0	A D E	A	にぶい橙	25%	№12, 13, 17, 18, SK128覆土。	
29	坏	(12.0)	3.1		A B E	A	橙	15%	SK106覆土。	
30	坏	13.3	3.9		A B E	A	橙	100%	№1, SK106覆土。	
31	坏		2.2	7.1	A B C	A	灰	60%	№1, SK102覆土。	
32	高台坏		1.4	10.1	B	A	灰	30%	№2, SK106覆土。東海産か。	
33	坏	(17.4)	5.1	10.8	A C	B	灰黄褐	30%	SK106覆土。	
34	坏	11.7	3.8	4.2	A B C E	B	橙	72%	№1, SK105覆土。切り離し面が2枚。	
35	坏	(12.2)	3.8	4.6	A C E	A	橙	35%	№2, SK105覆土。切り離し面が2枚。	
36	高台坏	(13.2)	4.7		A B D E	B	淡黄	15%	№1, SK115覆土。	
37	高台皿	(11.8)	3.0	6.6	A B C E	B	明黄褐	65%	№3, 105覆土。	
38	高台坏	13.8	5.0		A B C E	B	にぶい黄橙	85%	№4, SK105覆土。底部糸切り痕残る。	
39	高台坏		2.9	6.4	E G	C	灰白	70%	№3, SK115覆土。	
40	坏	11.7	3.8	4.2	A E	A	橙	70%	№5, SK120覆土。切り離し面が2枚。	
41	皿	(22.0)	3.5		B	A	淡黄	15%	SK125覆土。瀬戸・美濃系。	
42	甕	(21.2)	4.0		A B F	A	橙	5%	SK123覆土。	
43	鉢	(30.0)	8.4		A E I	B	灰	20%	№6, SK104覆土。瓦質。内面強い指ナデ。	
7	鉄釘	残長3.9cm。								SK36覆土。先端折れ曲がる。
8	鉄器	残長2.8cm。幅0.5~1.0cm。								SK36覆土。板状を呈す。
9	刀子	残長6.1cm。最大幅1.9cm。								SK71覆土。切先部完存。

第1表 第I群土壙一覽表

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)							備考(出土遺物・重複関係等)		
				6	7	8	9	10	11	中世		近世	
1	5	O-9	114×92×24		~~~~		~~~~						土師環 須恵環
2		N-7	121×88×43										遺物なし
3	21	P-6	114×101×18		~~~~		~~~~						土師甕・壺 須恵環
4	65	N-7	106×98×52										遺物なし
5	26	O-5	158×136×30		~~~~		~~~~						土師環・甕 須恵環
6	156	N-7	94×82×9				~~~~						土師甕 須恵環・埴
7	84	P-6	82×76×12										遺物なし
8	128	N-6	79×74×15										遺物なし
9	126	N-6	84×86×19		~~~~								土師環・甕
10	177	R-8	112×98×14										土師甕 時期不明
11	79	Q-6	98×91×16										遺物なし
12	63	Q-7・8	84×78×22										遺物なし
13	176	R・S-8	104×75×19										遺物なし
14	162	Q-6	118×98×45								~~~~		土師甕
15	78	Q-5・6	116×106×23										遺物なし
16	90	O-6	102×76×33				~~~~						須恵環
17	186	R-7	104×84×46		~~~~		~~~~						須恵甕
18	175	R-8	110×92×18										遺物なし
19	129	N-6	126×84×18										遺物なし
20	183	Q-9	134×104×26										遺物なし
21	64	O-8	142×130×18										遺物なし
22	81	S-7	150×108×19				~~~~						土師環・甕 須恵環・蓋・甕 灰釉埴
23	187	R-7	150×93×41										遺物なし
24	178	R-8	138×118×57										縄文土器 時期不明
25	67	O-7	162×120×25					~~~~					土師甕 須恵甕 灰釉埴
26	278	O-5	129×116×84				~~~~						土師甕 須恵環・瓶
27	68	Q-6	162×128×8										遺物なし
28		P-9	156×140×25										土師甕 須恵環
29	168	N-6	101×56×14		~~~~								土師甕 須恵環・甕 瓦
30	170	R-8	123×92×22								~~~~		土師甕 須恵甕 在地系鉢
31	267	N-9	175×101×21					~~~~					土師環・甕 須恵環・甕 緑釉埴 鉄滓
32	172	R-8	119×96×10										遺物なし
33	174	R-8	116×93×16										遺物なし
34	56	S-5	130×86×39										遺物なし
35	163	P-7	104×98×21										遺物なし
36	179	S-8	112×106×83		~~~~								土師環・甕・壺 須恵環・甕・瓶 鉄器
37	39	Q-8	156×138×50										遺物なし
38	180	Q-7	192×94×14										遺物なし
39	152	N-8	160×90×29						~~~~				須恵環・甕
40	169	P-8	141×92×20										遺物なし
41	173	R-8	174×114×21										遺物なし
42	19	P-7	158×120×28										遺物なし
43	10	P-9	204×150×52			~~~~							須恵甕
44	181	O-9	188×108×31										遺物なし
45	123	O-8	190×132×23		~~~~								須恵環・甕
46	171	R-8	167×126×16					~~~~					須恵環

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)								備考(出土遺物・重複関係等)		
				6	7	8	9	10	11	中世	近世			
47	47	Q-7	168×78×22											遺物なし
48	77	R-6	144×124×29											遺物なし
49	62	N・O-7	170×104×31				~~~~~							土師環・甕・甌 須恵環
50	273	Q-5	201×107×38					~~~~~						土師環・甕 須恵環・甕
51	221	N-10	194×140×80		~~~~~									土師環・甕・壺
52	127	N-6	108×80×8											遺物なし
53	155	N-7	108×68×11											遺物なし
54	183	Q-7	92×28×18											遺物なし
55	54	R-5	151×84×21											土師甕 時期不明
56	280	O-5	151×99×24				~~~~~							土師環・甕・鉢 須恵環・甕
57	75	P・Q-7	104×36×9					~~~~~						土師環・甕 須恵環
58	27	O-6	168×88×13											遺物なし
59	61	N-7・8	154×72×89		~~~~~									土師甕 須恵環・甕
60	124	O-7	190×114×14			~~~~~								土師環・甕 須恵環・甕
61	134	N-5	182×86×87			~~~~~								土師甕 須恵環・甕
62	160	Q-6	122×70×18											遺物なし
63	279	O-5	154×31×28											土師環・甕 時期不明
64	28	Q-8	184×118×11											遺物なし
65	153	O-8	222×152×21					~~~~~						土師環・甕 須恵環・蓋・甕・瓶
66	143	N-8	286×182×2		~~~~~	~~~~~								土師環・甕 須恵環・皿・蓋・甕
67	80	S-6・7	248×202×19		~~~~~									土師環
68	74	P-6	200×116×11					~~~~~						土師環 須恵環・甕
69	57	R-5・6	254×184×21					~~~~~						土師甕 須恵環・甕
70	82	S-7	122×66×5				~~~~~							土師甕 須恵環・甕
71	167	Q-9	162×64×13					~~~~~						土師環 須恵環 鉄器
72	154	N-7・8	192×64×33				~~~~~							土師環・甕 須恵環
73	35	P-5	223×112×40					~~~~~						須恵環
74	72	Q-6	168×70×9					~~~~~						須恵環 緑釉埴
75	34	P-5	181×86×35			~~~~~								土師甕 須恵環
76	184	Q-9	158×62×17											土師甕 時期不明
77	91	P・Q-5	256×92×26					~~~~~						須恵環・甕
78	157	N-8	228×88×10			~~~~~								土師環・甕 須恵環・甕
79	158	O・P-6	374×64×16											遺物なし
80	168	O-8	255×98×16					~~~~~						土師甕 須恵環・甕
81	55	R・S-5	284×85×18			~~~~~								土師甕 須恵甕
82	66	N-7	274×98×46											遺物なし
83	159	Q-6	272×108×16					~~~~~						土師甕 須恵環・甕
84	81	P-6	396×86×9											遺物なし
85	144	N-6	380×98×21			~~~~~								土師環・甕 須恵甕
86	23	P-6	134×92×52		~~~~~									土師環・甕 須恵環・甕・鉢
87	24	O-6	324×158×24					~~~~~						土師甕 須恵環・甕
88	25	O-6	358×101×19					~~~~~						土師環・甕 須恵環・蓋 緑釉埴
89	53	S-5	302×122×35											遺物なし
90	142	N-7	336×64×21			~~~~~					~~~~~			土師甕 須恵環・皿・蓋・甕 常滑甕
91	73	Q-6	240×104×21					~~~~~						土師甕 須恵環・瓶
92	220	N-10	295×126×121			~~~~~								土師環・埴・甕・壺 須恵環・甕
93	125	O-6	228×76×15			~~~~~								土師蓋・甕 須恵環・蓋・甕・壺・鉢

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)							備考(出土遺物・重複関係等)		
				6	7	8	9	10	11	中近		近世	
94	185	R-7	246×102×30				~~~~~						土師環 須恵環・甕
95	277	P-5	162×72×19				~~~~~						土師環・甕 須恵環・甕
96	276	P-5	246×84×9				~~~~~						土師環 須恵環
97	145	N-7	246×90×17			~~~~~	~~~~~						土師環・甕 甗 須恵環・甕
98	146	N-7	252×104×14				~~~~~						土師環・甕 須恵環・甕
99	272	Q-5	256×66×26										遺物なし
100	271	Q-5	228×130×17		~~~~~								土師環・甕 須恵環・甕・甕
101	40	R-7・8	354×178×12							~~~~~			土師甕 台付甕 土師質環 在地系甕 鉢 古銭
102	45	Q-8	340×102×14			~~~~~							土師甕 須恵環 縄文土器片
103	38	Q-7・8	514×92×21							~~~~~			土師甕 須恵環・甕 在地系鉢
104	37	Q-7・8	138×98×25							~~~~~			土師環・甕 須恵環・甕 在地系鉢
105	165	O-8	222×108×20					~~~~~					土師環・甕 須恵環・蓋・皿・甕 灰釉瓶
106	166	O-8	136×114×112		~~~~~								土師環・甕 須恵環・甕・甕
107		Q-7	436×220×20										遺物なし
108	181	Q-8	178×88×10					~~~~~					須恵環
109	86	P-6	138×58×16										遺物なし
110	85	P-6	324×68×30					~~~~~					土師環 須恵環・甕 緑釉壺
111	274	Q-5	272×42×73			~~~~~	~~~~~						須恵甕
112	83	P-6	180×73×22					~~~~~					緑釉壺
113	82	P-6	151×108×19										遺物なし
114	275	P-5	168×110×11					~~~~~					土師甕 須恵環
115	270	P・Q-5	292×154×27					~~~~~					土師環 須恵環・壺・蓋・瓶
116	70	Q-6	312×108×21					~~~~~					土師環・甕 須恵環・壺・甕
117	71	Q-6	174×62×13					~~~~~					須恵甕 灰釉壺
118	29	Q-7	180×108×7					~~~~~					遺物なし
119	30	Q-7	216×168×9					~~~~~					須恵環・甕
120	31	Q-7	278×138×18					~~~~~					土師甕 須恵環・皿 唐磁器 瓦
121		N-7	250×100×25										遺物なし SJ68
122	20	P-6	182×142×43				~~~~~						土師環・甕 須恵環・蓋・甕・瓶 SJ36内
123		S-6	210×82×20			~~~~~							土師甕 SJ13内
124		R-6	140×95×20										遺物なし SJ22
125	49	R-7	150×108×22							~~~~~			瀬戸皿 SJ26内
126	50	Q-8	146×112×18										土師環 須恵甕 時期不明 SJ26内
127	60	R-6	126×74×17										遺物なし
128	61	R-6・7	206×118×17					~~~~~					土師甕 須恵環・甕 SJ25
129	62	R-6・7	196×155×33		~~~~~	~~~~~							土師環・甕 甗 須恵環 瓦 SJ25内
130	59	R-6	198×108×28			~~~~~							須恵環・甕 SJ24内
131	52	Q-7	140×114×89										遺物なし SJ32内
132	12	S-6	225×55×9										遺物なし SJ13内

6. 竪穴状遺構 (S X01~03)

第I群では3基の竪穴状遺構が検出されている。3基は切り合いながら連続して構築されほぼ同様な性格を有するものと推測されるが具体的な機能に関しては不明とせざるを得ない。第1号竪穴状遺構の南に接する23号住居跡も一応住居跡として報告したが、形態や規模から竪穴状遺構に含めて考えるべきものかもしれない。そうすると南北に主軸をもつS J 23・S X01と東西に主軸をもつS X02・03の二つのグループに分けて理解することもできよう。

第1号竪穴状遺構(第202図)

Q・R-5・6区に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸3.80m、短軸2.95m、深さ0.35mを測る。北壁では第2号竪穴状遺構と切り合うが新旧関係は不明である。

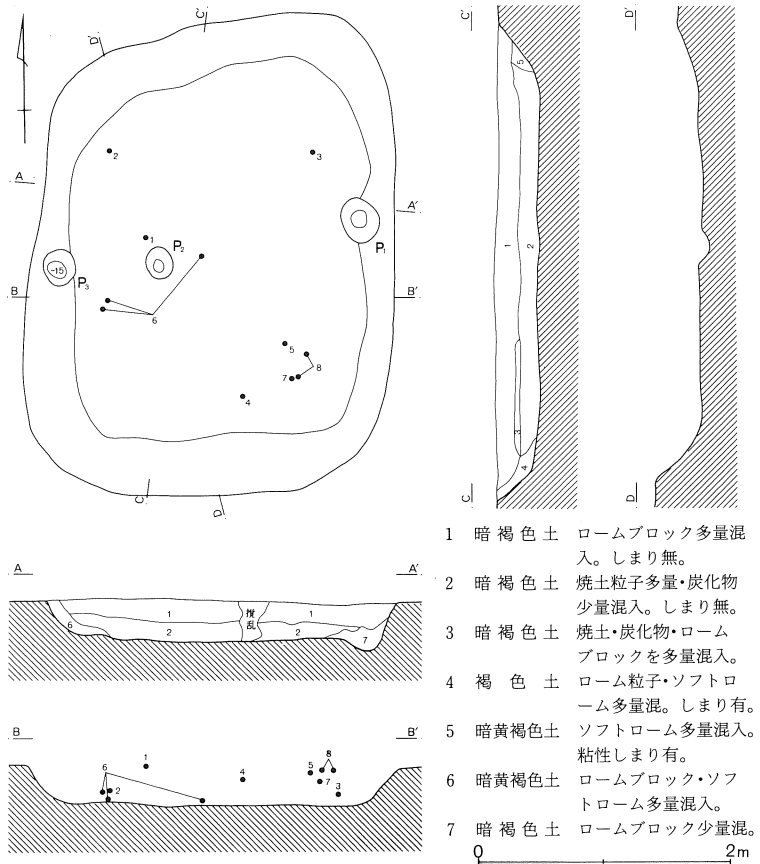
底面は緩やかな起伏をもち、床面状の堅い面は形成されていない。壁の立ち上がり角度もなだらかで、通常の住居とはやや異なる。

覆土は7層に区分されるが、大きく上層(第1層)と下層(第2層)に分かれる。全体にロームブロックの混入が目立つ。

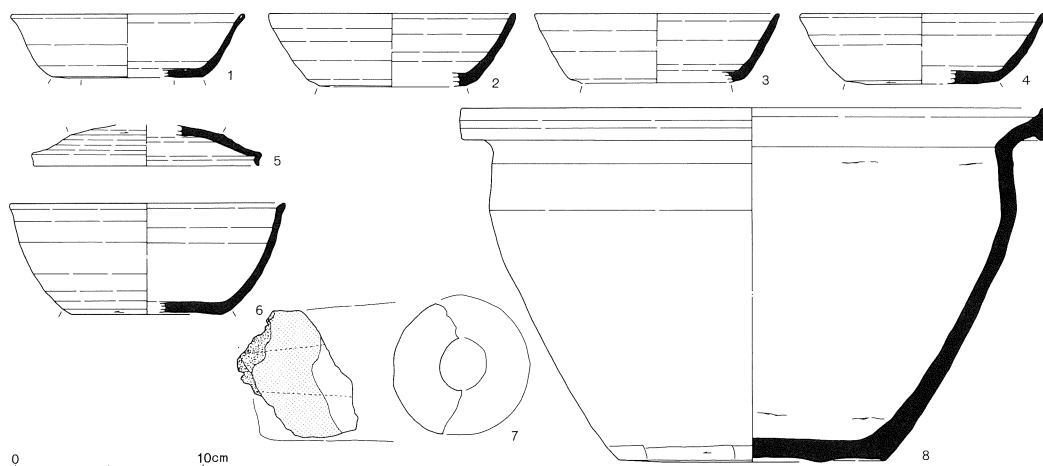
ピットは3本検出され、土層観察によれば遺構に伴う可能性もある。

出土遺物は107点検出され、器種的には土師器坏、皿、甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、鉢、壺と鞆羽口がある。須恵器坏が主体となり、そのなかでもほとんどは底部がヘラ削りが施されている。覆土から出土したものがほとんどで、第203図2・3・6は下層から出土した。出土遺物に大きな時期差はみられず概ね稲荷前IX期に比定される。

第203図7は鞆羽口片で先端は飴状に溶け、続く部分は青灰色に還元している。残存径7.3cm、孔径2.7cm。胎土にA・B・D含む。No62。覆土出土。



第202図 第1号竪穴状遺構(L=31.60m)



第203図 第1号竪穴状遺構出土遺物

第1号竪穴状遺構出土遺物観察表(第203図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.2)	3.4	(8.0)	A B C	A	灰	20%	№33。覆土。
2	坏	(12.8)	3.9	7.9	A B C	B	灰	15%	№60。覆土下層。
3	坏	(12.9)	3.7	(8.0)	A B D	A	灰	20%	№52。覆土下層。
4	坏	(12.8)	4.2	(8.2)	A C D	A	灰	25%	№28。覆土。
5	蓋	(11.8)	2.2		A B C	A	灰	25%	№18。覆土。
6	碗	(14.5)	5.9	(8.0)	A B C	A	灰	15%	№7, 35, 36。覆土下層。
8	鉢	(30.6)	18.6	14.0	A C	A	灰白	25%	№21, 24。覆土。

第2・3号竪穴状遺構(第204図)

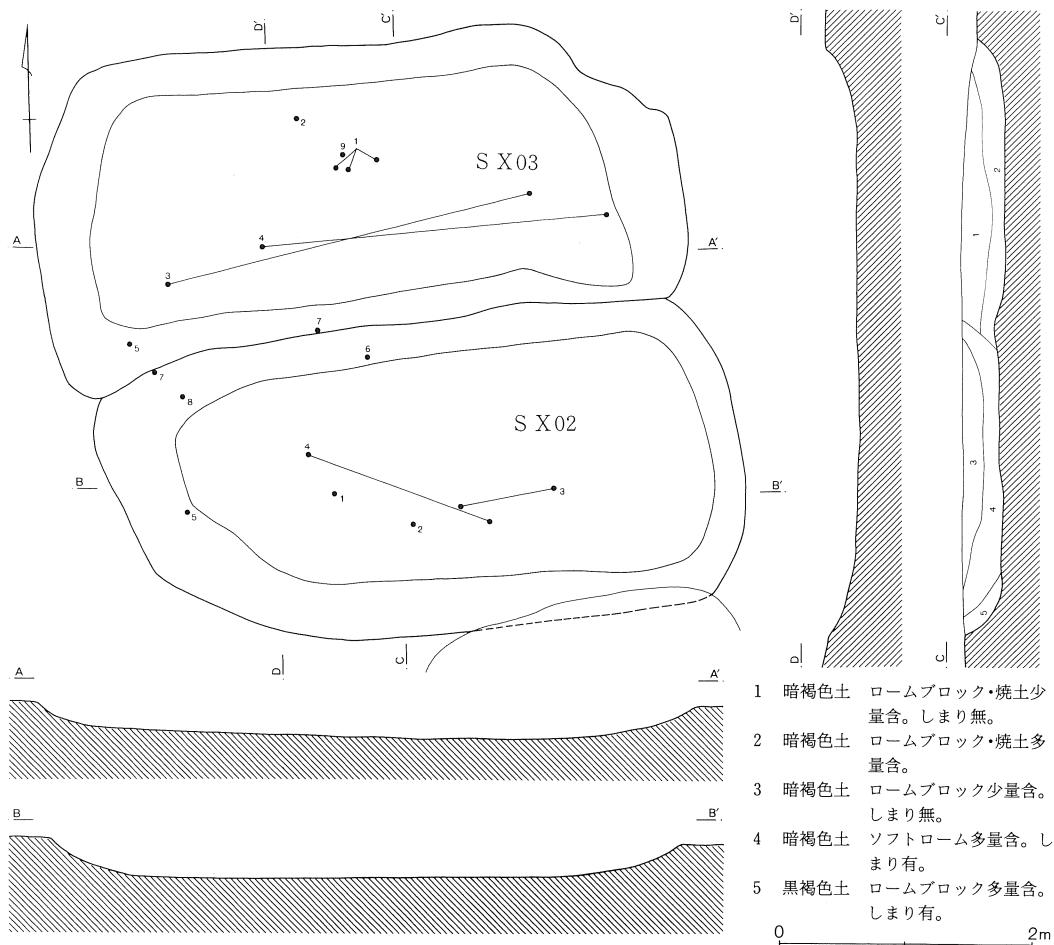
Q-5・6区に位置し、2基南北に平行して構築される。土層観察によれば第2号竪穴状遺構が新しいものと判断された。形態は不整楕円形を呈し、規模は第2号竪穴状遺構が長軸5.10m、短軸2.45m、深さ0.30m、第3号竪穴状遺構が長軸5.20m、短軸2.30m、深さ0.30mを測り、両遺構とも同様な規模を有する。

底面は全体が皿状に凹み、堅く踏み締められたような形跡は観察されなかった。また壁の立ち上がり角度も緩やかである。第1号竪穴状遺構と形態や規模が類似し、同様な機能を果たしたものと推定されるが、具体的な性格を明らかにすることはできなかった。

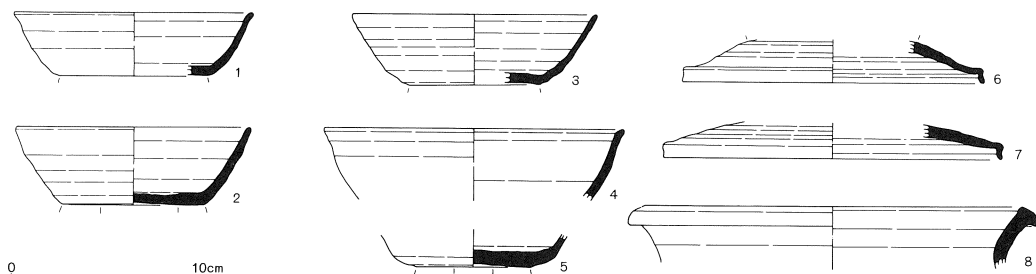
第2号竪穴状遺構出土遺物観察表(第205図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.6)	3.5	7.8	A C	B	灰	20%	№80。覆土。
2	坏	(12.4)	4.1	7.6	A B C	A	灰	50%	№54。覆土。
3	坏	(13.0)	3.7	(7.0)	A B C	A	灰白	25%	№79。覆土。
4	碗	15.8	3.8		A B C	A	灰	15%	№54, 86。覆土。
5	坏		1.8	6.0	A B C	A	灰	45%	№96。覆土。
6	蓋	(16.0)	2.2		A C	B	灰	10%	№83。覆土。
7	蓋	(17.8)	1.9		A C D	A	灰	10%	№119。覆土。
8	壺	(20.0)	3.4		A B C	B	灰白	5%	№112。覆土。

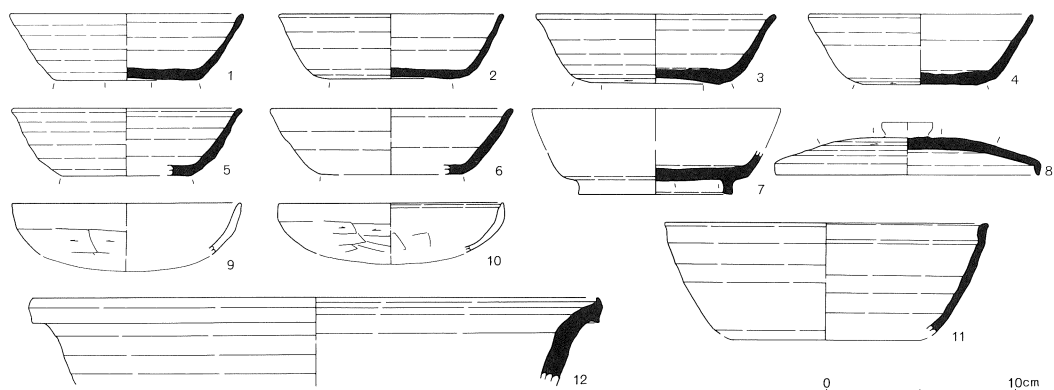
出土遺物は第2号竖穴状遺構から108点、第3号竖穴状遺構から188点検出された。両竖穴共に須惠器坏類が主体を占め、明らかな混入品を除くと図示した以外の破片を含めて全て底部調整が施され底部糸切り未調整のものは1点も含まれていない。稻荷前IX期の範疇に含まれるものと推定されるが、3号竖穴出土須惠器坏は、2号のそれに比して口径分布が小型に振れており若干新しい要素もある。これが有意差か否かは判然としないが遺構の切合関係とは矛盾する結果となってしまう。



第204図 第2・3号竖穴状遺構(L=31.50m)



第205図 第2号竖穴状遺構出土遺物



第206図 第3号竪穴状遺構出土遺物

第3号竪穴状遺構出土遺物観察表(第206図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.2)	3.5	7.6	AC	A	灰	25%	№8, 14, 15。覆土下層。
2	坏	(11.8)	3.4	(6.6)	ABC	A	灰	20%	№5。覆土上層。底部にヘラ記号あり。
3	坏	12.6	3.7	6.7	ABC	A	灰	85%	№80, 107。覆土。
4	坏	(11.9)	3.7	6.0	ABCD	A	灰	45%	№58, 106。覆土下層。
5	坏	(12.0)	3.55	(7.0)	AC	A	灰	15%	№83。覆土。
6	坏	(12.8)	3.5	(7.2)	ACD	B	灰白	20%	№134。覆土。
7	高台坏		2.2	8.0	ACD	B	灰	60%	№40。覆土。
8	蓋	(13.9)	2.1		ACD	A	灰	35%	覆土。
9	坏	(12.0)	2.8		AC	A	浅黄橙	5%	№12。覆土。
10	坏	(11.8)	2.7		B	A	褐灰	15%	覆土。
11	埴	(17.0)	5.9		ACD	A	灰	15%	№138。覆土。
12	甕	(30.0)	4.7		ABC	A	橙	10%	覆土。

7. 小鍛冶遺構(SX06)

第1号小鍛冶遺構(第207図)

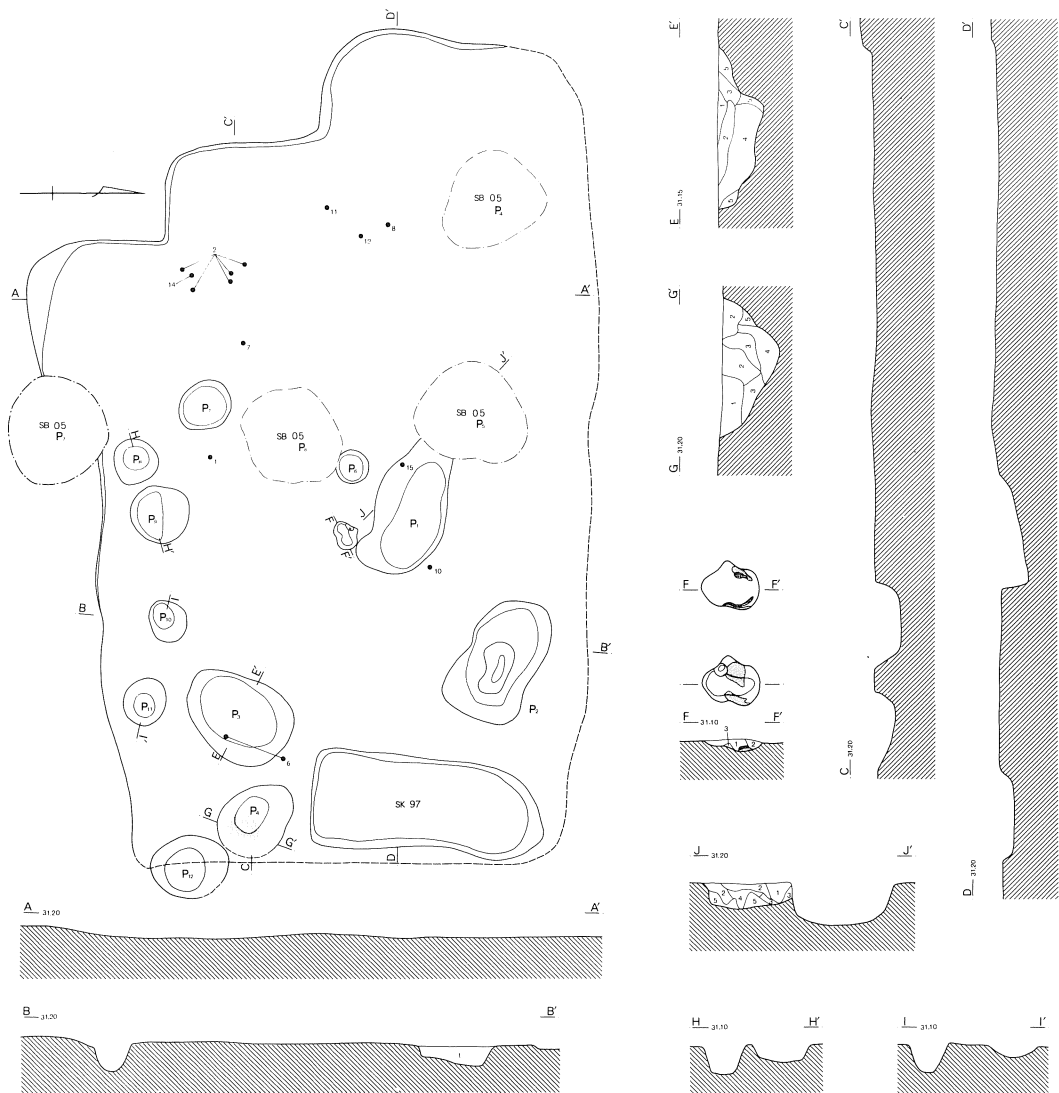
M・N-6・7区に位置する。A区で検出された唯一の小鍛冶遺構で、直上に走っていた農道除去中に鉄滓の出土が目立って多いためにローム上面に堆積する黒色土中で確認を試みた。凡そ東西9.00m、南北6.10m程の図示した範囲にまとまるが、北壁と東壁側の限界は不明確であった。

第5号掘立柱建物跡と重複し、掘立柱建物跡内部にまで鉄滓分布範囲が広がることから小鍛冶遺構の方が新しいものと判断した。また97号土壌は本遺構よりも新しい段階の所産である。

底面はローム面またはその直上の漸移層中に形成されたものと考えられ、明確には捉えられない。覆土は焼土粒子とローム粒子を多量に含む黒色土で構成され、鉄滓や小鉄片が混在するという状況であった。

内部にはピット状の掘り込みが12基検出された。P₁は不整楕円形を呈し、焼土と粘土、炭化物の混じった土層が不規則に堆積し性格は明らかではない。P₂は粘土溜状の遺構で白色粘土の堆積が多く認められた。P₃は第2層が黒色土とロームの混じった土で床面状の硬化面を形成していた。

調査時は炉の痕跡かとも想定したが性格は不明である。P₄・P₅は鍛冶炉と推定したもので、前者は上面に被熱した礫と薄い焼土が堆積していた。後者は上面に鉄滓、焼土と青灰色に還元した粘土ブロックを含み、皿状に窪んだ底面は被熱し焼土化していた。ピット周辺及び内部の鍛造剥片の採集は行なわなかったため鍛冶炉と証明することは困難であるが、P₅は鍛冶炉の一般的特性に合致する。他のピットについては伴うか否か明確にできなかった。



- | | |
|--|---|
| <p>P₁</p> <p>1 暗褐色土 多量の粘土塊と少量の焼土粒子を含む。</p> <p>2 黒褐色土 粘土・焼土・炭化物含む。</p> <p>3 褐色土 黄灰色粘土多量含む。</p> <p>4 褐色土 ローム粒子と粘土が混在する。</p> <p>5 黄褐色土 ローム質土。褐色土少量混在する。</p> <p>P₂</p> <p>1 暗褐色土 焼土粒子・灰白色粘土を多量に含む。</p> <p>P₃</p> <p>1 黒褐色土 焼土・炭化物を含む。</p> | <p>2 黒褐色土とロームの混土層。</p> <p>3 黒褐色土 ローム粒子少量含む。</p> <p>4 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量混入する。</p> <p>5 黄褐色土 ローム主に焼土少量混入する。</p> <p>P₄</p> <p>1 暗褐色土 焼土・炭化物・ローム少量混入する。</p> <p>2 暗褐色土 焼土・ローム多量混入する。</p> <p>3 暗褐色土 多量のロームと少量の焼土を含む。</p> <p>4 褐色土 ロームブロック混入する。</p> <p>5 黄褐色土 ローム主体。</p> |
|--|---|

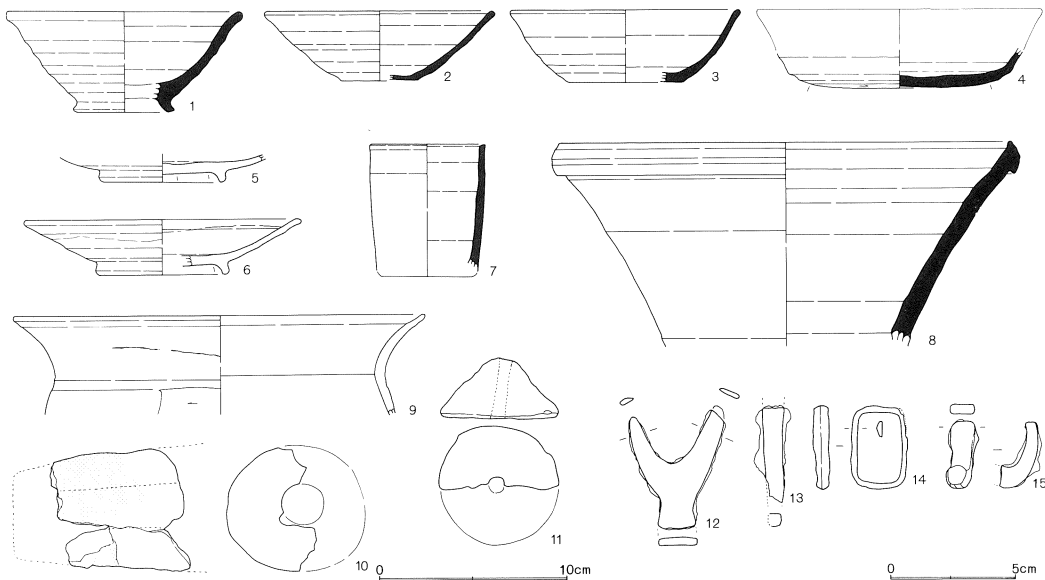
第207図 第1号小鍛冶遺構

出土遺物は埴型滓数点を含む鉄滓数10点と鉄製品、銅製品、鞆羽口、土製紡錘車、土器類231点がある。土器には土師器坏、甕、台付甕、須恵器坏、埴、皿、蓋、甕、壺類、枅形土器、灰釉埴皿類、緑釉埴がある。土器には8世紀代の混入品と推定されるものがかかり含まれる。図示した4・7・9は混入であろう。5・6は灰釉陶器である。1・2の須恵器を基準に稻荷前 XIV 期に比定されよう。

第208図10は鞆羽口で残長7.0cm、推定径7.4cm、孔径2.3cmの小型品である。11は土製紡錘車。径6.3cm、高さ3.2cm、孔径0.7cm。表面は指撫でで雑に整形される。12は雁股鋸。残長4.6cm。13は鉄釘か。断面方形を呈し、残長3.8cm。14は青銅製環状製品。全長3.3cm、幅2.2cm、厚さ0.65cm。接合面は観察されず、铸造によるものと推定される。外側面中央に弱い稜が走り断面は三角形を呈する。刀装具責金具に似るが形状がやや異なり性格は不明。15は残長2.7cmで上端は板状、下端は棒状に整形される。未製品か。

第1号小鍛冶遺構出土遺物観察表(第208図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	高台坏	(12.2)	5.3	(4.8)	ABC	C	灰	15%	№44。覆土。
2	坏	(12.0)	4.7	4.2	AB	A	橙	60%	№18, 19, 20, 25。覆土。
3	坏	(12.0)	4.8	(6.0)	ACD	B	灰	20%	№56。覆土。
4	坏		1.9	9.5	ABCD	A	灰	20%	P ₂ 。覆土。
5	灰釉皿		1.5	6.2	B	A	灰白	60%	№37。覆土。
6	灰釉皿	(14.4)	2.95	6.5	B	A	灰白	35%	№74。覆土。灰釉漬け掛け。
7	枅形	(6.0)	6.7		BC	A	灰	20%	№47。覆土。
8	甕	(24.0)	10.8		ABC	A	灰	20%	№8。覆土。
9	甕	(21.8)	5.2		ABE	B	にぶい橙	15%	P ₁ 。覆土。



第208図 第1号小鍛冶遺構出土遺物

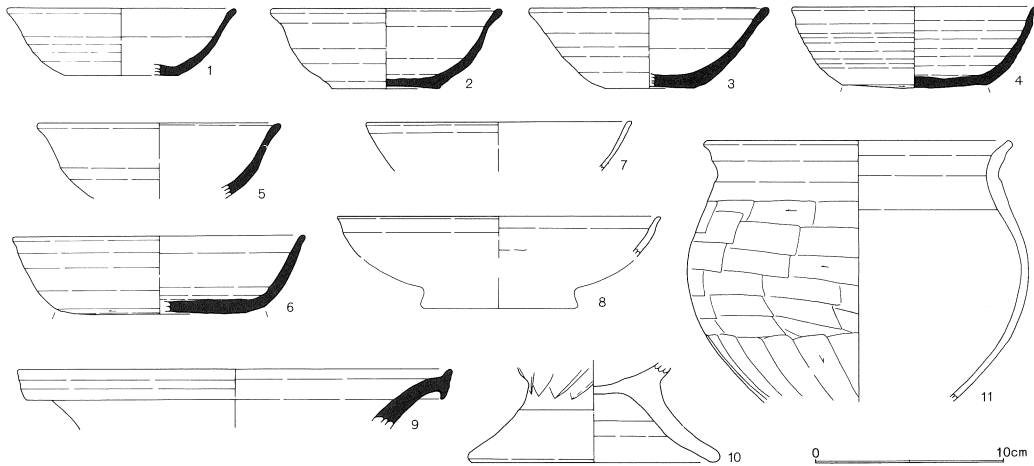
8. その他

(1) ピット

第 I 群では住居や掘立柱建物跡以外のピットが総数266基検出されている。この中には建物を構成するものも相当数含まれるものと推定されるが、残念ながら復元するに至らなかったため、結果的に単独ピットとして処理したものである。図示し得る遺物を出土したピットに関しては第192図に位置を示したが、それ以外については個別図面の掲載は省略した。

第 I 群ピット出土遺物観察表(第209図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.0)	3.55	(6.0)	A B C	B	灰	25%	N-7Grid, P ₁₈ 。覆土。
2	坏	(12.0)	4.25	(5.8)	A B	B	灰	20%	Q-6Grid, P ₁ 覆土。
3	坏	(12.6)	4.25	4.7	A C E	D	暗緑灰	25%	O-8-a, P ₅₅ 覆土。
4	碗	(12.8)	4.3	(7.6)	A B	D	灰	40%	O-7Grid, P ₅ 覆土。
5	坏	(12.6)	4.0		B C E	C	黒	10%	P ₅₄ (N-8-n Grid)覆土。
6	坏	(15.4)	4.1	(11.2)	A B C	A	灰黄	25%	P ₁₃₈ 覆土。
7	緑釉碗	(14.0)	2.6		J	A	灰	5%	O-7Grid, P ₁ 覆土。硬質。
8	灰釉碗	(17.0)	2.1		A B	A	灰白	5%	Q-7Grid, P ₃ 覆土。東濃産か。
9	甕	(23.0)	3.1		A B C	A	灰	15%	N-7Grid, P ₃ 覆土。
10	台付甕		5.4	(13.0)	B E G	A	橙	30%	O-7Grid, P ₉ No.1。覆土。
11	小型甕	15.8	13.8		A B E	A	にぶい褐	50%	O-7Grid, P ₉ No.2。覆土。



第209図 第 I 群ピット出土遺物

(2) グリッド

明確な遺構に伴わず単独で出土したもの、或いは帰属遺構が不明なものについてはグリッド出土遺物として扱った。点数はかなりあるがそのうち21点を図化した。

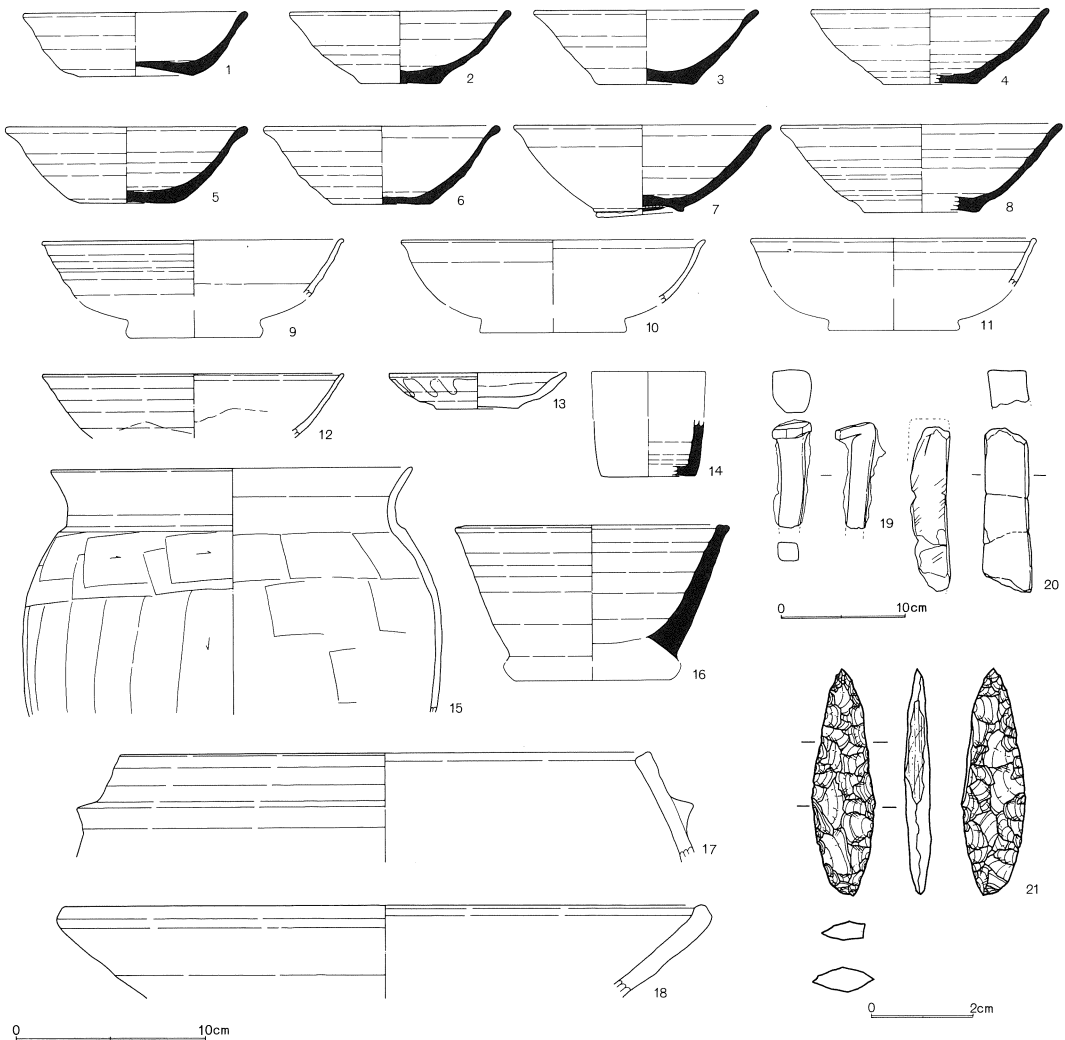
第210図19は方頭角釘である。残長4.2cm、頭部は一辺1.2cmの方形を呈する。R-9区出土。

20は凝灰岩製と推定される砥石である。上下両端を欠失する。残長8.6cm、最大幅2.6cmを測り、

欠損部を除く各面は平滑である。側面には刃先で付けられたと推定される条線が多数残る。S-8区出土。

21は石英製尖頭器。長さ4.4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm。一度折損したものを再加工した再生品。本来は現存器体より僅かに大きなものであった可能性が高い。欠損部は表面右側縁上半部に認められるが、石材の節理に沿ったものである。

表裏剝離面との切り合いを観察すると、裏面側の加工は欠損以前のものであり、表面側の加工は欠損後節理面を打面としたものであることが解る。もともとは断面がほぼレンズ状の優美な器体であったものが節理の影響によりエッジの一部が失われ、それを回復すべく再加工を施したが、平坦面は除去しきれずに残されたものと思われる。欠損は完成間近の製作途上、あるいは完成後に生じたものであろうが、その時点で廃棄されることなく再生されている。N-7区出土。(川口 潤)



第210図 第I群グリッド出土遺物

第 I 群グリッド出土遺物観察表(第210図)

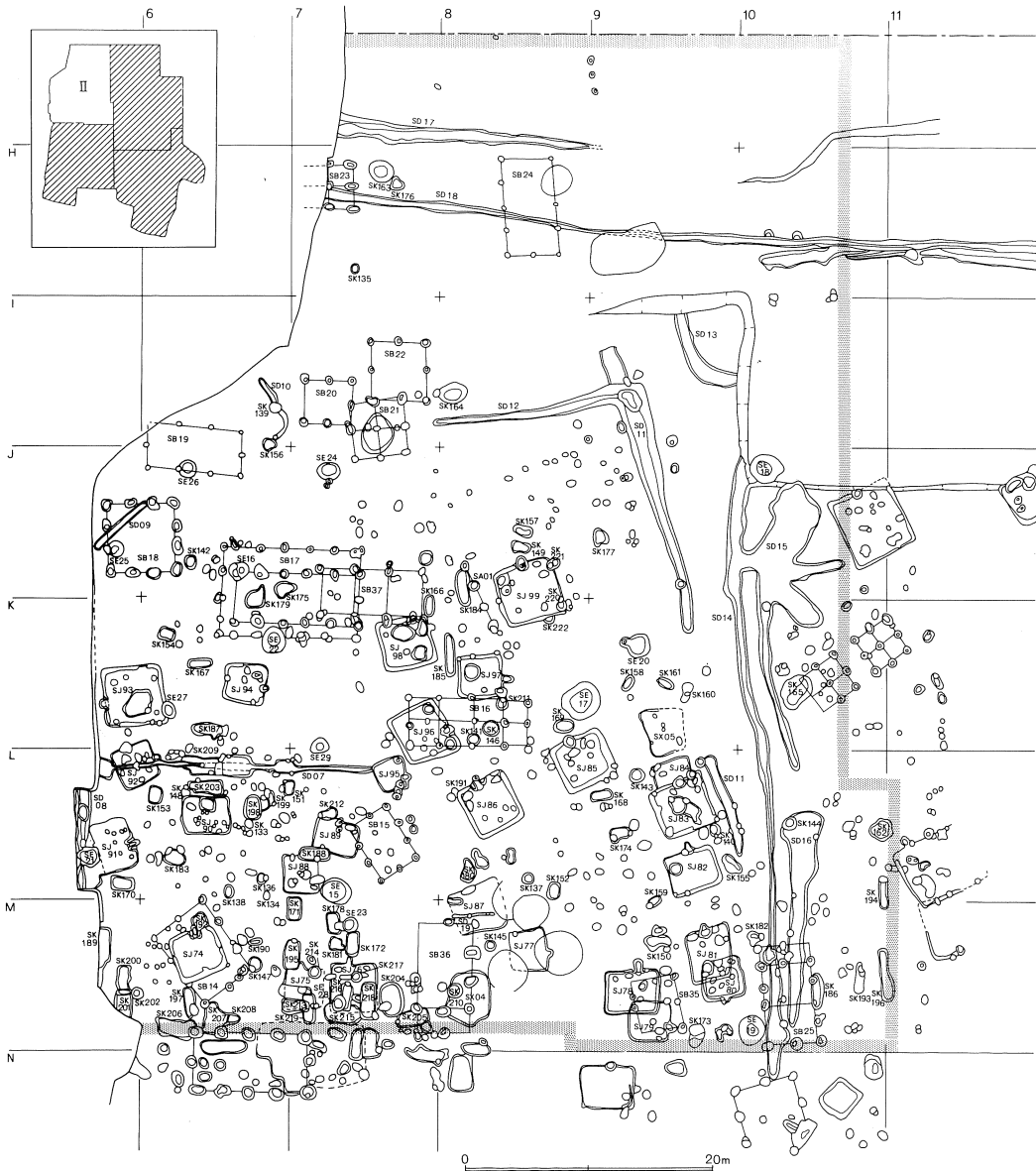
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.7)	3.4	(6.1)	ABC	A	灰	45%	O-8Grid。
2	坏	(11.4)	3.8	(4.3)	BE	B	灰白	35%	P-7Grid。
3	坏	(11.8)	3.9	(5.0)	ABDE	C	暗灰黄	50%	Q-5Grid。
4	坏	(12.5)	4.0	(5.0)	ABE	B	褐灰	20%	O-9Grid。
5	坏	(12.6)	4.0	5.0	ACE	B	橙	30%	Q-10Grid。
6	坏	(12.2)	4.1	(5.2)	ACD	B	にふい褐	20%	O-7-d Grid。
7	坏	(13.4)	4.9	4.7	ACD	D	灰黄褐	35%	P-8Grid。
8	碗	(14.8)	4.6	(6.0)	ABCD	A	灰	40%	O-8Grid。
9	灰釉碗	(15.8)	3.0		B	A	灰白	10%	P-5Grid。東濃産。灰釉刷毛掛け。
10	緑釉碗	(16.0)	3.4		B	A	灰	5%	O-7Grid。硬質。猿投産。
11	緑釉碗	(15.0)	2.55		G	B	灰白	15%	O-5-p Grid。軟質。猿投産か。
12	灰釉碗	(15.8)	3.4		B	A	灰白	10%	O-5-p Grid。
13	皿	9.4	1.9	4.4	A	A	灰	65%	Q-8-n Grid。瀬戸・美濃系灰釉小皿。
14	枘形		3.0	(5.0)	ABC	A	灰	25%	N-5-p Grid。
15	甕	(19.0)	3.0		ABDE	A	橙	40%	P-5Grid。
16	鉢	(13.4)	7.1		ABCD	A	灰	20%	N-5-h Grid。
17	羽釜	(28.0)	5.7		ACDE	A	橙	10%	Q-8Grid。
18	鉢	(34.0)	4.8		AB	A	淡赤橙	15%	Q-7Grid。常滑系か。



▲撮影の準備

V 第II群の遺構と遺物

第II群は調査区の北西部に位置し、J区以南はほぼ平坦面が続き、第I群と同様遺構が密集する。対して北側の第17・18号溝跡付近は東西に延びる谷地が形成され遺構分布は薄い。この谷地を挟んだ北側は稲荷前B区となる。検出された遺構は、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡15棟、井戸跡15基、土壌90基、溝跡13条などがある。住居跡の時期は7世紀後半から8世紀初頭頃と9世紀後半代に下がる住居が多い。掘立柱建物跡は7世紀代から中世に下がる時期のものまで存在する。



第211図 第II群遺構配置図

1. 住居跡

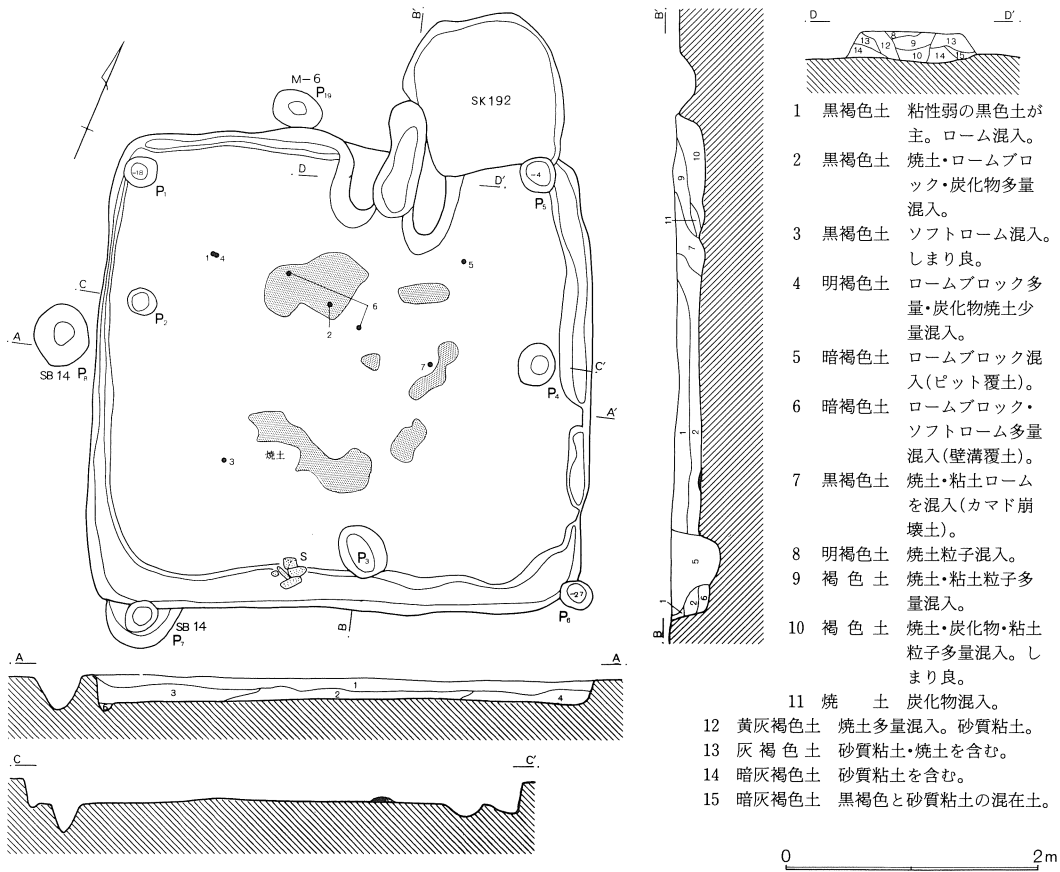
第74号住居跡(第212図)

M-6区に位置する。第14号掘立柱建物跡が周囲を取り囲むように構築されているが、新旧関係は捉えられなかった。形態はほぼ方形を呈し、規模は、長軸3.98m、短軸3.74m、深さ0.25mを測る。主軸方位はN-22°-Wを示す。

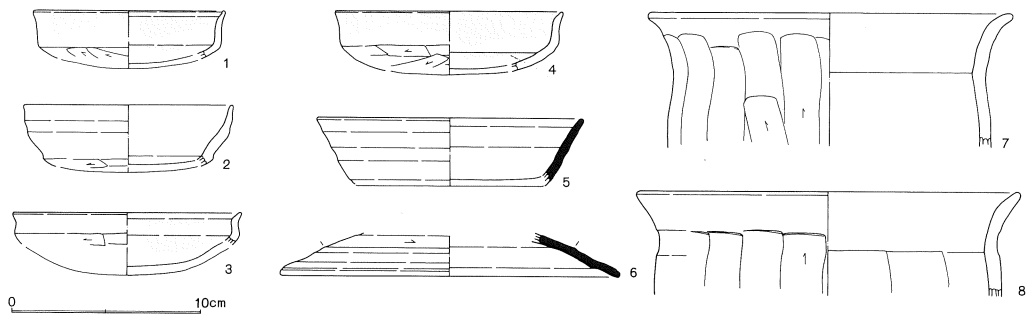
床面は全体に平坦で堅い。覆土にはロームブロックの混入が多く、自然堆積とは断定できない。また床面上には炭化物を含む黒色土が薄く堆積していたが、特に火災を受けた様子も認められない。カマドは北壁に設置されるが、第192号土壌により一部破壊されていた。燃焼部は一部壁外に延び、掘り込みは浅い。袖の遺存状況は良好で、砂質粘土を主体に構築される。壁溝はカマド周囲を除いてほぼ全周する。ピットは住居内に5本、壁に掛かって3本検出されたが、明確に伴うものはない。

出土遺物は63点と比較的少ない。全体に浮いた位置から出土したものが多く、確実に住居に伴うものは少ない。また南壁直下の床面から自然石が4個出土したが、いわゆる編み物石とは異なる。

器種的には土師器甕を主に坏、小型甕、台付甕、甑、壺と須恵器が少量ある。須恵器は混入の可能性が高いと推定される。土師器の様相から稻荷前Ⅲ期に位置付けておきたい。



第212図 第74号住居跡(L=31.10m)



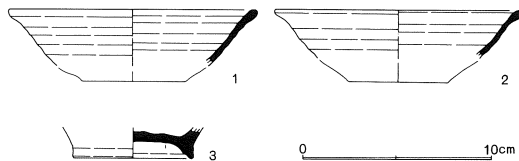
第213図 第74号住居跡出土遺物

第74号住居跡出土遺物観察表(第213図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	2.5		A B	A	橙	10%	№5。床面。
2	坏	(11.0)	3.2		A B	A	にふい橙	10%	№70。覆土下層。
3	坏	12.0	1.7		B C	A	橙	10%	№8。床面。
4	坏	12.0	3.2		A D	A	橙	25%	№5。床面。
5	坏	(14.0)	3.6		A D	B	にふい黄橙	10%	№55。覆土。
6	蓋	(18.0)	3.3		A C D	C	灰白	20%	№68, 74。覆土。
7	甕	(19.0)	7.1		A C D	A	明赤褐	20%	№41。覆土。
8	甕	(20.0)	5.5		A B C	B	明褐	15%	カマド袖内。

第75号住居跡(第215図)

M-7区に位置する。周辺に位置する中世の土壌群によって激しく攪乱され、遺存状態は極めて悪い。カマド付近が辛うじて残存するため、住居跡と確認できたが、正確な規模や形態は不明である。



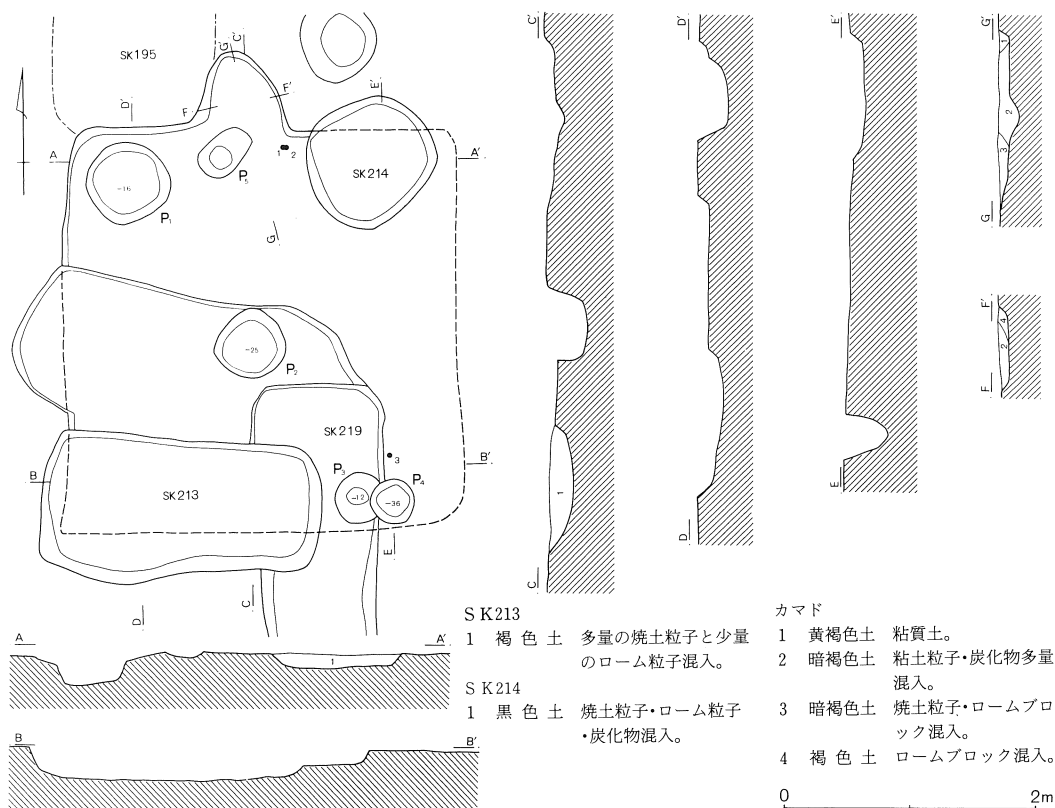
第214図 第75号住居跡出土遺物

遺構確認の段階で部分的に床面が露出しており、深さも0.05mに満たない。主軸方位はほぼ座標北を指すものと推定される。床面は凹凸があり一定したものではなく、覆土の状況も不明である。カマドは北壁に設置される。燃焼部は壁外に突出し、床面下の掘り込みは浅い。袖は存在しない。ピットは住居と推定される範囲内に5本検出された。P₁は伴う可能性が高いと判断したが、他のピットの帰属は不明である。壁溝等の施設は検出されなかった。

出土遺物は細片が15点あり、土師器甕、台付甕、須恵器坏、埴、甕から構成される。須恵器坏は口縁部が肥厚し外反度の強いものである(第214図)。稻荷前XIV期に比定しておきたい。

第75号住居跡出土遺物観察表(第214図)

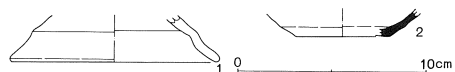
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.0)	3.0		A B	B	灰	10%	№6。床面。
2	坏	(13.0)	2.6		A B C	B	灰白	10%	№6。床面。
3	高台坏		1.6	6.2	A B E	B	灰黄	90%	№5。床面。



第215図 第75号住居跡(L=31.00m)

第76号住居跡(第217図)

M-7区に位置し、第75号住居跡の東側に隣接する。周囲に集中する土壌群に激しく攪乱され、遺存状態は極めて悪い。第28号井戸跡とも重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。正確な規模や形態は不明とせざるを得ないが形態は方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸3.76m、短軸3.66m、深さ0.05m前後を測る。主軸方位はほぼ座標北を示す。

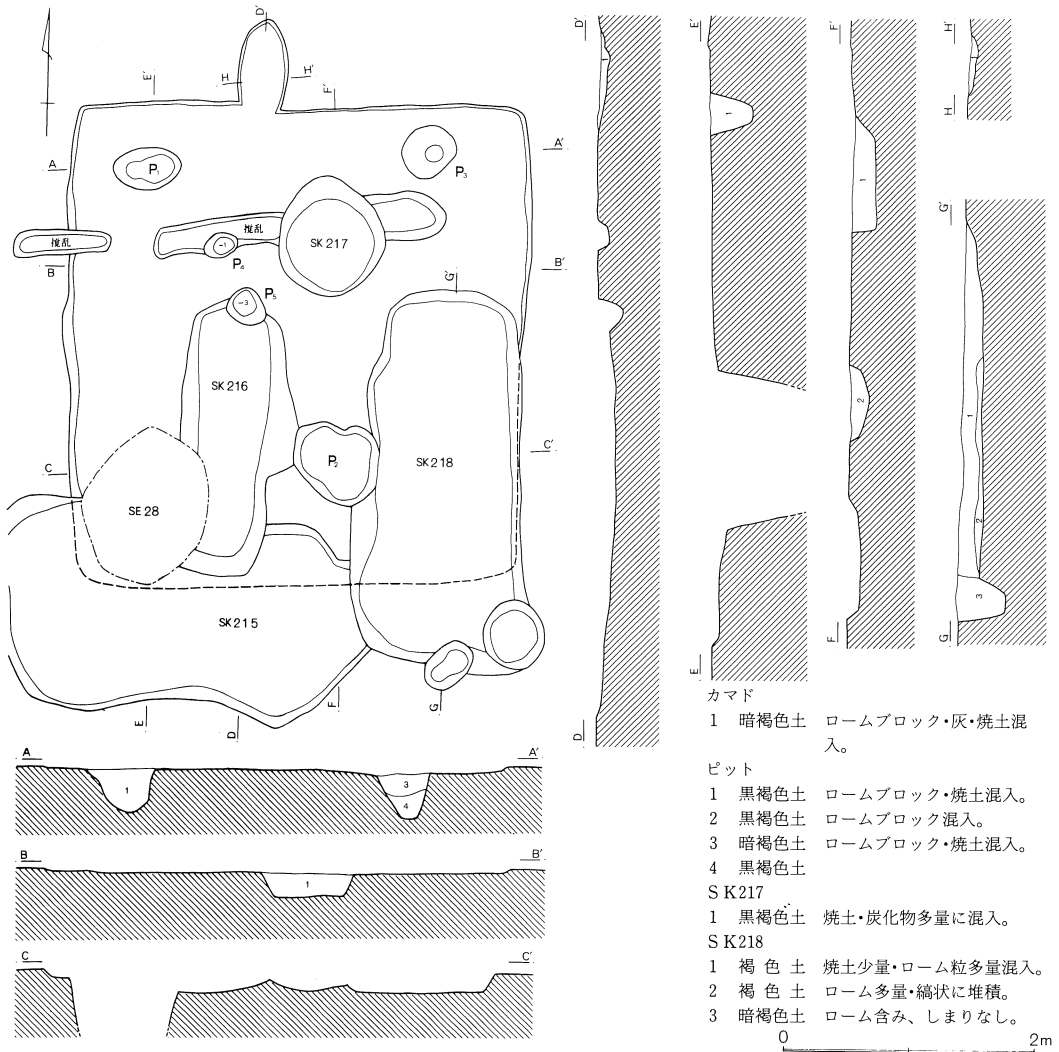


第216図 第76号住居跡出土遺物

床面は概ね平坦であるが、攪乱が多く詳細は不明である。覆土の状況も明らかにできなかった。カマドは北壁に設置される。燃焼部は壁外に延びるが、掘り込みは浅い。

ピットは5本検出され、P₁・P₃は遺構に伴う柱穴であろう。P₂は柱穴とはならないがやはり伴うものと推定される。P₄・P₅は遺構には帰属しないものと考えられる。壁溝等の施設は検出されなかった。

出土遺物は9点を数えるのみである。正確な時期は明らかにできないが、須恵器坏の底部は小型化しており9世紀末葉頃の年代と考えられる。住居の位置や主軸から見て第75号住居跡と近接した時期に比定されよう。



第217図 第76号住居跡(L=31.00m)

第76号住居跡出土遺物観察表(第216図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	台付甕		2.4	(10.8)	A B C	A	橙	10%	P ₂ 覆土。
2	坏		1.5	(5.0)	A C	A	灰	10%	P ₂ 覆土。

第77号住居跡(第219図)

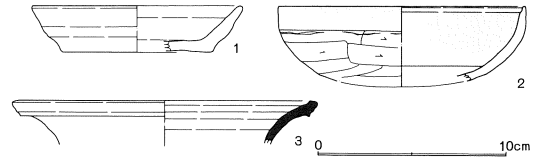
M-7区に位置する。北西側に第87号住居跡が近接して所在する。南西コーナーは倒木痕に破壊され残存しないが、東側の倒木痕は住居構築以前のものである。平面形態は不整形を呈する。規模は長軸3.30m、短軸3.00m、深さ0.05m前後を測る。主軸方位は北壁を基準にとるとN-83°-Eを示す。

床面はほぼ平坦だが、礫が浮き出た堅い部分や軟弱な箇所がみられる。壁高が浅いために覆土の

状況は不明である。

カマドは東壁に設置される。燃烧部は壁外に延び、燃烧部底面には薄い灰層が形成されていた。袖は存在しない。ピットは2本検出されたが、柱穴とは考えられない。壁溝は検出されなかった。

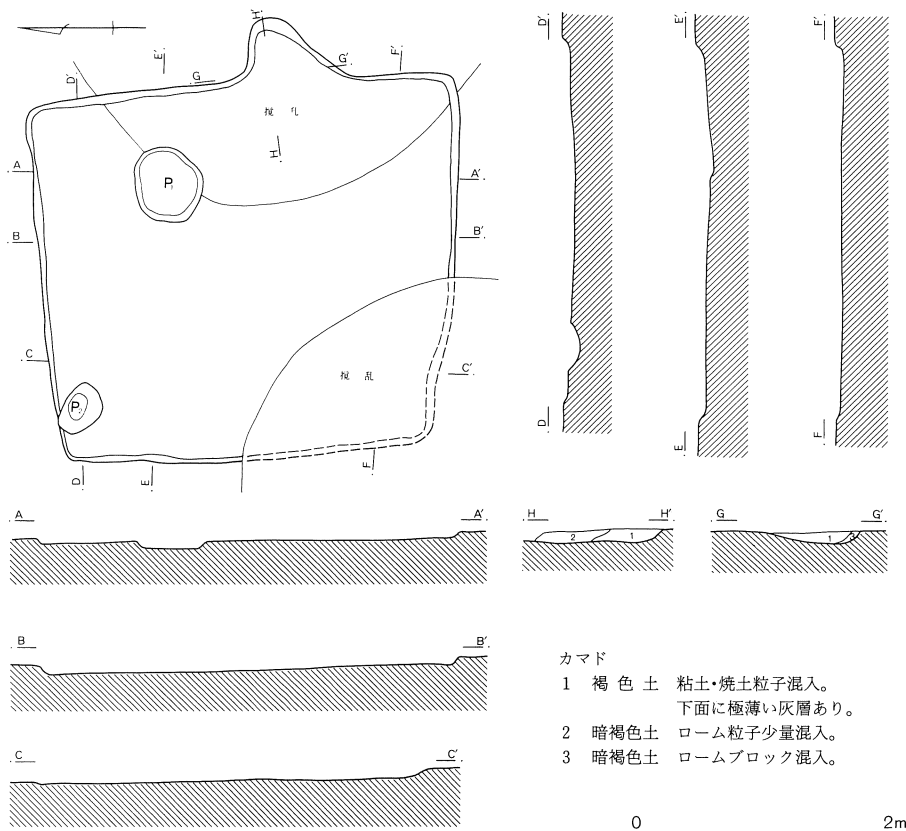
出土遺物は34点と少ない。土師器坏、甕、須恵器坏、甕、土師質土器(皿)の各器種が検出されている。土師質土器(第218図1)は中世段階のもので明らかに混入であるが、図示したものの他に9世紀代に降る土器片もみられ、正確な年代は決し難い。土師器甕は古墳時代的な器壁の厚いものが主体であり、第218図2の坏ともさほど年代的な齟齬はなく凡そ7世紀末葉から8世紀初頭頃(稻荷前V期)とするのが妥当であろう。



第218図 第77号住居跡出土遺物

第77号住居跡出土遺物観察表(第218図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	皿	(11.0)	2.5	(8.0)	ACDE	A	淡黄	10%	カマド。カワラケ。底部糸切り。
2	坏	(13.0)	3.9		AD	A	橙	20%	P ₁ 覆土。
3	壺	(15.4)	2.6		AC	A	灰	20%	P ₁ 覆土。



第219図 第77号住居跡(L=31.00m)

第78号住居跡(第222図)

M-9区に位置し、第79号住居跡及び第35号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は前者よりも旧いが、後者との関係は明らかにできなかった。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸4.38m、短軸3.50m、深さ0.10m前後を測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。

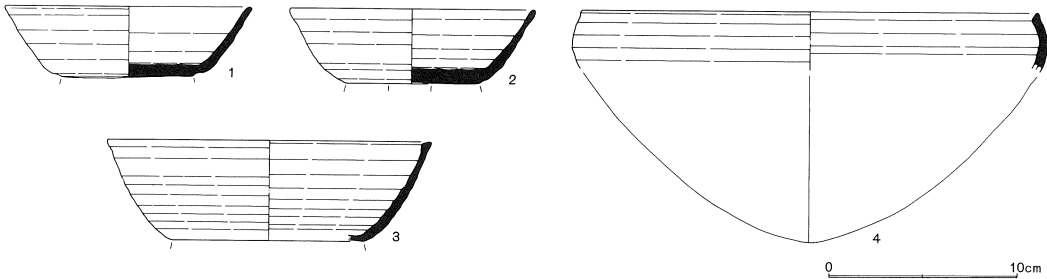
床面はほぼ平坦であるが、東壁と西壁の壁際は軟弱であった。覆土堆積状況は、層厚が薄いために明確ではない。

カマドは北壁に設けられる。燃烧部は鍋底状に掘り込まれ、壁外に延びる。袖には僅かに粘土の堆積がみられたが、はっきりしたものではない。壁溝はカマドを除き全周する。ピットは住居内に8本検出されたが、伴う柱穴は不明である。第35号掘立柱建物跡柱穴に相当するものが4本あるが、P₇~P₉は掘立柱建物跡の柱穴配置上、ややずれるため伴うか否か微妙である。もし伴うとするならば掘立柱建物跡の方が古い可能性が高くなる。P₃は床下土壌であろう。

出土遺物は28点と少ない。器種的には土師器坏、甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、鉢があるが、土師器坏は混入と考えられる。図示した遺物(第220図1~4)はカマド内から出土したもので遺構に伴うものと推定される。稻荷前VIII期新段階に比定されよう。

第78号住居跡出土遺物観察表(第220図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.0	3.8	7.0	A B C	A	にぶい橙	100%	Na1。カマド内。
2	坏	13.0	4.0	7.0	A B C	A	灰	70%	Na2。カマド内。
3	埴	(17.2)	5.3	(10.2)	A B C	A	灰	15%	カマド内。
4	鉢	(24.0)	3.1		A C	A	灰	10%	カマド内。

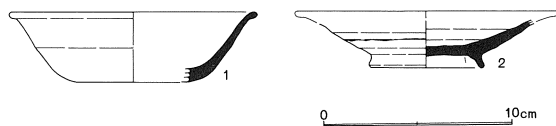


第220図 第78号住居跡出土遺物

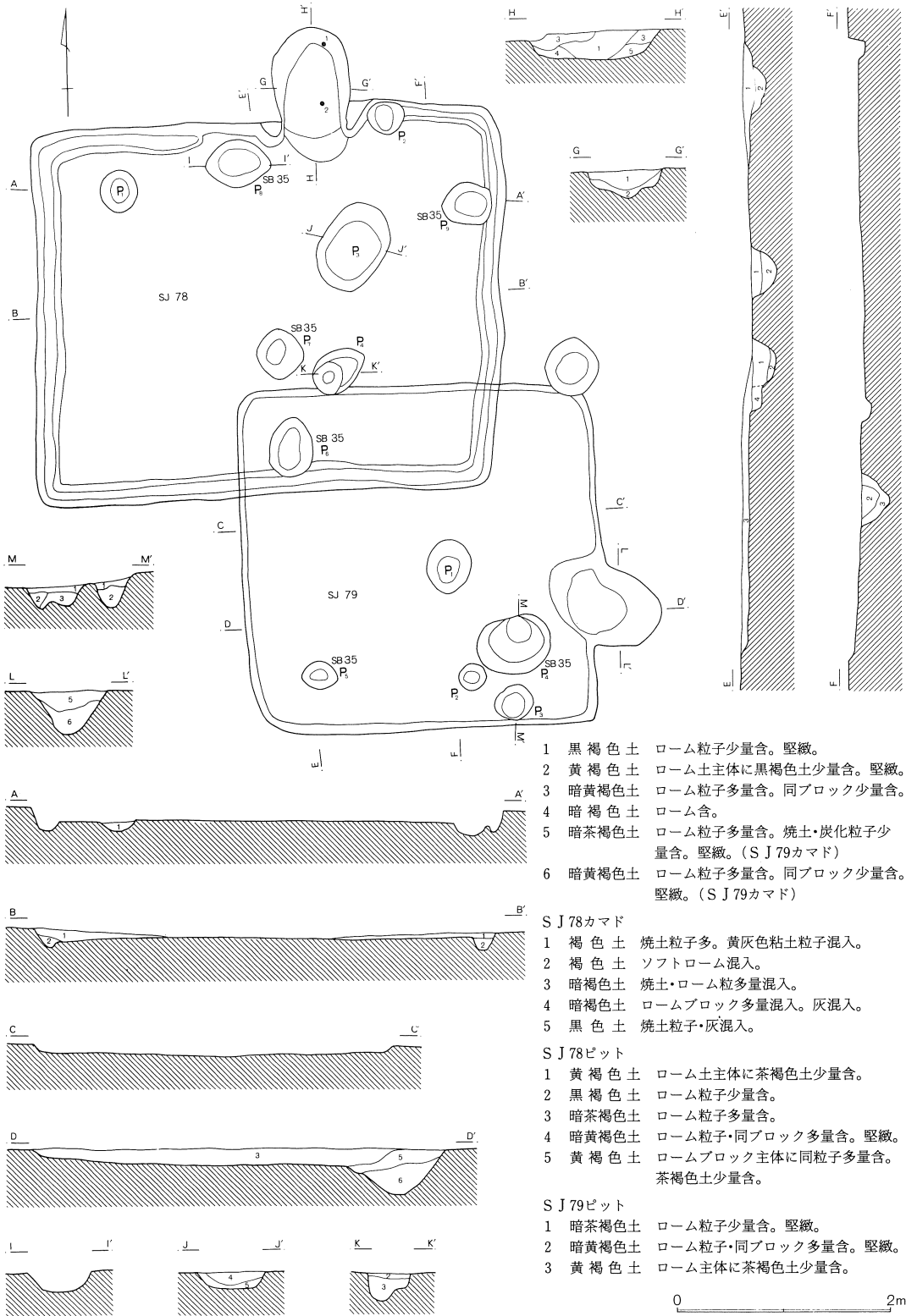
第79号住居跡(第222図)

M-9区に位置し、第78号住居跡よりも新しく、第35号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。形態は方形を呈し、規模は長軸3.38m、短軸3.20m、深さ0.05~0.10mを測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、中央部が若干深い。第78号住居跡上部には貼床されたものと思われるが、高低差が余りなく明確に捉えられなかった。覆土は暗黄褐色土単層



第221図 第79号住居跡出土遺物



第222図 第78・79号住居跡(L=30.90m)

で構成され、土層変化は観察されなかった。カマドは東壁に設置され、燃烧部の中心は壁外に位置する。掘り込みは深く、床面下0.20mを測る。袖は存在しない。ピットは住居内に5本検出されているが、掘立柱建物跡の柱穴が混在する。覆土の状態から確実に遺構に伴うものは認められない。壁溝等の施設は検出されなかった。

出土遺物は33点検出された。器種としては土師器坏、甕、須恵器坏、皿、甕、甗と中世の内耳鍋片がある。土師器坏と内耳鍋は明らかな混入である。第221図1の坏は焼きが甘く、土師器的な焼成である。2の底部は回転ヘラ削り調整がなされる。須恵器の様相から稲荷前 XIII 期に比定される。

第79号住居跡出土遺物観察表(第221図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.0)	3.7	(5.8)	BC	C	浅黄橙	10%	カマド内覆土。
2	高台皿		2.5	(5.9)	AC	B	灰白	55%	覆土。底部回転ヘラケズリ。

第80号住居跡(第223図)

M-9・10区に位置し、第81号住居跡と重複する。形態は方形を呈し、規模は一辺3.30m、深さ0.05~0.15mを測る。主軸方位はN-9°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、北半は削平され第81号住居跡構築時に削平されている。覆土は暗褐色土の単層で構成され、埋没過程の詳細は明らかでない。

カマドは北壁に位置するが、上面を第81号住居跡に削平され、燃烧部の掘り込み部分しか残存しない。土壇は1基カマド西側のコーナー部に検出された。やはり削平を受け詳細は不明であるが、本来貯蔵穴であった可能性がある。ピットは9本検出されているが、P₁~P₃は柱穴となる可能性があるが、他のピットは遺構に伴わないものと推定される。壁溝は削平を受けた北半を除くと全周する。

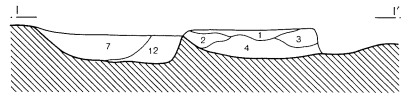
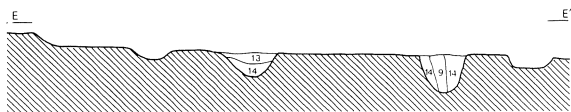
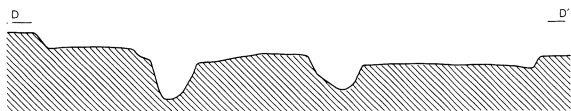
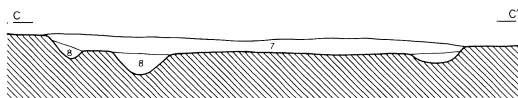
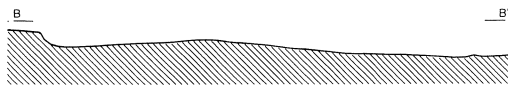
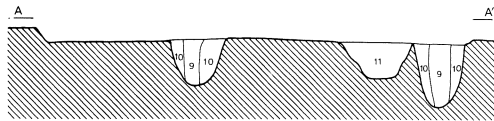
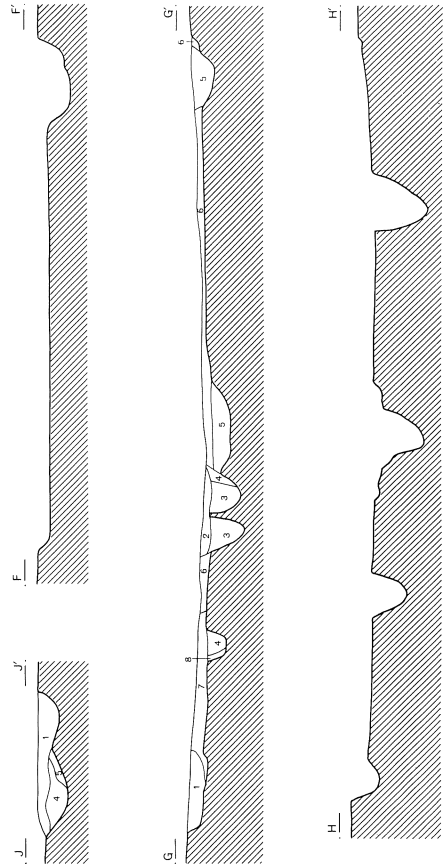
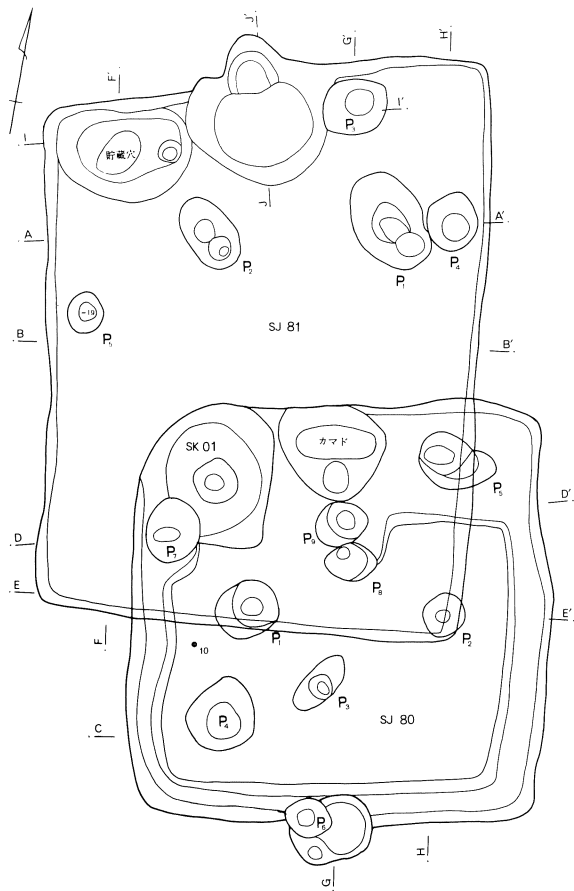
出土遺物は第81号住居跡のものと混在してしまっていて分離できない。第224図10の金環は本住居覆土から検出された。銅地に鍍金されており、側面の金は比較的良好に遺存している。

第81号住居跡(第223図)

M-9区に位置し、第80号住居跡の北側に重複する。新旧関係は本住居跡が新しい。形態は歪んだ長方形を呈し、規模は長軸4.50m、短軸3.45m、深さ0.10m前後を測る。主軸方位は西壁を基にするとN-8°-Wを示す。形態や主軸方位とも第80号住居跡と近似するため、第80号住居跡から本住居へ建て替えられたものと推定される。

床面はほぼ平坦で全体的に堅い。但し、西壁部には壁溝状に掘方が巡り、床面は軟弱であった。覆土は黒褐色土で土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁に設けられるが、袖は流失したか、破壊されたのかは不明だが残存していなかった。燃烧部は二段に掘り込まれ、覆土には焼土粒子が多量に含まれていた。貯蔵穴はカマド西側のコーナー部に設けられていた。ピットは5本検出された。P₂・P₄には柱痕が明瞭に残り、覆土の状況も近似する。住居の柱穴と考えても良からう。



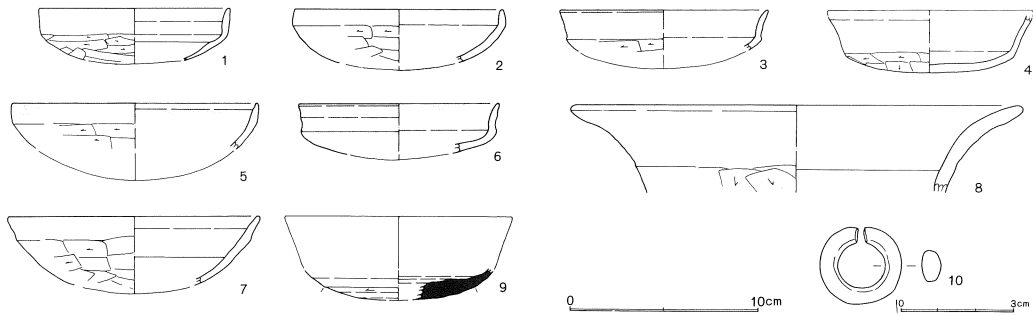
- 1 黒褐色土 ロームブロック多量混入。
- 2 暗黒褐色土 焼土粒少量混入。
- 3 黒褐色土 ローム粒・焼土粒多量混入。
- 4 暗褐色土 ローム粒多量混入。
- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒混入。
- 6 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒少量混入。
- 7 暗黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 8 黒褐色土 ロームブロック混入。
- 9 暗褐色土 ローム粒少量混入。
- 10 暗黒褐色土 ロームブロック少量混入。
- 11 黒褐色土 焼土粒多量混入。
- 12 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒少量混入。
- 13 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 14 暗黒色土 ロームブロック多量混入。

カマド

- 1 黒褐色土 焼土粒多量混入。
- 2 暗黒褐色土 焼土粒・炭化物多量混入。
- 3 暗灰褐色土 焼土ブロック・炭化物多量混入。
- 4 暗茶褐色土 焼土粒・ローム粒多量混入。
- 5 褐色土 ロームブロック主体。

0 2m

第223図 第80・81号住居跡(L=30.80m)



第224図 第80・81号住居跡出土遺物

出土遺物は第80号住居跡と併せて124点検出された。ほとんどは土師器の坏と甕の破片で占められ、須恵器は甕の破片を主に11点出土したに過ぎない。出土遺物からみても、両住居跡共に時期差はほとんどないものと考えられる。稲荷前IV～V期前半段階に比定される。

第80・81号住居跡出土遺物観察表(第224図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	2.75		A C	A	におい橙	25%	SJ80覆土。
2	坏	(11.0)	2.8		A D E	B	におい橙	5%	覆土。北武蔵系。
3	坏	(11.0)	2.2		B C	A	橙	10%	SJ81カマド内。
4	坏		2.9		A B C E	A	におい黄橙	35%	覆土。
5	坏	(13.0)	2.4		B C	A	橙	10%	SJ81カマド内。
6	坏	(10.6)	2.6		B C	A	浅黄橙	10%	SJ81覆土。
7	坏	(13.2)	3.6		A	A	におい橙	15%	覆土。
8	甕	(23.4)	4.6		A C E	B	におい橙	20%	覆土。
9	坏		1.6		A B C	A	橙	20%	SJ81カマド内。
10	金環	直径2.2cm。厚さ0.8cm。							No.1.SJ80覆土。

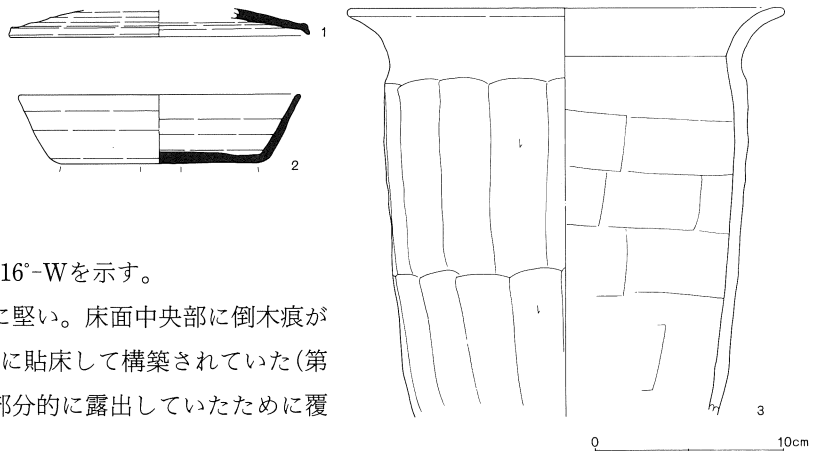
第82号住居跡(第226図)

L-9区に単独で位置する。形態は整った長方形を呈し、規模は長軸4.10m、短軸3.30m、深さは0.05m

を測る。主軸方位はN-16°-Wを示す。

床面は平坦で全体的に堅い。床面中央部に倒木痕が位置するが、住居は上部に貼床して構築されていた(第1層)。確認面で床面が部分的に露出していたために覆土の詳細は不明である。

カマドは北壁中央に設置される。左袖部にピットの



第225図 第82号住居跡出土遺物

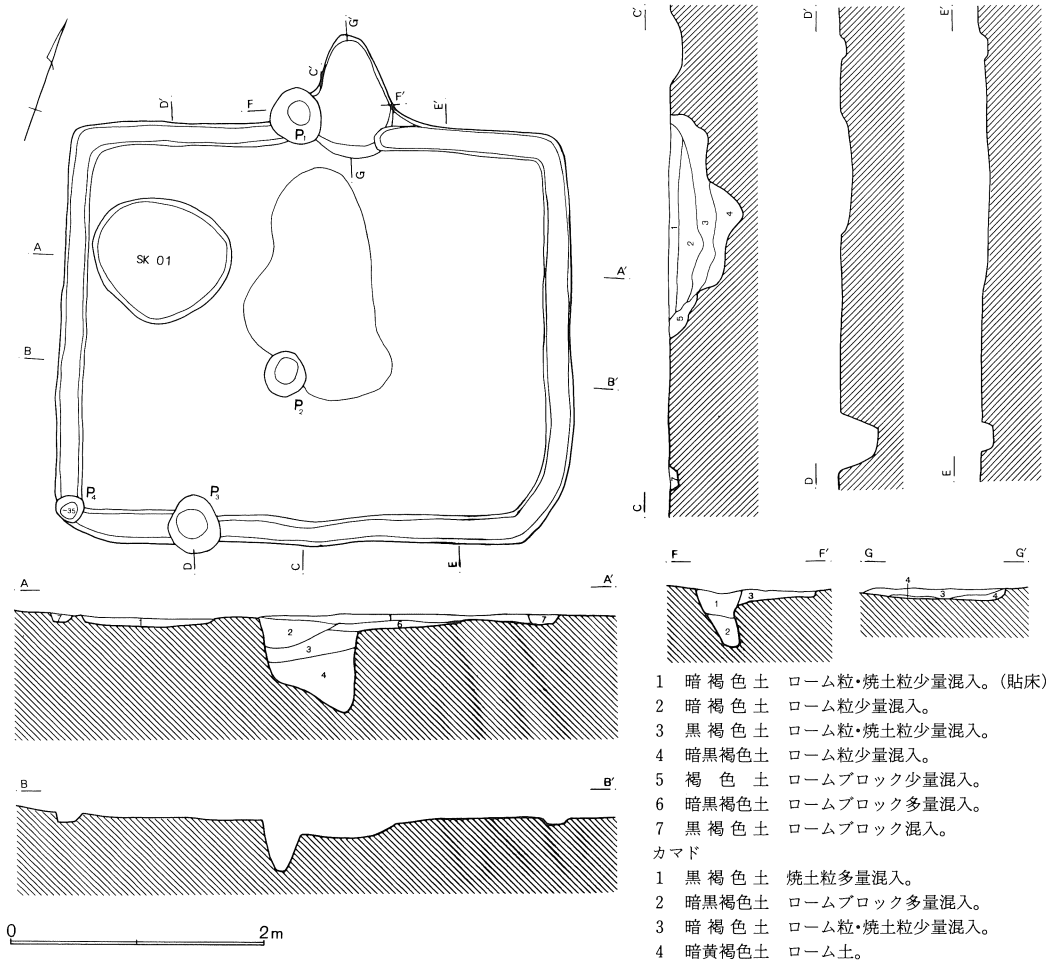
攪乱を受け、遺存状態はあまり良くない。燃焼部壁外に延び、掘り込みは浅く床面と大差ない。袖には明確な粘土の堆積は認められなかった。

壁溝はほぼ全周する。ピットは4本検出された。何れも柱穴としても十分な深度を有するが、配置からみて伴う可能性があるのはP₂のみである。土壌は1基存在するが、上部に床面が形成されており、床下土壌と考えられる。

出土遺物は土器片が26点と少ないが、遺構の遺存状態から見て、ほとんどがほぼ床面に残された遺物と考えられる。器種としては土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕が認められる。稻荷前VI~VII期に比定されよう。

第82号住居跡出土遺物観察表(第225図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備	考
1	蓋	(16.0)	1.4		A B C	A	灰	20%	覆土。	
2	坏	14.9	3.65	10.4	A B C	A	灰	40%	覆土。	
3	甕	22.8	21.5		A B E	A	橙	25%	覆土。	



第226図 第82号住居跡(L=30.90m)

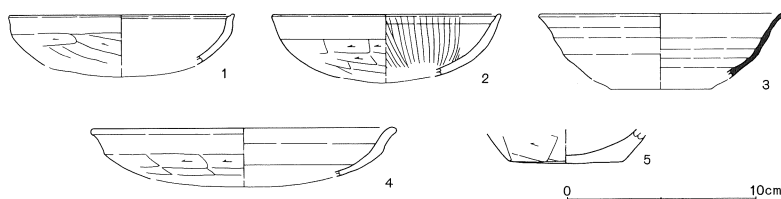
第83号住居跡(第228図)

L-9区に位置し、第84号住居跡と重複する。両住居とも掘り込みが浅く、新旧関係の把握は確実とは言い難いが、一応本住居が新しいものと推定される。形態は方形を呈し、規模は長軸4.60m、短軸4.22m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-22°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で全体的に堅く締まっていた。覆土は2層に分割されるが、堆積環境の詳細は把握できない。

カマドは北壁に設けられる。遺存状況は極めて悪く、燃焼部底面しか確認できなかった。壁外への突出は少なく、埋土には焼土が多量に含まれていた。壁溝は東壁と南壁に途切れる箇所がある。ピットは17本検出されたが、伴うと判断されるものは少ない。P₁~P₄は住居の主柱穴と考えられる。第1号土壌はいわゆる床下土壌と判断され、上面には床が形成されていた。

遺物は76点あり、土師坏類と甕を主体とし須恵坏・甕を少量含む。後者は混入品であろう。稲荷前V期に比定される。



第227図 第83号住居跡出土遺物

第83号住居跡出土遺物観察表(第227図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.9)	2.6		A E F	A	橙	20%	SK01内。無彩。
2	坏	(12.0)	3.3		A F	A	橙	15%	覆土。内面暗文。
3	坏	(12.8)	3.4		A B	A	灰	25%	覆土。
4	皿	(16.0)	2.6		A B F	A	にぶい褐	15%	カマド内。
5	甕		1.7	(6.0)	A B E	A	褐灰	25%	覆土。

第84号住居跡(第228図)

L-9区に位置し、重複する第83号住居跡に切られている。形態は方形を呈するものと推定される。残存規模は、長軸3.20m、短軸1.78m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-20°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土の詳細は明らかにできなかった。残存部にはカマドは検出されていない。ピットは4本検出された。P₁・P₂については伴う可能性がある。壁溝は存在しない。

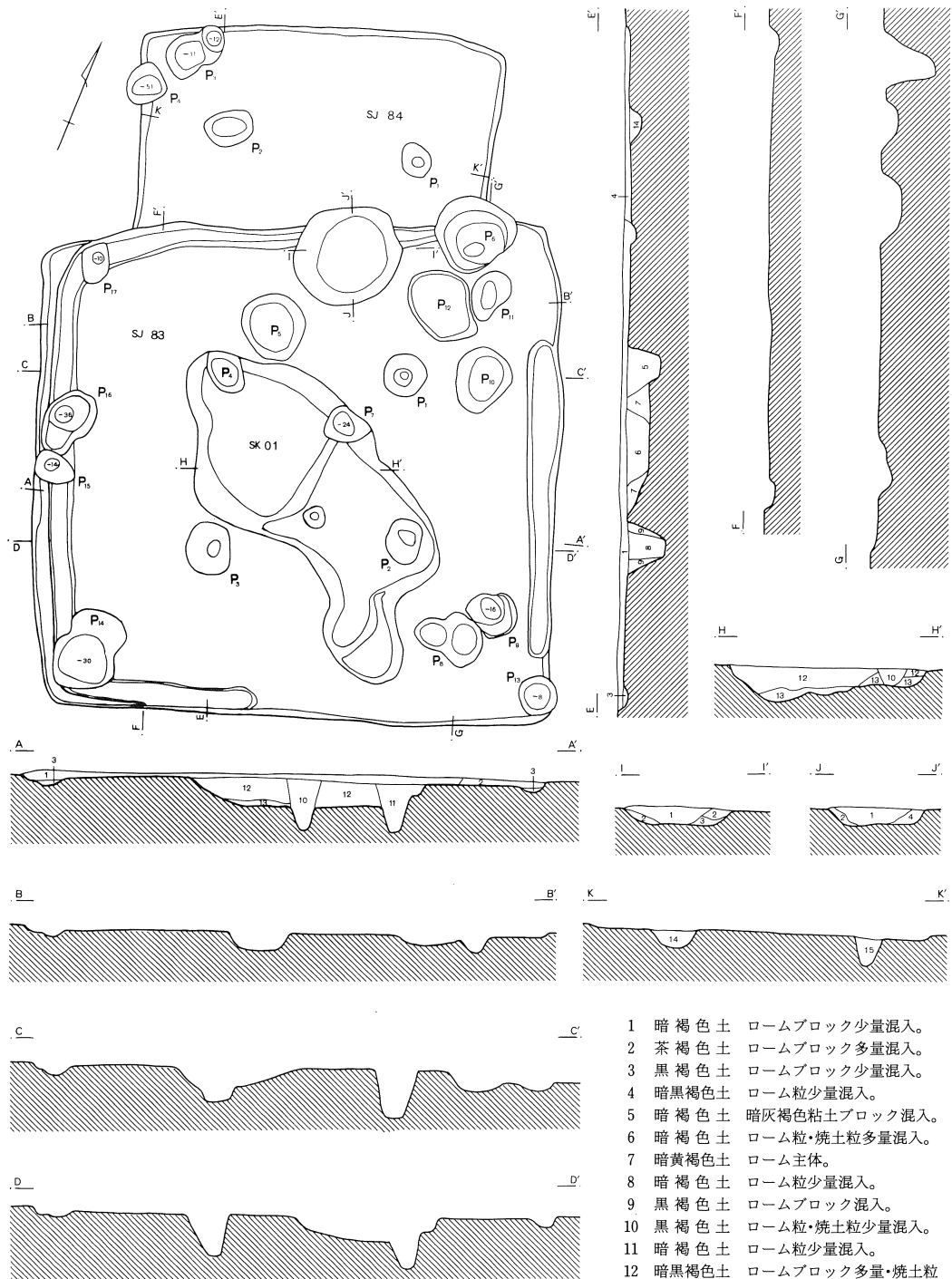
出土遺物は土師器甕3片と須恵器甕1片のみで時期は不明である。

第85号住居跡(第229図)

K・L-8・9区に位置する。形態は整った方形を呈し、規模は長軸4.28m、短軸4.08m、深さ0.15mを測る。主軸方位はN-24°-Wを示す。

床面は平坦で全体的に堅い。覆土は4層に分かれるが、第一次堆積層(第2・5層)にはロームブロックが多量に含まれ、全て自然堆積とは思われない。

カマドは北壁に設置される。遺存状況は悪く、袖は平面的にも断面観察によっても検出されな



カマド

- 1 暗茶褐色土 焼土ブロック・褐色粘土粒多量混入。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒多量混入。
- 3 暗褐色土 ロームブロック主体。
- 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。

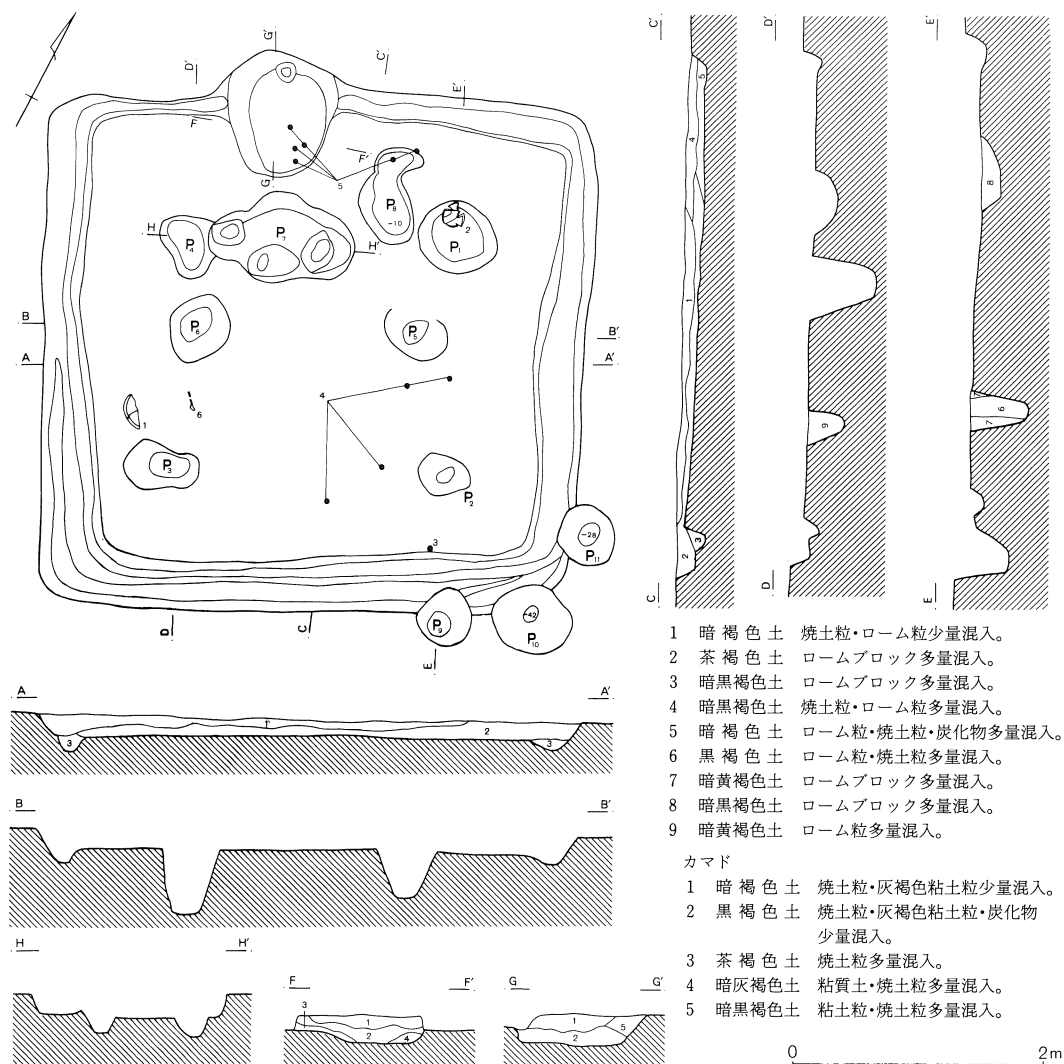
- 1 暗褐色土 ロームブロック少量混入。
- 2 茶褐色土 ロームブロック多量混入。
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量混入。
- 4 暗黒褐色土 ローム粒少量混入。
- 5 暗褐色土 暗灰褐色粘土ブロック混入。
- 6 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量混入。
- 7 暗黄褐色土 ローム主体。
- 8 暗褐色土 ローム粒少量混入。
- 9 黒褐色土 ロームブロック混入。
- 10 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 11 暗褐色土 ローム粒少量混入。
- 12 暗黒褐色土 ロームブロック多量・焼土粒少量混入。
- 13 暗黄褐色土 ローム主体。
- 14 暗黄褐色土 ローム主体。
- 15 暗黒褐色土 ローム粒少量混入。

0 2m

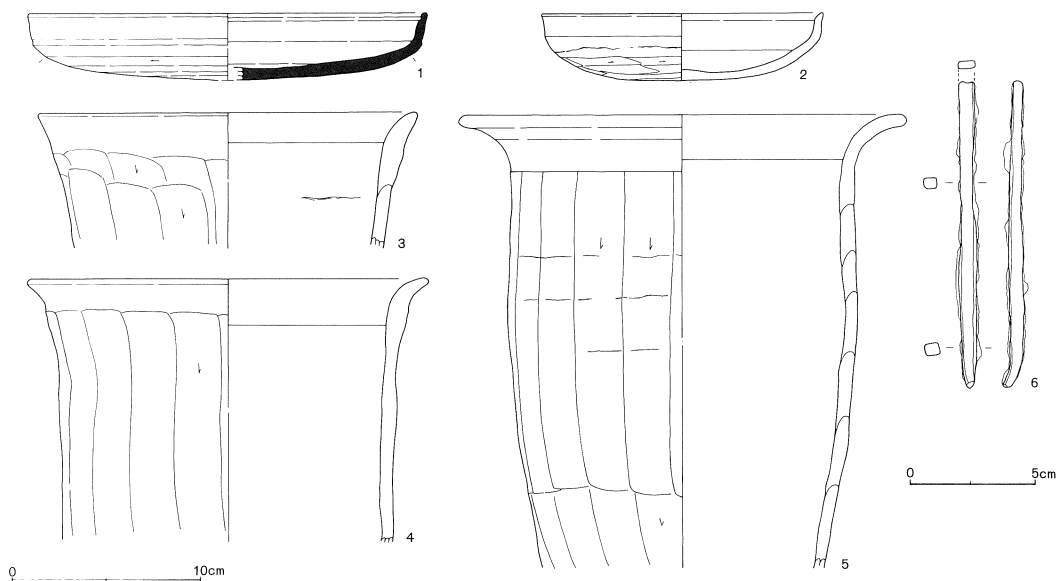
第228図 第83・84号住居跡(L=30.90m)

った。燃烧部は大部分が壁内に納まり、底面は鍋底状に掘り込まれる。壁溝は全周するが、南壁から西壁にかけては壁からやや内側に巡っていた。ピットは11本検出された。P₂・P₃・P₅・P₆が支柱穴に相当するものと考えられる。P₁は上面に床が貼られていた。他のピットは遺構に伴うものではない。

出土遺物は97点検出された。土師器坏、甕、甑、須恵器坏、蓋、甕、盤があるが、土師器坏類は破片を含めても5点に過ぎない。須恵器坏は全て小片で混入品であろう。盤(230図1)は床面からかなり浮いた位置から出土した。口縁部内面に沈線が巡り歪みが著しい(図上補正した)。6の鉄器は角棒状を呈し、上端は薄く延ばされ下端は細くなり緩く屈曲する。土師器坏(2)は浅坑風を呈する大型品である。甕は口縁部が直立するものと水平方向に強く屈曲するものがある。盤は出土状況からみると直接伴うとはいえないが、大きな時期差は認め難く稻荷前V期に位置付けておきたい。



第229図 第85号住居跡(L=30.90m)



第230図 第85号住居跡出土遺物

第85号住居跡出土遺物観察表(第230図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	盤	21.0	3.6		A B C	A	灰	50%	No.7。覆土。歪み有り。図上補正。内底面磨減
2	皿	14.8	3.6		A B E	A	明赤褐	100%	No.12。覆土。
3	甑	(20.0)	7.2		A B C G	A	にぶい褐	20%	No.24。覆土。
4	甕	(20.8)	13.9		A C	A	橙	30%	No.17~20。覆土。
5	甕	(23.0)	24.0		A C D G	B	橙	45%	No.1, 2, 25, 26, 27, 28。カマド内覆土。
6	鉄器	残長12.1cm。							No.6。床面。角棒状製品残欠。

第86号住居跡(第231図)

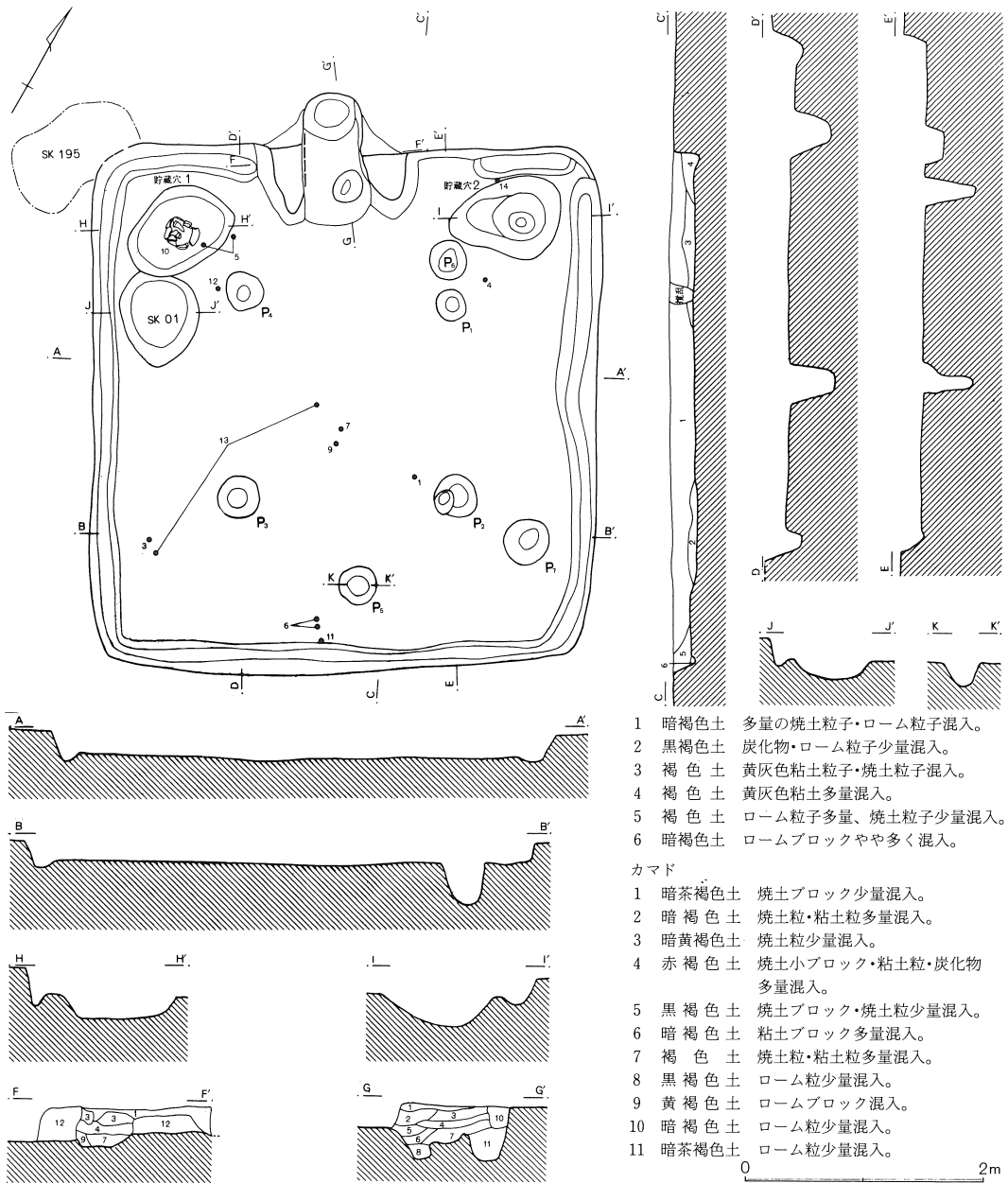
L-8区に位置する。第85号住居跡の南西にほぼ軸を揃えて構築される。形態は整った方形を呈し遺存状態は比較的良好であった。規模は長軸4.36m、短軸4.20m、深さ0.30mを測る。主軸方位はN-27°-Wを示す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。覆土は5層に分かれ、概ね自然堆積と推定される。

カマドは北壁の中央部に設けられる。燃焼部先端はピット状に深く掘り下げられているが、カマド構築前の掘り込みと考えられる。第6・7・9層上面が火床面であろう。袖は黄灰色砂質粘土で構成され(第12層)、遺存状態は良好である。

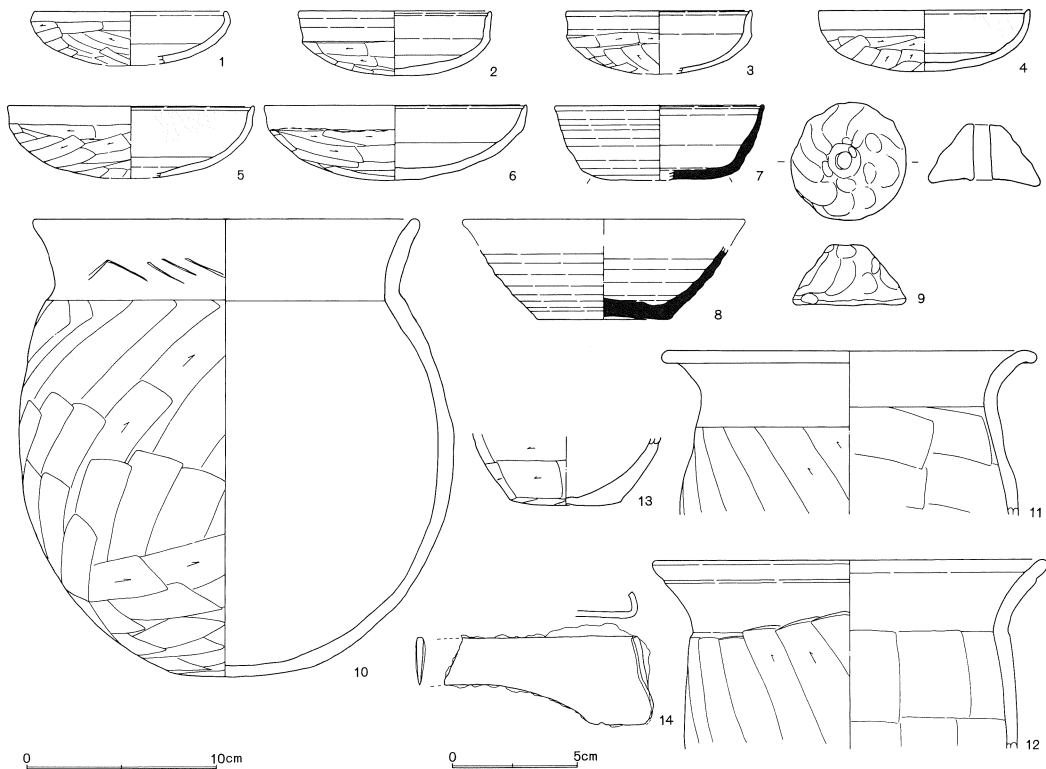
ピットは7本検出された。P₁~P₄は住居に伴う主柱穴と考えられる。貯蔵穴は2基検出された。第1号貯蔵穴内部には甕が遺存しており、住居廃棄時まで機能していたことは疑いないが、第2号貯蔵穴はロームブロックを多量に含む暗褐色土で埋められ、同時存在した可能性は薄いものと推定される。何らかの理由で2号から1号に付け替えられたのであろう。第1号土壌は住居に直接伴う可能性は少ないものと思われる。壁溝はカマド周囲を除くとほぼ全周する。

出土遺物は110点検出された。器種的には土師器坏、甕を主体に土師器鉢、須恵器坏、蓋、甕と土



第231図 第86号住居跡(L=30.90m)

製紡錘車、鉄鎌がある。須恵器は数点に過ぎず、図示した7以外は混入である。7は胎土が精良で東海産か。底部は削り後丁寧になでられている。土師器環は口縁部片が56点検出され、232図2・3に代表される小型の比企系環が16点、口縁部が内屈する小型の北武蔵系環(搬入品)が7点、4のような内面沈線をもたない浅椀風タイプが6点、5・6に示される沈線をもつ浅椀が24点、その他3点という比率を示す。図示していないが沈線をもつ浅椀には口径11cm前後で口縁部下に稜をもたないものが主体となり5・6のような大型品は少ない。稲荷前IV期に位置付けられよう。



第232図 第86号住居跡出土遺物

第86号住居跡出土遺物観察表(第232図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	2.8	7.0	A B E	A	橙	50%	№43。床面。北武蔵系。
2	坏	(10.2)	3.45		B E	A	橙	90%	カマド左袖内。
3	坏	(9.8)	3.4		A B	A	橙	45%	№51。覆土。
4	坏	11.2	3.3		B	A	橙	50%	№83。床面。
5	坏	(13.0)	3.8		A B	A	橙	35%	№9, 67。覆土。
6	坏	13.9	4.0		A B C	C	にふい褐	80%	№60, 61。覆土。無彩。
7	坏	(11.0)	4.0		A J	A	灰	35%	№50。覆土。東海産。
8	碗		3.8		A C	B	灰	40%	覆土。
10	甕	(20.2)	24.1		A D E	B	にふい橙	80%	№97。貯穴1内。
11	甕	(19.0)	8.7		A D E	A	橙	30%	№59。覆土。
12	甕	(20.6)	10.0		A E	A	橙	25%	№13。覆土。
13	甕		3.2		A C E	A	にふい褐	60%	№33, 52。覆土。
9	紡錘車	径6.2cm。高さ3.2cm。				A C E	A	にふい橙	95%
14	鉄鎌	残長8.3cm。基部幅3.5cm。刃部欠損。基部折り返し。							№96。床面。

第87号住居跡(第233図)

L・M-8区に位置する。東壁は倒木痕、西壁は攪乱を受けるなど、遺存状態は極めて悪く、遺構の詳細は明らかにできない。第36号掘立柱建物跡、第19号溝跡と重複し、本住居跡の方が古い。形

態はやや歪んだ長方形と把握したが、南壁部は不鮮明で確実とはいえない。

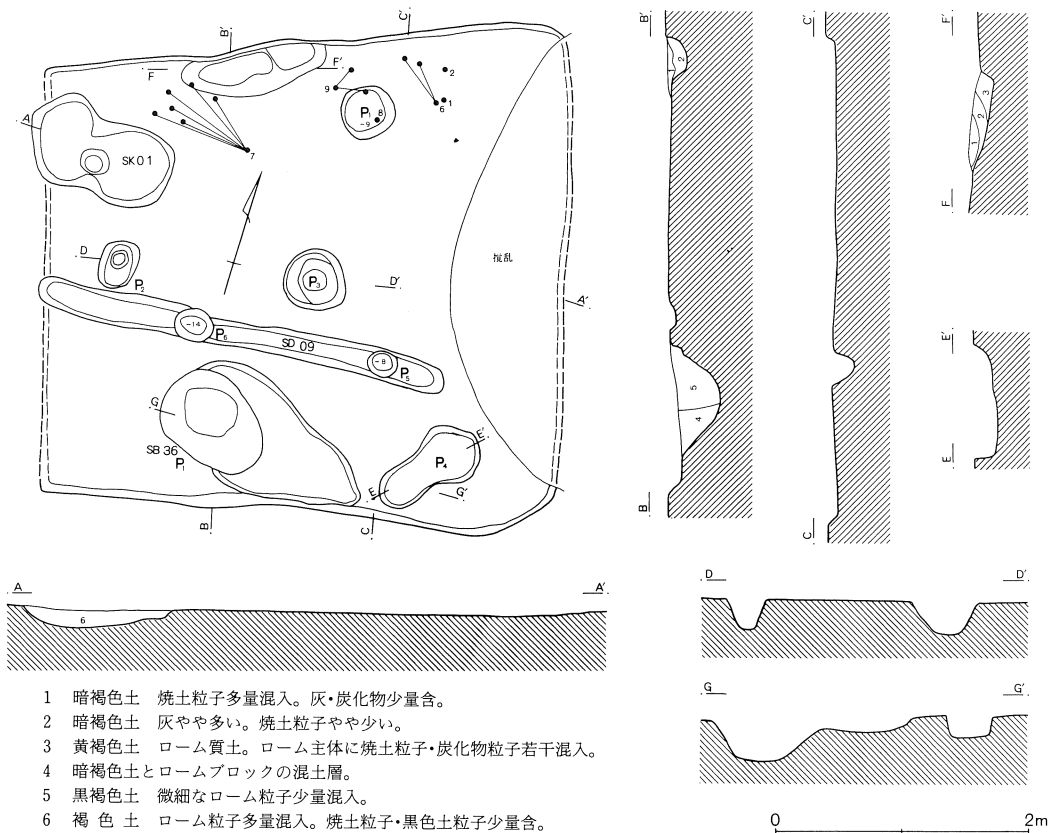
残存規模は、長軸4.14m、短軸3.78m、深さ約0.05mを測る。主軸方位は北壁に直交するものと仮定すればN-21°-Wを示す。

床面は極めて判りにくい。ほぼ平坦と推定されるが、若干掘り過ぎた箇所がある。確認面直上まで農道の攪乱を受けているために、覆土の状況は不明である。

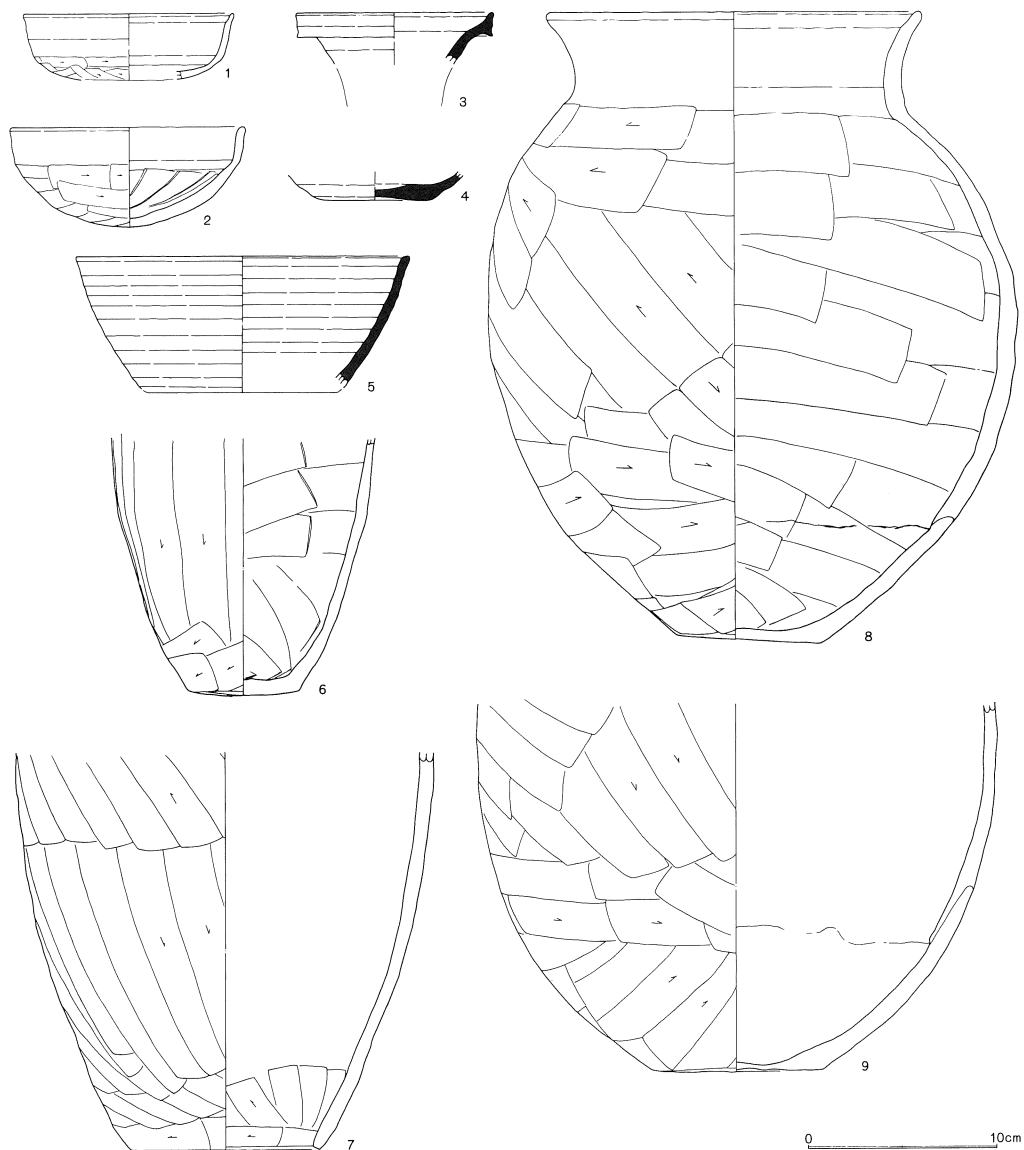
カマドは明確に検出できなかったが、北壁中央部直下に楕円形の掘り込みがあり、灰と焼土が含まれていた。壁外には痕跡は残されていないため確定できないが、この位置にカマドが所在した蓋然性が高いものとする。

ピットは6本検出された。P₁は上部に床面が乗る。他のピットの帰属は明らかではない。第1号土壌は伴わないものと判断した。

出土遺物は81点検出された。器種としては土師器杯、甕、小型甕、台付甕、壺、甌、須恵器杯、碗、蓋、甕、瓶、青磁碗がある。須恵器の大部分と青磁碗は直接伴うものではない。住居に伴う可能性の高い遺物は北壁付近で検出された第234図1・2・6～9である。8の壺は床面に横倒しの状態で出土した。胴部には指なでの痕跡が顕著に残る。1・2もほぼ床面から出土した。3～5は混入である。稻荷前IV期に比定される。



第233図 第87号住居跡(L=31.00m)



第234図 第87号住居跡出土遺物

第87号住居跡出土遺物観察表(第234図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	3.5		BE	A	にぶい赤褐	25%	No18.床面。無彩?。
2	坏	12.2	5.3		ACE	A	橙	100%	No17.カマド付近。床面。
3	長頸瓶	(10.3)	2.7		AC	A	灰	20%	覆土。
4	坏		1.5	6.2	ABC	C	灰	50%	覆土。
5	碗	(17.6)	7.0		AB	A	灰	10%	覆土。
6	甕	13.5	6.0		ACE	B	にぶい褐	60%	No13, 15, 19. 覆土。
7	甕	21.0	(10.0)		ABE	A	にぶい橙	35%	No1~7. 覆土。
8	壺	(19.9)	33.3	7.6	ABE	A	にぶい黄橙	75%	カマド付近。床面。
9	壺		19.5	9.0	ACE	A	にぶい橙	25%	No10, 11, 14. 覆土。

第88号住居跡(第235図)

L-6・7区に位置する。確認面で床が露出しており、遺構の詳細は明らかにできなかった。また北壁部は第188号土壌の攪乱を受けて残存しない。小型の住居跡と考えられ、形態は方形、規模は長軸3.10m、短軸2.90m前後と推定される。主軸方位は西壁に直交するラインを基準とするとN-90°-Eを示す。

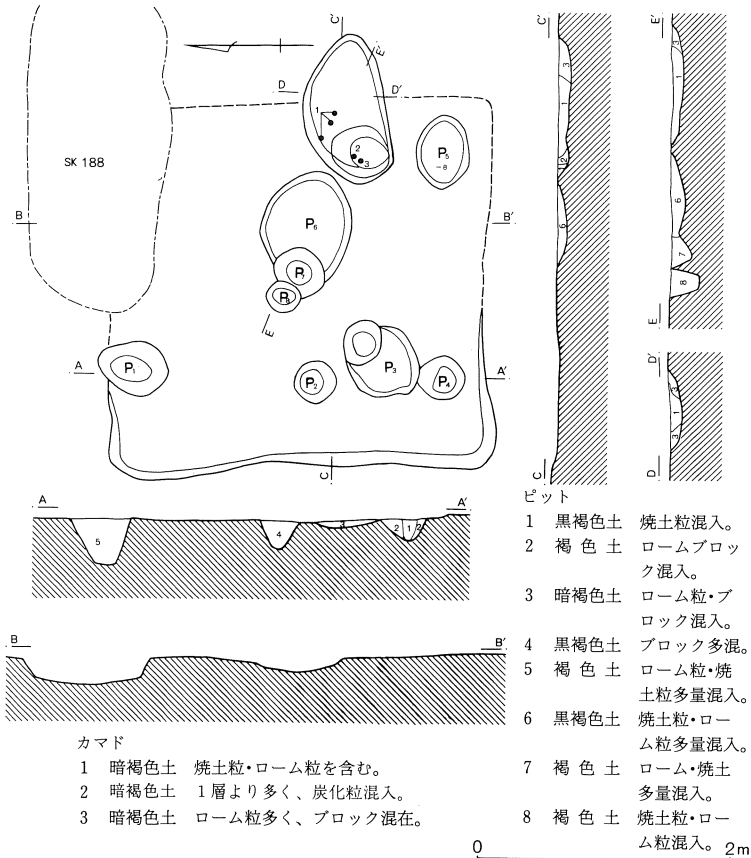
床面はほぼ平坦であるが、東壁部では残存しない箇所もみられた。覆土の状況は不明とせざるを得ない。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は楕円形を呈し壁外に延びるものと考えられる。底面は皿状に掘り込まれ、焚口部にピットがみられる。袖は当初より存在しないものと推定される。ピットは8本検出されているが、住居に確実に伴うものは明らかにできなかった。

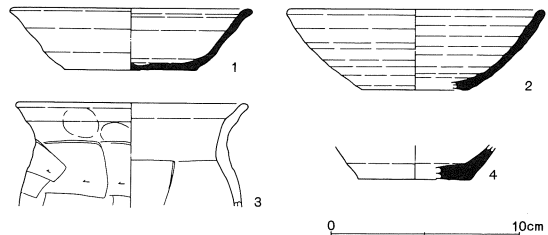
出土遺物は16点にすぎない。ほとんどはカマド内から出土したもので、器種としては土師器甕、小型甕、須恵器坏、蓋、甕、瓶がある。一応第236図1を基準に稻荷前Ⅲ期としておきたい。

第88号住居跡出土遺物観察表(第236図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.2)	3.25	7.0	A	C	にぶい黄橙	30%	Na5, 7, 9.カマド内。
2	坏	(13.4)	4.2	(5.6)	A G	A	灰白	20%	Na14.カマド内。
3	小型甕	(12.0)	5.2		A B	B	にぶい褐	25%	Na13.カマド内。
4	坏		1.8	6.0	A B	A	灰白	40%	覆土。



第235図 第88号住居跡(L=31.00m)



第236図 第88号住居跡出土遺物

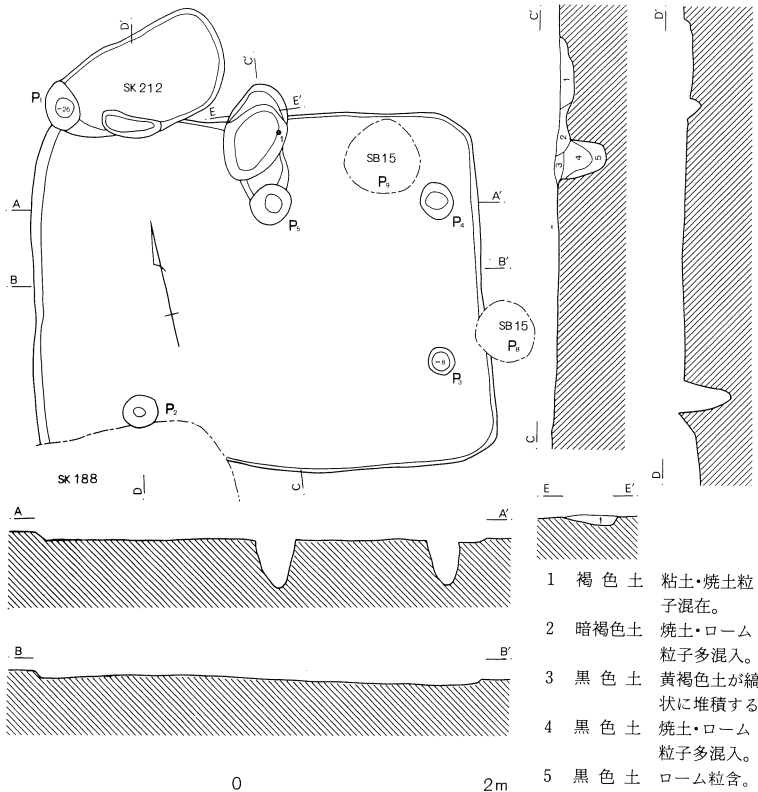
第89号住居跡(第237図)

L-7区に位置する。第188号土塙、第15号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は前者よりも旧く、後者よりも新しい。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸3.56m、短軸2.84m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-8°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。確認面で床面の一部が露出しており、覆土の状況は不明である。カマドは北壁の中央に設置される。燃烧部は楕円形を呈し、皿状に掘り込まれる。袖は存在しない。ピットは5本検出されているが、伴うものは明確ではない。P₅は上面にカマド堆積土が覆い、住居構築以前のピットと考えられる。北壁にかかって第212号土塙が存在するが、本住居の方が古いものと推定される。

出土遺物は極めて少なく、須恵器坏が3点、土師器甕が1点にすぎない。時期は不明確だが、出土土器や住居形態から9世紀後半頃(稻荷前 XIII 期)と推定される。

第238図1は須恵器坏である。残高2.4cm、推定底径5.0cm。胎土A~CとG含む。焼成良好で鈍い橙色。10%残。カマド内覆土。



第237図 第89号住居跡(L=31.00m)



第238図 第89号住居跡出土遺物

第90号住居跡(第239図)

L-6区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.92m、短軸3.20m、深さ0.15mを測る。主軸方位はほぼ座標北を示す。

床面は全体に軟弱で堅い箇所はあまりみられない。覆土の堆積状況は不自然な箇所がみられ、自然堆積とは思われない。

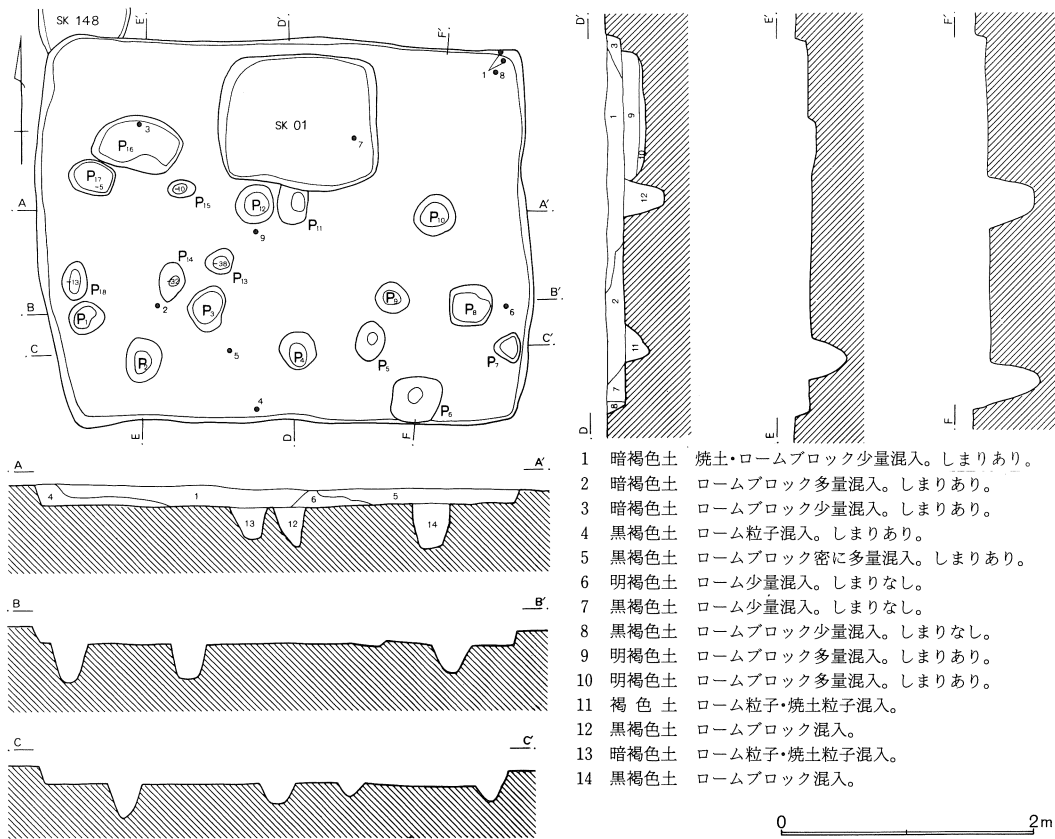
カマドは検出されていない。ピットは18本検出されているが、どれが遺構に伴うものか明確ではない。周辺には中世以降のピットが多数存在し、多くはそれらに含まれるものと考えられる。土塙は1基検出された。上部に貼床されている模様であり、住居の掘方か、または住居構築前の所産と

推定される。

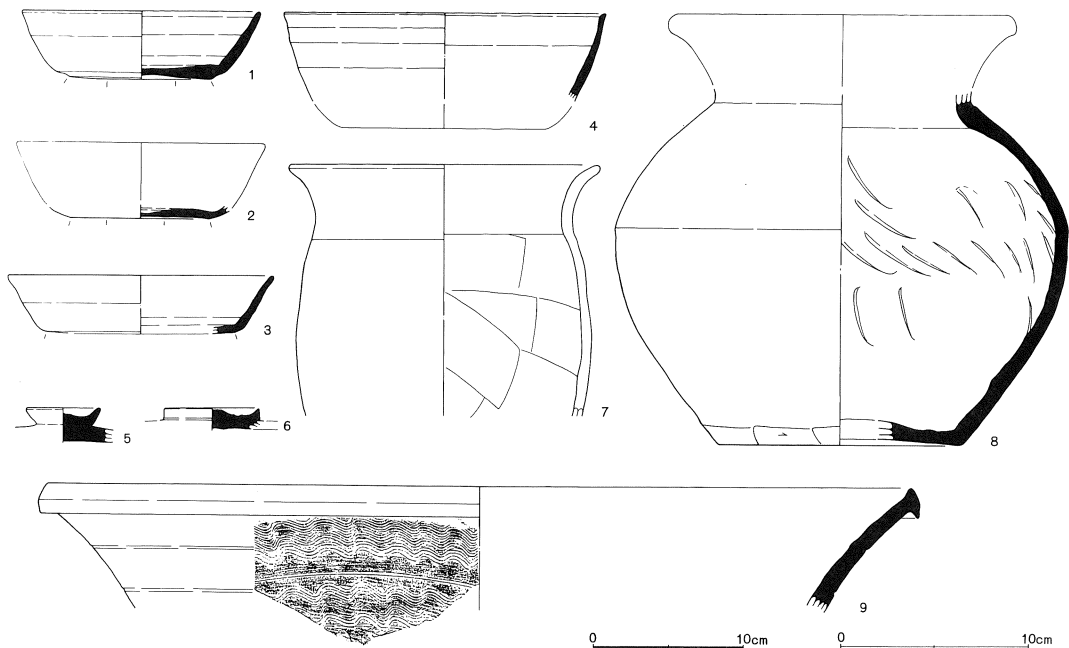
出土遺物は55点検出された。土師器環、甕、小形甕、甗、壺、須恵器環、埴、蓋、甕、鉢の各器種がある。小片が多く、またやや時期的に幅があるため年代比定は難しいが、第240図1を基準とすると稲荷前IX期に位置付けられよう。

第90号住居跡出土遺物観察表(第240図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	12.5	3.5	7.5	A C	B	灰	80%	No.56, 57.床面。
2	環		0.7	7.4	A B C	A	灰	60%	No.29.覆土。
3	環	(14.0)	3.1		B C	A	灰	5%	No.2.床面。
4	埴	(17.0)	4.7		B C D G	B	灰白	10%	No.40.覆土。
5	蓋		1.9		B C	B	灰白	95%	No.38.覆土。
6	蓋		1.1		A B C	A	暗青灰	100%	No.54.覆土。
7	甕	(16.3)	13.3		B C E F	B	にぶい橙	25%	No.67.覆土。
8	壺		18.6	(13.0)	A C	A	灰	45%	No.47.覆土。
9	甕	(57.4)	8.1		A B C	B	黒褐	15%	No.20.覆土。



第239図 第90号住居跡(L=31.10m)

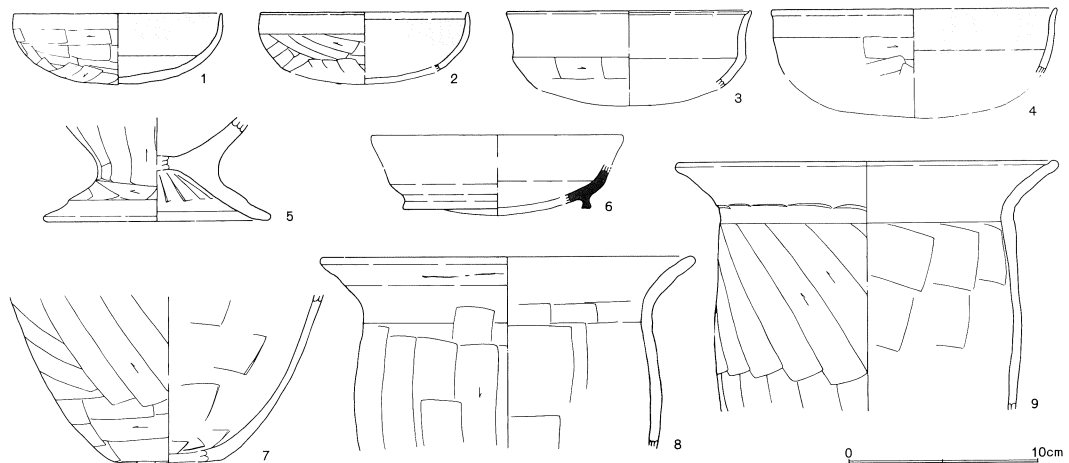


第240図 第90号住居跡出土遺物

第91号住居跡(第242図)

調査区西端のL-5区に位置する。第8号溝跡、第21号井戸跡等の攪乱を受け西壁と北壁部の詳細は不明である。形態は方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸3.96m、短軸2.86m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-76°-Eを示す。

床面は中央部を中心に貼床され、全体に強く踏み締められていた。覆土にはロームブロックが多量に含まれていたが、深度が浅いために堆積環境に関しては明確に捉えられなかった。カマドは東壁に設置される。燃焼部底面はほぼ壁内に納まり、掘り込みは浅い。袖には砂質粘土が用いられ、



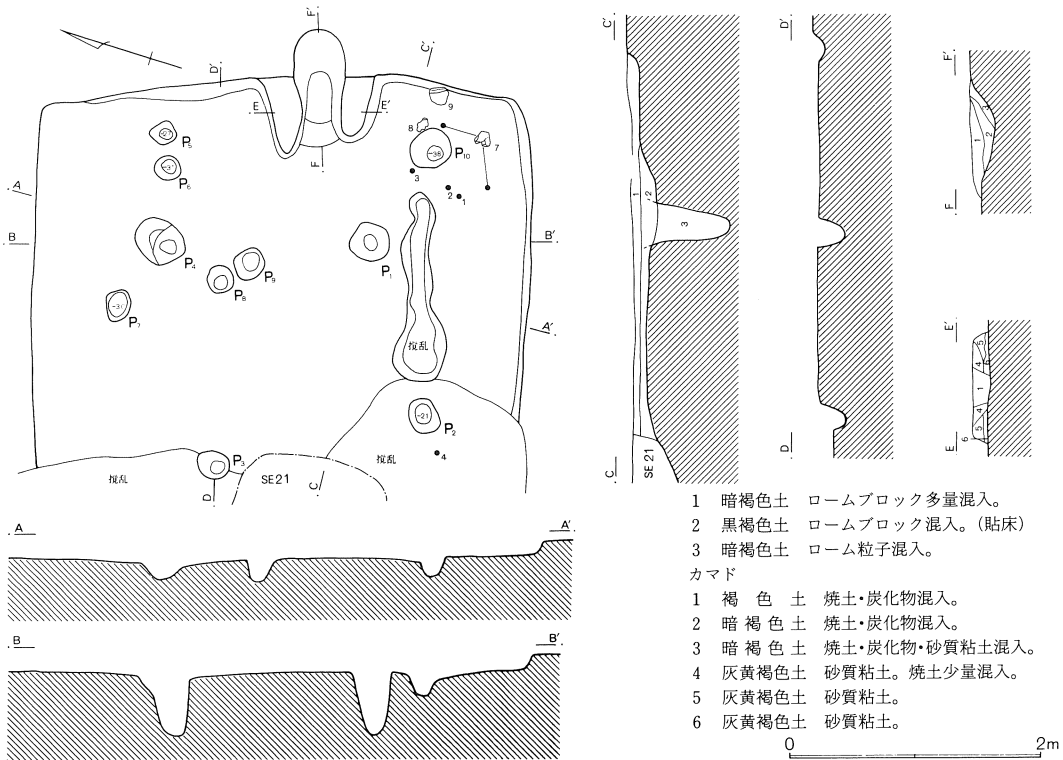
第241図 第91号住居跡出土遺物

遺存状態は良好である。ピットは10本検出された。P₁・P₄は支柱穴と考えられるが、P₂・P₃がそれに対応するか否かは明らかではない。他のピットは中世以降の所産と推定される。壁溝は存在しない。

出土遺物は33点あり、土師器環、甕、台付甕、壺、須恵器環、甕から構成されるが須恵器は3点のみで全て混入品と思われる。第241図1・2は小振りの深坑風の環で口縁部と体部に明確な境をもたない。3はやや大振りの模倣環であろう。土師器環には図化した以外に内面に沈線をもたない小型の比企型環(分類のA₁b類)片と、赤彩される模倣環系土器(B₁a類)が少量含まれる。5の須恵高台環は小片からの復元で傾きに不安を残す。土師器環と甕の様相から稻荷前IV期に比定される。

第91号住居跡出土遺物観察表(第241図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残調	備考
1	環	(11.0)	3.7		ABF	A	明赤褐	25%	No10。覆土。
2	環	(11.0)	3.1		AF	A	橙	20%	No9。覆土。
3	環	(13.0)	4.1		AB	A	明赤褐	10%	No19。床面。
4	壺	(15.0)	3.4		B	A	橙	10%	No13。覆土。
5	台付甕		5.5	11.6	AE	B	橙	30%	覆土。
6	環		2.3	(10.0)	ABC	A	暗青灰	10%	確認面。
7	甕		8.8	5.4	ABE	B	黄橙	50%	No3, 7, 8。覆土。
8	甕	(19.7)	10.2		ADEF	B	浅黄橙	15%	No4。覆土。
9	甕	20.0	13.2		ABDE	A	橙	25%	No1。床面。



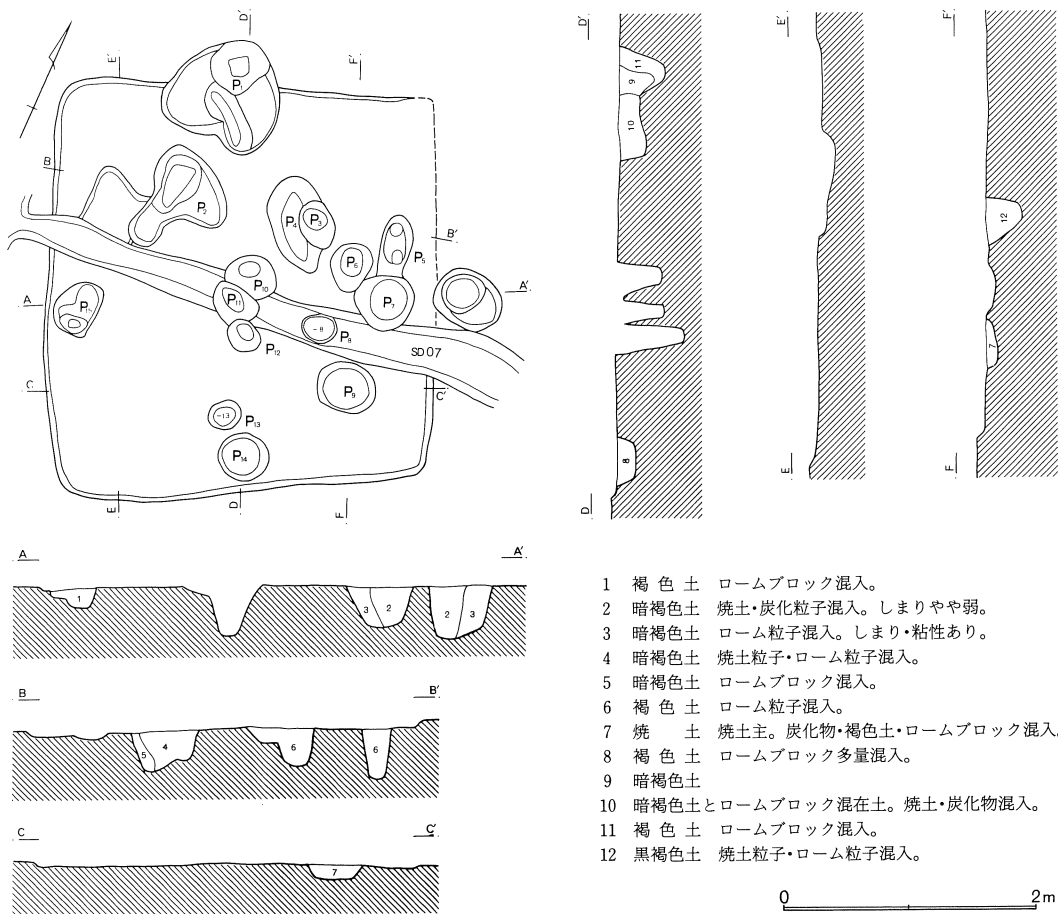
第242図 第91号住居跡(L=31.10m)

第92号住居跡(第243図)

K・L-5・6区に位置する。第7号溝跡に上部を攪乱され、遺存状態はあまりよくない。形態は方形を呈するものと推定され、規模は長軸3.32m、短軸3.20m、深さは0.05mに満たない。主軸方位はN-26°-Wを示す。

床面は概ね平坦で中央部が比較的堅く締まっている。覆土の状況は不明である。カマドは北壁に設けられる。上面は削平され、また中世期と推定されるピットに切られ、遺存状態は極めて悪い。ピットは15本検出された。断面観察に拠って住居に伴う可能性があるものを拾うとP₂・P₆・P₁₁・P₁₃が挙げられ、他は中世以降のピットと考えられる。壁溝等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器甕1片、須恵器坏2片のみで正確な年代は不明である。実測し得る遺物はない。



第243図 第92号住居跡(L=31.10m)

第93号住居跡(第244図)

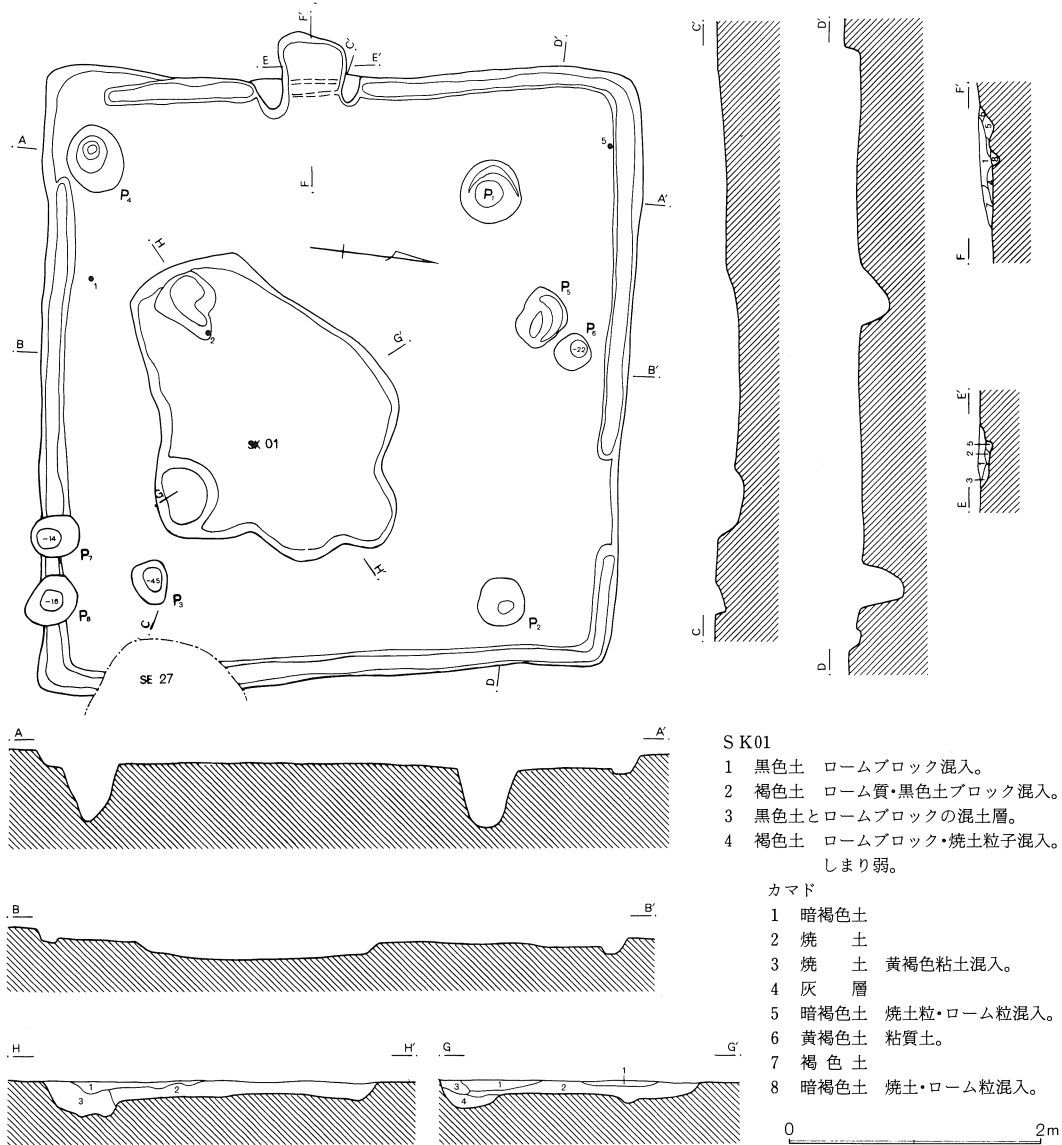
調査区西端のK-5・6区に位置する。東壁部に第27号井戸跡が重複し、本住居跡の方が古いものと考えられる。平面形態は方形を呈し、規模は長軸4.76m、短軸4.68m、深さ約0.05mを測る。主軸方位はS-84°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅い。深度が浅いために覆土の詳細は明らかにできなかった。

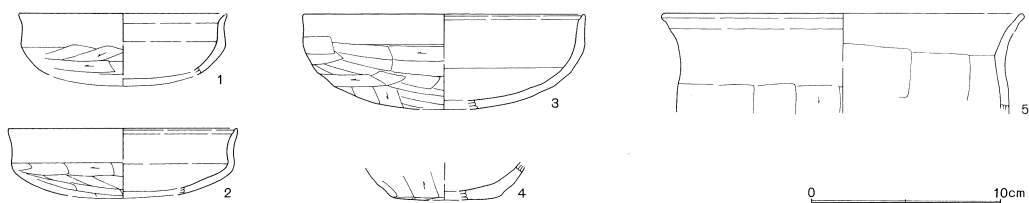
カマドは西壁に設けられる。住居に比して小規模なカマドで、床面下の掘り込みは殆どない。土層観察によって壁溝を埋めて構築されていることが判明した。掘方は存在せず、底面が火床面となっている。袖は褐色系の粘質土が残存するが、あまり明確なものではない。壁溝は壁に沿って巡るが、一部途切れている。

ピットは8本検出された。P₁～P₄を支柱穴と考えたが、配置が悪く確定できない。土壌は住居中央部に存在する。上面に床が貼られていることから、床下土壌と考えられる。

出土遺物は26点と少ない。土師器杯、甕、小型甕、須恵器杯、蓋、甕から成る。須恵器は混入である。土師器杯の様相から稲荷前III期に比定しておきたい。



第244図 第93号住居跡(L=30.90m)



第245図 第93号住居跡出土遺物

第93号住居跡出土遺物観察表(第245図)

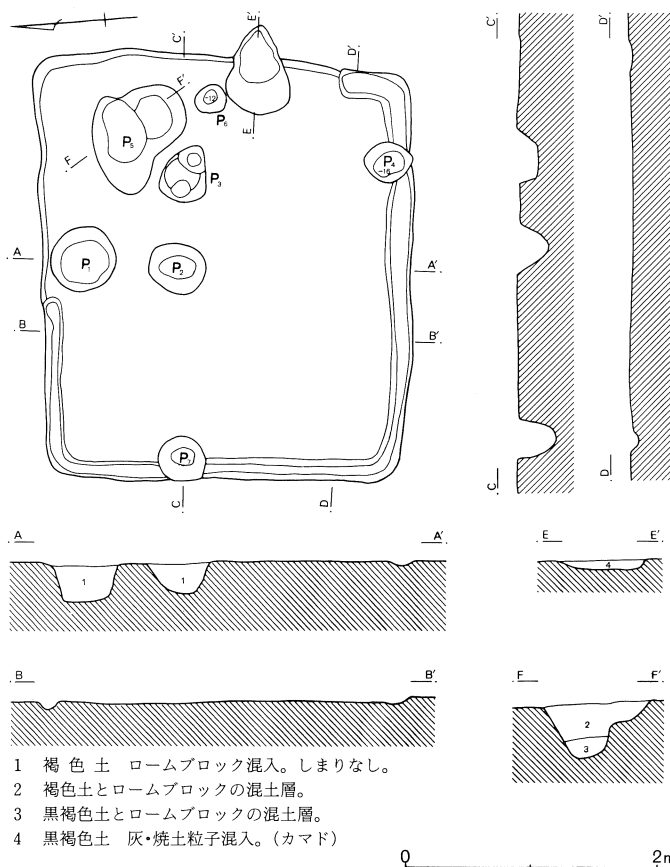
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	3.3		BF	B	橙	10%	№16。覆土。
2	坏	(12.1)	3.5		ABF	B	橙	20%	№15。覆土。
3	碗	(15.0)	5.1		ACDEF	C	にぶい褐	25%	覆土。
4	甕		2.0	(5.2)	ABCF	B	にぶい黄橙	20%	P ₄ 覆土。
5	甕	(19.0)	5.2		ACDF	B	橙	15%	№28。覆土。

第94号住居跡(第246図)

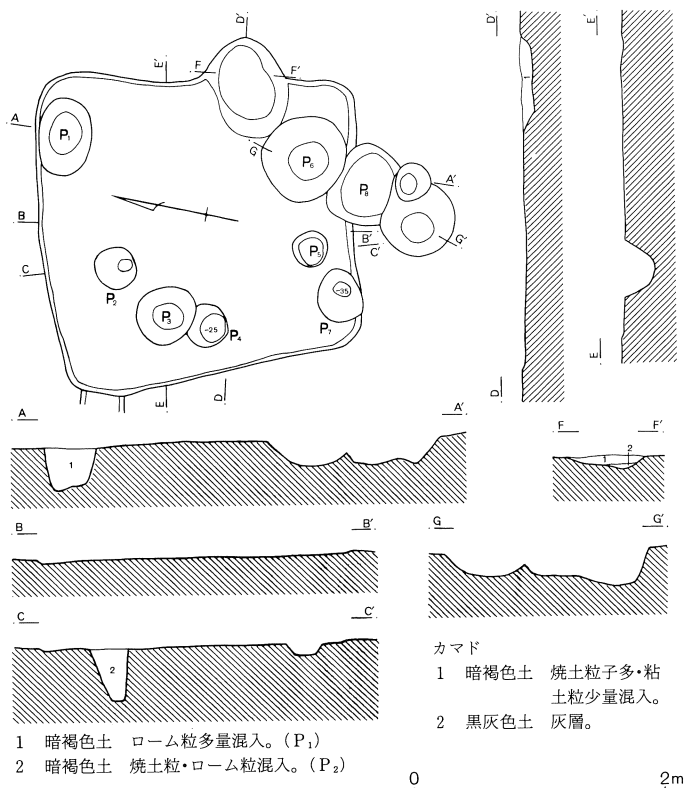
K-6区に位置する。形態は長方形を呈する。規模は長軸3.34m、短軸2.96mを測る。深さは殆どなく、確認面で床面が露出している状況であった。主軸方位はS-87°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁に設置される。燃烧部は壁外に延びるが、遺存状態は悪く詳細は不明である。袖は存在しない。壁溝はカマド周辺を除いて2/3周ほど巡る。ピットは7本検出された。P₁・P₂・P₄は覆土が類似する。一方P₃・P₆・P₇は灰褐色土を呈し、中世以降の所産と推定される。P₅覆土は掘立柱建物跡の柱掘方に類似し、貯蔵穴にはならないものと考えられる。

出土遺物は7点と非常に少ない。土師器甕と須恵器坏、甕があるが、実測し得る遺物はない。土器の様相から稲荷前XIV期頃と考えられる。



第246図 第94号住居跡(L=31.00m)



第247図 第95号住居跡(L=31.00m)

第95号住居跡(第247図)

L-7区に位置し、第7号溝跡が僅かに掛かっている。形態は不整形を呈する小型住居で、規模は長軸2.46m、短軸2.34mを測る。深さは浅く、床面の大部分が露出していた。主軸方位は東壁に直交すると仮定すればN-72°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。カマドは東壁に設けられ、燃烧部底面には灰層が残る。袖は存在しない。ピットは住居に伴うものと思われぬ。

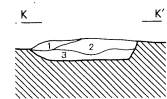
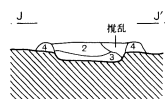
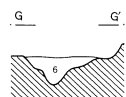
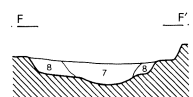
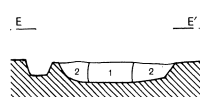
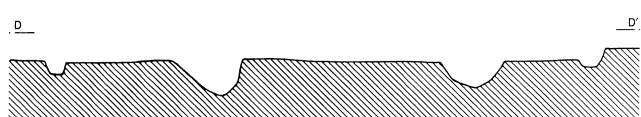
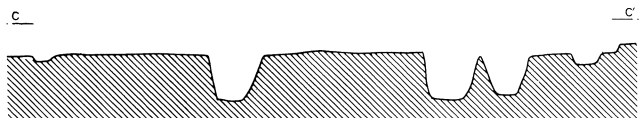
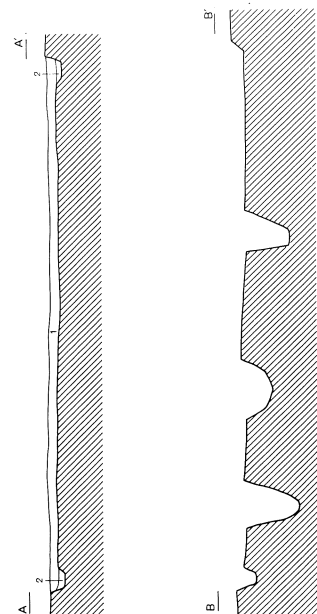
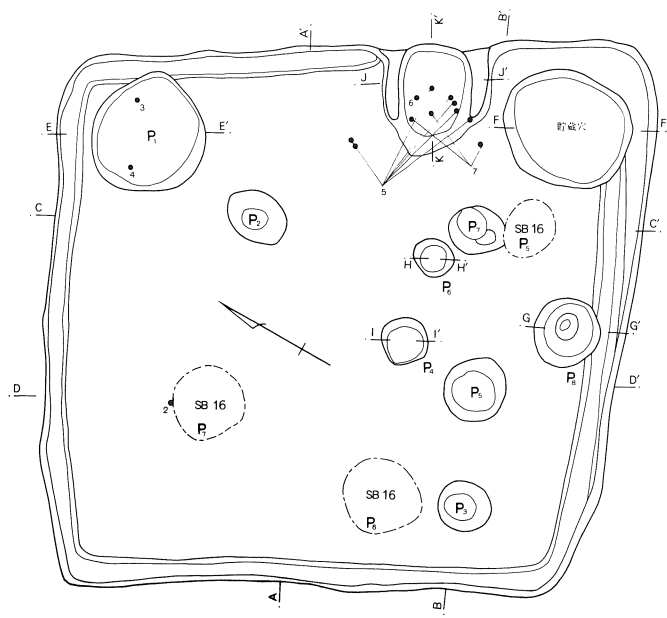
遺物は8点にすぎない。実測し得る遺物はないが、須恵器坏と土師器甕の様相から稻荷前 XIII~XIV 期頃住居と推定しておきたい。

第96号住居跡(第248図)

K・L-7・8区に位置する。第16号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古いものと推定される。形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は長軸4.46m、短軸4.24m、深さ0.10mを測る。主軸方位は東壁に直交するラインを基準とするとN-59°-Eを示す。

床面は平坦で全体に堅い。覆土には大きな土層変化はみられなかった。カマドは東壁に設置される。燃烧部は壁内に納まり、底面は皿状に掘り込まれている。袖は褐色の粘質土で構築されている。カマド右側のコーナーには貯蔵穴(長径1.04m、深さ0.18m)が設けられる。北東コーナーにも貯蔵穴様の土壇(第1号土壇)が存在するが、上面に床面が貼られ、同時存在したものではない。ピットは7本検出されている。P₁・P₂・P₅は主柱穴と考えられるが、SB16P₇が対応しないとすると柱穴配置は不明である。2本柱穴であろうか。壁溝はカマドから南東コーナーを除き巡っているが、南壁部では壁ラインよりも内側に位置し、貯蔵穴に掛かる箇所がある。

出土遺物は134点検出された。器種としては土師器坏、埴、甕、甑、壺、須恵器坏、甕があるが、須恵器は全て混入と考えられる。第249図2~4は床面、5・7の甕はカマド内から出土した。同一個体の可能性もあるが、接点はなく、胎土・色調にも相違がみられる。6の壺はカマド内と貯蔵穴内の破片が接合している。稻荷前V期古段階に比定される。



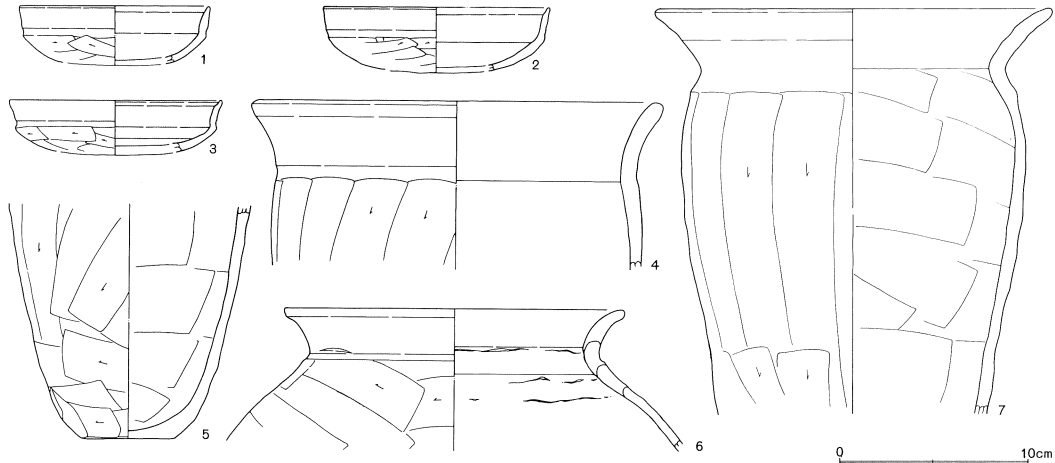
- 1 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量混入。
 - 2 褐色土 ローム粒子混入。
- カマド
- 1 黒褐色土 焼土粒・褐色粘土粒混入。
 - 2 暗灰色土 粘質土・焼土粒多量混入。
 - 3 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量・ローム粒子少量混入。
 - 4 褐色土 粘土ブロック混入。袖構築土。
- ピット
- 1 褐色土 暗褐色土・黄灰色粘土ブロック・焼土粒子混入。(P₁)
 - 2 褐色土 黄灰色粘土混入。焼土粒子多。(P₁)
 - 3 褐色土 ロームブロック混入。(P₄)
 - 4 黒褐色土 柱痕。(P₆)
 - 5 黒褐色土 ロームブロック混入。(掘方埋土)(P₆)
 - 6 黒褐色土 P₄・フク土と類似。(P₆)
 - 7 暗褐色土 焼土粒・ローム粒混入。(貯蔵穴)
 - 8 暗褐色土 ロームブロック多量混入。(貯蔵穴)



第248図 第96号住居跡(L=30.90m)

第96号住居跡出土遺物観察表(第249図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	2.0		B	A	にぶい褐	20%	SK01内。
2	坏	(12.0)	3.3		BCE	A	にぶい褐	10%	№20。床面。
3	坏	(11.2)	2.7		B	A	浅黄橙	20%	№14。床面。
4	甗	(21.0)	8.9		AE	A	にぶい黄橙	20%	№12。床面。
5	甗		12.3	(5.0)	ACE	A	にぶい橙	50%	№36, 37。カマド内№7, 11。覆土。
6	甗	(17.9)	7.5		ABE	A	橙	40%	カマド内№4。貯穴。
7	甗	(20.6)	21.4		ABCE	B	橙	20%	№42。カマド内№2, 5。覆土。



第249図 第96号住居跡出土遺物

第97号住居跡(第250図)

K-8区に位置し、第16号掘立柱建物跡柱穴が切っている。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.66m、短軸3.40m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-85°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、中央部からカマドにかかる一帯が堅く締まっていた。深度が浅く覆土の状況は不明である。

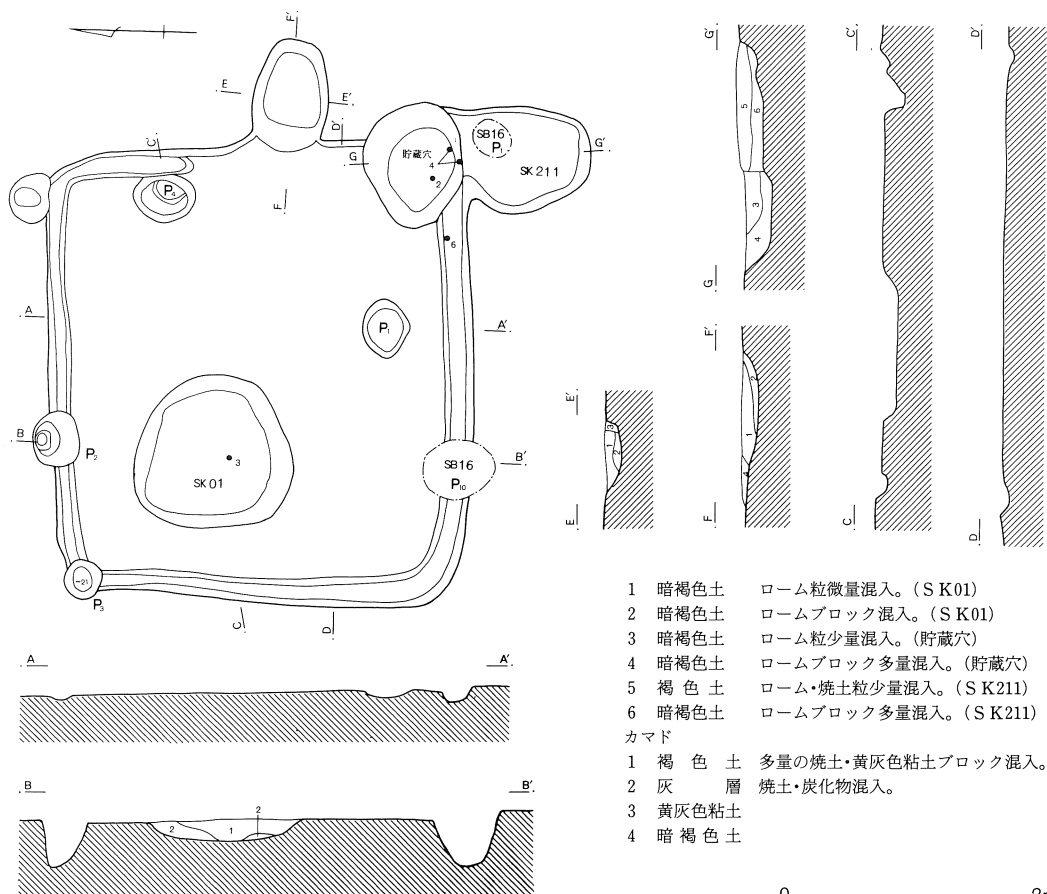
カマドは東壁に設置される。燃烧部は皿状に掘り込まれ、壁外に突出する。袖は存在しなかった。壁溝はカマド部分を除きほぼ全周する。貯蔵穴は南東コーナーに位置する。壁ラインが正しいとすると一部壁外に突出することになる。断面観察によって重複する第211号土壌を切っていることが判明した。

ピットは4本検出されているが、全て住居よりも新しい時期の所産と推定される。土壌は1基、西壁近くの床面に穿たれ、径1.20m、深さ0.18mの規模をもつ。住居に伴うものと推定されるが性格は不明である。

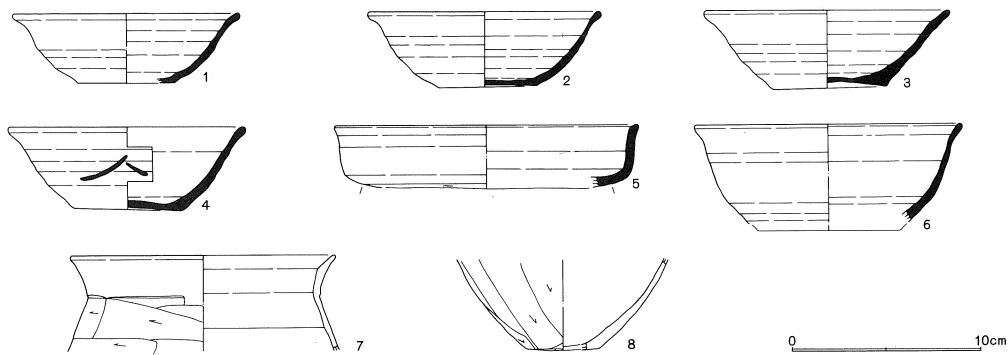
出土遺物は25点と少ない。器種としては土師器坏、甕、小型甕、須恵器坏、蓋、盤がある。土師器坏と須恵器盤は混入である。第251図4の須恵器坏の体部外面には「人」の墨書が記されている。稲荷前XIII期に比定される。

第97号住居跡出土遺物観察表(第251図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.8)	3.7	(5.2)	ABC	B	淡黄	25%	覆土。
2	坏	12.2	4.0	5.3	ABC	B	浅黄橙	80%	№6。貯穴内覆土。
3	坏	12.8	4.2	6.0	ABC	C	にぶい黄	75%	№12。SK01内覆土。
4	坏	12.4	4.3	5.9	ABC	C	明黄褐	80%	№1, 3。貯穴内。体部外面「人」の墨書あり。
5	盤	(16.0)	3.3		AC	A	灰白	10%	覆土。
6	坏	14.0	5.2		ABC	B	灰黄	25%	№7。壁溝内覆土。
7	小型甕	(14.0)	5.0		ABEF	A	橙	25%	SK01内覆土。
8	甕		4.6	3.8	ABE	A	にぶい褐	25%	SK01内。壁溝内覆土。



第250図 第97号住居跡(L=30.90m)



第251図 第97号住居跡出土遺物

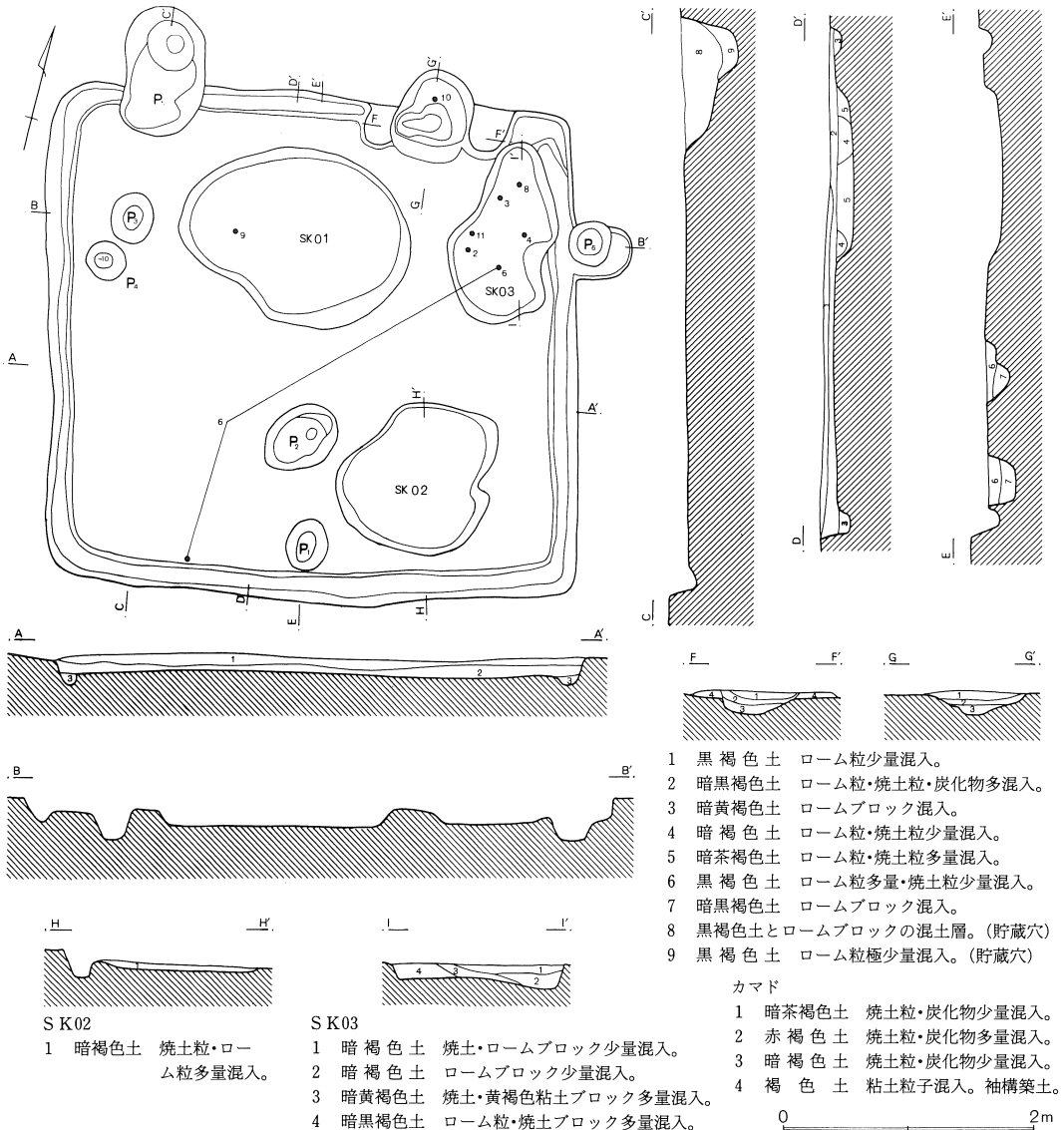
第98号住居跡(第252図)

K-7区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸4.20m、短軸3.96m、深さ0.15mを測る。主軸方位はN-12°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅く締まっていた。覆土は2層に分層されたが、大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁に設けられる。燃烧部は浅く、皿状に掘り込まれ僅かに壁を掘り込んでいる。袖は褐色粘土で構築されていたが深度が浅いこともあり遺存状態は良くない。貯蔵穴はカマド東側に近接して位置する。不整楕円形を呈し、深さ0.20mを測る。壁溝はほぼ全周する。

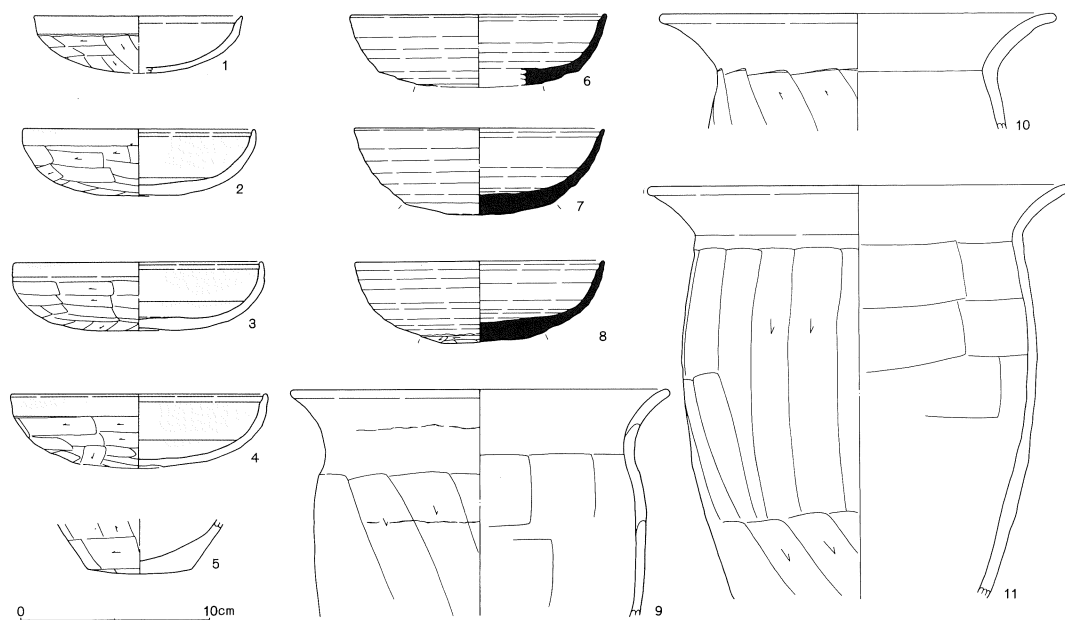
ピットは5本検出されたが、主柱穴と考えられるものは明確ではない。P₅・P₆は住居に伴うもの



第252図 第98号住居跡(L=30.80m)

ではない。土壌は2基検出されている。何れも上部に貼床されており、床下土壌または掘方と推定される。

出土遺物は116点検出された。器種としては土師器坏、甕、須恵器坏、埴、甕、灰釉埴から構成されるが、須恵器坏と甕、灰釉埴は混入と考えられる。したがって土師器坏と甕が主体を占め、伴う須恵器は図示した6～8の3点のみである。貯蔵穴から出土した遺物が多い。第253図6～8の坏はいずれも口縁部内面が凹み、底部はヘラ切り後二次整形されるという特徴をもつ。これらのうち2点は白色針状物質が確実に含まれ、南比企窯跡群産と考えられる。他の1点も共通した形態から在地産と考えてよからう。稲荷前V期に比定される。



第253図 第98号住居跡出土遺物

第98号住居跡出土遺物観察表(第253図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	3.0	5.5	ABC	A	橙	25%	覆土。
2	坏	12.2	3.6		ABC	A	橙	80%	No2。貯穴内覆土。
3	坏	(13.0)	3.6		EF	A	橙	55%	No1。貯穴内覆土。
4	坏	13.4	3.8		ABEF	A	橙	55%	No4。貯穴内覆土。
5	甕		2.9		AE	B		45%	覆土。
6	坏	(13.4)	3.75		ABC	A	灰	40%	No32, 78。覆土。底部ヘラ切り後ケズリ。
7	坏	(13.2)	4.6		BE	C	灰白	70%	覆土。全体に磨滅。底部ヘラ切り後ケズリ。
8	坏	13.2	4.3		BC	B	灰白	95%	No13。貯穴内覆土。底部ヘラ切り後ケズリ。
9	甕	(20.0)	12.0		AE	B	橙	15%	No64。SK01底面。
10	甕	(20.0)	6.1		ABE	A	橙	25%	No22。カマド火床面。
11	甕	(22.0)	21.8		ABE	B	橙	20%	No75。貯穴内覆土。

第99号住居跡(第255図)

J・K-8区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸5.52m、短軸4.66m、深さ0.10mを測る。建て替えされた形跡があり、東壁では壁溝の内側に段差をもつ。北東コーナー部の形態に不自然さを残すが、床面の状態からみて壁溝をもつ住居から東壁部を内側に縮小したと考えておきたい。主軸方位はN-16°-Wを示す。

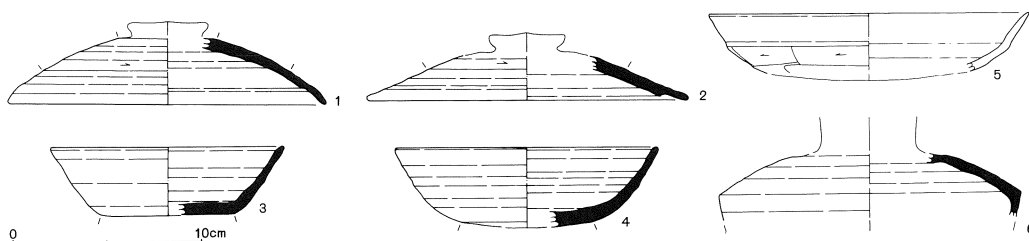
床面は概ね平坦である。覆土は3層に分かれるが堆積環境の詳細は不明である。

カマドは北壁の中央部に設けられる。遺存状態は悪く、袖部は殆ど失われていた。壁溝は北壁東半を除いて巡るが、建て替え前の住居に伴う蓋然性が高いものと判断した。

柱穴は8本検出された。このうちP₁~P₄が主柱穴に相当するものと推定される。他のピットは直接伴うものではなからう。

貯蔵穴はカマド東側に位置する。また第1号土壌は掘方であろう。第2号土壌は底面に炭化物層を形成する。一応床下土壌と考えておきたい。第220~222号土壌は住居を切って構築されており住居に伴うものではない。

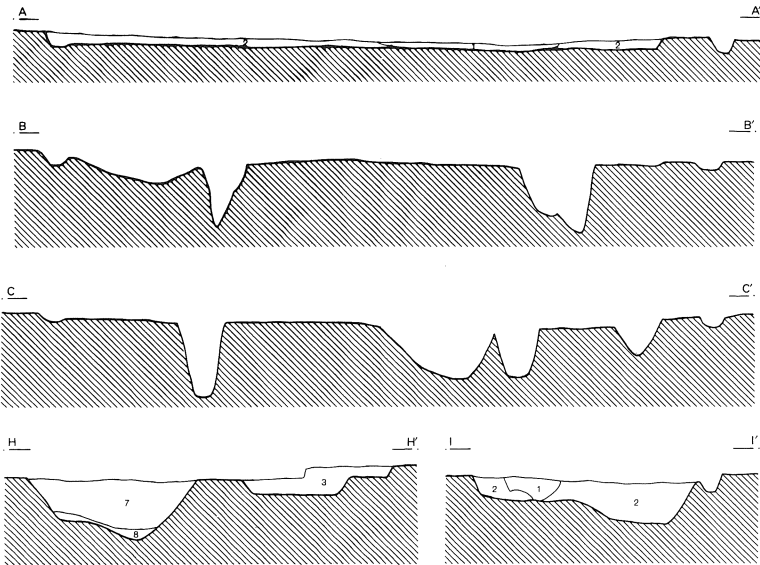
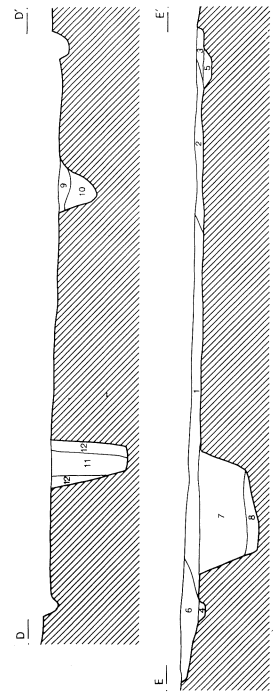
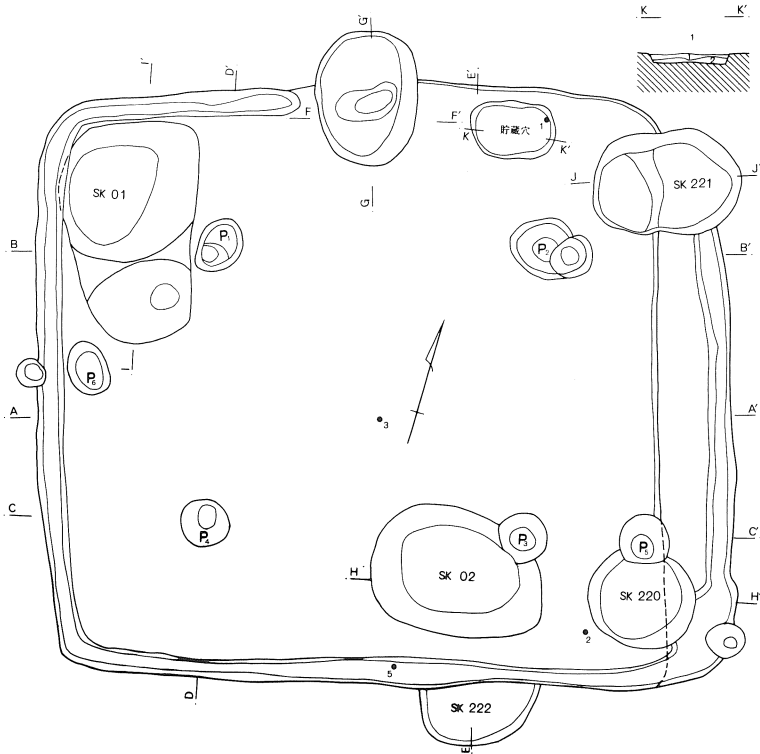
出土遺物には土師器坏、碗、皿、甕、須恵器坏、蓋、甕、瓶が認められる。土師器甕は胴部片と口縁部小片のためやや全体像はつかみにくい。土師器坏にはいわゆる内面に沈線をもつ小型の比企系坏は見られず、浅碗と思しきやや大型化した坏の底部が見られるのみである。須恵器坏の第254図3は底部全面回転へら削りされる。床面から出土したが伴うかどうか判らない。4は丸碗風の坏で底部は篋切り成形されたものと考えられる。図示した以外に山下6号窯又は鳩山I期の坏に類似した丸底風で腰をもつ底部片(底径約12cm)が1点含まれる。須恵器蓋は4点あるが何れも退化したかえりを有するもので3点には白色針状物質が認められる。6の長頸瓶は灰白色の精選された胎土をもち東海産の可能性がある。稻荷前V期後半頃に中心を置くものと推定しておきたい。



第254図 第99号住居跡出土遺物

第99号住居跡出土遺物観察表(第254図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(16.8)	3.4	7.0	AC	B	灰白	20%	№8.貯穴内覆土。
2	蓋	(16.8)	2.3		ABC	A	灰白	25%	№15.SK02覆土。
3	坏	(12.2)	3.6		ABC	A	灰	40%	№7.床面。
4	坏	(13.8)	4.2		AG	B	明褐灰	30%	SK02覆土。
5	皿	(16.8)	3.1		AB	A	橙	20%	№13.覆土。
6	長頸瓶		3.4		BG	A	灰白	15%	覆土。東海産か。

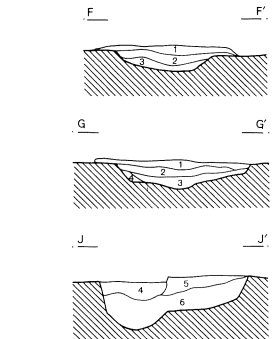


カマド

- 1 暗茶褐色土 焼土粒・ローム粒少量混入。
 - 2 暗黄褐色土 焼土粒・黄褐色粘土粒多量混入。
 - 3 暗褐色土 焼土粒・黄褐色粘土粒多量混入。
 - 4 暗黄褐色土 ローム多量混入。
- 貯蔵穴
- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入。
 - 2 暗黄褐色土 焼土小ブロック少量混入。

SK 01

- 1 褐色土
 - 2 暗褐色土とロームブロックの混土層。焼土粒混入。
- SK 220
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量混入。
- SK 221
- 4 暗茶褐色土 ローム粒多量混入。
 - 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
 - 6 暗黒褐色土 ローム粒少量混入。



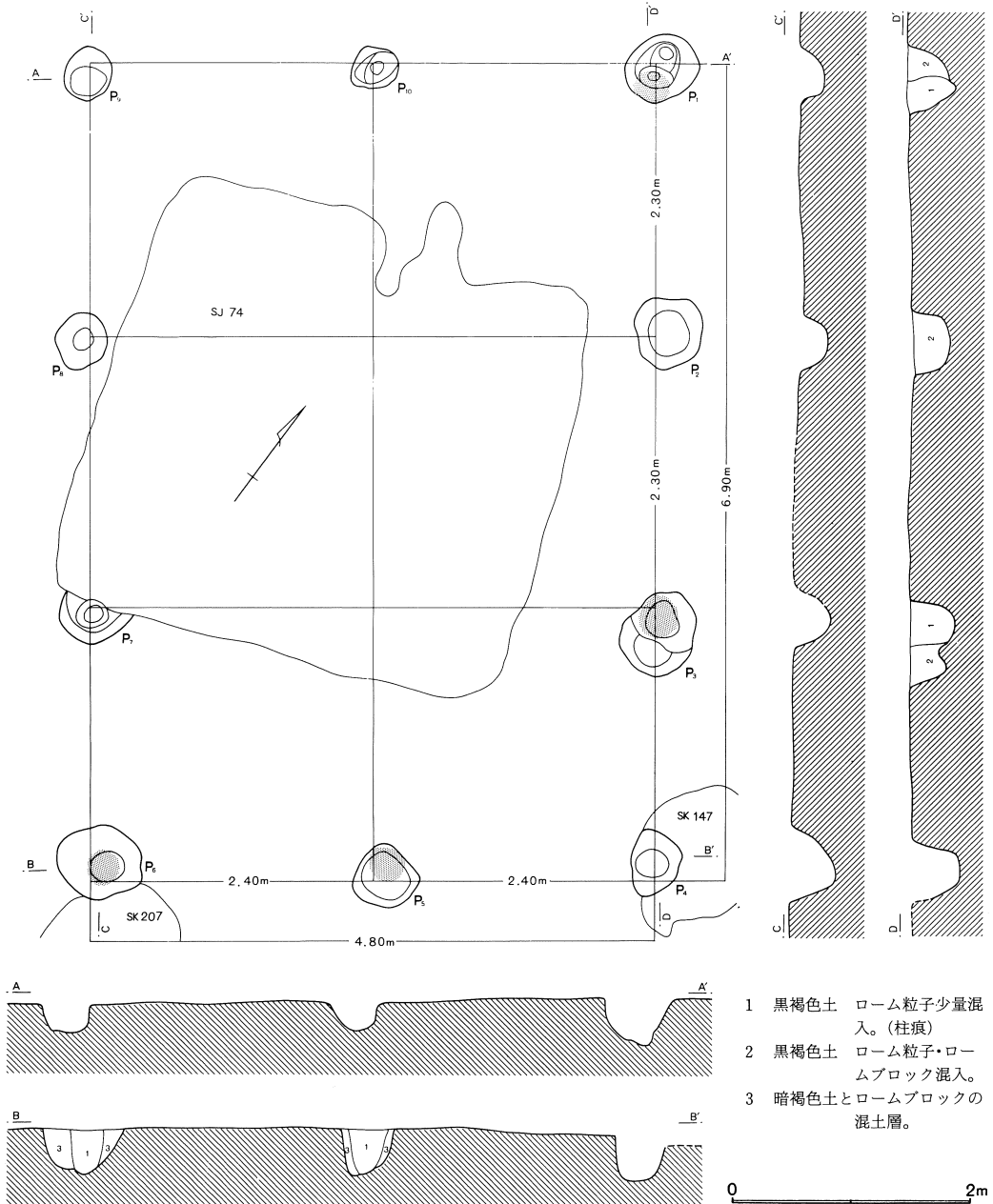
- 1 暗黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入。
- 3 暗黄褐色土 焼土粒・ローム粒多量混入。
- 4 黒褐色土 ローム粒混入。
- 5 暗黄褐色土 焼土ブロック少量混入。
- 6 黒褐色土 ローム粒少量混入。
- 7 暗黒褐色土 ロームブロック多量混入。(SK 02)
- 8 黒色土 炭化物主体。焼土粒少量含。(SK 02)
- 9 暗黄褐色土 ローム粒多量混入。(P₁)
- 10 暗黒褐色土 ローム粒少量混入。(P₁)
- 11 黒褐色土 ローム粒少量混入。(P₄)
- 12 暗黒褐色土 ロームブロック多量混入。(P₄)

第255図 第99号住居跡(L=30.70m)

2. 掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡(第256図)

M-6区に位置し、第74号住居跡と重複するが新旧関係は捉えられていない。3×2間の側柱建物で桁行6.90m、梁行4.80mの規模をもち、各柱間寸法は桁行2.30m、梁行2.40mを測る。主軸方位



第256図 第14号掘立柱建物跡(L=31.10m)

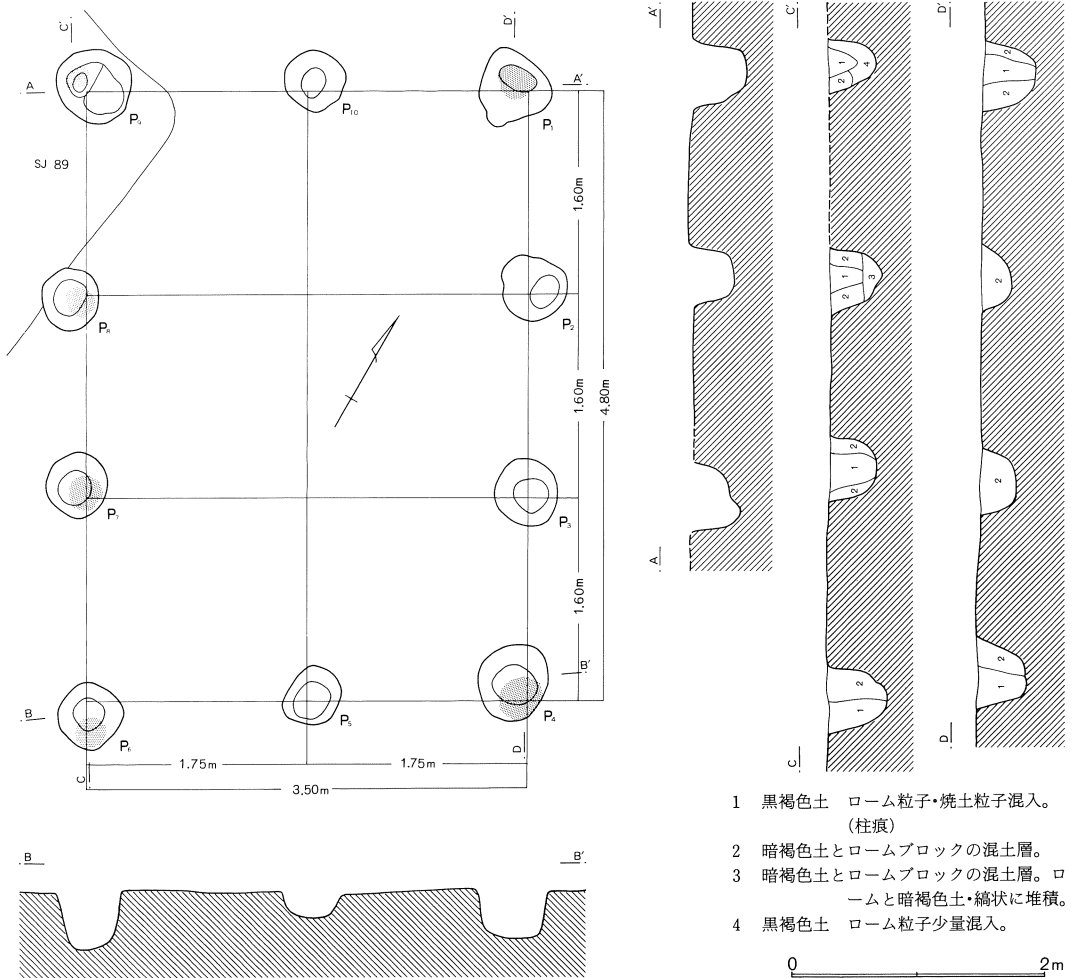
はN-36°-Wを示す。

柱掘方は円形を呈し、比較的規模は小さい。4本の柱穴で柱痕または抜き取り痕と思われる痕跡が確認された。

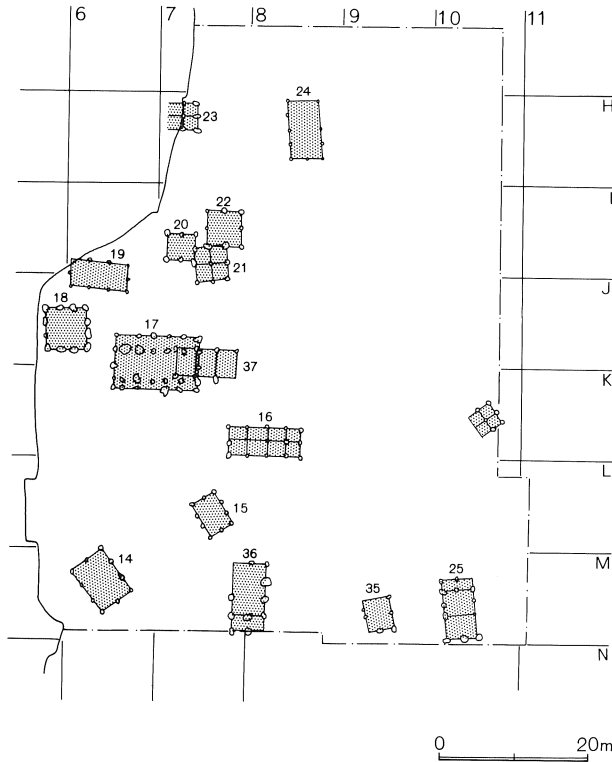
出土遺物は少なく10点のみで、土師器甕、須恵器坏が検出されている。図示した須恵器坏(第273図1)は底部回転へら削り調整されている。P₃から出土したが遺構に伴う可能性は薄いものと考えられる。正確な年代は不明とせざるを得ないが、第15号掘立柱建物跡と主軸方位が近く、南側妻のラインがほぼ揃うことから同一時期に比定できようか。

第15号掘立柱建物跡(第257図)

L-7区に位置する。P₉上面を第89号住居跡に切られており、本建物の方が古い。3×2間の側柱建物で桁行4.80m、梁行3.50mの規模をもつ。各柱穴は規則的に配置され、柱間寸法は桁行1.60m、梁行1.75m等間となる。主軸方位はN-30°-Wを示す。



第257図 第15号掘立柱建物跡(L=31.00m)



第258図 第II群掘立柱建物跡見取図

柱掘方は円形を呈し、径0.50~0.60m、深さは隅柱が深い傾向にある。柱痕または抜き取り痕は6本の柱穴で確認できた。

出土遺物は6点にすぎない。土師器坏と鉢、金環がある。第273図4の金環はP₆の掘方埋土中層から検出されたもので意図的に封入された可能性も考えられよう。金環の出土と併せ、図示した土師器坏から稻荷前V期に比定されるものと考えておきたい。

第16号掘立柱建物跡 (第259図)

K-7・8区に位置する。第96・97号住居跡と重複し、本建物の方が新しいものと判断

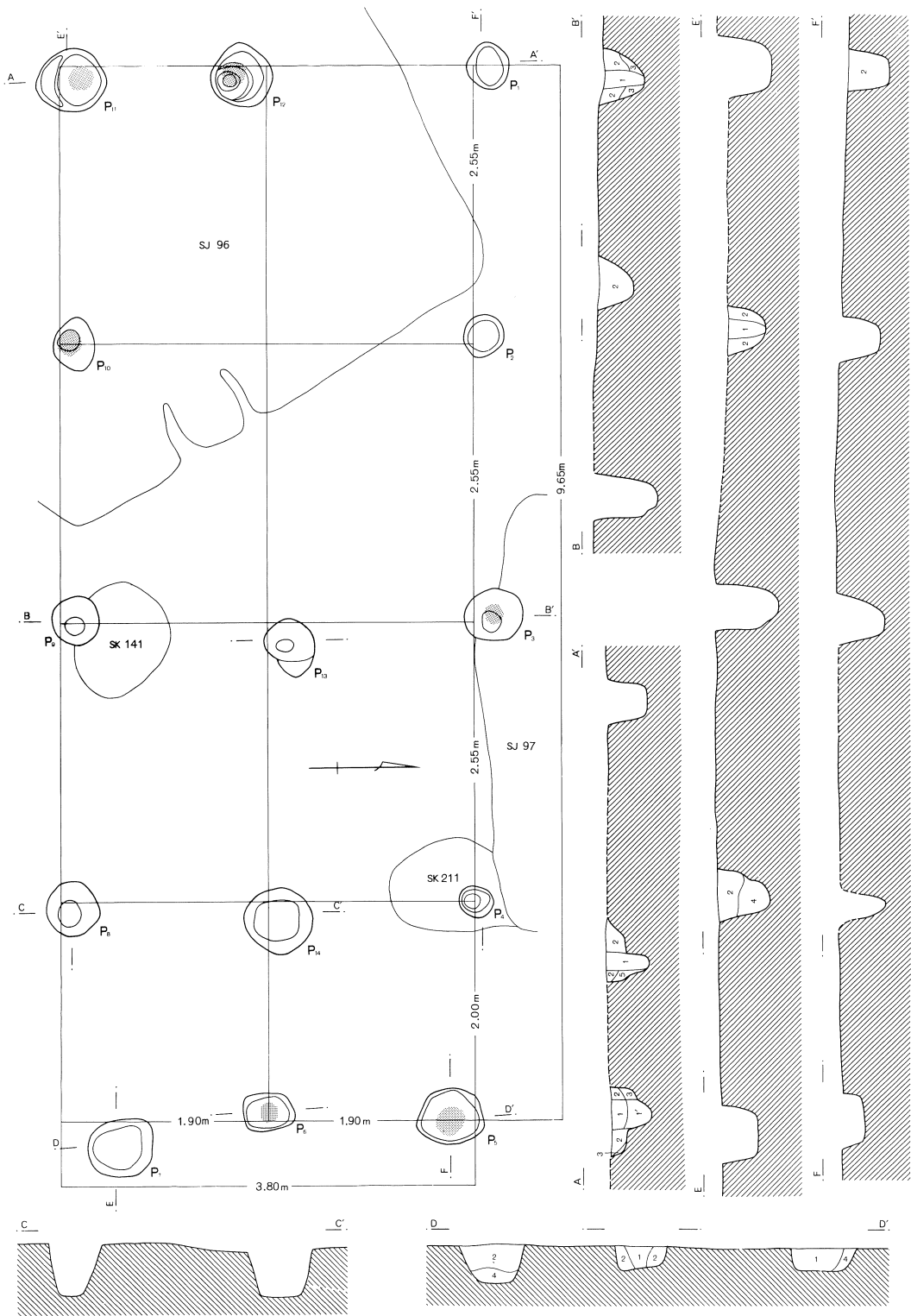
された。ほぼ東西棟の3×2間の建物で東妻側に庇をもつ。一応側柱建物と考えたが、P₁₃が伴うとなると、一部床張りの建物と推定される。

身舎の桁行7.65m、梁行3.80m、柱間寸法は桁行2.55m、梁行1.90mを測る。但し東西の妻中間柱は中心からややずれ気味である。庇柱は身舎からの距離2.00mを測り、身舎の桁行寸法よりもやや短い。また南北の隅柱P₅・P₇は側柱の柱筋よりも内側に入っている。主軸方位はN-90°-Wを指す。

柱掘方は円形を呈し、径0.40m前後の比較的小規模のものが主体を占める。身舎柱の深度は0.50~0.60mの比較的深いものが多いのに対し、庇柱は0.35m以下と浅くなっている。

覆土は第1層が柱痕に相当する。ローム粒子を僅かに含む暗褐色土で締まり弱い。第2~4層は掘方埋土である。褐色系でロームブロックの混入が多く締まりが強い。

出土遺物はP₂から須恵器甕の細片が1点検出されただけで、建物の年代を明らかにする資料に欠けるが、柱穴規模が小さくかつ深いことや柱間寸法が間延びしている点、覆土の状態等から中世の建物と考える。



第259图 第16号掘立柱建物跡(L=30.90m)

第17号掘立柱建物跡(第260・261図)

J・K-6・7区に位置する。第16・22号井戸跡と重複し、前者よりも新しいことは判明したが、後者との新旧関係は不明である。また37号掘立柱建物跡とも切り合い関係を有し、柱穴の断面観察から本建物の方が新しいことが確認されている。

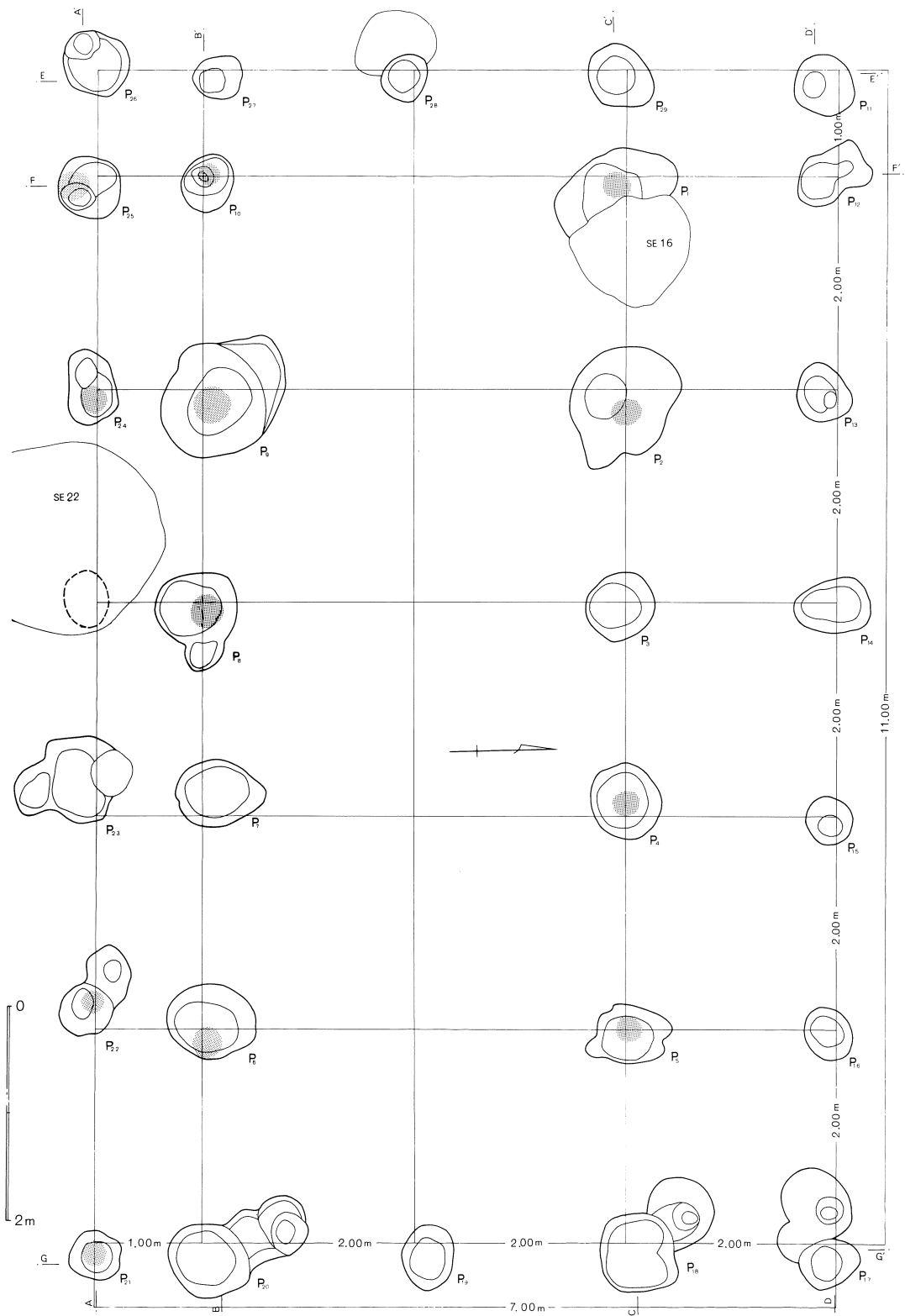
5×2間の3面庇、または6×2間の2面庇の大型側柱建物と考えられる。前者と考えた場合、西側妻の中間柱が存在せず棟を如何に支えたのか解釈に苦しむ。また後者を想定した場合、桁行の柱間寸法が1スパンのみ短くなってしまい、かつ柱穴規模も一回り小さくこれまた問題が生じる。一応柱穴規模と柱間寸法を重視し、5×2間の3面庇建物と仮定して述べると、身舎の規模は桁行10.00m、梁行4.00mとなり柱間寸法は桁行、梁行共に2.00mを測る。主軸方位はN-88°-Wを示す。

柱掘方は円形を呈し、径0.60~0.80m、深さ0.40~0.60m程のものが主体を占める。北庇は身舎と同一寸法をもつが、柱穴規模がやや小さく深度も浅い。西庇及び南庇は身舎との間隔が1.0mと身舎柱間寸法の1/2に設定されている。やはり柱穴規模は小さめで深度もやや浅い。

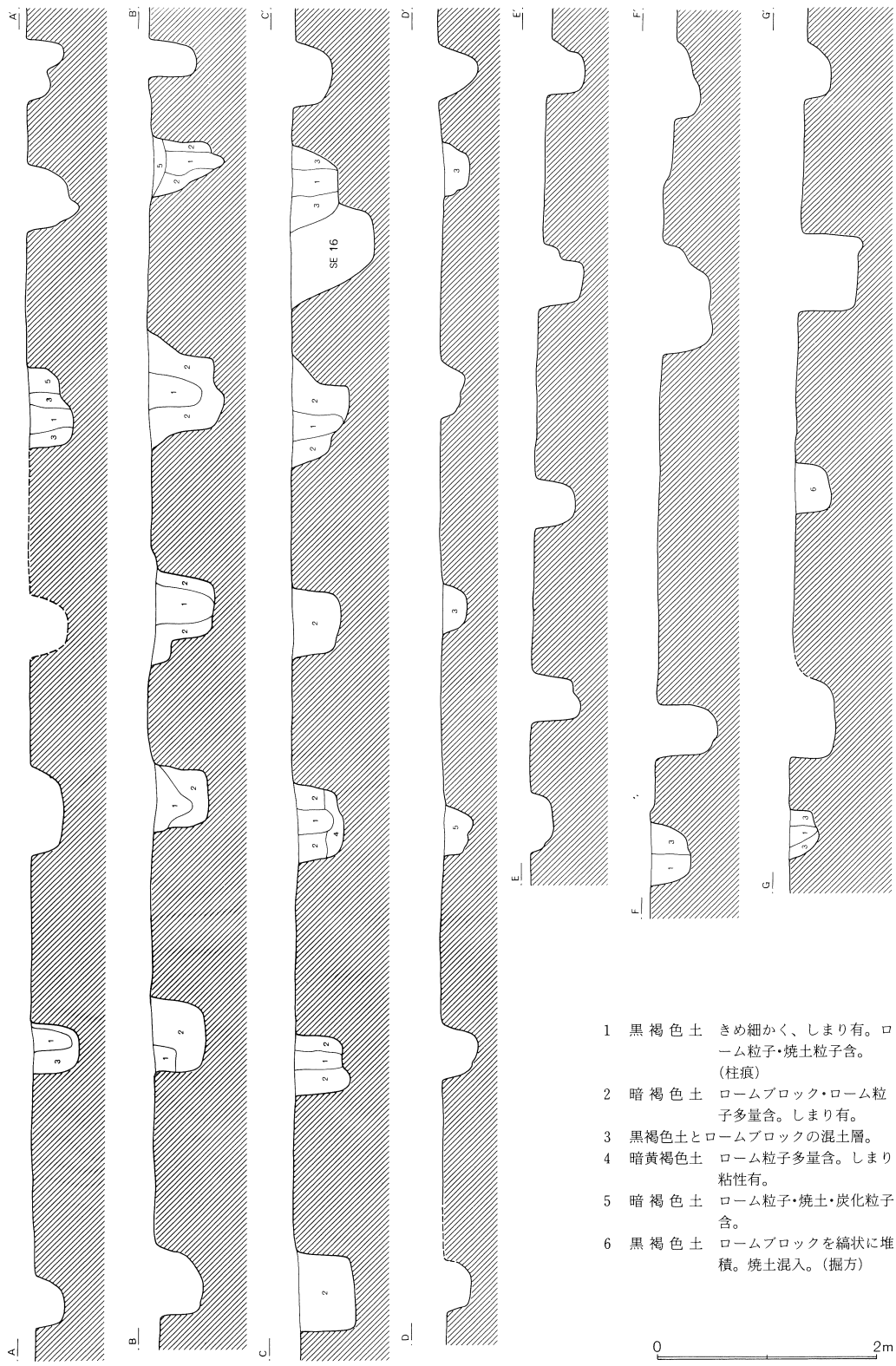
出土遺物は81点検出された。器種的には土師器坏、甕、壺、須恵器坏、蓋、甕、壺の他、鉄器2、鉄滓1、土師質皿1点がある。風化した小片が多く7世紀代から10世紀に入るかと思われる遺物を含み時期的にまとまる様相はみられない。調査当初は古代の建物と考えたが、古代の大型建物に比較して柱掘方は規模がやや小さく、形態も円形を呈すること、建物構造が異質であること、また1点のみであるが土師質皿と思われる土器が存在する(第273図11)ことから、中世の建物と推定される。また鉄滓は径約5cm、重量50gを量る。



▲第II群第17号掘立柱建物跡周辺



第260图 第17号掘立柱建物迹(1)(L=30.90m)

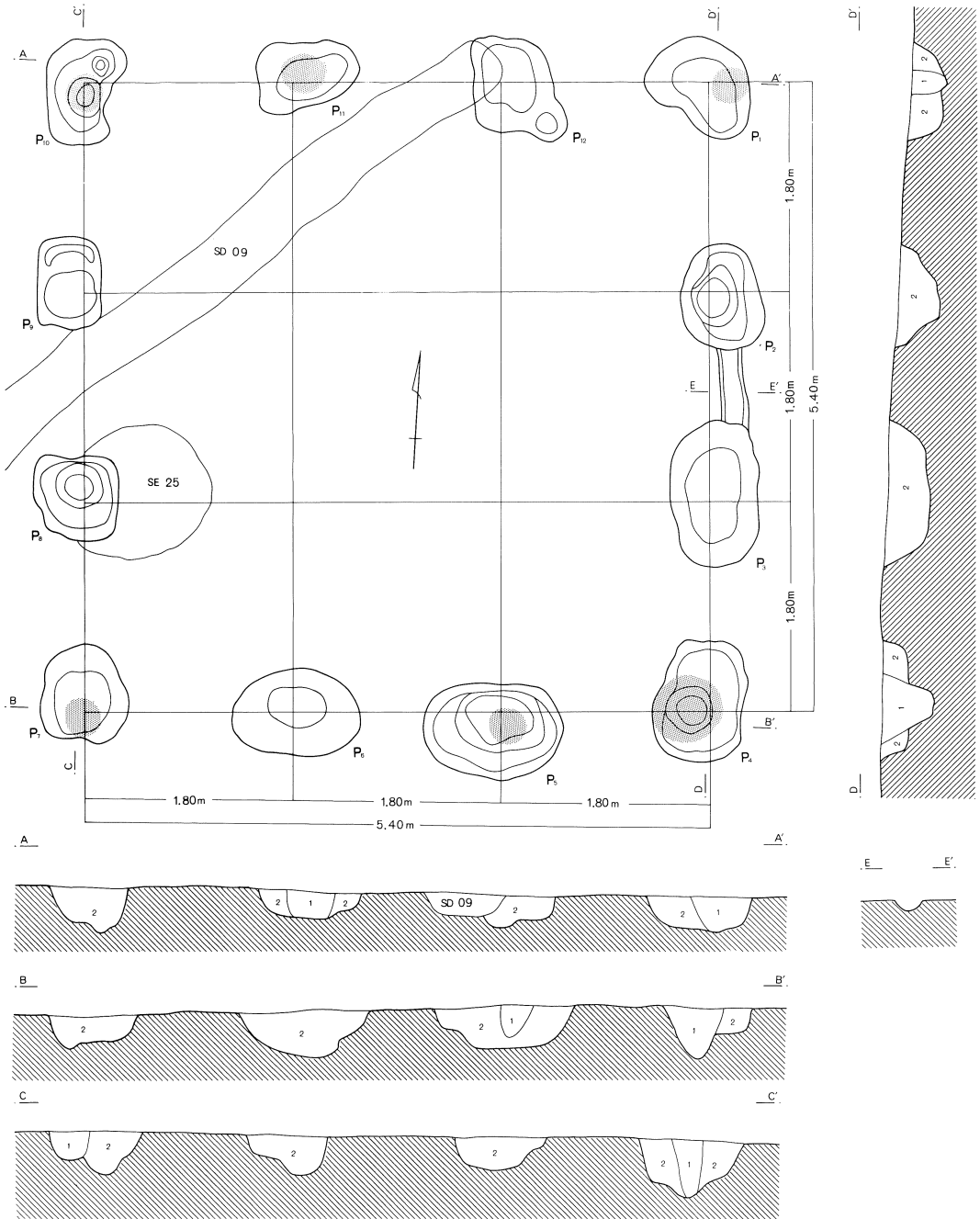


- 1 黒褐色土 きめ細かく、しまり有。ローム粒子・焼土粒子含。(柱痕)
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量含。しまり有。
- 3 黒褐色土とロームブロックの混土層。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子多量含。しまり粘性有。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土・炭化粒子含。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを縞状に堆積。焼土混入。(掘方)

第261図 第17号掘立柱建物跡(2)(L=30.90m)

第18号掘立柱建物跡(第262図)

J-5・6区に位置する。第25号井戸跡、第9号溝跡と重複し、断面観察により前者よりも新しく後者よりも古いことが判明した。3×3間の側柱建物で桁行、梁行共に5.40mの規模をもつ。主軸方位はN-2°-Wを示す。



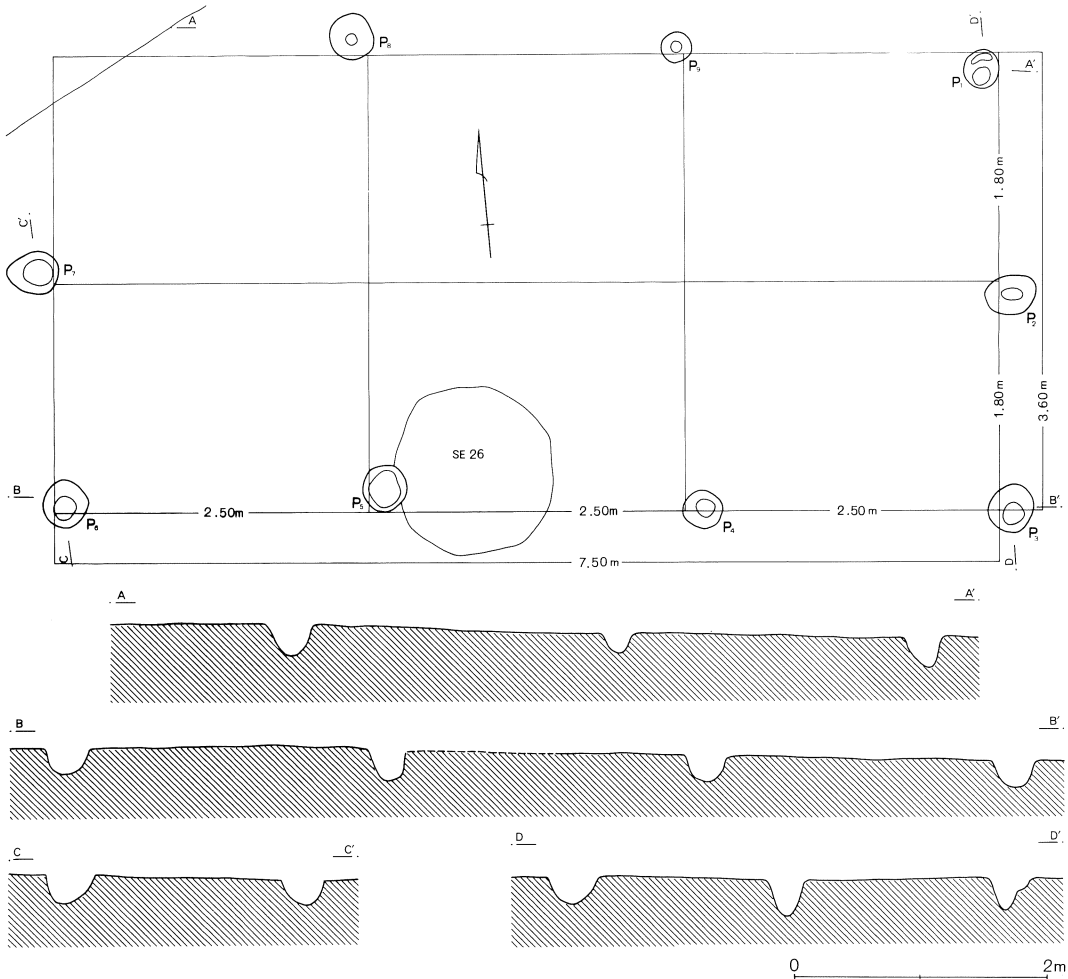
第262図 第18号掘立柱建物跡(L=30.90m)

柱間寸法は1.80m等間となろう。柱掘方は隅丸方形を意識したもので、隅柱のP₁・P₁₀は「L」字状に屈曲する。径0.80~1.20m、深さ0.20~0.50mを測る。柱痕は6本の柱穴で確認され、多くは抜き取り痕と思われる。焼土とローム粒子を含む黒褐色土で構成され、締まり弱い(第1層)。掘方埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で埋められ、強く突き固められていた(第2層)。またP₂・P₃間は浅い溝で連結されていた。性格は不明であるが、本建物に伴うものと判断した。

出土遺物は土師器壺、甕、台付甕、須恵器環の破片が計23点検出された。全て小片で図化し得るものは1点にすぎず、正確な年代を比定することはできないが、掘方形態等から古代であることは間違いない。土師器甕は所謂「コ」の字甕の系列下に位置付けられ、肩部横削りが認められる。8世紀後葉から9世紀代と推定しておきたい。

第19号掘立柱建物跡(第263図)

I・J-6区に位置する。第26号井戸跡と重複し、本建物が切って構築されていた。3×2間の側



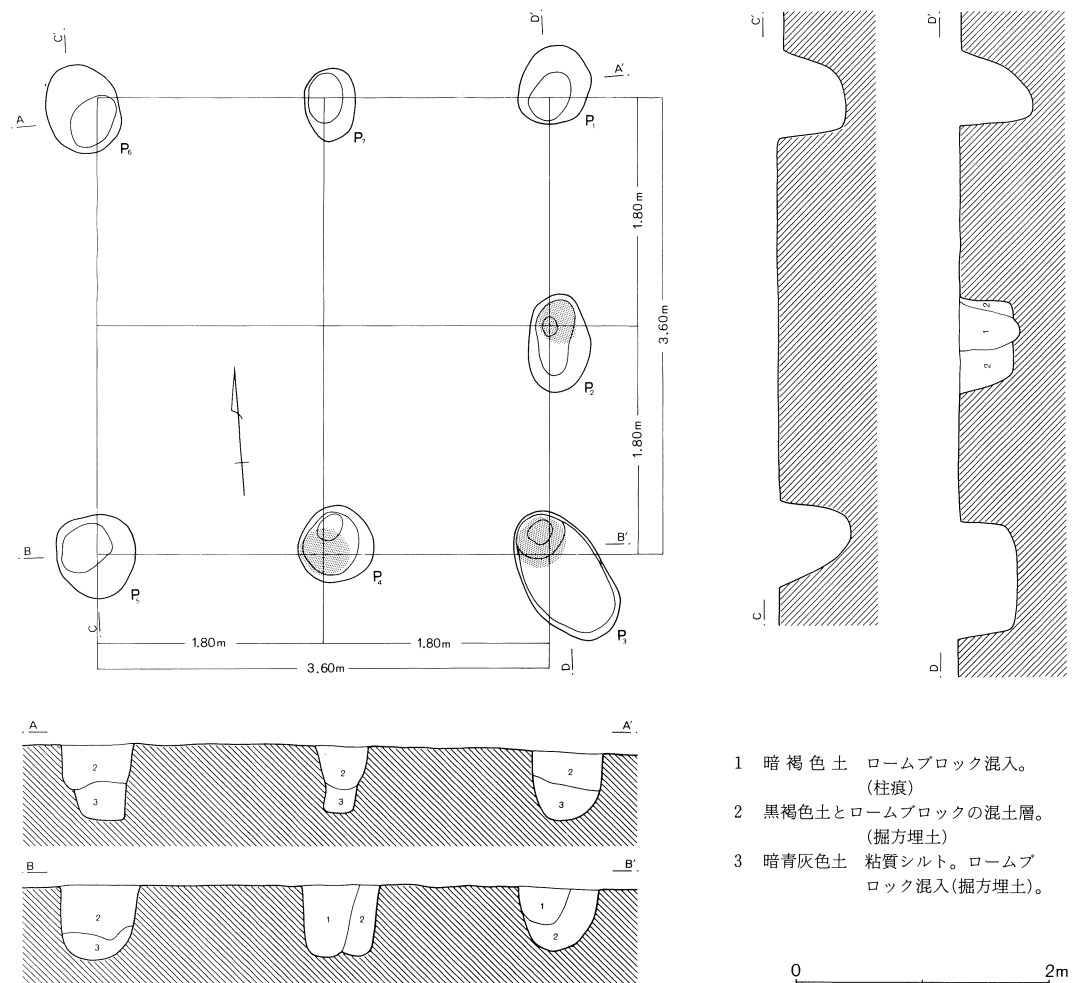
第263図 第19号掘立柱建物跡(L=30.50m)

柱建物と推定されるが北西隅柱は調査区外に存在し検出されなかった。桁行7.50m、梁行3.60mの規模をもち、柱間寸法は桁行2.50m、梁行1.80mと考えられるが、各柱穴の配置は、ずれ気味で芯々を通らないものがある。妻側中間柱は棟持柱風にやや外側に突出する。主軸方位はN-86°-Wを指す。柱掘方は円形を呈し、径0.30m前後、深さ0.20~0.30mを測る規模の小さいものである。断面観察を行なった柱穴では所謂掘方部分は殆どなく、柱径より僅かに大きな柱穴を掘削したものと推定される。

出土遺物はP₆から須恵器瓶の肩部片が1点検出されたのみで、時期決定の資料に欠けるが、柱掘方の形態や規模から推して古代のものとは思われない。中世段階の構築と捉えておきたい。

第20号掘立柱建物跡(第264図)

第II群北側緩斜面のI-7区に位置する。第21号掘立柱建物跡と重複し、P₂の土層観察により本建物が新しいものと判明した。2×2間の倉庫様建物であるが、西側柱筋の中間柱と中央の束柱は当



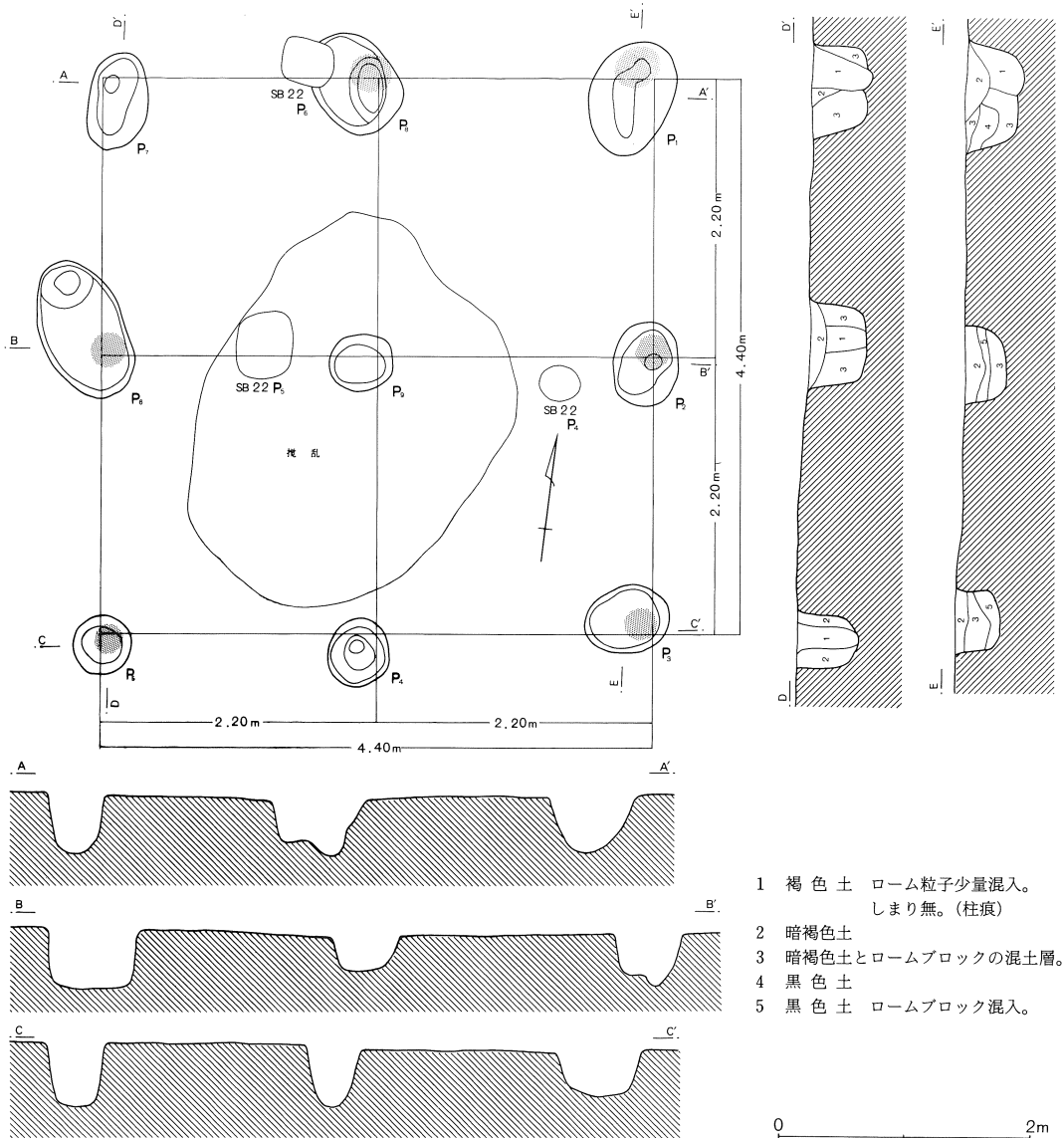
第264図 第20号掘立柱建物跡(L=30.30m)

初より存在しない。規模は一辺3.60m、柱間寸法は1.80m 等間を測る。主軸方位はN-4°-Eを指す。柱掘方は円形を呈し径0.50~0.60m、深さ0.60m 前後を測る。柱痕は全て抜き取られたものと考えられる。

出土遺物はP₅から8~9世紀と推定される須恵器蓋の破片が1点検出されただけで、正確な年代は押さえられない。古代のものであろう。

第21号掘立柱建物跡(第265図)

I・J-7区に位置する。第20・22号掘立柱建物跡と重複し、何れよりも古いことが確認された。2×2間の総柱建物で、一辺4.40m、柱間寸法は2.20m 等間となる。主軸方位はN-7°-Wを指す。



第265図 第21号掘立柱建物跡(L=30.30m)

柱掘方は円形から楕円形を呈し、径0.50～0.90m、深さ0.50m前後と比較的深い。但し東柱はやや規模が小さく深度も浅い。柱痕は6本の柱穴で検出されたが、殆どが抜き取られたものと推定される。出土遺物は6点検出されたに留まる。器種としては土師器坏、甕、須恵器坏があり、7世紀後半～8世紀代に含まれる時期のものであろう。

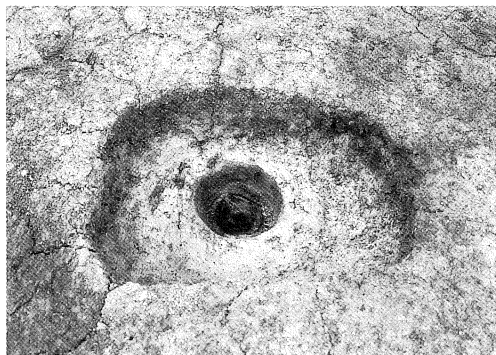
第22号掘立柱建物跡(第266図)

I-7区、北に傾斜する斜面部に位置し、重複する第21号掘立柱建物跡を切って構築される。3×2間の側柱建物で規模は桁行7.05m、梁行4.60m、柱間寸法は桁行2.35m、梁行2.30mを測るが、一部柱痕の位置がずれるのがみられる。なお、南東隅柱は入念に確認したが検出できなかった。主軸方位はN-2°-Eを指す。

柱掘方は円形または隅丸方形を呈し、径0.50m前後、深さ0.20～0.30mを測る。P₈・P₉からは柱材と考えられる木片が残存していた。その他P₅以外の柱穴では柱痕が確認されている。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏の細片が4点検出されたのみである。建物の時期を推定する根拠としては弱い。やや柱穴規模が小さい点疑問もあるが、中世以降の遺物が皆無でもあり一応古代の建物と推定しておきたい。

第273図23～25はP₉から出土した木片である。23は径が細く柱材には不向きである。24は柱材の一部かも知れない。斧状工具の痕跡が残る。25はP₈から出土した柱材である。残存径11.2cmで下端は斧状工具で斜めに切断されていた。



▲SB22 P₈



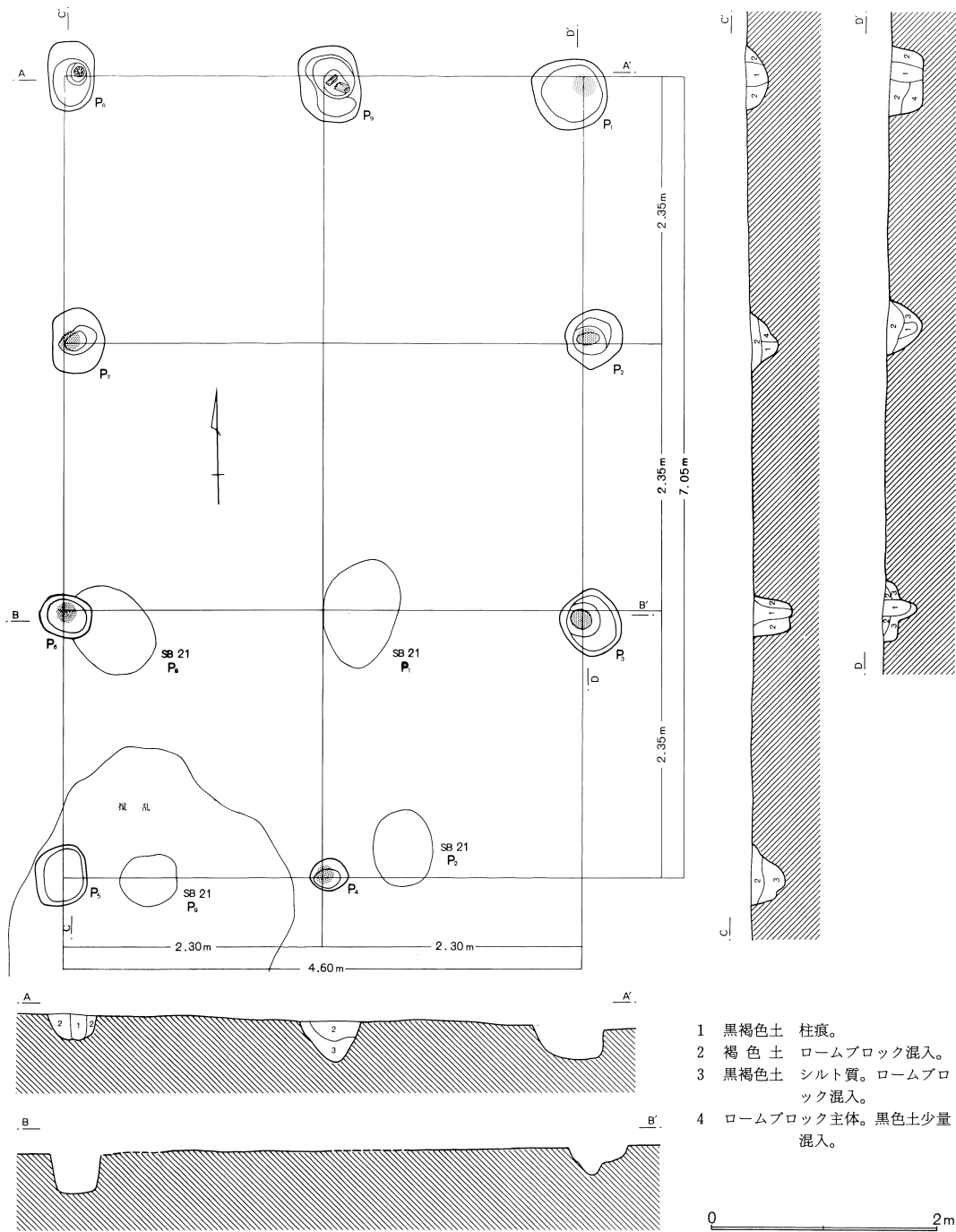
▲SB22 P₉

第23号掘立柱建物跡(第267図)

H-7区に位置する。II群とIII群を区画する谷地形の底面に所在し、一部西側の調査区外に延びている。確認された建物は2×1間の総柱であるが、おそらく2×2間の総柱建物になるものと推定される。

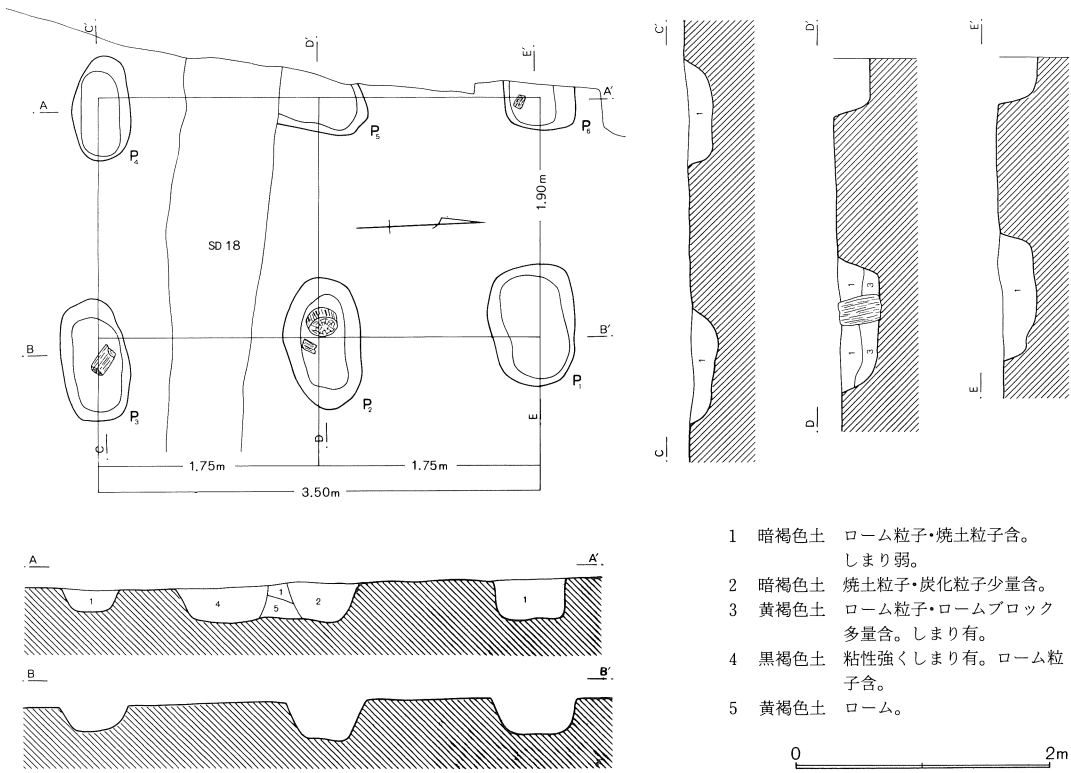
残存規模は南北約3.50m、東西1.90mを測る。柱間寸法は凡そ南北1.75m、東西1.90m程となる。主軸方位はN-1°-Eを指す。

柱掘方は隅丸長方形を呈し、長径0.80～1.00m、深さ0.20～0.30mを測る。柱痕は明瞭には確認



第266図 第22号掘立柱建物跡(L=30.30m)

されなかったが、 $P_2 \cdot P_3$ では柱材と考えられる丸太材が、 P_6 でも木片が遺存していた。特に P_2 の柱材は径23cmを測る大型材でほぼ据えられた状態で出土している(第273図26)。底面は斧状工具による加工痕が明瞭に残されている。倉庫とするに十分な柱であろう。束柱と考えられる P_5 は第18号溝



第267図 第23号掘立柱建物跡(L=30.20m)

跡の攪乱を受け全容は不明であるが、他の柱穴と規模は大差ない。

出土遺物は、P₂埋土中から須恵器環と甕が各1点検出されたのみである。年代的に限定するのは難しいが、出土土器及び掘方構造から古代の建物であることは間違いなく、おそらく8～9世紀代の建物であろう。



▲第23号掘立柱建物跡



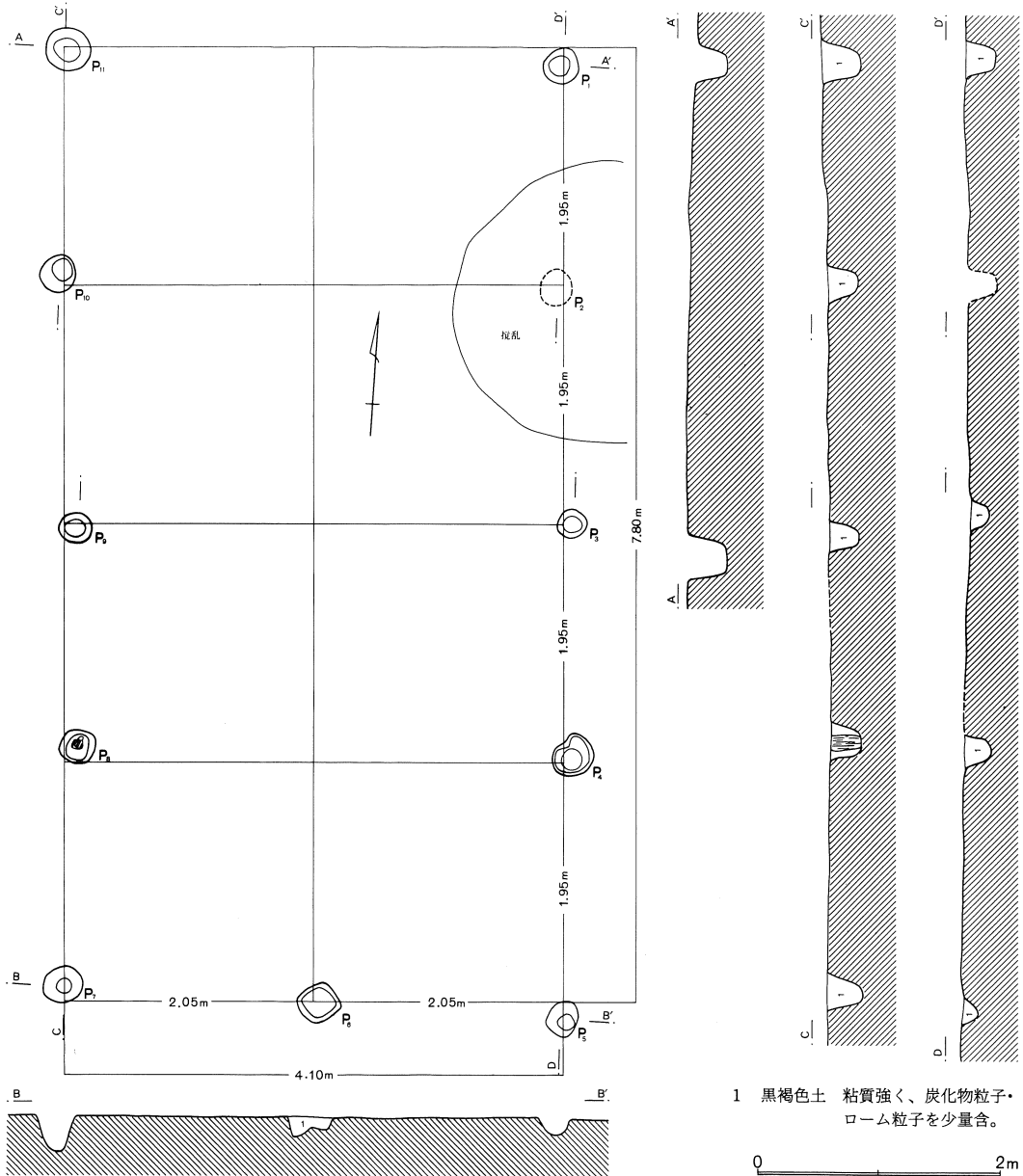
▼P₂出土柱根

第24号掘立柱建物跡(第268図)

H-8区に位置する。23号掘立柱建物跡と同様谷底の低地部に構築されていた。4×2間の側柱建物と考えられるが、北側妻の中間柱は検出されなかった。またP₂に相当する柱穴は倒木痕の攪乱を受け残存しない。

規模は桁行7.80m、梁行4.10m、柱間寸法は桁行1.95m、梁行2.05mを測る。主軸方位はN-4°-Wを指す。

確認された柱穴は全体に規模が小さく、径0.30m前後のものが多い。柱痕の残されたものは確認



第268図 第24号掘立柱建物跡(L=29.90m)

できなかったが、P₈には径約10cmを測る柱材そのものが遺存していた。

出土遺物はP₁・P₄から土師器甕の細片が各1点検出されたのみで時期決定の資料に欠ける。感覚的にしかいえないが、柱穴規模が小さいことから中世の建物である可能性が高いものと考えておきたい。

第25号掘立柱建物跡(第269図)

II群南西端のM-10区に位置する。4×2間に妻庇をもつ建物、或いは5×2間の建物と考えられる。北東隅柱と西側柱の1本が欠けるが、両柱穴とも確認したが存在しなかった。何れの構造をとるか決定できないが、一応前者として説明すると、身舎の規模は桁行6.40m、梁行4.00m、柱間寸法は桁行1.60m、梁行2.00mとなる。庇状の張り出しは北側の妻に付き、柱間寸法及び柱穴規模は身舎と同等である。主軸方位はN-7°-Wを指す。

柱掘方は円形または隅丸方形を呈し、深さは0.50m前後のものが多く比較的深い。柱痕が確認されたのは3本の柱穴に留まる。このうちP₆では抜き取った形跡が明瞭に観察された。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器甕の破片が10点検出された。2点を図化した(第273図6・7)が、何れも8世紀初頭以前のものでそれよりも新しい段階の遺物は含まれない。古代の建物であることは疑いないが正確な時期は不明である。出土遺物とともに主軸方位が北からやや西に振れていることからみると以外に古くなる可能性もある。一応稲荷前V期頃に位置付けておきたい。

第35号掘立柱建物跡(第270図)

M-9区に位置する。第78・79号住居跡と重複するが、新旧関係は明確に捉えられていない。P₄の上面に貼床されたような形跡が窺え、第79号住居跡よりも古い可能性が高いものと考えておきたい。整理時に抽出した建物であるため全体の柱穴配置や規模に不明確な点がある。一応2×2間の側柱建物と推定されるが、P₈・P₉の配置がずれてしまう。また、P₇は西側柱筋に乗るが、伴わないかもしれない。

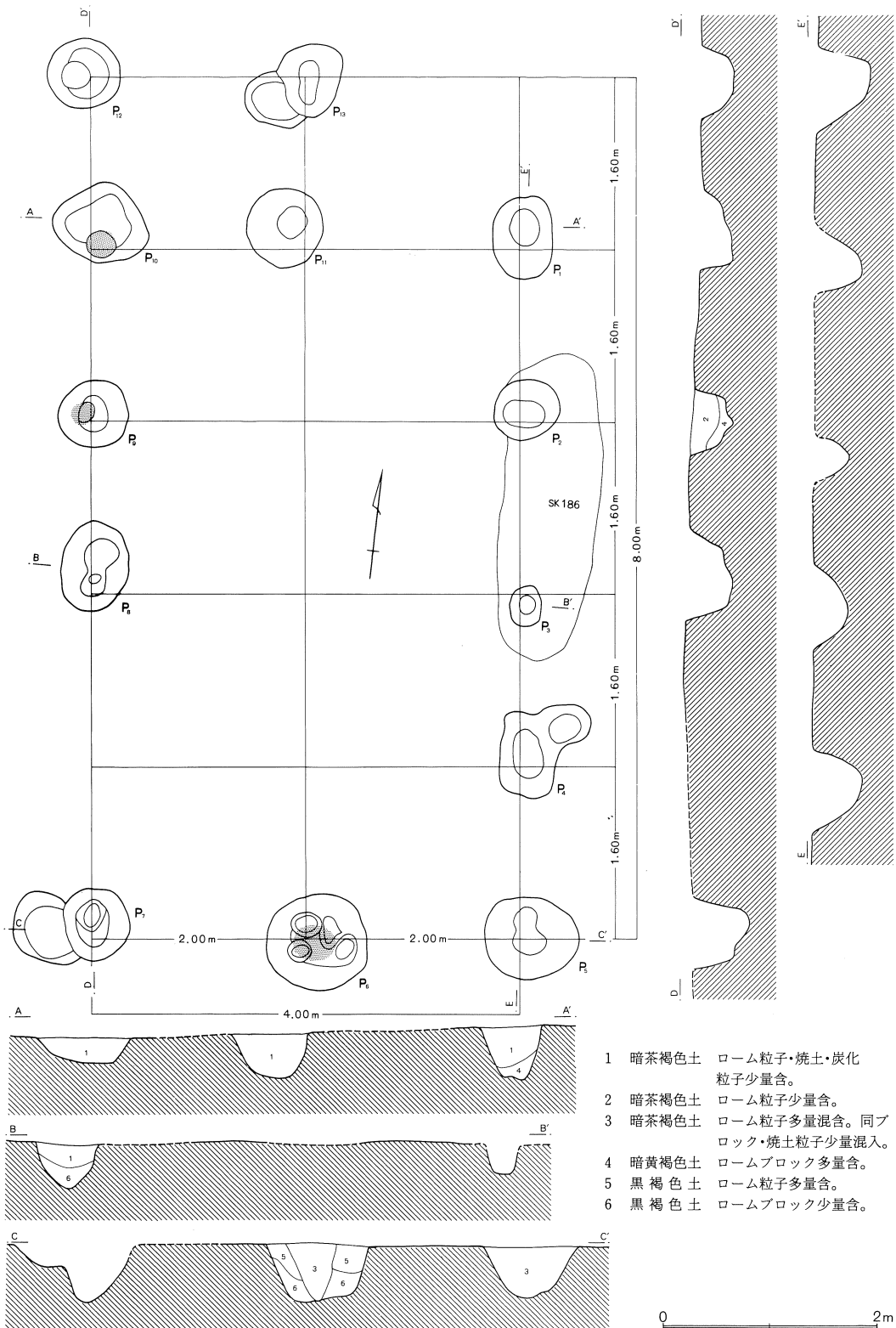
規模はP₈・P₉を無視すると桁行4.40m、梁行3.60m、柱間寸法は桁行2.20m、梁行1.80mを測る。主軸方位はN-8°-Wを指す。

柱掘方は円形から楕円形を呈し、径0.50~0.80mが主体となる。深さは0.20~0.30m程と比較的浅い。柱痕が明瞭に観察されたものはみられなかった。

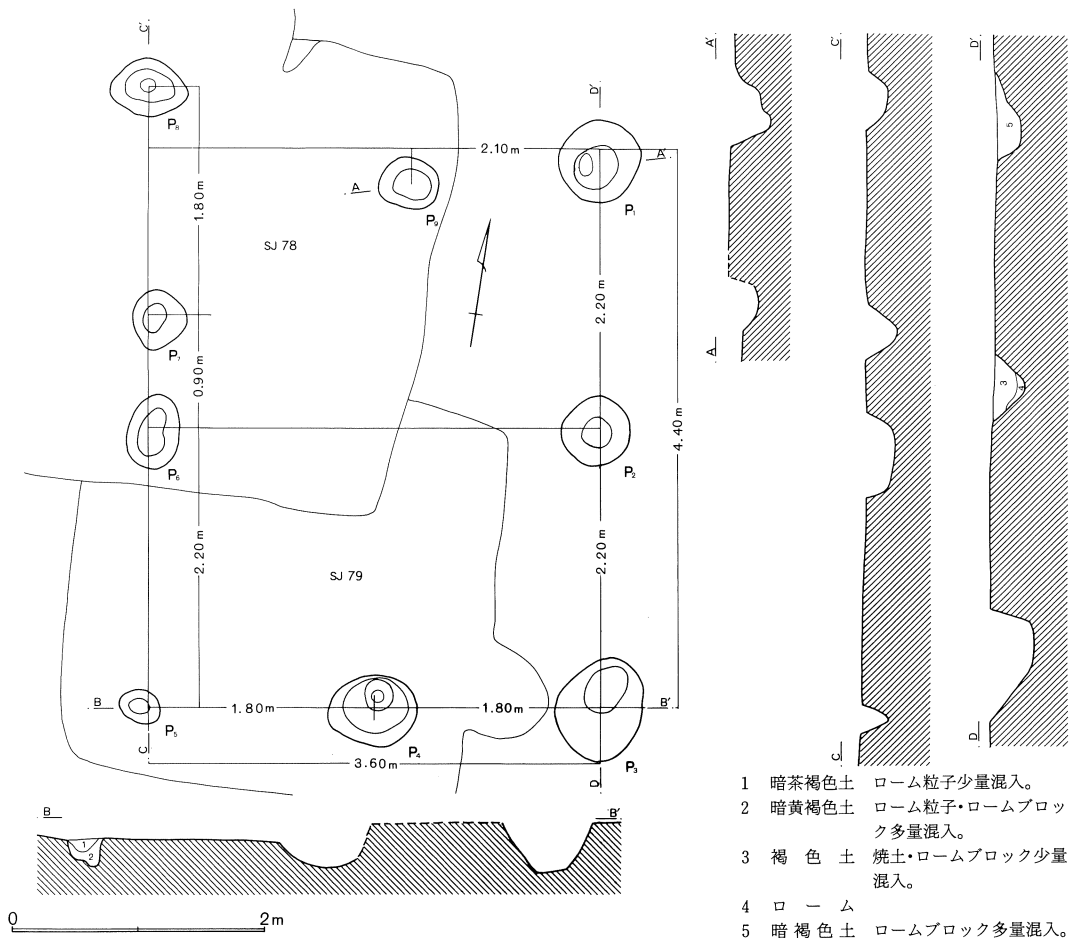
出土遺物はP₁・P₃から土師器甕の小片が3点検出されたのみである。何れも7世紀から8世紀前半頃の特徴を有しており、特に新しい遺物は含まれない。年代を限定することは難しいが、若し重複する住居よりも古いとすると稲荷前VIII期以前とすることができる。

第36号掘立柱建物跡(第271図)

M-7・8区に位置する。調査時に建物として把握されなかったために、不明な点を残してしまった。一応3×2間の側柱建物で南側妻に庇が付く構造と考えたが、庇の東隅柱が確認されておらず、また建物北西部は攪乱を受け柱穴の配置が不明である。P₉が柱筋にうまく対応しないが、覆土の状



第269図 第25号掘立柱建物跡(L=30.70m)



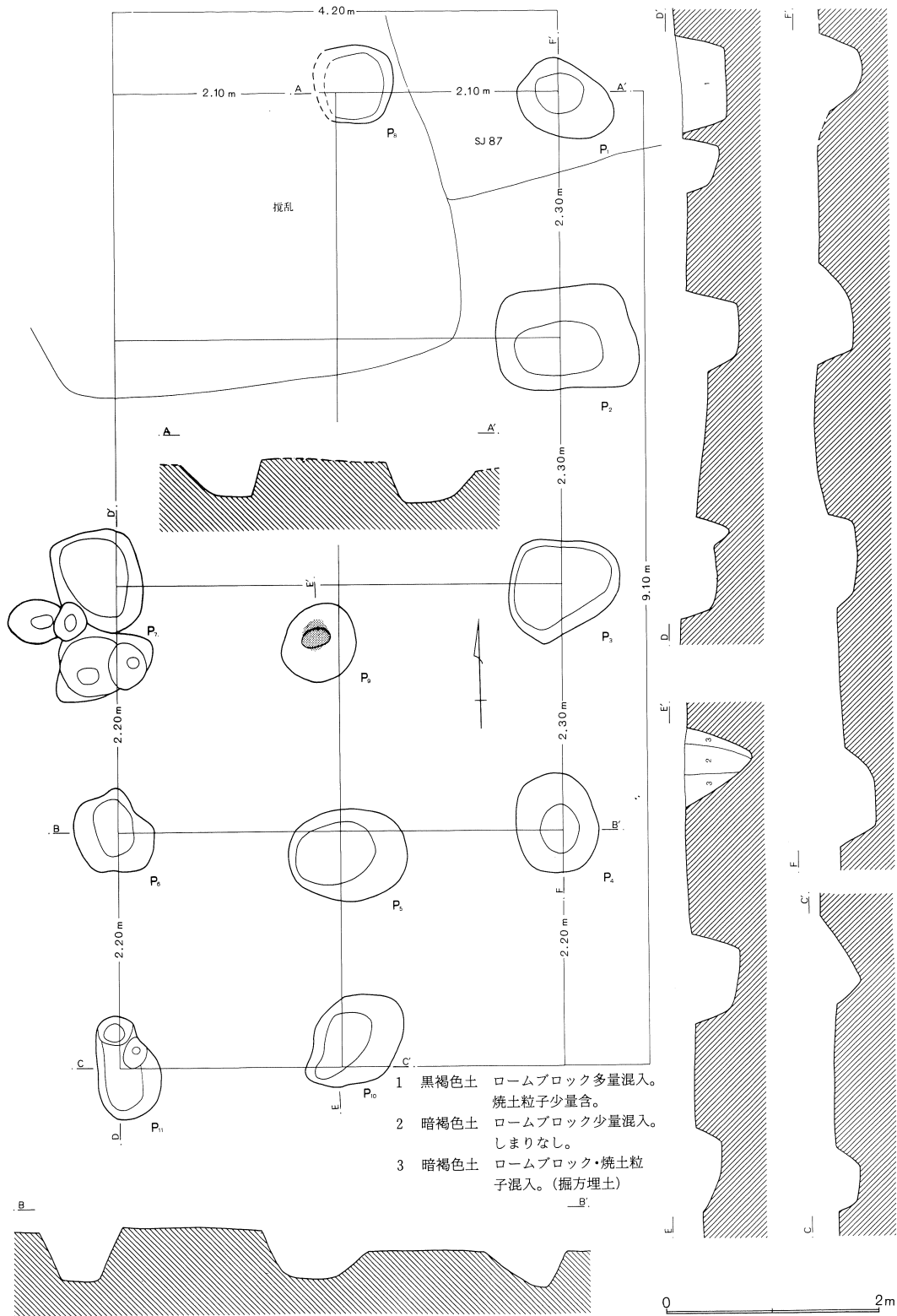
第270図 第35号掘立柱建物跡(L=30.90m)

況は建物柱穴と考えても違和感がなく柱痕も残されている。本建物に伴うか否かもはや知る術はないが、P₉の捉え方如何によっては総柱、或いはP₉~P₁₀を隅柱とする、西に延びる別の建物の存在を想定することさえ可能である。

庇を含めた規模は桁行9.10m、梁行4.20m、身舎桁6.90mを測る。柱間寸法は身舎の桁行2.30m、梁行2.10mとなる。主軸方位はN-1°-Wを指す。

柱掘方は方形または楕円形を呈し、径0.80~1.35mに及ぶ規模の大きなもので占められている。深さは0.30~0.50m前後で、庇柱がやや浅い傾向にある。

出土遺物は土師器坏、高台坏、甕、須恵器坏、蓋、甕、甌、灰釉碗の破片が計37点検出された。5点を図化した(第273図15~19)が、灰釉碗(第273図16)はP₉から出土したもので前述したように伴うか否か判断できないが、須恵器坏類(15・17・18)が構築年代に近いものと考え、稻荷前 XIII~XIV 期に比定しておきたい。



第271図 第36号掘立柱建物跡(L=31.10m)

第37号掘立柱建物跡(第272図)

J・K-7区に位置し、第17号建物とP₂・P₆で重複する。P₆の土層観察から本建物が切られていることが判明している。3×1間の東西棟の建物であるが、妻の中間柱と南東隅柱が検出されず構造的に疑問もある。

規模は桁行8.40m、梁行3.80m、側柱の柱間寸法は2.80m等間となり、柱間寸法が長いのが特徴である。主軸方位はN-89°-Wを指す。

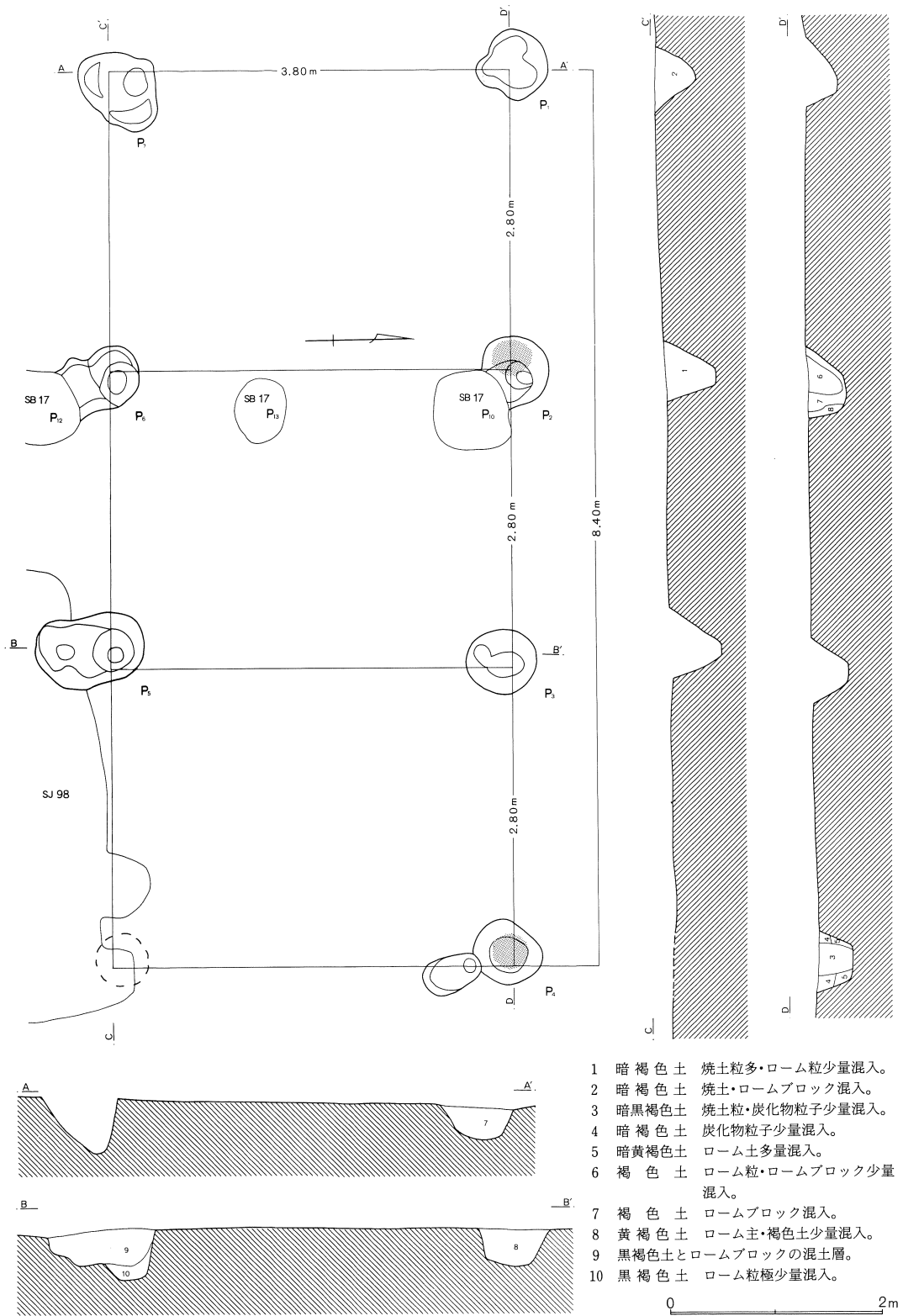
柱掘方は円形を呈し、径0.70m前後で深さ約0.40m程の規模をもつ。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、甕と中世と推定される軟質陶器の土釜? (第273図20)、鉄器(21)、砥石(22)が計12点検出された。正確な年代は不明であるが、中世であることは疑いなくおよそ15～16世紀頃と推定される。

第II群掘立柱建物跡出土遺物観察表(第273図)

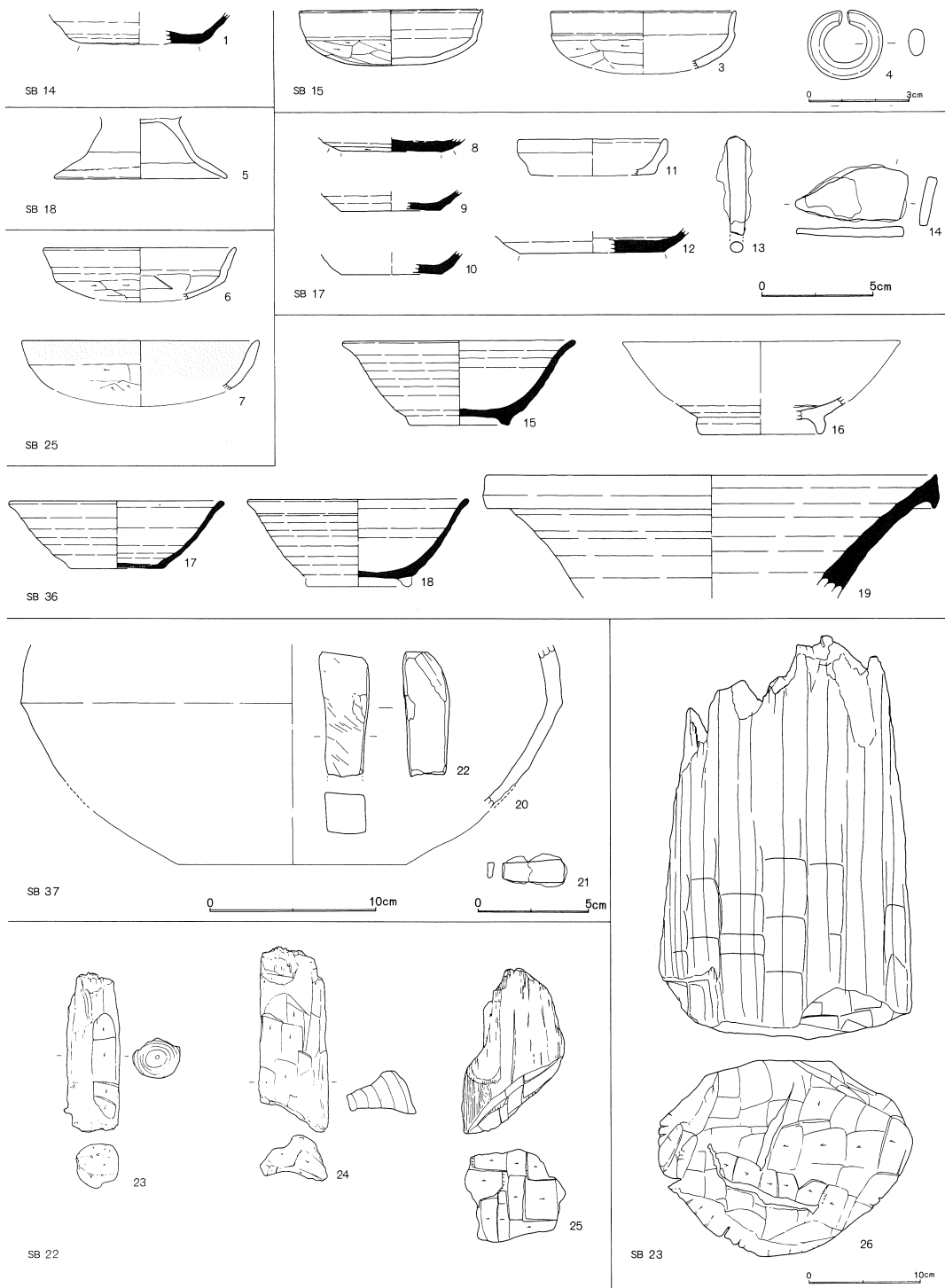
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏		1.8	(7.3)	BC	A	灰	10%	SB14-P ₃ 覆土。	
2	坏	10.8	3.4		BF	C	橙	40%	SB15-P ₇ 覆土。	
3	坏	11.0	3.4		AB	A	橙	15%	SB15-P ₄ 覆土。	
5	台付甕		3.6	10.2	ACE	B	橙	35%	SB18-P ₁₁ 覆土。	
6	坏	(11.4)	3.1		ACE	A	にふい橙	10%	SB25-P ₁₀ 覆土。	
7	坏	(14.0)	3.6		AB	A	にふい黄橙	10%	SB25-P ₁₂ 覆土。	
8	坏		0.8	(6.0)	BC	B	灰	35%	SB17-P ₂₃ 覆土。	
9	坏		1.2	(6.0)	ABC	A	灰	10%	SB17-P ₇ 覆土。	
10	坏		1.3	(6.0)	ABC	B	灰	10%	SB17-P ₁₈ 覆土。	
11	皿	(8.8)	2.1		AFJ	A	橙	10%	SB17-P ₁ 内覆土。土師質。底部糸切り。	
12	坏		1.4	(8.6)	ABC	A	灰	15%	SB17-P ₁ 覆土。	
15	高台坏	13.7	5.0	(5.9)	AC	C	浅黄	60%	SB36-P ₁₁ 覆土。	
16	灰釉碗		2.2	(7.0)	B	A	灰白	10%	SB36-P ₉ 覆土。	
17	坏	(12.6)	4.05	5.4	ACE	B	灰白	20%	SB36-P ₅ 覆土。	
18	高台坏	(13.0)	4.8		CE	B	橙	60%	SB36-P ₁₁ 覆土。	
19	甕	27.0	7.3		ABC	A	灰	10%	SB36-P ₇ 覆土。	
20	土釜?		9.7		ADI	C	橙	10%	SB37-P ₂ 覆土。	
4	金環	外径2.2cm。重量80g。								SB15-P ₆ 掘方埋土。
13	鉄器	残長4.4cm。径0.7cm。								SB17-P ₁₃ 覆土。棒状鉄器。
14	鉄器	全長5.0cm。最大幅2.3cm。厚さ0.3～0.5cm。								SB17-P ₂₀ 覆土。板状製品。
21	刀子	残長2.7cm。最大幅1.0cm。								SB37-P ₂ 覆土。
22	砥石	残長7.4cm。重量85g。								SB37-P ₇ 覆土。凝灰岩製。





- 1 暗褐色土 焼土粒多・ローム粒少量混入。
- 2 暗褐色土 焼土・ロームブロック混入。
- 3 暗黒褐色土 焼土粒・炭化物粒子少量混入。
- 4 暗褐色土 炭化物粒子少量混入。
- 5 暗黄褐色土 ローム土多量混入。
- 6 褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入。
- 7 褐色土 ロームブロック混入。
- 8 黄褐色土 ローム主・褐色土少量混入。
- 9 黒褐色土とロームブロックの混土層。
- 10 黒褐色土 ローム粒極少量混入。

第272図 第37号掘立柱建物跡(L=30.80m)



第273图 第II群掘立柱建物跡出土遺物

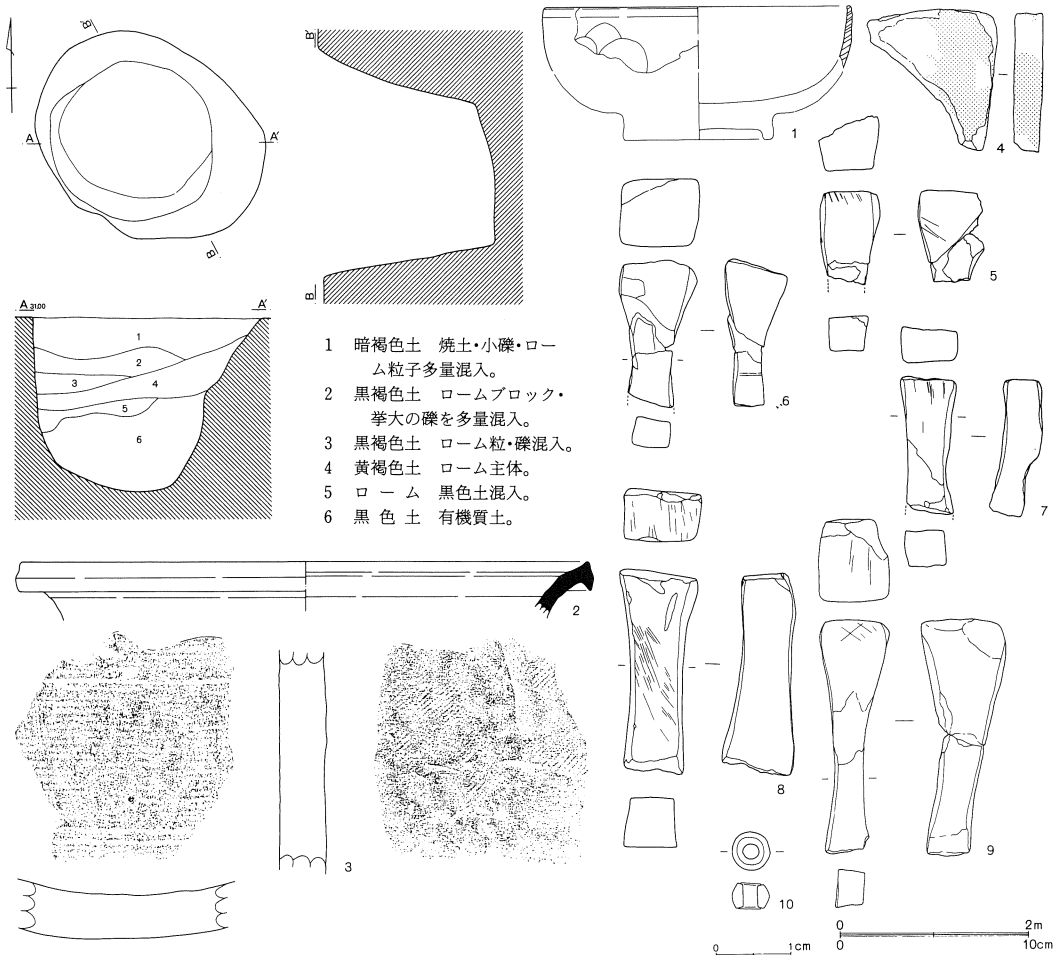
3. 井戸跡

第15号井戸跡(第274図)

L・M-7区に位置する。平面形は楕円形を呈し、径2.50×2.00m、深さ1.80mを測る。断面形は筒状を呈する素掘り井戸である。

覆土は6層に区分され、下層に(第6層)には黒色有機質土が厚く堆積していた。

出土遺物は土器・石器類が84点、木製塗椀が1点検出されている。須恵器が多いが、図示した以外に在地系の鉢小片が3片含まれており、中世の井戸跡と考えるのが妥当と思われる。第274図1の椀は推定口径16.0cm、体部外面に魚鱗状の削り痕が残る。全面黒色を呈し漆が塗布されたものと推定される。底部は欠く。3の平瓦は凹面に糸切り痕をそのまま残し凸面は平行叩き後、部分的にへら削り。4は須恵窯で使用された焼き台が搬入されたものと推定される。表裏及び側面に自然釉が付着する。5～9は砥石、10は白玉で混入品と考えられる。



第274図 第15号井戸跡・出土遺物

第15号井戸跡出土遺物観察表(第274図)

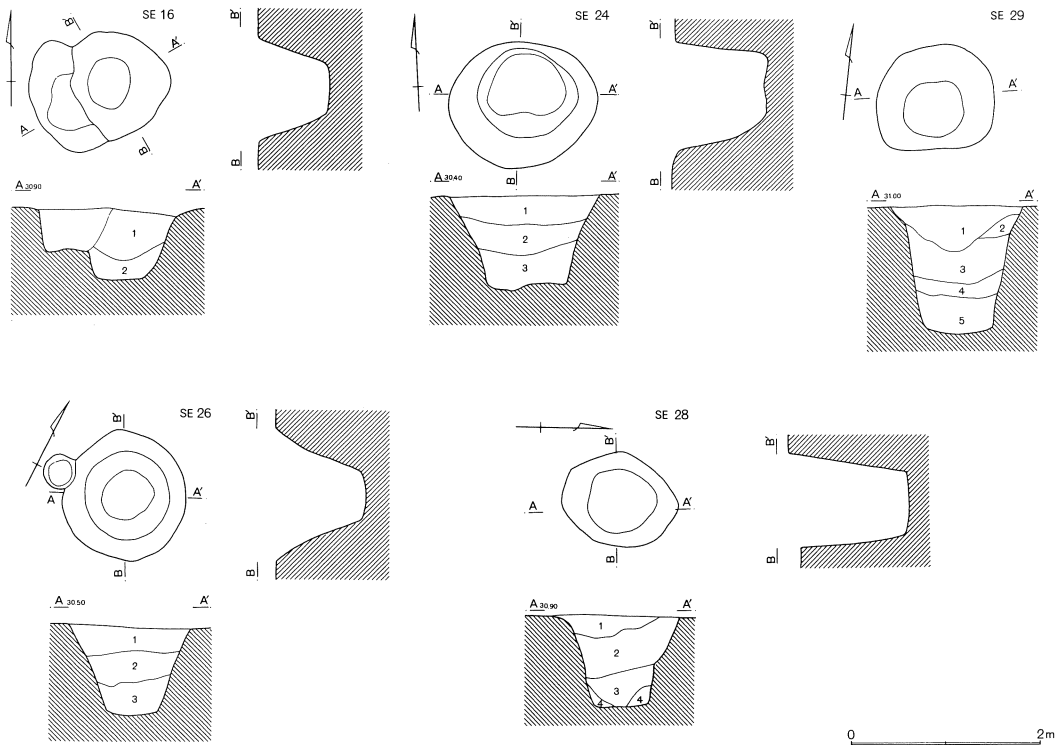
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
2	鉢	(30.0)	3.0		AC	A	灰	5%	覆土。
3	平瓦	残長11.6cm。幅11.3cm。			AC	B	灰白		覆土。
4	焼台	長さ7.3cm。厚さ1.5cm。							覆土。表面に自然釉付着。
5	砥石	残長4.9cm。重量65g。							覆土。
6	砥石	残長7.8cm。重量85g。							覆土。
7	砥石	残長7.2cm。重量60g。							覆土。
8	砥石	残長10.7cm。重量190g。							覆土。
9	砥石	全長12.2cm。重量160g。							覆土。
10	白玉	最大径0.5cm。孔径0.2cm。							覆土。

第16号井戸跡(第275図)

J-6区に位置し、第17号掘立柱建物跡P₁に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、径1.10m、深さ0.80mを測る小型の井戸跡である。

覆土は2層に分かれ、第1層はローム・焼土粒子混じりの暗褐色土、第2層は小礫・ローム混じりの黒色有機質土で構成されていた。

出土遺物は土師器坏の体部片が1点あるのみで時期を限定することは困難である。おそらく古代の井戸跡であろう。



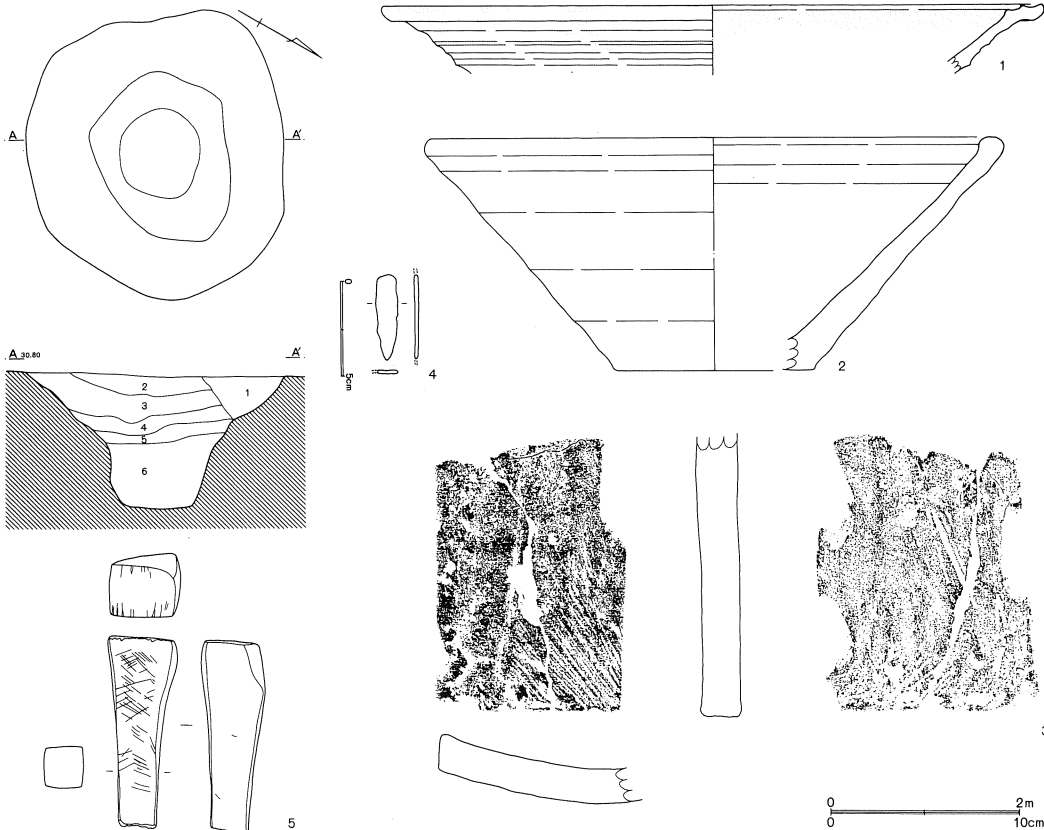
第275図 第16・24・26・28・29号井戸跡

第17号井戸跡(第276図)

K-8・9区に位置する。平面形は不整円形、断面形はロート形を呈し、規模は径2.90×2.70m、深さ1.40mを測る。覆土は6層に区分され、第1層は攪乱、2・3層はローム混じりの褐色系土、4層が黒色土、5層は酸化鉄が凝集した灰褐色土、6層は暗青灰色の有機質土となる。腐朽しかかった板材や側壁に刺さった状態の竹片が一部遺存しており、本来井戸側が存在したものと推定される。出土遺物は土師器・須恵器片28点の他、瀬戸・美濃系折縁深皿、在地系鉢、青磁蓮弁文碗小片、瓦、砥石、青銅製品断片が出土した。折縁深皿(第276図1)は白～薄黄色の釉が掛かり断面には黒漆が付着し、補修を行なった痕跡が残る。平瓦(3)は凹面に糸切り痕、凸面はヘラなでか。青銅製品は薄い板状を呈し、図上の右側縁が一部原形を留めるのみである。出土遺物から中世、おそらく14～15世紀頃に機能した井戸跡と推定される。

第17号井戸跡出土遺物観察表(第276図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	皿	(35.0)	3.6		A	A	灰白	5%	覆土。瀬戸・美濃系折縁深皿。	
2	鉢	(30.0)	12.2	(10.5)	A E	C	灰	20%	覆土。在地系。	
3	平瓦				A B	B	にぶい橙		覆土。	
4	銅製品	残長3.35cm。幅0.95cm。厚さ0.2cm。								覆土。
5	砥石	残長10.0cm。重量145g。								覆土。

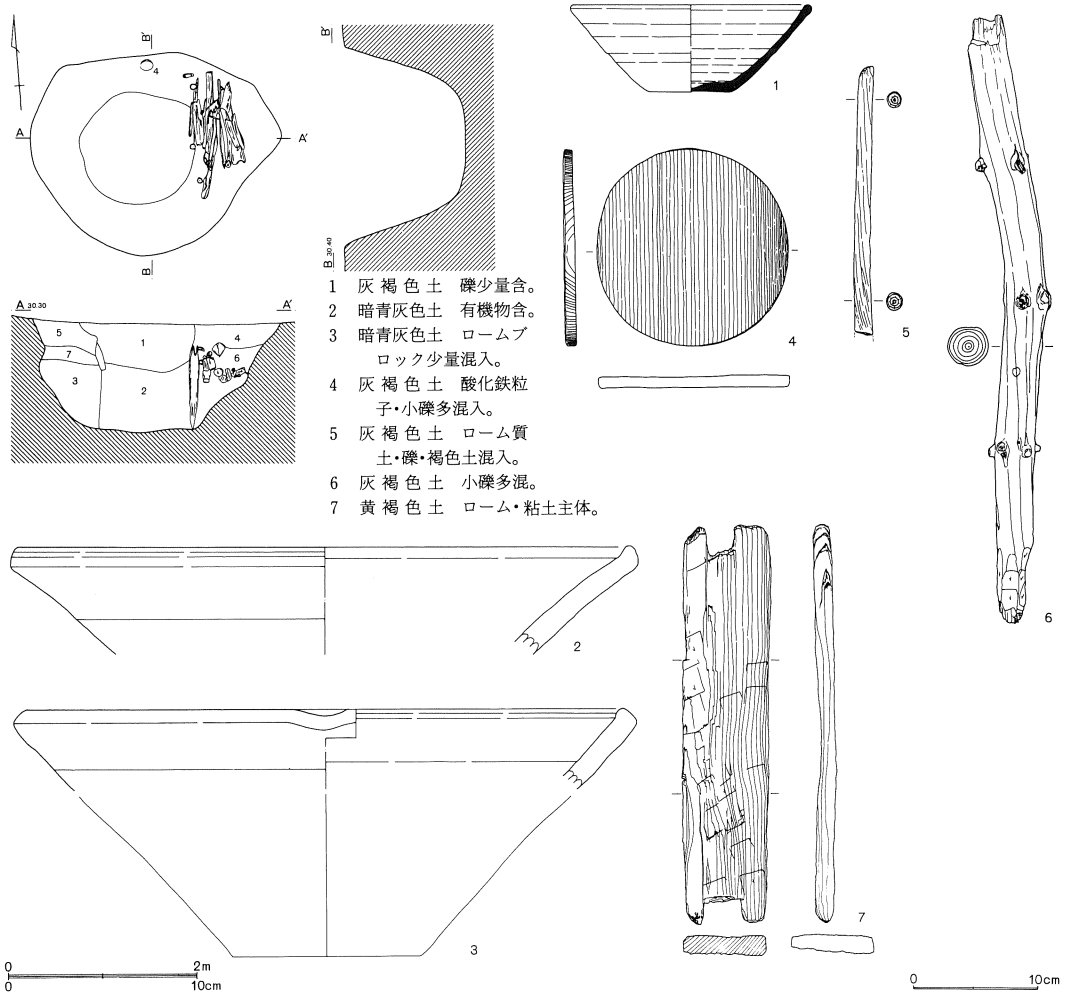


第276図 第17号井戸跡・出土遺物

第18号井戸跡(第277図)

J-10区に位置する。掘方平面形はやや歪んだ円形を呈し、規模は径2.60×2.10m、深さ1.20mを測る。断面観察により、井戸側が存在したことは間違いなく、東側壁相当部には縦に打ち込まれた杭が3本、杭の外側には建築廃材と思われる板材が足場状に敷き並べられていた。また北側掘方側壁に沿って曲物底板が1点出土した。覆土は7層に区分され、第1・2層が井戸側内部の埋土、3層以下が掘方埋土である。

出土遺物は少なく土器類では土師器・須恵器を除くと、在地系鉢4、常滑甕1点にすぎない。曲物底板(第277図4)は径15.6cm。厚さ1.0cm。杭(6)は残長94.3cmで下端は手斧状工具で削り込んでいる。樹種同定の結果クロマツと判明した。5・7は足場状の木材群の一部である。5は棒状を呈し木柄の一部か。長さ42.8cm。7は建築材と推定され長さ63.2cmを測る。上下端部には切り込みが入る。樹種同定によりスギ材であることが判明した。出土遺物により中世おそらく15~16世紀に比定されよう。



第277図 第18号井戸跡・出土遺物

第18号井戸跡出土遺物観察表(第277図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.6)	4.6	4.3	A B G	A	橙	20%	覆土。土師質。
2	播鉢	(32.4)	4.5		A B E	A	灰	10%	覆土。
3	片口鉢	(31.4)	4.2		A D E	B	灰	10%	覆土。

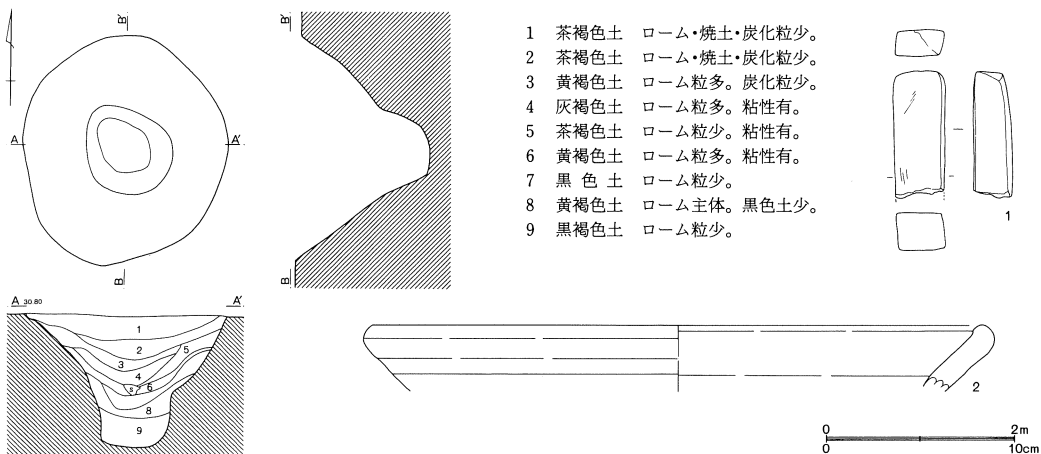
第19号井戸跡(第278図)

M-10区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径2.40×2.20m、深さ1.40mを測る。断面形はロート形を呈する。

覆土は9層に分かれるが、特に井戸側等の施設を設けた痕跡は確認されなかった。

出土遺物は灰釉瓶胴部片1、在地系鉢片4、常滑甕胴部片3、砥石1と土師器6点、須恵器20点がある。土師器・須恵器と灰釉陶器は混入で、井戸の年代としては中世と考えられる。

第278図1は砥石で残長6.7cm、重量60g。下端部を欠いている。石材不明。2は在地産と推定される鉢である。推定口径32cm前後。残高3.5cmを測る。焼成は普通でぶい褐色を呈する。胎土に石英を含む。5%残。

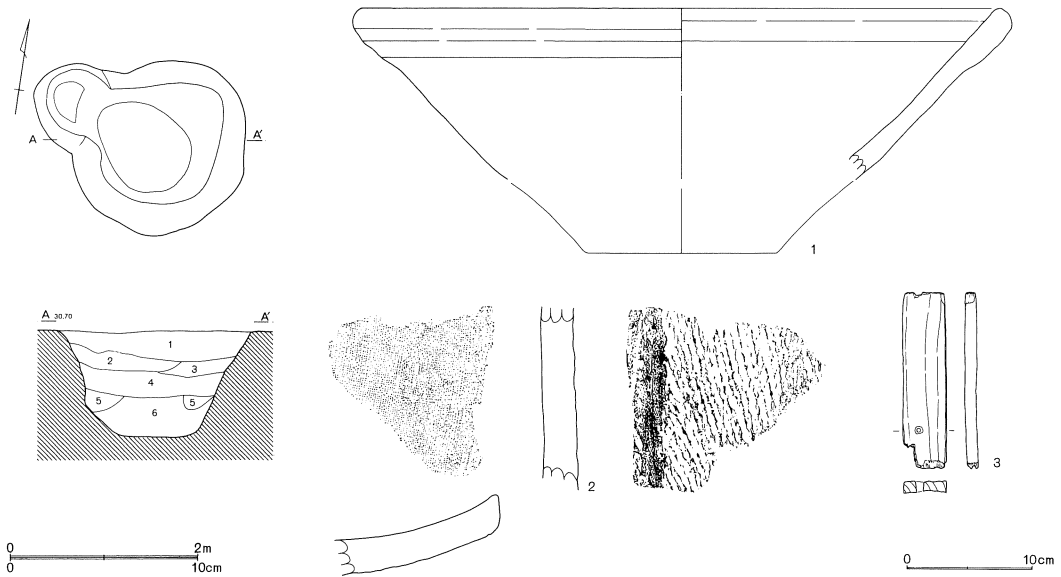


第278図 第19号井戸跡・出土遺物

第20号井戸跡(第279図)

K-9区に位置する。平面形は瓢箪形を呈するが、突出部は別の土壌と推定される。径1.85m、深さ1.10mを測る。断面はロート形に掘り込まれ、覆土は6層に区分された。第1～4層は黒色土系でロームや砂礫を含む。5・6層は青灰色粘質土で5層はやや砂質が強い。

出土遺物は内耳鍋3、在地系甕1、同鉢2、土師器坏2、須恵器甕6、瓦1点と板状木製品がある。第279図1は鉢で推定口径34cm、残高9.0cm。焼成は普通で褐灰色。石英・片岩含む。15%残。2は須恵質の瓦で凹面布目、9×9本/cm²。凸面縄叩き。側端面はヘラ調整される。木製品(3)は残長14.1cm、厚さ1.0cm。下部に径0.6cmの穴が穿たれている。出土遺物から中世、おそらく15～16世紀と推定される。



第279図 第20号井戸跡・出土遺物

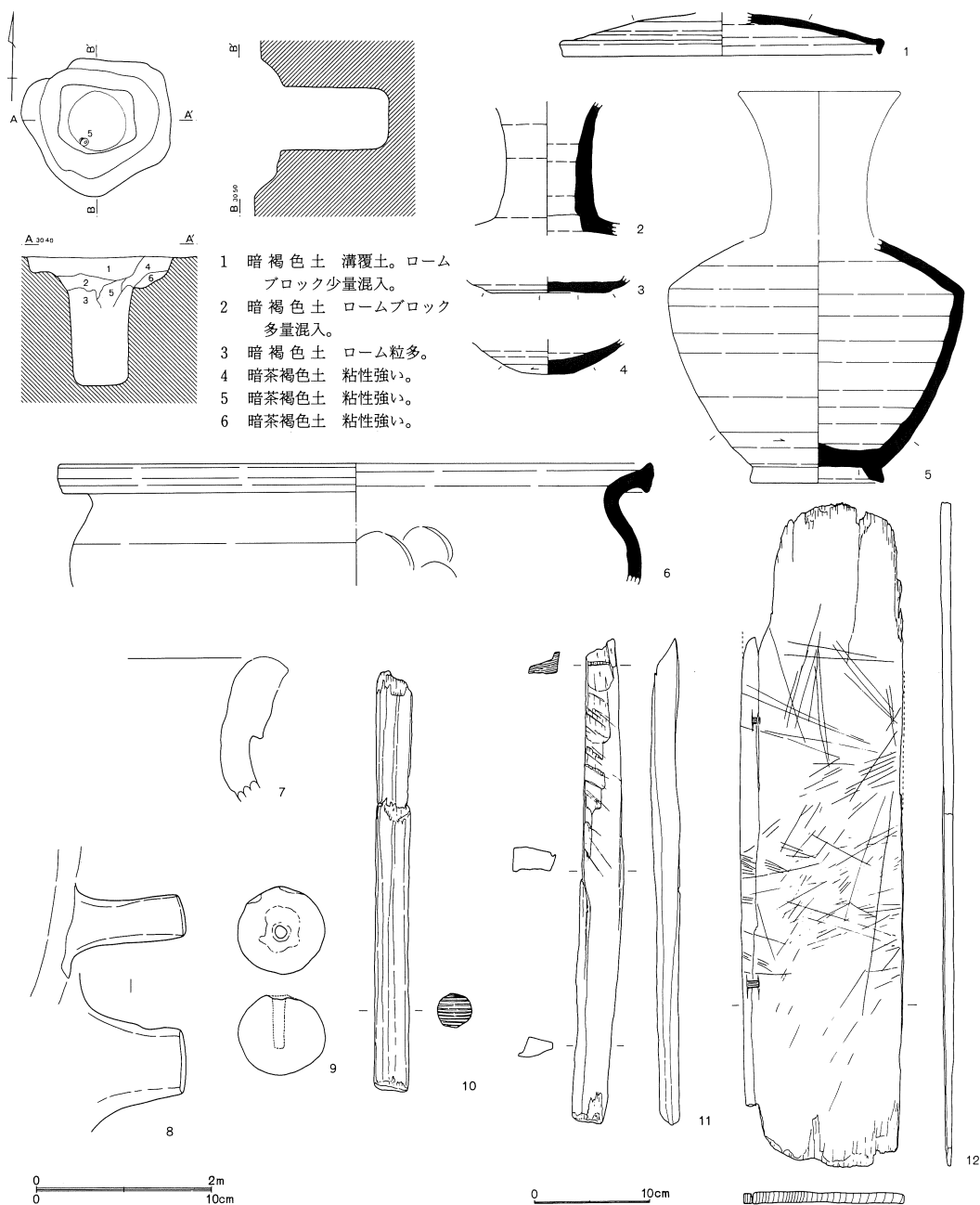
第21号井戸跡(第280図)

調査区西端のL-5区に位置する。第8号溝跡に上面を切られ、第91号住居跡を切って構築されている。確認面での平面形態は径1.60mの不整円形を呈し、やや下がった位置に一段テラスをもつ。テラス面以下はほぼ垂直に掘り込まれ、径0.70~0.85m、確認面からの深さは1.45mを測る。覆土は大きく6層に区分したが、下部は狭過ぎるため土層観察は断念した。第1層は第8号溝の覆土である。

出土遺物は38点検出され大きく二時期に分かれる。一つは7世紀後半~8世紀代のもので土師器、坏、甕、甗、須恵器坏、蓋、甕、壺類計22点検出された。もう一つは中世遺物で、内耳鍋、鍋把手、在地系鉢、常滑甕と有孔球状土製品、計16点検出されている。前者が井戸に伴う土器を含み、後者は重複する第8号溝に伴うものと推定しておきたい。

第280図9は有孔球状土製品である。径5.0cm、高さ4.5cmを測る。上面は僅かに平坦面が作りだされ中心部に径0.7cm、深さ3.0cmの小孔が穿たれるが、貫通していない。胎土に石英・長石を含む。焼成良好で鈍い黄橙色を呈する。95%残。重量100g。性格や用途は全く不明である。中世段階の遺物であろう。

第280図10~12は覆土下層から出土した木製品である。10は残長36.3cm、径3.0cmの棒状製品である。断面は略円形で面取りされる。木柄であろうか。11は長さ41.8cm、最大幅3.4cmの角棒状製品で、上端は手斧状工具でカットされる。また上半には刀子状工具による切り込みと手斧状工具による雑な切削痕が認められる。12は長さ56.8cm、幅13.8cm、厚さ1.1cmの板状製品。片面には無数の条線が残されている。また図上左側縁近くには桜皮で綴じた痕跡が確認された。補修痕と推定される。用途は不明である。



- 1 暗褐色土 溝覆土。ローム
ブロック少量混入。
2 暗褐色土 ロームブロック
多量混入。
3 暗褐色土 ローム粒多。
4 暗茶褐色土 粘性強い。
5 暗茶褐色土 粘性強い。
6 暗茶褐色土 粘性強い。

第280図 第21号井戸跡・出土遺物

第21号井戸跡出土遺物観察表(第280図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(18.0)	2.4		ABC	A	灰	15%	No.8.覆土。
2	長頸瓶		7.6		ABD	A	灰	90%	No.10.覆土。
3	坏		0.7	6.4	ABCD	B	灰	100%	No.18.覆土。
4	坏		1.9	3.0	AB	A	灰	40%	No.5.覆土。東海産。
5	長頸瓶		13.8	7.4	AC	B	灰	100%	No.1.覆土。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
6	鉢	(33.8)	6.9		A B C	B	灰	10%	覆土。
7	常滑甕				A D	B	にふい橙	5%	覆土。
8	鍋				A E	A	灰白	100%	覆土。

第22号井戸跡(第281図)

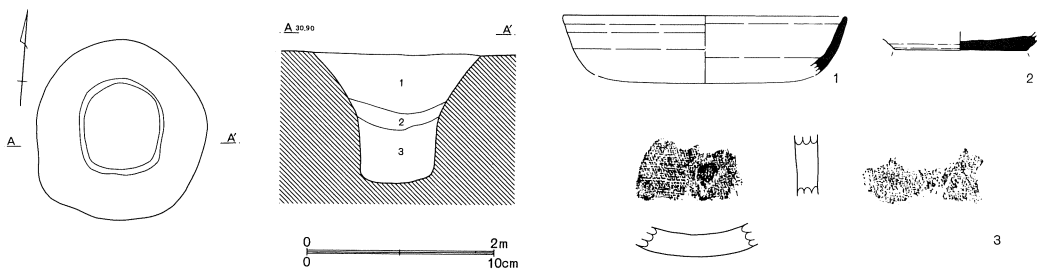
K-6区に位置する。第17号掘立柱建物跡の庇柱が重複する筈であるが調査では確認を怠ったため検出できなかった。平面形は楕円形、断面はロート形を呈し、規模は径1.90×1.80m、深さ1.40mを測る。

土層は3層に区分され、第1・2層はロームブロック混じりの褐色系土、第3層はロームと礫を含む黒色有機質土が形成されていた。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、甕、壺、瓦と瓦質陶器片、計25点検出された。おそらく中世遺物は重複遺構である第17号建物に帰属するものと考えられる。土師器・須恵器の様相から井戸の年代は8世紀頃と思われる。

第22号井戸跡出土遺物観察表(第281図)

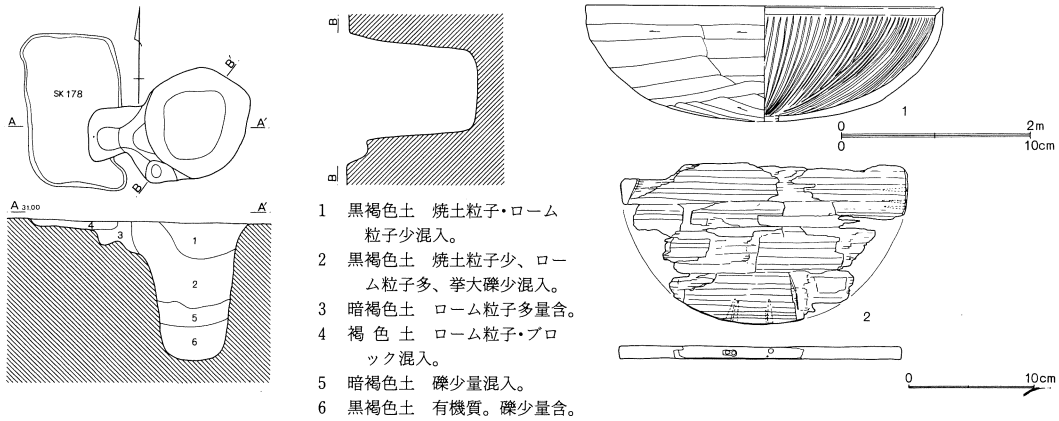
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(15.0)	3.1		A B C	B	青灰	10%	覆土。
2	坏		1.0	7.0	A C	B	灰	30%	覆土。内底面磨減。転用硯か。
3	平瓦				A C	B	にふい橙	5%	覆土。凹面布目8×9本/cm ² 。凸面篋ナデか。



第281図 第22号井戸跡・出土遺物

第23号井戸跡(第282図)

M-7区に位置する。平面形は円形を呈し、径1.20m、深さ1.40mを測る。ほぼ筒状に掘り込まれるが、西側に長さ0.60m程の2段に掘り込まれた階段状の張り出しをもつ。性格は明らかでない。井戸側等の施設は検出されなかった。出土遺物は土師器碗、甕、須恵器坏、碗、蓋、甕、壺と曲物底板、桃の種子がある。遺物数は22点と少ないが、稻荷前V～VI期頃の遺物で構成され、井戸の機能した年代もほぼその頃と考えられる。第282図1は土師器碗。推定口径18.8cm、器高6.1cm。胎土に石英、白色粒子含む。焼成良好。橙色。45%残。内面に放射状暗文が施される。2は曲物底板。径23.0cm、厚さ1.1cm。遺存状態は悪いが側面に目釘穴が7ヶ所確認される。



- 1 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少混入。
- 2 黒褐色土 焼土粒子少、ローム粒子多、挙大礫少混入。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量含。
- 4 褐色土 ローム粒子・ブロック混入。
- 5 暗褐色土 礫少量混入。
- 6 黒褐色土 有機質。礫少量含。

第282図 第23号井戸跡・出土遺物

第24号井戸跡(第275図)

J-7区に位置する。平面形は楕円形、断面形はロート形を呈し、規模は径1.60×1.35m、深さ1.00mを測る。

土層は3層に分かれ、第1層は酸化鉄分とロームブロックを多量に含む灰褐色土、第2・3層は黒色有機質土で、ロームブロックが少量含まれていた。井戸側等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏、甕計9点に過ぎない。全て小片で図化資料はないが、土器様相から見る限り9世紀末葉から10世紀に掛かる時期と推定される。

第25号井戸跡(第283図)

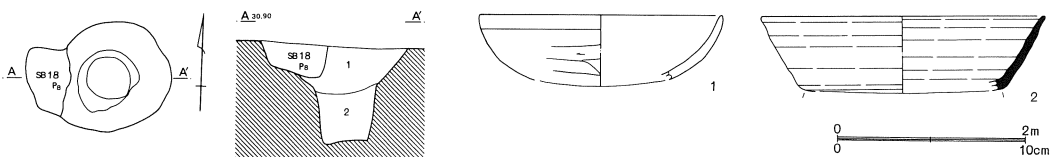
J-5区に位置し、第18号掘立柱建物跡P₈に上面を切られている。平面形は円形を呈し、径1.20m、深さ1.00mを測る。断面形はロート形を呈する。

覆土は2層に区分される。第1層はローム・焼土を少量含む暗褐色土、第2層はロームブロックを含む黒色有機質土である。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、甕が計10点と少ない。出土遺物から稻荷前VI期頃を中心に機能した井戸跡と推定される。

第25号井戸跡出土遺物観察表(第283図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.8)	3.4		ABE	B	橙	15%	覆土。全体に磨滅。
2	坏	(15.0)	4.0	(10.4)	ABC	B	灰	20%	覆土。



第283図 第25号井戸跡・出土遺物

第26号井戸跡(第275図)

J-6区に位置する。第19号掘立柱建物跡と重複し、本井戸跡の方が古い。平面形は円形を呈し、径1.30m、深さ0.95mを測る。

覆土は3層に分かれ、第1層は酸化鉄と小礫を含む灰褐色土、第2・3層は有機物を含む黒色シルト質土である。遺物は全く検出されず時期は不明である。

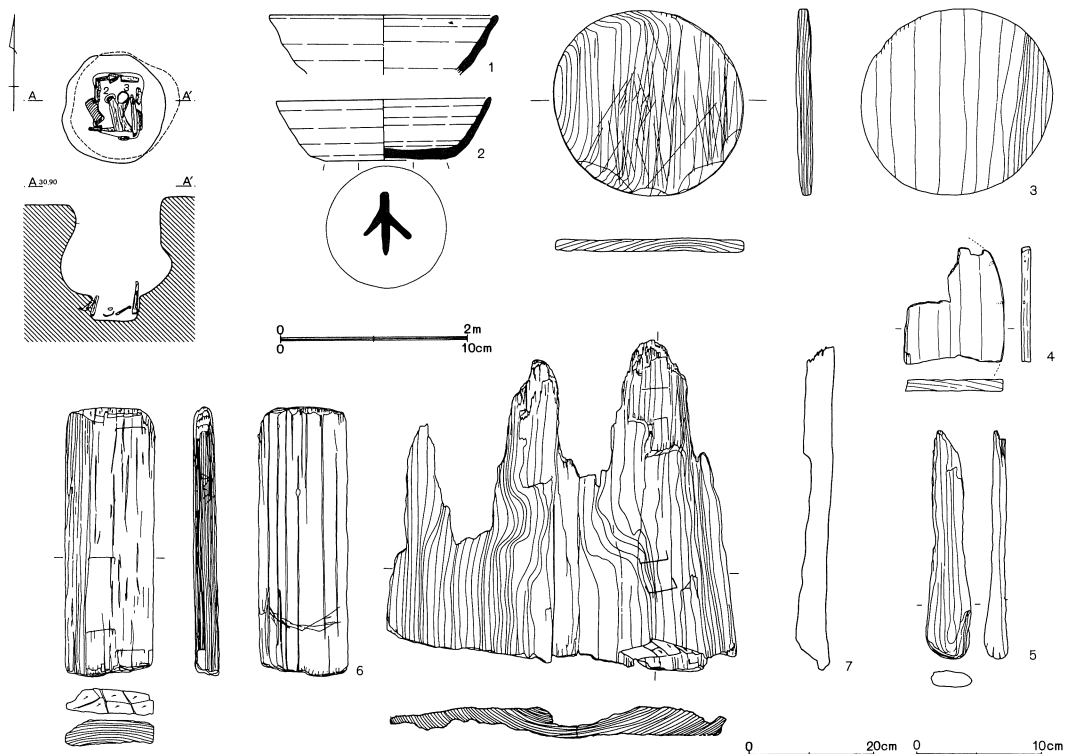
第27号井戸跡(第284図)

K-6区に位置し、第93号住居跡を切って構築される。平面形は円形を呈し、径1.10m、深さ1.30mを測る。断面形はほぼ筒状に掘り込まれたものと推定されるが、側壁は崩落していた。

底面には板材を方形に組み合わせた井戸側が遺存していた。井戸側の径は55~60cmを測り、内部には須恵器坏(第284図2)と曲物底板(3)の他、竹や木片が落込んだような状態で出土した。

出土遺物は極めて少なく土器類は図示したものが全てである。2の須恵器坏底部には矢印状の墨書が記されていた。墨痕は濃く明瞭であるが意味は不明である。記号的なものであろうか。

3は曲物底板か容器の蓋であろう。径15.5cm、厚さ1.0cm。片面には線状の傷が無数に刻まれていた。側面には目釘穴はみられない。4は曲物底板残片。残長9.1cm、厚さ1.0cm。側面に2箇所目釘穴が穿たれる。5は木柄状製品。残長18.3cm。下端は丸みもちやや太くなっている。鎌柄か。分析結果によれば樹種はブナ科カシ属に同定された。6・7は板材である。6は井戸側北壁に用いら



第284図 第27号井戸跡・出土遺物

れていたもので常緑針葉樹であるマツ科モミ属に同定された。長さ42.7cm、幅14.0cm、厚さ3.8cmを測り上下小口面は手斧整形されている。7は割り板材か。井戸側西壁に用いられていた。残長52.8cm、幅56.1cm、厚さ5.5cm。下端部小口面に手斧痕が残る。樹種は6と同一である。井戸の年代に関して2の須恵器坏を基準にすると、口径の縮小化が顕著で底部整形が施される点から鳩山窯跡群H B 7号窯の様相に類似するが、器形は異なっている。一応稻荷前X期に位置付けておきたい。

第27号井戸跡出土遺物観察表(第284図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.0)	3.1		A C	B	灰	20%	№2。覆土。
2	坏	11.3	3.2	6.4	A B C	A	灰	95%	№18。覆土下層。底部外面に「↑」墨書あり。

第28号井戸跡(第275図)

M-7区に位置する。第76号住居跡内に掘り込まれるが新旧関係は捉えられなかった。平面形は楕円形を呈し、規模は径1.30×1.00m、深さ1.35mを測る。断面形は筒状を呈する。

覆土は5層に分かれ、第1～4層はローム・焼土混じりの褐色系土、第5層はロームブロックを混入する黒色有機質土となる。出土遺物は土師器坏1、須恵器坏3片と中世の在在系鉢1片のみで年代比定は難しいが中世であろうか。

第29号井戸跡(第275図)

K・L-7区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径1.25m、深さ0.95mを測る。断面は筒状を呈する。

覆土は4層に分かれ、第1・2層はローム混じりの暗褐色土、第3層はローム・焼土を含む黒色有機質土、第4層は第3層と類似するが礫の混入が多い。遺物は全く検出されておらず、年代も不明である。

4. 溝跡

第II群では13条の溝跡が検出された。I群同様中世以降に掘削されたものと推定される。第17・18号溝は谷地に沿って東流するもので水田に関する用排水路と推定される。他は区画溝であろうか。遺構配置は第285図に、土層及び出土遺物は第286・287図に示した。

第7号溝跡はL-5～7区に掛けてほぼ東西方向に約22m延びる。幅50cm、深さ10～20cmを測る。覆土は褐色系の土で構成され、締まりに欠ける。重複遺構との切り合いは確認されたものは全て本溝跡の方が新しいものと判断された。遺物は検出されていないため時期は明らかにできないが、覆土や重複関係から中世以降であることは間違いない。

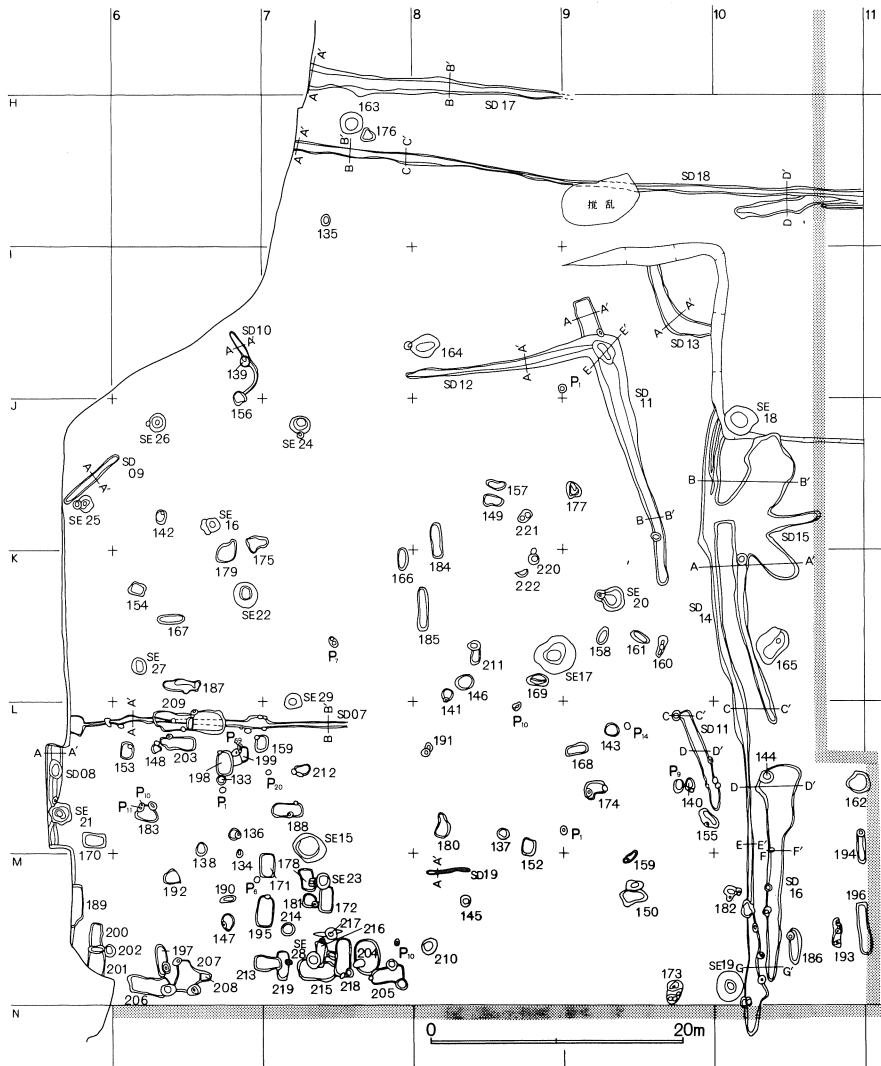
第8号溝跡は調査区西端のM-5区に位置する。部分的に確認し得たに留まるがほぼ南北に走るものと推定される。幅は最大で1.0m、深さ10～30cmを測る。時期は不明であるが21号井戸跡の新しい一群の遺物が伴うとすると中世の所産と推定される。

第9号溝跡はJ-5・6区に位置する。第18号掘立柱建物跡を斜めに横断するように延び、西端は調査区外に消えてしまい確認できない。東端は同掘立柱建物跡P₁₂上部で止まっている。長さ約6

m、幅50~60cm、深さ30cm前後を測る。覆土はローム粒子を含む暗褐色土で構成され、締まりやや弱い。出土遺物は土師器片18、須恵器片31、灰釉碗1、緑釉碗1、中世陶器類3点がある。中世陶器類には土師質皿の細片と在地系甕(第287図1)が認められ、溝の年代も中世後期頃と推定される。

第10号溝跡はI-6区に位置する。谷を臨む台地肩部にあるため北側は消失している。南端付近で屈曲し、第9号溝の方向に延びるが一体のものであるか否かは不明である。幅40cm前後、深さ10cmを測る。覆土は黒色土が埋積していた。出土遺物はない。

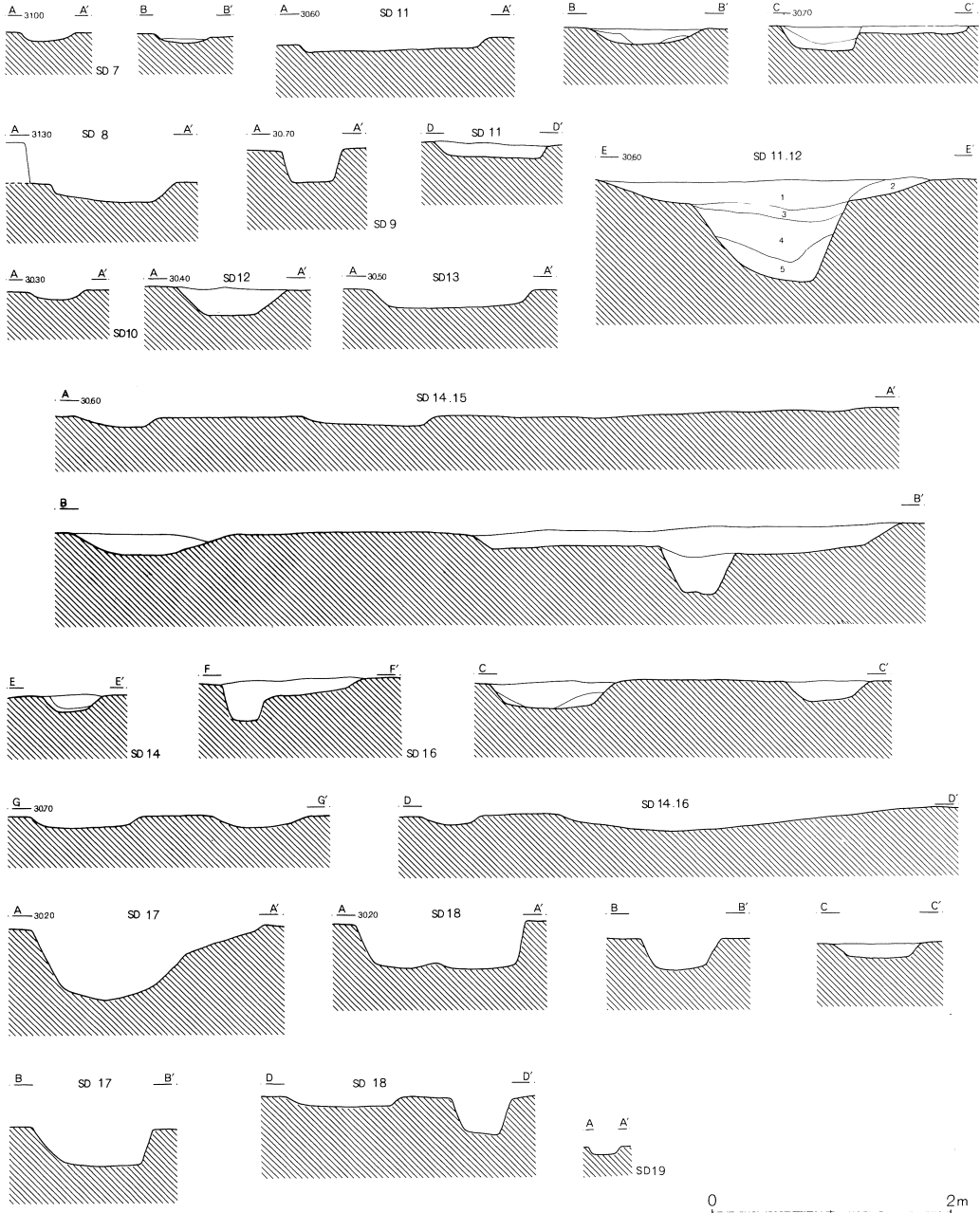
第11・12号溝跡は同一溝である。I-9区を頂点に直角に屈曲し、南流する部分を11号、西流する部分を12号溝とした。またこの屈曲部から北側にも幅160cm、深さ10cmの浅い溝が分岐しているが、長さ3m程で消失している。11号溝はK-9区付近で一度途切れるが本来は繋がっていたものと考えられる。北端の屈曲部には土壌状の掘り込みが見られ上幅280cm、深さ90cmを測る。11号溝南端で



第285図 第II群溝跡・土壌配置図

は幅100cm、深さ15cm程、12号溝は幅40~130cm、深さ10~35cmを測る。覆土は褐色系土で構成され、ローム粒子・ブロックを混入する。土壌状掘り込みは底面は黒褐色または青灰色の有機質土が堆積していた。出土遺物は土師器38点、須恵器29、内耳鍋3、鉢2、土師質皿・瓦・土錘・砥石各1点が検出された。出土遺物から中世後期(15~16)世紀頃と推定される。

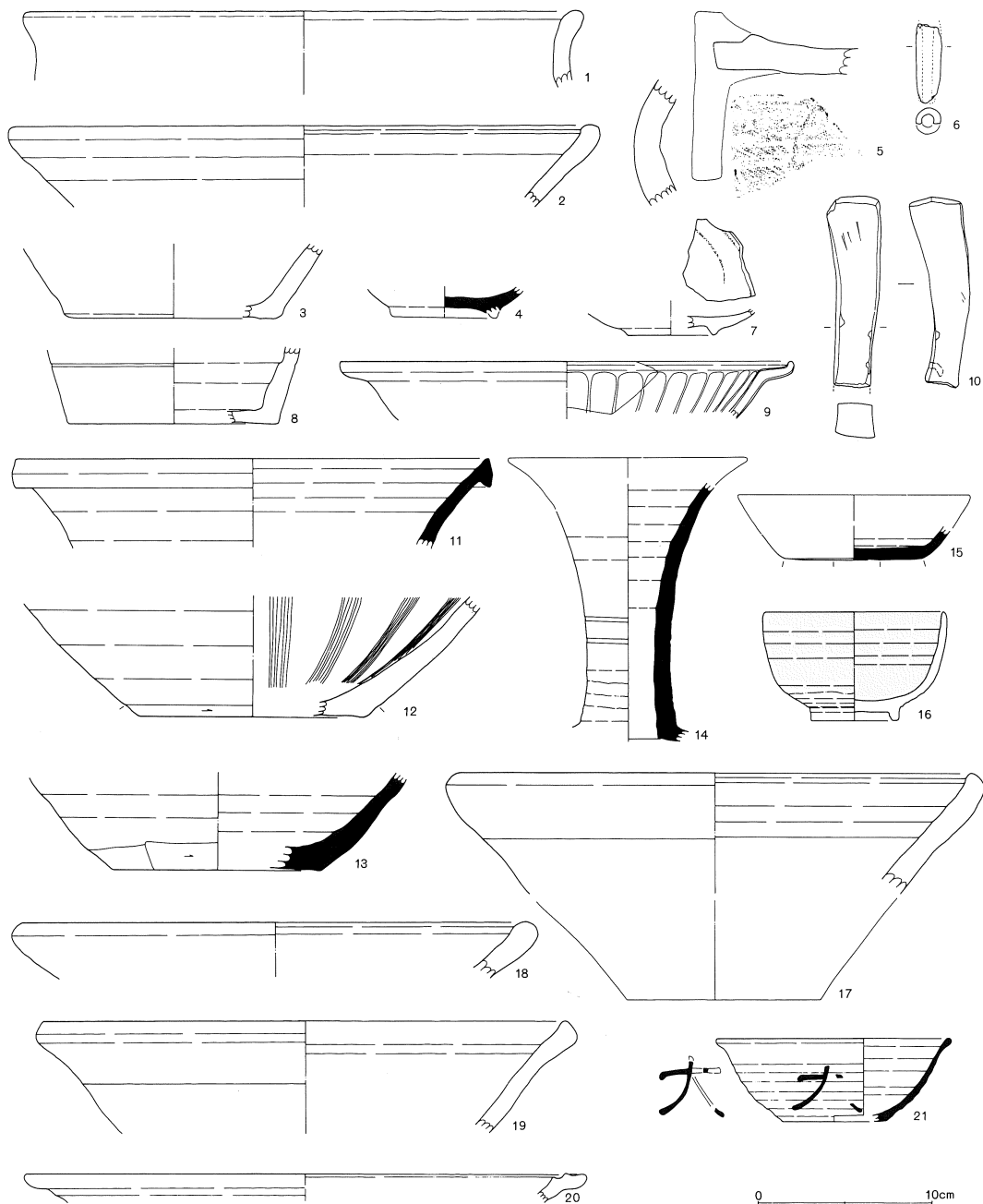
第13号溝跡はI-9区に位置する。谷地に面した台地肩部にあり、弓状に屈曲している。幅130cm、



第286図 第II群溝跡土層図

深さ10~20cmを測る。覆土は褐色土で小礫とロームブロックの混入が目立つ。出土遺物は須恵器片6、瀬戸・美濃系鉄釉天目茶碗片1点がある。15~16世紀頃と推定される。

第14~16号溝跡は一体のものと考えられる。第II群東端のJ~N-9・10区に位置し、ほぼ南北に延びる。14号溝跡は西側にあり北端では二条に分かれ、J区付近で東側に広がる不整形の土壌と連結する。幅40~130cm、深さ10~25cmを測る。15号溝跡は土壌状の掘り込みを介して14号溝と連結す



第287図 第II群溝跡出土遺物

る。途中途切れるが南側延長線上には16号溝があり、両者は同一溝と考えられる。14号溝の東側にほぼ平行して延びている。幅は40~300cm、深さ約10cmを測る。覆土はローム粒子・礫を含む褐色土で構成される。単なる区画溝とも思えず、性格は明確にできない。14~16号溝跡出土遺物は古代の遺物と中世から近世のものが含まれ、後者が溝の年代に近いものと推定される。

第17号溝跡はG・H-7~9区に位置する。谷底を東西に延びるが20m程で消失している。最大幅200cm、深さ50cmを測る。覆土は黒色土で粘土ブロック、ローム粒子が混入していた。出土遺物は20点あり、須恵器と常滑系の甕の破片が認められる。時期としては中世と推定される。第287図21は覆土から出土した須恵器坏で体部に「大」と思われる墨書が記されている。

第18号溝跡は17号溝の南側にほぼ平行して延び、東側の延長はH-13区まで達している。幅は部分的に異なり、30~90cm、深さ10~40cmを測る。覆土はローム粒子・礫を含む黒色土で構成され、粘性が強い。部分的に酸化鉄凝集層が認められる。出土遺物は5点に過ぎないが、内1点は瓦質の陶器(鉢?)が含まれる。中世後期以降の所産と推定される。

第19号溝跡はM-8区に位置する。ほぼ東西に約3.5m延びる。溝幅は20~30cm、深さ10cmを測る小規模なもので、畑の畝の一部かもしれない。覆土は褐色の締まりない土でローム粒子が含まれる。近世以降の所産と推定しておきたい。

第II群溝跡出土遺物観察表(第287図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	甕	(31.4)	4.4		AB	C	橙	30%	SD09覆土。在地系甕。
2	鉢	33.0	4.7		AE	B	灰白	5%	SD11覆土(L-9Grid)。在地系。
3	鉢		4.2	(11.8)	AE	C	黄灰	15%	SD11覆土(L-9Grid)。在地系。
4	高台坏		1.6		BCG	C	灰	35%	SD11覆土(I-8Grid)。
5	軒丸瓦				ABE	C	にふい褐	30%	SD11覆土(L-9Grid)。
6	土錘				AC	A	橙	40%	SD11覆土。
7	皿		1.5	4.8	G	A	白	20%	SD14覆土。染付皿。
8	瓶		4.3	(12.0)	BG	B	灰白	10%	SD14覆土(J-10Grid)。瀬戸・美濃系梅瓶。
9	青磁盤	(26.0)	3.3			A	白	5%	SD14覆土。青磁盤。内面に蓮弁文巡る。
11	甕	(27.0)	5.1		ABC	A	灰	15%	SD15覆土。
12	搦鉢		6.9	(13.0)	AB	A	橙	20%	SD15覆土。常滑系か。内面磨減。
13	鉢		5.8	(12.0)	ABC	A	灰	15%	SD15覆土。
14	長頸瓶		14.6		AC	A	灰	80%	SD15覆土(H-12Grid)。頸部に2条の沈線。
15	坏		1.9	(8.0)	C	C	灰白	60%	SD15覆土。
16	高台碗	(10.2)	6.2	5.0	G	A	灰白	10%	SD15覆土。褐色の鉄釉が掛かる。
17	搦鉢	(29.4)	6.9		AB	A	灰	10%	SD15覆土。瓦質。
18	搦鉢	(29.0)	3.1		ABCG	B	淡黄	5%	SD16覆土。在地系。
19	搦鉢	(30.0)	6.4		ABE	C	灰オリーブ	10%	SD16覆土。内面風化。
20	皿	(32.0)	1.7		B	A	灰白	5%	SD16覆土。瀬戸・美濃系折縁深皿。
21	坏	(13.2)	4.8	(6.0)	ABC	D	淡黄	20%	SD17覆土。体部外面に「大」の墨書あり。
10	砥石	残長10.9cm。重量110g。							SD12覆土(I-8Grid)。凝灰岩製か。

5. 土壙

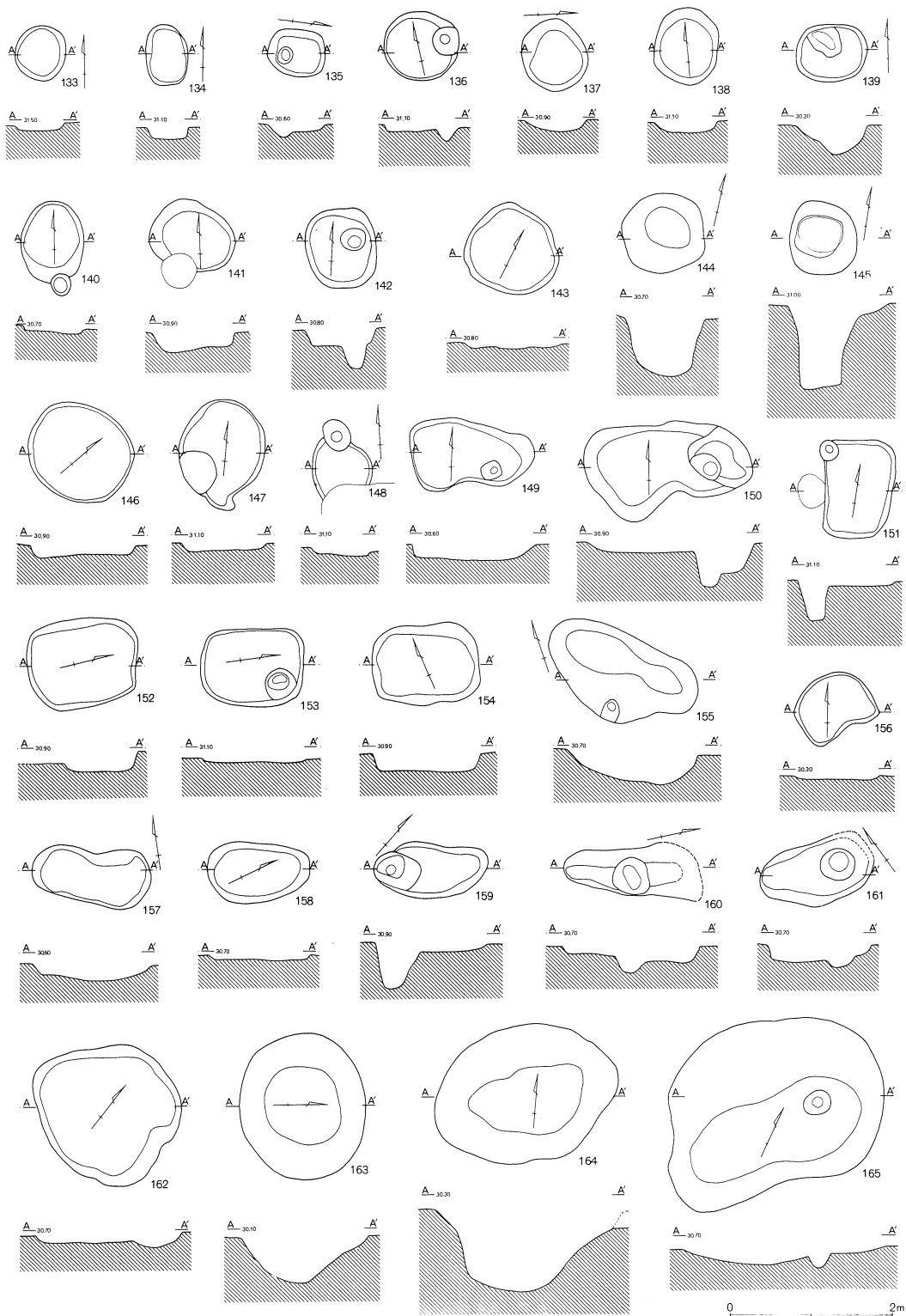
第II群では第133号～222号土壙に至る90基の土壙が検出された。遺構配置図は第285図に、各遺構は第288～290図、出土遺物は第291・292図に示した。各土壙の規模等に関しては第2表にまとめて記し個別説明は省略する。

形態的には円形を呈するもの、楕円形、方形、長方形、不整形の各種が見られる。概して浅いものが多いのが特徴である。長方形プランをもつ大型の土壙(S K184～188・196・206等)は座標北またはそれに直交する方位に主軸をもつようである。

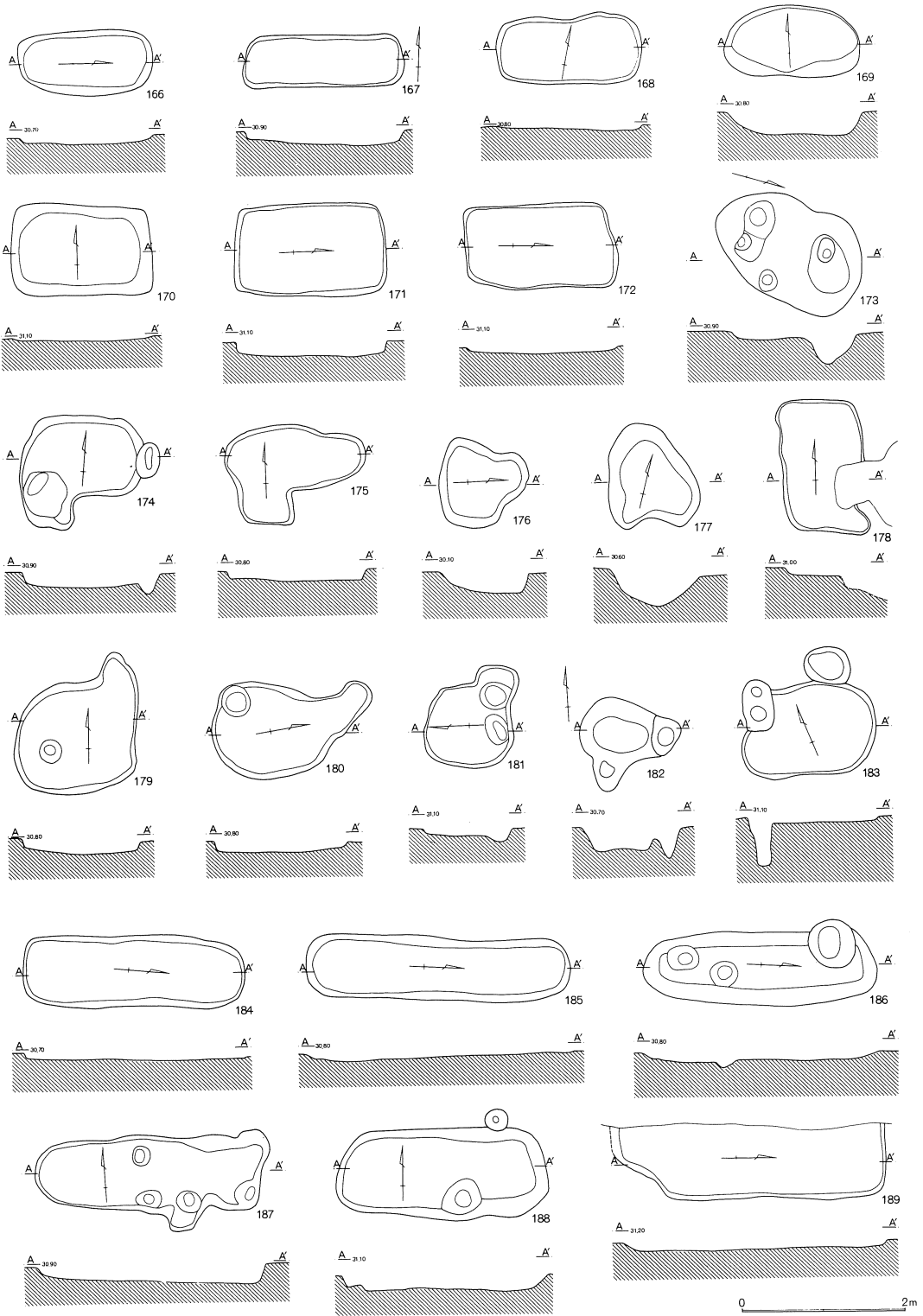
特筆すべきものに第145号土壙がある。径90cm程の円形プランを有し深さ94cmを測る。小形の井戸に似た形態であるが、ほぼ完形の平瓶や口縁部が平坦で外面に浅い沈線を数条もつ甌、長頸瓶等の須恵器が出土した(第291図4～8)。また第183号土壙からは「上」と記された須恵器坏底部が、218号土壙からは祭祀に使用されたと推定される鉄鐸が検出されている。

第II群土壙出土遺物観察表(第291・292図)

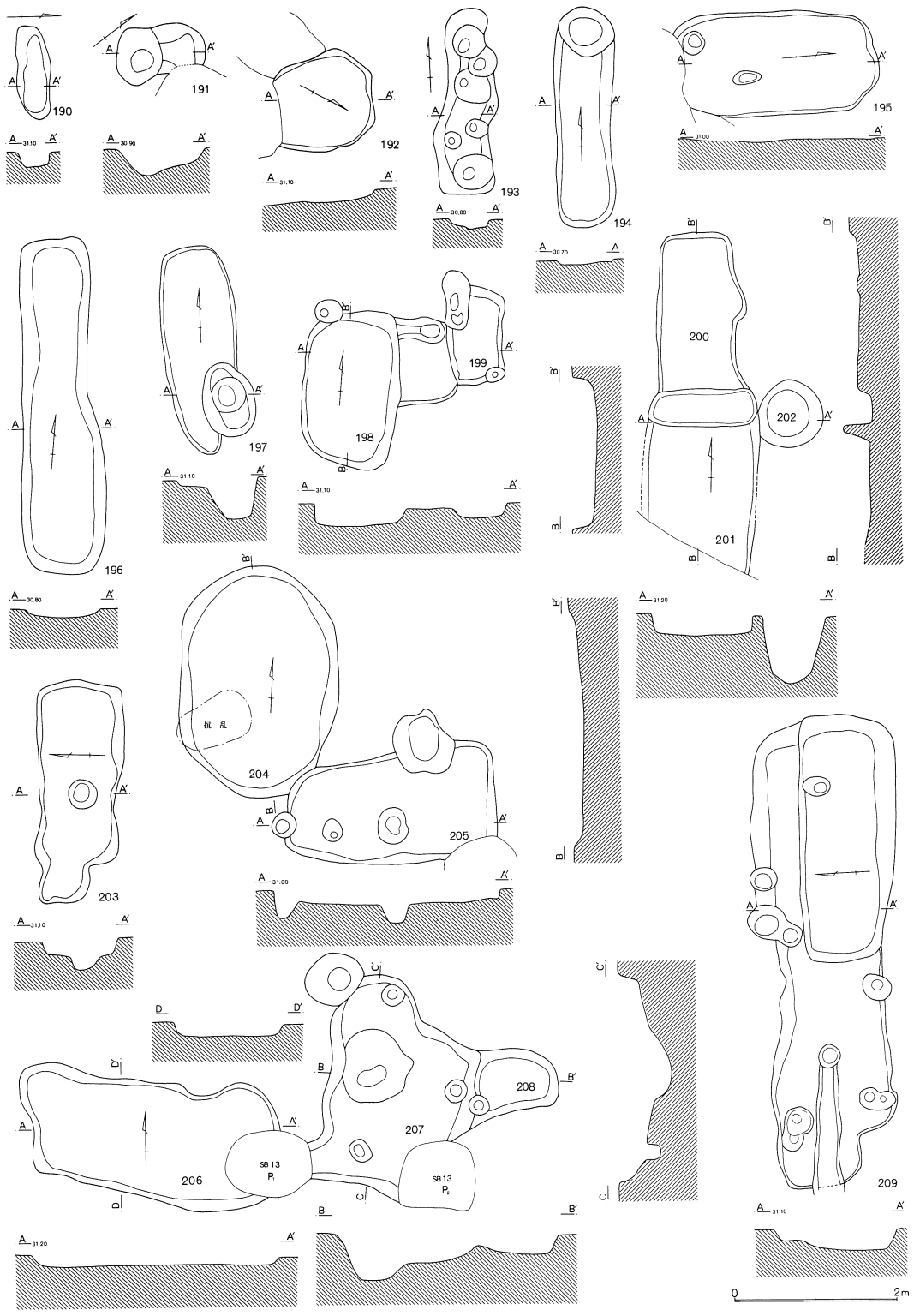
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏		1.3	(7.0)	AB	B	灰	15%	SK139覆土。底部手持ちヘラケズリ。	
2	坏		1.4	(5.6)	BC	A	橙	45%	SK140覆土。	
3	坏	(10.4)	2.5		AB	A	橙	20%	SK141覆土。北武蔵系。	
4	長頸瓶		9.8		ABC	A	灰	80%	SK145覆土。	
5	坏		1.1	(10.0)	ABC	A	灰	60%	SK145覆土。	
6	甌	(28.0)	3.4		ABC	A	灰	10%	SK145覆土。頸部10本単位の櫛描波状文。	
7	甌	(30.0)	16.7		ABC	A	灰白	30%	SK145覆土。内面ヘラケズリ。外面は沈線。	
8	平瓶		9.3	19.1	ABC	A	灰	60%	SK145覆土。	
9	坏		1.3	5.3	AC	B	にぶい黄橙	70%	SK152覆土。	
10	坏	(12.0)	3.45		ABC	A	褐灰	15%	SK152覆土。	
11	坏	(13.0)	3.6	(6.0)	ABC	A	灰	10%	SK152覆土。	
13	坏	(12.0)	2.8		AB	B	黄橙	25%	SK164覆土。	
14	坏		0.7	(7.0)	AC	B	灰白	30%	SK183覆土。底部外面に「上」の墨書あり。	
15	擂鉢	(30.0)	7.4		ABG	A	灰白	10%	SK188覆土。全体に風化。	
16	擂鉢	(33.0)	5.1		AE	B	灰	5%	SK187覆土。瓦質。	
17	坏	(14.6)	3.1	(10.1)	AC	B	灰	20%	SK187覆土。	
18	甌	(30.0)	3.9		ABC	C	褐灰	5%	SK195覆土。	
19	瓶		3.8	(10.0)	AB	A	灰	15%	SK195覆土。	
20	甌	(40.0)	7.3		ABC	A	灰	5%	SK152覆土。11本組?の波状文2条。	
21	坏	(14.6)	4.2		AC	B	灰白	15%	SK214覆土。	
22	坏	(14.6)	4.1		ABC	C	にぶい褐	20%	SK214覆土。	
23	坏	(12.0)	3.0		AB	B	橙	15%	SK222覆土。北武蔵系。	
24	甌	(26.0)	4.2		ABC	B	灰白	10%	SK204覆土。	
25	羽釜	23.6	4.8		ABE	A	橙	5%	SK204覆土。	
26	擂鉢	(35.6)	6.0		ABG	C	灰オリーブ	10%	SK204覆土。全体に風化。	
27	擂鉢	(32.6)	5.6		ABE	B	にぶい橙	5%	SK184覆土。風化している。	
28	坏		3.0	(5.0)	BC	A	橙	35%	SK218覆土。土師質。内面黒色処理。	
29	灰釉壺		1.1	(7.6)	AG	C	灰白	20%	SK218覆土。底部糸切り痕残る。	
30	鉄鐸	残長5.5cm, 径1.3～1.5cm。								SK218覆土。



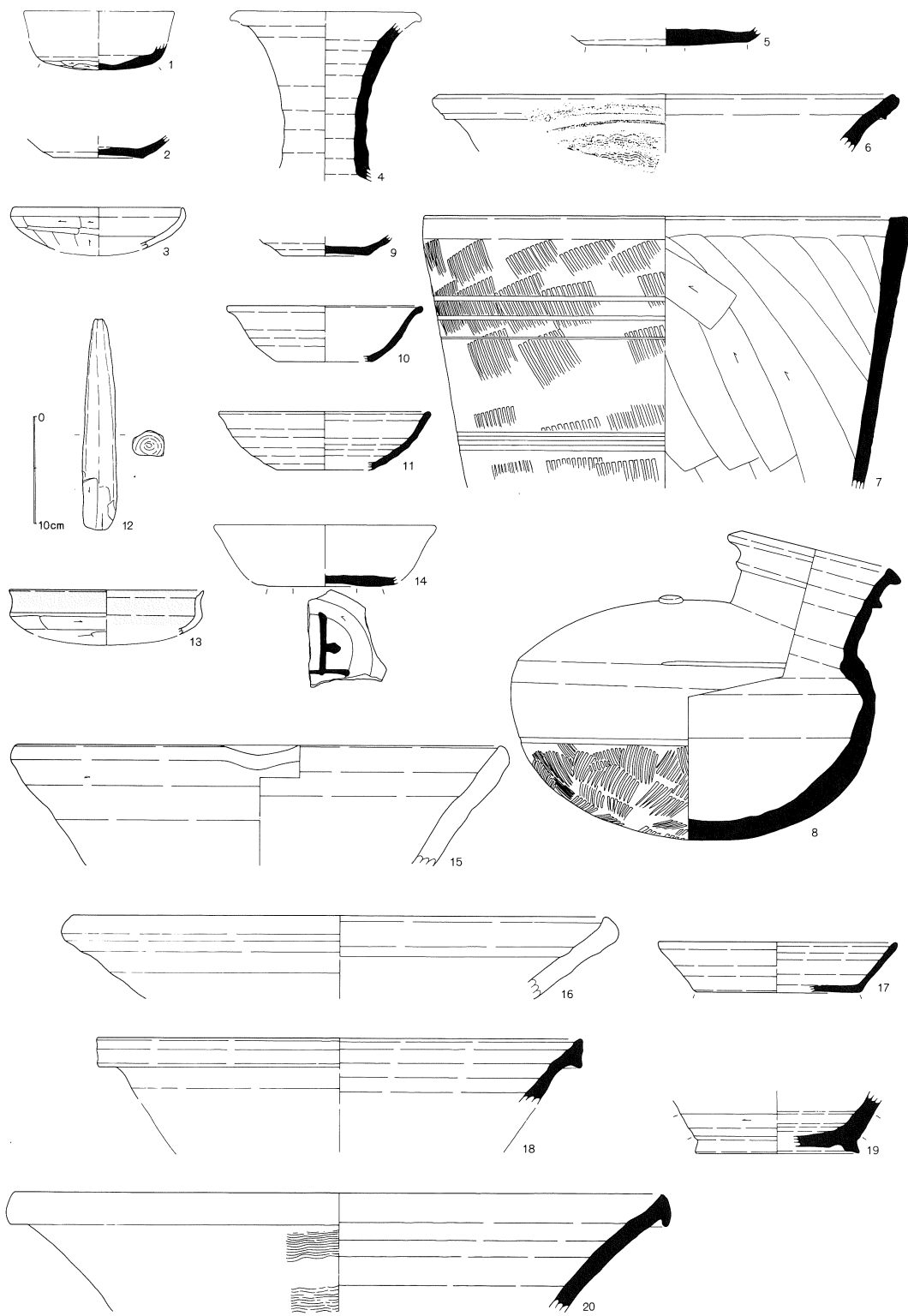
第288图 第II群土坑(1)



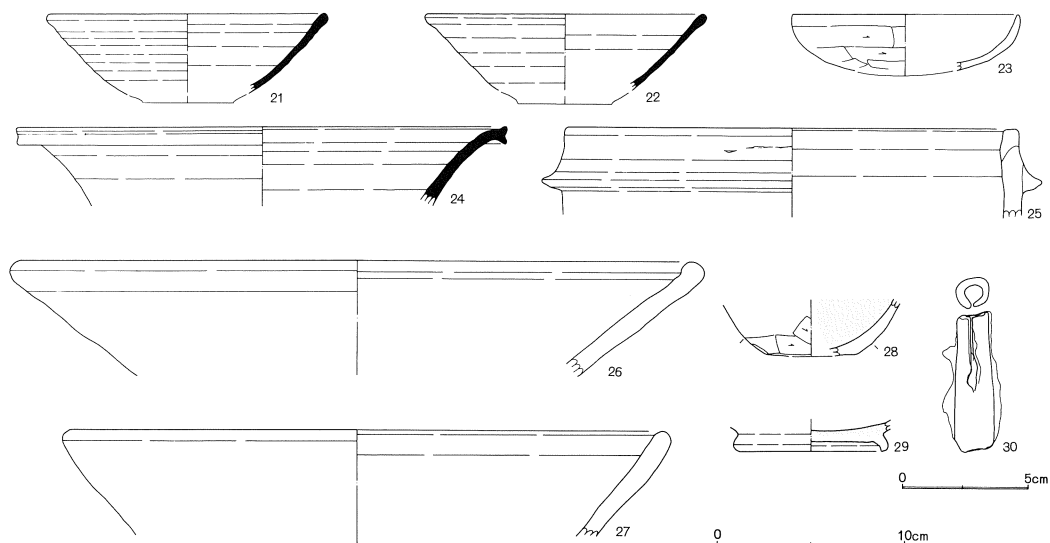
第289图 第II群土坑(2)



第290图 第II群土壙(3)



第291图 第II群土壙出土遺物(1)



第292図 第II群土壙出土遺物(2)

第2表 第II群土壙一覧表

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)										備考(出土遺物・重複関係等)	
				6	7	8	9	10	11	中世	近世				
133	102	L-6	69×62×10												遺物なし
134	190	L・M-6	76×50×13												遺物なし
135	121	H-7	69×58×11												遺物なし
136	101	L-6	92×86×9												土師環・須恵環・甕
137	190	L-8	88×80×14												遺物なし
138	99	L-6	94×79×14												遺物なし
139	116	I-6	86×70×24			≈									須恵環 鞆羽口
140	203	L-9	101×76×8						≈						土師環・甕 須恵環
141	192	K-8	106×83×24			≈									土師環・甕 須恵甕 鉄器
142	35	J-6	98×88×23												遺物なし
143	206	L-9	117×106×8												遺物なし
144	245	L-10	108×98×77												土師甕 須恵環・甕
145	199	M-8	91×82×94			≈									土師環・甕 須恵環・甕・鉢・甌・平瓶
146	193	K-8	133×118×12												遺物なし
147	113	M-6	134×105×10												土師甕 時期不明
148	96	L-6	80×74×7												遺物なし
149	217	J-8	154×72×18												遺物なし
150		M-9	206×120×12												遺物なし
151	105	L-6・7	119×84×9												須恵甕
152	191	L-8	134×108×24						≈						土師甕 須恵環・蓋・甕
153	95	L-6	127×96×7												遺物なし
154	32	K-6	134×98×22												遺物なし
155	204	L-9・10	196×102×43												土師甕 須恵環・甕
156	118	I・J-6	105×78×4												土師甕
157	216	J-8	146×58×24												遺物なし

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)								備考(出土遺物・重複関係等)		
				6	7	8	9	10	11	中世	近世			
158	208	K-9	126×73×7											遺物なし
159	202	L・M-9	140×64×11				~~~~~							土師甕 須恵甕・埴
160	210	K-9	170×58×11					~~~~~						土師甕 須恵甕 内黒埴
161	209	K-9	143×76×23											遺物なし
162	243	L-10・11	168×160×8			~~~~~	~~~~~							須恵環・甕
163	120	H-7	179×155×57											遺物なし
164	218	I-8	194×169×78	~~~~~										土師環・甕 須恵蓋・甕・瓶
165	239	K-10	265×196×22											土師甕 時期不明
166	214	J・K-7	164×80×10				~~~~~							土師環・甕 須恵甕
167	33	K-6	194×62×17								~~~~~			土師環・甕 須恵環・甕 在地系鉢 常滑系鉢 内黒埴
168	207	L-9	178×78×5											遺物なし
169	200	K-8	169×86×17											遺物なし
170	98	L-5	172×108×4											遺物なし
171	106	L・M-7	186×114×18			~~~~~								土師甕 須恵環・甕 常滑甕
172	107	M-7	184×102×10		~~~~~	~~~~~								土師甕 須恵環
173	205	M-9	194×115×31											土師環・甕 須恵環・甕
174	201	L-9	169×99×21				~~~~~	~~~~~						須恵甕
175	115	J-6・7	172×80×14											土師甕 須恵甕
176	219	H-7	109×97×24											遺物なし
177	213	J-9	139×100×48											遺物なし
178	114	M-7	160×100×12											遺物なし
179	34	J・K-6	147×138×20											遺物なし
180	189	L-8	200×110×14											遺物なし
181	108	M-7	109×104×12			~~~~~	~~~~~							須恵環・甕
182	211	M-10	123×78×29		~~~~~									土師環・甕 須恵環・甕
183	97	L-6	172×112×8			~~~~~								須恵環(「上」銘の墨書あり)
184	215	J・K-8	270×85×12								~~~~~			土師甕 須恵環・甕 在地系鉢
185	194	K-8	324×74×8		~~~~~									土師甕 須恵甕
186	222	M-10	288×73×14			~~~~~	~~~~~							土師環・甕 須恵環・甕
187	36	K-6	280×94×24			~~~~~					~~~~~			須恵環 在地系鉢
188	109	L-7	259×109×20								~~~~~			土師甕 須恵鉢 片口鉢
189	119	M-5	336×86×12				~~~~~							土師環・甕 須恵環・甕
190	112	M-6	116×40×16									~~~~~		染付碗
191	195	L-8	112×57×22					~~~~~						土師環・甕 須恵甕
192	4	M-6	114×112×16											遺物なし
193	223	M-10	230×66×10											土師甕 時期不明
194	244	L・M-10・11	268×68×7											遺物なし
195	136	M-6・7	242×126×14					~~~~~						土師環・甕 須恵環・甕
196	224	M-10・11	412×81×11			~~~~~								土師甕 須恵環・蓋
197	151	M-6	254×90×45		~~~~~									土師環・甕 須恵甕
198	103	L-6	193×121×29					~~~~~						土師甕 須恵環・甕
199	104	L-6	121×67×17			~~~~~								土師環・甕
200	111	M-5	182×101×12			~~~~~		~~~~~	~~~~~					土師環・甕 須恵甕 緑釉埴 鉄滓(椀型滓)
201	149	M-5	152×134×34				~~~~~							土師環・甕 須恵甕
202	150	M-5・6	82×80×83											須恵甕 時期不明
203	5	L-6	274×88×24											遺物なし
204	141	M-7	284×194×18					~~~~~			~~~~~			土師甕・鉢 須恵環・蓋・甕 羽釜

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)								備考(出土遺物・重複関係等)		
				6	7	8	9	10	11	中世	近世			
205	147	M-7	258×132×22		〰									土師環・甕
206	133	M-6	308×139×14			〰								土師甕 須恵環・甕
207	131	M-6	273×168×37			〰								土師甕 須恵環・甕
208	132	M-6	114×73×22			〰								須恵甕
209	6	L-6	575×119×48			〰		〰						土師環・甕 須恵環・甕 緑釉埴 灰釉埴
210		M-8	115×110×27											遺物なし SX04内
211	2	K-8	103×84×23											遺物なし SJ97
212	110	L-7	146×86×6											遺物なし SJ89
213	135	M-6・7	222×104×27		〰									土師環・甕 須恵環・甕 SJ75内
214	137	M-7	104×102×12					〰						土師環・甕 須恵環 SJ75内
215	130	M-7	290×134×8			〰								土師甕 須恵環・甕・瓶 SJ76
216	138	M-7	219×82×14			〰								土師環 須恵環・甕 鉄滓 SJ76内
217	139	M-7	96×86×20			〰								土師環・甕 須恵環・甕・瓶 SJ76内
218	140	M-7	304×119×15			〰					〰			須恵環・甕 灰釉埴 在地系鉢 内黒埴SJ76内
219	148	M-7	232×92×14			〰								土師環 須恵環・蓋・甕・瓶 SJ75内
220	196	K-8	86×73×12			〰								土師甕 SJ99内
221	197	J-8	116×78×41											遺物なし SJ99内
222	198	K-8	96×50×10		〰									土師環 須恵甕 SJ99内

6. 竪穴状遺構(S X04・05)

第4号竪穴状遺構(第294図)

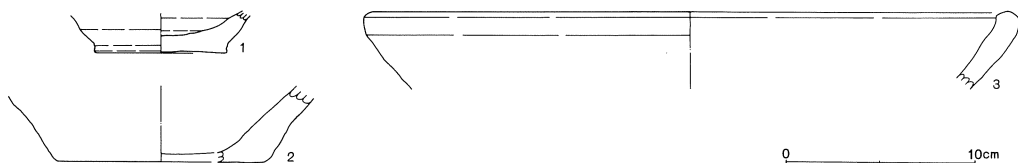
M-8区に位置する。第36号掘立柱建物跡と第210号土壌を切って構築される。規模は長径4.40m、短径3.60m、深さ0.30mを測る不整形プランを有する土間状遺構である。底面は緩やかな凹凸をもち、堅い面は認められない。壁の立ち上がり角度も鈍い。

覆土はローム粒子を少量含む褐色土で構成され大きな土層変化はみられなかった。

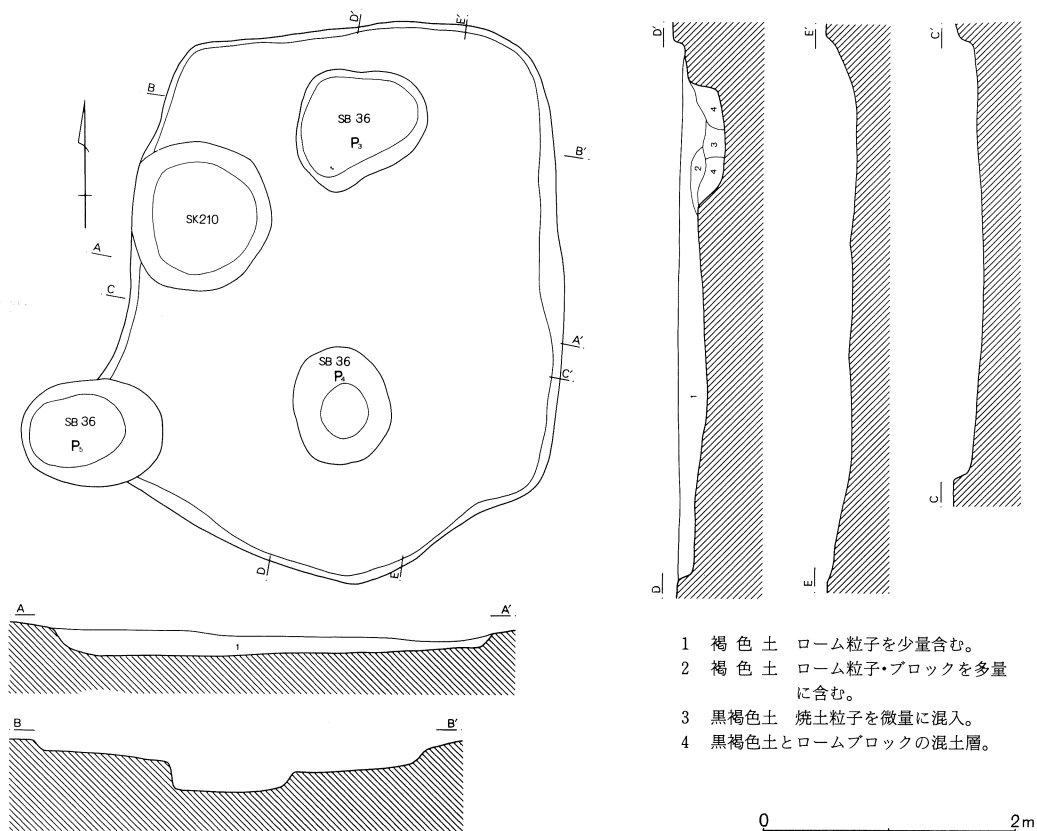
出土遺物は土師器・須恵器を除くと在地系の鉢2、土師質坏1点がある(第293図)。中世の所産と推定される。

第4号竪穴状遺構出土遺物観察表(第293図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏		2.1	7.0	A C E	A	橙	20%	覆土。土師質土器。
2	播鉢		4.0	11.0	A	B	灰	25%	覆土。
3	播鉢	(33.6)	4.1		A B I	C	橙	5%	覆土。



第293図 第4号竪穴状遺構出土遺物



第294図 第4号竪穴状遺構(L=31.00m)

第5号竪穴状遺構(第295図)

K・L-9区に位置する。東壁部は削平されており遺存していなかった。平面形は不整形を呈し、残存規模は長径4.00m、短径2.10m、深さは西壁下で0.20mを測る。

底面は凹凸をもつが比較的堅く踏み締められていた。ピットは7本検出されているが、全て伴うか否かは不明である。

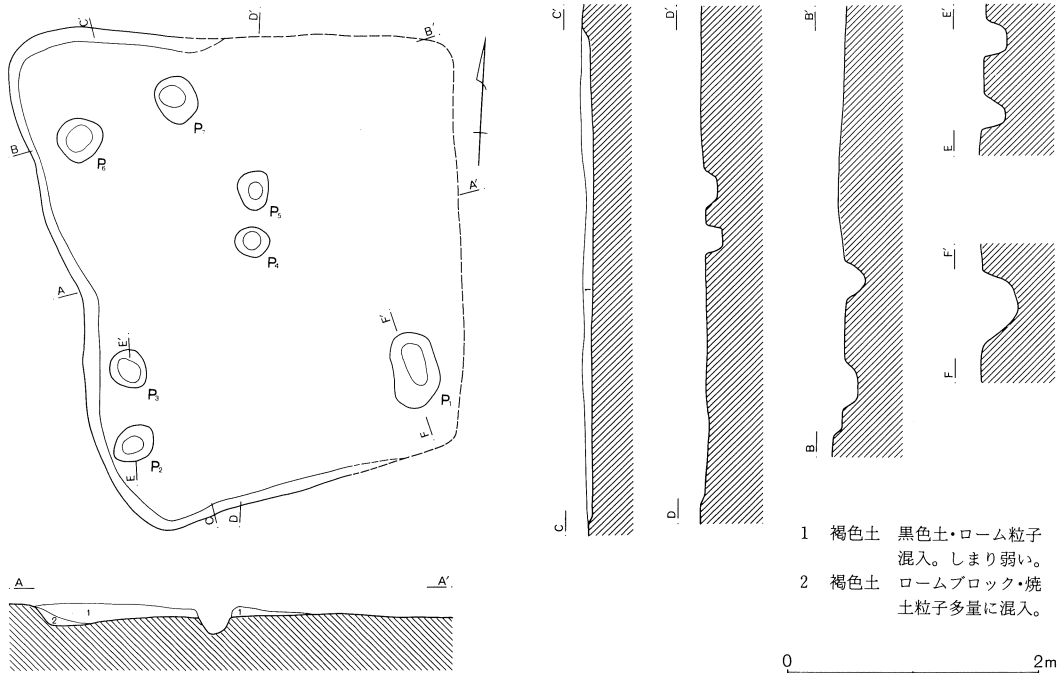
出土遺物が検出されていないため年代は不明であるが、覆土の状態等から中世以降の土間状遺構と推定される。

7. その他

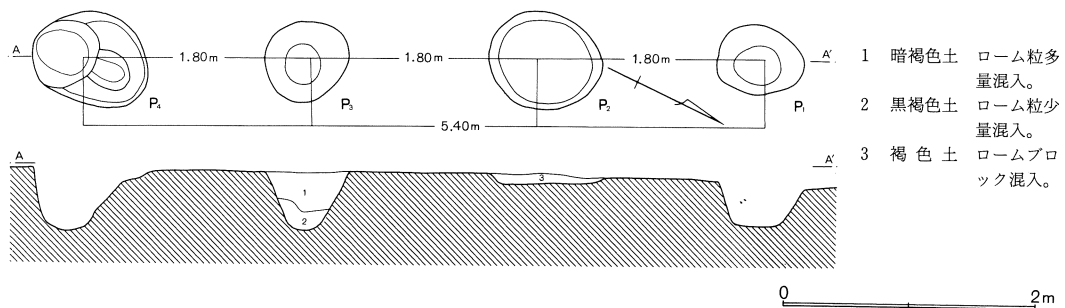
(1) 柱穴列(SA)

第1号柱穴列(第296図)

J・K-8区に位置する。掘立柱建物跡にはならないが4本のピットがほぼ等距離に並ぶため柱穴列とした。



第295図 第5号竖穴状遺構(L=30.80m)



第296図 第1号柱穴列(L=30.70m)

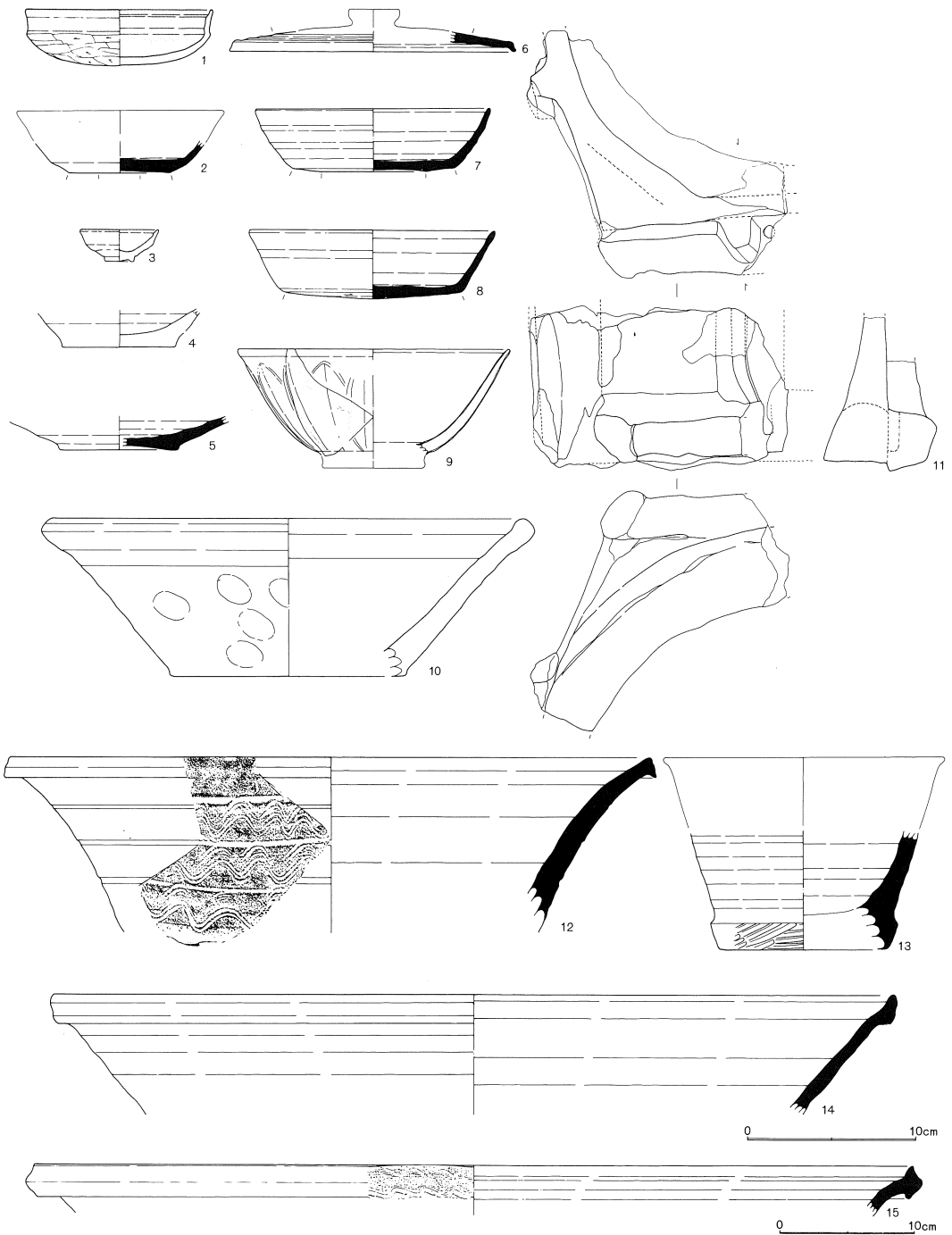
柱間寸法は約1.80mを測る。深度は0.40~0.50mを測るがP₂のみ浅いため疑問も残る。出土遺物は検出されておらず、性格・年代共に明らかにできない。

(2) ピット

第II群では278基の単独ピットが検出された。出土遺物は第297・298図に掲載した。また図示遺物を出土したピットの位置は第285図に示すこととし、個別遺構図は省略した。

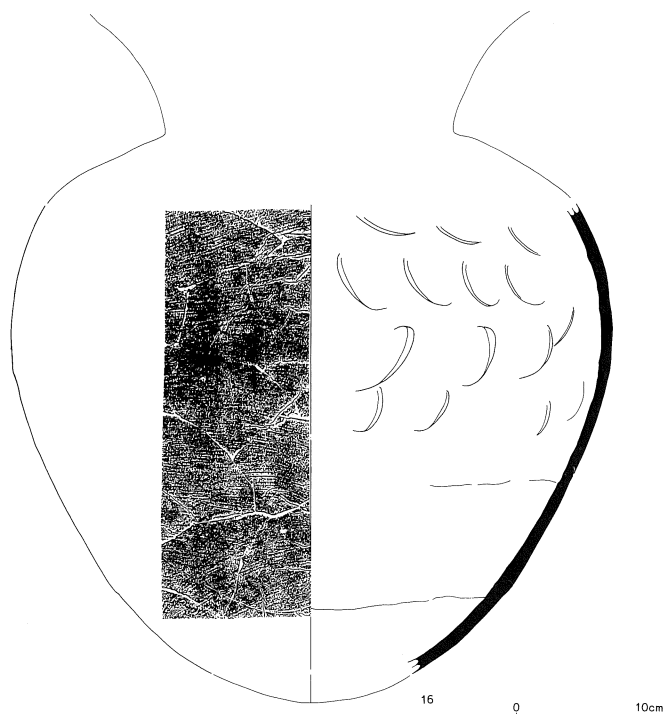
特筆すべき遺物としてK-7区P₇から出土した瓦塔がある(第297図11)。これは長径70cm、深さ45cmの楕円形ピットの下層から根固め状に敷き詰められた小礫群に混じって出土した。おそらくピットそのものは中世以降の所産と推定され、瓦塔の破片は二次的に使用されたものと考えられる。

厚さ3.0~3.5cm程の円形に巡らせた粘土板周囲に粘土を貼付して製作されている。須恵質の焼き



第297図 第II群ピット出土遺物(1)

で胎土に白色針状物質を含むことから南比企窯跡群で焼成されたものと考えられる。現状では正面と左側面の2面が確認されるが、両面の挟角は 105° 前後を測り、あるいは六角瓦塔の可能性も想定されるが現状では決し難い。正面には基部に基壇状の張り出しが見られ、その上部に柱が1本、その



第298図 第II群ピット出土遺物(2)

右側の側壁欠損部には切り込みが確認され、扉を表現した開口部となる。またこの開口部と柱の中間点下部には軸ずりの穴が僅かながら残されている。左側壁には張り出しは存在せず柱は基部まで延びている。隅から柱中心部までの距離は正面で8.0~8.5cm、側面で10.0cmと両方で異なり柱間寸法の相違を反映したもののか製作上の誤差であるのか不明である。

3は瀬戸・美濃系鉄釉小杯、9は龍泉窯系青磁碗である。体部に鎬蓮弁文が施されている。

第II群ピット出土遺物観察表(第297・298図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	3.3		AB	A	浅黄橙	35%	L-7Grid ₀ P ₂₀ 覆土。
2	坏		1.9	6.0	ABC	A	灰	90%	M-6Grid ₀ P ₁₆ 覆土。
3	小杯	(4.5)	1.9	1.7	J	A	灰白	35%	K-6 Grid ₀ P ₁₀ 覆土。瀬戸・美濃系鉄釉小杯。
4	坏		2.2	6.6	BC	B	橙	100%	L-8-g Grid ₀ P ₁₀ 覆土。
5	皿		2.0	(7.0)	ABC	B	灰	45%	L-9Grid ₀ P ₉ 覆土。
6	蓋	(17.0)	1.1		ABC	A	灰	10%	L-9Grid ₀ P ₉ 覆土。
7	坏	(13.8)	3.7	(9.6)	ABC	A	灰	25%	L-6Grid ₀ P ₁₀ , 11.底部外周手持ち筥削り。
8	坏	(14.4)	4.0	10.4	ABC	A	灰	55%	I-9Grid ₀ P ₅ 覆土。
9	青磁碗	(16.0)	6.2		B	A	白	15%	L-9Grid ₀ P ₁₄ 。龍泉窯系。鎬蓮弁文を施す。
10	播鉢	(28.0)	10.1		AB I	B	にぶい褐	20%	L-6Grid ₀ P ₁ 覆土。
11	瓦塔		10.0		ABCE	B	灰	20%	K-7Grid ₀ P ₇ 覆土。
12	囊	(38.0)	10.4		AC	B	灰	10%	L-6Grid ₀ P ₆₉ 覆土。
13	磨鉢		7.0	(10.0)	AC	A	灰	15%	L-9Grid ₀ P ₉ 覆土。
14	囊	(50.0)	7.0		BC	A	灰	10%	L-9Grid ₀ P ₉ 。Na8, 10覆土。
15	囊	(65.0)	3.6		ABC	A	灰	10%	L-9Grid ₀ P ₉ 。Na3, 6覆土。
16	囊		46.0		AC	A	灰	25%	L-9Grid ₀ P ₁ 覆土。

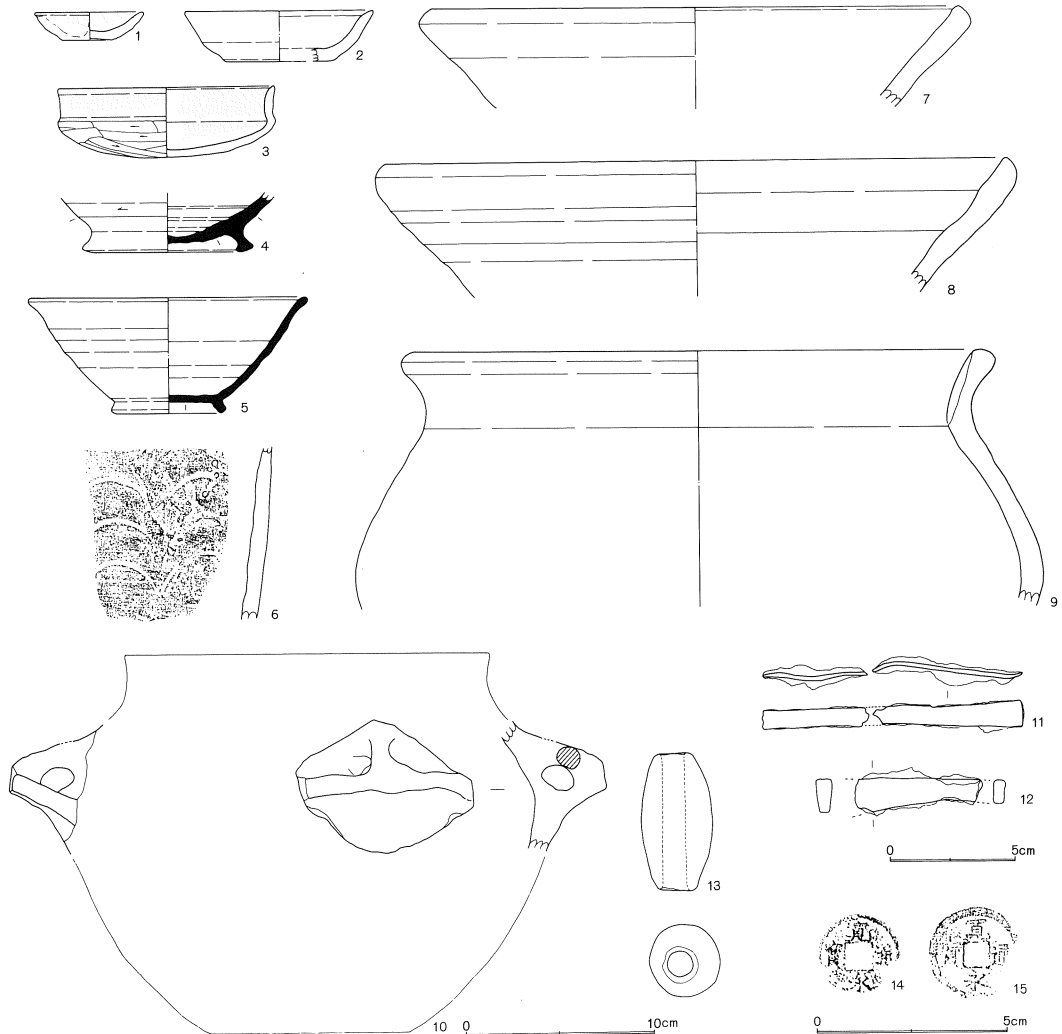
(3) グリッド

15点を図化した。第299図6は瀬戸美濃系灰釉瓶子胴部片で、ヘラ描沈線で孤状の文様を描く。釉調は淡緑色。10は在地産土釜の把手。板状の火除が付される。11は板状鉄製品。接合しない2片からなり、幅0.9~1.1cm、厚さ0.15cm前後で刃は無い。L-8区。12は刀子。残長5.1cm、最大幅1.3

cm。M-7区。13は土錘。全長7.2cm、最大径3.8cm、孔径1.3cm。重量90g。K-8区。14・15はI-9区確認面から出土した寛永通寶。14は径2.3cm。15は径2.5cm。3枚鏽着したうちの2枚である。

第II群グリッド出土遺物観察表(第299図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	小杯	5.8	1.5	2.6	B	A	灰白	35%	K-9Grid, 瀬戸鉄釉小杯。
2	坏	10.0	2.7	(6.0)	B F	A	浅黄橙	25%	I-9Grid。
3	坏	11.4	3.7		A B	A	にぶい橙	100%	K-5-p Grid。
4	瓶		3.1	7.8	B G	A	灰白	100%	I-10Grid。
5	高台坏	14.4	6.1	5.6	B C	B	灰白	40%	M-7Grid。
6	瓶子				B	A	灰白	10%	I-10Grid。瀬戸灰釉瓶子。
7	播鉢	(28.0)	5.4		A B E	A	にぶい黄	5%	J-10Grid。
8	播鉢	(33.0)	7.1		A B	B	灰白	5%	J-10Grid。
9	甕	(30.0)	13.5		A B G I	C	褐灰	20%	J-10Grid。在地系
10	土釜				A D	C	オリーフ黒	5%	J-10Grid。在地系。



第299図 第II群グリッド出土遺物

VI 第III群の遺構と遺物

第III群はA区の北東部に当たる。北と東には浅い谷が広がり、B区・C区との境界をなしている。本群では住居跡22軒、掘立柱建物跡20棟、井戸跡14基、溝跡12条、土壌55基、火葬墓1基と単独ピット208基が検出された。遺存状態は全体に悪いが、古代から中世の遺構が複雑に重複していた。



第300図 第III群遺構配置図

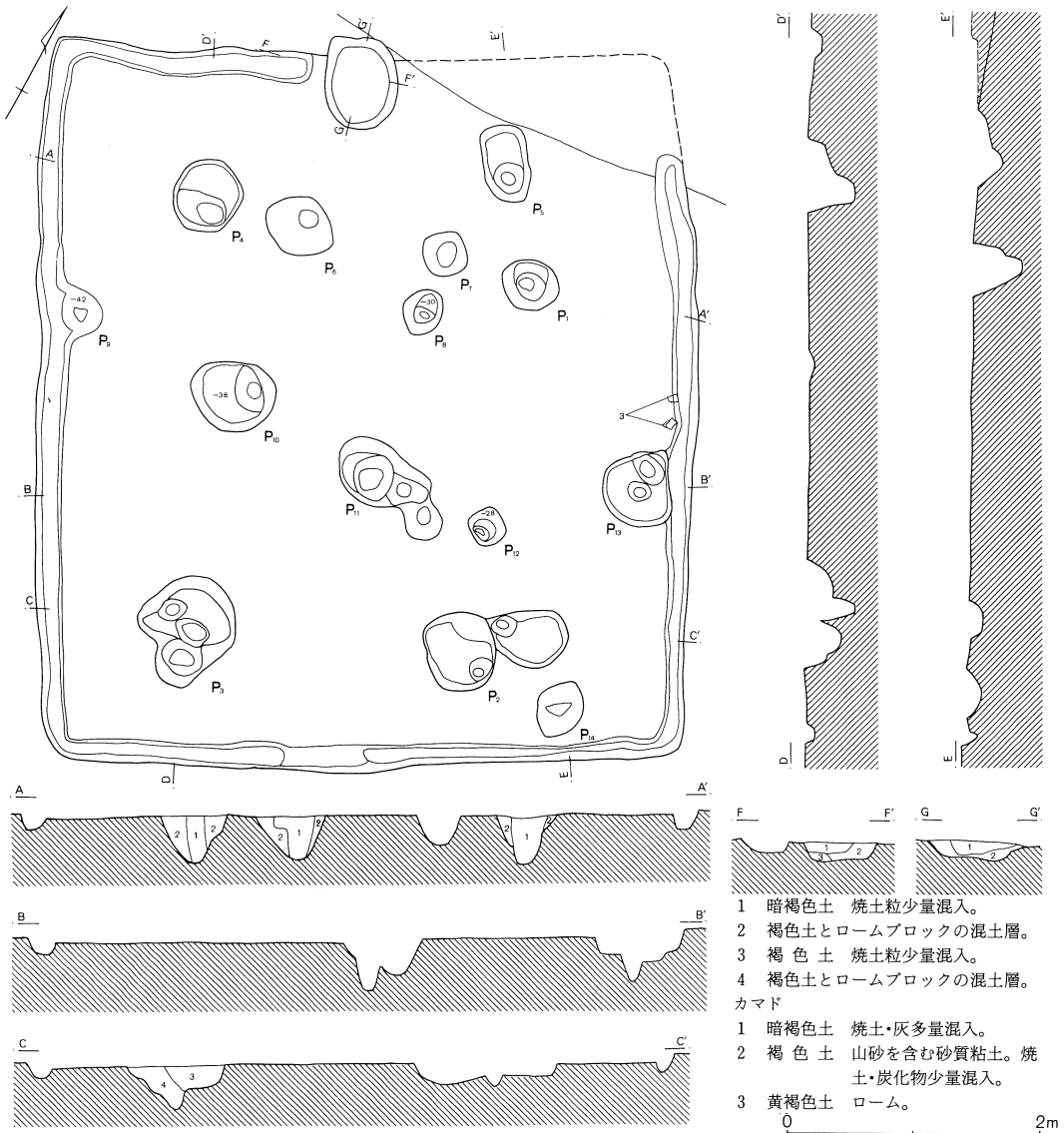
1. 住居跡

第100号住居跡(第301図)

J-10・11区に位置し、北東コーナーを削平されている。形態は方形を呈するものと推定される。規模は長軸5.68m、短軸5.26m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-28°-Wを示す。

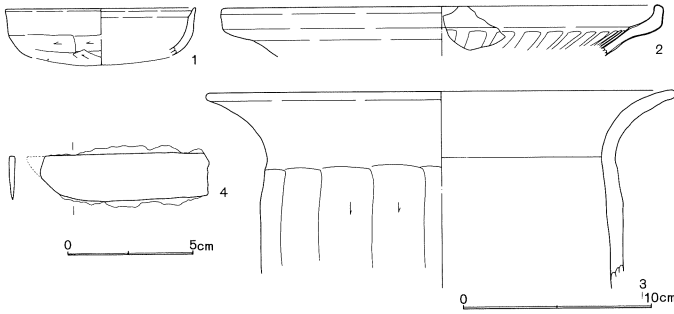
床面はほぼ平坦で全体に堅い。覆土はローム粒子・焼土粒子を含む褐色土で土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁に設けられるが、上面は削平され袖は残存しない。燃焼部は僅かに壁外に延びている。壁溝は残存部ではほぼ全周する。



第301図 第100号住居跡(L=30.60m)

ピットは14本検出された。支柱穴を4本とすると配置に無理がある。P₁・P₄・P₅は埋土が類似し、柱痕も確認されているが確実に住居に伴うとはいえない。



第302図 第100号住居跡出土遺物

出土遺物は31点あり、土師器坏、甕、小型甕、須恵器坏、甕と青磁盤、鉄製刀子が検出されている。青磁盤(第302図2)はP₂から出土したもので、住居に伴わない。龍泉窯系であろう。土師器坏(1)と甕(3)から稲荷前IV期に比定しておきたい。

第100号住居跡出土遺物観察表(第302図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	(10.0)	2.5		A B	A	橙	10%	P ₁₀ 内覆土。無彩。	
2	青磁盤	(23.0)	2.6		G	A	灰白	5%	P ₂ 内覆土。	
3	甕	(24.7)	10.4		A B	B	にぶい橙	15%	No.1, 2。床面。	
4	小刀	残長6.6cm。最大幅1.8cm。								No.33。覆土。

第101号住居跡(第307図)

J-11・12区に位置する。住居北半は後世谷地を水田化した際に削平されたものと思われ、遺存状態は極めて悪い。形態は方形または長方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸4.60m、短軸3.64m、深さ約0.20mを測る。主軸方位はN-33°-Wを示す。

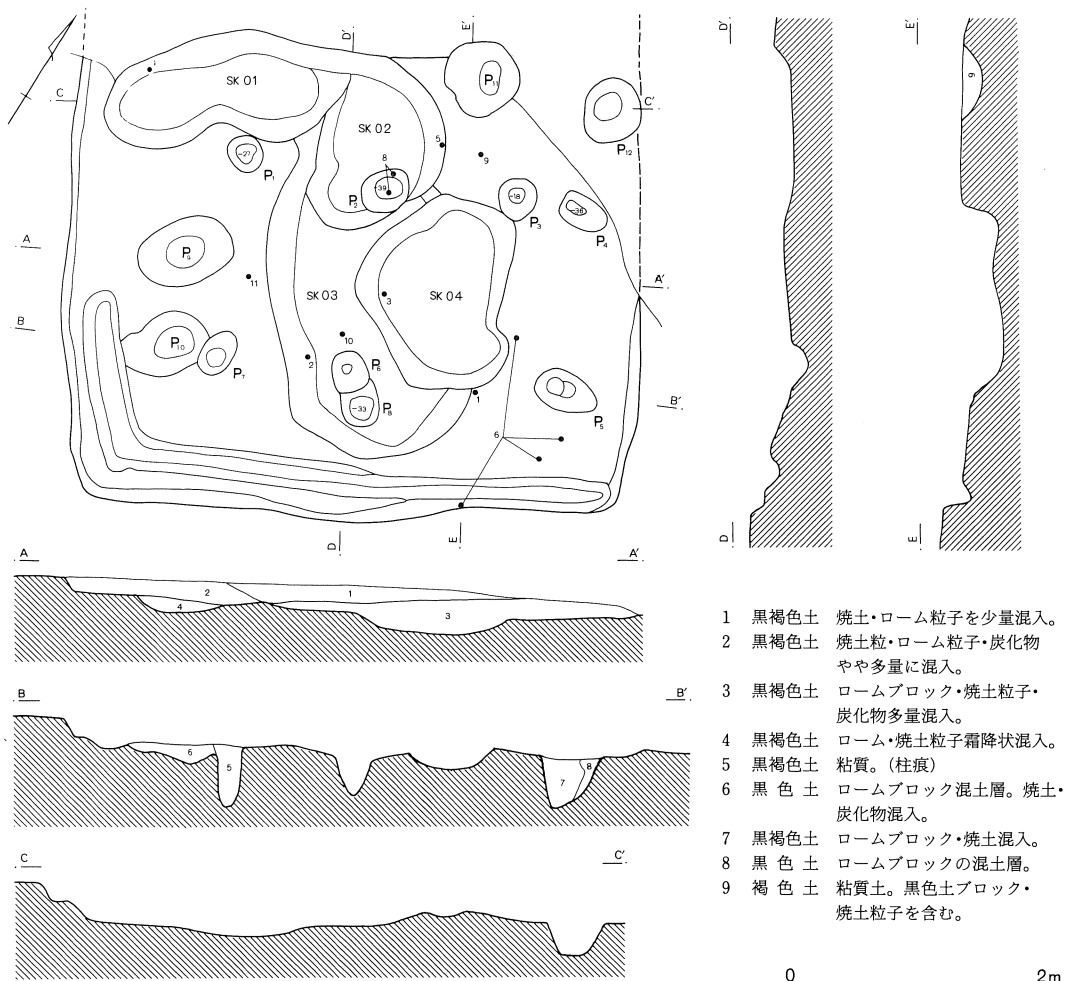
第3・4層上面が床面に相当するが、住居北東部は不明である。特に堅く締まった箇所は少なく、貼床が検出されたのは部分的に留まった。

覆土は4層に分けられ、第3・4層が掘方に相当する。覆土の残存状態が悪いため、堆積環境は明確には捉えられない。

カマドは残存部には検出されなかった。おそらく削平された北壁に位置したものと推定される。ピットは12本検出された。P₁~P₇は何れも径が小さくかつ深度も深く、柱穴であることは間違いない。本住居に帰属する可能性もないとはいえないが、中世頃の建物の一部となる可能性の方が高いものとする。寧ろ、P₁₀やP₁₁が住居柱穴となる可能性があるだろう。

土壌は4基検出されているが、何れも住居の掘方と考えられる。壁溝は南壁と西壁にかけて部分的に検出された。

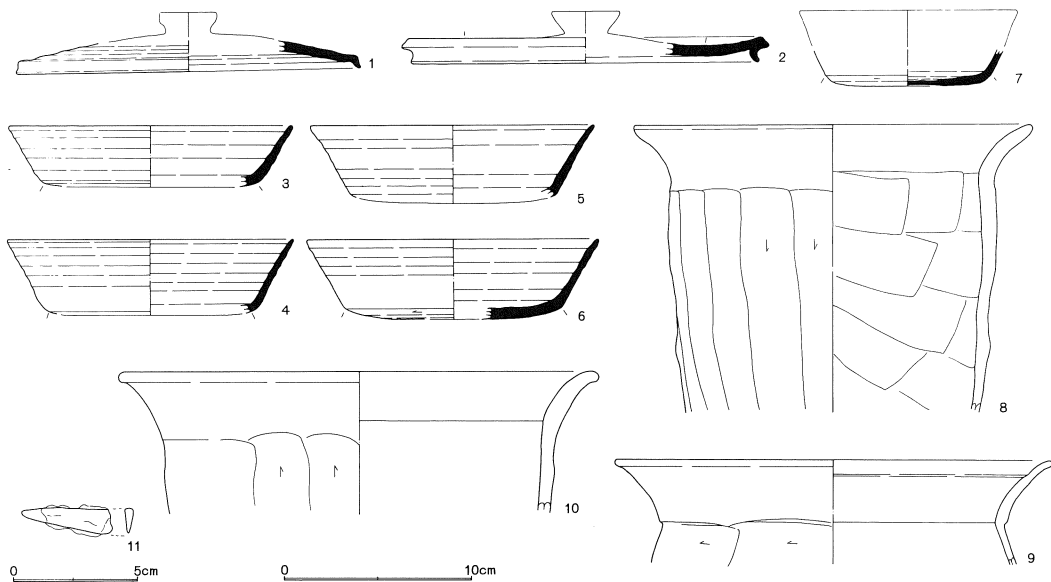
出土遺物は195点を数え、住居の遺存状態が悪い割には比較的多い。器種的には土師器坏、甕、甗、須恵器坏、蓋、甕、壺がある。遺物からみると大きく二時期の製品がみられ土師器坏はIV期前後の製品で占められる。第304図7・8・10はこの段階に含まれる可能性が高い。1・2・3~6の須恵器はVI期に位置付けられる。9の甕もこれらに伴う段階であろう。時期決定は難しいが一応後者で以て住居の年代としておきたい。その他に刀子片が床面から出土している。



第303図 第101号住居跡(L=30.60m)

第101号住居跡出土遺物観察表(第304図)

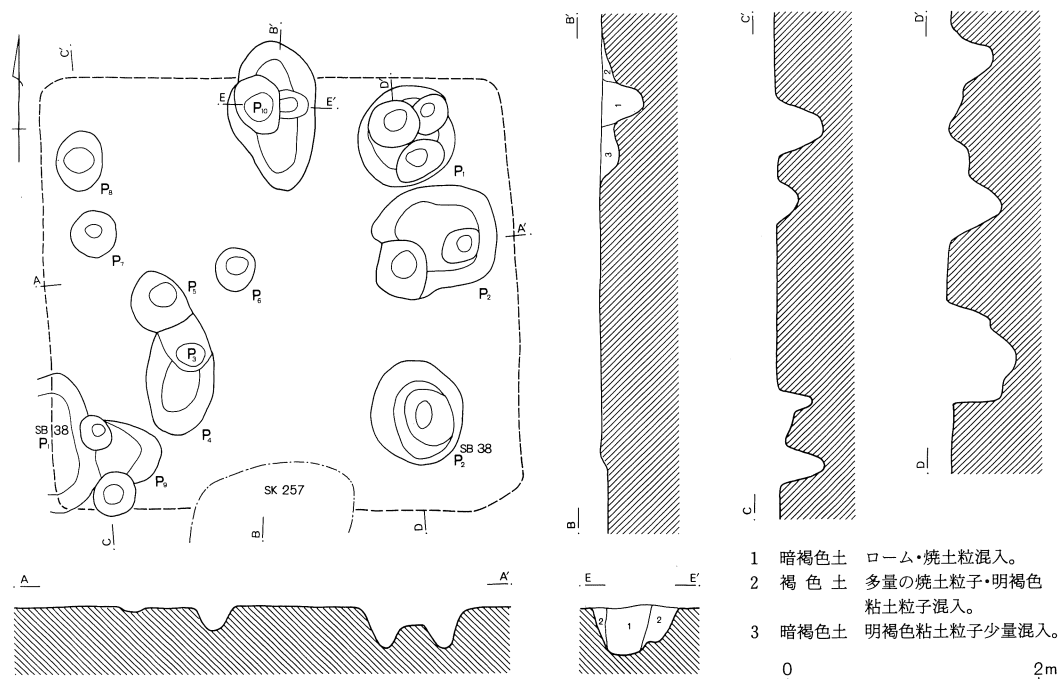
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(18.2)	1.6		ABC	A	灰	10%	Na61。覆土。
2	蓋	(18.4)	1.3		ABC	A	灰	10%	Na135。SK03底面。
3	坏	(15.0)	3.2	(11.3)	AC	B	灰	10%	Na137。SK04内覆土。
4	坏	(15.2)	3.9		ABC	A	灰	10%	Na36。SK01底面。
5	坏	(15.0)	3.8		ABC	B	灰	20%	Na112。SK02底面。
6	坏	(15.5)	4.2	(11.5)	ABC	A	灰	35%	Na56, 72, 87, 89。覆土。
7	坏		1.9	(7.6)	ABC	A	灰	25%	覆土。
8	甕	(21.0)	15.2		ABC	A	橙	25%	Na1。覆土。
9	甕	(23.0)	5.5		ABEF	B	にぶい橙	20%	Na114, 116。P ₂ 内覆土。
10	甕	(25.0)	7.5		BE	A	浅黄橙	10%	Na134。SK03底面。
11	刀子	残長3.6cm。最大幅1.0cm。							Na119。床面。



第304図 第101号住居跡出土遺物

第102号住居跡(第305図)

J-11区に位置する。遺構確認作業中、焼土・ローム混じりの黒色土が薄く分布する地点が発見され、床面下まで削平の及んだ住居の掘方と判断した。分布範囲は凡そ3.4×3.8m程で、ほぼ方形を



第305図 第102号住居跡(L=30.70m)

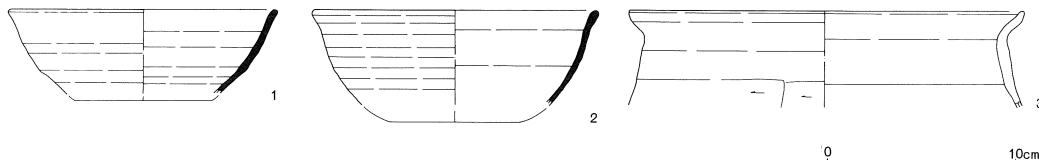
呈する。第37号掘立柱建物跡と重複するが、本住居の方が古いものと推定される。

カマドは不明であるが、P₁₀に切られた楕円形の土壇がその候補で、覆土には焼土粒子が多量に含まれていた。推定線の範囲内には10本のピットが検出された。伴う可能性のあるものはP₁・P₂のみで、他は中世以降のピットと考えられる。

出土遺物は21点と少なく、全て小片である。土師器坏、甕、須恵器坏、埴、甕の各器種があるが、土師器坏は明らかに混入である。第306図1の須恵器坏は第37号掘立柱建物跡P₂に流入したもので、本来は本住居に伴うものと判断した。年代としては、須恵器坏と甕の様相から9世紀末葉(稻荷前XIV期)頃と推定しておきたい。

第102号住居跡出土遺物観察表(第306図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.0)	4.5		ACE	B	灰	5%	SB37P ₂ 内覆土。
2	埴	(15.0)	5.0		ACE	A	褐灰	5%	P ₁ 内覆土。
3	甕	20.8	5.1		ACE	B	橙	5%	カマド内覆土。



第306図 第102号住居跡出土遺物

第103号住居跡(第307図)

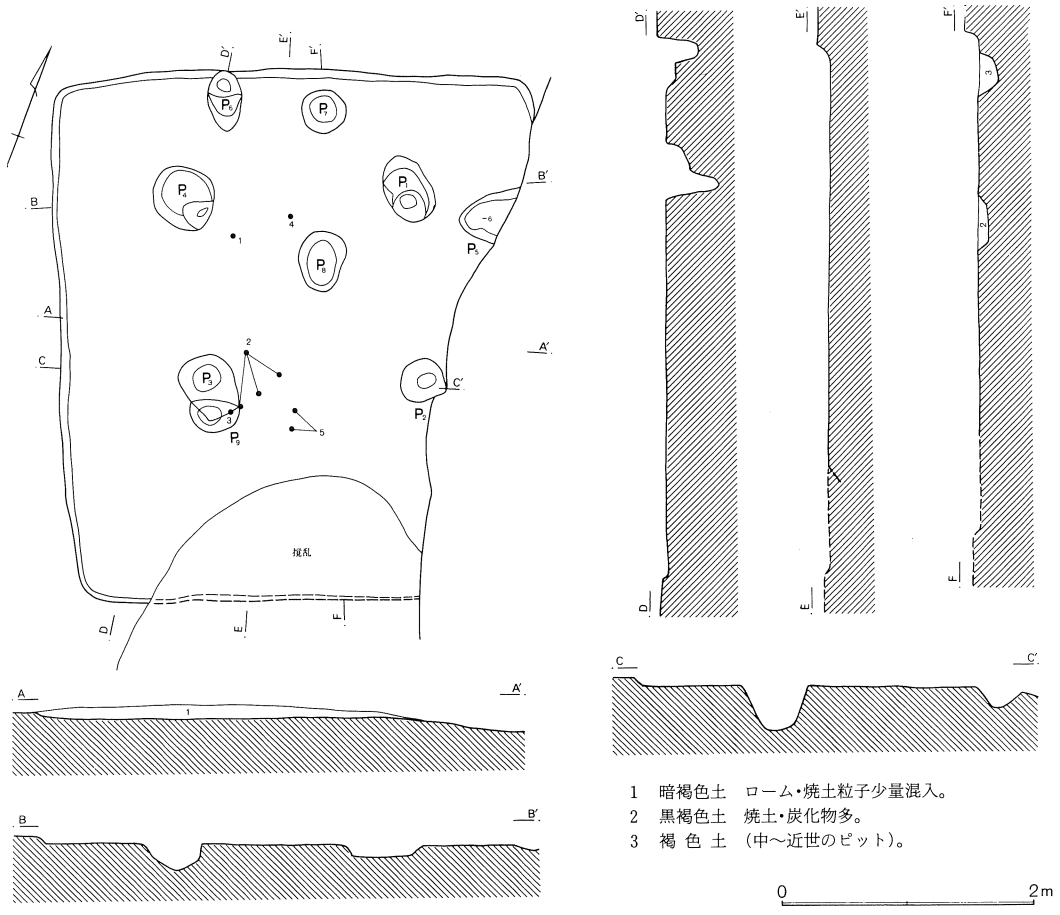
J・K-12区に位置する。浅谷に面した台地肩部にあり東壁部は削平されていた。また、南壁部も倒木痕による攪乱を受け全体に遺存状態は悪い。平面形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸4.12m、短軸3.84m、深さ0.10mを測る。主軸方位は北壁を基準にとると、N-67°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅く締まっている。覆土はローム粒子混じりの暗褐色土単層で土層変化は観察されていない。カマドは東壁部に設けられたものと推定され、僅かにP₅周囲に褐色粘土が散布していた。ピットは9本検出された。P₁からP₄が主柱穴と考えられる。他は中世以降の所産であろう。

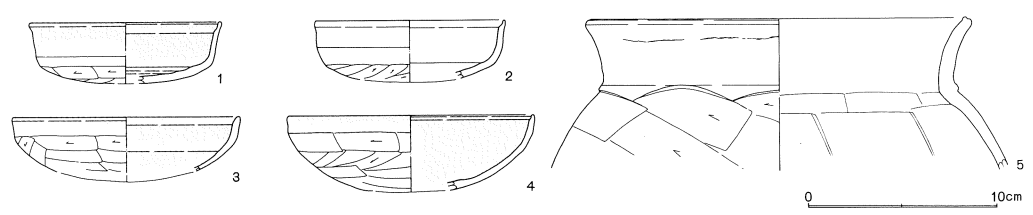
出土遺物は92点検出されたが、小片が多い。器種的には土師器坏、甕、壺、須恵器坏、甕、瓶があるが、須恵器は混入の可能性が高い。稻荷前IV期に比定される。

第103号住居跡出土遺物観察表(第308図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	3.2		ACE	A	にぶい黄橙	25%	No6.覆土。
2	坏	(10.0)	3.1		ABF	A	にぶい橙	25%	No12, 17, 19, 23.覆土。無彩。
3	坏	(12.0)	2.9		BE	B	浅黄橙	35%	No25. P ₄ 内覆土。
4	坏	(13.0)	4.0		AB	A	橙	20%	No3.覆土。
5	壺	(20.0)	8.0		BEG	A	橙	30%	No26, 36.覆土。



第307図 第103号住居跡(L=30.50m)

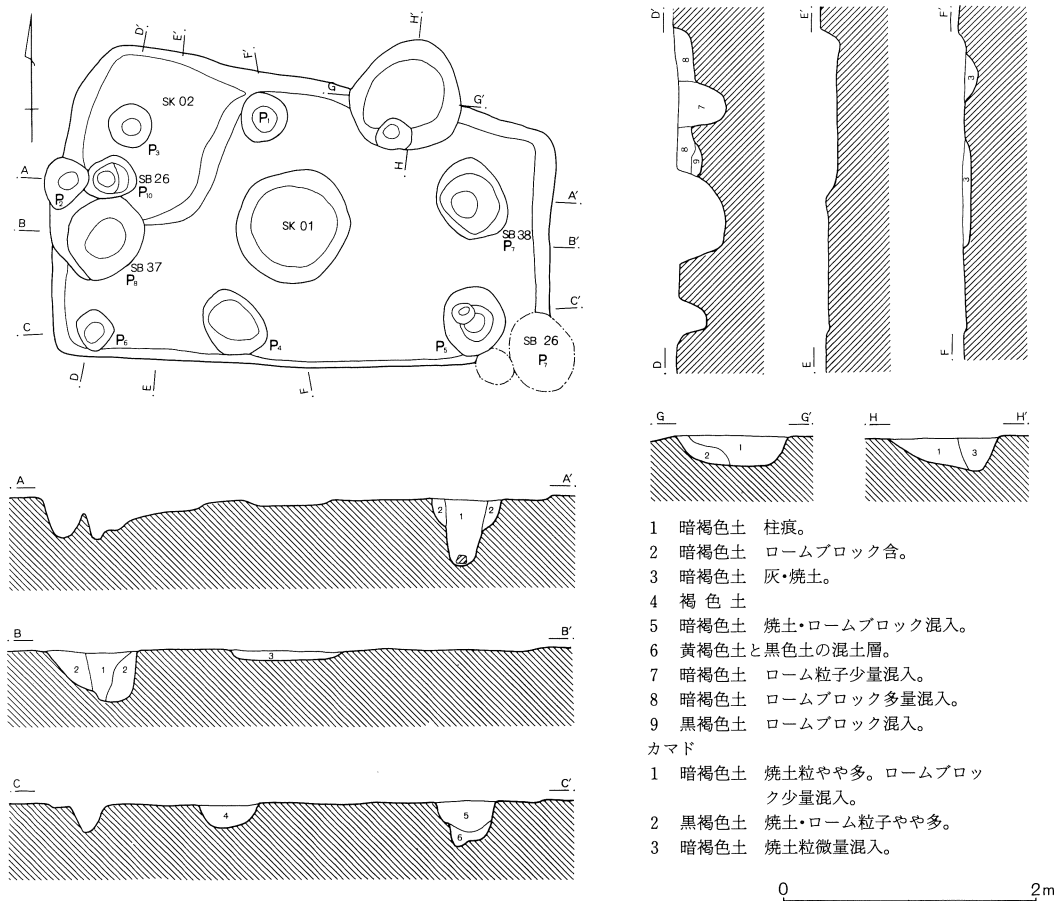


第308図 第103号住居跡出土遺物

第104号住居跡(第309図)

J・K-11区に位置し、第26・38号掘立柱建物跡と重複する。形態は南壁部が不明瞭であるが不整長方形を呈するものと推定される。規模は長軸4.00m、短軸2.26m、深さ0.05mを測る。主軸方位は東壁を基準とするとN-3°-Eを示す。

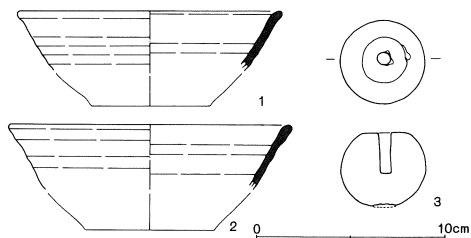
床面はほぼ平坦であるが、特に堅い箇所はみられなかった。覆土の状況は明らかにできなかった。カマドは北壁に設けられる。円形プランを呈し、燃焼部は壁外に突出する。袖は存在しない。ピッ



第309図 第104号住居跡(L=30.60m)

トは8本検出されたが、確実に本住居に伴うものは認められなかった。覆土の様相からほとんど中世以降の所産であろう。土壌は2基検出された。第1号土壌には焼土と灰が詰まっていた。

出土遺物は21点と少ない。年代は、須恵器坏の様相から9世紀末葉頃と推定される。第310図3は球形の石製品で、一端に平坦面を設け、径0.6~0.7cmの孔を穿っている。小孔は深さ2.1cmを測り貫通しない。用途不明。おそらく中世の遺物であろう。P₆出土。



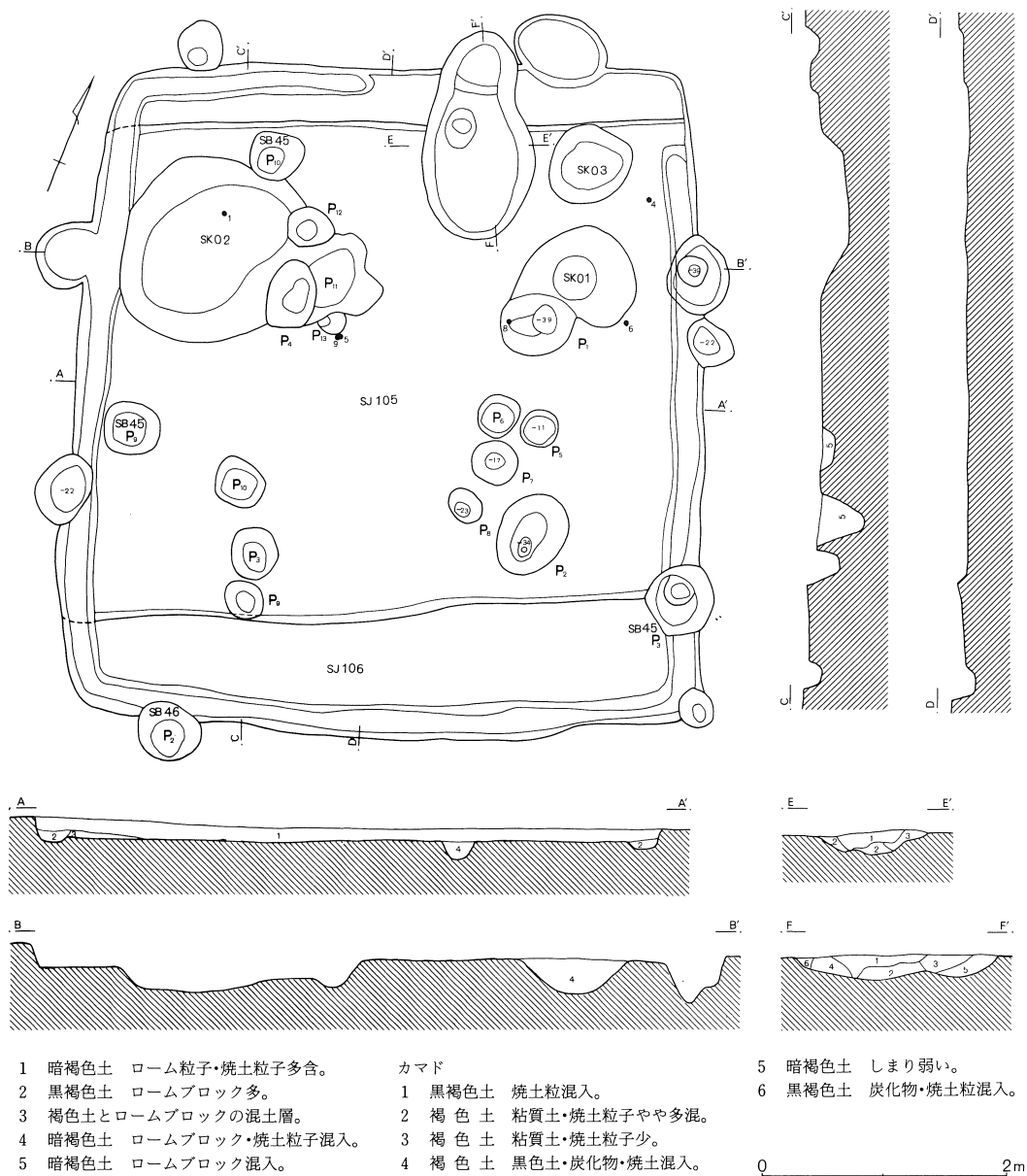
第310図 第104号住居跡出土遺物

第104号住居跡出土遺物観察表(第310図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	埴	(13.8)	3.1		AC	A	灰	5%	SK02覆土。	
2	埴	(14.8)	3.4		AB	A	灰	10%	床面。	
3	石製品	最大径4.5cm。高さ3.9cm。重量100g。								P ₆ 内。凝灰岩製か。

第105・106号住居跡(第311図)

K・L-11・12区に位置する。当初、1軒の住居として調査を進めたが、北壁と南壁部の内側に段差が生じ、2軒の住居が入れ「コ」状に重複することが判明した。内側の住居を105号、外側のそれを106号とする。床面の遺存状況から後者から前者に建て替えられたものと推定される。第105号住居跡は西壁と東壁を106号住居跡と共有し、規模は長軸5.16m、短軸4.10m、深さ0.10mを測る。第106号住居跡は長軸5.46m、短軸5.16m、深さ0.05mの規模を有する。主軸方位は何れもN-20°-Wを示す。



第311図 第105・106号住居跡(L=30.70m)

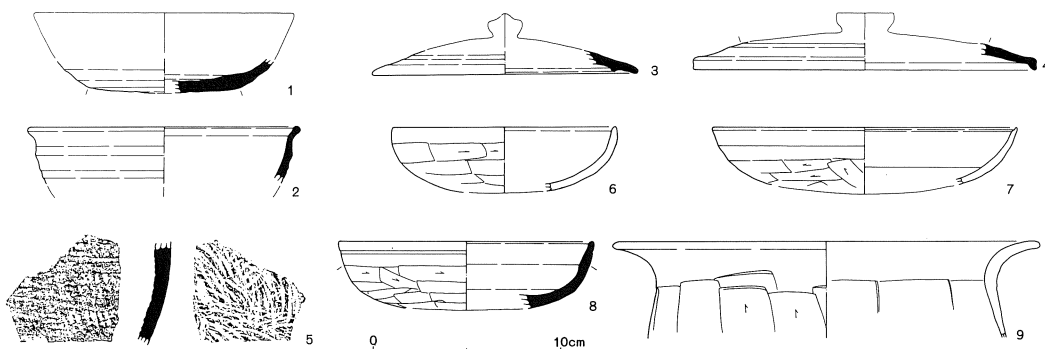
105号の床面はほぼ平坦で全体に堅い。覆土は暗褐色土単層で土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁に設けられる。遺存状況は悪く詳細は明らかにできないが、106号カマドの南側に重複して構築されたものと判断した。第5層が106号住カマド埋土であろうか。袖は明確には検出されなかった。ピットは住居内に13本検出された。P₁～P₄は105号の支柱穴と考えられる。106号に対応する柱穴は明らかにできなかった。他のほとんどのピットは、周辺に群在する中世のピット群に含まれるものと考えられる。土壌は3基検出された。第1・2号は掘方、3号は貯蔵穴の可能性がある。壁溝は106号の壁に沿って検出されたが、北壁の東半部は途切れていた。

両住居から出土した遺物は37点を数える。土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、甕、瓶の各器種が検出され、出土位置からほとんどは105号に属することになる。第312図1は底部へラ切り後削り。2の壙？は東海産であろうか。胎土が精良である。6は北武蔵系の杯、8は土師器杯に酷似するが、還元焰焼成を受け灰色を呈するため一応須恵器杯としたが良く分からない。小片が多く時期を確定し難いが、稻荷前V期頃と考えておきたい。

第105・106号住居跡出土遺物観察表(第312図)

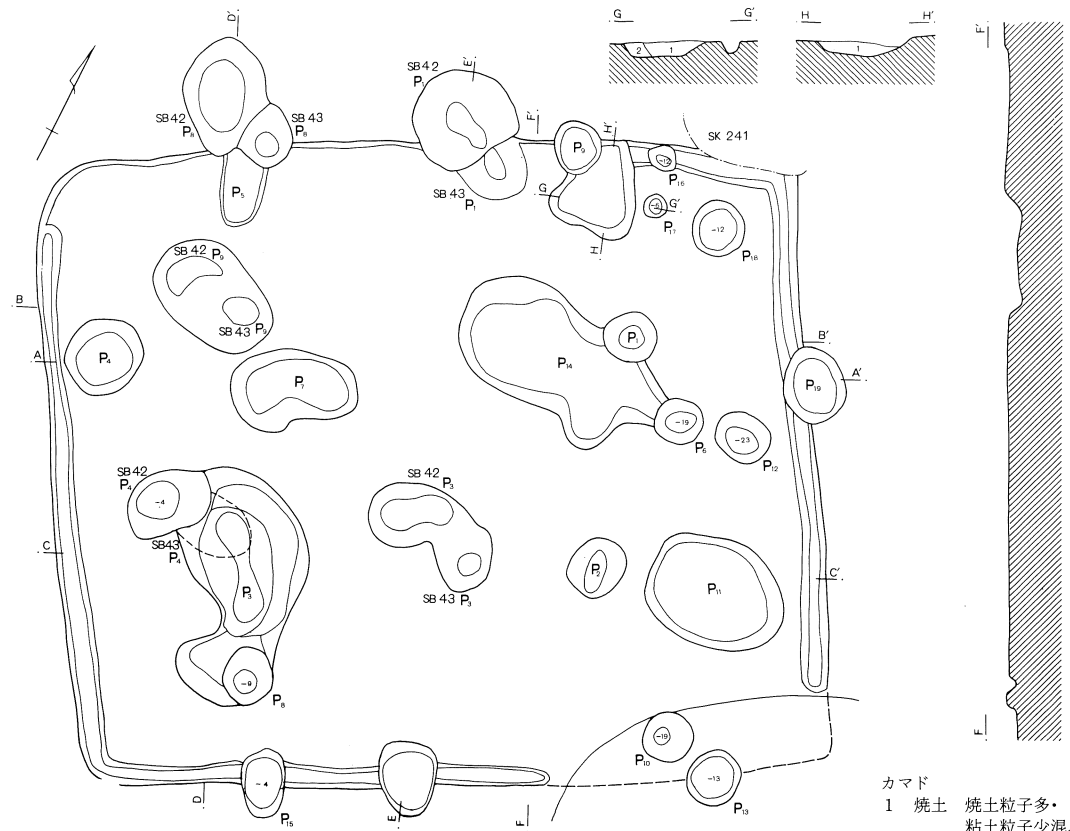
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	杯		1.8	8.0	A B C E	C	灰白	30%	№7。床面。風化。底部へラ切りか？。
2	壙	(14.0)	3.0		B G	A	灰	5%	P ₁₀ 覆土。東海産か。
3	蓋	(14.0)	1.2		A B C	B	灰	5%	覆土。かえり蓋。
4	蓋	18.0	1.5		A C G	B	灰白	5%	№3。床面。
5	甕				A B C	B	灰	5%	№9。覆土。
6	杯	(11.8)	3.4		A B E	B	橙	20%	№12。覆土。口唇部磨滅。
7	皿	(16.0)	3.0		A B	A	橙	15%	覆土。
8	杯	(13.5)	3.5		A B C	B	灰	20%	№11。P ₁ 覆土。体部から底部へラ削り。
9	甕	(22.0)	5.1		A B E	B	にぶい橙	25%	覆土。



第312図 第105号住居跡出土遺物

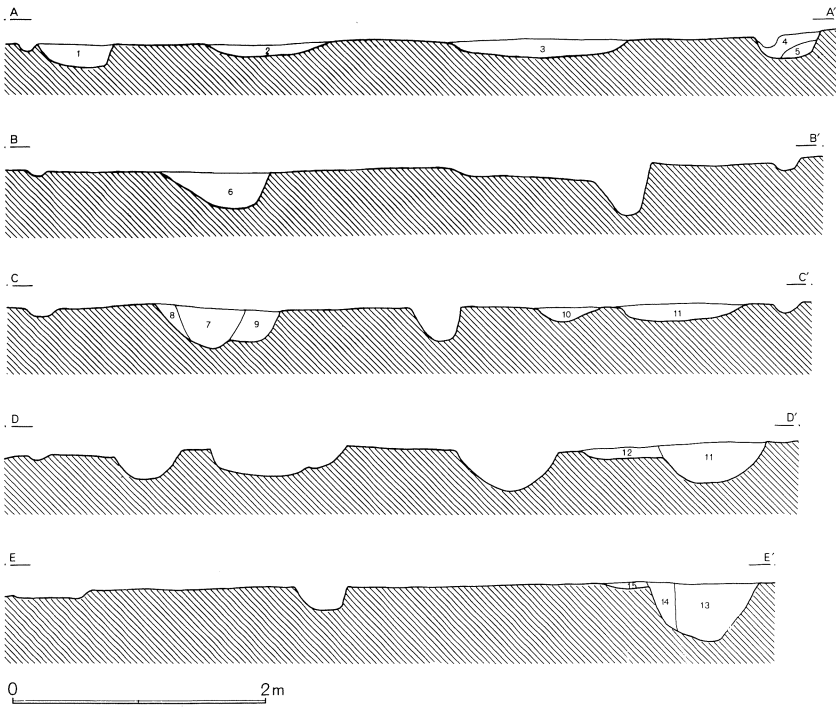
第107号住居跡(第313図)

L・M-11区に位置し、第110・111号住居跡と一部重複する。遺存状態は悪く、確認面で既に床面の大部分が露出していた。形態は長方形を呈し、長軸6.08m、短軸5.11mを測る大型住居跡であ



カマド
 1 焼土 焼土粒子多・粘土粒子少量。
 2 焼土 黒色土ブロック粘土粒子多。

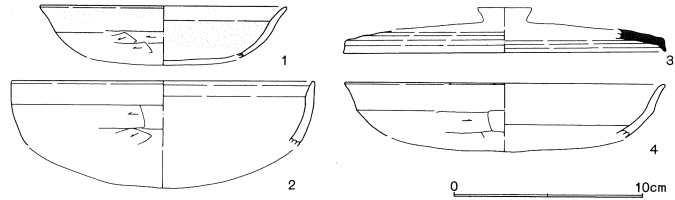
ピット
 1 暗褐色土 焼土・ローム粒子少量。
 2 暗褐色土 焼土・焼土粒小礫混入。
 3 黒褐色土 焼土・ローム粒子多。
 4 暗茶褐色土 ローム粒子少量混入。
 5 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量。
 6 黒褐色土 焼土・ローム粒少量。
 7 黒褐色土 ローム・焼土粒・小礫多混。
 8 黒褐色土 ローム粒子多しまり弱。
 9 褐色土とロームブロックの混土層。
 10 黒褐色土 礫混入。
 11 黒褐色土 ローム小礫・焼土粒子混。
 12 褐色土 ロームブロック混入。
 13 暗褐色土 焼土・小礫少量混入。
 14 暗褐色土 焼土粒子少小礫多量。
 15 褐色土 焼土多。



第313図 第107号住居跡(L=30.70m)

る。主軸方位はN-30°-Wを示す。

床面は平坦で全体に堅い。但し、南東隅は削平されて遺存していなかった。



第314図 第107号住居跡出土遺物

カマドは北壁東寄りに設けられるが、床面下の掘り込み

が僅かに残るのみである。燃焼部は壁内に納まり、覆土には焼土粒子が多量に含まれていた。袖は削平されており確認できなかった。ピットは22本検出された。P₁～P₄を主柱穴と判断したが、P₂がやや浅い。他のピットは直接伴うものではない。

土壌は3基検出された。第1・2号土壌は掘方乃至床下土壌と思われる。壁溝は北壁と南壁に途切れる箇所がある。貯蔵穴はみられない。

出土遺物は土師器坏、碗、皿、甕、須恵器蓋、甕が計46点検出されたが全て小片である。欠落器種が多くて年代決定は難しいが、土師器坏類には比企型坏の系譜を引く内面に沈線をもつ小ぶりの坏は皆無で、大振りの皿または碗タイプに変わっている。稻荷前VI期頃の様相と理解しておきたい。

第107号住居跡出土遺物観察表(第314図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.8)	2.8		AB	A	橙	5%	覆土。
2	碗	(16.0)	3.5		BF	A	橙	5%	覆土。
3	蓋	(17.0)	1.2		BC	A	灰	10%	P ₆ 内。
4	皿	(16.8)	2.8		ACE	B	にぶい黄褐	5%	覆土。

第108号住居跡(第315図)

L-11・12区に位置する。第109号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しいものと考えられる。また、第41号井戸跡が住居内に位置するが、井戸跡に切られているものと判明した。西壁から南壁にかけては掘り込みが浅く、全体の様相は不明な点がある。

一応東辺5.90m、北辺2.90mを確認したが、推定規模が正しければ、かなり大型の住居跡になる。住居の捉え方を誤った可能性と2軒の住居跡の重複についても検討したが、該期の遺物分布は推定線内のほぼ全域に及ぶため、一応当初通りのプランと考えた。深さは0.10mに満たない。主軸方位は東壁を基準にすると、N-60°-Eを示す。

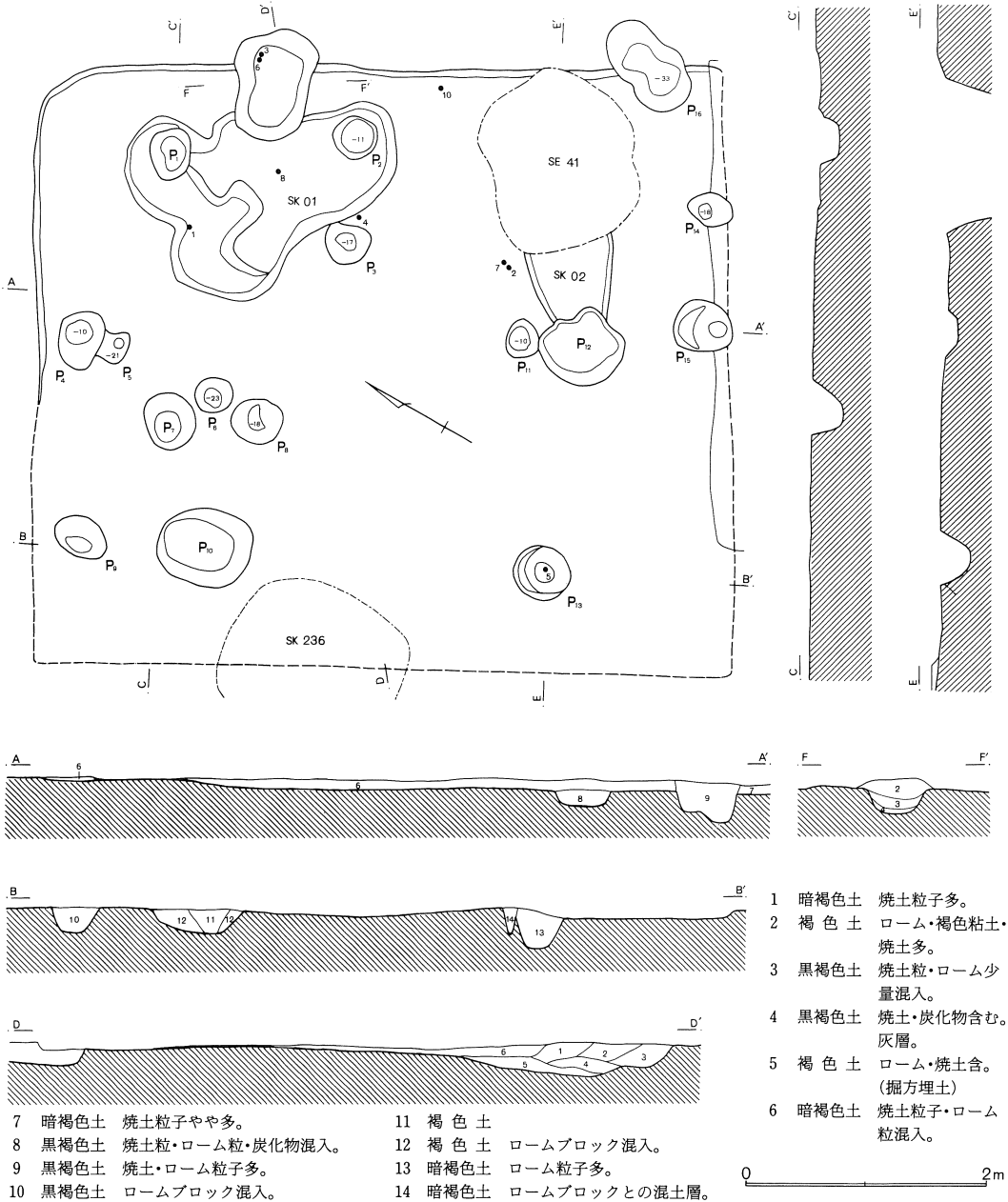
床面はカマド前面を中心に堅く踏み締められていたが、西域から南域にかけては全体に軟弱で、踏み締められた形跡は窺えない。覆土は薄く土層変化は明瞭には捉えられなかった。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は壁外に一部延び、皿状に掘り込まれる。袖は存在しないものと推定される。

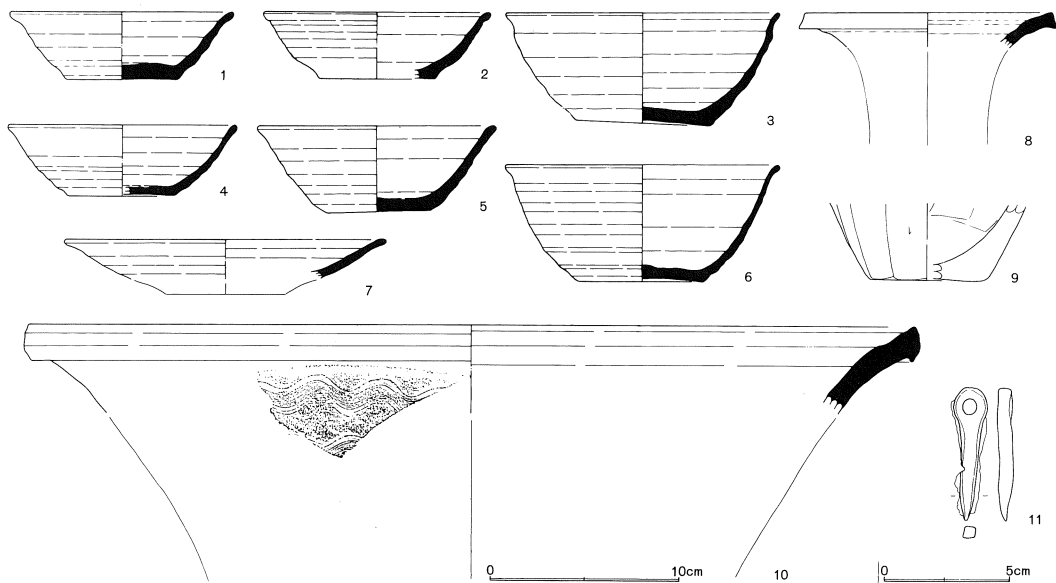
ピットは16本検出された。P₁₀～P₁₃は伴うものと考えられるが、他のピットに関しては帰属不明である。土壌は2基検出された。第1号土壌はカマド前面の掘方と推定される。第2号土壌の帰属

は不明であるが、遺構に伴う可能性もある。

出土遺物は142点検出された。土師器環、甕、小型甕、須恵器環、埴、皿、甕、壺の各器種がある。このうち、主体をなすものは須恵器環類で、土師器環と土師器甕類の大部分は混入である。第316図3・6の埴は二枚重なった状態でカマド燃焼部から出土した。4の埴はP₁₁に、5の埴はP₁₃にそれぞれ落込んだような状態で検出された。稲荷前 XIII 期に比定される。



第315図 第108号住居跡(L=30.80m)



第316図 第108号住居跡出土遺物

第108号住居跡出土遺物観察表(第316図)

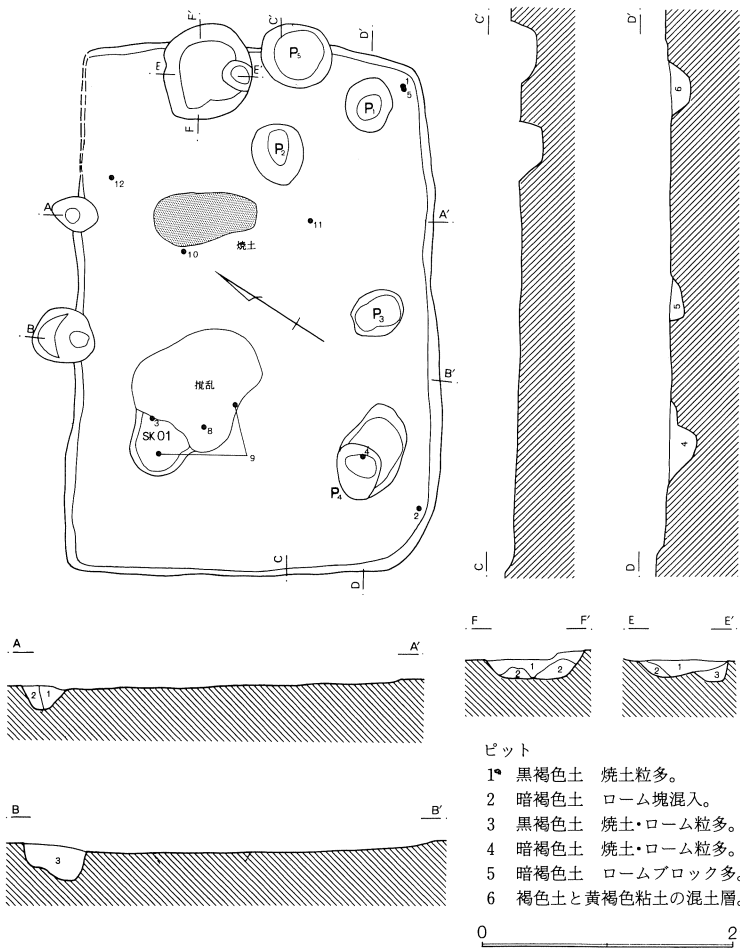
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	11.8	3.6	5.8	ABG	B	灰	40%	№2。SK01覆土。	
2	坏	11.9	3.6	6.0	AB	A	灰	20%	№17。覆土。	
3	碗	14.4	6.0	7.0	ABC	C	淡黄	95%	№34。カマド内覆土。	
4	坏	(12.0)	3.8	5.7	ABC	B	灰	40%	№5。P11覆土。	
5	坏	12.4	4.7	5.5	ACE	B	にふい赤褐	95%	P13覆土。	
6	碗	14.5	6.2	6.6	ABC	C	淡黄	95%	№35。カマド内覆土。	
7	皿	(17.0)	2.1		AC	C	にふい黄橙	10%	№16。覆土。	
8	瓶	(13.0)	1.0		ABC	B	灰	25%	№43。SK01覆土。	
9	甕		4.0	(6.0)	ABF	A	にふい橙	20%	覆土。	
10	甕	(47.0)	4.6		AC	A	灰	5%	№15。覆土。13本組の櫛描波状文を施す。	
11	留金具	残長5.3cm。頭部幅1.3cm。								P8覆土。

第109号住居跡(第317図)

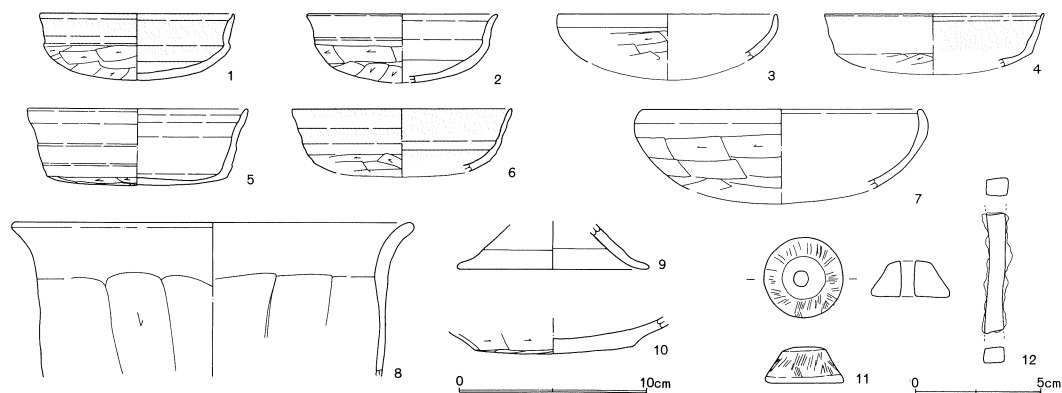
L・M-11・12区に位置する。第108号住居跡の南側に重複し、本住居の方が古い。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.16m、短軸2.98m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-56°-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、処々に礫が露出していた。また、カマド前面の床面には0.40×0.80mの範囲に焼土が薄く堆積していた。特に床面下の掘り込みは認められず、炉状の施設ではない。覆土の状況は不明である。

カマドは東壁に設けられるが、遺存状態は極めて悪い。燃焼部の大半は壁内に納まり、底面は鍋底状に掘り込まれる。袖は削平され残存しない。覆土は第1層が焼土、ローム粒、灰を混入する暗褐色土、第2層が焼土混じりの黄褐色土、第3層が褐色土で埋められていた。ピットは5本検出さ



第317図 第109号住居跡(L=30.80m)



第318図 第109号住居跡出土遺物

れたが、どれが住居の柱穴となるかわからない。第1号土壌は攪乱に切れ性格は不明である。

出土遺物は75点検出された。器種的には土師器杯、甕、台付甕、鉢、須恵器杯、甕と鉄片、石製紡錘車から成る。主体は土師器杯と甕で、須恵器は混入と考えられる。土師器杯には北武蔵系杯を含む(第318図3・7)。1と5は床面から約3cm浮いた位置から2枚重なった状態で出土。滑石製紡錘車(11)は側面に斜方向の条線が無数に走る。鉄器(12)は鍔茎部か。稲荷前IV期に比定される。

- ピット
- 1 黒褐色土 焼土粒多。
 - 2 暗褐色土 ローム塊混入。
 - 3 黒褐色土 焼土・ローム粒多。
 - 4 暗褐色土 焼土・ローム粒多。
 - 5 暗褐色土 ロームブロック多。
 - 6 褐色土と黄褐色粘土の混土层。
- 0 2m

0 10cm

0 5cm

第109号住居跡出土遺物観察表(第318図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	10.2	3.5		AB	A	橙	55%	№55。覆土。
2	坏	(10.0)	3.6		AB	C	にぶい黄橙	25%	№74。P ₄ 内。無彩。
3	坏	(11.5)	2.5		ABE	C	橙	10%	№4。SK01内覆土。
4	坏	(11.6)	2.8		ABC	A	橙	10%	№101。P ₄ 内。
5	坏	(11.6)	4.1	9.6	AB	A	褐灰	50%	№56。覆土。
6	坏	(11.6)	3.3		ABC	B	橙	15%	覆土。
7	坏	(14.8)	4.2		ABE	B	橙	40%	覆土。
8	甕	(21.0)	8.2		ACE	B	にぶい黄橙	15%	№12。攪乱内。
9	台付甕		2.4	10.0	ABCD	B	にぶい橙	50%	№2, 94。SK01。覆土。
10	壺		1.8	8.4	AC	A	にぶい黄橙	50%	№32。覆土。
11	紡錘車	最大径4.2cm。高さ1.9cm。重量45g。						100%	№45。覆土。滑石製。孔径0.8cm。
12	鉄器	残長4.9cm。幅0.9cm。							№80。床面。角棒状。

第110号住居跡(第319図)

L・M-11区に位置し、第107・111号住居跡と重複する。遺存状況が悪く、新旧関係は明確ではないが、本住居の壁溝上に貼床状の堅い面が確認されたことから110→111号住居に建て替えられたものと判断される。しかし、107号住居との新旧関係は明確にできなかった。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.73m、短軸3.32m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-15°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅いが、重複する111号住居のそれとほとんど同一レベルで続いている。部分的に床面が露出していたため、覆土の状態は明らかにできない。

カマドは北壁に設けられるが、遺存状態は極めて悪く詳細は不明である。新旧関係が正しいとすると111号住居跡のものとなり、本住居のそれは全く遺存しない。同一地点で作り替えたものであろうか。ピットは2本検出されたが、1本は111号の柱穴と判断される。

土壌は2基あり、1号土壌は111号住居に伴うものと推定され、貯蔵穴の可能性もある。壁溝は北壁を除いて巡るが、褐色土で意識的に埋められた形跡が窺え、上面は堅く踏み締められていた。

出土遺物は本住居域内から出土したものは本住居に伴う遺物として取上げたが、新旧関係の検討からほとんどは111号住居に含まれることになってしまう。遺物に時間幅が認められるため111号住居の時期そのものの限定が難しいが一応VI期前後とすると本住居はV頃に比定されよう。

第111号住居跡(第319図)

L・M-11区に位置し、第110号住居跡の東壁と北壁を基準に拡張したものと推定される。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸5.25m、短軸4.72m、深さ0.10m前後を測る。主軸方位はN-15°-Wを示す。

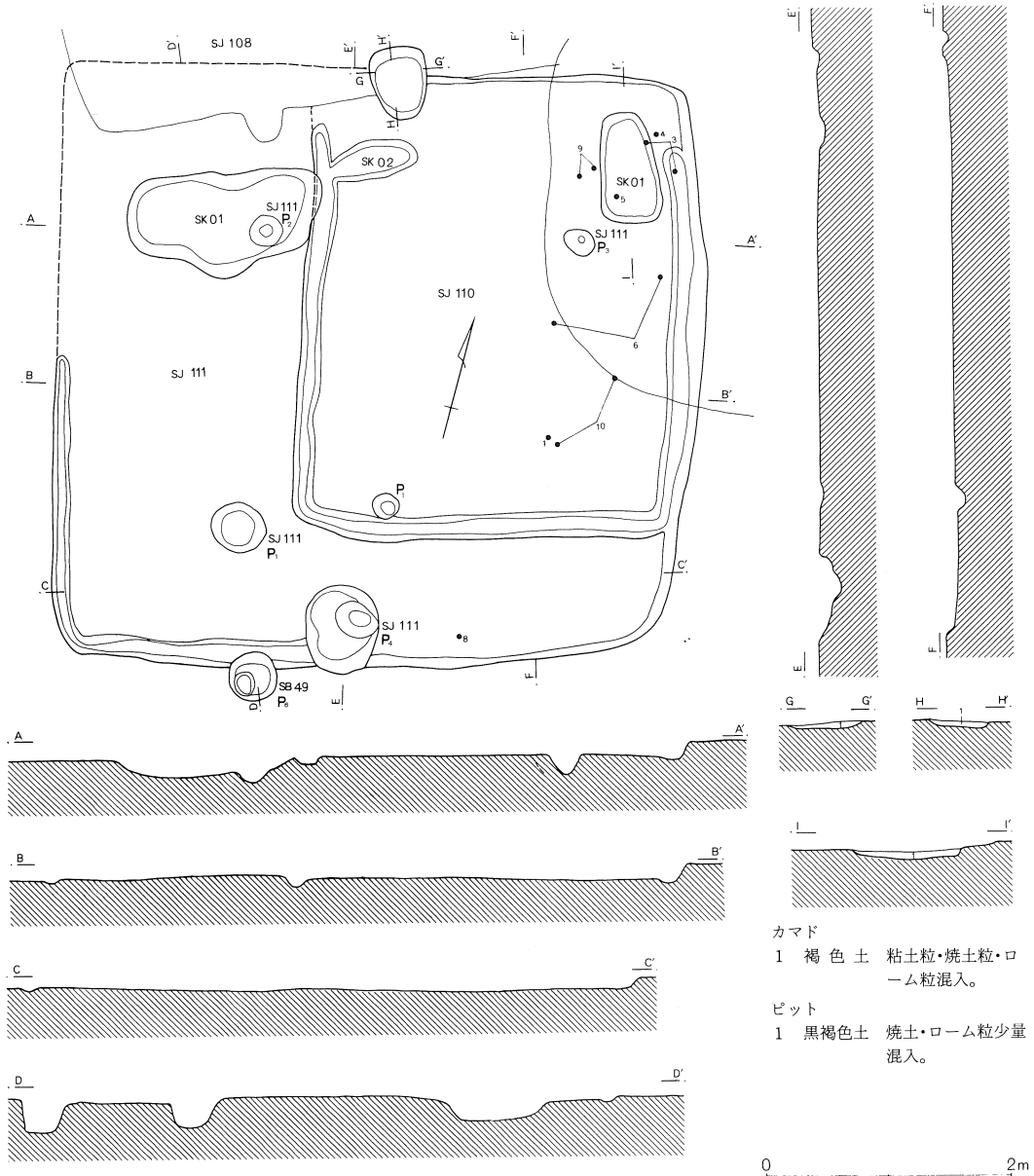
床面は全体的に堅いが、北東部では床面直下まで削平され、遺存しない箇所もみられた。覆土の状況は掘り込み自体が浅く明らかにできなかった。

カマドは北壁に設けられ一応本住居に伴うものと推定されるが、遺存状況が悪く詳細は不明である。ピットは住居内及び壁に掛かって6本検出されたが、住居の柱穴と判断されるものは3本(P₁

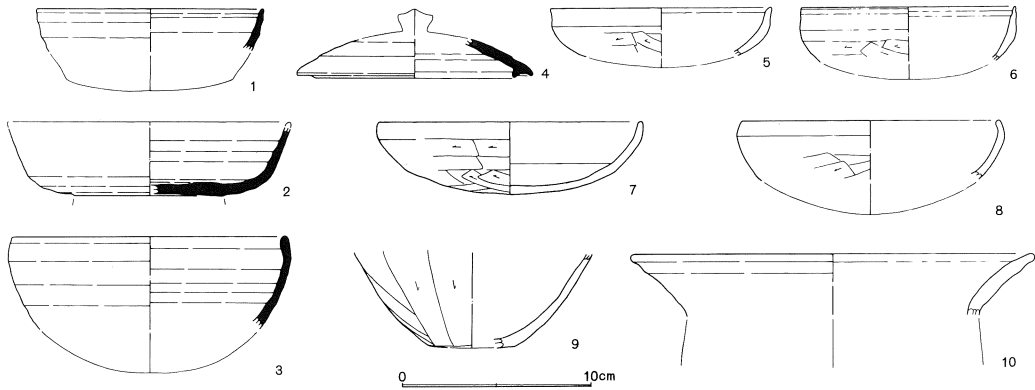
～P₃)である。

土壌は1基あるが住居掘方と考えられる。壁溝は南西コーナーを中心に巡り、全周しない。

出土遺物は110号と合わせて89点検出されたが、ほとんどが小片である。土師器坏、甕を主体に須恵器坏、蓋、鉢を少量含む。若干時期差が認められ、第320図1・4はIV期、2はVI期か、3は鉄鉢形とするとVII期に下がるかもしれない。土師器坏も7・8は北武蔵系であるが型式的には7の方がやや新しい。在地系の5・6はV期頃に比定できよう。両住居の年代比定は難しいが、稲荷前IV期～V期頃にかけて建て替えられたものと考えておきたい。



第319図 第110・111号住居跡(L=30.70m)



第320図 第110・111号住居跡出土遺物

第110・111号住居跡出土遺物観察表(第320図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.8)	2.25	8.0	ABC	A	灰	10%	№46。覆土。
2	坏		3.6		ABC	A	灰	35%	確認面。
3	碗	14.4	4.9		AB	C	灰	65%	№60, 64。SK01内。壁溝上。
4	蓋	(12.3)	2.1		AB	A	灰	5%	№62。床面。産地不明。
5	坏	(11.6)	2.5		ABC	A	橙	5%	№5。覆土。赤彩不明。
6	坏	(11.2)	2.9		AB	B	にぶい橙	15%	№14, 24。床面。
7	坏	13.9	3.9		ABG	B	橙	35%	覆土。
8	坏	(13.6)	3.1		ABE	B	橙	5%	№11。床面。
9	甕		4.9	(4.6)	ABEF	A	にぶい橙	25%	№3, 54。床面。
10	甕	(21.0)	3.3		AEI	B	橙	10%	№30, 45。覆土。

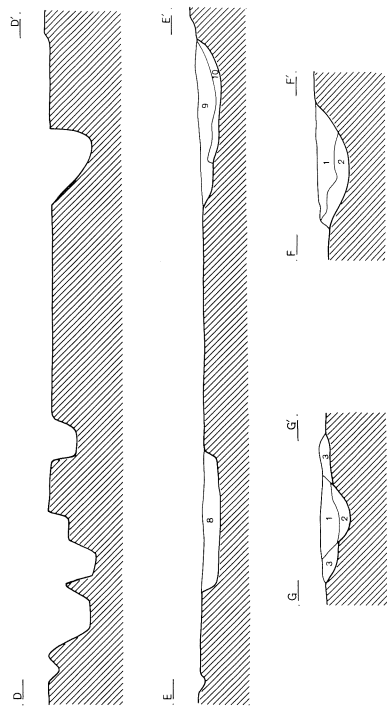
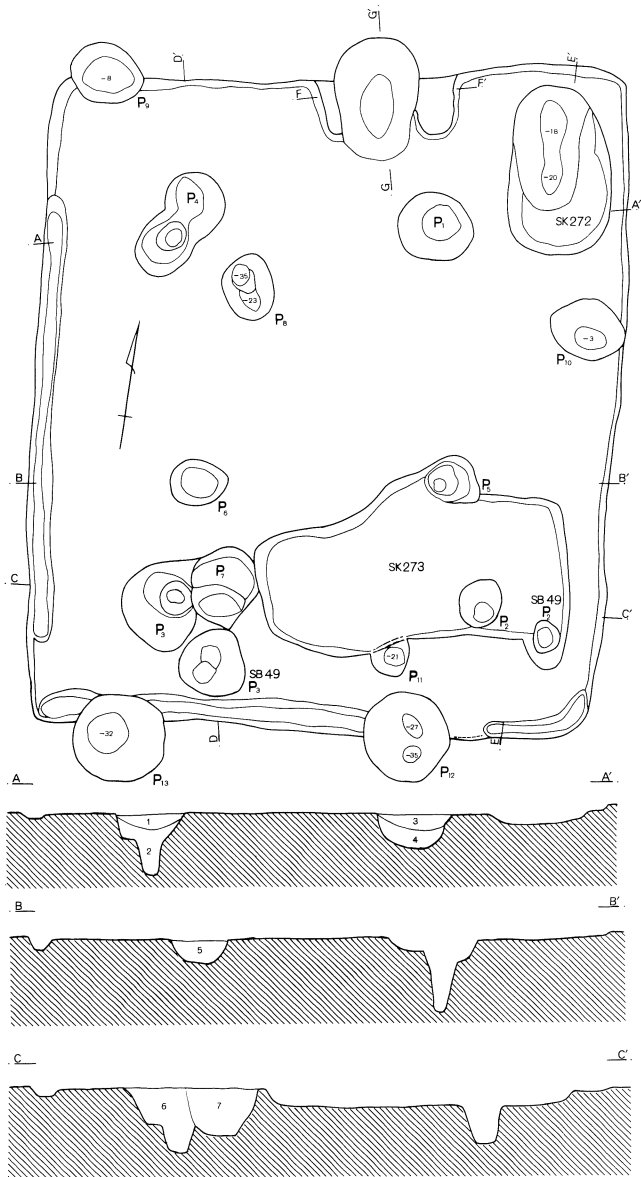
第112号住居跡(第321図)

M-11区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸5.10m、短軸4.66m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-7°-Wを示す。

床面は平坦で全体に堅い。覆土は薄く、堆積状況の変化は捉えられなかった。

カマドは北壁に設けられる。楕円形の燃焼部を有し、底面は皿状に掘り込まれている。袖は僅かに残存し、灰褐色の粘質土で構成される。土壌は2基存在するが、何れも住居埋没後に掘り込まれたものである。ピットは14本検出されているが、主柱穴と考えられるものはP₁~P₄でP₅・P₆についても可能性はある。P₄底面には土師器長胴甕の胴部大破片が流れ込んだような状態で出土しており、柱は抜き取られたことが判る。壁溝は南壁から西壁にかけて検出されたが、途中が途切れている。

出土遺物は76点検出されたが、大半は小片である。器種的には土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕、瓶がある。第322図3の高台坏は他地域(東海か)からの搬入品と推定される。若干時期幅のある土器群であるため、時期の限定は難しい面もあるが、6の北武蔵系の坏はやや古い要素をもつが、図示以外の土師器の様相を見てもIV期に遡らない。V期~VI期頃の住居と考えておきたい。



- 1 暗茶褐色土 ロームブロック少量含。焼土粒子多量含。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量含。炭化粒子少量含。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子多量含。焼土粒子少量含。
- 4 黄褐色土 ロームブロック多量含。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子少量含。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒子多量含。焼土粒子少量含。
- 7 暗茶褐色土 ロームブロック・焼土・炭化粒子少量含。
- 8 暗茶褐色土 ロームブロック多量含。焼土粒子少量含。
- 9 黒褐色土 ロームブロック・焼土・炭化粒多。
- 10 暗黄褐色土 ロームブロックを主体に黒褐色土少量含。

カマド

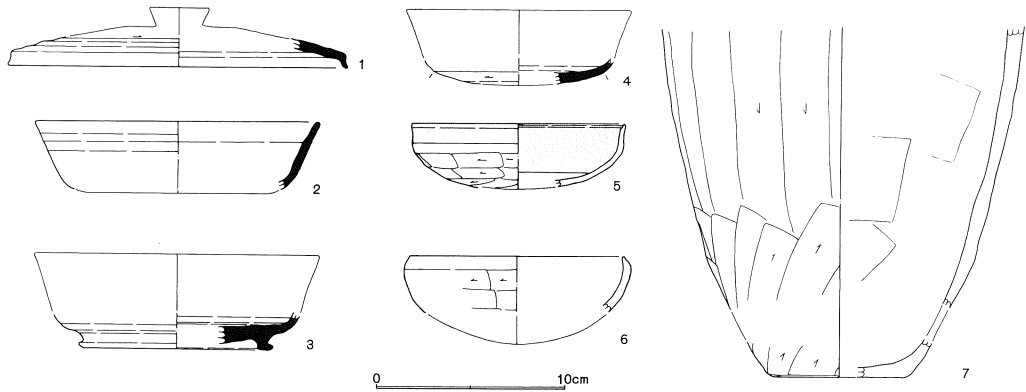
- 1 焼土 焼土ブロック主に炭化物・粘土多量に混入。
- 2 黒色土 灰層。
- 3 灰褐色土 粘質土。

0 2m

第321図 第112号住居跡(L=30.80m)

第112号住居跡出土遺物観察表(第322図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(18.0)	1.5		A C	A	灰	20%	P ₄ 覆土。
2	坏	(15.0)	3.6		A B C E	B	にぶい橙	15%	覆土。
3	高台坏		2.0	(10.0)	B G	A	灰白	20%	覆土。東海産。
4	坏		1.4		A B C	B	灰	20%	P ₇ 内覆土。
5	坏	(11.2)	3.4		A B	A	橙	30%	カマド内覆土。
6	坏	11.2	3.0		B E	B	橙	10%	P ₆ 内覆土。北武蔵系。
7	甕	18.5	(6.8)		A B C E	A	橙	50%	P ₄ 内覆土。



第322図 第112号住居跡出土遺物

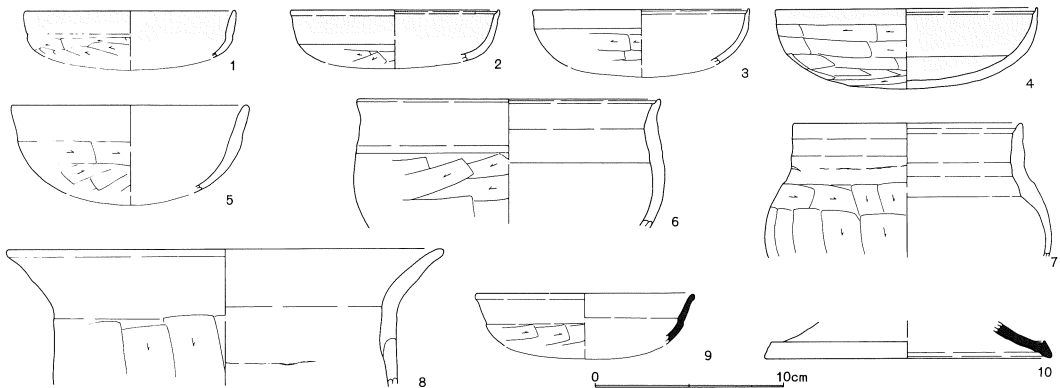
第113号住居跡(第324図)

M・N-11・12区に位置し、第112号住居跡の南東に隣接する。形態は方形を呈し、規模は長軸6.00m、短軸5.88m、深さ0.07mを測る。主軸方位はN-13°-Wを示す。

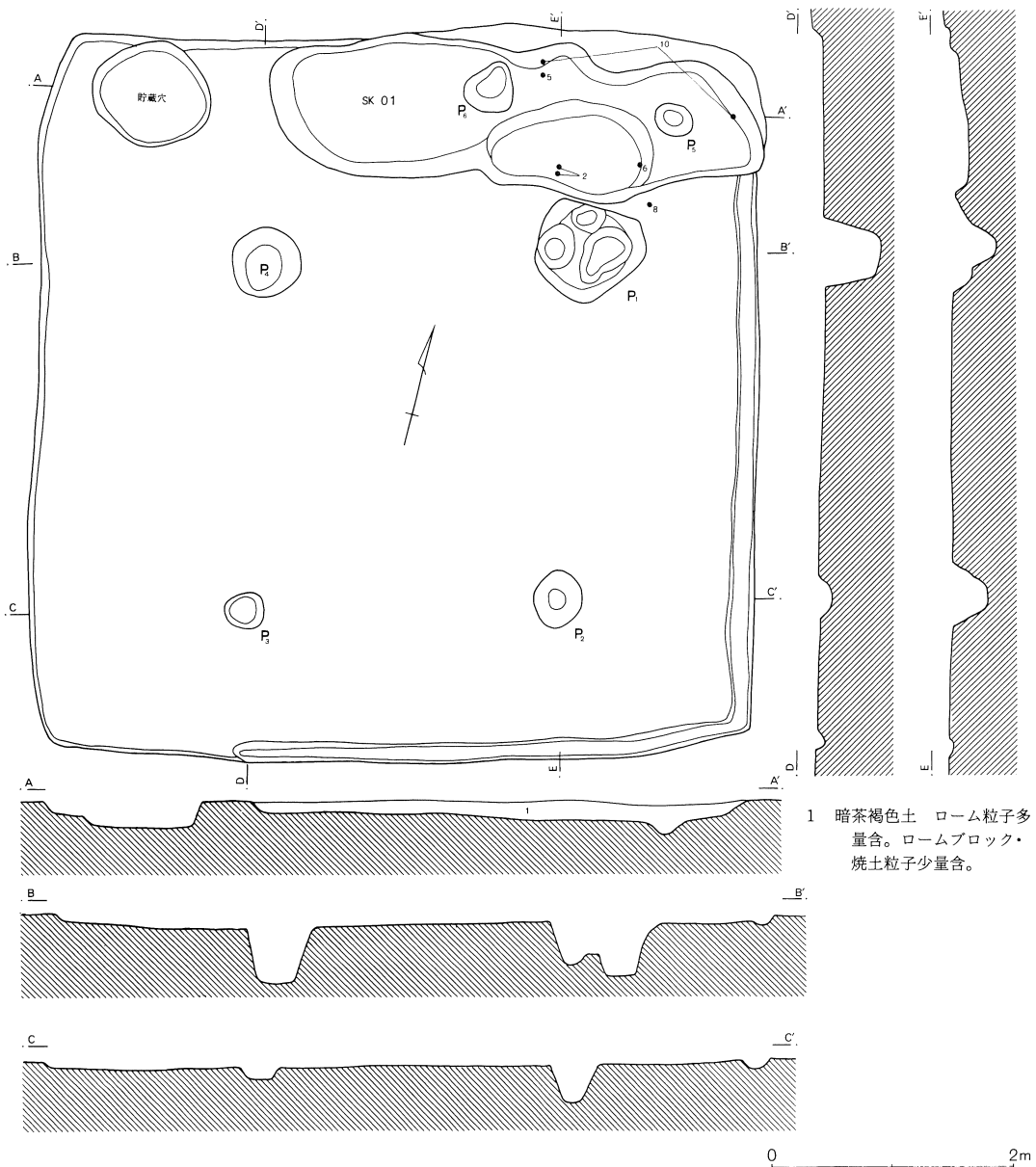
床面は平坦で西壁際を除き、全体に堅く締まっていた。深度が浅く覆土の様相は明らかにできなかった。

カマドは検出されていない。おそらく北壁に設けられたものと推定されるが、痕跡は見いだされなかった。貯蔵穴は北壁西側の隅に検出された。ピットは6本あり、P₁～P₄が支柱穴となる。土壌は1基北壁際に検出され、長楕円形を呈する。ロームブロック混じりの土で埋められており、住居掘方と思われる。

出土遺物は73点検出された。小片が多いが、北壁部周辺から主に出土した。器種的には土師器坏、甕を主体に土師鉢、台付甕、須恵器坏(?)、甕、瓶(東海産か)の破片を少量含む。第323図9は土師器坏に酷似するが、還元焰焼成を受け、灰色を呈する。須恵器坏であろうか。稲荷前IV～V期に比定しておきたい。



第323図 第113号住居跡出土遺物



第324図 第113号住居跡(L=30.70m)

第113号住居跡出土遺物観察表(第323図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.0)	2.5		BC	A	にふい橙	20%	覆土。
2	坏	(11.0)	2.7		AB	A	橙	10%	№33, 35。SK01内覆土。
3	坏	(11.4)	3.0		ABF	A	橙	10%	覆土。赤彩不明。
4	坏	(13.8)	4.3		ABC	A	明赤褐	50%	覆土。
5	碗	(12.4)	4.7		AEF	B	浅黄橙	10%	№6。覆土。
6	鉢	(16.0)	6.6		AB	A	明赤褐	10%	№18。覆土。

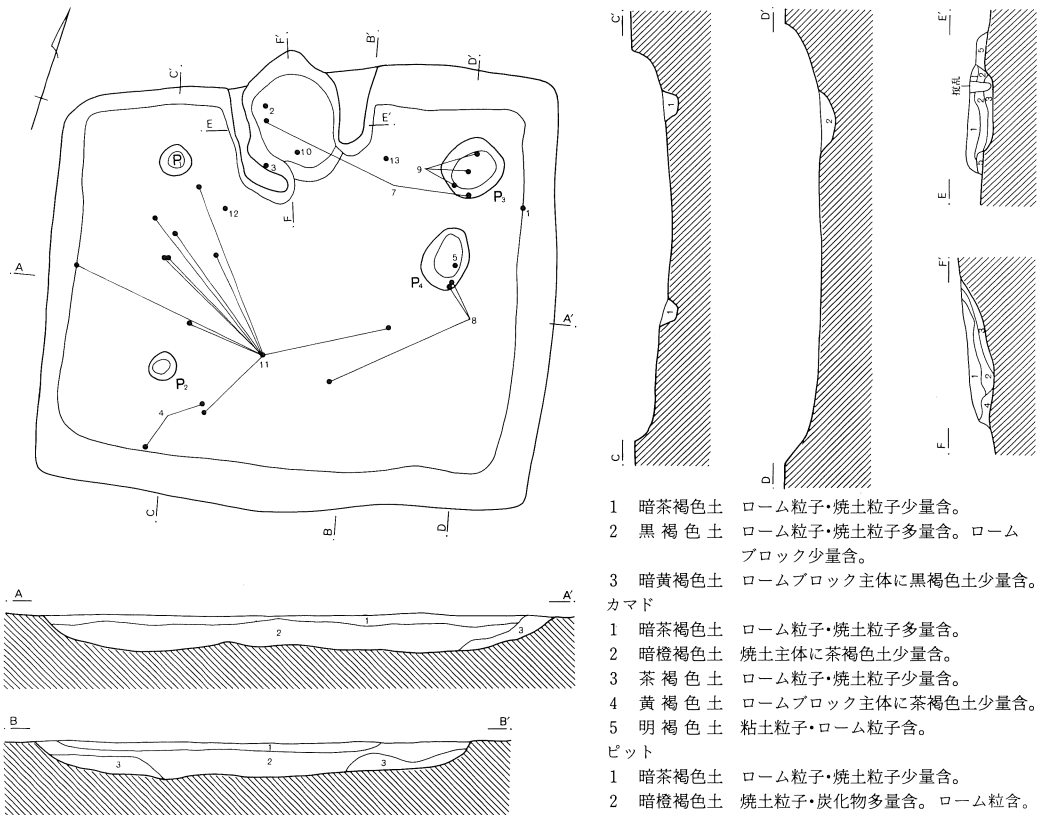
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
7	壺	(12.0)	7.1		A B C E	A	橙	25%	覆土。
8	甕	(23.0)	7.2		A B C E	B	にふい黄橙	10%	№20。床面。
9	坏?	(11.4)	2.7		B C	C	灰黄	15%	覆土。還元焰焼成を受ける。土師坏に酷似。
10	高盤?		1.9	(15.0)	A B C	B	灰	20%	№5, 25。覆土。器種不明。高盤脚部か。

第114号住居跡(第325図)

M-13区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.06m、短軸3.49m、深さ0.20mを測る。主軸方位はN-11°-Wを示す。

床面はやや凹凸が目立ち、余り堅く締まった箇所は観察されていない。壁の立ち上がり角度は緩やかである。また図には表現していないが、住居中央から西壁にかけて掘方をもち、不整形の土壇状に窪んでいた。覆土は3層に分割され、埋没過程は自然堆積に近いものと判断される。

カマドは北壁に設けられ、燃烧部は壁内にほぼ納まっている。掘り込みは浅く、緩やかな角度で煙道部に続く。袖は明褐色の粘質土を積み上げていたが、大半は流出しており遺存状態は悪い。ピットは4本検出されている。柱穴とするには深度が浅いが、何れも住居に伴うものと考えられる。

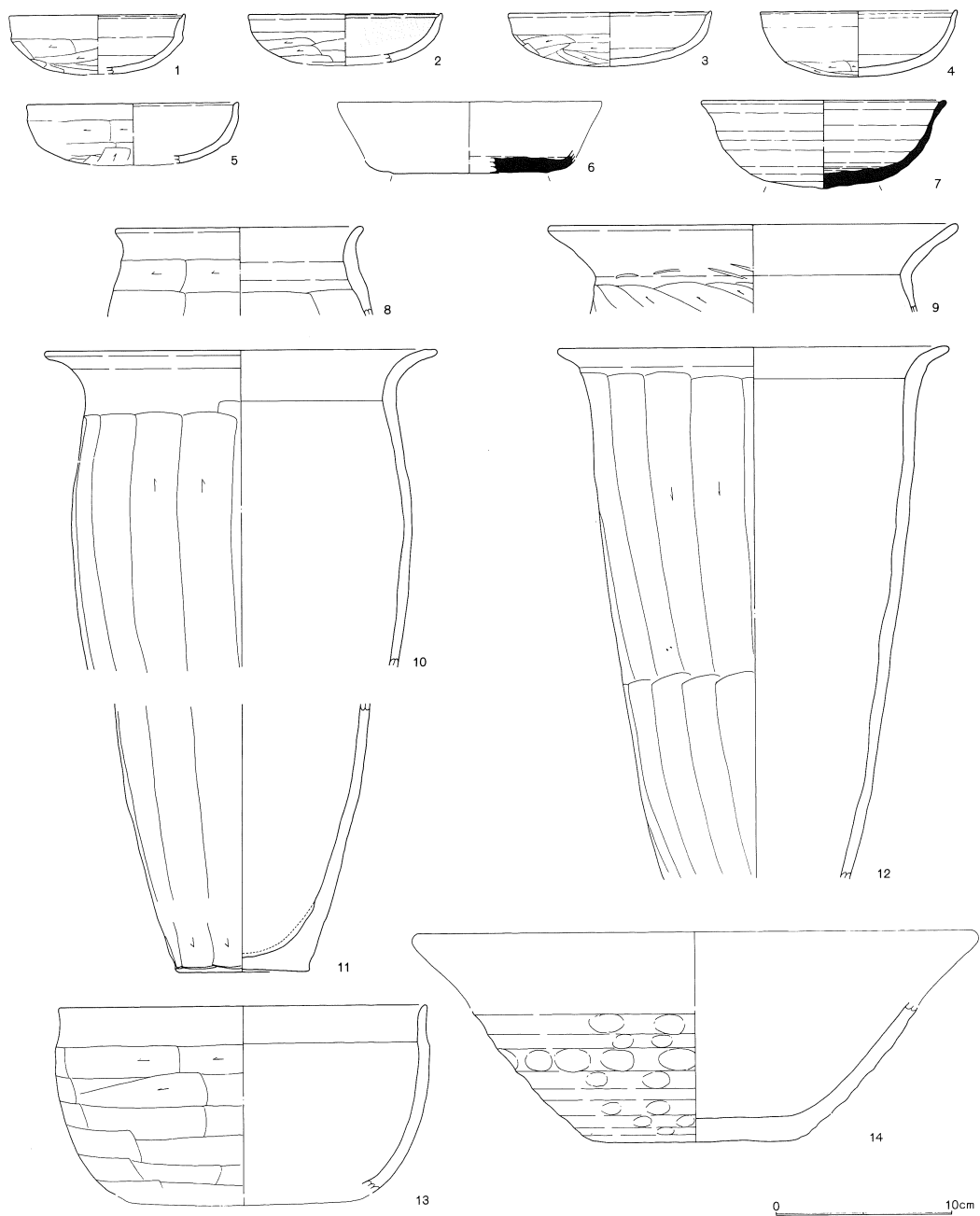


第325図 第114号住居跡(L=30.70m)

0 2m

P₃に関しては土層堆積と遺物の出土状態から、住居使用時に開口していたものと思われ、貯蔵穴とも考えられる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は233点検出され比較的多い。土師器坏、埴、甕類、鉢、須恵器坏、甕、瓶と中世の鉢がある。主体は土師器甕で土師器坏は口縁部破片数でも20点に満たない。口縁と体部を画する稜がはっきりしないものが主体となり扁平化したもの(2・3)とやや器高の深いもの(4・5)の二者があ



第326図 第114号住居跡出土遺物

る。1は小型でやや古い様相もあるが、口縁は外反に傾いている。須恵器は量的にも少なく混入品がほとんどである。図示した7の坏は伴うと考えている。丸底を呈する底部の中央はやや突出し、ヘラ切り成形と推定される。白色針状物質を含み在地産である。土師器甕は厚手の甕といわゆる「くの字」甕がみられる。6・14は混入であろう。稻荷前V期に比定しておきたい。

第114号住居跡出土遺物観察表(第326図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(9.8)	3.3		ACE	B	にぶい黄褐	45%	Na65。覆土。
2	坏	(10.9)	2.8		BCE	A	橙	25%	Na235。カマド内覆土。外面赤彩不明。
3	坏	(11.4)	3.1		AE	A	にぶい橙	30%	Na240。カマド内覆土上層。赤彩不明。
4	坏	11.1	3.7		ACE	B	橙	60%	Na88, 89。覆土。
5	坏	(12.0)	3.4		ABF	C	にぶい橙	15%	Na71。P ₄ 内覆土。
6	坏		1.3	(8.8)	ABC	B	灰白	20%	覆土。混入か。
7	坏	(13.8)	5.0		ABCG	C	灰白	45%	Na247, 151。カマド内覆土。
8	小型甕	13.8	5.0		AEF	C	にぶい橙	20%	Na189, 226, 230。覆土。
9	甕	(23.0)	5.0		ABE	A	橙	35%	Na53, 148, 150。P ₃ 内覆土。
10	甕	(22.0)	18.0		AE G	A	にぶい橙	35%	Na244。カマド内覆土。
11	甕	15.1	7.6		ABC	C	橙	65%	Na20, 24, 78, 79, 82, 90, 92, 106他。覆土中層
12	甕	(22.0)	30.0		BCE F	C	橙	40%	Na25。覆土中層。
13	鉢	(20.8)	10.6		ACE	A	にぶい橙	25%	Na136。覆土下層。
14	播鉢		7.8	11.8	AB	C	暗灰	80%	覆土。内面磨減。在地系。混入。

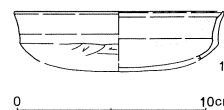
第115号住居跡(第328図)

M-13区に位置し、第29・30号掘立柱建物跡と第32号井戸跡に切られている。形態は長方形を呈するものと推定されるが、遺存状態は極めて悪く、遺構の詳細は不明である。残存規模は南北長4.56m、東西長4.17mを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。

掘り込みが浅いため床面は削平され遺存せず、覆土の様相も不明である。

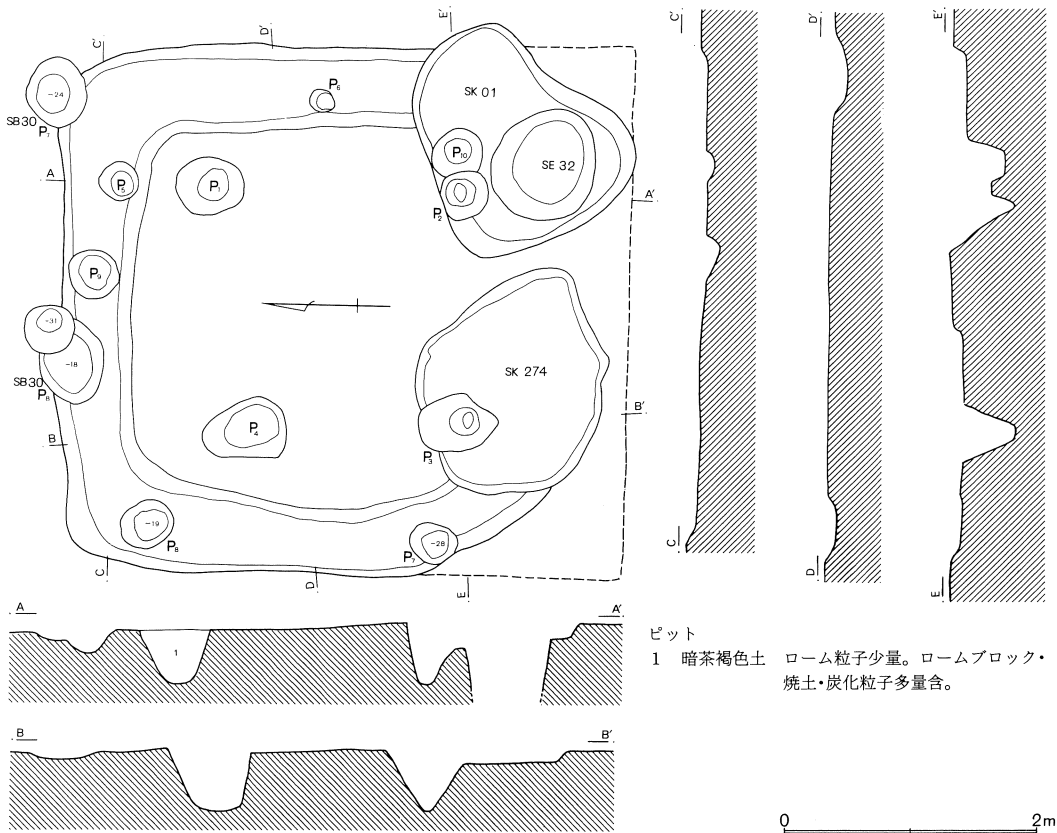
カマドは残存しない。第1号土壌がカマド掘方となる可能性があるが、明確な証拠は見いだされなかった。第274号土壌は床下土壌であろう。壁溝は検出されていないが、掘方と思われる溝が壁に沿って周溝状に巡っていた。ピットは10本検出されている。P₁~P₄は支柱穴と考えて誤りないが、他のピットは直接伴うものではない。

出土遺物は、掘方及びピット内から土師器坏と甕の小片が計12点検出されただけで、正確な時期を明らかにすることはできない。重複する第32号井戸跡が8世紀前半頃と推定されることから、おそらくそれ以前の7世紀後半代に営まれたと考えられる。図示した坏(第327図1)から稻荷前IV期頃としておきたい。



第327図1は土師器坏である。推定口径11.0cm。残高2.6cmを測る。胎土に石英、白色粒子、角閃石を含む。焼成良好でにぶい橙色を呈する。15%残。P₄覆土から出土した。

第327図 第115号住居跡出土遺物



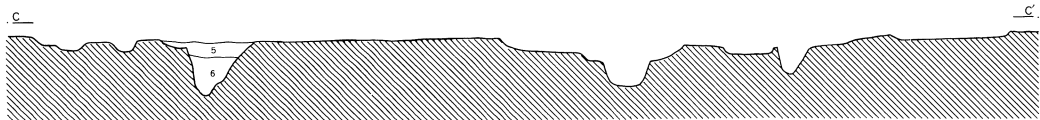
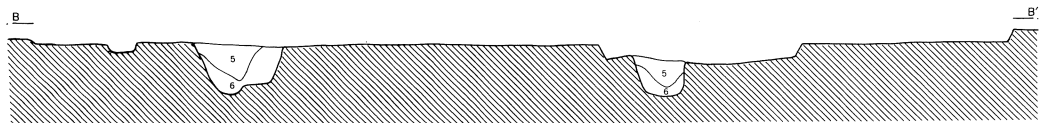
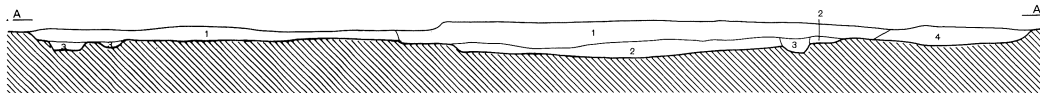
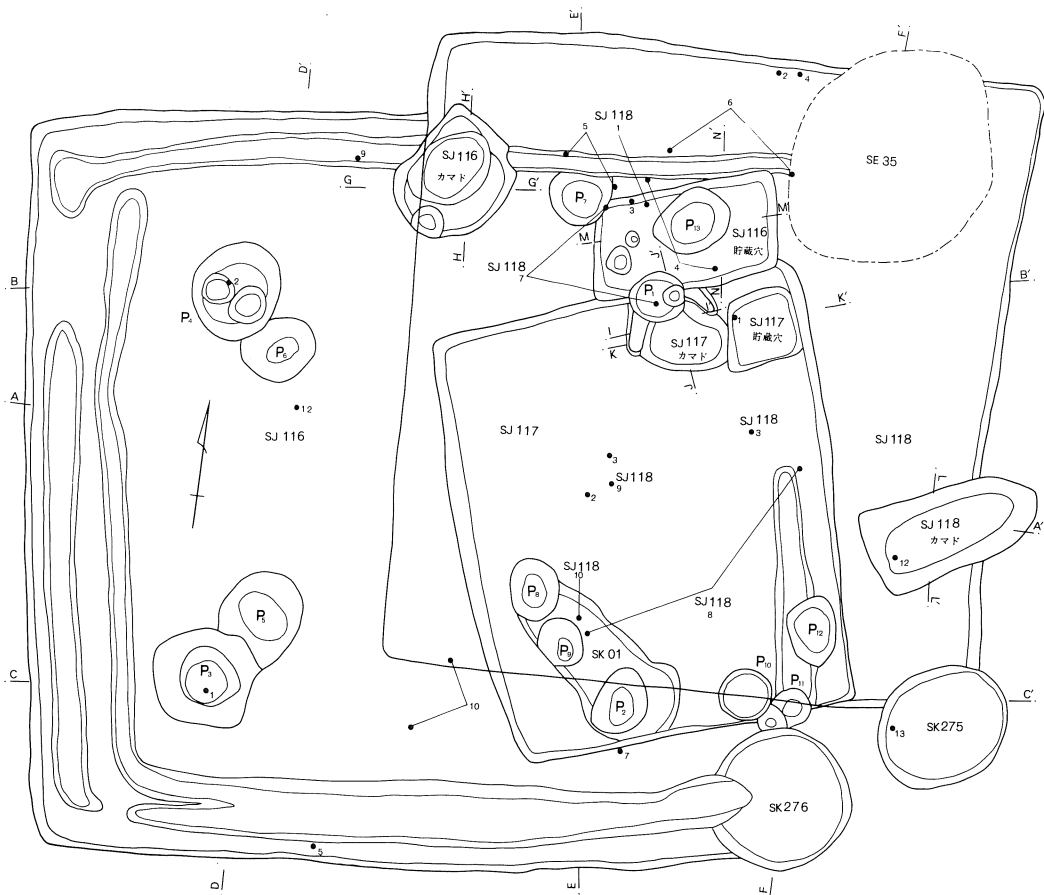
第328図 第115号住居跡(L=30.60m)

第116号住居跡(第329図)

N-13区に位置する。第117・118号住居跡と重複し、新旧関係は117→116→118号の順に新しいものと判断された。形態は東壁が明確に検出されていないため、正確とは言い難いが長方形を呈するものと推定され、規模は長軸6.30m前後、短軸5.96mを測る大型住居跡である。深さは0.05m程しか残存しない。また、西壁部で壁溝が2本確認されることから、建て替えがなされたものと想定されるが、詳細は明らかにできなかった。主軸方位はN-8°-Wを示す。

床面は東半部が118号住居跡に切られているが、床面レベルはほとんど同一である。残存部は比較的平坦で堅い。覆土は浅く118号住居のそれと大差なく、土層面から切り合いを捉えることはできなかった。

カマドは北壁に設置されるが、上面は削平され、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁内に納まり、覆土には焼土の堆積が多い。袖は残存しない。ピットは住居内に13本検出されている。P₁~P₄は支柱穴と考えられる。P₅・P₆・P₉も建て替え前の支柱穴の可能性がある。P₁は貯蔵穴と切り合い関係をもつが、新旧は明らかにできなかった。貯蔵穴は北東コーナーに位置し、長方形を呈する。壁溝は入れコ状に2条検出されたが途切れる部分や2条重なる箇所があり今一步明確にできない。最低2度の建て替えがなされたものと推定される。



- 1 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量含。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック多量含。
- 3 褐色土 ローム粒含。
- 4 暗赤褐色土 ローム粒子・焼土炭化粒子多量含。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量含。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック多量・焼土粒子少量含。
- 7 黄褐色土 ローム土主体に茶褐色土少量含。

カマド

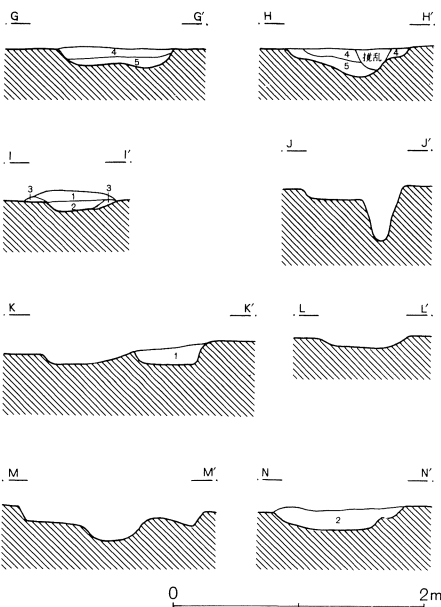
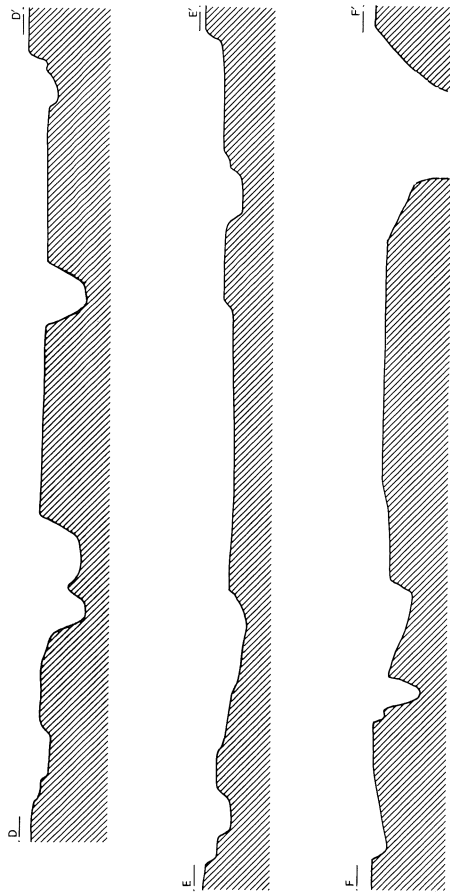
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子少量・焼土粒子少量含。(SJ117)
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量・同ブロック少量含。(SJ117)
- 3 明褐色土 粘土。(SJ117)
- 4 灰褐色土 焼土粒子・灰多量・ローム粒子少量含。(SJ116)
- 5 暗黄褐色土 ローム・焼土含。(SJ116)

貯蔵穴

- 1 黄褐色土 ロームブロック主体に茶褐色土少量含。(SJ117)
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量含。

0 2m

第329図 第116~118号住居跡(L=30.70m)



出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕、甗等がある。土師器坏(1・2)と7の須恵器坏は混入の可能性が高いものとする。8・9の須恵器坏を基準に稲荷前VI期に位置付けておきたい。

第117号住居跡(第329図)

N-13区に位置する。遺構上面を第116・118号住居跡により破壊されており、遺存状況は悪い。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸3.46m、短軸3.06m、確認面からの深さ0.20mを測る。主軸方位はN-20°-Wを示す。

床面は緩やかな凹凸をもつ。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土で構成され、人為的に埋め戻されたものと推定される。

カマドは北壁に設置されるが、第116号住居跡P₁と貯蔵穴に壊され、全容は不明である。袖に相当する部分には明褐色の粘質土が僅かに遺存する程度であった。貯蔵穴はカマド東側のコーナー部に検出されたが、燃烧部と接してしまう。

伴うピットは明確ではない。土壌は1基検出され、本住居に伴う掘方の可能性が高い。

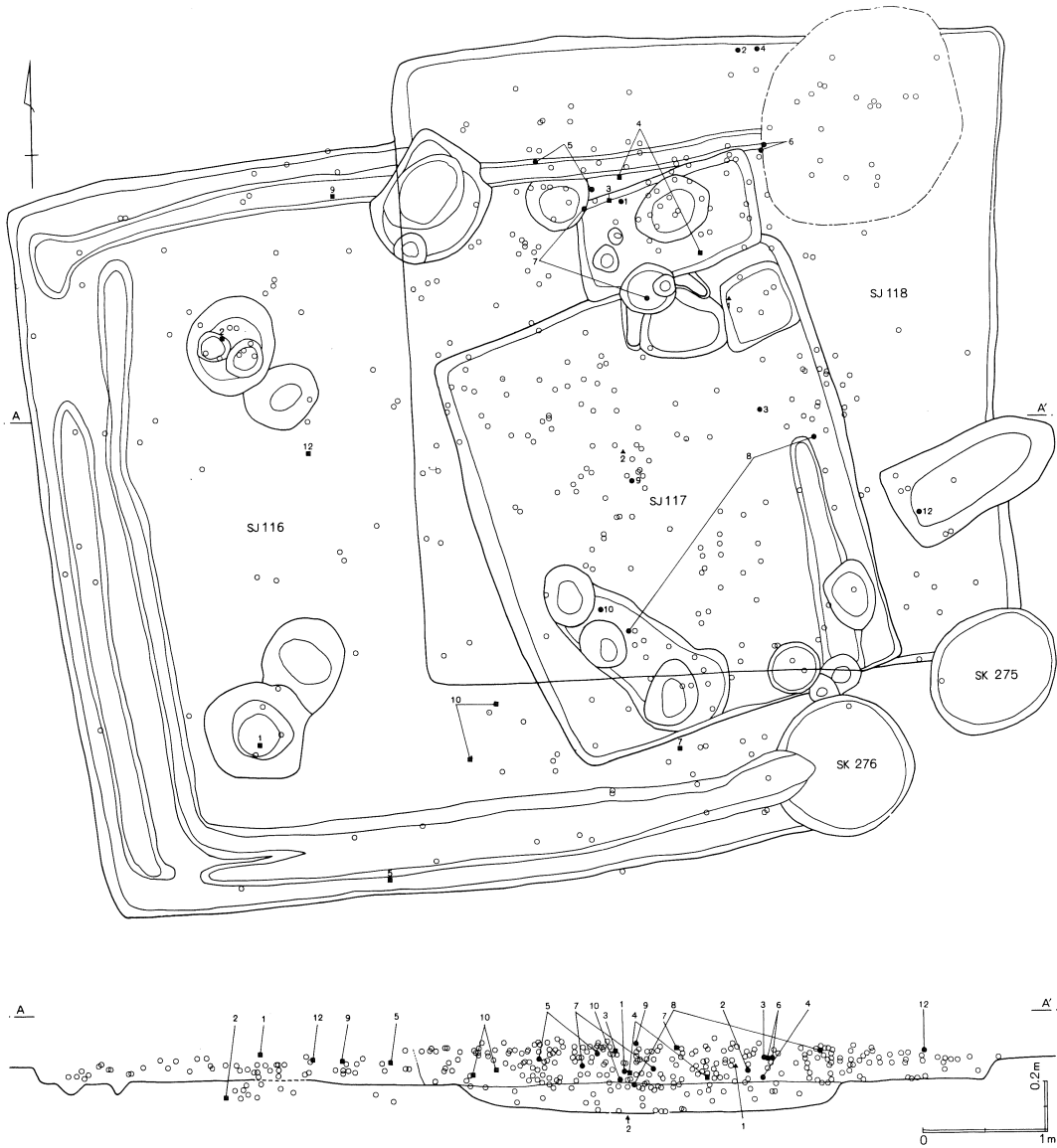
出土遺物には土師器坏、甕、須恵器坏、高台坏、甕がある。第331図中段1・2から稲荷前V期に比定しておきたい。3は伴うかどうか判らない。

第118号住居跡(第329図)

N-13区に位置し、重複する第116・117号住居を切って構築され、第35号井戸跡に切られていた。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸5.02m、短軸4.86m、深さ0.10mを測る。主軸方位はN-2°-Wを示す。

床面は概ね平坦で堅い。覆土は暗褐色土で占められ大きな変化は観察されなかった。

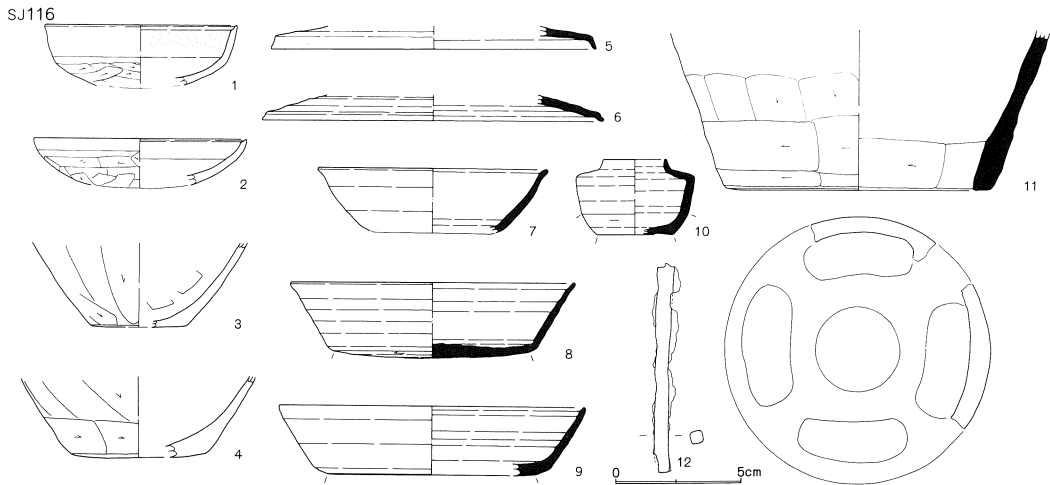
カマドと思われる掘り込みは東壁に掛かって検出されたが、軸に対してかなり傾いている。形態



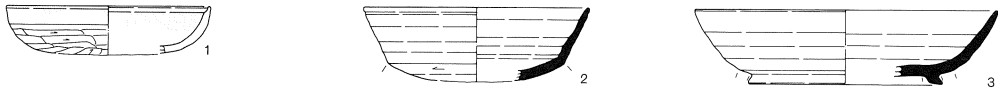
第330図 第116～118号住居跡遺物分布図

は楕円形を呈し、覆土には焼土が多量に含まれていた。他にカマドに相当する施設は確認されておらず、この土壌がカマドになる可能性が高いものと判断した。伴うピットは明確ではない。貯蔵穴、壁溝は存在しない。

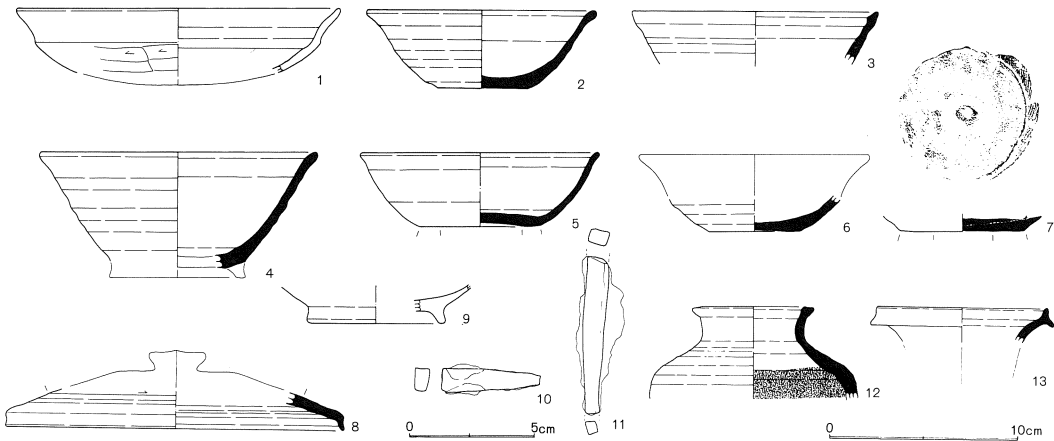
出土遺物には土師器坏、皿、甕、須恵器坏、埴、蓋、甕、壺、灰釉埴が認められる。第331図7の須恵器坏内面の剝離面に糸切り痕が残る。12の胴部内面には、墨またはタール状を呈する有機物の被膜が観察される。内容物の痕跡であろうか。1は本来116号住居に伴うものである。出土土器に時期差が認められるが、出土状態から2・4の須恵器坏は住居に伴う遺物と推定される。稻荷前 XIII 期に位置付けておきたい。



SJ117



SJ118



第331図 第116～118号住居跡出土遺物

第116号住居跡出土遺物観察表(第331図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	3.2		ABF	A	にぶい橙	15%	№145。P ₃ 内覆土。外面赤彩不明。
2	坏	(11.2)	2.4		BCE	B	にぶい橙	20%	№113。P ₄ 内覆土。無彩。
3	甕		4.3	5.2	ABEG	B	橙	10%	№34。覆土。
4	甕		4.2	(7.0)	ABCE	B	にぶい赤褐	35%	№46, 126。貯穴内覆土。
5	蓋	(17.2)	1.3		ABC	A	灰	5%	№98。覆土。
6	蓋	(18.0)	1.4		AB	B	灰白	5%	P ₄ 覆土。
7	坏	(12.0)	3.4		ABC	A	灰	15%	№138。覆土。
8	坏	(15.0)	4.0	(11.2)	ABC	A	灰白	30%	貯穴。
9	坏	(16.2)	3.6	(11.0)	AC	C	灰白	20%	№15。覆土。底部手持ちヘラケズリ。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
10	短頸壺	(3.3)	4.0		A B C	A	灰	25%	№78, 79. 床面。	
11	甑		8.4	(14.0)	A C	B	灰白	35%	貯穴。	
12	鉄器	残長8.2cm。最大幅0.7cm。								№137. 覆土。鉄釘か。断面方形。

第117号住居跡出土遺物観察表(第331図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.6)	3.5		B	A	橙	20%	№46. 貯穴内覆土。
2	坏	(11.9)	3.8		A B C	B	にぶい黄橙	15%	№219. 床面。
3	高台坏	(16.0)	3.9	(10.2)	A B C	A	灰	10%	№253. 床面。

第118号住居跡出土遺物観察表(第331図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	皿	17.0	3.4		B E F	A	橙	10%	№45. 覆土。	
2	坏	12.0	4.1	4.8	A B C E	C	黄灰	100%	№71. 覆土下層。	
3	碗	(13.0)	2.9		A C	A	灰	20%	№141. 覆土。器種不明。	
4	高台坏	14.4	6.1		A B C E	D	にぶい赤褐	55%	№54. 床面。	
5	坏	(12.4)	3.9	6.4	A B C	C	褐灰	40%	№204, 209. 覆土。	
6	坏		1.9	4.9	A B E	D	褐灰	40%	№66, 67. 覆土。	
7	坏		0.8	6.6	A C	A	灰	95%	№190, 210. 覆土。内面に糸切り痕残る。	
8	蓋	(17.8)	2.0		A C	A	灰	15%	№144, 227. 覆土。	
9	碗		2.0	(7.0)	A	C	灰白	10%	№127. 覆土。灰釉。猿投産か。	
12	小型壺	(5.4)	5.0		A C	A	灰	20%	№156. カマド内覆土。	
13	長頸瓶	(9.0)	1.8		A C	A	灰	20%	№179. SK277内覆土。	
10	刀子	残長3.8cm。最大幅1.0cm。								№225. 覆土。刀子柄部残欠。
11	釘	残長6.2cm。最大幅0.8cm。								カマド覆土。角釘茎部片。



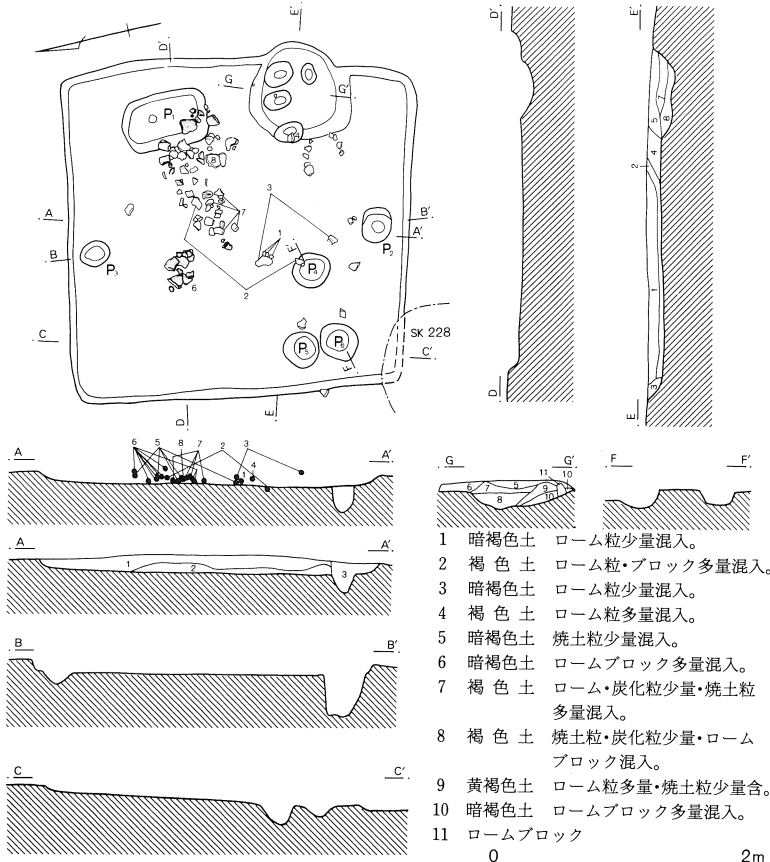
▲第Ⅲ群(南より)

第119号住居跡(第332図)

N・O-14・15区に位置し、南西コーナーを第228号土壌に切られていた。平面形は方形を呈し、規模は長軸2.74m、短軸2.67m、深さ0.10mを測る比較的小型の住居跡である。主軸方位はS-76°-Eを示す。

床面はやや凹凸を有し全体に堅く締まっているが、壁の立ち上がり角度はやや緩い。覆土は2層に分かれ、下層にロームの含有量が多い。

カマドは東壁に設けられる。燃焼部は一部壁を切り込んで掘り込まれ、底面は凹凸が激しい。袖



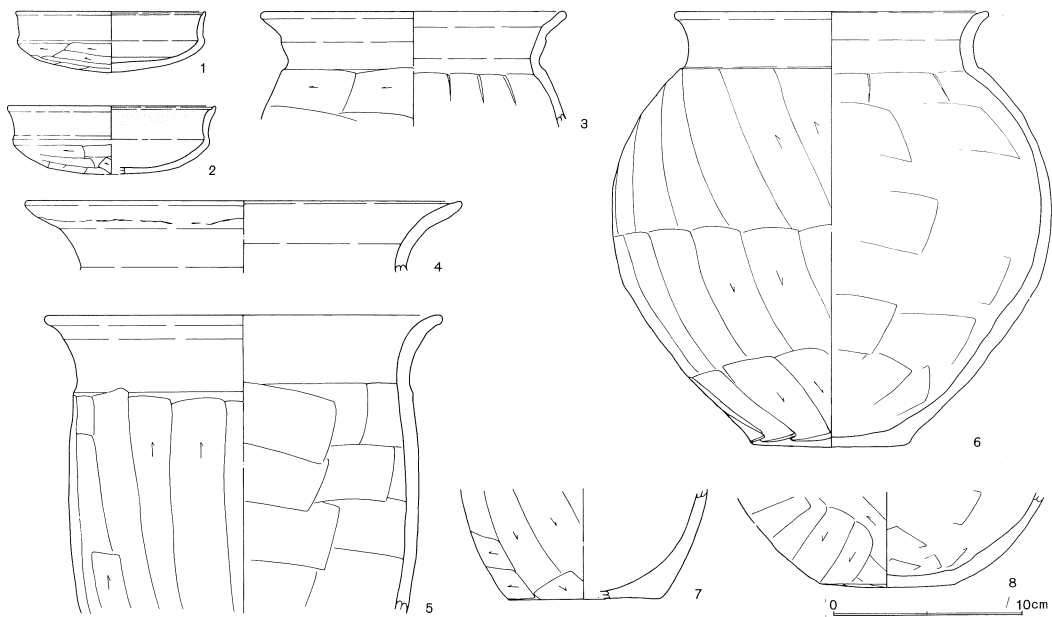
は全く遺存していなかった。住居廃絶時に取り払われたものと推定される。ピットは6本検出された。P₁は貯蔵穴と推定される。P₃・P₄は伴う可能性があるが、他は住居廃絶後の掘り込みと考えられる。

出土遺物は73点検出された。器種組成はほとんど土師器(坏、甕、小型甕、壺)で構成される。厳密に住居に伴う遺物はなく、大部分は一括投棄されたような状況で出土した。出土遺物から稻荷前IV期に比定しておきたい。

第332図 第119号住居跡(L=30.70m)

第119号住居跡出土遺物観察表(第333図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(10.0)	3.1		A B C F	A	橙	20%	No.33.覆土。
2	坏	(11.0)	3.6		A B C E	A	橙	20%	No.15, 34.覆土。
3	甕	(15.8)	6.1		B C E F	A	にぶい褐	25%	No.32, 53.覆土。
4	甕	(23.0)	3.8		A B C	B	にぶい橙	25%	No.45.カマド内覆土。
5	甕	(20.8)	15.7		A B C E	A	橙	25%	No.6, 22, 23, 69, 75.覆土。
6	壺	(16.4)	23.0	8.0	A B C	B	橙	70%	No.2, 30, 36, 37他.覆土。
7	甕		5.8	(8.0)	B C E	B	明赤褐	25%	No.18, 20, 27, 29.覆土。
8	壺		4.9	7.2	B C E	A	浅黄橙	80%	No.40.覆土。

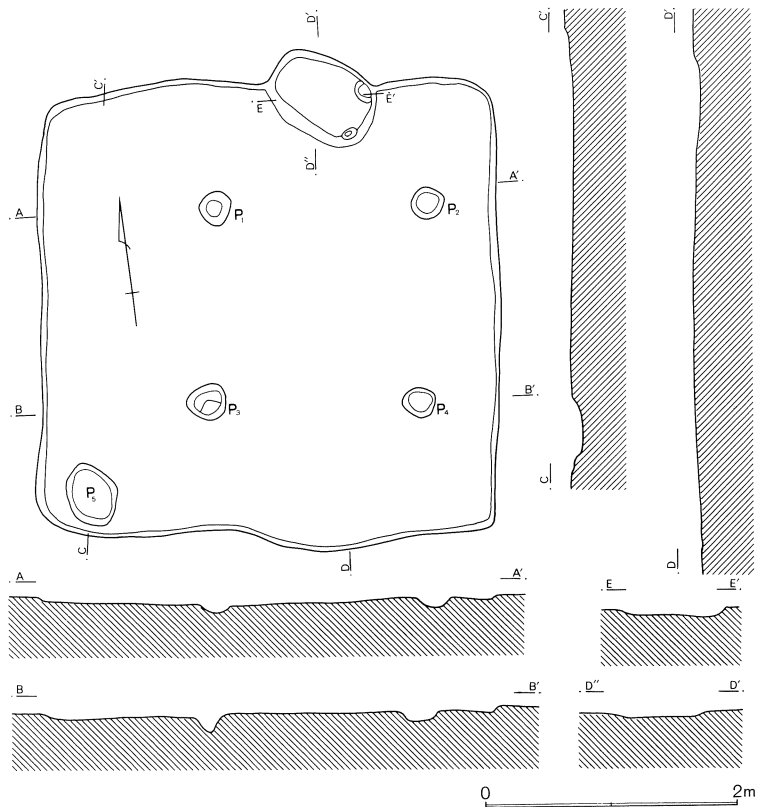


第333図 第119号住居跡出土遺物

第120号住居跡(第334

図)

O-14・15区に位置する。形態は方形を呈し、長軸3.64m、短軸3.60mを測る。主軸方位はN-10°-Eを指す。床面はほぼ平坦である。確認面で床面が露出していたため、覆土の状況は不明。カマドは北壁に設けられるが、掘り込みも浅く詳細は明らかにできない。ピットは5本検出され、P₁～P₄が支柱穴に相当する。P₅の帰属は不明である。出土遺物は土師器甕片が1点のみで時期は不明。



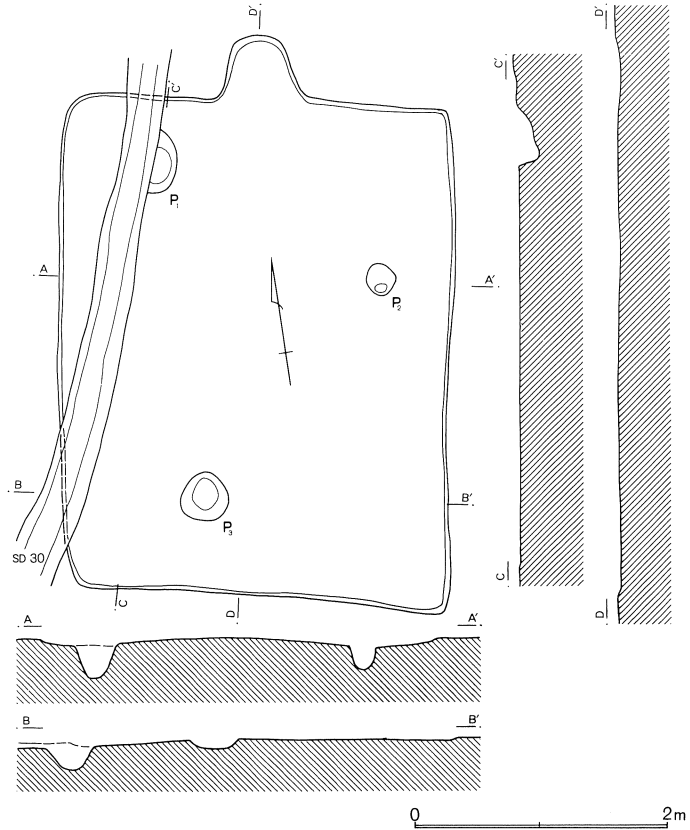
第334図 第120号住居跡(L=30.60m)

第121号住居跡(第335図)

O-15区に位置し、第30号溝跡によって床面の一部は攪乱を受けている。全体に住居の遺存状態は極めて悪く詳細は不明の部分が多い。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.92m、短軸3.10mを測る。確認面で既に床面まで達しているため壁の立ち上がりは殆ど確認できない。主軸方位はN-9°-Eを示す。

床面及び覆土の状況は不明である。カマドは北壁に設けられるが、やはり掘り込みが浅く詳細は不明である。ピットは3本検出されているが、伴うか否かについても明らかではない。

出土遺物は皆無で、時期決定はできない。



第335図 第121号住居跡(L=30.60m)

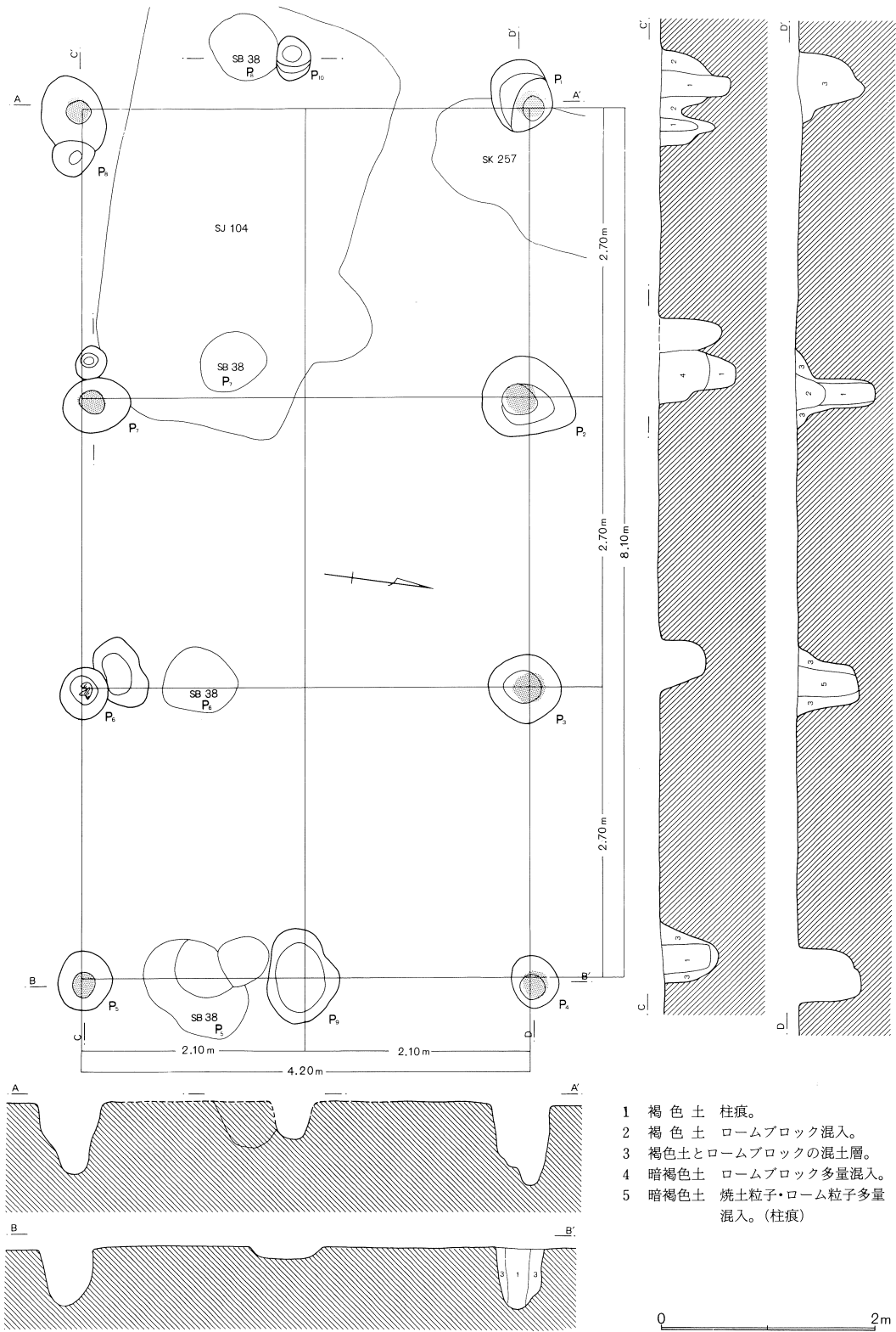
2. 掘立柱建物跡

第26号掘立柱建物跡(第336図)

J・K-11・12区に位置する。第104号住居跡を切って構築されるが、棟筋を僅かにずらして重複する第38号建物との新旧関係は不明である。3×2間の側柱建物と考えられ、規模は桁行8.10m、梁行4.20m、柱間寸法は桁行2.70m、梁行2.10m等間となり、柱間が広いのが特徴である。主軸方位はN-81°-Eを指す。

柱穴は円形を呈し、径0.60m前後とさほど大きくないが深度は0.70mに及ぶものもあり非常に深い。柱痕は全ての桁柱で確認されP₇には柱材の基底部分が遺存していた。一方妻側中間柱のP₅は浅く、P₁₀は柱穴規模が小さく柱筋から棟持柱風に突出してしまう等建物に伴うか疑わしい面もある。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器甕、瀬戸美濃系灰釉小皿(第355図6)、瓦質の在り系鉢、砥石(第355図7)がある。土師、須恵は混入で灰釉小皿と在り系鉢が建物の年代を表わすものと考えられる。灰釉小皿は口縁部内外面に釉が掛けられており、凡そ15世紀中葉から後半頃に比定される。本建物もこれを前後する時期と捉えてよからう。



第336図 第26号掘立柱建物跡(L=30.60m)

第27号掘立柱建物跡(第338図)

K-10・11区に位置し、第28号掘立柱建物跡と主軸を揃えて隣接する。2×2間の総柱建物で倉庫跡と考えられる。規模は一辺3.20m、柱間寸法は比較的短く1.60m等間を測る。主軸方位はN-35°-Wを指す。

柱掘方は円形または楕円形を呈し、径0.60~0.90m、深さは最も深いもので0.60mとなる。埋土はロームと黒色土の混在した土で埋められ堅く締まっていた(第2層)。柱痕は幾つかの柱穴で確認されたが、抜き取られた痕跡を残すものが多い(第1層)。

出土遺物は土師器鉢、甕、須恵器瓶の破片が計9点検出されたにすぎない。年代決定の根拠としては弱い、何れも比較的古手の様相を示し、おそらく7世紀後半代から8世紀の前半という年代幅には納まるものとする。

第28号掘立柱建物跡(第338図)

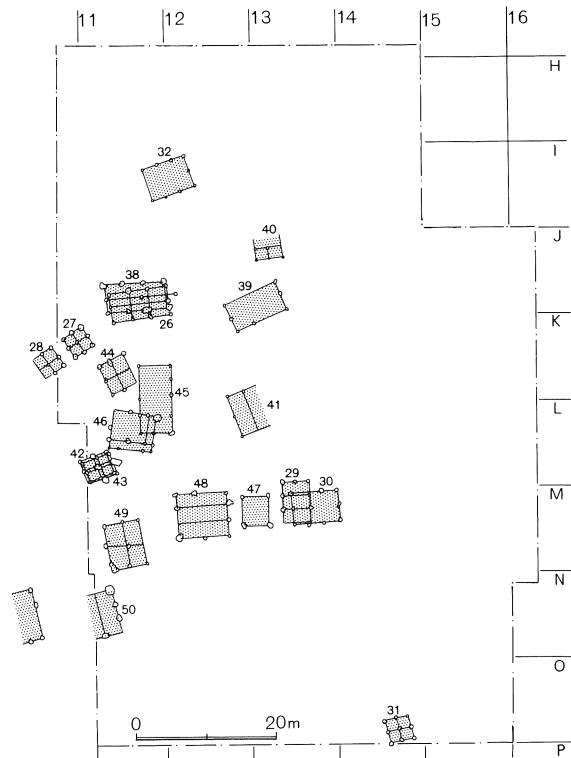
K-10区に位置し、第27号建物の南西2.0mの距離に隣接して構築されていた。主軸、規模、柱筋も共通している。

確認された柱穴は6本、2列のみで南西側の柱列は存在しなかった。これは建物の所在する位置ではロームの堆積が非常に薄く、下部の礫層が表面に浮きでており、深く掘削することが困難であったために結果的に遺存しなかったのかも知れない。

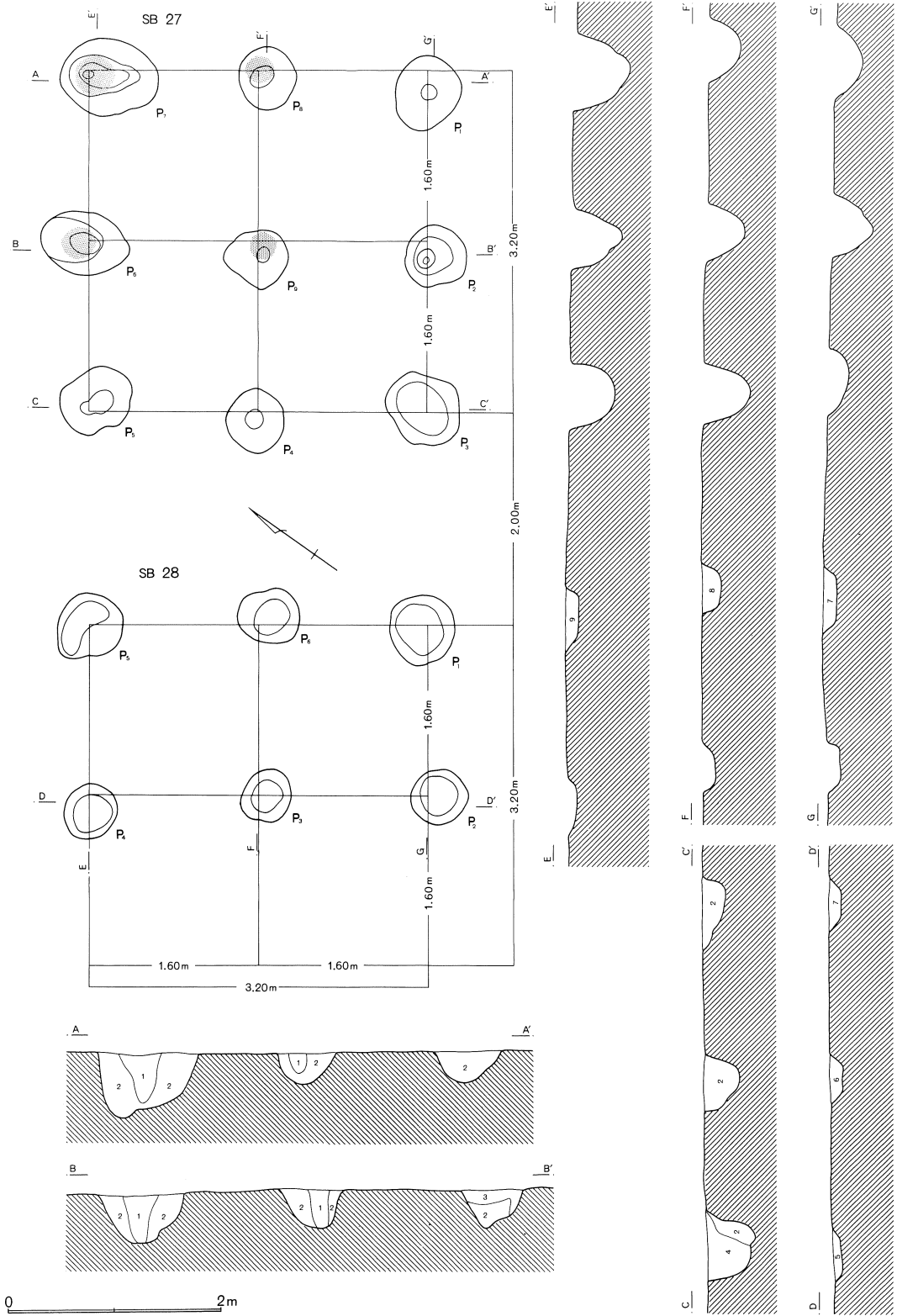
事実残存柱穴の深さをみても隣接する第27号建物跡に比して非常に浅くなっている。従って、当初の規模は2×2間の総柱の倉庫建物であった蓋然性が極めて高いものと考えておきたい。

柱間寸法は桁行、梁行共に1.60mを測り、第27号掘立柱建物跡と同一である。また柱掘方の規模も大差ない。覆土は焼土粒子、ローム、小礫の混じった暗褐色土で構成される(第3層)。

出土遺物はないが、規模・主軸の一致から見て第27号掘立柱建物跡と同時期、または相前後した時期のものとする。ただし、同時併存したとすると建物間隔の2mはやや狭すぎるようにも思える。



第337図 第Ⅲ群掘立柱建物跡見取図

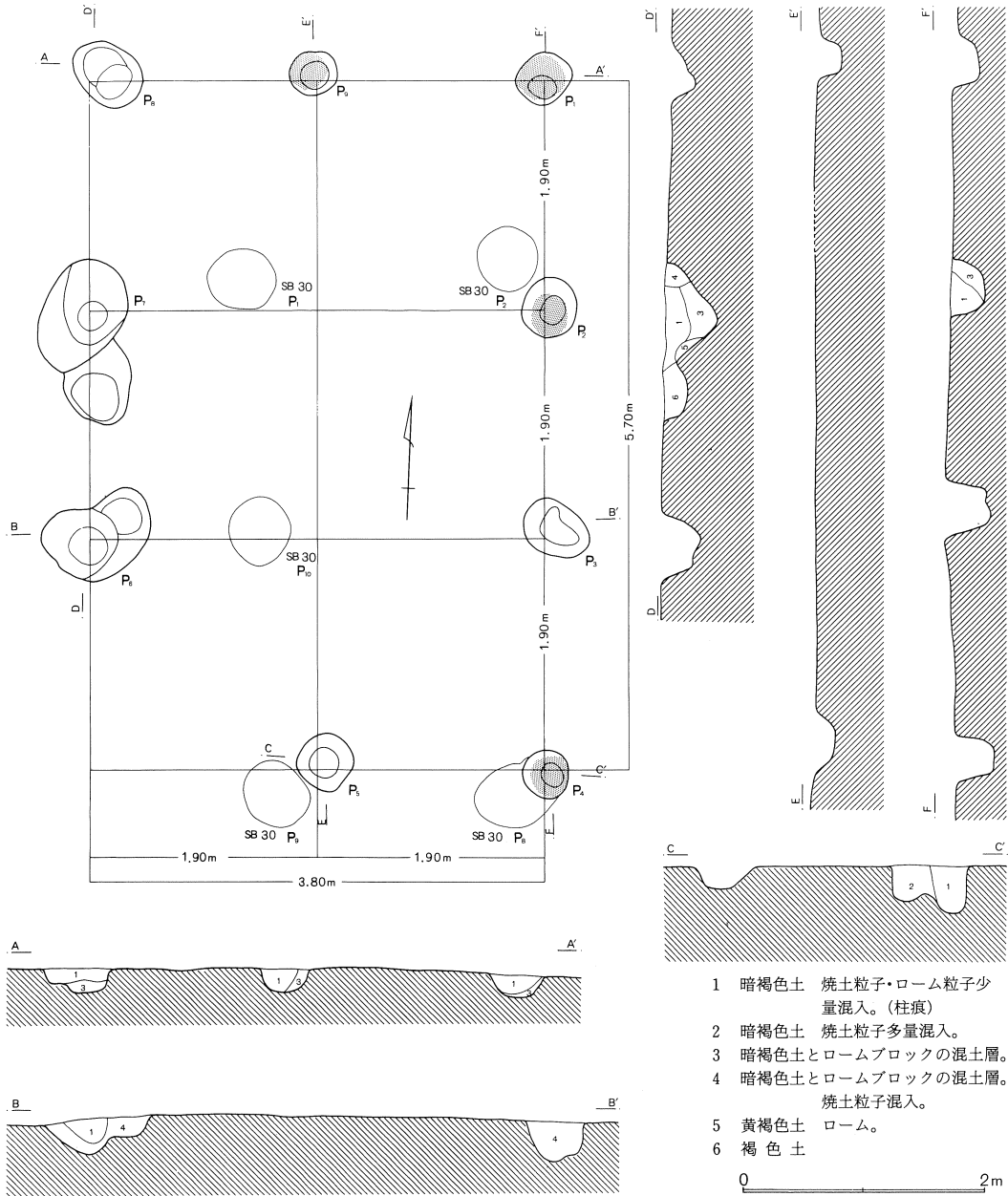


第338图 第27・28号掘立柱建物跡(L=30.70m)

第29号掘立柱建物跡(第339図)

L・M-13区に位置する。3×2間の南北棟の建物で南西隅柱を欠いている。第30号建物と重複するが、P₅の切り合い関係から本建物の方が新しいことが判明した。桁行5.70m、梁行3.80m、柱間寸法は1.90mを測る。主軸方位はN-4°-Wを指す。

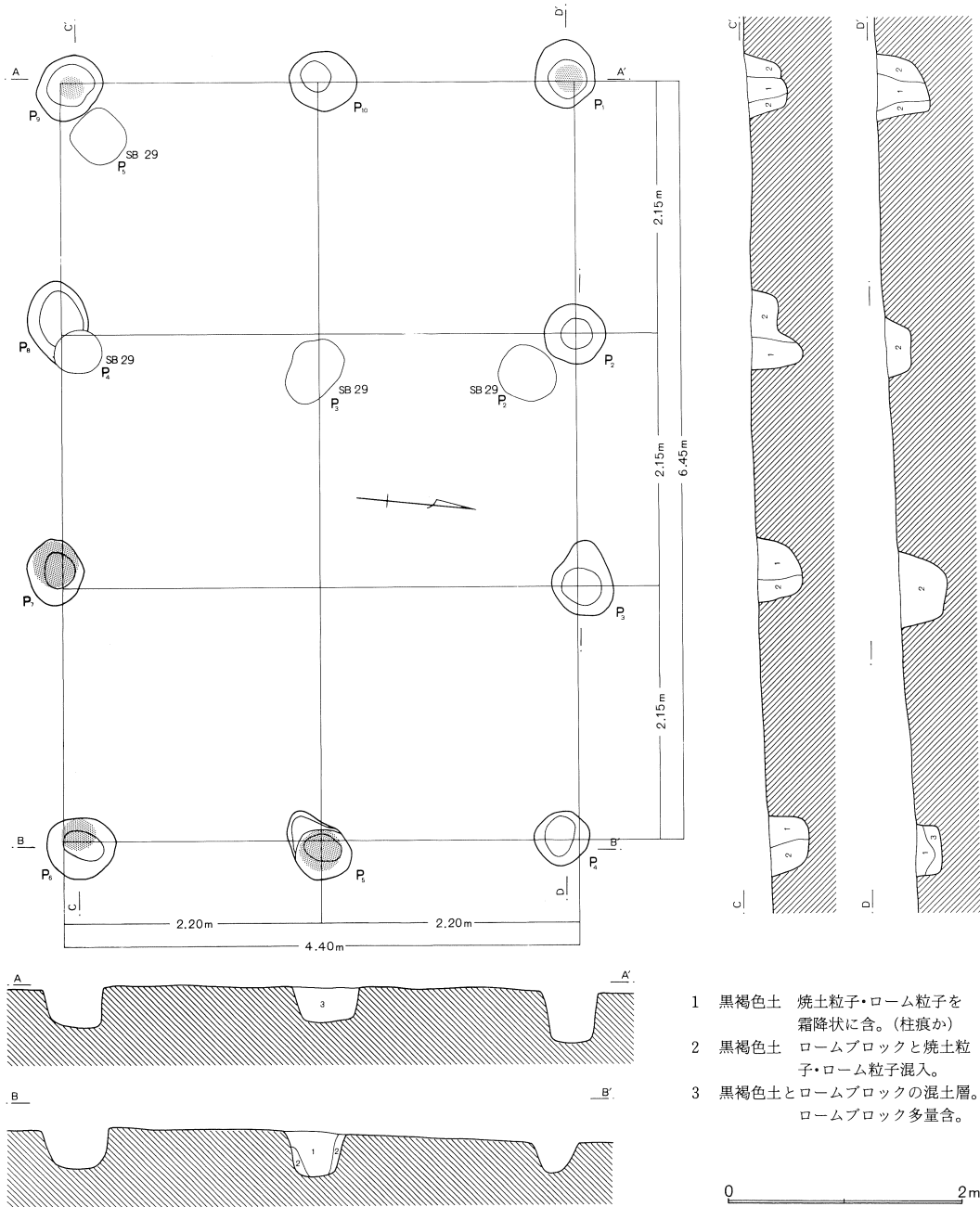
柱掘方は円形を呈し、径0.40~0.60mと比較的小規模なものが主体となり、深さは0.20~0.40m程である。柱痕は4本の柱穴で確認されたが、何れも抜き取られた形跡が認められた。



第339図 第29号掘立柱建物跡(L=30.60m)

出土遺物は50点を数え、土師器坏、甕類、須恵器坏、甕が認められる(第355図1~5)。須恵器坏は全て底部調整されており図化遺物の中では3が最も新しくなるうか。重複する30号掘立柱建物跡との関係からみて、稻荷前VIII~IX期頃の建物と推定しておきたい。

第30号掘立柱建物跡(第340図)



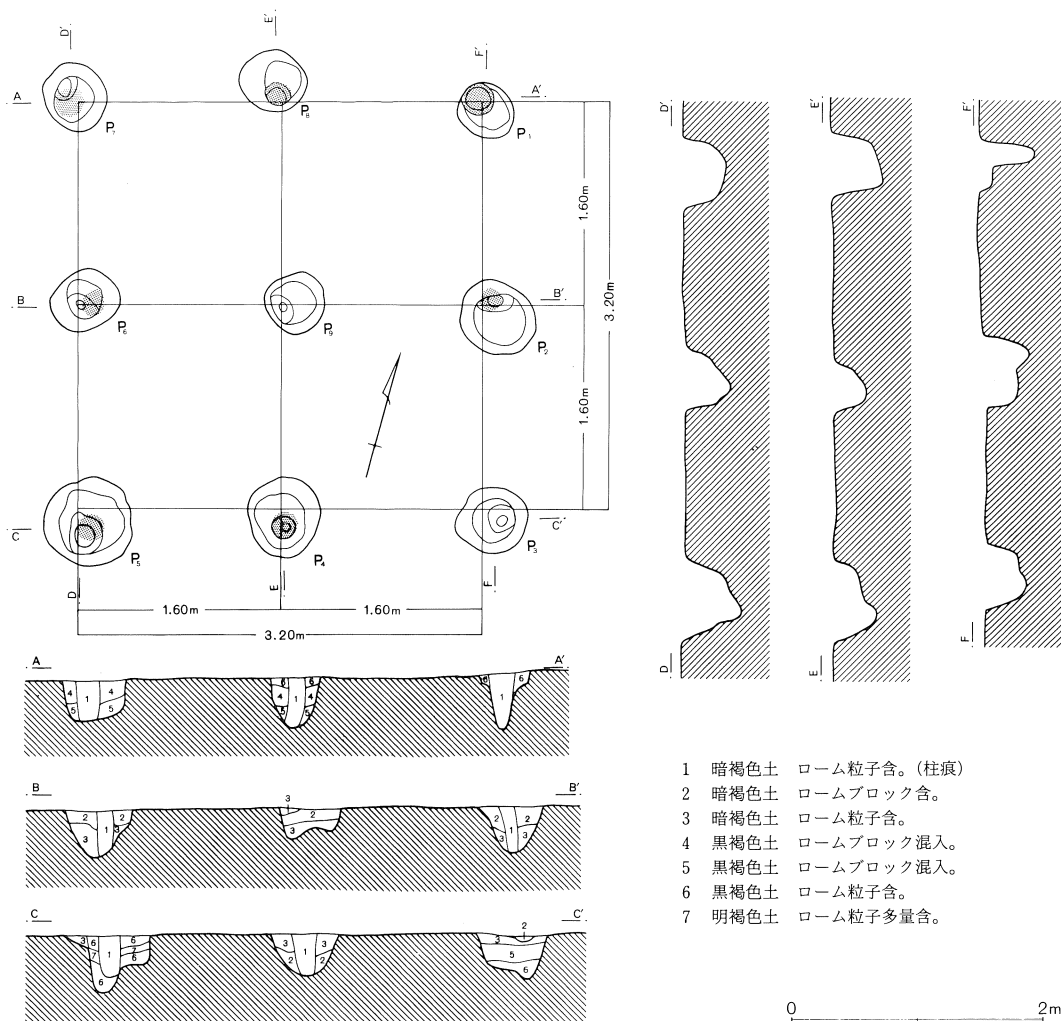
第340図 第30号掘立柱建物跡(L=30.60m)

M-13・14区に位置する3×2間の側柱建物で、第29号掘立柱建物跡とP₉で切り合う。新旧関係は本建物が古いものと考えられる。桁行6.45m、梁行4.40mを測る。柱間寸法は桁行2.15m、梁行2.20mとなる。主軸方位はN-85°-Eを指す。

柱掘方はほぼ円形で径0.50m前後の比較的小さいもので構成され、深さは0.20~0.50mを測る。柱痕は5本の柱穴で確認されたが、全て抜き取られたような痕跡が認められた。出土遺物は76点検出された。器種的には土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕、瓶がある(第355図8~10)。小片が多く、正確な年代は明らかにはできないが、土器様相からみる限り7世紀後半から8世紀初頭頃のもので占められ、それ以降の遺物は確認できない。稲荷前VI期前後の建物と考えておきたい。

第31号掘立柱建物跡(第341図)

第III群南端のO-14区に位置する。2×2間の総柱建物で規模は桁行・梁行共に3.20m、柱間寸法



- | | |
|--------|-------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子含。(柱痕) |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック含。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子含。 |
| 4 黒褐色土 | ロームブロック混入。 |
| 5 黒褐色土 | ロームブロック混入。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子含。 |
| 7 明褐色土 | ローム粒子多量含。 |

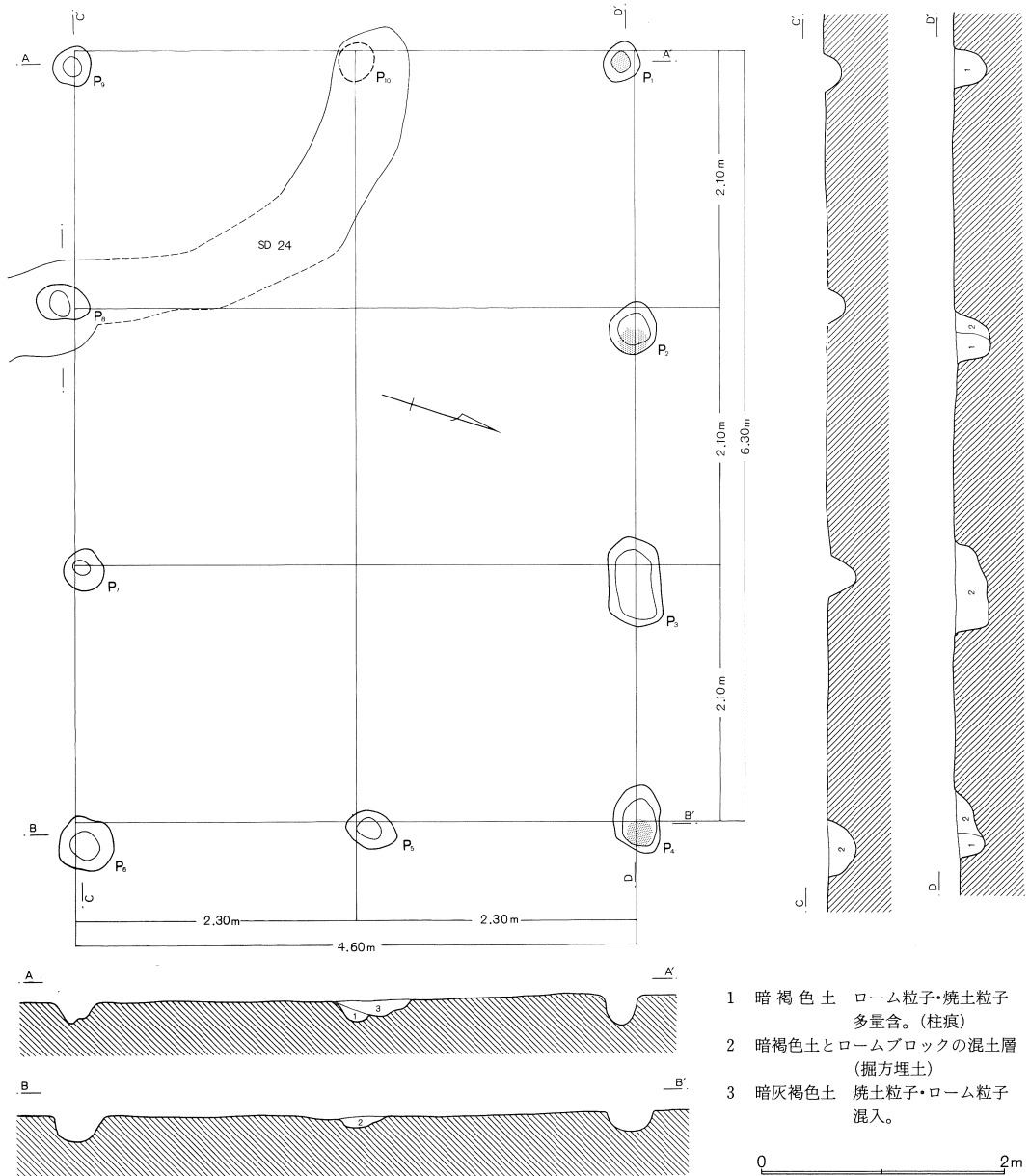
第341図 第31号掘立柱建物跡(L=30.50m)

1.60m 等間を測るが、確認された柱位置からは若干ずれ気味となってしまう。

柱掘方は円形を呈し、径0.50~0.70m、深さ0.20~0.45m 程の規模をもつ。主軸方位はN-15°-Wを指す。柱痕は7本の柱穴で確認された。柱径は0.15~0.20m を測る。

出土遺物は検出されていないため時期を限定することは難しいが、中世に降ることはないものと考えられる。主軸方位や規模からみて、7世紀後半~8世紀初頭頃の可能性もある。

第32号掘立柱建物跡(第342図)



第342図 第32号掘立柱建物跡(L=30.30m)

I-11・12区に位置する。第Ⅲ群北側の低地部に所在し上面は圃場作成時に削平されたものと思われる遺存状態は悪い。またP₈・P₁₀は上部を第24号溝跡により破壊されている。3×2間の側柱建物と考えられ、規模は桁行6.30m、梁行4.60mを測る。柱間寸法は桁行2.10m、梁行2.30mとなる。主軸方位はN-72°-Eを指す。

柱掘方は円形または隅丸方形を呈し、深さ0.10~0.30mと浅い。柱痕は2本の柱穴で確認されたのみである。出土遺物は4点検出され、土師器甕、須恵器坏、蓋がある。正確な年代は不明であるが、8世紀前半代に位置付けられる可能性がある。

第38号掘立柱建物跡(第343図)

J-11・12区に位置する。第26号掘立柱建物跡と僅かに軸を北側にずらして重なっているが、新旧関係は不明である。

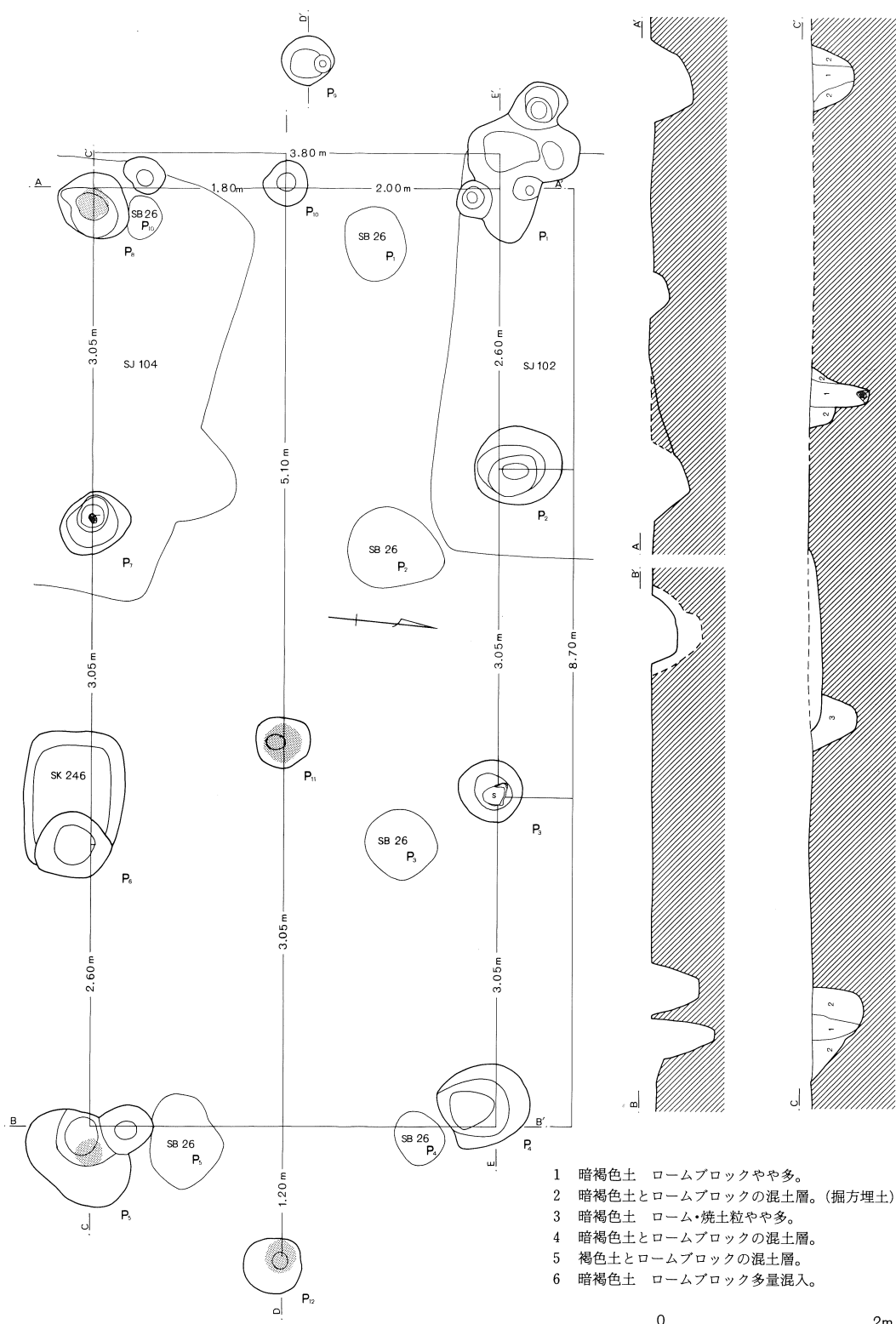
規模は桁行8.70m、梁行3.80mを測る。柱間寸法は一定せず、桁行では北側と南側で柱穴の並びが異なる。西側妻の中間柱(P₁₀)は中軸線に乗らず、東側妻の中間柱は存在しない。P₁₀の延長上にはP₁₂が位置し、若し伴うとすると独立棟持柱風の構造となる。また屋内棟通りのほぼ中間部にP₁₁が存在しており、屋内棟持柱の可能性が考えられる。西側妻の中軸線上外側にあるP₉については伴うか否か不明である。主軸方位はN-95°-Eを指す。

柱掘方は円形を呈し、径0.40m前後から0.80m程のものまである。深さは0.40~0.50mと比較的深い。柱痕は4本の柱穴で確認され、P₇では柱材と思われる木片が僅かに残存していた。またP₃底面には柱を据えたと思われる板石が検出されている。

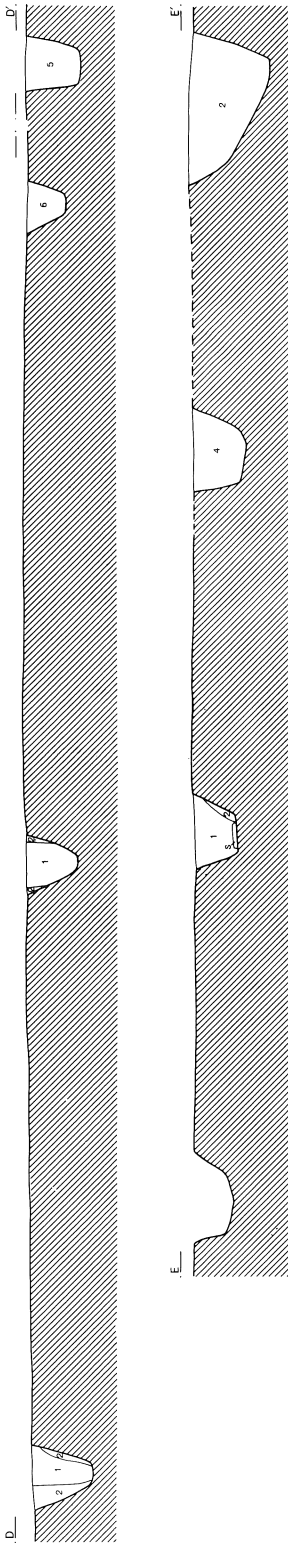
出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、土師質土器?の小片が計39点検出されたが、図示できるものはない。土師質土器を除くと他は混入と考えられる。建物構造からみても中世段階の構築物と考えて誤りなからう。



▲第Ⅲ群（東側谷地から西を臨む）



第343図 第38号掘立柱建物跡(L=30.60m)



第39号掘立柱建物跡(第344図)

J・K-12・13区に位置する。周囲は後世の削平を受けており、遺構の遺存状態は良くない。

本来3×2間の側柱建物と推定されるが、桁柱が3本欠落している。規模は桁行7.80m、梁行4.40mを測る。桁行柱間寸法はP₅・P₆間で2.60m、梁行では2.20m等間となる。主軸方位はN-64°-Eを指す。

柱穴は上面を削平されているためもあるが、全体に小規模で径0.40~0.60mを測る。深さは0.20~0.45m程で全体に浅い。柱抜き取り痕はほとんどの柱穴で確認され、特にP₇では柱材そのものが残されていた(第355図17)。

出土遺物は土師器甕片が5点検出されたのみである。時期を明らかにすることは難しいが、桁柱間隔が広く、かつ柱径が小さいことからみると、古代の建物とするには違和感がある。ここでは中世段階の建物と推定しておきたい。

第40号掘立柱建物跡(第345図)

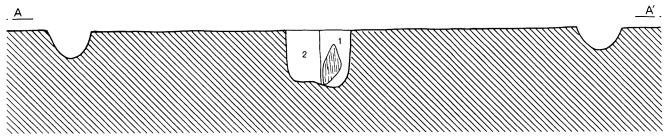
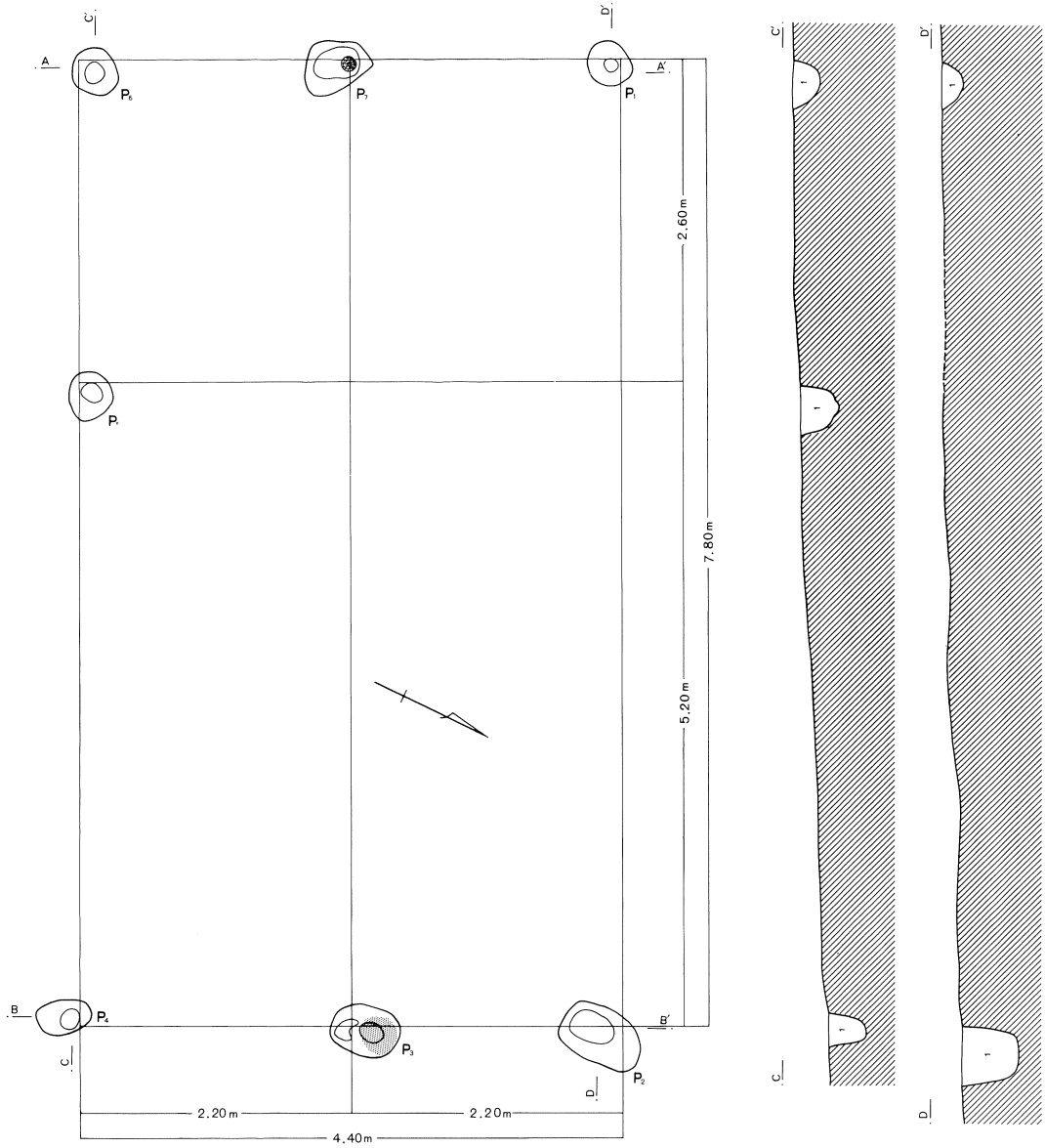
J-13区に位置する。後世の水田化による削平を受けているために遺存状態は極めて悪い。東西2間、南北1間が辛うじて残存してただけで詳細は不明である。おそらく北側に延びる建物と推定される。

柱間寸法は1.80m程と比較的狭く、東西長3.60m、南北長1.80mを測る。仮に南北棟の建物とすると、主軸方位はN-7°-Wを指す。

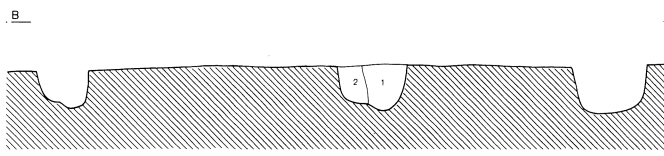
柱穴規模は遺存状態が良くないためもあり全体に小規模で、径0.30m前後、深さ0.30m以下である。

覆土は黒褐色の粘質土で構成されていた。柱痕の有無は不明である。

出土遺物は8世紀初頭以前と推定される、器壁の厚い土師器甕の破片が4点検出されただけで、時期決定の資料に欠ける。柱間寸法が短いことを考えると古代とすることもできようが、断定はできない。

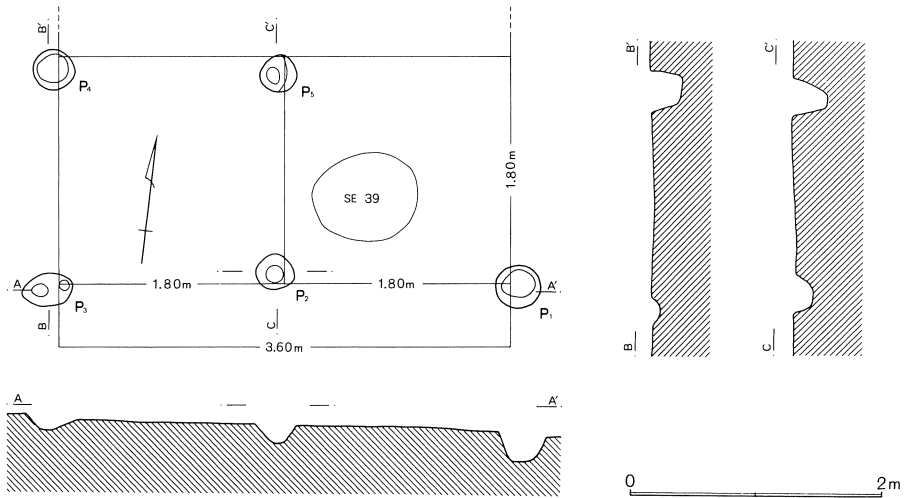


- 1 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量混入。(柱抜き取り痕か)
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量・焼土粒子微量混入。(掘方埋土)



0 2m

第344図 第39号掘立柱建物跡(L=30.20m)



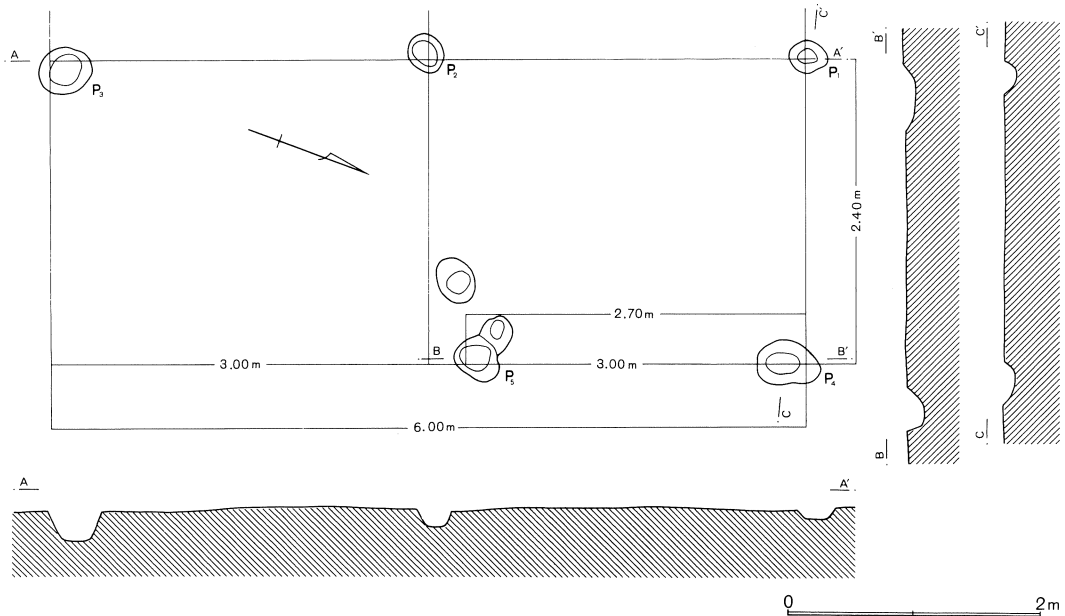
第345図 第40号掘立柱建物跡(L=30.00m)

第41号掘立柱建物跡(第346図)

K・L-12区に位置する。第III群東側の谷部に所在し上面は削平されている。確認できた柱穴は4本のみで詳細は不明である。一応南北2間(6.00m)、東西1間(2.40m)が残存する。西側柱列の柱間寸法は3.00m(10尺)、東側のP₄・P₅間は2.70mを測る。主軸方位はN-20°-Wを指す。

柱穴は小規模で径0.30~0.50m、深さ0.10~0.25m程である。柱痕の有無は不明である。

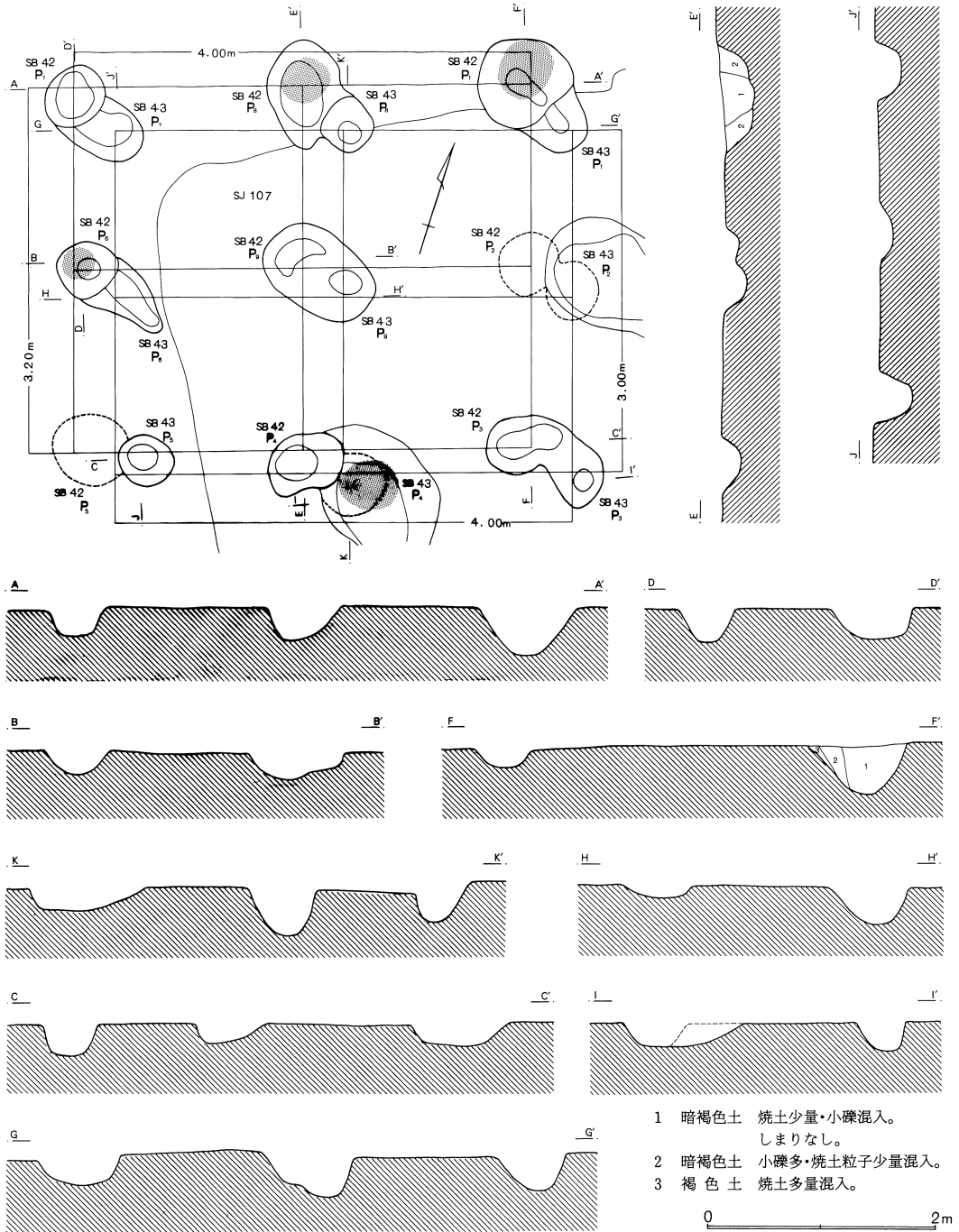
出土遺物がないため正確な時期は明らかにできないが、柱間隔が9尺または10尺と長いことから中世段階の建物と推定しておきたい。



第346図 第41号掘立柱建物跡(L=30.30m)

第42・43号掘立柱建物跡(第347図)

L-10・11区に位置する。調査時に建物の存在に気付かず、不明な点を残してしまった。第107号住居跡と大部分重複するが、住居そのものの遺存が悪く新旧関係は明確にできない。建物同士の間合いは断面観察から42号建物が新しいことが判明しており、43号建物から僅かに北西に軸を移



第347図 第42・43号掘立柱建物跡(L=30.80m)

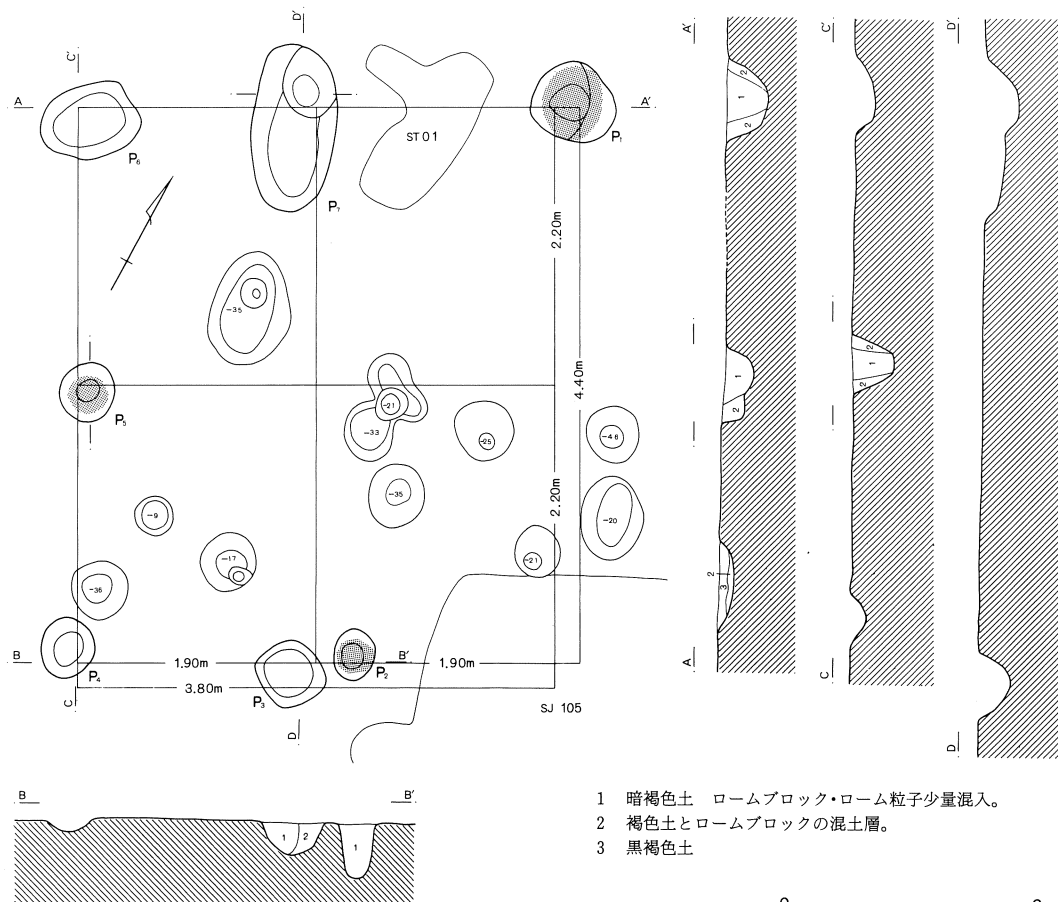
して建て替えたものと推定される。

第42号掘立柱建物跡は2×2間の総柱建物で倉庫と推定される。P₂・P₆は検出できなかったが存在したものと考えられる。規模は桁行4.00m、梁行3.20m、柱間寸法はそれぞれ2.00m、1.60mを測る。主軸方位はN-72°-Eを指す。柱穴掘方は円形を呈し、径0.50~0.80m、深さ0.30~0.40m前後の規模をもつ。柱痕は3本の柱穴で確認され、何れも抜き取られた形跡が認められた。

第43号掘立柱建物跡はやはり2×2間の総柱建物で、桁行4.00m、梁行3.00mを測り、42号建物よりも梁行が一回り小さい。P₂は未確認、P₄は断面で確認した。柱穴規模は42号建物よりも若干小さい。柱痕はP₄・P₅で確認され、両柱穴とも抜き取られていた。

遺物は柱穴埋土から土師器坏、甕が8点検出されたのみである。小片のため時期比定の根拠とするには弱い、7世紀から8世紀初頭前後の時間幅に納まる土器群と考えられる。柱間寸法や覆土の状況から古代の建物と考える。107号住居跡との時間差が問題となるが、主軸方位を重視すると時期的に大きく隔たらない可能性もある。

第44号掘立柱建物跡(第348図)



第348図 第44号掘立柱建物跡(L=30.80m)

K-11区に位置する。第105号住居跡と一部重複するが、新旧関係は不明である。一応2×2間の建物で、束柱は存在しない。

整理段階で抽出したため東側柱筋の2本が検出されておらず、疑問点を残している。規模は桁行4.40m、梁行3.80mを測る。主軸方位はN-29°-Wを指す。

柱間寸法はそれぞれ2.20m、1.90mとなるが、P₃は等分線に乗らない。P₂は柱筋には乗るが伴う可能性は少ない。柱穴は円形を呈し比較的径は小さい。深さは全体に浅めで0.20~0.30m程である。柱痕はP₂・P₅で確認された。

出土遺物は存在せず、時期は不明である。

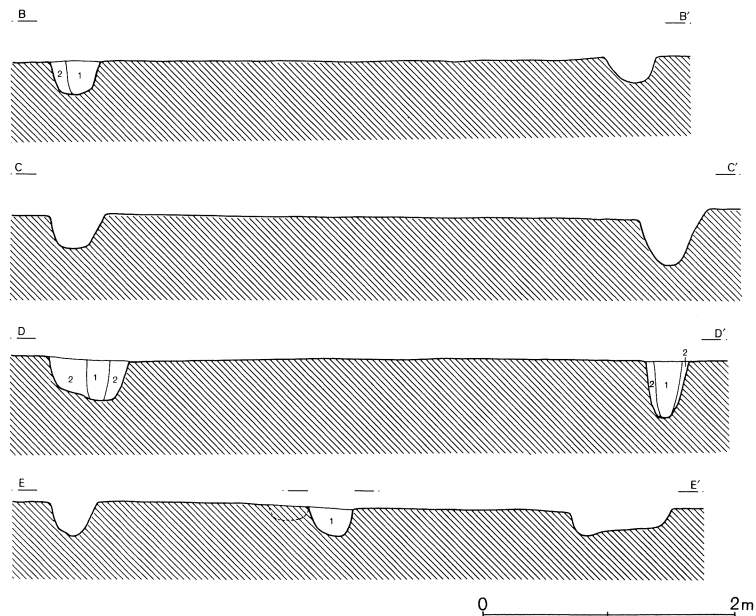
第45号掘立柱建物跡(第349図)

K・L-11・12区に位置し、4×2間の南北に長い側柱建物と推定される。第105・106号住居跡、第44・46号掘立柱建物跡と重複する。住居跡よりも新しいことは判明したが、建物同士の直接的な切り合いはなく新旧は不明である。規模は桁行9.20m、梁行4.50mを測る。主軸方位はN-2°-Wを指す。

柱間寸法は規格制に乏しく、特に東側の桁柱は2.30mの等間距離からずれてしまう。また妻側の中間柱も柱筋に乗るものがなく、P₆とP₁₂をそれに想定すると妻の等分線からずれることになり、片屋根風の建物に復元されようか。

各柱穴は円形を呈し、径0.40~0.60mを測る比較的規模の小さいもので構成される。柱痕は6本の柱穴で確認された。褐色系の土で埋まり、締まりに欠ける(第1層)。掘方はロームブロック混じりの褐色土で構成される(第2層)。

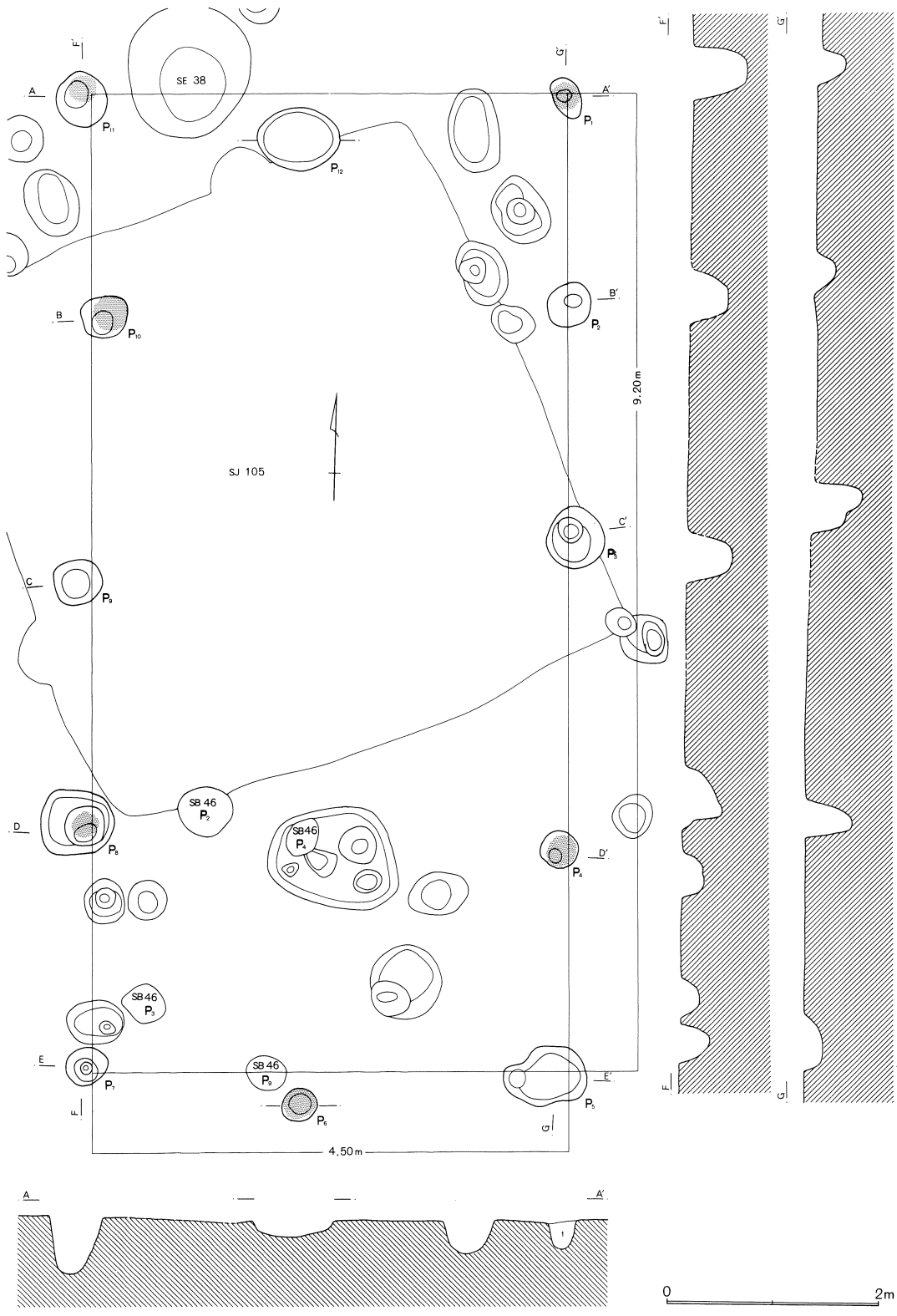
出土遺物は14点出土した。土師器坏、甕、須恵器坏、甕があるが何れも細片で時期的なまとまりもない。柱穴規模や構造から見て古代の建物とするには無理があろう。中世の建物と推定しておきたい。



第46号掘立柱建物跡(第350図)

L-11区に位置する。2×2間の側柱建物に東側と南側の2面に庇が付くものと考えた。

第349図



第45号掘立柱建物跡(L=30.80m)



第350图 第46号掘立柱建物跡(L=30.80m)

第45号建物及び第106～108号住居跡と重複する。前者との新旧関係は不明であるが、後三者とのそれは本建物の方が新しいものと推定される。

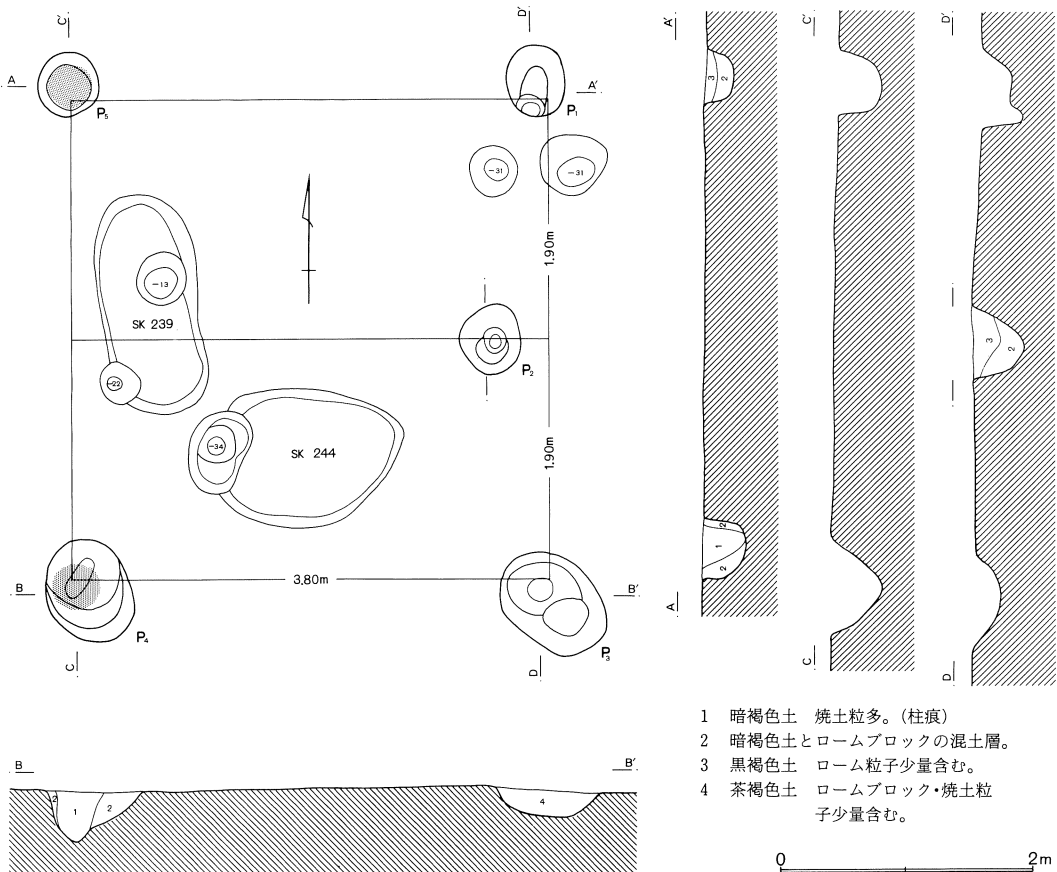
身舎の規模は桁行5.00m、梁行4.00m、身舎と庇との距離は東側で1.00m、南側で1.10mを測る。本建物も整理段階で抽出したため、不明な箇所が見られる。先ず北西隅柱が存在しない、妻の中間柱が庇も含めて中軸線上からややはずれる等である。主軸方位はN-83°-Wを指す。

各柱穴は円形を呈し径が小さいのが特徴である。深さは身舎柱が深く、庇柱は浅めである。柱痕は6本の柱穴で確認された。ローム・焼土粒子を僅かに含む褐色系の土で埋没し、締まりに欠ける(第1層)。ほとんどは抜き取られた形跡を示す。掘方はロームブロックを多量に含む褐色土で構成されていた(第2層)。

出土遺物は土師器・須恵器の破片が計28点ある。また1点のみカワラケ風の土師質土器小片が含まれている。土師器と須恵器は时期的にまとまりがなく、年代比定の根拠とは成らない。建物形態からも中世の建物と考えるのが妥当であろう。

第47号掘立柱建物跡(第351図)

M-12・13区に位置し、第29・30号建物の西側にほぼ軸を揃えて隣接する。1(2)×1間で桁・梁



第351図 第47号掘立柱建物跡(L=30.80m)

ともに中間柱が欠けるため疑問が残るが、一応建物と推定しておきたい。桁行・梁行共一辺3.80mを測る。P₂を中間柱としたが柱筋が通らず、伴うか否か不明である。主軸方位はN-2°-Wを指す。

柱掘方は円形から楕円形を呈し、径0.50~0.90m、深さ0.25~0.40mの規模をもつ。柱痕はP₄・P₅で確認された。

出土遺物は8世紀前半以前と推定される土器(須恵器坏1、土師器甕2点)3点のみで時期は不明であるが、古代のものであろう。

第48号掘立柱建物跡(第352図)

M-12区に位置する。整理段階で抽出した建物で柱穴の確認が充分でない点がある。

建物規模は、桁行7.20m、梁行4.40mを測る東西棟の建物で北側に庇が設けられる。身舎と庇の間隔は1.60mを測る。主軸方位はN-87°-Eを指す。

身舎の北側柱列は3間、南側柱列は2間となる。西側妻の中間柱は検出されなかった。また東妻の中間柱は柱筋よりも1本分ほど外側に突出し、棟持柱様の構造を示す。

庇柱はP₁₁とP₁₂の間に1本存在した可能性が高いが検出されていない。P₄・P₁₃が伴うか否かは明らかではない。柱穴規模は円形または楕円形を呈し、P₉を除くと径0.50m程で比較的小さめである。深さは0.20~0.40mが主体となる。

柱痕は5本の柱穴で確認され、ローム粒子を少量含む茶褐色土で構成される(第1層)。掘方は黒色土とロームブロックの混土層で埋められ堅く締まっていた(第2層)。

遺物は20点検出された。土師器坏、甕、須恵器蓋、甕の各器種があるが何れも小片である。2点を図化した(第355図11・12)が年代を特定する根拠としては弱い。寧ろ建物構造や柱穴形態からすると、中世以降の可能性があるものとする。

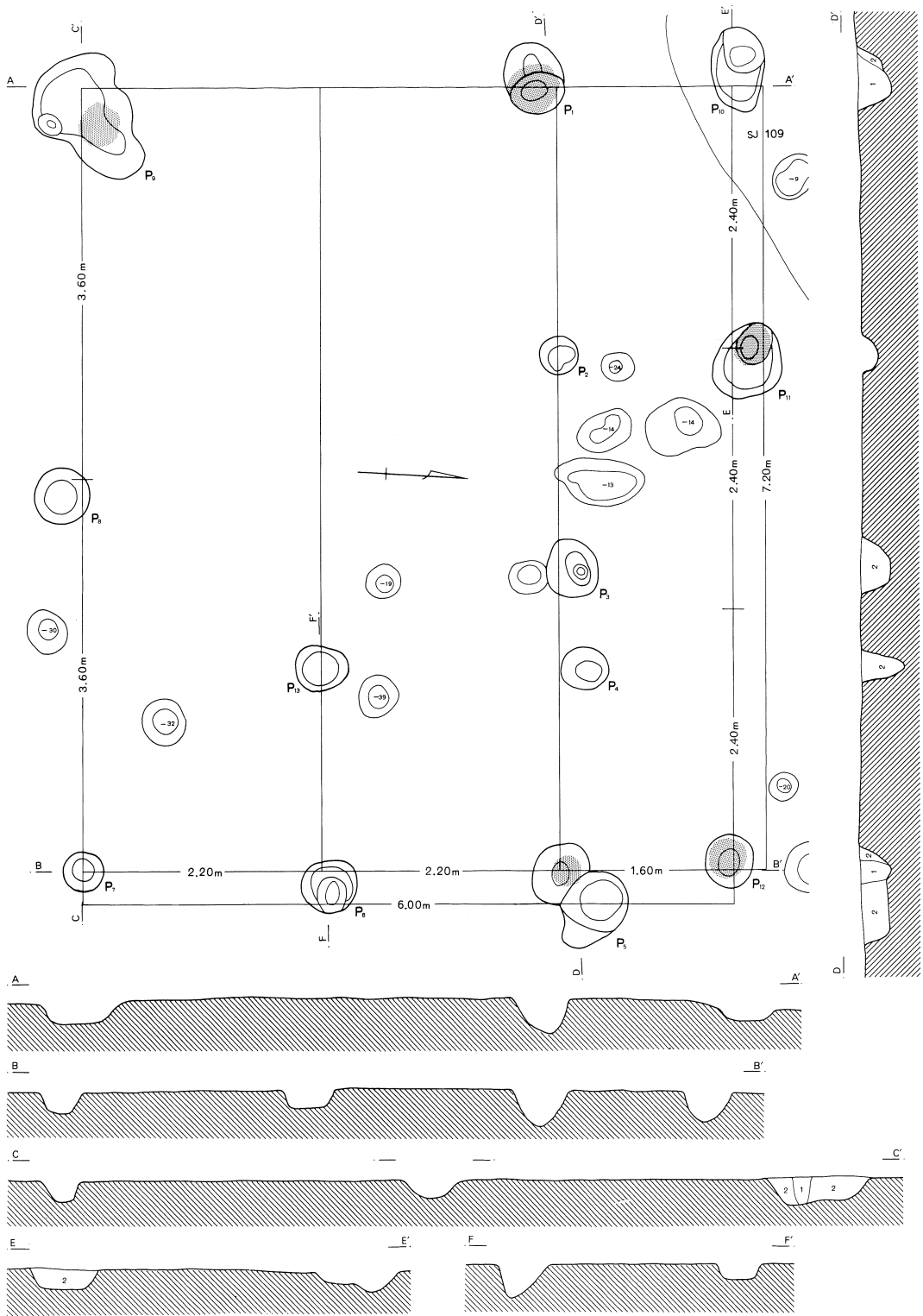
第49号掘立柱建物跡(第353図)

M-11区に位置する。2×2間の建物と推定されるが、整理段階で抽出したためにP₇~P₁₀が伴うか否か不明である。第111・112号住居跡と重複するが、土層観察により本建物の方が新しいものと推定される。

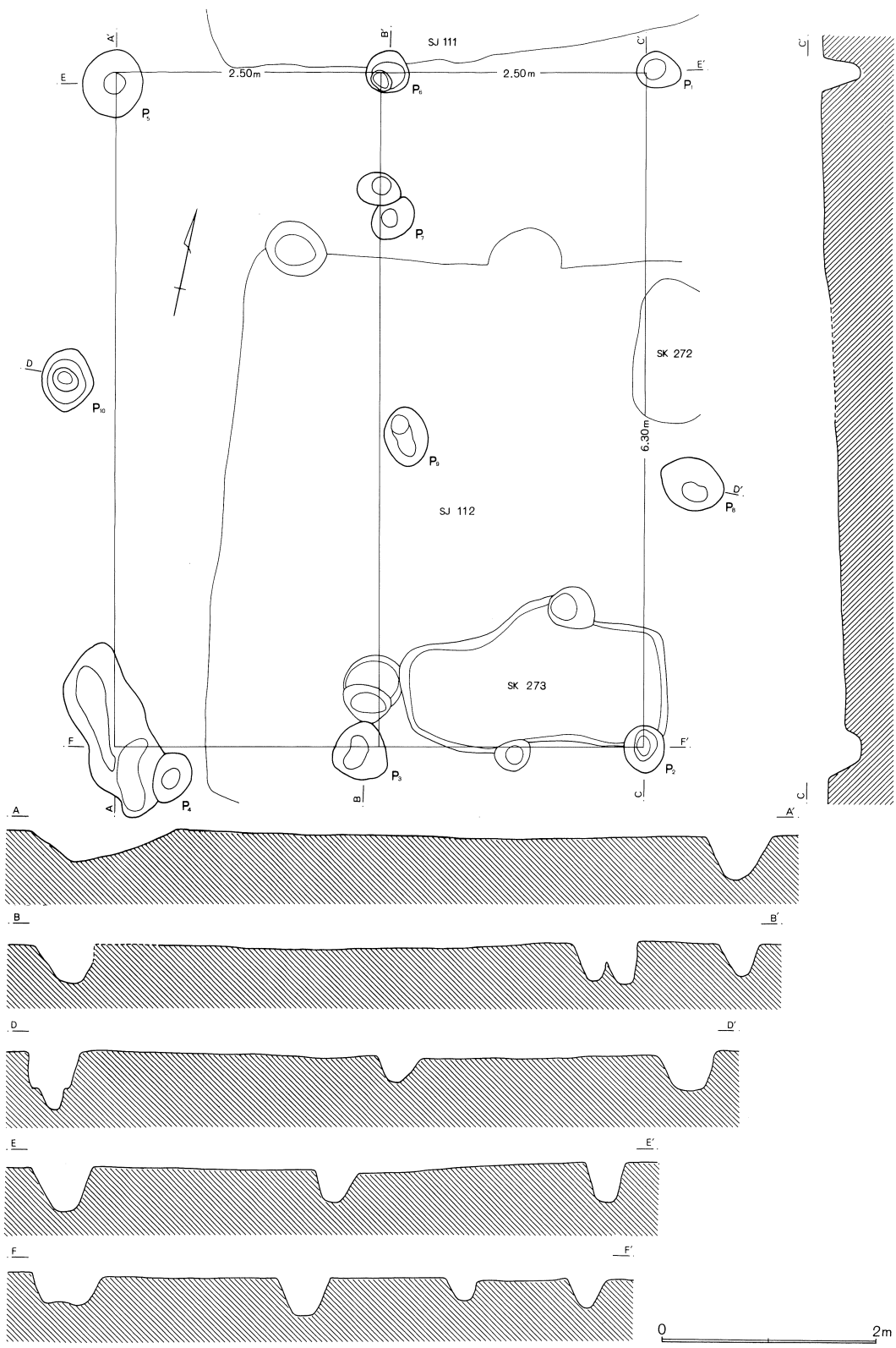
建物規模は、桁行6.30m、梁行5.00mを測る。桁行の柱間寸法は不明であるが、梁行では2.50mを測る。主軸方位はN-11°-Wを指す。

柱穴形態はほとんどが円形を呈する。直径0.40~0.60m程と比較的小さく、深さは0.25~0.40mを測る。P₄とした不整楕円形の土壇は古代のものとして推定され、偶然建物柱穴が重複したものと考えられる。

出土遺物はP₄から土師器坏、埴、甕、台付甕、須恵器甕、鉄滓等36点検出されているが、前述したように建物の年代を直接反映したものとは考えられず、建物自体はおそらく中世段階のものとして推定する。



第352图 第48号掘立柱建物跡(L=30.80m)



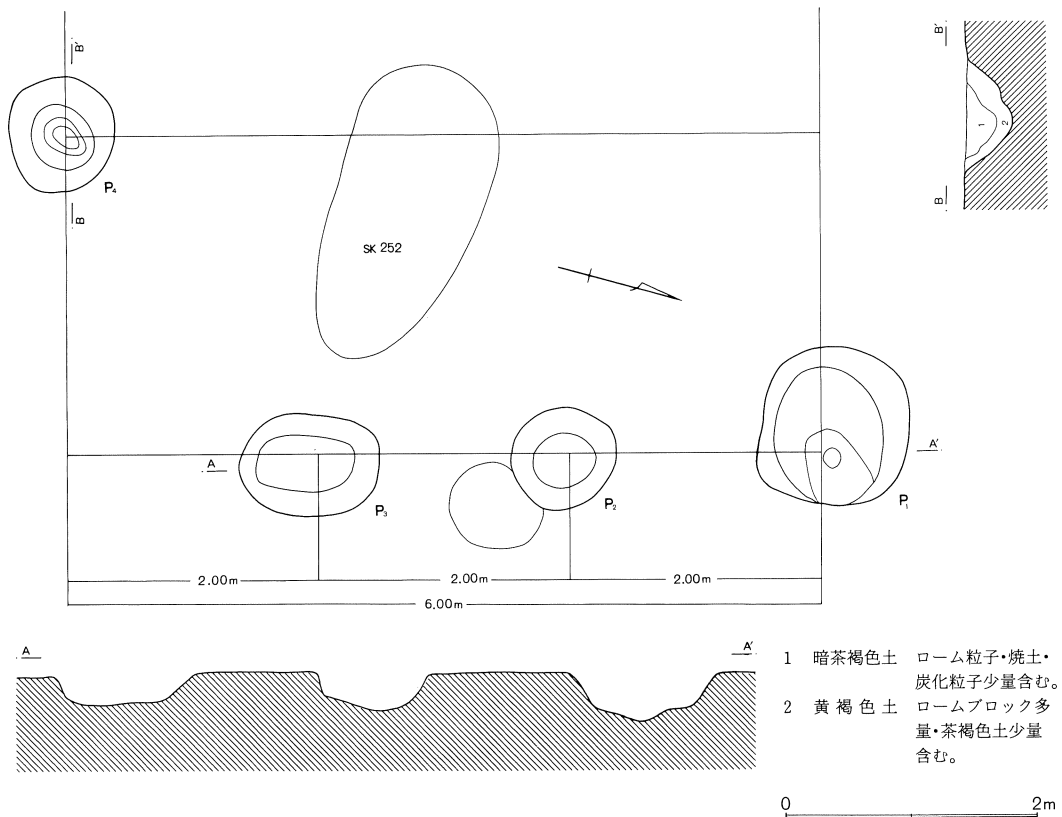
第353图 第49号掘立柱建物跡(L=30.80m)

第50号掘立柱建物跡(第354図)

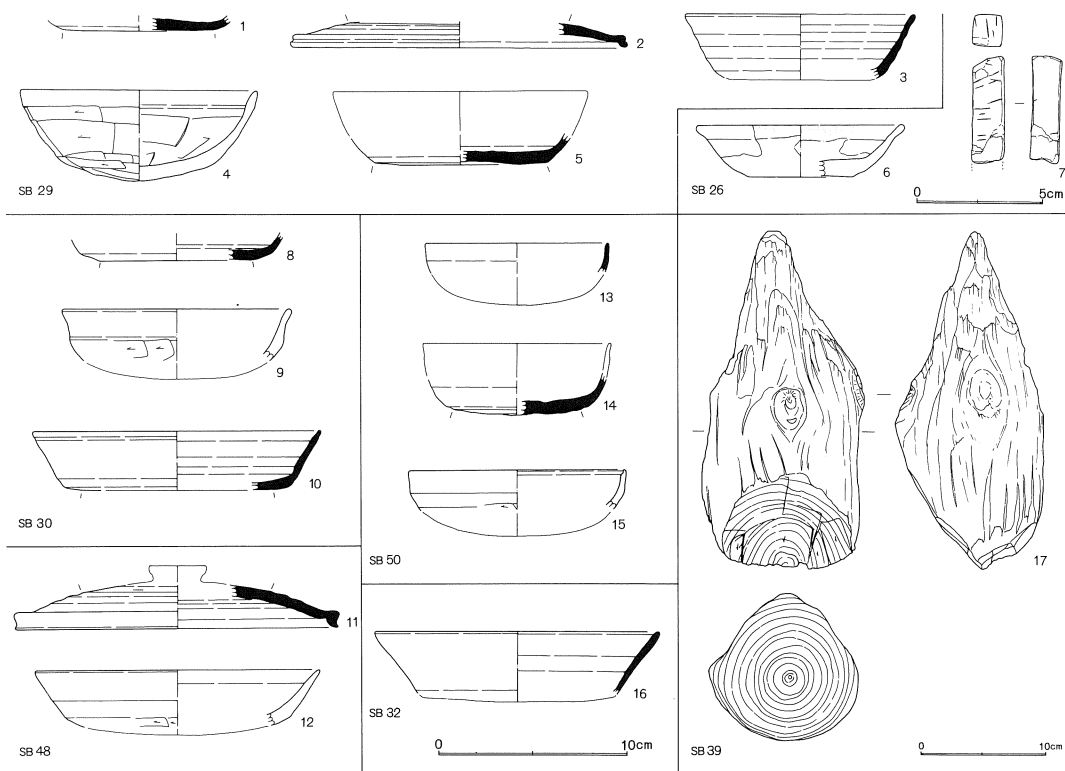
N-11区に位置する。本建物も整理時に抽出したものである。調査の際柱穴の確認が不十分で建物形態及び規模に不明点を多々残してしまった。柱穴4本は確認できたが南東隅柱が検出されていない。

建物規模は南北推定長6.00m、東西は2.50m以上となる。主軸方位はN-16°-Wを指す。

柱掘方は円形または隅丸長方形を呈し、径0.80~1.20mに及ぶ規模の大きなもので占められる。明瞭な柱痕が確認できたものはないが、P₄では抜き取り痕と思われる堆積が確認された。埋土にはロームブロックを多量に含まれる等、通有の建物掘方と類似した土層構成が認められる。遺物はP₁・P₂とP₄から39点検出されている。土師器坏、甕、須恵器坏、甕を主体とし、P₄から2点中世陶器片が出土した。前者はほぼ7世紀後半代、降っても8世紀初頭という時間幅の中に納まるものと考えられる。柱穴形態から推しても中世の遺物は混入と考えるのが妥当であろう。



第354図 第50号掘立柱建物跡(L=30.80m)



第355図 第Ⅲ群掘立柱建物跡出土遺物

第Ⅲ群掘立柱建物跡出土遺物観察表(第355図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏		0.8	(8.0)	BC	A	灰	10%	SB29-P ₁ 覆土。
2	蓋	(17.7)	1.3		AC	B	灰	5%	SB29-P ₇ 覆土。
3	坏	(12.1)	3.4		BC	A	灰	25%	SB29-P ₇ 覆土。
4	坏	(12.5)	4.8		ABCE	A	にぶい褐	60%	SB29-P ₆ 覆土。
5	坏		1.6	9.2	ABC	A	灰白	50%	SB29-P ₃ 覆土。
6	皿	(10.6)	2.7	(5.0)	J	A	灰白	25%	SB26-P ₃ 覆土。瀬戸・美濃系緑釉小皿。
8	坏		1.4	(8.0)	AC	B	灰白	5%	SB30-P ₆ 覆土。
9	坏	(12.0)	2.7		A EF	A	にぶい橙	5%	SB30-P ₇ 覆土。
10	坏	15.2	3.1	12.0	ABC	A	灰	15%	SB30-P ₁ 覆土。
11	蓋	(17.0)	2.3		ABC	A	灰	15%	SB48-P ₁ 覆土。
12	皿	(15.0)	2.9		ABC	A	にぶい赤褐	5%	SB48-P ₉ 覆土。
13	坏	(9.6)	1.5		BC	B	灰	5%	SB50-P ₄ 覆土。
14	坏		2.2		ABC	A	淡橙	20%	SB50-P ₂ 覆土。
15	坏	(11.4)	2.1		ACF	B	にぶい橙	15%	SB50-P ₁ 覆土。
16	坏	15.0	3.3		ABC	B	灰	10%	SB32-P ₂ 覆土。
7	砥石	残長5.7cm。幅1.7cm。厚さ1.6cm。							SB26-P ₇ 覆土。凝灰岩製か。線状痕数条残る。

3. 井戸跡

第30号井戸跡(第356図)

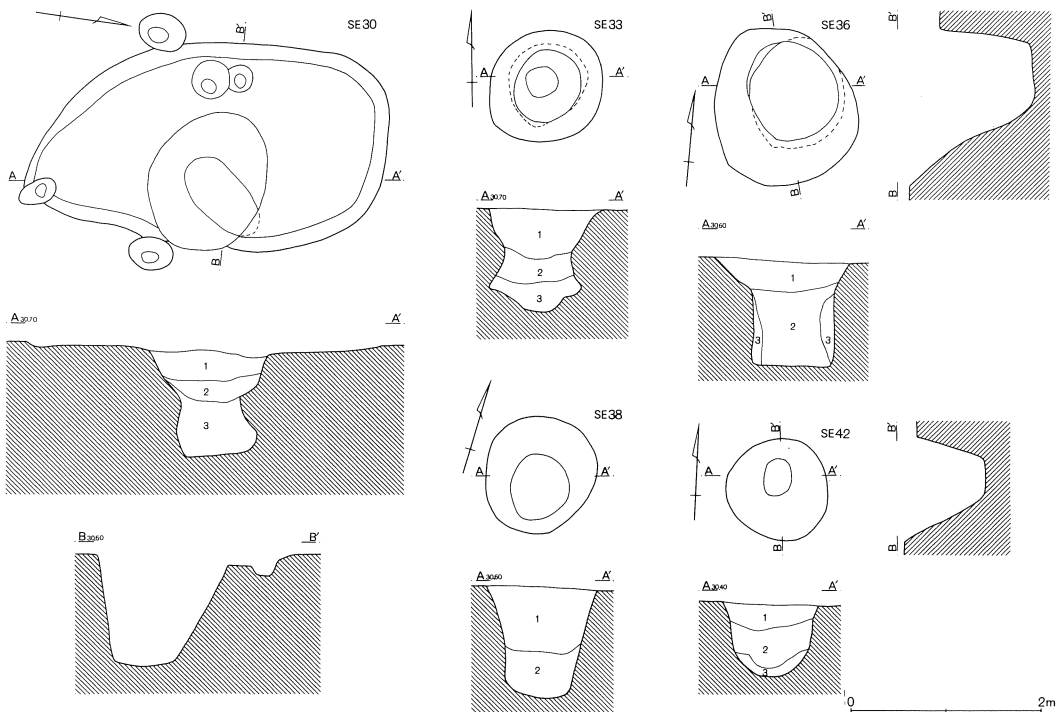
K-11・12区に位置する。平面形は楕円形を呈し、径1.50×1.20m、深さ1.20mを測る。断面形はロート形を呈する。覆土は3層に分かれ、第1・2層はローム粒子・炭化物を少量含む褐色土、第3層は黒色有機質土で構成される。また、周囲には径3.80×2.20mの浅い楕円形土壌が掘り込まれており、性格は明らかではないが井戸跡に伴う可能性もある。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕計24点検出された。全て小片で時期は不明確であるが、8世紀～9世紀代の井戸跡と推定される。

第31号井戸跡(第357図)

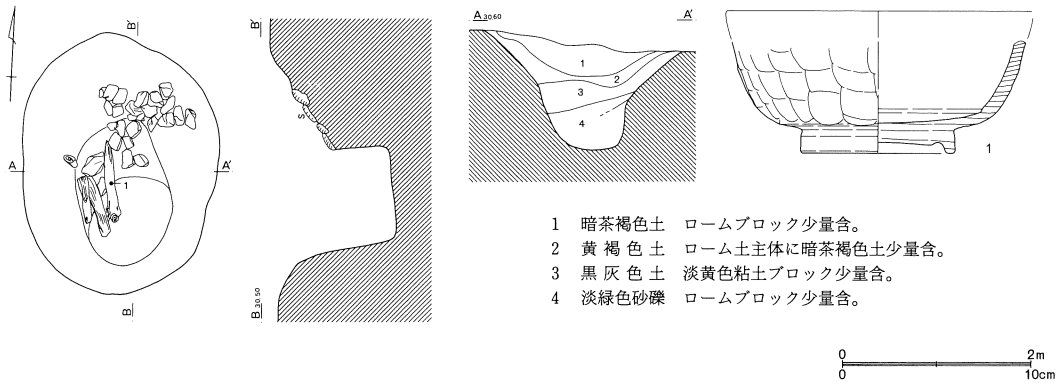
K-12区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は径2.75×2.10m、深さ1.25mを測る。断面形はほぼ筒状を呈するが北側にテラスをもつ。このテラス部分には径20cm前後の扁平な礫が24個敷き詰められた状態で残され、この礫群に寄りかかるように棒状木製品3本(加工痕無し)が出土した。また礫群と棒状木製品西側に接する位置には木杭が1本打ち込まれた状態で遺存しており、これらは井戸側と水を汲むための足場状の施設と理解することができよう。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、甕、軟質陶器(鉢か)が計9点と木製椀1点が検出されている。土器類は小片であるため年代決定の資料とするには弱いが、一応中世の井戸跡と推定して



第356図 第30・33・36・38・42号井戸跡

おきたい。第357図1は木製塗碗。棒状木製品下部から出土した。口縁部を欠くが残高5.9cm、高台径8.0cm。轆轤成形後、体部外面は手斧状工具で鱗状に削られる。全面黒漆が塗布される。30%残。



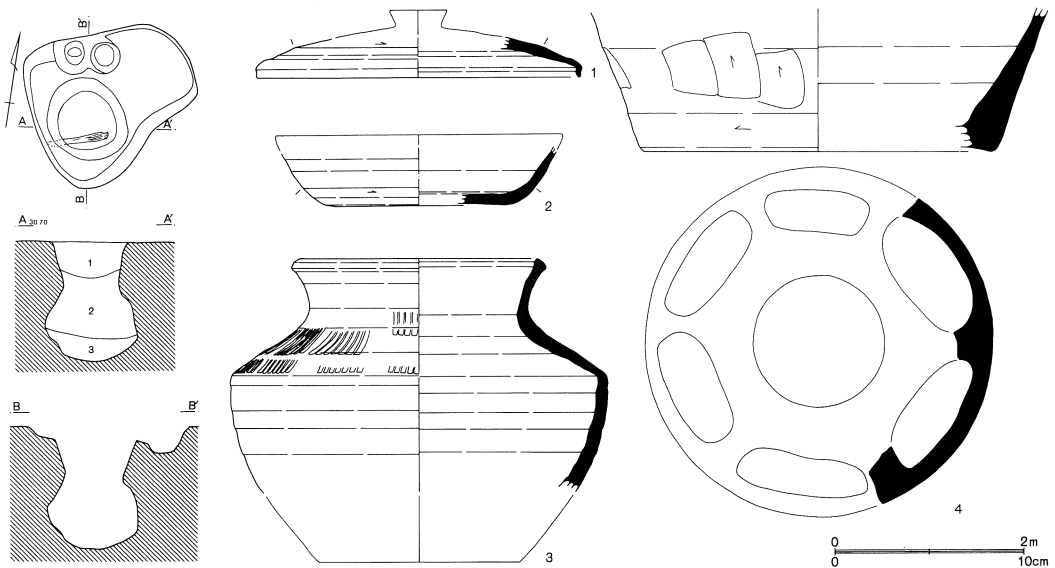
第357図 第31号井戸跡・出土遺物

第32号井戸跡(第358図)

M-13区に位置し、重複する第115号住居跡を切って構築される。形態は円形を呈し、規模は径0.90m、深さ1.25mを測る。上面周囲には浅い土壌が存在するが伴う可能性は少ないものと判断された。断面は筒上を呈するが、側壁は崩落していた。

覆土は3層に分かれ、第1・2層は茶褐色土、3層はロームを含む暗黄褐色土で構成される。

出土遺物は42点検出され、器種としては土師器坏、甕、台付甕、須恵器坏、蓋、甕、甑、壺が認められる。また底部付近から木材片が1点出土したが、井戸側等の施設の存否は明らかにできな



第358図 第32号井戸跡・出土遺物

った。稻荷前VI～VII期頃に比定されよう。

第32号井戸跡出土遺物観察表(第358図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(17.0)	2.0		BC	A	灰	10%	覆土。
2	坏		3.0	(10.0)	ABC	A	灰	15%	覆土。
3	壺	12.6	12.3		ABC	A	灰	60%	覆土。
4	甌		7.4	(18.4)	AC	A	灰白	30%	覆土。

第33号井戸跡(第356図)

M-12区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径1.20m、深さ1.10mを測る。ほぼ筒状に掘り込まれるが、底面近くの側壁は崩落していた。

覆土は3層に分かれ、第1層は焼土・ロームブロック・礫が多量に含まれ人為的に埋め戻された可能性が高い。第2層はロームを少量含む暗褐色土、第3層は粘性の強い黒色土で構成される。

形態から見ておそらく古代の井戸跡と推定されるが、出土遺物は全くないため年代を限定することはできない。

第34号井戸跡(第359図)

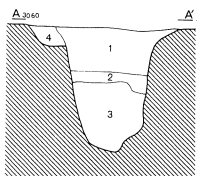
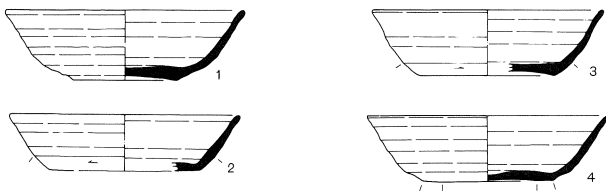
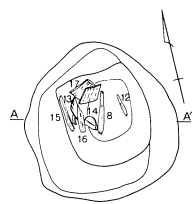
N-14区に位置する。確認面の平面形は不整円形を呈するが、肩部以下は方形を呈する。規模は径1.60m、深さ1.40m、断面形はロート形を呈する。底面はやや狭まり、側壁に沿って板材と角材を組み合わせた井戸側が一部遺存していた。覆土は4層に分かれ第4層は掘方と推定される。

出土土器は109点あり、須恵器坏、埴、甕、蓋、壺類が存在する。須恵器坏には底部未調整のものと周辺ヘラ削りを施すものがあり後者の方が比率的には高い。IX～XI期に比定されようか。

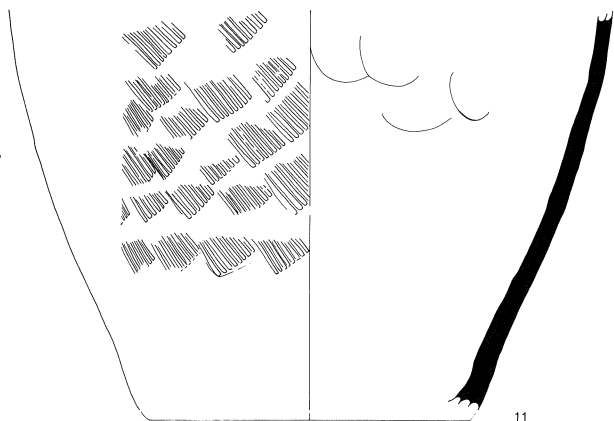
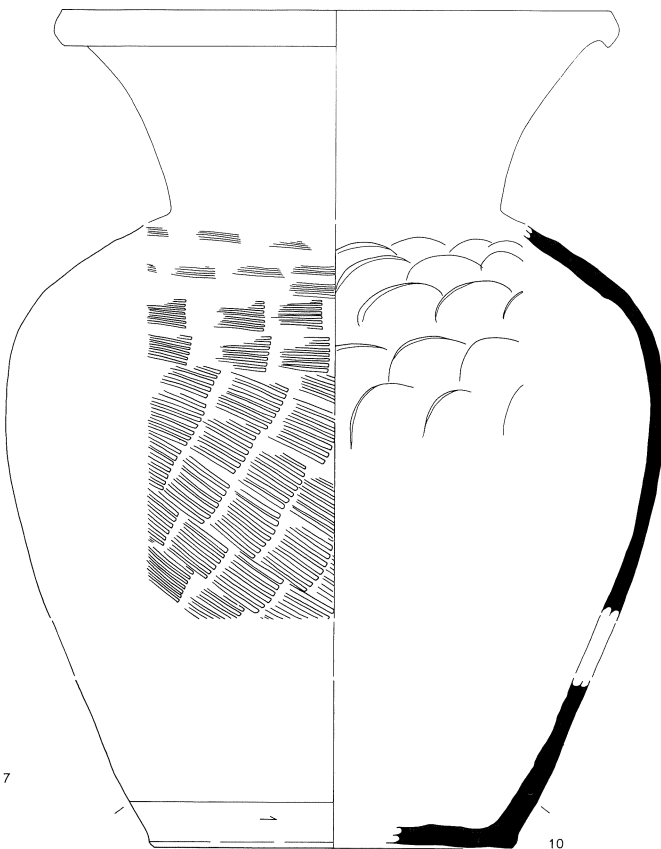
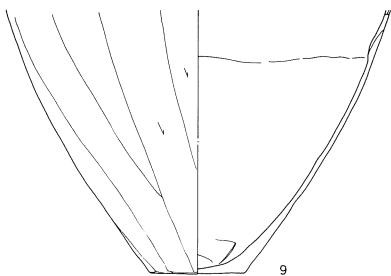
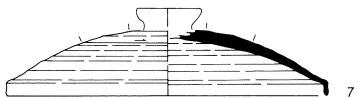
第360図12は井戸側東側壁に使用された板材である。長さ25.5cm、厚さ3.1cm。13は長さ34.7cm、厚さ3.4cm。14は長さ36.5cm、厚さ5.5cm。15は長さ45.1cm、幅6.2cm、厚さ0.9cmの板状製品。16は長さ33.2cm、厚さ4.1cm。17は長さ31.7cm、幅20.6cm、厚さ2.5cmの板材で下端隅にほぞ穴が穿たれる。18は長さ57.4cm、幅5.4cm、厚さ4.0cmの角材で下端部は臍状に突起を設ける。19は長さ41.2cm、幅20.1cm。形状は17と同一。

第34号井戸跡出土遺物観察表(第359図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.5)	3.7	5.6	AB	A	灰	35%	覆土。
2	坏	(12.1)	3.0	(8.0)	ABC	A	灰	20%	覆土最下層。
3	坏	(12.2)	3.4	7.0	ABC	A	灰白	10%	覆土最下層。
4	坏	12.6	3.5	6.8	BC	B	灰	60%	覆土最下層。
5	坏		2.8	(7.0)	ABC	B	灰白	40%	覆土下層。
6	坏		2.1	6.4	AC	B	灰	70%	覆土最下層。底部に「<」印のヘラ記号あり。
7	蓋	(16.8)	3.5		ABC	A	灰	25%	覆土最下層。
8	埴	(17.0)	4.1		AB	A	灰	10%	覆土最下層。口唇部磨滅。
9	甕		13.8	5.0	ABEG	A	にぶい黄橙	30%	覆土最下層。
10	甕		32.8	(19.0)	ABC	A	灰白	20%	覆土。
11	甕		21.0		AC	B	灰	40%	覆土。

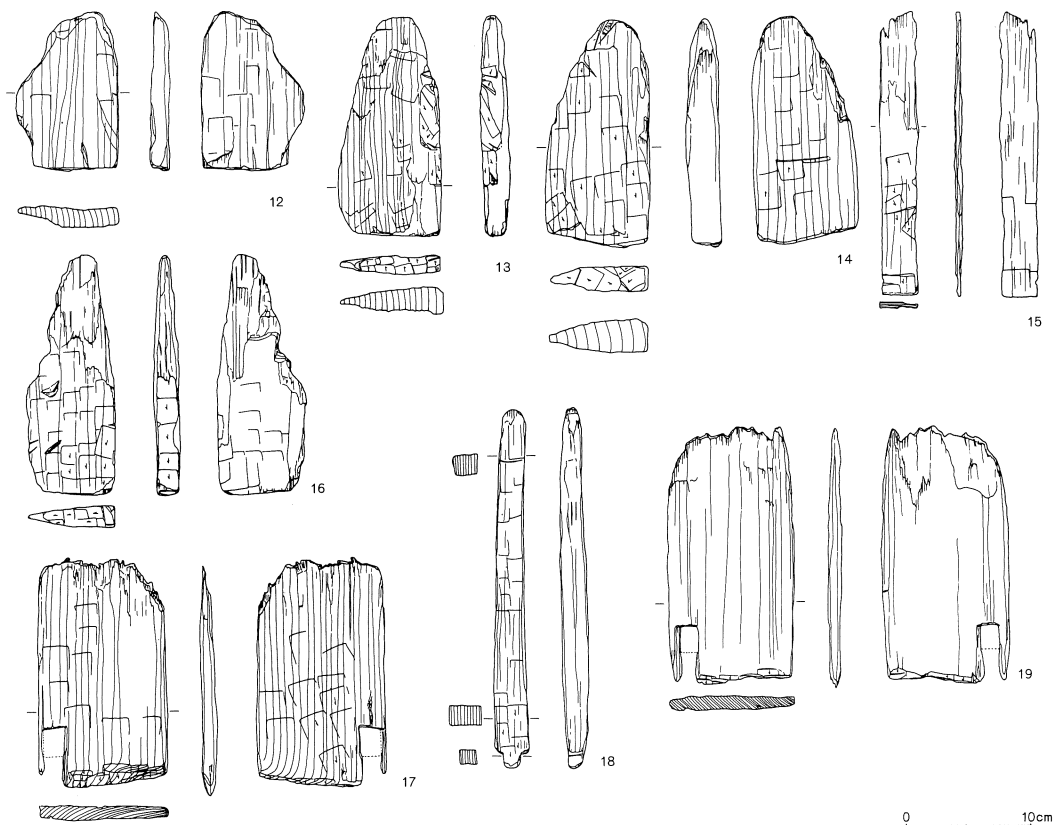


- 1 暗褐色土 焼土粒子多。
ローム粒子少量混入。
- 2 暗褐色土 粘性強。ローム
ブロック混入。
- 3 黒灰色土 粘性強。有機
質土。ローム粒少量含。



0 2m
0 10cm

第359図 第34号井戸跡・出土遺物(1)



第360図 第34号井戸跡出土遺物(2)

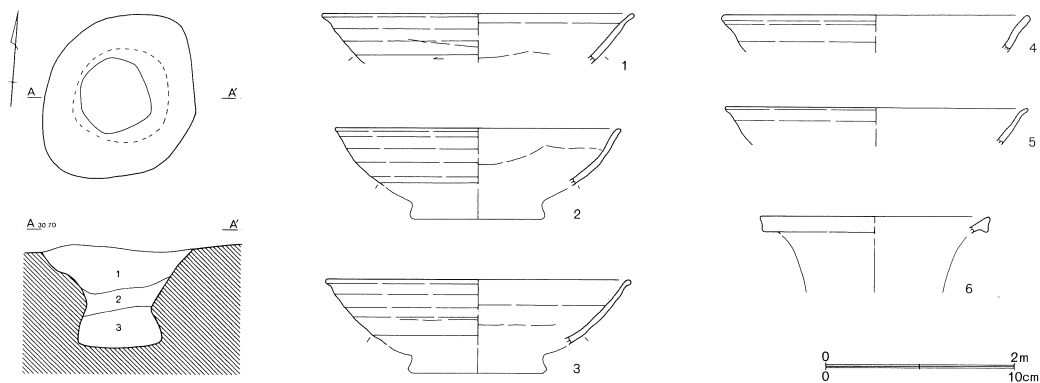
第35号井戸跡(第361図)

N-13区に位置する。第118号住居跡を切って構築される。平面形は円形を呈し規模は径1.70m、深さ1.10mを測る。断面形はロート状を呈するものと推定されるが底面近くの側壁は崩落し形状が変わっていた。覆土は3層に分かれ、第1層は焼土・炭化物粒子を多量に含む暗茶褐色土、第2・3層はローム粒子などを少量含む黒褐色土で構成される。

出土遺物は少なく、須恵器坏1、灰釉碗5、灰釉瓶1、緑釉碗2点の計9点で、施釉陶器が主体を占める。9世紀末葉～10世紀代であろう。

第35号井戸跡出土遺物観察表(第361図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	灰釉碗	(16.4)	2.6		A B	A	灰白	5%	覆土。灰釉漬掛け。産地不明。
2	灰釉碗	(15.0)	3.0		B	A	灰白	25%	覆土。灰釉漬掛け。東濃産。
3	灰釉碗	(16.0)	3.4		B	A	灰白	10%	覆土。灰釉刷毛塗りか。東濃産。
4	灰釉碗	(16.0)	2.0		B	B	灰白	5%	覆土。東濃産。
5	緑釉碗	(16.0)	2.0		J	A	灰	5%	覆土。猿投産か。
6	灰釉瓶	(12.0)	0.8		G	A	灰白	5%	覆土。猿投産。



第361図 第35号井戸跡・出土遺物

第36号井戸跡(第356図)

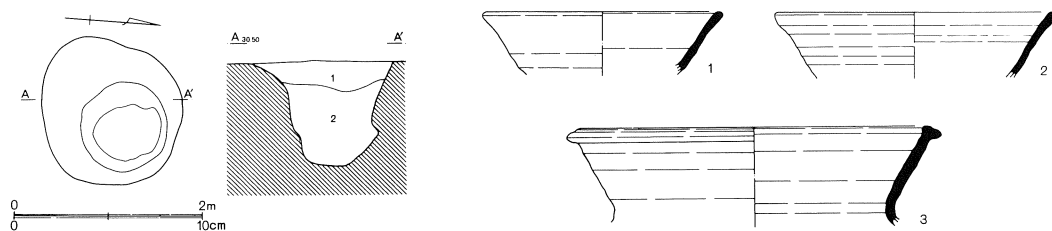
N-14区に位置する。平面形は楕円形、断面形はロート状を呈し、規模は径1.70×1.50m、深さ1.35mを測る。覆土は第1層が暗褐色土、2層がロームブロックを少量含む黒灰色土、3層が砂質の強い緑灰色土である。

出土遺物は土師器・須恵器が8点と常滑焼の大甕胴部片2点がある。後者から中世の井戸跡と考えられる。

第37号井戸跡(第362図)

K-12区に位置する。平面形は円形、断面形は筒状を呈し、規模は径1.60m、深さ1.10mを測る。覆土は第1層が焼土粒子を微量含む褐色土、2層が砂質の黒色有機質土である。

出土遺物は土師器甕、小型甕、須恵器坏、蓋、甕、壺が計89点あるが細片が多い。須恵器坏類には酸化焰焼成のものが8点含まれる。稻荷前 XIII~XIV 期頃と推定しておきたい。



第362図 第37号井戸跡・出土遺物

第37号井戸跡出土遺物観察表(第362図)

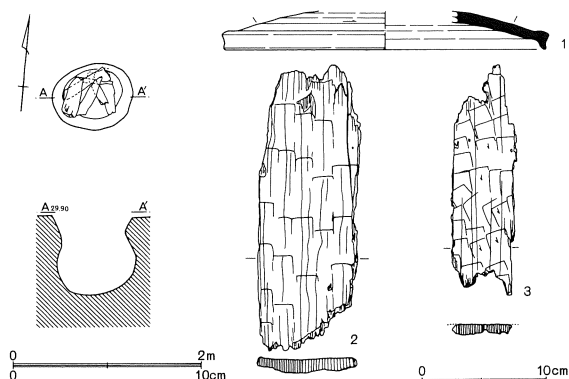
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.4)	3.3		ACE	B	浅黄	10%	覆土。土師質。
2	埴	(14.6)	3.5		ACE	C	淡黄	10%	覆土。土師質。
3	壺	(18.2)	5.2		ABC	A	灰	10%	覆土。

第38号井戸跡(第356図)

K-11区に位置する。平面形は円形を呈し、径1.25m、深さ1.15mを測る。断面形はほぼ筒状を呈する。覆土は2層に分かれ、第1層はロームブロックを多量に含む褐色土で堅く締まっていた。人為的埋土と推定される。第2層はローム粒子を少量含む黒色有機質土である。遺物は検出されず年代は不詳。

第39号井戸跡(第363図)

J-13区に位置する。平面形は楕円形を呈し、径0.85×0.70m、深さ0.90mを測る。断面形は筒状またはロート状を呈するものと推定されるが、側壁は崩落している。底面には板材が6枚重なるように遺存しており、井戸側等の施設が存在したものと推定される。



第363図 第39号井戸跡・出土遺物

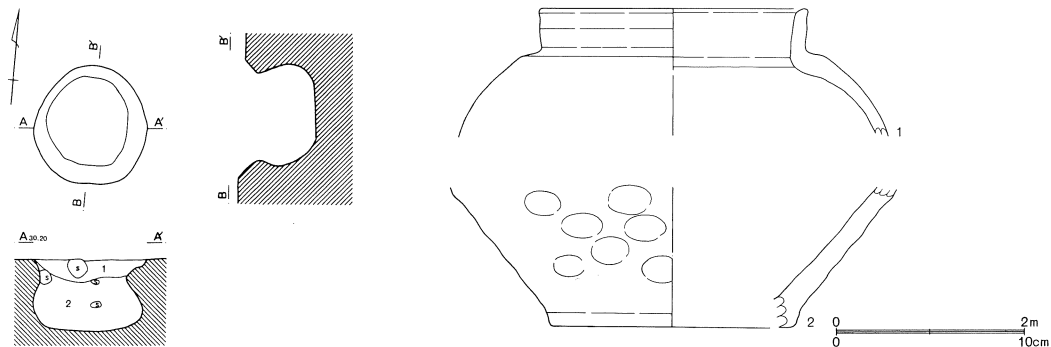
遺物は土師器甕3点、須恵器蓋1点、甕1点が出土したのみで詳細な年代は明らかにできないが、8世紀～9世紀の範疇には納まるものと考えられる。

第363図1は須恵器蓋。推定口径17.0cm。残高2.0cm。胎土に石英、白色針状物質含む。焼成良好で灰白色を呈する。15%残。覆土中層出土。2は板材である。長さ45.2cm、幅16.0cm、厚さ2.1cm。3は長さ41.7cm、幅10.0cm、厚さ1.9cm。腐食が進んで遺存状態は悪い。

第40号井戸跡(第364図)

J-12区に位置する。低地部に位置し上面は削平されている。平面形は円形を呈し、径1.25m、深さ0.75mを測る。覆土は第1層が黒色粘質土で酸化鉄粒子、ローム粒子を多く含む。第2層は礫と粗砂を含む黒色有機質土である。

出土遺物は土釜と鉢の破片が各1点認められた。中世の井戸跡と考えられる。



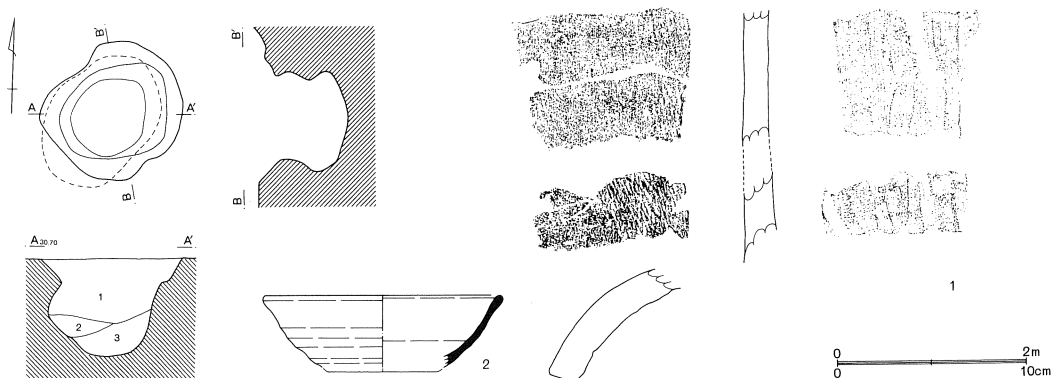
第364図 第40号井戸跡・出土遺物

第364図1は土釜である。推定口径14.0cm、残高6.8cmを測る。胎土に石英、白色粒子、角閃石、片岩を含む。焼成は普通で灰黄色を呈する。15%残。覆土出土。2は鉢である。内面は磨滅が著しい。残高7.5cm、底径13.8cmを測る。石英と片岩を含む。焼成は甘く、灰褐色を呈する。15%残。覆土出土。

第41号井戸跡(第365図)

L-12区に位置し、第108号住居跡を切って構築される。平面形は不整円形を呈し、径1.50m、深さ0.95mを測る。断面形はロート形を呈するものと推定されるが側壁は崩落している。覆土は3層に分かれ、第1層は小礫混じりの暗褐色土で焼土・炭化物・ローム粒子を含む。第2・3層は黒色有機質土で、3層には砂礫が多量に混じる。遺物は土師器甕、壺、須恵器坏、甕と瓦、計10点検出されている。土器の大半は重複住居からの流れ込みと推定され正確な年代は明らかにできない。中世に降る可能性もある。

第365図1は丸瓦。凸面縄叩き痕残る。凹面ナデ。紐造り成形。胎土に石英、白色針状物質含む。焼成は普通で灰褐色を呈する。覆土出土。2は酸化焰焼成の須恵器坏である。推定口径12.5cm、残高4.0cm。胎土に石英、白色針状物質、角閃石を含む。焼成は普通で橙色を呈する。15%残。覆土出土。



第365図 第41号井戸跡・出土遺物

第42号井戸跡(第356図)

N-14・15区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径1.10m、深さ0.80mを測る。断面形は筒状を呈し、底面は丸みをもって窪む。

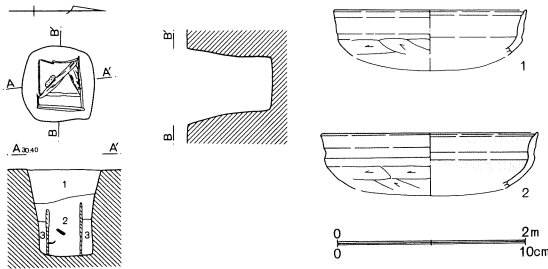
覆土は3層に分かれ、第1層はローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土、第2層は黒色土、第3層は黒色土を少量含む緑灰色土で砂質が強い。

遺物は土師器甕、須恵器坏、甕、計12点検出された。図化できる遺物はないが、土器様相から8～9世紀頃の井戸跡と推定される。

第43号井戸跡(第366図)

0-12区の谷地に位置する。平面形が方形を呈する箱形を呈する井戸跡で規模は一辺0.80m、深さ0.90mを測る。底面には4枚の板材(幅40~50cm、高さ50~60cm)を方形に組み合わせて井戸側を構築している。内部には板材が3枚とヒョウタンと思われる植物遺体が遺存していた。覆土は3層に区分され、第1層はローム粒子を少量含む暗茶褐色土、第2層は黒色有機質土、第3層はロームブロックを多量に含む黄褐色土で井戸側の裏込め土と考えられる。

出土遺物は土師器坏5点と甕2点に過ぎないが時期的にはまとまっている。稻荷前IV~V期頃と推定される。



第366図 第43号井戸跡・出土遺物

第366図1は土師器坏。推定口径10.2cm、残高2.4cm。胎土に石英、白色粒子含む。焼成良好でにぶい橙色を呈する。15%残。覆土出土。赤彩の有無は不明。2は土師器坏。推定口径11.4cm、残高2.9cm。胎土に石英、白色粒子含む。焼成良好でにぶい橙色を呈する。15%残。覆土出土。

4. 溝跡

第III群には12条の溝跡が検出された。II群から延びる18号溝跡と関連するものと、III群南東部にまとまる一群に大別される。出土遺物や覆土から何れも中世以降の溝と推定され、古代に遡るものは確認されなかった。

第20・22・23・25号溝跡は18号溝跡と一体のものと考えられる。H-13区付近で北側に延びる20号溝、北東に広がる22号溝、東に延びる23号溝、南東に延びる25号溝にそれぞれ分岐する。覆土は18号溝と近似する。

規模は第20号溝が幅70~120cm、深さ20cm。第22号溝は最大幅180cm、深さ10~25cm。第23号溝は最大幅150cm、深さ10~20cm。第25号溝は幅70~120cm、深さ10~20cmを測る。出土遺物は少なく22号溝から土師器甕と内耳鍋の破片が、第25号溝から土師器壺が検出された。溝の機能した年代としては中・近世と推定される。

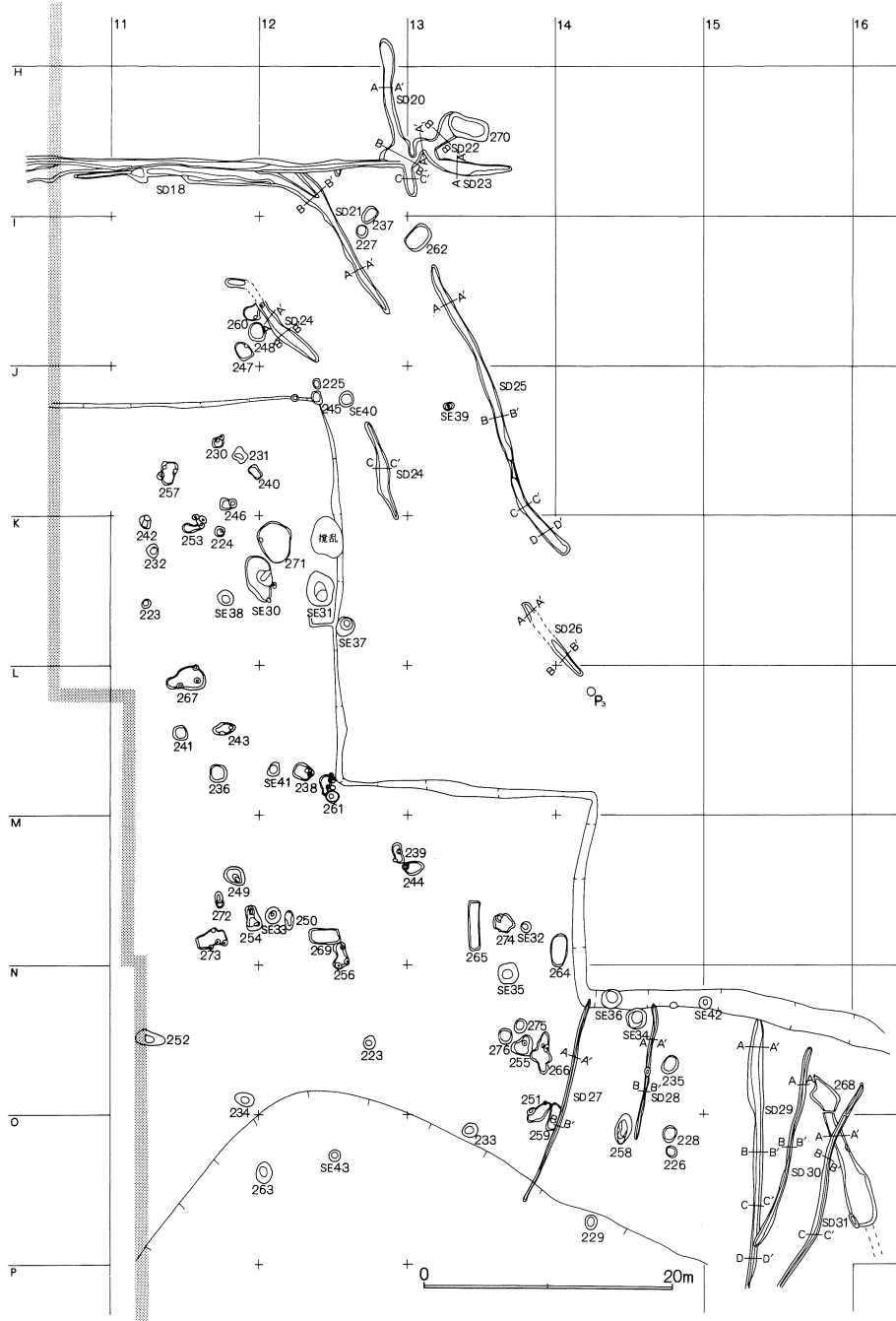
第21号溝跡はH-10区から2条に分かれ、第18号溝跡と重なりながら東流し、H-12区で1条にまとまり南東に向かっている。18号溝跡との新旧関係は捉えられていないが、時期的にもほぼ一致し一体のものとして捉えた方が良いかもしれない。幅は西端付近で120cm、東端で80cm前後、深さ20cm以下である。出土遺物は47点検出された。磨滅した須恵器が主体を占めるが、中世の播鉢(第369図1)や深皿片、近世の染め付け碗が含まれている。中・近世の水路であろう。

第24号溝跡は第21号溝跡の西側に平行するように南東流するが、底面深度が一定しないため途切れる箇所がある。幅100cm、深さ30cmを測る。覆土はローム粒子を含み、褐色から黒褐色土で構成さ

れる。出土遺物は44点検出されている。土師器・須恵器が主体を占めるが、常滑甕、在地系甕、鉢、内耳鍋の破片が含まれる。中・近世の溝であろう。

第26号溝はK-13～L-14区に位置し、長さ7.5m程確認された。21号溝跡の南東延長線上にあることから同一溝と推定される。幅70cm、深さ10cm前後と規模は小さい。出土遺物はない。

第27号溝跡はN・O-13・14区に位置する。南北に延びる溝で長さ約17mが確認された。幅30～40



第367図 第三群溝跡・土壌配置図

cm、深さ20cmを測る。覆土はローム粒子を含む暗褐色土で構成される。遺物は16点検出されている。土師器・須恵器類であるが全て細片で時期比定の根拠とするには弱い。

第28号溝跡は27号溝の東約6mをほぼ平行して延びる。幅30cm、深さ10cm前後と小規模である。覆土は27号溝と近似する。出土遺物はない。

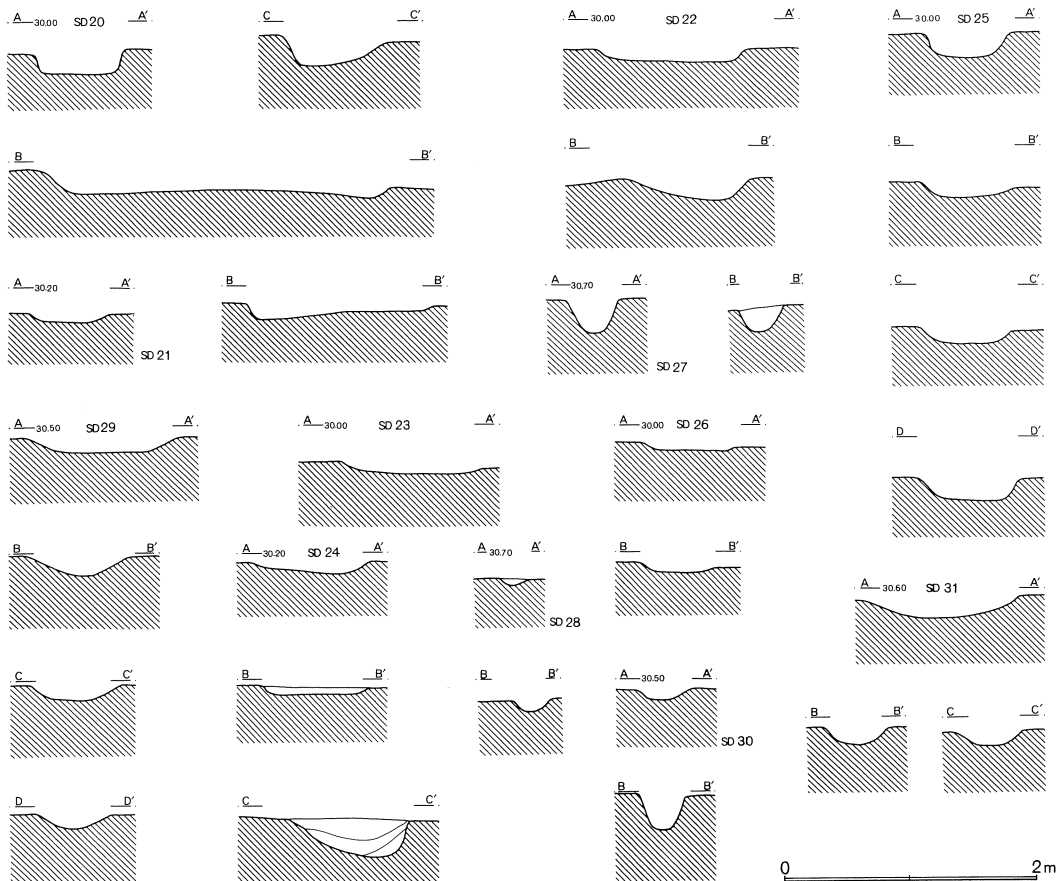
第29号溝跡はN～P-15区に位置しほぼ南北に延びる。最大幅120cm、深さ20cmを測る。

第30号溝は29号溝から分岐している。幅30cm、深さ30cmを測る。両溝とも出土遺物がなく時期不明である。

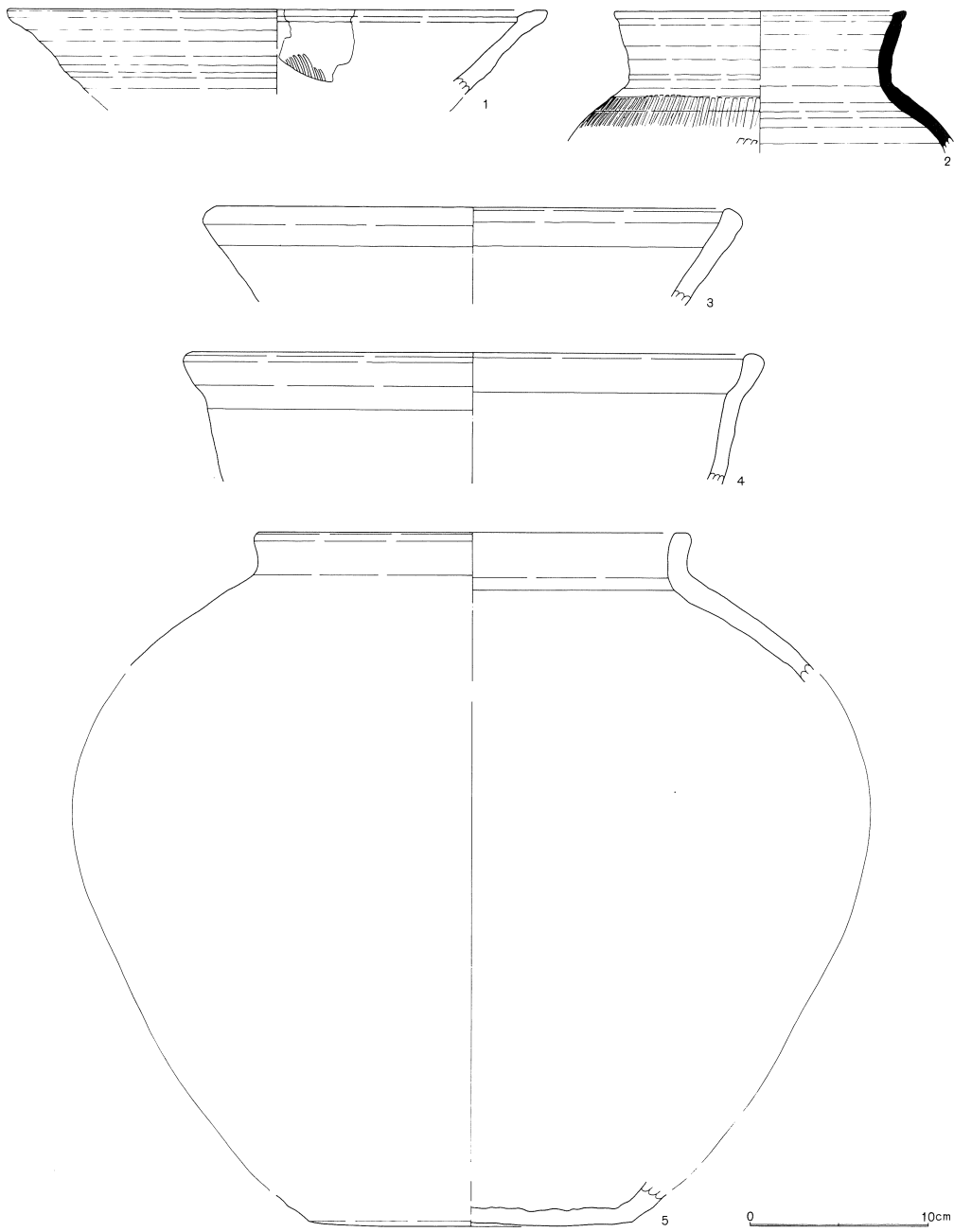
第31号溝跡も29号溝から分岐し、北端で第32号溝と切り合うが新旧関係は不明である。幅50cm前後、深さ10cm程である。時期は不明。

第Ⅲ群溝跡出土遺物(第369・370図)

第369図1は播鉢である。推定口径約30cmを測り、胎土は灰白色を呈し精選されている。全面に茶褐色の釉が掛かり内面に播り目を残す。16世紀代の瀬戸の大窯製品と考えられる。第21号溝から出土した。2は須恵器壺である。推定口径16.2cmを測り、胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含



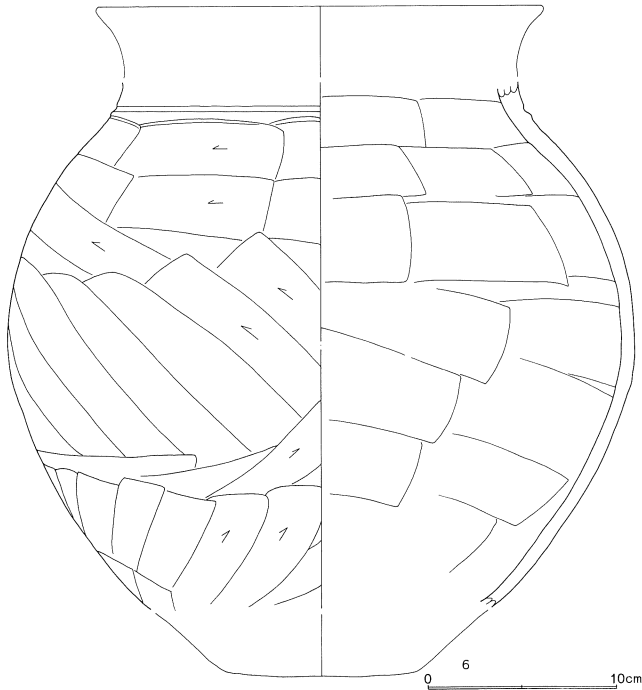
第368図 第Ⅲ群溝跡土層図



第369図 第Ⅲ群溝跡出土遺物(1)

む。灰色を呈し、焼成は普通。20%残。第21号溝から出土した。3は在地系の鉢である。推定口径28.8cmを測る。胎土に石英と雲母含む。灰白色を呈し焼成は良好である。5%残。第24号溝から出土した。

4は内耳鍋である。推定口径31.4cm。胎土に石英・白色粒子、角閃石を含む。焼成は普通で褐灰色を呈する。5%残。第24号溝出土。



第370図 第Ⅲ群溝跡出土遺物(2)

5は在地系の甕である。口縁部と底部の破片からなり、胴部を欠いている。推定口径は24cm程を測り、底部は平底となる。胎土に石英と白色粒子を含む。焼成は甘く、鈍い橙色を呈する。第24号溝から出土した。中世遺物と考えられる。

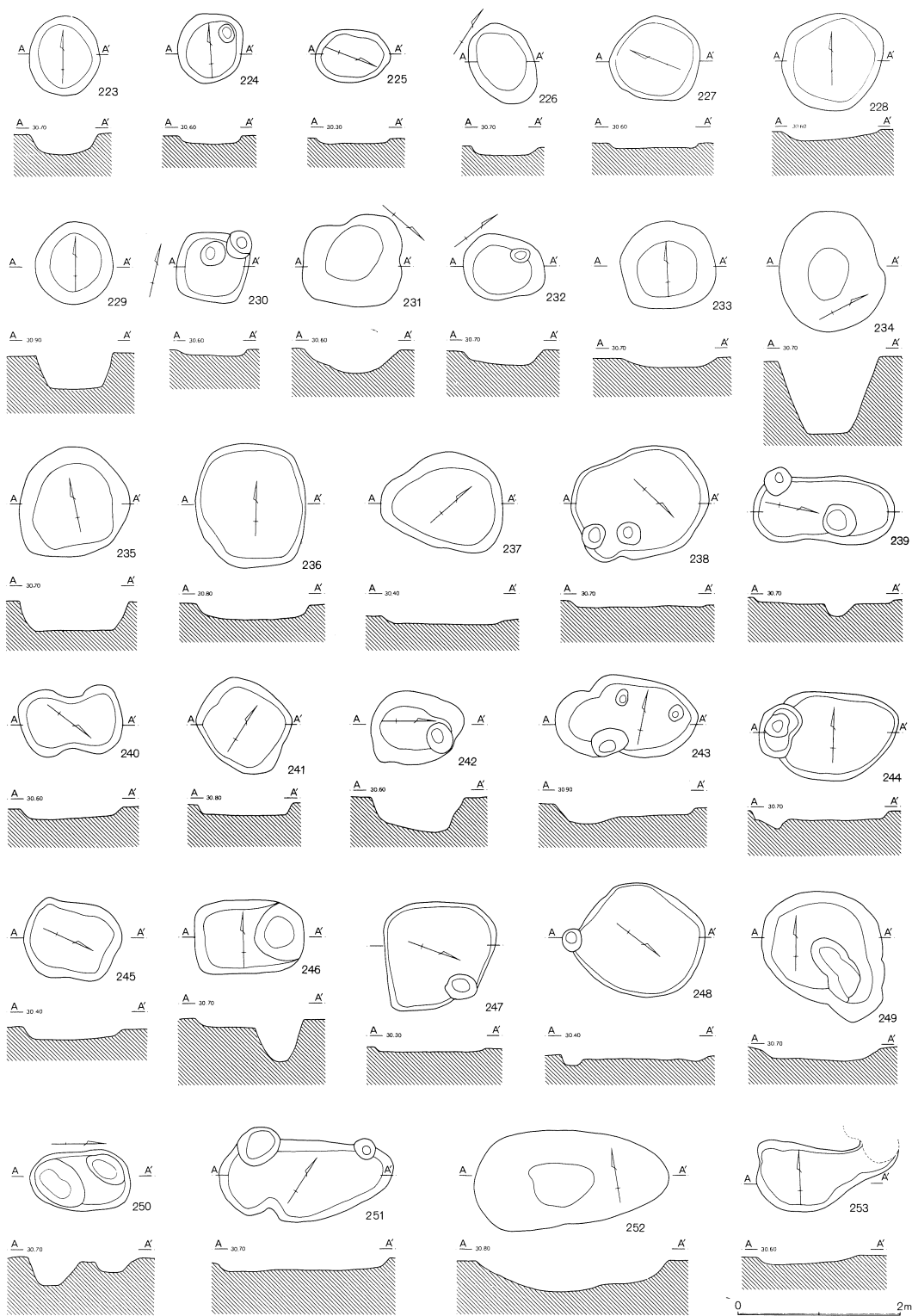
第370図6は土師器壺である。口縁部と底部を欠いている。残高27.7cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含み、焼成は良好である。橙色を呈する。25%残。第25号溝のH-13グリッドから出土した。

5. 土壌

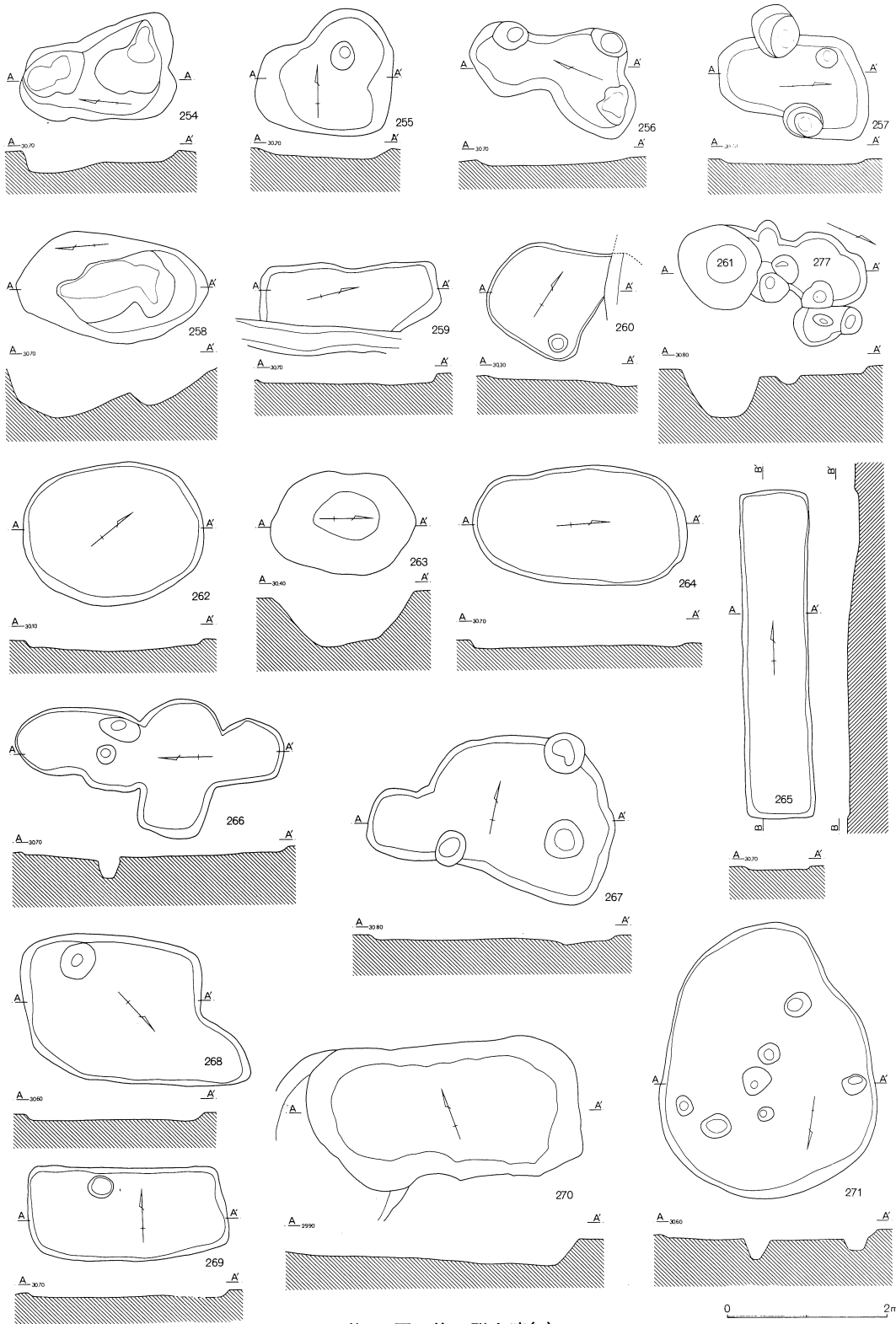
第Ⅲ群では55基の土壌が検出された。遺構配置図は第367図に、規模等の詳細は第3表に示し、個別説明は省略した。出土遺物は土師器・須恵器片を出土する土壌が多いが、中世に降る土壌もかなり含まれるものと推定される。

第Ⅲ群土壌出土遺物観察表(第373図)

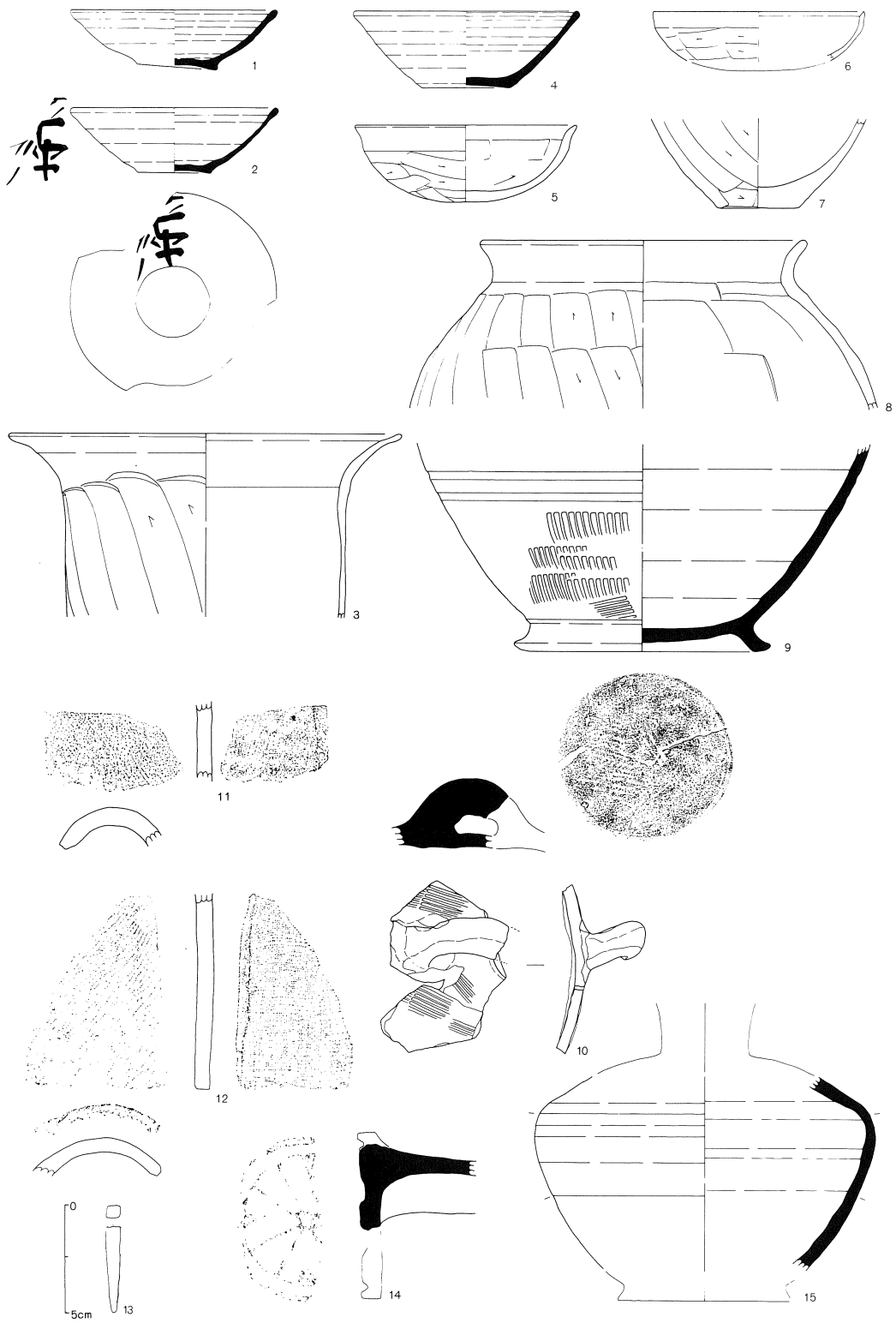
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	12.6	3.7	5.0	A B C E	D	にぶい橙	60%	No1. SK272覆土。土師質に近い焼き締り。	
2	坏	12.6	4.0	4.5	A B C	C	灰黄	75%	SK272覆土。体部外面に不明墨書あり。	
3	甕	(24.0)	11.3		A B E	B	橙	50%	No1. SK237覆土。口唇部内面凹む。	
4	坏	(13.6)	4.7		A C	C	浅黄橙	35%	SK264覆土。	
5	坏	(13.6)	4.7		A B	A	橙	25%	SK270覆土。体部内面へラナデ。	
6	坏	(13.0)	3.0		A B	A	橙	20%	SK244覆土。	
7	甕		5.4	5.0	B C E	A	にぶい橙	60%	SK244覆土。底部砂底。	
8	壺	(19.8)	10.4		A C E	A	褐灰	20%	SK270覆土。内面へラナデ(平滑)。	
9	壺		12.7	13.8	A B C	A	灰	40%	SK270覆土。外底面にも叩き痕残す。	
10	壺				A B C	A	灰		SK270覆土。胴部に環状把手が付される。	
11	丸瓦				A B C	A	灰		SK265覆土。凸面叩き。凹面ケズリ及びナデ。	
12	丸瓦				A B C	A	灰白		SK265覆土。凸面叩き。凹面布目8×9本/cm ² 。	
14	軒丸瓦				A B C	A	灰		SK265覆土。瓦当面径10.0cmを測る小型瓦。	
15	瓶		11.9		A C	A	灰	25%	SK270覆土。胴部下位格子叩き。	
13	鉄釘	残長3.9cm。								SK258覆土。



第371图 第Ⅲ群土坑(1)



第372图 第三群土壤(2)



第373图 第Ⅲ群土壙出土遺物

第3表 第三群土坑一覽表

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)								備考(出土遺物・重複関係等)		
				6	7	8	9	10	11	中世	近世			
223		N-12	100×88×24											遺物なし
224	230	K-11	84×80×40											遺物なし
225	237	J-12	92×64×10				~~~~~							土師環・甕
226	285	O-14	102×81×12											遺物なし
227	269	I-12	110×100×8											土師環・甕
228	D区211	O-14	120×110×13			~~~~~	~~~~~							土師環・甕 須恵甕
229	290	O-14	101×95×49											土師環・甕
230	233	J-11	86×86×10											遺物なし
231	232	J-11	124×100×33											遺物なし
232		K-11	100×82×20											遺物なし
233	265	O-13	118×106×17					~~~~~						土師環・甕 須恵甕
234	235	N-11	148×122×97				~~~~~	~~~~~						土師環・甕 須恵環・蓋・甕 灰釉環
235	282	N-14	134×132×36			~~~~~	~~~~~							土師甕 須恵甕
236	261	L-11	156×136×23											遺物なし
237	268	H・I-12	152×116×14		~~~~~									土師甕
238	248	L-12	170×132×14						~~~~~					土師環・埴 須恵甕
239	257	M-12	172×78×8			~~~~~	~~~~~							土師環・甕
240	241	J-11・12	130×62×13											遺物なし
241	251	L-11	114×104×16				~~~~~							土師甕 須恵環・甕
242		J-11	115×92×42											遺物なし
243	250	L-11	176×94×23				~~~~~							土師環・甕 須恵甕
244	258	M-13	122×108×13			~~~~~	~~~~~							土師環・甕 須恵環 縄文土器
245	236	J-12	116×94×24			~~~~~	~~~~~							土師環・甕
246	231	J-11	134×92×10											遺物なし
247	263	I-11	138×130×9				~~~~~							土師環・甕 須恵環・甕
248	264	I-11・12	148×136×10				~~~~~			~~~~~				土師環・甕
249	254	M-11	170×132×30				~~~~~							土師環・甕 須恵環・蓋・甕・瓶
250		M-11	120×78×34											遺物なし
251	284	N・O-13	214×100×19						~~~~~					土師甕 須恵環
252	226	N-11	242×115×50			~~~~~	~~~~~							土師甕
253	229	K-11	136×58×8											遺物なし
254	252	M-11・12	194×96×38											遺物なし
255	290	N-13	190×158×14				~~~~~		~~~~~					土師環・甕 灰釉埴
256	256	M・N-12	198×66×11				~~~~~							土師環・甕 須恵甕
257	234	J-11	188×74×9											遺物なし
258	287	N・O-14	240×131×59								~~~~~			鉄器
259	286	N・O-13・14	222×74×12											土師環・甕 灰釉瓶
260	265	I-11	140×130×7						~~~~~					土師環・甕 須恵甕
261	247	L-12	110×100×61						~~~~~					土師環・甕 須恵環・甕 緑釉環 瓦
262	266	I-12・13	226×176×28			~~~~~	~~~~~							土師甕 須恵甕
263	289	O-11・12	180×126×64			~~~~~	~~~~~							土師環・甕 須恵環・甕 丸瓦
264	262	M-13・14	268×148×23			~~~~~	~~~~~							土師環・甕 須恵環
265	289	M-13	409×82×9			~~~~~	~~~~~							土師環・甕 須恵環・甕 瓦
266	288	N-13	338×84×14			~~~~~	~~~~~							土師環・甕 須恵環・甕
267	249	L-11	310×170×12									~~~~~		土師甕・甕 須恵環・甕
268	283	N-15	222×182×20									~~~~~		土師環 須恵環・甕

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)								備考(出土遺物・重複関係等)		
				6	7	8	9	10	11	中世	近世			
269	255	M-12	248×116× 9			~~~~~								土師環・甕 須恵環
270	281	H-13	340×158× 48			~~~~~								土師環・壺 須恵環・甕・壺
271	240	K-11・12	344×270× 15								~~~~~			土師甕 須恵環・甕
272	253	M-11	134× 80× 19				~~~~~							土師環・甕 須恵環・甕 SJ112内
273	259	M-11	252×112× 14			~~~~~								土師環・甕 須恵環 SJ112内
274	260	M-13	172×148× 12			~~~~~								土師甕 須恵甕 SJ115内
275	212	N-13	83× 74× 13											遺物なし SJ118
276	263	N-13	112× 80× 17			~~~~~								土師環・甕 須恵環・甕 SJ116
277		L-12	190× 96× 10											遺物なし

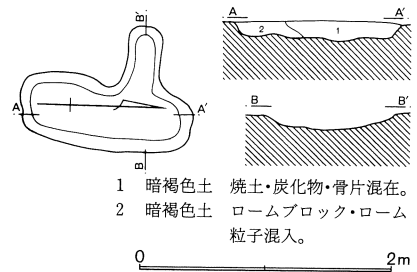
6. 火葬墓(S T)

第1号火葬墓

K-11区に位置する。「T」字形を呈し、本体の楕円形土壇(長径1.40m、短径0.54m、深さ0.18m)に、長さ0.50mの焚口または煙道が付される形態である。

覆土は大きく2層に分かれ、第1層は焼土・炭化物・骨片が混じった暗褐色土で構成される。

出土遺物は検出されず、年代は不明であるが中世の所産と推定される。



第374図 第1号火葬墓(L=30.60m)

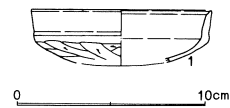
7. その他

(1) ピット

本群では208基の単独ピットが存在する。J～M-11・12区にかけて多数のピットが群在する。おそらくかなりのものは古代、あるいは中世の建物を構成する柱穴と推定されるが、現状では柱並びがうまく揃わないため建物から除外したものである。

出土遺物は比較的少なく図示し得たのは土師器環1点に留まる(第375図1)。

第375図1は土師器環である。推定口径9.5cm、残存高2.8cmを測る。胎土に石英・白色粒子を含み焼成は良好である。淡橙色を呈する。25%残。L-14区P₁₃の覆土から出土した。



第375図 第Ⅲ群ピット出土遺物

(2) グリッド

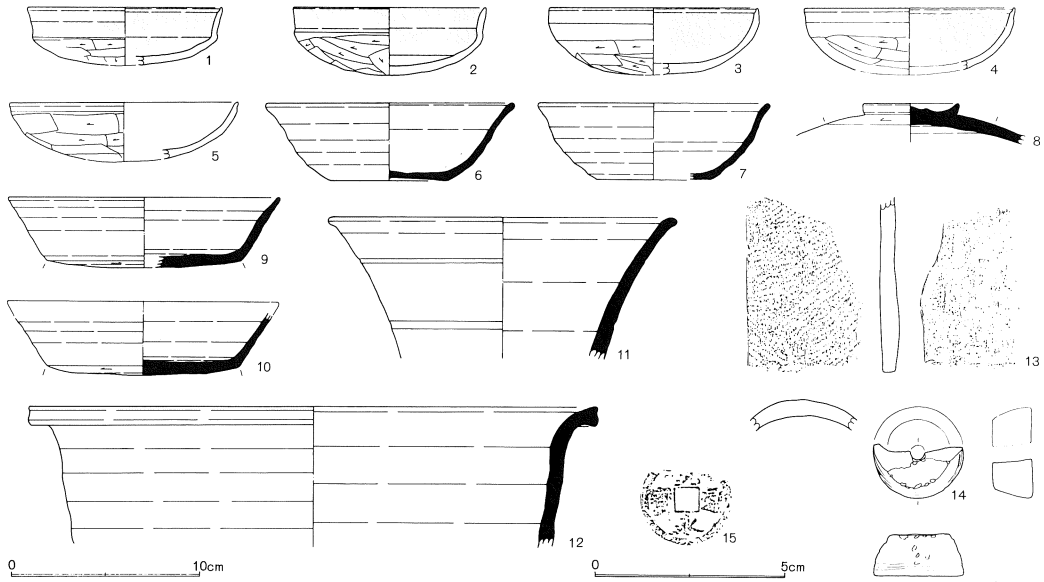
本群で遺構外から出土した遺物は比較的多い。G・H-13区周辺の谷地形から出土したものが目立

つ。ここでは一応15点を図化した(第376図)。

第376図13は小型の軒丸瓦である。凸面平行叩き、凹面撫でを施す。須恵質である。

14は石製紡錘車で凡そ半分を欠く。孔径0.8cm、重量40g。

15は寛永通寶で約1/3を欠く。径2.5cm。K-10区出土。



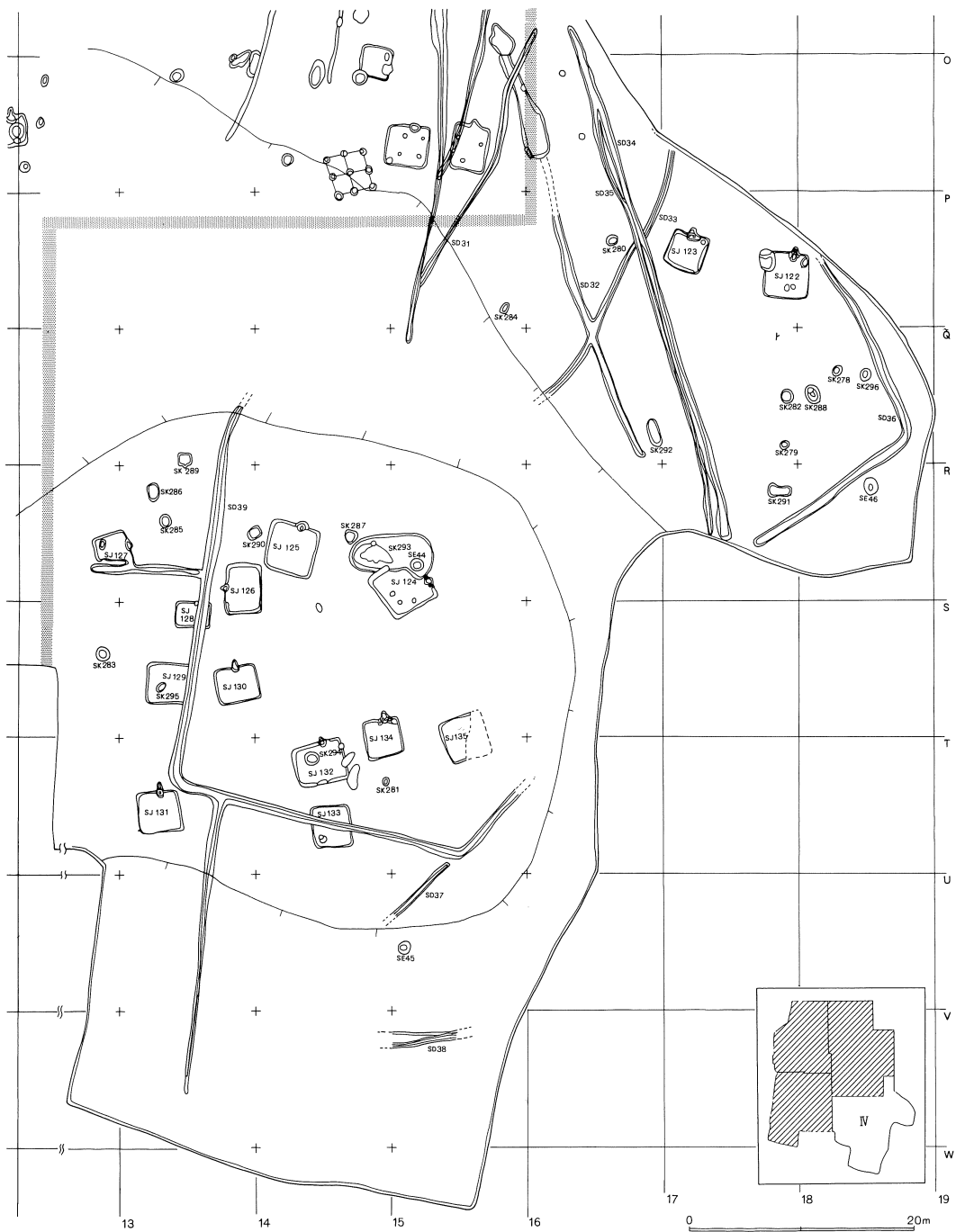
第376図 第三群グリッド出土遺物

第三群グリッド出土遺物観察表(第376図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	10.2	3.1		B	B	にぶい橙	15%	N-12Grid。	
2	坏	10.2	3.6		B C E	A	橙	75%	N-11Grid。	
3	坏	(11.0)	3.5		A B	A	にぶい橙	25%	N-12Grid。	
4	坏	(11.0)	3.3		A B E	A	橙	20%	N-12Grid。	
5	坏	(12.0)	2.9		A B C E	B	橙	25%	N-12Grid。器面風化。	
6	坏	(13.0)	4.1	6.2	A B C	C	褐灰	40%	J-11Grid確認面。	
7	坏	(12.0)	4.0	(6.0)	A B C	B	灰	25%	J-11Grid確認面。	
8	蓋		2.1		A B C	A	灰	60%	H-13Grid。	
9	坏	(14.2)	3.7	(10.3)	A B C	A	灰	15%	H-13Grid。	
10	坏		3.2	10.2	A B C	A	灰	70%	H-13Grid。	
11	長頸瓶	(17.8)	7.5		A C	A	灰	20%	G-14Grid確認面。	
12	鉢	(30.0)	7.4		A B C	C	灰黄	5%	Q-14Grid。	
13	丸瓦				A B C	A	灰		G-14Grid確認面。凸面平行叩き。	
14	紡錘車	最大径4.8cm。高さ2.2cm。重量40g。								H-13Grid。

VII 第IV群の遺構と遺物

第IV群はA区の南東部に位置し谷を隔てて北群と南群に分かれる。検出された遺構は住居跡16軒、

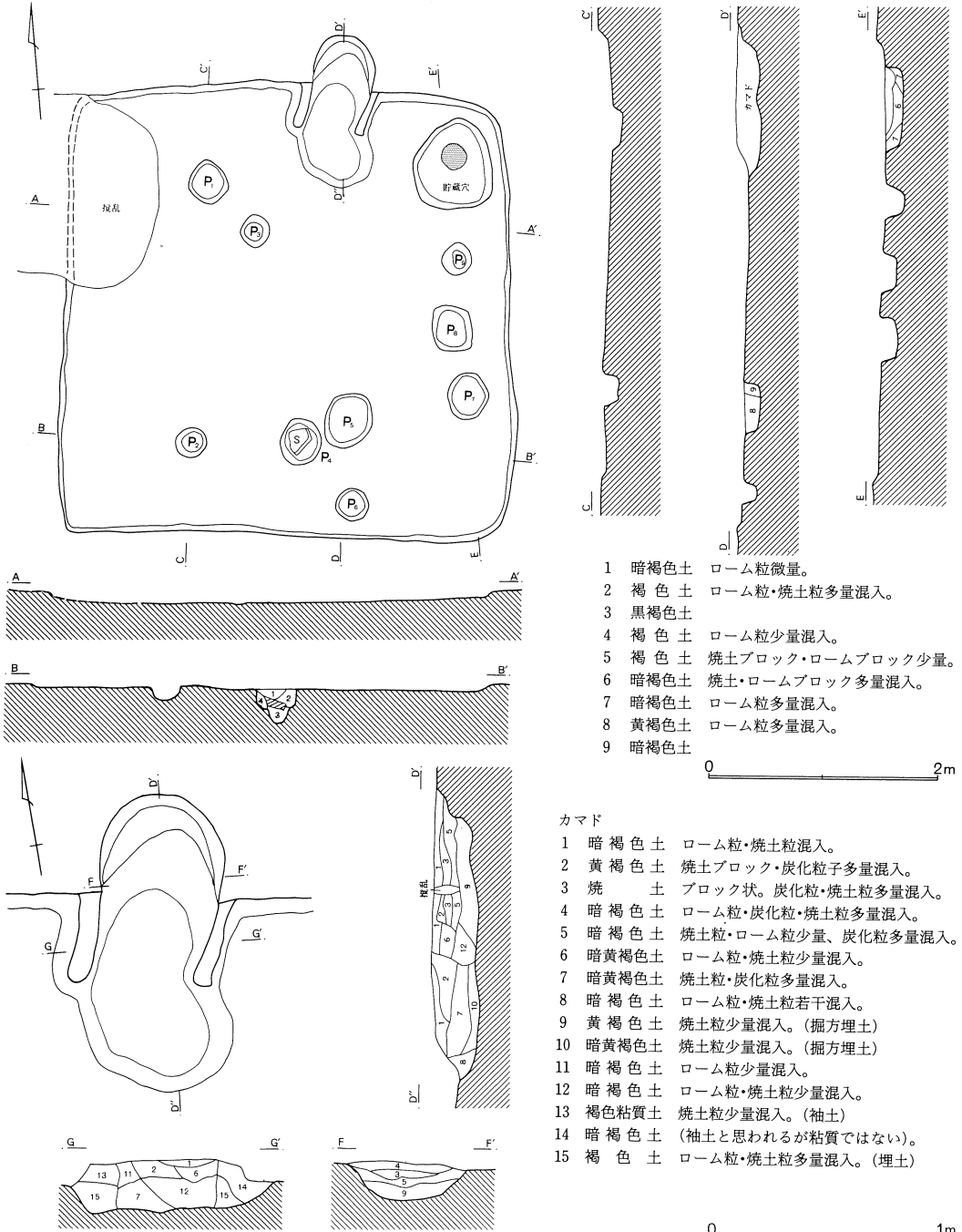


第377図 第IV群遺構配置図

井戸跡 3 基、土壇 19 基、溝跡 8 条がある。上面の削平が激しく遺存状態は悪い。

1. 住居跡

第122号住居跡(第378図)



第378図 第122号住居跡・カマド(L=30.60m)

P-17・18区に位置する。西壁部を倒木痕の攪乱を受けている。形態は方形を呈し、一辺3.88m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-5°-Eを示す。

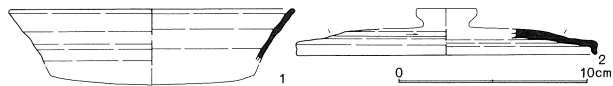
床面はほぼ平坦で堅い。覆土は褐色土または暗褐色土で構成されるが、覆土が浅く埋没状況の詳細は不明である。

カマドは北壁に設けられ、燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれる。第9・10層は掘方である。袖は褐色から暗褐色の粘質土で構築されるが、遺存状況はあまり良くない。貯蔵穴はカマド東側のコーナーに設置される。覆土上層と底面に焼土が多量に堆積していた。

ピットは9本検出された。P₂・P₃・P₇・P₉が支柱穴に相当しよう。P₄覆土中層には片岩が敷かれていた。住居に伴うものではなからう。

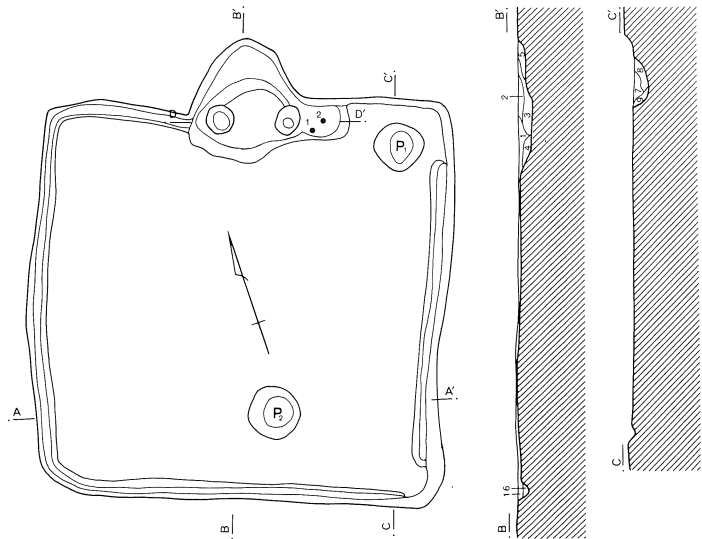
出土遺物は少なく31点検出されたに留まる。小片が殆どであるが、土師器杯、甕、小型甕、須恵器杯、蓋の各器種がある。

時期はあまり明確にはできないが、稲荷前VI期頃と考えられる。



第379図 第122号住居跡出土遺物

第379図1は須恵器杯である。推定口径15.0cm、残高2.9cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は普通で灰白色。10%残。カマド内覆土出土。2は天井部の低平な須恵器蓋である。推定口径16.0cm、残高1.4cmを測る。胎土に石英・白色針状物質を含む。焼成良好で灰色。5%残。カマド内覆土出土。



第123号住居跡(第380図)

P-17区に位置する。形態は略方形を呈し、規模は長軸3.34m、短軸3.10m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-20°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅い。覆土が浅く埋没状況は明らかにできない。

- | | | | |
|--------|----------------------|--------|---------------|
| 1 褐色土 | ローム粒子多量混入。 | 6 黄褐色土 | ローム粒子混入。 |
| 2 明褐色土 | 焼土粒子・粘土少量混入。 | 7 褐色土 | ローム粒子・炭化粒子少量。 |
| 3 褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子多量混入。 | 8 明褐色土 | ローム粒子・焼土粒子少量。 |
| 4 褐色土 | ロームブロック混入。 | 9 暗褐色土 | ロームブロック混入。 |
| 5 黄褐色土 | 焼土粒子少量混入。 | | |

第380図 第123号住居跡(L=30.60m)

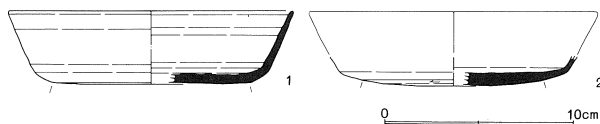
カマドは北壁に設置され、燃烧部は壁を一部切り込んで構築されている。底面の掘り込みは浅く、袖も流出して残存しない等、遺存状況は悪く詳細は不明とせざるを得ない。

ピットは2本検出されているが、伴うか否か明らかにできなかった。壁溝はカマド東側と南東コーナーを除き巡っている。

出土遺物は少なく、須恵器坏8点と土師器甕1点が検出されたのみである。時期も明確にできないが、図示した遺物はカマド掘方と思われる位置から出土した。一応稻荷前VI期頃と推定される。

第381図1は須恵器坏である。推定口径15.1cm、器高3.9cm。底径10.4cmを測る。胎土に石英・白色針状物質を含む。焼成は普通で浅黄橙色を呈する。25%残。註記No.7。カマド内覆土出土。赤焼け風で口唇部が磨滅している。底部は全面回転ヘラ削り。

2は須恵器坏である。残高1.5cm、底径12.1cmを測る。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は良好で灰色を呈する。45%残。No.8。カマド内覆土出土。底部丸底を呈し回転ヘラ削り調整されるが、体部との屈曲部までは及ばない。ヘラ削り径は9.8cm程である。



第381図 第123号住居跡出土遺物

第124号住居跡(第382図)

R・S-14・15区に位置し、北壁側は第293号土壌の攪乱を受けている。また第44号井戸跡とも重複するが直接の切り合いがないため新旧は不明である。平面形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸4.32m、短軸4.28m、深さ0.17mを測る。主軸方位はN-62°-Eを示す。

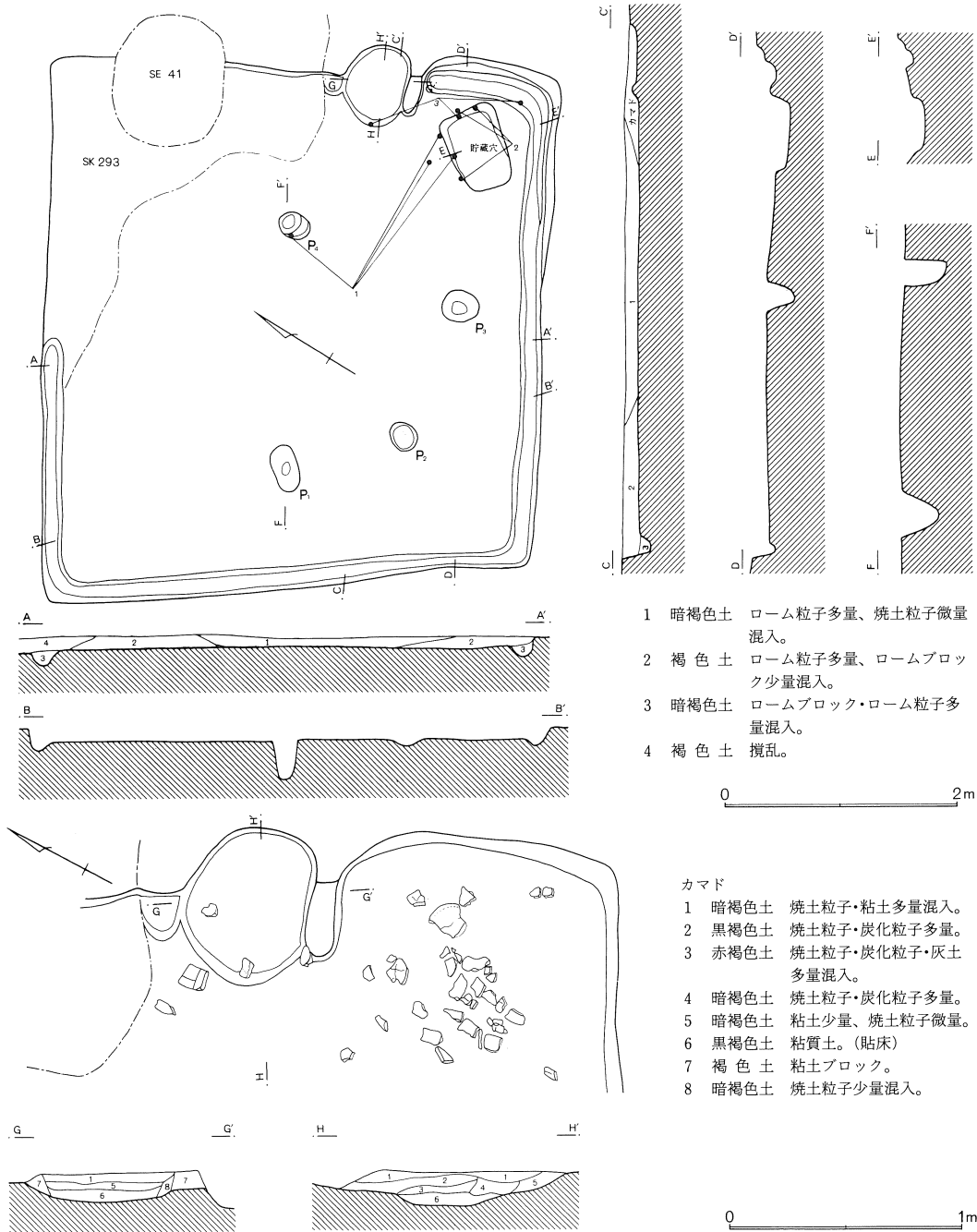
床面は平坦で全体に堅く締まっている。覆土は2層に大きく分かれ、第1層にはローム粒子の混入が目立つ。

カマドは東壁に設けられ、燃烧部は壁を一部切り込んで構築される。底面は皿状に凹み、第6層上面が火床面に相当する。袖は褐色粘土を積み上げて構築されるが、特に向かって左側のそれは遺存状態が悪い。

貯蔵穴はカマド南側のコーナーに位置し、住居主軸に対してやや傾いている。径70×50cmの長方形を呈し、約15cmの深さを有する。ピットは4本検出され、P₁・P₄が主柱穴に相当するものと考えられる。壁溝は遺存部分では全周する。

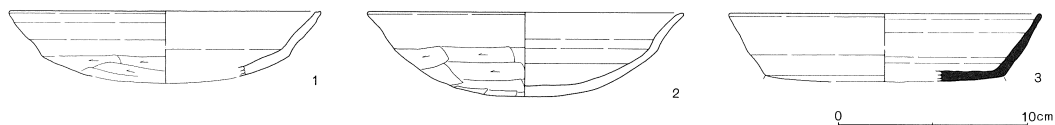
出土遺物は49点検出された。殆どは土師器甕で占められ、土師器坏、皿、須恵器坏、甕瓶が少量含まれる。須恵器瓶は東海産と推定される。遺物はカマドから貯蔵穴周辺から出土している。稻荷前VI期に比定される。

第383図1は土師器皿である。推定口径16.4cm、残高3.4cmを測る。胎土に石英・白色粒子・角閃石を含む。焼成良好で橙色を呈する。20%残。No.5・15・17・20。貯蔵穴内出土。2は土師器皿である。口径16.6cm、器高4.5cmを測る。胎土は1と同様で焼成は普通。橙色を呈する。75%残。No.11・12・21。覆土出土。



第382図 第124号住居跡・カマド(L=30.80m)

3は須恵器坏である。推定口径16.4cm、器高3.6cm、推定底径12.5cmを測る。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成はやや甘く浅黄橙色を呈する。20%残。No.9・14。貯蔵穴内、及び覆土から出土した。底部全面回転ヘラ削りと思われるが磨滅しており不明瞭。



第383図 第124号住居跡出土遺物

第125号住居跡(第384図)

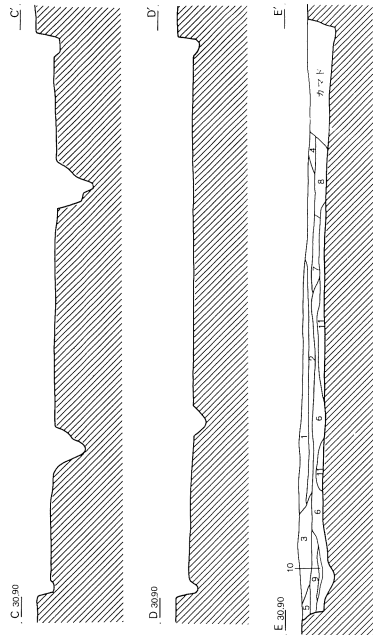
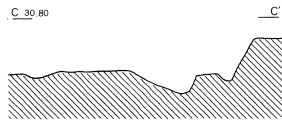
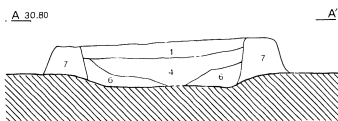
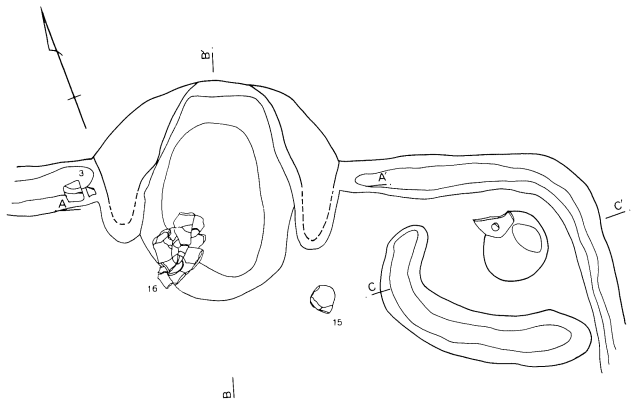
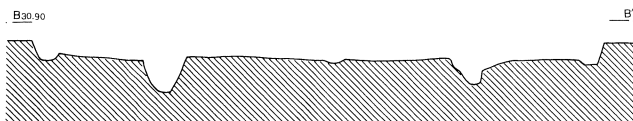
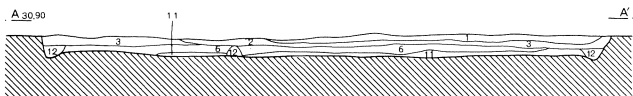
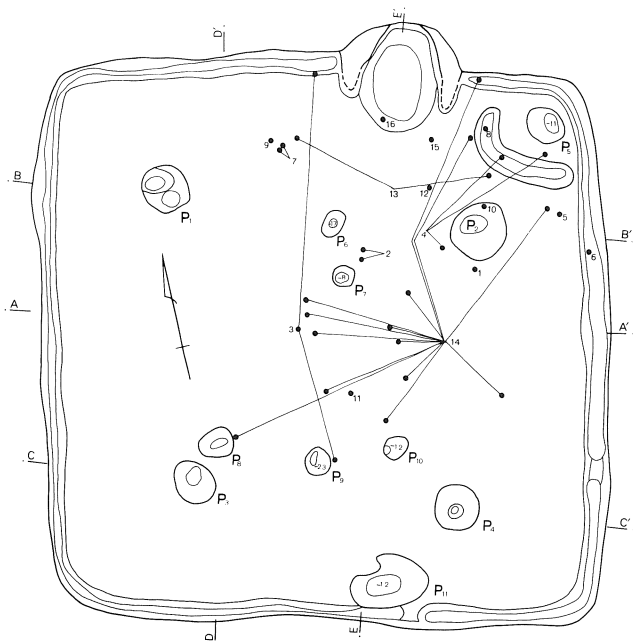
R-14区に位置する。第IV群の中では最も遺存状態の良い住居跡である。平面形態は整った方形を呈し、規模は長軸4.52m、短軸4.44m、深さ0.20mを測る。主軸方位はN-13°-Eを示す。

床面は平坦で全体的に堅く踏み締められていた。覆土は細かく分層されるが、全て自然堆積とは思われない。カマドは北壁に設けられ、燃焼部周囲と袖にかけては黄褐色の粘質土を張り巡らせていた(第7層)。燃焼部底面は浅く皿状に掘り込まれ、壁外への掘り込みは少ない。ピットは11本検出された。P₁~P₄が主柱穴と考えられる。P₅は北東コーナーに位置し半月形の浅い溝が周囲を取り囲んでいた。貯蔵穴としても良いかもしれない。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は43点検出され、土師器坏、埴、皿、甕、小型甕、須恵器坏、蓋、瓶、壺がある。須恵器坏は口径15~17cm代と大型で底部は全面回転ヘラ削りが施される。全体に器肉が薄手で均質な点も特徴である。須恵器坏は図示以外にもう1点あるが、やはり大型坏の底部片で中央部が厚く周辺に向かって厚みを減じるものである。土師器坏類は図示したものがほぼ全てで、北武蔵系と考えられる坏も含まれる(第385図8・10)。しかし、比企型坏の系譜を引く小振りの坏は破片中にも見いだせない。16の甕はカマド火床面と思われる位置から出土した。鳩山窯跡群第I期とされる土器群にやや先行する可能性があるだろうか。稲荷前V期後半としておきたい。

第125号住居跡出土遺物観察表(第385図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	蓋	(19.0)	1.85		ABC	A	灰	15%	№30。覆土。
2	坏	(15.0)	3.1	(10.6)	ABC	A	灰	30%	№21, 72。覆土。
3	坏	(16.4)	3.9	(12.0)	ABC	B	灰	40%	№6, 51, 73。覆土。
4	坏	(17.4)	3.7	(13.6)	ABC	B	灰白	20%	№24, 28, 35。覆土。
5	広口壺	(20.0)	4.0		ABC	B	灰白	10%	№61。覆土。東海産か。
6	瓶	(10.4)	2.4		GJ	A	灰白	10%	№32。覆土。
7	坏	12.2	3.0		ABC	A	橙	75%	№46, 48。覆土下層。
8	坏	(11.4)	3.0		ABE	B	にぶい橙	25%	№26。覆土。北武蔵系。
9	坏	(12.0)	2.8		AB	B	暗褐	10%	№45。覆土。無彩。
10	坏	(12.0)	3.1		ABE	B	にぶい黄橙	15%	№25。覆土。北武蔵系。
11	皿	(17.0)	2.7		AB	B	にぶい黄橙	10%	№16。覆土。
12	埴	(16.2)	3.5		BC	A	にぶい赤褐	10%	№67。覆土下層。
13	甕	(23.0)	11.1		ABE	A	橙	40%	№64, 49。床面。
14	甕		24.0		ADE	A	橙	35%	№2, 10~13, 15, 17~20, 29, 33, 37, 56。覆土。
15	甕		5.4	5.4	AB	A	にぶい黄橙	80%	№63。覆土。
16	甕	(24.6)	28.4		ABD	C	橙	55%	№53。カマド内火床面。



- 1 黒褐色土 ローム粒子少量混入。
- 2 黒褐色土 焼土ブロック・ロームブロック混入。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量混入。
- 4 褐色土 焼土粒子・炭化粒子・粘土多量混入。
- 5 黒褐色土 ロームブロック少量混入。
- 6 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量混入。
- 7 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子混入。
- 8 褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量混入。
- 9 褐色土 ローム粒子少量混入。
- 10 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量混入。
- 11 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒少量含。
- 12 暗褐色土 ロームブロック多量混入。

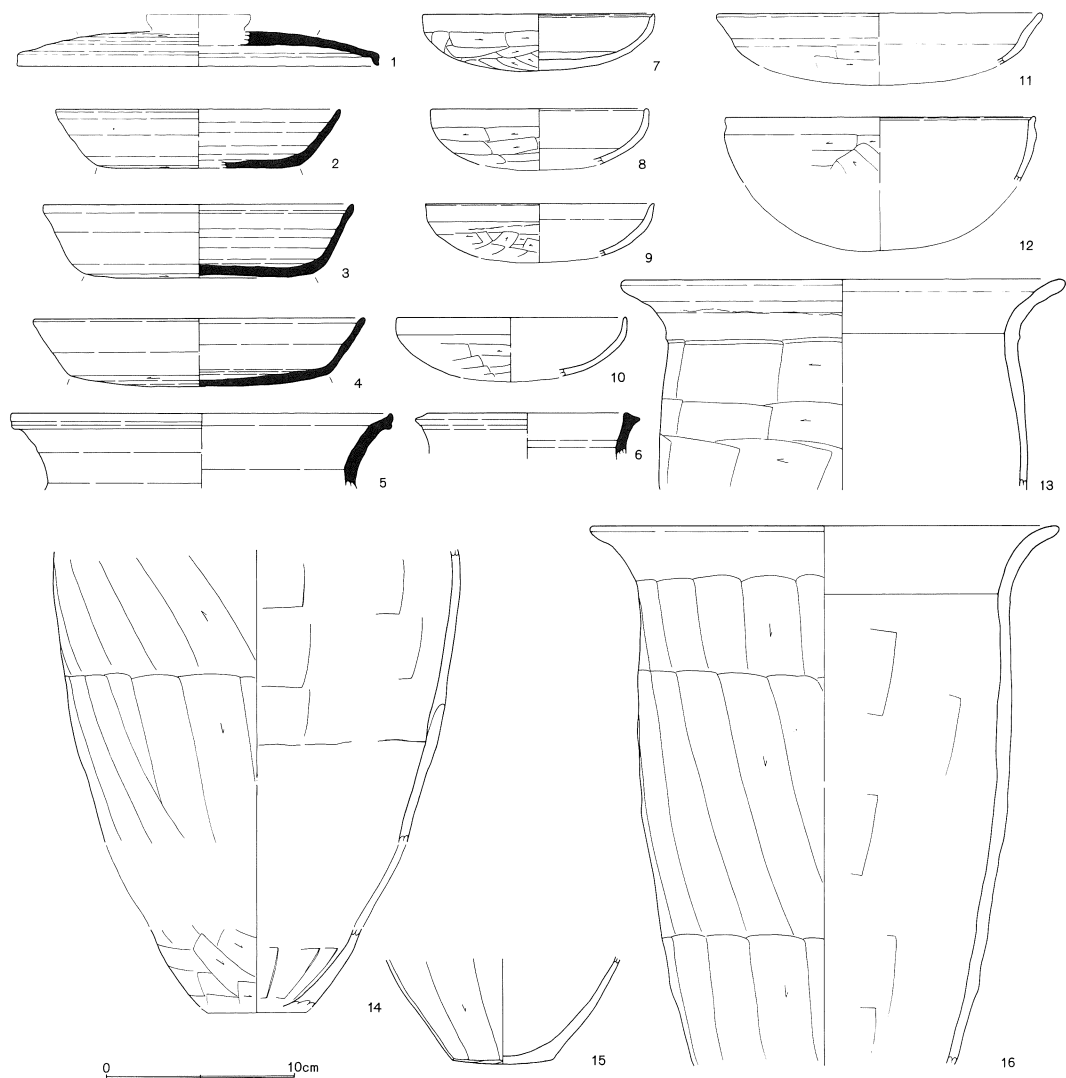
0 2m

カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土少量混入。
- 2 淡褐色土 焼土粒子・黄褐色粘土多量、炭化粒子少量混入。
- 3 暗褐色土 焼土粒子・粘土少量、炭化粒子微量混入。
- 4 暗褐色土 焼土粒・粘土多量、炭化粒少量混入。
- 5 黄褐色土 粘土多量、焼土粒・炭化粒少量混入。
- 6 黄褐色土 粘土多量、焼土粒・炭化粒少量混入。
- 7 黄褐色土 粘質土。焼土粒子少量混入。
- 8 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子多量混入。
- 9 暗褐色土 焼土粒子・粘土炭化粒子多量混入。
- 10 黄褐色土 粘質土。焼土粒混入。

0 1m

第384図 第125号住居跡・カマド



第385図 第125号住居跡出土遺物

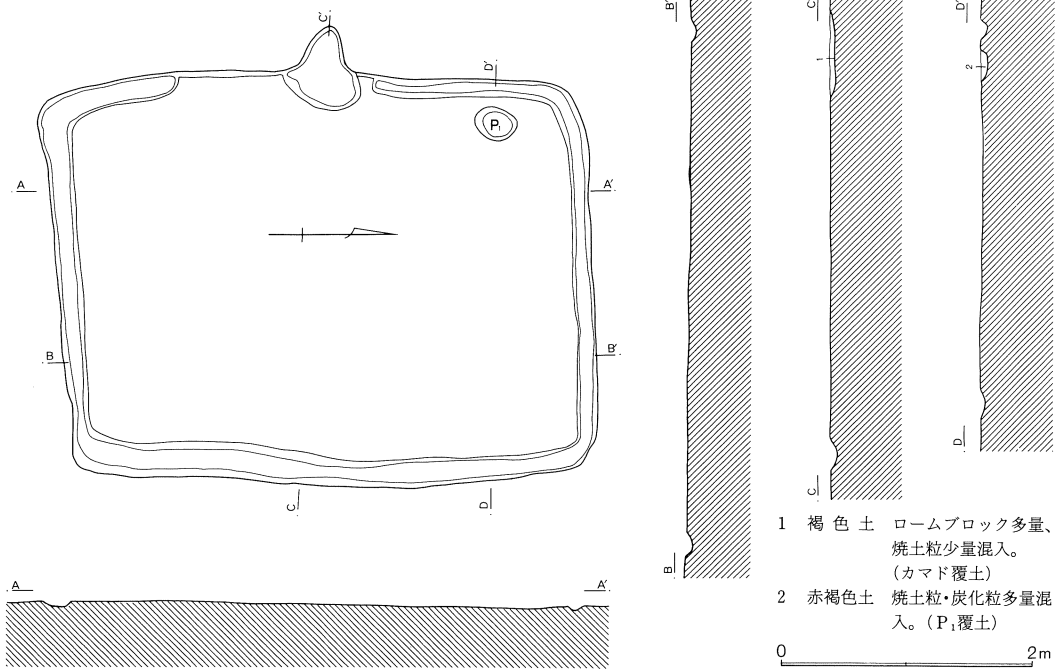
第126号住居跡(第386図)

R・S-13・14区に位置する。平面形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸4.28m、短軸3.16mを測る。確認面で既に床面が露出しており、壁溝とカマドによって辛うじて全体の規模を知ることができたものである。主軸方位はN-90°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、余り堅い箇所はみられない。カマドは西壁に設けられるが、遺存状態は悪く、掘方面が僅かに残存するのみである。

ピットは1本検出されたが、柱穴とは性格が異なり、灰が詰まった灰溜め状を呈する。一応住居には伴うものであろう。壁溝はカマド付近を除き巡っている。

出土遺物は少なく、土師器甕、台付甕、須恵器坏が計4点検出されているのみである。須恵器坏

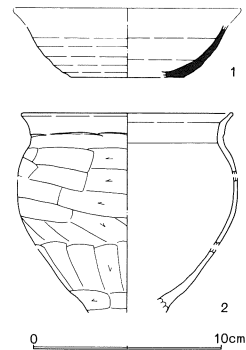


第386図 第126号住居跡(L=30.90m)

(第387図1)は底部糸切り離しで比較的底径は大きい。台付甕口縁も「コ」の字状を呈する。正確な時期は不明であるが、凡そ稲荷前 XII~XIII 期頃であろう。

第387図1は須恵器坏で口縁部を欠く。残高2.8cm、推定底径6.8cm。焼成良好で、灰色を呈する。20%残。カマド内覆土出土。

2は土師器台付甕である。推定口径11.0cm、残高10.5cmを測る。焼成良好でにぶい褐色を呈する。20%残。カマド内覆土出土。



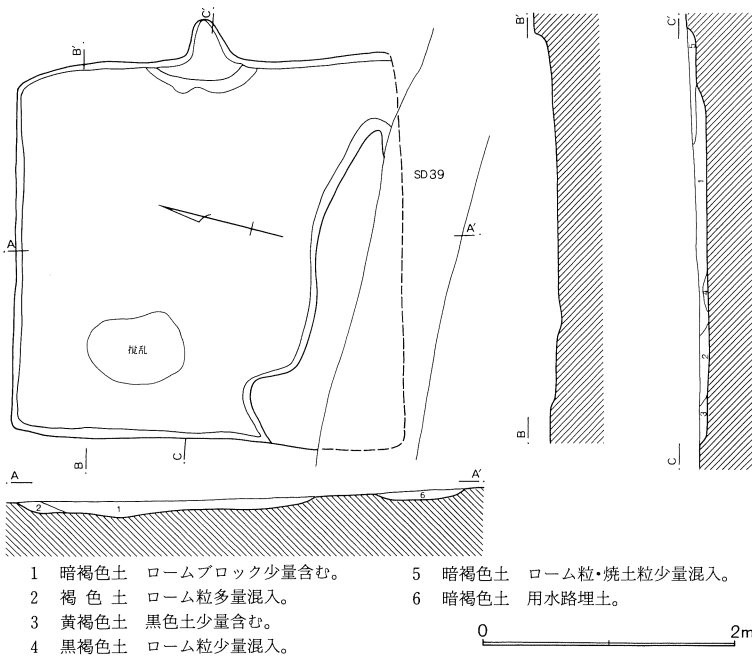
第387図 第127号住居跡出土遺物

第127号住居跡(第388図)

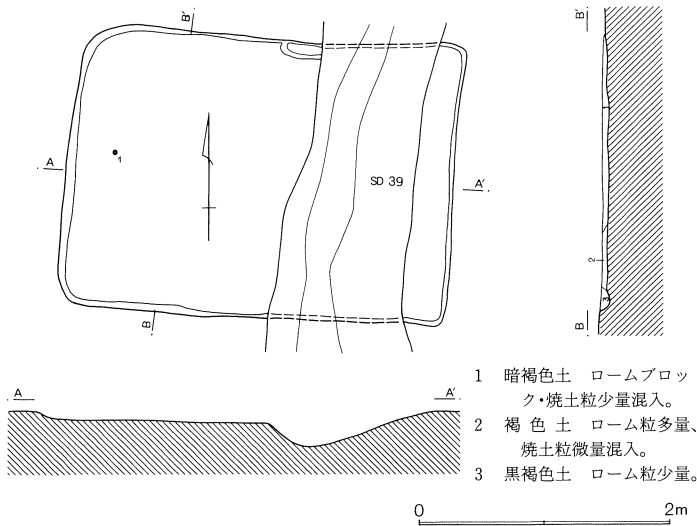
R-12・13区に位置し、南壁部周辺を第39号溝跡の攪乱を受けている。平面形態は長方形または方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸3.10m、短軸2.98mを測る。掘り込み自体が浅いためか、確認面で既に床面下まで削平されており、遺存状態は極めて悪い。主軸方位はN-77°-Eを示す。

床面は残存せず、確認されたのは掘方のみである。南壁部から西壁部にかけてローム地山を残す他は、全面掘方となりローム混じりの土で充填されていた。

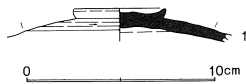
カマドは東壁に設けられるが、確認面からの掘り込みは浅く、構造の詳細は把握できない。出土遺物も全く検出されず、時期も不明とせざるを得ない。



第388図 第127号住居跡(L=30.90m)



第389図 第128号住居跡(L=30.90m)



第390図 第128号住居跡出土遺物

第128号住居跡(第389図)

S-13区に位置する。第39号溝跡が住居内を南北に貫通する。形態は長方形を呈し、規模は、長軸3.08m、短軸2.24m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-7°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で、西壁付近を除き堅く締まっていた。覆土が僅かしか残存しないため、埋没状況は明確に把握できなかった。

カマドは北壁に設置されたものと推定され、第39号溝付近の北壁際に焼土の散布が確認された。溝跡によって破壊されたものと考えられる。壁溝状の凹みはカマド推定部付近の北壁際に僅かに検出されたが、詳細は不明である。柱穴は存在しない。

出土遺物は須恵器蓋の破片が1点検出されたのみである。正確な年代は勿論不明であるが、第390図1の蓋は環状鈕をもつもので8世

紀前半代に比定されるものであろう。

第390図1は須恵器蓋である。口縁部を欠失する。残高1.8cmを測る。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は良好で灰色を呈する。20%残。No.1。覆土出土。

第129号住居跡(第392図)

S-13区に位置し、第39号溝跡と住居中央部に存在する第295号土壌の攪乱を受け遺存状態は悪い。平面形態は長方形を呈し、残存規模は長軸3.50m、短軸3.24m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-1°-Eを示す。

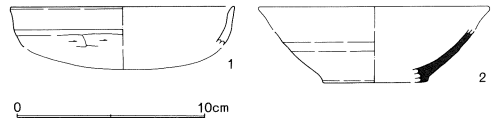
床面はやや凹凸をもち、住居中央部が比較的堅く締まっていた。

カマドは残存しない。おそらく東壁に設けられたものと推定されるが、溝跡により破壊されたものと考えられる。壁溝、柱穴等の施設は検出されなかった。

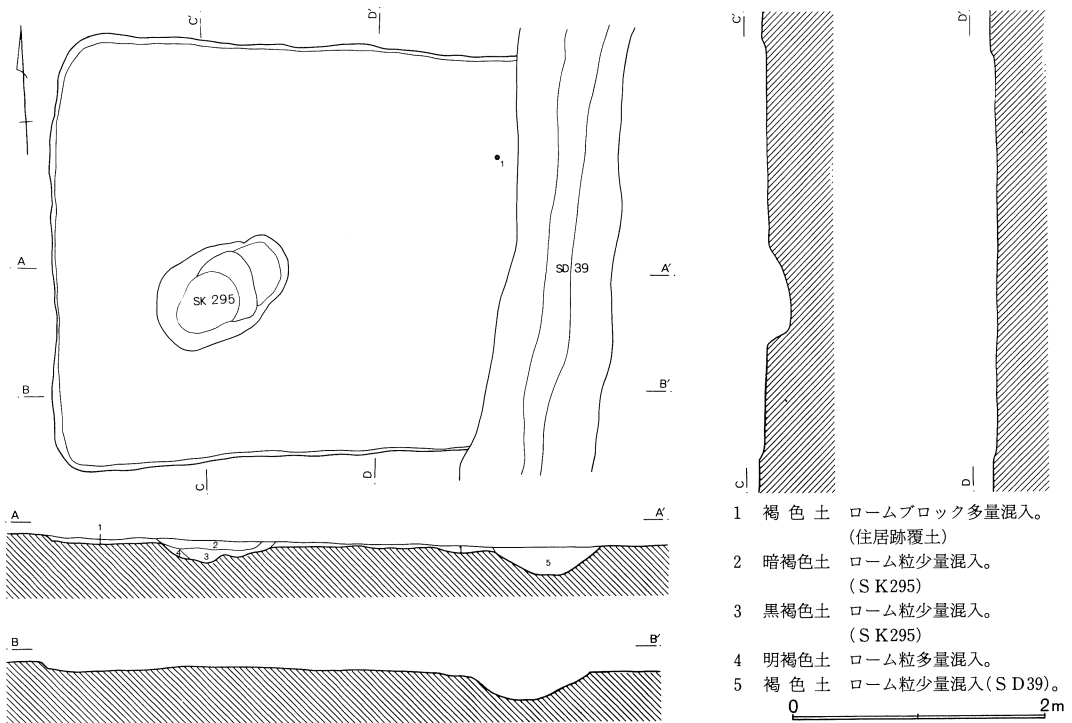
出土遺物は少なく18点検出されたが全て小片である。土師器坏、甕、須恵器坏の各器種があり、須恵器坏(第391図2)のみ9世紀代に下がると思われ、混入の可能性が高いものと推定される。年代の限定は難しいが、土師器の様相からみる限りにおいては稻荷前V期前後に位置付けられるであろう。

第391図1は土師器坏である。推定口径約12cm、残高2.1cmを測る。胎土に石英・白色粒子を含む。焼成は良好で橙色を呈する。5%残。No.9。床面出土。

2は須恵器坏で、口縁部を欠いている。残高2.7cm、推定底径5.4cmを測る。胎土に石英・白色針状物質を含む。焼成は良好で灰色を呈する。10%残。覆土出土。

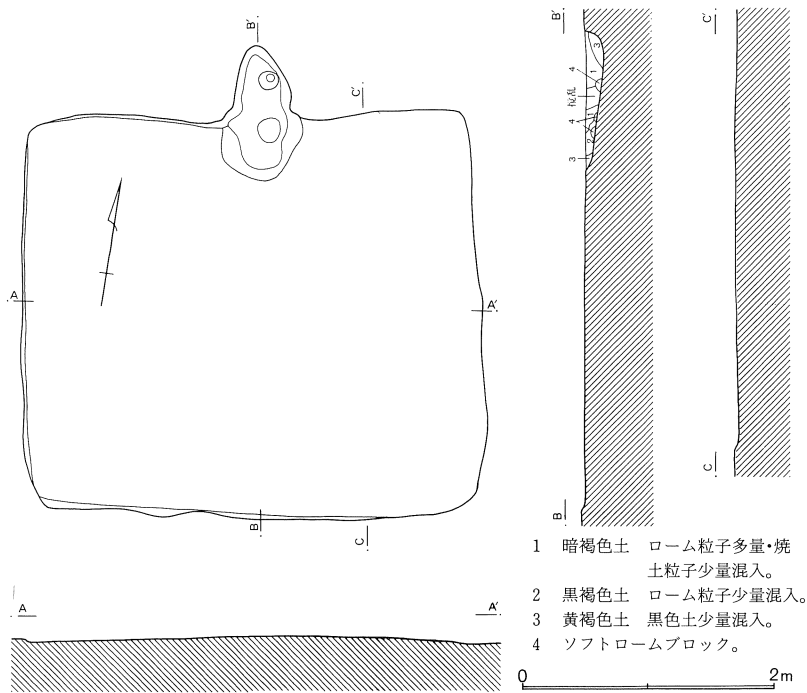


第391図 第129号住居跡出土遺物



第392図 第129号住居跡(L=31.00m)

第130号住居跡 (第393図)



第393図 第130号住居跡(L=31.00m)

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量混入。
- 3 黄褐色土 黒色土少量混入。
- 4 ソフトロームブロック。

S-13・14区に位置する。ほぼ床面まで削平が及び遺存状態は悪い。形態は略方形を呈し、規模は長軸3.64m、短軸3.20mを測る。主軸方位はN-9°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、特に堅い箇所はみられない。覆土の状況は不明である。

カマドは北壁中央に設けられている。燃烧部先端は壁外に延び、底面は皿状に

掘り込まれる。中央部に攪乱が入るため堆積状況は明確ではないが、第1層下面が火床面と推定されよう。

柱穴等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器甕の小片が5点検出されたのみで、図化し得る遺物はない。年代は決し難いが、甕は器壁の厚いものでさほど新しい要素はみられない。7世紀後半から8世紀前半頃であろう。

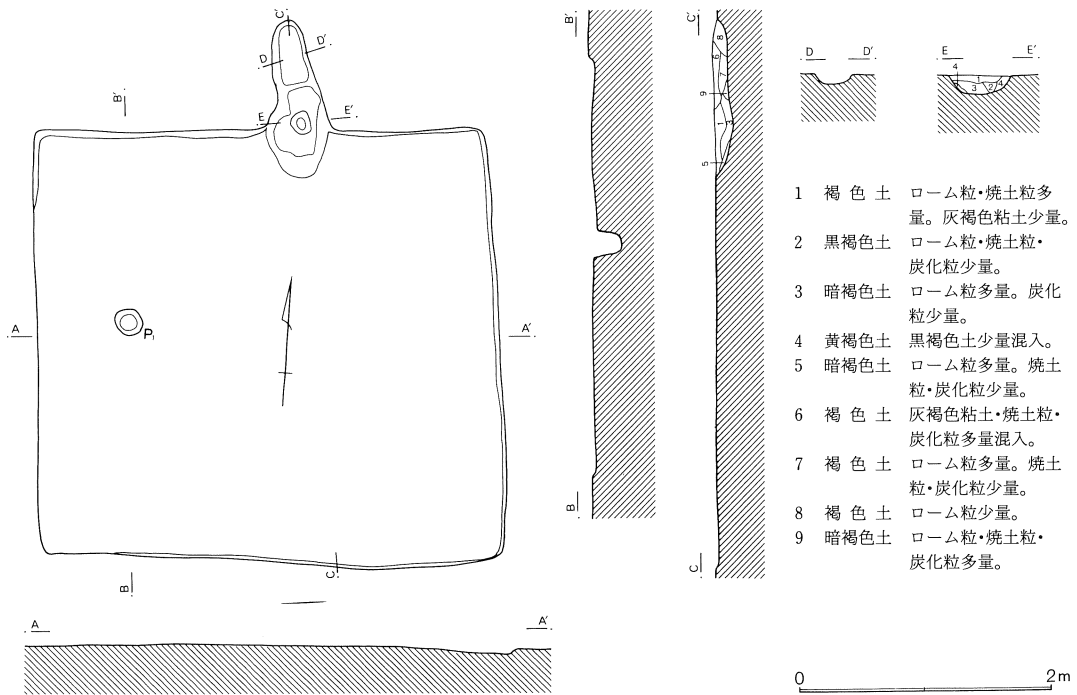
第131号住居跡(第394図)

T-13区に位置する。形態はほぼ方形を呈するが、上面はかなり削平されており西壁から南壁にかけての壁は遺存していなかった。規模は長軸3.64m、短軸3.44m、深さ0.05mを測り、主軸方位はN-5°-Wを示す。

床面はほぼ平坦であるが、特に堅く踏み締められた形跡は認められなかった。覆土の状況は深度が浅いため不明である。

カマドは北壁に設けられる。煙道部は壁を切り込んで長く壁外に延びる。袖は残存しない。ピットは1本検出されたが、伴う柱穴か否か明らかではない。

出土遺物は極めて少なく、土師器坏と甕の小片が計9点検出されたのみである。年代を限定することは難しいが、土師器坏は口唇部内面に沈線を有する比企型坏の系譜を引くものである。この坏については稲荷前IV期からV期頃に位置付けられるものであろう。住居の年代と合致するか否かは不明であるが周辺住居の状況からさほどかけ離れたものとは思われない。



第394図 第131号住居跡(L=31.00m)

第132号住居跡(第395図)

T-14区に位置する。東壁部に倒木痕とピットの攪乱を受け、またほぼ床面に達するまで上面が削平されるなど遺存状態は悪い。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸4.64m、短軸3.74mを測る。主軸方位はN-11°-Wを示す。

床面は平坦で全体に堅い。カマドは北壁に設けられるが、掘り込みが浅く火床面が僅かに残存するのみである。袖は削平されたものと思われ遺存しない。住居内に土壌(第294号土壌)が1基検出されたが、住居よりも新しい段階の所産である。壁溝は南壁から北壁にかけて巡り、東壁部には検出されなかった。

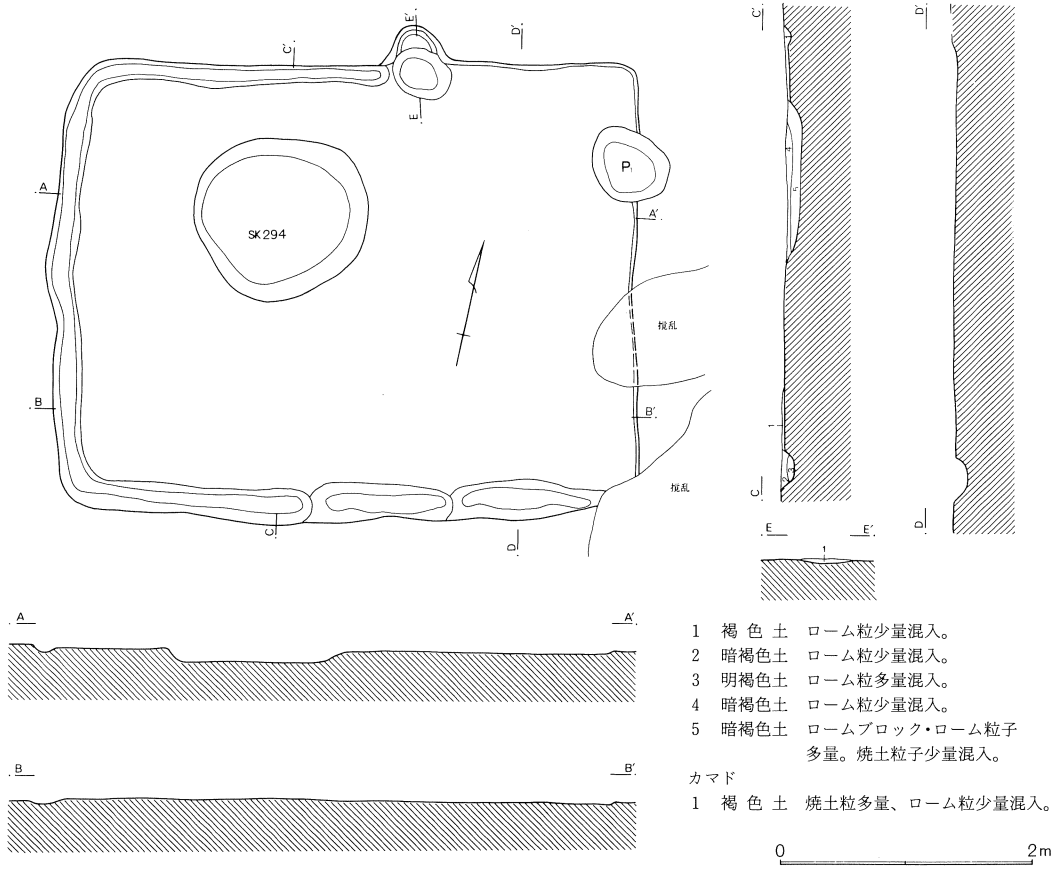
出土遺物は全く検出されず、年代についても不明とせざるを得ない。

第133号住居跡(第396図)

T-14区に位置する。第39号溝跡の攪乱を受けるなど遺存状態は良くないが、かろうじて床面が残存していた。平面形態はほぼ方形を呈し、規模は長軸3.64m、短軸3.32m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-5°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で、住居中央部が比較的強く締まっていた。覆土は住居南半で僅かに残るが北壁側では殆ど遺存していなかった。

カマドは検出されなかった。東壁部中央には焼土が僅かに分布しておりこの部分に設けられたものと推定されるが、第39号溝跡によって破壊されたものと考えられる。



第395図 第132号住居跡(L=31.00m)

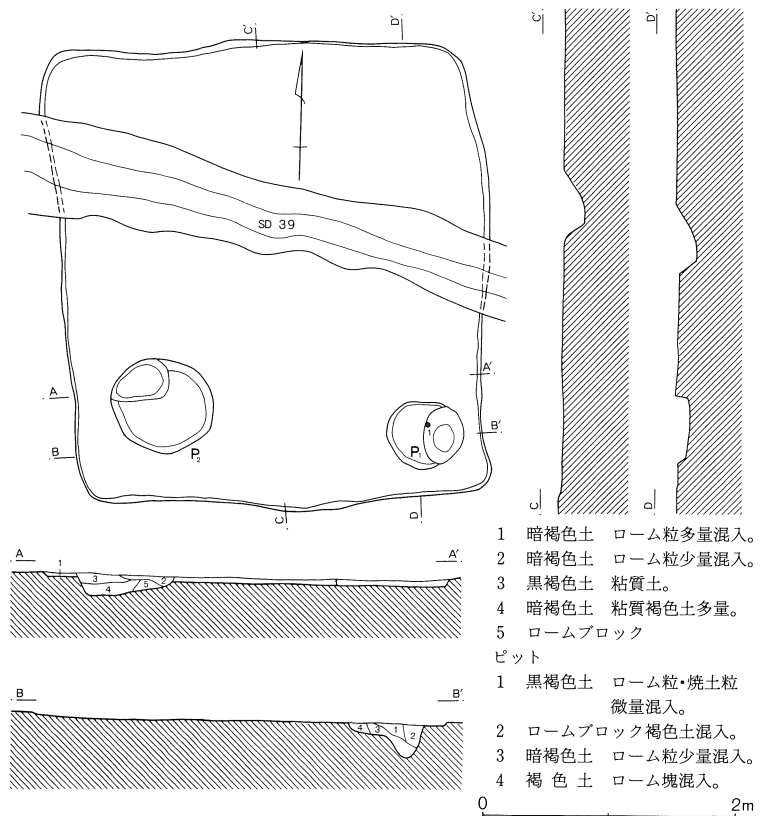


◀ 第IV群の遺構分布(南東より)

ピットは2本検出された。P₁は伴う可能性があるが、P₂は住居よりも新しい段階の所産である。

出土遺物は図示した土器(第397図1)が1点検出されたのみで正確な年代は明らかにできない。およそ7世紀後半から8世紀前半頃であろう。

第397図1は土師器壺である。口縁部から胴部上半を欠いている。残高8.4cm、底径6.8cmを測る。胎土に石英・白色針状物質・赤色粒子を含む。焼成は普通でにぶい橙色を呈する。90%残。P₁の上面から出土した。



第396図 第133号住居跡(L=30.90m)

第134号住居跡(第398図)

S・T-14・15区に位置する。形態は略方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸3.20m、深さ0.05mを測る。主軸方位はN-11°-Wを示す。

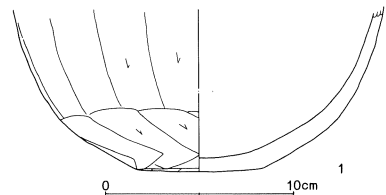
床面は概ね平坦で、ほぼ全面にわたって貼床される(第3・4層)。

覆土は暗褐色土が薄く堆積するが、埋没状況の詳細は不明である。

カマドは北壁に設けられる。燃焼部は壁を切り込んで構築されている。第9層上面が火床面に相当しよう。袖自体は遺存しないが、袖下部とカマド東側の隅は掘方面よりも一段高く掘り残されていた。柱穴等の施設は検出されていない。

出土遺物は20点と少ない。土師器杯、皿、甕、須恵器杯、甕から構成される。第399図1・2は貼床内、3は覆土から出土した。小片が多いため確実とは言い難いが、一応稲荷前VI期に比定しておきたい。

第399図1は土師器杯である。推定口径13.6cm、残高2.7cmを測る。胎土に石英・白色粒子を含む。

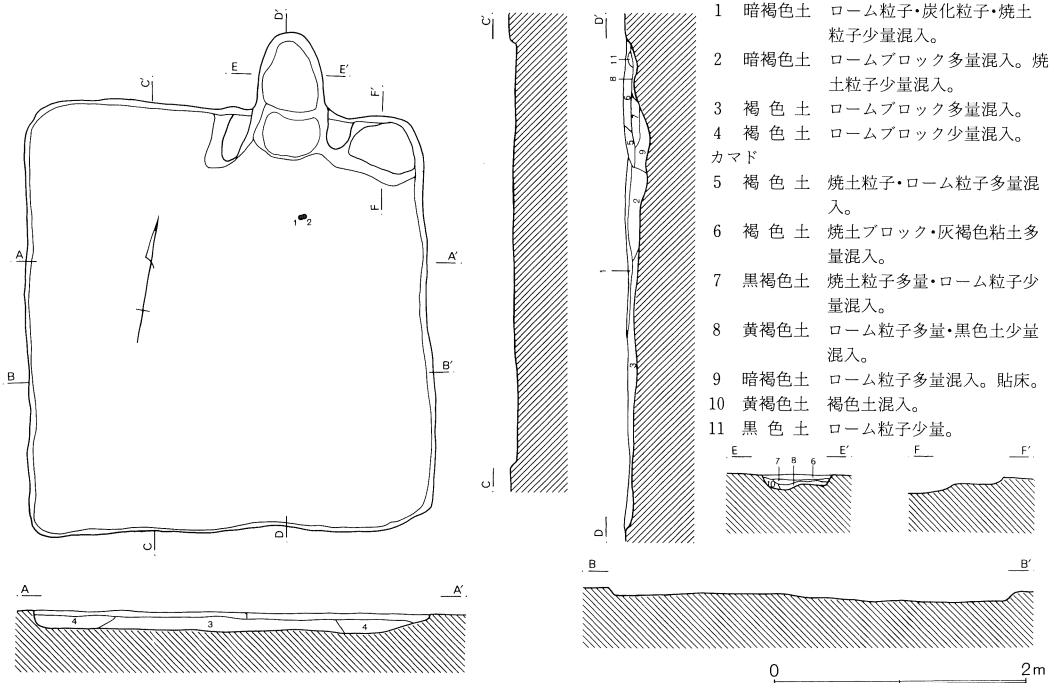


第397図 第133号住居跡出土遺物

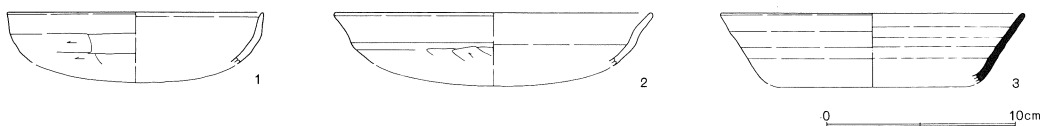
焼成は普通でにぶい橙色を呈する。15%残。No.13。貼床内出土。

2は土師器皿である。推定口径16.8cm、残高2.8cmを測る。胎土に白色粒子・角閃石を含む。焼成は良好でにぶい橙色を呈する。15%残。貼床内出土。

3は須恵器坏である。推定口径16.0cm、残高3.7cmを測る。胎土に石英・白色針状物質を含む。焼成は堅緻で灰色を呈する。5%残。覆土出土。



第398図 第134号住居跡(L=30.90m)



第399図 第134号住居跡出土遺物

第135号住居跡(第400図)

S・T-15区に位置する。住居のほぼ東半分は緩斜面に掛かり、削平されており遺存しない。平面形態は方形または長方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸4.00m、短軸3.00mを測る。ほぼ床面まで削平が及び、壁の大部分は検出されなかった。主軸方位は仮に西辺を基準とすると、N-17°-Wを示す。

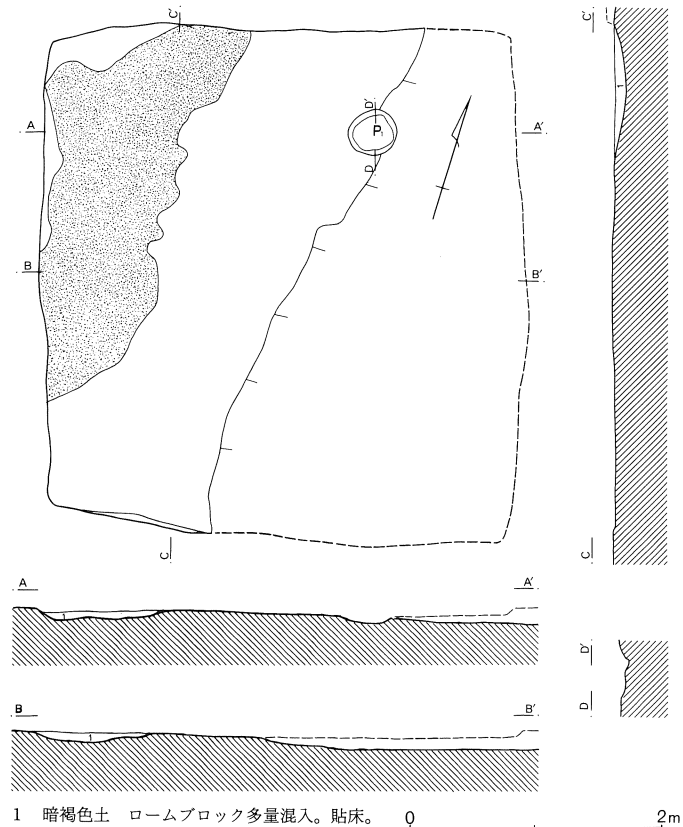
床面はやや凹凸を有し、中央部は比較的強く締まっていたが、西壁部付近では貼床され(スクリーン部分)しており、やや軟弱であった。

カマドは検出されていない。おそらくは削平された東壁部に存在したものであろう。

ピットは1本検出されているが、住居の柱穴とするにはやや無理がある。

出土遺物は須恵器坏1点と土師器甕3点の計4点検出されたのみである。全て小片であり図化し得るものはない。

確実に伴うとはいえないため、正確な年代は不明とせざるを得ないが、土器の特徴からみると、8世紀初頭を中心とした時期に営まれた可能性もある。



第400図 第135号住居跡(L=30.80m)

2. 井戸跡

第44号井戸跡(第401図)

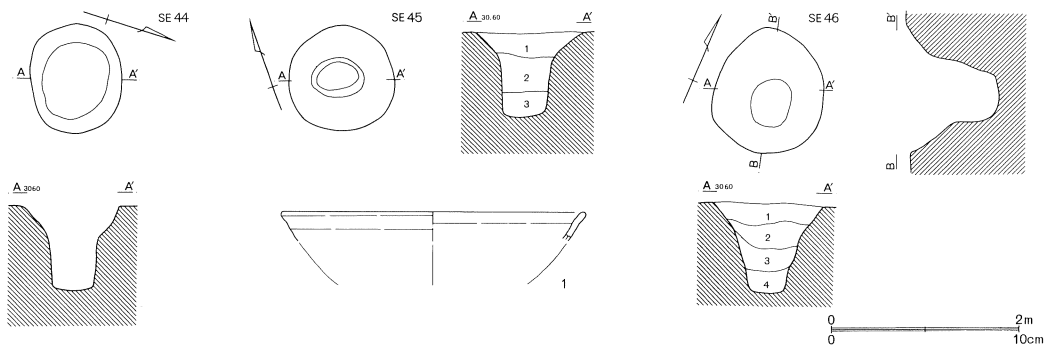
R-15区に位置する。上面は第293号土壌による攪乱を受けている。平面形は楕円形を呈し、規模は径1.15×0.95m、深さ0.85mを測る。断面はロート状を呈し底径は0.45m前後と幅狭くなっている。覆土は黒色土で埋まり粘性が強い。底面直上はロームから砂礫層に移行していた。出土遺物は皆無で年代は不明とせざるを得ない。

第45号井戸跡(第401図)

U-15区に位置する。第IV群の南に広がる谷地に単独で構築されている。平面形はおおよそ円形を呈し、規模は直径1.15m、深さ0.85mを測る。断面形はロート状を呈し、底面は径0.30m程と非常に幅狭くなっている。

覆土は3層に分かれ、第1・2層はロームブロックを少量含む黒褐色土、第3層は粘性強く、粘土ブロック混じりの黒色土で構成される。出土した遺物は土師器甕2点と図示した灰釉坑が1点あるのみである。灰釉坑が井戸に伴うか否かは不明である。

第401図1は灰釉坑である。残高1.5cm、焼成は堅緻で灰白色の胎土をもつ。東濃産と推定される。



第401図 第44～46号井戸跡・出土遺物

5%残。覆土から出土した。

第46号井戸跡(第401図)

R-18区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は径1.30×1.20m、深さ0.95mを測る。断面形はロート形を呈する。

覆土は4層に分かれ、第1層・第2層はローム粒子を含む褐色系土、第3層・第4層は粘性の強い黒色土で構成され、第4層には青灰色粘土ブロックが少量含まれていた。遺物は全く検出されず年代は不明である。

3. 溝跡

第IV群では8条の溝跡が発見された。谷を挟んだ北東側の一群と南側の島状台地に位置する一群とに分かれる。出土遺物に乏しく年代の解るものは少ないが、住居跡等の古代の遺構と重複する例では全て溝跡の方が新しいものと判断された。また覆土の状態も締まりないものが多く、古代に遡る溝は存在しないものと推定される。

第32号溝跡は31・33号溝跡と切り合うが新旧関係は明らかにされなかった。幅90cm、深さ10cm前後であるが、北端は溝幅が2mに広がる部分がある。出土遺物はない。

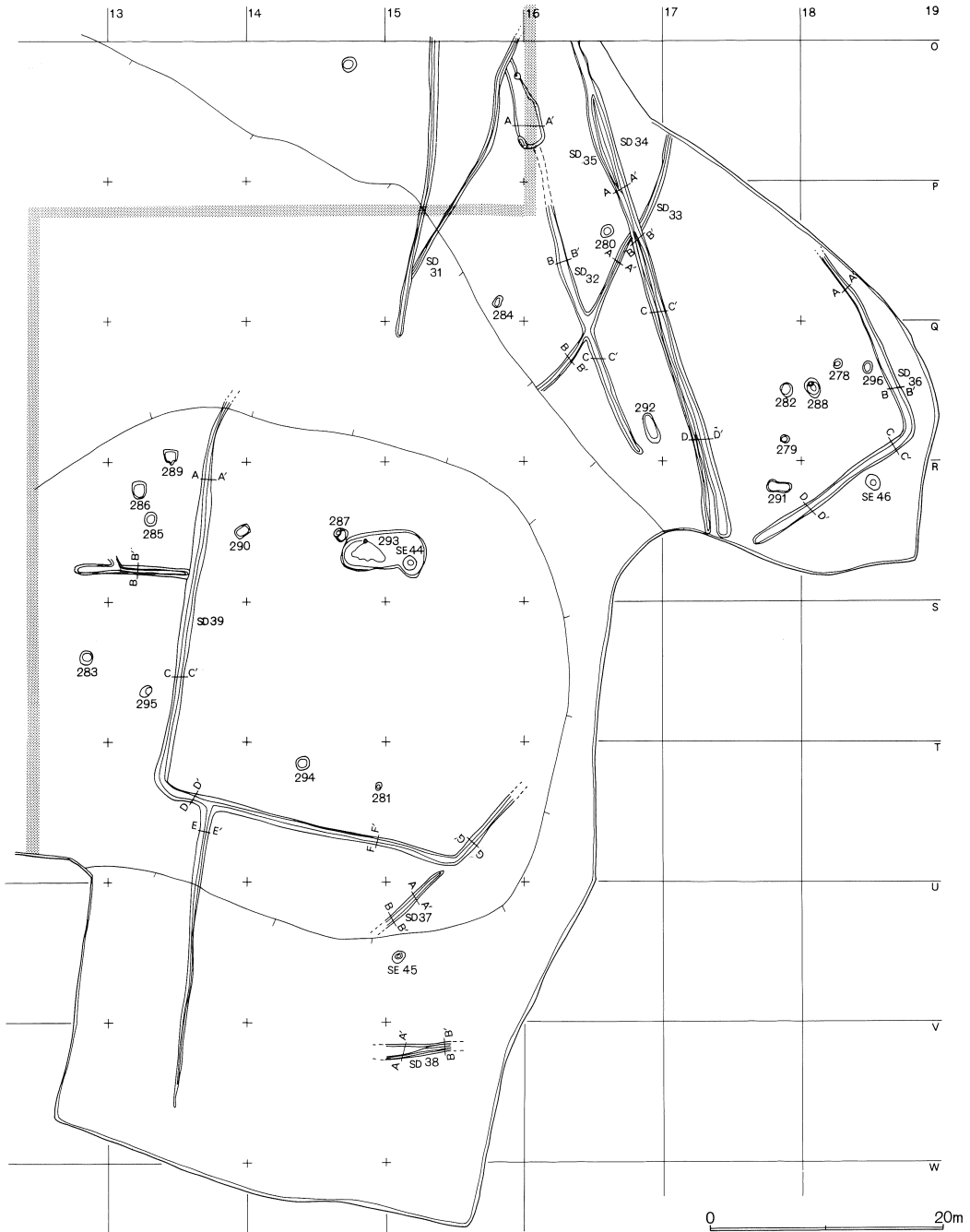
第33号溝跡は31号溝跡と平行するように北東から南西に延びている。3条の溝と重複するが新旧関係は捉えられていない。幅40～50cm、深さ20cm前後を測る。遺物は土師器甕と須恵器坏、甕が計4点出土しただけで時期は不明である。

第34・35号溝跡は北端で合流している。規模は34号が幅90cm、深さ35cm、35号は幅30cm、深さ20cm前後を測る。覆土はローム・焼土粒子を含む褐色系土で構成される。遺物は7点出土した。35号溝から出土した1点は瀬戸・美濃系の灰釉小皿(第403図3)で15世紀頃のものとして推定される。中世以降に機能した溝であろう。

第36号溝跡は調査区東端部に位置し、直角に屈曲している。溝幅60～80cm、深さ20～30cmを測る。覆土はローム・焼土粒子を含む褐色系の土で構成される。遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、甕、瓶

の破片が計15点検出されたが、溝の年代を表わしているとは必ずしも言えない。おそらく中世以降と推定される。

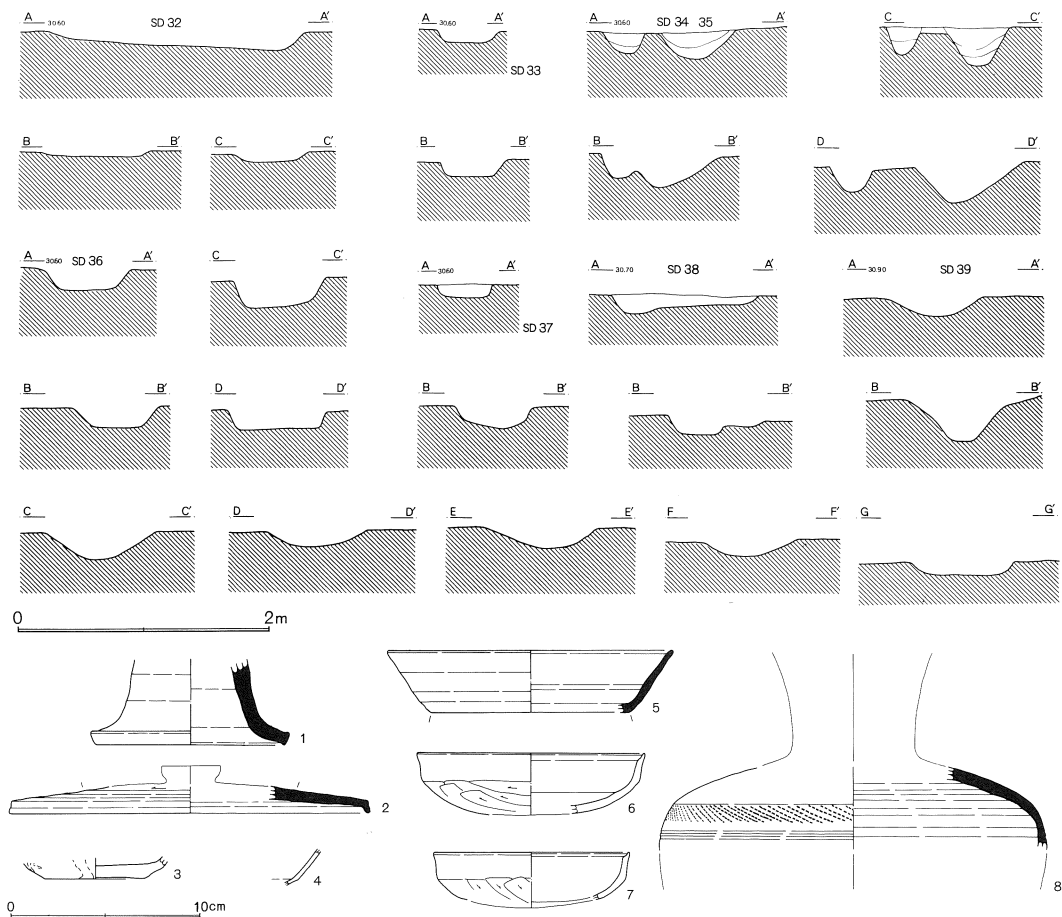
第37・39号溝跡は一体のものと考えられる。途中2条の溝が分岐する。溝幅は70～90cm前後で、深さ40cm以下を測る。出土遺物は少なく3片であるが、中世以降の瓦質陶器を含む。おそらく近世



第402図 第IV群溝跡・土壌配置図

以降の水田用水路と推定される。

第38号溝跡は調査区最南端のV-15区に位置する。部分的に確認されただけであるが、ほぼ東西に延びる。最大幅115cm、深さ20cmを測る。遺物は検出されず時期は不明であるが中世以降と推定される。



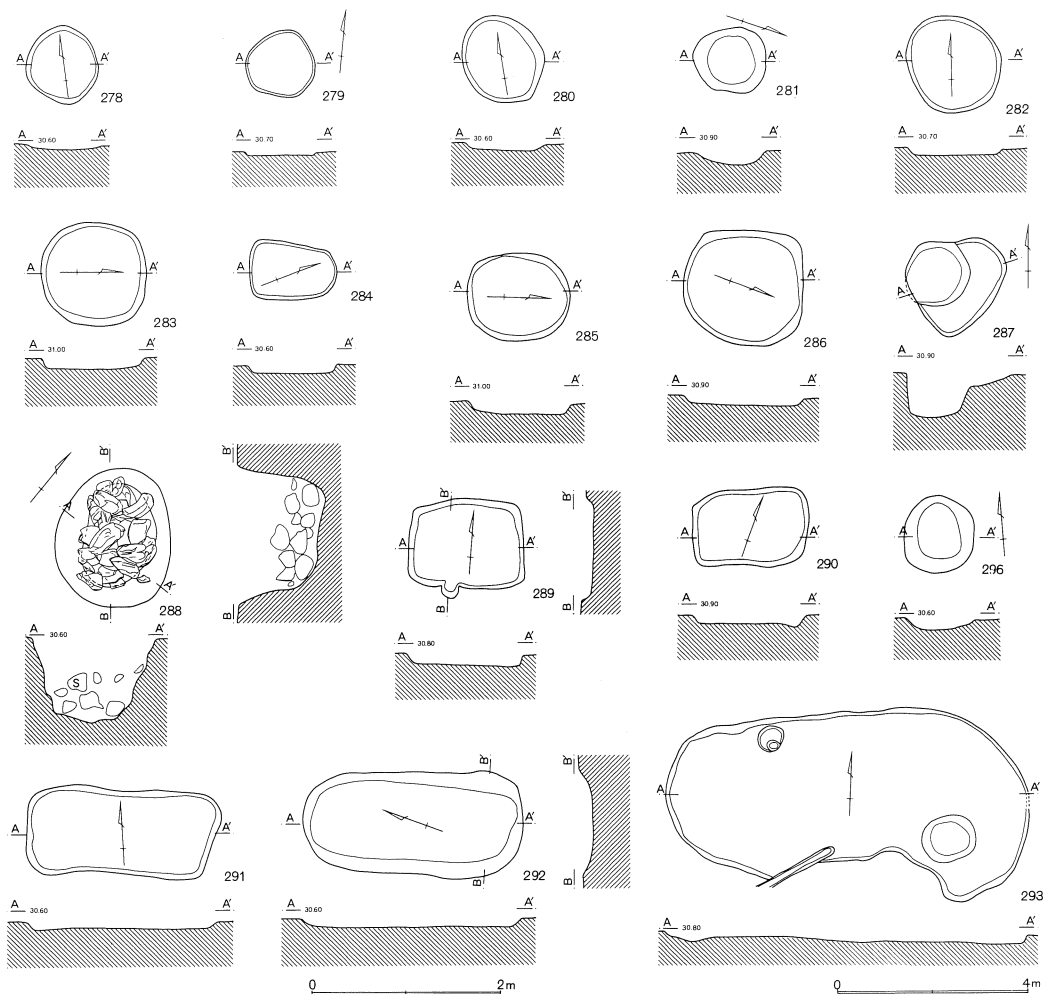
第403図 第IV群溝跡土層・出土遺物

第IV群溝跡出土遺物観察表(第403図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	高盤		4.5	(10.0)	A B C	A	灰	35%	SD34覆土。
2	蓋	(19.0)	1.4		A B C	A	灰	15%	SD34覆土。
3	小皿		1.1	5.4	A	A	灰白	90%	SD35覆土。(0-16Grid)。瀬戸美濃系鉄釉皿。
4	緑釉碗				J	A	灰	5%	SD37覆土。硬質。猿投産。
5	坏	(15.0)	3.3	(10.5)	A B C	B	灰	10%	№1。SD36覆土。
6	坏	(12.0)	3.2		A B F	A	橙	25%	№2。SD36覆土。
7	坏	(10.3)	2.5		A C	A	にぶい橙	10%	№2。SD36覆土。
8	長頸瓶		4.4		B J	A	灰	15%	SD36覆土。東海産か。

4. 土壇

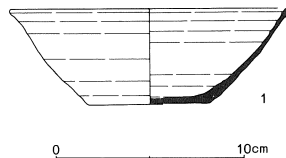
第IV群では19基の土壇が検出された。遺構配置は第402図に、遺構図は第404図、規模等の詳細は第4表に示した。大半は遺物が出土せず時期・性格共に不明である。第288号土壇は内部に多量の礫が詰まっており、他の土壇とは異なる性格が想定されるが、具体的には明らかにできない。須恵器甕の破片が検出されている。第293号土壇は長径7.65mにも及ぶ大きな楕円形土壇である。覆土の状態から近世以降の水田に関する遺構と推定される。



第404図 第IV群土壇

第IV群土壇出土遺物(第405図)

第405図1は須恵器坑。口径14.7cm、器高5.0cm、底径6.4cmを測る。胎土に石英・白色粒子を含むが、白色針状物質は確認できない。焼成はやや悪く淡黄色を呈する。95%残。第291号土壇出土。



第405図 第IV群土壇出土遺物

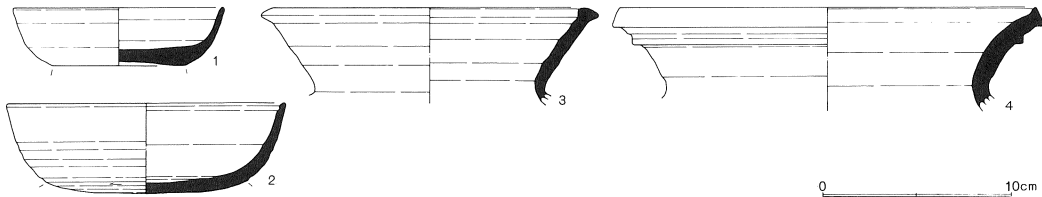
第4表 第IV群土壙一覧表

番号	旧番号	位置	規模 (長軸×短軸×深さ)	時期(世紀)								備考(出土遺物・重複関係等)	
				6	7	8	9	10	11	中世	近世		
278	D区213	Q-18	82×75×4										遺物なし
279	" 218	Q-17	75×70×4										遺物なし
280	" 219	P-16	100×82×19										遺物なし
281	" 205	T-14	77×67×16		≈								土師環・甕
282	" 216	Q-17	108×97×9										遺物なし
283	" 207	S-12	110×108×15										遺物なし
284	" 220	P-15	92×60×12				≈						須恵環
285	" 210	R-13	110×90×16										遺物なし
286	" 209	R-13	126×121×11				≈						土師甕
287	" 206	R-14	107×100×48				≈						遺物なし
288	" 214	Q-18	145×115×87			≈	≈						須恵甕
289	" 204	Q-13	123×95×14				≈						須恵甕
290	" 203	R-13・14	120×80×8										遺物なし
291	" 215	R-18	200×88×10				≈						須恵環
292	" 217	Q-16	235×109×11				≈						須恵環
293	" 208	R-14・15	765×315×23								≈		土師環・甕 須恵環・皿・甕
294	" 201	T-14	139×129×12										遺物なし SJ132内
295	" 202	S-13	115×74×19										遺物なし SJ129内
296	" 212	Q-18	83×74×13										遺物なし

5. その他

(1) グリッド

本群では遺構に伴わずに出土したものととして土器4点を図化した。2の須恵環は底部丸底を呈し全面へら削り調整される。口縁内面に沈線が巡り、内面はかなり磨滅している。4の須恵壺は口縁直下に凸帯をもつ。



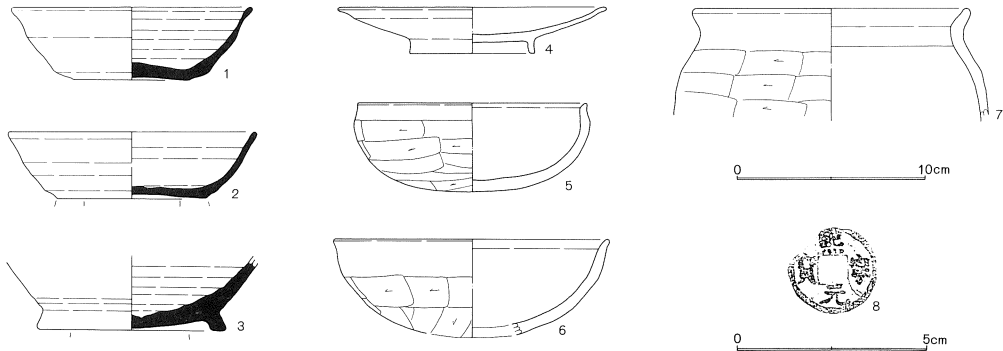
第406図 第IV群グリッド出土遺物

第IV群グリッド出土遺物観察表(第406図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(11.0)	3.05	7.0	A B C	B	灰	60%	Q-11Grid。
2	環	(14.6)	4.8		A B C	B	灰	35%	P-13Grid。内面磨滅。
3	壺	(16.6)	5.1		A B C	A	灰	20%	P-13Grid。
4	壺	(22.0)	5.4		A B C	B	にふい赤褐	5%	P-12Grid。

VIII 表採遺物

試掘調査時、或いは表土除去作業中等に出土し、伴出遺構や出土位置が不明確な遺物を一括して掲載した。須恵器と土師器がほとんどであるが、図示した以外に縄文時代と推定される石鏃が2点ある。



第407図 A区表採遺物

A区表採遺物(第407図)

第407図1は須恵器杯。口径12.6cm、器高3.8cm、底径6.2cmを測る。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成はやや悪く灰色を呈する。80%残。試掘時出土。

2は須恵器杯。推定口径13.0cm、器高3.5cm、底径8.0cm。胎土は1と同様である。焼成は普通で灰白色を呈する。25%残。底部外縁部へラ削り。註記消滅により出土遺構不明。

3は須恵器瓶と思われ底部に高台が付く。底径9.8cm。胎土に石英・白色粒子含む。焼成はやや甘く灰白色を呈する。50%残。A区表採。

4は緑釉皿。推定口径14.0cm。器高2.4cm、底径6.6cm。胎土は灰色で焼成は堅緻。15%残。猿投産か。A区表採。

5は土師器碗。口径12.1cm、器高4.6cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は良好で橙色を呈する。30%残。試掘時出土。

6は土師器碗。口径14.4cm、器高5.2cm。胎土に石英・白色粒子を含む。焼成良好で橙色を呈する。註記消滅により出土遺構不明。

7は土師器小形甕。推定口径14.4cm、残高6.0cm。胎土に白色粒子・白色針状物質・角閃石含む。焼成はやや悪くにぶい橙色を呈する。20%残。註記消滅により出土遺構不明。

8は熙寧元寶で外縁を僅かに欠く。直径2.4cm。北宋銭で1068年初鑄。A区表採。

第5表 稻荷前遺跡A区 遺構新旧対照表

新番号	旧番号	群	新番号	旧番号	群	新番号	旧番号	群	新番号	旧番号	群
S J- 01	S J- 26		S J- 46	S J- 12		S J- 91	S J- 18		S B- 01	S B- 01	
02	54		47	13		92	90		02	06	
03	78		48	79		93	19	II	03	14	
04	78		49	15		94	83		04	12	
05	75		50	45		95	84		05	13	I
06	76		51	30		96	37	群	06	15	
07	69	I	52	30	I	97	39		07	17	
08	70		53	29		98	38		08	18	
09	71		54	100		99	40		09	19	
10	73		55	97		100	58		10	16	
11	72		56	98		101	88		11	29	
12	68	群	57	91	群	102	102		12	30	
13	63		58	50		103	101		13		群
14	64		59	31		104	103	III	33		
15	60		60	32・49		105	104A		34		
16	61		61	51		106	104B		51		
17	82		62	46B		107	107		52		
18	115		63	46A		108	105				
19	59		64	47		109	106	群	14	07	
20	81		65	48		110	108		15	09	
21	62		66	96		111	110		16	27	
22	65		67	52		112	109		17	10	II
23	25		68	95		113	118		18	02	
24	67		69	80		114	111		19	08	
25	66		70	86		115	116		20	04	
26	22		71	87		116	113		21	04	
27	28		72	94		117	112		22	03	
28	07		73	16		118	114		23	05	
29	03		74	17		119	D区 117		24	11	
30	04		75	92		120	D区 116		25	20	群
31	01		76	93		121	D区 115		35	28	
32	21		77	117		122	D区 113		36		
33	24		78	34	II	123	D区 114		37		
34	53		79	33		124	D区 109		26	25	
35	55		80	57		125	D区 107	IV	27	21	
36	10		81	56		126	D区 106		28	26	
37	08		82	42		127	D区 110		29	22	III
38	23		83	43	群	128	D区 111		30	23	
39	02		84	44		129	D区 108		31	D区 01	
40	06		85	41		130	D区 105	群	32	24	
41	05		86	36		131	D区 112		38		
42	11		87	35		132	D区 102		39		
43	27		88	85		133	D区 101		40		群
44	14		89	89		134	D区 103		41		
45	09		90	20		135	D区 104		42		
									43		

新番号	旧番号	群	新番号	旧番号	群	新番号	旧番号	群	新番号	旧番号	群
S B- 44		III 群	S E- 19	S E- 31	II 群	S E- 44	S E- 21	IV 群	S D- 23	S D- 26	III 群
45			20	29		45	05		24	24	
46			21	01		46	22		25	34	
47			22	09		S D- 01	08		26	33	
48			23	14			02		09	27	
49			24	13		03	03		28	28	
50			25	07		04	14		29	29	
S E- 01	02	I 群	26	06	05	13	群	30	30	IV 群	
02	04		27	12	06	02	31	31			
03	03		28	19	07	07	32	D区 14			
04	27		29	10	08	01	33	D区 13			
05	26		30	32	09	06	34	D区 11			
06	24		31	35	10	12	35	35			
07	25		32	36	11	14	36	D区 10			
08	17		33	34	12	15	37	D区 04			
09	21		34	44	13	16	38	D区 05			
10	08		35	46	14	19	39	D区 17			
11	23		36	42	15	20	S X- 01	01	I ・ II 群		
12	20		37	41	16	21		02			02
13	36		38	23	17	10		03			03
14	18		39	40	18	11		04			05
15	15	40	39	19	群	05		06			
16	11	41	37	20	22	06		04			
17	28	42	43	21	23	S A- 01		II 群			
18	30	43	45	22	26						

※ S Kは土壙一覧表に記載



IX 調査のまとめ

稲荷前遺跡(A区)では竪穴住居跡135軒、掘立柱建物跡52棟、井戸跡46基、溝跡39条、土壇296基、竪穴状遺構5基、小鍛冶跡1基、火葬墓1基、単独ピット750基等多数の遺構とそれに伴う多量の遺物が検出された。各遺構は古墳時代後期(7世紀代)から中世に至る時期のものとして推定され、時代を異にして複雑に重複していた。それでも稲荷前遺跡全体からみると1/3強の遺構数でしかなく、遺跡の全体像を把握するには今後整理されるB・C区の結果を待つほかない。本章では土師器・須恵器の編年を軸に各時期の集落構成とその変化をトレースすることに主眼を置くこととしたい。稲荷前遺跡を含む入西遺跡群における律令期集落の動向を明らかにするためのいわば序論的な意味合いをもつものである。合わせて郡名墨書土器の性格について若干触れることでまとめとしたい。

1. 遺物について

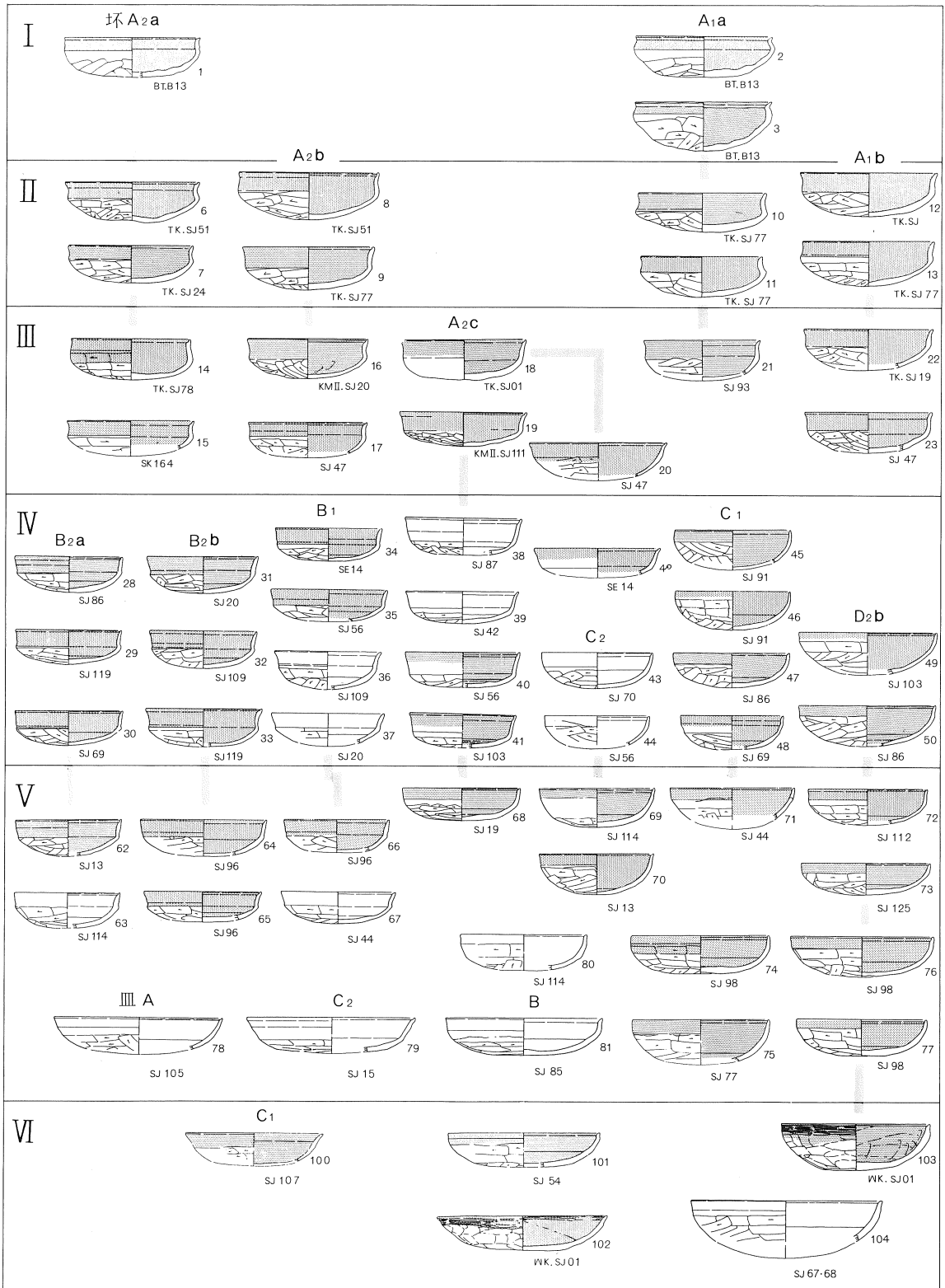
ここでは土師器・須恵器の分類と編年を行ない、集落構成の変遷を追うための前提作業としたい。7世紀代においては在地の須恵器生産自体まだ整っておらず、土師器の変遷を主に時期判定せざるを得ない状況である。8世紀以降、より具体的には鳩山窯跡群で須恵器生産が本格的に開始されるようになると、供膳器はほとんど全て須恵器に取って代わられてしまう。そこには在地の土師器生産体制の大幅な改変乃至、在地に於ける土師器生産そのものの終焉という重大な変化が内包されているものと思われるが、この問題は別に考えるとしてここでは深く触れない。A区の時期幅は7世紀中葉から10世紀前半までであるが、次回報告予定のB・C区並びに隣接する塚の越遺跡では7世紀前半の資料も含まれるため、将来の入西遺跡群全体の検討に備えて6世紀末葉前後から筆を起すこととしたい。付言すれば、入西遺跡群全体を見渡すと6世紀前半代と考えられる桑原遺跡の消滅以降、一定の断絶期間が存在するものと思われる。

土師器坏類の分類(第408図)

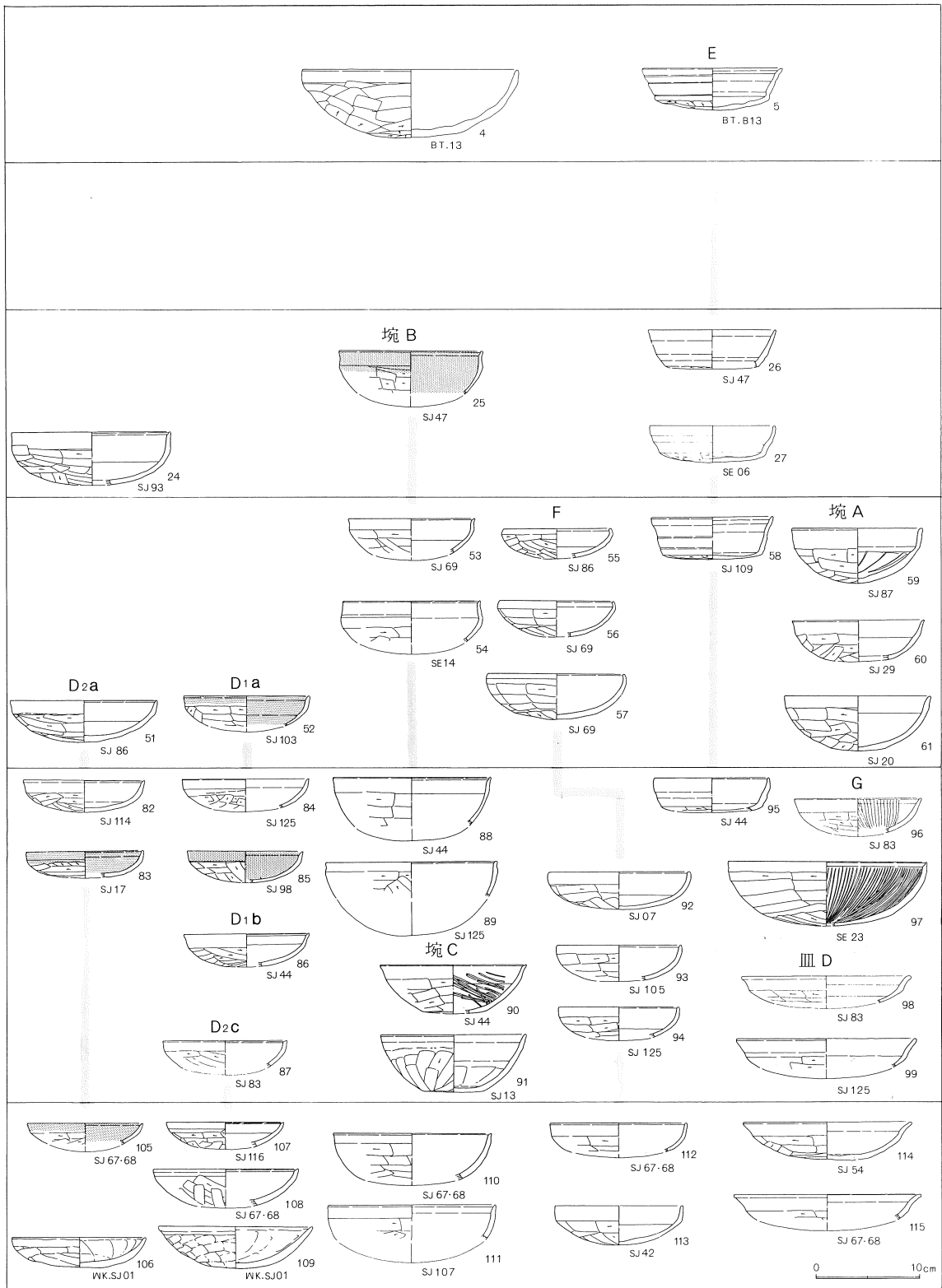
坏A いわゆる比企型坏で、口縁部がS字状に外反し、口縁部外面と内面を赤彩することを原則とする。口唇部内面に沈線をもたないもの(A₁類)、沈線または凹みをもつもの(A₂類)の2タイプがある。更に口縁部が内屈するもの(a)、ほぼ直立するもの(b)、外傾するもの(c)に分かれる。

坏B 鬼高系模倣坏の影響を多分に受けたもの。比企型坏が口縁部下位に「腰」といえるような丸みをもって底部に移行するのに対し、B類は「稜」で以て底部と区別される。口唇部沈線をもたないもの(B₁類)、沈線をもつもの(B₂類)の2者があり、更に口縁部の形状により直立するものをa類、外反するものをb類とする。いわゆる模倣坏と単純にいえないのは、口縁部沈線をもつものの存在、或いはもたないものにしても赤彩されるものが一定量含まれることにあり、やはり比企型坏の影響を認めざるを得ない。両者の折衷形態とすべきであろう。

坏C 口縁部と底部を区画する稜または腰が明確でなく口縁部から底部にそのまま続くもの。小型の深碗風の形態を示す。口唇部沈線の有無により、無沈線をC₁類、有沈線をC₂類とする。



第408图 土師器坏



坏D 口縁部が短く直立乃至外反気味に伸び丸底の底部に続く浅椀風のものを一括した。口唇部無沈線をD₁類、有沈線をD₂類とする。坏Dは幾つかのタイプに分かれ口縁部と体部の境が外面では比較的明瞭に表現されるものをa類、D₁b類としたものは口縁部が外反するもの(408図86)、D₂b類は口縁部と体部の境が不明瞭なものとした(49・50・72~77)。D₂c類は短い口縁部から底部中心に向かってやや角度を以てすぼまる皿形のもので口唇上端に沈線をもつ特徴がある(87・107・108)。

坏E 鬼高II式期からの伝統を引く有段坏で、口縁に2乃至3条の段をもつ。胎土からみて他地域からの搬入品と考えられる。

坏F 口縁内屈丸底坏(52)とその系譜下にあるもの。胎土から明らかに在地産とは異なり、他地域(粉っぽい胎土からおそらくは児玉周辺地域の可能性が高い)からの搬入品と推定される。口縁部が強内屈するものをF₁類(55~57)、内弯気味に直立するものをF₂類(92~94)、口縁部が直立し体部との境が比較的明瞭なものをF₃類(112・113)とする。

坏G 暗文坏を一括した。半球状の坩形態を呈し、口唇部に沈線をもつもの(94)ともたないもの(93)がある。

坩A 口縁部が直立または外反する大型の深坩形態を一括した。バリエーションはかなりある。大形の模倣坏系土器群を含む。

坩B 口縁部が短く直立し、口唇部内面に沈線をもつもの。形態的には深坩となる。

坩C 平底風の深坩形態を示すもの。

皿A 口径15cmを越える大型の浅椀形態ともいえるもので、内弯気味に立ち上がるもの(78)。

皿B やはり大型の浅椀形態で、口縁部は短く直立するもの(81・101)。

皿C 口縁部が外反する浅い皿形を呈するもの(79・100)。

皿D 皿Cと同様な器形をもつが、胎土から北武蔵系と考えられるもの(98・99・114・115)。当然ながら赤彩はない。

土師器甕の分類(第409・410図)

甕A 口縁部が短く強く外反し胴部に膨らみをもつもの。最大径は胴部にある。

甕B 口縁部の外反は弱く斜め上方に立ち上がるもの。胴部の膨らみは弱い。

甕C 口縁部がやや長く胴部の張りもやや強い。最大径は口縁部にある。

甕D 口縁部が短く強く外反するもの。肩が張り胴部は直線的となる。

甕E 口縁部が直線的に上方に延び端部を外反させるもの。

甕F 甕Cに類似する。口縁部の外反がやや強くなり弓状を呈する。

甕G 口縁部の形状は甕Bに類似するが、胴部の張りは殆どない。

甕H 口縁部に最大径をもち、胴部は截頭砲弾形を呈する。

甕I 甕Eに類似するが、口縁部上端の外反が強く最大径は口縁部にある。

甕J 口縁部は外反し、肩部が強く張るもの。最大径は口縁部にある。

甕K 口縁部は「く」の字状に外反し胴部上位に張りをもつ。最大径は口縁部にある。

甕L 口縁部の形状は甕Kと同様で、肩部斜め削りを施す。

甕M 口縁部の外反度はやや弱くなり、胴部上位に張りをもつ。

甕N 口縁部は弓状に外反し最大径は胴部に移行する。

甕O 口縁部は「コ」の字状に近い形状を示す。

甕P 頸部の直立が顕著でいわゆる「コ」の字状口縁甕となる。

甕Q 甕Pの退化形態で器壁はやや厚くなると共に頸部と胴部の境が弱くなり、見かけ上「く」の字に近いものや胴部の最大径が下がるものなど個体毎の変異が大きくなる。

土師器の変遷

I期

坏は前代の主系列である比企型坏A₁a類に加え、内面沈線をもつA₂a類が出現している。腰の位置は高く口径は13cm代の法量を保ちまだ大ぶりである。伴出する有段口縁坏E類も口径が大きい。甕は口縁部が短く外反するタイプで胴部中位から下位に膨らみをもつA類と、胴部の膨らみの弱いB類の両者がある。稲荷前遺跡中には良好な資料が見いだせない。東松山市舞台遺跡B区13号住、二次5号住を当てる。

II期

坏は比企型坏A₁a類・A₂a類の他、口縁部が直立気味となるb類が加わる。口縁部がやや長くなり、必然的に腰の位置はI期に比して下がってくる。口径は13cm代のももの含むが主体は12cm代に縮小する。甕はA・B類が残存する他、C～E類がみえる。稲荷前遺跡B・C区及び塚の越遺跡には該期の資料は存在するがA区では認められない。

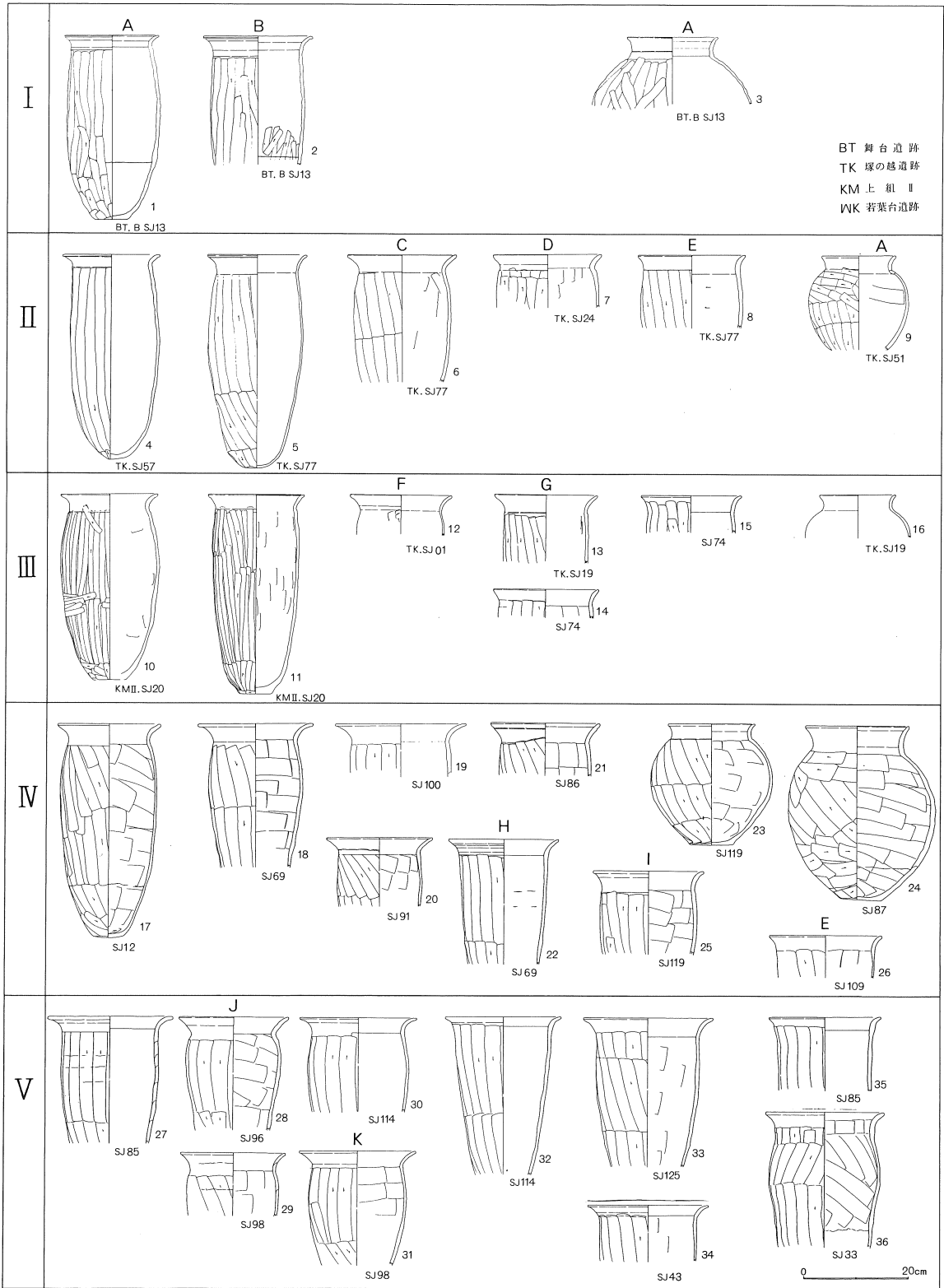
III期

坏A₁a類は残存するが口縁の内傾度は弱くなり、A₁b類との区別が不明確になる(第408図21・22)。A₂a類も少なくなる。第408図15はあまり適当な資料ではないが、A₂a類の流れを汲むものとしておきたい。該期における主体はA₂b・c類にある。口縁部が外傾するc類の出現に関しては水口に扱れば、須恵器蓋の影響下にあるとして比企型坏とは別系列に展開するとされているが(水口1989)、ここでは敢えて須恵蓋の影響を持ち出さずともA₂b類からの型式変化の中で追えるものと考えておきたい。A₂c類の中には口縁の外傾が著しく皿形に近いものも現れている(20)。全体に腰の位置が器高の1/2前後まで下がってくるとともに、口径はやや大きいものを残しながらも主体は12cm前後～11cm代まで縮小する。一方、大型の坏D類、壙B類も少量ではあるが存在する。また有段口縁坏E類は口径の縮小したものが存在するが構成比は低い。

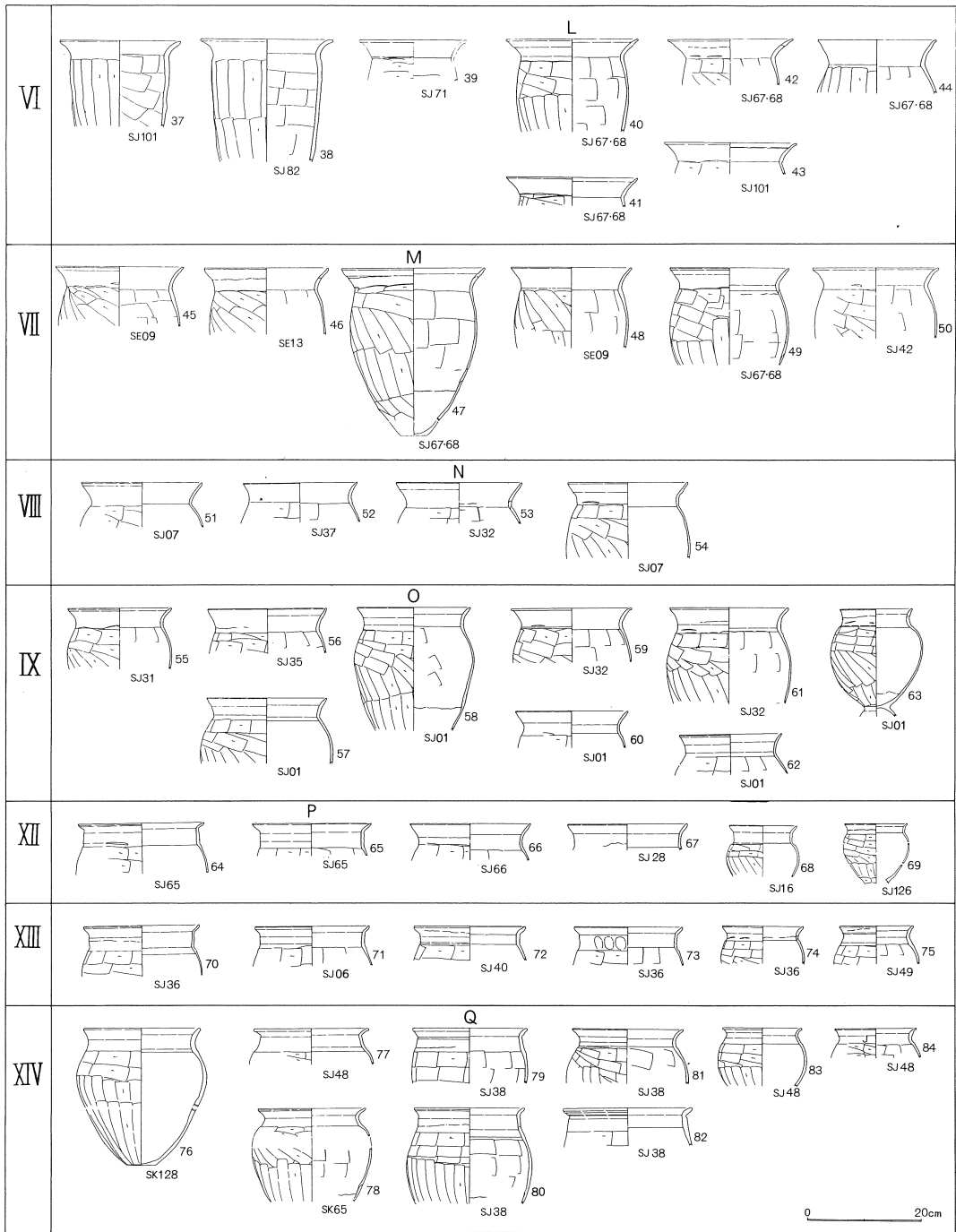
甕はA類・B類の系譜を引くものと、C類に近いがより外反のきつくなるF類、肩部に段をもつ直胴のG類、口縁部が直立気味のE類からなる。稲荷前遺跡A区において集落が出現する段階である。

IV期

A₁a類及びA₂a類の系譜で追える坏は殆どみられなくなる。A₂b類、A₂c類の系列にあると考えられるもの(第408図38～42)については口唇端部の外反は残すものの腰の位置は器高の1/2よりも下位に下がる。また外面の赤彩範囲が減少する例や当初から赤彩されないものが増加するなど、も



第409図 土師器壺・甕類の変遷(1)



第410図 土師器壺・甕類の変遷(2)

はや比企型坏の範疇から逸脱するものが顕著になる。B₂類の盛行は本期のメルクマールになる。須恵器模倣坏またはその影響の強い一群で口縁部と底部の境は「稜」で以て区画され、坏A類にみられる「腰」作りとは一線を画すものと考えている。しかし、A類の影響も口唇部内面の沈線や赤彩されるものがあるなど確実に認められ、正確には両者の折衷形態を含むものとした方が良いかもしれな

い。C類としたものは赤彩にのみ比企型坏の影響を残すが、口縁部と体部の境が不明瞭となり丸坩化した小形坏である(43~48)。A~C類に関しては小型化が最も進んだ段階で、口径は10cm前後のものが主体となり、中には10cmを切るものもみられる。

一方D₁・D₂類とした口縁部が短く直立する浅椀タイプのもは前期のD類から系譜的に連続するか否か確たる証拠はないが、A~C類に比してかなり大型の一群(口径13cm代)が、坏類の器種組成において一定量を占めるのは間違いないようである。また坏Fが新たに加わるのも本期における特徴といってよい。北武蔵系とされる一群で口唇部の内屈が強く同系のなかでも最古段階の特徴を備えるものである。小型(52)から大型品(54)まであり、胎土から児玉地域周辺から搬入された可能性が高い。坏Eは底部が扁平化し箱形を呈するものが存在する。

甕はA類の系譜を引くと考えられる長胴甕はみられる(409図17)が、口縁部が長くなり外反度が強くなる。F類(18・19)も口縁部の屈曲が強くなり、端部は水平方向に引き出されるものが現れる。また胴部が砲弾形にすぼまるH類の出現も本期にあるようだ(22)。

V期

坏Aの系譜で捉えられるものは殆どなくなる。坏Bは一定量を占める。前期に比して口径が11cm前後のやや扁平化したものと前期と殆ど変わらないものもみられる。C類は一定量存在するが、一部に深坩化が著しいものがみられる。D類は引続き存続し本期の主体となるが、全体に扁平化が進行し浅椀的なものになっていくようである(72~77・82~87)。D₁類においては口縁部が外傾するもの(86)が出現し、口縁部内面に内傾した端面をもつもの、従って口縁は尖り気味となるものが多く見受けられるようになる(85)。坏Eは本期まで残存するが、底部扁平化と小型化に形式的な退化が如実に現れている。坏Fは口縁が内屈するものに加えて内湾気味に直立するものが存在する。内面に暗文を施す坏Gは量的には少ないが本期または次期に伴うものであろう。ⅢA・B・C₂類は本期に出現するものと考えている。本来坏とすべきかもしれないが口径が大きく扁平化している点からⅢとした。ⅢBは坏のなかに類似した形態が認められ(80)、坏が大形化したものとするのが妥当であろう。

甕はF・H・EまたはI類の系譜を引くものは引き続き存続する。その他に肩部に強い張りをもつJ類は本期に出現するようである(第409図28・29)。K類は口縁部が「く」の字状に強く屈曲し胴部上半に張りをもつ。次期以降の主系列に連なるものであろう。最大径は全て口縁部にもつもので占められ、胴部調整も縦方向のヘラ削りが施される。

VI期

坏A~C類は基本的には消滅するようである。というよりも土師器坏類の減少が本期を特徴付けるといっても良い。比較的坏類の出土量の多い67・68号住居跡の様相をみると、坏はD₂C類と北武蔵系坏、大型坩、皿類で構成され小型の坏類は器種組成から欠落する。この様相は若葉台遺跡1号住等でも確認され本地域の一般的な傾向となるかもしれない。

甕は武蔵型甕の系譜に連なる「く」の字甕(40~43)が主体となり胴部上半の斜め削りも顕在化する。ほかに前期以来の系譜下にある甕もまだ存続するようである(37・38)。

VII～XIV 期

土師器坏類はもはや確認できない。67・68号住居跡出土の北武蔵系坏(113)はVII期に下がる可能性をもつが、比企型坏の流れを汲む在地産坏類の本遺跡への供給はVI期を境にほぼ停止したものと考えられる。その他の時期の土師器坏類としてはIX期後半と思われる第1号住から内面黒色処理を施した坏が1点検出されている。白色針状物質を多量に含み在地産であることは明らかであるが系統は不明である。

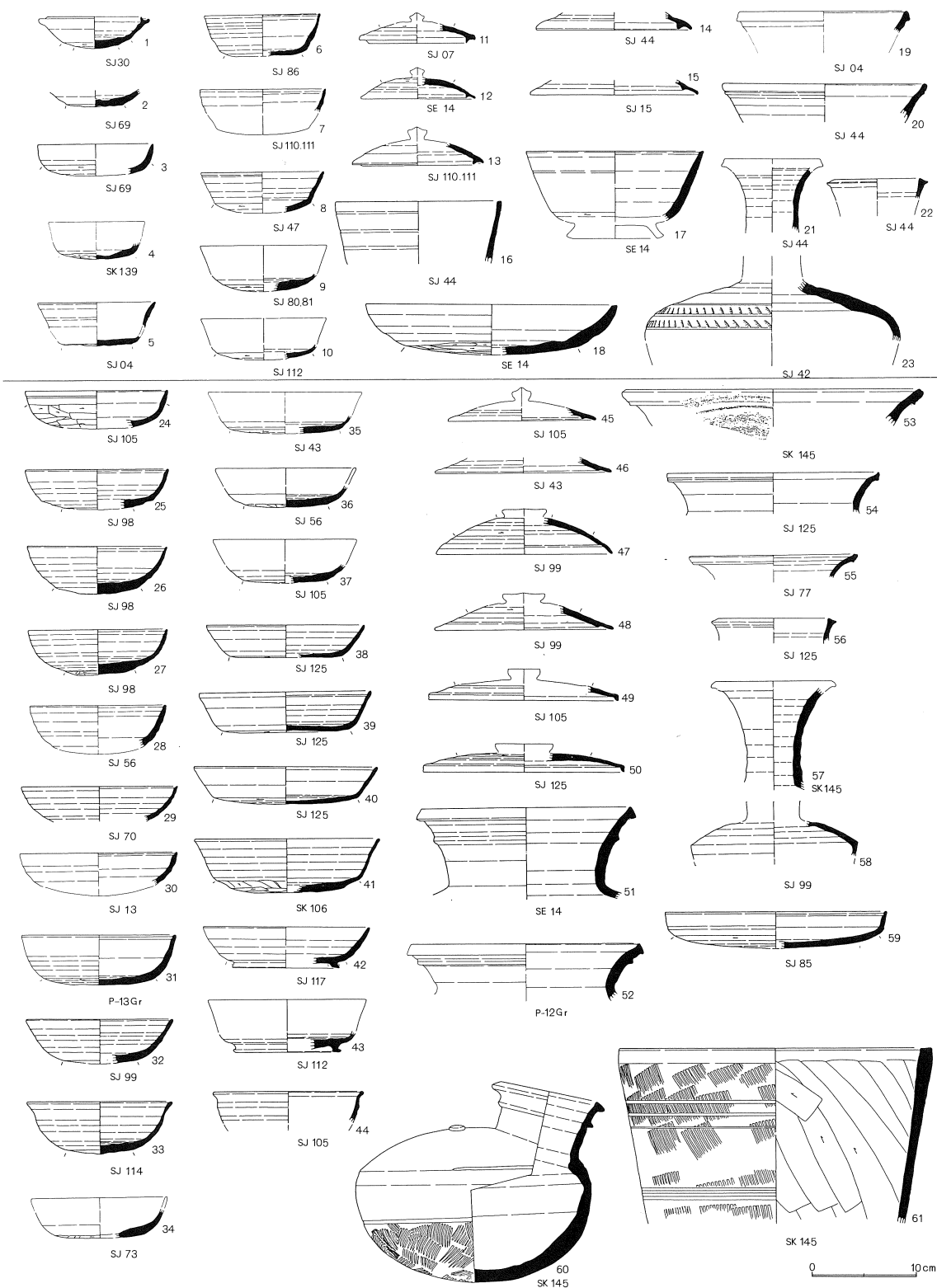
甕類は全て武蔵型甕の系譜下にあるもので統一される。口縁部が「く」の字状を呈するVII期から口縁部が「コ」の字状に屈曲するいわゆる「コ」の字甕を達成する XII・XIII 期、口縁部「コ」の字状の屈曲が形骸化し、器壁も厚くなる XIV 期という連続した変化が辿れる。XIV 期の甕には底部外面に砂が多量に付着する「砂底」のものが現れている。XIV 期以降では遺構に伴うものではないが羽釜が1点検出されているのみで、稲荷前の集落は解体する段階である。

須恵器の変遷

IV・V期(第411図)

IV期では坏は受け部をもついわゆる坏H(1)と、無台坏身とかえり蓋のセットをなす坏G(4～15)がある。3は坏としたが或いは坏H蓋かもしれない。口径が10cmに満たない小振りのものから13cm前後の比較的口径の大きなものがあり、大きく飛鳥II期～IV期の土器群を含む。17は高台坏と思われる体部に沈線、口唇部に内傾した面を有する。立野遺跡(今井1980)に類例が見いだされる。16は器種が明らかではないが同様に高台坏かもしれない。盤は厚手で大振りのものがある(18)。口唇部が平坦に切られ分厚い作りが特徴である。口縁部の立ち上がりが丸みをもち底部との区別ない点は立野遺跡以降の盤の様相とは異なり、類例に乏しい。強いて挙げれば本庄市今井遺跡群G地点5号住、畿内ではTK217号窯のものに近い形態である。甕の様相は余り明確ではないが、胴部破片をみる限りでは内面に青海波文の当て具を使うものが頻出している。瓶類には21～23のような長頸瓶が認められる。何れも東海地方からの搬入品と思われる。23は沈線区画された肩部に櫛状工具による列点文が施される。該期の須恵器には非在地産の占める割合が比較的高く、図示した中では1・2・6・11・14は東海産と推定される。

V期とした坏は前期の坏Gの系譜を引く34～37と共に、形態的には坏H蓋に類似する丸底碗風の坏(坏Cとする)が一定量検出されている点に特徴がある(25～33)。底部はヘラ切り成形されたものと思われ、その後ヘラ削りで整えられている。口縁部内面に沈線が巡るものが多く認められる(25～31)。胎土から全て在地(南比企窯跡群)産と考えられる。形態的に幾つかの種類がみられるいは前段階に位置付けられるものがあるかもしれないが伴出遺物から確実に遡るといえるものは摘出できず、取りあえず該期に含めておいたものもある。このタイプの製品を生産する窯とすると東松山市舞台遺跡C-2号窯のなかに1点類似した形態の坏が発見されているがなお時期的な隔りがある。集落遺跡からの類例も乏しいが、霞ヶ関遺跡92号住から畿内系暗文坏・山下6号窯(金井塚1990)風の坏、大型かえり蓋に伴って同様な丸底風の坏が1点検出されている。坏C類の時期を押さえる唯一の資料といえる。今後その系譜を含めて注意しなければならない土器群であるが、おそら



第411図 第Ⅳ・Ⅴ期の須恵器

く次期以降には連続しないであろう。

鳩山窯跡群の坏Aに連なる系譜と考えられるものに38～41がある。41は推定口径17.4cmを測る大型坏で底部は手持ちヘラ削り調整が施される。ヘラ削りが浅いために底部が突出した形態を取るが、それを除けば霞ヶ関遺跡16号住の製品に非常に近似している。38～41は125号住居跡からの一括品で口径15～17cm代の製品で構成され、山下6号窯乃至鳩山窯跡群H I期(渡辺1990)の坏に連なるタイプと考えられる。類例は金井遺跡29号住(昼間1989)にある。口径分布から鳩山編年H I期(以下単にH*期と略す)直前段階もしくは一部平行する段階と考えておきたい。

蓋はかえりを有するものともたないものの二者がある。かえり蓋は口唇部を結ぶ接線よりもやや内側に付される(45)古いタイプと、退化したかえりをもつもの(46～48)がある。時期差を反映したものであろうが45については土師器の様相から本段階とした。山下窯跡6号窯では大型かえり蓋は生産されず、鳩山窯跡群でもは特殊品以外一般的ではないが、45～48は胎土から南比企窯跡群産であることは確実に大型かえり蓋の生産を行なっていた未知の窯があったことを教えてくれる。46～48のかえりは痕跡程度で退化が著しい。特に48では粘土を貼付けたかえりとは異なり口縁部を強くなでることによってかえり風の段を作り出したものである。該期のかえり蓋を周辺で捜すと先に挙げた霞ヶ関遺跡16号・92号住で各3点、金井遺跡でも数点検出されている。霞ヶ関の資料については末野窯跡群産という見方(酒井1987)と南比企窯跡群産(渡辺1990)という説があるが、実見していないため確定はできないが本遺跡の資料をみる限り南比企窯跡群産としても良いように思われる。金井遺跡の資料には白色針状物質が含まれるものが認められる。

盤は85号住出土資料を本期とした(59)。実際はかなり歪みが激しく図上補正しているが、口縁部が直立し口唇部内面と外面腰の部分に沈線が巡る特色ある土器といえる。内面沈線の存在は坏Cと共通した手法といえ興味深いものがある。鳩山窯跡群には類例が見当たらず外面の沈線は立野遺跡に類例がある。しかし本例は口縁部が丸くなっており立野遺跡の平坦面をもつ口縁部の作りよりも明らかに後出するであろう。鳩山窯跡群H I期との時間的距離は測りかねるが、より先行するものと考えておきたい。

その他の器種として注目されるのが壺類の一部と平瓶である(51・52・60)。口縁部直下に断面三角形の凸帯をもつという共通点がある。ほかにも数点の出土を確認しているが、何れも胎土に白色針状物質を含み明らかに南比企窯跡群の製品と見做すことができる。この種の壺(甕か)の出土例は今のところ周辺遺跡では確認できない。地域は異なるが静岡県湖西市吉美中村遺跡A地点でまとまって出土している(高橋1990)が、全て「甕」で平瓶に凸帯を施す例は拾えない。後藤健一の論に従えば本遺跡の凸帯壺は「湖西窯跡群に特有」の甕A b類に属し、湖西編年第IV期(701～8世紀第2四半期前半)に比定されている(後藤1989)。S E 14出土の頸部に凸帯をもつ壺(51)は伴出土器からみる限り後藤の年代観とはうまく対応しない。覆土から出土したため埋没過程の混入とすべきであろうか。平瓶に関しては今のところ良好な類例が拾えず、時期的にやや遡るのではないかという疑念が拭えない面があるが、壺との口縁部形態の類似性からによって一応本期としておきたい。

ところでこの平瓶と同一土壌から出土した61の鉢形土器も注目される。残存部に把手はないが形態から大形甕と考えられる。口縁部は平坦面を有し、外面に叩き調整後沈線加飾され、内面は篋状

工具によって削り上げられるもので甗とすると特異なタイプに属する。県内では立野遺跡に類例が1例あるのみで鳩山窯跡群で生産される甗とは形態が異なる。前述の湖西窯跡群では吉美中村遺跡に類例が認められ、生産年代は湖西編年第Ⅲ期第3小期～第Ⅳ期第1小期に限定されるという(後藤前掲書)。湖西窯跡群の生産年代と本遺跡の凸帯を有する壺・平瓶及び甗の生産された年代にあまりタイムラグがないことを前提とすればこれらの器種の年代観は湖西第Ⅳ期第1小期(701～715年)前後に措ける蓋然性が高いことになる。それはともかく今後類例に注意すべき土器群である。8世紀前後の南比企窯跡群の展開に際して、他地域の窯跡の直接的・間接的影響が指摘されているが、湖西窯跡の影響を受けた窯跡が存在したことを窺わせる一例となろう。

VI・VII期(第412図)

鳩山窯跡群Ⅰ期～Ⅱ期に平行する段階とする。この段階以降は殆どの須恵器が南比企窯跡群産となる。Ⅵ期の坏は口径が15～16cm代を主体とし、底部に丸みをもつものと盤状を呈するものから成り、底部は全面ヘラ削りのものと中心部に糸切り痕を残すものがある。1～4・9～13についてはHⅠ期併行としてよいものであろうが5～8については次期に下がるかもしれない。壙(14・15)についても該期またはⅦ期であろう。蓋は環状のつまみをもつものを該期とした。18は無かえり蓋なのか特殊かえり蓋なのか良く判らない。19は内面に「内」の刻印をもつ蓋でHⅠ期段階と考えられる。印形及び形態から鳩山窯跡群広町15窯の製品の可能性が最も高い(註¹)。Ⅵ期に含まれるものと考えられる。21は鉢としたが鉄鉢形となろうか。小形壺(25)は肩部の張りが強い。23の水滴は搬入品と推定される。

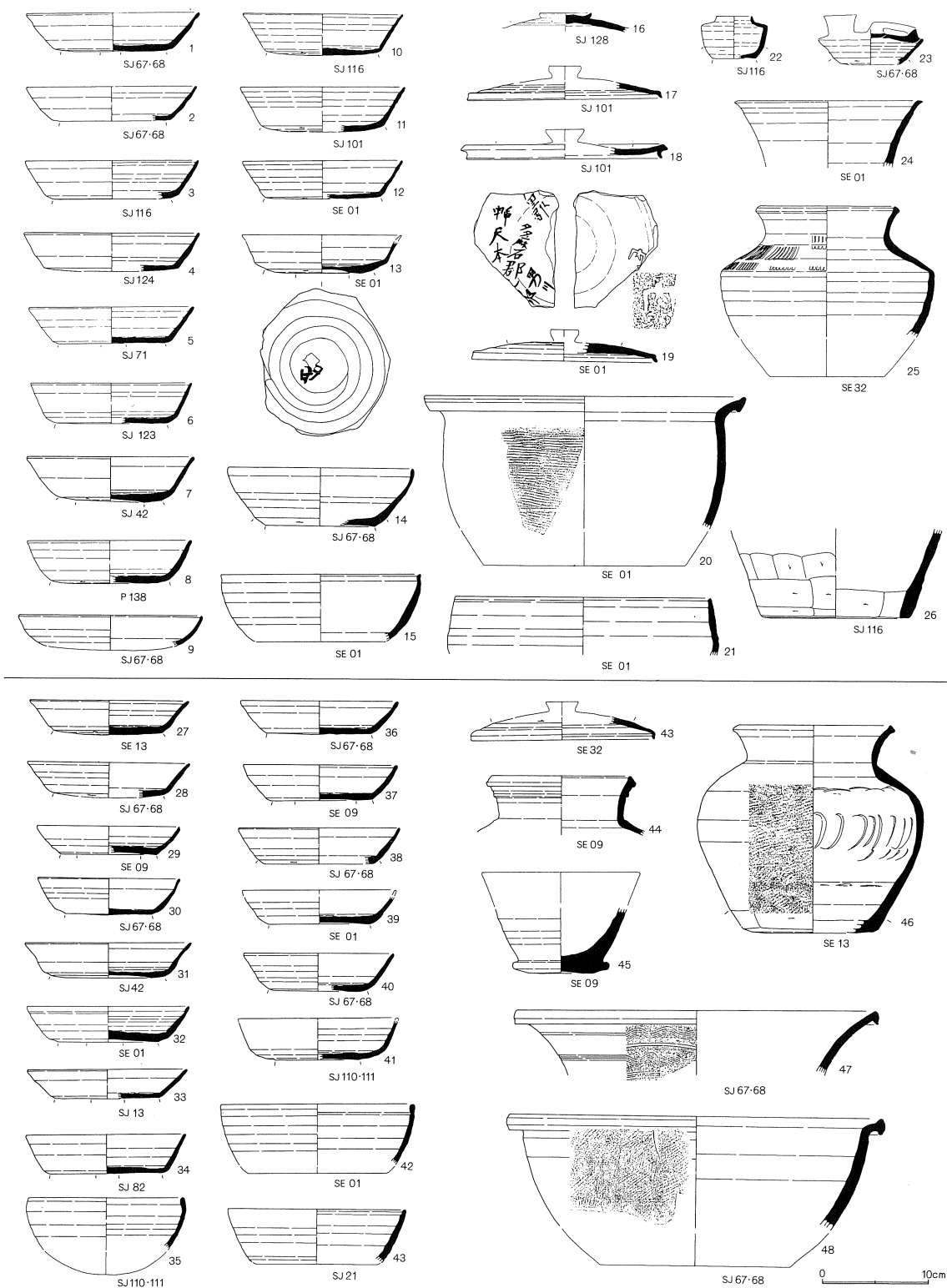
Ⅶ期の坏は27～34・36～41がある。口径が14cm代にやや縮小したものが中心となるが大形品も含まれる。Ⅵ期に比してやや扁平化したものが多いが、鳩山編年においてもその差異は微妙なものも含まれる。31・41等は前期に上がる可能性もありうる。35は立野遺跡にみられるような無台壙なのか鉄鉢とすべきか判然とせず所属年代も特定は難しい。

壙(42・43)は口縁部内面が沈線状に凹む。蓋の様相は良く判らない。45の播鉢も本期に伴うとした。小形壺は前期に比して肩部の張りがやや弱まるようである。

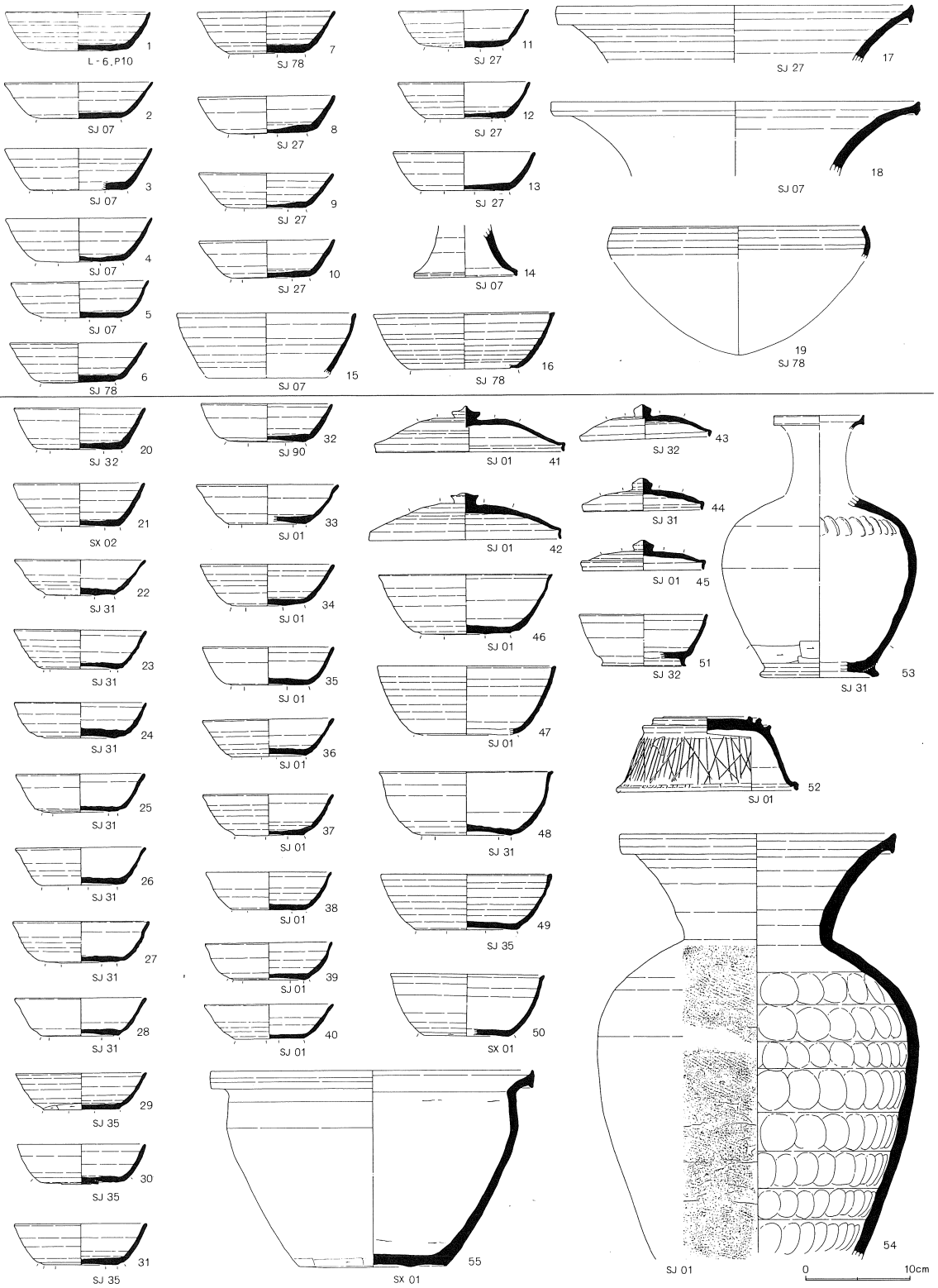
VIII・IX期(第413図)

Ⅷ期の坏は口径13cm代を主体とし、ほぼHⅢ期に併行する段階である。口径14cm前後の1～4が古から中段階、口径は13cm前後に縮小し器壁の厚い6～10・13が新段階に位置付けられる。5・11・12は相対的に薄手で体部に丸みが目立つなどⅨ期との過渡的な土器群と考える。壙は口唇部内面が肥厚するもの(16)と丸みをもつもの(15)がある。この段階には高盤(14)と鉄鉢(19)が伴うものと考えられるが小片で形態は良く判らない。

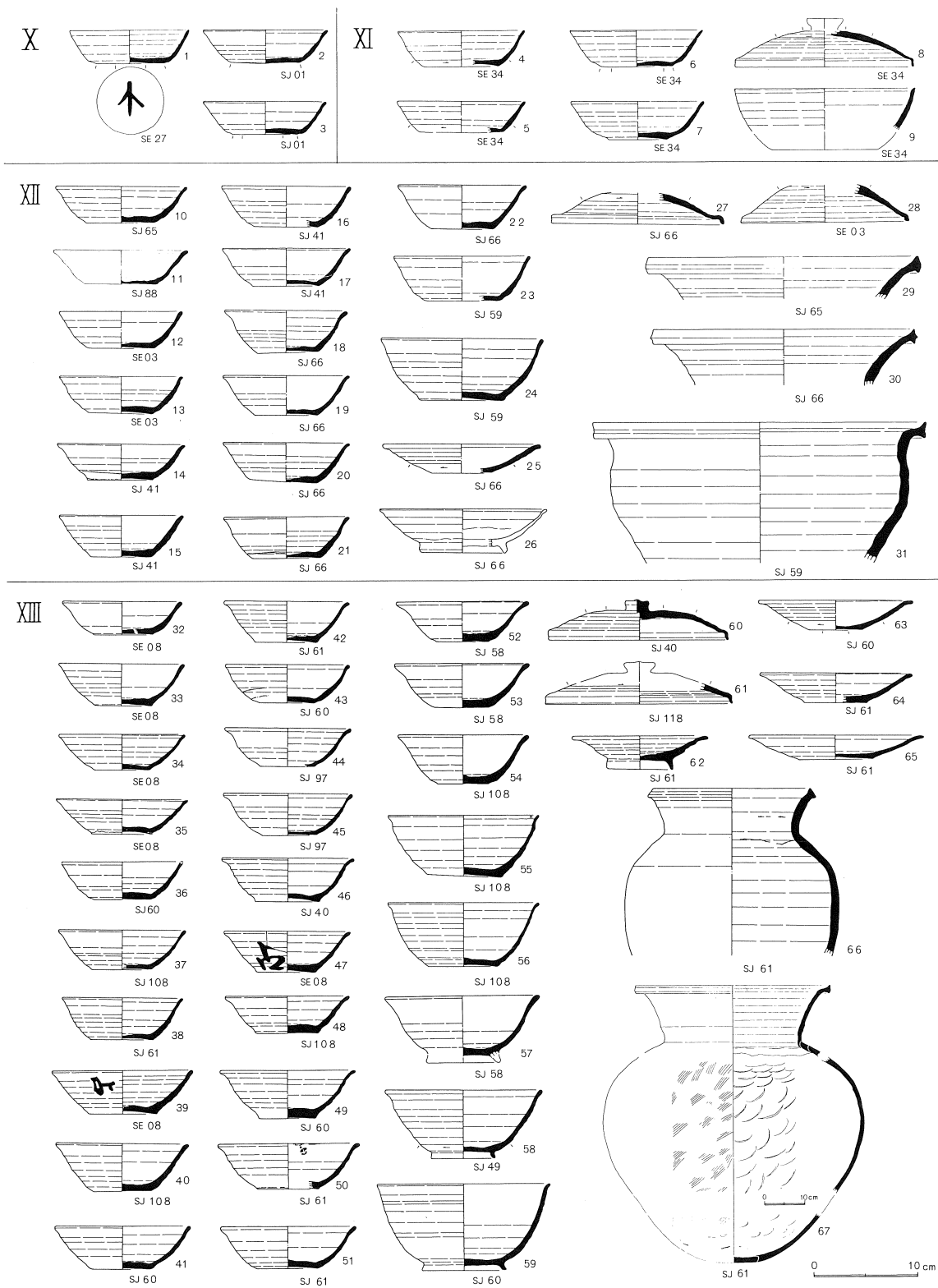
Ⅸ期の坏は口径12cm代を中心とする。前期に比して口径が縮小するとともに体部の丸みが強くなり、全体に薄手で軽量感が増幅する。底部調整は周辺ヘラ削りが主体を占めるが、30はヘラ切り風でやや特殊なものである。壙は形態差が大きい体部に丸みもち口縁が外反に傾くものが出現する。全体に器壁の薄いものが主体となるようである。蓋は小形の坏蓋と大形の壙蓋の2種がある。円面硯(52)は透しが欠如し斜格子状の沈線文のみの文様構成となり、方形透しを主体とする段階のものに比して相対的に新しい様相であることは疑いないが、硯部際と脚上端の間にも中堤が巡り古



第412図 第Ⅵ・Ⅶ期の須恵器



第413図 第八・IX期の須恵器



第414図 第X～XIII期の須恵器

手の様相も看取される。伴出須恵器の年代にほぼ合致するものと考えた。本期後半に位置付けておきたい。甕は全体を窺える資料がないが、胴部が長胴化し撫で肩の器形となっている。

X～XIII期(第414図)

X期には良好な資料がない。強いて挙げれば第1号住出土土器の新しい一群と27号井戸跡の坏程度である(1～3)。口径が最も縮小した段階で11cm大となり、底部はヘラ削り調整される。HV期でも古段階に併行する時期と捉えているが、鳩山窯跡群においても生産が縮小する段階で該当窯が1基しかなく問題を残す時期でもある。

続くXI期も資料的には貧弱で確実に本期に属するものとしては34号井戸跡を挙げ得るに過ぎない(4～9)。坏はX期に比して口径が拡大し12cm大となる。また4・5にみられるような体部下端の面取り調整が施されるものは該期の典型となるものであろう。口縁部の外反はまだみられない。蓋(8)も笠形に開くもので本期としても良いであろう。

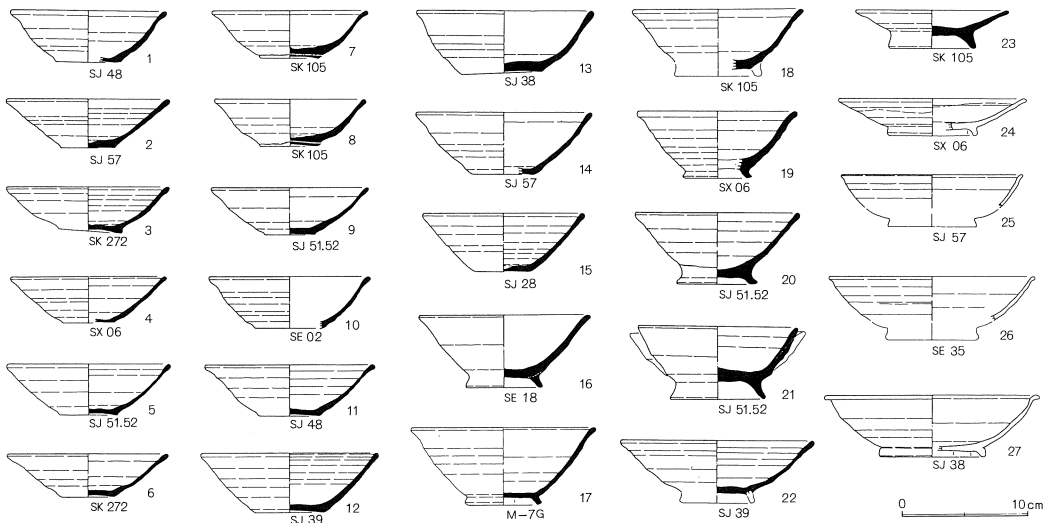
XII期とした坏は口縁部の外反が現れるようになり、口径は12cm大を中心として13cm大を含む。底径は口径の1/2以上の一団である(10～23)。その中でも18～22は口縁部の外反が強まり口底指数は1/2程に縮小したものでよりXIII期に近い。もはや底部調整を施すものは影を潜め糸切り底に揃う。坏は底部が縮小し口縁部の内弯がなくなったものが伴う(24)。本期後半の66号住には皿(25)と灰釉碗(26)が伴出する。前者は体部下端及び底部を再調整するもので伴うものと考えている。後者は東濃産光ヶ丘1号窯式と思われる^(註2)。他に大原2号窯式に擬定されるものもみられるが、灰釉陶器は本期に伴わないかもしれない。蓋は全体を知ることのできる資料がなく詳細は不明であるが、天井部の高いものとやや低く口縁が強く屈曲するものがみられる(27・28)。

XIII期とした坏は口径が11cm大を一部含みながらも12cm大が中心となる。底径が口径の1/2以下に縮小した段階のもの(32～54)で口縁部の外反が顕著になるとともに口縁部の肥厚が目立ってくる。体部は直線化したものもみられるが丸みをもったものが主体となる。碗は前期に比して口縁の外反の強いものとなり(55・56)、加えて高台を附した碗が現れる(57～59)。皿は体部下位に再調整を施すもの(63)と再調整を行わないもの(64・65)の二者がある。高台皿の初現も本期にあるようだ。

XIV期(第415図)

坏は底部の縮小化が更に進み口径の1/3近くまで減少する(1～15)。それに伴い体部は直線的に伸びようになり、口縁部は玉縁状に肥厚する傾向が認められる。口径は12cm前後のもの(1種)と13cm大のやや大振りのもの(2種)の2タイプがあるが形態的には大差ない。高台坏(碗)は2種の坏に高台を附したものと考えられる(16～22)。薄手で均質な器壁をもつ17・22と厚手でぼってりしたタイプ(18～21)の2種類がある。無台皿は良好な資料がないが高台皿は105号土壇から出土している(23)。伴出した坏は体部に丸みを残し本期でも前半代に比定されようか。底部に比して口縁部が矮小化したやや特異な作りである。

24～27は本期に含まれる遺構から出土した施釉陶器である。24は東濃産大原2号窯式、27は猿投産、無釉の灰釉系陶器でK-90号窯式か。灰釉・緑釉陶器は稻荷前A区全体で100点を越える出土量があるが、惜しむらくは小片で、且つ遺構外または他時期の遺構に混入するものが大半を占めるため、須恵器との伴出関係を特定する上で障害となっている。東濃産光ヶ丘1号窯式～丸石2号窯式、



第415図 第XIV期の須恵器

猿投産K-14号窯式～O-53号窯式とそれ以外の製品と推定されるものも若干認められるようである。灰釉陶器の編年観に従えば、本期以降11世紀代にかけても集落は存続したことになるが、残念ながら本期を最後に中世段階に至るまでの間集落が営まれた形跡は認め難いのが現状である。

年代観

各期の歴年代観については土師器に伴出する須恵器から推し量るしかないが、特に7世紀代の須恵器のそれについては現在でも一致した見解はなく流動的な部分が多く残されている。県内における律会期の須恵器編年と年代観に関しては最近酒井清治(酒井1987等)、渡辺 一(渡辺1990)両氏によって精力的な研究が進められある程度煮詰まって来た段階である。第I期は舞台遺跡B区13号住、舞台5号住をほぼ同時期と考え後者に伴う須恵器の年代観から6世紀末葉と推定しておきたい。第II期・第III期は特に定点とすべき資料がなく7世紀代の須恵器編年が流動的な現在、推測でしか言えないが、前者を7世紀1/4期を中心とした年代、後者を2/4期を中心とした時期、続く第IV期は須恵器供膳器が最も小振りとなる時期から立野遺跡に示されるやや口径の拡大した坏・蓋類を含む段階とすべきようである。7世紀3/4～4/4期にかけての年代と思われるが、土師器と須恵器の伴出関係をもう少し詰める必要がある。第V期は7世紀末葉～8世紀1/4期前半頃、続く第VI期以降は基本的には鳩山編年(渡辺1990他)に準拠した変遷で捉えている。これは距離的にも近接し、該期以降須恵器は殆どが南比企窯跡産で占められることによる。第VI期はほぼHI期併行と考え8世紀1/4期後半、第VII期はHII期併行段階(8世紀2/4期中)、第VIII期はHIII期併行(8世紀2/4後半～3/4期前半)、第IX期はHIV期併行(8世紀3/4後半～4/4期前半)、第X期はHV期併行(8世紀4/4期後半～9世紀1/4期前半)、第XI期はHVI期併行(9世紀1/4期後半～2/4期前半)、第XII期はHVII期併行(9世紀2/4期後半～3/4期前半)、第XIII期はHVIII期併行(9世紀3/4期後半～4/4期前半)、第XIV期はHIX期併行(9世紀4/4期後半～10世紀1/4期)ということになる。

比企型坏その後

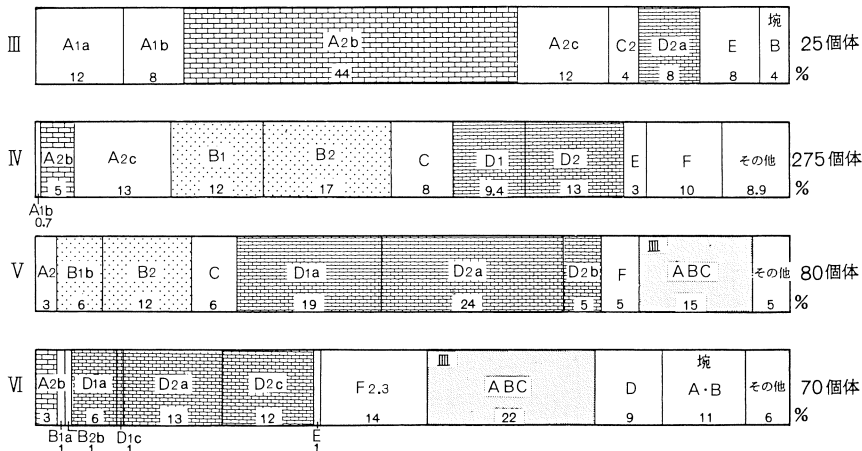
本遺跡の大きな特徴の一つとして比企型坏消滅段階のまとまった集落が検出されたことを挙げる
 ことができる。比企型坏の研究は舞台遺跡の資料を主に扱った井上肇の論考を嚆矢とし(井上1979)、
 最近では水口由紀子が総括的な論考を発表している(水口1989)。比企型坏の変遷に関してはほぼ水
 口論文で大綱は示されたといつてよい。本稿に関わりのある部分で水口の論旨を要約すると、IV段
 階第2小期(本遺跡第IV期頃)を境に「比企型坏」は消滅し、「宮都の坏A・Cの影響を受けたような土
 器群」に変化すること、本遺跡分類のA₂b・c類は比企型坏の主系列とは別に須恵器坏蓋を模倣して
 新たに出現したもの(水口はB系列とする)であるとし、名称に関して、IV段階については「比企型坏」
 と呼称するのは不相当であるとした。また渡辺 一は鳩山窯跡群を分析する中で比企型坏の終末期の
 変遷に触れ、「比企型坏」以降の在産土器群に対し「比企型坏系土器」という名称を与え、凡そ8世
 紀2/4期まで迎れるとした(渡辺1991)。

本稿の検討によっても両氏の変遷観は基本的に正しいものと考えられるが、ここでその検証とい
 う意味から各期に占める坏類の組成変化について触れてみたい(第416図)。編年図には示されない各
 類間の量的な多寡を知るためである。この表に示された原資料は本遺跡資料に限定したものである
 (註³)。混入と思われる資料に関してカウントしたために一部不都合なものも示されている(例え
 ばVI期のA類)が、大まかな傾向は示しえたものとする。

第III期では個体数が少ないために必ずしも全体的な傾向を示すとは言えないもののA₂類が主体
 となりA₁類の構成比は少ない。この段階で既にC類が少数認められるが、確実に伴うかどうかは不
 安がある。

第IV期ではA₁類は殆ど消滅し、A₂類も18%と構成比は減少している。替わってB類は29%と主体
 を占めるようになるが見掛け以上に構成比は低いようである。D類がかなりの割合を占めること(17
 %)、北武蔵系のF類が10%と一定の組成を占めることも注目される。

第V期になるとA₂類が僅かに見られるが混入の可能性が高い。B類も減少する。本期の主体を占
 めるのはD類で全体の約50%を占める。D₁a類とした中では口縁が内傾する面をもつものが多いよ



第416図 土師器供膳器の器種組成

うだ。D₂a類の構成比が高いのが本期の最大の特徴である。皿形の占める割合も確実に増加する。北武蔵系坏F類は少ないながら一定の構成比を占める。

第VI期においてはA・B・C類といった小形坏は基本的に消滅し、扁平化した坏D類と皿、大形碗で構成される。また特筆すべきことは北武蔵系坏と皿が23%を占めることである。第VII期では土師器坏類は明瞭な形では拾えない。既に本遺跡での役割は消滅したものと見てよからう。

以上土師器坏類の組成変化を述べてきたが、特に大きな変化を挙げるとするとV期とVI期にあるようだ。それはB類の消滅とD類及び皿の盛行に端的に示される。その変化は明確には示し得なかったがV期後半段階で起きているようにも思われる。それはともあれ、周辺遺跡でIV期以降の資料を探ると、霞ヶ関10号住がIV期、同69号住がIV～V期、同55・56号住、92・128号住がV期、若葉台1号住がVI期、8号住がVI期またはVII期、下石井2号住はIV期とVI期が混在するようである。花影遺跡1号住がVI期か、千代田遺跡3号住がVまたはVI期という年代と思われる。VII期となると僅かに鶴ヶ丘遺跡C区4号住を挙げ得るに過ぎない。平底化した皿Bと北武蔵系坏F₃類かと思われるものが共伴している。伴出須恵器から見てVI期には上がらないであろう。それ以降は比企型坏の流れを汲む土器群は完全に消滅すると見てよからう。

水口が指摘したいいわゆる「比企型坏」が消滅した段階以降もその流れを汲む土器群は以前として存続し少なくともVI期までは器種構成上一定の比率を占めていたのは明らかである。確かに比企型坏を本来の形態、即ち口縁部がS字状に強く屈曲し、口縁部外面と内面を赤彩するというものに限定的に解釈すればIII乃至IV期をもって型式的連続性は解体してしまう、だが、その後も胎土・色調・成形技法とも何ら変わらない土器群が存続するのも事実で、在地に於ける土師器生産を重視すれば「比企型坏」の消滅をあまり強調するのも問題があるものと考えている。ここでは水口の言う「比企型坏」消滅期以降の土器群、具体的には坏B₂類・C・D類と皿A～C類を主要構成器種とする坏類に関して取りあえず「続比企型坏」として類型化すると^(註3)、寧ろVI期乃至VII期を境にこの「続比企型坏」が消滅する段階こそ土師器生産の大きな改変を示す現象として注目されなければならないであろう。

いうまでもなくVI期は鳩山窯跡群の生産が本格化した時期で、在地産土師器坏類の消滅と須恵器生産の本格化は表裏一体の出来事とみたほうがよい。現象的には民需を当初から強く志向した鳩山窯跡群をはじめとする南比企窯跡群産須恵器が土師器供膳器を駆逐したものと理解されるがその意味するところは大きい。

一つには、坏類の生産を放棄した段階以降でも土師器甕類は第XIV期まで引続き煮沸形態として存続するのもまた事実で、この現象を如何に捉えるかということが問題となる。土師器生産者が供膳器生産を止め甕の生産に生き残りを賭けたのか、それとも土師器生産は完全にストップし土師器甕は他地域からの搬入品を充当したのかということである。結論先取的にいえば後者と考えている。比企・入間郡域において7～8世紀代の土師器生産遺跡が発見されていない現在において結論を出すのは尚早かもしれないが、土師器甕の胎土を観察することによってもある程度の見通しは得られるであろう。当地域の須恵器の多くには白色針状物質が含まれ、南比企窯跡群の生産品であることを示すメルクマールとされていることは既に良く知られている。この白色針状物質は須恵器のみならず入西遺跡群を例に取れば、縄文土器から中耕遺跡の弥生終末から古墳時代初頭の土器、桑

原遺跡の鬼高期の比企型坏と土師器甕、そして本遺跡のⅢ～Ⅴ期の坏類と甕にもかなりの確率で含まれる在地産土器の特徴でもある。ところが少なくとも凶化したⅦ期以降の土師器甕には白色針状物質が明瞭に確認されるものは皆無とってよい。Ⅶ期以降の甕とは、いわゆる武蔵型甕として類型化され「コ」の字状口縁甕の系譜に繋がる薄手で均質な器壁をもつ特徴的な土器である。全ての甕を詳細に観察したわけではなく、他遺跡の資料についても実見していないので現状では感触としか言いようがないが、遅くともⅦ期、おそらくそれ以前から武蔵型甕の系列下の甕は非在地産である可能性が高いものと推定している。勿論、「非在地産」という意味は白色針状物質を含む粘土を共有する地域以外ということを示すのみで特定地域を示してはいないし、武蔵型甕はその名の示すとおり分布範囲は武蔵国全域に及んでいる。産地同定を進めるにあたっては科学的な胎土分析を経なければならないものであるが、敢えて憶測を重ねればその供給元は児玉周辺の北武蔵地域が最も可能性が高いものと考えている。

その微証として北武蔵系坏・皿の存在を挙げたい。Ⅳ期で10%、Ⅴ期で5%、Ⅵ期では23%を占め、比企型坏の中心地域と目される本遺跡において特にⅥ期の23%はかなり高率といえる。何も本遺跡に限らず7世紀後半から8世紀前半にかけての比企・入間地域の集落遺跡では報告書で見る限り北武蔵系坏かと思われる土器を拾うことはさほど難しいことではない。このことから見ても土師器坏のみならず煮沸形態として不可欠な甕も相当量流入していると考えた方が自然ではなかろうか。こうした視点は既に古代北武蔵地域の供膳器の諸相を分析した中村倉司によって「供膳器に須恵器を充当した主に南部地域では、土師器生産は行なわれず、煮沸器である土師器甕も他地域から供給した」(中村1984)ものと把握されている。更に中村によれば律令期それも初期から須恵器供給が郡を越えて容易に行ない得た背景に、「ずっと以前の鬼高期」から在地間の広域に渡る「交通関係」が存在したと推定されている(中村前掲書)。

北武蔵系坏と武蔵型甕の故地の一つと考えられる児玉地方では7世紀後半以降10世紀に至るまで土師器坏・甕が型式的連続性を維持しており、交易を前提とした集中的かつ一貫した生産体制下にあったことが指摘されている(鈴木1983)。鈴木によって指摘された土師器生産における第2の画期、即ち土師器甕の斉一化と手法の安定化にみられる継続的な生産が進展した段階は、本地域において土師器生産がストップした時期にほぼ対応するようで、こうした背景には土師器甕の需要増大が前提にあったとみる方が合理的であろう。同じ土師器生産でありながら比企型坏と北武蔵系坏の生産体制の在り方は対照的ですからある。須恵器生産に比重を移した比企・入間地域と片や主要須恵器産地から一定の距離を保ち、寧ろ須恵器の欠を補う意味での土師器坏・甕生産を行ない得た北武蔵地域と言い換えることもでき、その意味では相互に補完的な生産であったともいえる。更に言えば児玉地域の大集落である将監塚・古井戸遺跡では8世紀初頭以降、8世紀中葉の一時期を除いて9世紀全般にわたり、南比企産須恵器が安定的に供給されているという(赤熊1988)。比企・入間地域と児玉地域における土器供給関係を示すものとして示唆的であるが、それはともかく8世紀前半代以降「非土師器生産地帯」となる本地域に煮沸具として不可欠な土師器甕をどの地域からいかなる流通システムで供給されたのか、全ては今後の土師器甕の検討にかかっている。

それとともに土師器工人の行末も考える必要がある。古墳時代後期の土師器生産は雑徭的労働

編成に基づく臨時的生産(田中1991)という見方からすれば、農業生産者に戻ったとすることができる。一方、7世紀代に焼かれた須恵器には首長層の要求により土師器工人の手になるものが存在した(小用・根平窯跡)と想定されている(高橋1991)。土師器工人にも須恵器を焼くことができた訳である。「土器生産」という共通性を重視するならば、南比企窯跡群が本格的で継続的な生産を開始する段階で、在地の土師器工人が須恵器工人組織の中に取り込まれていった可能性をも残しておきたい。比企型坏消滅後の土師器生産と流通の問題を以上のような仮説として捉えてみた。未だ論証以前の段階といわねばならないが今後の検討課題としたい。

註1 渡辺 一氏より御教示頂いた。感謝申し上げたい。生産地のみならず生産窯を特定できる極めて稀な一例となろう。なお「内」の刻印を有する須恵器が生産地以外から出土したのも本例が唯一のようである。

註2 施釉陶器に関しては愛知県陶磁資料館井上喜久男氏に御教示いただいた。

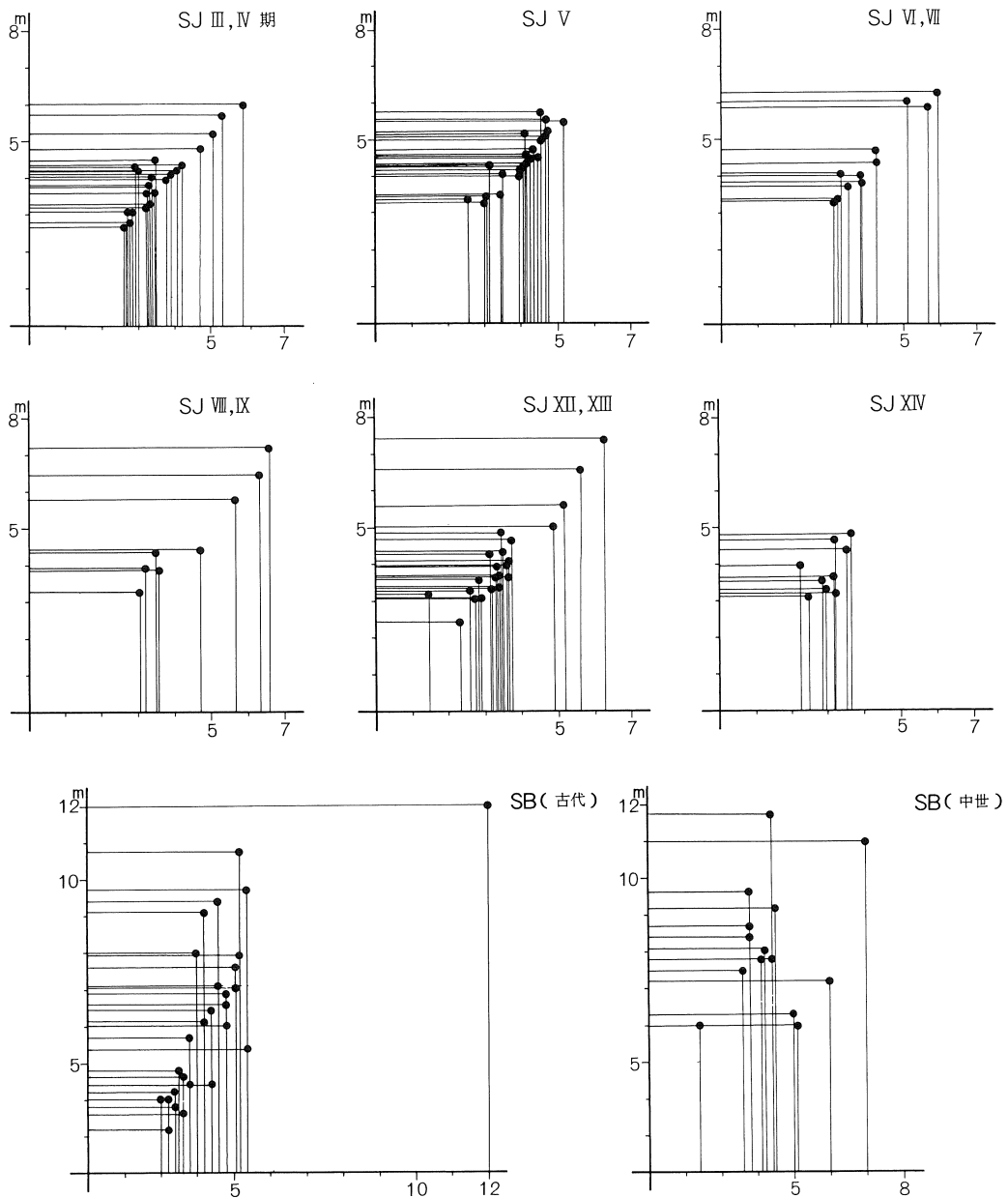
註3 個体数の算出に用いた資料はⅢ期がS J 46・47・74・93、Ⅳ期がS J 02・04・09・11・12・14・20・53・56・64・69・70・80・81・86・87・91・100・103・109・113・115・119・131、Ⅴ期がS J 13・15・17・19・24・33・77・85・96・98・99・105・106・114・117・125・129、Ⅵ期がS J 54・67・68である。

註4 比企型坏消滅後の土器群に渡辺氏は「比企型坏系土器」という名称を与えている。系譜関係が表わされており理解しやすいのではあるが、主体となる分布地域外で出土する坏を「**系坏」と呼ぶ場合がままあり、やや紛らわしい点があることも否めない。土器生産や手法的な面から比企型坏との系統的な連続性を示すものとしてここでは「統比企型坏」と呼んでおきたい。なお「比企型坏」の名称に関して言えば、水口女氏は変更の必要を主張しているが、本遺跡に隣接する桑原遺跡や棚田遺跡では6世紀初頭段階から比企型坏が供膳器の主体として存在しており、周辺地域が比企型坏の主要分布範囲に含まれることは明らかである。現在の位置関係からみると入間郡北部であるが比企郡とも境を接する地域でもある。主要分布地域が隣接する比企郡にも伸びることはほぼ確実といえ、その意味で特に名称変更の必要はないと考えている。

2. 遺構について

住居の規模と主軸分布

本遺跡で発見された住居跡は135軒ある。そのなかで規模の判明したものに関して住居規模を表わしたものが第417図である。時期的な傾向を知るために一応6期に区分してY軸に長辺、X軸に短辺を示したが、それによればⅢ・Ⅳ期では一辺2.5m～6m前後に分布し長軸4.5m以下の比較的小型住居の構成比が高いことが判る。全体に長軸と短軸の差の少ない方形系の住居が多い点も指摘できる。ただ長軸4m前後の住居では長方形に偏したものと方形系に分かれるようである。Ⅴ期になると住居規模のバラツキがより少なくなり長軸4～6m、短軸4～5m付近に集中する。方形系になるものよりも長軸と短軸の差が若干見られるいわば長方形系にシフトした住居形態が主流となるようだ。Ⅵ・Ⅶ期では小型の一群と6m前後の大型の一群に分化する傾向が認められ、一辺5m前後の住居域に空白帯が認められる。こうした分化の傾向はⅧ～ⅩⅢ期にも続くようであるが、ⅩⅡ・ⅩⅢ期では長軸3～4m前後のより小型の住居が主体となると考えられる。それとともに長方形系住居に片寄る傾向が顕在化している。集落解体期のⅩⅣ期になると前期以来の小型住居のみで構成され大型住居が欠落するようになる。しかし特に住居の小型化が進行したとは言えない。より細かく見ると長軸4m代の住居は長方形系、3m代のより小型の一群は方形系住居形態を取る傾向にあると



第417図 住居・掘立柱建物跡の規模

いえよう。全般的な傾向を挙げるとすれば3m代の小型住居から6m前後の比較的大型住居まで連続して分布する7世紀代、小型のものとやや大型の一群に分化する8～9世紀後半代、小型の住居のみで構成される9世紀末から10世紀初頭ということになるか。

主軸分布については第418図に示した。それによれば第III期～V期では北～西へ約30°の偏差のなかにおさまるものが大半であることが判る。東カマドをもつものも90°ずらせばほぼ同様の偏差のなかに入る。V期・VI期になっても基本的には変化ないが座標北から東に若干ブレるものがみられるようになる。VII期の状況は掴み難いが、VIII・IX期ではほぼ座標北に集中する傾向が顕著に現れる。

X・XI期は該当住居がない。XII期ではほぼ東、XIII期では座標北を向くものと90°ずれて東を指向するものに分かれる。XIV期でも傾向的には大差ないがより東にぶれるものが認められる。大きくみて北から北西を指向する7世紀後半～8世紀初頭、北を指向する8世紀後半、北と東に分化する9世紀後半以降という変化が認められよう。

住居にはカマドが設置されるのが常であるが、なかには住居と全く同様な形態を取りながらカマドが検出されなかった例が数軒認められる。当初より存在しなかったのか遺存状態が悪い等の理由により検出できなかったのか不明なものもあるが、構築段階で未設置のものも確実に存在する。本来竪穴状遺構とすべきもので区分が本報告でもあいまいなまま掲載している。ほぼ全体が検出されながらカマドの認められなかったものには23・27・56号住がある。23号住は北側に隣接する1～3号竪穴状遺構と形態的にも時期的にも一致し同様な性格をもったものとした方が良いが、性格そのものを特定するには至らなかった。27号住は床面に段差をもつ特殊な住居である。中央部に攪乱を受けるがカマドは未検出である。56号住は床面の中央にやや深いピットを保有する。井戸、或いは祭祀に関連した遺構との見方もできるが現状では性格不明とせざるを得ない。

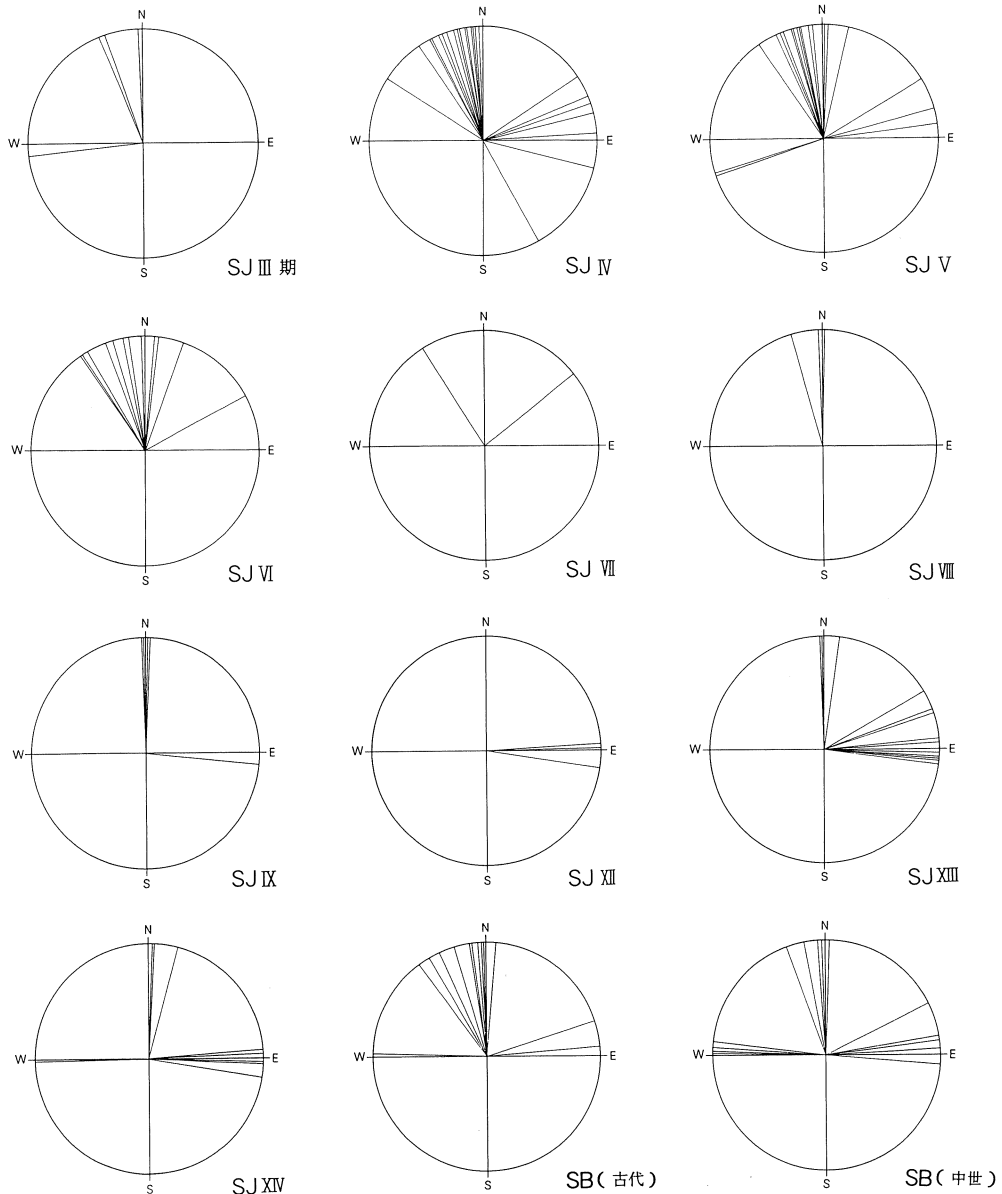
カマドの構造については全般的に遺存状態が悪いためもあるが使用時の様子が明確に捉えられるものは殆どなかった。詳細は各遺構説明で述べたとおりであるが、袖には砂質粘土を使用するものが多く、幾つかの住居では袖に土師器甕を補強材として用いられたことが確認された。設置位置は北壁に設置されるものが最も多く、次いで東壁、西壁または南壁に設けられるものもみられるが該当軒数は少ない。東カマドが優勢な児玉地方例えば将監塚・古井戸遺跡等とは好対照に北カマド優勢地域といえようか。但し、本遺跡でもXII期以降では東カマドが北カマドを凌駕するようになり明確な逆転が認められる。

堀立柱建物跡の規模と主軸分布

本遺跡から検出された堀立柱建物は52棟を数える。建物の性格上、構築年代を特定できるものは数少なく、多くは切り合い関係や主軸方位からの推定によるもので住居に比して推定年代の確度の低さは否めない。一応古代の建物と推定したものは39棟認められた。

規模は1×1間、2×1間、2×2間という小型の建物が推定を含めて14棟、その内総柱構造が7棟を占める。3×2間は14棟と最も多く、総柱が1棟(S B06)、妻側に庇をもつものが1棟(S B36)、束柱を1本有するものが1棟(S B13)含まれるほかは全て側柱建物である。それ以外は3×3間、4×2間、5×2間、5×3間、5×5間(または3×3間の4面庇)が各1棟、4×2間に妻庇または束柱をもつ5×2間の建物が1棟という内訳となる。

このうち建物規模の確定できるものに関して桁行、梁行距離をグラフに落したものが第417図である。これによればS B09の12m×12m、占有面積144㎡を最大とし、桁行9～11m、梁行4～5m程の大型建物が続く。占有面積は50㎡前後で、梁行に対し桁行が2倍程もある長方形建物で占められる。当然桁行は4乃至5間の構成を取るもので柱穴掘方も大型でしっかりした作りである。全体的に3×2間が多いことにも拠るが、桁行6～7m、梁行4～5mの中型建物は最も多く存在する。中型建物といっても竪穴住居に置き換えれば本遺跡の大型住居に匹敵する規模をもち、その多くは



第418図 住居・掘立柱建物跡の主軸分布

平地式の居住施設と考えられる。しかし、東柱をもつ S B 13は住居内に床張り部分を有していた可能性が高く、総柱の S B 06に至っては住居とすれば有床形式、非住居とすると大型の倉庫である可能性をもち、本遺跡の集落構成を考える上で重視すべき建物といえる。

2×2間の建物は東柱をもつものが多く規模も小さい。第417図でみると、桁行5m以下、梁行3m~4.4mの範囲に分布し面積でいうと10~20㎡程となる。桁行・梁行共に同一寸法のもの、やや差のある一群に分かれるようである。東柱をもつもの、言い換えれば総柱建物は通例通り高床倉庫、より具体的には穀倉と捉えるのが妥当であろう。東柱のないものに関して住居施設とは認め難く、構造的に耐えうるものならば高床倉庫的な使用のされ方であったものと考えたい。

3×2間の建物を居住施設、2×2間の総柱建物を穀倉としたところでやはり問題は桁行10m前後の大型建物(S B03~05・36)と3×3間の身舎におそらく4面庇が設けられるS B09であろう。S B36には不明な点があるが他の建物は何れも掘方が大型で構造的にも中規模以下の建物との格差は大きい。出現時期も限定され集落内でもより有力な階層の居住施設、乃至公的な性格も考える必要があるだろう。特にS B09においては規模は他を圧しており、3×3間の総柱構造の身舎、4面に庇が付く可能性があること等通常の建物とは明らかに性格の異なるものである。寺院或いは豪族居館の形態とでもいえようか。後節において再述したい。

古代の建物の主軸分布をみると(第418図)、北を指向するもの、北からやや西に振れるもの、そして東西方向を向く一群にほぼ集中し一定の主軸規制が存在したことは明らかである。更にその指し示す方位は住居の主軸方位分布とよく一致しており、竪穴住居と掘立柱建物が有機的な関係を以て構築されたことを物語るものといえる。掘立柱建物跡の年代を推定する際主軸方位を無視し得ない所以でもある。

3. 集落の変遷

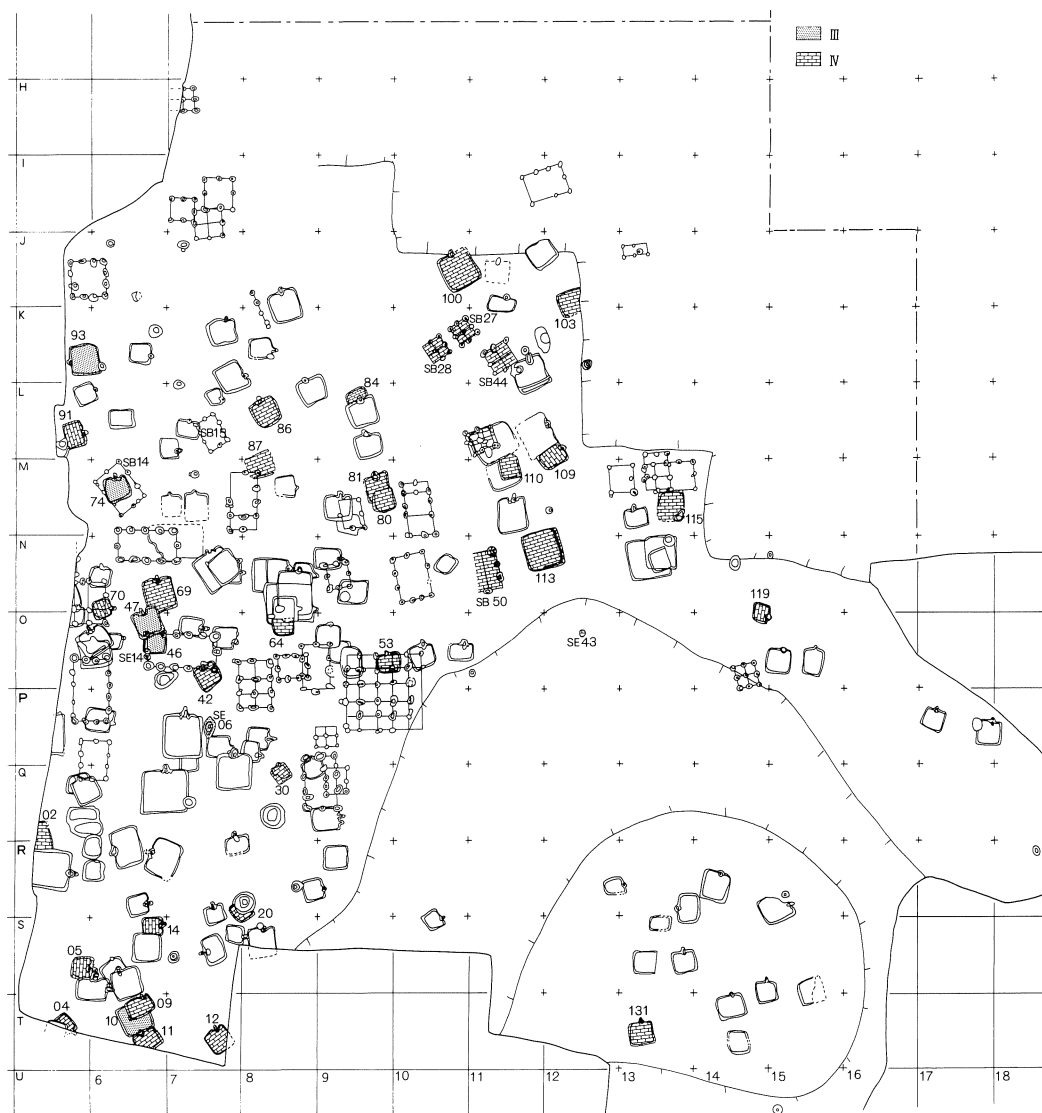
最近の集落論に関する考古学的成果とすると群馬県黒井峰・中筋遺跡に代表される集落景観の抽出はとりわけ重要である。柴垣に囲まれた「屋敷」的空間内に竪穴住居・平地式住居・平地式建物・掘立柱倉庫・家畜小屋・家庭菜園的な小区画畑地が存在し、こうした家屋群を結ぶ「径」と祭祀場、水場等も付属するなど古墳時代後期の具体的な集落イメージを植えつけてくれた点でまさに衝撃的でした(石井1990)。律令期集落においても集落の移動から集落構成の画期を措定する論点(利根川1982)、集落内の径と広場の存在と屋敷地の成立の見通し(高橋1983)、集落内の方形区画の存在(都出1989)等社会構成を考える上で重要な分析視角が提唱されている。しかし、以下に示す内容は竪穴住居と掘立柱建物跡から構成されるA区の集落を時期的に分解して羅列したにすぎず、集落論の課題に接近するにはあまりに貧弱な内容しかもたないが、A区内の集落構成の変化を概括的には捉えられたものと思う。B・C区の整理が終了した段階で改めて入西遺跡群全体の律令期集落の諸相を分析することとしたい。

第I～II期

A区には集落は形成されていない。浅谷を隔てて北側に隣接するB・C区、南側の一段高い台地上に占地する塚の越遺跡では確実に該期の集落が形成されており両者の間に位置するA区において集落が存在しない理由もまた重要であろう。両集落とも水田耕作依存型集落であったことは疑いないが全て水稻耕作に依存していたわけではあるまい。周囲に畑地をもち、両者の複合的な経営をなしていたものと考えればこの場が畑地あるいは共有地であったかもしれない。

第III期(第419図)

S J 10・46・47・74・93を当てる。A区において集落が形成された段階である。調査区の西端のみに占地は限定されている。S J 46・47は重複しており前者から後者へという近接時期の建て替へとみられる。この2軒とS J 74、93は視覚的には等間隔にかつ直線的に並んでいる。主軸方位からみるとS J 46と93、47と74の2つのグループに分けることができるが、時期差を反映したもののかは

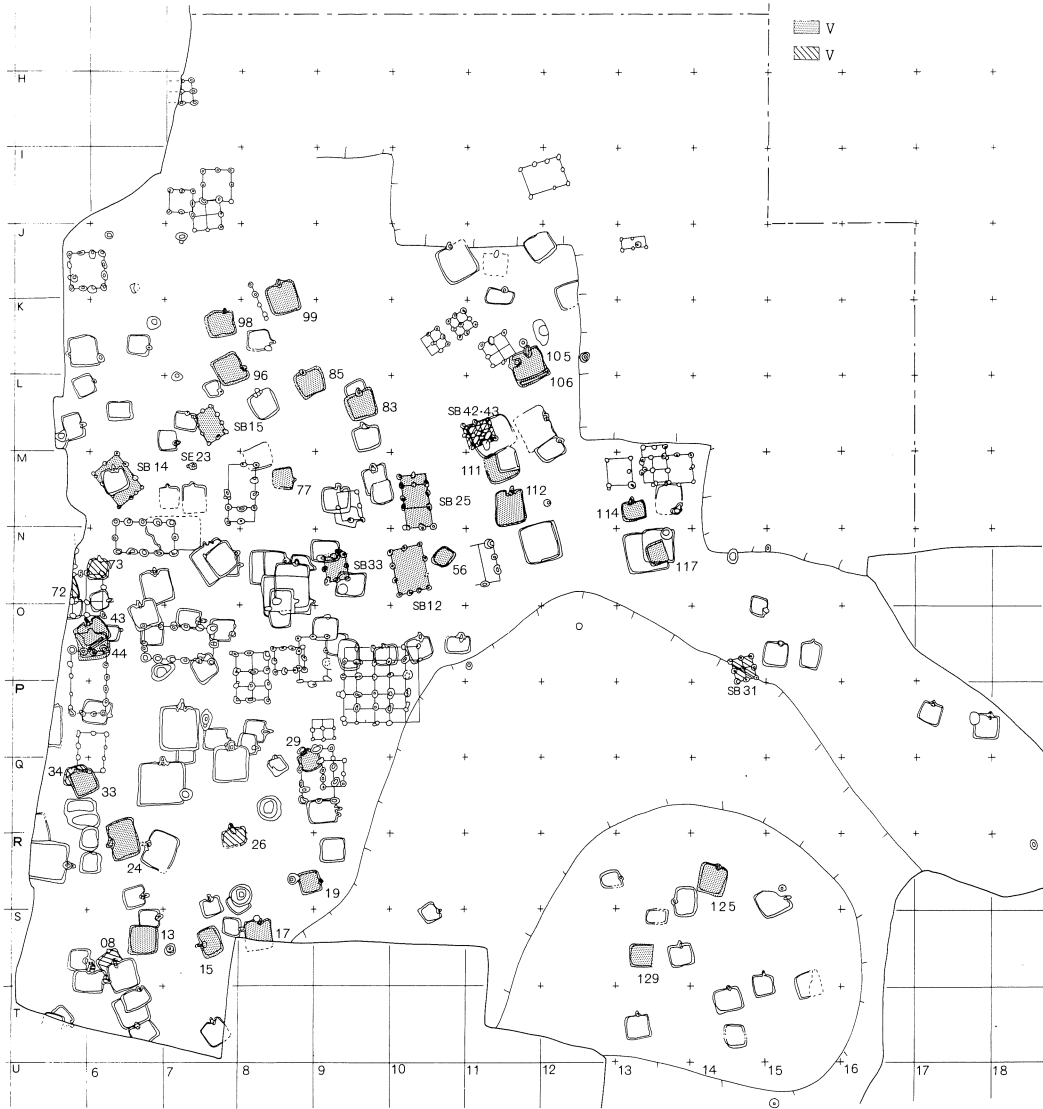


第419図 第Ⅲ・Ⅳ期の集落

判然としない。ただS J 74には出土土器片中に土師器杯C₂類とD₂a類が認められよりIV期に近い様相とすることができる。そうした観点からすれば南群ではS J 46→47、北群ではS J 93→73へそれぞれ近接した場所に建て替えられたものと理解できよう。S J 10に関しては重複する住居との切り合い関係から該期としたもので出土遺物もなく詳細は不明であるが、調査区最南端の住居群のフロンティアであろう。掘立柱建物跡は摘出できない。伴う井戸はあまり明確にできないがS E 06が該期に相当する可能性を有する。

第IV期(第419図)

前期から一転して集落が遺跡の全域に拡大する段階である。該期に含まれる住居は極めて多く、S J 02・04・05・09・11・12・14・30・42・53・64・69・70・80・81・84・86・87・91・100・103・109・110・113・115・



第420図 第V期の集落

119・131の27軒が該当する。検出された住居総数の約20%に及ぶことになる。これは一つにはIV期とした土器群の細分が難しく結果的に実年代幅が他期に比して長く取らざるを得なかったことに起因しているが、単にそれだけではなかろう。隣接する塚の越遺跡ではこの段階に集落が極端に衰微することが指摘されており(屋間1991)、塚の越遺跡からより可耕地に近い稲荷前遺跡A区に移動した集団があったものと推定しておきたい。またそれとともに積極的な水田開発といった生産力の増大による人口増加も主因として考えなければならないであろう。

前期との繋がりで言えば、S J 10→09または11、S J 47→69、S J 74→91へ継続したものと推定される。全体的に散漫な分布状態を示すが、調査区南西端の地域に比較的まとまる様相が看取される。調査区南東部分の島状に孤立した地区にも該期に至って住居が現れる。主軸分布をみると大方

は北北西を指向するようである。

掘立柱建物跡はおそらく該期から出現するものとみている。S B50は出土遺物から該期としたが全容が不明で不安を残す。該期において最大規模のS J 113と軸を揃えて隣接している点は注意を要する。その他にS B27・28・44は主軸方位もほぼ一致し近接住居の位置関係から本期に伴うものと推定した。44はともかく27・28は高床倉庫として良いであろう。また一応次期としたS B14・15も主軸方位からみると本期に含めた方が理解しやすいが、どちらの時期に伴うかは明確にはできない。いずれにせよ倉庫を含む掘立柱建物跡と竪穴住居という組み合わせは本期には出現していたものと理解しておきたい。井戸ではS E14・43が本期に伴うであろう。

V期(第420図)

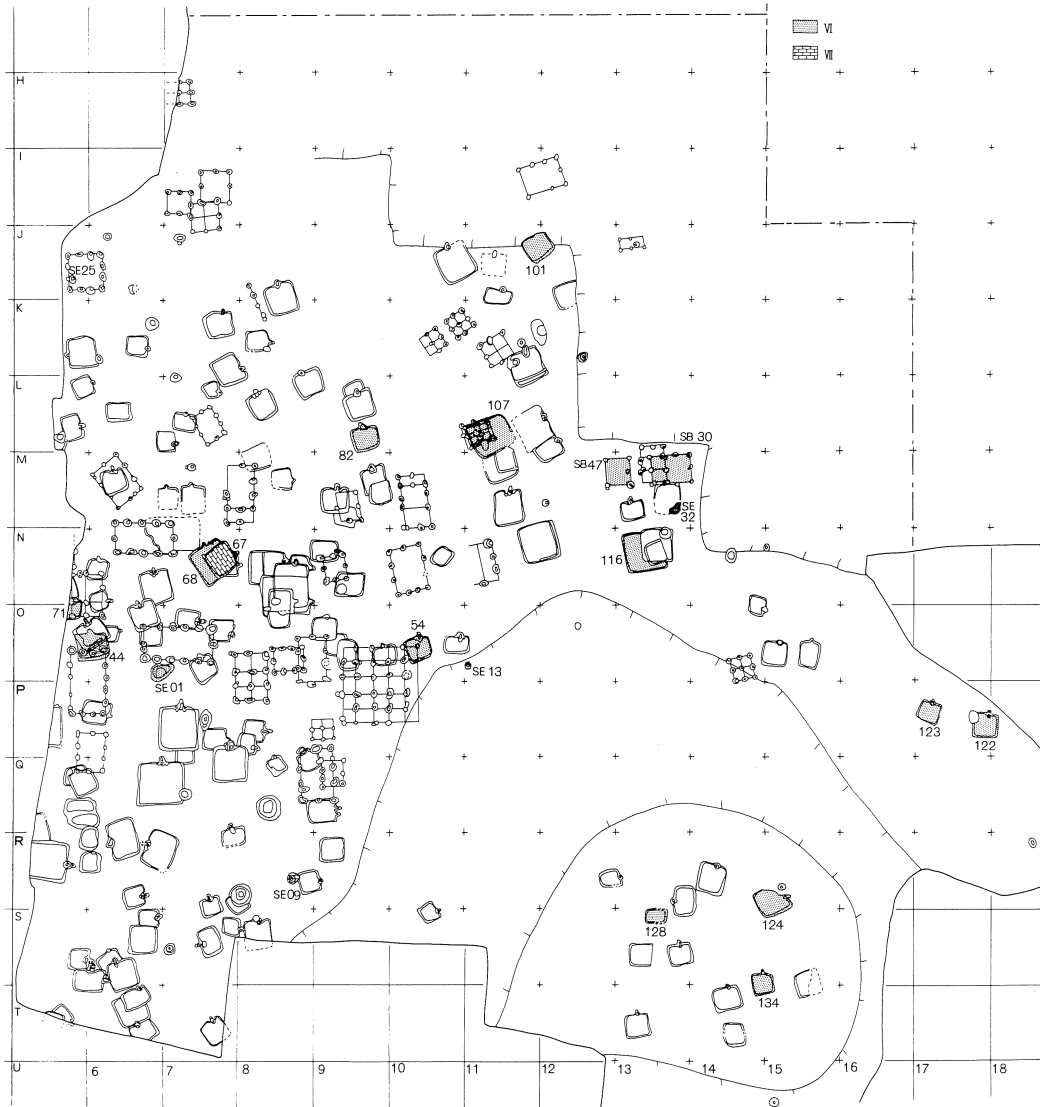
引続き安定した集落が営まれている。該期に含まれる住居にはS J 08・13・15・17・19・24・26・29・33・34・43・44・56・72・73・77・83・85・96・98・99・105・106・111・112・114・117・125・129がある。その中には該期の可能性をもつものや不確定なものも若干含まれる(図内で斜線で示した)し、前後の時期の過渡的な様相を示すものも存在する。総数29軒を数え前期と共に稲荷前遺跡A区の集落が最も発展した時期といえる。掘立柱建物跡はS B12・14・15・25・31・33・42・43が本期に伴うものと推定した。S B14・15は前述したように本期または前期、42・43は前期の高床倉庫の流れから該期に比定し、31にあっては本期とする根拠は主軸方位以外ないといっても良く次期に降る可能性も否定できない。建物の時期比定にはかなり不安定な部分を認めなければならない。井戸はS E23が本期に伴うであろう。住居数に比して井戸が少ないが時期不明とした井戸の中に本期に機能したものが含まれている可能性はある。

分布傾向をみると前期と同様とくに稠密に分布する地域はなく、各住居は一定の距離を保って構築されていることが判るが、特に注目すべきことは集落の中央部に明白な空白域が認められることである。実は前期にもその傾向はあったのであるが、本期に至るとO～P区にかけてとN～O・6～8区の集落内でも中心部分に遺構が全く営まれていない。これにより視覚的にはS J 44からS B12を経てS B31に至るラインよりも北側の一群(仮に北群と呼ぶ)とそれ以南の南群、島状部分を分離すれば南東群の3群から構成されることになる。南群・南東群には該期に相当する掘立柱建物跡を想定することは全くできず、その意味では北群の相対的な優勢は明らかである。特に前期に引続き高床倉庫を保有するであろう北東の住居群がその中心となろうか。

第VI期(第421図)

前期までの拡張した集落がやや縮小化に向かう段階である。S J 43・54・68・71・82・101・107・116・122・123・124・128・134の13軒が相当しよう。掘立柱建物跡はS B30と47、前段階としたS B31も本期に含まれる可能性はある。住居ではS J 43は前期から本期にかけてのものであろう。68・71は本期から次期にかかる住居と考えている。また前期とした125も本期前半まで存続した可能性をもつ。井戸ではS E01・25・32を本期とした。01・32は次期にも機能していたものと推定されるが、25は所属時期に不安を残す。

集落構成からみると前段階の相対的な弱小集団とした南群から住居が姿を消してしまう点が最も大きな変化であろう。空白域が南に拡大したとみるべきであろうか。北群でも北東よりの一角では



第421図 第VI・VII期の集落

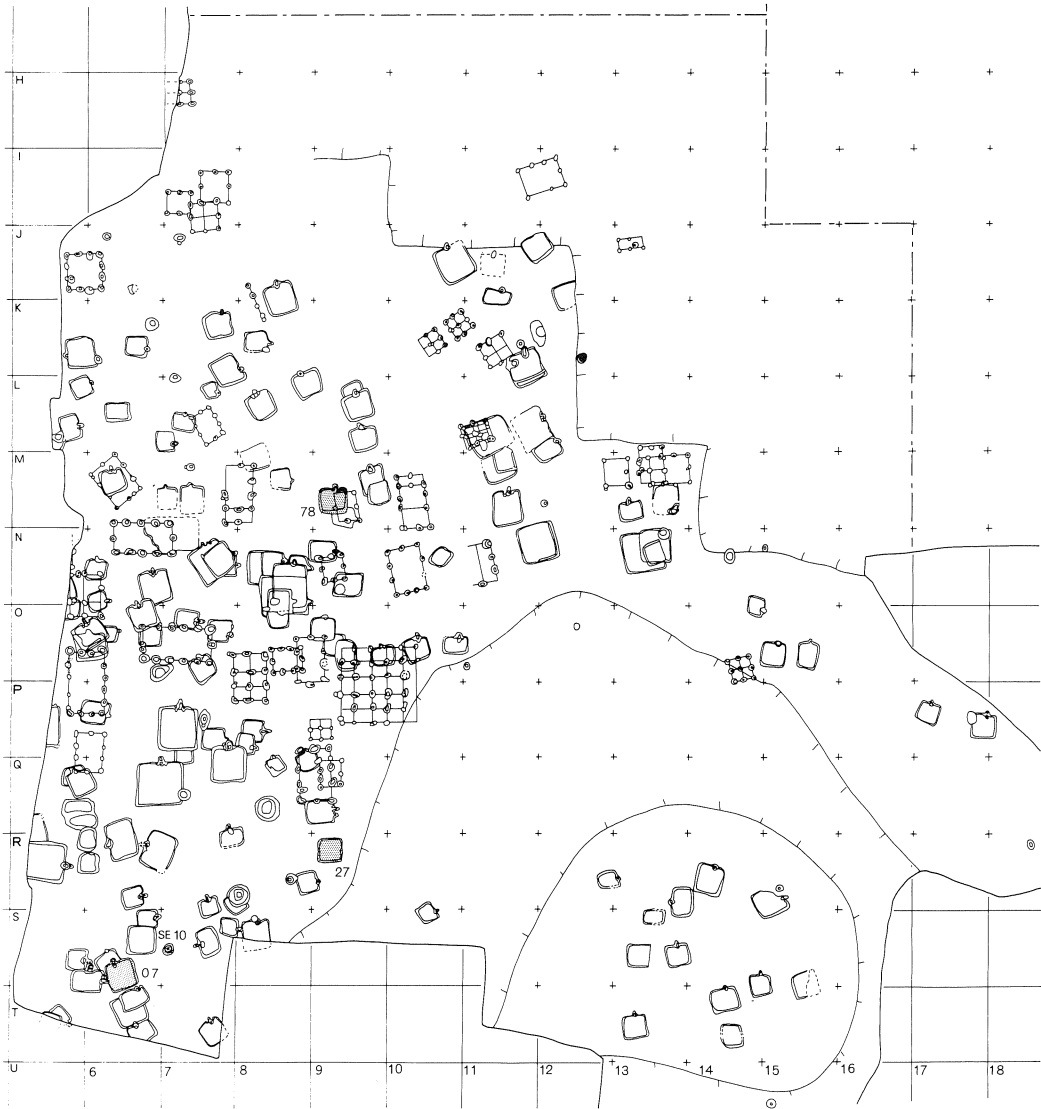
集落形成がなされなくなるようである。掘立柱建物跡をもつのは北群東寄りの伝統的なグループと思われる。

第VII期(第421図)

集落の衰退は顕著に現れてくる。該当住居はS J 67・71があるにすぎない。掘立柱建物跡は明確ではない。井戸はS E 01・09・13・32と住居に比して多くなってしまふ。調査区外に主体が移った可能性もあるが現状では様相が良く掴めない。

第VIII期(第422図)

前期以来の縮小傾向はまだ続く。該当する住居は07・27・78の3軒、掘立柱建物跡では本期に属するものは明確には認められない。井戸の様相も判然としないが、S E 10は本期に機能していたかも

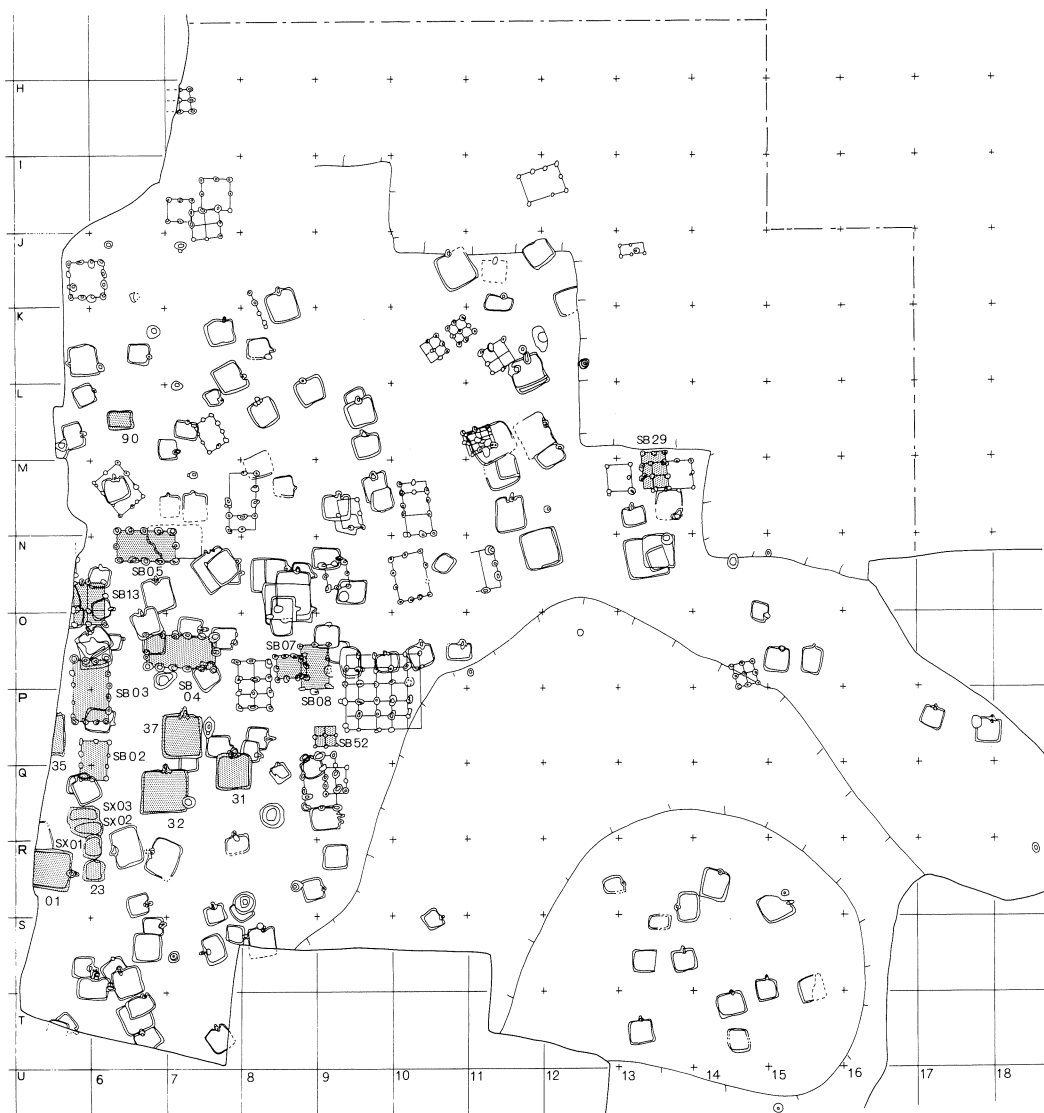


第422図 第VIII期の集落

しれない。

第IX期(第423図)

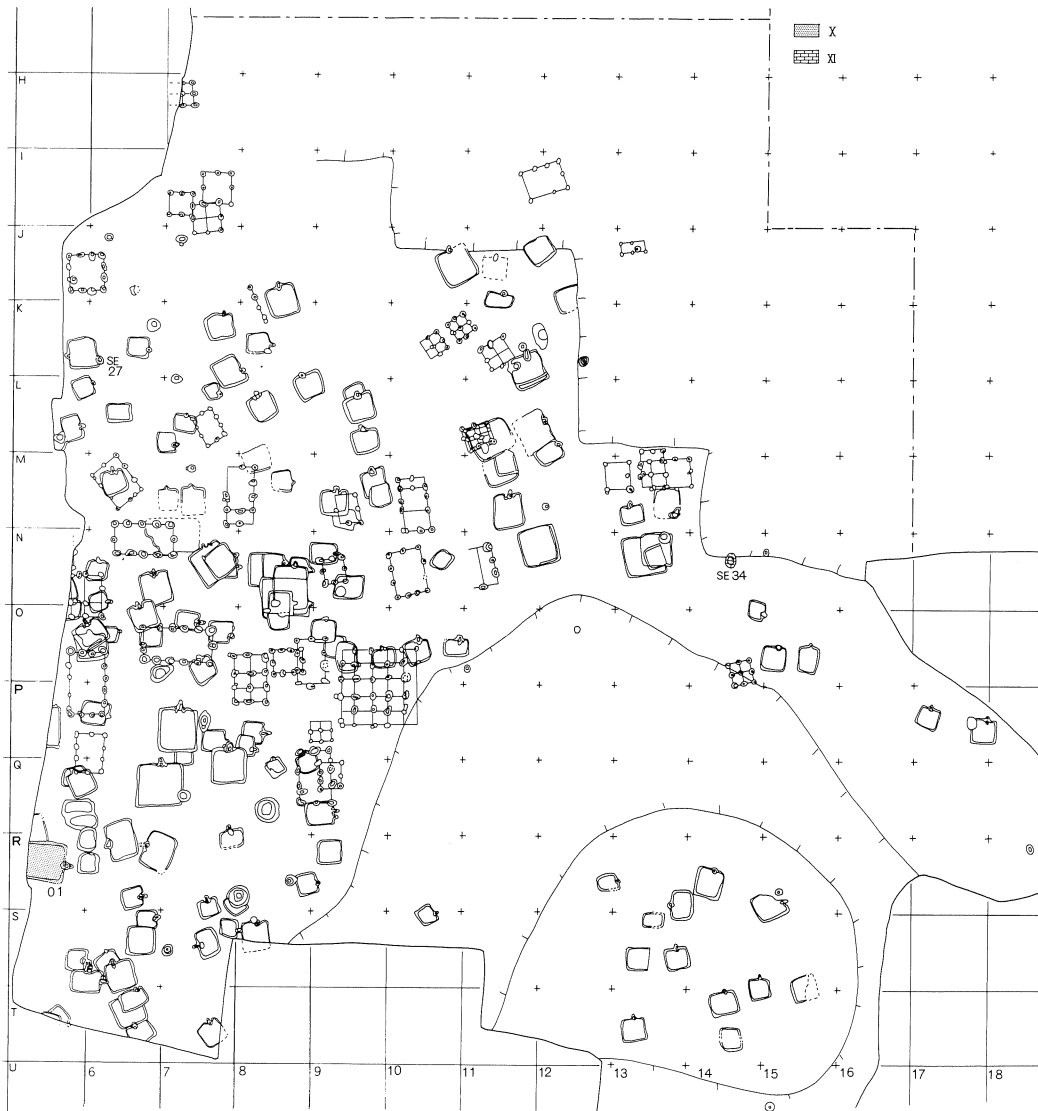
本遺跡における集落変遷のなかでも一つの大きな画期となる段階である。前期まで続いた衰退傾向からいわば再興期ともいえる。該当住居は S J 01・23・31・32・35・37・90の7軒、竪穴状遺構 S X 01~03、掘立柱建物跡は S B 02~05・13・29の6棟に07・52が加わる可能性がある。S B 08は本期または XIII 期となろう。本期の特徴は大型住居と大型掘立柱建物跡、竪穴状遺構が規則的な配列をなし構成されること、分布状態からみると調査区西南付近の極めて限定された範囲に集中して建物が営まれること、そして占地形態は従来からの集落内の空白域を取り込む、というよりもそれが全く意識されていないともいえるような状態が窺えることであろう。



第423図 第Ⅸ期の集落

まず住居についてみると、従来の北群に位置するS J 90のみ小型に属し他の5軒は何れも大型住居に属するものである。但しこれらの住居は土器様相からみる限り若干の時期差は存在するようである。S J 37が該期でも前半段階に属するのは間違いなく、続いてS J 31・32・35・90、S J 01が新段階から次期にかかる段階と思われる。S J 23は機能的に竪穴状遺構と同一の性格を果たしたものと推定され概ね新段階、S X 01・02が古段階から中段階、03が中段階から新段階といった時間幅と考える。

掘立柱建物跡は出土遺物や切り合い関係から該期に属するとしたものであるが、周囲に前後の時期の遺構が殆ど存在しないことからみて本期中の構築である可能性は高いものと考えている。建物配置はS B 02～13の南北棟の建物がほぼ直線的に並び、東西棟の建物S B 04・05・07も主軸は平行す



第424図 第X・XI期の集落

る。調査区域外にどのような建物が存在したかにも拠るが現状では全体に「L」字型配置、S B 08と52が加われば「コ」の字型配置となる可能性もある。ただし全てが同時存在したかどうかは保証の限りではない。S B 03とS J 35は位置的に同時存在は難しく、その意味では住居同様に2時期程度の建物の変遷は認めるべきかもしれない。1案を示せばS B 05・13・03・07とS J 37、S B 04・02・(08)・(52)とS J 31・32・35・(01)という組み合わせである。組み合わせの当否はともかく、この一群が以前からの集落とは隔絶した内容をもっていることは事実である。主屋を想定するとすれば規模や掘方の大きさからみて東西棟のS B 04と05であろう。

隣接した塚の越遺跡では鍵の手状の溝に区画された区域内に大型掘立柱建物跡8棟から構成される建物群が存在している。溝内の土器からみると本遺跡VIII期からX期頃までのある一定期間に機能

したものとは推定される。建物はやはり「コ」または「L」字型配置を採り、大型住居はVIII期と推定されるものが1軒付属するようだ。成立は塚の越遺跡が先行するようであるが(VIII期)、建物相互の切り合いから最低2時期は存続したものと考えられる。本遺跡と時期的に重なるのか否かが不明であるが、大きくみれば本遺跡IX期の建物群がより後出すると考えてよからう。8世紀後半頃は掘立柱建物跡自体急速に普及していく段階で、建物の存在そのものはさして珍しいものではないが、しかし5×2間程度の大型建物を主に規則的に配置される集落または集落内の一群の存在はやはり特異な部類に属する。最近「郡衙でもないが一般集落でもない」遺跡の存在が注目されている(井上1989)が、類型化するとしたらまさにこの一角の建物群がそれに相当するものと考えられる。S J 01出土の円面硯は注目してよい遺物ではあるがこれを以て官衙という訳にはいかない。しかし例えば郡衙に出仕した地方官人の居宅とも言われる北坂遺跡(中島1981)と比較しても遺構配置からみる限り見劣りする内容ではないことも事実であろう。集落内に成長してきた有力農民層の居宅、官人居宅或いは井上の提唱するような「郷家」に含まれるものか否か今後の検討課題としたい。

第X・XI期(第424図)

X期に含まれる住居としては僅かにS J 01の新しい一群の土器から本期前半まで存続した可能性をもつのみで、掘立柱建物跡は摘出できない。井戸はS E 27が本期前半に含まれるであろう。

続くXI期には該当する住居が確認できない。辛うじて井戸が1基(S E 34)認められるだけになってしまうようである。この2時期はIX期の特殊な集落形態から一変して集落そのものの断絶期といっても良いような衰退傾向が顕著に現れ、IX期とは別の意味で問題となる時期といえよう。

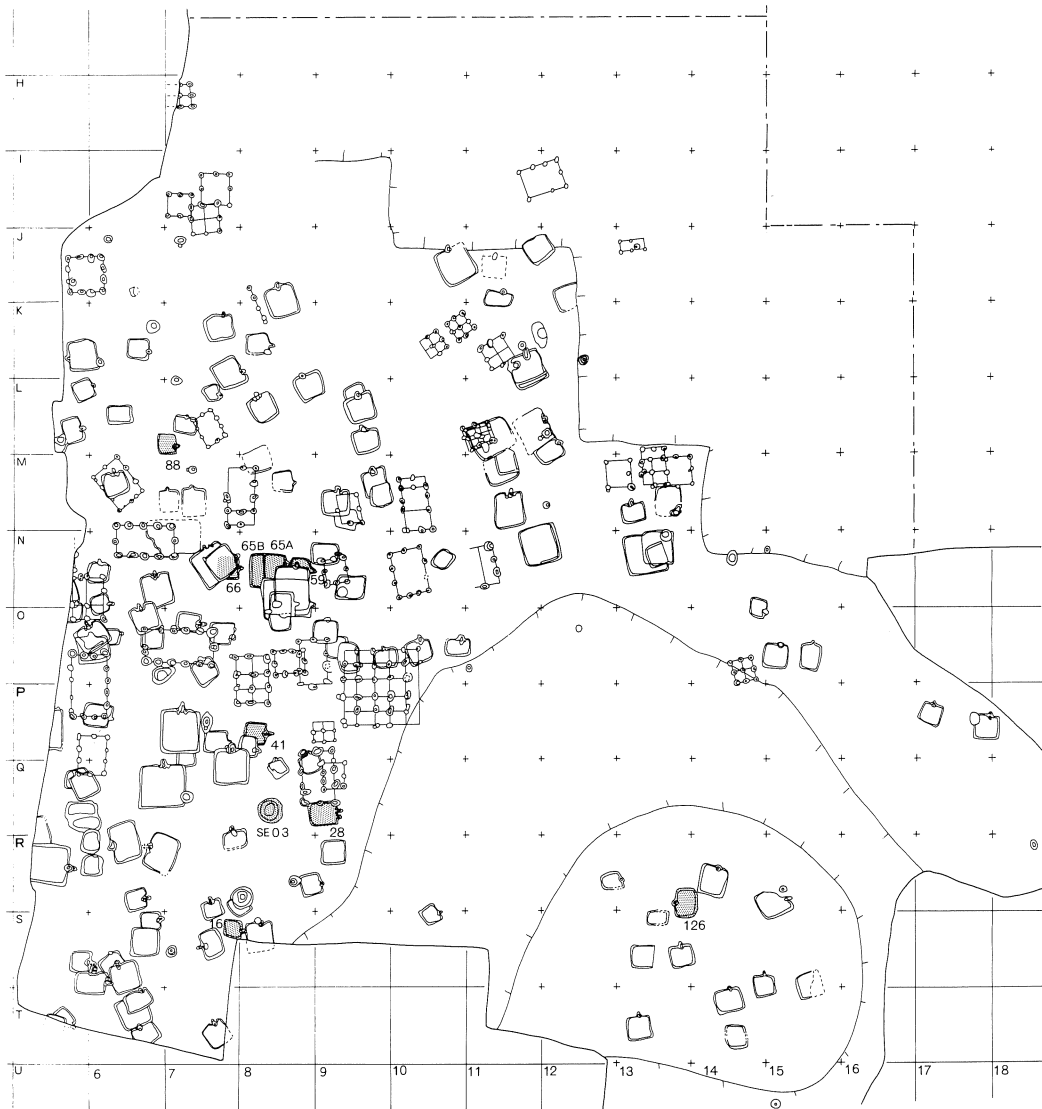
第XII期(第425図)

該期になると再度集落形成が開始されるようになる。本期の住居にはS J 16・28・41・59・65・66・88・126の8軒が相当するが、伴う掘立柱建物跡は明確にできない。井戸は1基(S E 03)認められる。分布的には中央部のS J 65周辺に纏まる他は散漫な傾向を示し、北部から東部にかけては該期の住居は存在しない。中央部の59・65・66は近接して存在し最低でも2時期の変遷が想定されよう。主軸方位は東に向くもの7軒、西を向くものが1軒となる。

第XIII期(第426図)

本期では構成住居数は増加に転ずる。S J 06・22・36・40・49・50・58・60・61・79・89・95・97・102・108・118の他S J 45も含まれる可能性が高く、結局17軒を数え前段階に比して倍増している。該期と思われる掘立柱建物跡はS B 06・09～11・18・36がある。他にS B 20～23に関しても該期に比定される可能性をもつが決め手に欠けている。井戸はS E 08と37が本期に機能したものと推定される。

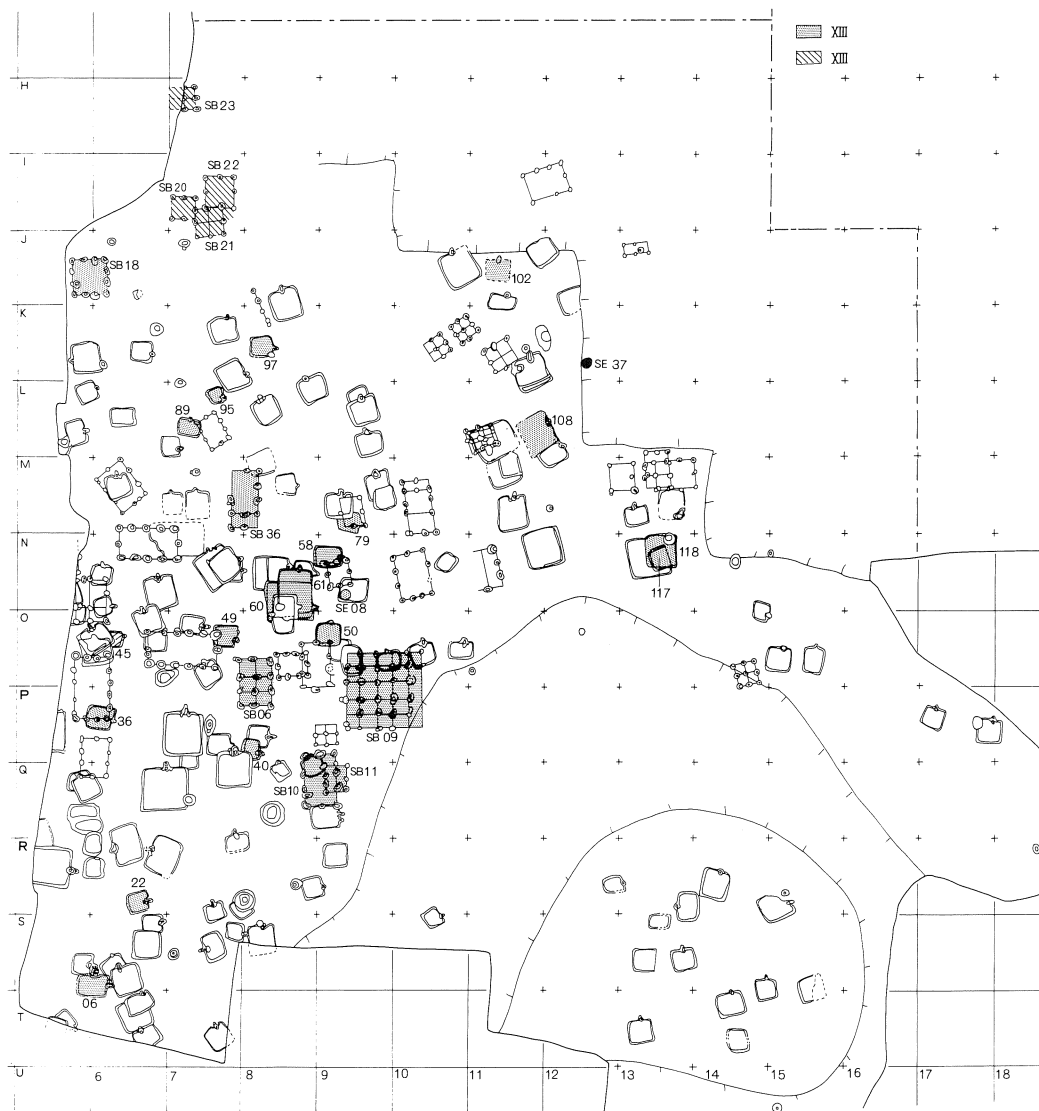
住居にあつては前期以来ほぼ同一地点に固執して占地する大型住居S J 60・61を中心とする一群が主体となる。他は全般的に散在的な分布状態を示す。この一群を中央群と呼ぶとその南に展開するS B 09を主殿とする建物群(南群と呼ぶ)は通常の建物とは明らかに異質なものである。S B 09は3×3間の総柱構造の身舎に最低でも3面おそらくは4面に庇が取付く形態と推定される。但し、庇は身舎柱に比較して小規模で柱通りが悪いものが幾つかみられ、縁とすることもできよう。西側に柱筋を揃えて並立するS B 06も3×2間の総柱建物である。この2棟の南にはほぼ同一主軸をもつS B 10・11が存在する。重複するため同一時期の所産でないことは明らかであるが、前記の大型建



第425図 第XII期の集落

物に相応しいのはS B10であろう。S B06・09・10で構成された建物群と考えておきたい。中央住居群の北側に位置するS B36は4×2間の大型建物と推定され軸方位も一致しており同一時期の所産と考えられる。S B18は本遺跡唯一の3×3間の側柱建物であるが、S B36とは別のグループを構成するものであろう。

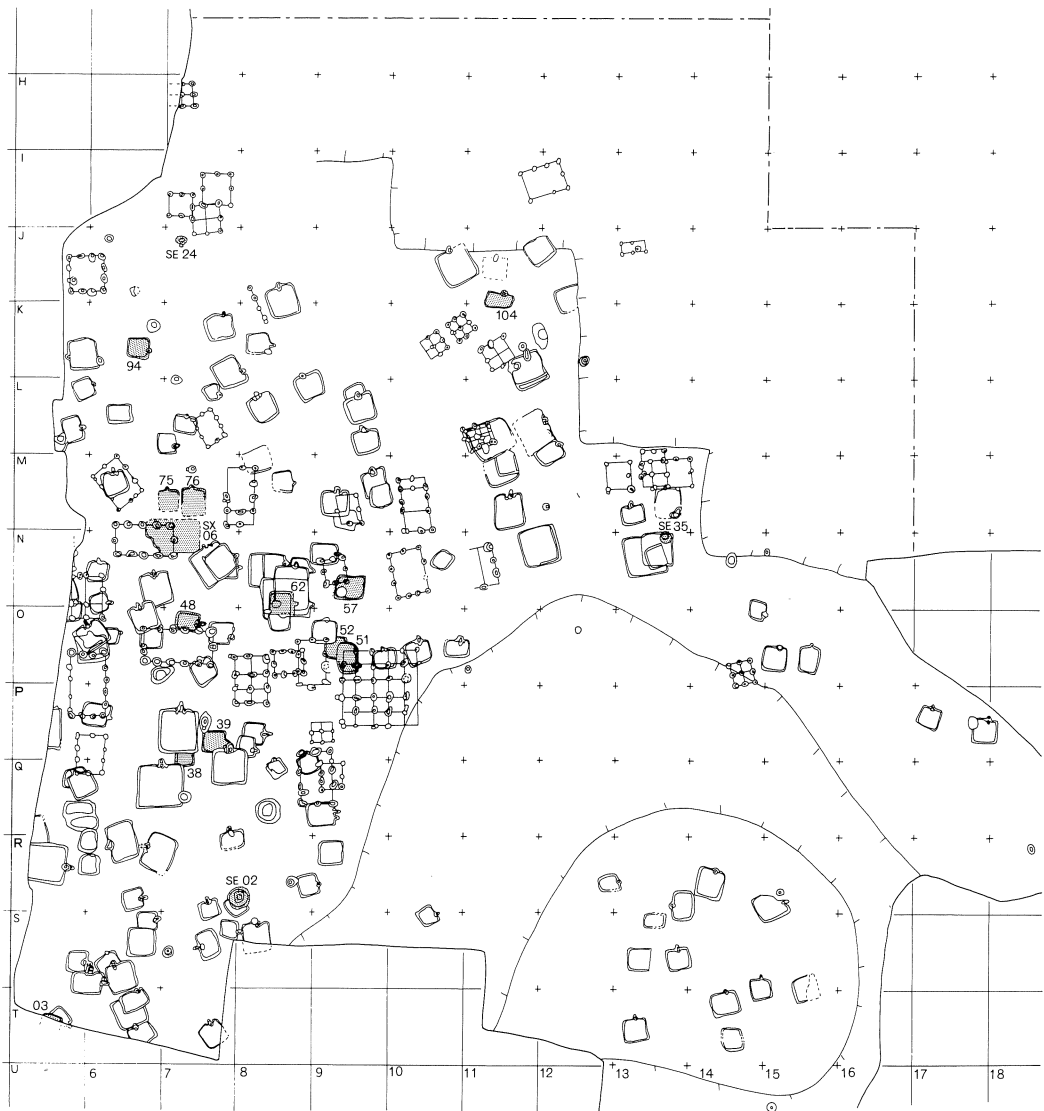
この建物群の性格、とりわけS B09の性格について若干検討を加えたい。S B09は身舎柱の内、側柱と束柱の規模は何等変わるところがなく相当な荷重にも耐えうるような強固な構造といえる。思い付くのは「倉院」があるが、貧弱ながら庇または縁をもつことは確実であり倉という想定は困難である。良好な類例に恵まれないが比較材料とすると将監塚・古井戸遺跡第4住居跡群12号建物がある。4×3間の総柱建物に西庇が取付くもので、報告者は高床の住居を想定している(井上1989)。



第426図 第XIII期の集落

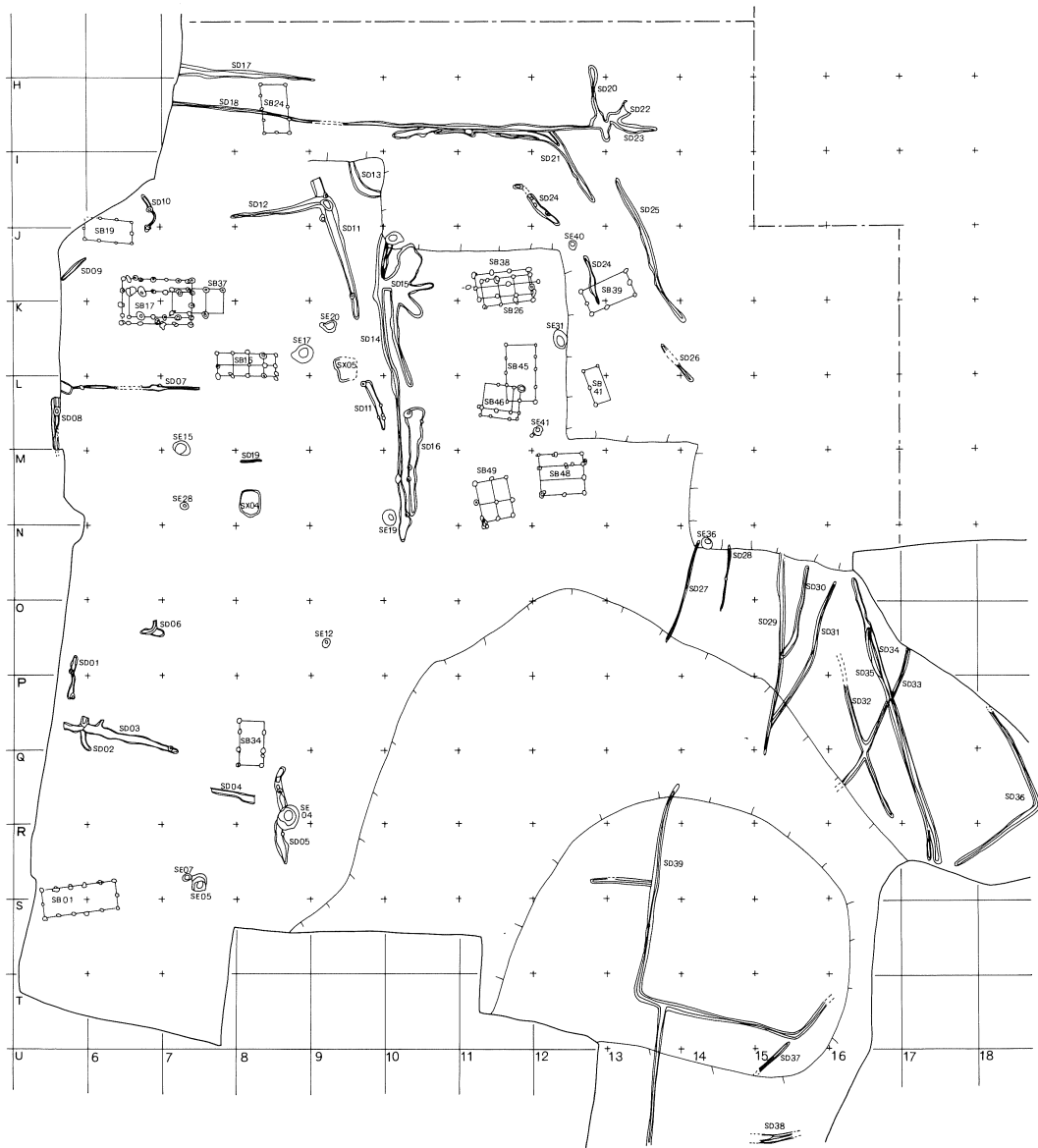
若葉台遺跡ではB地点から4×3間の身舎に4面庇が巡る構造の建物が検出されている。かつて入間郡衙と考えられた根拠の一つともなった建物であるが、内部に東柱がない(齊藤1984)。東京都落川遺跡117号掘立柱建物跡は3×2間の身舎に4面庇が取付く。庇は縁の可能性も想定されている。構造的には総柱で本遺跡SB09に近いが、柱穴が小規模で時期的にも11世紀後半以降とやや降る。在地有力者の居宅と捉えられているようだ(高林1988)。これらからみると在地有力者層の居館の可能性が浮かび上がる。

もう一つの可能性とすると「村落内寺院」がある。千葉県遠寺原遺跡では3×2間を身舎とする4面庇建物が竪穴住居と共存する形で検出され、周囲からは「西寺」や「僧」等と記された多数の墨書土器や陶硯等が出土した。公津原遺跡 Loc.15からは3×3間の身舎に4面庇を有する側柱建物が検出



第427図 第XIV期の集落

され、「忍保寺」・「新寺」等の墨書土器、瓦塔がその周辺地区から出土しており、これらについては『日本霊異記』に記載されるような村落内に営まれた小規模寺院ではないかという想定がなされている(笹生他1990)。だがこれらの寺院推定建物は何れも側柱構造である。瓦塔を出土した「堂」的な施設では美里町東山遺跡が著名であるが、庇構造はなく、規模も本例に比して小さい。それではS B09に寺院的な性格はあるのであろうか。本遺跡から出土した墨書土器は数も少なく宗教関係を示す文字は認められない。瓦については稲荷前タイプとも呼べる小型の軒丸瓦とそれに対応する丸瓦が検出されている(S K265)。瓦塔は破片で1点出土したが、時期的に伴うか否か不明である。また小型瓦についても隣接するB・C区により多く出土している模様でS B09の軒を飾った可能性は低いようである。そうすると仏教的な施設の可能性も強く主張できないことになる。



第428図 中世以降の遺構配置図

今のところ建物の性格を特定することは困難であるが、寺院的な色彩が薄いとなれば在地で成長してきた富豪層の居宅とみるのが妥当であろうか。類例の増加を待つて再検討したい。

第 XIV 期(第427図)

S J 38・39・51・52・57・62・63・75・76・94・104の住居跡11軒と S E 02・35の 2 基の井戸から構成される。竪穴住居は前期と良く似た集落配置を示し、XIII 期の S J 06から03へ、S J 40から39、49から48、50から51・52、60から62・63、58から57、89から94、102から104というように同一位置乃至、近接した場所に継続して居住した様相が比較的良好に把握できる。このうち、S J 39、62・63、94については XII 期からの変遷を追うことが可能で若し居住区の固定化という観点で屋敷地の成立をみるならば、

本遺跡では XII 期に成立をみて、XIV 期まで存続したことになる。その他鍛冶工房が伴うのも本期である。ただ S J 75・76 との位置関係からみると同時存在には否定的に作用してしまうことは否めない。前段階の大型建物 S B 09 は忽然と姿を消してしまう。というよりも本期に伴う掘立柱建物跡自体明確には認められなくなってしまう。S E 24 の位置関係からみると前期とした S B 20～23 のあるものは本期に伴うとしても良いかもしれない。竪穴住居には大型住居はなく全て小型の一群で占められるのも特徴である。

250 年余りの長きに亘って存続してきた稲荷前 A 区の集落は何故か本期を以て途絶えてしまう。集落の変遷を概述した中で明らかのように一見安定して存続したかに見える本遺跡も実は幾多の盛衰を経てきたことが解る。そして集落構成における画期も存在することも判明した。今後はこうした変化なり画期が入西遺跡群ひいては周辺集落の様相とどのような対応関係をもつのか検討することにした。

中世の集落(第428図)

S B 01・16・17・24・26・34・38・39・41・45・46・48 の 12 棟の建物と土間状遺構 2 基 (S X 04・05)、井戸跡 12 基 (S E 04・05・07・12・15・17・19・20・28・31・36・40)、火葬墓 1 基 (S T 01) と多数の溝跡から主に構成される。建物は全て掘立構造である。一応 12 棟を復元したが、該期の単独ピットやピット群は多数存在し実際にはこれをかなり上回る建物が存在したものと推定される。周囲に建物を伴わず単独で存在する井戸跡の多いことはこのことを如実に示しているといえる。建物の主軸方位にバラツキがみられ、重複する例が 3 例認められることからこれらの建物が一時期に存在したものではないことは疑いないものの、各建物の時期を弁別することは難しい。建物の柱穴から出土した遺物とすると S B 17 から土師質小杯、S B 37 から在産土釜?、S B 26 から瀬戸美濃系縁釉小皿が検出された程度である。出土遺物から S B 26 は 15 世紀後半頃、S B 17 と 37 は 15～16 世紀と推定される。遺跡全体から出土した中世陶磁器をみると 13 世紀の青磁が最も古く、14・15 世紀代の瀬戸美濃系陶器類、おそらく 15 世紀以降の在産軟質陶器が認められ、量的には 15 世紀代の遺物が多いようである。それらは何れかの建物群に伴うのであろうが残念ながら詳細を明らかにすることはできない。溝については遺跡北側と東側に存在する多数の溝は中世から近世にかけての水路と思われる。その他の溝に関しては建物の区画溝や道路の側溝になるものもあろうが、遺存状態の悪さもあって性格付けはなかなか困難な面がある。中世の村落は近在では堂山下遺跡(宮瀧 1991) など最近良好な調査例が増え、入西遺跡群でもかなり多数の遺構や遺物が検出されている。特に金井遺跡 B 区で中世の鑄造遺跡が検出され全国的な注目を浴びるなど成果は上がりつつある。金井遺跡の存続期間に大部分重複する本遺跡に関してももっと注意する必要があるが本稿では取りあえず該期の遺構を抽出したのみで終え該期集落の総合的な検討は後日を期したい。

4. 郡名墨書土器をめぐる

稲荷前遺跡から出土した墨書土器のなかで特に注目すべきものが2点ある。何れも第1号井戸跡から検出されたもので、墨書土器としても現在まで県内最古の資料と考えられる。また書かれている内容も通常の墨書土器とは明らかに異なる点が認められる他、土器そのものに関しても極めて特徴ある点が見られるのである。最後にこれら2点の墨書土器についてその特徴と問題点をまとめて本稿を閉じることにしたい。

2点の墨書土器は第1号井戸最下層から出土した。井戸そのものは深さ1.75mとさほど深くない。1点は須恵器蓋である(第175図18)。この土器は推定径17.4cmで鈕及び天井部の約3/5を欠いている。焼成はやや甘く灰色を呈する。胎土に所謂白色針状物質を含むことから南比企窯跡群の製品であることは疑いない。形態を見ると全体に低平で分厚い作りで、平坦な天井部の中位以上を回転ヘラ削り調整されている。また折り返し部はやや外方に短く屈折する。墨書は天井部外面のほぼ全面にわたって記されている。内容は「^{〔大カ〕}□里郡」、「□尺本」、「多磨郡男川」、「□□^{〔郡カ〕}」と判読される。□里郡は土器周縁部から中心に向かって書かれ、文意から大里郡と読める。多磨郡男川は鈕を巡るように逆時計回りに記されている。大里郡、多磨郡は武蔵国の郡名を表わし、「郡」という表記方法から大宝令(701年)以降であることは間違いないと思われる。尺本の上の一字が判読できないが、尺本は「坂本」と読め、地名と人名の両方の可能性をもつが、他の文字が何れも地名を表わしていることから地名の可能性がより高いといえようか。若し、地名とすると武蔵国の郡あるいは郷名の中には該当するものがない。最後の□□郡は残画から見ると多磨郡の可能性が高いものと判断したが断定はできない。もし多磨郡だとすれば習書とするのが最も妥当な解釈となろう。多磨郡には小川、川口、小楊、小野、新田、小島、海田、石津、狛江、勢多の各郷が存在したとされている(和名類聚抄高山寺本)。多磨郡に続く「男川」は音の一致から小川郷を指すと見るのが自然であろう。小川郷は元々は男川であったのかもしれない。

この蓋の内面には「内」の押印が刻されている。鳩山窯跡群からも「内」の押印が押された土器が少数ではあるが出土しており(渡辺1990)、蓋の器形や印形から見て広町15号窯の製品であることがほぼ確実視されてきた。ただ広町15号窯からは蓋に押印を押した例は検出されていないようだ。「内」の押印をもつ須恵器は鳩山Ⅰ期～Ⅱ期に限定され、この蓋もその範疇にあるが、この蓋は分厚い作りから見て鳩山Ⅰ期(本遺跡第Ⅵ期)に属するものと推定される。実年代は渡辺氏によって8世紀第1四半期後半と考えられている。墨書のかかれた時期と土器の年代は必ずしも一致する訳ではないが、井戸の機能した年代は長く見積もっても8世紀第2四半期までであったと考えられ、土器の使用から廃棄に至る年代幅を加味すると、墨書が記された年代と土器の生産年代とは大きなタイムラグは存在しなかったものと推定される。もう一つ重要な点はこの「内」の押印をもつ土器の供給先である。渡辺氏は郡衙或いは国衙を想定している(渡辺前掲書)が、墨書の記載内容から見て妥当な解釈である。「内」の押印をもつ土器そのものの発見例は生産地以外とすると本例が唯一と思われる。8世紀第1四半期頃は郡の設置が進んだ時期にあたり、墨書土器そのものが集落から出土する例は殆どない。そうした意味でなぜ本遺跡から該期の墨書土器、それも郡名を記したものが出土するの

か大きな謎である。いや、郡衙といわれる遺跡でも複数の郡名を記した墨書土器が発見されたという例は寡聞にして知らない。本遺跡VI期の集落を概観しても官衙的な色彩は全く認められないのである。こうした土器の年代限定が正しければ逆に大里郡、多磨郡が8世紀第1四半期から遅くとも第2四半期には建郡されていた資料ともなろうし、郷里制との絡みで言うと「多磨郡男川」の下に続く文字があったとすればそれは「郷」であった可能性がより高いことにもなろう。

もう1点の墨書土器は須恵器坏でやはり南比企産である。口縁部を欠くが口径15cm前後となろう。底部はヘラ削り調整され、中央部に糸切り痕を残す。形態から鳩山I期に比定しても大きな過誤はなかろう。底部に欠損があり墨書も切れているが、中央部に小さく記され、古い段階の墨書土器の特徴を備えている(平川1988)。字は「的」または「多」とも思えるが、判然としない。字の判読は取りあえず保留したい。土器の時期としても前記の蓋と齟齬はなく両者はほぼ同時期に書かれた墨書とすることができよう。

おそらく「内」の刻印をもつ特徴や本遺跡の性格から見てこの2点の墨書土器は稻荷前遺跡で書かれた可能性は少ない。やはり国衙乃至郡衙において習書されたとするのが今のところ精一杯の解釈であろう。国衙はともかく、南比企産須恵器が供給された郡衙は武蔵国全てではない筈で将来的に郡衙本体が調査されればもっと限定されてくるであろう。郡衙は以外に近いかもしれない。入間郡衙の発見に期待を寄せつつ擱筆したい。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸』歴史時代編II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 飯田充晴 1982 『東の上遺跡第7・8次調査』所沢市文化財調査報告書第8集 所沢市教育委員会
- 飯田充晴 1984 『柳瀬川流域遺跡群(II)』所沢市文化財調査報告書第11集 所沢市教育委員会
- 飯塚武司 1988 「No.362・363遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和61年度』東京都埋蔵文化財調査報告 第9集 (財)東京都埋蔵文化財センター
- 石井克己 1990 「黒井峯遺跡」『古墳時代の研究』2 集落と豪族居館 雄山閣
- 石川久明 1986 『越生五領・南原』越生町埋蔵文化財調査報告書第4集 越生町教育委員会
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸』古墳・歴史時代編I 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上尚明 1989 「古代集落遺跡の再検討—郡衙・郷家・一般集落」『研究紀要』第5号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上 肇 1979 「7世紀の坏形土器について—南比企地方を中心として—」『埼玉県立博物館紀要』第6号 埼玉県立博物館
- 伊藤研志 1981 『勝呂廃寺』坂戸市勝呂廃寺跡範囲確認調査概報 坂戸市教育委員会
- 今井 宏 1980 『児沢・立野・大塚原』埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 埼玉県教育委員会
- 加藤恭朗他1987 『古代の坂戸—坂戸市遺跡発掘調査概報I—』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他1988 『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第I集』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他1989 『若葉台遺跡—若葉台遺跡発掘調査報告書I—』坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗他1990 『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第II集』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他1991 『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第III集』坂戸市教育委員会
- 金井塚厚志1989 『境田遺跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告 第5集 鳩山町教育委員会

- 金井塚厚志1990 『山下窯跡』 鳩山町埋蔵文化財調査報告 第7集 鳩山町教育委員会
- 小出輝雄 1988 『谷津遺跡第7地点』 富士見市遺跡調査会調査報告第29集 富士見市遺跡調査会
- 後藤健一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県文化財調査報告書 第42集
静岡県教育委員会
- 後藤健一 1991 「3 須恵器の編年 5 東海」『古墳時代の研究』 6 土師器と須恵器 雄山閣
- 駒見和夫他1982 『宮ノ越遺跡』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第44集 埼玉県遺跡調査会
- 埼玉県 1984 『新編埼玉県史』 資料編 3 奈良・平安
- 埼玉県 1987 『新編埼玉県史』 通史編 1 原始・古代
- 斉藤 稔他 1979 『若葉台遺跡群 第一次発掘調査概報』 若葉台遺跡C地点 鶴ヶ島町教育委員会
- 斉藤 稔他 1980 『若葉台遺跡群 第二次発掘調査概報』 若葉台遺跡D・E地点 鶴ヶ島町教育委員会
- 斉藤 稔他 1983 『若葉台遺跡群発掘調査報告書』 鶴ヶ島町教育委員会
- 斉藤 稔他 1984 『若葉台遺跡群 A・B・B地点南』 鶴ヶ島町教育委員会
- 斉藤祐司 1988 『霞川遺跡』 入間市埋蔵文化財調査報告第8集 入間市教育委員会
- 酒井清治 1982 『緑山遺跡』 日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告-VII- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第19集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 酒井清治 1986 「北武蔵における7・8世紀の須恵器の系譜について-立野遺跡の検討を通して-」『研究紀要』 第8号 埼玉県立歴史資料館
- 酒井清治 1987 「埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
- 酒井清治 1989 「古墳時代の須恵器生産の開始と展開」『研究紀要』 第11号 埼玉県立歴史資料館
- 笹生 衛他 1990 シンポジウム『平安前期の村落とその仏教』 資料 千葉県立房総風土記の丘資料館
- 鈴木 透 1984 「2 歴史時代の飯能市」『飯能市遺跡分布調査報告書』 飯能市教育委員会
- 鈴木徳雄 1983 「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』 第7号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土師器の動態」『土曜考古』 第9号 土曜考古学研究会
- 曾根原裕明1990 『飯能の遺跡(9)張摩久保遺跡第12次調査』 飯能市教育委員会
- 高橋一夫他1980 『日高町遺跡分布調査報告書』 日高町教育委員会
- 高橋一夫他1982 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』 埼玉県県史編纂室
- 高橋一夫 1983 「集落分析の一視点」『埼玉考古』 第21号 埼玉考古学会
- 高橋一夫 1991 「埼玉における古代窯業の展開」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋一敏 1990 『吉美中村遺跡』 湖西市教育委員会
- 高林 均 1988 『落川遺跡調査概報』 VI 日野市落川遺跡調査会
- 田中一郎他1976 『上谷遺跡』 坂戸市教育委員会・東坂戸団地遺跡調査団
- 田中 信 1989 『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(IX)龍光第4遺跡・天王第5遺跡・天王第6遺跡』 川越市教育委員会
- 田中広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給-有段口縁坏と在地社会の動態-」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪 1973 『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告』 埼玉県遺跡調査会報告第18集 埼玉県遺跡調査会
- 都出比呂志1989 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店
- 鶴間正昭 1984 「赤色塗彩土師器坏の消滅について-武蔵・相模国の様相-」『法政考古学』 第9集
- 富田和夫 1982 『伴六』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第11集
- 富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 中島 宏 1981 『清水谷・安光寺・北坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村倉司 1984 「古代北武蔵における供膳器の様相」『土曜考古』 第9号 土曜考古学研究会

- 中村倉司 1988 『小山ノ上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第70集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村倉司 1991 「武蔵国における渡来人の軌跡」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 並木 隆 1984 『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書第12集 所沢市教育委員会
- 西川 制 1989 『若葉台遺跡群－S地点発掘調査報告書－』 鶴ヶ島町遺跡調査会
- 菱田哲郎 1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻3号 史学研究会
- 平川 南 1988 「古代集落と墨書土器－千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
- 昼間孝志 1991 『塚の越遺跡』住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅲ－ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 水口由紀子 1989 「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』第7号
- 宮瀧交二 1991 『堂山下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮瀧交二 1991 「墨書土器と集落遺跡」『藤沢市史研究』24
- 村木 功 1983 『伴六遺跡』毛呂山町教育委員会
- 村木 功 1988 『毛呂山町の遺跡－遺跡詳細分布報告書－』 毛呂山町教育委員会
- 山口英男 1991 「墨書土器と官衙遺跡」『藤沢市史研究』24
- 山下裕一 1983 「坂戸市の地形と地質」『坂戸市史』原始資料編 坂戸市
- 山田邦和 1988 「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」『古代文化』第40巻第6号 財団法人古代学協会
- 渡辺 一・竹野谷俊夫 1988 『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一・竹野谷俊夫 1990 『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990 「南比企窯跡群の須恵器の年代－鳩山窯跡の年代を中心に－」『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
- 渡辺 一・竹野谷俊夫 1991 『鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会